

目錄

上篇	1
醫學衷中參西錄前三期合編	59
張序	60
袁序	61
蘇序	63
自序	65
題詞	67
例言	70
〈第一卷〉	73
治陰虛勞熱方	83
【資生湯】	84
【十全育真湯】	84
【醴泉飲】	91
【一味薯蕷飲】	100
【參麥湯】	105
【珠玉二寶粥】	108
	115

〈第二卷〉

【沃雪湯】	117
【水晶桃】	118
【既濟湯】	120
【來復湯】	123
【鎮攝湯】	127
治喘息方	129
【參赭鎮氣湯】	130
【薯蕷納氣湯】	137
【滋培湯】	139
治陽虛方	143
【敦復湯】	143
治心病方	149
【定心湯】	149
【安魂湯】	154
治肺病方	156
【黃耆膏】	156
【清金益氣湯】	158
【清金解毒湯】	160

【安肺寧嗽丸】	161
【清涼華蓋飲】	163
治嘔吐方	167
【鎮逆湯】	167
【薯蕷半夏粥】	168
治膈食方	170
【參耨培氣湯】	170
治吐衄方	176
【寒降湯】	176
【溫降湯】	183
【清降湯】	186
【保元寒降湯】	187
【保元清降湯】	188
【秘紅丹】	189
【二鮮飲】	191
【三鮮飲】	192
【化血丹】	193
【補絡補管湯】	194
【化痰理膈丹】	203

治消渴方 ..... 204

【玉液湯】 ..... 204

【滋脾飲】 ..... 207

治癰閉方 ..... 211

【宣陽湯】 ..... 211

【濟陰湯】 ..... 212

【白茅根湯】 ..... 215

【溫通湯】 ..... 217

【加味苓桂朮甘湯】 ..... 218

【寒通湯】 ..... 221

【升麻黃耆湯】 ..... 222

【雞脰湯】 ..... 227

【雞脰茅根湯】 ..... 229

〈第三卷〉 ..... 232

治黃疸方 ..... 233

【審定《金匱》黃疸門硝石礬石散方】 ..... 233

治淋濁方 ..... 236

【理血湯】 ..... 236

【膏淋湯】 ..... 241

【氣淋湯】	242
【勞淋湯】	243
【砂淋丸】	244
【寒淋湯】	246
【秘真丹】	247
【毒淋湯】	248
【消毒二仙丹】	249
【鮮小薊根湯】	250
【朱砂骨湃波丸】	251
【澄化湯】	253
【清腎湯】	254
【舒和湯】	255
治痢方	256
【化滯湯】	256
【變理湯】	257
【解毒生化丹】	262
【天水滌腸湯】	264
【通變白頭翁湯】	266
【三寶粥】	269

【通變白虎加人參湯】	272
治燥結方	282
【硝菴通結湯】	282
【赭遂攻結湯】	285
【通結用蔥白熨法】	287
治泄瀉方	291
【益脾餅】	291
【扶中湯】	293
【薯蕷粥】	294
【薯蕷雞子黃粥】	297
【薯蕷芩苳湯】	298
【加味天水散】	299
【加味四神丸】	301
治痰飲方	302
【理飲湯】	302
【理痰湯】	306
【龍蚝理痰湯】	308
【健脾化痰丸】	310
【期頤餅】	311

〈第四卷〉

【治痰點天突穴法】	314
【明礬湯】	316
【麝香香油灌法】	317
治癲狂方	318
【蕩痰湯】	318
【蕩痰加甘遂湯】	319
【調氣養神湯】	322
治大氣下陷方	325
【升陷湯】	325
【回陽升陷湯】	356
【理鬱升陷湯】	358
【醒脾升陷湯】	360
治氣血鬱滯肢體疼痛方	364
【升降湯】	364
【培脾舒肝湯】	366
【金鈴瀉肝湯】	368
【活絡效靈丹】	370
【活絡祛寒湯】	375

〈第五卷〉

治傷寒方

【健運湯】	376
【振中湯】	377
【曲直湯】	378
【熱性關節腫疼用阿斯必林法】	382
治傷寒方	388
【麻黃加知母湯】	389
【加味桂枝代粥湯】	393
【小青龍湯解】	397
【從龍湯】	408
【鯀水石膏飲】	412
【葛根黃芩黃連湯解】	415
【小柴胡湯解】	417
【通變大柴胡湯】	427
【加味越婢加半夏湯】	428
治溫病方	430
【涼解湯】	435
【寒解湯】	436
【石膏阿斯匹林湯】	442



〈第六卷〉

【和解湯】	444
【宣解湯】	445
【滋陰宣解湯】	446
【滋陰清燥湯】	448
【滋陰固下湯】	452
【猶龍湯】	453

治傷寒溫病同用方

【仙露湯】	456
【石膏粳米湯】	481
【鎮逆白虎湯】	484
【白虎加人參以山藥代粳米湯】	486
【寧嗽定喘飲】	503
【蕩胸湯】	504
【一味萊菔子湯】	508
【鎮逆承氣湯】	509

〈第七卷〉

治瘟疫瘧疹方

【青孟湯】	512
-------	-----

【護心至寶丹】	523
【清疹湯】	524
治瘧疾方	529
【加味小柴胡湯】	529
治霍亂方	534
【急救回生丹】	534
【衛生防疫寶丹】	537
【急救回陽湯】	539
治內外中風方	547
【搜風湯】	547
【熄風湯】	550
【逐風湯】	552
【加味黃耆五物湯】	553
【加味玉屏風散】	555
【鎮肝熄風湯】	556
【加味補血湯】	565
治小兒風證方	568
【定風丹】	568
【鎮風湯】	571

治癩風方 ..... 576

【加味磁朱丸】 ..... 576

【通變黑錫丹】 ..... 579

【一味鐵養湯】 ..... 580

治肢體痿廢方 ..... 583

【補偏湯】 ..... 583

【振頹湯】 ..... 588

【振頹丸】 ..... 590

【薑膠膏】 ..... 592

〈第八卷〉 ..... 593

治女科方 ..... 594

【玉燭湯】 ..... 594

【理衝湯】 ..... 597

【理衝丸】 ..... 602

【安衝湯】 ..... 606

【固衝湯】 ..... 609

【溫衝湯】 ..... 613

【清帶湯】 ..... 615

【加味麥門冬湯】 ..... 618

【壽胎丸】	620
【安胃飲】	623
【大順湯】	625
【和血熄風湯】	629
【滋陰清胃湯】	632
【滋乳湯】	633
【消乳湯】	634
【升肝舒鬱湯】	635
【資生通脈湯】	636
治眼科方	639
【蒲公英湯】	639
【磨翳水】	641
【磨翳散】	642
【明目蓬硝水】	643
【清腦黃連膏】	644
【益瞳丸】	645
【羊肝豬膽丸】	646
治咽喉方	649
【咀華清喉丹】	649

治牙疳方	653
【古方馬乳飲】	653
【敷牙疳散藥方】	655
【牙疳敷籐黃法】	656
治瘡科方	658
【消癰丸】	658
【消癰膏】	660
【化癰生肌散】	661
【內托生肌散】	663
【洗髓丹】	666
雜錄	670
【服硫磺法】	670
【解砒石毒兼解洋火毒方】	673
【治夢遺運氣法】	674
跋	676
中篇	678
醫學衷中參西錄第四期	679
序	680
例言	682

〈第一卷〉……………684

石膏解……………685

人參解……………713

【附：人參形狀考】……………715

西洋參解……………723

黃耆解……………724

〈第二卷〉……………734

山萸肉解……………735

白朮解……………742

赭石解……………744

山藥解……………761

地黃解……………768

甘草解……………772

硃砂解……………776

鴉膽子解……………778

龍骨解……………779

牡蠣解……………782

石決明解……………784

玄參解……………785

〈第三卷〉

當歸解	786
芍藥解	788
芍藥解	789
芎藭解	793
大黃解	795
朴硝、硝石解	797
厚朴解	800
麻黃解	802
柴胡解	805
桂枝解	809
三七解	812
滑石解	817
牛膝解	819
遠志解	820
龍膽草解	821
半夏解	822
栝蒌解	824
天花粉解	826
乾薑解	827

〈第四卷〉

生薑解	832
附子、烏頭、天雄解	833
肉桂解	836
知母解	838
天門冬解	839
麥門冬解	841
黃連解	842
黃芩解	844
白茅根解	846
葶苈、蘆根解	847
鮮小薊根解	849
大麥芽解	850
茵陳解	852
萊菔子解	854
枸杞子、地骨皮解	855
【附方：金髓煎】	857
海螵蛸、茜草解	859
罌粟殼解	861



草薺	894
五味子解	893
胡桃解	891
大棗解	889
柏子仁解	887
龍眼肉解	885
石榴解	883
山楂解	882
常山解	881
乳香、沒藥解	879
三稜、莪朮解	877
蒲黃解	875
木通解	874
茯苓、茯神解	871
薄荷解	869
川楝子解	868
連翹解	866
沙參解	864
竹茹解	862

〈第五卷〉

雞內金解	895
穿山甲解	899
蜈蚣解	900
水蛭解	903
蠍子解	905
蟬蛻解	906
羚羊角解	907
血餘炭解	914
指甲解	915
〈第五卷〉	916
阿斯必林	917
安知必林	919
別臘蜜童	920
安知歇貌林	921
弗那攝精	923
撒裡矢爾酸那篤留謨	924
撒魯兒	925
規尼涅	926
烏羅特羅賓	928

鹽酸	929
鹽酸歇魯茵	930
旗那葉	931
蓖麻子油	932
硫苦	933
甘汞	934
食鹽	935
抱水格魯拉爾	936
貌羅謨加留謨、貌羅謨安母紐謨、貌羅謨那篤留謨	937
依的兒	939
哥羅芳謨	940
實芰答裡斯葉	942
斯獨落仿斯精、斯獨落仿斯丁兒	943
安母尼亞茴香精	944
安息香酸那篤留謨	945
含糖白布聖	946
石碳酸	947
硼酸	948
單寧酸	949

單那爾並	950
硫酸亞鉛	951
幾阿蘇	952
過滿俺酸加里	953
百露拔爾撒謨	954
麥角	955
醋酸鉛	958
沃度仿謨	960
沃度加留謨	961
重碳酸那篤留謨	963
骨拜波拔爾撒謨	964
萘澄茄末	965
白檀油	966
醫學衷中參西錄第五期	967
序	968
題詞	969
例言	972
〈第一卷〉	976
論中醫之理多包括西醫之理溝通中西原非難事	977

人身神明詮	986
元氣詮	988
大氣詮	992
論人身君火相火有先後天之分	999
腦氣筋辨	1001
三焦考	1004
少陽為遊部論	1007
左傳盲之上膏之下解及病在膏肓之治法	1010
答人問膜原	1011
答人問泌尿道路	1012
答方寄齋問黃庭經後有幽闕前有命門	1015
答劉希文問外腎與舉丸與何髒有密切之關係	1016
答人問胞室子宮氣海兒枕	1018
答陳董塵疑《內經》十二經有名無質	1020
報駁左肝右脾解者書	1022
深研肝左脾右之理	1024
續申左肝右脾之研究	1027
論醫士當用靜坐之功以悟哲學	1030
醫學宜參看《丹經》論	1033

〈第二卷〉

論哲學與醫學之關係	1036
石膏生用直同金丹煨用即同鳩毒說	1040
石膏治病無分南北論	1041
答王隆驥君石膏生用煨用之研究	1044
論三七有殊異之功能	1049
羚羊角辨	1055
〔甘露清毒飲〕	1059
論馬錢子為健胃妙藥	1065
論龍骨不可煨用之理	1067
麝蟲辨	1069
論雞內金為治女子乾血勞要藥	1070
答人疑洗髓丹中輕粉紅粉性過猛烈	1071
讀高思潛氏野苧菜根對於霍亂之功效書後	1072
讀盧育和氏葵能治瘧述書後	1075
冬葵子辨	1077
論赤石脂煨用之可疑	1080
辨《傷寒論》方中所用之赤小豆是穀中小豆非相思子	1082
論白虎湯中粳米不可誤用糯米	1083
	1084

〈卷三〉

麥奴、麥角辨	1085
小茴香辨	1086
論用藥以勝病為主不拘分量之多少	1088
答朱靜恒問藥三則	1093
牛肉反紅荊之目睹	1095
甘草反鱧魚之質疑	1096
論中西之藥原宜相助為理	1097
論西藥不盡宜於中人	1100
復李祝華書	1101
復竹芷熙書	1103
論鱉甲、龜板不可用於虛弱之證	1104
論草薺為治失溺要藥不可用之治淋	1105
論沙參為治肺勞要藥	1106
.....	1107
論腦充血之原因及治法	1108
論腦充血證可預防及其證誤名中風之由 (附：建瓴湯)	1112
【建瓴湯】	1112
論腦貧血治法 (附：腦髓空治法)	1117
論腦貧血痿廢治法答內政部長楊階三先生 (附：乾頹湯、補腦振痿湯)	1120

論心病治法	1124
論肺病治法（附：清金二妙丹、清肺三妙丹、治肺病便方）	1129
【清金益氣湯】	1134
【清金解毒湯】	1134
【治肺病便方】	1136
論肺勞喘嗽治法	1139
讀章太炎氏論肺病治法書後	1141
總論喘證治法	1143
論李東垣補中益氣湯所治之喘證	1149
論胃病噎膈（即胃癌）治法及反胃治法（附：變質化痰丸）	1151
論胃氣不降治法	1158
答劉希文問肝與脾之關係及肝病善作疼之理	1161
論肝病治法（附：新擬和肝丸）	1163
【新擬和肝丸】	1166
論腎弱不能作強治法	1168
論治夢遺法	1171
〈第四卷〉	1172
論目疾由於腦充血者治法	1173
【磨翳藥水】	1173



目疾由於伏氣化熱者治法	1175
答郭炳恒問小兒耳聾口啞治法	1176
論鼻淵治法	1177
自述治癒牙疼之經過	1178
論喉證治法	1180
詳論咽喉證治法	1183
【加減八味地黃湯】	1183
【斂陰瀉肝湯】	1185
【消腫利咽湯】	1191
閱劉華封《爛喉痧證治辨異》書後	1194
論結胸治法	1196
論腸結治法	1199
論肢體痿廢之原因及治法（附：起痿湯、養腦利肢湯）	1202
【起痿湯】	1205
【養腦利肢湯】	1206
論四肢疼痛其病因涼熱各異之治法	1208
答余姚周樹堂為母問疼風證治法	1210
肢體受寒疼痛可熨以坎離砂及坎離砂製法	1211
答宗弟相臣問右臂疼治法	1212

論治偏枯者不可輕用王勛臣補陽還五湯	1214
答徐韻英問腹疼治法	1216
論腰疼治法	1218
【益督丸】	1218
論足趾出血治法	1221
論骨雷治法	1222
答黃雨岩問接骨方並論及接筋方	1223
〈第五卷〉	1225
論傷寒脈緊及用麻黃湯之變通法	1227
論大青龍湯中之麻黃當以薄荷代之	1230
用小青龍湯治外感痰喘之經過及變通之法	1231
論白虎湯及白虎加人參湯之用法	1241
論大承氣湯厚朴分量似差及變通法	1244
《傷寒論》大承氣湯病脈遲之研究及脈不遲轉數者之變通下法	1246
論《傷寒論》大柴胡湯原當有大黃無枳實	1248
答徐韻英陽旦湯之商榷	1249
論少陰傷寒病有寒有熱之原因及無論涼熱脈皆微細之原因	1250
《傷寒論》〈少陰篇〉桃花湯是治少陰寒痢非治少陰熱痢解	1252

〈第六卷〉

答人問《傷寒論》以六經分篇未言手經足經及後世論溫病者言入手經不入足經，且謂溫病不宜發汗之義	1255
溫病之治法詳於傷寒論解	1258
《傷寒論》中有治溫病初得方用時宜稍變通說（應漢皋丹雪峰君徵稿）	1263
論傷寒溫病神昏譫語之原因及治法	1266
傷寒風溫始終皆宜汗解說	1271
答徐韻英讀《傷寒論》質疑四則	1275
答王景文問《神州醫藥學報》何以用真武湯治其熱日夜無休止立效	1278
論吳又可達原飲不可以治溫病	1279
論吳氏《溫病條辨》二甲復脈三甲復脈二湯	1281
論冬傷於寒春必病溫及冬不藏精春必病溫治法	1284
論伏氣化熱未顯然成溫病者之治法	1288
詳論猩紅熱治法	1290
論天水散（即六一散）治中暑宜於南方，北方用之宜稍變通	1297
論伏暑成瘧治法	1299
論黃膽有內傷外感及內傷外感之兼證並詳治法	1301
徐伯英論審定硝石礬石散	1308
論痢證治法（附：開胃資生丹）	1309

論霍亂治法 ..... 1329

【急救回生丹】 ..... 1331

【衛生防疫寶丹】 ..... 1332

論鼠疫之原因及治法（附：坎離互根湯） ..... 1338

【坎離互根湯】 ..... 1341

【王孟英治結核法】 ..... 1345

【辟穢驅毒飲】 ..... 1345

〈第七卷〉 ..... 1355

答臺灣嚴坤榮代友問痰飲治法 ..... 1356

答張汝偉問其令尊咳嗽治法 ..... 1359

答張汝偉服藥有效致謝書 ..... 1361

論水臌氣臌治法（附：表裡分消湯） ..... 1362

論血臌治法 ..... 1367

論吐血衄血之原因及治法 ..... 1369

【平胃寒降湯】 ..... 1369

【健胃溫降湯】 ..... 1370

【瀉肝降胃湯】 ..... 1370

【鎮衝降胃湯】 ..... 1370

【滋陰清降湯】 ..... 1371

【保元清降湯】	1372
【保元寒降湯】	1372
論治吐血、衄血不可但用涼藥及藥炭強止其血	1381
論吐血、衄血證間有因寒者	1384
論衝氣上衝之病因病狀病脈及治法	1386
論火不歸原治法	1388
虛勞溫病皆忌橘紅說	1393
論治疔宜重用大黃（附：大黃掃毒湯）	1395
論治癩	1397
駁方書貴陽抑陰論	1398
治虛勞證宜慎防汗脫說	1401
答翁義方問呃逆氣鬱治法	1402
論治癩瘋	1403
【附制硫化鉛法】	1404
論癩狂失心之原因及治法	1405
論革脈之形狀及治法	1407
答人問鐵汁與四物湯補血之比較	1409
答人問四物湯能補血中血球及明水之理	1410
論女子癥瘕治法（附：化瘀通經散）	1411

論帶證治法	1415
論血崩治法	1416
論治女子血崩有兩種特效藥	1418
論婦人不妊治法	1419
論治婦人流產	1421
論難產治法	1423
答鮑槎法問女子陰挺治法	1424
論室女干病治法	1425
論小兒瘰癧病治法	1426
答胡天宗問小兒暑天水瀉及由瀉變痢由瘧轉痢之治法	1428
論脾風治法	1429
治幼年溫熱證宜預防其出痧疹	1431
論治瘋犬傷方	1434
解觸電氣	1437
外傷甚重救急方	1438
〈第八卷〉	1441
致陸晉笙書	1442
復宗弟相臣書	1445
復傅鶴臯書	1446

復賓仙園書	1447
復胡劍華書	1449
復王肖舫問《內經》注疏何家最善書	1451
復相臣哲嗣毅武書	1453
復冉雪峰問創建醫學堂規則書	1456
復劉希憲書	1457
宗弟相臣來函（名樹筠，直隸青縣張家營人）	1458
相臣哲嗣毅武來函（名燕傑）	1462
孫香蓀來函（名蕊榜，直隸鹽山趙毛陶人）	1466
馬秀三來函（奉天義縣南關人）	1471
蕭介青來函（漢口太和橋屏藩裡人）	1472
周禹錫來函（名榮珪，四川涇南人）	1474
張讓軒來函（直隸唐山老莊之人）	1477
席文介來函（湖北當陽縣人）	1479
章叔和來函（名洪均，安徽績溪長安人）	1480
盧月潭來函（名保圻，山東德州人）	1483
董壽山來函（名仁清，滄縣董程家林人）	1485
閻兆元來函（名國慶，奉天桓仁縣女子師範校長）	1489
楊鴻恩來函（奉天鐵嶺人，曾在奉天醫院從習醫學）	1490

萬澤東來函（名沛霖，奉天法庫縣人）	1492
賓仙園來函（名啟榮，廣西柳州人）	1496
田聘卿來函（名毓珍，奉天開原人）	1497
張右長來函（湖南常德縣神武巷人）	1498
蔡維望來函（江蘇崇明縣協平鄉西新鎮人）	1499
李品三來函（名金恒，直隸滄縣城東孫家莊子人）	1501
李曰綸來函（名恩綽，直隸鹽山花寨人）	1502
楊學忱來函（名繡章，天津北營門外曹家胡同五號住址）	1505
刁繼沖來函（江蘇崇明縣人）	1506
高硯樵來函（名崇勳，煙臺同善社）	1507
劉惠民來函（山東沂水城西鄉胡家莊協濟中西藥房）	1509
趙利庭來函（唐山啟新洋灰公司收發課）	1510
吳宏鼎來函（安徽當陽護駕墩鎮）	1511
王錫光來函（江蘇平臺）	1512
仲曉秋來函（柳河孤山子郵政局局長）	1513
高麗安鳳軒來函（高麗慶南統營郡光道面竹林裡（二七六番地）	1514
山西平陸縣尹彭子益致山西醫學會理事長書（論《衷中參西錄》之內容）	1515
盛澤王鏡泉登《紹興醫報》論《衷中參西錄》為醫家必讀之書	1516
蚩湖盧逸軒登如皋醫報論第四期書藥物學講義之內容	1517



跋重刊第五期《醫學衷中參西錄》…………… 1518

下篇…………… 1520

醫學衷中參西錄第六期…………… 1521

序…………… 1522

題詞…………… 1523

例言…………… 1525

〈第一卷〉…………… 1527

虛勞喘嗽門…………… 1528

【虛勞證陽亢陰虧】…………… 1528

【虛勞兼勞碌過度】…………… 1530

【肺勞咳嗽由於伏氣化熱所傷證】…………… 1532

【虛勞咳嗽兼外感實熱證】…………… 1534

【勞熱咳嗽】…………… 1536

【肺勞喘嗽遺傳性證】…………… 1538

【肺勞痰喘】…………… 1541

【肺勞喘咳】…………… 1543

【肺勞喘嗽兼不寐證】…………… 1545

【肺病咳嗽吐血】…………… 1547

【肺病咳吐膿血】…………… 1549

【肺病咳吐痰血】 ..... 1552  
氣病門 ..... 1554

【大氣下陷兼小便不禁】 ..... 1554

【大氣下陷】 ..... 1558

【大氣下陷身冷】 ..... 1559

【大氣陷兼消食】 ..... 1561

【大氣陷兼疝氣】 ..... 1564

【衝氣上衝兼奔豚】 ..... 1566

【胃氣不降】 ..... 1568

【肝氣鬱兼胃氣不降】 ..... 1570

【胃氣不降】 ..... 1573

血病門 ..... 1574

【吐血證】 ..... 1574

【咳血兼吐血證】 ..... 1576

【吐血兼咳嗽】 ..... 1577

【吐血兼咳嗽】 ..... 1579

【吐血證】 ..... 1581

【吐血證】 ..... 1582

〈第二卷〉 ..... 1584

血病門 ..... 1585

【大便下血】 ..... 1585

【大便下血】 ..... 1587

【大便下血】 ..... 1588

【大便下血】 ..... 1589

【瘀血短氣】 ..... 1591

腦充血門 ..... 1593

【腦充血頭疼】 ..... 1593

【腦充血頭疼】 ..... 1596

【腦充血頭疼】 ..... 1599

【腦充血兼腿痿弱】 ..... 1602

【腦充血兼痰厥】 ..... 1604

【腦充血兼偏枯】 ..... 1606

腸胃病門 ..... 1609

【噎膈】 ..... 1609

【反胃吐食】 ..... 1611

【胃脘疼痛】 ..... 1612

【冷積腹疼】 ..... 1614

【腸結腹疼】 ..... 1615

【腸結腹疼兼外感實熱】	1616
頭部病門	1617
【頭疼】	1617
【眼疾】	1619
【目病乾疼】	1620
【牙疼】	1621
肢體疼痛門	1622
【脅疼】	1622
【脅下疼兼胃口疼】	1625
【脅疼】	1628
【腰疼】	1629
【腿疼】	1631
腫脹門	1633
【受風水腫】	1633
【陰虛水腫】	1635
【風水有痰】	1637
黃膽門	1639
【黃膽兼外感】	1639
【黃膽】	1642

〈第三卷〉

【黃膽】	1644
痢疾門	1645
【痢疾轉腸潰瘍】	1646
【痢疾】	1649
【痢疾】	1650
【噤口痢】	1651
大小便病門	1653
【泄瀉兼發灼】	1653
【小便白濁】	1655
【小便因寒閉塞】	1657
不寐病門	1659
【心虛不寐】	1659
【不寐兼驚悸】	1662
癩癩癩狂門	1664
【癩風兼腦充血】	1664
【受風癩瘰】	1666
【慢脾風】	1667
【慢脾風】	1670

【將成慢脾風】	1672
【癲狂失心】	1674
【神經錯亂】	1676
傷寒門	1678
【傷寒兼腦膜炎】	1678
【傷寒脈閉】	1681
【傷寒脈閉】	1682
【少陰傷寒】	1683
【傷寒兼有伏熱證】	1685
溫病門	1687
【溫病兼大氣下陷】	1687
【溫病兼氣虛氣鬱】	1690
【溫病兼吐瀉腿抽】	1694
【溫病少陰證】	1697
【溫病結胸】	1700
【溫病結胸】	1701
【溫病】	1703
【風溫】	1704
【風溫兼伏氣化熱】	1706

〈第四卷〉

【溫病兼痧疹】	1708
【溫病兼勞力過度】	1711
【溫病兼下痢】	1713
【溫病兼腦膜炎】	1715
【溫熱泄瀉】	1717
.....	1720
【溫病兼虛熱】	1721
【溫病體虛】	1723
【溫熱腹疼兼下痢】	1725
【溫病兼下痢】	1728
【溫病兼下痢】	1730
【暑溫兼泄瀉】	1732
【溫病】	1734
【溫病兼項後作疼】	1737
【溫病兼脅疼】	1738
【風溫兼喘促】	1740
【秋溫兼伏氣化熱】	1743
【溫病兼嘔吐】	1746
【溫病兼嘔吐】	1748

【溫病兼衄血便血】	1750
【溫疹】	1752
【溫疹兼喉痧】	1753
【溫病兼喉痧痰喘】	1756
【溫病兼喉疼】	1759
【溫病兼陰虛】	1760
【溫病兼喘脹】	1763
【溫病兼虛熱】	1765
【溫病兼吐血】	1767
【溫病兼衝氣上衝】	1769
瘧疾門	1771
【瘧疾兼陰虛】	1771
【瘧疾兼脾脹】	1772
【瘧疾兼暑熱】	1774
【瘧痢兼證】	1775
霍亂門	1776
【霍亂兼轉筋】	1776
【霍亂吐瀉】	1779
【霍亂脫證】	1780



【霍亂暴脫證】 ..... 1782

婦女科 ..... 1785

【懷妊受溫病】 ..... 1785

【受妊嘔吐】 ..... 1787

【懷妊得溫病兼痰喘】 ..... 1789

【懷妊受溫病兼下痢】 ..... 1793

【產後下血】 ..... 1795

【產後手足抽掣】 ..... 1798

【產後癥瘕】 ..... 1799

【血閉成瘕】 ..... 1801

【產後溫病】 ..... 1803

【流產後滿悶】 ..... 1805

【月閉兼溫疹醫急】 ..... 1807

【處女經閉】 ..... 1810

【血崩證】 ..... 1812

【附錄保赤良方】 ..... 1813

〈第五卷〉 ..... 1815

種菊軒詩草 ..... 1816

自序 ..... 1816

登日觀峰詩並序	1817
秋日與廣平諸同人會治北學舍開軒遠眺	1820
和楊孕靈君甲子生朝偶成（步原韻）	1820
貴農	1821
惜物命	1821
憫時	1821
德州軍中視日報有感	1821
德州衛岸有感（時洪憲僭號）	1822
秋日閒遊衛岸	1822
月夜獨步河上	1822
題扇詩並序	1823
廣平學舍題壁並序	1823
廣平模範學校題壁	1824
大名臨河旅邸春日即事	1824
客居大名清明有感	1824
黃鶴樓題壁詩並序	1825
漢皋江上偶成	1826
自漢皋還至保陽即事	1826
題東明縣漆陽書院	1827

和友人李心泉自詠原韻	1827
詠菊詩並序	1827
詠菊（在奉省作於錫鈞翰林座上）	1828
正月上旬懷友人楊杏村	1828
和張漢槎自題避秦居原韻	1828
又壘前韻	1829
和宗弟相臣詠懷二律原韻	1829
和胡天宗五十自壽原韻	1830
詠遼寧城東萬泉河並序	1831
和徐韻英二十感懷原韻	1832
感時	1832
呂鏡宇尚書八旬晉五壽誕兼重逢赴鹿鳴之期志喜	1833
放紙鳶	1833
詠傅星橋表兄元配劉孺人詩並序	1834
暮春閒遊衛上	1834
意境	1835
題友人張子平別墅（別墅在許孝子莊，門外有許孝子墓）	1835
秋日在大名偶眺河上	1835
和李心泉詠黃梅詩原韻	1835

題楊如侯君靈素生理新論中肖相	1835
自題衷中參西錄中肖相	1836
題友人張叔翔與全連軍士攝影	1836
詠藥中白頭翁	1836
題軍士魯廣達肖相	1837
題蘇明陽君肖相（天地新學社主任）	1837
題張鐘山君肖相（天地新學社副主任，素有修道工夫，故詩中云云）	1837
題姜指歐君肖相（天地新學社編輯主任）	1837
題優伶孝女詩並序	1837
中秋望月	1839
題友人張海如所畫山水圖	1839
寄友人朱鉢文	1839
題康變忱色門棒喝集	1840
詠史	1840
題明季費宮人故里	1841
立春日遲楊杏材不至	1842
湖北道中	1842
觀劇偶成	1842
和友人何筱棠贈妓原韻並勸筱棠為之消籍	1843

茲溪張生甫君六旬壽詞	1843
贈友人楊杏村	1844
謝何筱棠贈詩為題扇上並為畫蘭於扇	1845
題畫	1846
題友人祁仲安肖相	1846
挽陸軍中將黃華軒公	1847
擬諸葛武侯祠堂對聯（奉天高等師範題）	1847
〈醫學衷中參西錄第七期〉	1848
放魚詩並序	1849
題先師張壽甫先生遺像	1850
王序	1851
高序	1853
衷中參西錄第七期題詠六首	1855
林序	1856
張序	1858
劉序	1860
孫序	1861
題詞	1862
題記	1863

〈第一卷〉

六經總論	1864
太陽病桂枝湯證	1865
【桂枝湯方】	1869
太陽病麻黃湯證（附：太陽與陽明合病麻黃湯證）	1874
【麻黃湯方】	1875
附：用麻黃湯之變通法	1876
太陽與陽明合病麻黃湯證	1880
太陽溫病麻杏甘石湯證	1881
【麻黃杏仁甘草石膏湯原方】	1883
太陽病大青龍湯證（附：脈微弱汗出惡風及筋惕肉瞤治法）	1886
【大青龍湯方】	1886
太陽病小青龍湯證（附：從龍湯）	1890
【小青龍湯原方】	1890
【後世所用小青龍湯份量】	1891
太陽病旋覆花代赭石湯證	1897
【旋復代赭石湯方】	1897
太陽病大陷胸湯證	1900
【大陷胸湯方】	1901

太陽病小陷胸湯證（附：白散方）	1904
【小陷胸湯方】	1904
【白散方】	1905
太陽病大黃黃連瀉心湯證	1908
【大黃黃連瀉心湯方】	1908
太陽病附子瀉心湯證（附：自擬變通方）	1909
【附子瀉心湯方】	1909
太陽病炙甘草湯證	1911
【炙甘草湯方】	1911
太陽病桃核承氣湯證	1915
【桃核承氣湯方】	1915
〈第二卷〉	1917
太陽陽明合病桂枝加葛根湯證	1918
【桂枝加葛根湯方】	1918
太陽陽明合病葛根湯證	1920
【葛根湯方】	1920
陽明病葛根黃連黃芩湯證（附：自訂滋陰宣解湯方）	1921
【葛根黃連黃芩湯方】	1921
陽明病白虎湯證	1924

【白虎湯方】	1925
陽明病白虎加人參湯證	1936
【白虎加人參湯方】	1936
陽明病三承氣湯證	1943
【大承氣湯方】	1944
【小承氣湯方】	1945
【調胃承氣湯方】	1946
陽明病茵陳蒿湯證	1952
【茵陳蒿湯方】	1952
陽明病梔子柏皮湯證	1954
【梔子柏皮湯方】	1954
陽明病麻黃連軹赤小豆湯證	1955
【麻黃連軹赤小豆湯方】	1955
陽明病豬苓湯證	1959
陽明病四逆湯證	1962
【四逆湯方】	1962
〈第三卷〉	1964
少陽病提綱及汗吐下三禁	1965
少陽病小柴胡湯證	1968



【小柴胡湯方】	1969
少陽病大柴胡湯證	1977
【大柴胡湯方】	1977
〈少陽篇〉三陽合病之治法	1982
太陰病提綱及意義	1986
太陰病桂枝湯證	1988
太陰病宜四逆輩諸寒證	1989
太陰病壞證桂枝加芍藥湯及桂枝加大黃湯證	1990
【桂枝加芍藥湯方】	1991
【桂枝加大黃湯方】	1992
〈第四卷〉	1993
少陰病提綱及意義	1994
少陰病麻黃附子細辛湯證	2000
【麻黃附子細辛湯方】	2000
少陰病黃連阿膠湯證（附：自訂坎離互根湯方）	2002
【黃連阿膠湯】	2002
少陰病當灸及附子湯證	2005
少陰病桃花湯證	2008
【桃花湯方】	2009

少陰病吳茱萸湯證	2013
【吳茱萸湯】	2013
少陰病苦酒湯證	2015
【苦酒湯】	2015
少陰病白通湯證及白通加豬膽汁湯證	2017
【白通湯方】	2017
【白通加豬膽汁湯方】	2017
少陰病真武湯證	2020
【真武湯方】	2020
少陰病通脈四逆湯證	2022
【通脈四逆湯】	2022
少陰病大承氣湯證	2024
厥陰病提綱及意義	2027
厥陰病烏梅丸證	2028
【烏梅丸方】	2028
厥陰病白虎湯證	2032
厥陰病當歸四逆湯及加吳茱萸生薑湯證	2033
【當歸四逆湯方】	2033
【當歸四逆加吳茱萸生薑湯方】	2033

厥陰病白頭翁湯證	2035
【白頭翁湯方】	2035
不分經之病燒棍散證、理中丸證、竹葉石膏湯證	2038
【燒棍散方】	2038
【理中丸方】	2039
【竹葉石膏湯方】	2040
溫病遺方	2042
【太陽經】	2042
【更定麻杏甘石湯方】	2045
醫學衷中參西錄第八期	2048
醫話拾零	2050
【診餘隨筆】	2050
【離中丹】	2051
【坎中丹】	2052
【逐風通痺湯】	2052
胡萊菔英能解砒石毒	2061
麥苗善治黃膽	2062
答受業高崇勳質疑	2063
答受業林世銘質疑	2066

答葛介人相質一則（論隱曲）	2068
答汪景文質疑	2069
答柴德新疑問	2070
答劉希文問七傷	2071
答胡劍華疑問二則	2073
答徐韻英疑問	2075
診餘隨筆	2076
答王肖舫質疑	2077
答沈仲圭問學醫當讀何書為要	2078
答周小農問魚肚	2081
復汪景文書	2082
答金履升問治吐血後咳嗽法	2083
答吳自雄問病	2084
答高甘棠問病三則	2085
答王肖舫問小兒走馬牙疳	2086
答徐莊君問其夫人蕩漾病治法	2087
答諸暨孟興朕疑問二則	2088
答月影女士問疼經治法	2089
答劉希文問濕溫治法之理由	2090

答王蘭遠問時方生化湯	2091
答陳士成問異證治法	2093
答龐履廷問大便脫肛治法	2094
答章景和君代友問病案治法	2095
答章韶君問腹內動氣證治法	2096
答任伯和問治蛇咬法	2097
答任伯和問治頑癬法及足底癢治法	2098
答任伯和問喉證治法	2099
答黃雨岩問創傷及跌打損傷外敷內服止疼化瘀方	2100
答胡劍華問拔漏管方	2101
答蕭介青書	2102
第一集三三醫書評	2103
《溫熱逢源》第一種評	2104
《醫事啟源》第二種評	2105
《醫經秘旨》第三種評	2106
《醫病簡要》第四種評	2107
《醫階辨症》第五種評	2108
《喉科秘訣》第六種評	2109
《癩科全書》第七種評	2110

《時行伏陰芻言》第八種評	2111
《村居救急方》第九種評	2112
《毆蠱燃犀錄》第十種評	2113
《外科方外奇方》第十一種評	2114
《咳論經旨》第十二種評	2115
《臨證經驗舌法》第十三種評	2116
《沈氏經驗方》第十四種評	2117
《痧疫指迷》第十五種評	2118
《靈蘭要覽》第十六種評	2119
《凌臨靈方》第十七種評	2120
《推篷悟話》第十八種評	2121
《舊德堂醫案》第十九種評	2122
《內經辯言》第二十種評	2123
《診脈三十二辯》第二十一種評	2124
《專治麻疹初編》第二十二種評	2125
《產科心法》第二十三種評	2126
《本草衍句》第二十四種評	2127
《先哲醫話》第二十五種評	2128
《陳氏幼科秘訣》第二十六種評	2129

《秋瘧指南》第二十七種評	2130
《備急灸法》第二十八種評	2131
《醫源》第二十九種評	2132
《馬培之醫案》第三十種評	2133
《本事方集》第三十一種評	2134
《曹仁伯醫案》第三十二種評	2135
《南醫別鑒》第三十三種評	2136
臨症隨筆	2137
治癒筆記	2149
臨證隨筆	2150

編者序

觀看坊間中醫古籍，大都以大陸出版為多，臺灣所出者，甚少，而大陸自從改繁從簡後，書籍的印行，皆以簡體字為多，因而簡體書籍，充斥於書市，書中所排的版面，也都仿西式的橫書，中式的直書已不復見。雖然簡體書無妨於閱讀，但對於有心於中醫之學者，其字型構造所蘊育的內涵，已不復見，這是簡體書籍所不能勝於繁體書之處，況簡體有多字混用，如干、乾、幹，簡體字都是干，對於習於繁體字的人，實有點在別錯字的感覺。此外，在繁體字使用的地區，要閱讀書籍，還要先學會辨識簡體字，在閱讀上又多了一層阻礙，實在不利於該區域中醫知識的普及。

感恩有此能力為中醫的古籍的電子化盡一分心力，雖然從事中醫繁體古籍的電子化，首先必須找與中醫相關之人員，最好是中醫師，但畢竟不是所有的中醫師，能於診務之餘，空暇之時，願長時間犧牲，醉心於古籍，不旁涉俗務，又能精心點校，以使讀者在閱讀時，文理曉暢，無絲毫的阻礙。像這部份的工程，實在是浩大，所以常令諸多有心親為的中醫師，望而卻步。

像我，一個中醫界的後輩小生，性內向，不喜與人交遊，口中常言「君子之交淡如水」，心中所繫者，大丈夫當有所作為以利益於後生，所以對於中醫古籍的電子化，便欣然承受而有所著力焉，至於對於免費繁體電子書的編著，以供人下載閱讀，推廣中醫知識，使中醫更為世人所了解，更是醉心於此。然有諸多網



友，喜歡書本的感覺。所以現在將此古籍，經由多次校正、句讀，做成直書，不僅可以用電子書來閱讀，也可以印成書本。當然往後，也將有諸多繁體電子書籍，發布於世，敬請讀者拭目以待。

編者陳永諸敬上



张锡纯寿甫遗像

# 上 篇

醫 學 衷 中 參 西 錄 前 三 期 合 編

張序

吾友壽甫張君，宿學士也。自幼讀書即不落恒蹊，長而好學，篤志近思，一字一句不容放過，於六經類多深造，而尤邃於《易》，曾衍有圖說，以發前人未發之奧。夫《易》由四聖以成，而吾友探蹟索隱，別具神奇，非大聰明，曷克語此。嘗見以文會友，談妙理，揭精蘊，舉座傾聽，共相首肯，知其得力者深也。方今大重算學、天元代數諸書，耐人尋味，實費人研究，而吾友一見即解，因著書立說，教課生徒，多所成就，凡此固天資高，亦由學力到也。

名為實之賓，吾友能勵躬行、尚節義、立廉隅，修於己，聞於人，雖身為布衣，而於流俗之披靡，殊有整頓。誠者，物之終始，不誠無物。吾友天性諒直，無稍涉虛浮，忠信為本，實事求是，此其所以進德，即其所以立業也。今夫人有文固貴，有本能知尤貴。能行博雅弘通之士，當持論剴切，非不娓娓動人，及徵諸日用之地，宜於口者，不能體諸身，以視吾友之本末交修、知行並進，豈可同日語哉？其誦讀餘暇，兼及醫學，於中西方書，搜閱極博，而生平得力，實在乎《本經》、《內經》。恒因經文一二語，悟出無限法門，故其臨證，手到病除，即病勢重危，群醫束手，一經診視，立能回春，然此特吾友之緒餘，初非以此見長也。

迨夫閱歷日久，其經驗良方，不忍拋棄，爰成斯編，質諸同好，志在濟人，情殷覺世，指迷津，普慈航，一片婆心，喚醒夢夢，是不獨收效於當時，尤將流

澤於後世也。雖然天性發為文章，事功根於學問，吾願覽斯編者，不以醫視醫，而以經術視醫，審其制方之精義，用藥之要著，化裁通變，方智圓神，於以見醫學精華之流露，即以見六經精華之流露也，而吾友之深於經學彰彰矣，乃知道明德立之儒，不為良相，必為良醫，利用厚生之道與起死回生之能，其事異，其理同也。

宣統二年季春愚弟張慎敬亭氏敬序

袁序

夫古者《神農本經》實為藥性之真詮，軒轅《內經》窮盡陰陽之奧旨，於以歎聖神首出，不但利濟一時，實能利濟萬世也。至漢張仲景得伊聖湯液經，更上溯《本經》、《內經》之精義，著《傷寒》、《金匱》兩書，醫學於以大備，後世論醫學者推為正宗，但《本經》、《內經》，醫者多因其文字艱深，義蘊難窺，束閣不觀。《傷寒論》及《金匱》，醫者又多畏疑其方而不敢輕試，雖晉唐迄今，諸名家立論，咸遵古訓而闡發《本經》、《內經》及《傷寒》、《金匱》，諸書仍多餘蘊，至獨出己見更能發前人所未發，則行世方書中，誠不易覲也。

吾友張壽甫君，鹽山博雅士，素有窮經工夫，於《本經》、《內經》及仲景以後諸名醫著作，莫不探索其精奧，又兼通西人醫學及西人化學之理，亦恒運用於方藥之中，是以生平臨證疏方，活人無算，於內傷、外感諸要證，無不應手輒效，而其屢試屢驗之方，久而恐其遺失，輒於方後各加詮解，並附載緊要醫案，輯為八卷，名曰《醫學衷中參西錄》，實能闡發前人所未發，更能融匯中西為一致，見者爭相傳抄。

予於春杪客京師，適見抄本，讀閱一過，驚為當時醫學中有一無二之著作，函勸於內務部，呈請立案，公諸世界，君韙予言，內務部果批准有著作權，而君仍未敢自信也。於夏季正自錄真本，並細加研思，夜以繼日，心力疲甚，不覺睡去，夢升講臺，對大眾演說醫理，忽有人捧一冠，若南海大士所戴蓮花冠形，為

加於首。醒後恍悟曰「此中殆有神靈欲我速成此書，以普濟群生也」，遂覺精神奮發，頓忘其勞，而付梓之意亦決，並委予以參訂。予雖不習醫，然十年作吏，於民間疾苦時，恫瘝在抱，頗志同道合，古人云「上醫醫國」，又云「為醫等於為相」，君之大著，欽佩已深，故樂得而贊成之。

民國六年季秋奉天桓仁愚弟袁澍滋霖普序



蘇序

先王以不忍人之心，行不忍人之政，醫書之作，其具不忍人之心乎？生命至重也，辨證不清，投劑多誤，時有因此而戕賊人者。斯道也，非寢饋於古今中外各名家諸書，悉書抉擇，獨辟機緘，不足以問世；非洞明陰陽、氣運、虛實、表裡之理，盡人合天，如見肺肝，不足以臨證。以故神農、黃帝而後，以醫學著者，若扁鵲、若倉公、若張仲景、若王叔和，僅問世一出，豈彼蒼有所秘惜歟？誠以醫理精微，空談易，實施良難也。若本其生平之著作，施用於臨證之際，而皆能得心應手者，誠曠世不一睹也。

僕於往歲有志醫學，涉獵群書未竟其事，因西學發明太陽不動，地球繞轉之說風行一世，詳究其理，疑義叢生，因疑生悟，由是研究天地學，歷十餘寒暑，未暇兼顧醫學，而傾慕之心，仍未有已也。民國五年秋，以自製天地模型人都呈准，大部適有鹽山張壽甫先生函寄醫書，原稿八卷，簽題《醫學衷中參西錄》，且云「拙作本懷救世之心，深恐已誤誤人，請校正」，翻閱數過，觀其審證精詳，立方確當，究藥性之寬猛，以老幼強弱為標準，不拘拘成法，不趨於險路，誠所謂獨辟機緘，如見肺肝者也。以之問世，臨證必不脛而走，但僕於醫學，粗知津涯，何足負校正之責，必質諸高明，始不負壽甫先生濟世之苦心。遂於民國六年春，與同社友張君鐘山、姜君指歐，代為呈部注冊。立案回奉後，即乞醫學研究會正、副會長高振鐸、王松閣兩先生暨精於醫術諸同人，詳加校正，不惟人人稱

絕，凡遵其方施治者，莫不立起沉疴，是真能振興醫學，大有進化者矣。於是遂與同社友集資代付剞劂，以公諸同好，俾百萬蒼生群躋壽域，則於不忍人之心，庶乎近焉。書成後，爰書數行於編首，以志巔末。

中華民國七年三月九日蘇中宣明陽氏序於瀋陽天地新學社

自序

人生有大願力，而後有大建樹，一介寒儒，伏處草茅，無所謂建樹也，而其願力固不可沒也。老安友信少懷，孔子之願力也。當令一切眾生皆成佛，如來之願力。醫雖小道，實濟世活人之一端，故學醫者，為身家溫飽計則願力小；為濟世活人計則願力大，而此願力之在錫純，又非僅一身之願力，實乃祖訓斯紹也。錫純原籍山東諸城，自前明遷居直隸鹽山邊務里，累世業儒。先祖友三公續修家乘，垂訓來茲，謂凡後世子孫讀書之外，可以學醫，蓋即范文正公「不為良相，必為良醫」之意也。

錫純幼時，從先嚴丹亭公讀書，嘗述斯言以教錫純，及稍長，又授以方書，且為指示大意，謂誦讀之暇，遊藝於此，為益良多，且又遵祖訓也。特當時方習舉子業，未能大致力於斯耳，後兩試秋闈不第，雖有壯年，而淡於進取，遂廣求方書，遠自農軒，近至國朝著述諸家，約共搜閱百餘種，知《本經》與《內經》，治之開天闢地之聖神，為醫學之鼻祖，實即為醫學之淵海也。迨漢季張仲景出，著《傷寒》、《金匱》兩書，為《本經》、《內經》之功臣，而晉之王叔和、唐之孫思邈、王燾、宋之成無己、明季之喻嘉言，又為仲景之功臣。國朝醫學昌明，人才輩出，若張志聰、徐大椿、黃元御、陳念祖諸賢，莫不率由仲景，上溯《本經》、《內經》之淵源，故其所著醫書，皆為醫學正規。特是自晉、唐迄今，諸家著述，非不美備，然皆斤斤以傳舊為務，初未嘗日新月異，俾吾中華醫學漸有

進步。夫事貴師古者，非以古人之規矩、準繩限我也，惟藉以淪我性靈，益我神智，迨至性靈神智洋溢活潑，又貴舉古人之規矩、準繩而擴充之、變化之、引伸觸長之，使古人可作，應歎為後生可畏。凡天下事皆宜然，而醫學何獨不然哉！

錫純存此意念，以孜孜研究醫學者有年，偶為人疏方，輒能得心應手，挽回沉疴，時先慈劉太君在堂，錫純恐溫清有缺，不敢輕應人延請，適有以急證相求者，錫純造次未遽應，先慈謂錫純曰「病家盼醫如溺水求援，汝果能治，宜急往救之。然臨證時，須多加小心，慎勿鹵莽誤人」，錫純唯唯受教，自此臨證者幾無虛日，至今十餘年矣，今彙集十餘年經驗之方，其屢試屢效者，適得大衍之倍數，方後綴以詮解與緊要醫案，又兼採西人之說與方中義理相發明，緝為八卷，名之曰《醫學衷中參西錄》。

有客適至，翻閱一過而問曰「觀子之書多能發前人所未發，於醫學誠有進化。然今凡百事，皆尚西法，編中雖採取西人之說，而不甚採取西人之藥，恐於此道仍非登峰造極也」，答曰「中華苞符之秘，啟自三墳，《伏羲易經》、《神農本草經》、《黃帝內經》是也。伏羲畫《易》，在有文字之前，故六十四卦止有其象，而能包括萬事萬物之理，經文王、周公、孔子闡發之，而猶有餘蘊。《本經》、《內經》之包括醫理，至精至奧，神妙無窮，亦猶《易經》之包括萬事萬物之理也。自周末秦越人後，歷代諸賢，雖皆各有發明，而較之三聖人之闡發《易經》，實有不及，故其中餘蘊猶多。」

吾儒生古人之後，當竟古人未竟之業，而不能與古為新，俾吾中華醫學大放光明於全球之上，是吾儒之罪也。錫純日存斯心，孜孜忘老，於西法醫學，雖嘗涉獵，實未暇將其藥餌一一試驗，且其藥多係猛烈之品，又不敢輕於試驗，何能多採取乎！然斯編於西法，非僅採用其醫理，恒有採其化學之理，運用於方藥中者，斯乃合中西而融貫為一，又非若採用其藥者，僅為記問之學也。特是學問之道，貴與年俱進，斯編既成之後，行將博覽西法，更採其可信之說與可用之方，試之確有效者，作為續編，此有志未逮之事，或即有志竟成之事也」。

己酉孟春鹽山張錫純壽甫氏書於志誠堂

題詞

淵源仲景舊家聲，博考旁通術益精。薄海同胞關痛癢，中華醫界放光明。滿腔熱血如潮湧，到處陽春著手成。脈案方書千萬卷，慈心濟世獨先生。

瀋陽愚弟李樹勳翰宸敬題

抱負非凡韋布身，遭逢時世偃經論。青囊小試活人術，大地釀成不老春。

安新愚弟楊世榮杏村敬題

良醫良相本相同，妙藥功參造化功。萬里相延（時先生寓湖北漢皋）來塞外，活人事業遍遼東。

鐵嶺愚弟劉尚清海泉敬題

同胞疾苦最關心，費盡精神著等身。恍若早苗齊待雨，權將靈素化甘霖。

瀋陽愚弟苗蘭生孟馥敬題

八卷方書闡隱微，聲名無羽六州飛。大悲閣上東風起，吹到塵寰轉化機。

黃縣同學社弟淳於兆禧廉谿敬題

醫界浮沉二十年，讀君大著心豁然。從今識得活人術，歷試群方妙勝仙。

鐵嶺同學社弟吳衷輯瑞五敬題

閱遍方書意渺茫，偶讀大著喜如狂。中西合撰發名論，醫界撐持有棟樑。

柳河小弟王德一尊三敬題  
憶在荆門睹此書，精言名論近今無。署名喜出同宗手，一脈相傳紹漢初。

青縣同宗弟樹筠敬題  
仲景醫宗眾所欽，後先輝映古同今。著書盡泄苞符秘，具見先生濟世心。

南昌愚弟萬云敬題  
冀北儒醫矯不群，鰥生何幸接蘭薰。雄談汨汨河懸水，神態悠悠岫出雲。勝日郊坰從遺興，忘年樽酒快論文。匆匆半歲駒光盡，風雨雞鳴輒憶君。

灤縣愚弟柔麟祥素村敬題  
胸羅靈素費揣摩，腹貯奇才勝緩和。德被群黎消疫癘，功參造化濟人多。

潛江愚弟朱登五敬題  
學貫天人醫理通，此心久欲坐春風。活人無量恒河數，妙藥深參造化功。

天門後學崔壽康蘭亭敬題  
南陽而後道沉淪，醫學紛更莫問津。幸有此編昭日月，農軒事業又重新。

同邑愚弟李恩綽曰綸敬題  
書著活人苦費心，學經閱歷益深深。探源庖羲靈明辟，究極軒岐奧義尋。神術救時留寶笈，良方餉世度金針。宣傳簡冊足千古，仲景風規又到今。

同邑愚弟黃祺海仙槎敬題

鴻綱細目手編摩，醫界指南受益多。精力過人成妙手，苦心救世洗沉疴。神靈默相追倉扁，診斷分明媿緩和。案列此書生異彩，震驚一豎不為魔。

津沽後學楊秀章學忱敬題

遠紹靈素得真傳，醫藥活人到處然。濟救蒼生無限苦，學參造化貫人天。

瀋陽受業王德峻子岡敬題

心存匡濟裕經猷，遭際偃蹇志莫售。權托刀圭活眾庶，良醫良相本同流。

棗強受業李書剛毅伯敬題

醫國醫人易地然，廣行仁術遍坤乾。萬言靈素羅胸臆，四海蒼黎待保全。著作為經參造化，中西合撰費陶甄。心香一瓣留千古，君是長生不老仙。

同邑世晚李煇熔心泉敬題



一、發明藥性之書，始於《神農本草經》，其書為有文字之後第一書（《易》雖在先，其時猶無文字），簡策之古可知。其書共載藥三百六十五味，以象周天之日數，分上中下三品，上品者，養生之藥也；中品者，治病之藥也；下品者，攻病之藥也，各品之下，皆詳載其氣味與主治，明其氣味，主治之理亦即寓其中矣，而藥性獨具之良能，又恒有出於氣味之外者。古聖洞徹精微，皆能為之一一表出，此在醫學中，誠為開天闢地之鼻祖也。乃後人識見短淺，凡於藥有獨具之良能，不能以氣味推求者，皆刪去不載，如桂枝治上氣吐吸（吸不下達即吐出，即喘者之不納氣也）甚效，《本經》載之，而後世本草不載也。山茱萸治寒熱往來（肝虛極之寒熱往來之）甚效，《本經》載之，而後世本草不載也，若此者不勝舉。愚每觀至此等處，恒深為惋惜，故斯編於論藥性處，皆祖述《本經》，而於後世本草不輕採取也。或有疑其未載明入何臟腑及何經絡者，不知其所主何病，即知其藥力能至何處。究之服藥後，藥隨氣血流行，無處不到，後世之詳為分疏其臟腑經絡者，似轉貽學者以拘墟之弊也。

二、闡發醫理之書，始於《黃帝內經》，其書係黃帝與其臣岐伯、伯高、鬼臾、雷公相問答之詞，分為《素問》、《靈樞》，《素問》大旨以藥治病，《靈樞》大旨以針灸治病，特其年遠代湮，不無殘缺。古時相傳多以口授，尤易亡失，故晉皇甫謐言其書不完全，宋林億疑其書有偽託，且仲景《傷寒論》序謂「撰用

《素問》九卷」，今《素問》二十四卷，其中有偽託可知，然其醇粹之處，確乎貽之聖神，繼非偽託者所能為。即如以針灸治病，此時為東西所共認，設非古聖開其始，後世能創造乎？即西人之細講剖解者，能創造乎？是以讀《內經》之法，但於其可信之處，精研有得，即能開無限法門；其不可信之處，或為後世偽託，付之不論，可也，此孟子所謂「書難盡信」之義也。乃今之偏重西法者，不於《內經》可信之處費心研究，但於其不可信之處極力指摘，推其意見，直謂《內經》真本久失，所傳於世者皆係偽託，有斯理乎？我四萬萬同胞，皆黃帝之子孫也，以祖宗嘉惠後人之典冊，不知抱殘守缺，倍加愛護，而轉欲弁毛棄之，此真令人可發浩歎者也，故斯編於各門中，祖述《內經》之處甚多，而於後世醫書之祖述《內經》者，若《難經》，若《傷寒》、《金匱》諸書，亦偶有所採取焉。

三、斯編所載之方，多係拙擬，間有用古人成方，亦恒有所加減，或於方中獨有會心之處，亦偶載其方而詳為疏解。又於各門方後，附錄西人恒用之效，及西藥試之果有實效者。至論臟腑經絡之處，恒兼取道家之說，以其授受有自來也。又間採西人之說，以其剖驗有實考據也。

四、西人於臟腑剖驗雖精，而仍有未能剖驗之處。人之臟腑有氣、有血、有功用、有性情，西人剖驗之學，詳於論血，略於論氣，能明臟腑之功用，未識臟腑之性情，究於醫學未臻醇備，斯編論臟腑之氣血及其功用、性情，不但多為西人所未發明，即漢晉以來名醫亦多有未發明者。

五、西人之藥喜用猛烈之品，吾中華服之恒與臟腑有不宜，誠以西人多食肉，吾人多穀食，自幼養料既異，臟腑之性質即因之有異。斯編於用西法處，恒取其化學之理，運用於醫理之中，而自處方藥即間有引用西藥之時，亦必其性稍和平，不至含有猛烈毒性者。

六、古人用藥，多是煎一大劑，分三次服下，病癒不必盡劑，不愈者，必一日服盡，此法今人不講久矣。愚治傷寒、瘟疫與一切急證，必用此法。蓋治此等證，勢如救火，以水潑之，火勢稍減，若不連番潑之，則火勢復熾，而前功盡棄。若治他證，不必日服藥三次，亦必朝夕各服藥一次（煎渣再服，可權作一次），使藥力晝夜相繼，見效自速也。

七、富貴之家服藥，多不用次煎，不知次煎原不可廢。慎柔和尚治陰虛勞熱專用次煎，取次煎味淡，善能養脾陰也。夫淡氣歸胃，《內經》曾言之，淡能養脾陰之義，原自淡氣歸胃悟出，而其所以然之故，人仍多不解。徐靈胎曰「《洪範》言五行之味，水曰潤下，潤下作鹹；火曰炎上，炎上作苦；木曰曲直，曲直作酸；金曰從革，從革作辛」，皆直言其物之本味。至於土則變其文曰「土爰稼穡，稼穡作甘」。蓋土本無味，借稼穡之味以為味。夫無味即是淡，故入脾胃屬土，凡味之淡者，皆能入脾胃也。

又按：治陰虛專責重於脾，人亦多不解，陳修園謂「脾為太陰，乃三陰之長」，故治陰虛者，當以滋脾陰為主，脾陰足，自能灌溉諸臟腑也。

八、白虎湯中用粳米，古方生用，今人亦生用。至謂薏米、芡實、山藥之類，猶粳米也。諸家本草多注炒用者，為丸散計耳。今人用之入湯劑亦必炒熟，殊令人不解，惟專用以健脾胃或可炒用，若用以止瀉利，即不宜炒，蓋生者，汁漿稠黏，可以留戀腸胃，若炒熟煮之，則無汁漿矣。至於用以滋陰，用以淡滲，則不宜炒熟，尤彰彰明矣。

九、今之黨參即古之人參，為其生於山西之上黨山谷，故曰黨參，而生於山西之五臺山者尤佳，故又別之曰「臺黨參」，與今之遼東人參原非一種，而氣溫性和，實較遼東人參為易用。且其價又甚廉，貧家亦可服用，誠濟世之良藥也。今遼東亦多有此藥，不必皆生於山西，然必參皮作橫紋，若胡萊菔之紋，而更密於胡萊菔之紋者，方為野山自生之參，用之以代人參，甚有功效。若無橫紋，係土人種植之物，不堪用也。又斯編方中所用人參，皆可用野黨參代之，而不可用遼東秧參代之。遼東秧參俗名高麗參，其性燥熱，不宜輕用，而用於傷寒、瘟疫諸方中，尤非所宜。又有潞黨參，皮色微紅，生於潞安紫團山，故又名紫團參，其補力亞於臺黨參，而性平不熱，用於氣虛有熱者甚宜。

十、黃耆入湯劑，生用即是熟用，不必先以蜜炙。若丸散劑中宜熟用者，蜜炙可也。若用治瘡瘍，雖作丸散，亦不宜炙用。王洪緒《證治全生集》曾詳言之。至於生用發汗、熟用止汗之說，尤為荒唐。蓋因氣分虛陷而出汗者，服之即可止

汗，因陽強陰虛而出汗者，服之轉大汗汪洋。若氣虛不能逐邪外出者，與發表藥同服，亦能出汗。是知其止汗與發汗不在生熟，亦視用之者何如耳。

十一、石膏寒而能散，以治外感有實熱者，直同金丹。《神農本經》謂其微寒，則性非大寒可知，且謂其能治產乳，則性情純良可知。世人多誤認為大寒而煨用之，則辛散之性變為收斂（點豆腐者必煨用，以其能收斂也），用於外感有實熱者，至一兩即能傷人，因外感之熱，宜散不宜斂也。乃重用煨石膏而僨事者，不知其誤在煨不在石膏，轉謂煨用之而猶猛悍如此，則不煨者更可知矣。於是遂視用生石膏為畏途，即有放膽用者，亦不過七八錢而止。夫石膏之質甚重，七八錢不過一大撮耳。以微寒之藥，欲用一大撮以挽回極重之寒溫，又何能有大效？是以愚治外感有實熱者，輕證亦必用至兩許，若實熱熾盛，又恒重用至三四兩，將藥煎湯數盅，分三四次溫飲下，欲以免病家之疑，且欲其藥力常在上焦，而寒涼不侵下焦，致滑瀉也。蓋石膏生用，以治外感實熱，斷無傷人之理，且放膽用之，亦斷無不能退熱之理。特是坊間軋細之石膏多係煨者，即方中明開生者，亦恒以煨者充之，因煨者其所素備，且又自覺慎重也。故凡用生石膏者，宜買其整塊明亮者，自監視軋細方的。

或問「同一石膏也，何以生用之則能散，煨用之則性之散者驟變為斂乎」？答曰「石藥之性與草木之藥不同，恒因煨與不煨而其性迥異，如丹砂無毒，煨之即有毒，煨石作石灰，其燥烈之性頓發，以水沃之，其熱如火。石膏原硫、氧、

氫、鈣化合而成，煨之則硫、氧、氫皆飛去，所餘之鈣已變為石灰，黏澀異常。是以燒洋灰者，必多用石膏，洋灰豈可服乎？故凡煎石膏，其渣凝結於罐底者，即係煨石膏，其藥即斷不可服。

十二、細辛有服不過錢之說，後世醫者恒多非之，不知其說原不可廢。凡味辛兼能麻口之藥，若花椒、天雄、生半夏，大抵皆有此弊，不但細辛也。蓋能麻口者，即能麻肺，肺麻則其呼吸即停矣。嘗因胃中受涼，嚼服花椒約三十粒，下嚥後即覺氣不上達，移時呼吸始復常，乃悟古人諫君恐有不測，故有搗椒自隨者。由斯觀之，用藥可不慎哉！

十三、半夏為降逆止嘔之主藥，今坊間制以白礬，若用以降逆氣止嘔吐，恐服後病轉增劇，因礬味能令人湧吐也。愚用半夏治此等證，必用微溫之水將半夏淘洗數次，務須將礬味淘淨。然淘時須斟酌其礬有多少，即額外加半夏多少，約計其淘淨曬乾後，仍還足原定分量。至坊間之好清半夏，其礬較少，用時亦須淘之，若專用以利痰，則清半夏不淘亦可。

十四、龍骨、牡蠣，若專取其收澀，可以煨用，若用以滋陰、用以斂火，兼取其開通者（二藥皆斂而開），皆不可煨。若用於丸散中，微煨亦可，今用者一概煨之，殊非所宜。

十五、山茱萸之核原不可入藥，以其能令人小便不利也。而僻處藥坊所賣山茱萸，往往核與肉參半，甚或核多於肉，即方中注明去淨核，亦多不為去，誤人

甚矣。斯編重用山茱萸治險證之處甚多，凡用時愚必自加檢點，或說給病家檢點，務要將核去淨，而其分量還足，然後不至誤事。又山萸肉之功用長於救脫，而所以能固脫者，因其味之甚酸，然間有嘗之微有酸味者，此等萸肉實不堪用。用以治險證者，必須嘗其味極酸者，然後用之，方能立建奇效。

十六、肉桂氣味俱厚，最忌久煎，而坊間又多搗為細末，數沸之後，藥力即減，況煎至數十沸乎？至於石膏氣味俱淡，且係石質，非搗細煎之，則藥力不出。而坊間又多不為搗細，是以愚用石膏，必搗為細末，然後煎之。若用肉桂，但去其粗皮，而以整塊入煎。至藥之類肉桂、類石膏者，可以肉桂、石膏為例矣。

十七、乳香、沒藥最宜生用，不可炒枯，若用於丸散中，先軋作粗渣，入鍋內，隔紙烘至半熔，候冷軋之，即成細末，此乳香、沒藥去油之法。

十八、威靈仙、柴胡諸藥，原是用根，坊間恒雜以莖葉，醫者不知甄別，即可誤事。細辛之葉，其功用亦不如根，故李瀕湖《本草綱目》亦謂用根。至樗白皮與桑白皮，亦皆用根上之皮，其真偽尤屬難辨，用者必自採取方的。如樗根白皮大能固澀下焦，而帶皮樗枝煎湯，又能通大便。俗傳便方，大便不通者，用帶皮樗枝七支，每節長寸許，煎湯服之，甚效。其枝與根性之相異如此，用者不可慎哉！

十九、赭石為鐵氧化石，性同鐵鏽，原不宜煨，徐靈胎謂「若煨之，復用醋淬，即能傷肺」，此書諸方中有赭石者，皆宜將生赭石軋細用之。

二十、藥有非制過不可服者，若半夏、附子、杏仁諸有毒之藥皆是也。雖古方中之附子亦偶生用，實係鹵水淹透，未經炮熟之附子，亦非採取即用也。凡此等藥，方中雖未注明如何炮製，坊間亦必為制至無毒，若其藥本無毒，原可生用者，斯編方中若未注明制用，皆宜生用。有用斯編之方者，甚勿另加制法，致失藥之本性也。

二十一、古人服藥，病在下者，食前服；病在上者，食後服，此定法也。後人有謂「服藥後，必待脾胃消化，而後力能四達，若病在上者食後服，則脾胃必先消化宿食，而後消化藥物，是求速而反遲也」，此說亦似近理，而不知非也。藥力之行於周身，端藉人身之氣化以傳遞之，猶空氣之傳聲也。使兩間無空氣，發聲於何處即止於何處；使人身無氣化，脾胃雖能消化藥物，亦不能傳遞於周身。蓋人身之氣化流行，原無臟腑界限，而藥物下嚥之後，即附之而行，其傳遞之神速，誠有傾刻可遍周身者。特是空氣傳聲雖速，實漸遠而聲漸微，推之氣化傳藥，亦漸遠而力漸減。由是觀之，病在下者食前服，病在上者食後服，俾藥近病所，其直達之力必尤捷也。

二十二、凡湯劑，藥汁不可煎少，少則藥汁仍多半含於渣中，而滋陰清火之藥，尤必藥汁多煎方效，故斯編凡用重劑之處，必煎汁數杯，分數次服下。又或誤將藥煎乾，復添水重煎，則藥盡失其本性，服之病必增劇，即宜棄之勿服。



二十三、煎時易沸之藥，醫者須預告病家。如知母若至五六錢，微火煎之亦沸，若至一兩，幾不能煎，然此藥最易煎透，先將他藥煎十餘沸，再加此藥，敞開藥罐蓋，略煎數沸，其湯即成。至若山藥、阿膠諸有汁漿之藥，龍骨、牡蠣、石膏、滑石、赭石諸搗末之藥，亦皆易沸。大凡煎藥，其初滾最易沸，煎至將滾時，須預將藥罐之蓋敞開，以箸攪之。迨沸過初滾，其後仍沸，敞蓋煎之無妨，若不沸者，始可蓋而煎之。蓋險急之證，安危止爭此藥一劑，設更委之僕婢，將藥煎沸出，復不敢明言，則誤事多矣，故古之醫者，藥餌必經己手修制，即煎湯液，亦必親自監視也。

二十四、此書即一期，加三萬餘言為二期，後即二期又加三萬餘言為三期，是三期書原即前三期合編也。今又即原書添補若干，又間有刪改之處，實較原書為完備。

二十五、書中所載諸方，其方中緊要之藥，有未確知其性味能力者，宜詳觀四期藥物學講義所載本藥後之注解。蓋愚對於諸藥，雖劇如巴豆、甘遂，亦必親自嘗試，是以凡所用之藥，皆深知其性味能力，於諸家本草之外，恒另有發明也。

二十六、書中所載各門諸病，有與五期醫論相同者，當與五期醫論匯通參觀。蓋醫論為登各省醫學志報之論說，每論一證，至為詳細周到，若肺病、膈噎諸論中所用之方，恒有為此書中所不載者。

二十七、書中未備之證，五期論中亦恒及之，若鼠疫、疔瘡、癩疾諸論是也。是五期之書可為此書之副本，宜間採之，以補此書之未備也。

二十八、古方分量，折為今之分量，諸說莫衷一是。從來愚用古方，原不拘於分量，若間有用古分量時，則以陳修園之說為準（說見五卷第一方後）。

二十九、西醫用藥分量以柯蘭某（Gramme）為起點，合中量二分六厘四毫。東人依其法而易其名曰瓦，有用三分瓦之一者，將一瓦分為三分而用其一分也；有用四分瓦之一者，將一瓦分為四分瓦而用其一分也；有用十分瓦之二者，將一瓦分為十分而用其二分也，餘可類推。

三十、書中諸方，除古方數首之外，其餘一百六十餘方，皆係拙擬。此非矜奇立異，欲與古人爭勝也。誠以醫者以挽回人命，為孜孜當盡之天職，至遇難治之證，歷試成方不效，不得不苦心經營，自擬治法。迨擬出用之有效，且屢次用之，皆能隨手奏效，則其方即不忍拋棄，而詳為錄存。是此一百六十餘方，皆迫於孜孜挽回人命之熱忱，而日積月累以成卷帙者也。計書自初期出版至今，已歲星一周矣。而此十餘年間，醫界同人用書之方有效而來函相告者，已不勝紀。有謂此書當於醫界中開新紀元者，有推此書為至貴至寶之救命書者，有謂視此書為第二生命者，有謂拙著此書當為醫學革命家者。夫同人如此推許，在愚原不敢當，然區區寸衷，未嘗不深感佩也，且亦足徵此書為醫界有用之書，不致濫竽貽譏也。

〈 第 一 卷 〉

治陰虛勞熱方

【資生湯】

治勞瘵羸弱已甚，飲食減少，喘促咳嗽，身熱，脈虛數者，亦治女子血枯不月。

生山藥（一兩）、玄參（五錢）、於朮（三錢）、生雞內金（二錢，搗碎）、牛蒡子（三錢，炒，搗）。熱甚者，加生地黃五六錢。

脾為後天之本，能資生一身。脾胃健壯，多能消化飲食，則全身自然健壯，何曾見有多飲多食，而病勞瘵者哉？《內經》《陰陽別論》曰「二陽之病發心脾，有不得隱曲。在女子為不月，其傳為風消，其傳為息賁者，死不治」，以其先不過陽明，胃腑不能多納飲食也，而原其飲食減少之故。曰發於心脾，原其發於心脾之故。曰有不得隱曲者何居？蓋心為神明之府，有時心有隱曲，思想不得自遂，則心神拂鬱，心血亦遂不能濡潤脾土，以成過思傷脾之病。脾傷不能助胃消食，變化津液，以溉五臟，在男子已隱受其病，而尚無顯徵；在女子則顯然有不月之病，此乃即女以徵男也。至於傳為風消，傳為息賁，無論男女病證至此，人人共見，勞瘵已成，挽回實難，故曰不治。然醫者以活人為心，病證之危險，雖至極點，猶當於無可挽回之中，盡心設法以挽回之。而其挽回之法，仍當遵二陽之病發心脾之旨，戒病者淡泊寡慾，以養其心，而復善於補助其脾胃，使飲食漸漸加多，其身體自漸漸復原。

如此湯用於朮以健脾之陽，脾土健壯，自能助胃。

山藥以滋胃之陰，胃汁充足，自能納食（胃化食賴有酸汁）。特是脾為統血之臟，《內經》謂「血生脾」，蓋謂脾係血液結成，故中多涵血。西人亦謂脾中多回血管（詳第二卷補絡補管湯下）為血薈萃之所。此證因心思拂鬱，心血不能調暢，脾中血管遂多閉塞，或如爛炙，或成絲膜，此脾病之由。而脾與胃相助為理，一氣貫通，臟病不能助腑，亦即胃不能納食之由也。

雞內金為雞之脾胃，中有瓷、石、銅、鐵，皆能消化，其善化有形鬱積可知，且其性甚和平，兼有以脾胃補脾胃之妙，故能助健補脾胃之藥，特立奇功，迥非他藥所能及也，方中以此三味為不可挪移之品。

玄參《本經》謂其微寒，善治女子產乳餘疾，且其味甘勝於苦，不至寒涼傷脾胃可知，故用之以去上焦之浮熱，即以退周身之燒熱，且其色黑多液，《本經》又謂能補腎氣，故以治勞瘵之陰虛者，尤宜也。

牛蒡子體滑氣香，能潤肺又能利肺，與山藥、玄參並用，大能止嗽定喘，以成安肺之功，故加之以為佐使也。

地黃生用，其涼血退熱之功，誠優於玄參。西人謂其中涵鐵質，人之血中，又實有鐵鏽。地黃之善退熱者，不但以其能涼血滋陰，實有以鐵補鐵之妙，使血液充足，而蒸熱自退也。又勞瘵之熱，大抵因真陰虧損，相火不能潛藏，地黃善引相火下行，安其故宅，《本經》列之上品，洵良藥也。然必燒熱過甚而始加之

者，以此方原以健補脾胃為主，地黃雖係生用，經水火煎熬，其汁漿仍然粘泥，恐於脾胃有不宜也。至熱甚者，其脾胃必不思飲食，用地黃退其熱，則飲食可進，而轉有輔助脾胃。

生山藥，即坊間所鬻之乾山藥，而未經火炒者也。此方若用炒熟山藥，則分毫無效（理詳後一味薯蕷飲下）。

於朮色黃氣香，乃浙江於潛所產之白朮也。色黃則屬土，氣香則醒脾，其健補脾胃之功，迥異於尋常白朮。若非於潛產而但觀其色黃氣香，用之亦有殊效，此以色、味為重，不以地道為重也。

西人謂「胃之所以能化食者，全賴中有酸汁」，腹饑思食時，酸汁自然從胃生出。若憂思過度，或惱怒過度，則酸汁之生必少，或分毫全無，胃中積食，即不能消化，此論與《內經》「二陽之病發心脾」、「過思則傷脾」之旨暗合。

或問曰「《內經》謂脾主思，西人又謂思想發於腦部，子則謂思發於心者，何也」？答曰「《內經》所謂脾主思者，非謂脾自能思也。蓋脾屬土，土主安靜，人安靜而後能深思，至西人謂思發於腦部，《內經》早寓其理。《脈要精微論》曰「頭者精明之府」，夫頭之中心點在腦，頭為精明之府，即腦為精明之府矣。既曰精明，豈有不能思之理，然亦非腦之自能思也。試觀古文「思」字作「恂」，囟者腦也，心者心也，是知思也者，原心腦相輔而成，又須助以脾土鎮靜之力也」。

或問曰「子解二陽之病發心脾一節，與王氏《內經》之注不同，豈王氏之注解謬歟」？答曰「愚實不敢云然。然由拙解以繹經文，自覺經文別有意味，且有實用也。夫二陽之病發心脾，與下三陽為病發寒熱，一陽發病、少氣、善咳、善泄，句法不同，即講法可以變通。蓋二陽之病發心脾，謂其病自心脾而來也。三陽為病發寒熱，是形容三陽之病狀也，故將之病『之』字易作『為』字。至一陽發病數句，其句法又與三陽為病句不同，而其理則同也」。

或又問「三陽一陽病，皆形容其發病之狀，二陽病，獨推究其發病之原因者何居」？答曰「三陽、一陽，若不先言其病發之狀，人即不知何者為三陽、一陽病。至二陽胃腑，原主飲食，人人皆知。至胃腑有病，即不能飲食，此又人人皆知，然其所以不能飲食之故，人多不能知也。故發端不言其病狀，而先發明其得病之由來也」。

或又問「胃與大腸皆為二陽，經文既渾曰二陽，何以知其所指者專在於胃」？答曰「胃為足陽明，大腸為手陽明，人之足經長、手經短，足經原可以統手經，論六經者原當以足經為主，故凡《內經》但曰某經，而不別其為手與足者，皆指足經而言，或言足經而手經亦統其中。若但言手經，則必別之曰手某經矣。經文俱在，可取而細閱也」。

民國二年，客居大名。治一室女，勞瘵年餘，月信不見，羸弱不起，詢方於愚，為擬此湯。連服數劑，飲食增多，身猶發熱，加生地黃五錢，五六劑後熱退，

漸能起床，而腿疼不能行動。又加丹參、當歸各三錢，服至十劑腿愈，月信亦見。又言有白帶甚劇，向忘言及。遂去丹參加生牡蠣六錢，又將於朮加倍，連服十劑，帶證亦愈，遂將此方郵寄家中。月餘，門人高如壁來函云「鄰村趙芝林病癆瘵數年不愈，經醫不知凡幾，服藥皆無效，今春驟然咳嗽，喘促異常，飲食減少，脈甚虛數，投以資生湯十劑痊愈」。審斯則知此方治勞瘵，無論男女，服之皆有捷效也。

女子月信，若日久不見，其血海必有堅結之血，治此等證者，但知用破血通血之藥，往往病猶未去，而人已先受其傷。雞內金性甚和平，而善消有形鬱積，服之既久，瘀血之堅結者，自然融化。矧此方與健脾滋陰之藥同用，新血活潑滋長，生新自能化瘀也。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

津埠宋氏婦，年將四旬，身體羸弱，前二年即咳嗽吐痰，因不以為事未嘗調治。今春證浸加劇，屢次服藥無效。診其脈，左部弦細，右部微弱，數近六至。咳嗽，吐痰白色，氣腥臭，喘促自汗，午後發熱，夜間尤甚，胸膈滿悶，飲食減少，大便秘結，知其已成癆瘵而兼肺病也。從前所服藥十餘紙，但止嗽藥治其肺病，而不知子虛補母之義，所以無效。為疏方用資生湯加減，生山藥八錢，玄參、大生地、淨萸肉各六錢，生牡蠣、生杭芍、生赭石各四錢，於朮、生雞內金、



甘草各二錢。煎服二劑，汗止喘輕，發熱咳嗽稍愈。遂將前方去牡蠣，加萸仁、地骨皮各三錢，山藥改用一兩，赭石改用六錢。連服十劑，諸病皆愈，為善後計，用生山藥細末八錢煮粥，調白糖服之，早晚各一次，後月餘。與介紹人晤面，言此時宋氏婦飲食甚多，身體較前健壯多矣。

又族嫂年三十五歲，初患風寒咳嗽，因懶於服藥，不以為事，後漸至病重，始延醫，所服之藥，皆溫散燥烈之品，不知風寒久而化熱，故越治越劇，幾至不起。後生於臘底回里，族兄邀為診視。脈象虛而無力，身瘦如柴，咳嗽微喘，飲食減少，大便泄瀉，或兼白帶，午後身熱，顴紅，確係癆瘵已成。授以資生湯，加炒薏仁、茯苓片、生龍骨、生牡蠣各三錢，茵陳、炙甘草各錢半。服二劑，身熱、顴紅皆退，咳嗽泄瀉亦見愈。後仍按此方加減，又服六劑，諸病皆痊。囑其每日用生懷山藥細末煮粥，調以白糖服之，以善其後。

四川涇南周禹錫來函：

楊姓女，年十九歲。出嫁二載，月事猶未見，身體羸瘦，飲食減少，乾咳無痰，五心煩熱，診其脈細數有力。仿用資生湯方，用生山藥一兩，於朮二錢，牛蒡子三錢，玄參五錢，生地黃四錢，生雞內金一錢。連服五劑，熱退咳減，食慾增加。遂於原方中去生地，倍於朮。又服三劑，潮忽至。共服二十劑痊愈。

奉天法庫縣萬澤東來函：

族弟婦產後虛羸少食，遷延月餘，漸至發灼、自汗、消瘦、乏氣、乾嘔、頭暈等證，此方書所謂蓐勞也。經醫四人治不效，並添顴紅作瀉。適生自安東歸，為之診視，六脈虛數。檢閱所服之方，有遵《醫宗金鑒》三合飲者，有守用養榮湯者，要皆平淡無奇。然病勢至此，誠難入手，幸脈雖虛數，未至無神，顴雖紅，猶不搏聚（若搏聚則陰陽離矣，不搏聚是其陰陽猶未離），似尚可治。此蓋素即陰虛，又經產後亡血，氣亦隨之，陰不中守，陽不外固，故汗出氣乏，其陰陽不相維繫，陰愈虧而陽愈浮，故發燒咳嗽頭暈。其顴紅者，因其部位應腎，腎中真陽上浮，故發現於此，而紅且熱也。其消瘦作瀉者，以二陽不納，無以充肌肉，更不特腎陰虛，而脾陰胃液均虛，中權失司，下陷不固，所必然者。此是病之原委歟？再四思維，遂處方，用生懷山藥二兩，於朮三錢，玄參四錢，雞內金、牛蒡子各二錢（此係資生湯原方稍加重），外加淨萸肉、龍骨、牡蠣各五錢，止汗並以止瀉。五劑後，汗與瀉均止，飲食稍進，惟乾咳與發熱僅去十之二三。又照原方加粉甘草、天冬、生地等味，連服七劑。再照方減萸肉，加黨參二錢，服四劑後，飲食大進，並能起坐矣，惟經尚未行。更按資生湯原方，加當歸四錢，服數劑後，又復少有加減，一月經脈亦通。

【十全育真湯】

治虛勞，脈弦、數、細、微，肌膚甲錯，形體羸瘦，飲食不壯筋力，或自汗，或咳逆，或喘促，或寒熱不時，或多夢紛紜，精氣不固。

野臺參（四錢）、生黃耆（四錢）、生山藥（四錢）、知母（四錢）、玄參（四錢）、生龍骨（四錢，搗細）、生牡蠣（四錢，搗細）、丹參（二錢）、三稜（錢半）、菝葜（錢半）。

氣分虛甚者，去三稜、菝葜，加生雞內金三錢；喘者，倍山藥，加牛蒡子三錢；汗多者，以白朮易黃耆，倍龍骨、牡蠣，加山萸肉（去淨核）、生白芍各六錢。若其汗過多，服藥仍不止者，可但用龍骨、牡蠣、萸肉各一兩煎服，不過兩劑，其汗即止，汗止後，再服原方。若先冷後熱而汗出者，其脈或更兼微弱不起，多係胸中大氣下陷，細閱拙擬升陷湯（在第四卷）後跋語，自知治法。

仲景治勞瘵，有大黃蠱蟲丸，有百勞丸，皆多用破血之藥。誠以人身經絡，皆有血融貫其間，內通臟腑，外溉周身，血一停滯，氣化即不能健運，勞瘵恆因之而成。是故勞瘵者肌膚甲錯，血不華色，即日食珍饈服參苓，而分毫不能長肌肉、壯筋力，或轉消瘦支離，日甚一日，誠以血瘀經絡阻塞其氣化也。玉田王清任著《醫林改錯》一書，立活血逐瘀諸湯，按上中下部位，分消瘀血，統治百病，謂瘀血去而諸病自愈。其立言不無偏處，然其大旨則確有主見，是以用其方者，亦多效驗。今愚因治勞瘵，故擬十全育真湯，於補藥劑中，加三稜、菝葜以通活

氣血，竊師仲景之大黃蟪蟲丸、百勞丸之意也。且仲景於《金匱》列虛勞一門，特以「血痺虛勞」四字標為提綱，益知虛勞者必血痺，而血痺之甚，又未有不虛勞者。並知治虛勞必先治血痺，治血痺亦即所以治虛勞也。

或問「治勞瘵兼用破血之藥，誠為確當之論，但破血用三稜、莪朮，將毋其力過猛乎」？答曰「仲景之大黃蟪蟲丸，與百勞丸所用破血之藥，若大黃、乾漆、水蛭，皆猛於三稜、莪朮，而方中不用三稜、莪朮者，誠以三稜、莪朮《本經》不載。至梁陶弘景著《名醫別錄》於《本經》外增藥品三百六十五味，皆南北朝以前，名醫所用之藥，亦未載三稜、莪朮。是當仲景時猶無三稜、莪朮，即有之，亦未經試驗可知。而愚於破血藥中，獨喜用三稜、莪朮者，誠以其既善破血，尤善調氣（三稜、莪朮詳解在第八卷理衝湯下），補藥劑中以為佐使，將資生納穀為寶。無論何病，凡服藥後飲食漸增者易治，飲食漸減者難治。三稜、莪朮與參、朮、耆諸藥並用，大能開胃進食，又愚所屢試屢效者也」。

或問「勞字從火，誠以勞瘵之證，陰虛發熱者居其強半，故錢仲陽之減味地黃丸、張景岳之左歸飲，皆為對證良方，以其皆以熟地黃為君，大能滋真陰退虛熱也。子方中何以獨不用也」？答曰「若論用熟地，我固過來人也。憶初讀方書時，曾閱趙氏《醫貫》、《張氏八陣》、《馮氏錦囊》諸書，遂確信其說。臨證最喜用熟地，曾以八味地黃丸作湯，加蘇子、白芍，治吸不歸根之喘逆；加陳皮、白芍，治下虛上盛之痰涎；加蘇子、厚朴，治腎不攝氣，以致衝氣上逆之脹滿（時

病人服之，覺有推蕩之力，後制參耨鎮氣湯，治此證更效，方在第二卷，又嘗減茯苓、澤瀉三分之二，治女子消渴小便頻數（《金匱》謂「治男子消渴」，以治女子亦效，案詳第二卷玉液湯下），又嘗去附子，加知母、白芍，治陰虛不能化陽，致小便不利，積成水腫，又嘗用六味地黃丸作湯，加川芎、知母，以治如破之頭疼；加膽草、青黛，以治非常之眩暈；加五味、枸杞、柏子仁，以斂散大之瞳子。且信其煎汁數碗，浩蕩飲之之說，用熟地四兩、茯苓一兩，以止下焦不固之滑瀉；用熟地四兩、白芍一兩，以通陰虛不利之小便。又嘗於一日之中用熟地斤許，治外感大病之後，忽然喘逆，脈散亂欲脫之險證（此證當用後來復湯，彼時其方未擬出，惟知用熟地亦幸成功，是知馮楚瞻謂熟地「能大補腎中元氣」，誠有所試也），且不獨治內傷也。又嘗用熟地、阿膠大滋真陰之類，治溫病脈陽浮而陰不應，不能作汗，一日連服二劑，濟陰以應其陽，使之自汗（詳案在第五卷寒解湯下），並一切傷寒外感，因下元虛憊而邪深陷者，莫不重用熟地，補其下元，即以托邪外出。惟用以治陰虛勞熱之證，輕者可效，若脈數至七八至，鮮有效者。彼時猶不知改圖，且以為地黃丸，即《金匱》之腎氣丸，自古推為良方，此而不效，則他方更無論矣，不知腎氣丸原用乾地黃，即藥坊間之生地也，其桂用桂枝，即《本經》之牡桂也，與今之地黃丸迥不侔矣。其方《金匱》凡五見，一治「腳氣上入，少腹不仁」；一治「虛勞腰痛，少腹拘急，小便不利」；一治「短氣有微飲，當從小便去之」；一治「男子消渴，小便反多，飲一斗，小便一

斗」；一治「婦人轉胞，胞繫了戾，不得溺」。統觀五條，原治少腹膀胱之疾居多，非正治勞瘵之藥，況後世之修制，又失其本然乎。後治一婦人，年近五旬，身熱勞嗽，脈數幾至八至，先用六味地黃丸加減，作湯服不效，繼用左歸飲加減亦不效。愚忽有會悟，改用生黃六錢、知母八錢為方，數劑見輕，又加丹參、當歸各三錢，連服十劑痊愈。以後凡遇陰虛有熱之證，其稍有根柢可挽回者，於方中重用黃耆、知母，莫不隨手奏效。始知叔和脈法謂「數至七八至為不治之脈」者，非確論也。蓋人稟天地之氣以生，人身之氣化即天地之氣化，天地將雨之時，必陽氣溫暖上升，而後陰雲會合，大雨隨之。黃耆溫升補氣，乃將雨時上升之陽氣也；知母寒潤滋陰，乃將雨時四合之陰雲也。二藥並用，大具陽升陰應，雲行雨施之妙。膏澤優渥，煩熱自退，此不治之治也（此理參觀第二卷玉液湯後跋語益明）。況勞瘵者多損腎，黃耆能大補肺氣，以益腎水之源，使氣旺自能生水，而知母又大能滋肺中津液，俾陰陽不至偏勝，即肺臟調和，而生水之功益普也（黃耆、知母雖可並用以退虛熱，然遇陰虛熱甚者，又必須加生地黃八錢或至一兩，方能服之有效）。

或又問「腎氣丸雖非專治虛勞之藥，而《金匱》虛勞門，明載其治虛勞腰疼，似虛者皆可服之，子獨謂無甚效驗，豈古方不可遵歟」？答曰「腎氣丸若果按古方修制，地黃用乾地黃，桂用桂枝，且止為丸劑，而不作湯劑，用之得當，誠有效驗。蓋生地能逐血痺（《神農本草經》），而熟地無斯效也。桂枝能調營衛，而

肉桂無斯效也。血痺逐，則瘀血自消；營衛調，則氣血自理，至於山萸肉之酸溫，亦能逐痺（《本經》山茱萸逐寒濕痺）。牡丹皮之辛涼，亦能破血。附子之大辛大溫，又能溫通血脈，與地黃之寒涼相濟，以共成逐血痺之功。是腎氣丸為補腎之藥，實兼為開瘀血之藥，故列於《金匱》虛勞門，而為要方也。其止為丸劑，而不作湯劑者，誠以地黃經水火煎熬，則汁漿稠粘，性近熟地，其逐血痺之力必減，是以《本經》謂地黃「生者尤良也」。後賢徐靈胎曾治一人，上盛下虛，胸次痰火壅滯，喘不能臥，將人參切作小塊，用清火理痰之藥煎湯，送服而愈。後其病復發，病家自用原方，並人參亦煎服，病益甚，靈胎仍教以依從前服法，其病仍愈。夫同一人參也，生切塊送服則效，煎湯則不惟不效，轉至增劇，觸類引伸，可以悟古人制腎氣丸之精義矣」。

或又問「腎氣丸既按古方修制，可以有效，而《金匱》虛勞門，腎氣丸與大黃蠱蟲丸之外，又有七方，皆可隨證採擇，則子之十全育真湯，似亦可以不擬歟」？答曰「《金匱》虛勞門諸方，雖皆有效，而一方專治虛勞門一證。若拙擬十全育真湯，實兼治虛勞門諸證。如方中用黃耆以補氣，而即用人參以培元氣之根本。用知母以滋陰，而即用山藥、元參，以壯真陰之淵源；用三稜、莪朮，以消瘀血，而即用丹參以化瘀血之渣滓。至龍骨、牡蠣，若取其收澀之性，能助黃耆以固元氣；若取其涼潤之性，能助知母以滋真陰；若取其開通之性（《本經》龍骨主癥瘕，後世本草亦謂牡蠣消血），又能助三稜、莪朮以消融瘀滯也。至於療肺虛之

咳逆、腎虛之喘促，山藥最良；治多夢之紛紜，虛汗之淋漓，龍骨、牡蠣尤勝，此方中意也。以尋常藥餌十味，彙集成方，而能補助人身之真陰陽、真氣血、真精神，故曰「十全育真也」。

勞瘵者多兼瘀血，其證原有兩種：有因勞瘵而瘀血者，其人或調養失宜，或縱慾過度，氣血虧損，流通於周身者必然遲緩，血即因之而瘀，其瘀多在經絡；有因瘀血而成勞瘵者，其人或有跌傷碰傷，或力小任重，或素有吐衄證，服藥失宜，以致先有瘀血，日久浸成勞瘵，其瘀血多在臟腑，此二者服十全育真湯皆可愈。而瘀血在臟腑者，尤須多用破血之藥。又瘵在經絡者，亦可用前方資生湯，加當歸、丹參。瘵在臟腑之劇者，又宜用拙擬理衝湯，或理衝丸（方在第八卷）。此數方可參變匯通，隨時制宜也。

世俗醫者，遇脈數之證，大抵責之陰虛血涸，不知元氣虛極莫支者，其脈可至極數。設有人或力作，或奔馳，至氣力不能支持之時，其脈必數，乃以力倦之不能支持，以仿氣虛之不能支持，其事不同而其理同也。愚臨證細心體驗，凡治虛勞之證，固不敢純用補藥，然理氣藥多於補氣藥，則脈即加數，補氣藥多於理氣藥，則脈即漸緩。是知脈之數與不數，固視乎血分之盈虧，實尤兼視乎氣分之強弱，故此十全育真湯中，臺參、黃耆各四錢，而三稜、莪朮各錢半，補氣之藥原數倍於理氣之藥。若遇氣分虛甚者，猶必以雞內金易三稜、莪朮也。



藥性之補、破、寒、熱，雖有一定，亦視乎服藥者之資稟為轉移。嘗權衡黃耆之補力，與三稜、莪朮之破力，等分用之，原無軒輊。嘗用三稜、莪朮各三錢，治臟腑間一切癥瘕積聚，恐其傷氣，而以黃耆六錢佐之，服至數十劑，病去而氣分不傷，且有愈服而愈覺強壯者。若遇氣分甚虛者，才服數劑，即覺氣難支持，必須加黃耆，或減三稜、莪朮，方可久服。蓋虛極之人，補藥難為攻，而破藥易見過也。若其人氣壯而更兼鬱者，又必須多用三稜、莪朮，或少用黃耆，而後服之不至滿悶。又嘗權衡黃耆之熱力，與知母之寒力，亦無軒輊，等分用之，可久服無寒熱也（此論湯劑，作丸劑則知母寒力勝於黃耆熱力）。而素畏熱者，服之必至增熱；素畏寒者，服之又轉增寒，其寒熱之力無定，亦猶補破之力無定也。故臨證調方者，務須細心斟酌，隨時體驗，息息與病機相符，而後百用不至一失也。古人云「良工心苦，志在活人」者，尚無愧斯言也。

西法曰「小腸外皮光滑，內皮摺疊，其紋以顯微鏡窺之，紋上有尖甚密，即吸管之口端。吸管者，吸喻食物之精液管也，百派千支，散佈腸後夾膜之間，與膜同色，細微難見。食後少頃，內有精液，始見如白絲然。夾膜有小核甚多，即吸管迴旋疊積所成者。一切吸管附近脊處乃合為一，名曰精液總管。在腰骨第二節，附脊骨而上，至頸骨第七節，即屈轉而下，左入頸下回血會管（會者，兩管相會合處），直達於心。食物由胃至小腸頭，即與膽汁、甜肉汁會合。漸落漸榨，

榨出精液，色白如乳，眾管吸之，初甚稀淡，漸入漸濃，遠至會管，即混為血。小腸細管病，液核凝大，其人多食猶瘠。

按：小腸吸管，實為血脈化生之門徑，設有不通，人即病瘠。則治勞瘵者，宜兼用破血之藥，以化其液核之凝大，更可知矣。

又按：膽汁、甜肉汁與小腸會合之理，西法言之甚詳。其說謂膽乃肝液之囊，存其汁以待用者也。膽汁色綠，味極苦，係連右肝內旁之下，其汁乃下部回血（回血說在第二卷補絡補管湯下）至肝所化，其功用能助小腸以化胃中不化之物。蓋胃中之液，能化蛋白質為滋養素，然不能化澱粉及脂肪。迨至傳入小腸，小腸飽滿，腸頭上逼膽囊，使其汁滲入小腸，能助小腸，榨化一切食物，為乳糜白汁，以資養血脈。若無膽汁，或汁不足用，則小腸之物，精粗不分，糞色白結而不黃矣。如膽汁過多，則嘔吐苦涎，泄瀉色青是也。膽管閉塞，膽汁滲入血分，即有疸病（俗名黃病），溺色黃赤。膽汁之用，實以得中為貴。甜肉者即「甜肉經」，長約五寸，橫貼幽門（胃之下口），形如犬舌，頭大向右，尾尖向左，中有一汁液管，斜入小腸上口之旁，與膽管入小腸處同路，所生汁如口津水，能參贊膽汁，同助小腸以榨化食物。

按：西人所謂甜肉經，唐容川謂當係胰子。蓋胰子善於滌油，即善消油，故能助小腸以化脂肪。至化澱粉，當全賴膽汁，蓋澱粉屬土，膽汁屬木，木能疏土，物理之自然也。

【附錄】

直隸滄縣李品三來函：

弟長男媳，年二十四歲，於本年（丙寅）正月間患寒熱往來，自因素畏服藥，故隱忍不肯言。至四月初，家人來迓弟，言兒媳病劇，回家視之，雖未臥床不起，而瘦弱實難堪矣。診其脈，弦而浮數。細詢病情，言每逢午後先寒後熱，時而微咳無痰，日夜作瀉十餘次，黎明則頭汗出，胸間綿綿作疼，食一下嚥，即脹滿難堪，而諸虛百損之狀，顯然盡露。籌思良久，為立逍遙散方，服兩劑無效。因復至滄取藥，適逢相臣自津來滄，遂將兒媳之病細述本末。相臣曰「以弟之意，將用何方以治之」？答曰「余擬將資生湯、十全育真湯二方，匯通用之，可乎」？相臣曰「得之矣。此良方也，服之必效」。弟遂師二方之義，用生懷山藥八錢，生白朮、淨萸肉、生雞內金、生龍骨、生牡蠣、鮮石斛各三錢，丹參四錢。連服四劑，諸證皆大輕減。又於原方加三稜、莪朮（十全育真湯中用此二藥者，因虛勞之證多血痺也）各一錢，粉丹皮、地骨皮各二錢。又連服八劑，諸病悉退，飲食增加，今已完全成功矣。

【醴泉飲】

治虛勞發熱，或喘或嗽，脈數而弱。

生山藥（一兩）、大生地（五錢）、人參（四錢）、玄參（四錢）、生赭石（四錢，軋細）、牛蒡子（三錢，炒，搗）、天冬（四錢）、甘草（二錢）。

勞熱之證，大抵責之陰虛。有肺陰虛者，其人因肺中虛熱熏蒸，時時癢而作嗽，甚或肺中有所損傷，略一動作，輒發喘促，宜滋補肺陰，兼清火理痰之品。有腎陰虛者，其人因腎虛不能納氣，時時咳逆上氣，甚或喘促，宜填補下焦真陰，兼用收降之品。若其脈甚數者，陳修園謂宜滋養脾陰，蓋以脾脈原主和緩，脈數者，必是脾陰受傷，宜於滋陰藥中，用甘草以引之歸脾，更兼用味淡之藥，如薏米、石斛之類（理詳例言）。特是人身之陰，所蓋甚廣，凡周身之濕處皆是也，故陰虛之甚者，其周身血脈津液，皆就枯涸，必用汁漿最多之藥，滋臟腑之陰，即以溉周身之液，若方中之山藥、地黃是也。然脈之數者，固係陰虛，亦係氣分虛弱，有不能支持之象，猶人之任重而體顫也，故用人參以補助氣分，與玄參、天冬之涼潤者並用，又能補助陰分。且慮其升補之性，與咳嗽上逆者不宜，故又佐以赭石之壓力最勝者，可使人參補益之力下行直至湧泉，而上焦之逆氣浮火，皆隨之順流而下，更可使下焦真元之氣，得人參之峻補而頓旺，自能吸引上焦之逆氣浮火下行也。至於牛蒡子與山藥並用，最善止嗽，甘草與天冬並用，最善潤肺，此又屢試屢效者也。

初制此方時，原無赭石，有丹參三錢，以運化人參之補力。後治一年少婦人，信水數月不行，時作寒熱，乾嗽連連，且兼喘逆，胸隔滿悶，不思飲食，脈數幾至七至。治以有丹參原方不效，遂以赭石易丹參，一劑咳與喘皆愈強半，胸次開通，即能飲食，又服數劑，脈亦和緩，共服二十劑，諸病皆愈。以後凡治婦女月閉血枯，浸至虛勞，或兼咳嗽滿悶者，皆先投以此湯，俾其飲食加多，身體強壯，經水自通。間有瘀血暗阻經道，或顯有癥瘕可據者，繼服拙擬理衝湯，或理衝丸（皆在第八卷）以消融之，則婦女無難治之病矣。若其人胸中素覺短氣，或大便易滑瀉者，又當預防其大氣下陷（大氣下陷詳第四卷升陷湯）。用醴泉飲時，宜減赭石、牛蒡子，並一切蘇子、萸仁、紫菀、杏仁治咳喘套藥，皆不宜用。

按：短氣與喘原迥異。短氣者，難於呼氣，不上達也。喘者，難於吸氣，不下降也。而不善述病情者，往往謂喘為「上不來氣」，是以愚生平臨證，凡遇自言上不來氣者，必細細詢問，確知其果係呼氣難與吸氣難，而後敢為施治也。

又按：方書名咳喘曰「咳逆」，喘曰「喘逆」，因二證多由逆氣上干也。而愚臨證實驗以來，知因大氣下陷而咳喘者，亦復不少。蓋肺懸胸中，必賴大氣以包舉之，而後有所附麗；大氣以鼓舞之，而後安然呼吸。大氣一陷，則包舉之力微，肺即無所附麗，而咳嗽易生。鼓舞之機滯，肺必努力呼吸，而喘促易作。

曾治一少年，泄瀉半載方愈，後因勞力過度，覺喉中之氣不舒，五六呼吸之間，必咳嗽一二聲，而其聲始舒，且覺四肢無力，飲食懶進，診其脈微弱異常，知胸中大氣下陷，投以拙擬升陷湯，數劑而愈。

又曾治一人，年近五旬，素有喘疾。因努力任重，舊證復發，延醫服藥罔效。後愚診視其脈，數近六至，而兼有沉濡之象。愚疑其陰虛不能納氣，因其脈兼沉濡，不敢用降氣之藥。遂用熟地、生山藥、枸杞、玄參大滋真陰之藥，大劑煎湯，送下人參小塊二錢，連服三劑，脈即不數，仍然沉濡，喘雖見輕，仍不能愈。因思此證得之努力任重，胸中大氣因努力而陷，所以脈現沉濡，且其背惡寒而兼發緊，此亦大氣下陷之徵也，亦治以升陷湯，方中升麻、柴胡、桔梗皆不敢用，以桂枝尖三錢代之。因其素有不納氣之證，桂枝能升大氣，又能納氣歸腎也（理詳第二卷參赭鎮氣湯下）。又外加滋陰之藥，數劑痊愈（詳案在第四卷升陷湯下）。

按：此二證之病因，與醴泉飲所主之病迥異，而其咳喘則同，必詳觀升陷湯後跋語，及所載諸案，始明治此二證之理，而附載於此者，恐臨證者審證不確，誤以醴泉飲治之也。

瀋陽商人婁順田，年二十二，虛勞咳嗽，其形羸弱，脈數八至，按之即無。細詢之，自言曾眠熱炕之上，晨起覺心中發熱，從此食後即吐出，夜間咳嗽甚劇，不能安寢。因二十餘日寢食俱廢，遂覺精神恍惚，不能支持。愚聞之，知脈象雖危，仍係新證，若久病至此，誠難挽回矣，遂投以醴泉飲。為其嘔吐，將赭石改

用一兩（重用赭石之理詳第二卷參赭鎮氣湯下），一劑吐即止，可以進食，嗽亦見愈。從前五六日未大便，至此大便亦通下，如此加減服之，三日後，脈數亦見愈。然猶六至餘，心中猶覺發熱，遂將玄參、生地皆改用六錢，又每日於午時，用白蔗糖沖水，送服西藥阿斯匹林（藥性詳後參麥湯下）七厘許。數日諸病皆愈，脈亦復常。

瀋陽蘇惠堂，年三十許，勞嗽二年不愈，動則作喘，飲食減少。更醫十餘人，服藥數百劑，分毫無效，羸弱轉甚，來院診治。其脈數六至，雖細弱，仍有根柢，知其可治。自言上焦恆覺發熱，大便三四日一行，時或乾燥，遂投以醴泉飲。為其便遲而燥，赭石改用六錢，又加雞內金二錢（搗細），恐其病久臟腑經絡多瘀滯也。數劑後飯量加增，心中仍有熱時，大便已不燥，間日一行，遂去赭石二錢，加知母二錢，俾於晚間服湯藥後，用白蔗糖水，送服阿斯匹林四分之一瓦（瓦之分量詳於例言），得微汗。後令於日間服之，不使出汗，數日不覺發熱，脈亦復常，惟咳嗽未能痊愈。又用西藥幾阿蘇六分，薄荷冰四分，和以綠豆粉為丸，梧桐子大，每服三丸，日兩次，湯藥仍照方服之，五六日後，咳嗽亦愈，身體從此康健。

按：幾阿蘇，亦名結列阿曹篤，乃乾鰻山毛櫟樹脂和那篤倫鹵液而振盪之，取其所得之依的兒，及依的兒那篤留謨之化合物，以硫酸分解之，再以鰻精製之，得中性透明微黃色油狀之液，有竄透特異之煙臭，仿佛那布答林（俗名洋潮腦）。

其功用近於石碳酸，而其抑制發酵防腐敗之力，遠勝石碳酸。能消除一切毒菌，凝固蛋白質及血液，故善治肺結核（詳後參麥湯下）及腸胃炎，補內外血管破裂，妊婦嘔吐，小兒吐瀉。用其液浸棉曬乾塞牙孔，止牙疼如神。惟性過乾燥，且又臭味難服，佐以薄荷冰之辛涼芳香，則性味和平，以治肺炎、肺結核，其效尤速，故以治久嗽能愈也。

幾阿蘇之用量，初服宜百分瓦之一。久服之可以漸漸加多，以加至一次服百分瓦之五為極量。在西藥中甚屬猛烈之品，慎勿多服。



【一味薯蕷飲】

治勞瘵發熱，或喘或嗽，或自汗，或心中怔忡，或因小便不利，致大便滑瀉，及一切陰分虧損之證。

生懷山藥（四兩，切片）煮汁兩大碗，以之當茶，徐徐溫飲之。

山藥之性，能滋陰又能利濕，能滑潤又能收澀，是以能補肺補腎兼補脾胃。且其含蛋白質最多，在滋補藥中誠為無上之品，特性甚和平，宜多服常服耳。

陳修園謂山藥為尋常服食之物，不能治大病，非也。若不治大病，何以《金匱》治勞瘵有薯蕷丸。嘗治一室女，溫病痰喘，投以小青龍加石膏湯，又遵《傷寒論》加減法，去麻黃加杏仁，喘遂定。時已近暮，一夜安穩。至黎明喘大作，脈散亂如水上浮麻，不分至數，此將脫之候也。取藥不及，適有生山藥兩許，急煮汁飲之，喘稍定，脈稍斂，可容取藥，方中仍重用山藥而愈（詳案在第六卷仙露湯下）。

一室女，月信年餘未見，已成勞瘵，臥床不起，治以拙擬資生湯（在前），復俾日用生山藥四兩，煮汁當茶飲之，一月之後，體漸復初，月信亦通。

一婦人，產後十餘日，大喘大汗，身熱勞嗽，醫者用黃耆、熟地、白芍等藥，汗出愈多。後愚診視，脈甚虛弱，數至七至，審證論脈，似在不治。俾其急用生山藥六兩，煮汁徐徐飲之，飲完添水重煮，一晝夜所飲之水，皆取於山藥中。翌日又換山藥六兩，仍如此煮飲之，三日後諸病皆愈。

一人，年四十餘，得溫病十餘日，外感之火已消十之八九。大便忽然滑下，喘息迫促，且有煩渴之意。其脈甚虛，兩尺微按即無，亦急用生山藥六兩，煎汁兩大碗，徐徐溫飲下，以之當茶，飲完煎渣再飲，兩日共享山藥十八兩，喘與煩渴皆愈，大便亦不滑瀉。

西人謂食物中之蛋白質最能益人，山藥之汁，晶瑩透徹，粘而且滑，純是蛋白之質，故人服之大有補益，然必生煮服之，其蛋白之質始全，若炒焦而後入煎劑，其蛋白之質已涸，雖服亦何益哉！

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

侄女秀姑，已於歸數載，因患癩癰證成癆，喘嗽不休，或自汗，或心中怔忡，來函索方。余揣此係陰分虧損已極所致，俾先用一味薯蕷飲，每日用生懷山藥四兩，煮汁兩大碗，當茶頻頻溫飲之。不數劑，喘定汗止，咳嗽亦見輕。繼又兼服薯蕷粥，作點心用之，漸漸痊愈。

奉天法庫縣萬澤東來函：

家慈患痰喘咳嗽病，三十年於茲矣。百方不效，且年愈高，病癒進，乃於今春，宿病既發，又添發灼、咽乾、頭汗出、食不下等證。生雖習醫，此時惟戰兢不敢處方，遂請一宿醫診視，云是痰盛有火，孰知是肺氣與脾陰腎陰將虛竭也。與人參清肺湯，加生地、丹皮等味，服二劑，非特未效，遂發灼如火，更添泄瀉，

有不可終日之勢。於是不敢延醫，自選用資生湯方，服一劑，亦無顯效。轉思此時方中於朮、牛蒡子、雞內金等味有未合也。因改用一味薯蕷飲，用生懷山藥四兩，加玄參三錢。服一劑見效，二劑大見效，三劑即病癒強半矣。後乃改用薯蕷粥，用生懷山藥一兩為細末，煮作粥，少調以白糖，每日兩次，當點心服之。又間進開胃之藥，旬餘而安。

【參麥湯】

治陰分虧損已久，浸至肺虛有痰，咳嗽勞喘，或兼肺有結核者。

人參（三錢）、乾麥冬（四錢，帶心）、生山藥（六錢）、清半夏（二錢）、牛蒡子（三錢，炒，搗）、蘇子（二錢，炒，搗）、生杭芍（三錢）、甘草（錢半）。

人參為補肺之主藥，而有肺熱還傷肺之虞，有麥冬以佐之，則轉能退熱。麥冬為潤肺之要品，而有咳嗽忌用之說，有半夏以佐之，則轉能止嗽。至於山藥，其收澀也，能助人參以補氣，其粘潤也，能助麥冬以滋液，雖多服久服，或有壅滯，而牛蒡子之滑利，實又可以相濟。且牛蒡子能降肺氣之逆，半夏能降胃氣、衝氣之逆，蘇子與人參同用，又能降逆氣之因虛而逆，平其逆氣，則喘與嗽不治自愈矣。用白芍者，因肝為肺之對宮，肺金虛損，不能清肅下行，以鎮肝木，則肝火恆恣橫而上逆，故加芍藥以斂戢其火，且芍藥與甘草同用，甘苦化合，味近人參，即功近人參，而又為補肺之品也。

按：古方多以麥冬治肺虛咳嗽，獨徐靈胎謂嗽者斷不宜用，蓋以其汁漿膠粘太甚，肺中稍有客邪，即可留滯不散，惟濟以半夏之辛燥開通，則不惟治嗽甚效，即治喘亦甚效，故仲景治傷寒解後，虛羸少氣，氣逆欲吐，有竹葉石膏湯，麥冬與半夏同用。治火逆上氣，有麥門冬湯，以麥冬為君，亦佐以半夏也。又肺虛勞嗽者，醫者多忌用半夏，是未知半夏之性者也。徐靈胎曰「肺屬金，喜斂而不喜

散」，蓋斂則肺葉垂而氣順，散則肺葉張而氣逆。半夏之辛，與薑、桂之辛迥別，入喉則閉不能言，塗金瘡則血不復出，辛中滯澀，故能疏又能斂也。又辛之斂與酸之斂不同，酸則一主於斂，辛則斂中有發散之意，尤與肺投合也。

又喻嘉言贊麥門冬湯中用半夏曰「於大建中氣，大生津液藥中，增入半夏之辛溫一味，以利嚥下氣，此非半夏之功，實善用半夏之功也」。

西人謂勞證因肺體生堅粒如沙，名都比迦力，或在左肺，或在右肺，或左右俱有，右多過左，上多過下，先生多小粒，在肺本體內，漸合為一大粒。久而潰爛成穴，穴有大小，有肺體全壞者，此證各國俱有，冷地尤多。病原或因父母延累性質，易患此證，或因身虛居處濕地，衣服單薄，冷風吹襲，或天時寒熱驟變，或熱地人遷居冷地，或食物不足，或屋內臭濁，不通風氣，或辛苦勞倦，或房事過度，或飲酒過度，在女子或漏經帶下，或哺嬰兒太久。男女患此證者，每在五歲以上，三十歲以下。病狀先乾嗽，或有血噲出，漸至氣短促，行動呼吸更促，困倦無精神，手足疲軟羸瘦，頸變細長，胸膈變窄，略有勤苦，則汗出泄瀉，食物不化，夜臥不安，脈微細而數，心跳多痰，或咳血，胸膈時疼，聲音不清，久則啞，手指末節生大甲彎曲。以聽病筒聽試，覺有聲從潰穴泄出。夜晚顏色鮮紅，早起多冷汗。舌苔先白後紅，或吐痰稠粘與膿相雜。又有總氣管出聲之處潰爛，不能出聲者；有累大小腸爛，色白過常度者；有因此肝血不得入肺，肝體大過常度者。且都比迦力不但肺有之也，如小兒疳積，肚腹大，四肢瘦，是因大小腸皮

膜生都比迦力，飲食之津不能吸入液管所致，食雖多，不長肌肉。法令其改變習氣，勿居濕地，勿過勞辛，勿太煩怒，勿提舉重物，勿貪色慾，勿飲酒過度，宜散步閒適，遊玩怡情，遷徙他處，變易水土，所居之室，開戶牖以通外氣，著綿當（亦名背心，即無袖之短衣也），令胸背常暖，頻用兩臂前後開合，令胸肺舒張，呼吸大通，更用酸醋水洗頸前胸膈各處，布巾擦之令熱。內服之藥，大概以出痰、止血、斂汗、止瀉、安身為主。咳嗽用乙畢格散、鴉片酒最宜。或先用嘔藥，以去其痰。汗多宜斂，鉛散三四厘、白礬四五厘，能收斂止汗。泄瀉者，用膽礬二厘、鴉片二三厘，配水一兩，日服二、三錢。肺疼者，貼斑蝥膏藥。

按：西人所謂，勞證因肺生都比迦力，致有種種羸弱冷熱痰嗽諸證，勞瘵病中皆有其病狀，而用西人所言之治法治之，則愈者恆鮮也。

迨西曆一千八百九十九年，西人遏爾倍兒富兒德氏制阿斯必林藥出，治此證較前似有把握。其法用阿斯必林，一日之間，少則一瓦，多不過三瓦，皆分為三次服下，以退此證之發熱，且投以止汗之藥，以防其出汗過多。蓋此證最要之點，在於發熱，熱愈甚則氣血愈虧，實能促病機之進行。阿斯必林最善解熱，且無不良之副作用，惟其性善發汗，而過汗非體虛者所宜，故以同時服止汗之品，以防其過汗也。

東人衍西人之說，名其病曰「肺結核」，其治法不出西人範圍。至丁仲祜推廣其說，謂此證自始至終之經過，未有不發熱者。因感染結核菌後，有一種物質，

生交換產物與崩壞產物，吸收時，影響於體溫者皆甚大，熱即由是而生。又因釀膿菌及各種細菌（連鎖球菌、葡萄球菌、綠膿菌、四疊菌之類）之侵入，起混合續發性傳染。氣管與空洞之分泌物因之分解，發生腐敗性及毒素性之物質。此物質吸收之際，亦發生此熱。夫罹此證者，營養原極缺乏，加以發熱不已，則食機不振，心力萎弱，分泌蛋白質日見消耗，宜用阿斯必林一瓦半，和以乳糖，分三次服下，佐以利痰健胃之藥。至於結核之證，兼小便下血，其生殖器亦有結核者，治以阿斯必林，而以清血止血之藥佐之。

愚對於此證，悉心研究，知其治法，當細分為數種。腎傳肺者，以大滋真陰之藥為主，以清肺理痰之藥為佐，若拙擬之醴泉飲（在前）是也；肺傳腎者，以清肺理痰之藥為主，以滋補真陰之藥為佐，若此參麥湯是也；其因肺腎俱病，而累及脾胃者，宜肺腎雙補，而兼顧其脾胃，若拙擬之滋培湯（在第二卷）、珠玉二寶粥（在後）是也。如此分途施治，斟酌咸宜，而又兼服阿斯匹林，凡其脈之稍有根柢可挽回者，需以時日，皆愈也。至於但肺有結核，而未累及他臟者，可於斯編肺病門中（在第二卷），酌其治法（論肺病治法，實合虛勞肺病詳細論之也，凡治虛勞及肺病者皆宜參觀）。

阿斯匹林採用亞里斯爾酸（即楊曹，其原質存於楊柳皮中）制成，其形狀為白色針形之結晶，無臭微酸，似有楊柳皮汁氣味。其性涼而能散，善退外感之熱，初得外感風熱，服之出涼汗即愈。兼能退內傷之熱，肺結核者，借之以消除其熱，

誠有奇效。又善治急性關節腫疼，發表痘毒、麻疹及腸胃炎、肋膜炎諸證，西藥中之最適用者也。

特其發汗之力甚猛，若結晶堅而大者，以治外感，半瓦即可出汗。若當天氣寒涼，或近寒帶之地，須服至一瓦，或至瓦半。若其略似白粉，微有結晶者，藥力薄弱，服至一瓦方能出汗，多可服至瓦半或二瓦。是在臨證者，相其藥力之優劣，而因時、因地、因人制宜也。

至用阿斯匹林治內傷，其份量尤須少用，因內傷發熱之人，陰虛陽浮，最易發汗。西人用治肺結核之熱，日服三瓦，其在歐洲地寒，且其人自幼多肉食，臟腑營衛壯固，或者猶可，在吾中華則定然不可。是以丁仲祐用阿斯匹林治肺結核，一日三次共服一瓦半，則視西人所用之分量減半矣。

愚用阿斯匹林治肺結核，視西人所用之數，則減之又減。曾治一少年，染肺結核，咳嗽食少，身體羸弱，半載不愈，求為診治。遂投以理肺清痰、健胃滋陰之藥，又於晚間臨睡時，用白蔗糖沖水，送服阿斯匹林三分之一瓦。須與周身即得大汗，過三點鐘其汗始止，翌日覺周身酸懶，蓋因汗太過也。而咳嗽則較前見輕，食慾亦少振，繼服滋補之藥數劑，每日只用阿斯匹林六分之一瓦，作一次服下，或出微汗，或不出汗，從此精神漸漸清爽，調治月餘而愈。自此以後，用阿斯匹林治肺結核，必先少少試服，初次斷不敢稍多也。



至西人謂防其出汗，可與止汗之藥同服，亦係善法，然仍恐服後止汗之藥不效，而阿斯匹林之發汗，仍然甚效也。愚治肺結核證，若一日用至一瓦，或一瓦強，恆作十次，或十餘次服下，勿須用止汗之藥，亦可不出汗，即有時微見汗，亦係佳兆。

凡勞瘵陰虛之證，其脈之急數者，無論肺結核與不結核，於每服滋補劑外，皆宜服阿斯匹林，或半瓦，或至一瓦。恐其出汗多，分幾次服下，其初日服之，俾微見汗，後日日常服，以或出汗或不出汗為適宜，如此旬日之間，脈之數者可漸和緩。

乳糖係於牛乳制乾酪之際，蒸發其所生之甘乳清，而採取精製者也。若無乳糖，即以白蔗糖代之，功效相同。

【附錄】

廣西柳州賓仙園來函：

治一婦人，年四十三歲，素因家務勞心，又兼傷心，遂患吐血。後吐血雖愈，而喘嗽殊甚，夜不能臥。諸醫率用枇杷葉、款冬花、杏仁、紫菀、貝母等藥治之，其後右邊面顴淡紅腫起，嗽喘仍不少愈。後僕為診治，先投以王清任少腹逐瘀湯加蘇子、沉香二劑，繼服書中參麥湯八劑，喘嗽皆愈。

又治一男子，年四十六歲，心中發熱作喘，醫治三年無效。僕為診視，先投以書中首方資生湯，遵注加生地黃六錢。一劑見輕，數劑病癒強半，繼用參麥湯

為數劑，病癒十之八九。然病已數年，身體羸弱，非倉猝所能復原，望先生賜惠，

【珠玉二寶粥】

治脾肺陰分虧損，飲食懶進，虛熱勞嗽，並治一切陰虛之證。

生山藥（二兩）、生薏米（二兩）、柿霜餅（八錢）。

上三味，先將山藥、薏米搗成粗渣，煮至爛熟，再將柿霜餅切碎，調入融化，隨意服之。

山藥、薏米皆清補脾肺之藥。然單用山藥，久則失於粘膩；單用薏米，久則失於淡滲，惟等分並用，乃可久服無弊。又用柿霜之涼可潤肺、甘能歸脾者，以為之佐使。病人服之不但療病，並可充飢，不但充飢，更可適口，用之對證，病自漸癒，即不對證，亦無他患。柿霜餅，即柿霜熬成者，為柿霜白而淨者甚少，故用其熬成餅者。然熬此餅時恆有摻以薄荷水者，其性即不純良。遇陰虛汗多之證用之即有不宜，若果有白淨柿霜尤勝於餅。

一少年，因感冒懶於飲食，猶勤稼穡，枵腹力作，遂成勞嗽。過午發熱，徹夜咳吐痰涎。醫者因其年少，多用滋陰補腎之藥，間有少加參、耆者。調治兩月不效，飲食減少，痰涎轉增，漸至不起，脈虛數兼有弦象，知其脾肺皆有傷損也。授以此方，俾一日兩次服之，半月痊愈。

或問「脈現弦象，何以即知其脾肺傷損」？答曰「脈雖分部位，而其大致實不分部位，今此證左右之脈皆弦，夫弦為肝脈，肝盛必然侮脾，因肝屬木脾屬土也。且五行之中，惟土可以包括四行，即脾氣可以包括四臟，故六部脈中，皆以

和緩為貴，以其饒有脾土之氣也。今其脈不和緩而弦硬，其脾氣受傷，不能包括四臟可知。又肺屬金，所以鎮肝木者也，故肺金清肅之氣下行，肝木必不至恣橫，即脈象不至於弦。今其脈既現如此弦象，則肺金受傷，不能鎮肝木更可知也。

【沃雪湯】

治同前證，更兼腎不納氣作喘者。

生山藥（一兩半）、牛蒡子（炒搗，四錢）、柿霜餅（沖服，六錢）。

一人，年四十餘，素有喘證，薄受外感即發，醫者投以小青龍湯，一劑即愈，習以為常。一日喘證復發，連服小青龍湯三劑不愈。其脈五至餘，右寸浮大，重按即無。知其從前服小青龍即愈者，因其證原受外感，今服之而不愈者，因此次發喘原無外感也，蓋其薄受外感即喘，肺與腎原有傷損，但知治其病標，不知治其病本，則其傷損必益甚，是以此次不受外感亦發喘也。為擬此湯服兩劑痊愈，又服數劑以善其後。

【水晶桃】

治肺腎兩虛，或咳嗽，或喘逆，或腰膝酸疼，或四肢無力，以治孺子尤佳。核桃仁（一斤）、柿霜餅（一斤）。

先將核桃仁飯甑蒸熟，再與柿霜餅同裝入瓷器內蒸之，融化為一，晾冷，隨意服之。

果有核，猶人之有骨，是骨亦名骸，其右旁皆從亥也。腎主骨而為生育之本，果核之二，亦為生生之機，故凡果核之仁，具補益之性者，皆能補腎。核桃乃果核之最大者，其仁既多脂，味更香美，為食中佳品，性善補腎可知。柿霜色白入肺，而甘涼滑潤，其甘也能益肺氣，其涼也能清肺熱，其滑也能利肺痰，其潤也能滋肺燥，與核桃同用，肺腎同補，金水相生，虛者必易壯實。且食之又甚適口，饑時可隨便服之，故以治小兒尤佳也。

【附方】

俗傳治勞嗽方，秋分日取鮮萊菔十餘枚去葉，自葉中心穿以鮮槐條，令槐條頭透出根外，懸於茂盛樹上滿百日，至一百零一日取下。用時去槐條，將萊菔切片煮爛，調紅沙糖服之，每服一枚，數服即愈。

按：萊菔色白入肺，槐條色黑入腎，如此作用，蓋欲導引肺氣歸腎。其懸於茂盛樹上者，因茂樹之葉多吐氧氣，萊菔借氧氣醞釀，其補益之力必增也。懸於

必滿百日者，欲其飽經霜露，借金水之氣，以補金水之臟也。邑中孫姓叟，年近六旬，勞喘，百藥不效，後得此方服之而愈，每歲都備此藥，以贈勞喘者，服之愈者甚多（六卷仙露飲後附有來函中載治嗽方，其第二方甚效，宜選用）。

【既濟湯】

治大病後陰陽不相維繫，陽欲上脫，或喘逆，或自汗，或目睛上竄，或心中搖搖如懸旌；陰欲下脫，或失精，或小便不禁，或大便滑瀉。一切陰陽兩虛，上熱下涼之證。

大熟地（一兩）、萸肉（去淨核，一兩）、生山藥（六錢）、生龍骨（搗細，六錢）、生牡蠣（搗細，六錢）、茯苓（三錢）、生杭芍（三錢）、烏附子（一錢）。

或問「既濟湯原為救脫之藥，方中何以不用人參」？答曰「人參之性補而兼升，以治上脫，轉有氣高不返之虞，喻嘉言《寓意草》中論之甚詳。惟與赭石同用，始能納氣歸根。而證兼下脫者，赭石又不宜用，為不用赭石，所以不敢用人參。且陽之上脫也，皆因真陰虛損，不能潛藏元陽，陽氣始無所繫戀而上奔，故方中重用熟地、山藥以峻補真陰，俾陰足自能潛陽，而佐以附子之辛熱，原與元陽為同氣，協同芍藥之苦降（《本經》味苦），自能引浮越之元陽下歸其宅。更有萸肉、龍骨、牡蠣以收斂之，俾其陰陽固結，不但元陽不復上脫，而真陰亦永不脫矣」。

一人，年二十餘，稟資素羸弱，又耽煙色，於秋初患瘧，兩旬始愈。一日大便滑瀉數次，頭面汗出如洗，精神頹憤，昏昏似睡。其脈上盛下虛，兩寸搖搖，



兩尺欲無，數至七至，延醫二人皆不疏方。愚後至為擬此湯，一劑而醒，又服兩劑遂復初。

友人張壽田（滄州人，其子侄從愚學醫），曾治一少年，素患心疼，發時晝夜號呼。醫者屢投以消通之藥，致大便滑瀉，虛氣連連下泄，汗出如洗，目睛上泛，心神驚悸，周身攣動，須人手按，而心疼如故。延醫數人皆不敢疏方。壽田投以此湯，將方中萸肉倍作二兩，連服兩劑，諸病皆愈，心疼竟從此除根。

或問「既濟湯原為救脫之藥，方中何以不用人參」？答曰「人參之性補而兼升，以治上脫，轉有氣高不返之虞，喻嘉言《寓意草》中論之甚詳。惟與赭石同用，始能納氣歸根，而證兼下脫者，赭石又不宜用，為不用赭石，所以不敢用人參。且陽之上脫也，皆因真陰虛損，不能潛藏元陽，陽氣始無所係戀而上奔，故方中重用熟地、山藥以峻補真陰，俾陰足自能潛陽，而佐以附子之辛熱，原與元陽為同氣，協同芍藥之苦降（《本經》味苦），自能引浮越之元陽下歸其宅。更有萸肉、龍骨、牡蠣以收斂之，俾其陰陽固結，不但元陽不復上脫，而真陰亦永不下脫矣」。

或問「此方能治脫證宜矣，而並能治心疼者何也」？答曰「凡人身內外有疼處，皆其氣血痺而不通。《本經》謂「山茱萸主心下邪氣、寒熱、溫中、逐寒濕痺」，是萸肉不但酸斂，而更善開通可知。李士材治肝虛作疼，萸肉與當歸並用。愚治肝虛腿疼，曾重用萸肉隨手奏效（詳案在第四卷曲直湯下）。蓋萸肉得木氣

最濃，酸斂之中大具條暢之性，故善於治脫，尤善於開痺也。大抵其證原屬虛痺，氣血因虛不能流通而作疼。醫者不知，惟事開破，迨開至陰陽將脫，而其疼如故，醫者亦束手矣。而投以此湯，惟將萸肉加倍，竟能於救脫之外，更將心疼除根，此非愚制方之妙，實壽田之因證施用，而善於加減也。

【來復湯】

治寒溫外感諸證，大病瘥後不能自復，寒熱往來，虛汗淋漓，或但熱不寒，汗出而熱解，須臾又熱又汗，目睛上竄，勢危欲脫，或喘逆，或怔忡，或氣虛不足，以息，諸證若見一端，即宜急服。

萸肉（去淨核，二兩）、生龍骨（搗細，一兩）、生牡蠣（搗細，一兩）、生杭芍（六錢）、野臺參（四錢）、甘草（二錢，蜜炙）。

一人，年二十餘，於孟冬得傷寒證，調治十餘日，表裡皆解。忽遍身發熱，頓飯頃，汗出淋漓，熱頓解，須臾又熱又汗。若是兩晝夜，勢近垂危，倉猝迎愚診治。及至，見汗出渾身如洗，目上竄不露黑睛，左脈微細模糊，按之即無，此肝膽虛極，而元氣欲脫也，蓋肝膽虛者，其病象為寒熱往來，此證之忽熱忽汗，亦即寒熱往來之意。急用淨萸肉二兩煎服，熱與汗均愈其半，遂為擬此方，服兩劑而病若失。

一人，年四十餘，外感痰喘，愚為治癒，但脈浮力微，按之即無。愚曰「脈象無根，當服峻補之劑以防意外之變」。病家謂「病人從來不受補藥，服之即發狂疾，峻補之藥實不敢用。」愚曰「既畏補藥，如是備用亦可」，病家依愚言。遲半日急發喘逆，又似無氣以息，汗出遍體，四肢逆冷，身軀後挺，危在傾刻。急用淨萸肉四兩，暴火煎一沸即飲下，汗與喘皆微止。又添水再煎數沸飲下，病又見愈。後添水將原渣煎透飲下，遂汗止喘定，四肢之厥逆亦回。

一少年，素傷煙色，又感冒風寒，醫者用表散藥數劑治癒。間日忽遍身冷汗，心怔忡異常，自言氣息將斷，急求為調治，診其脈浮弱無根，左右皆然。愚曰「此證雖危易治，得莢肉數兩，可保無虞」。時當霖雨，藥坊隔五里許，遣快騎冒雨急取淨莢肉四兩、人參五錢，先用莢肉二兩，煎數沸急服之，心定汗止，氣亦接續，又將人參切作小塊，用所餘莢肉，煎濃湯送下，病若失。

一人，年四十八，大汗淋漓，數日不止，衾褥皆濕，勢近垂危。詢方於愚，俾用淨莢肉二兩，煎湯飲之，其汗遂止。翌晨迎愚診視，其脈沉遲細弱，而右部之沉細尤甚，雖無大汗，遍體猶濕。疑其胸中大氣下陷，詢之果覺胸中氣不上升，有類巨石相壓。乃恍悟前此之汗，亦係大氣陷後，衛氣無所統攝而外泄之故。遂用生黃耆一兩，莢肉、知母各三錢，一劑胸次豁然，汗亦盡止，又服數劑以善其後（此案參看第四卷升陷湯後談語方明）。

一妊婦得霍亂證，吐瀉約一晝夜，病稍退，胎忽滑下。覺神氣頓，心搖搖似不能支持，求愚治療。既至，則病勢大革，殮服在身，已昇諸床，病家欲竟不診視。愚曰「一息猶存，即可挽回」。診之，脈若有若無，氣息奄奄，呼之不應。取藥無及，適此舍翁，預購藥兩劑未服，亦係愚方，共有莢肉六錢，急揀出煎湯灌下，氣息稍大，呼之能應。又取莢肉、生山藥各二兩，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，精神頓復。俾日用生山藥末兩餘，煮粥服之，以善其後。

歷觀以上諸案，則莢肉救脫之功，較參、朮、耆更勝。蓋莢肉之性，不獨補肝也，凡人身之陰陽氣血將散者，皆能斂之。故救脫之藥，當以莢肉為第一，而《本經》載於中品，不與參、朮、耆並列者，竊憶古書竹簡韋編，易於錯簡，此或錯簡之誤歟！

凡人元氣之脫，皆脫在肝，故人虛極者，其肝風必先動，肝風動，即元氣欲脫之兆也。又肝與膽，臟腑相根據，膽為少陽，有病主寒熱往來；肝為厥陰，虛極亦為寒熱往來，為有寒熱，故多出汗。莢肉既能斂汗，又善補肝，是以肝虛極而元氣將脫者服之最效。愚初試出此藥之能力，以為一己之創見，及詳觀《本經》山茱萸原主寒熱，其所主之寒熱，即肝經虛極之寒熱往來也。特從前涉獵觀之，忽不加察，且益歎《本經》之精當，實非後世本草所能及也。又《本經》謂山茱萸能逐寒濕痺，是以前方可用以治心腹疼痛。曲直湯用以治肢體疼痛，以其味酸能斂。補絡補管湯，用之以治咳血吐血。再合以此方重用之，最善救脫斂汗，則山茱萸功用之妙，真令人不可思議矣。

趙叟，年六十三歲，於仲冬得傷寒證，痰喘甚劇。其脈浮而弱，不任循按，問其平素，言有勞病，冬日恆發喘嗽。再三籌思，強治以小青龍湯去麻黃，加杏仁、生石膏，為其脈弱，俾預購補藥數種備用。服藥後喘稍愈，再診其脈微弱甚，遂急用淨莢肉一兩，生龍骨、生牡蠣各六錢，野臺參四錢，生杭芍三錢為方，

皆所素購也。煎湯甫成，此時病人呼吸俱微，自覺氣息不續，急將藥飲下，氣息遂能接續。

鄰村李子勳，年五旬，偶相值，求為診脈，言前月有病服藥已癒，近覺身體清爽，未知脈象何如？診之，其脈尺部無根，寸部搖搖有將脫之勢，因其自謂病癒，若遽悚以危語，彼必不信，姑以脈象平和答之。遂秘謂其侄曰「令叔之脈甚危險，當服補斂之藥，以防元氣之暴脫」。其侄向彼述之，果不相信，後二日，忽遣人迎愚，言其驟然眩暈不起，求為診治。既至，見其周身顫動，頭上汗出，言語錯亂，自言心怔忡不能支持，其脈上盛下虛之象較前益甚，急投以淨萸肉兩半，生龍骨、生牡蠣、野臺參、生赭石各五錢，一劑即愈。繼將萸肉改用一兩，加生山藥八錢，連服數劑，脈亦復常。

按：此方赭石之份量，宜稍重於臺參。

【附錄】

湖北張港崔蘭亭君來函：

張港紅十字會朱總辦之兒媳，產後角弓反張，汗出如珠，六脈散亂無根，有將脫之象，迎為診治。急用淨萸肉二兩，俾煎湯服之，一劑即愈。舉家感謝云「先生之方如此效驗神速，真神醫也」。愚應之曰「此非我功，乃著《衷中參西錄》者之功也」。總辦因作詩一首，托寄先生相謝，且以表揚先生之大德云。

【鎮攝湯】

治胸膈滿悶，其脈大而弦，按之似有力，非真有力，此脾胃真氣外泄，衝脈逆氣上干之證，慎勿作實證治之。若用開通之藥，凶危立見。服此湯數劑後脈見柔和，即病有轉機，多服自愈。

野臺參（五錢）、生赭石（軋細，五錢）、生芡實（五錢）、生山藥（五錢）、萸肉（去淨核，五錢）、清半夏（二錢）、茯苓（二錢）。

服藥數劑後，滿悶見輕，去芡實加白朮二錢。

脈之真有力者，皆有洪滑之象。洪者如波濤疊湧，勢作起伏；滑者指下滑潤，纍纍如貫珠。此脈象弦直，既無起伏之勢，又無貫珠之形，雖大而有力，實非真有力之象。

和緩者脾胃之正脈，弦長者肝膽之正脈，然脾胃屬土，其脈象原宜包括金、木、水、火諸臟腑，故六部之脈皆有和緩，乃為正像。今其脈弦而有力，乃肝木橫恣，侵侮脾土之象，故知其脾胃虛也。衝脈上隸陽明，故衝氣與胃氣原相貫通。今因胃氣虛而不降，衝氣即易於上干，此時脾胃氣化不固，既有外越之勢，衝氣復上干而排擠之，而其勢愈外越，故其脈又兼大也。

一媪，年過六旬，胸腹滿悶，時覺有氣自上下衝，飲食不能下行。其子為書賈，且知醫，曾因賣書至愚書校，述其母病證，且言脈象大而弦硬，為擬此湯，服一劑滿悶即減，又服數劑痊愈。

一人，年近五旬，心中常常滿悶，嘔吐痰水，時覺有氣起自下焦，上衝胃口。其脈弦硬而長，右部尤甚，此衝氣上衝，並迫胃氣上逆也。問其大便，言甚乾燥。遂將方中赭石改作一兩，又加知母、生牡蠣各五錢，厚朴、蘇子各錢半，連服六劑痊愈。

【附錄】

直隸鹽山李曰綸來函：

天津王媪，得病月餘，困頓已極，求治於弟。診其脈，六部皆弦硬有力，更粗大異常，詢其病，則胸膈滿悶，食已即吐，月餘以來，未得一飯不吐，且每日大便兩三次，所便少許有如雞矢，自云心中之難受，莫可言喻，不如即早與世長辭，脫此苦惱。細思胸膈滿悶，頗似實證者，然而脈象弦硬粗大，無一點柔和之象，遂憶鎮攝湯下注云「治胸膈滿悶，其脈大而弦，按之有力，此脾胃真氣外泄，衝脈逆氣上干之證，慎勿以實證治之」云云，即抄鎮攝湯原方與之。服一劑，吐即見減，大便次數亦見減，脈遂有柔和之象。四五劑，即諸病痊愈。以後遇此等脈象，即按此湯加減治之，無不效如桴鼓。



〈 第 二 卷 〉

治喘息方

【參赭鎮氣湯】

治陰陽兩虛，喘逆迫促，有將脫之勢，亦治腎虛不攝，衝氣上干，致胃氣不降作滿悶。

野臺參（四錢）、生赭石（六錢，軋細）、生芡實（五錢）、生山藥（五錢）、萸肉（六錢，去淨核）、生龍骨（六錢，搗細）、生牡蠣（六錢，搗細）、生杭芍（四錢）、蘇子（二錢，炒搗）。

一婦人，年三十餘，勞心之後兼以傷心，忽喘逆大作，迫促異常。其翁知醫，以補斂元氣之藥治之，覺胸中窒礙不能容受。更他醫以為外感，投以小劑青龍湯，喘益甚。延愚診視，其脈浮而微數，按之即無，知為陰陽兩虛之證。蓋陽虛則元氣不能自攝，陰虛而肝腎又不能納氣，故作喘也。為制此湯，病人服藥後，未及覆杯曰「吾有命矣」。詢之曰「從前呼吸惟在喉間，幾欲脫去，今則轉落丹田矣」。果一劑病癒強半，又服數劑痊愈。

按：生赭石壓力最勝，能鎮胃氣衝氣上逆，開胸膈，墜痰涎，止嘔吐，通燥結，用之得當，誠有捷效，虛者可與人參同用。

一人，當上腕處發瘡，大如核桃，破後，調治三年不愈。瘡口大如錢，覺自內潰爛，循脅漸至背後，每日自背後以手排擠至瘡口，流出膿水若干。求治於愚，

自言自患此瘡後，三年未嘗安枕，雖臥片時，即覺有氣起自下焦上逆衝心。愚曰：「此即汝瘡之病根也。俾用生芡實一兩，煮濃汁送服生赭石細末五錢，遂可安臥。又服數次，徹夜穩睡。蓋氣上逆者，乃衝氣之上衝，用赭石以鎮之，芡實以斂之，衝氣自安其宅也。繼用拙擬活絡效靈丹（在第四卷），加生黃耆、生赭石各三錢煎服，日進一劑，半月痊愈。」

一人，傷寒病瘥後，忽痰涎上湧，杜塞咽喉幾不能息。其父用手大指點其天突穴，息微通（點天突穴法，詳第三卷），急迎愚調治。遂用香油二兩熬熱，調麝香一分灌之，旋灌旋即流出痰涎若干。繼用生赭石一兩、人參六錢、蘇子四錢煎湯，徐徐飲下，痰涎頓開。

一婦人，年近五旬，得溫病，七八日表裡俱熱，舌苔甚薄作黑色，狀類舌斑，此乃外感兼內虧之証。醫者用降藥兩次下之，遂發喘逆。令其子兩手按其心口，即可不喘，須臾又喘，又令以手緊緊按住，喘又少停。診其脈，尺部無根，寸部搖搖，此將脫之候也。時當仲夏，俾用生雞子黃四枚，調新汲井泉水服之，喘稍定，可容取藥。遂用赭石細末二錢同生雞子黃二枚，溫水調和服之，喘遂愈，脈亦安定。繼服參赭鎮氣湯，以善其後。

一婦人，連連嘔吐，五六日間勺水不存，大便亦不通行，自覺下脘之處疼而且結，凡藥之有味者，人口即吐；其無味者，須臾亦復吐出，醫者辭不治。後愚診視，脈有滑象，上盛下虛，疑其有妊。詢之，言月信不見者五十日矣。然結證

不開，危在目前。《內經》謂「有故無殞，亦無殞也」，遂單用赭石二兩煎湯飲下。覺藥力至結處不能下行，復返而吐出，繼改用赭石四兩，又重羅出細末兩許，將餘三兩煎湯調細末服下，其結遂開，大便亦通，自此安然無恙，至期方產。

友人毛仙閣曾治一婦人，胸次鬱結，飲食至胃不能下行，時作嘔吐。仙閣用赭石細末六錢，濃煎人參湯送下，須臾腹中如爆竹之聲，胸次、胃中俱覺通豁，至此飲食如常。

友人高夷清曾治一人，上焦滿悶，艱於飲食，胸中覺有物窒塞。醫者用大黃、萸實、陷胸之品十餘劑，轉覺胸中積滿，上至咽喉，飲水一口即溢出。夷清用赭石二兩、人參六錢為方煎服，頓覺窒塞之物降至下焦。又加當歸、肉蓯蓉，再服一劑，降下瘀滯之物若干，病若失。

友人李景南曾治一人，寒痰壅滯胃中，嘔吐不受飲食，大便旬日未行。用人參八錢、乾薑六錢、赭石一兩，一劑嘔吐即止。又加當歸五錢，大便得通而愈。門人高如璧曾治一叟，年七十餘，得呃逆證，兼小便不通，劇時覺杜塞咽喉，息不能通，兩目上翻，身軀後挺，更醫數人治不效。如璧診其脈浮而無力。遂用赭石、臺參、生山藥、生芡實、牛蒡子為方之，呃逆頓愈。又加竹茹服一劑，小便亦通利。

歷觀以上諸治驗案，赭石誠為救顛扶危之大藥也。乃如此良藥，今人罕用，間有用者，不過二三錢，藥不勝病，用與不用同也。且愚放膽用至數兩者，非鹵

莽也。以臨證既久，凡藥之性情能力及宜輕宜重之際，研究數十年，心中皆有定見，而後如此放膽，百用不至一失。且赭石所以能鎮逆氣，能下有形瘀滯者，以其饒有重墜之力，於氣分實分毫無損。況氣虛者又佐以人參，尤為萬全之策也。其藥雖係石質，實與他石質不同，即未經火鍛，為末服之，亦與腸胃無傷。此從精心實驗而知，故敢確鑿言之。

或曰「赭石質甚重墜，故《別錄》謂其墮胎，諸案中如此重用赭石，以治他證猶可，以治妊婦惡阻，腸胃堅結，縱能愈，獨不近於行險乎？」答曰「此中理甚精奧，非細心研究不知也。赭石之原質，係鐵七氧三化合而成，其質原與鐵鏽相似（鐵與氧氣化合則生鏽）。鐵鏽善補血，赭石亦善補血，故《本經》謂其「主赤沃漏下」；《別錄》謂其「治帶下養血氣」；《日華》謂其「治月經不止」；《普濟方》用治血崩。統視以上主治，則赭石善於理血養血可知。既能養，其血足不自能墮胎乎？而《別錄》謂其墮胎者，指五六月以後之胎而言也。蓋五六月以後之胎，已成形體，赭石重墜有壓力，故可迫之下墜。若惡阻時，胞室之血脈初次凝結，無所謂形體也。此時惟過用破血之藥可以墮胎。豈善於養血之赭石，服之亦慮其墮胎乎？且惡阻至於腸胃堅結，百藥不效，惟重用赭石，猶可救挽，縱有墜胎之弊，猶當權其事之輕重緩急，而放膽用之，此孫思邈所謂「心欲小而膽欲大」也，況用之又斷不至墮胎乎」。

按：赭石色赤，氧氣與鐵化合之色也。其原質類鐵鏽，故與鐵鏽同色。鐵鏽研末服之，不妨腸胃，故赭石生研服之，亦於腸胃無損也。鐵鏽之生，層層作薄片，而赭石亦必層層作薄片。且其每片之兩面，一面點點作凸形，一面點點作凹形者，方為真赭石，故有釘頭赭石及龍眼赭石之名。

仲景旋覆代赭石湯，赭石、人參並用，治「傷寒汗吐下解後，心下痞硬，噫氣不除」。參赭鎮氣湯中人參，借赭石下行之力，挽回將脫之元氣，以鎮安奠定之，亦旋覆代赭石湯之義也。

一婦人，年二十餘，因與其夫反目，怒吞鴉片，已經救愈，忽發喘逆，迫促異常，須臾又呼吸頓停，氣息全無，約十餘呼吸之頃，手足亂動，似有蓄極之勢，而喘復如故。若是循環不已，勢近垂危，延醫數人，皆不知為何病。後愚診視其脈，左關弦硬，右寸無力，精思良久，恍然悟曰「此必怒激肝膽之火，上衝胃氣。夫胃氣本下行者也，因肝膽之火沖之，轉而上逆，並迫肺氣亦上逆，此喘逆迫促所由來也。逆氣上干，填塞胸膈，排擠胸中大氣，使之下陷。夫肺懸胸中，須臾無大氣包舉之，即須臾不能呼吸，此呼吸頓停所由來也（此理參觀第四卷升陷湯後跋語方明）。迨大氣蓄極而通，仍上達胸膈，鼓動肺臟，使得呼吸，逆氣遂仍得施其擊撞，此又病勢之所以循環也。《神農本經》載，桂枝主上氣咳逆、結氣、喉痺、吐吸（吸不歸根即吐出），其能降逆氣可知。其性溫而條達，能降逆氣，又能升大氣可知。遂單用桂枝尖三錢，煎湯飲下，須臾氣息調和如常。夫以桂枝

一物之微，而升陷降逆，兩擅其功，以挽回人命於頃刻，誠天之生斯，使獨也。然非親自經驗者，又孰信其神妙如是哉！繼用參赭鎮氣湯，去山藥、蘇子，加桂枝尖三錢，知母四錢，連服劑，病不再發。此喘證之特異者，故附記於此。

喻嘉言《寓意草》中有重用赭石治險證之案數則，與上所載之案參觀，其理益明。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

定縣吳錫三偕眷寓漢皋，其妻病，服藥罔效。弟診其脈，浮而無力。胸次鬱結，如有物杜塞，飲食至胃間，恆覺燒熱不下。仿參赭鎮氣湯之義，用野臺參六錢，赭石細末二兩。將二藥煎服，胸次即覺開通。服至二劑，飲食下行無礙。因其大便猶燥，再用當歸、肉苁蓉各四錢，俾煎服。病若失。

安徽績溪章叔和來函：

洪瑞璋，年五十餘，家素貧苦，曾吸鴉片，戒未多年，由咳而成喘疾，勉強操勞，每屆冬令則加劇，然病發時亦往往不服藥而自愈。茲次發喘，初由外感，兼發熱頭痛。醫者投以二活、防、葛，大劑表散，遂汗出二日不止，喘逆上衝，不能平臥，胸痞腹脹，大便旬餘未行，語不接氣，時或癱瘓，種種見證，已瀕極險。診其脈，微細不起，形狀頹敗殊甚，詳細勘視，誠將有陰陽脫離之虞。適日前閱赭石解，記其主治，揣之頗合，但恐其性太重鎮而正氣將隨以下陷也，再四

躊躇，因配以真潞黨參、生懷山藥、野苳神、淨萸肉、廣桔紅、京半夏、龍骨、牡蠣、蘇子、芩子等，皆屬按證而擬，竟與參赭鎮氣湯大致相同。一劑病癒大半，兩劑即扶杖起行，三劑則康復如恆矣。前月遇之，自言冬不知寒，至春亦未反覆。



【薯蕷納氣湯】

治陰虛不納氣作喘逆。

生山藥（一兩）、大熟地（五錢）、萸肉（五錢，去淨核）、柿霜餅（四錢，沖服）、生杭芍（四錢）、牛蒡子（二錢，炒搗）、蘇子（二錢，炒搗）、甘草（二錢，蜜炙）、生龍骨（五錢，搗細）。

前方，治陰陽兩虛作喘，此方乃專治陰虛作喘者也。方書謂肝腎虛者，其人即不能納氣，此言亦近理，然須細為剖析。空氣中有氧氣，乃養物之生氣也（氧氣詳解在後補絡補管湯下）。人之肺臟下無透竅，而吸入之氧氣，實能隔肺胞，息息透過，以下達腹中，充養周身。肝腎居於腹中，其氣化收斂，不至膨脹，自能容納下達之氣，且能導引使之歸根。有時腎虛，氣化不攝，則上注其氣於衝，以衝下連腎也。夫衝為血海，實亦主氣，今因為腎氣貫注，則衝氣又必上逆於胃，以衝上連胃也。由是，衝氣兼挾胃氣上逆，並迫肺氣亦上逆矣，此喘之所由來也。又《內經》謂「肝主疏泄，腎主閉藏」。夫肝之疏泄，原以濟腎之閉藏，故二便之通行，相火之萌動，皆與肝氣有關，方書所以有肝行腎氣之說。今因腎失其閉藏之性，肝遂不能疏泄腎氣使之下行，更迫於腎氣之膨脹，轉而上逆。由斯，其逆氣可由肝係直透膈上，亦能迫肺氣上逆矣，此又喘之所由來也。方中用地黃、山藥以補腎，萸肉、龍骨補肝即以斂腎，芍藥、甘草甘苦化陰，合之柿霜之涼潤多液，均為養陰之妙品，蘇子、牛蒡又能清痰降逆，使逆氣轉而下行，即能引藥

力速於下達也。至方名薯蕷納氣湯者，因山藥補腎兼能補肺，且饒有收斂之力，其治喘之功最弘也。

或問「氧氣雖能隔肺胞透過，亦甚屬些些無多，何以當吸氣內入之時，全腹皆有膨脹之勢」？答曰「若明此理，益知所以致喘之由。人之臟腑皆賴氣以撐懸，是以膈上有大氣，司肺呼吸者也；膈下有中氣，保合脾胃者也；臍下有元氣，固性命之根蒂者也。當吸氣入肺之時，肺胞膨脹之力，能鼓舞諸氣，節節運動下移，而周身之氣化遂因之而流通，且喉管之分支下連心肝，以通於奇經諸脈，當吸氣內入之時，所吸之氣原可由喉管之分支下達，以與肺中所吸之氣，相助為理也。下焦肝腎（奇經與腎相維繫）屬陰，陰虛氣化不攝則內氣膨脹，遂致吸入之氣不能容受而急於呼出，此陰虛者所以不納氣而作喘也。

【滋培湯】

治虛勞喘逆，飲食減少，或兼咳嗽，並治一切陰虛羸弱諸證。

生山藥（一兩）、於朮（三錢，炒）、廣陳皮（二錢）、牛蒡子（二錢，炒搗）、生杭芍（三錢）、玄參（三錢）、生赭石（三錢，軋細）、炙甘草（二錢）。

痰鬱肺竅則作喘，腎虛不納氣亦作喘，是以論喘者恆責之肺、腎二臟，未有責之於脾、胃者。不知胃氣宜息息下行，有時不下行而轉上逆，並迫肺氣亦上逆即可作喘。脾體中空，能容納諸回血管之血，運化中焦之氣，以為氣血寬閒之地，有時失其中空之體，或變為緊縮，或變為脹大，以致壅激氣血上逆迫肺，亦可作喘。且脾脈緩大，為太陰濕土之正像，虛勞喘嗽者，脈多弦數，與緩大之脈反對，乃脾土之病脈也，故重用山藥以滋脾之陰，佐以於朮以理脾之陽，脾臟之陰陽調和，自無或緊縮、或漲大之虞。特是，脾與胃臟腑相根據，凡補脾之藥皆能補胃。而究之臟腑異用，脾以健運磨積，宣通津液為主；胃以熟腐水穀、傳送糟粕為主。若但服補藥，壅滯其傳送下行之機，胃氣或易於上逆，故又宜以降胃之藥佐之，方中之赭石、陳皮、牛蒡是也。且此數藥之性，皆能清痰涎利肺氣，與山藥、玄參並用，又為養肺止嗽之要品也。用甘草、白芍者，取其甘苦化合，大有益於脾胃，兼能滋補陰分也，並治一切虛勞諸證者，誠以脾胃健壯，飲食增多，自能運化精微以培養氣血也。

一人，年二十二，喘逆甚劇，脈數至七至，用一切治喘藥皆不效，為制此方。將藥煎成，因喘劇不能服，溫湯三次始服下，一劑見輕，又服數劑痊愈。

或問「藥之健脾胃者，多不能滋陰分，能滋陰分者，多不能健脾胃，此方中芍藥、甘草同用，何以謂能兼此二長」？答曰「《本經》謂芍藥味苦，後世本草謂芍藥味酸。究之，芍藥之味苦酸皆有。陳修園篤信《本經》謂芍藥但苦不酸。然嚼服芍藥錢許，恆至齧齒，兼有酸味可知。若取其苦味與甘草相合，有甘苦化陰之妙（甘苦化陰說始於葉天士），故能滋陰分。若取其酸味與甘草相合，有甲己化土之妙（甲木味酸己土味甘），故能益脾胃。此皆取其化出之性以為用也。又陳修園曰『芍藥苦平破滯，本瀉藥非補藥也。若與甘草同用，則為滋陰之品，與生薑、大棗、桂枝同用，則為和營衛之品，與附子、乾薑同用，則能收斂元陽，歸根於陰，又為補腎之品。本非補藥，昔賢往往取為補藥之主，其旨微矣』。按此論甚精，能示人用藥變化之妙，故連類及之」。

西人謂「心有病可以累肺作喘」，此說誠信而有徵。蓋喘者之脈多數，夫脈之原動力發於心，脈動數則心動亦數可知。心左房之赤血與右房之紫血，皆與肺循環相通（理詳後定心湯下）。若心動太急，逼血之力過於常度，則肺臟呼吸亦因之速過常度，此自然之理也。然心與腎為對待之體，心動若是之急數，腎之真陰不能上潮，以靖安心陽可知。由是言之，心累肺作喘之證，亦即腎虛不納氣之證也。

西人又謂「喘證因肺中小氣管，痰結塞住，忽然收縮，氣不通行，呼吸短促，得痰出乃減。有日日發作者，又數日或因辛苦寒冷而發作者，又有因父母患此病傳延者。發作時，苦劇不安」，醫治無良法，應用紙浸火硝水內，取出曬乾，置盆內燃點，乘煙焰熏騰時，以口吸氧氣入肺（火硝多含氧氣），或用醉仙桃乾葉當煙吸之，內服樟腦鴉片酒一、二錢，更加薑末一分半、白礬七厘共為散，水調服。雖未必能除根，亦可漸輕。

按：此證乃勞疾之傷肺者，當名為肺勞，雖發作時甚劇，仍可久延歲月。其治法當用拙擬黃耆膏（黃耆膏在後）。

肺勞之證，因肺中分支細管多有瘀滯，熱時肺胞鬆容，氣化猶可宣通，故病則覺輕；冷時肺胞緊縮，其痰涎恆益杜塞，故病則加重，此乃肺部之錮疾，自古無必效之方。惟用曼陀羅熬膏，和以理肺諸藥，則多能治癒。爰將其方詳開於下：

曼陀羅正開花時，將其全科切碎，榨取原汁四兩，入鍋內熬至若稠米湯；再加入硼砂二兩，熬至融化；再用遠志細末、甘草細末各四兩，生石膏細末六兩，以所熬之膏和之，以適可為丸為度，分作小丸。每服錢半，若不效可多至二錢，白湯送下，一日兩次，久服病可除根。若服之覺熱者，石膏宜加重。肺臟具闢辟之機。其闢辟之機自如，自無肺勞病證。遠志、硼砂最善化肺管之瘀。甘草末服，不經火炙、水煮，亦善宣通肺中氣化，此所以助肺臟之辟也。曼陀羅膏大有收斂之力，此所以助肺臟之也。用石膏者，因曼陀羅之性甚熱，石膏能解其熱也。且

遠志、甘草、硼砂皆為養肺之品，能多生津液，融化痰涎，俾肺臟闢之機靈活無滯，則肺勞之喘嗽自愈也。

按：醉仙桃即曼陀羅花也。其花白色，狀類牽牛而大，其葉大如掌而有尖，結實大如核桃，實蒂有托盤如錢，皮有芒刺如包麻，中含細粒，如火麻仁。渤海之濱生殖甚多，俗呼為洋金花。李時珍謂「服之令人昏昏如醉，可作麻藥」。又謂「熬水洗脫肛甚效」，蓋大有收斂之功也。西人藥學謂「用醉仙桃花實葉，俱要鮮者榨汁，或熬乾，或曬乾作膏，每服三厘，能補火止疼、令人熟睡，善療喘嗽」，正與時珍之說相似，然此物有毒不可輕用。今人治勞喘者，多有取其花與葉，作煙吸之者，實有目前捷效，較服其膏為妥善也。

治陽虛方

【敦復湯】

治下焦元氣虛憊，相火衰微，致腎弱不能作強（《內經》云「腎者作強之官」），脾弱不能健運，或腰膝酸疼，或黎明泄瀉，一切虛寒諸證。

野臺參（四錢）、烏附子（三錢）、生山藥（五錢）、補骨脂（四錢，炒搗）、核桃仁（三錢）、萸肉（四錢，去淨核）、茯苓（錢半）、生雞內金（錢半，搗細）。

或問「人之相火生於下焦，而遊行於中焦、上焦。夫下焦既為相火所生之地，其處當熱於他處，何以人之下焦轉多畏寒乎」？答曰「此段理解，微妙難言，然可罕譬而喻也。君不見夫西洋火柴乎，夫火柴原蘊蓄一團火氣，然以手捫之，初不覺其熱也，惟手執火柴以其頂著物而劃之，且劃至如許之遠，而後火發而熱熾，是以火柴之火與熱，實生於與物相磨之道路也。火柴有然，人身之相火何莫不然。當其初起於命門，原是一縷生發之氣，息息上達以流行於周身，與周身之經絡相磨相蕩而生熱，猶火柴之劃物而生熱也。是人之下焦所以多畏寒者，誠以相火始生，其熱力猶微也。且相火為水中之元陽，乃陰中之火，猶兩間之電氣也。電氣無處不有，隨物而寓，即含電氣最多之物，亦非熱於他物，如鐵能含電，尤善傳電，西人以兩鐵相磨而生電光，兩鐵之相磨愈速，電光之生亦愈速。故凡欲補相火者，須兼補腎中元氣，元氣旺則流行於周身者速，磨蕩於經絡者必加力，而相

火之熱力，即因之而增也。故拙擬敦復湯，原為補相火之專方，而方中以人參為君，與萸肉、茯苓並用，借其收斂下行之力，能大補腎中元氣，元氣既旺，相火自生。又用烏附子、補骨脂之大熱純陽，直達下焦，以助相火之熱力，核桃仁之溫潤多脂，峻補腎臟，以厚相火之基址。且附子與人參同用名參附湯，為回元陽之神丹，補骨脂與核桃仁並用名青蛾丸，為助相火之妙品（核桃仁屬木，補骨脂屬火，並用之，有木火相生之妙），又恐藥性太熱，於下焦真陰久而有礙，故又重用生山藥，取其汁漿稠粘，能滋下焦真陰，其氣味甘溫，又能固下焦氣化也。至於雞內金，其健運脾胃之力，既能流通補藥之滯，其收澀膀胱之力，又能逗留熱藥之性也。

人身之熱力，方書恆責重相火，而不知君火之熱力，較相火尤勝。蓋生育子女以相火為主，消化飲食以君火為主。君火發於心中，為陽中之火，其熱下濟，大能溫暖脾胃，助其消化之力，此火一衰，脾胃消化之力頓減。若君火旺而相火衰者，其人仍能多飲多食可享大壽，是知君火之熱力，關於人身者甚大也。愚自臨證實驗以來，遇君火虛者不勝計，其人多廉於飲食，寒飲留滯為恙，投以辛熱升補之劑，即隨手奏效（拙擬理飲湯為治是病的方，方在第三卷）。彼謂心臟惡熱，用藥惟宜寒涼者，猶是一偏之論。曾治一人，年二十餘，嗜睡無節，即動作飲食之時，亦忽然昏倒鼾睡。診其脈兩尺洪滑有力，知其腎經實而且熱也。遂用黃柏、知母各八錢，茯苓、澤瀉各四錢，數劑而愈。是知人之資稟不齊，心臟多



惡熱，而亦有宜溫補者；腎臟多惡寒，而亦有宜涼瀉者。是在臨證時細心與之消息，不可拘於成見也。

欲明心火之熱力，今又得一確實證驗。愚資稟素強壯，心火頗旺而相火少衰，飲食不忌寒涼，恆畏坐涼處。因此，數年來，常於食前，服生硫黃如黑豆大一塊，約有四厘（服生硫黃法在第八卷），甚見效驗。後見道家書，有默運心火下行，與腎氣互相交感之法，且引《崔公入藥鏡》「先天氣，後天氣，得之者，常似醉」四語為注解。初未深信，後觀《抱朴子》〈大丹問答篇〉有「意雙則和，和則增壽」之語，疑即此法。反覆尋繹，恍悟《內經》〈四氣調神論〉所謂「使志若伏若匿，若有私意，若已有得」者，即此法之權輿也。遂效而行之，數日覺下元溫暖，即不欲再食硫黃。月餘功效異常，其神妙有不可言傳者，由此觀之，心火之功用何其大哉。

按：人之元神在心（元神藏於腦而出於心），人之元氣在腎。欲心腎相交者，須於有意無意之間，運心中元神隨呼吸之氣息息下降，與腎中元氣會合。然從前道家書皆謂「呼升降」，獨明伍衝虛謂「吸升呼降，方合有意無意之奧旨」，善哉此論，誠千古未發之秘也。愚未睹此論時，嘗默自體驗，亦是如此，忽睹此論，欣喜異常，益信愚所體驗者，誠不誤也。蓋心中元神，若必隨吸氣下降，則拘於蹟象，久之氣分必覺不順。惟呼氣外出之時，心中元神默默收斂，內氣下降，與腎中元氣會合渾融，不使隨呼氣外出，則息息歸根，存之又存而性命之根蒂自

固也。不但此也，此法須心腎互相交感，不惟心感腎，腎亦感心。當呼氣外出之時，腎中元氣原自上升，宜少加主宰之力，俾其上升之機稍大，始能與心中下降之元神欣欣相遇，互相交感。則一念在心，一念在腎，《抱朴子》所謂「意雙則和」也。然此法功候不可太過，使熱力熾盛，宜休息行之，又宜清心寬欲，戒謹色慾，涵養真水與真火相濟，始能有效。

或問「子所論交心腎之功，至精至確矣。似與道書所謂「媒合嬰兒姪女，以結金丹」之功無異，將毋遵斯道而專心行之，即可為學仙之基礎乎」？答曰「非也。仙與佛同一宗旨，當於『精明之府』（《內經》〈脈要精微論〉曰「頭者，精明之府」），常保此無念之正覺，有如日麗中天，照臨下土，無心而成化也。此中消息自然而然，純屬先天至微至妙，原非淺學所能窺，愚何人斯，敢參末議乎？至愚上所云云者，皆係後天工夫，欲人藉以卻病也，非妄談修仙之道，以誤人也」。

心火之熱力大矣哉！聞之腎為先天，脾為後天，二臟不失職，諸臟皆和。然非君火之陽光有以普照之，腎與脾亦無以伸其用，蓋腎中相火雖亦能熏蒸脾土，腐熟水穀，不過依君火之末光以成功也。僕自去秋，黎明泄瀉，屢治不效，自疑無藥可醫矣。偶與友弟壽甫言及，壽甫授以吸升呼降，以心溫腎之法。初試之四五日間，覺丹田生暖，由斯工夫加密，泄瀉遂愈。乃知心為百體所從，令心所至

氣必至，以心氣交腎氣，即以心火溫腎水，夫斯以水火既濟，而病可卻也。然非吾友之先覺，剴切指示，何由得焉！疾即愈，喜甚，因志之以示不忘云。

庚戌仲容愚小兄張慎敬亭敬識

天地交，而後陰陽和，萬物生。人身一小天地也，心腎常交而身始無病。余患寒飲証，發則喘急，不坐亦不臥，服藥無效，間習道家運氣之方，亦無大驗。戊申冬，友人張君壽甫告以吸升呼降之說，余乃恍然，悟悟而喜甚。如獲拱璧，依法習之。今年餘矣，覺丹田常暖，熱力充於周身，而病遂霍然已。神哉術乎！道家之奧乎！醫林之秘乎！抑天地之精乎！非明造化之機者，孰能與於斯，慎之、秘之，非人勿傳。然而有心攝養者，細繹此書，當自得之。

庚戌春日愚弟弋文藻翔高敬題

世謂必贊化育之功，古今人不相及，非也。余素不留心道家書，以其雖能壽身，未能壽世，及讀友兄壽甫《醫學衷中參西錄》，見有煉氣治病法，要旨在吸升呼降，亦以為道家吐納之術，而未之奇也。庚戌春，因事北上，路感風寒，鼻息熱而痰涎鬱胸。食梨一顆，下焦覺涼，痰熱如故。邀於車中試吸升呼降法，約行三十里，覺心爽體舒，外感頓解。煉氣之功，神妙竟至此哉！蓋人之心火，常與腎氣交感，則元氣充周，血脈流通，新症即時可除，夙病久將自愈。使人盡得此術，既可保身於預，又可救患於猝，無須用藥而能濟世活人，參贊化育之功，孰大於斯。然壽甫傳之，余幸得之，尚望不僅予得之也，於是乎書。

庚戌孟夏愚弟丁振翳翊仙敬題

治心病方

【定心湯】

治心虛怔忡。

龍眼肉（一兩）、酸棗仁（五錢，炒搗）、萸肉（五錢，去淨核）、柏子仁（四錢，炒搗）、生龍骨（四錢，搗細）、生牡蠣（四錢，搗細）、生明乳香（一錢）、生明沒藥（一錢）。

心因熱怔忡者，酌加生地數錢，若脈沉遲無力者，其怔忡多因胸中大氣下陷，詳觀拙擬升陷湯（在第四卷）後跋語及諸案自明治法。

《內經》謂「心藏神」，神既以心為舍宇，即以心中之氣血為保護，有時心中氣血虧損，失其保護之職，心中神明遂覺不能自主而怔忡之疾作焉，故方中用龍眼肉以補心血，棗仁、柏仁以補心氣，更用龍骨入肝以安魂，牡蠣入肺以定魄。魂魄者，心神之左輔右弼也，且二藥與萸肉並用，大能收斂心氣之耗散，並三焦之氣化亦可因之團聚。特是心以行血為用，心體常有舒縮之力，心房常有啟閉之機，若用藥一於補斂，實恐於舒縮啟閉之運動有所妨礙，故又少加乳香、沒藥之流通氣血者以調和之。其心中兼熱用生地者，因生地既能生血以補虛，尤善涼血而清熱，故又宜視熱之輕重而斟酌加之也。

西人曰「人身心肺關係尤重，與腦相等」。凡關係重者、護持之尤謹，故腦則有頭額等八骨以保護之，而心肺亦有胸脅諸骨以保護之。心肺體質相連，功用亦相倚賴，心之功用關係全體，心病則全體皆受害，心之重如此。然論其體質，不過赤肉所為，其能力專主舒縮，以行血脈，有左右上下四房，左上房主接肺經赤血，右上房主接周身回血，左下房主發赤血，營運周身，右下房主接上房回血過肺，更換赤血而回左上房，左上房赤血，落左下房入總脈管，以養全體，右上房回血，落右下房上注於肺，以出碳氣而接氧氣（此理與後補絡補管湯跋語參看方明），故人一身之血，皆經過於心肺。心能運血周流一身，無一息之停，即時接入，即時發出，其跳躍即其逼發也，以時辰表驗試，一瞥眈（即一分鐘）跳七十五次，每半時跳四千五百次，一晝夜計跳十萬八千次。然平人跳不自覺，若覺心跳即是心經改易常度。心房之內左厚於右，左下房厚於右下房幾一倍，蓋左房主接發赤血，功用尤勞，故亦加厚也。心位在胸中居左，當肋骨第四至第七節，尖當肋骨第五第六之間，下於乳頭約一寸至半寸，橫向胸骨，病則自覺周遭皆跳。

凡心經本體之病，或因心房變薄變厚，或心房之門有病，或夾膜有病，或總管有病，亦如眼目之病，或在明角罩，或在瞳人，或在睛珠，非必處處皆病也。大概心病左多於右，因左房功用尤勞故耳。心病約有數端，一者，心體變大，有時略大，或大過一半。因心房之戶，有病攔阻，血出入不便，心舒縮之勞過常度，有勞多則變大，亦與手足過勞則腫大之理相同。大甚，則逼血舒縮之用因之不靈矣。

一者，心房門戶變小、或變大、或變窄、或變闊，俱為非宜，蓋心血自上房落下房之門，開張容納血入後，門即翕閉，不令血得迴旋上出。其自下房入總管處亦有門，血至則開張，使之上出，血出，後門即翕閉，不令血得下返。若此處太窄太小，則血不易出；太大太闊，則血逼發不盡，或已出復返，營運不如常度矣。

再者心跳，凡無病之人心跳每不自覺。若因病而跳，時時自覺，撫之或覺動。然此證有真有假，真者心自病而跳也，或心未必有病，但因身虛而致心跳，亦以真論，若偶然心跳，其人驚懼，防有心病，其實心本無病，即心跳亦臨時之事，是為假心跳證，醫者均須細辨。凡心勻跳無止息，側身而臥，可左可右，呼吸如常，大概心自不病，所慮跳躍不定，或三四次一停，停後復跳不能睡臥，左半身著床愈覺不安，當慮其門戶有病，血不回運如常。有停滯妄流而為膨脹者，有累肺而咳嗽、難呼吸或喘者，有累腦而昏蒙頭疼，中風慌怯者，有累肝而血聚積滿溢者，有累胃不易消化，食後不安，心更跳者，皆心病之關係也。若心自不病，但因思慮過多，或讀書太勞，或用力過度，或驚懼喜怒失度，或色慾醉飽無節，或泄瀉失血，或多食瀉藥，或夜失眠，在婦女或因月事不調，凡遇此等心跳病，醫者應審察致病之由。如因房勞者，令戒房事；因飲食者，戒口止酒、更服黃連水、樟腦以安心，服雞那或鐵酒以補虛弱，戒勤勞行動，常平臥以安身體，遊玩散步以適情意，停止工作以養精神，此治心跳良法也。若胸脅骨之下有時動悸，人或疑為心跳，其實因胃不消化、內有風氣，與心跳病無涉，虛弱人及婦女患者

最多，略服補胃及微利藥可也。若飲食太少，或更過於菲薄，亦可令心跳，宜服雞那及鐵酒，兼多食肉為宜。

按：西人論心跳證有真假，真者，手捫之實覺其跳；假者，手捫之不覺其跳。其真跳者又分兩種：一為心體自病，若心房門戶變大小窄闊之類，可用定心湯，將方中乳香、沒藥皆改用三錢，更加當歸、丹參各三錢。一為心自不病，因身弱而累心致跳，當用治勞瘵諸方治之。至假心跳，即怔忡證也，其收發血脈之動力，非大於常率，故以手捫之不覺其跳。特因氣血虛而神明亦虛，即心之尋常舒縮，徐徐跳動，神明當之，亦若有衝激之勢，多生驚恐，此等證治以定心湯時，磨取鐵鏽水煎藥更佳。至於用鐵鏽之說，不但如西人之說，取其能補血分，實借其鎮重之力，以安心神也。第七卷載有一味鐵養湯，細觀方後治驗諸案，自知鐵鏽之妙用。惟怔忡由於大氣下陷者，斷不宜用。

又按：西人謂人之知覺運動，皆腦氣筋（東人名腦髓神經）主之。遂謂人神明皆在於腦而與心無涉，且設法能即物之腦而實驗之。然西人凡事必實驗而後信，若心之能知覺與否，固不能若腦之可實驗也。《內經》謂「心者，君主之官，神明出焉」。又謂「神遊上丹田，在泥丸官下」。夫腦之中心點，即泥丸官也。古文「思」字作「恧」，上從「囟」，即頂門骨。徐氏《說文》釋此字謂「囟至心如絲，相貫不絕」，是知心與腦相輔而成思。而自腦至心，皆為神明之所貫徹普照也。



此理也，即可以西人之說證之。西人謂腦之左右，各有血脈管兩支分佈，兩支在前，兩支在後，此管由心而出，運血養腦，以全體之血計之，腦得七分之一。由其所言形跡論之，心與腦顯然相通，豈神明之於中者，猶有隔閡而不相通乎。又丁韋良者，西人之甚博雅者，曾為同文館之總教習。然其人於中書亦甚有研究工夫，故所著《天道溯源》一書，凡論思想處，皆歸於心，而不仍西人之舊說，此誠研究中書而有得者也。

又明金正希曰「人見一物必留一影於腦中」。此言人中如攝影鏡子一般，此理雖無處可實驗，而實確有可信。愚於此語悟得心與腦雖功用相輔助，有時亦有偏重於一部之時。如人追憶往事，恆作抬頭想像之狀，此凝於腦，以印證舊留之影也。若研究新理，恆作低頭默思之狀，此凝於心，無所依傍以期深造也。

更以愚自體驗者明之。愚素留心算學，而未諳西法，欲學之無師承。歲在丁酉，遂自購代數、幾何諸書，朝夕研究，漸能通曉。而每當食蒜之後研究算學，即覺心上若有蛛絲細網罩住，與算理即有隔膜，因此不敢食蒜。且人陡遇驚恐甚劇之事，即心中怔忡，或至手捫之亦覺其跳動。若渭神不在心，何他處不跳動乎！若謂傷腦其人即無知覺，試問果傷其心，其人亦復能知覺乎？

【安魂湯】

治心中氣血虛損，兼心下停有痰飲，致驚悸不眠。

龍眼肉（六錢）、酸棗仁（四錢，炒搗）、生龍骨（五錢，搗末）、生牡蠣（五錢，搗末）、清半夏（三錢）、茯苓片（三錢）、生赭石（四錢，軋細）。

若服一二劑後無效者，可於服湯藥之外，臨睡時用開水送服西藥臭剝（性詳第七卷加味磁朱丸下）一瓦，借其麻痺神經之力，以收一時之效，俾湯劑易於為力也。

方書謂「痰飲停於心下，其人多驚悸不寐」。蓋心，火也。痰飲，水也。火畏水刑，故驚悸至於不寐也。然痰飲停滯於心下者，多由思慮過度，其人心臟氣血，恆因思慮而有所傷損，故方中用龍眼肉以補心血，酸棗仁以斂心氣，龍骨、牡蠣以安魂魄，半夏、茯苓以清痰飲，赭石以導引心陽下潛，使之歸藏於陰，以成瞌睡之功也。

一媪，年五十餘，累月不能眠，屢次服藥無效。診其脈有滑象，且其身形甚豐腴，知其心下停痰也。為制此湯，服兩劑而愈。

一婦人，年三十許，一月之間未睡片時，自言倦極，彷彿欲睡，即無端驚恐而醒。診其脈左右皆有滑象，遂用苦瓜蒂十枚，焙焦軋細，空心時開水送服，吐出膠痰數碗，覺心中異常舒暢，於臨眠之先，又送服熟棗仁細末二錢，其夜遂能安睡。後又調以利痰養心安神之藥，連服十餘劑，其證永不反覆矣。

《內經》〈邪客篇〉有治目不得瞑方，用流水千里以外者八升，揚之萬遍，取其清五升煮之，炊以葦薪。水沸，置秫米一升，制半夏（制好之半夏）五合，徐炊令竭為一升半。去其渣，飲汁一小杯，日三，稍益，以知為度（知覺好也）。故其病新發者，覆杯則臥，汗出而已矣，久則三飲而已也。觀此方之義，其用半夏，並非為其利痰，誠以半夏生當夏半，乃陰陽交換之時，實為由陽入陰之候，故能通陰陽和表裡，使心中之陽漸漸潛藏於陰，而入睡鄉也。秫米即蘆稷之米（俗名高粱），取其汁漿稠潤甘緩，以調和半夏之辛烈也。水用長流水，更揚之萬遍，名曰「勞水」，取其甘緩能滋養也。薪用葦薪，取其能暢發腎氣上升，以接引心氣下降，而交其陰陽也。觀古人每處一方，並其所用之薪與水及其煎法、服法，莫不詳悉備載，何其用心之周至哉！

按：《內經》之方多奇驗，半夏秫米湯取半夏能通陰陽，秫米能和脾胃，陰陽通、脾胃和，其人即可安睡，故《內經》謂「飲藥後，覆杯即瞑」，言其效之神速也。乃後世因其藥簡單平常，鮮有用者，則良方竟埋沒矣。門生高如璧治天津河北玄緯路劉姓，年四十二，四月未嘗少睡，服藥無效，問治法於愚，告以半夏秫米湯方。如璧因其心下發悶，遂變通經方，先用鮮萊菔四兩切絲，煎湯兩茶杯，再用其湯煎清半夏四錢服之。時當晚八點鐘，其人當夜即能安睡，連服數劑，心下之滿悶亦愈。

治肺病方

【黃耆膏】

治肺有勞病，薄受風寒即喘嗽，冬時益甚者。

生箭耆（四錢）、生石膏（四錢搗細）、淨蜂蜜（一兩）、粉甘草（二錢細末）、生懷山藥（三錢細末）、鮮茅根（四錢，銼碎如無鮮者可用乾者二錢代之）。

上藥六味，先將黃耆、石膏、茅根，煎十餘沸去渣，澄取清汁二杯，調入甘草、山藥末同煎，煎時以箸攪之，勿令二末沉鍋底，一沸其膏即成。再調入蜂蜜，令微似沸，分三次溫服下，一日服完，如此服之，久而自愈。然此乃預防之藥，喘嗽未犯時，服之月餘，能拔除病根。

肺胞之體，原玲瓏通徹者也。為其玲瓏通徹，故具闢辟之機，而司呼吸之氣。其闢辟之機無礙，即呼吸之氣自如也。有時肺臟有所損傷，其微絲血管及肺胞涵津液之處，其氣化皆湮淤凝滯，致肺失其玲瓏之體，即有礙於闢辟之機，呼吸即不能自如矣。然當氣候溫和時，肺葉舒暢，呼吸雖不能自如，猶不至甚劇。有時薄受風寒，及令屆互寒之時，肺葉收縮，則瘀者益瘀，能闢而不能辟，而喘作矣。肺中之氣化，瘀而且喘，痰涎壅滯，而嗽亦作矣。故用黃耆以補肺之陽，山藥以滋肺之陰，茅根以通肺之竅，俾肺之陰陽調和，竅絡貫通，其辟之力自適均也。用石膏者，因其涼而能散，其涼也，能調黃耆之熱；其散也，能助茅根之通也。

用甘草者，因其味甘，歸脾益土，即以生金也。用蜂蜜者，因其甘涼滑潤，為清肺潤肺，利痰寧嗽之要品也。

茅根不但中空，週遭片上兼有十餘小孔，乃通體玲瓏之物，與肺胞之形體大有相似，故善通肺胞之竅絡。又治病之法，當兼取對宮之藥，茅根係萑葦之屬，於卦為震，稟初春少陽之氣，升而能散，原肺臟對宮，肝家之藥也。夫肺金主斂，肝木主散，此證因肺金之斂太過，故用茅根導引肝木之氣，入肺以宣散之，俾其闡辟之機自若，而喘嗽均不作矣。

或問「凡藥之名膏者，皆用其藥之原汁，久經熬煉而成膏。今僅取黃耆、石膏、茅根之清汁，而調以山藥、甘草之末與蜜，以成膏者何也？」答曰「古人煎藥，皆有火候，及藥之宜先入後入，或浸水摻入，及藥之宜湯、宜膏、宜丸、宜散之區別，然今人不講久矣。如此方黃耆、茅根過煉，則宣通之力微，石膏過煉，則清涼之力減，此三味所以不宜熬膏也。然猶恐藥入胃之後，由中焦而直趨下焦，其力不能灌注於肺，故加山藥、蜂蜜之潤而粘，甘草之和而緩者，調入成膏，使人服之，能留戀胃中不遽下，俾其由胃輸脾，由脾達肺也」。

或問「調之成膏者，恃山藥、蜂蜜也。至甘草何不與黃耆、石膏同煎取汁，而亦為末調入？」答曰「西人謂甘草微有苛（苛即薄荷）辣之味，煎之則甘味減，而苛辣之味轉增。是以西人潤肺之甘草水，止以開水浸之，取其味甘，且清輕之氣上升也。此方將甘草調入湯中，止煎一沸，亦猶西人作甘草水之意也」。

【清金益氣湯】

治羸少氣，勞熱咳嗽，肺痿失音，頻吐痰涎，一切肺金虛損之病。

生黃耆（三錢）、生地黃（五錢）、知母（三錢）、粉甘草（三錢）、玄參（三錢）、沙參（三錢）、川貝母（二錢去心）、牛蒡子（三錢炒搗）。

一婦人，年四十，上焦發熱，咳吐失音，所吐之痰自覺腥臭，漸漸羸瘦，其脈弦而有力，投以清火潤肺之藥，數劑不效，為制此湯，於大隊清火潤肺藥中，加生黃耆一味以助元氣，數劑見輕，十餘劑後，病遂痊愈。

或問「脈既有力矣，何以復用補氣之藥」？答曰「脈之有力，有真有假。凡脈之真有力者，當於敦厚和緩中見之，此脾胃之氣壯旺，能包括諸臟也（脾胃屬土，能包括金、木、水、火諸臟腑）。其餘若脈象洪而有力，多係外感之實熱。若滑而有力，多係中焦之熱痰。若弦而有力，多係肝經之偏盛，尤為有病之脈，此證之脈是也。蓋肺屬金、肝屬木，金病不能鎮木，故脈現弦而有力之象，此肝木橫恣，轉欲侮金之象也。凡肺痿、肺癰之病，多有脅下疼者，亦係肝木偏勝所致」。

一人，年三十餘，肺中素鬱痰火，又為外感拘束，頻頻咳嗽，吐痰腥臭。恐成肺癰，求為診治，其脈浮而有力，關前兼滑，遂先用越婢湯，解其外感，咳嗽見輕，而吐痰腥臭如故。次用葶藶（生者三錢，紗袋裝之）大棗（七枚擘開）湯，瀉其肺中壅滯之痰，間日一服。又用三七、川貝、粉甘草、金銀花為散，鮮地骨

皮煎湯，少少送服，日三次。即用葶藶大棗湯之日，亦服一次。如此調治數日，葶藶大棗湯用過三次，痰涎頓少，亦不腥臭。繼用清金益氣湯、貝母、牛蒡子各加一錢，連服十餘劑，以善其後。

【清金解毒湯】

治肺臟損爛，或將成肺癰，或咳嗽吐膿血者，又兼治肺結核。

生明乳香（三錢）、生明沒藥（三錢）、粉甘草（三錢）、生黃耆（三錢）、玄參（三錢）、沙參（三錢）、牛蒡子（三錢炒搗）、貝母（三錢）、知母（三錢）、三七（二錢，搗細藥汁送服）。

將成肺癰者去黃耆，加金銀花三錢。

一人，年四十八，咳吐痰涎甚腥臭，夜間出汗，日形羸弱。醫者言不可治，求愚診視。脈數至六至，按之無力，投以此湯，加生龍骨六錢，又將方中知母加倍，兩劑汗止，又服十劑痊愈。肺結核之治法，曾詳載於參麥湯下（在第一卷）。然所論者，因肺結核而成勞瘵之治法，此方及後方，乃治肺結核而未成勞瘵者也。若服此二方不見效時，亦可兼服阿斯必林，其服法亦詳參麥湯下。或兼服幾亞蘇薄荷冰丸，其藥性及服法，詳載於醴泉飲（在第一卷）下。鹽酸規尼涅（詳第七卷加味小柴胡湯下），亦可為輔用之品，因其善退肺炎，又善治貧血，炎退血生，結核之爛者自易愈也，其用量，每次服半瓦，一日可服兩次。



【安肺寧嗽丸】

治肺鬱痰火及肺虛熱作嗽，兼治肺結核。

嫩桑葉（一兩）、兒茶（一兩）、硼砂（一兩）、蘇子（一兩炒搗）、粉甘草（一兩）。

上藥五味為細末，蜜作丸三錢重，早晚各服一丸，開水送下。

肺臟具闢之機，治肺之藥，過於散則有礙於闢，過於斂則有礙於辟。桑得土之精氣而生（根皮甚黃燧，應夏季是其明徵），故長於理肺家之病，以土生金之義也。至其葉涼而宣通，最解肺中風熱，其能散可知。又善固氣化，治崩帶脫肛（肺氣旺自無諸疾），其能斂可知。斂而且散之妙用，於肺臟闢之機尤投合也。硼砂之性涼而滑，能通利肺竅，兒茶之性涼而澀，能安斂肺葉。二藥並用，與肺之闢辟亦甚投合。又佐以蘇子之降氣定喘，甘草之益土生金，蜂蜜之潤肺清燥，所以治嗽甚效也。

按：硼砂、兒茶，醫者多認為瘡家專藥。不知其理痰寧嗽，皆為要品。且二藥外用，能解毒化腐生肌，故內服亦治肺結核，或肺中損爛，亦甚有效驗。

或問「《本經》謂桑根白皮主五勞、六極。此方治勞嗽，不用皮而用葉，且不用霜桑葉，而用嫩葉者何居」？答曰「樹之有葉，猶人之有肺，是故人以肺為呼吸，植物即以葉為呼吸（化學家謂葉能吸碳氣吐氧氣）。以其葉治肺，實有同聲相應，同氣相求之妙也。且桑根白皮，雖有補益之力，而與嗽之夾雜外感者，

實有不宜。吳鞠通曾詳論之，其言固不可廢也。至桑葉必用嫩者，因嫩葉含有蛋白質（嫩葉採下，葉蒂必出白漿），故能於人有所補益。若霜桑葉，乃乾枯腐敗之物，作柴用之尚可，豈可以之為藥乎。

【清涼華蓋飲】

治肺中腐爛，浸成肺癰，時吐膿血，胸中隱隱作疼，或旁連脅下亦疼者。

甘草（六錢）、生明沒藥（四錢，不去油）、丹參（四錢）、知母（四錢）。

病劇者加三七二錢（搗細送服）。脈虛弱者，酌加人參、天冬各數錢。

肺癰者，肺中生癰瘡也。然此證肺中成瘡者，十之一二，肺中腐爛者，十之八九，故治此等證，若葶藶、皂莢諸猛烈之藥，古人雖各有專方，實不可造次輕用，而清火解毒化腐生肌之品，在所必需也。甘草為瘡家解毒之主藥，且其味至甘，得土氣最濃，故能生金益肺，凡肺中虛損糜爛，皆能愈之。是以治肺癰便方，有單用生粉草四兩煎湯，頻頻飲之者。而西人潤肺藥水，亦單有用甘草製成者。特其性微溫，且有壅滯之意，而調以知母之寒滑，則甘草雖多用無礙，且可借甘草之甘溫，以化知母之苦寒，使之滋陰退熱，而不傷胃也。丹參性涼清熱，色赤活血，其質輕鬆，其味微辛，故能上達於肺，以宣通臟腑之毒血鬱熱而消融之。乳香、沒藥同為瘡家之要藥，而消腫止痛之力，沒藥尤勝，故用之以參贊丹參，而癰瘡可以內消。三七化瘀解毒之力最優，且化瘀血而不傷新血，其解毒之力，更能佐生肌藥以速於生肌，故於病之劇者加之。至脈虛者，其氣分不能運化藥力，方雖對證無功，又宜助以人參。而猶恐有肺熱還傷肺之虞，是以又用天冬，以解其熱也。

一人，年三十餘，晝夜咳嗽，吐痰腥臭，胸中隱隱作疼，恐成肺癰，求為診治。其脈浮而有力，右勝於左，而按之卻非洪實，投以清金解毒湯（在前），似有煩躁之意，大便又滑瀉一次。自言從前服藥，略補氣分，即覺煩躁，若專清解，又易滑瀉，故屢次延醫無效也。遂改用粉甘草兩半、金銀花一兩、知母、牛蒡子各四錢，煎湯一大碗，分十餘次溫飲下，俾其藥力常在上焦，十劑而愈。後兩月，因勞力過度舊證復發，胸中疼痛甚於從前，連連咳吐，痰中兼有膿血。再服前方不效，為制此湯，兩劑疼止。為脈象虛弱，加野臺參三錢、天冬四錢，連服十劑痊愈。

邑孝廉曾鈞堂，愚年忘友也，精通醫學，曾告愚曰「治肺癰方，林屋山人犀黃丸最效」。余用之屢次，皆隨手奏功，今錄其方於下，以備參觀。

《外科證治全生集》（王洪緒所著）犀黃丸，用乳香、沒藥末各一兩，麝香錢半，犀牛黃三分，共研細。取黃米飯一兩搗爛，入藥再搗為丸，萊菔子大，曬乾（忌火烘）。每服三錢，熱陳酒送下。

徐靈胎曰「蘇州錢復庵咳血不止，諸醫以血證治之，病益劇。餘往診，見其吐血滿地，細審血中似有膿而腥臭，因謂之曰『此肺癰也，膿已成矣。』《金匱》云『膿成則死』，然有生者」。余遂多方治之，病家亦始終相信，一月而愈。蓋余平日，因此證甚多，集唐人以來驗方，用清涼之藥以清其火，滋肺之藥以養其

血，滑降之藥以祛其痰，芳香之藥以通其氣，更以珠黃之藥解其毒，金石之藥填其空，兼數法而行之，屢試必效。今治復庵，亦兼此數法而痊」。

按：此論誠為治肺癰者之準繩，故錄之以備參觀。

西人、東人，對於肺結核，皆視為至險之證。愚治以中藥湯劑，輔以西藥阿斯匹林，恆隨手奏效，參麥湯下論之甚詳。而於近今，又得一治法。奉天清丈局科員宿貫中之兄，年近五旬，素有肺病。東人以為肺結核，屢次醫治皆無效。一日忽給其弟來電報，言病勢已革，催其速還。貫中因來院中，求為疏方，謂前數日來信言，痰嗽較前加劇，又添心中發熱，今電文未言及病情，大約仍係前證，而益加劇也。夫病勢至此，誠難挽回，因其相求懇切，遂為疏方：玄參、生山藥各一兩，而佐以川貝、牛蒡、甘草諸藥。至家將藥煎服，其病竟一汗而愈。始知其病之加劇者，係有外感之證。外感傳裡，陽明燥熱，得涼潤之藥而作汗，所以愈也。其從前肺病亦愈者，因肺中之毒熱隨汗外透，暫覺愉快，而其病根實猶伏而未除也。後旬餘其肺病復發，咳嗽吐痰腥臭。貫中復來詢治法，手執一方，言係友人所贈，問可服否，視之林屋山人犀黃丸也。愚向者原擬肺結核可治以犀黃丸，及徐氏所論治肺癰諸藥，為其價皆甚昂，恐病者辭費，未肯輕於試用。今有所見與愚同者，意其方必然有效，慙慙制其丸，服之未盡劑而愈。夫黃、麝原為寶貴之品，吾中醫恒用之以救險證，而西人竟不知用，何也？

奉天車站開飯館者趙煥章，年四十許。心中發熱、懶食、咳嗽、吐痰腥臭，羸弱不能起床。詢其得病之期，至今已遷延三月矣。其脈一分鐘八十五至，左脈近平和，右脈滑而實，舌有黃苔滿佈，大便四五日一行且甚燥。知其外感，稽留於肺胃，久而不去，以致肺臟生炎，久而欲腐爛也。西人謂肺結核證至此，已不可治，而愚慨然許為治癒，投以清金解毒湯，去黃耆，加生山藥六錢、生石膏一兩，三劑後熱大清減，食量加增，咳嗽吐痰皆見愈。遂去山藥，仍加黃耆三錢，又去石膏，以花粉六錢代之，每日兼服阿斯匹林四分之一瓦，如此十餘日後，病大見愈，身體康健，而間有咳嗽之時，因忙碌遂停藥不服。二十日後，咳嗽又劇，仍吐痰有臭，再按原方加減治之，不甚效驗。亦俾服犀黃丸病遂愈。

治嘔吐方

【鎮逆湯】

治嘔吐，因胃氣上逆，膽火上衝者。

生赭石（六錢，細軋）、青黛（二錢）、清半夏（三錢）、生杭芍（四錢）、龍膽草（三錢）、吳茱萸（一錢）、生薑（二錢）、野臺參（二錢）。

【薯蕷半夏粥】

治胃氣上逆，衝氣上衝，以致嘔吐不止，聞藥氣則嘔吐益甚，諸藥皆不能下嚥者。

生山藥（一兩，軋細）、清半夏（一兩）。

上二味，先將半夏用微溫之水淘洗數次，不使分毫有礬味。用做飯小鍋（勿用藥甑）煎取清湯約兩杯半，去渣調入山藥細末，再煎兩三沸，其粥即成，和白沙糖食之。若上焦有熱者，以柿霜代沙糖，涼者用粥送服乾薑細末半錢許。

按：吐後口舌乾燥，思飲水者熱也。吐後口舌濕潤，不思飲水者涼也。若嘔吐既久，傷其津液，雖有涼者亦可作渴，又當細審其脈，滑疾為熱，弦遲為涼。滑而無力，為上盛下虛，上則熱而下或涼。弦而有力，為衝胃氣逆，脈似熱卻非真熱。又當問其所飲食者，消化與否，所嘔吐者，改味與否，細心詢問體驗，自能辨其涼熱虛實不誤也。

從來嘔吐之證，多因胃氣衝氣，並而上逆。半夏為降胃安衝之主藥，故《金匱》治嘔吐，有大小半夏湯。特是嘔者，最忌礬味，而今之坊間鬻者，雖清半夏亦有礬，故必將礬味洗淨，而後以治嘔吐，不至同於抱薪救火也。其多用至一兩者，誠以半夏味本辛辣，因坊間治法太過，辣味全消，又經數次淘洗，其力愈減，必額外多用之，始能成降逆止嘔之功也。而必與山藥作粥者，凡嘔吐之人，飲湯則易吐，食粥則借其稠粘留滯之力，可以略存胃腑，以待藥力之施行。且山藥，



在上大能補肺生津，則多用半夏，不慮其燥，在下大能補腎斂衝，則衝氣得養，自安其位。且與半夏皆無藥味，故用於嘔吐甚劇，不能服藥者尤宜也。

有因「膽倒」而嘔吐不止者，《續名醫類案》載許宣治一兒十歲，從戲臺倒跌而下，嘔吐苦水，綠如菜汁。許曰「此膽倒也，膽汁傾盡則死矣」。方用溫膽湯，加棗仁、代赭石，正其膽腑。可名正膽湯，一服吐止。

按：此證甚奇異，附載於此，以備參考。

治膈食方

【參耨培氣湯】

治膈食（第五期《衷中參西錄》第三卷論胃病噎膈治法及反胃治法宜參看）。

潞黨參（六錢）、天門冬（四錢）、生耨石（八錢，軋細）、清半夏（三錢）、淡耨蓉（四錢）、知母（五錢）、當歸身（三錢）、柿霜餅（五錢，服藥後含化徐徐咽之）。

人之一身，自飛門以至魄門，一氣主之，亦一氣懸之，故人之中氣充盛，則其賁門（胃之上口）寬展，自能容受水穀，下通幽門（胃之下口）以及小腸、大腸，出為二便，病何由而作？若中氣衰憊，不能撐懸於內，則賁門縮小，以及幽門、小腸、大腸皆為之緊縮。觀膈證之病劇者，大便如羊矢，固因液短，實亦腸細也。況中氣不旺，胃氣不能息息下降，而衝氣轉因胃氣不降，而乘虛上干，致痰涎亦隨逆氣上並，以壅塞賁門。夫此時賁門已縮如藕孔，又加逆氣痰涎以壅塞其間，又焉能受飲食以下達乎？故治此證者，當以大補中氣為主，方中之人參是也。以降逆安衝為佐，以清痰理氣為使，方中之耨石、半夏、柿霜是也。又慮人參性熱、半夏性燥，故又加知母、天冬、當歸、柿霜，以清熱潤燥、生津生血也。用耨蓉者，以其能補腎，即能斂衝，衝氣不上衝，則胃氣易於下降。且患此證者，多有便難之虞，耨蓉與當歸、耨石並用，其潤便通結之功，又甚效也。若服數劑無大效，當係賁門有瘀血，宜加三稜、桃仁各二錢。

一叟，年六十餘，得膈證，向愚求方。自言猶能細嚼焦脆之物，用湯水徐徐送下，然一口咽之不順，即嘔吐不能再食，且嘔吐之時，帶出痰涎若干。診其脈關後微弱，關前又似滑實，知其上焦痰涎壅滯也。用此湯加邑武帝臺所產旋覆花二錢，連服四劑而愈。

仲景《傷寒論》有旋復代赭石湯，原治傷寒汗吐下解後，心下痞硬，噫氣不除者。周揚俊、喻嘉言皆謂治膈證甚效。拙擬此方，重用赭石，不用旋覆花者，因旋覆花《本經》原言味鹹，今坊間所鬻旋覆花，苦而不鹹，用之似無效驗。惟邑武帝臺為漢武帝築臺望海之處，地多鹹鹵，周遭所產旋覆花，大於坊間鬻者幾一倍。其味鹹而兼辛，以治膈食甚效。夫植物之中，含鹹味者甚少，惟生於鹹鹵之地，故能饒有鹹味，與他處產者迥異。為僻在海濱，無人採取購買，其處居民亦不識為藥物（俗名六月蘭），但取其作柴，惜哉！

或問「《本經》旋覆花，未言苦亦未言辛。藥坊之苦者，既與《本經》之氣味不合，豈武帝臺之辛者，獨與《本經》之氣味合乎」？答曰「古人立言尚簡，多有互文以見義者。《本經》為有文字後第一書，其簡之又簡可知，故讀《本經》之法，其主治未全者，當於氣味中求之；其氣味未全者，即可於主治中求之。旋覆花《本經》載其主結氣，脅下滿，驚悸、除水、去五臟間寒熱，補中下氣。三復《本經》主治之文，則旋覆花當為平肝降氣之要藥，應借辛味，以鎮肝木，其味宜鹹而兼辛明矣。至於苦味，性多令人湧吐，是以旋覆花不宜兼此味也。且其

花開於六月，而能預得七月庚金之氣，故《爾雅》又名之曰「盜庚」。庚者金也，其味辛也，顧其名而思其義，則旋覆花宜鹹而兼辛尤明矣。有用拙擬之方者，有可用之旋覆花，其味不至甚苦，亦可斟酌加人也」。

一人，年四十六，素耽葉子戲，至廢寢食。初覺有氣上衝咽喉，浸至妨礙飲食，時或嘔吐不能下行。其脈弦長而硬，左右皆然。知係衝氣挾胃氣上衝。治以此湯，加武帝臺旋覆花二錢、生芡實四錢，降其衝逆之氣而收斂之，連服十劑而愈。

族家姑，年五旬有六，初覺飲食有礙，後浸增重，惟進薄粥，其脈弦細無力。蓋生平勤儉持家，自奉甚薄，勞心勞力又甚過。其脈之細也，因飲食菲薄而氣血衰，其脈之弦也，因勞心過度而痰飲盛也。姑上有兩姊，皆以此疾逝世，氣同者其病亦同，惴惴自恐不愈。愚毅然以為可治，投以此湯，加白朮二錢、龍眼肉三錢，連服十餘劑痊愈。

堂侄女，年四十八歲，素羸弱多病。侄婿與兩甥皆在外營業，因此自理家務，勞心過度，恆徹夜不寐。於癸卯夏日得膈證。時愚遠出，遂延他醫調治，屢次無效，及愚旋里，病勢已劇。其脈略似滑實，重按無力。治以此湯，加龍眼肉五錢，兩劑見輕，又服十餘劑痊愈。

奉天北鎮縣蕭叟，年六十七歲，友人韓玉書之戚也，得膈證延醫治不愈。遷延五六月，病浸加劇，飲水亦間有難下之時。因至書介紹，來院求為診治。其脈

弦長有力，右部尤甚。知其衝氣上衝過甚，迫其胃氣不下降也。詢其大便，乾燥不易下，多日不行，又須以藥通之。投以參赭培氣湯，赭石改用一兩。數劑後，飲食見順，脈亦稍和，覺胃口仍有痰涎堵塞。為加清半夏三錢，連服十劑，飲食大順，脈亦復常，大便亦較易。遂減赭石之半，又服數劑，大便一日兩次。遂去赭石、柿霜餅、當歸、知母，加於朮三錢，數劑後自言，覺胃中消化力稍弱，此時痰涎已清，又覺胃口似有疙瘩，稍礙飲食之路。遂將於朮改用六錢，又加生雞內金（搗細）二錢，佐於朮以健運脾胃，即藉以消胃口之障礙，連服十餘劑痊愈。

友人吳瑞五（奉天鐵嶺）治姜姓叟，年六十餘，得膈食證。屢次延醫調治，服藥半載，病轉增進。瑞五投以參赭培氣湯，為其脈甚弦硬，知其衝氣上衝，又兼血液枯少也，遂加生芡實以收斂衝氣，龍眼肉以滋潤血液，一劑能進飲食，又連服七八劑，飲食遂能如常。

【附錄】

奉天義縣馬秀三來函：

去歲（乙丑）舍侄洪升患膈食，延醫診治，年餘無效。及病至垂危，諸醫束手無策，有舊戚贈一良方，言係《衷中參西錄》所載之方，名參赭培氣湯，服之立見功效。連服十劑，其病痊愈。

奉天法庫縣萬澤東來函：

本年六月，生在輯安外岔溝緝私局充文牘，有本街邱雲閣之女，年十五，天癸已至，因受驚而經閉。兩閱月，發現心熱、心跳、膨脹等證，經醫治療未效，更添翻胃吐食、便燥、自汗等證。又經兩月，更醫十數，病益劇。適友人介紹為之診視，脈浮數而濡，尺弱於寸，面色枯槁，肢體消瘦，不能起床，蓋兩月間食入即吐，或俟半日許亦必吐出，不受水穀之養，並灼熱耗陰，無怪其支離若是也。思之再四，此必因受驚氣亂而血亦亂，遂至遏其生機，且又在童年，血分未充，即不能應月而潮，久之不下行，必上逆，氣機亦即上逆，況衝為血海，隸屬陽明，陽明有升無降，衝血即隨之上逆，瘀而不行，以至作灼作脹。其心跳者，為上衝之氣血所擾也。其出汗吐食者，為上衝之氣血所迫也。其津液因汗吐過多而消耗，所以大便乾燥也。勢非降逆、滋陰，鎮心、解瘀之藥並用不可。查參赭鎮氣湯及參赭培氣湯二方，實為治斯證之津梁，爰即二方加減，赭石兩半，當歸、淨萸肉、龍骨、牡蠣各五錢，白芍、肉蓯蓉、黨參、天冬、生雞內金各三錢，磨取鐵鏽之水煎服。一劑病似覺甚，病家嘩然，以為藥不對證，欲另延醫。惟介紹人主持甚力，勉又邀生再診，此中喧變生固未之知也。既診脈如故，決無病進之象。後聞有如此情形，生亦莫解。因反覆思之，恍悟此必胃虛已極，兼胃氣上逆過甚，遽投以如此重劑，其胃虛不能運化，氣逆更多衝激，想有一番瞑眩，故病似加重也。於斯將原方減半，煎湯一盅，又分兩次溫服下，並送服柿霜三錢。其第一次服，仍吐藥一半，二次即不吐，服完此劑後，略進薄粥，亦未吐，病家始歡然相信。

又連服三劑，汗與吐均止，心跳膨脹亦大見輕。惟灼熱猶不甚減，遂去淨萸肉、龍骨、牡蠣，加生地、玄參各四錢，服五劑後，灼熱亦愈強半。如此加減服之，一月後遂能起床矣。囑其仍守服原方，至諸病痊愈後可停藥勿服，月事至期亦當自至也。

治吐衄方

【寒降湯】

治吐血、衄血，脈洪滑而長，或上入魚際，此因熱而胃氣不降也，以寒涼重墜之藥，降其胃氣則血止矣。

生赭石（六錢，軋細）、清半夏（三錢）、萸仁（四錢，炒搗）、生杭芍（四錢）、竹茹（三錢）、牛蒡子（三錢，炒搗）、粉甘草（錢半）。

一童子，年十四，陡然吐血，一晝夜不止，勢甚危急，其父通醫學，自設有藥房，亦束手無策，時愚應其鄰家延請，甫至其村，急求為診視。其脈洪長，右部尤重按有力。知其胃氣因熱不降，血隨逆氣上升也。為擬此湯，一劑而愈，又服一劑，脈亦和平。

一人，年十八，偶得吐血證，初不甚劇。因醫者誤治，遂大吐不止。診其脈如水上浮麻，莫辨至數，此虛弱之極候也。若不用藥立止其血，危可翹足而待。遂投以此湯，去竹茹，加生山藥一兩，赭石改用八錢，一劑血止。再診其脈，左右皆無，重按亦不見，愚不禁駭然。詢之心中亦頗安穩，惟覺酸懶無力。忽憶呂滄洲曾治一發斑證，亦六脈皆無，滄洲謂「脈者血之波瀾，今因發斑傷血，血傷不能復作波瀾，是以不見，斑消則脈出矣」。遂用白虎加人參湯，化其斑毒，脈果出（詳案在第七卷青孟湯下）。今此證大吐亡血，較之發斑傷血尤甚，脈之重按不見，或亦血分虛極，不能作波瀾歟？其吐之時，脈如水上浮麻者，或因氣逆



火盛，強迫其脈外現歟？不然聞其診畢還里（相距十里），途中復連連嘔吐，豈因路間失血過多歟？躊躇久之，乃放膽投以大劑六味地黃湯，減茯苓、澤瀉三分之一，又加人參、赭石各數錢，一劑脈出。又服平補之藥二十餘劑，始復初。

《金匱》治心氣不足吐衄，有瀉心湯，大黃與黃連、黃芩並用，後世未窺仲景制方之意，恆多誤解。不知所謂心氣不足者，非不足也，若果不足，何又瀉之？蓋此證因陽明胃腑之熱，上逆衝心，以致心中怔忡不安，若有不足之象。仲景從淺處立說，冀人易曉，遂以心氣不足名之，故其立方，獨本《內經》吐血、衄血，責重陽明不降之旨，用大黃直入陽明之腑，以降其逆上之熱，又用黃芩以清肺金之熱，使其清肅之氣下行，以助陽明之降力，黃連以清心火之熱，使其元陽潛伏，以保少陰之真液，是瀉之實所以補之也。且黃連之性，肥腸止瀉，與大黃並用，又能逗留大黃之力，使之不至滑瀉，故吐衄非因寒涼者，服之莫不立愈。且愈後而瘀血全消，更無他患，真良方也。即使心氣果係不足，而吐衄不止將有立危之勢，先用瀉心湯以止其吐衄，而後從容調補，徐復其正，所謂急則治標，亦醫家之良圖也。乃世人竟畏大黃力猛，不敢輕用，即或用之，病家亦多駭疑。是以愚不得已，擬此寒降湯，重用赭石，以代大黃降逆之力，屢次用之，亦可隨手奏效也。

或問「後世本草謂血證忌用半夏，以其辛而燥也。子所擬寒降湯，治吐衄之因熱者，何以方中仍用半夏，獨不慮其辛燥傷血乎？」答曰「血證須有甄別，若

虛勞咳嗽，痰中帶血，半夏誠為所忌。若大口吐血，或衄血不止，雖虛勞證，亦可暫用半夏以收一時之功，血止以後，再徐圖他治。蓋吐血之證，多由於胃氣挾衝氣上逆，衄血之證，多由於胃氣衝氣上逆，並迫肺氣亦上逆。《內經》〈厥論篇〉曰「陽明厥逆、喘咳身熱、善驚衄、嘔血」。煌煌聖言，萬古不易。是治吐衄者，原當以降陽明之厥逆為主，而降陽明胃氣之逆者，莫半夏若也。

斯更可以前哲之言徵之。黃坤載曰「人之中氣，左右迴旋，脾主升清，胃主降濁。在下之氣不可一刻而不升，在上之氣不可一刻而不降。一刻不升則清氣下陷，一刻不降則濁氣上逆。濁氣上逆，則嘔噦痰飲皆作，一切驚悸、眩暈、吐衄、咳喘、心痞、脅脹、膈噎、反胃，種種諸病於是生焉。膽為少陽之府，屬甲木而化相火，順則下行，而溫腎水，相火寧秘，故上清而下暖；逆則上行，出水府而升火位，故下寒而上熱。然甲木所以息息歸根溫水臟者，緣於胃腑戊土之下降。戊土不降，甲木失根，神魂飄蕩，此驚悸、眩暈所由來也。二火升炎，肺金被克，此燥渴、煩躁所由來也。膽胃上逆，木土壅迫，此痞悶、膈噎所由來也。凡此諸證，悉宜溫中燥土之藥，加半夏以降之。其火旺金熱者，須用清斂金火之品，然肺為病標，胃為病本，胃氣不降，金火無下行之路也。半夏辛燥開通，沉重下達，人胃腑而降逆氣。胃土右轉，濁痰掃蕩，肺腑沖和，神氣歸根，綿綿不竭矣。血原於臟而統於經，升於肝而降於肺，肝脾不升，則血病下陷，肺胃不降，則血病上逆。緣中脘濕寒，胃土上鬱，濁氣衝塞，肺氣隔礙，收令不行，是以吐衄。此

與虛勞驚悸，本屬同原。未有虛勞之久不生驚悸，驚悸不止不至吐衄者。當溫中燥土，暖水斂火，以治其本，而用半夏降攝胃氣，以治其標。庸工以為陰虛火動，不宜半夏，率以清涼滋潤之法，刊諸紙素，千載一轍，四海同風。《靈樞》半秫米之奧旨（治目不得瞑在《邪客篇》），鮮有解者、可勝歎哉！

按：因寒因熱，皆可使胃氣不降，然因熱，胃氣不降者，人猶多知之，因寒，胃氣不降者，則知者甚鮮。黃氏論胃氣不降，專主因寒一面，蓋有所感觸而言也。曾有一少婦，上焦煩熱，不能飲食，頻頻咳吐，皆係稀涎，脈象弦細無力。知係脾胃濕寒，不能運化飲食下行，致成留飲為恙也。詢其得病之初，言偶因咳嗽懶食，延本處名醫投以栝蒌、貝母、麥冬之類，旋愈旋即反覆，服藥月餘竟至如此。遂為開苓桂朮甘湯，加乾薑、半夏（細觀第三卷理飲湯後跋語自知），且細為剖析用藥之意。及愚旋里，其藥竟不敢服，復請前醫治之，月餘而亡。夫世之所謂名醫者，其用藥大抵如此，何不讀黃氏之論，而反躬自省也哉！

門人高如璧實驗一方，赭石、滑石等分研細，熱時新汲井泉水送服，冷時開水送服，一兩或至二兩，治吐衄之因熱者甚效。如璧又在保陽，治一吐血證甚劇者，諸藥皆不效，診其脈浮而洪，至數微數，重按不實。初投以拙擬保元寒降湯（在前），稍見效，旋又反覆。如璧遂放膽投以赭石二兩、臺參六錢、生杭芍一兩，一劑而愈。

唐容川曰「平人之血暢行脈絡，充達肌膚，是謂循經，謂循其經之常道也。一旦不循其常，溢出於肺胃之間，隨氣上逆，於是吐出。蓋人身之氣游於血中而出於血外，故上則出為呼吸，下則出為二便，外則出於皮毛而為汗。其氣沖和，則氣為血之帥，血隨之而運行；血為氣之守，氣得之而靜謐。氣結則血凝，氣虛則血脫，氣迫則血走，氣不止而血欲止，不可得矣。方其未吐之先，血失其經常之道，或由背脊走入膈間，由膈溢入胃中。病重者其血之來，辟辟彈指，漉漉有聲，病之輕則無聲響。故凡吐血胸背必疼，是血由背脊而來，氣迫之行，不得其和，故見背疼之證。又或由兩脅下走油膜人小腸，重則潮鳴有聲，逆入於胃以致吐出，故凡失血復多腰脅疼痛之證。此二者來路不同，治法亦異。由背上來者，以治為主，由脅下來者，以治肝為主。蓋肺為華蓋，位在背與胸膈，血之來路，既由其界分溢而出，自當治肺為是；肝為統血之臟，位在脅下，血從其地而來，則又以治肝為是。然肝肺雖係血之來路，而其吐出，實則胃主之也。凡人吐痰吐血，皆胃之咎。血雖非胃所主，然同是吐證，安得不責之於胃。況血之舊宿在於血海，衝為血海，其脈隸於明，未有衝氣不逆上而血逆上者也。仲景治血以治衝為要。衝脈隸於陽明，治陽明即治衝也。陽明之氣下行為順，今乃逆吐，失其下行之令，急調其胃，使氣順吐止，則血不致奔脫矣。此時血之原委不暇究治，惟以止血為第一要法。血止之後，其離經而未吐出者，是為瘀血。既與好血不相合，反與好血不相能，或壅而成熱，或變而成勞，或結癥成刺疼，日久變證未可預料，

必亟為消除，以免後來諸患，故以消瘀為第二法。止吐消瘀之後，又恐血再潮動，則須用藥安之，故以寧血為第三法。邪之所湊，其正必虛，去血既多，陰無有不虛者。陰者陽之守，陰虛則陽無所附，久且陽隨而亡，故又以補虛為收功之法。四者乃通治血證之大綱也。」

按：此論甚精當。愚向擬治吐衄諸方，猶未見唐氏書，今補錄之以備參觀。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

天津裕牲堂藥局同事曹希賢，年二十五歲，自春日患吐血證，時發時愈，不以介意。至仲冬，忽吐血較前劇，咳嗽音啞，面帶貧血，胸中煩熱，食少倦怠，屢治罔效，來寓求診。左脈細弱，右脈則弦而有力，知其病久生熱，其胃氣因熱上逆，血即隨之上升也。為開寒降湯方，為其咳嗽音啞，加川貝三錢，連服二劑，病大輕減。又服二劑，不但吐血已止，而咳嗽音啞諸病皆愈。

安徽當陽吳宏鼎來函：

孟夏二十三日，赤日晴天，鑠人臟腑。有陶國榮者，因業商，斯日出外買糧，午後忽於路中患吐血，迨抵家尚嘔不止，凌晨來院求治。診其脈象洪滑，重按甚實，知其為熱所迫而胃氣不降也。因夫子嘗推《金匱》瀉心湯為治吐衄良方，遂俾用其方煎湯，送服黑山樞紐末二錢。服後病稍愈而血仍不止，診其脈仍然有力，

遂為開寒降湯，加廣三七細末三錢，俾將寒降湯煎一大盅，分兩次將三七細末送服。果一劑而愈。

【溫降湯】

治吐衄脈虛濡而遲，飲食停滯胃口，不能消化，此因涼而胃氣不降也，以溫補開通之藥，降其胃氣，則血止矣。

白朮（三錢）、清半夏（三錢）、生山藥（六錢）、乾薑（三錢）、生赭石（六錢，軋細）、生杭芍（二錢）、川厚朴（錢半）、生薑（二錢）。

歲在壬寅，邑之北境，有學生劉玉良者，年十三歲，一日之間衄血四次。診其脈甚和平，詢其心中不覺涼熱。因思吐衄之證熱者居多，且以童子少陽之體，時又當夏令，遂略用清涼止血之品。衄益甚，脈象亦現微弱，知其胃氣因寒不降，轉迫血上逆而為衄也。投以拙擬溫降湯，一劑即愈。隔數日又有他校學生，年十四歲，吐血數日不愈，其吐之時，多由於咳嗽。診其脈，甚遲濡，右關尤甚。疑其脾胃虛寒，不能運化飲食，詢之果然。蓋吐血之證多由於胃氣不降，飲食不能運化，胃氣即不能下降。咳嗽之證，多由於痰飲入肺。飲食遲於運化，又必多生痰飲，因痰飲而生咳嗽，因咳嗽而氣之不降者更轉而上逆，此吐血之所由來也。亦投以溫降湯，一劑血止，接服數劑，飲食運化，咳嗽亦愈。

或問「此湯以溫降為名，用藥宜熱不宜涼矣。乃既用乾薑之熱，復用芍藥之涼，且用乾薑而更生薑者何也？」答曰「脾胃與肝膽，左右對待之臟腑也。肝膽屬木，中藏相火，其性恆與熱藥不宜。用芍藥者，所以防乾薑之熱力入肝也。且肝為藏血之臟，得芍藥之涼潤者以養之，則寧謐收斂，而血不妄行。更與生薑

同用，且能和營衛，調經絡，引血循經，此所以用乾薑又用生薑也。《內經》〈厥論篇〉謂陽明厥逆衄血，所謂陽明者，指胃腑而言也，所謂厥逆者，指胃腑之氣上行而言也。蓋胃以消化飲食，傳送下行為職，是以胃氣以息息下行為順，設或上行則為厥逆。胃氣厥逆，可至衄血、嘔血，因血隨胃氣上行也。然胃氣厥逆因熱者固多，因寒者亦間有之。

近在瀋陽論及此事，李子林謂，從前有老醫徐敬亭者，曾用理中湯治癒歷久不愈之吐血證，是吐血誠有因寒者之明徵也。然徐敬亭但用理中湯以暖胃補胃，而不知用赭石、半夏佐之以降胃氣，是處方猶未盡善也。特是藥局製藥，多不如法，雖清半夏中亦有礬，以治吐衄及嘔吐，必須將礬味用微溫之水淘淨。淘時，必於方中原定之份量外，多加數錢，以補其淘去礬味所減之份量及藥力。又薛立齋原有血因寒而吐者，治用理中湯加當歸之說。特其因寒致吐血之理，未嘗幫助，是以後世間有駁其說者。由斯知著醫書者宜將病之原因仔細發透，俾讀其書者易於會悟，不至生疑為善。不惟吐衄之證有因寒者，即便血之證亦有因寒者，特其證皆不多見耳。

鄰村高某，年四十餘，小便下血久不愈，其脈微細而遲，身體虛弱，惡寒，飲食減少。知其脾胃虛寒，中氣下陷，黃坤載所謂「血之亡於便溺者，太陰不升也」。為疏方，乾薑、於朮各四錢，生山藥、熟地黃各六錢，烏附子、炙甘草各



分也。三錢。煎服一劑，血即見少。連服十餘劑，痊愈。此方中不用肉桂者，恐其動血。

【清降湯】

治因吐衄不止，致陰分虧損，不能潛陽而作熱，不能納氣而作喘。甚或衝氣因虛上干，為呃逆、為眩暈。心血因虛甚不能內榮，為怔忡、為驚悸不寐。或咳逆、或自汗諸虛證蜂起之候。

生山藥（一兩）、清半夏（三錢）、淨萸肉（五錢）、生赭石（六錢，軋細）、牛蒡子（二錢，炒搗）、生杭芍（四錢）、甘草（錢半）。

【保元寒降湯】

治吐血過多，氣分虛甚，喘促咳逆，血脫而氣亦將脫。其脈上盛下虛，上焦兼煩熱者。

生山藥（一兩）、野臺參（五錢）、生赭石（八錢，軋細）、知母（六錢）、大生地（六錢）、生杭芍（四錢）、牛蒡子（四錢，炒搗）、三七（二錢，細軋藥汁送服）。

一叟，年六十四，素有勞疾，因勞嗽太甚，嘔血數碗。其脈搖搖無根，或一動一止，或二三動一止。此氣血虛極，將脫之候也。診脈時見其所嗽吐者，痰血相雜。詢其從前嘔吐之時心中發熱。為制此湯，一劑而血止，又服數劑脈亦調勻。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

河間裘幻因，年二十八歲。患咳嗽吐血，且咯吐甚多，氣分太虛，喘息迫促，上焦煩熱，其脈大而無力，右部尤甚，蓋血脫而氣亦將脫也。急用保元寒降湯，加青竹茹、麥門冬各三錢。一劑血止。至第二劑，將臺參五錢易為西洋參一錢，服之而愈。方病相投，效如影響，洵不誤也。

【保元清降湯】

治吐衄證，其人下元虛損，中氣衰憊，衝氣胃氣因虛上逆，其脈弦而硬急，轉似有力者。

野臺參（五錢）、生赭石（八錢，軋細）、生芡實（六錢）、生山藥（六錢）、生杭芍（六錢）、牛蒡子（二錢，炒搗）、甘草（錢半）

友人毛仙閣曾治一少年吐血證。其人向經醫者治癒，旋又反覆。仙閣診其脈弦而有力，知其為衝胃之氣上逆也。遂於治吐血方中，重用半夏、赭石以降逆，白芍、牡蠣（不煨）以斂衝瀉熱，又加人參以補其中氣，使中氣健旺以斡旋諸藥成功。有從前為治癒之醫者在座，頗疑半夏不可用，仙閣力主服之。一劑血止，再劑脈亦和平，醫者訝為異事。仙閣曉知曰「此證乃下元虛損，衝氣因虛上逆，並迫胃氣亦上逆，脈似有力而非真有力，李士材《四字脈訣》所謂「直上直下，衝脈昭昭者」，即此謂也。若誤認此脈為實熱，而恣用苦寒之藥涼其血分，血分因涼而凝，亦可止而不吐，而異日瘀血為恙，竟成勞瘵者多矣。今方中用赭石、半夏以鎮衝氣，使之安其故宅，而即用白芍、牡蠣以斂而固之，使之永不上逆。夫血為氣之配，氣為血之主，氣安而血自安矣，此所以不治吐血，而吐血自止也。況又有人參之大力者，以參贊諸藥，使諸藥之降者、斂者，皆得有所憑藉以成功乎」。醫者聞之，肅然佩服，以為聞所未聞云。

【秘紅丹】

治肝鬱多怒，胃鬱氣逆，致吐血、衄血及吐衄之證，屢服他藥不效者，無論因涼因熱，服之皆有捷效。

川大黃（一錢細末）、油肉桂（一錢細末）、生赭石（六錢細末）。  
上藥三味，將大黃、肉桂末和勻，用赭石末煎湯送下。

一婦人，年近三旬，咳嗽痰中帶血，劇時更大口吐血，常覺心中發熱。其脈一分鐘九十至，按之不實，投以滋陰寧嗽降火之藥數劑無效。因思此證，若用藥專止其嗽，嗽愈其吐血亦當愈。遂用川貝九錢，煎取清湯四茶盅，調入生山藥細末一兩，煮作稀粥，俾於一日連進二劑，其嗽頓止（此方可為治虛嗽良方），吐血證亦遂愈。數日後，覺血氣上潮，肺復作癢而嗽，因此又復吐血。自言夜間睡時，常作生氣惱怒之夢，怒極或夢中哭泣，醒後必然吐血。據所云云，其肝氣必然鬱遏，遂改用舒肝（連翹、薄荷不可多用）瀉肝（龍膽、棟子）之品，而以養肝（柏子仁、生阿膠）鎮肝（生龍骨、生牡蠣）之藥輔之，數劑病稍輕減。而猶間作惱怒之夢，夢後仍復吐血。欲辭不治，病家又信服難卻，再四躊躇，恍悟平肝之藥，以桂為最要，肝屬木，木得桂則枯也（以桂作釘釘樹，其樹立枯），而單用之則失於熱。降胃止血之藥，以大黃為最要（觀《金匱》治吐衄有瀉心湯重用大黃可知），胃氣不上逆，血即不逆行也，而單用之又失於寒。若二藥並用，則寒熱相濟，性歸和平，降胃平肝，兼顧無遺。況俗傳方，原有用此二藥為散，

治吐血者（詳後化療理血湯下），用於此證當有捷效。而再以重墜之藥輔之，則力專下行，其效當更捷也。遂用大黃、肉桂細末各一錢和勻，更用生赭石細末煎湯送下，吐血頓愈，惱怒之夢，亦從此不作。後又遇吐血者數人，投以此方，皆隨手奏效。至其人身體壯實而暴得吐血者，又少變通其方，大黃、肉桂細末各用錢半，將生赭石細末六錢與之和勻，分三次服，白開水送下，約點半鐘服一次（生赭石可以研末服之，理詳前參赭鎮氣湯下）。

按：肉桂味辣而兼甜，以甜勝於辣者為佳，辣勝於甘者次之。然約皆從生旺樹上取下之皮，故均含有油性，皆可入藥，至其薄厚不必計也，若其味不但不甚甜，且不甚辣，又兼甚乾枯者，是係枯樹之皮，不可用也。

【二鮮飲】

治虛勞證，痰中帶血。

鮮茅根（四兩，切碎）、鮮藕（四兩，切片）。

煮汁常常飲之，旬日中自愈。若大便滑者，茅根宜減半。再用生山藥細末兩許，調入藥汁中，煮作茶湯服之。

茅根善清虛熱而不傷脾胃，藕善化瘀血而兼滋新血，合用之為函養真陰之妙品。且其形皆中空，均能利水，血亦水屬，故能引汜濫逆上之血徐徐下行，安其部位也。

堂兄贊宸，年五旬，得吐血證，延醫治療不效。脈象滑數，搖搖有動象，按之不實。時愚在少年，不敢輕於疏方，因擬此便方，煎湯兩大碗，徐徐當茶溫飲之，當日即見愈，五六日後病遂脫然。自言未飲此湯時，心若虛懸無著，既飲後，覺藥力所至，若以手按心，使復其位，此其所以愈也。

按：茅根遍地皆有，初秋末，其根甚甜，用之尤佳。至於藕以治血證，若取其化瘀血，則紅蓮者較優，若用以止吐衄，則白蓮者勝於紅蓮者。

【三鮮飲】

治同前證兼有虛熱者。即前方加鮮小薊根二兩。

京都名薊門，故畿內之地，各處皆有大、小薊。乃以本地土物，醫者猶多不能辨認。恒以大薊為小薊，小薊為大薊，殊屬可怪。夫二薊之形象，最易辨別。大薊葉縐，初貼地而生，狀類蒲公英。嫩時可生啖當菜，老則自葉心出莖，高二三尺，莖上亦有小葉，花黃色亦如蒲公英，俗名曲曲菜。小薊邊有芒刺（故亦名刺薊）。嫩時即生莖，其葉在莖上，高尺許，花紫色狀如小絨球，嫩時可作羹，俗名青青菜，亦名刺兒菜。大、小薊皆能清血分之熱，以止血熱之妄行，而小薊尤勝。凡因血熱妄行之證，單用鮮小薊根數兩煎湯，或榨取其自然汁，開水沖服，均有捷效，誠良藥也。醫者多視為尋常土物而忽之，可謂貴耳賤目矣。

小薊莖中生蟲，即結疙瘩如小棗。若取其鮮者十餘枚搗爛，開水沖服，治吐衄之因熱者甚效。鄰村李心泉，愚之詩友也。曾告愚曰「余少年曾得吐血證，屢次服藥不效，後得用小薊疙瘩便方，服一次即愈。因呼之謂清涼如意珠，真藥中之佳品也」。



【化血丹】

治咳血，兼治吐衄，理瘀血，及二便下血。

花蕊石（三錢，存性）、三七（二錢）、血餘（一錢，存性）。

共研細，分兩次，開水送服。

世醫多謂三七為強止吐衄之藥，不可輕用，非也。蓋三七與花蕊石，同為止血之聖藥，又同為化血之聖藥，且又化瘀血而不傷新血，以治吐衄，愈後必無他患。此愚從屢次經驗中得來，故敢確實言之。即單用三七四五錢，或至一兩，以治吐血、衄血及大、小便下血皆效。常常服之，並治婦女經閉成瘕。至血餘，其化瘀血之力不如花蕊石、三七，而其補血之功則過之。以其原為人身之血所生，而能自還原化，且煨之為炭，而又有止血之力也。

曾治一童子，年十五，大便下血，數月不愈，所下者若爛炙，雜以油膜，醫者諉謂不治。後愚診視其脈，弦數無力。俾用生山藥軋細作粥，調血餘炭六七分服之，日二次，旬日痊愈。

作血餘炭法：用壯年剃頭的短髮，洗淨剪碎，以鍋炒至融化，晾涼軋細，過羅服之。

【補絡補管湯】

治咳血吐血，久不愈者。

生龍骨（一兩，搗細）、生牡蠣（一兩，搗細）、萸肉（一兩，去淨核）、三七（二錢，研細藥汁送服）。

服之血猶不止者，可加赭石細末五六錢。

一婦人，年三十許，咳血三年，百藥不效，即有愈時，旋復如故。後愚診視，其夜間多汗，先用龍骨、牡蠣、萸肉各一兩煎服，以止其汗。一劑汗止，再服一劑，咳血之病亦愈。自此永不反復。後又治一少年，或旬日，或浹辰之間，必吐血數口，浸至每日必吐，屢治無效。其脈近和平，微有乳象，亦治以龍骨、牡蠣、萸肉各一兩，三劑而愈。

張景岳謂「咳嗽日久，肺中絡破，其人必咳血」。西人謂「胃中血管損傷破裂，其人必吐血」。龍骨、牡蠣、萸肉，性皆收澀，又兼具開通之力（三藥之性詳第一卷既濟湯、來復湯與第四卷理鬱升陷湯，第八卷清帶湯下），故能補肺絡，與胃中血管，以成止血之功，而又不至有遽止之患，致留瘀血為恙也。又佐以三七者，取其化腐生新，使損傷之處易愈，且其性善理血，原為治衄之妙品也。

咳血之原由於肺，吐血之原由於胃，人之所共知也。而西人於吐血，論之尤詳。其說謂「胃中多回血管，有時潰裂一二處而血出，其故或因胃本體自生炎證，爛壞血管，或因跌打外傷，胃中血管斷裂，其血棕黑而臭穢，危險難治，但此類

甚少。常見之證，大概血管不曾潰裂，其血亦可自管中溢出，其血多帶黑色。因回血管之血色原紫黑，而溢出在胃，胃中酸汁又能令血色變黑也。若血溢自胃中血管，即時吐出，其色亦可鮮紅。其病原，或因胃致病，或因身虛弱血質稀薄，皆能溢出。有胃自不病，或因別經傳入於胃，如婦女倒經，是子宮之血傳入於胃。又如肝脾脹大，血不易通行，回血管滿溢，入胃則吐出，入大小腸則便出。便與吐之路不同，其理一也。

吐血紫黑者，方書多謂係瘀血，愚向疑其不然，又不能確其果係何故。今觀此論，心始昭然。又論中所謂回血管，乃導回紫血人心之管也。管內有門，門無定處，其體比脈管薄，其徑稍大，有血則圓，無血則扁。總管二支，由心右上房而出。一支向下以接下身臟腑兩足之回血，一支向上以接頭腦兩手之回血，散佈小支，一如脈管之狀。但脈管深居肉內者多，而回血管深淺皆有，藍色無脈者是也。另有一種，名曰微絲血管，目力不能見，以鏡顯之，見密結如網，骨肉內外遍體皆然，與血脈管、回血管兩尾相通，故赤紫兩血通行無礙。夫血以赤色為正，其有紫色者何？凡血運行，由心左下房發源，直出血脈總管，流布周身，長骨肉，養身命。然漸行漸改其性，迨由微絲血管入回血管之中，其色遂變為紫矣。由是紫血由回血管行近至心，流歸總血管，以達心右上房，轉落右下房。右下房有大血管一支，長寸許，即分為二，以入肺左右葉，運行肺中，隨呼氣吐出碳氣，復

吸氣納進氧氣，其色復變為赤。即由肺血管（左右各二支）回心左上房，轉落左下房，復出血脈總管，往來運行，如環無端。

按：化學家謂空氣中所含之氣，大要可分為二種。一為氧氣，一為氮氣。氮氣居百分之七十九，氧氣居百分之二十一。氧氣者，養人之生氣也。然氮氣多而氧氣少者，誠以氧氣濃烈，必須以氮氣淡之，而後得其和平。人之百體，日有消長，其合骨肉用者，固賴血以生之，不合骨肉用者，又須血以出之。何以血行漸改變為紫色，緣其中有碳氣也。碳氣者，乃身體中無用之物，雜化為氣，與氧氣合即有毒，與炭氣同類，故曰碳氣。凡人一呼一吸，合為一息，呼者，吐碳氣也，吸者，吸氧氣也。氧氣入血則赤，赤為正血，碳氣入血則紫，紫為壞血。故紫血必須入肺，運至氣胞之上，泄碳氣於胞內，氣管遞而出之，是為一呼。碳氣既出，復遞生氣以人，直抵胞內，血遂攝之，是為一吸。呼吸一停，轉流改換，人始無病。

或問「西人回血管之說，甚微妙矣，然其說可確信乎？」答曰「其說確有憑據，以其雖為行血之管，而按之無動脈也。心體常動，每呼吸之間，約動四次。每心一動，即激發新血注於脈管中，而周身之脈管，皆隨之一動。特其管多深藏肉裡，故人周身動脈處無多。至回血管，多淺在肉外，微透青色，世俗誤呼為青筋者皆是，雖密絡周身，而按之皆不動。與血脈管之行血，實有進退之分。血脈管鼓進新血，隨心力運行，故按之常動。回血管收回陳血，不隨心力運行，故按

之不動。蓋運久之血，中含碳氣，漸變紫色，賴心部收回，注之於肺，呼出碳氣，吸進氧氣，仍變為赤，此造化之神妙也。若心於回血管，亦鼓之使動，則其氣機外向，即不能收回陳血。是以不借心力鼓之，惟借血脈管之餘力，透過微絲血管以運行之，如微弱之水，涓涓徐流，不起波瀾，以轉回於心部。故曰因其按之無動脈，而可決為回血管也。向嘗疑治痧證者，刺血管放血，其血莫不發紫。若謂其證因熱甚而血發紫，何以因寒之證其血亦紫，且周身之血既發紫，何以止刺其數處出血少許，病或即愈。今乃知其所刺者皆回血管，其出血無多而病可愈者，放出碳氣之力也」。

或又問「西人回血管之說既可信，則其肺呼出碳氣，吸進氧氣，血仍變赤，復歸於心之說，亦必可信，何以古聖賢皆未言及」？答曰「此理《內經》言之，扁鵲《難經》亦言之，而《難經》較詳。其書第一節曰『十二經皆有動脈，獨取寸口，以決五臟六腑，死生吉凶之法，何謂也？然（答詞也），寸口者脈之大會，手太陰之動脈也。人一呼脈行三寸，一吸脈行三寸，呼吸定息，脈行六寸。人一晝夜凡一萬三千五百息，脈行五十度（《內經》謂十六丈二尺為一度）周於身，水下百刻。榮衛行陽二十五度，行陰二十五度，為一周也。故五十度復會於手太陰。寸口者，五六腑之所終始，故取法於寸口也』。蓋人之臟腑，皆有血脈管與回血管。其回血管之血，由心至肺將碳氣呼出，是諸臟腑之回血管至此而終也。迨吸進氧氣，其血仍赤，歸於心而散於諸臟腑，是諸臟腑之血脈管自此而始也。

故曰五臟六腑之所終始也。為肺能終始諸臟腑，是以諸臟腑之病，可於肺之寸口動脈候之，而寸口之動脈，遂可分其部位而應諸臟腑矣。特古書語意渾含，有待於後世闡發耳」。

或又問「回血管之說，證以秦越人《難經》益可確信。然據西人之說，謂吐紫黑成塊者，亦係回血管之血，何以人之腑中或脅下，素有瘀積，偶有因吐紫黑成塊之血而愈者？答曰「此等證，西人亦嘗論及，謂有因肝脾瘀血及他處瘀血由胃而出，而胃自不病者，吐後即覺鬆適，所謂以病醫病也。然他處瘀血，既假道於胃而出，雖云胃自不病，而胃中回血管必有潰裂之處，亦宜治以化瘀，兼收澀之藥。濃煎龍骨牡蠣湯，送下三七細末，可以頃刻奏效。若但認為瘀血，任其傾吐，未有不危殆者。此有關性命之證，醫者切宜知之」。

或又問「據西人之說，是他經之血，皆可以借徑於胃而吐出。至咳血出於肺，而他處之血，亦或借徑於肺而上行否？」答曰「此問甚精微，然可實指而確論之也。吾友蘇明陽先生，當世之哲學士也（著有天地新學說）。嘗告愚曰「肺管下行連心、連肝及膽。其相連之處，心及肝膽，皆有門與之相通，再下行至下，連於氣海。氣海即《醫林改》謂其狀若倒提雞冠花者是也。然相連之處，仍有膜膈之在若通若不通之間。因氣海之中，所存者元氣，若與此管不通，則元氣不能上達，若與此管通，元氣又不能存蓄也。氣海之下，又有管與之相連，亦在若通若不通之間。其管由氣海之下，轉而上行，循脊樑上貫腦部，復轉而下行。氣海上

之管，任脈也，下之管，督脈也。人當未生之時，息息得母之氣化，以貫注於氣海。迨其氣化充滿，即衝開督任二脈，以灌溉諸臟腑，此人之先天，督任所以常通也。既生之後，氣海之來源既停，其中所存之元氣，遂蘊蓄其中，以為百年壽命之根，而其所以培養諸臟腑者，端藉呼吸與飲食之力，此人之後天，督任所以不通也。愚曾即其言驗諸物類，剖解之時，其形跡亦分毫不謬。由是觀之，是心肝之血皆可由喉出也。任脈在下焦，又與衝脈血海相通，斯下焦之血亦可由喉出也。夫喉為肺管，其正支入肺，其分支即為任脈之管。凡血自任脈上溢而出於喉者，雖非借徑於肺，與借徑於肺者，無異也。再者，人之咳嗽不已則氣必上升，而血即可隨之上。其血因嗽可從肺管上溢，久之亦可因嗽自胃管上溢，故凡自上失血之證兼咳嗽者，無論咳血、吐血、衄血，皆當急治癒其咳嗽，為要著也。

或問「《內經》謂『陽明厥逆，則吐衄』。西人謂『胃中血管損傷破裂出血，則吐血』。此二說亦相通乎？」答曰「陽明厥逆，胃腑氣血必有膨脹之弊，此血管之所以易破也。降其逆氣，血管之破者自閉。設有不閉，則用龍骨、牡蠣諸收澀之藥以補之，防其潰爛，佐以三七、乳香、沒藥諸生肌之品以養之。此拙擬補絡補管湯所以效也。設使陽明未嘗厥逆，胃中血管或因他故而破裂，則血在胃中，亦恆隨飲食下行自大便出，不必皆吐出也。」

此方原無三七，有乳香、沒藥各錢半。偶與友人景山談及，景山謂「余治吐血，亦用兄補絡補管湯，以三七代乳香、沒藥，則其效更捷」。愚聞之遂欣然易之。

景山又謂「龍骨、牡蠣能收斂上溢之熱，使之下行，而上溢之血，亦隨之下行歸經。至莢肉為補肝之妙藥，凡因傷肝而吐血者，莢肉又在所必需也。且龍骨、牡蠣之功用神妙無窮，即脈之虛弱已甚，日服補藥毫無起象，或病虛極不受補者，投以大劑龍骨、牡蠣，莫不立見功效，餘亦不知其何以能然也」。愚曰「人身陽之精為魂，陰之精為魄。龍為天地元陽所生（理詳第五卷從龍湯下），故能安魂，牡蠣為水之真陰結成（海氣結為蚝山，即牡蠣山），故能強魄。魂魄安強，精神自足，虛弱自愈也。是龍骨、牡蠣，固為補魂魄精神之妙藥也。」

邑有吐血久不愈者，有老醫於平津先生，重用赤石脂二兩，與諸止血藥治之，一劑而愈。後其哲嗣錦堂向愚述其事，因詰之曰「重用赤石脂之義何據」？錦堂曰「凡吐血多因虛火上升，然人心中之火，亦猶爐中之火，其下愈空虛，而火上升之力愈大，重用赤石脂，以填補下焦，虛火自不上升矣」。愚曰「兄之論固佳，然猶有剩義。赤石脂重墜之力，近於赭石，故能降衝胃之逆，其粘澀之力，近於龍骨、牡蠣，故能補血管之破。兼此二義，重用石脂之奧妙，始能盡悉。是以愚遇由外傷內，若跌碰致吐血久不愈者，料其胃中血管必有傷損，恆將補絡補管湯去莢肉，變湯劑為散劑，分數次服下，則龍骨、牡蠣，不但有粘澀之力，且較煎



湯服者，更有重墜之力，而吐血亦即速愈也」。錦堂聞之欣然曰「先嚴用此方時，我年尚幼，未知詳問，今聞兄言貺我多矣」。

曾治滄州馬氏少婦，咳血三年，百藥不效，即有愈時，旋復如故。後愚為診視，其夜間多汗，遂用淨萸肉、生龍骨、生牡蠣各一兩，俾煎服，擬先止其汗，果一劑汗止，又服一劑咳血亦愈。蓋從前之咳血久不愈者，因其肺中之絡，或胃中血管有破裂處，萸肉與龍骨、牡蠣同用以澀之斂之，故咳血亦隨之愈也。又治本村表弟張權，年三十許，或旬日，或浹辰之間，必吐血數口，浸至每日必吐，亦屢治無效。其脈近和平，微有芤象，亦治以此方，三劑痊愈。後又將此方加三七細末三錢，煎藥湯送服，以治咳血吐血久不愈者，約皆隨手奏效。若遇吐血之甚者，宜再加赭石五六錢，與此湯前三味同煎湯，送服三七細末更效。

邑張某家貧傭力，身挽鹿車運貨遠行，因枵腹努力太過，遂致大口吐血。臥病旅邸，恐即不起，意欲還里，又乏資斧。乃勉強徒步徐行，途中又復連吐不止，目眩心慌，幾難舉步。腹中覺饑，懷有乾餅，又難下嚥。偶拾得山楂十數枚，遂和乾餅食之，覺精神頓爽，其病竟愈。蓋酸者能斂，而山楂則酸斂之中，兼有化痰之力。與拙擬補絡補管湯之意相近，故獲此意外之效也。

【附錄】

江蘇崇明縣蔡維望來函：

回憶畢業中學時，勞心過度，致患吐血，雖家祖世醫，終難療治。遍求名醫診治，亦時止時吐。及肄業大學時，吐血更甚，醫者多勸輟學靜養，方可望痊。乃輟學家居，服藥靜養，病仍如舊。計無所施，自取數世所藏醫書遍閱之，又汗牛充棟，渺茫無涯。況玉石混雜，瑜瑕莫辨，徒增望洋之歎也。幸今秋自周小農處購得《衷中參西錄》，閱至吐衄方補絡補管湯，知為治僕病的方。抄出以呈家祖父，命將藥劑減半煎服，頗見效驗。遂放膽照原方，兼取寒降湯之義加赭石六錢，連服三劑痊愈。從前半月之間，必然反覆，今已月餘安然無恙，自覺身體漸強，精神倍加。

【化療理膈丹】

治力小任重，努力太過，以致血瘀膈上，常覺短氣。若吐血未癒者，多服補藥或涼藥，或多用諸藥炭，強止其血，亦可有此病，皆宜服此藥化之。

三七（二錢，搗細）、鴨蛋子（四十粒，去皮）。

上藥二味，開水送服，日兩次。凡服鴨蛋子，不可嚼破，若嚼破即味苦不能下嚥，強下嚥亦多嘔出。

一童子，年十四，夏日牧牛野間。眾牧童嬉戲，強屈其項背，納頭中，倒縛其手，置而弗顧，戲名為看瓜。後經人救出，氣息已斷。俾盤膝坐，捶其腰背，多時方蘇。惟覺有物填塞胸膈，壓其胸中大氣，妨礙呼吸，劇時氣息仍斷，兩目上翻，身軀後挺，此必因在中悶極之時努掙不出，熱血隨努掙之氣力上溢，而停於膈上也。俾單用三七三錢搗細，開水送服，兩次痊愈。

一人，年四十七，素患吐血。醫者謂其虛弱，俾服補藥，連服十餘劑，覺胸中發緊，而血益不止。後有人語以治吐血便方，大黃、肉桂各五分軋細，開水送服，一劑血止。然因從前誤服補藥，胸中常覺不舒，飲食減少，四肢酸懶無力。愚診之，脈似沉牢，知其膈上瘀血為患也。俾用鴨蛋子五十粒去皮，糖水送服，日兩次，數日而愈。

治消渴方

【玉液湯】

治消渴。消渴，即西醫所謂糖尿病，忌食甜物。

生山藥（一兩）、生黃耆（五錢）、知母（六錢）、生雞內金（二錢，搗細）、葛根（錢半）、五味子（三錢）、天花粉（三錢）。

消渴之證，多由於元氣不升，此方乃升元氣以止渴者也。方中以黃耆為主，得葛根能升元氣。而又佐以山藥、知母、花粉以大滋真陰。使之陽升而陰應，自有雲行雨施之妙也。用雞內金者，因此證尿中皆含有糖質，用之以助脾胃強健，化飲食中糖質，為津液也。用五味者，取其酸收之性，大能封固腎關，不使水飲急於下趨也。

方書消證，分上消、中消、下消。謂上消口乾舌燥，飲水不能解渴，係心移熱於肺，或肺金本體自熱不能生水，當用人參白虎湯；中消多食猶饑，係脾胃蘊有實熱，當用調胃承氣湯下之；下消謂飲一斗溲亦一斗，係相火虛衰，腎關不固，宜用八味腎氣丸。

按：白虎加人參湯，乃《傷寒論》治外感之熱，傳入陽明胃腑，以致作渴之方，方書謂上消者宜用之，此借用也。愚曾試驗多次，然必胃腑兼有實熱者，用之方的。中消用調胃承氣湯，此須細為斟酌，若其右部之脈滑而且實，用之猶可，

若其人飲食甚勤，一時不食，即心中怔忡，且脈象微弱者，係胸中大氣下陷，中氣亦隨之下陷，宜用升補氣分之藥，而佐以收澀之品與健補脾胃之品，拙擬升陷湯（在第四卷）後有治驗之案可參觀。若誤用承氣下之，則危不旋踵。至下消用八味腎氣丸，其方《金匱》治男子消渴，飲一斗溲亦一斗，而愚嘗試驗其方，不惟治男子甚效，即治女子亦甚效。曾治一室女得此證，用八味丸變作湯劑，按後世法，地黃用熟地、桂用肉桂，丸中用幾兩者改用幾錢，惟茯苓、澤瀉各用一錢，兩劑而愈。後又治一少婦得此證，投以原方不效，改遵古法，地黃用乾地黃（即今生地），桂用桂枝，份量一如前方，四劑而愈。此中有宜古宜今之不同者，因其證之涼熱，與其資稟之虛實不同耳。

嘗因化學悟出治消渴之理。今試以壺貯涼水置爐上，壺外即凝有水珠，恒至下滴，迨壺熱則其水珠即無。蓋爐心必有氫氣上升，與空氣中之氧氣合，即能化水，著於涼水壺上，即可成珠下滴。迨壺熱則所著之水，旋著旋即涸去，故又不見水。人腹中之氣化壯旺，清陽之氣息上升，其中必挾有氫氣上升，與自肺吸進之氧氣相合，亦能化水，著於肺胞之上，而為津液。津液充足，自能不渴。若其肺體有熱，有如爐上壺熱，所著之水旋即涸去，此渴之所由來也。當治以清熱潤肺之品，若因心火熱而鑠肺者，更當用清心之藥，若肺體非熱，因腹中氣化不升，氫氣即不能上達於肺，與吸進之氧氣相合而生水者，當用升補之藥，補其氣化，而導之上升，此拙擬玉液湯之義也。然氫氣必隨清陽上升，而清陽實生於人

身之熱力，猶爐心有火，而爐心始有氫氣上升也。故消渴之證，恒有因脾胃濕寒、真火衰微者，此腎氣丸所以用桂、附，而後世治消渴，亦有用乾薑、白朮者。嘗治一少年，咽喉常常發乾，飲水連連，不能解渴，診其脈微遲濡，投以四君子湯，加乾薑、桂枝尖，一劑而渴止矣。又有濕熱鬱於中焦作渴者，蒼柏二妙散、丹溪越鞠丸，皆可酌用。

邑人某，年二十餘，貿易津門，得消渴證。求津門醫者，調治三閱月，更醫十餘人不效，歸家就醫於愚。診其脈甚微細，旋飲水旋即小便，須臾數次。投以玉液湯，加野臺參四錢，數劑渴見止，而小便仍數，又加萸肉五錢，連服十劑而愈。

【滋脾飲】

治消渴。

生箭耆（五錢）、大生地（一兩）、生懷山藥（一兩）、淨萸肉（五錢）、生豬胰子（三錢，切碎）。

上五味，將前四味煎湯，送服豬胰子一半，至煎渣時，再送服餘一半。若遇中、上二焦積有實熱，脈象洪實者，可先服白虎加人參湯數劑，將實熱消去強半，再服此湯，亦能奏效。

消渴一證，古有上中下之分，謂其證皆起於中焦而極於上下。究之，無論上消、中消、下消，約皆渴而多飲多尿，其尿有甜味。是以《聖濟總錄》論消渴謂「渴而飲水多，小便中有脂，似麩而甘」。至謂其證起於中焦，是誠有理，因中焦脾病，而累及於脾也。蓋脾為脾之副臟，在中醫書中，名為散膏，即扁鵲《難經》所謂脾有散膏半斤也（脾尾銜接於脾門，其全體之動脈又自脾脈分支而來，故與脾有密切之關係）。有時脾臟發酵，多釀甜味，由水道下陷，其人小便遂含有糖質。迨至脾病累及於脾，致脾氣不能散精達肺（《內經》謂「脾氣散精，上達於肺」）則津液少，不能通調水道（《內經》謂「通調水道，下歸膀胱」）則小便無節，是以渴而多飲多溲也。嘗閱申報，有胡適之者，因病消渴，求治於北平協和醫院，久而無效，既而旋里，亦以為無藥可醫矣。其友勸其延中醫治療，服藥竟愈，所用方中，以黃耆為主藥，為其能助脾氣上升，還其散精達肺之舊也。

《金匱》有腎氣丸，善治消渴。其方以乾地黃（即生地黃）為主，取其能助腎中之真陰，上潮以潤肺，又能協同山萸肉以封固腎關也。又向因治消渴，曾擬有玉液湯（方在前），方中以生懷山藥為主，屢試有效。近閱醫報且有單服山藥以治消渴而愈者。以其能補脾固腎，以止小便頻數，而所含之蛋白質，又能滋補脾臟，使其散膏充足，且又色白入肺，能潤肺生水，即以止渴也。又俗傳治消渴方，單服生豬胰子可愈。蓋豬胰子即豬之脾，是人脾之病，而可補以物之脾也。此亦猶雞內金，諸家本草皆謂其能治消渴之理也。雞內金與豬胰子，同為化食之物也。愚因集諸藥，合為一方，以治消渴，屢次見效。因敢筆之於書，以公諸醫界。

【附記】

天津盧抑甫君評此方云「按糖尿病一證，在西醫病理上之研究，由於脾臟之島素組織萎縮，製造內分泌物之機能減卻，故對於副腎之內分泌物亞篤列那林助肝造糖之過勝技能不能制止，因而血液內含糖量過多，以致尿內亦含有糖質，西醫起初無適切之治法。自西曆一千九百二十年，西醫邦廷古氏由牛、馬、豕等之脾抽出其內分泌物，名之曰依蘇林，注射於皮下或靜脈內，能使血內過量之糖立即少，雖至病劇陷於昏睡時，亦有起死回生之望。今先生治糖尿病之處方內，有豬胰一味，屬於古來臟器療法，與現今西醫之內分泌療法暗合。但古人只知以臟補臟，不知其有內分泌物之作用。又內服之法不如注射，因經口入胃，其有效成分為酸性胃液所破壞，即難奏效，注射則成分直達於病所，其奏效必確也。如除



去豬胰子之脂肪、結締組織及蛋白酵素，製成水制流膏，使僅含有抗糖物質，再加鹼性液以防制其胃液之酸性，則內服之缺點可以免去。病人不欲行注射者，當以此法為最良矣。中國古方治糖尿病有黃耆湯與八味丸，以新學理解之，必有使糖量減少之作用。至於何種藥味有此作用，尚待研究，此時難以指定也。日醫博士上條秀介，曾於中藥何首烏抽出一種有效成分，名之曰巴利夠寧，以治糖尿病，確有減少糖質作用，發表治驗報告，東西醫界甚為驚異。我國醫家如能於黃耆湯、八味丸抽出某藥成分，證明有減糖質作用，則上條秀介不能專美於前矣。然而未能抽出者，科學落後，其程度不如人也。以哲學的藥性治哲學的病理，則終於哲學的範圍而已。而先生此方由黃耆湯與八味丸脫胎變體而來，有西醫制方之精神，又加豬胰子之臟器療法，暗合於科學之原理，此則為現今醫界所未有，而為鄙人所欽佩無已者也。

又先生所著之《醫學衷中參西錄》中，各種處方類於此方之理想者甚多，鄙人臨證採用多收良效，擬撰張氏醫方解，以西醫之理發明之，俾西醫界中亦可放膽試用，此誠溝通中西之資藉也。以後得暇，當按方循序披露，登於拙撰醫學報（即醫藥衛生淺說報），以便使中西醫界之參考，庶於當今醫學有小補云。

觀盧君此段議論，誠當今醫界之偉人也。盧君印（謙）先畢業於西醫校，後又自精心研究中醫，生平臨證以西理斷病，以中藥治病，自命為新醫學家。凡所用之中藥，皆細心研究其成分，將其有用之成分提出，製成為流液，或制為結晶

用之，較諸藥片恒有捷效，且將其提出諸藥之成分，恒披露於所撰報中。盧君自命為新醫學家，洵非虛語也。

治癰閉方

【宣陽湯】

治陽分虛損，氣弱不能宣通，致小便不利。

野臺參（四錢）、威靈仙（錢半）、寸麥冬（六錢，帶心）、地膚子（一錢）。

【濟陰湯】

治陰分虛損，血虧不能濡潤，致小便不利。

懷熟地（一兩）、生龜板（五錢，搗碎）、生杭芍（五錢）、地膚子（一錢）。

陰分陽分俱虛者，二方並用，輪流換服，如下案所載服法，小便自利。

一媪，年六十餘，得水腫證，延醫治不效。時有專以治水腫名者，其方秘而不傳。服其藥自大便瀉水數桶，一身腫盡消，言忌鹹百日，可保永愈。數日又見腫，旋復如故，服其藥三次皆然，而病人益衰憊矣。蓋未服其藥時，即艱於小便，既服藥後，小便滴瀝全無，所以旋消而旋腫也。再延他醫，皆言服此藥，愈後復發者，斷乎不能調治。後愚診視，其脈數而無力。愚曰「脈數者，陰分虛也，無力者，陽分虛也。膀胱之腑，有下口無上口，水飲必隨氣血流行，而後能達於膀胱，出為小便。《內經》所謂「州都之官，津液藏焉，氣化則能出」者是也。此脈陰陽俱虛，致氣化傷損，不能運化水飲以達膀胱，此小便所以滴瀝全無也。易繫辭曰「日往則月來，月往則日來，日月相推，而明生焉，寒往則暑來，暑往則寒來，寒暑相推，而歲成焉，往者屈也，來者信（音伸）也，屈信相感，而利生焉」。此天地之氣化，即人身之氣化。爰立兩方，一方，以人參為君，輔以麥冬以濟參之熱，靈仙以行參之滯，少加地膚子為嚮導藥，名之曰宣陽湯，以象日象暑。一方以熟地為君，輔以龜板以助熟地之潤，芍藥以行熟地之滯（芍藥善利小便，故能行熟地之泥），亦少加地膚子為嚮導藥，名之曰濟陰湯，以象月象寒。

二方輪流服之，以象日月寒暑相推，往來屈伸相感之義也。俾先服濟陰湯，取其貞下起元也。服至三劑，小便稍利。再服宣陽湯，亦三劑小便大利。又再服濟陰湯，小便直如泉湧，腫遂盡消。

病家疑而問曰「前服濟陰湯，小便微通，此時又服之，何其功效百倍於從前」？答曰「善哉問也。前服濟陰湯，似於冬令，培草木之根荄，以厚其生長之基也，於服宣陽湯劑後，再服濟陰湯，如純陽月後，一陰二陰甫生，時當五六月大雨沛行，萬卉之暢茂，有迥異尋常者矣」。

或問「西人謂膀胱有進水之口，在出水之口下，其口斜透膀胱，且有油膜繞護，故不易辨認。西人實驗最精，其說必不差謬。子論膀胱，何以仍遵古說」？答曰「西人之說雖得之實驗，然必以中法參之，始能盡臟腑之奧。唐容川曰『三焦之根，出於腎係。兩腎之間，有油膜一條連於脊骨，自下而上，第七節命門穴處，即腎係也。由腎係下生連網油膜（俗名網油，西人名連網），是為下焦，中生板油，是為中焦，上生隔膜，是為上焦。蓋三焦即人身之油膜，上絡心肺、中絡脾胃、下絡腸與腎連膀胱。食入於胃由腸而下，飲入於胃，則胃之四面皆有微絲血管將水吸出，散走油膜之上，即三焦也。水緣三焦下行，由腎漉過，以達膀胱，今試取物脬驗之，其出水口下，油膜繞護之處，即與三焦連網相連之處，初無外露之口。三焦氣化流行，自能運轉水飲，由連網而達於膀胱。《內經》所謂『三焦者決瀆之官，水道出焉』者是也。由斯觀之，其進水之口，原在若有若無

之間，謂之有可也。謂之無亦無不可也。彼西人駁三焦之說，而不知其所謂連網即三焦，且不知連網生於腎係，是實驗雖精而猶未精也。」。

一婦人，年三十許，因陰虛小便不利，積成水腫甚劇，大便亦旬日不通，一老醫投以八正散不效。友人高夷清為出方，用生白芍六兩，煎汁兩大碗，再用阿膠二兩，融化其中，俾病人盡量飲之。老醫甚為駭疑，高夷清力主服之。盡劑而二便皆通，腫亦頓消。後老醫與愚覲面，為述其事，且問此等藥何以能治此病？答曰「此必陰虛不能化陽，以致二便閉塞。白芍善利小便，阿膠能滑大便，二藥並用，又大能滋補真陰，使陰分充足，以化其下焦偏勝之陽，則二便自能通利也」。

長子萌潮治一水腫證。其人年六旬，二便皆不通利，心中滿悶，時或煩躁。知其陰虛積有內熱，又兼氣分不舒也，投以生白芍三兩，橘紅、柴胡各三錢，一劑二便皆通，繼服滋陰理氣，少加利小便之藥而愈。

一婦人，年四十許，得水腫證，百藥不效。偶食綠豆稀飯，覺腹中鬆暢，遂連服數次，小便大利而愈。有人向愚述其事，且問所以能愈之故。答曰「綠豆與赤小豆同類，故能行水利小便，且其性又微涼，大能滋陰退熱。凡陰虛有熱，致小便不利者，服之皆有效也」。

【白茅根湯】

治陽虛不能化陽，小便不利，或有濕熱壅滯，以致小便不利，積成水腫。白茅根（一斤，掘取鮮者去淨皮與節間小根細切）。

將茅根用水四大碗煮一沸，移其鍋置爐旁，候十數分鐘，視其茅根若不沉水底，再煮一沸，移其鍋置爐旁，須臾視其根皆沉水底，其湯即成。去渣溫服多半杯，日服五六次，夜服兩三次，使藥力相繼，周十二時，小便自利。

茅根形象中空，頗類蘆根，鮮者煮稠汁飲之，則其性微涼，其味甘而且淡。為其涼也，故能去實火。為其甘也，故能清虛熱。為其淡也，故能利小便。且其根不但中空，周遭片上有十二小孔（細觀可見），象人十二經絡。故又能宣通臟腑，暢達經絡，兼治外感之熱，而利周身之水也。然必須如此煮法，服之方效。若久煎，其清涼之性及其宣通之力皆減，服之即無效矣。所煮之湯，歷一晝夜即變綠色，若無發酵之味，仍然可用。

一婦人，年四十餘，得水腫證。其翁固諸生，而精於醫者，自治不效，延他醫診治亦不效，偶與愚遇，問有何奇方，可救此危證。因細問病情，知係陰虛有熱，小便不利。遂俾用鮮茅根煎濃汁，飲旬日痊愈。

一媪，年六十餘，得水腫證。醫者用藥，治癒三次皆反覆，再服前藥不效。其子商於梓匠，欲買棺木，梓匠固其親屬，轉為求治於愚。因思此證反覆數次，

後服藥不效者，必是病久陰虛生熱，致小便不利。細問病情，果覺肌膚發熱，心內作渴，小便甚少。俾單用鮮白茅根煎湯，頻頻飲之，五日而愈。

一婦人，年四十許，得水腫證。其脈象大致平和，而微有滑數之象。俾濃煎鮮茅根湯飲之，數日病癒強半。其子來送信，愚因囑之曰「有要緊一言，前竟忘卻。患此證者，終身須忌食牛肉。病癒數十年，食之可以復發」。孰意其子未返，已食牛肉。且自覺病癒，出坐庭中，又兼受風。其證陡然反覆，一身盡腫，兩目因腫甚不能開視。愚用越婢湯發之，以滑石易石膏（用越婢湯原方，常有不汗者，若以滑石易石膏則易得汗），一劑汗出，小便頓利，腫亦見消。再飲白茅根湯，數日病遂痊愈。

按：白茅根，拙擬二鮮飲與三鮮飲，用以治吐衄。此方又用以治水腫，而其功效又不止此也。愚治傷寒溫病，於大便通後，陽明之盛熱已消，恆俾濃煮鮮茅根湯，渴則飲之，其人病癒必速，且愈後即能飲食，更無反覆之患。蓋寒溫愈後，其人不能飲食與屢次復病者，大抵因餘熱未盡，與胃中津液未復也。白茅根甘涼之性，既能清外感餘熱，又能滋胃中津液。至內有鬱熱，外轉覺涼者，其性又善宣通鬱熱使達於外也。

又按：凡膨脹，無論或氣、或血、或水腫。治癒後，皆終身忌食牛肉。蓋牛肉屬土，食之能壅滯氣血，且其彭亨之形，有似腹脹，故忌之也。醫者治此等證，宜切囑病家，慎勿誤食。



【溫通湯】

治下焦受寒，小便不通。

椒目（八錢，炒搗）、小茴香（二錢，炒搗）、威靈仙（三錢）。

人之水飲，由三焦而達膀胱。三焦者，身內脂膜也。曾即物類驗之，其脂膜上皆有微絲血管，狀若紅絨毛，即行水之處。此管熱則膨漲，涼則凝滯，皆能閉塞水道。若便濁兼受涼者，更凝結稠粘杜塞溺管，滴瀝不通，故以椒目之滑而溫、茴香之香而熱者，散其凝寒，即以通其竅絡。更佐以靈仙溫竄之力，化三焦之凝滯，以達膀胱，即化膀胱之凝滯，以達溺管也。涼甚者，肉桂、附子、乾薑皆可酌加。氣分虛者，更宜加人參助氣分以行藥力。

【加味苓桂朮甘湯】

治水腫小便不利，其脈沉遲無力，自覺寒涼者。

於朮（三錢）、桂枝尖（二錢）、茯苓片（二錢）、甘草（一錢）、乾薑（三錢）、人參（三錢）、烏附子（二錢）、威靈仙（一錢五分）。

腫滿之證，忌用甘草，以其性近壅滯也。惟與茯苓同用，轉能瀉濕滿，故方中未將甘草減去。若腫脹甚劇，恐其壅滯者，去之亦可。

服藥數劑後，小便微利，其脈沉遲如故者，用此湯送服生硫黃末四五厘。若不覺溫暖，體驗漸漸加多，以服後移時覺微溫為度。

人之水飲，非陽氣不能宣通。上焦陽虛者，水飲停於膈上。中焦陽虛者，水飲停於脾胃。下焦陽虛者，水飲停於膀胱。水飲停蓄既久，遂漸漬於周身，而頭面肢體皆腫，甚或腹如抱甕，而臃脹成矣。此方用苓桂朮甘湯，以助上焦之陽。即用甘草協同人參、乾薑，以助中焦之陽。又人參同附子，名參附湯（能固下焦元陽將脫），協同桂枝，更能助下焦之陽（桂枝上達胸膈，下通膀胱，故腎氣丸用桂枝不用肉桂）。三焦陽氣宣通，水飲亦隨之宣通，而不復停滯為患矣。至靈仙與人參並用，治氣虛小便不利甚效（此由實驗而知，故前所載宣陽湯並用之）。而其通利之性，又能運化朮、草之補力，俾脹滿者服之，毫無滯礙，故加之以為佐使也。若藥服數劑後，脈仍如故，病雖見愈，實無大效，此真火衰微太甚，恐非草木之品所能成功，故又用生硫黃少許，以補助相火。諸家本草謂其能使大便

潤，小便長，補火之中大有行水之力，故用之因涼成水腫者尤良也。第八卷載有服生硫黃法，其中有治水腫之驗案宜參觀。

脈沉水腫，與脈浮水腫迥異。脈浮者，多係風水，腠理閉塞，小便不利。當以《金匱》越婢湯發之，通身得汗，小便自利。若浮而兼數者，當是陰虛火動，宜兼用涼潤滋陰之藥。脈沉水腫，亦未可遽以涼斷。若沉而按之有力者，係下焦蘊熱未化，仍當用涼潤之藥，滋陰以化其陽，小便自利。惟其脈沉而且遲，微弱欲無，詢之更自覺寒涼者，方可放膽用此湯無礙。或但服生硫黃，試驗漸漸加多，亦可奏效。特是腫之劇者，脈之部位皆腫，似難辨其沉浮與有力無力，必重按移時，使按處成凹，始能細細辨認。

按：苓桂朮甘湯，為治上焦停飲之神方。《金匱》曰「短氣有微飲，當從小便去之，苓桂朮甘湯主之，腎氣丸亦主之」。喻嘉言注云「呼氣短，宜用苓桂朮甘湯，以化太陽（膈上）之氣；吸氣短，宜用腎氣丸，以納少陰（腎經）之氣」。推喻氏之意，以為呼氣短，則上焦陽虛，吸氣短，則下焦陰虛，故二方分途施治。然以之為學者說法，以自明其別有會心則可；以之釋《金匱》，謂其文中之意本如是則不可。何者？仲景當日著書立言，原期後世易於率由，使二方果如此分用，仲景何竟統同言之，致令後世費如許推測。蓋膈上與膀胱相隔雖遠，實皆太陽寒水之所統貫。太陽者天也，膈上也。寒水者水也，腎之腑膀胱也。水氣上升而為雲，復得天氣下降而為水，天水相連，升降一氣，此太陽寒水所以相並而為一經

也。愚臨證體驗多年，見有膈上氣旺而膺胸開朗者，必能運化水飲，下達膀胱，此用苓桂朮甘湯治飲之理也。見有腎氣旺，而膀胱流通者，又必能吸引水飲，下歸膀胱，此用腎氣丸治飲之理也。故仲景於上焦有微飲而短氣者，並出兩方，任人取用其一，皆能立建功效。況桂枝為宣通水飲之妙藥，茯苓為淡滲水飲之要品，又為二方之所同乎。且《金匱》之所謂短氣，乃呼氣短，非吸氣短也。何以言之，吸氣短者，吸不歸根即吐出，《本經》所謂吐吸，即喘之替言也。《金匱》之文，有單言喘者，又有短氣與喘並舉者。若謂短氣有微飲句，當兼呼氣短與吸氣短而言，而喘與短氣並舉者，又當作何解耶（惟論溢飲，變其文曰氣短，似言吸氣短）？

用越婢湯治風水，愚曾經驗，遇藥病相投，功效甚捷。其方《金匱》以治風水惡風，一身悉腫，脈浮不渴，續自汗出，無大熱者。而愚臨證體驗以來，即非續自汗出者，用之亦可，若一劑而汗不出者，可將石膏易作滑石（份量須加重）。

【寒通湯】

治下焦蘊蓄實熱，膀胱腫脹，溺管閉塞，小便滴瀝不通。

滑石（一兩）、生杭芍（一兩）、知母（八錢）、黃柏（八錢）。

一人，年六十餘，溺血數日，小便忽然不通，兩日之間滴瀝全無。病人不能支持，自以手揉擠，流出血水少許，稍較輕鬆。揉擠數次，疼痛不堪揉擠，徨無措，求為診治。其脈沉而有力，時當仲夏，身復厚被，猶覺寒涼。知其實熱鬱於下焦，溺管因熱而腫脹不通也。為擬此湯，一劑稍通，又加木通、海金沙各二錢，服兩劑痊愈。

【升麻黃耆湯】

治小便滴瀝不通。偶因嘔吐咳逆，或側臥欠伸，可通少許，此轉胞也。用升提藥，提其胞而轉正之，胞係不了戾，小便自利。

生黃耆（五錢）、當歸（四錢）、升麻（二錢）、柴胡（二錢）。

一婦人，產後小便不利，遣人詢方。俾用生化湯加白芍，治之不效，復來詢方。言有時噁心嘔吐，小便可通少許。愚恍悟曰「此必因產時努力太過，或撐擠太甚，以致胞繫了戾，是以小便不通。噁心嘔吐，則氣機上逆，胞係有提轉之勢，故小便可以稍通也」。遂為擬此湯，一劑而愈。

三焦之氣化不升則不降。小便不利者，往往因氣化下陷，鬱於下焦，滯其升降流行之機也。故用一切利小便之藥不效，而投以升提之藥恆多奇效。是以拙擬此湯，不但能治轉胞，並能治小便癱閉也。

古方有但重用黃耆治小便不利，積成水腫者，陸定圃《冷廬醫話》載「海甯許珊林觀察，精醫理。官平度州時，幕友杜某之戚王某，山陰人。夏秋間，忽患腫脹，自頂至踵，大倍常時，氣喘聲嘶，大小便不通，危在旦夕。因求觀察診之。令用生黃耆四兩，秫米一酒盅，煎一大碗，用小匙逐漸呷服。至盞許，氣喘稍平。即於一日間服盡，移時小便大通，溺器易三次，腫亦隨消，惟腳面消不及半。自後仍服此方，黃耆自四兩至一兩，隨服隨減。佐以祛濕平胃之品，兩月復元，獨

腳面有錢大一塊不消。恐次年復發，勸其歸，屆期果患前證。延紹城醫士診治，痛詆前方，以為不死乃是大幸。遂用除濕猛劑，十數服而氣絕。次日，將及蓋棺，其妻見其兩目微動，呼集眾人環視，連動數次。復用耆米湯救，至滿口不能下，少頃，眼忽一睜，湯俱下嚥，從此便出聲矣。服黃耆至數斤，並腳面之腫全消而愈。觀察之弟，辛未曹部，謂此方治驗多人。先是嫂吳氏，患子死腹中，渾身腫脹，氣喘身直，危在頃刻。余兄遍檢名人醫案，得此方遵服，便通腫消，旋即產下，一無所苦。後在平度有姬顧姓，患腫脹脫胎，此方數服而愈。繼又治癒數人，王某更在後矣。「蓋黃耆實表，表虛則水聚皮裡膜外，而成腫脹，得黃耆以開通水道，水被祛逐，脹自消矣。」

按：水腫之證，有虛有實，實者似不宜用黃耆。然其證實者甚少，而虛者居多。至其證屬虛矣，又當詳辨其為陰虛陽虛，或陰陽俱虛。陽虛者，氣分虧損，可單用、重用黃耆。陰虛者，其血分枯耗，宜重用滋陰之藥，兼取陽生陰長之義，而以黃耆輔之。至陰陽俱虛者，黃耆與滋陰之藥，可參半用之。醫者不究病因，痛詆為不可用，固屬鹵莽，至其連用除濕猛劑，其鹵莽尤甚。蓋病至積成水腫，即病因實者，其氣血至此，亦有虧損。猛悍藥，或一再用猶可。若不得已而用至數次，亦宜以補氣血之藥輔之。況其證原屬重用黃耆治癒之虛證乎。至今之醫者，對於此證，縱不用除濕猛劑，亦恆多用利水之品。不知陰虛者，多用利水之藥則

傷陰；陽虛者，多用利水之藥亦傷陽。夫利水之藥，非不可用，然貴深究其病因，而為根本之調治，利水之藥，不過用作嚮導而已。

【附方】

葛稚川《肘後方》治小便不通，用大螻蛄二枚，取下體，以水一升漬飲，須臾即通。又《壽域方》用土狗後半，焙研服半錢，小便即通，生研亦可。又《唐氏經驗方》用土狗後截和麝香搗，納臍中縛定，即通。

按：土狗即螻蛄，《日華本草》謂其治水腫，頭面腫。李時珍謂其通大小便，治石淋，誠為利小便要藥。凡小便不通者，無論涼熱虛實，皆可加於藥中以為嚮導，即單服之亦甚有效驗。然觀古方，皆用其後半截。蓋其前半開破之力多，後半利水力多。若治二便皆不通者，當全用之。

俗傳治小便不通聞藥方：用明雄黃一錢，蟾酥五分（焙發），麝香六厘，共研細，鼻聞之，小便即通。

西法曰「膀胱失卻舒縮功用，而成癱證，小便或全不出，或滿積後略出涓滴。因膀胱無力，不能使小便暢出。或因中風所致，或因下身截癱，或偏癱所累。亦有老人無癱證，忽然膀胱自失功用。又有腦證、熱證溺秘不出者。凡病人自言溺不利，不能全出，有時涓滴而出，無力暢送，醫者即應推究，膀胱中積溺多少，有無關係。小腹脹大，旁擊之覺有水，是有積溺也。治法用引溺銀管，自陽莖透入膀胱，將溺引出，立覺輕鬆。引溺銀管，以銀為之，外面須極光滑，有大小、



長短、曲直，或大曲、略曲，須各種俱備（今各種皆有賣者）。臨證常用微彎者，約長七八寸，略似鵝毛管，彎端左右有細眼五六，溺自眼入即可引出。若膀胱偶失功用，無別證者，引一二次即愈。若兼別證，須另治病源，仍用引出法以鬆適之可也。引溺後，服斑蝥酒數滴，腰貼斑蝥膏藥，多著衣令身暖，食潤物，如胡麻子水及粥之類。

又謂「有溺管變窄證，有初起略通，漸窄而塞；有忽然變窄，初起即塞住溺道。其故或因炎證，或因流白濁。致病之源，或飲酒房勞過度，或傷於飲食，致溺質改變，溺管不安而病生，此變窄所由也。治分二法，忽然變窄，溺管素無病者，鴉片膏四五厘，漿和貯水節中，射入溺管，如無水節，鴉片膏作丸，納入肛門，更用深澡盆滿盛熱水，下身坐浸一二刻時，上身用棉被擁護發表，當有小便出也，內服胡麻子水或胡麻子粥，戒飲酒，戒食酸，宜服微利藥，勿令大便秘。一法用朴硝一錢，樟腦一二分，滾水沖服。凡患此者，身宜溫暖，勿觸犯冷氣，慎飲食為最要。初起略通，漸窄而塞者，因溺管多生炎證，更多流白濁，或外被打踢跌落所傷，內皮硬厚，管塞阻溺或在腎囊肛門之間，或在龜頭內寸許或在龜頭口，或在膀胱蒂前，有一處者，有二三處者。治法用銀引溺管，略逼深送入膀胱，溺出後稍停片刻抽出，日用一兩次，用時管須以手搓熱，擦以香油，令極滑易入。初用小者，溺管漸開，漸換大，其大小須有多種備用。

按：引溺管法甚妙，邑有患小便難者，初不甚劇，漸至僅通滴瀝，屢次服藥無效，求愚診治。愚曰「此證但服藥不能療，當用西人引溺法」。彼依愚言，求西人用引溺管治之，旬日而愈。

一人年近五旬，小便陡然不通，用一切利小便藥無效，求為診治，投以升麻黃耆湯，亦不效。自言小便之口，有物杜塞，若小魚尿胞，俾用針挑破，小便湧出。

又一婦人，小便陡然不通，滴瀝全無，窘迫之際，其夫以細挺探其便處，小便即時通下。此其夫見愚，為述其事，且問何以得此，小便即時通下？答曰「此西人所謂溺道陡然變窄，宜治以引溺管之理也」。按此證與前證，雖皆未治以引溺管，而皆為引溺管可治癒之證，故連類及之，以徵引溺管之確乎可用也。

【雞脛湯】

治氣鬱成臑脹，兼治脾胃虛而且鬱，飲食不能運化。

生雞內金四錢（去淨瓦石糟粕搗碎）、於朮三錢、生杭芍四錢、柴胡二錢、廣陳皮二錢、生薑三錢。

《內經》謂「諸濕腫滿，皆屬於脾」，誠以脾也者，與胃相連以膜，能代胃行其津液。且地居中焦（為中焦油膜所包），更能為四旁宣其氣化。脾若失其所司，則津液氣化凝滯，腫滿即隨之矣。是臑脹者，當以理脾胃為主也。西人謂脾體中虛，內多回血管。若其回血管之血因脾病不能流通，瘀而成絲成塊，原非草木之根荖所能消化。雞內金為雞之脾胃，中有瓦石銅鐵皆能消化，其善化有形瘀積可知。故能直入脾中，以消回血管之瘀滯。而又以白朮之健補脾胃者以駕馭之，則消化之力愈大。柴胡《本經》謂「主腸胃中飲食積聚，能推陳致新」，其能佐雞內金消瘀可知，且與陳皮並用，一升一降，而氣自流通也。用芍藥者，因其病雖係氣臑，亦必挾有水氣，芍藥善利小便，即善行水，且與生薑同用，又能調和營衛，使周身之氣化流通也。夫氣臑本為難治之證，從擬此方之後，連治數證皆效。後治一叟年六旬，腹脹甚劇。治以此湯數劑，其效不速，用黑丑一錢炒研細，煎此湯送下，兩劑大見功效。又去黑丑，再服數劑痊愈。若小便時覺熱，且色黃赤者，宜酌加滑石數錢。

按：雞內金雖饒有消化之力，而諸家本草，實有能縮小便之說，恐於證之挾有水氣者不宜。方中用白芍以利小便，所以濟雞內金之短也。

《內經》謂「按之脊而不起者，風水也」。愚臨證體驗以來，知凡係水臟，按之皆不能即起。氣臟則按之舉手即起。或疑若水積腹中，不行於四肢，如方書所謂單腹脹者，似難辨其為氣為水。不知果為水證，重按移時，舉手則有微痕，而氣證則無也。且氣臟證，小便自若，水臟證，多小便不利，此又其明徵也。

【雞胫茅根湯】

治水臌氣臌並病，兼治單腹脹，及單水臌脹，單氣臌脹。

生雞內金五錢（去淨瓦石糟粕軋細）、生於朮（分量用時斟酌）、鮮茅根二兩（切細）。

先將茅根煎湯數茶盅（不可過煎，一兩沸後，慢火溫至茅根沉水底，湯即成）。先用一盅半，加生薑五片，煎雞內金末，至半盅時，再添茅根湯一盅，七八沸後，澄取清湯（不拘一盅或一盅多）服之。所餘之渣，仍用茅根湯煎服。日進一劑，早晚各服藥一次。初服小便即多，數日後大便亦多。若至日下二三次，宜減雞內金一錢，加生於朮一錢。又數日，脹見消，大便仍勤，可減雞內金錢，加於朮一錢。如此精心隨病機加減，俾其補破之力，適於病體相宜，自能痊愈。若無鮮茅根，可用藥房中乾茅根一兩代之。無鮮茅根即可不用生薑。所煎茅根湯，宜當日用盡，煎藥後若有餘剩，可當茶溫飲之。

雞內金之功效，前方下已詳論之矣。至於茅根最能利水，人所共知。而用於此方，不但取其利水也。《易》〈繫辭〉謂「震於植物為萑葦」。茅根中空，其四圍片上，且有十餘小孔，與萑葦為同類。而春日發生最早，是稟一陽初生之氣，而上升者也。故凡氣之鬱而不暢者，茅根皆能暢達之。善利水又善理氣，故能佐雞內金以奏殊功也。加生薑者，恐鮮茅根之性微寒也。且其味辛能理氣，其皮又

善利水也。繼加於朮，減雞內金者，因脹已見消，即當扶正以勝邪，不敢純用開破之品，致傷其正氣也。或疑此方，初次即宜少加於朮者。而愚曾經試驗，早加於朮，固不若如此晚加之有效也。

或問「茅根能清熱利小便，人所共知，至謂兼理氣分之鬱，諸家本草皆未言及，子亦曾單用之，而有確實之征驗乎？」答曰「此等實驗已不勝計。曾治一室女，心中常覺發熱，屢次服藥無效。後愚為診視，六脈皆沉細。診脈之際，聞其太息數次，知其氣分不舒也。問其心中脅下，恒隱隱作疼。遂俾剖取鮮茅根，切細半斤，煎數沸當茶飲之。兩日後，複診，其脈已還浮分，重診有力，不復聞其太息。問其脅下，已不覺疼，惟心中仍覺發熱耳。再飲數日，其心中發熱亦愈。又嘗治少年，得肺鼠疫病（鼠疫分肺鼠疫、腺鼠疫、敗血鼠疫）。其咽喉唇舌異常乾燥，精神昏昏似睡，周身肌膚不熱，脈象沉微。問其心中，時常煩悶，此鼠疫之邪，閉塞其少陰，致腎氣不能上達也。問其大便，四日未行。遂投以大劑白虎加人參湯。先用茅根數兩煎湯，以之代水煎藥，取汁三盅，分三次飲下。其脈頓起，變作洪滑之象，精神已復，周身皆熱，諸病亦皆見愈。俾仍按原方將藥煎出，每飲一次，調入生雞子黃一枚，其病遂痊愈。蓋茅根生於水邊，原兼稟寒水之氣，且其出地之時，作尖銳之錐形，故能直入少陰，助腎氣上達，與心相濟，則心即跳動有力，是以前脈遂洪滑外現也。再加生雞子黃，以滋少陰之液，俾其

隨氣上升，以解上焦之因燥生熱，因熱生煩，是以諸病皆愈也。此二案皆足徵茅根理氣之效也」。

〈 第 三 卷 〉



治黃疸方

【審定《金匱》黃疸門硝石礬石散方】

（第五期《衷中參西錄》論黃疸治法宜參視）

仲景治黃疸方甚多，有治外感之黃疸者，《傷寒論》治發黃諸方是也；有治內傷之黃疸者，《金匱》黃疸門諸方是也。其中治女勞疸，硝石礬石散方為治女勞疸之的方，實可為治內傷黃疸之總方。其方硝石（俗名火硝，亦名焰硝）、礬石等分為散，大麥粥汁和服方寸匕（約重一錢），日三服，病隨大小便去，小便正黃色、大便正黑色是也。特是方中礬石，釋者皆以白礬當之，不無遺議？嘗考《本經》，礬石一名羽涅，《爾雅》又名涅石，許氏《說文》釋涅字，謂「黑土在水中，當係染黑之色」。礬石既為涅石，亦當為染黑色所需之物，豈非今之皂礬乎！是知皂礬、白礬，古人皆名為礬石，而愚臨證體驗以來，知以治黃疸，白礬之功效，誠不如皂礬。蓋黃疸之證，中法謂由脾中蘊蓄濕熱；西法謂由膽汁溢於血中。皂礬退熱燥濕之力不讓白礬，故能去脾中濕熱，而其色綠而且青（亦名綠礬，又名青礬）能兼入膽經，借其酸收之味，以斂膽汁之妄行。且此物化學家原可用硫酸水化鐵而成，是知礦中所產之皂礬，亦必多含鐵質。尤可借金鐵之餘氣，以鎮肝膽之木也。硝石性寒，能解臟腑之實熱，味鹹入血分，又善解血分之熱。且其性善消，遇火即燃，又多含氧氣。人身之血，得氧氣則赤，又借硝石之消力，以消融血中之渣滓，則血之因膽汁而色變者，不難復於正矣。矧此證大便

難者甚多，得硝石以軟堅開結，濕熱可從大便而解。而其鹹寒之性，善清水腑之熱，即兼能使濕熱自小便解也。至用大麥粥送服者，取其補助脾胃之土以勝濕，而其甘平之性，兼能緩硝礬之峻，猶白虎湯中之用粳米也。

按：原方礬石下注有燒字，蓋以礬石酸味太烈，制為枯礬則稍和緩。而愚實驗以來，知徑用生者，其效更速。臨證者，相其身體強弱，斟酌適宜可也。

或曰「硝石、朴硝性原相近，仲景他方皆用朴硝，何此方獨用硝石」？答曰「朴硝味鹹，硝石則鹹而兼辛，辛者，金之味也。就此一方觀之，礬石既含有鐵質，硝石又具有金味，既善理脾中之濕熱，又善制膽汁之妄行，中西醫學之理，皆包括於一方之中，所以為醫中之聖也。且朴硝降下之力多，硝石消融之力多（理詳後砂淋丸下）。膽汁之溢於血中者，佈滿周身難盡降下，實深賴硝石之善消融也。又朴硝為水之精華結聚，其鹹寒之性，似與脾濕者不宜。硝石遇火則燃，兼得水中真陽之氣。其味之鹹不若朴硝，且兼有辛味，似能散濕氣之鬱結，而不致助脾濕也」。

戊午仲秋，愚初至奉天，有小北門裡童子朱文奎者，年十三歲，得黃疸證月餘，服藥無效，浸至不能飲食，其脈甚沉細，治以此散。為其年幼，一次止服六分。旬日病癒，而面目猶微黃，改用生山藥、生薏米各八錢，茯苓三錢，連服數劑痊愈。文奎雖在髫齡，已善書畫，自書對聯酬愚，字態韶秀，蓋仿王夢樓也。

或謂「西人謂膽汁能滲入小腸，消化食物。若過多則嘔吐綠水、苦涎。若溢於血分，則成黃疸，今既論疸證，兼採其說。想其能助小腸消食之說，亦可信歟」？答曰「其說殊有理，小腸雖為心之腑，而與胃相連，同為消化食物之具，亦當從胃之氣化，與胃均以土論。五行之理，木能疏土，膽之汁亦木也，故能疏通小腸之氣化，助之消化食物。有如柴胡為肝膽之藥，而《本經》謂其『主腸胃中飲食積聚，能推陳致新』也，即使小腸經絡與心相表裡當以火論，而以木助火，是亦五行相生之理也。西人又謂『甜肉汁與膽汁同入小腸，以助小腸化食』，甜肉係胰子，胰子善消油，能入小腸，助小腸以化脂肪。而食物以穀為主，五穀皆屬土，澱粉乃穀之重要分子，故膽汁能助小腸以化澱粉也」。

按：近今所謂西人方書，黃疸又名白血病，似不專主其膽汁溢於血中之說也。又有名為脾瘕者，似亦改從中法，脾有濕熱之說也。其治法用鹽酸規尼涅，每日一瓦至二瓦（瓦量詳第二卷清金解毒湯下）分三次服下，規尼涅即雞納霜（詳第七卷加味小柴胡湯下）。其藥以硫酸制者，名硫酸規尼涅，以鹽酸制者，名鹽酸規尼涅，皆有透表之力，善治間歇熱，鹽酸者似稍優，或治以林擒鐵丁，係林擒精液與鐵浸酒所制，性能補血化滯，清熱解煩。然二藥以治外感黃疸猶可，以治內傷黃疸則迴不如硝石礬石散也。

治淋濁方

【理血湯】

治血淋及溺血、大便下血，證之由於熱者。

生山藥（一兩）、生龍骨（六錢，搗細）、生牡蠣（六錢，搗細）、海螵蛸（四錢，搗細）、茜草（二錢）、生杭芍（三錢）、白頭翁（三錢）、真阿膠（三錢，不用炒）。

溺血者，加龍膽草三錢。大便下血者，去阿膠，加龍眼肉五錢。

血淋之症，大抵出之精道也。其人或縱慾太過而失於調攝，則腎臟因虛生熱，或欲盛強制而妄言採補，則相火動無所泄，亦能生熱。以致血室（男女皆有，男以化精，女以係胞）中血熱妄動，與敗精混合，化為腐濁之物，或紅、或白、或成絲、成塊，溺時杜塞牽引作疼，故用山藥、阿膠以補腎臟之虛，白頭翁其性寒涼，其味苦而兼澀，涼血之中大有固脫之力，故以清腎臟之熱，茜草、螵蛸以化其凝滯而兼能固其滑脫，龍骨、牡蠣以固其滑脫而兼能化其凝滯（四藥詳解在第八卷清帶湯下），芍藥以利小便而兼能滋陰清熱，所以投之無不效也。此證間有因勞思過度而心熱下降，忿怒過甚而肝火下移以成者，其血必不成塊，惟溺時牽引作疼。此或出之溺道，不必出自精道也，投以此湯亦效。

一人，年三十許，患血淋。溲時血塊杜塞，努力始能溲出，疼楚異常。且所溲者上多浮油，膠粘結於器底，是血淋而兼膏淋也。從前延醫調治，經三十五人，服藥年餘，分毫無效，尅羸已甚。後愚診視，其脈弦細，至數略數，周身肌膚甲錯，足骨凸處，其肉皮皆成旋螺，高寸餘，觸之甚疼。蓋臥床不起者，已半載矣。細詢病因，謂得之忿怒之餘，誤墜水中，時當秋夜覺涼甚，遂成斯證。知其忿怒之火，為外寒所束，鬱於下焦而不散，而從前居室之間，又有失保養處也。擬投以此湯，為脈弦，遂以柏子仁（炒搗）八錢，代方中山藥，以其善於養肝也。疏方甫定，其父出所服之方數十紙，欲以質其同異。愚曰「無須細觀，諸方與吾方同者，惟阿膠白芍耳」，閱之果然。其父問何以知之？愚曰「吾所用之方，皆苦心自經營者，故與他方不同」。服三劑血淋遂愈，而膏淋亦少減。改用拙擬膏淋湯（在後），連服二十餘劑，膏淋亦愈，而小便仍然頻數作疼。細詢其疼之實狀，謂少腹常覺疼而且墜，時有欲便之意，故有尿即不能強忍，知其又兼氣淋也。又投以拙擬氣淋湯（在後），十劑痊愈。周身甲錯，足上旋螺盡脫。

或問「柏子仁《本經》謂其能安五臟，未嘗專言治肝，子獨謂其善養肝者何也」？答曰「凡植物皆喜陽光，故樹杪皆向東南，而柏樹則獨向西北，西北金水之方也。其實又隆冬不雕，飽經霜露，得金水之氣甚多。肝臟屬木，中含相火，性甚暴烈，《內經》名為將軍之官，如驕將悍卒，必恩威並用，而後能統馭之。柏子仁既稟金水之氣，水能滋肝，金能鎮肝，滋之、鎮之，肝木自得其養也。曾

治一少年，其肝臟素有傷損，左關脈獨微弱，一日忽脅下作疼，俾單用柏子仁兩許，煎湯服之立愈。觀此，則柏子仁之善於養肝可知矣」。

或問「白頭翁與羌活、獨活皆名獨搖草，以其有風不動，無風獨搖也。審是則白頭翁當善祛風，與二活同性，何為其功專在於理血乎？」答曰「白頭翁仲春貼地開花，狀如小蓮，花謝然後生葉，數葉一梗，其梗甚硬，其葉之蒂又甚軟。為其葉之蒂軟，微風吹噓，他草未動，此葉亦動，所謂無風自動也。為其梗甚硬，雖在大風中亦不動，而其葉因蒂軟，隨風偏於一邊，無自反之力，亦似不動也。是知白頭翁亦名獨搖草，原係古人之誤也。蓋此藥多生於岡埠之陰，其性寒涼，其味苦而兼澀，涼血之中大有固脫之力也」。

或問「白頭翁既兼有收澀固脫之力，《金匱》白頭翁湯何以治熱痢下重？」答曰「白頭翁頭頂白毛，形如其名，必具有金氣。熱痢下重，係肝火下迫大腸，借金氣以制肝木之盛，則肝火自消，下重自除矣。唐容川謂白頭翁通身皆有白毛，似與白頭翁命名之義不符，且與坊間鬻者亦異，然或別有此種，想其所具之金氣愈全也」。

阿膠係用黑驢皮熬以阿井之水而成，人之所共知也。然必冬至後取其水熬者方為合法。蓋阿井為濟水之伏流，其水原重於他水，而冬至後取之，則素日盛水百斤之器，又可加重二斤，故以之熬膠，沉重下達，滋補肝腎，伏藏血脈。特是井中之泉不旺，終日不過取水數石，且又俟冬至後取之，所熬之膠，何能濟一世

之用。且非自視熬之，亦不知其真假也。大抵用阿井水熬者，無論何時皆可為真者。其膠以舌舐之，甘淡異常，不甚黏滯，且無別臭，能澄濁水為清。至於其本色，熬老則黃而暗，嫩則微黃而亮。若黑者，乃熬時攪以黑色也，然此亦難得。今坊間所鬻之阿膠，若果經夏不軟，捍之可碎，乃濟南濟水熬成，雖非真者，用之亦有效驗，以濟水與阿井原係一脈也。不宜炒用者，恐炒則涸其原汁，且難辨其真偽也。

溺血之證，不覺疼痛，其證多出溺道，間有出之精道者。大抵心移熱於小腸，則出之溺道。肝移熱於血室，則出之精道。方中加生地黃者，瀉心經之熱也。若係肝移熱於血室者，加龍膽草亦可。

按：溺血之證，熱者居多，而間有因寒者，則此方不可用矣。曾治一人，年三十餘，陡然溺血，其脈微弱而遲，自覺下焦涼甚。知其中氣虛弱，不能攝血，又兼命門相火衰微，乏吸攝之力，以致腎臟不能封固，血隨小便而脫出也。投以四君子湯，加熟地、烏附子，連服二十餘劑始愈。又有非涼非熱，但因脾虛不能統血而溺血者。方書所謂失於便溺者，太陰之不升也。仍宜用四君子湯，以龍骨、牡蠣佐之。

大便下血者，大抵由於腸中回血管或血脈管破裂。方中龍骨、牡蠣之收澀，原可補其破裂之處，而又去阿膠者，防其滑大腸也。加龍眼肉者，因此證間有因脾虛不能統血而然者，故加龍眼肉以補脾。若虛甚者，又當重用白朮，或更以參、

耆佐之。若虛而且陷者，當兼佐以柴胡、升麻。若虛而且涼者，當兼佐以乾薑、附子，減去芍藥、白頭翁。

一少婦，大便下血月餘，屢次服藥不效。愚為診視，用理血湯，去阿膠，加龍眼肉五錢治之，而僻處藥坊無白頭翁，權服一劑，病稍見愈。翌日至他處藥坊，按方取藥服之，病遂痊愈，則白頭翁之功效，何其偉哉！

【附錄】

直隸唐山張讓軒來函：

張灼芳，年二十八歲，於冬月初，得膏淋，繼之血淋。所便者，或血條，或血塊，後則繼以鮮血，溺頻莖疼。屢經醫者調治，病轉加劇。其氣色青黑，六脈堅數，肝脈尤甚，與以理血湯，俾連服三劑，血止，脈稍平，他證仍舊。繼按治淋濁方諸方加減治之，十餘劑痊愈。



【膏淋湯】

治膏淋。

生山藥（一兩）、生芡實（六錢）、生龍骨（六錢，搗細）、生牡蠣（六錢，搗細）、大生地（六錢，切片）、潞黨參（三錢）、生杭芍（三錢）。

膏淋之證，小便溷濁，更兼稠粘，便時淋澀作疼，此證由腎臟虧損，暗生內熱。腎臟虧損則蟄藏不固，精氣易於滑脫；內熱暗生，則膀胱熏蒸，小便改其澄清。久之，三焦之氣化滯其升降之機，遂至便時牽引作疼，而混濁稠粘矣。故用山藥、芡實以補其虛，而兼有收攝之功。龍骨、牡蠣以固其脫，而兼有化滯之用（理詳第八卷清帶湯下）。地黃、芍藥以清熱利便。潞參以總提其氣化，而斡旋之也。若其證混濁，而不稠粘者，是但出之溺道，用此方時，宜減龍骨、牡蠣之半。

【氣淋湯】

治氣淋。

生黃耆（五錢）、知母（四錢）、生杭芍（三錢）、柴胡（二錢）、生明乳香（一錢）、生明沒藥（一錢）。

氣淋之證，少腹常常下墜作疼，小便頻數，淋澀疼痛。因其人下焦本虛，素蘊內熱，而上焦之氣化又復下陷，鬱而生熱，則虛熱與濕熱，互相結於太陽之腑，滯其升降流通之機，而氣淋之證成矣。故以升補氣化之藥為主，而以滋陰利便流通氣化之藥佐之。

【勞淋湯】

治勞淋。

生山藥（一兩）、生芡實（三錢）、知母（三錢）、真阿膠（三錢，不用炒）、生杭芍（三錢）。

勞淋之證，因勞而成。其人或勞力過度、或勞心過度、或房勞過度，皆能暗生內熱，耗散真陰。陰虧熱熾，熏蒸膀胱，久而成淋，小便不能少忍，便後仍復欲便，常常作疼。故用滋補真陰之藥為主，而少以補氣之藥佐之，又少加利小便之藥作嚮導。然此證得之勞力者易治，得之勞心者難治，得之房勞者尤難治。又有思欲無窮，相火暗動而無所泄，積久而成淋者，宜以黃柏、知母以涼腎，澤瀉、滑石以瀉腎，其淋自愈。

或問「以上治淋四方中，三方以山藥為君，將山藥之性與淋證最相宜乎？」答曰「陰虛小便利者，服山藥可利小便。氣虛小便不攝者，服山藥可攝小便。蓋山藥為滋陰之良藥，又為固腎之良藥，以治淋證之淋澀頻數，誠為有一無二之妙品。再因證而加以他藥輔佐之，所以投之輒效也」。

【砂淋丸】

治砂淋，亦名石淋。

黃色生雞內金（一兩，雞鴨皆有肫皮，而雞者色黃，宜去淨砂石）、生黃耆（八錢）、知母（八錢）、生杭芍（六錢）、硼砂（六錢）、朴硝（五錢）、硝石（五錢）。

共軋細，煉蜜為丸，桐子大，食前開水送服三錢，日兩次。

石淋之證，因三焦氣化瘀滯，或又勞心勞力過度，或房勞過度，膀胱暗生內熱，內熱與瘀滯煎熬，久而結成砂石，杜塞溺道，疼楚異常。其結之小者，可用藥化之，若大如桃、杏核以上者，不易化矣，須用西人剖取之法，此有關性命之證，剖取之法雖險，猶可於險中求穩也。

雞內金為雞之脾胃，原能消化砂石。硼砂可為金、銀、銅焊藥，其性原能柔五金、治骨鯁，故亦善消硬物。朴硝，《本經》謂其能化七十二種石。硝石《本經》不載，而《名醫別錄》載之，亦謂其能化七十二種石。想此二物性味相近，古原不分，即包括於朴硝條中，至陶隱居始別之，而其化石之能則同也。然諸藥皆消破之品，恐於元氣有傷，故加黃耆以補助氣分，氣分壯旺，益能運化藥力。猶恐黃耆性熱，與淋證不宜，故又加知母、芍藥以解熱滋陰，而芍藥之性，又善引諸藥之力至膀胱也。

西人用硫黃九分，朴硝一分可制為黃強水，又用黃強水與朴硝等分可制為硝強水，二水皆能化石質之物，由此理推之，若去方中黃耆，加生硫黃四錢，取其與朴硝化合，更加生石膏兩半，以解硫黃之熱，其有效當更捷。

醋之性善化硬物，如雞、鴨蛋皮，醋浸久可至消化。若於食料中多調以醋，亦可為思患預防之法。或患此者，多食醋亦佳。按化學之理，鈣一分、碳一分、氧三分，化合則為石。鈣者，石灰也，水中皆有石灰原質，開水中之白屑是也。由此理推之，水至膀胱，與人身氧氣、碳氣渾合，而適符化合之數，即可結為石淋。人不能須臾離氧氣，而碳氣則可蠲除也。預防此證，當以蠲除碳氣為第一要著。

按：氧碳二氣渾合，其性必熱。方書謂此證因膀胱蓄熱，煎熬小便而成，洵不誣也。

按：此證有救急之法。當石杜塞不通時，則仰臥溺之可通。若仍不通，或側臥、或立、或以手按地，俾石離其杜塞之處即可通。

《堅夷志》曰「唐與正能以意治病，吳巡檢病不得溲，臥則微通，立則不能涓滴，遍用通藥不效。唐詢其平素自製黑錫丹常服。因悟曰『此必結砂時硫黃飛去，鉛質不化，鉛砂人膀胱，臥則偏重猶可溲，立則正塞水道故不通』。取金液丹（硫黃所制）三百粒，分十次服，瞿麥湯送下。鉛得硫則化，水道遂通」。

按：此為罕見之證，其杜塞溺道與石淋相似，附記於此，以備參觀。

【寒淋湯】

治寒淋。

生山藥（一兩）、小茴香（二錢，炒搗）、當歸（三錢）、生杭芍（二錢）、椒目（二錢，炒搗）。

上所論五淋，病因不同而證皆兼熱外，實有寒熱凝滯，寒多熱少之淋。其證喜飲熱湯，喜坐暖處，時常欲便，便後益抽引作疼，治以此湯服自愈。

【秘真丹】

治諸淋證已癒，因淋久氣化不固，遺精白濁者。

五倍子（一兩，去淨蟲糞）、粉甘草（八錢）。

上二味共軋細，每服一錢，竹葉煎湯送下，日再服。

曾治一人，從前患毒淋，服各種西藥兩月餘，淋已不疼，白濁亦大見輕，然兩日不服藥，白濁仍然反覆。愚俾用膏淋湯，送服秘真丹，兩次而愈。

【毒淋湯】

治花柳毒淋，疼痛異常，或兼白濁，或兼溺血。

金銀花（六錢）、海金沙（三錢）、石韋（二錢）、牛蒡子（二錢，炒搗）、甘草梢（二錢）、生杭芍（三錢）、三七（二錢，搗細）、鴨蛋子（三十粒，去皮）。

上藥八味，先將三七末、鴨蛋子仁用開水送服，再服餘藥所煎之湯（鴨蛋子一名鴨膽子，詳解見痢疾門燮理湯後）。

此證若兼受風者，可加防風二三錢。若服藥數劑後，其疼瘥減，而白濁不除，或更遺精者，可去三七、鴨蛋子，加生龍骨、生牡蠣各五錢。

今人治毒淋，喜用西藥强悍之品，以其善消淋證之毒菌也。不知中藥原有善消此等毒菌，更勝於西藥者，即方中之鴨蛋子是也。蓋鴨蛋子味至苦，而又善化療解毒清熱，其能消毒菌之力，全在於此。又以三七之解毒化腐生肌者佐之，以加於尋常治淋藥中，是以治此種毒淋，更勝於西藥也。



【消毒二仙丹】

治花柳毒淋，無論初起、日久，凡有熱者，服之皆效。

丈菊子（一兩，搗碎）鴨蛋子（四十粒，去皮，仁破者勿用，服時宜囫圇吞下）。

上藥二味，將丈菊子煎湯一盅，送服鴨蛋子仁。

丈菊俗名向日葵，其花善催生，子善治淋（詳解在第八卷大順湯後）。鄰村一少年患此證，便時膏淋與血液相雜，疼痛頗劇，語以此方，數次痊愈。

【鮮小薊根湯】

治花柳毒淋，兼血淋者。

鮮小薊根（一兩，洗淨銼細）。

上一味，用水煎三四沸，取清湯一大茶盅飲之，一日宜如此飲三次。若畏其性涼者，一次用六七錢亦可。

曾治一少年患此證，所便者血溺相雜，其血成絲、成塊，間有脂膜，疼痛甚劇，且甚腥臭。屢次醫治無效，授以此方，連服五日痊愈。

小薊之形狀，於三鮮飲（在第二卷）下曾言之。然彼則用治吐血，此則用治毒淋中之血淋，皆極效驗，而其功用實猶不止此也。一十五六歲童子，項下起疙瘩數個，大如巨栗，皮色不變，發熱作疼。知係陽證，俾濃煎鮮小薊根湯，連連飲之，數日全消。蓋其善消血中之熱毒，又能化瘀開結，故有如此功效也。

【朱砂骨泔波丸】

治花柳毒淋久不愈者。

骨泔波十瓦、朱砂研細三錢。

將骨泔波與朱砂調和，再用熟麥粉與之調和適宜，可以為丸，即分作九十九丸。丸成後，再用一大盤，盤中滿鋪麥粉，將藥丸置盤中旋轉之，俾外面以麥粉為衣，骨泔波之油質不外透，易於曬乾。每日服九丸，分三次服下。

骨泔波，南美熱帶地方所產，決明科樹中樹脂也。西人謂脂油之類曰拔爾撒謨，故亦名為骨泔波拔爾撒謨。其性最善治淋，而以治毒淋尤效。丁仲佑謂其自古迄今，占治淋藥之首位。惟其性近於熱，淋證初得挾熱者，似有不宜。以朱砂之涼而解毒者濟之，則無所用而不宜矣。此方愚用過多次皆效，而以治毒淋之久不愈者尤效也。

按：朱砂為水銀、硫黃二原質合成。此二原質，皆善消除毒菌。化合為朱砂，尤善防腐除炎，解毒生肌。且又赤色入心，能解心經之熱。《內經》謂「諸痛瘡癢，皆屬於心」。心中熱輕減，而淋證之尿管疼或兼如瘡瘍之腐爛者，自能輕減矣。

西醫治淋恒用之方，白檀香油二瓦，烏羅透品一瓦，撒魯兒一瓦，和為丸，分作二十粒，每服二粒，日服三次，頗有效驗。

按：白檀香油出於前印度及印度群島白檀香木心蒸餾水之揮發油，色黃質稠厚，難溶解於水，易溶於強酒精，其香氣特異而竄透，長久留存，稀釋之則芳芬似薔薇味，苛烈而稍苦，為治淋要品。然其性降下，且有礙消化，對於慢性淋疾似無效驗。用時以其二十滴少加薄荷油，一日之間分三次服下。烏羅透品未詳何基之藥。撒魯兒即楊曹，詳痢疾門（見第三卷）所附載西藥中。

丁仲佑謂德國所制山推而善治五淋白濁，並開胃益神，固精健體，歷經試驗甚效。用量一日三回，每回二粒。又謂英國倫敦大藥廠所制之檀香五淋白濁丸，凡淋證初起，刺疼難忍，繼有白濁，此丸能將白濁之微生物排出，數日即覺小便通暢，淋濁自止。用量：初服每點鐘一粒，服三日後，一日僅服三回，每回一粒至三粒。

按：西人治淋之藥，恒統言治五淋。究之惟宜於治毒淋，而毒淋原不在五淋之內也。即以治毒淋，亦恒有不效之時。如毒淋之兼血淋者，但用西藥多不效，而與鴨蛋子、三七、鮮小薊根並用則效。至於淋久滑脫之甚者，亦必須與中藥同用。曾治一人，從前患毒淋，服各種西藥兩月餘，淋已不疼，白濁亦大見輕，然兩日不服藥，白濁仍然反復。愚俾用膏淋湯，送服秘真丹，兩次而愈。

【澄化湯】

治小便頻數，遺精白濁，或兼疼澀，其脈弦數無力，或咳嗽、或自汗、或陰虛作熱。

生山藥（一兩）、生龍骨（六錢，搗細）、牡蠣（六錢，搗細）、牛蒡子（三錢，炒搗）、生杭芍（四錢）、粉甘草（錢半）、生車前子（三錢，布包）。

【清腎湯】

治小便頻數疼澀，遺精白濁，脈洪滑有力，確係實熱者。

知母（四錢）、黃柏（四錢）、生龍骨（四錢，搗細）、生牡蠣（三錢，炒搗）、海螵蛸（三錢，搗細）、茜草（二錢）、生杭芍（四錢）、生山藥（四錢）、澤瀉（一錢半）。

或問「龍骨、牡蠣收澀之品也。子治血淋，所擬理血湯中用之，前方治小便頻數或兼淋澀用之，此方治小便頻數疼澀亦用之，獨不慮其收澀之性有礙於疼澀乎」？答曰「龍骨、牡蠣斂正氣而不斂邪氣，凡心氣耗散、肺氣息賁、肝氣浮越、腎氣滑脫，用之皆有捷效。即證兼瘀、兼疼或兼外感，放膽用之，毫無妨礙。拙擬補絡補管湯（在第二卷）、理鬱升陷湯（在第四卷）、從龍湯（在第五卷）、清帶湯（在第七卷），諸方中論之甚詳，皆可參觀」。

一叟，年七十餘，遺精白濁、小便頻數，微覺疼澀。診其六脈平和，兩尺重按有力，知其年雖高，而腎經確有實熱也。投以此湯，五劑痊愈。

一人，年三十許，遺精白濁，小便時疼如刀，又甚澀數。診其脈滑而有力，知其係實熱之證。為其年少，疑兼花柳毒淋，遂投以此湯，加沒藥（不去油）三錢、鴨蛋子（去皮）四十粒（藥汁送服），數劑而愈。

【舒和湯】

治小便遺精白濁，因受風寒者，其脈弦而長，左脈尤甚。

桂枝尖（四錢）、生黃耆（三錢）、續斷（三錢）、桑寄生（三錢）、知母（三錢）。

服此湯數劑後病未痊愈者，去桂枝，加龍骨、牡蠣（皆不用煨）各六錢。

東海漁者，年三十餘，得騙白證甚劇。旬日之間，大見衰憊，懼甚，遠來求方。其脈左右皆弦，而左部弦而兼長。夫弦長者，肝木之盛也。木與風為同類，人之臟腑，無論何處受風，其風皆與肝木相應。《內經》陰陽應像論所謂「風氣通於肝」者是也。脈之現象如此，肝因風助，倍形其盛，而失其和也。況病人自言，因房事後小便當風，從此外腎微腫，遂有此證，尤為風之明徵乎？蓋房事後，腎臟經絡虛而不閉，風氣乘虛襲入，鼓動腎臟不能蟄藏（《內經》謂「腎主蟄藏」），而為腎行氣之肝木，又與風相應，以助其鼓動，而大其疏泄（《內經》謂「肝主疏泄」），故其病若是之劇也。為擬此湯，使脈之弦長者，變為舒和。服之一劑見輕，數劑後遂痊愈。以後凡遇此等症，其脈象與此同者，投以此湯無不輒效。

治痢方

【化滯湯】

治下痢赤白，腹疼，裡急後重初起者。若服藥後病未痊愈，繼服後方。

生杭芍（一兩）、當歸（五錢）、山楂（六錢）、萊菔子（五錢，炒搗）、甘草（二錢）、生薑（二錢）。

若身形壯實者，可加大黃、朴硝各三錢下之。

方中之意：用芍藥以泄肝之熱，甘草以緩肝之急，萊菔子以開氣分之滯，當歸、山楂以化血分之滯，生薑與芍藥並用又善調寒熱之互相凝滯，且當歸之汁液最滑，痢患滯下而以當歸滑之，其滯下愈而痢自愈也。



【燮理湯】

治下痢服前藥未痊愈者。若下痢已數日，亦可逕服此湯。又治噤口痢。

生山藥（八錢）、金銀花（五錢）、生杭芍（六錢）、牛蒡子（二錢，炒搗）、甘草（二錢）、黃連（錢半）、肉桂（一錢半，去粗皮將藥煎至數十沸再入）。單赤痢加生地榆二錢，單白痢加生薑二錢，血痢加鴨蛋子二十粒（去皮），藥汁送服。

痢證古稱滯下，所謂滯下者，誠以寒火凝結下焦，瘀為膿血，留滯不下，而寒火交戰之力又逼迫之，以使之下也，故方中黃連以治其火，肉桂以治其寒，二藥等分並用，陰陽燮理於頃刻矣。用白芍者，《傷寒論》諸方，腹痛必加芍藥協同甘草，亦燮理陰陽之妙品。且痢證之噤口不食者，必是膽火逆衝胃口，後重裡急者，必是肝火下迫大腸，白芍能瀉肝膽之火，故能治之。矧肝主藏血，肝膽火戕，則膿血自斂也。用山藥者，滯下久則陰分必虧，山藥之多液，可滋臟腑之真陰。且滯下久，則氣化不固，山藥之收澀，更能固下焦之氣化也。又白芍善利小便，自小便以瀉寒火之凝結。牛蒡能通大便，自大便以瀉寒火之凝結。金銀花與甘草同用，善解熱毒，可預防腸中之潰爛。單白痢則病在氣分，故加生薑以行氣。單赤痢則病在血分，故加生地榆以涼血。至痢中多帶鮮血，其血分為尤熱矣，故加鴨蛋子，以大清血分之熱。拙擬此方以來，歲遇患痢者不知凡幾，投以此湯，即至劇者，連服數劑亦必見效。

痢證，多因先有積熱，後又感涼而得，或飲食貪涼，或寢處貪涼，熱為涼迫，熱轉不散。迨歷日既多，又浸至有熱無涼，猶傷於寒者之轉病熱也。所以此方雖黃連、肉桂等分並用，而肉桂之熱，究不敵黃連之寒。況重用白芍，以為黃連之佐使，是此湯為燮理陰陽之劑，而實則清火之劑也。

或問「以此湯治痢，雖在數日之後，或服化滯湯之後，而此時痢邪猶盛，遽重用山藥補之，獨無留邪之患乎？」答曰「山藥雖饒有補力，而性略遲鈍，與參、之迅速者不同。在此方中，雖與諸藥同服，約必俟諸藥之涼者、熱者、通者、利者，將痢邪消融殆盡，而後大發其補性，以從容培養於諸藥之後，俾邪去而正已復，此乃完全之策，又何至留邪乎？且山藥與芍藥並用，大能瀉上焦之虛熱，與痢之噤口者尤宜。是以愚用此湯，遇痢之挾虛與年邁者，山藥恆用至一兩，或至一兩強也」。

或問「地榆方書多炒炭用之，取其黑能勝紅，以制血之妄行。此方治單赤痢加地榆，何以獨生用乎？」答曰「地榆之性，涼而且澀，能涼血兼能止血，若炒之則無斯效矣，此方治赤痢所以必加生地榆也。且赤痢之證，其劇者，或因腸中潰爛。林屋山人治湯火傷，皮膚潰爛，用生地榆末和香油敷之甚效。夫外敷能治皮膚因熱潰爛，而內服亦當有此效，可知也。鴨蛋子一名鴉膽子，苦參所結之子也。不但善治血痢，凡諸痢證皆可用之，即純白之痢，用之亦有效驗，而以治噤口痢、煙後痢、尤多奇效，並治大小便因熱下血。其方單用鴨蛋子（去皮），擇

成實者五六十粒，白沙糖化水送服，日兩次，大有奇效。若下血因涼者，亦可與溫補之藥同用，其善清血熱，而性非寒涼，善化瘀滯，而力非開破，有祛邪之能，兼有補正之功，誠良藥也。坊間將鴨蛋子去皮，用益元散為衣，治二便下血如神，名曰菩提丹，讚有其神靈之功也」。

一人，年五十餘，素吸鴉片。當霍亂盛行之時，忽然心中覺疼、噁心嘔吐、下痢膿血參半。病家懼甚，以為必是霍亂暴證。診其脈毫無閉塞之象，惟弦數無力，左關稍實。愚曰「此非霍亂，乃下焦寒火交戰，故腹中作疼，下痢膿血。上焦虛熱壅迫，故噁心嘔吐，實係痢證之劇者。遂投以白芍六錢，竹茹、清半夏各三錢，甘草、生薑各二錢，一劑嘔吐即愈，腹疼亦輕，而痢獨不愈，不思飲食。俾單用鴨蛋子五十粒，一日連服兩次，病若失。審斯，鴨蛋子不但善理下焦，即上焦虛熱，用之亦妙，此所以治噤口痢而有捷效也。

一人，年四十八，資稟素弱，亦吸鴉片，於季秋溏瀉不止，一日夜八九次，且帶紅色，心中怔忡，不能飲食。日服溫補之藥，分毫無效。延愚診治，其脈左右皆微弱，而尺脈尤甚，知係下焦虛寒。為其便帶紅色，且從前服溫補之藥無效，俾先服鴨蛋子四十粒，瀉愈其半，紅色亦略減，思飲食。繼用溫補下焦之藥煎湯，送服鴨蛋子三十粒，後漸減至十粒，十劑痊愈。蓋此證雖下焦虛寒，而便帶紅色，實兼有痢證也。故單服鴨蛋子，而溏瀉已減半。然亦足徵鴨蛋子雖善清熱化瘀，而實無寒涼開破之弊，洵良藥也。

滄州友人滕玉可，壬寅之歲，於中秋下赤痢，且多鮮血。醫治兩旬不愈。適愚他出新歸。過訪之，求為診治。其脈象洪實，知其純係熱痢。遂謂之曰「此易治。買苦參子百餘粒，去皮，分兩次服下即愈矣」。翌日愚復他出，二十餘日始歸。又訪之，言曾遍問近處藥坊，皆無苦參子。後病益劇，遣人至滄州取來，如法服之，兩次果愈，功效何其神哉！愚曰「前因粗心，言之未詳，苦參子即鴨蛋子，各藥坊皆有，特其見聞甚陋，不知係苦參所結之子耳」。玉可因病癒喜甚，遂作詩以存紀念。其詩曰「一粒苦參一粒金，天生瑞草起疴沉，從今覓得活人藥，九轉神丹何用尋。後玉可旋里，其族人自適奉天病重歸來者，大便下血年餘，一身悉腫，百藥不效。玉可授以此方，如法服之，三次痊愈。

按：鴨蛋子味甚苦，服時若嚼破，即不能下嚥。若去皮時破者，亦不宜服。恐服後若下行不速，或作噁心嘔吐，故方書用此藥，恒以龍眼肉包之，一顆龍眼肉包七數，以七七之數為劑，以象大衍之用數（《易》《繫辭》曰「大衍之數，五十其用四十有九」）。然病重身強者，猶可多服，常以八八之粒為劑，然亦不必甚拘。

又按：鴨蛋子連皮搗細，醋調，敷疔毒甚效，立能止疼。其仁搗如泥，可以點痣。拙擬毒淋湯（在前），又嘗重用之，以治花柳毒淋。其化療解毒之力如此，治痢所以有奇效也。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

蘆臺李子芳，年四十二歲，壬戌五月間，因勞碌暑熱，大便下血，且腹疼。醫者多用西洋參、野於朮、地榆炭、柏葉炭溫澀之品投之，愈服愈危。

小站王紹圃，余友也，代寄函詢方，並將病源暨前方開示。余閱畢，遂為郵去菩提丹四服。每服六十粒，日服一次。未幾，接復函，謂服畢血止，腹疼亦愈，極贊藥之神妙。近年用此丹治赤痢及二便下血，愈者甚多。

山東德州盧月潭來函：

介受族嫂，因逃荒驚恐，又兼受暑，致患痢兩月餘，服藥無效，益加沉重。侄為開烏梅六個，山楂兩半，煎湯送服益元散四錢，去皮鴨蛋子四十粒。煎藥渣時，亦如此送服。一劑病若失。

【解毒生化丹】

治痢久鬱熱生毒，腸中腐爛，時時切疼，後重，所下多似爛炙，且有腐敗之臭。

金銀花（一兩）、生杭芍（六錢）、粉甘草（三錢）、三七（二錢搗細）、鴨蛋子（六十粒，去皮揀成實者）。

上藥五味，先將三七、鴨蛋子，用白沙糖化水送服。次將餘藥煎湯服。病重者，一日須服兩劑始能見效。

按：此證乃痢之最重者。若初起之時，氣血未虧，用拙擬化滯湯，或加大黃、朴硝下之即愈。若未痊愈，繼服變理湯數劑，亦可痊愈。若失治遷延日久，氣血兩虧，浸至腸中腐爛，生機日減，致所下之物，色臭皆腐敗，非前二方所能愈矣。此方則重在化腐生肌，以救腸中之腐爛，故服之能建奇效也。

一人，年五十二，因大怒之後，中有鬱熱，又寢於冷屋之中，內熱為外寒所束，愈鬱而不散，大便下血。延醫調治，醫者因其得於寒涼屋中，謂係脾寒下陷，投以參、耆溫補之藥，又加升麻提之。服藥兩劑，病益增重，腹中切疼，常常後重，所便之物，多如爛炙。更延他醫，又以為下元虛寒，而投以八味地黃丸，作湯服之，病益加重。後愚診視，其脈數而有力，兩尺愈甚。確知其毒熱鬱於腸中，以致腸中腐爛也。為擬此方，兩劑而愈。

一婦人，年五十許，素吸鴉片，又當惱怒之餘，初患赤痢，滯下無度。因治療失宜，漸至血液腐敗，間如爛炙，噁心懶食，少腹切疼。其脈洪數，純是熱象。亦治以此湯，加知母、白頭翁各四錢，煎湯服。又另取鴨蛋子六十粒、三七二錢，送服。每日如此服藥兩次，三日痊愈。

【天水滌腸湯】

治久痢不愈，腸中浸至腐爛，時時切疼，身體因病久羸弱者。

生山藥（一兩）、滑石（一兩）、生杭芍（六錢）、潞黨參（三錢）、白頭翁（三錢）、粉甘草（二錢）。

一媪，年六十一歲，於中秋痢下赤白，服藥旋愈，旋又反覆。如此數次，遷延兩月。因少腹切疼，自疑寒涼，燒磚熨之。初熨時稍覺輕，以為對證。遂日日熨之，而腹中之疼益甚。晝夜呻吟，噤口不食，所下者痢與血水相雜，且係腐敗之色。其脈至數略數，雖非洪實有力，實無寒涼之象，舌上生苔，黃而且濃。病人自謂下焦涼甚，若用熱藥溫之疼當愈。愚曰「前此少腹切疼者，腸中欲腐爛也，今為熱磚所熨而腹疼益甚，敗血淋漓，則腸中真腐爛矣。再投以熱藥，危可翹足而待」。病人亦似會悟，為制此方。因河間天水散（即六一散），原為治熱痢之妙藥，此方中重用滑石、甘草，故名之天水滌腸湯。連服四劑，疼止，痢亦見愈。減去滑石四錢，加赤石脂四錢，再服數劑，病癒十之八九。因上焦氣微不順，俾用鮮藕四兩，切細絲煎湯，頻頻飲之，數日而愈。

按：此證亦痢中至險之證，而方中用黨參者，因痢久體虛，所下者又多腐敗，故於滋陰清火解毒藥中，特加黨參以助其生機，而其產於潞者，性平不熱，於痢證尤宜也。



也。生地榆亦可。又按：此證若服此湯不效，則前方之三七、鴨蛋子、金銀花亦可酌加，或加

【通變白頭翁湯】

治熱痢下重腹痛，及患痢之人，從前曾有鴉片之嗜好者。

生山藥（一兩）、白頭翁（四錢）、秦皮（三錢）、生地榆（三錢）、生杭芍（四錢）、甘草（二錢）、旱三七（三錢，軋細）、鴨蛋子（六十粒，去皮揀成實者）。

上藥共八味，先將三七、鴨蛋子，用白蔗糖水送服一半，再將餘煎湯服。其相去之時間，宜至點半鐘。所餘一半，至煎湯藥渣時，仍如此服法。

《傷寒論》治厥陰熱痢下重者，有白頭翁湯。其方以白頭翁為主，而以秦皮、黃連、黃柏佐之。陳古愚解曰「厥陰標陰病則為寒下，厥陰中見（中見少陽），病則為下利下重者，經所謂『暴注』是也。白頭翁臨風偏靜，特立不撓，用以為君者，欲平走竅之火，必先定動搖之風也。秦皮浸水青藍色，得厥陰風木之化，而性涼能瀉肝家之熱，故用以為臣。以黃連、黃柏為使者，其性寒能除熱，其味苦又能堅腸也。總使風木遂其上行之性，則熱痢下重自除。風火不相煽而燎原，則熱渴飲水自止也」。

唐容川解曰「白頭翁一莖直上，四面細葉，莖高尺許，通體白芒，其葉上下亦皆白芒，花微香，味微苦，乃草中秉金性者。能無風動搖，以其得木氣之和也；有風不動，以其秉金性之剛也，故用以平木熄風。又其一莖直上，故治下重，使風上達，而不迫注也」。

愚用此方，而又為之通變者，因其方中盡卻病之藥，而無扶正之藥，於證之兼虛者不宜，且連、柏並用，恐其苦寒之性妨礙脾胃，過侵下焦也。矧《傷寒論》白頭翁湯，原治時氣中初得之痢，如此通變之，至痢久而腸中腐爛者，服之亦可旋愈也。

唐氏論白頭翁詳矣，而猶有剩義，拙擬理血湯（在第三卷）下，於白頭翁另有發明，可與唐氏之論參觀。再者白頭翁入藥，宜用其根，且宜用其全根，至根上端之白茸，則用、不用皆可也。乃關外東三省藥房中所鬻之白頭翁，但根端白茸下帶根之上端少許，亦有不帶根者。問其根作何用，乃謂其根係漏蘆，賣時作漏蘆，不作白頭翁也。愚聞之，不禁啞然失笑。夫漏蘆與白頭翁迥異，而竟以白頭翁充之耶。於是在東三省診病，欲用白頭翁處方時，即開漏蘆。然醫藥所關非輕，愚願東三省之業醫者鹹知之，欲用白頭翁時勿為藥房所誤。

陸軍團長王劍秋，奉天鐵嶺人，年四十許。己未孟秋，自鄭州病歸，先瀉後痢，腹疼重墜，赤白稠粘，一日夜十餘次。先入奉天東人所設醫院中，東人甚畏此證，處以隔離所，醫治旬日無效。遂出院歸寓，求為診治。其脈弦而有力，知其下久陰虛，肝膽又蘊有實熱也。投以此湯，一劑痢愈。仍變為瀉，日四五次，自言腹中涼甚。愚因其疾原先瀉，此時痢愈又瀉，且恆以溫水袋自熨其腹，疑其下焦或有伏寒，遂少投以溫補之藥。才服一劑，又變為痢，下墜腹疼如故，惟次數少減，知其病原無寒，不受溫補，仍改用通變白頭翁湯。一劑痢又愈，一日猶

瀉數次。繼用生山藥一兩，龍眼、蓮子各六錢，生杭芍三錢，甘草、茯苓各二錢，又少加酒麴、麥芽、白蔻消食之品，調補旬日痊愈。

奉天省議長李亞僑，年近四旬。因有事，連夜廢寢，陡然腹疼，繼而泄瀉，兼下痢。其痢赤多於白，上焦有熱，不能飲食。其脈弦而浮，按之不實。先投以三寶粥方（在後），腹疼與瀉痢皆見輕，仍不能飲食。繼用通變白頭翁湯方，連服兩劑，痢愈可進飲食，腹疼泄瀉猶未痊愈。後仍用三寶粥方，去鴨蛋子，日服兩次，數日病痊愈。

【三寶粥】

治痢久，膿血腥臭，腸中欲腐，兼下焦虛憊，氣虛滑脫者。

生山藥（一兩，軋細）、三七（二錢，軋細）、鴨蛋子（五十粒，去皮）。上藥三味，先用水四盅，調和山藥末煮作粥。煮時，不住以箸攪之，一兩沸即熟，約得粥一大碗。即用其粥送服三七末、鴨蛋子。

己巳之歲，愚客居德州，有盧姓婦，年五十六。於季夏下痢赤白，遷延至仲冬不愈。延醫十餘人，服藥百劑，皆無效驗，亦以為無藥可醫矣。其弟月潭，素通醫學，偶與愚覲面談及，愚曰「此病非難，願用藥何如耳」。因診之，脈象微弱，至數略數，飲食減少，頭日時或眩暈，心中微覺煩熱，便時下墜作疼，然不甚劇。詢其平素，下焦畏涼，是以從前服藥，略加溫補，上即煩熱，略為清理，下又腹疼泄瀉也。為擬此方，一日連服兩次，其病遂愈。後旬餘，因登樓受涼，舊證陡然反覆，日下十餘次，腹疼覺劇。其脈象微弱如前，至數不數。俾仍用山藥粥，送服生硫黃末（服生硫黃詳解在第八卷）三分，亦一日服兩次，病癒強半。翌日又服一次，心微覺熱。繼又改用前方，兩劑痊愈。

戊午秋日，愚初至奉天，有鐵嶺李濟臣，年二十八。下痢四十餘日，膿血雜以脂膜，屢次服藥，病益增劇，羸弱已甚。診其脈，數而細弱，兩尺尤甚，亦治以此方，服後兩點鐘腹疼一陣，下膿血若干。病家言「從前腹疼不若是之劇，所下者亦不若是之多，似疑藥不對證」。愚曰「腹中瘀滯下盡即愈矣」。俾再用白

蔗糖化水，送服去皮鴨蛋子五十粒，此時已屆晚九點鐘，一夜安睡，至明晨，大便不見膿血矣。後間日大便，又少帶紫血，俾仍用山藥粥送服鴨蛋子二十粒，數次痊愈。

又斯秋中元節後，愚自漢口赴奉，路過都門小住數日。有劉發起者，下痢兩月不愈，持友人名片，造寓求為診治。其脈近和平，按之無力，日便五六次，血液腐敗，便時不甚覺疼，後重亦不劇。亦治以此方，一劑病癒強半。翌日將行，囑以再接原方服兩劑當愈。後至奉，接其來函言「服第二劑，效驗不如從前；至三劑，病轉似增重」，因恍悟，此證下痢兩月，其脈毫無數象，且按之無力，其下焦當係寒涼。俾仍用山藥粥送服炒熟小茴香末一錢，連服數劑痊愈。

或問「西人謂痢為腸中生炎。所謂炎者，紅熱腫疼，甚則腐爛也。觀此案與治盧姓之案，皆用熱藥成功，亦可謂之腸炎乎？既非腸炎，何以其腸亦欲腐爛乎？」答曰「痢證原有寒有熱。熱證不愈，其腸可至腐爛。寒證久不愈，其腸亦可腐爛。譬如瘡瘍，紅腫者陽而熱，白硬者陰而寒，其究竟皆可變為膿血。賞觀《弢園隨筆錄》，言其曾患牙疳，醫者治以三黃犀角純寒之品，滿口肉爛盡，而色白不知疼。後醫者，改用肉桂、附子等品，一服知疼，連服十餘劑而愈。夫人口中之肌肉，猶腸中之肌肉也。口中之肌肉，可因寒而腐爛，腸中之肌肉，獨不可因寒而腐爛乎？曾治一人，因久居潮濕之地，致下痢，三月不愈，所下者，紫血雜以脂膜，腹疼後重，授以龍眼肉包鴨蛋子方，服之，下痢與腹疼益劇。後愚診視，其

脈微弱而沉，左部幾不見。俾用生硫黃研細，摻熟麵少許，作丸。又重用生山藥、熟地、龍眼肉煎濃湯送服，連服十餘劑，共計服生硫黃兩許，其痢始愈。由是觀之，即純係赤痢，亦誠有寒者，然不過百中之二三耳。且嘗實驗痢證，若因寒者，雖經久不愈，猶可支持，且其後重、腹疼，較因熱者亦輕也。且《傷寒論》有桃花湯，治少陰病下利便膿血者，原赤石脂與乾薑並用，此為以熱藥治寒痢之權輿。注家不知，謂少陰之火傷陰絡所致，治以桃花湯，原係從治之法。又有矯誣藥性，謂赤石脂性涼，重用至一斤，乾薑雖熱，止用一兩，其方仍以涼論者。今試取其藥十分之一，煎湯服之，果涼乎？熱乎？此皆不知《傷寒論》此節之義，而強為注解者也」。

【通變白虎加人參湯】

治下痢，或赤、或白、或赤白參半，下重腹疼，周身發熱，服涼藥而熱不休，脈象確有實熱者。

生石膏（二兩，搗細）、生杭芍（八錢）、生山藥（六錢）、人參（五錢，用野黨參按此份量，若遼東真野參宜減半，至高麗參則斷不可用）、甘草（二錢）。上五味，用水四盅，煎取清湯兩盅，分二次溫飲之。

此方，即《傷寒論》白虎加人參湯，以芍藥代知母，山藥代粳米也。痢疾身熱不休，服清火藥而熱亦不休者，方書多諉為不治。夫治果對證，其熱焉有不休之理？此乃因痢證夾雜外感，其外感之熱邪，隨痢深陷，永無出路，以致痢為熱邪所助，日甚一日而永無愈期。惟治以此湯，以人參助石膏，能使深陷之邪，徐徐上升外散，消解無餘。加以芍藥、甘草以理下重腹疼，山藥以滋陰固下，連服數劑，無不熱退而痢愈者。

按：外感之熱已入陽明胃腑，當治以苦寒，若白虎湯、承氣湯是也。若治以甘寒，其病亦可暫愈，而恆將餘邪錮留胃中，變為骨蒸勞熱，永久不愈（《世補齋醫書》論之甚詳）。石膏雖非苦寒，其性寒而能散（若煨用之則斂矣，石膏不可煨用），且無汁漿，迥與甘寒粘泥者不同，而白虎湯中，又必佐以苦寒之知母。即此湯中，亦必佐以芍藥，芍藥亦味苦（《本經》）微寒之品，且能通利小便，故以佐石膏，可以消解陽明之熱而無餘也。



一叟，年六十七，於中秋得痢證，醫治二十餘日不效。後愚診視，其痢赤白膠滯，下行時，覺腸中熱而且乾，小便亦覺發熱，腹痛下墜並迫，其脊骨盡處，亦下墜作痛。且時作眩暈，其脈洪長有力，舌有白苔甚厚。愚曰「此外感之熱挾痢毒之熱下迫，故現種種病狀，非治痢兼治外感不可」。遂投以此湯，兩劑，諸病皆愈。其脈猶有餘熱，擬再用石膏清之，病家疑年高，石膏不可屢服，愚亦應聘他往。後二十餘日，痢復作，延他醫治療，於治痢藥中，雜以甘寒濡潤之品，致外感之餘熱，永留腸胃不去，其痢雖愈，而屢次反覆。延至明年仲夏，反覆甚劇，復延愚診治，其脈象、病證皆如舊。因謂之曰「去歲若肯多服石膏數兩，何至有以後屢次反覆，今不可再留邪矣」。仍投以此湯，連服三劑，病癒而脈亦安和。

一人，年四十二，患白痢，常覺下墜，過午尤甚，心中發熱，間作寒熱。醫者於治痢藥中，重用黃連一兩清之，熱如故，而痢亦不愈。留連兩月，浸至不起。診其脈，洪長有力，亦投以此湯，為其間作寒熱，加柴胡二錢，一劑熱退痢止，猶間有寒熱之時。再診其脈，仍似有力，而無和緩之致，知其痢久，而津液有傷也，遂去白芍、柴胡，加玄參、知母各六錢，一劑寒熱亦愈。

一媪，年六旬，素多疾病。於夏季晨起，偶下白痢，至暮十餘次。秉燭後，忽然渾身大熱，不省人事，循衣摸床，呼之不應。其脈洪而無力，肌膚之熱烙指，知係氣分熱痢，又兼受暑，多病之身，不能支持，故精神昏憤如是也。急用生石

膏三兩、野臺參四錢，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，至夜半盡劑而醒，痢亦遂愈。詰朝煎渣再服，其病脫然。

一人，年五十餘，於暑日痢而且瀉，其瀉與痢俱帶紅色，下墜腹疼，噤口不食。醫治兩旬，病勢浸增，精神昏憤，氣息奄奄。診其脈，細數無力，周身肌膚發熱。詢其心中亦覺熱，舌有黃苔，知其證夾雜暑溫。暑氣溫熱，瀰漫胃口，又兼痢而且瀉，虛熱上逆，是以不能食也。遂用生山藥兩半、滑石一兩、生杭芍六錢、粉甘草三錢，一劑諸病皆見愈，可以進食。又服一劑痊愈。此證用滑石不用石膏者，以其證兼瀉也。為不用石膏，即不敢用人參，故倍用山藥以增其補力。此就通變之方，而又為通變也。

痢證，又有肝膽腸胃先有鬱熱，又當暑月勞苦於烈日之中，陡然下痢，多帶鮮血，脈象洪數，此純是一團火氣，宜急用大苦大寒之劑，若芩、連、知、柏、膽草、苦參之類，皆可選用，亦可治以白虎湯，方中生石膏必用至二兩，再加生白芍一兩。若脈大而虛者，宜再加人參三錢。若其脈洪大甚實者，可用大承氣湯下之，而佐以白芍、知母。有痢久而清陽下陷者，其人或間作寒熱，或覺胸中短氣，當於治痢藥中，加生黃耆、柴胡以升清陽。脈虛甚者，亦可酌加人參。又當佐以生山藥以固下焦，然用藥不可失於熱也。有痢初得，兼受外感者，宜於治痢藥中，兼用解表之品，其外邪不隨痢內陷，而痢自易治。不然，則成通變白虎加人參湯所主之證矣。

痢證初得雖可下之，然必確審其無外感表證，方可投以下藥。其身體稍弱，又宜少用參、耆佐之。

痢證忌用滯泥之品，然亦不可概論。外祖母，年九旬，仲夏下痢赤白甚劇，脈象數而且弦。愚用大熟地、生杭芍各一兩煎湯，服下即愈。又服一劑，脈亦和平，後壽至九十四歲。

痢證間有涼者，然不過百中之一耳，且又多係純白之痢。又必脈象沉遲，且食涼物，坐涼處則覺劇者，治以乾薑、白芍、小茴香各三錢，山楂四錢，生山藥六錢，一兩劑即愈。用白芍者，誠以痢證必兼下墜腹痛，即係涼痢，其涼在腸胃，而其肝膽間必有伏熱，亦防其服熱藥，而生熱也。

凡病人酷嗜之物，不可力為禁止。嘗見患痢者，有恣飲涼水而愈者，有飽食西瓜而愈者。總之，人之資稟不齊，病之變態多端，尤在臨證時，精心與之消息耳。曾治一少年，下痢，晝夜無數，裡急後重，投以清火通利之藥數劑，痢已減半，而後重分毫不除。疑其腸中應有阻隔，投以大承氣湯，下燥糞長數寸而愈。設此證，若不疑其中有阻隔，則燥糞不除，病將何由愈乎？

有奇恆痢者，張隱庵謂「其證三陽並至，三陰莫當，九竅皆塞，陽氣旁溢，咽乾喉塞痛，並於陰則上下無常，薄為腸澀。其脈緩小遲澀，血溫身熱者死，熱見七日者死」，蓋因陽氣偏盛，陰氣受傷，是以脈小遲澀，此證急宜用大承氣湯瀉陽養陰，緩則不救。若不知奇恆之因，見脈氣平緩，而用平易之劑，必至誤事。

陳修園曰「嘉慶戊午，夏泉郡王孝廉，患痢七日，忽於寅卯之交，聲微啞，譫語，半刻即止，酉刻死。七月榕城葉廣文觀鳳之弟，患同前證來延。言伊弟患此亦不重，飲食如常，惟早晨咽乾微疼，如見鬼狀，午刻即止。時屆酉刻，餘告以不必往診，令其速回看視，果於酉戌之交死，此皆奇恆痢也。若投以大承氣湯，猶可挽回」。

按：此證愚實未見。修園所遇二證，皆在戊午年。天干戌為火運，地支午又為少陰君火司天，火氣太盛，故有此證。其危在七日者，火之成數也。由斯觀之，《內經》歲運之說，原自可憑。唐容川曰「《內經》以痢屬於肝熱，故曰『諸嘔吐酸，暴注下迫，皆屬於熱』」。下迫與吐酸同言，則知其屬於肝熱也。仲景於下利後重，便膿血者，亦詳於《厥陰篇》中，皆以痢屬肝經也。蓋痢多發於秋，乃肺金不清、肝木遏鬱。肝主疏泄，其疏泄之力太過，則暴注裡急，有不能待之勢。然或大腸開通，則直瀉下矣。乃大腸為肺金之腑，金性收澀，秋日當令，而不使瀉出，則滯澀不得快利，遂為後重，治宜開利肺氣，使金性不收，則大腸通快，而不後重矣。枳殼、桔梗、粉葛、枇杷葉，皆須為用。又宜清潤肝血，使木火不鬱，則肝木疏泄而不暴注矣。白芍、當歸、生地、丹皮、地榆皆須為用。至於腸胃之熱，皆從肝肺而生，西醫名腸中發炎，言其色紅腫也，故黃連、黃芩、膽草、黃柏能退肝火，石膏、知母、天冬、麥冬、花粉、連翹、銀花、白菊能清肺火，皆可擇用，此清肺氣調肝血之法也。至噤口痢，世多不知治法，惟仲景存

胃津液，足以救之，此即胃炎欲腐爛之候也。非大寒涼中加人參、花粉不能助救。故凡噤口痢，但得舌上津回，則能進食而生矣。至於大黃，惟滿實者可暫用之，其餘蘊釀之熱，皆宜苦堅為法，不可用猛悍藥也。仲景治痢，主白頭翁湯，夫白頭翁一莖直上，中空有瓢，能通達木氣，而遍體有毛，無風動搖，有風不動，其色純白（此形象與坊間鬻者不同），兼稟金氣，總為金木交合之物。予從白頭翁悟出清肝木達風氣之法。又從下利肺痛（《金匱》之文）一「肺」字，悟出肝之對面即是肺金，清金以和大腸，又為屢效之法矣。

西人治痢，先用蓖麻子油或甘汞（即水銀粉）降之。不愈者，繼用楊曹、硝蒼、單那而並、那布答林諸藥，以清熱解毒，防腐生肌，兼用血清灌腸諸方以佐之。

東人行西人之法，謂赤痢初期，腸中毒熱腫疼，決不可用收斂之劑。至第二期，腸中腐爛有若潰瘍，可用硝蒼鴉片之劑。蓋在初期，當務去腸內之刺激，流通糞便，以防病勢之上進，為赤痢療治第一義，故病有上進之象，當相機而投以下劑。但下劑易增進患者之衰弱，不可不謹慎用之。至灌腸及注腸，不惟足以疏通腸內之停滯，且有緩解裡急後重之效，是以用之最宜。但於炎證期，則當但行食鹽水之灌腸。於潰瘍期，則可用硝酸銀、單寧酸等收斂，兼以消除毒菌。

按：東人之論如此，用以治痢者，有效有不效。大概體壯者可愈，體弱者仍然危險。至痢證之夾雜外感溫病者，尤不能見效。東人志賀潔著有《赤痢新論》，

載有未治癒之案兩則，一為宮野某女，五十六歲。下腹部及左腹部忽發疼痛，繼乃發熱頭疼，翌日腹疼下痢，一小時內約排三次之黏血便。診之，則體格及營養皆佳良，體溫三十七度八分，脈搏七十至。食思缺損，舌有苔，時嘔吐，頭疼，為注射血清。翌日，舌苔乾燥而龜裂，體溫三十八度，脈搏七十二至，痢下二十次。又翌日，體溫三十八度七分，諸證依然，便通二十五次，注射血清。又翌日，口渴及食思缺乏如故，心機亢進，體溫三十八度七分，脈搏至百一十至，神識朦朧，言語不清，衰弱較前為甚。又翌日，時時呃逆嘔吐，舌腫大乾燥，舌苔剝離，下唇糜爛，心音微弱，脈搏極微若無，注射食鹽水，又二日，衰弱益甚，午前二時，遂虛脫而死。其一為田中某女，二十一歲。腹疼下痢，又發劇熱。便性為黏液，便間混有血液。其腸之曲折處及盲腸管，覺有壓疼。發病第五日之夜，發躁狂狀之舉動，精神發揚，第六日之夜亦然。嗣後即不復發，而時發譫妄，人事不省，為昏睡狀，至第三星期後，精神證狀痊愈，諸證輕快。乃未幾，而體溫再升，達於四十度二分，復發譫妄。經過二十八日，虛脫而死。

細觀東人所載二案，皆痢而夾雜溫病者也。東人對於前案，但知治痢不知治溫，所以不愈。至後案，雖未明載治法，其治法大抵與前案等。至三星期而見愈者，因溫病即不治而常有自愈者。至其後體溫再升，達於四十度二分，屢發譫妄，顯係溫病反復，熱人陽明之府。東人不能治溫，安能治溫之重發，況此重發者，又為久痢體虛之人乎！然而，治此二案之證，固非難事，以前所載通變白虎加人

參湯投之，一二劑皆可愈矣。次取通變白虎加人參湯下，所治驗之案，與此二案對勘自明也。

楊曹一名撒裡矢爾酸那篤留謨，一名撒裡矢爾酸曹達，一名水楊酸曹達，一名水楊酸那篤留謨，省文曰楊曹，亦曰撒曹，為白色無臭鱗屑狀結晶，或為結晶質粉末。味甘鹹而稍帶辛辣，其原質出於楊柳皮及美洲所產植物中，化以安息香酸，為撒裡矢爾酸（亦名撒魯兒），再用撒裡矢爾酸精製為楊曹。大抵外用及滌腸劑，皆用撒裡矢爾酸，內服則用楊曹，其性退熱防腐，愈偏頭疼，為治赤痢要藥。

硝蒼為次硝酸蒼鉛之省文，一名鹽基性硝酸蒼鉛，一名硝強鉍，一名鉍氧氮氧五，為白色結晶性粉末，檢視於顯微鏡下，現有光輝細小棱柱形結晶，為金屬收斂藥，含有多量蒼鉛、少量硝酸之製品也。其性能制異常發酵，保護腸胃不受異物之刺激。善治胃癌、胃潰瘍、赤痢等證。一日服三四次，每次可服半瓦，多至一瓦。

重曹即重酸遭達之省文，又名重碳酸那篤留謨，為白色結晶性粉末，係用水浸出木炭之汁，煉為碳酸那篤，再用碳酸那篤留謨精製為重曹，能治臟腑中慢性加答兒，胃中分泌過多，消化不良，肝臟硬化證之初起，腹部臟器靜脈鬱積所致之諸般障礙。止嘔吐、退黃疸、利肺疾、解尿酸，於諸般之浮腫水腫，用為利便藥，又為大便之緩下劑。每服半瓦，其極量可至二瓦。

單那兒並即單寧酸亞爾布明，乃蛋白化單寧酸（單甯酸之原質存於沒石子中），為褐色無味臭之粉末，其藥服至胃中，不甚溶解，下至腸中，始分為蛋白及單寧酸，呈單寧酸之收斂作用，故不害胃之消化機能，為大小腸之收斂藥，專用於大小腸加答兒，兼治腸瀉囊之潰瘍機轉、肺勞者之下列、慢性赤痢、夏期小兒下列（無味易服）等，代單寧酸為灌腸劑，用量每次可服半瓦，多至一瓦，日服數次，可少少增加。

那布答林為無色有光澤之版狀結晶，有特異竄透臭氣與燒味，乃生化於有機物（石灰）乾餾之際，在最高熱餾出之碳水素之一也。其性最能消除各種毒菌，饒防腐之力。內瘍潰爛，能催肉芽速長。治膀胱加答兒、小兒蛔蟲。外用和脂油，能除疥癬。於創傷潰瘍，為乾燥繃帶藥，能除惡臭，促肉芽之發生。用於室中，可以逐穢祛邪。置於書篋、衣筒，可以避蠹驅蟲。每服三分之一瓦，或半瓦，其極量不過一瓦。

在所錄東西人治病之藥，其解毒清血之力，遠不如鴨蛋子；其防腐生肌之力，遠不如三七。且於挾虛之痢，而不知輔以山藥人參；於挾熱之痢，而不知重用石膏。宜其視赤痢為至險之證，而治之恒不愈也。

東人志賀潔謂「熱帶之地有阿米巴赤痢，其證間或傳於溫帶地方」，阿米巴者，為蟲類生殖之毒菌，傳染於人則為阿米巴赤痢。阿米巴之現狀為球形或橢圓形之結核，與尋常赤痢菌之為杆狀者不同，外有包，為玻璃透明形，其內結之核



為球，間有膿球。取新便下之混血黏液一滴，置玻璃片上，加生理的食鹽水，更以小玻璃片輕覆其上，以顯微鏡視之，若有假足之伸縮，助其活動，即為阿米巴赤痢之毒菌。其劇者，痢中混有壞疽潰瘍片，而帶腐肉樣之臭氣，或為污泥色。至其證狀之經過，與慢性赤痢大略相似。其身體大率無過熱之溫度，故遲之累月累年不愈，而猶有可支援者。此證治法宜日服甘汞十分瓦之一至十分瓦之三，當連服七八日。但須注意於中毒狀，若稍發現中毒形狀，宜速停止。又可服硫黃半瓦，一日三次。又宜用雞納霜為注腸劑，惟不可自始即用濃厚之液。最初當用五千倍之溶液，繼乃可用千倍水者，數日後則可用五百倍水者。

愚未至熱帶，東人所論阿米巴赤痢未經治過，然彼又云間有傳至溫帶者，至所載其證之劇者一段云云，愚上所治痢證案中，似有具此狀況者，而未用其治法，亦皆應手奏效。至其謂內服可用硫黃，上所治痢證案中，已載兩則，其為阿米巴痢與否，尚不敢斷定，而當其時臨證疏方，固未聞有阿米巴痢也。惟度其證宜投以硫黃，且再四躊躇，若不用硫黃，它藥恐難於建功，故遂放膽用之耳（治痢之方，再參看五期《衷中參西錄》第六卷，論痢治法方備）。

治燥結方

【硝菴通結湯】

治大便秘結久不通，身體兼羸弱者。

淨朴硝（四兩）、鮮萊菔（五斤）。

將萊菔切片，同朴硝和水煮之。初次煮，用萊菔片一斤，水五斤，煮至萊菔爛熟撈出。就其餘湯，再入萊菔一斤。如此煮五次，約得濃汁一大碗，頓服之。若不能頓服者，先飲一半，停一點鐘，再溫飲一半，大便即通。若脈虛甚，不任通下者，加人參數錢，另燉同服。

軟堅通結，朴硝之所長也。然其味鹹性寒，若遇燥結甚實者，少用之則無效，多用之則鹹寒太過，損肺傷腎。其人或素有勞疾或下元虛寒者，尤非所宜也。惟與萊菔同煎數次，則朴硝之鹹味，盡被萊菔提出，萊菔之汁漿，盡與朴硝融化。夫萊菔味甘，性微溫，煨熟食之，善治勞嗽短氣（方附在第一卷水晶桃下），其性能補益可知。取其汁與朴硝同用，其甘溫也，可化朴硝之鹹寒，其補益也，可緩朴硝之攻破。若或脈虛不任通下，又借人參之大力者，以為之扶持保護。然後師有節制，雖猛悍亦可用也。

一媪，年近七旬，傷寒初得，無汗，原是麻黃湯證。因誤服桂枝湯，遂成白虎湯證。上焦煩熱太甚，聞藥氣即嘔吐。但飲所煎石膏清水，亦吐。俾用鮮梨片

蘸生石膏細末，嚼咽之。約用石膏兩半，陽明之大熱遂消，而大便旬日未通，其下焦餘熱，仍無出路，欲用硝黃降之，聞藥氣仍然嘔吐。且其人素患勞嗽，身體羸弱，過用鹹寒，尤其所忌，為制此方，煎汁一大碗，仍然有朴硝餘味，復用菜菔一個，切成細絲，同蔥添油醋，和藥汁調作羹。病人食之香美，並不知是藥，大便秘通而愈。

一媪，年七旬，勞嗽甚劇，飲食化痰涎，不化津液，致大便秘結，十餘日不行，飲食漸不能進。亦擬投以此湯，為羸弱已甚，用人參三錢，另燉汁，和藥服之。一劑便通，能進飲食。復俾煎生山藥稠汁，調柿霜餅服之，勞嗽亦見愈。

按：用朴硝煉玄明粉法，原用菜菔。然此法今人不講久矣，至藥坊所鬻者，乃風化硝，非玄明粉也。今並載其法，以備參觀，實心救人者，亦可照法煉之，以備施用。其法於冬至後，用潔淨朴硝十斤，白菜菔五斤切片，同人鍋中，用水一斗五升，煮至菜菔爛熟，將菜菔撈出。用竹篩一個，鋪綿紙二層，架托於新缸之上，將硝水濾過。在庭露三日，其硝凝於缸邊，將餘水傾出，曬乾。將硝取出，用沙鍋熬於爐上，融化後，攪以銅鏟，熬至將凝，用鏟鏟出，再裝於瓷罐，未滿者寸許，蓋以瓦片，用釘三個，釘地作鼎足形，釘頭高二寸，罐置其上。用磚在罐周遭砌作爐形，多留風眼，爐磚離罐三寸。將木炭火置於爐中，罐四圍上下都被炭火壅培，以煨至硝紅為度。次日取出，再用綿紙鋪於靜室地上，將硝碾細，用絹羅篩於紙上，厚一分。將戶牖皆遮蔽勿透風，三日後取出，其硝潔白如粉，

輕虛成片。其性最能降火化痰，清利臟腑，怪證服之可蠲，狂躁用之即愈。搜除百病，安斂心神。大人服二三錢，小兒服五分至一錢，用白湯或蔥湯融化，空心服之。服藥之日，不宜食他物，惟飲稀粥。服二三次後，自然精神爽健，臟腑調和，津液頓生，百病如失矣。惟久病泄瀉者，服之不宜。

【赭遂攻結湯】

治宿食結於腸間，不能下行，大便多日不通。其證或因飲食過度，或因恣食生冷，或因寒火凝結，或因嘔吐既久，胃氣衝氣，皆上逆不下降。

生赭石（二兩，軋細）、朴硝（五錢）、乾薑（二錢）、甘遂（一錢半，軋細藥汁送服）。熱多者，去乾薑。寒多者，酌加乾薑數錢。嘔多者，可先用赭石一兩、乾薑半錢煎服，以止其嘔吐。嘔吐止後，再按原方煎湯，送甘遂末服之。

朴硝雖能軟堅，然遇大便燥結過甚，腸中毫無水氣者，其軟堅之力，將無所施。甘遂辛竄之性，最善行水，能引胃中之水直達燥結之處，而後朴硝因水氣流通，乃得大施其軟堅之力，燥結雖久，亦可變為溏糞，順流而下也。特是甘遂力甚猛悍，以攻決為用，能下行亦能上達，若無以駕馭之，服後恆至吐瀉交作。況此證多得之湧吐之餘，或因氣機不能下行，轉而上逆，未得施其攻決之力，而即吐出者，故以赭石之鎮逆，乾薑之降逆，協力下行，以參贊甘遂成功也。且乾薑性熱，朴硝性寒，二藥並用，善開寒火之凝滯。寒火之凝滯於腸間者開，宿物之停滯於腸間者亦易開也。愚用此方救人多矣，即食結中脘下脘，亦未有不隨手奏效者。

乙卯之歲，客居廣平，忽有車載病人，造寓求診者。其人年過五旬，呻吟不止，言自覺食物結於下脘，甚是痛楚，數次延醫調治，一劑中大黃用至兩半不下。且凡所服之藥，覺行至所結之處，即上逆吐出，飲食亦然，此時上焦甚覺煩躁，

大便不通者已旬日矣。診其脈，雖微弱，至數不數，重按有根，知猶可任攻下，因謂之曰「此病易治，特所服藥中，有强悍之品，服藥時，必吾親自監視方妥。然亦無須久淹，能住此四點鐘，結處即通下矣」。遂用此湯去乾薑，方中赭石改用三兩，朴硝改用八錢。服後須臾，腹中作響，遲兩點半鐘，大便通下而愈。後月餘，又患結證如前，仍用前方而愈。

【附錄】

山東德州盧月潭來函：

族侄孫雲倬，患腸結證，纏綿兩月有餘。更醫數十人，服藥百餘劑，不但無效，轉大增劇。伊芳亦以為無人能治，無藥可醫，氣息奄奄，殮服已備。後接先生來信（曾為去信服《衷中參西錄》中赭遂攻結湯），即攜《衷中參西錄》往視，幸伊芳心神未昏，將赭遂攻結湯方查出示之。伊芳素知醫，臥觀一小時，即猛起一手拍胸，言我病即愈，幸不當死。立急派人取藥，服後片刻，腹中大響一陣，自覺其結已開，隨即大瀉兩三盆，停約兩句鐘，又瀉數次，其病竟愈。隨即食山藥粉稀粥兩茶杯，繼用補益濡潤之藥數劑以善其後。

【通結用蔥白熨法】

治同前證。

大蔥白（四斤，切作細絲）、乾米醋（多備待用）。

將蔥白絲和醋炒至極熱，分作兩包，乘熱熨臍上，涼則互換，不可間斷。其涼者，仍可加醋少許，再炒熱。然炒蔥時，醋之多少，須加斟酌。以炒成布包後，不至有湯為度。熨至六點鐘，其結自開。

一孺子，年六歲。因食肉過多，不能消化，鬱結腸中。大便不行者六七日，腹中脹滿，按之硬如石，用一切通利藥皆不效。為用此法熨之，至三點鐘，其腹漸軟。又熨三點鐘，大便通下如羊矢，其脹遂消。

一童子，年十五六，因薄受外感，腹中脹滿，大便數日不通，然非陽明之實熱燥結也。醫者投以承氣湯，大便仍不通，而腹轉增脹。自覺為腹脹所迫，幾不能息，且時覺心中怔忡。診其脈，甚微細，按之即無，脈虛證實，幾為束手，亦用蔥白熨法，腹脹頓減。又熨三點鐘，覺結開，行至下焦。繼用豬膽汁導法，大便秘通而愈。

按：豬膽汁導法，乃《傷寒論》下燥結之法也。原用豬膽汁，和醋少許，以灌穀道中。今變通其法，用醋灌豬膽中，手捻令醋與膽汁融和，再用以通氣長竹管，一端裝豬膽中，用細繩紮住，一端納穀道中。用手將豬膽汁，由竹管擠入穀道。若穀道離大便猶遠，宜將竹管深探至燥糞之處。若結之甚者，又必連用兩三

個。若畏豬膽汁涼，或當冷時，可將豬膽置水中溫之。若無鮮豬膽，可將乾者，用醋泡開，再將醋灌豬膽中，以手捻至膽汁之凝結者皆融化，亦可用。若有灌腸注射器，則用之更便。

一人，年四十許，素畏寒涼。愚俾日服生硫黃（服生硫黃法在第八卷），如黑豆粒大兩塊，大見功效，已年餘矣。偶因暑日勞碌，心中有火，恣食瓜果，又飽餐肉食，不能消化，腸中結而不行，且又疼痛，時作嘔吐。醫者用大黃附子細辛湯降之，不效。又用京都薛氏保赤萬應散，三劑並作一劑服之，腹疼減去，而仍不通行。後愚診視，其脈近和平，微弦無力。蓋此時不食數日，不大便十日矣。遂治以蔥白熨法，覺腹中鬆暢，且時作開通之聲，而仍然噁心，欲作嘔吐。繼用赭石二兩，乾薑錢半，俾煎服以止其噁心。仍助以蔥白熨法，通其大便，外熨內攻，藥逾五點鐘，大便得通而愈。

按：《金匱》大黃附子細辛湯，誠為開結良方。愚嘗用以治腸結腹疼者甚效。即薛氏保赤萬應散，三劑作一劑服之，以治大人，亦為開結良方，愚用過屢次皆效。而以治此證，二方皆不效者，以其證兼嘔吐，二方皆不能止其嘔吐，故也。病人自言，從前所服之藥，皆覺下行未至病所，即上逆吐出，獨此次服藥，則沉重下達，直抵病結之處，所以能攻下也。

一人，年四十三。房事後，恣食生冷，忽然少腹抽疼，腎囊緊縮，大便四日不通，上焦兼有煩躁之意。醫者投以大黃附子細辛湯，兩脅轉覺疼脹。診其脈，



弦而沉，兩尺之沉尤甚。先治以蔥白熨法，腹中作響，大有開通之意。腎囊之緊縮見愈，而大便仍未通。又用赭石二兩，附子五錢，當歸、蘇子各一兩，煎湯，甫飲下，即覺藥力下墜。俾復煎渣飲之，有頃，降下結糞若干，諸病皆愈。

按：此證用蔥白熨之，雖未即通，而腸中之結已開。至所服之藥，重用赭石者，因此證原宜用熱藥以溫下焦，而上焦之煩躁，與大便之燥結，又皆與熱藥不宜。惟重用赭石以佐之，使其熱力下達，自無僭上之患。而其重墜之性，又兼有通結之功。上焦之浮熱，因之歸根，下焦之凝寒，因之盡化矣。

古方治小便忽然不通者，有蔥白炙法。用蔥白一握，捆作一束，將兩端切齊，中留二寸。以一端安臍上，一端用炭火炙之。待炙至臍中發熱，小便自通。此蓋借其溫通之性，自臍透達，轉入膀胱，以啟小便之路也。然僅以火炙其一端，則熱力之透達頗難。若以拙擬蔥白熨法代之，則小便之因寒不通，或因氣滯不通者，取效當更速也。

又此熨法，不但可通二便，凡疝氣初得，用此法熨之，無不愈者。然須多熨幾次，即熨至疝氣消後，仍宜再熨兩三次，或更加以小茴香、胡椒諸末，同炒亦佳（用胡椒末時，不宜過五錢，小茴香可多用）。

西人降下之藥，慣用蓖麻子油、硫苦、旃那葉。按：蓖麻子油，即用蓖麻子製成，其藥來自英國，晶潔稠黏，所制甚精，每服二錢，多至五錢，通結甚效。惟其臭稍劣，且蓖麻子性近巴豆（壯人不過服五粒），制為油仍含有毒性，故服

後間有作嘔吐者。硫苦，即硫酸麻偃涅留謨，亦名瀉利鹽，係用朴硝製成，為白色透明之細粒結晶。其鹹苦之味減於朴硝，而其軟堅降下之力，亦稍弱於朴硝，每服二錢至四錢。至旃那葉，為印度熱帶地方所產之決明科。其葉之乾燥者，狀若小竹葉，毫無臭味，其色嫩而綠者良，老而微黃者稍弱，每服一錢，置碗中開水浸飲之，下便結甚效。其力雖近猛，而服後腸胃安然，不覺攻激，自然通下，較前二藥為獨良也。

治泄瀉方

【益脾餅】

治脾胃濕寒，飲食減少，長作泄瀉，完穀不化。

白朮（四兩）、乾薑（二兩）、雞內金（二兩）、熟棗肉（半斤）。

上藥四味，白朮、雞內金皆用生者，每味各自軋細焙熟（先軋細而後焙者，為其焙之易勻也）。再將乾薑軋細，共和棗肉，同搗如泥，作小餅。木炭火上炙乾，空心時，當點心，細嚼咽之。曾為友人制此方，和藥一料，服之而愈者數人。後屢試此方，無不效驗。

藥坊雞內金，因揀擇不淨，恒有包瓦石者。若入丸散劑中，甚非所宜。臨軋此藥時，須先親自檢點。

一婦人，年三十許，泄瀉數月，用一切治瀉諸藥皆不效。其脈不涼，亦非完穀不化。遂單用白朮、棗肉，如法為餅，服之而愈。此證並不用雞內金者，因雞內金雖有助脾胃消食之力，而究與瀉者不宜也。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

胞妹路姑，年四十餘歲，體素瘦弱，久患脾胃濕寒，胃脘時覺疼痛，飲食減少，常作泄瀉，完穀不化。因照益脾餅原方，為制一料，服之即愈。為善後計，又服一料，永久被除病根。

【扶中湯】

治泄瀉久不止，氣血俱虛，身體羸弱，將成勞瘵之候。

於朮（一兩，炒）、生山藥（一兩）、龍眼肉（一兩）。

小便不利者加椒目（三錢，炒搗）。

一婦人，年四十許。初因心中發熱，氣分不舒，醫者投以清火理氣之劑，遂泄瀉不止。更延他醫，投以溫補之劑，初服稍輕，久服，則瀉仍不止。一日夜四五次，遷延半載，以為無藥可治。後愚為診視，脈雖濡弱，而無弦數之象，知猶可治。但瀉久身弱，虛汗淋漓，心中怔忡，飲食減少，躊躇久之，為擬此方，補脾兼補心腎。數劑瀉止，而汗則加多。遂於方中加龍骨、牡蠣（皆不用煨）各六錢，兩劑汗止，又變為漫腫。蓋從前瀉時，小便短少，瀉止後，小便仍少，水氣下無出路，故蒸為汗，汗止又為漫腫也。斯非分利小便，使水下有出路不可。特其平素常覺腰際涼甚，利小便之藥，涼者斷不可用。遂用此方，加椒目三錢，連服十劑痊愈。

龍眼肉，味甘能補脾，氣香能醒脾，誠為脾家要藥。且心為脾母，龍眼肉色赤入心，又能補益心臟，俾母旺自能蔭子也。愚治心虛怔忡，恆俾單購龍眼肉斤許，飯甑蒸熟，徐徐服之，皆大有功效，是能補心之明徵。又大便下血者，多因脾虛不能統血，亦可單服龍眼肉而愈，是又補脾之明徵也。

【薯蕷粥】

治陰虛勞熱，或喘，或嗽，或大便滑瀉，小便不利，一切羸弱虛損之證。生懷山藥（一斤，軋細過羅）。

上藥一味，每服用藥七八錢，或至一兩。和涼水調入鍋內，置爐上，不住以箸攪之，兩三沸即成粥服之。若小兒服，或少調以白糖亦可。

此粥多服久服間有發悶者，摻以西藥百布聖一瓦同服，則無此弊，且更多進飲食。

按：白布聖，乃取吃乳之小豬、小牛胃中津液，而制為白粉者也。其性善助胃消化，每食後服二瓦，則化食甚速。然久服之，生脾胃依賴性，與健補脾胃之藥同服，則無斯弊。此藥東人更以糖制之，名含糖白布聖，以治小兒尤便。

門生吳書林，年二十一。羸弱發熱，脈象虛數，不能飲食，俾早晚服山藥粥，加百布聖，晌午單服玄參三錢，煎湯服。如此數日，食量增加，發熱亦愈，自此健壯。

一婦人，年三十餘。泄瀉數月不止，病勢垂危。請人送信於其父母，其父將往瞻視，詢方於愚。言從前屢次延醫治療，百藥不效，因授以山藥煮粥方，日服三次，兩日痊愈。又服數日，身亦康健。

一娠婦，日發癘風，其脈無受娠滑象，微似弦而兼數。知陰分虧損，血液短少也，亦俾煮山藥粥服之即愈。又服數次，永不再發。

奉天大東關，關氏少婦，素有勞疾，因產後暴虛，喘嗽大作。治以此粥，日服兩次，服至四五日，喘嗽皆愈。又服數日，其勞疾自此除根。

奉天大東關，學校教員鄭子綽之女，年五歲。秋日為風寒所束，心中發熱。醫者不知用辛涼表散，而純投以苦寒之藥，連服十餘劑，致脾胃受傷，大便滑瀉，月餘不止，而上焦之熱益熾。醫者皆辭不治，始求愚為診視，其形狀羸弱已甚，脈象細微浮數，表裡俱熱，時時噁心，不能飲食，晝夜猶瀉十餘次。治以此粥，俾隨便飲之，日四五次，一次不過數羹匙，旬日痊愈。

農村小兒，於秋夏之交，多得滑瀉證。蓋農家此時多飲涼水，而小兒尤喜飲之。農家此時多食瓜果，而小兒尤喜食之。生冷之物，皆傷脾胃，脾胃傷，則滑瀉隨之，此自然之理也。而滑瀉之證，在小兒為最難治。蓋小兒少陽之體，陰分未足，滑瀉不止，尤易傷陰分。往往患此證者，數日即渾身發熱，津短燥渴，小便不利，乾嘔懶食，唯嗜涼物。當此之際，欲滋其陰，而脾胃愈泥，欲健其脾，而真陰愈耗，涼潤溫補，皆不對證。而小兒又多苦服藥，病家又多姑息，以婉隨小兒之意，以致遷延歲月，竟成不治者多矣。惟山藥脾腎雙補，在上能清，在下能固，利小便而止大便，真良藥也。且又為尋常服食之物，以之作粥，少加沙糖調和，小兒必喜食之。一日兩次煮服，數日必愈。若係哺乳稚子，不能食粥，即

食之亦不能多者，但濃煮生山藥汁，飲之亦可。愚以此方治小兒多矣，志在救人者，甚勿以為尋常服食之物，而忽之也。

山藥之功效，一味薯蕷飲（在第一卷）後曾詳言之。至治泄瀉，必變飲為粥者，誠以山藥汁本稠黏，若更以之作粥，則稠黏之力愈增，大有留戀腸胃之功也。憶二十年前，歲試津門，偶患泄瀉，飲食下嚥，覺與胃腑不和，須臾腸中作響，遂即作瀉。濃煎甘草湯，調赤石脂細末，服之不效。乃用白粳米慢火煮爛熟作粥，儘量食之，頓覺脾胃舒和，腹中亦不作響，泄瀉遂愈。是知無論何物作粥，皆能留戀腸胃。而山藥性本收澀，故煮粥食之，其效更捷也。且大便溏瀉者，多因小便不利，山藥能滋補腎經，使腎陰足，而小便自利，大便自無溏瀉之患。

按：生芡實軋細作粥，收澀之力過於山藥，而多服久服易作滿悶，不若山藥作粥，可日日服之也。



【薯蕷雞子黃粥】

治泄瀉久，而腸滑不固者。即前薯蕷粥，加熟雞子黃三枚。

一人，年近五旬，泄瀉半載不愈，羸弱已甚。遣人來詢方，言屢次延醫服藥，皆分毫無效。授以薯蕷粥方，數日又來言，服之雖有效驗，瀉仍不止。遂俾用雞子數枚煮熟，取其黃捏碎，調粥中服之，兩次而愈。蓋雞子黃，有固澀大腸之功，且較雞子白，易消化也。以後此方用過數次，皆隨手奏效。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

河間劉君仲章，久仕鄂，年五十餘歲，漏瘡甚劇，屢治不痊，後兼泄瀉不止，蓋腸滑不固，故醫藥無靈。診其脈甚小弱，漸已成癆，囑其用薯蕷雞子黃粥。一劑瀉止。三服，精神煥發。十數日後，身體復原，此後凡遇虛瀉久不愈者，用之屢收特效。

【薯蕷芡苳湯】

治陰虛腎燥，小便不利，大便滑瀉，兼治虛勞有痰作嗽。

生山藥（一兩，軋細）、生車前子（四錢）。

上二味，同煮作稠粥服之，一日連服三次，小便自利，大便自固。蓋山藥能固大便，而陰虛小便不利者服之，又能利小便。車前子能利小便，而性兼滋陰，可為補腎藥之佐使（五子衍宗丸中用之），又能助山藥以止大便。況二藥皆汁漿稠粘，同作粥服之，大能留戀腸胃，是以致效也。治虛勞痰嗽者，車前宜減半。蓋用車前者，以其能利水，即能利痰，且性兼滋陰，於陰虛有痰者尤宜。而仍不敢多用者，恐水道過利，亦能傷陰分也。

按：車前子能利小便，而驟用之，亦無顯然功效。惟將車前子炒熟（此藥須買生者，自家經手炒，以微熟為度，過熟則無力），嚼服少許，須臾又服，約六點鐘服盡一兩，小便必陡然利下，連連不止。此愚實驗而得之方也。

又單用車前子兩半，煮稠粥，頓服之，治大便滑瀉亦甚效驗。黃姓媪，大便滑瀉，百藥不效，或語以此方，一服即愈。然必用生者煮之，始能成粥，若炒熟者，則不能成粥矣。

【加味天水散】

治暑日泄瀉不止，肌膚燒熱，心中燥渴，小便不利，或兼喘促。小兒尤多此證，用此方更佳。

生山藥（一兩）、滑石（六錢）、粉甘草（三錢）。作湯服。

此久下亡陰，又兼暑熱之證也，故方中用天水散以清溽暑之熱。而甘草份量，三倍原方（原方滑石六、甘草一，故亦名六一散），其至濃之味，與滑石之至淡者相濟，又能清陰虛之熱。又重用山藥之大滋真陰，大固元氣者，以參贊之。真陰足，則小便自利，元氣固，則泄瀉自止。且其汁漿稠粘，與甘草之甘緩者同用，又能逗留滑石，不至速於淡滲。俾其清涼之性由胃輸脾，由脾達肺，水精四布，下通膀胱，則周身之熱與上焦之燥渴喘促，有不倏然頓除者乎？

小兒少陽之體，最不耐熱，故易傷暑。而飲食起居，喜貪寒涼，故又易泄瀉。瀉久則亡陰作熱，必愈畏暑氣之熱，病熱循環相因，所以治之甚難也。此方藥止三味，而用意周匝，內傷外感，兼治無遺。一兩劑後，暑熱漸退，即滑石可以漸減，隨時斟酌用之，未有不應手奏效者。小兒暑月瀉久，虛熱上逆，與暑熱之氣相並，填塞胃口，恆至噁心嘔吐，不受飲食。此方不但清暑滋陰，和中止瀉，其重墜之性，又能鎮胃安衝，使上逆之熱與暑氣之熱，徐徐下行，自小便出，而其噁心嘔吐自止。初定此方時，授門人高如璧錄之。翌日，如璧還里，遇一孺子，

泄瀉月餘，身熱燥渴，嗜飲涼水，強與飲食，即噁心嘔吐，多方調治不愈。如璧投以此湯，一劑燥渴與泄瀉即愈其半。又服一劑，能進飲食，諸病皆愈。

【加味四神丸】

治黎明腹疼泄瀉。

補骨脂（六兩酒炒）、吳茱萸（三兩，鹽炒）、五味子（四兩，炒）、肉豆蔻（四兩，麩裏煨）、花椒（一兩微焙）、生硫黃（六錢）、大棗（八十一枚）、生薑（六兩，切片）。

先煮薑十餘沸，入棗同煮，至爛熟去薑，餘藥為細末，棗肉為丸，桐子大。人稟天地之氣而生，人身一小天地也。天地之一陽生於子，故人至夜半之時，腎係命門之處，有氣息息萌動，即人身之陽氣也。至黎明寅時，為三陽之候，人身之陽氣，亦應候上升，自下焦而將達中焦。其人或元陽之根柢素虛，當臍之處，或兼有凝寒遮蔽，即互相薄激，致少腹作疼。久之陽氣不勝凝寒，上升之機轉為下降，大便亦即溏下，此黎明作瀉之所由來也。夫下焦之陽氣少火也，即相火也，其火生於命門，而寄於肝膽，故四神方中，用補骨脂以補命門，吳茱萸以補肝膽，此培火之基也。然瀉者關乎下焦，實又關乎中焦，故又用肉豆蔻之辛溫者，以暖補脾胃。且其味辛而澀，協同五味之酸收者，又能固澀大腸，攝下焦氣化。且薑棗同煎，而丸以棗肉，使辛甘化合，自能引下焦之陽，以達於中焦也。然此藥病輕者可愈，病重者服之，間或不愈，以其補火之力猶微也。故又加花椒、硫黃之大補元陽者以助之，而後藥力始能勝病也（硫黃生用，理詳第八卷服生硫黃方下）。

治痰飲方

【理飲湯】

治因心肺陽虛，致脾濕不升，胃鬱不降，飲食不能運化精微，變為飲邪。停於胃口為滿悶，溢於膈上為短氣，漬滿肺竅為喘促，滯膩咽喉為咳吐粘涎。甚或陰霾佈滿上焦，心肺之陽不能暢舒，轉鬱而作熱。或陰氣逼陽外出為身熱，迫陽氣上浮為耳聾。然必診其脈，確乎弦遲細弱者，方能投以此湯。

於朮（四錢）、乾薑（五錢）、桂枝尖（二錢）、炙甘草（二錢）、茯苓片（二錢）、生杭芍（二錢）、桔紅（錢半）、川厚朴（錢半）。

服數劑後，飲雖開通，而氣分若不足者，酌加生黃耆數錢。

一婦人，年四十許，胸中常覺滿悶發熱，或旬日，或浹辰之間，必大喘一兩日。醫者用清火理氣之藥，初服稍效，久服轉增劇。後愚診視，脈沉細幾不可見。病家問「係何病因」？愚曰「此乃心肺陽虛，不能宣通脾胃，以致多生痰飲也。人之脾胃屬土，若地輿然。心肺居臨其上，正當太陽部位（膈上屬太陽，觀《傷寒論》〈太陽篇〉自知），其陽氣宣通，若日麗中天暖光下照，而胃中所納水穀，實借其陽氣宣通之力，以運化精微而生氣血，傳送渣滓而為二便。清升濁降，痰飲何由而生？惟心肺陽虛，不能如離照當空，脾胃即不能借其宣通之力，以運化傳送，於是飲食停滯胃口，若大雨之後，陰霧連旬，遍地污淖，不能乾滲，則痰飲生矣。痰飲既生，日積月累，鬱滿上焦則作悶，漬滿肺竅則作喘，阻遏心肺陽

氣，不能四布則作熱。醫者不識病源，猶用涼藥清之，勿怪其久而增劇也。遂為制此湯，方中用桂枝、乾薑，以助心肺之陽，而宣通之。白朮、茯苓、甘草，以理脾胃之濕，而淡滲之（茯苓、甘草同用最瀉濕滿）。用厚朴者，葉天士謂「厚朴多用則破氣，少用則通陽」，欲借溫通之性，使胃中陽通氣降，運水穀速於下行也。用桔紅者，助白朮、茯苓、甘草以利痰飲也。至白芍，若取其苦平之性，可防熱藥之上僭（平者主降），若取其酸斂之性，可制虛火之浮游（《本經》謂芍藥苦平，後世謂芍藥酸斂，其味實苦而微酸）。且藥之熱者，宜於脾胃，恐不宜於肝膽，又取其涼潤之性，善滋肝膽之陰，即預防肝膽之熱也。況其善利小便，小便利而痰飲自減乎。服之一劑，心中熱去，數劑後轉覺涼甚。遂去白芍，連服二十餘劑，胸次豁然，喘不再發。

一婦人，年三十許。身形素豐。胸中痰涎鬱結，若礙飲食，上焦時覺煩熱。偶服礞石滾痰丸有效，遂日日服之。初則飲食加多，繼則飲食漸減，後則一日不服，即不能進飲食。又久服之。竟分毫無效，日僅一餐，進食少許，猶不能消化。且時覺熱氣上騰，耳鳴欲聾，始疑藥不對證。求愚診治，其脈象浮大，按之甚軟。愚曰「此證心肺陽虛，脾胃氣弱，為服苦寒攻瀉之藥太過，故病證脈象如斯也」。擬治以理飲湯。病家謂「從前醫者，少用桂附，即不能容受，恐難再用熱藥」。愚曰「桂附原非正治心肺脾胃之藥，況又些些用之，病重藥輕，宜其不受。若拙擬理飲湯，與此證針芥相投，服之必無他變。若畏此藥，不敢輕服，單用乾薑五

錢，試服亦可」，病家根據愚言，煎服乾薑後，耳鳴即止，須臾覺胸次開通。繼投以理飲湯，服數劑，心中亦覺涼甚。將乾薑改用一兩，又服二十餘劑，病遂除根。

一婦人，年四十許。上焦滿悶煩躁，思食涼物，而偶食之，則滿悶益甚。且又黎明泄瀉，日久不愈，滿悶益甚，將成臌脹。屢次延醫服藥，多投以半補半破之劑，或佐以清涼，或佐以收澀，皆分毫無效。後愚診視，脈象弦細而遲。知係寒飲結胸，阻塞氣化。欲投以理飲湯，病家聞而遲疑，似不敢服，亦俾先煎乾薑數錢服之，胸中煩躁頓除。為其黎明泄瀉，遂將理飲湯去厚朴、白芍，加生雞內金錢半，補骨脂三錢，連服十餘劑，諸病皆愈。

一婦人，年近五旬，常覺短氣，飲食減少，屢次延醫服藥，或投以宣通，或投以升散，或投以健補脾胃，兼理氣之品，皆分毫無效。浸至飲食日減，羸弱不起，奄奄一息，病家亦以為不治之證矣。後聞愚在其鄰村，屢救危險之證，復延愚診視。其脈弦細欲無，頻吐稀涎。詢其心中，言覺有物杜塞胃口，氣不上達，知其為寒飲凝結也。遂投以理飲湯，方中乾薑改用七錢，連服三劑，胃口開通。又覺呼吸無力，遂於方中加生黃耆三錢，連服十餘劑，病痊愈。方書謂「飲為水之所結，痰為火之所凝」，是謂飲涼而痰熱也。究之飲證亦自分涼熱，其熱者，多由於憂思過度，甚則或至癡狂，雖有飲而恆不外吐。其涼者，則由於心肺陽虛，



如方名下所言種種諸情狀。且其證，時吐稀涎，常覺短氣，飲食廉少，是其明徵也（後世謂痰之稀者為飲，稠者為痰，與《金匱》所載四飲名義不同）。

邑韓蕙圃醫學傳家，年四十有四，偶得奇疾。臥則常常發搐，旋發旋止，如發寒戰之狀，一呼吸之間即愈。即不發搐時，人偶以手撫之，又輒應手而發。自治不效，廣求他醫治療皆不效。留連半載，病勢浸增。後愚診視，脈甚弦細，詢其飲食甚少，知係心肺脾胃陽分虛憊，不能運化精微，以生氣血。血虛不能榮筋，氣虛不能充體，故發搐也。必發於臥時者，臥則氣不順也。人撫之而輒發者，氣虛則畏人按也。授以理飲湯方，數劑，飲食加多，搐亦見愈。二十劑後，病不再發。

【理痰湯】

治痰涎鬱塞胸膈，滿悶短氣，或漬於肺中為喘促咳逆，停於心下為驚悸不寐，滯於胃口為脹滿噦呃，溢於經絡為肢體麻木或偏枯，留於關節，著於筋骨，為俯仰不利，牽引作疼，隨逆氣肝火上升，為眩暈不能坐立。

生芡實（一兩）、清半夏（四錢）、黑芝麻（三錢，炒搗）、柏子仁（二錢，炒搗）、生杭芍（二錢）、陳皮（二錢）、茯苓片（二錢）。

世醫治痰，習用宋《局方》二陳湯，謂為治痰之總劑，不知二陳湯能治痰之標，不能治痰之本。何者？痰之標在胃，痰之本原在於腎。腎主閉藏，以膀胱為腑者也。其閉藏之力，有時不固，必注其氣於膀胱，膀胱膨脹，不能空虛若谷，即不能吸引胃中水飲，速於下行而為小便，此痰之所由來也。又腎之上為血海，奇經之衝脈也。其脈上隸陽明，下連少陰。為其下連少陰也，故腎中氣化不攝，則衝氣易於上干。為其上隸陽明也，衝氣上干，胃氣亦多上逆，不能息息下行以運化水飲，此又痰之所由來也。此方以半夏為君，以降衝胃之逆，即重用芡實，以收斂衝氣，更以收斂腎氣，而厚其閉藏之力。腎之氣化治，膀胱與衝之氣化，自無不治，痰之本原清矣。用芝麻、柏實者，潤半夏之燥，兼能助芡實補腎也。用芍藥、茯苓者，一滋陰以利小便，一淡滲以利小便也。用陳皮者，非借其化痰之力，實借其行氣之力，佐半夏以降逆氣，並以行芡實、芝麻、柏實之滯膩也。

初制此方時，愚年未及壯，醫術無所知名。有李龍章先生，邑之宿醫也。見之大加嘗異，謂異日必成名醫。後果用此方屢次能建奇效，即痰證垂危，服之亦可挽救。

友人毛仙閣，曾治一婦人，年四十餘。上盛下虛，痰涎壅滯，飲食減少，動則作喘。他醫用二陳湯加減治之，三年，病轉增劇。後延仙閣診視，投以此湯，數劑病癒強半。又將芡實減去四錢，加生山藥五錢，連服二十餘劑，痰盡消，諸病皆愈。至今數年，未嘗反覆。

仙閣又嘗治一少婦，患癩風，初兩三月一發，浸至兩三日一發。脈滑、體豐，知係痰涎為恙，亦治以此湯，加赭石三錢，數劑竟能拔除病根。後與愚覲面述之。愚喜曰「向擬此湯時，原不知能治癩風，經兄加赭石一味，即建此奇功，大為此方生色矣」。

按：此方若治癩風，或加硃砂，或加生鐵落，或用磨刀水煎藥，皆可。

【龍虵理痰湯】

治因思慮生痰，因痰生熱，神志不寧。

清半夏（四錢）、生龍骨（六錢，搗細）、生牡蠣（六錢，搗細）、生赭石（三錢，軋細）、朴硝（二錢）、黑芝麻（三錢，炒搗）、柏子仁（三錢，炒搗）、生杭芍（三錢）、陳皮（二錢）、茯苓（二錢）。

此方，即理痰湯，以龍骨、牡蠣代芡實，又加赭石、朴硝也。其所以如此加減者，因此方所主之痰，乃虛而兼實之痰。實痰宜開，礞石滾痰丸之用硝黃者是也；虛痰宜補，腎虛泛作痰，當用腎氣丸以逐之者是也。至虛而兼實之痰，則必一藥之中，能開痰亦能補虛，其藥乃為對證，若此方之龍骨、牡蠣是也。蓋人之心腎，原相助為理，腎虛則水精不能上輸以鎮心，而心易生熱，是由腎而病及心也；心因思慮過度生熱，必暗吸腎之真陰以自救，則腎易虧耗，是由心而病及腎也。於是心腎交病，思慮愈多，熱熾液凝，痰涎壅滯矣。惟龍骨、牡蠣能寧心固腎，安神清熱，而二藥並用，陳修園又稱為治痰之神品，誠為見道之言，故方中用之以代芡實，而猶恐痰涎過盛，消之不能盡消，故又加赭石、朴硝以引之下行也。

一人，年三十餘，常覺膽怯，有時心口或少腹動後，須臾覺有氣起自下焦，上衝胸臆，鬱而不伸，連作呃逆，脖項發熱，即癲狂唱呼。其夾咽兩旁內，突起若瘰癧，而不若瘰癧之硬，且精氣不固，不寐而遺，上焦覺熱，下焦覺涼。其脈

左部平和，微嫌無力，右部直上直下（李士材《脈訣》云「直上直下，衝脈昭昭」），彷彿有力，而按之非真有力。從前屢次醫治皆無效，此腎虛致衝氣挾痰上衝，亂其心之神明也。投以此湯，減厚朴之半，加山萸肉（去淨核）五錢，數劑諸病皆愈，惟覺短氣。知係胸中大氣下陷（理詳第四卷升陷湯下），投以拙擬升陷湯，去升麻、柴胡，加桂枝尖二錢，兩劑而愈。蓋此證，從前原有逆氣上干，升麻、柴胡能升大氣，恐兼升逆氣。桂枝則升大氣，兼降逆氣，故以之代升、柴也。

一媪，年六十二，資稟素羸弱，偶當外感之餘，忽然妄言妄見，驚懼異常，手足擾動，飢渴不敢飲食，少腹塌陷，胸膈突起，脈大於平時一倍，重按無力。知係肝腎大虛，衝氣上逆，痰火上並，心神擾亂也。投以此湯，去朴硝，倍赭石，加生山藥、山萸肉（去淨核）、生地黃各六錢。又磨取鐵鏽水煎藥（理詳第七卷一味鐵養湯下），一劑即愈。又服一劑，以善其後。

【健脾化痰丸】

治脾胃虛弱，不能運化飲食，以至生痰。

生白朮（二兩）、生雞內金（二兩，去淨瓦石糟粕）。

上藥二味，各自軋細過羅，各自用慢火焙熟（不可焙過），煉蜜為丸梧桐子大。每服三錢，開水送下。

白朮純稟土德，為健補脾胃之主藥，然土性壅滯，故白朮多服久服，亦有壅滯之弊；有雞內金之善消瘀積者以佐之，則補益與宣通並用。俾中焦氣化，壯旺流通，精液四布，清升濁降，痰之根柢蠲除矣。又此方不但治痰甚效，凡廉於飲食者，服之莫不飲食增多。且久服之，並可消融腹中一切積聚。

初擬此方時，原和水為丸，而久服者間有咽乾及大便燥結之時。後改用蜜丸，遂無斯弊。

【期頤餅】

治老人氣虛，不能行痰，致痰氣鬱結，胸次滿悶，脅下作疼。凡氣虛痰盛之人，服之皆效，兼治疝氣。

生芡實（六兩）、生雞內金（三兩）、白麵（半斤）、白沙糖（不拘多少）。先將芡實用水淘去浮皮，曬乾，軋細，過羅。再將雞內金（中有瓦石糟粕去淨，份量還足）軋細，過羅，置盆內浸以滾水，半日許。再入芡實、白糖、白麵，用所浸原水，和作極薄小餅，烙成焦黃色，隨意食之。然芡實、雞內金須自監視，如法制好，不可委之於坊間也。

雞內金，雞之脾胃也，其中偶有瓦石銅鐵，皆有消化痕跡，脾胃之堅壯可知，以補助脾胃，大能運化飲食，消磨瘀積。食化積消，痰涎自除。再者，老人痰涎壅盛，多是下焦虛憊，氣化不攝，痰涎隨衝氣上泛。芡實大能斂衝固氣，統攝下焦氣化。且與麥麵同用，一補心，一補腎，使心腎相濟，水火調和，而痰氣自平矣。

或問「老人之痰，既由於氣虛不行，何不加以補助氣分之品」？答曰「凡補氣之藥，久服轉有他弊。此方所用藥品，二穀食，一肉食，復以沙糖調之，可作尋常服食之物，與他藥餌不同。且食之，能令人飲食增多，則氣虛者自實也。

此方去芡實，治小兒疳積痞脹，大人癥瘕積聚。

西人治老年之痰，喜用阿摩尼亞。其法，阿摩尼亞散七厘，或至十厘，白沙糖化水送服，日兩三次，大能愈老人咳嗽多吐痰涎。又方阿摩尼亞散一錢，黃連膏半錢，作二十粒，每服一二粒，日再服，大能補人精神。咳嗽有虛熱者，服之甚宜。

按：阿摩尼亞，西人取之有三法。一在駱駝糞中，一在獸骨中，一在火山之麓所產石中，與鹽強水相連。西人設法令離開，取出入藥，或作散，或作水。散色白而氣濃，功力補火補精神，頭昏嗅之即時蘇，頭疼因身虛軟弱者，亦宜嗅。但病人未覺時，不可令久嗅，防壞鼻肉也。其外用法，豬油調和，擦皮令紅熱，能引炎外出，與貼斑蝥膏藥同意。或用阿摩尼亞酒三四錢，樟腦一錢，熱油一二兩，融和擦皮，大有功力，肢體因風濕，交節作疼，及喉病（宜擦項間），並宜擦之。收貯宜用玻璃瓶，塞住瓶口，勿透氣。

西人又謂鹿茸為峻補之藥，因其中有阿摩尼亞。峻補功力不在鹿茸而在阿摩尼亞也。阿摩尼亞得火則飛去，故服食鹿茸法，應切片浸服，若不知此理，以火炙或湯煮，阿摩尼亞因火而飛，服之即無效矣。且鹿茸價昂，真者難得，以自他物中取出之阿摩尼亞代之，則功力相同，而價又甚廉，貧者亦可服矣。

按：鹿角所生之處，實為督脈經過之處。鹿之督脈最強，故其角最大，而長又甚速。鹿茸為角之胚胎，是以善補督脈，而督脈貫腦，故又善補腦也。人之腦髓屬陰，腦神屬陽，鹿茸中之阿摩尼亞，能補人腦中之陽。鹿茸中之赤血（鹿茸



初生皆含赤色，督脈之血所灌注也）與膠（角有膠茸，即有膠），能補人腦中之陰。鹿茸經炙與煮，阿摩尼亞或有飛去，而其中滋養之料，仍可補腦中陰分，迨其陰分充足，陽亦萌生，所謂一陰一陽互為之根也。西人用藥，多取目前捷效，而不為根本久遠之謀，故其論鹿茸，如此云云。然既有此說，炙與煮或亦鹿茸所忌，生軋細服之亦可，至其謂自他物中取出之阿摩尼亞可代鹿茸，然止能代鹿茸之補陽也。夫鹿茸初生，原係血胞，後漸成茸，成茸之後，猶含血液，其兼能滋陰分可知。陳修園曰「朱紫坊黃姓之女，年二十二歲。始因經閉，服行經之藥不效。後泄瀉不止，食少骨瘦如柴，服四神、八味之類，瀉益甚，而五更至天明數次，便後帶血。余主用《金匱》黃土湯，以乾薑易附子，每服加生鹿茸五錢。意以先止其泄瀉便紅，然後再調其經水，連服八劑，泄瀉如故，而經水通矣。又服五劑，瀉血俱止。後服六君子湯，加乾薑收功。可知鹿茸人衝、任、督三脈，大能補血，非無情之草木所可比也」。觀修園此案，則鹿茸之功用，誠非西人所能盡知矣。

西藥又有阿摩尼亞茴香精，係阿摩尼亞與茴香之精液化合之黃液。用之自一滴至十滴，和於二百倍之餾水中，服之亦善利痰，又能治肺癆、胃疼及小兒疹癩、吐瀉諸證。

【治痰點天突穴法】

（附：捏結喉法、明礬湯、麝香香油灌法）

點天突穴以治痰厥，善針灸者，大抵知之。而愚臨證體驗，尤曲盡點法之妙。穴在結喉（頸間高骨）下宛宛中。點時屈手大指（指甲長，須剪之），以指甲貼喉，指端著穴，直向下用力（勿斜向裡），其氣即通。指端，當一起一點，令痰活動，兼頻頻撓動其指端，令喉癢作嗽，其痰即出。

一婦人，年二十許，數日之前，覺胸中不舒，一日忽然昏昏似睡，半日不醒。適愚自他處歸，過其村。病家見愚喜甚，急求診治。其脈沉遲，兼有閉塞之象。唇潤動。凡唇潤動者，為有痰之徵。脈象，當係寒痰壅滯上焦過甚。遂令人扶之坐，以大指點其天突穴，俾其喉癢作嗽。約點半點鐘，咳嗽十餘次，吐出涼痰一碗，始能言語。又用乾薑六錢，煎湯飲下而愈。

歲在甲寅，客居大名之金灘鎮，適有巡防兵，自南樂移戍武邑，道出金灘。時當孟春，天寒，雨且雪，兵士衣裝盡濕，一兵未至鎮五里許，因凍甚，不能行步，其伙舁之至鎮，昏不知人。呼之不應，用火烘之，且置於溫暖之處，經宿未醒。聞愚在鎮，曾用點天突穴法，治癒一人，求為診治。見其僵臥不動，呼吸全無。按其脈，彷彿若動，以手掩其口鼻，每至呼吸之頃，微覺有熱，知猶可救。遂令人扶起俾坐，治以點天突穴之法，兼捏其結喉。約兩點鐘，咳嗽二十餘次，共吐涼痰碗半，始能呻吟。亦飲以乾薑而愈。

捏結喉法得之滄州友人張獻廷，其令人喉癢作嗽之力尤速。欲習其法者，可先自捏其結喉，如何捏法即可作嗽，則得其法矣。然當氣塞不通時，以手點其天突穴，其氣即通。捏結喉，必癢嗽吐痰後，其氣乃通。故二法宜相輔並用也。

按：西人謂，凍死者若近火，則寒氣內迫，難救。宜置寒冷室中，或樹陰無風處，將衣服脫除，用雪團或冷水，周身摩擦，或將身置冷水中，周身摩擦。及四肢漸次柔軟，行人工呼吸法，此時摩擦，更不宜間斷。迨患者自能呼吸，先被以薄衾，繼用稍濃之被，漸移入暖室。

按：此法必周身血肉，凍至冰凝，呼吸全無者，方宜用之。若凍猶不至若是之劇，用其法者又宜斟酌變通。究之其法雖善，若果有寒痰堵塞，必兼用點天突穴、捏結喉法，方能挽救。人工呼吸法，即患者呼吸全無，以法復其呼吸之謂也。其法，先將患者仰臥，俾其頭及胸稍高。啟其口，將舌周遭纏以細布條，緊結之，防舌退縮，及口之收閉。救護者跪於頭之旁，以兩手握患者之兩肘，上提過頭，俾空氣流入肺中，以助其吸後，須臾，將兩肘放下，緊壓於胸脅之際，以助其呼（助其呼時，更有人以兩手心按其胸及心窩更佳）。如此往復，行至患者自能呼吸而止，此為救急之良方，凡呼吸暴停者，皆可用此方救之。

【明礬湯】

生白礬，長於治頑痰熱痰，急證用之，誠有捷效。惟涼痰凝滯者，斷不可用。一婦人，年二十餘。因悲泣過度，痰涎杜塞胃口，其胃氣蓄極上逆，連連乾嘔。形狀又似呃逆，氣至咽喉不能上達。劇時，渾身抖戰，自掇其髮，有危在頃刻之狀。醫者用生薑自然汁灌之，益似不能容受。愚診視之，其脈左手沉濡，右三部皆無。然就其不受生薑觀之，仍當是熱痰杜塞，其脈象如此者，痰多能瘀脈也。且其面有紅光，亦係熱證。遂用生白礬二錢，化水俾飲之，即愈。此方愚用之屢次，審知其非寒痰杜塞，皆可隨手奏效。即痰厥至垂危者，亦能救愈。

【麝香香油灌法】

嚴用和云「中風不醒者，麝香清油灌之」。曾治一人，年二十餘。因夫妻反目，身軀忽然後挺，牙關緊閉，口出涎沫。及愚診視，已閱三點鐘矣。其脈閉塞不全，先用痧藥吹鼻，得嚏氣通，忽言甚渴。及詢之，仍昏昏如故，惟牙關微開，可以進藥。因憶嚴用和麝香清油灌法，雖治中風不醒，若治痰厥不醒，亦當有效。況此證形狀，未必非內風掀動，遂用香油二兩燉熱，調麝香一分，灌之即醒。又研砂四錢化水，治痰厥可代白礬，較白礬尤穩妥。若治寒痰杜塞，用胡椒三錢搗碎，煎湯灌之，可代生薑自然汁，與乾薑湯。

【附錄】

滄縣董壽山來函：

朱姓婦，產後旬餘，甚平順。適伊芳弟來視，午後食煮包一大碗，伊芳弟去後，竟猝然昏倒，四肢抽搐，不省人事。延為診視，六脈皆伏。當係產後五內空虛，驟而飽食填息，胸中大氣不能宣通，諸氣亦因之閉塞，故現此證。取藥不及，急用點天突穴及捏結喉法，又用針刺十宣及少商穴，須臾咳吐稠痰若干，氣順腹響，微汗而愈。

治癲狂方

【蕩痰湯】

治癲狂失心，脈滑實者。

生赭石（二兩，軋細）、大黃（一兩）、朴硝（六錢）、清半夏（三錢）、鬱金（三錢）。

【蕩痰加甘遂湯】

治前證，頑痰凝結之甚者，非其證大實不可輕投。其方，即前方加甘遂末二錢，將他藥煎好，調藥湯中服。

凡用甘遂，宜為末，水送服。或用其末，調藥湯中服。若入湯劑煎服，必然吐出。又凡藥中有甘遂，不可連日服之，必隔兩三日方可再服，不然亦多吐出。又其性與甘草相犯，用者須切記。

按：甘遂性猛烈走竄，後世本草，稱其以攻決為用，為下水之聖藥。痰亦水也，故其行痰之力，亦百倍於他藥。曾治一少年癲狂，醫者投以大黃六兩，連服兩劑，大便不瀉。後愚診視，為開此方，惟甘遂改用三錢。病家謂「從前服如許大黃，未見行動，今方中止用大黃兩許，豈能效乎」？愚曰「但服無慮也」。服後，大便連瀉七八次，降下痰涎若干，癲狂頓愈。見者以為奇異，彼蓋不知甘遂三錢之力，遠勝於大黃六兩之力也。

痰脈多滑，然非頑痰也。愚治此證甚多。凡癲狂之劇者，脈多瘀塞，甚或六脈皆不見，用開痰藥通之，其脈方出，以是知頑痰之能閉脈也。

神明之功用，原心與腦相輔而成。愚於資生湯（在第一卷）、定心湯（在第二卷）後曾發明之。癲狂之證，乃痰火上泛，瘀塞其心與腦相連竅絡，以致心腦不通，神明皆亂，故方中重用赭石，借其重墜之力，攝引痰火下行，俾竅絡之塞

者皆通，則心與腦能相助為理，神明自復其舊也。是以愚治此證之劇者，赭石恆有用至四兩者，且又能鎮甘遂使之專於下行，不至作嘔吐也。

癲者，性情顛倒，失其是非之明。狂者，無所畏懼，妄為妄言，甚或見聞皆妄。大抵此證初起，先微露癲意，繼則發狂。狂久不愈，又漸成癲，甚或知覺全無。蓋此證，由於憂思過度，心氣結而不散，痰涎亦即隨之凝結。又加以思慮過則心血耗，而暗生內熱。痰經熱煉，而膠粘益甚，熱為痰錮，而消解無從。於是痰火充溢，將心與腦相通之竅絡，盡皆瘀塞，是以其神明淆亂也。其初微露癲意者，痰火猶不甚劇也，迨痰火積而益盛，則發狂矣。是以狂之甚者，用藥下其痰，恆作紅色，痰而至於紅，其熱可知。迨病久，則所瘀之痰，皆變為頑痰。其神明淆亂之極，又漸至無所知覺，而變為癲證。且其知覺欲無，從前之憂思必減，其內熱亦即漸消，而無火以助其狂，此又所以變為癲也。然其初由癲而狂易治，其後由狂而癲難治。故此證，若延至三四年者，治癒者甚少。

西人於癲狂之證，專責之腦氣筋，謂人之腦中神明病久，而累及腦氣筋，以致腦氣筋失其常司，其性情動作，皆顛倒狂亂。是以西人外治之法，將病者先雜其發，以豬脬裝冰，置其頭顛，腦中之炎熱藉此可消，腦氣筋之病者，因此可愈矣。



按：腦氣筋亦名腦髓神經，其在脊者，名脊髓神經，共四十三對，每一對一主知覺，一主運動，散佈於全體之內外，以司全體之知覺運動，為其本源在腦，故可統稱腦氣筋，亦可統曰腦髓神經。

人之神明，原在心與腦兩處。金正希曰「人見一物必留一影於腦中，小兒善忘者，腦髓未滿也，老人健忘者，腦髓漸空也」。汪訥庵釋之曰「凡人追憶往事，恆閉目上瞪，凝神於腦，是影留於腦之明徵」。由斯觀之，是腦原主追憶往事也。其人或有思慕不遂，而勞神想像，或因從前作事差誤，而痛自懊懣，則可傷腦中之神。若因研究理解工夫太過，或有將來難處之事，而思患預防，躊躇太過，苦心思索，則多傷心中之神。究之，心與腦，原徹上徹下，共為神明之府。一處神明傷，則兩處神俱傷。腦中之神明傷，可累及腦氣筋。心中之神明傷，亦可累及腦氣筋。且腦氣筋傷，可使神明顛倒狂亂，心有所傷，亦可使神明顛倒狂亂也。曾治一少婦癲狂，強灌以藥，不能下嚥。遂俾以朴硝代鹽，每飯食之，病人不知，月餘而愈。誠以朴硝鹹寒屬水，為心臟對宮之藥，以水勝火，以寒勝熱，能使心中之火熱，消解無餘，心中之神明，自得其養，非僅取朴硝之能開痰也。

【調氣養神湯】

治其人思慮過度，傷其神明。或更因思慮過度，暗生內熱，其心肝之血，消耗日甚，以致心火肝氣，上衝頭部，擾亂神經，致神經失其所司，知覺錯亂，以是為非，以非為是，而不至於瘋狂過甚者。

龍眼肉（八錢）、柏子仁（五錢）、生龍骨（五錢，搗碎）、生牡蠣（五錢，搗碎）、遠志（二錢，不炙）、生地黃（六錢）、天門冬（四錢）、甘松（二錢）、生麥芽（三錢）、菖蒲（二錢）、甘草（錢半）、鏡面硃砂（三分，研細用頭次煎藥湯兩次送服），磨取鐵鏽濃水煎藥。

此乃養神明、滋心血、理肝氣、清虛熱之方也。龍眼肉色赤入心，且多津液，最能滋補血分，兼能保合心氣之耗散，故以之為主藥。柏樹杪向西北，稟金水之精氣，其實採於仲冬，飲受霜露，且多含油質，故善養肝，兼能鎮肝（水能養木，金能鎮木），又與龍骨、牡蠣之善於斂戢肝火肝氣者同用，則肝火肝氣自不挾心火上升，以擾亂神經也。用生地黃者，取其能瀉上焦之虛熱，更能助龍眼肉生血也。用天門冬者，取其涼潤之性，能清心寧神，即以開燥痰也。用遠志、菖蒲者，取其能開心竅、利痰涎，且能通神明也。用硃砂、鐵鏽水者，以其皆能鎮安神經，又能定心平肝也。用生麥芽者，誠以肝為將軍之官，中寄相火，若但知斂之鎮之，或激動其反應之力，故又加生麥芽，以將順其性，蓋麥芽炒用能消食，生用則善舒肝氣也。至於甘松，即西藥中之纈草也，其性在中醫用之以清熱、開瘀、逐痺；

在西醫則推為安養神經之妙藥，而兼能治霍亂轉筋，蓋神經不失其所司，則筋可不轉，此亦足見安養神經之效也。此取西說，以補中說所未備也。惟甘松在中藥中醫者罕用，若恐其陳蠹乏力，可向西藥房中買纈草用之。

〈 第 四 卷 〉

治大氣下陷方

【升陷湯】

治胸中大氣下陷，氣短不足以息。或努力呼吸，有似乎喘，或氣息將停，危在頃刻。其兼證，或寒熱往來，或咽乾作渴，或滿悶怔忡，或神昏健忘，種種病狀，誠難悉數。其脈象沉遲微弱，關前尤甚。其劇者，或六脈不全，或參伍不調。

生箭耆（六錢）、知母（三錢）、柴胡（一錢五分）、桔梗（一錢五分）、升麻（一錢）。

氣分虛極下陷者，酌加人參數錢，或再加山萸肉（去淨核）數錢，以收斂氣分之耗散，使升者不至復陷，更佳。若大氣下陷過甚，至少腹下墜，或更作疼者，宜將升麻改用錢半，或倍作二錢。

大氣者，充滿胸中，以司肺呼吸之氣也。人之一身，自飛門以至魄門，一氣主之。然此氣有發生之處，有培養之處，有積貯之處。天一生水，腎臟先成，而腎係命門之中（包腎之膜油，連於脊椎自下上數七節處），有氣息息萌動，此乃乾元資始之氣，《內經》所謂「少火生氣」也。此氣既由少火發生，以徐徐上達，培養於後天水穀之氣，而磅礴之勢成；績貯於膺胸空曠之府，而盤據之根固。是大氣者，原以元氣為根本，以水穀之氣為養料，以胸中之地為宅窟者也。夫均是氣也，至胸中之氣，獨名為大氣者，誠以其能撐持全身，為諸氣之綱領，包舉肺外，司呼吸之樞機，故鄭而重之曰大氣。夫大氣者，內氣也。呼吸之氣，外氣也。

人覺有呼吸之外氣與內氣不相接續者，即大氣虛而欲陷，不能緊緊包舉肺外也。醫者不知病因，猶誤認為氣鬱不舒，而開通之，其劇者，呼吸將停，努力始能呼吸，猶誤認為氣逆作喘，而降下之，則陷者益陷，凶危立見矣。其時作寒熱者，蓋胸中大氣，即上焦陽氣，其下陷之時非盡下陷也，亦非一陷而不升也。當其初陷之時，陽氣鬱而不暢則作寒，既陷之後，陽氣蓄而欲宣則作熱，迨陽氣蓄極而通，仍復些些上達，則又微汗而熱解。其咽乾者，津液不能隨氣上潮也；其滿悶者，因呼吸不利而自覺滿悶也；其怔忡者，因心在膈上，原懸於大氣之中，大氣既陷，而心無所附麗也；其神昏健忘者，大氣因下陷，不能上達於腦，而腦髓神經無所憑藉也。其證多得之力小任重，或枵腹力作，或病後氣力未復，勤於動作，或因泄瀉日久，或服破氣藥太過，或氣分虛極自下陷，種種病因不同，而其脈象之微細遲弱，與胸中之短氣，實與寒飲結胸相似。然診其脈似寒涼，而詢之果畏寒涼，且覺短氣者，寒飲結胸也；診其脈似寒涼，而詢之不畏寒涼，惟覺短氣者，大氣下陷也。且即以短氣論，而大氣下陷之短氣，與寒飲結胸之短氣，亦自有辨。寒飲結胸短氣，似覺有物壓之；大氣下陷短氣，常覺上氣與下氣不相接續。臨證者，當細審之（寒飲結胸詳第三卷理飲湯下）。

升陷湯以黃耆為主者，因黃耆既善補氣，又善升氣。且其質輕鬆，中含氧氣，與胸中大氣有同氣相求之妙用。惟其性稍熱，故以知母之涼潤者濟之。柴胡為少陽之藥，能引大氣之陷者自左上升。升麻為陽明之藥，能引大氣之陷者自右上升。

桔梗為藥中之舟楫，能載諸藥之力上達胸中，故用之為嚮導也。至其氣分虛極者，酌加人參，所以培氣之本也。或更加萸肉，所以防氣之渙也。至若少腹下墜或更作疼，其人之大氣直陷至九淵，必需升麻之大力者，以升提之，故又加升麻五分或倍作二錢也。方中之用意如此，至隨時活潑加減，尤在臨證者之善變通耳。

肺司呼吸，人之所共知也。而謂肺之所以能呼吸者，實賴胸中大氣，不惟不業醫者不知，即醫家知者亦鮮，並方書亦罕言及，所以愚初習醫時，亦未知有此氣。迨臨證細心體驗，始確知於肺氣呼吸之外，別有氣貯於胸中，以司肺臟之呼吸。而此氣，且能撐持全身，振作精神，以及心思腦力、官骸動作，莫不賴乎此氣。此氣一虛，呼吸即覺不利，而且肢體酸懶，精神昏憤，腦力心思，為之頓減。若其氣虛而且陷，或下陷過甚者，其人即呼吸頓停，昏然罔覺。愚既實驗得胸中有此積氣與全身有至切之關係，而尚不知此氣當名為何氣。涉獵方書，亦無從考證。惟《金匱》水氣門，桂枝加黃耆湯下，有「大氣一轉，其氣乃散」之語。後又見喻嘉言《醫門法律》謂「五臟六腑，大經小絡，晝夜循環不息，必賴胸中大氣，斡旋其間」，始知胸中所積之氣，當名為大氣。因憶向讀《內經》〈熱論篇〉有「大氣皆去，病日已矣」之語，王氏注大氣，為大邪之氣也。若胸中之氣，亦名為大氣，仲景與喻氏果何所本？且二書中亦未嘗言及下陷，於是復取《內經》，挨行逐句細細研究，乃知《內經》所謂大氣，有指外感之氣言者，有指胸中之氣

言者。且知《內經》之所謂宗氣，亦即胸中之大氣，並其下陷之說，《內經》亦嘗言之。煌煌聖言，昭如日星，何數千年著述諸家，不為之大發明耶？

今試取《內經》之文釋之。《靈樞》〈五味篇〉曰「穀始入於胃，其精微者，先出於胃之兩焦，以溉五臟，別出兩行營衛之道，其大氣之搏而不行者，積於胸中，命曰氣海。出於肺，循喉咽，故呼則出，吸則入。天地之精氣，其大數常出三入一，故穀不入半日則氣衰，一日則氣少矣」。愚思肺懸胸中，下無透竅，胸中大氣，包舉肺外，上原不通於喉，亦並不通於咽，而曰出於肺循喉咽，呼則出，吸則入者，蓋謂大氣能鼓動肺臟使之呼吸，而肺中之氣，遂因之出入也。所謂天地之精氣常出三入一者，蓋謂吸入之氣，雖與胸中不相通，實能隔肺膜通過四分之一以養胸中大氣，其餘三分吐出，即換出臟腑中混濁之氣，此氣化之妙用也。然此篇專為五味養人而發，故第言飲食能養胸中大氣，而實未發明大氣之本源。愚嘗思之，人未生時，皆由臍呼吸，其胸中原無大氣，亦無需乎大氣。迨胎氣日盛，臍下元氣漸充，遂息息上達胸中而為大氣。大氣漸滿，能鼓動肺膜使之呼吸，即脫離母腹，由肺呼吸而通天地之氣矣（西人謂肺之呼吸延髓主之，胸中大氣實又為延髓之原動力）。

至大氣即宗氣者，亦嘗深考《內經》而得之。《素問》〈平人氣象論〉曰「胃之大絡名虛裡，出於左乳下，其動應衣，脈宗氣也」。按虛里之絡，即胃輸水穀之氣於胸中，以養大氣之道路，而其貫膈絡肺之餘，又出於左乳下為動脈。是此



動脈，當為大氣之餘波，而曰宗氣者，是宗氣即大氣，為其為生命之宗主，故又尊之曰宗氣。其絡所以名虛里者，因其貫膈絡肺，遊行於胸中空虛之處也。

又《靈樞》〈邪客篇〉曰「五穀入於胃，其糟粕、津液、宗氣，分為三隧。故宗氣積於胸中，出於喉嚨，以貫心脈，而行呼吸焉」。觀此節經文，則宗氣即為大氣，不待詮解，且與《五味篇》同為伯高之言，非言出兩人，而或有異同。且細審「以貫心脈，而行呼吸」之語，是大氣不但為諸氣之綱領，並可為周身血脈之綱領矣。至大氣下陷之說，《內經》雖無明文，而其理實亦寓於《內經》中。《靈樞》〈五色篇〉雷公問曰「人無病卒死，何以知之」？黃帝曰「大氣入於臟腑者，不病而卒死」。夫人之膈上，心肺皆臟，無所謂腑也。經既統言臟腑，指膈下臟腑可知。以膈上之大氣，入於膈下之臟腑，非下陷乎？大氣既陷，無氣包舉肺外以鼓動其闢之機，則呼吸頓停，所以不病而猝死也。觀乎此，則大氣之關於人身者，何其重哉！

試再以愚所經驗者明之。友人趙厚庵丁外艱時，哀毀過甚，忽覺呼吸之氣，自胸中近喉之處如繩中斷。其斷之上半，覺出自口鼻，仍懸凶門之上；其下半，則覺漸縮而下，縮至心口，胸中轉覺廓然，過心以下，即昏然罔覺矣。時已仆於地，氣息全無。旁人代為扶持，俾盤膝坐。片時，覺縮至下焦之氣，又徐徐上升，升至心口，恍然覺悟。再升至胸，覺凶門所懸之氣，仍由口鼻入喉，與上升之氣相續。其斷與續，皆自覺有聲，仿佛小爆竹，自此遂呼吸復常。後向愚述其事，

且問其故。遂歷舉《內經》所論大氣數則告之，厚庵恍然悟曰「十年疑團，經兄道破矣。予嚮者誠大氣下陷也」。特是其大氣既陷而復能升者，因其下元充實，平時不失保養，且正在壯年，生機甚旺也。此事與《內經》參觀，胸中大氣之功用，不昭然共見哉！今並將愚生平治驗大氣下陷之案。擇其緊要者，列十餘則於下，以備參觀。

愚深憫大氣下陷之證，醫多誤治，因制升陷湯一方，又有回陽升陷湯、理鬱升陷湯二方，皆由升陷湯加減而成。此三升陷湯後，附載治癒之案，其病之現狀。有呼吸短氣者，有心中怔忡者，有淋漓大汗者，有神昏健忘者，有聲顫身動者，有寒熱往來者，有胸中滿悶者（此因呼吸不利而自覺滿悶，若作滿悶治之立危），有努力呼吸似喘者（此種現狀尤多，乃肺之呼吸將停，其人努力呼吸以自救，若作喘證治之立危），有咽乾作渴者，有常常呵欠者，有肢體痿廢者，有食後易饑者，有二便不禁者，有癱閉身腫者，有張口呼氣外出而氣不上達，肛門突出者，在女子有下血不止者，更有經水逆行者（證因氣逆者多，若因氣陷致經水逆行者曾見有兩人，皆投以升陷湯治癒），種種病狀實難悉數。其案亦不勝錄。治癒大氣下陷之案，略登數則於下，以備考徵。

有兄弟二人，其兄年近六旬，弟五十餘。冬日畏寒，共處一小室中，熾其煤火，復嚴其戶牖。至春初，二人皆覺胸中滿悶，呼吸短氣。蓋因戶牖不通外氣，屋中氧氣全被煤火著盡，胸中大氣既乏氧氣之助，又兼受炭氣之傷，日久必然虛

陷，所以呼吸短氣也。因自覺滿悶，醫者不知病因，竟投以開破之藥。迨開破益覺滿悶，轉以為藥力未到，而益開破之。數劑之後，其兄因誤治，竟至不起。其弟服藥亦增劇，而猶可支持，遂延愚診視。其脈微弱而遲，右部尤甚，自言心中發涼，少腹下墜作疼，呼吸甚覺努力。知其胸中大氣下陷已劇，遂投以升陷湯，升麻改用二錢，去知母，加乾薑三錢。兩劑，少腹即不下墜，呼吸亦順。將方中升麻、柴胡、桔梗皆改用一錢，連服數劑而愈。其處塾中教員黃鑫生，滄州博雅士也。聞愚論大氣下陷之理，以為聞所未聞。遂將所用之方，錄十餘紙，詳加詮解，遍寄其處之業醫者。

或曰「室中有爐火，亦冬日衛生之道，據此案觀之，爐火不可令旺乎」？答曰「非也。按化學之理，爐火旺，則所出之氣為氧二分碳一分，於人無損。若不旺，則所出之氣為碳氧參半，轉有損於人，是屋中爐火之熱，固不可過度，然不可不旺也。特是火非氧氣不著，人之呼吸，亦須與不能離氧氣。惟戶牖能通外氣，俾屋中之氧氣，足供爐火與人呼吸之用而有餘，人處其間，始能無病。不但此也，西人講衛生者，恒移置病人於空氣最佳之處。且細審其地點之空氣，俾與所受之病，各有所宜，則病人居之，自易調治。吾中華衛生之道不講，一有疾病，恐體弱不能禁風，必先致慎戶牖。稍冷更熾其爐火，厚其帷幕。遇有急證險證，眷屬戚友，更多衛侍看護，致令一室之中，皆碳氣薰蒸，無病者且將有病，有病者何以能愈。是以愚生平臨證，見病人之室，安置失宜，必懇切告之。至無論有病無

病，睡時喜以被蒙頭，尤非所宜。試觀中碳氣者，其人恒昏不知人，氣息欲無，急移置當風之處，得呼吸新鮮之空氣，即漸蘇醒，不可悟衛生之理乎」。

或疑大氣下陷者，氣不上達也，喘者，氣不下降也，何以歷述大氣下陷之病狀，竟有努力呼吸有似乎喘者？答曰「此理不易驟解，仍宜以治癒之案證之。一人，年二十餘。因力田勞苦過度，致胸中大氣下陷，四肢懶動，飲食減少，自言胸中滿悶，其實非滿悶乃短氣也，病人不善述病情，往往如此。醫者不能自審病因，投以開胸理氣之劑，服之增重。又改用半補半破之劑，服兩劑後，病又增重。又延他醫，投以桔梗、當歸、木香各數錢，病大見愈，蓋全賴桔梗升提氣分之力也，醫者不知病癒之由，再服時，竟將桔梗易為蘇梗，升降易性，病驟反覆。自此不敢服藥。遲延二十餘日，病勢垂危，喘不能臥，晝夜倚壁而坐，假寐片時，氣息即停，心下突然脹起，急呼醒之，連連喘息數口，氣息始稍續，倦極偶臥片時，覺腹中重千斤，不能轉側，且不敢仰臥，其脈乍有乍無，寸關尺或一部獨見，或兩部同見，又皆一再動而止，此病之危，已至極點。因確知其為大氣下陷，遂放膽投以生箭耆一兩，柴胡、升麻、淨萸肉各二錢。煎服片時，腹中大響一陣，有似昏憤，蘇息須臾，恍然醒悟，自此呼吸復常，可以安臥，轉側輕鬆。其六脈皆見，仍有雀啄之象。自言百病皆除，惟覺胸中煩熱，遂將方中升麻、柴胡皆改用錢半，又加知母、玄參各六錢，服後脈遂復常。惟左關三五不調，知其氣分之根柢猶未實也，遂用野臺參一兩，玄參、天冬、麥冬（帶心）各三錢，兩劑痊愈。

蓋人之胸中大氣，實司肺臟之呼吸。此證因大氣下陷過甚，呼吸之機關將停，遂勉強鼓舞肺氣，努力呼吸以自救，其迫促之形有似乎喘，而實與氣逆之喘有天淵之分。觀此證假寐片時，肺臟不能努力呼吸，氣息即無，其病情可想也。設以治氣逆作喘者治此證之喘，以治此證之喘者治氣逆作喘，皆凶危立見。然欲辨此二證，原有確實徵驗：凡喘證，無論內傷外感，其劇者必然肩息（《內經》謂喘而肩上抬者為肩息）；大氣下陷者，雖至呼吸有聲，必不肩息。蓋肩息者，因喘者之吸氣難，不肩息者，因大氣下陷者之呼氣難也。欲辨此證，可作呼氣難與吸氣難之狀，以默自體驗，臨證自無差謬。又喘者之脈多數，或有浮滑之象，或尺弱寸強，大氣下陷之脈，皆與此成反比例，尤其明徵」。

或問「喘者皆係氣上逆，而不能下達。此證係胸中大氣下陷，何以亦作喘乎」？答曰「人之胸中大氣，實司肺臟之呼吸，此證因大氣下陷過甚，呼吸之機關將停，遂勉強鼓舞肺臟，努力呼吸以自救，其迫促之形有似乎喘，而實與氣逆之喘有天淵之分。觀此證假寐之時，肺臟不能努力呼吸，氣息即無，其病情可想也。設以治氣逆作喘者治此證，以治此證之喘者治氣逆作喘，皆凶危立見。臨證者當細審之」。

一人，年四十八。素有喘病，薄受外感即發，每歲反覆兩三次，醫者投以小青龍加石膏湯輒效。一日反覆甚劇，大喘晝夜不止。醫者投以從前方兩劑，分毫無效。延愚診視，其脈數至六至，兼有沉濡之象，疑其陰虛不能納氣，故氣上逆

而作喘也。因其脈兼沉濡，不敢用降氣之品，遂用熟地黃、生山藥、枸杞、玄參大滋真陰之品，大劑煎湯，送服人參小塊（人參用塊之理詳第二卷十全育真湯下）二錢。連服三劑，喘雖見輕，仍不能止。復診視時，見令人為其捶背，言背常發緊，捶之則稍輕，呼吸亦稍舒暢。此時，其脈已不數，仍然沉濡。因細詢此次反覆之由，言曾努力搬運重物，當時即覺氣分不舒，遲兩三日遂發喘。乃恍悟，此證因陰虛不能納氣，故難於吸。因用力太過，大氣下陷，故難於呼。其呼吸皆須努力，故呼吸倍形迫促。但用納氣法治之，止治其病因之半，是以其喘亦止愈其半也。遂改用升陷湯，方中升麻、柴胡、桔梗，皆不敢用，以桂枝尖三錢代之。又將知母加倍，再加玄參四錢，連服數劑痊愈。

按：此證雖大氣下陷，而初則實兼不納氣也。升麻、柴胡、桔梗，雖能升氣，實與不納氣之證有礙，用之恐其證仍反覆。惟桂枝性本條達，能引臟腑之真氣上行，而又善降逆氣。仲景苓桂朮甘湯，用之以治短氣，取其能升真氣也。桂枝加桂湯，用之以治奔豚，取其能降逆氣也。且治咳逆上氣吐吸（喘也）《本經》原有明文。既善升陷，又善降逆，用於此證之中，固有一無二之良藥也。

或問「桂枝一物耳，何以既能升陷又能降逆」？答曰「其能升陷者，以其枝直上而不下垂，且色赤屬火，而性又溫也。其能降逆者，以其味辛，得金氣而善平肝木，凡逆氣之緣肝而上者（逆氣上升者多由於肝），桂枝皆能鎮之。大抵最

良之藥，其妙用恆令人不測。拙擬參楮鎮氣湯（在第二卷）後，有單用桂枝治一奇病之案，可以參觀」。

一人，年二十餘，動則作喘，時或咳嗽。醫治數年，病轉增劇，皆以為勞疾不可治。其脈非微細，而指下若不覺其動，知其大氣下陷，不能鼓脈外出，以成起伏之勢也。投以升陷湯，加人參、天冬各三錢，連服數劑而愈。因其病久，俾於原方中減去升麻，為末煉蜜作丸藥，徐服月餘，以善其後。

一人，年二十四。胸中滿悶，晝夜咳嗽，其咳嗽時，脅下疼甚。診其脈象和平，重按微弦無力。因其脅疼，又兼胸滿，疑其氣分不舒，少投以理氣之藥。為其脈稍弱，又以黃耆佐之，而咳嗽與滿悶益甚，又兼言語聲顫動。乃細問病因，知其素勤稼穡，因感冒懶食，猶枵腹力作，以致如此。據此病因，且又服理氣之藥不受，其為大氣下陷無疑。遂投以升陷湯，四劑，其病脫然。

按：此證之形狀，似甚難辨，因初次未細詰問，致用藥少有差錯，猶幸迷途未遠，即能醒悟，而病亦旋愈。由斯觀之，臨證者，甚勿自矜明察，而不屑瑣瑣細問也。

一人，年四十許，失音半載，漸覺咽喉發緊，且常潰爛，畏風惡寒，冬日所著衣服，至孟夏猶未換。飲食減少，浸成虛勞，多方治療，病轉增劇。診其脈，兩寸微弱，毫無軒起之象，知其胸中大氣下陷也。投以升陷湯，加玄參四錢，兩劑，咽喉即不發緊。遂減去升麻，又連服十餘劑，諸病皆愈。

一人，年四十許。每歲吐血二三次，如此四年，似有一年甚於一年之勢，其平素常常咳嗽，痰涎壅滯，動則作喘，且覺短氣，其脈沉遲微弱，右部尤甚。知其病源係大氣下陷，投以升陷湯，服三劑，諸病皆愈，遂減去升麻，加龍骨、牡蠣（皆不用煨）、生地黃各六錢，又將方中知母改用五錢，連服三劑，諸病皆愈，遂減去升麻，又服數劑以善其後。

或問「吐血之證，多由於逆氣上干而血隨氣升。此證既大氣下陷，當有便血、溺血之證，何以竟吐血乎」？答曰「此證因大氣陷後，肺失其養，勞嗽不已，以致血因嗽甚而吐出也。究之胸中大氣，與上逆之氣原迥異。夫大氣為諸氣之綱領，大氣陷後，諸氣無所統攝，或更易於上干。且更有逆氣上干過甚，排擠胸中大氣下陷者（案詳第二卷參赭鎮氣湯下），至便血、溺血之證，由於大氣下陷者誠有之，在婦女更有因之血崩者（案詳第八卷固衝湯下）。又轉有因大氣下陷，而經血倒行，吐血、衄血者（案詳第八卷加味麥門冬湯下）。是知大氣既陷，諸經之氣無所統攝，而或上或下錯亂妄行，有不能一律論者。

或問「龍骨、牡蠣為收澀之品，大氣陷者宜升提，不宜收澀。今方中重用二藥皆至六錢，獨不慮其收澀之性，有礙大氣之升乎」？答曰「龍骨、牡蠣最能攝血之本源。此證若但知升其大氣，恐血隨升氣之藥復妄動，於升陷湯中加此二藥，所以兼顧其血也。且大氣下陷後，慮其耗散，有龍骨、牡蠣以收斂之，轉能輔升陷湯之所不逮。況龍骨善化瘀血（本經主癥瘕），牡蠣善消堅結（觀其治療癰可



知），一藥並用，能使血之未離經者永安其宅，血之已離經者盡化其滯。加於升陷湯中，以治氣陷兼吐血之證，非至穩善之妙藥乎！」

按：吐血證最忌升麻。此證兼吐血，服升陷湯時，未將升麻減去者，因所加之龍骨、牡蠣原可監製之，而服藥之時，吐血之證猶未反復也。若恐升麻有礙血證時，亦可減去之，多加柴胡一錢。

一人，年四十餘。小便不利，周身漫腫，自腰以下，其腫尤甚。上焦痰涎杜塞，劇時幾不能息。咳嗽痰中帶血，小便亦有血色。遷延半載，屢次延醫服藥，病轉增劇。其脈滑而有力，疑是濕熱壅滯，詢之果心中發熱。遂重用滑石、白芍以滲濕清熱，佐以柴胡、乳香、沒藥以宣通氣化。為其病久，不任疏通，每劑藥加生山藥兩許，以固氣滋陰。又用藥汁，送服三七末二錢，以清其血分。數劑熱退血減，痰涎亦少，而小便仍不利。偶於診脈時，見其由臥起坐，因稍費力，連連喘息十餘口，呼吸始順。且其脈從前雖然滑實，究在沉分。此時因火退，滑實既減，且有濡象。恍悟此證確係大氣下陷。遂投以升陷湯，知母改用六錢，又加玄參五錢，木通二錢，一劑小便即利。又服數劑，諸病痊愈。

一人，年四十七。咳嗽短氣，大汗如洗，晝夜不止，心中怔忡，病勢危急。遣人詢方，俾先用山萸肉（去淨核）二兩煎服，以止其汗。翌日迎愚診視，其脈微弱欲無，呼吸略似迫促。自言大汗雖止，而仍有出汗之時，怔忡見輕，仍覺短

氣。知其確係大氣下陷，遂投以升陷湯，為其有汗，加龍骨、牡蠣（皆不用煨）各五錢，三劑而愈。

一人，年二十。臥病兩月不愈，精神昏憤，肢體酸懶，亦不覺有所苦，屢次延醫診視，莫審病情，用藥亦無效。一日忽然不能喘息，張口呼氣外出，而氣不上達，其氣蓄極之時，肛門突出，約二十呼吸之頃，氣息方通。一晝夜之間，如此者八九次。診其脈，關前微弱不起，知其大氣下陷，不能司肺臟呼吸之樞機也。遂投以人參一兩，柴胡三錢，知母二錢，一劑而呼吸順。又將柴胡改用二錢，知母改用四錢，再服數劑，宿病亦愈。

按：此證臥病數月，氣分虧損太甚，故以人參代黃耆。且此時係初次治大氣下陷證，升陷湯方猶未擬出也。

又按：此證初得時，當係大氣下陷，特其下陷未劇，故呼吸之間不覺耳。人參、黃耆皆補氣兼能升氣者也，然人參補氣之力勝於黃耆；黃耆升氣之力勝於人參，故大氣陷而氣分之根柢猶未傷者，當用黃耆；大氣陷而氣分之根柢兼傷損者，當用人參。是以氣分虛極下陷者，升陷湯方後，曾注明酌加人參數錢也。

一婦人，年二十餘。動則自汗，胸脅滿悶，心中怔忡。其脈沉遲微弱，右部尤甚為其脈遲，疑是心肺陽虛，而詢之不覺寒涼，知其為大氣下陷也。其家適有預購黃耆一包，且證兼自汗，升、柴亦不宜用，遂單用生黃耆一兩煎湯，服後諸病皆愈。有習醫者董生捷亭在座，疑而問曰「《本經》黃耆原主大風，有透表之

力，生用則透表之力益大，與自汗證不宜。其性升而能補，有膨脹之力，與滿悶證不宜。今單用生黃耆兩許，而兩證皆愈，並怔忡亦愈，其義何居？答曰「黃耆誠有透表之力，故氣虛不能逐邪外出者，用於發表藥中即能得汗，若其陽強陰虛者，誤用之則大汗如雨，不可遏抑。惟胸中大氣下陷，致外衛之氣無所統攝而自汗者，投以黃耆則其效如神。至於證兼滿悶而亦用之者，確知其為大氣下陷，呼吸不利而作悶，非氣鬱而作悶也，至於心與肺同懸胸中，皆大氣之所包舉，大氣升則心有所依，故怔忡自止也」。董生聞之，欣喜異常曰「先生真我師也」。繼加桔梗二錢，知母三錢，又服兩劑，以善其後。

一婦人，因臨盆努力過甚，產後數日，脅下作疼，又十餘日，更發寒熱。其翁知醫，投以生化湯兩劑，病大見愈。遲數日，寒熱又作。遂延他醫調治，以為產後瘀血為恙，又兼受寒，於活血化瘀藥中，重加乾薑。數劑後，寒熱益甚，連連飲水，不能解渴。時當仲夏，身熱如炙，又復嚴裹厚被，略以展動，即覺冷氣侵膚。後愚診視，左脈沉細欲無，右脈沉緊，皆有數象。知其大氣下陷，又為熱藥所傷也。其從前服生化湯覺輕者，全得芎藭升提之力也。治以升陷湯，將方中知母改用八錢，又加玄參六錢，一劑而寒熱已，亦不作渴。從前兩日不食，至此遂能飲食。惟脅下微疼，繼服拙擬理鬱升陷湯（在後），二劑痊愈。

按：產後雖有實熱，若非寒溫外感之熱，忌用知母，而不用玄參，以玄參原為治產乳之藥，《本經》有明文也。此證雖得之產後，時已逾月，故敢放膽重用知母。

或問「緊為受寒之脈，故傷寒麻黃湯證，其脈必緊。此證既為熱藥所傷，何以其右脈沉緊」？答曰「脈沉緊者，其脈沉而有力也。夫有力當作洪象，此證因大氣下陷，雖內有實熱，不能鼓脈作起伏之勢，故不為洪而為緊，且為沉緊也。其獨見於右部者，以所服乾薑之熱，胃先受之也」。

按：脈無起伏為弦，弦而有力，即緊脈也。若但弦，則為寒矣。仲景（平脈篇）謂「雙弦者寒，偏弦者飲」。究之飲為稀涎，亦多係因寒而成也。

一婦人，年三十餘，得下痿證，兩腿痿廢，不能屈伸，上半身常常自汗，胸中短氣，少腹下墜，小便不利，寢不能寐。延醫治療數月，病勢轉增。診其脈細如絲，右手尤甚。知其係胸中大氣下陷，欲為疏方。病家疑而問曰「大氣下陷之說，從前醫者，皆未言及。然病之本源，既為大氣下陷，何以有種種諸證乎」？答曰「人之大氣雖在胸中，實能統攝全身，今因大氣下陷，全身無所統攝，肢體遂有廢而不舉之處，此兩腿之所以痿廢也。其自汗者，大氣既陷，外衛之氣亦虛也。其不寐者，大氣既陷，神魂無所根據附也。小便不利者，三焦之氣化，不升則不降，上焦不能如霧，下焦即不能如瀆也。至於胸中短氣，少腹下墜，又為大氣下陷之明徵也」。遂治以升陷湯，因其自汗，加龍骨、牡蠣（皆不用煨）各五

錢，兩劑汗止，腿稍能屈伸，諸病亦見愈。繼服拙擬理鬱升陷湯數劑，兩腿漸能著力。然痿廢既久，病在筋脈，非旦夕所能脫然。俾用舒筋通脈之品，製作丸藥，久久服之，庶能痊愈。

一婦人，產後四五日，大汗淋漓，數日不止，形勢危急，氣息奄奄，其脈微弱欲無，問其短氣乎？心中怔忡且發熱乎？病人不能言而頷之。知其大氣下陷，不能吸攝衛氣，而產後陰分暴虛，又不能維繫陽分，故其汗若斯之脫出也。遂用生黃耆六錢，玄參一兩，山萸肉（去淨核）、生杭芍各五錢，桔梗二錢，一劑汗減，又服兩劑，諸病皆愈。從前六七日未大便，至此大便亦通。

一婦人，年三十許，胸中滿悶，不能飲食。醫者純用開破之藥數劑，忽發寒熱，脈變為遲，醫者見脈遲，又兼寒熱，方中加黃耆、桂枝、乾薑各數錢，而仍多用破氣之藥。購藥未服，愚應其鄰家延請，適至其村，病家求為診視，其脈遲而且弱。問其呼吸覺短氣乎？答曰「今於服藥數劑後，新添此證」。知其胸中大氣因服破氣之藥下陷。時醫者在座，不便另為疏方。遂調醫曰「子方中所加之藥，極為對證，然此對其胸中大氣下陷，破氣藥分毫不可再用」。遂單將所加之黃耆、桂枝、乾薑煎服。寒熱頓已，呼吸亦覺暢舒。後醫者即方略為加減，又服數劑痊愈。

一婦人，年二十餘，資稟素羸弱，因院中失火，驚恐過甚，遂覺呼吸短氣，心中怔忡，食後更覺氣不上達，常作太息。其脈近和平，而右部較沉。知其胸中

大氣，因驚恐下陷，《內經》所謂恐則氣陷也。遂投以升陷湯，為心中怔忡，加龍眼肉五錢，連服四劑而愈。

一婦人，年二十餘，因境多拂鬱，常作惱怒，遂覺呼吸短氣，咽乾作渴，劇時，覺氣息將停，努力始能呼吸。其脈左部如常，右部來緩去急，分毫不能鼓指。《內經》謂宗氣貫心脈，宗氣即大氣也。此證蓋因常常惱怒，致大氣下陷，故不能鼓脈外出，以成波瀾也。遂投以升陷湯，為其作渴，將方中知母改用六錢，連服三劑，病癒強半，右脈亦較前有力，遂去升麻，又服數劑痊愈。

或問「《內經》謂恐則氣陷，前案中已發明之。然《內經》又謂怒則氣逆也，何以與此案中之理，相矛盾乎？」答曰「《內經》所謂怒則氣逆者，指肝膽之氣而言，非謂胸中大氣也。然肝膽之氣上逆，上衝大氣亦上逆者，故人當怒急之時，恆有頭目眩暈，其氣呼出不能吸入，移時始能呼吸，此因大氣上逆也。有肝膽之氣上逆，排擠大氣轉下陷者，拙擬參赭鎮氣湯下，有治驗之案可考也。況大氣原賴穀氣養之，其人既常惱怒，納穀必少，大氣即暗受其傷，而易下陷也」。

門人高如璧曾治一人，年三十餘。因枵腹勞力過度，致大氣下陷。寒熱往來，常常短氣，大汗淋漓，頭疼咽乾，畏涼嗜睡，遷延日久，不能起床。醫者誤認為肝氣鬱結，投以鱉甲、枳實、麥芽諸藥，病益劇。診其脈，左寸關尺皆不見，右部脈雖見，而微弱欲無。知其為大氣下陷，投以升陷湯，加人參三錢，一劑左脈即見，又將知母改用五錢，連服數劑痊愈。

如璧又治一婦人，年三十許，胸中短氣，常常出汗，劇時覺氣不上達，即昏不知人，移時始蘇，睡時恆自驚寤。診其脈，微弱異常，知其胸中大氣下陷甚劇。遂投以升陷湯，知母改用五錢，又加人參、萸肉（去淨核）各三錢，連服數劑痊愈。

大氣下陷之證，不必皆內傷也，外感證亦有之。

一人年四十許，於季春得溫證，延醫調治不愈，留連兩旬，病益沉重。後愚診視，其兩目清白無火，竟昏憤不省人事，舌乾如磋，卻無舌苔。問之亦不能言語，周身皆涼，其五六呼吸之頃，必長出氣一口。其脈左右皆微弱，至數稍遲，此亦胸中大氣下陷也。蓋大氣不達於腦中則神昏，大氣不潮於舌本則舌乾，神昏舌乾，故問之不能言也。其周身皆涼者，大氣陷後，不能宣佈於營衛也。其五六呼吸之頃，必長出氣者，大氣陷後，胸中必覺短氣，故太息以舒其氣也。遂用野臺參一兩、柴胡二錢，煎湯灌之，一劑見輕，兩劑痊愈。

按：此證從前原有大熱，屢經醫者調治，大熱已退，精神愈憊。醫者諉為不治，病家亦以為氣息奄奄，待時而已。乃遲十餘日，而病狀如故，始轉念或可挽回，而迎愚診視。幸投藥不瘥，隨手奏效，是知藥果對證，誠有活人之功也。

又按：此證若不知為大氣下陷，見其舌乾如斯，但知用熟地、阿膠、枸杞之類滋其津液，其滯泥之性，填塞膈胸，既陷之大氣將何由上達乎？愚願業醫者，

凡遇氣分不舒之證，宜先存一大氣下陷理想，以細心體察，倘遇此等證，庶可挽回人命於頃刻也。

一人，年三十餘。於初夏得溫病，醫者用涼藥清解之，兼用枳實、青皮破氣諸品，連服七八劑，譫語不省人事，循衣摸床，周身顫動。再延他醫，以為內風已動，辭不治。後愚診視，其脈五至，浮分微弱，而重按似有力，舌苔微黃，周身肌膚不熱，知其溫熱之邪，隨破氣之藥下陷已深，不能外出也。遂用生石膏二兩，知母、野臺參各一兩，煎湯兩茶杯，分二次溫服。自午至暮，連進二劑，共服藥四次，翌日精神清爽，能進飲食，半日進食五次，猶饑而索食。看護者不敢復與，則周身顫動，復發譫語，疑其病又反覆，求再診視。其脈象大致和平，而浮分仍然微弱。恍悟其胸中大氣，因服破氣之藥下陷，雖用參數次，至此猶未盡復，故亟亟求助於水穀之氣，且胃中之氣，因大氣下陷無所統攝，或至速於下行，而飲食亦因之速下也。遂用野臺參兩許，佐以麥門冬（帶心）三錢、柴胡二錢，煎湯飲下，自此遂愈。

或問「子所治大氣下陷證，有兩日不食者，有飲食減少者。此證亦大氣下陷，何以轉能多食」？答曰「事有常變，病亦有常變。王清任《醫林改錯》載有所治胸中瘀血二案。一則胸不能著物，一則非以物重壓其胸不安，皆治以血腑逐瘀湯而愈。夫同一胸中瘀血，其病狀竟若斯懸殊，故同一大氣之下陷也，其脾胃若因大氣下陷，而運化之力減者，必然少食；若大氣下陷，脾胃之氣亦欲陷者，或轉



至多食。曾治一少婦，忽然飲食甚多，一時覺饑不食，即心中怔忡。醫者以為中消證，屢治不效。向愚詢方，疑其胸中大氣下陷，為開升陷湯方，加龍骨、牡蠣（皆不用煨）各五錢，數劑而愈。蓋病因雖同，而病之情狀，恆因人之資稟不同，而有變易。斯在臨證者，細心體察耳。

按：此證與前證，雖皆大氣下陷，而實在寒溫之餘，故方中不用黃耆，而用人參。因寒溫之熱，最能鑠耗津液，人參能補氣，兼能生津液，是以《傷寒論》方中，凡氣虛者，皆用人參，而不用黃耆也。

上所列者，皆大氣下陷治驗之案也。然此證為醫者誤治及失於不治者甚多，略登數則於下，以為炯戒。

庚戌秋，在滄州治病，有趙姓，忽過訪，言有疑事，欲質諸先生。問何疑？曰「予妹半月前來歸寧，數日間，無病而亡，未知何故」？愚曰「此必有病，子蓋未知耳」。渠曰「其前一日，覺咽喉發悶，診其脈沉細，疑其胸有鬱氣，俾用開氣之藥一劑，翌日不覺輕重，惟自言不再服藥，斯夕即安坐床上而逝。其咽喉中發悶，並不甚劇，故曰無病也」。愚曰「此胸中大氣下陷耳」。時行篋中有治大氣下陷諸案，因出示之，且為剖析其理。渠泫然流涕曰「斯誠為藥誤矣」。

一人，年三十餘。呼吸短氣，胸中滿悶。醫者投以理氣之品，似覺稍輕，醫者以為藥病相投，第二劑，遂放膽開破其氣分。晚間服藥，至夜如廁，便後遂不能起。看護者，扶持至床上，昏昏似睡，呼之不應，須臾張口呼氣外出，若呵欠

之狀，如斯者日餘而亡。後其兄向愚述之，且問此果何病？因歷舉大氣下陷之理告之。其兄連連太息，既自悔擇醫不慎，又痛恨醫者誤人，以後不敢輕於延醫服藥。

一農家媪，年五十餘。因麥秋農家忙甚，井臼之事皆自任之，漸覺呼吸不利，氣息迫促。醫者誤認為氣逆作喘，屢投以納氣降氣之藥，氣息遂大形迫促，其努力呼吸之聲，直聞戶外。延愚診視，及至，診其脈左右皆無，勉為疏方，取藥未至而亡，此亦大氣下陷也。其氣息之迫促，乃肺之呼吸將停，努力呼吸以自救也，醫者又復用藥，降下其氣，斯何異韓昌黎所謂「人落陷阱，不一引手救，反擠之」者乎！愚觸目傷心，不覺言之過激，然志在活人者，自當深思愚言也。

一諸生，年五十六，為學校教員，每講說後，即覺短氣，向愚詢方。愚曰「此胸中大氣，虛而欲陷，為至緊要之證，當多服升補氣分之藥」，彼欲用燒酒燉藥，謂朝夕服之甚便。愚曰「如此亦可，然必須將藥燉濃，多飲且常飲耳」。遂為疏方，用生黃耆四兩、野臺參二兩，柴胡、桔梗各八錢，先用黃酒斤許，煎藥十餘沸，再用燒酒二斤，同貯瓶中，置甌中燉開，每飯前飲之，旬日而愈。後因病癒，置不復飲。隔年，一日步行二里許，自校至家，似有氣息迫促之狀，不能言語，倏忽而亡。蓋其身體素胖，艱於行步，胸中大氣，素有欲陷之機，因行動勞苦，而遂下陷，此誠《內經》所謂「大氣入於臟腑，不病而猝死」者也。方書有氣厥、中氣諸名目，大抵皆大氣下陷之證，特未窺《內經》之旨，而妄為議論耳。

按：《內經》原有氣厥二字，乃謂氣厥逆上行，非後世所謂氣厥也。

或問「案中所載大氣下陷證，病因及其病狀，皆瞭如指掌矣。然其脈之現象，或見於左部，或見於右部，或左右兩部皆有現象可徵，且其脈多遲，而又間有數者，同一大氣之下陷也，何以其脈若是不同乎？」答曰「胸中大氣包舉肺外，原與肺有密切之關係，肺之脈診在右部，故大氣下陷，右部之脈多微弱者其常也。然人之元氣自腎達肝，自肝達於胸中，為大氣之根本。其人或肝腎素虛，或服破肝氣之藥太過，其左脈或即更形微弱，若案中左部寸關尺皆不見，左脈沉細欲無，左關參伍不調者是也。至其脈多遲，而又間有數者，或因陰分虛損，或兼外感之熱，或為熱藥所傷，乃兼證之現脈，非大氣下陷之本脈也」。

或問「人之胸中上不通咽喉，下有膈膜承之，與膈下臟腑亦不相通，此中所積之大氣，何以能主持人之全身」？答曰「此理易解，如浮針於缸中，隔缸執磁石引之，針即隨磁石而動，無他，其氣化透達也。胸中大氣，雖不與全身相通，實息息與全身相通，其氣化之透達，亦猶隔缸之磁石與針也。況人身之經絡，原無處不相貫徹乎。且其所以能主持全身者，正賴其與他所不相通耳。設有顯然隧道通於他處，其氣即不能搏結胸中，又何以主持全身乎！」

或問「大氣下陷者，常覺胸中發悶，子謂非真發悶，實呼吸不利，而有似發悶耳。然吾見患此證者，其胸中恒滿悶異常，不識果何理由」？答曰「大氣之在胸中，猶空氣之在瓶中，若用機械將瓶中空氣提盡，其瓶之薄脆者，必被外氣排

擠而破，因內無空氣相抵故也。至胸中大氣下陷，其胸中空虛，外氣必來排擠，不勝其排擠之力，即覺胸中逼窄而滿悶。由是觀之，仍非真滿悶也。若真滿悶，則胸多鬱氣，而可受開破藥矣，何以誤服破藥，即凶危立見乎？況呼吸不利，原自易覺發悶耳」。

或問「人之胸中，原多積血，故王清任《醫林改錯》謂胸中為血府，因制血府逐瘀湯，以治上焦瘀血諸證，今子於胸中，專推重大氣，豈胸中之血於身無關緊要乎」？答曰「臆中為氣海，《內經》原有明文，臆中即胸中也（臆即膈也，《內經》言臆中，有指胸中言者，有指心包言者，以其皆在膈上也），此誠萬古不易之聖訓也。王氏《醫林改錯》一書，皆從目力視驗而得，但見胸中有形之積血，不見胸中無形之積氣，遂敢輕易《內經》氣海之名為血府。夫血為氣之配，胸中無血，大氣將無所留戀，血之所關非不重，究不如大氣之斡旋全身，關於人者尤重也。因王氏不知大氣，故其書中未嘗言及，此誠王氏之遺漏也。愚著斯篇，原以發前人所未發，期吾中華醫學漸有進步，恒於前人遺漏之處，喜為補綴之，故於胸中大氣三致意焉。不復論及胸中之血者，誠以王氏之書，遍行天下，業醫者大抵皆熟悉其說，無庸再為之贅語也」。

或問「李東垣補中益氣湯所治之證，若身熱惡寒、心煩懶言，或喘、或渴、或陽虛自汗，子所治大氣下陷案中，類皆有之。至其內傷外感之辨，謂內傷則短氣不足以息，尤為大氣下陷之明徵。至其方中所用之藥，又與子之升陷湯相似。

何以其方名為補中益氣，但治中氣之虛陷，而不言升補大氣乎？答曰「大氣之名，雖見於《內經》，然《素問》中所言之大氣，乃指外感之邪氣而言，非胸中之大氣也。至《靈樞》所言，雖係胸中大氣，而從來讀《內經》者，恆目《靈樞》為針經而不甚注意。即王氏注《內經》，亦但注《素問》而不注《靈樞》。後人為其不易索解，則更廢而不讀。至仲景《傷寒》、《金匱》兩書，惟《金匱》水氣門，有「大氣一轉，其氣乃散」之語，他如《難經》、《千金》、《外臺》諸書，並未言及大氣。是以東垣於大氣下陷證，亦多誤認為中氣下陷，故方中用白朮以健補脾胃，而後來之調補脾胃者，皆以東垣為法。夫中氣誠有下陷之時，然不若大氣下陷之尤屬危險也。間有因中氣下陷，泄瀉日久，或轉致大氣下陷者，可仿補中益氣湯之意，於拙擬升陷湯中，去知母加白朮數錢。若但大氣下陷，而中氣不下陷者，白朮亦可不用，恐其氣分或有鬱結，而者、朮並用，易生脹滿也」。

按：補中益氣湯所治之喘證，即大氣下陷者之努力呼吸也。若果係真喘，桔梗尚不宜用，況升麻乎？愚少時觀東垣書，至此心嘗疑之，後明大氣下陷之理，始覺豁然，而究嫌其立言欠妥。設醫者，真以為補中益氣湯果能治喘，而於氣機上逆之真喘亦用之，豈不足僨事乎？此有關性命之處，臨證者當審辨之。

或問「大氣與元氣孰重」？答曰「元氣者，稟受先天，為胚胎之根基，故道書尊之曰『祖氣』。大氣肇始於先天，而培養於後天，為身體之楨幹，故《內經》

尊之曰「宗氣」。有如樹上之果，元氣乃其樹之根也，大氣乃其樹之身也。根之關於果者至重，身之關於果者亦非輕也。

或問「觀子所治大氣下陷諸驗案，人之大氣有傷損者，不難為之補助矣。若其元氣有所傷損，不知亦有補法否耶？」答曰「大氣傷損可補助者，以其為後天氣也，藥物飲食及呼吸之空氣，皆其補助培養之料也。至元氣，乃空中真氣之所凝結（友人蘇明陽曰，道家言真空，餘則曰空真，因空中有真也，此見道之言，可為人身元氣之真詮），純屬先天，為太極之朕兆，非後天一切有形跡之物（空氣亦是有形跡者）所能補助也。惟深於內典者，常存此無念之正覺（覺不在心，若在心，見則有念矣），若天道之光明下濟（《易》曰天道下濟而光明），勿忘勿助，久之能於空中得真，是為補助元氣之正法。愚不敢自命為道中人，何敢妄言哉！」

西豐縣張繼昌，年十八九，患病數年不愈，來院診治。其證夜不能寐，飲食減少，四肢無力，常覺短氣，其脈關前微弱不起，知係胸中大氣下陷，故現種種諸證。投以升陷湯，為其不寐，加熟棗仁、龍眼肉各四錢，數劑痊愈。

奉天於氏女，出嫁而孀，依居娘門。因病還家中，夜忽不能言，並不能息。其同院住者王子崗，係愚門生，急來院扣門，求為援救。因素為診脈調藥，知其大氣虛損，此次之證，確知其為大氣下陷，遂為疏方，用生箭耆一兩，當歸四錢，升麻二錢，煎服，須臾即能言語。翌晨昇至院中，診其脈沉遲微弱，其呼吸仍覺

短氣。遂將原方減升麻一錢，又加生山藥、知母各三錢，柴胡、桔梗各一錢，連服數劑痊愈。按此證，脈遲而仍用知母者，因大氣下陷之脈大抵皆遲，非因寒涼而遲也，用知母以濟黃耆之熱，則藥性和平，始能久服無弊。

奉天袁姓少婦，小便處常若火炙，有時覺腹中之氣下墜，則炙熱益甚。診其脈關前微弱，關後重按又似有力。其呼吸恆覺短氣，心中時或發熱。知其素有外感伏邪，久而化熱，又因胸中大氣下陷，伏邪亦隨之下陷也。治以升陷湯加生石膏八錢，後漸加至二兩，服藥旬日痊愈。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

湖北督署韓承啟，慶軒寅友也，其夫人，年六旬，素多肝鬱，浸至胸中大氣下陷。其氣短不足以息，因而努力呼吸，有似乎喘，喉乾作渴，心中滿悶怔忡，其脈甚沉微。知其胸中大氣下陷過甚，肺中呼吸幾有將停之勢，非投以升陷湯，以升補其大氣不可。為錄出原方，遵注大氣陷之甚者，將升麻加倍服。一劑後，吐出粘涎數碗，胸中頓覺舒暢。又於方中加半夏、陳皮，連服三劑，病遂霍然。蓋此證因大氣下陷，其胸肺胃腕無大氣以斡旋之，約皆積有痰涎，迨服藥後，大氣來復，故能運轉痰涎外出，此《金匱》水氣門所謂「大氣一轉，其氣（水氣即痰涎）乃散」也。後大氣下陷證數見不鮮，莫不用升陷湯加減治癒。

相臣哲嗣毅武來函：

族嬸母，年四十餘歲，身體素弱，因境遇不順，又多抑鬱。癸亥十月下旬，忽患頭疼甚劇，已三日矣，族叔來舍，俾生往診。及至，聞呻吟不已，臥床不起，言已針過百會及太陽兩處，均未見效。其左脈微細如絲，按之即無，右脈亦無力，自言氣息不接，胸悶不暢，不思飲食，自覺精神恍惚，似難支持，知其胸中之大氣下陷也。其頭疼者，因大氣陷後，有他經之逆氣乘虛上干也。遵用升陷湯原方，升提其下陷之大氣，連服數劑痊愈。

四川涇南周禹錫來函：

程姓男孩，年五歲，乳哺不足，脫肛近四載，醫不能治。其面白神疲，身體孱弱，大腸墜出二寸許，用手塞入，旋又墜出，其脈濡弱無力，呼吸促短，狀若不能接續。知其胸中大氣下陷，下焦之氣化因之不能固攝也。仿用升陷湯方，用生箭耆四錢，知母二錢，桔梗、柴胡、升麻各一錢，潞參、淨莢肉各三錢煎湯一盅，分兩次溫飲下。連服二劑，肛即收縮。乃減去升麻，再服三劑，痊愈。

直隸唐山張讓軒來函：

價儒之內，以其夫病勢沉重，深恐難起，憂慮成疾，心內動悸，痞塞短氣。醫者以為痰鬱，用二陳湯加減清之，病益加劇。因鑒其父為藥所誤（其父因下痢十餘日，醫用大黃四錢降之，覆杯而卒），遂停藥不敢服。此際愚正在城中為其夫調治餘病。俟愚來家求診，見其滿面油光，兩手尺寸之脈皆極沉，惟關脈堅而有力。愚曰「此乃胸中大氣下陷，何醫者不明如是，而用清痰之二陳也。今兩關



脈之堅弦，乃彼用藥推蕩之力」。診際，大氣一陷，遂全身一戰，冷汗滿額，心即連次跳動十餘次。遂用升陷湯，再仿逍遙散、炙甘草湯之意，提其下陷之氣，散其中宮之滯，並以交其心腎。一劑而三部平，大氣固。嗣因尺中太微，而理氣藥及升柴等藥皆不敢用，遂按治大氣下陷方之意及治虛勞之法，精心消息，調治而愈。

安徽績溪章叔和來函：

一距均家二里之朱家村，有馮順昌者，務農而家小康。其母章氏，年正八秩，體豐善飯。一日忽覺左手麻痺，漸至不能持碗。越朝方食麵餅，倏然僵厥，坐向下墮，肢冷額汗，氣息僅屬。人皆以為猝中也，聚商救治，自午至晡，逐見危殆，來請吾為籌挽救簡方，以老人素不服藥，且口噤鼻塞，恐藥汁亦難下嚥耳。吾意謂年老久厥，詎能回陽？姑囑以紅靈丹少許吹鼻中，倘嚏氣能宣通，再議用藥。乃藥甫入而嚏作，似漸甦醒。然呼吸甚微，如一線游絲，恐風吹斷。先按口鼻，溫度甚低，音在喉中，猶言誓不服藥。診其脈，則沉微，察其瞳，亦渙散，遂確定為大氣下陷。但值老年，勢難遽投重峻之劑，爰照升陷湯方而小其劑，用生箭耆一錢五分，知母八分，淨萸肉一錢，柴胡四分，升麻三分。煎服須臾，即漸有轉機。續進兩劑，逐次平復。繼俾服潞黨參，每日二錢，加五味子五粒，廣陳皮少許，頻飲代茶。今春見之，較未病前更倍康強矣。

山東德州盧月潭來函：

五家嫂及內子兩人，係因家務心力煎勞，自覺無日不病者。五家嫂怔忡異常，每犯此病，必數日不能起床，須人重按其心，終日面目虛浮，無病不有。而內子則不但怔忡，寒熱往來，少腹重墜，自汗、盜汗，亦無定時，面目手足及右腿無日不腫。而兩人丸藥日不離口，不但無效，更漸加劇。後侄查大氣下陷一切方案，確知兩人皆係大氣下陷無疑，服升陷湯數劑，並加滋補之味，而各病若失，現今均健壯如常矣。

直隸鹽山孫香蓀來函：

一九二六年冬，河東友人翟桐生之母，乳部生瘡，疼痛難忍，同事王德三約往診視。桐生言「昨日請醫診治，服藥一劑，亦不覺如何，惟言誓不再服彼醫方藥」。生診視時，其脈左關弦硬，右寸獨微弱，口不能言，氣息甚微，病勢已危險萬分。生斷為年高因病瘡大氣下陷，為開升陷湯，以升舉其氣，又加連翹、丹參諸藥，以理其瘡。一劑能言，病人喜甚，非按原方再服一劑不可。後生又診數次，即方略為加減，數服痊愈。後遇此證數次，亦皆用升陷湯加減治癒。

奉天桓仁縣閻兆元來函：

客歲家慈得大氣下陷證，吾以向未行醫，未敢率爾用藥，遂聘本縣名流再三診治，終無效驗。遲至今歲正月初二日，氣息奄奄，迫不及待，遂急用升陷湯，遵方後所注更番增減，按證投藥，數月沉疴，數日痊愈。

江蘇平臺王錫光來函：

一婦人，產後乳上生癰，腫疼殊甚。延西醫治不效，繼延吾診治。其膿已成，用針刺之，出膿甚多，第二日已眠食俱安矣。至第三日，忽神昏不食，並頭疼。其母曰「此昨日受風寒以致如此」。診其脈，微細若無，身無寒熱，心跳，少腹微疼，知非外感，當係胸中大氣下陷。投以升陷湯，兩劑痊愈。

【回陽升陷湯】

治心肺陽虛，大氣又下陷者。其人心冷、背緊、惡寒，常覺短氣。

生黃耆（八錢）、乾薑（六錢）、當歸身（四錢）、桂枝尖（三錢）、甘草（一錢）。

周身之熱力，借心肺之陽，為之宣通，心肺之陽，尤賴胸中大氣，為之保護。大氣一陷，則心肺陽分素虛者，至此而益虛，欲助心肺之陽，不知升下陷之大氣，雖日服熱藥無功也。

一童子，年十三四，心身俱覺寒涼，飲食不化，常常短氣，無論服何熱藥，皆分毫不覺熱。其脈微弱而遲，右部兼沉。知其心肺陽分虛損，大氣又下陷也。為制此湯，服五劑，短氣已愈，身心亦不若從前之寒涼。遂減桂枝之半，又服數劑痊愈。俾停藥，日服生硫黃分許，以善其後（服生硫黃法在第八卷）。

一人，年五十餘。大怒之後，下痢月餘始愈。自此胸中常覺滿悶，飲食不能消化。數次延醫服藥，不外通利氣分之品，即間有溫補脾胃者，亦必難以破氣之藥，愈服病癒增重。後愚診視，其脈沉細微弱，至數甚遲。詢其心中，常有覺涼之時，知其胸中大氣下陷，兼上焦陽分虛損也。遂投以此湯，十劑痊愈。後因怒病又反復，醫者即愚方加厚朴二錢，服後少腹下墜作疼，徹夜不能寐，複求為診治，仍投以原方而愈。

一婦人，年四十餘，忽然昏倒不語，呼吸之氣，大有滯礙，幾不能息，其脈微弱而遲。詢其生平，身體羸弱，甚畏寒涼。知其心肺陽虛，寒痰結胸，而大氣又下陷也。然此時形勢將成痰厥，取藥無及，遂急用胡椒二錢搗碎，煎二三沸，澄取清湯灌下，須臾胸中作響，呼吸頓形順利。又用乾薑八錢，煎湯一盅，此時已自能飲下，須臾氣息益順，精神亦略清爽，而仍不能言，且時作呵欠，十餘呼吸之頃，必發太息。知其痰飲雖開，大氣之陷者猶未復也。遂投以回陽升陷湯數劑，呵欠與太息，皆愈，漸能言語。

按：此證初次單用乾薑開其寒飲，而不敢佐以赭樸諸藥以降下之者，以其寒飲結胸又兼大氣下陷也。設若辨證不清而誤用之，必至凶危立見，此審證之當細心也。

或問「心臟屬火，西人亦謂周身熱力皆發於心，其能宣通周身之熱宜矣。今論周身熱力不足，何以謂心肺之陽皆虛」？答曰「肺與心同居膈上，左心房之血管，右心房之回血管，皆與肺循環相通，二臟之宣通熱力，原有相助為理之妙。然必有大氣以斡旋之，其功用始彰耳」。

按：喻嘉言《醫門法律》最推重心肺之陽，謂心肺陽旺，則陰分之火自然潛伏。至陳修園推展其說，謂心肺之陽下濟，大能溫暖脾胃消化痰飲，皆確論也。

【理鬱升陷湯】

治胸中大氣下陷，又兼氣分鬱結，經絡湮淤者。

生黃耆（六錢）、知母（三錢）、當歸身（三錢）、桂枝尖（錢半）、柴胡（錢半）、乳香（三錢，不去油）、沒藥（三錢，不去油）。

脅下撐脹，或兼疼者，加龍骨、牡蠣（皆不用煨）各五錢；少腹下墜者，加升麻一錢。

一婦人，年三十許，胸中滿悶，時或作疼，鼻息發熱，常常作渴。自言得之產後數日，勞力過度。其脈遲而無力，籌思再三，莫得病之端緒。姑以生山藥一兩，滋其津液，雞內金二錢、陳皮一錢，理其疼悶，服後忽發寒熱。再診其脈，無力更甚，知其氣分鬱結，又下陷也。遂為制此湯，一劑諸病皆覺輕，又服四劑痊愈。

一少女，年十五。臍下左邊起一癥瘕，沉沉下墜作疼，上連腰際，亦下墜作疼楚，時發呻吟。劇時，常覺小便不通，而非不通也。診其脈，細小而沉。詢其得病之由，言因小便利，便時努力過甚，其初腰際墜疼，後遂結此瘕。其方結時，揉之猶軟，今已五閱月，其患處愈堅結。每日晚四點鐘，疼即增重，至早四點鐘，又漸覺輕。愚聞此病因，再以脈象參之，知其小便時努力過甚，上焦之氣，陷至下焦而鬱結也。遂治以理鬱升陷湯，方中乳香、沒藥皆改用四錢，又加丹參

三錢、升麻錢半，二劑而墜與疼皆愈。遂去升麻，用藥汁送服朱血竭末錢許，連服數劑，癥瘕亦消。

或問「龍骨、牡蠣為收澀之品，兼脅下脹疼者，何以加此二藥」？答曰「脅為肝之部位，脅下脹疼者，肝氣之橫恣也，原當用瀉肝之藥，又恐與大氣下陷者不宜。用龍骨、牡蠣，以斂戢肝火，肝氣自不至橫恣，此斂之即以瀉之，古人治肝之妙術也。且黃耆有膨脹之力，脹疼者原不宜用，有龍骨、牡蠣之收斂，以縮其膨脹之力，可放膽用之無礙，此又從體驗而知道也。嘗治一少婦，經水兩月不見，寒熱往來，脅下作疼，脈甚微弱而數至六至。詢之常常短氣，投以理鬱升陷湯，加龍骨、牡蠣各五錢，為脈數，又加玄參、生地、白芍各數錢，連服四劑。覺脅下開通，瘀血下行，色紫黑，自此經水調順，諸病皆愈。蓋龍骨、牡蠣性雖收澀，而實有開通之力，《本經》謂龍骨消瘦，而又有牡蠣之鹹能軟堅者以輔之，所以有此捷效也」。

【醒脾升陷湯】

治脾氣虛極下陷，小便不禁。

生箭耆（四錢）、白朮（四錢）、桑寄生（三錢）、川續斷（三錢）、萸肉（四錢，去淨核）、龍骨（四錢，搗）、牡蠣（四錢，搗）、川萆薢（二錢）、甘草（二錢，蜜炙）。

《內經》曰「飲入於胃，游溢精氣，上輸於脾，脾氣散精，上歸於肺，通調水道，下輸膀胱」，是脾也者，原位居中焦，為水飲上達下輸之樞機，樞機不旺，則不待上達而即下輸，此小便之所以不禁也。然水飲降下之路不一，《內經》又謂「肝熱病者，小便先黃」，又謂「肝壅兩（脅也）滿，臥則驚悸，不得小便」，且芍藥為理肝之主藥，而善利小便。由斯觀之，是水飲又由胃入肝，而下達膀胱也。至胃中所餘水飲，傳至小腸滲出，此又人所共知，故方中用黃耆、白朮、甘草以升補脾氣，即用黃耆同寄生、續斷以升補肝氣，更用龍骨、牡蠣、萸肉、萆薢以固澀小腸也。又人之胸中大氣旺，自能吸攝全身氣化，不使下陷，黃耆與寄生並用，又為填補大氣之要藥也。

或問「西人謂水入於胃，被胃中微細血管吸去，引人回血管，過肝入心，以布於周身。自肺達出為氣，自膚滲出為汗，餘人膀胱為溺。何以西人之論小便，與子所論者皆不同」？答曰「水飲下行之道路原多端，愚所論者，其大概也。然西人謂水飲由胃中微絲血管以達回血管，即隨回血管以過肝入心。夫既隨回血管



人心，必隨回血管入肺，其氣化之餘，必由肺降下，與自脾達肺而降下者，同循三焦脂膜下行可知。且西人又謂內腎之中有回血管，其管尾與溺管相接，為回血管之水飲，透腎以達膀胱之路。夫回血管中水飲，若皆隨回血管過肝人心，而回血管之循行未有自心下達腎者，其中水飲何以復由回血管入腎。是知水飲由回血管入腎者，必其過肝之時未盡隨回血管人心，而即隨肝經下行之回血管達腎可知。由是觀之，愚與西人所論者，何嘗不同歸一致耶」。

或問「西人謂小腸內皮，有無數吸管，能吸引小腸榨化食物之精液，轉輸於心而為血，而未嘗言其能將水飲滲出為小便。將勿水飲自小腸滲出之說，不足憑歟」？答曰「西人吸管之說，固有跡象可憑，而水飲自小腸滲出，亦有徵驗可指。試觀剖解物類者，其小腸中水飲與食物參半，至大腸則水飲全無，若非自小腸滲出，何以不人大腸乎？蓋小腸將食物化為精液，必借水氣醞釀而成，迨津液成後，被吸管吸去，並入精液總管，以轉輸於心，而小腸中所餘之水，亦即被小腸中微絲血管吸去，達於與小腸相連之脂膜以及膀胱，此自然之理也。是知臟腑之妙用，但以理推測不能盡得，但據跡象考驗亦不能盡得，欲為中華醫學進化者，貴合中西之法而細細研究也」。

或問「黃耆為補肺脾之藥，今謂其能補肝氣何也」？答曰「同聲相應，同氣相求，孔子之言也。肝屬木而應春令，其氣溫而性喜條達，黃耆性溫而升，以之補肝，原有同氣相求之妙用。愚自臨證以來，凡遇肝氣虛弱，不能條達，一切補

肝之藥不效者，重用黃耆為主，而少佐以理氣之品，服之，覆杯之頃，即見效驗（治驗詳黃耆解）。曾治一少婦，心中寒涼，飲食減少，坐時覺左半身下墜，寢時不敢向左側，服溫補兼理氣之藥，年餘不效。後愚診視，左脈微弱不起，知其肝氣虛也。治以生黃耆八錢，柴胡、川芎各一錢，乾薑三錢，煎湯飲下，須臾左側即可安臥，又服數劑，諸病皆愈。是知謂肝虛無補法者，非見道之言也。

或問「《本經》謂桑寄生能治腰疼、堅齒髮、長鬚眉，是當為補肝腎之藥，而謂其能補胸中大氣何也」？答曰「寄生根不著土，寄生樹上，最善吸空中之氣，以自滋生，故其所含之氣化，實與胸中大氣為同類。嘗見有以補肝腎，而多服久服，胸中恆覺滿悶，無他，因其胸中大氣不虛，故不受寄生之補也。且《本經》不又謂其治癰腫乎？然癰腫初起，服之必無效，惟癰腫潰後，生肌不速，則用之甚效。如此而言，又與黃耆之主癰疽敗證者相同，則其性近黃耆，更可知矣」。

或問「葶藶世醫多用以治淋，夫淋以通利為主，蓋取葶藶能利小便也。此方中用之以固小便，其性果固小便乎？抑利小便乎」？答曰「葶藶為固澀下焦之要藥，其能治失溺，《名醫別錄》原有明文。《別錄》者乃陶弘景集南北朝以前名醫所用之藥，附載於《本經》之後，用墨書之，以別於《本經》之朱書，故曰《名醫別錄》，雖非《本經》，其書誠可確信。時醫因古方有葶藶分清飲，遂誤認葶藶為利小便之要藥，而於小便不利、淋澀諸證多用之。嘗見有以利小便，而小便轉癰閉者，以治淋證，竟致小便滴瀝不通者，其誤人可勝道哉！蓋葶藶分清飲之

君草薺，原治小便頻數，溺出旋白如油，乃下焦虛寒，氣化不固之證，觀其佐以縮小便之益智，溫下焦之烏藥，其用意可知。特當日命名時，少欠斟酌，遂致庸俗醫輩，錯有會心，貽害無窮，可不慎哉！

治氣血鬱滯肢體疼痛方

【升降湯】

治肝鬱脾弱，胸脅脹滿，不能飲食，宜與論肝病治法參看。

野臺參（二錢）、生黃耆（二錢）、白朮（二錢）、廣陳皮（二錢）、川厚朴（二錢）、生雞內金（二錢，搗細）、知母（三錢）、生杭芍（三錢）、桂枝尖（一錢）、川芎（一錢）、生薑（二錢）。

世俗醫者，動曰平肝，故遇肝鬱之證，多用開破肝氣之藥。至遇木盛侮土，以致不能飲食者，更謂伐肝即可扶脾。不知人之元氣，根基於腎，而萌芽於肝。凡物之萌芽，皆嫩脆易於傷損，肝既為元氣萌芽之臟，而開破之若是，獨不慮損傷元氣之萌芽乎？《內經》曰「厥陰（肝經）不治，求之陽明（胃經）」，《金匱》曰「見肝之病，當先實脾」，故此方，惟少用桂枝、川芎以舒肝氣，其餘諸藥，無非升脾降胃，培養中土，俾中宮氣化敦厚，以聽肝氣之自理。實竊師《內經》求之陽明，與《金匱》當先實脾之奧旨耳。

按：「見肝之病，當先實脾」二句，從來解者，謂肝病當傳脾，實之所以防其相傳，如此解法固是，而實不知實脾，即所以理肝也。兼此二義，始能盡此二句之妙。

一媪，年近六旬。資稟素弱，又兼家務勞心，遂致心中怔忡，肝氣鬱結，胸腹脹滿，不能飲食，舌有黑苔，大便燥結，十數日一行。廣延醫者為治，半載無效，而羸弱支離，病勢轉增。後愚診視，脈細如絲，微有弦意，幸至數如常，知猶可治。遂投以升降湯，為舌黑便結，加鮮地骨皮一兩，數劑後，舌黑與便結漸癒，而地骨皮亦漸減。至十劑病癒強半，共服百劑，病癒而體轉健康。

按：人之臟腑，脾胃屬土，原可包括金、木、水、火諸臟。是故肝氣宜升，非脾土之氣上行，則肝氣不升。膽火宜降，非胃土之氣下行，則膽火不降（黃坤載曾有此論甚確），所以《內經》論厥陰治法，有「調其中氣，使之和平」之語。所謂「中氣」者，指「脾胃」而言也。所謂「使之和平」者，指「厥陰肝經」而言也。厥陰之治法如斯，少陽之治法亦不外斯。至仲景祖述《內經》，繼往開來，作《傷寒論》一書，於治少陽寒熱往來有小柴胡湯，方中用人參、甘草、大棗、半夏以調理脾胃，所謂調其中氣使之和平也。治厥陰乾嘔、吐涎沫，有吳茱萸湯，方中亦用人參、大棗以調理脾胃，亦所謂調其中氣使之和平也。且小柴胡湯中，以柴胡為君，雖係少陽之藥，而《本經》謂其主腸胃中結氣，飲食積聚，寒熱邪氣，推陳致新。細繹《本經》之文，則柴胡實亦為陽明之藥，而兼治少陽也。觀《本經》、《內經》與《傷寒》、《金匱》諸書，自無疑於拙擬之升降湯矣。

【培脾舒肝湯】

治因肝氣不舒、木鬱克土，致脾胃之氣不能升降，胸中滿悶，常常短氣。

於朮（三錢）、生黃耆（三錢）、陳皮（二錢）、川厚朴（二錢）、桂枝尖（錢半）、柴胡（錢半）、生麥冬（二錢）、生杭芍（四錢）、生薑（二錢）。

脾主升清，所以運津液上達。胃主降濁，所以運糟粕下行。白朮、黃耆，為補脾胃之正藥，同桂枝、柴胡，能助脾氣之升，同陳皮、厚朴，能助胃氣之降。清升濁降滿悶自去，無事專理肝氣，而肝氣自理，況桂枝、柴胡與麥芽，又皆為舒肝之妙品乎！用芍藥者，恐肝氣上升，膽火亦隨之上升，且以解黃耆、桂枝之熱也。用生薑者，取其辛散溫通，能渾融肝脾之氣化於無間也。

從來方書中，麥芽皆是炒熟用之，惟陳修園謂麥芽生用，能升發肝氣，可謂特識。蓋人之元氣，根基於腎，萌芽於肝，培養於脾，積貯於胸中為大氣，以斡旋全身。麥芽為穀之萌芽，與肝同氣相求，故能入肝經，以條達肝氣，此自然之理，無庸試驗而可信其必然者也。然必生煮汁飲之，則氣善升發，而後能遂其條達之用也。

又按：麥芽具升發之性，實兼消化之力。化學家生麥芽於理石（即石膏）上，凡麥芽根盤布之處，其石皆成微凹，則其尤善消化可知。故用麥芽生發肝氣者，必與參耆諸藥並用，而後有益無損。

又按：土爰稼穡，稼穡作甘，百穀味甘屬土，故能補益，而百穀之芽，又皆屬木，故能疏通，然有人氣分、血分之別。甲生者陽，其芽拆甲而出，稻、粱（俗名穀子）、麥、黍、稷（亦名蘆稷，俗名高粱），諸芽是也，為其屬陽，故能疏通氣分；乙生者陰，其芽形曲似乙而出，諸豆之芽是也，為其屬陰，故能疏通血分。《金匱》薯蕷丸用之，以治血痺虛勞也（薯蕷丸中有大豆黃卷）。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

族侄婦，年二十餘，素性謹言，情志抑鬱，因氣分不舒，致四肢痙攣顫動，呼吸短促，胸中脹悶，約一晝夜。先延針科醫治，云是雞爪風，為刺凶門及十指尖，稍愈，旋即復作如故。其脈左部弦細，右部似有似無，一分鐘數至百至。其兩肩抬動，氣逆作喘。詢知其素不健壯，廉於飲食，蓋肝屬木而主筋，肝鬱不舒則筋攣，肝鬱恆侮其所勝，故脾土受傷而食少，遂為開培脾舒肝湯。為有逆氣上干，又加生赭石細末五錢。囑服二劑。痙攣即愈，氣息亦平。遂去赭石，照原方又服數劑，以善其後。

【金鈴瀉肝湯】

治脅下掀疼。

川棟子（五錢，搗）、生明乳香（四錢）、生明沒藥（四錢）、三稜（三錢）、莪朮（三錢）、甘草（一錢）。

劉河間有金鈴子散（即棟子之核）與玄胡索等分，為末服之，以治心腹脅下作疼，其病因由於熱者甚效。誠以金鈴子能引心包之火及肝膽所寄之相火下行，又佐以玄胡索以開通氣血，故其疼自止也。而愚用其方，效者固多，而間有无效者。後擬得此方，莫不隨手奏效。蓋金鈴子佐以玄胡索，雖能開氣分之鬱，而實不能化氣，所謂化氣者，無事開破，能使氣之鬱者，融化於無形，方中之乳香、沒藥是也。去玄胡索，加三稜、莪朮者，因玄胡索性過猛烈，且其開破之力，多趨下焦，不如三稜、莪朮性較和平，且善於理肝也。用甘草者，所以防金鈴子有小毒也。此方不但治脅疼甚效，凡心腹作疼，而非寒涼者，用之皆甚效驗。

【附錄】

直隸鹽山李曰綸來函：

去歲仲冬，吾邑西崔莊劉耀南兄，係弟之同學，病左脅掀疼，諸治無效，詢方於弟。授以活絡效靈丹方，服之不應，因延為診視。脈象他部皆微弱，惟左關沉而有力。治以金鈴瀉肝湯，加當歸數錢。服一劑，翌日降下若干綠色粘滯之物，



遂豁然而愈。蓋此湯原注明治脅下掀疼，由此知兄所擬方各有主治，方病相投，莫不神效也。

【活絡效靈丹】

治氣血凝滯，痲痺癥瘕，心腹疼痛，腿疼臂疼，內外瘡瘍，一切臟腑積聚，經絡湮淤。

當歸（五錢）、丹參（五錢）、生明乳香（五錢）、生明沒藥（五錢）。

上藥四味作湯服。若為散，一劑分作四次服，溫酒送下。腿疼加牛膝。臂疼加連翹。婦女瘀血腹痛，加生桃仁（帶皮尖作散服炒用）、生五靈脂。瘡紅腫屬陽者，加金銀花、知母、連翹。白硬屬陰者，加肉桂、鹿角膠（若恐其偽可代以鹿角霜）。瘡破後生肌不速者，加生黃黃、知母（但加黃耆恐失於熱）、甘草。臟腑內癰，加三七（研細沖服）、牛蒡子。

一人，年三十許。當臍忽結癥瘕，自下漸長而上，其初長時稍軟，數日後即硬如石，旬日長至心口。向愚詢方，自言凌晨冒寒，得於途間，時心中有驚恐憂慮，遂覺其氣結而不散。按此病因甚奇，然不外氣血凝滯。為制此方，於流通氣血之中，大具融化氣血之力，連服十劑全消。以後用此方治內外瘡瘍、心腹四肢疼痛，凡病之由於氣血凝滯者，恒多奇效。

高魯軒年近五旬。資稟素羸弱。一日訪友鄰村，飲酒談宴，徹夜不眠，時當季冬，復清晨冒寒，步行旋里，行至中途，覺兩腿酸麻，且出汗，不能行步，因坐涼地歇息，至家，遂覺腿痛，用熱磚熨之，疼益甚。其人素知醫，遂自服發汗之藥數劑，病又增劇，因服藥過熱，吐血數口，大便燥結，延愚診視。見其仰臥

屈膝，令兩人各以手托其兩腿，忽歌忽哭，疼楚之態萬狀，脈弦細，至數微數。因思此證，熱磚熨而益疼者，逼寒內陷也；服發汗藥而益疼者，因所服之藥，散肌肉之寒，不能散筋骨之寒，且過汗必傷氣血，血氣傷，愈不能勝病也。遂用活絡效靈丹，加京鹿角膠四錢（另燉兌服）、明天麻二錢，煎湯飲下，左腿遂愈。而右腿疼如故，因恍悟曰，人之一身，左陽右陰，鹿名斑龍，乃純陽之物，故其膠人左不人右。遂復用原方，以虎骨膠易鹿角膠，右腿亦出涼氣如左而愈。《禮》有之「左青龍，右白虎」，用藥本此，即建奇功，古人豈欺我哉。苟悟醫理之妙，六經皆我注腳也。

一少婦，左脅起一瘡，其形長約五寸，上半在乳，下半在肋，皮色不變，按之甚硬，而微熱於他處。延醫詢方，調治兩月不效，且漸大於從前。後愚診視，閱其所服諸方，有遵林屋山人治白疽方治者，有按乳癰治者。愚曉病家曰「此證硬而色白者，陰也。按之微熱者，陰中有陽也。統觀所服諸方，有治純陰陽之方，無治半陰半陽之方，勿怪其歷試皆不效也」。用活絡效靈丹，俾作湯服之，數劑見輕，三十劑後，消無芥蒂。

一婦人年五十許。腦後發一對口瘡，詢方於愚，時初擬出活絡效靈丹方，即書而予之，連服十劑痊愈。

一婦人，年五十餘，項後筋縮作疼，頭向後仰，不能平視，腰背強直，下連膝後及足跟大筋皆疼，並牽周身皆有疼意。廣延醫者診治，所用之藥，不外散風、

和血、潤筋、通絡之品。兩載無效，病轉增劇，臥不能起，起不能坐，飲食懶進。後愚診視，其脈數而有力，微有弦意，知其為宗筋受病，治以活絡效靈丹，加生薏米八錢，知母、玄參、白芍各三錢，連服三十劑而愈。蓋筋屬於肝，獨宗筋屬胃，此證因胃腑素有燥熱，致津液短少，不能榮養宗筋。夫宗筋為筋之主，故宗筋拘攣，而周身牽引作疼也。薏米性味沖和，善能清補脾胃，即能榮養宗筋。又加知母、玄參，以生津滋液，活絡效靈丹，以活血舒筋，因其脈微弦，恐其木盛侮土，故又加芍藥以和肝，即以扶脾胃也。

薏米主筋急拘攣《本經》原有明文。活絡效靈丹中加薏米，即能隨手奏效。益歎《本經》之精當，為不可及。

活絡效靈丹，治心腹疼痛，無論因涼、因熱、氣鬱、血鬱皆效。同里有一少年，臍下疼甚劇。醫者投以溫藥益甚，晝夜號呼不止。又延他醫，以藥下之稍輕，然仍晝夜呻吟，繼又服藥數劑，亦不見效。適愚自津門旋里，診其脈，兩尺洪實。詢其得病之由，言夜晚將寢覺饑，因食冷餅一塊，眠起遂疼。曉之曰「此雖由於食涼物，然其疼非涼疼，乃下焦先有蘊熱，又為涼物所迫，其熱愈結而不散也」。投以活絡效靈丹，加龍膽草、川棟子各四錢，一劑而愈。

或問「此證醫者曾用藥下之，何以其下焦之鬱熱，不隨之俱下」？答曰「熱在大腸者，其熱可隨降藥俱下，然又必所用之下藥為鹹寒之品，若承氣湯是也。今其熱，原鬱於奇經衝任之中，與大腸無關，衝任主血，而活絡效靈丹諸藥品，

皆善入血分，通經絡，故能引龍膽、棟子直入衝任，而消解其鬱熱。況其從前所服之下藥，原非鹹寒之品，是以從前不效，而投以此藥，則隨手奏效也」。

又鄰村一婦人，年三十許。心腹疼痛異常，服藥不效，勢近垂危。其家人夜走五六里，叩門求方。適愚他出，長子蔭潮為開活絡效靈丹方授之，亦一劑而愈。自擬得此方以來，數年之間，治癒心腹疼痛者，不可勝計矣。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

族兄泰，年三十餘，素強壯無病。壬戌中秋，因在田間掘壑，勞苦過甚，自覺氣力不支，即在壑中吃煙休息，少緩須臾，又復力作。至晚歸家時，途中步行，覺兩腿酸木不仁。及至夜間，兩腿抽疼甚劇。適生在里，其弟扣門求為往治。診其脈，遲滯而細，號呼不已，氣逆不順，身冷，小溲不利，遂用活絡效靈丹方，加白芍三錢、桂枝尖二錢、生薑三片。一劑腿疼大減，小便即利，身冷亦退。再劑，霍然痊愈。

又：天津西門外王媪，年五十七歲，右膝蓋部發炎，紅熱腫疼，食減不眠。其嗣如珍延為診視，至其家，聞病者呼號不止，口稱救命。其右脈洪數有力，心悸頭眩，舌苔白而膩，大便三日未行，小便赤熱，此足徵濕熱下注，予以活絡效靈丹，加生石膏六錢，知母、懷牛膝、生薏米各四錢，甘草梢一錢，囑服一劑。

次日自能來寓，其疼減腫消，夜已成寐，尚云右臂酸疼。又即原方加青連翹、金銀花、油松節各二錢，服之痊愈。

【活絡祛寒湯】

治經絡受寒，四肢發搐，婦女多有此證。

生黃耆（五錢）、當歸（四錢）、丹參（四錢）、桂枝尖（二錢）、生杭芍（三錢）、生明乳香（四錢）、生明沒藥（四錢）、生薑（三錢）。  
寒甚者，加乾薑三錢。

證寒在經絡，不在臟腑。經絡多行於肌肉之間，故用黃耆之溫補肌肉者為君，俾其形體壯旺，自能勝邪。又佐以溫經絡、通經絡諸藥品，不但能祛寒，且能散風，此所謂血活風自去也。風寒既去，血脈活潑，其搐焉有不止者乎？

【健運湯】

治腿疼、臂疼因氣虛者。亦治腰疼。

生黃耆（六錢）、野臺參（三錢）、當歸（三錢）、寸麥冬（三錢，帶心）、知母（三錢）、生明乳香（三錢）、生明沒藥（三錢）、莪朮（一錢）、三稜（一錢）。

此方減麥冬、知母三分之一，合數劑為一劑，軋細煉蜜為丸，名健運丸，治同前證。

從來治腿疼臂疼者，多責之風寒濕痺，或血瘀、氣滯、痰涎凝滯。不知人身之氣化壯旺流行，而周身痺者、瘀者、滯者，不治自愈，即偶有不愈，治之亦易為功也。愚臨證體驗以來，知元氣素盛之人，得此病者極少。故凡遇腿疼、臂疼，歷久調治不愈者，補其元氣以流通之，數載沉疴，亦可隨手奏效也。



【振中湯】

治腿疼、腰疼，飲食減少者。

於白朮（六錢，炒）、當歸身（二錢）、陳皮（二錢）、厚朴（錢半）、生明乳香（錢半）、生明沒藥（錢半）。

土居中央，分主四季，人之脾胃屬土，故亦旁主四肢。一室女腿疼，幾不能步，治以拙擬健運湯（在前）而愈。次年舊病復發，又兼腰疼，再服前方不效。診其脈，右關甚濡弱，詢其飲食減少，為制此湯，數劑，飲食加多，二十劑後，腰疼腿疼皆愈。蓋此方重用白朮以健補脾胃，脾胃健則氣化自能旁達。且白朮主風寒濕痺，《本經》原有明文，又輔以通活氣血之藥，不惟風寒濕痺開，而氣血之痺而作疼者，亦自開也。

一媪，年近七旬。陡然腿疼，不能行動，夜間疼不能寐。其家人迎愚調治，謂脈象有力，當是火鬱作疼。及診其脈，大而且弦，問其心中亦無熱意。愚曰「此脈非有火之象，其大也，乃脾胃過虛，真氣外泄也。其弦也，乃肝膽失和，木盛侮土也」。治以振中湯，加人參、白芍、山萸肉（去淨核）各數錢，補脾胃之虛，即以抑肝膽之盛，數劑而愈。

【曲直湯】

治肝虛腿疼，左部脈微弱者。

萸肉（一兩，去淨核）、知母（六錢）、生明乳香（三錢）、生明沒藥（三錢）、當歸（三錢）、丹參（三錢）。

服藥數劑後，左脈仍不起者，可加續斷三錢，或更加生黃耆三錢，以助氣分亦可。覺涼者，可減知母。

脾虛可令人腿疼，前方已詳其理，深於醫學人大抵皆能知之。至肝虛可令人腿疼，方書罕言，即深於醫學者，亦恆不知。曾治一人，年三十許，當大怒之後，漸覺腿疼，日甚一日，兩月後，臥床不能轉側。醫者因其得之惱怒之餘，皆用舒肝理氣之藥，病轉加劇。後愚診視，其左脈甚微弱，自言凡疼甚之處皆熱。因恍悟《內經》謂「過怒則傷肝」，所謂傷肝者，乃傷肝經之氣血，非必鬱肝經之氣血也，氣血傷，則虛弱隨之，故其脈象如斯也。其所以腿疼且覺熱者，因肝主疏泄，中藏相火（相火生於命門寄於肝膽），肝虛不能疏泄，相火即不能逍遙流行於周身，以致鬱於經絡之間，與氣血凝滯，而作熱作疼，所以熱劇之處，疼亦劇也。為制此湯，以萸肉補肝，以知母瀉熱，更以當歸、乳香諸流通血氣之藥佐之，連服十劑，熱愈疼止，步履如常。

安東友人劉仲友，年五十許。其左臂常覺發熱，且有酸軟之意。醫者屢次投以涼劑，發熱如故，轉覺脾胃消化力減少。後愚診之，右脈和平如常，左脈微弱，

較差於右脈一倍。詢其心中，不覺涼熱，知其肝木之氣虛弱，不能條暢敷榮，其所寄之相火，鬱於左臂之經絡，而作熱也。遂治以曲直湯，加生黃耆八錢，佐莢肉以壯旺肝氣（黃耆補肝氣之理詳前醒脾升陷湯下），赤芍藥三錢，佐當歸、丹參諸藥以流通經絡，服兩劑，左脈即見起，又服十劑痊愈。

或問「西人謂脾居左、肝居右，今剖驗家精詳考察，確乎不誤。子猶拘守舊說，謂肝仍主左者何也」？答曰「脾左肝右之說，非始於西人，淮南子早言之，古籍猶在可考也。然脾雖居左，而其氣化實先行於右，故脾脈診於右關。肝雖居右，而其氣化實先行於左，故肝脈診於左關。此陰陽互根，剛柔錯綜之妙也。蓋《內經》論臟腑，以發明其氣化，兼研究其性情為宗旨，至對於形跡之粗，恒有簡略不詳者。至於西人，則但講形跡，不講氣化，且但言臟腑之功用，而不言臟腑之性情。其意見直謂臟腑毫無性情，凡性之情發動，皆關於腦部，其理果可盡信乎？《內經》曰「肝者將軍之官，謀慮出焉，膽者中正之官，決斷出焉」，蓋肝為厥陰（厥者，逆也，盡也），陰盡陽生，膽即為肝中蘊蓄之陽（膽汁中涵少陽之氣），能暢達肝氣，而決斷其謀慮，故人之肝膽壯實者，必勇敢果斷；肝膽虛弱者，必懼怯遊移。比鄰竇杏村之太夫人，年六旬，時忽得奇疾，驚懼異常，多人衛護，仍驚懼至於抖戰，口中連連吐出綠沫甚苦，數日而終。多醫研究，皆謂膽破，是非膽失其中正之官，而驚懼如是乎？由斯觀之，吾之舊說，不可輕疑，西人之說，不可概信也」。

或問曰「聆子之論，〈內經〉論臟腑之處誠可信矣。至肝之氣化，先行於左之說，果有確徵可實指乎」？答曰「人稟天地之靈秀以生，人身亦小天地也，欲明人身之氣化，可先觀天地之氣化。夫天地一歲之氣化始於春，一日之氣化始於朝。春之氣化從東來飛（觀律管飛灰是其明機），朝之氣化隨日自東上升。春者，一歲之木令，朝者，一日之木令也。肝臟屬木，具有生發之氣，於一歲則應春，於一日則應朝。其氣化先行於左之理，固可於春之東來，日之東升，比例而得也，天地之東，即人身之左也。且即以此案論，左脈之微弱如是，投以補肝之劑，而脈即旋起，豈非肝與人身之左，相關甚切乎」！

或又曰「肝之氣化既先行於左矣，而其所以居右者何也」？答曰「人之膈上屬天，膈下屬地。地道上右，其氣化自西而東也。天道上左，其氣化自東而西也。觀於日在地中，自西而東。日在地外，自東而西，是明徵也。肝居膈下，猶木根埋藏地中，以下襲水氣，宜從地道上右之義，故居於右也。其氣化透膈貫絡，有如木之條達滋長，以上升氧氣（化學家謂木能吸碳氣吐氧氣），宜從天道上左之義，故其氣化先行於左。試觀植物中，藤蔓之類附物而生，必自右向左盤旋而上（惟金銀藤之盤旋自左向右，乃植物之獨異者），亦猶肝居右，而其氣化先行於左之理也（宜與第五期《衷中參西錄》報駁左肝右脾者書參觀）。

奉天本溪湖煤鐵公司科員王雲生，年四十餘，兩脅下連腿作疼，其疼劇之時，有如錐刺，且尿道艱澀滴瀝，不能成溜，每小便一次，須多半點鐘，其脈亦右部

如常，左部微弱。亦投以曲直湯，加生黃耆八錢，續斷三錢，一劑其疼減半，小便亦覺順利。再診之，左脈較前有力。又按原方略為加減，連服二十餘劑，脅與腿之疼皆愈，小便亦通利如常。蓋兩脅為肝之部位，肝氣壯旺上達，自不下鬱而作疼。至其小便亦通利者，因腎為二便之關，肝氣既旺，自能為腎行氣也（古方書有肝行腎之氣之語）。

按：山茱萸得木氣最厚，酸性之中大具開通之力，以木性喜條達故也。《神農本草經》謂主寒濕痺，諸家本草多謂其能通利九竅，其性不但補肝，而兼能利通氣血可知，若但視為收澀之品，則淺之乎視山茱萸矣。特是其核與肉之性相反，用者須加審慎，千萬將核去淨。有門人張甲升亦有重用山茱萸肉治癒腿疼之案，附載於加味補血湯（在第七卷）後，可參觀。再合之拙擬既濟湯、來復湯（皆在第一卷）後，所載重用萸肉治驗之案，則山茱萸肉之功用，不幾令人不可思議哉！

乳香、沒藥不但流通經絡之氣血，諸凡臟腑中有氣血凝滯，二藥皆能流通之。醫者但知其善入經絡，用之以消瘡瘍，或外敷瘡瘍，而不知用之以調臟腑之氣血，斯豈知乳香、沒藥者哉！

【熱性關節腫疼用阿斯必林法】

西人治關節急性（熱也）癩麻質斯（腫疼）慣用阿斯必林，而愚對於此證亦喜用之，更以中藥駕馭之，則其效愈顯。奉天陸軍參謀長趙海珊之侄，年六歲，腦後生瘡，漫腫作疼，繼而頭面皆腫，若赤遊丹毒，繼而作抽掣，日甚一日，浸至周身僵直，其目不能合，亦不能瞬，氣息若斷若續，呻吟全無。其家人亦以為無藥可治，待時而已。閱兩晝夜，形狀如舊，時灌以勺水，似猶知下嚥，因轉念或猶可治。而彼處醫者，又皆從前延請，而屢次服藥無效者也。其祖父素信愚，因其嚮患下部及兩腿皆腫，曾為治癒。其父受瘟病甚險，亦昇至院中治癒，遂亦昇之來院，求為診治。其脈洪數而實，肌膚發熱，知其夾雜瘟病，陽明府證已實，勢雖垂危，猶可挽回也。遂用生石膏細末四兩，以蒸汽水煮湯四茶杯，徐徐溫灌之，周十二時劑盡，脈見和緩，微能作聲。又用阿斯必林瓦半，仍以汽水所煎石膏湯，分五次送下，限一日夜服完。服至末一次，皆周身微見汗，其精神稍明瞭，肢體能微動。從前七八日不食，且不大便，至此可少進食，大便亦通下矣。自此用生山藥細末二三錢，煮作茶湯，調以白蔗糖，送服阿斯必林三分瓦之一，日兩次，若見有熱，又間飲汽水所煮石膏湯。又用蜂蜜調黃連末，少加薄荷冰，敷其頭面腫處，生肌散敷其瘡破處。如此調養數日，病勢皆減退，可以能言。其左邊手足仍不能動，試略為屈伸則疼不能忍。細驗之，關節處皆微腫，按之亦覺疼，知其關節之間，因熱生炎也。遂又用鮮茅根煎濃湯（無鮮茅根藥房中乾者亦可用），

調以白蔗糖，送服阿斯必林半瓦，日兩次，俾服藥後，周身微似有汗，亦間有不出汗之時，俾關節中之炎熱，徐徐隨發表之藥透出，又佐以健補脾胃之藥，俾其多進飲食，如此旬餘，左手足皆能運動，關節處皆能屈伸。以後飲食復常，停藥勿服，靜養半月，行動如常矣。

此證，共用生石膏三斤、阿斯必林三十瓦，始能完全治癒。愚用阿斯必林治急性關節腫疼者已多次，為此證最險，故詳記之。

茅根，性涼中空，稟初春生發之氣，能使內熱外達，透表而出，又善利小便，熱自水道出，又味甘多液，善滋養陰分，二鮮飲及白茅根湯（皆在第二卷）曾詳論之。

丁仲佑《西藥實驗談》謂，東人治關節急性癱麻質斯，亦多用阿斯必林，兼引矢島國大郎之醫案以證明之，今並錄之於下以備參觀。

光緒壬寅，日本醫學報云「矢島國大郎阿斯必林之效用，既得諸家之報告，知為各醫家所注目，無庸再為陳說。但其應用之處，與向來癱麻質斯劑及各種解熱劑，其優劣如何，尚待竭力研究之，始能得其實際」。予自接阿斯必林有特效為癱麻質斯之報告，至今施用於患此證者，計共二十三名，中有急性患者十九名服之均呈效果。餘之慢性者，則無效。而急性患者之十九名中，有下之四例茲特報告之。

第一例：根橋某次女，年二十九歲。在二年前右膝關節罹痺麻質斯，歷二月而治癒，距今二十日前，復罹感冒，右膝關節腫起而疼痛，惡寒發熱，而髀白關節及足跗關節亦波及，而不便運動。醫治不效，疼浸加劇，赴某醫會診之。右腳各關節均紅腫，而膝關節尤甚，不能為些微之運動，如微觸之則疼痛難忍。體溫在三十九度六分，脈搏百二十至（一分鐘之脈動數）而細弱，聽其心臟有如吹氣之雜音，舌白苔厚，食量銳減，故診定為急性關節痺麻質斯。舊時醫法，撒裡矢爾酸曹達，每次一瓦，一日三次，或內服沃度劑及安知必林，患處縛以塗沃度丁幾之布，按法施治未見輕減。予於是用阿斯必林二瓦和乳糖分為三包，一日分服。膝關節部，則囑該會醫施以石炭酸水之冷濕布繃帶。明日復往診視，患者服藥後曾發汗，疼亦消減半，夜可睡眠。於是復取阿斯必林二瓦，每日作三次分服。二日後，紅腫頓形淨退，能為輕微之運動，自後連服二周間，所患竟霍然愈。

第二例：野澤某女，年四十一歲。其所患者為右肩胛關節部腫起疼痛，手指麻痺不能自由運動，加以按摩法，腫疼反增劇，且更難運動，乞予診治。往診時患者適自浴出，云有人言此證取雜草煎湯沐浴之當見輕，而浴後運動稍覺自由。診之則肩胛關節部及上膊各處腫起壓疼，周身皆運動極難，其外形若脫臼狀。體溫在三十九度二分，脈搏百零八至，身神倦怠。予恐其浴後體溫或一時升騰，有頃再診之，仍為三十九度二分。遂診定為急性關節痺麻質斯。戒以發熱時不可久浴，宜用溫臥法治之，以撒裡矢爾酸曹達每服一瓦，日三次服。二日疼稍減而無



著明之變化，反起充血性之頭疼、耳鳴等證。予於是取阿斯必林一瓦半和入乳糖，分二包，令每日二回分服。翌日患處腫疼皆大減，頭疼亦愈，所患之肢能自徐徐上舉至頭部。乃更用阿斯必林二瓦，分三包與服。翌日患者大喜，來呼云「今朝能自結帶」，先後復服此劑二日，而所患悉除。

第三例：矢島某男，年四十九歲，業水車。病前數日並無他患，一日修繕水車試用於水中，遂整日在水中作業，迨至翌朝而左手腕關節部漸次腫疼，乃以右手持左手來求診。診之則腫起疼痛殊甚，殆不能接觸。予因其勞動診定為外傷性關節炎，用局部消炎法，命之靜養，至次日惡寒發熱，疼痛加甚，不能外出，熱至三十九度，脈搏百二十至，夜間難於安眠，意其為痺麻質斯，治以撒裡矢爾酸曹達三瓦、苦丁二瓦，和水一百瓦，為一日量，三次服下。患處用冷罨法，繼續不斷。次日仍無變化，體溫依然三十八度八分，出汗後惡寒加甚，於是易以阿斯必林二瓦，分為三包給之。次日大見平靜，疼痛亦大為減退，惟運動尚覺疼，腫起則減退淨盡，仍令連服阿斯必林，五日後遂痊愈，予故改診斷為腕關節痺麻質斯。

第四例：上田某女，年二十五歲。五年前產第一子，其足遂患疼痛，後復罹心臟病。惟十日前，並無他種原因可記，迨患日覺左肩胛部疼痛，勉強在室操作，覺疼痛浸增且腫起，遂難於運動。診之其腫起自肩胛關節部蔓延至肩胛背部及上膊部，惟疼痛止在關節部，安靜時尚無劇疼。熱三十八度，脈搏百至，心臟有雜

音，頸部及肘部有如淋巴腺之腫起，遂診定為肩胛關節儂麻質斯，用阿斯必林一瓦，分作三包，為一日之量，外用沃度丁幾。至一周日，毫無變化，腫疼依然。予於是疑藥物之作用，且疑其既往病歷中或有梅毒，故有腫起之線，乃改方為沃剝劑，兼以撒裡矢爾酸曹達一瓦，令頓服日二次。至一周日，仍不愈，且消化亦多障礙，遂再改診定為儂麻質斯，以阿斯必林二瓦，分三包，作一日服，每日如此，且以障礙消化，故兼用健胃的療法，疼痛乃稍退減。復漸次增其藥量為二瓦，服至三周間，連前藥四周間而治癒。由是知前用之量不合，而患者亦為慢性證，且患者正乳其第二子，晝間雖有人代為抱持，夜間仍自行提挈，忍疼以盡繃襪之任，故治療遂益形緩慢。

丁仲佑曰「阿斯必林之應用不過為解熱、治關節疼二端而已。閱者每易滑過，而不知所謂解熱者，乃流行性感冒氣管支加答兒（炎熱腫疼之輕者）及一切熱性病皆可用之。所謂治關節疼者，凡淋毒性關節儂麻質斯及一切神經疼、頸寒、乳癌疼、子宮癌疼、脊髓勞皆可用之」。阿斯必林之原質性味形狀愚於參麥湯（在第一卷）下曾詳言之。其善治流行感冒者，以其能入三焦（即包連臟腑之油膜，第五卷小柴胡湯解下詳言之），外達腠理以發汗也。其善治肺結核者，以其能引肺中之毒熱外透皮毛（肺主皮毛）以消散也。其善治關節腫疼者，以其涼散之性能使關節之鬱熱悉融化也。愚嘗歷試此藥，用之得當奏效甚速，然其力甚猛，虛人服少半瓦即可出汗，故其案中於體質虛者，必以健胃之藥輔之始效也。



〈 第 五 卷 〉

治傷寒方

【麻黃加知母湯】

治傷寒無汗。

麻黃（四錢）、桂枝尖（二錢）、甘草（一錢）、杏仁（二錢，去皮炒）、知母（三錢）。

先煮麻黃五六沸，去上沫，納諸藥煮取一茶盅。溫服覆被，取微似汗，不須啜粥，餘如桂枝法將息。

麻黃湯原方，桂枝下有去皮二字，非去枝上之皮也。古人用桂枝，惟取梢尖嫩枝折視之，內外如一，皮骨不分。若見有皮骨可分辨者，去之不用，故曰去皮。陳修園之侄鳴岐曾詳論之。

《傷寒論》〈太陽篇〉中麻黃湯，原在桂枝湯後，而麻黃證多，桂枝證不過十中之一二，且病名傷寒，麻黃湯為治傷寒初得之主方，故先錄之。

傷寒者，傷於寒水之氣也。在天有寒水之氣，冬令之嚴寒是也。在人，有寒水之經，足太陽膀胱之經是也。外感之來，以類相從，傷寒之證，先自背受之，背者足太陽所轄之部位也。是以其證初得，周身雖皆惡寒，而背之惡寒尤甚，周身雖皆覺疼，而背下連腿之疼痛尤甚。其脈陰陽俱緊者，誠以太陽為周身外衛之陽，陡為風寒所襲，逼其陽氣內陷，與脈相並，其脈當有力，而作起伏迭湧之勢。而

寒氣之縮力（凡物之體熱則脹，寒則縮），又將外衛之氣縮緊，逼壓脈道，使不得起伏成波瀾，而惟現弦直有力之象，甚或因不能起伏，而至左右彈動。

凡脈之緊者必有力，夫脈之跳動，心臟主之，而其跳動之有力，不但心主之也，諸臟腑有熱皆可助脈之跳動有力，營衛中有熱亦可助脈之跳動有力，特是脈之有力者，恆若水之有浪，大有起伏之勢，而緊脈雖有力，轉若無所起伏，誠以嚴寒束其外表，其收縮之力能逼營衛之熱內陷與脈相並，以助其有力，而其收縮之力又能遏抑脈之跳動，使無起伏，是緊脈之真相，原於平行中見其有力也。至於緊脈或左右彈者，亦蓄極而旁溢之象也。仲師治以麻黃湯，所以解外表所束之寒也，方中用麻黃之性熱中空者，直走太陽之經，外達皮毛，借汗解以祛外感之寒。桂枝之辛溫微甘者，偕同甘草以溫肌肉、實腠理，助麻黃托寒外出。杏仁之苦降者，入胸中以降逆定喘。原方止此四味，而愚為加知母者，誠以服此湯後，間有汗出不解者，非因汗出未透，實因餘熱未清也。佐以知母於發表之中，兼寓清熱之意，自無汗後不解之虞。此乃屢經試驗，而確知其然，非敢於經方輕為加減也。

或問「喘為肺臟之病，太陽經於肺無涉，而其證多兼微喘者何也」？答曰「胸中亦太陽部位，其中所積之大氣，原與周身衛氣，息息相通。衛氣既為寒氣所束，則大氣內鬱，必膨脹而上逆衝肺，此喘之所由來也。又風寒襲於皮毛，必兼入手太陰肺經，挾痰涎凝鬱肺竅，此又喘之所由來也。麻黃能兼入手太陰經，散其在

經之風寒，更能直入肺中，以瀉其鬱滿，所以能發太陽之汗者不僅麻黃，而仲景獨取麻黃，為治足經之藥，而手經亦兼顧無遺，此仲景制方之妙也」。

凡利小便之藥，其中空者，多兼能發汗，藹蓄、木通之類是也。發汗之藥，其中空者，多兼能利小便，麻黃、柴胡之類是也。太陽經病往往兼及於膀胱，以其為太陽之腑也。麻黃湯治太陽在經之邪，而在腑者亦兼能治之。蓋在經之邪，由汗而解，而在腑之邪，亦可由小便而解。彼後世自作聰明，恆用他藥以代麻黃湯者，於此義蓋未之審也。

大青龍湯，治傷寒無汗煩躁，是胸中先有內熱，無所發泄，遂鬱而作煩躁，故於解表藥中，加石膏以清內熱。然麻黃與石膏並用，間有不汗之時，若用此方，將知母加重數錢，其寒潤之性，能入胸中化合而為汁，隨麻、桂以達於外，而煩躁自除矣。

傷寒與溫病，始異而終同，為其始異也，故傷寒發表，可用溫熱，溫病發表必須辛涼。為其終同也，故病傳陽明之後，無論寒溫，皆宜治以寒涼，而大忌溫熱。茲編於解表類中，略取《傷寒論》太陽篇數方，少加疏解，俾初學知傷寒初得治法，原異於溫病，因益知溫病初得治法，不同於傷寒。至於傷寒三陰治法，雖亦與溫病多不同，然其證甚少。若擴充言之，則凡因寒而得之霍亂、痧證，又似皆包括其中。精微浩繁，萬言莫罄，欲精其業者，取原書細觀可也。

錢天來曰「漢之一兩為今之二錢七分。一升為今之二合半」。程扶生曰「以古今量度及秬黍考之，以一千二百黍之重，實於黃鐘之龠，得古之半兩，今之三錢也。合兩龠為合，得古之一兩，今之六錢也。十銖為千黍之重，今之二錢半也。一銖為百黍之重，今之二分半也」。陸九芝曰「傷寒方一兩，准今之七分六厘。一升，准今之六勺七抄。若麻黃湯麻黃三兩，准今之二錢三分，其三之一，應得七分強。承氣湯大黃四兩，准今之三錢，折半應得一錢五分」。按程氏之說，古方分量過重，陸氏之說，古方分量又過輕，惟錢氏之說，其輕重似適宜。陳修園則謂「用古不必泥於古，凡《傷寒》、《金匱》古方中之一兩，可折為今之三錢」。陸氏又謂「麻黃數分即可發汗，大黃一二錢即可降下燥結，此以治南方人猶可，若治北方人則不然」。愚臨證體驗多年，麻黃必至二錢始能出汗，大黃必至三錢始能通結，然猶是富貴中，且不受勞碌之人。至其人勞碌不避寒暑，飲食不擇精粗，身體強壯，或又當嚴寒之時，恒有用麻黃至七八錢始能汗者，若其大便燥結之甚，恒有用大黃至兩餘大便始能通者，究之用藥以勝病為主，此中因時、因地、因證、因人，斟酌鹹宜，自能愈病，安可有拘執之見，存於心中也哉！



【加味桂枝代粥湯】

治傷寒有汗。

桂枝尖（三錢）、生杭芍（三錢）、甘草（錢半）、生薑（三錢）、大棗（三枚，掰開）、生黃耆（三錢）、知母（三錢）、防風（二錢）。

煎湯一茶盅，溫服覆被，令一時許，遍身微似有汗者益佳。不可如水流漓，病必不除。禁生冷、粘滑、肉面、五辛、酒酪及臭惡等物。

桂枝湯為治傷風有汗之方。釋者謂風傷營則有汗，又或謂營分虛損，即與外邪相感召。斯說也，愚嘗疑之。人之營衛，皆為周身之外廓。衛譬則郭也，營譬則城也，有衛以為營之外圍，外感之邪，何能越衛而傷營乎？蓋人之胸中大氣，息息與衛氣相關，大氣充滿於胸中，則饒有吸力，將衛氣吸緊，以密護於周身，捍御外感，使不得著體，即或著體，亦止中於衛，而不中於營，此理固顯然也。有時胸中大氣虛損，不能吸攝衛氣，衛氣散漫，不能捍御外邪，則外邪之來，直可透衛而入營矣。且愚臨證實驗以來，凡胸中大氣虛損，或更下陷者，其人恆大汗淋漓，拙擬升陷湯（在第四卷下）下，載有數案，可參觀也。是知凡桂枝湯證，皆因大氣虛損，其汗先有外越之機，而外邪之來，又乘衛氣之虛，直透營分，擾其營中津液，外泄而為汗也。究之，風寒原不相離，即係傷風，其中原挾有寒氣，若但中於衛則亦能閉汗矣，故所用桂枝湯中，不但以祛風為務，而兼有散寒之功也。

陳古愚曰「桂枝辛溫，陽也。芍藥苦平，陰也。桂枝又得生薑之辛，同氣相求，可恃之調周身之陽氣。芍藥而得大棗、甘草之甘苦化合，可恃之以滋周身之陰液。既取大補陰陽之品，養其汗源，為勝邪之本，又啜粥以助之，取水穀之津以為汗，汗後毫不受傷，所謂立身於不敗之地，以圖萬全也」。

按：此解甚超妙，而於啜粥之精義，猶欠發揮。如謂取水穀之津，以為汗，而人無傷損，他發汗藥，何以皆不啜粥？蓋桂枝湯所主之證，乃外感兼虛之證，所虛者何？胸中大氣是也。《內經》曰「穀始入於胃，其精微者，先出於胃之兩焦，以溉五臟，別出兩行營衛之道，其大氣之搏而不行者，積於胸中，命曰氣海」。由斯觀之，大氣雖本於先天，實賴後天水穀之氣培養而成。桂枝湯證，既因大氣虛損，致衛氣漫散，邪得越衛而侵營，故於服藥之後，即啜熱粥，能補助胸中大氣以勝邪，兼能宣通薑、桂以逐邪，此誠戰則必勝之良方也。乃後世醫者忽不加察，雖用其方，多不啜粥，致令服後無效，病轉深陷，故王清任《醫林改錯》深詆桂枝湯無用，非無用也，不啜粥故也。是以愚用此方時，加黃耆升補大氣，以代粥補益之力，防風宣通營衛，以代粥發表之力，服後啜粥固佳，即不啜粥，亦可奏效。而又恐黃耆溫補之性，服後易至生熱，故又加知母，以預為之防也。

按：凡服桂枝湯原方，欲其出汗者，非啜粥不效。趙晴初曰「族侄柏堂，二十一歲時，酒後寐中受風，遍身肌膚麻痺，搔之不知疼癢，飲食如常。時淮陰吳鞠通適寓伊芳家，投以桂枝湯，桂枝五錢、白芍四錢、甘草三錢、生薑三片、大

棗兩枚，水三杯，煎二杯，先服一杯，得汗止後服，不汗再服。並囑弗夜膳，臨睡腹覺饑，服藥一杯，須與啜熱稀粥一碗，覆被取汗。柏堂如其法，只一服，便由頭面至足，遍身熱熱得微汗，汗到處，一手搔之，輒知疼癢，次日病若失。觀此醫案，知欲用桂枝湯原方發汗者，必須啜粥，若不啜粥，即能發汗，恐亦無此功效。

或問「桂枝湯證，其原因既為大氣虛損，宜其陽脈現微弱之象，何以其脈轉陽浮而陰弱乎」？答曰「人之一身，皆氣之所撐懸也。此氣在下焦為元氣，在中焦為中氣，在上焦為大氣，區域雖分，而實一氣貫注。故一身之中，無論何處氣虛，脈之三部，皆現弱象。今其關前之脈，因風而浮，轉若不見其弱，而其關後之脈，仍然微弱，故曰陽浮而陰弱也。如謂陰弱為下焦陰虛，則其脈宜兼數象。而愚生平所遇此等證，其脈多遲緩，不及四至，其為氣分虛損，而非陰分虛損可知，即所謂嗇嗇惡寒、淅淅惡風，翕翕發熱，亦皆氣分怯弱之形狀也。後世謂「傷寒入足經，不人手經」，治傷寒之方，亦但治足經，不治手經，其說誠非也。夫麻黃湯，兼治手太陰經，於前方後曾詳論之。至桂枝湯，兼治手太陽經，唐容川論之甚詳。其言曰「膀胱主氣屬衛分，小腸主火主血屬營分。營生於心、藏於肝，而導之出者小腸也」。心火生營血，循包絡下人肝膈，散走連網而及小腸，通體全生於連網之上。小腸者心之府，而連網者，肝膈相連者也。小腸宣心之陽，從連網肝膈之中，而外達腠理，又外達肌肉，是為營氣與衛氣合，以成其為太陽之

功用。故邪在營分，用甘、棗補脾，從脾之膏油外達，以托肌肉之邪。用芍藥行肝血，從肝隔連網而外達肌肉，以行營血之滯。用生薑宣三焦少陽之氣，從連網達腠理，以散外邪。而尤重在桂枝一味，能宣心陽，從小腸連網以達於外，使營血充於肌肉間，而邪不得留也。然則此方，正是和肌肉、治營血之方，正是小腸血分之方。蓋膀胱屬水，小腸屬火，以火化水，而後成太陽之功用，若不知水火合化之理，則此方之根源不明也。

按：連網即包連臟腑之網油脂膜，亦即三焦也。從前論三焦者，皆未能確指為何物，獨容川所著《醫經精義》論之甚詳，能發前人所未發，其功偉矣。

王叔和《脈訣》三焦與心包絡，皆診於右尺，後世多有詆其差謬者。愚向亦嘗疑之，後見容川所論三焦與腎係，心始豁然，所謂腎係者，即絡腎之脂膜，其根連於脊椎，自下數第七節處，此為命門穴，乃相火由生之處。此油膜，原與網油相連為一體，上為隔膜，更上為心與肺相連之包絡，由斯知心包絡與三焦，亦皆發原於命門。且心包絡與三焦臟腑相配，又皆屬火，故可與相火同診於右尺也。叔和當日，去古未遠，此必有秘傳口授，而後筆之於書也。詳觀容川之論，可明叔和之《脈訣》；既明叔和之《脈訣》，更知容川之論信而有徵矣。

【小青龍湯解】

（宜與第五期《衷中參西錄》第五卷歷序用小青龍湯治外感痰喘之經過及通變化裁之法參看）

《傷寒論》曰「傷寒表不解，心下有水氣，乾嘔，發熱而咳，或渴，或利，或噎，或小便不利、少腹滿，或喘者，小青龍湯主之」。

陳修園注云「太陽主寒水之氣，運行於皮膚，出入於心胸。今不運行出入，以致寒水之氣，泛溢而無底止。水停於胃則乾嘔，水氣與寒邪留戀而不解故發熱，肺主皮毛，水氣合之則發熱而咳，是發熱而咳，為心下有水氣之陰證。然水性之變動不居，不得不於未然之時，先作或然之想，或水蓄而正津不行則為渴，或水漬入腸間則為利，或逆之於上則為噎，或留而不行則為小便不利、少腹滿，或如麻黃證之喘，而兼證處顯出水氣，則為水氣之喘者。以上諸證，不必悉具，但見一二證即是也，以小青龍湯主之」。

又《傷寒論》曰「傷寒，心下有水氣，咳而微喘，發熱不渴，服湯已渴者，此寒去欲解也，小青龍湯主之」。陳修園注云「寒水之氣，太陽所專司，運行於膚表，出入於心胸，有氣而無形。苟人傷於寒，則不能運行出人，停於心下，無形之寒水化而為有形之水氣。水寒傷肺而氣上逆，則為咳而微喘。病在太陽之表，則現出標陽而發熱。然水寒已甚，標陽不能勝之，雖發熱而仍不渴。審證既確，

而以小青龍湯與服，服湯已而渴者，此寒去欲解，而水猶未解也。仍以小青龍湯主之，再散其水氣而愈。

修園此二節之注，原係即經文而為襯注，逐字逐句，補綴挑剔，曲暢盡致，可謂善解經文者矣。

【附錄】小青龍湯原方

麻黃去節三兩、芍藥三兩、細辛三兩、乾薑三兩、甘草三兩、桂枝去皮三兩、五味子半升、半夏半升湯洗。

上八味，以水一斗，先煮麻黃減二升，去上沫，納諸藥，煮取三升，去滓，溫服一升。若微利者，去麻黃，加薤花，如雞子大，熬令赤色（古以熬字作炒字用）。若渴者，去半夏，加栝蒌根三兩。若噎者（即呃逆），去麻黃，加附子一枚炮。若小便利、少腹滿，去麻黃，加茯苓四兩。若喘者，去麻黃，加杏仁半升，去皮尖。

按：薤花今人罕用，修園謂可以茯苓代之。

【附錄】更定小青龍湯分量

麻黃二錢、生杭芍三錢、乾薑一錢、甘草錢半、桂枝尖二錢、清半夏二錢、五味子錢半、細辛一錢。

此後世方書所載小青龍湯分量，而愚略為加減也。喘者，原去麻黃加杏仁，愚於喘證之甚實者，又恒加杏仁三錢，而仍用麻黃一錢，則其效更捷。若兼虛者，麻黃斷不宜用。《傷寒論》小青龍湯，無加石膏之例，而《金匱》有小青龍加石膏湯，治肺脹咳而上氣，煩躁而喘，脈浮者，心下有水。是以愚治外感痰喘之挾熱者，遵《金匱》之例必酌加生石膏數錢，其熱甚者，又或用至兩餘。

喻嘉言曰「桂枝、麻黃法無大小，而青龍湯有大小者，以桂枝、麻黃之變化多，而大青龍湯之變法，不過於桂、麻二湯內施其化裁，或增或去，或饒或減，其中神化莫可端倪。又立小青龍一法，散邪之功兼乎滌飲，取義山澤小龍養成頭角，乘雷雨而翻江攪海，直奔龍門之義，用以代大青龍，而擅江河行水之力，立法誠大備也。因經叔和編次漫無統紀，昌於分編之際，特以大青龍為綱，於中麻、桂諸法悉統於青龍項下，擬為龍背、龍腰、龍腹，然後以小青龍湯尾之，或飛或潛，可彌可伏，用大用小，曲暢無遺。居然仲景通天手眼，馭龍心法矣。昔有善畫龍者，舉筆凝思，而青天忽生風雨。吾不知仲景制方之時，其為龍乎？其為仲景乎？必有倏然雷雨滿盈（大青龍湯），倏然密雲不雨（桂枝二越婢一湯），倏然波浪奔騰（小青龍湯），以應其生心之化裁者，神哉青龍等方，即擬為九天龍經可也。

又曰「婁東胡卣臣先生，昌所謂賢士大夫也。夙昔痰飲為恙，夏日地氣上升，痰即內動，設小有外感，隔間痰即不行，二三日瘥後，當膺尚結小瘥，無醫不詢，

無方不考，乃至夢寐懇求大士治療，因而聞疾思苦，深入三摩地位，薦分治病手眼，今且仁智兼成矣。昌昔謂膀胱之氣流行，地氣不升，則天氣常朗，其偶受外感，則仲景之小青龍方，與大士水月光中大圓鏡智無以異也。蓋無形之感挾有形之痰互為膠漆，其當胸窟宅，適在太陽經位，惟於麻、桂方中，倍加五味、半夏以滌飲而收陰，加乾薑、細辛以散結而分解，合而用之，令藥力適在痰飲縮結之處，攻擊片時，則無形之感從肌膚出，有形之痰從水道出，頃刻分解無餘，而膈胸空曠，不復叢生小瘞矣。若泥麻、桂甘溫，減去不用，則不成其為龍矣，將恃何物為翻波鼓浪之具乎？

寒溫中，皆有痰喘之證，其劇者甚為危險。醫者自出私智治之，皆不能效，惟治以小青龍湯，或治以小青龍加石膏湯，則可隨手奏效。然寒溫之證，兼喘者甚多，而有有痰無痰與虛實輕重之分，又不必定用小青龍湯也。今將其證，分列數條於下，審證施治，庶幾不誤。

\* 氣逆迫促，喘且呻，或兼肩息者，宜小青龍湯，去麻黃加杏仁。熱者，加生石膏。

\* 喘伏如前，而脈象無力，或兼數者，宜小青龍湯，去麻黃加杏仁，再加生石膏、人參。

\* 喘不至呻，亦不肩息，惟吸難呼易，苦上氣，其脈虛而無力，或兼數者，宜拙擬清燥湯（在後）。



\*喘不甚劇，呼吸無聲，其脈實，而至數不數者，宜小青龍湯，去麻黃加杏仁生石膏。若脈更滑數者，宜再加知母。

\*喘不甚劇，脈洪滑而浮，舌苔白厚，胸中煩熱者，宜用拙擬寒解湯（在後）汗之。

\*喘而發熱，脈象確有實熱，至數兼數，重按無力者，宜拙擬白虎加人參以山藥代粳米湯（在第六卷），更以生地代知母，加茅根作引。

\*喘而結胸者，宜用《傷寒論》中諸陷胸湯丸，或拙擬蕩胸湯（在第七卷），以開其結，其喘自愈。上所列喘證共七種，合之後留水石膏飲所主之喘證，外感喘證之治法，亦略備矣。至於麻黃湯證，多有兼微喘者，此為業醫者所共知，不必列於數條中也。

小青龍湯，為治外感痰喘之神方。其人或素有他證，於小青龍湯不宜，而必須用小青龍湯之時，亦不可有所顧忌。徐靈胎曰「松江王孝賢夫人，素有血證，時發時止，發則微嗽。又因感冒變成痰喘，不能著枕，日夜俯几而坐，竟不能支持矣」。是時有常州名醫法丹書調治不效，延余至。余曰「此小青龍湯證也」。法曰「我固知之，但體弱而素有血證，麻、桂諸方可用乎」？余曰「急則治標，若更喘數日殆矣。且治其新病，愈後再治其本病可也」。法曰「誠然，病家焉能知之，如用麻、桂而本病復發，則不咎病本無治，而恨用麻、桂誤之矣。我乃行道之人，不能任其咎，君不以醫名，我不與聞，君獨任之可也」。余曰「然服之

有害，我自當之，但求先生不阻之，遂與服，飲畢而氣平，終夕得安。然後以消痰、潤肺、養陰、開胃之方，以次調之，體乃復舊。

按：有血證者，最忌桂枝，不甚忌麻黃。用此方時，宜稍為變通，去桂枝留麻黃，再加生石膏，服之亦可愈病，且妥善無他虞。

又愚用小青龍湯，凡遇脈虛者，必預購補藥，以備不時之需。曾治一叟，年六十三，於仲冬得傷寒證，痰喘甚劇，其脈浮而弱，不任循按。問其平素，言有勞病，冬日恒發喘嗽。愚再三躊躇，勉強治以小青龍湯，去麻黃加杏仁、生石膏。為其脈弱，俾預購補藥數種備用，服藥喘稍愈。再診其脈微弱益甚，愚遂用龍骨、牡蠣（皆不用煨）、野臺參、生杭芍、山萸肉（去淨核）為方，皆所素購也。煎湯甫成，此時病人呼吸俱微，自覺氣息不續，急將藥飲下，氣息遂可接續。愚將旋里，囑再服藥數劑，以善其後。隔三日復來迎愚，言病又反復。愚至，見其喘促異常，其脈尺部無根，寸部有熱。急用酸石榴一個，連皮搗爛煮湯，調白沙糖多半兩，服之喘愈大半。又用所服原方去萸肉，仍加酸石榴一個，與藥同煎好，再兌生梨自然汁半茶盅，服之喘遂大愈。蓋石榴與萸肉，同係酸斂之品，而一則性溫，一則性涼，此時脈象有火，故以酸石榴易萸肉，而又加生梨汁之甘寒，所以服之能效也。

又門人高如璧，曾治一外感痰喘，其脈甚虛，如璧投以小青龍湯，去麻黃，加杏仁，又加野臺參五錢、生石膏八錢，一劑而喘定。繼用拙擬從龍湯（在後），

亦加參與石膏，病若失。按：如此調方，以治外感之痰喘兼虛者，誠為穩善，較愚之用補藥於小青龍湯後者，可謂青出於藍矣。

又長子蔭潮，曾治一外感痰喘，喘逆甚劇，脈甚虛數。諸醫因喘劇脈虛數，皆辭不治。蔭潮投以小青龍湯，去麻黃，加杏仁，又加人參、生石膏各一兩，一劑病癒大半。繼投以從龍湯，去半夏，加人參、生石膏，兩劑痊愈。

小青龍湯，治外感挾水氣，凡證由於外感痰飲者，用之皆有捷效，以痰飲即水之所結也。一媪，年六十餘，得溫病三四日，胸膈煩滿，甚覺短氣，其脈滑而有力。投以小青龍湯，加生石膏一兩，胸次豁然，仍覺表裡發熱。繼投以大劑白虎加人參湯，方中生石膏用三兩，煎湯一大碗，分三次溫飲下，盡劑而愈。

外感之證，皆忌用五味，而兼痰嗽者尤忌之，以其酸斂之力甚大，能將外感之邪錮閉肺中而終身成勞嗽也。惟與乾薑並用，濟之以至辛之味，則分毫無礙。按五行之理，辛可勝酸，《內經》有明文也，徐氏《本草百種錄》中亦論之甚詳。

肺具闢之力，其闢之力適均，且機關靈動活潑，則呼吸自順。陳修園曰：「乾薑以司肺之辟，五味以司肺之闢，細辛以發動其闢辟活動之機，小青龍湯中，當以此三味為主，故他藥皆可加減，此三味則缺一不可。按五味能闢，乾薑能辟，其理易明，至細辛能發動其闢辟之機，其理甚邃。蓋細辛味辛，而細嚼之，有酸收之意，《本經》謂主咳逆上氣，是此一藥不但味辛能辟，而又能闢也，其所以能發動闢辟之機者，誠在於斯。」

細辛有服不過錢之說，是言單服此一味也。若入湯劑，有他藥渣相混，即用一錢，不過有半錢之力，若再少用，即不能成功矣。故用小青龍湯者，細辛必以一錢為度。

麻黃能瀉肺氣以定喘，桂枝能降肺氣以定喘。外感痰喘，多有兼氣虛者，故不敢用麻黃瀉肺，而易以杏仁，助桂枝以降肺。由是觀之，若其氣分不虛，而證又甚實，不去麻黃亦可，或加杏仁，減麻黃之半亦可。況《金匱》小青龍加石膏湯，治肺脹作喘，原不去麻黃，亦不加杏仁。蓋加石膏，即可以不去麻黃，為有麻黃，所以不用杏仁。若遇其氣分甚虛者，雖加石膏，亦宜以杏仁代麻黃，而又加參也。

愚用小青龍治外感痰喘，屢次皆效，然必加生石膏，或七八錢，或至兩餘，若畏石膏不敢多用，即無效驗。堂姊丈褚樾濃，體豐氣虛，素多痰飲，薄受外感即大喘不止，醫治無效，旬日喘始漸愈。偶與愚言及，若甚恐懼。愚曰「此甚易治，顧用方何如耳。」《金匱》小青龍加石膏湯，為治外感痰喘之神方，輔以拙擬從龍湯，則其功愈顯。若後再喘時，先服小青龍加石膏湯，若一劑喘定，繼服從龍湯一劑，其喘必不反復。若一劑喘未定，小青龍加石膏湯可服至兩三劑，若猶未痊愈，繼服從龍湯一兩劑，必能痊愈。若服小青龍加石膏湯喘止，旋反復，再服不效者，繼服從龍湯一二劑必效。遂錄兩方贈之，樾濃甚欣喜，如獲異珍，後用小青龍湯時，畏石膏不敢多加，雖效實無捷效。偶因外感較重喘劇，連服小

青龍湯兩劑，每劑加生石膏三錢，喘不止而轉增煩躁，遂放膽加生石膏一兩，一劑喘止，而煩躁亦愈。由斯觀之，即脈與證皆無熱象者，亦宜加生石膏數錢，以解麻、桂、姜、辛之熱也。

嘗視《傷寒》之方，不但小青龍湯宜加石膏，而他方亦多有宜加涼藥者。仲景為醫中之聖，所著《傷寒論》一書，弘博淵深，開後人無限法門，原不可輕加擬議。特是天地之氣運，數十年而一變。仲景先成《傷寒論》，小青龍湯一方加法甚多，而獨不加石膏，蓋其時無可加石膏之證也。後著《金匱》，則小青龍湯加石膏矣，其時有其證可知。相隔應不甚遠，氣運即有變遷，況自漢季至今，一千六百餘年，必執定古人之方，以治今人之病，不知少有變通，是亦不善用古方也。況《傷寒論》前原散佚，經王叔和編次而成，其中能保無舛訛乎？是以愚於《傷寒論》一書，其可信者，尊之如《本經》、《內經》，間有不敢信者，不得不存為疑案，以待質高明也。

即如太陽一篇，第二十五節云「服桂枝湯大汗出，脈洪大者，與桂枝湯如前法」。按：此證有過汗亡陰之象（徐氏《迴溪醫案》言過汗亡陰亡陽之分，論之甚詳），其脈之洪大，乃陽偏盛也，桂枝之辛溫猶可用乎？

第四十五節云「太陽病，脈浮緊，無汗，發熱，身疼痛，八九日不解，表證仍在，此當發其汗，服藥已微除，其人發煩目瞑，劇者必衄，衄乃解，所以然者，陽氣重故也，麻黃湯主之」。按：此證麻黃湯主之，謂用麻黃湯於未衄之前，當

發其汗時也。然服麻黃湯後，至於發煩目暝，劇者且衄，則其先早有伏熱可知。設用麻黃湯時，去桂枝勿使動其血分，再加知母以清其伏熱，其人不發煩目暝，血即可以不衄，縱衄時不亦輕乎？且今日寒溫諸證，恒有因衄血過劇而憤事者，又不可執定衄後即解也。曾治一室女得溫病，七八日間衄血甚多，衄後身益熱，且怔忡，脈甚虛數。投以大劑白虎加人參湯，生石膏重用三兩，煎湯一大碗，分三次溫飲下，熱遂退。隔半日復衄血，病家懼甚，診其脈甚平和，曰無須用藥即愈矣，果須臾而愈。此證若於初次衄後，不急用白虎加人參湯，清熱兼補其虛，其身熱脈數，心複怔忡之狀況，猶堪再衄乎！

第五十四節云「傷寒不大便六七日，頭痛有熱者，與承氣湯。小便清者，知不在裡，仍在表也，當須發汗，若頭痛者必衄，宜以桂枝湯」。按：此謂用桂枝湯，於未衄之前，即可以不衄也。徐靈胎曰「外感風熱，藥中誤用桂枝，即可吐血衄血」，此誠確當之論。曾治一媪，年近六旬，感冒風寒，投以發表之劑，中有桂枝，一服而愈。後數月又得感冒證，兼有心中積熱，自服原方，竟至吐血。由斯觀之，此證既血熱，有將衄之勢，桂枝湯亦似難用，縱有表證宜解，擬用麻黃湯去桂枝，加知母、芍藥，方為穩妥。

諸如此類，竊疑非仲景原文，即係仲景原文，而當時人猶近古，稟質渾穆，雖經外感鑱耗，其陰分不易虧損，即偶有所損，而其根柢仍固，故治之者，率可但治其外感，不必多有所顧忌。今人稟賦不及古人，而人事又多遭損，或吸煙、

或鳩酒、或縱欲及一切勞心勞力過度之事，皆足傷人陰分，故甫經邪熱鏢耗，其陰分即有莫支之勢。治之者，宜時時顧其陰分，無論或發表、或和解、或降下，見有熱象可徵者，即宜加涼潤之藥佐之，若知母、生石膏、芍藥之類。惟甘寒黏泥，雖能滋陰，而能錮閉外邪者，不宜用也。

【從龍湯】

治外感痰喘，服小青龍湯，病未痊愈，或愈而復發者，繼服此湯。

龍骨（一兩，不用煨）、牡蠣（一兩，不用煨）、生杭芍（五錢）、清半夏（四錢）、蘇子（四錢，炒搗）、牛蒡子（三錢，炒搗）。

熱者，酌加生石膏數錢或至一兩。

從來愚治外感痰喘，遵《傷寒論》小青龍湯加減法，去麻黃加杏仁，熱者更加生石膏，莫不隨手而愈。然間有愈而復發，再服原方不效者，自擬得此湯後，凡遇此等證，服小青龍湯一兩劑即愈者，繼服從龍湯一劑，必不再發。未痊愈者，服從龍湯一劑或兩劑，必然痊愈。名曰從龍湯者，為其最宜用於小青龍湯後也。

或疑方中重用龍骨、牡蠣，收澀太過，以治外感之證，雖當發表之餘，仍恐餘邪未盡，被此收澀之藥固閉於中，縱一時強制不喘，恐病根益深，異日更有意外之變。答曰「若是以品龍骨、牡蠣，淺之乎視龍骨、牡蠣者也，斯可徵之以前哲之說」。

陳修園曰「痰，水也，隨火而上升。龍屬陽而潛於海，能引逆上之火、氾濫之水，下歸其宅。若與牡蠣同用，為治痰之神品。今人止知其性澀以收脫，何其淺也」。



徐靈胎曰「龍得天地純陽之氣以生。藏時多，見時少，其性雖動而能靜。故其骨最粘澀，能收斂正氣，凡心神耗散，腸胃滑脫之疾，皆能已之」。

又曰「陽之純者，乃天地之正氣，故在人亦但斂正氣，而不斂邪氣。所以仲景於傷寒邪氣未盡者，亦恒與牡蠣同用，若仲景之柴胡加龍骨牡蠣湯，桂枝、甘草、龍骨、牡蠣湯諸方是也。後之醫者，於此義蓋未之審也」。

又曰「人身之神屬陽，然非若氣血之有形質，可補瀉也，故治神為最難。龍者秉天地之元陽出入而變化不測，乃天地之神也，以神治神，則氣類相感，更佐以寒熱溫涼補瀉之法，雖無形之病，不難治矣」。

又曰「天地之陽氣有二，一為元陽之陽，一為陰陽之陽。陰陽之陽，升於太極既判之時，以日月為升降，而水火則其用也，與陰為對待，而不並於陰，此天地並立之義也。元陽之陽，存於太極未判之時，以寒暑為起伏，而雷雨則其用也，與陰為附麗，而不雜於陰，此天包地之義也。龍者正天地元陽之氣所生，藏於水而不離乎水者也。故春分陽氣上並，泉冷，龍用事而能飛。秋分陽氣下並，泉溫，龍退蟄而能潛。人身五臟屬陰，而腎尤為陰中之至陰，故人之元陽藏焉，是腎為藏水之臟，而亦為藏火之臟也，所以陰分之火，動而不藏者亦用龍骨，蓋借其氣以藏之，必能自還其宅也」。

按：此論與前論皆妙甚，果能細參其理，則無疑於拙擬之從龍湯矣。

愚於傷寒、溫病，熱實脈虛，心中怔忡，精神騷擾者，恆龍骨與莢肉、生石膏並用，即可隨手奏效。門人高如璧曾治一外感痰喘，其喘劇脈虛，醫皆諉為不治。如璧投以小青龍湯，去麻黃，加杏仁，又加生石膏一兩、野臺參五錢，一劑而喘定。恐其反復，又繼投以從龍湯，亦加人參與生石膏，其病霍然頓愈。

又子萌潮治曲姓叟，年六十餘，外感痰喘，十餘日不能臥。醫者投以小青龍湯兩劑，病益加劇（脈有熱而不敢多加生石膏者其病必加劇）。萌潮視之，其脈搏一息六至，上焦煩躁，舌上白苔滿佈，每日大便兩三次，然非滑瀉。審證論脈，似難挽回。而萌潮仍投以小青龍湯，去麻黃，加杏仁，又加野臺參三錢，生龍骨、生牡蠣各五錢，生石膏一兩半。一劑病癒強半，又服一劑痊愈。

按：前案但加補氣之藥於小青龍湯中，後案並加斂氣之藥於小青龍湯中，似近於少年鹵莽，而皆能挽回至險之證，亦可為用小青龍湯者多一變通之法矣。

邑，鄭仁村，年五十許。感冒風寒，痰喘甚劇，服表散、清火、理痰之藥皆不效，留連二十餘日，漸近垂危。其甥劉振緒，從愚讀書，與言醫學，頗能記憶。聞其舅病革，往省之，既至，則衣冠竟屬續矣。振緒用葶藶（四錢生者布包）大棗（五枚擘開）湯，加五味子二錢，煎湯灌之，豁然頓醒，繼服從龍湯一劑痊愈。蓋此證乃頑痰鬱塞肺之竅絡，非葶藶大棗湯，不能瀉之。且喘久則元氣必虛，加五味子二錢，以收斂元氣，並可借葶藶下行之力，以納氣歸腎也。以十四歲童子，而能如此調方，豈非有神動物為其事特異，故附記於此。且以知拙擬從龍湯，固

宜於小青龍湯後，而服過發表之藥者，臨時制宜，皆可酌而用之，不必盡在小青龍湯後也。

【餽水石膏飲】

治胸中先有蘊熱，又受外感，胸中煩悶異常，喘息迫促，其脈浮洪有力，按之未實，舌苔白而未黃者。

生石膏（二兩，軋細）、甘草（三錢）、麻黃（二錢）。

上藥三味，用蒸汽水煎兩三沸，取清湯一大碗，分六次溫服下。前三次，一點鐘服一次，後三次，一點半鐘服一次。病癒則停服，不必盡劑。下焦覺涼者，亦宜停服。僻處若無汽水，可用甘瀾水代之。

作甘瀾水法：用大盆盛水，以杓揚之，揚久水面起有若干水泡，旁有人執杓逐取之，即甘瀾水。

若以治溫病中，似此證者，不宜用麻黃。宜用西藥阿斯匹林一瓦，融化於湯中以代之。若僻處藥局無阿斯匹林，又可代以薄荷葉二錢。

奉天車站經理礦務錢慕韓，愚之同鄉也。其婦人於仲冬得傷寒證，四五日間，喘不能臥，胸中煩悶異常，頻頻呼喚，欲自開其胸。診其脈浮洪而長，重按未實，舌苔白厚。知其證雖入陽明，而太陽猶未罷也（胸中屬太陽）。此時欲以小青龍湯治喘，則失於熱。欲以白虎湯治其煩熱，又遺卻太陽之病，而喘不能愈。躊躇再三，為擬此方，取汽水輕浮之力，能引石膏上升，以解胸中之煩熱。甘草甘緩之性，能逗留石膏不使下趨，以專其上行之力。又少佐以麻黃解散太陽之餘邪，兼藉以瀉肺定喘，而胸中滿悶可除也。湯成後，俾徐徐分六次服之。因病在上焦，

若頓服，恐藥力下趨，則藥過病所，而病轉不愈也。服至三次，胸間微汗，病頓見愈，服至盡劑，病癒十之八九。再診其脈，關前猶似浮洪，喘息已平，而從前兼有咳嗽未癒，繼用玄參一兩，杏仁（去皮）二錢，萸仁、牛蒡子各三錢，兩劑痊愈。



【葛根黃芩黃連湯解】

《傷寒論》曰「太陽病桂枝證，反下之，利遂不止，脈促者，表未解也，喘而汗出者，葛根黃芩黃連湯主之」。

唐容川曰「此節提出桂枝證，以別於上書麻黃證之太陽病也。上二節是傷寒，以見此一節是傷風。風在肌肉，陽明所司之界，本能翕翕發熱，若誤下之，則熱邪內陷，為協熱下利，與上節之必自利者不同。何以知其與上節寒利不同哉？蓋寒脈不數，今以其脈數而歇至，名之為促，所以促者，因熱內陷而表未解，故邪欲出而不得出，是以促急也。熱氣逆於肺則喘，熱氣蒸於肌腠則汗出，此太陽陽明協熱下利之證，故用葛根黃芩黃連湯治之」。陸九芝曰「溫熱之與傷寒所異者，傷寒惡寒，溫熱不惡寒，惡寒為太陽主證，不惡寒為陽明主證，仲景於此，分之最嚴。惡寒而無汗用麻黃，惡寒而有汗用桂枝，不惡寒而有汗且惡熱者用葛根。陽明之葛根，即太陽之桂枝也，所以達表也。葛根黃芩黃連湯中之芩、連，即桂枝湯中之芍藥也，所以安裡也。桂枝協麻黃，治惡寒之傷寒。葛根協芩、連，治不惡寒之溫熱。其方為傷寒溫熱之分途，任後人審其病之為寒為熱而分用之。尤重在芩、連之苦，不獨可降、可瀉，且合苦以堅之之義，堅毛竅可以止汗，堅腸胃可之止利，所以葛根黃芩黃連湯，又有下利不止之治。一方面而表裡兼清，此則藥借病用，本不專為下利設也。乃後人視此方，若捨下利一證外，更無他用者何也。

按：用此方為陽明溫熱發表之藥，可為特識。然葛根發表之力甚微，若遇證之無汗者，擬加薄荷、蟬退，或更加連翹，方能得清涼解熱之汗。試觀葛根湯，治項背強幾幾，無汗惡風者，必佐以麻、桂可知也。

或問「薄荷、蟬退之類，既善解陽明經無汗之溫熱，何以《傷寒論》方中皆不用」？答曰「仲景用藥多遵《本經》，薄荷《本經》不載，《別錄》亦不載，當仲景時猶未列於藥品可知。蚱蟬雖載於《本經》，然古人止知用蟬，不知用蛻，較之蟬退，以皮達皮之力必遠不如，故仲景亦不用。至連翹古惟知用根，即麻黃連軹赤小豆湯中之連軹，其發表之力，亦必不如連翹，故身發黃證，仲景用之以宣通內熱，而非用之以發表也」。

【附錄】葛根黃芩黃連湯原方

葛根半斤、甘草炙二兩、黃芩三兩、黃連三兩。

上四味，以水八升，先煮葛根，減二升，納諸藥，煮取二升，去滓，分溫再服。

【附錄】後世用葛根黃芩黃連湯分量

葛根四錢、甘草炙一錢、黃芩一錢五分、黃連一錢五分。  
不下利者，去黃連加知母三錢。無汗者，加薄荷葉、蟬退各錢半。



【小柴胡湯解】

小柴胡湯本為少陽之方，而太陽、陽明、厥陰篇皆用之。誠以少陽介於太陽、陽明之間，又與厥陰臟腑相連，故三經中，亦皆有小柴胡證也。

《太陽篇》曰「太陽病，十日已去，脈浮細而嗜臥者，外已解也，設胸滿脅痛者，與小柴胡湯」。陳修園注曰「十日已去，為十一日，正直少陰重主氣之期。此言太少陰陽之氣表裡相通，而太陽又得少陰之樞以為出人也」。

又曰「傷寒五六日，中風，往來寒熱，胸脅苦滿，默默不欲飲食，心煩喜嘔，或胸中煩而不嘔，或渴，或腹中痛，或脅下痞硬，或心下悸、小便利，或不渴，身有微熱，或咳者，與小柴胡湯主之」。陳修園注曰「太陽之氣不能從胸出入，逆於胸脅之間，內干動於臟氣，當藉少陽之樞轉而外出。傷寒五六日，經盡一周，氣值厥陰，可藉其中間之少陽而樞轉也」。

唐容川注曰「《內經》云少陽為樞，蓋實有樞之境地可指。足少陽膽經，膽附於肝，人皆知之。至手少陽三焦經，宋元以來皆不知為何物，致西人譏中國三焦之說為妄談。且謂人身有連網，所飲之水，由胃散出，緣連網而下通膀胱，此為人身行水之道，中書並未言及。而不知《內經》早言之，特不名為連網，而名為三焦耳。《內經》《靈蘭秘典》曰『三焦者，決瀆之官，水道出焉』。此水道，即西人所謂行水之道，是三焦即連網也。然西人知有連網，而不知連網生於何處，且止知其能行水，至其微妙處西人仍不知」。

按：焦字，古本作𩇛，從採，有層折可辨也，從韋，以其膜象韋皮也，從焦，有皺紋如火灼皮也，西人以連網形容之，古聖只一𩇛字，已如繪其形。其根起於腎中，腎係貫脊通髓，名為命門，由命門生出膜油，上生脅下兩大板油，為足少陽經之都會。又生出臍下膜油，中有細竅，通於膀胱。膀胱之後，大腸之前，膜中一大夾室，女子名血室，男子名精室，道家名丹田，乃氣血交會，化生精氣孕育之所。又有衝任二脈，導血而下以入此，導氣而上出於胸膜。凡熱人血室，衝氣上逆，皆責於此，是為下焦最重之所。從臍上至胸前鳩尾，環肋骨至腰脊，是為中焦，其膜根於腎係，而發出如網，與小腸胃脘相連，有細竅通腸胃，所謂秘別糟粕，蒸津液也。此膜上有脾居之，脾氣發生膏油，凡有膜網處，其上皆生膜油，凡化水穀，皆是膏油發力以薰吸之，所謂脾主化食利水者如此。再上生心下膈膜，由膈膜透過，上生心肺相連之係，其係之近心處，為心包絡，與三焦為臟腑之配。由內膜透出筋骨之外，是生肥肉。肥肉內、瘦肉外，一層網膜有紋理，為營衛外出之路，名曰腠理，乃三焦之表也。邪在腠理，出與陽爭則寒，入與陰爭則熱，故往來寒熱。胸脅是膈膜連接之處，邪在膈膜，故胸脅苦滿。足少陽膽火，遊行三焦，內通包絡，火鬱不達，故默默。凡人飲水，俱從胃散於膈膜，下走連網，以入膀胱。凡人食物，化為汁液，從腸中出走網油，以達各臟。邪在膜油之中，水不下行，則不欲飲。食不消化，則不欲食。心煩者，三焦之相火，內合心包也。喜嘔者，三焦為行水之府，水不下行，故反嘔也。或但合心火，為胸

中煩，而水不上逆則不嘔。或三焦之火，能消水則渴。或肝膈中之氣迫湊於腹內網油之中，則腹中痛。或邪結於脅下兩大板油之中，則脅下痞滿。或三焦中火弱水盛，水氣逆於心下膈膜之間，而心下悸。或三焦之府不熱，則不消渴，而邪在三焦之府，居腠理之間，則身有微熱。或從膈膜中上肺，致肺中痰火上衝咽喉則咳。總之，是少陽三焦膜中之水火鬱而為病也。統以小柴胡湯散火降水主之，各隨其證之所見而加減之，無不確切。

又曰「血弱氣衰腠理開，邪氣因入，與正氣相搏，結於脅下，正邪外爭，往來寒熱，休作有時，默默不欲飲食，臟腑相連，其痛必下，邪高痛下，故使嘔也，小柴胡湯主之」。陳修園曰「此言太陽之氣結於脅下，而傷太陰、陽明之氣，亦當借少陽之樞而轉出也」。

又曰「傷寒四五日，身熱惡風，脅下滿，手足溫而渴者，小柴胡湯主之」。唐容川注曰「此證全與上節（指九十七節）相同。只是未經誤下，脈亦不浮弱」。是脾之膏油未傷，而邪在膜網。仍當清疏理其膜網，故用小柴胡湯。

又曰「傷寒陽脈澀，陰脈弦，法當腹中急痛者，先與小建中湯，不差者，與小柴胡湯主之」。唐容川注曰「陽脈屬氣分，衛氣從膜網而出，以達皮膚。膜網不通利，則衛氣難於外出，故脈應之而澀。陰脈屬血，血藏膏油中，血滯油寒，氣不得與血流通，則血行氣阻而作痛，所謂痛則不通也」。故先與小建中湯，以溫其膏油，建中者，指中焦而言。中焦之膏油既溫，則血不凝滯，而膜中之氣，

自通而不痛矣。若油既溫和，痛仍不瘥者，是膏油血分通利，而膜網之微細管竅不通利，故陽氣不得出也，復與小柴胡湯，疏通其膜網。則陽氣通暢而愈。

又曰「婦人中風七八日，續得寒熱，發作有時，經水適斷者，此為熱入血室，其血必結，故使如瘧狀，發作有時，小柴胡湯主之」。唐容川注曰「邪在表裡之間，只能往來寒熱，而不發作有時。惟瘧證邪客風府，或瘧母結於脅下膜油之中，衛氣一日一周，行至邪結之處，欲出不得，相爭為寒熱，所以發作有時也。夫衛氣者，發於膀胱水中，達出血分，血為營、氣為衛，此證熱入血室，在下焦膜網之中，其血必結，阻其衛氣至血結之處，相爭則發寒熱。衛氣已過則寒熱止，是以發作有時，與瘧無異。原文故使二字，明言衛氣從膜中出，血結在膜中，故使衛氣不得達也，用柴胡透達膜隔而愈。知熱入血室在膜中，即知瘧亦在膜中矣」。

又曰「傷寒五六日，頭汗出，微惡寒，手足冷，心下滿，口不欲食，大便硬，脈細者，此為陽微結，必有表復有裡也。脈沉亦在裡也。汗出為陽微，假令純陰結，不復有外證，悉入在裡，此為半在裡半在外也。脈雖沉緊，不得為少陰病。所以然者，陰不得有汗，今頭汗出，故知非少陰也。可與小柴胡湯，設不了了者，得屎而解」。陳修園注曰「此言陽微結似陰，雖見裡證，而究與少陰之純陰結有辨」。

又曰「傷寒五六日，嘔而發熱者，柴胡證具，而以他藥下之，柴胡證仍在者，復與柴胡湯。此雖已下之不為逆，必蒸蒸而振，卻發熱汗出而解。若心下滿而硬

痛者，此為結胸也，大陷胸湯主之。但滿而不痛者，此為痞，柴胡不中與之，宜半夏瀉心湯。唐容川注曰「柴胡證，是表之腠理間病，腠理是赤肉外之膜油。若從外膜而人內膜，聚於膈則為陷胸，蓋胸膈乃內膜之大者，為上下之界。故邪入於內，多與正氣結於此間。正氣不升，飲食亦停於膈，是為有形之水飲。邪氣內陷，並心包之火阻於胸膈，則為有形之痰血。血生於心火，火行則血行，火阻則血阻，血與水交結，則化為痰，是為結胸實證，當奪其實，用大陷胸湯。但滿而不痛，則無血與水，無凝聚成痰之實證，只水火無形之氣，塞於胸膈，和其水火之氣，而痞自解，不必攻下有形之物也。柴胡湯是透膈膜而外達腠理，陷胸湯是攻膈膜而下走大腸，瀉心等湯則和膜膈以運行之，皆主膈膜間病，而有內外虛實之分，故仲景連及言之。《陽明篇》曰「陽明病發潮熱，大便溏，小便自可，胸膈滿不去者，小柴胡湯主之」。唐容川注曰「此潮熱，是如瘧之發作有時，以胸脅結滿，衝陽之氣上至結處，即相交而發熱，其但熱不寒者，以其為少陽陽明也」。

又曰「陽明病脅下硬滿，不大便而嘔，舌上白苔者，可與小柴胡湯。上焦得通，津液得下，胃氣因和，身濺然而汗出解也」。唐容川注曰「凡病在三焦膜膈中，則舌色必白，現出三焦之本色，故丹田有熱，亦云舌白苔，丹田是下焦之膜中也」。此上病是胸前，正當胃中之水散走之路，陽明之熱合於此間，則水不得入於膜中，而反嘔出，是為上焦不通，必用柴胡以透達胸膜，則上焦得水道下行，

是以津液得下。胃中水不留逆，則因而和平。內膜之水道既通，則外膜之氣道自暢，故身澌然而汗出解也。

又曰「陽明中風，脈弦浮大而短氣，腹部滿，脅下及心痛。久按之氣不通，鼻乾不得汗，嗜臥，一身及面目悉黃，小便難，有潮熱，時時噦，耳前後腫，刺之少差，外不解，過十日脈續浮者，與小柴胡湯」。唐容川注曰「此節是發明首章太陽陽明、少陽陽明之義，故提出脈弦，為少陽經之眼目，提出脈浮，為太陽經之眼目。此下先言少陽陽明，謂少陽三焦膜中水不得利，則氣不化而氣短。三焦之膜油布於腹中，故腹部滿。脅下是板油所居，心下是膈膜所在，故結而作痛。久按之氣不通，則膜中之氣結甚矣，此皆少陽三焦膜中病也。而陽明經脈之熱，又夾鼻作乾。膜與油連，膏油是陽明所司，膏油被蒸，周身困頓，故嗜臥，遂發出膏油被蒸之黃色。膜中水不利，則小便難。有潮熱者，發作如瘧，應正氣至邪結處而熱，與上條潮熱同例。膜中實，胃中虛，膜中氣逆入胃則噦，隨少陽經上耳，則前後腫。刺之經脈已愈，而其外各證不解，又見脈浮有欲出於表之情，故與小柴胡湯，使達於外也」。

〈少陽篇〉曰「本太陽病不解，轉入少陽者，脅下硬滿，乾嘔，不食，往來寒熱，尚未吐下，脈沉緊者，與小柴胡湯」。唐容川注曰「此節言三焦有膜，膜上有膏，邪從太陽肌肉入於膏油，而內著脅下，居板油之內，則脅下痛滿。膏油主消食，故不能食。邪從皮毛而入於膜，是為腠理，居陰陽之界，故往來寒熱。」

膜縫內氣逆於上，則為乾嘔。脈沉者，邪已內陷之象，脈緊者，正與邪爭，尚欲外出之象，故以柴胡湯清利疏達，而膜中油中之邪，仍達出而解，此即少陽為樞之義也。

〈厥陰篇〉曰「嘔而發熱者，小柴胡湯主之」。陳修園注曰「此厥陰病，從少陽之樞轉而治之也，發熱應是寒熱往來」。

手少陽是三焦經，足少陽是膽經，從前因不知三焦為何物，並膽經亦不能確為指出，致小柴胡湯所主之病，皆不發明其理，即知為借少陽之樞轉，而所以能樞轉之理終渺茫。自容川悟出三焦一經，則手少陽之經明，足少陽之經亦因之能明，而《內經》太陽主開，陽明主闔，少陽為樞之理始顯。本此以釋小柴胡湯所主之病，觸處貫通，無事煩言而解，故編中特詳錄之，其有剩義未盡發者，復參以管見，列數則於下，學者果盡明其理，於治傷寒一道，思過半矣。

小柴胡湯，雖兼主手、足少陽，而實注重足少陽，何以知之？因少陽提綱中明言不可發汗也。蓋手少陽為水道所出，而小便與汗，皆與水道相通，是汗解為手少陽之出路。足少陽之都會為脅下板油，此油外膜上緊連膈膜。凡小柴胡證，必脅滿喜嘔，是邪藏板油之中，欲借少陽上升之氣緣膜透膈而出也。小柴胡湯，是因其病機而越之。

少陽提綱既戒發汗矣，而一百零二節與一百四十九節、二百三十節，皆言汗解者，因誤下後，脅下所聚之邪，兼散漫於三焦包絡，仍投以小柴胡湯，以和解

宣通之。而邪之散漫者，遂由手少陽，外達之經絡，作汗而解。而其留於脅下者，亦與之同氣相求，借徑於手少陽而汗解。故於汗出上特加一「卻」字，言非發其汗，而卻由汗解。此是宣通其少陽，聽其自汗，而非強發其汗也。

其汗時，必發熱蒸蒸而振者，有戰而後汗之意也。蓋少陽之病由汗解，原非正路，而其留於脅下之邪作汗解尤難。乃至服小柴胡湯後，本欲上透隔膜，因下後氣虛，不能由上透出，而其散漫於手少陽者，且又以同類相招，遂於蓄極之時，而開旁通之路，此際幾有正氣不能勝邪之勢，故汗之先必發熱而振動，此小柴胡方中，所以有人參之助也。是以愚用此方時，於氣分壯實者，恒不用人參，而於誤服降藥後，及氣虛者，則必用人參也。

少陽經所居之部位，介太陽、陽明之間，此指手少陽而言，三焦所屬之腠理也。而其傳經之次第，乃在陽明之後，此指足少陽而言，膽經所屬之板油也。板油與包脾之膜油相近，故從此可傳太陰。小柴胡證多兼咳，其咳者咳吐黏涎也。乃太陰濕氣，經少陽之熱煉鑠而成，是以愚驗此證，常以吐黏涎為的。而方中之參、草、大棗，亦所以補助脾經，斷其傳太陰之路也。

小柴胡證喜嘔者，不必作嘔吐者，但常常有欲嘔之意，即為喜嘔。是以愚治傷寒遇有覺噁心而微寒熱往來者，即投以小柴胡湯，一劑而愈。此《傷寒論》所謂「傷寒中風，有柴胡證，但見一證便是，不必悉見也」。



容川謂「三焦外通於腠理」，其說甚確。《內經》〈脹論〉曰「三焦脹者，氣滿皮膚中，輕輕然而不堅」，是明言三焦與腠理相通也。又容川欲證明三焦，即西人所謂連網，而引證於《內經》「三焦者，決瀆之官」，數語。然《內經》可證三焦即是連網者，不獨此數語也。《靈樞》〈勇論〉謂「勇士者三焦理橫，怯士者三焦理縱」，夫理既明明可辨其橫縱，則其理之大且顯可知。而一身之內，理之大且顯者，莫連網若也，此又三焦即連網之明證也。

【附錄】小柴胡湯原方

柴胡八兩、黃芩三兩、人參三兩、甘草三兩、半夏半升洗三兩、生薑三兩、大棗十二枚切。

上七味，以水一斗二升，煮取六升，去滓再煎，取三升，溫服一升，日三服。若胸中煩而不嘔，去半夏、人參，加枳實一枚。若渴者，去半夏，加人參，合前成四兩半，枳實根四兩。若腹中痛，去黃芩，加芍藥三兩。若脅下痞硬，去大棗，加牡蠣四兩。若心下悸，小便不利者，去黃芩，加茯苓四兩。若不渴，外有微熱者，去人參，加桂枝三兩，溫覆取微汗愈。若咳者，去人參、大棗、生薑，加五味子半升，乾薑二兩。

【附錄】後世用小柴胡湯分量

柴胡八錢、黃芩三錢、人參三錢、甘草三錢、清半夏四錢、生薑三錢切、大棗四枚擘。

陳修園曰「少陽介於兩陽之間，須兼顧三經，故藥不宜輕。去滓再煎者，因其方為和解之劑，再煎則藥性和合，能使經氣相融，不復往來出入也。古聖不但用藥之妙，其煎法俱有精義」。

按：去滓再煎，此中猶有他義。蓋柴胡有升提之力，兼有發表之力，去滓重煎，所以去其發表之力也。然恐煎久並升提之力亦減，故重用至八兩，而其三分之一，折為今之八錢也。唐容川曰「柴胡之力，能透胸前之膈，而仲景用柴胡以治少陽，其義尤精。少陽者，水中之陽，發於三焦，以行腠理，寄居膽中，以化水穀，必三焦之膜網通暢，肝膽之木火清和，而水中之陽乃能由內達外。柴胡莖中虛鬆，有白瓢通氣，象人身三焦之膜網。膜網有紋理與肌膚筋骨相湊，故名腠理。少陽木火鬱於腠理而不達者，則作寒熱，惟柴胡能達之，以其鬆虛象腠理能達陽氣，且味清苦，能清三焦之火與膽中之火。其兼治太陽陽明者，則是通三焦之路，以達其氣，乃借治非正治也」。又曰「柴胡須用莖直上，色青葉四面生，如竹葉而細，開小黃花者，乃為真柴胡，是仲景所用者。至於軟柴胡、紅柴胡、銀柴胡，皆不堪用」。

【通變大柴胡湯】

治傷寒溫病，表證未罷，大便已實者。

柴胡（三錢）、薄荷（三錢）、知母（四錢）、大黃（四錢）。

此方若治傷寒，以防風易薄荷。

《傷寒論》大柴胡湯，治少陽經與陽明府同病之方也，故方中用柴胡以解在經之邪，大黃以下陽明在府之熱，方中以此二藥為主，其餘諸藥，可加可減，不過參贊以成功也。然其方宜於傷寒，而以治溫病、與表證不在少陽者，又必稍為通變，而後所投皆宜也。

或問「其表果係少陽證，固宜用柴胡矣。若非少陽證，既加薄荷、防風以散表邪，何須再用柴胡乎？」答曰「凡表證未罷，遽用降藥下之，恆出兩種病證。一為表邪乘虛入裡，《傷寒論》所載，下後胸滿心下痞硬，下後結胸者是也。一為表邪乘虛入裡且下陷，《傷寒論》所謂，下之利不止者是也。此方中用防風、薄荷以散之，所以防邪之內陷，用柴胡以升之，所以防邪之下陷也」。

一人，年二十餘。傷寒六七日，頭疼惡寒，心中發熱，咳吐粘涎。至暮尤寒熱交作，兼眩暈，心中之熱亦甚。其脈浮弦，重按有力，大便五日未行。投以此湯，加生石膏六錢、芒硝四錢，下大便二次。上半身微見汗，諸病皆見輕。惟心中猶覺發熱，脈象不若從前之浮弦，而重按仍有力。擬投以白虎加人參湯，恐當下後，易作滑瀉，遂以生山藥代粳米，連服兩劑痊愈。

【加味越婢加半夏湯】

治素患勞嗽，因外感襲肺，而勞嗽益甚，或兼喘逆，痰涎壅滯者。

麻黃（二錢）、石膏（三錢，煨、搗）、生山藥（五錢）、寸麥冬（四錢，帶心）、清半夏（三錢）、牛蒡子（三錢，炒搗）、玄參（三錢）、甘草（一錢五分）、大棗（三枚，擘開）、生薑（三片）。

《傷寒論》有桂枝二越婢一湯，治太陽病發熱惡寒，熱多寒少。《金匱》有越婢湯，治受風水腫。有越婢加半夏湯，治外感襲肺，致肺中痰火壅滯，脹而作喘。今因其人素患勞嗽，外感之邪與肺中蘊蓄之痰，互相膠漆，壅滯肺竅而勞嗽益甚，故用越婢加半夏湯，以祛外襲之邪，而復加山藥、玄參、麥冬、牛蒡子，以治其勞嗽，此內傷外感兼治之方也。

一叟，年近七旬。素有勞嗽，初冬宿病發動，又兼受外感，痰涎壅滯胸間，幾不能息，劇時昏不知人，身軀後挺，診其脈，浮數無力。為制此湯，一劑氣息通順，將麻黃、石膏減半，又服數劑而愈。

或問「子嘗謂石膏宜生用，不宜煨用。以石膏寒涼之中，原兼辛散，煨之則辛散之力，變為收斂，服之轉可增病。乃他方中，石膏皆用生者，而此獨用者何也」？答曰「此方所主之病，外感甚輕，原無大熱。方中用麻黃以祛肺邪，嫌其性熱，故少加石膏佐之。且更煨取者，收斂之力，能將肺中痰涎凝結成塊，易於吐出，此理從用石膏點豆腐者悟出，試之果甚效驗。後遇此等證，無論痰涎如何

壅盛、如何杜塞，投以此湯，須臾，藥力行後，莫不將痰涎結成小塊，連連吐出，此皆石膏與麻黃並用之效也。若以治寒溫大熱，則斷不可，若更多用，則更不可也（石膏用於此方，且止三錢，自無妨礙。然愚後來志願，欲全國藥局，皆不備煅石膏，後有用此方者，若改用生石膏四錢更佳）。

治溫病方

【清解湯】

治溫病初得，頭疼，周身骨節酸疼，肌膚壯熱，背微惡寒無汗，脈浮滑者。

薄荷葉（四錢）、蟬蛻（三錢，去足土）、生石膏（六錢，搗細）、甘草（一錢五分）。

《傷寒論》曰「太陽病，發熱而渴，不惡寒者，為溫病。若發汗已，身灼熱者，名曰風溫。風溫為病，脈陰陽俱浮，自汗出，身重，多眠睡，息必鼾，言語難出」，此仲景論溫病之提綱也。乃提綱詳矣，而後未明言治溫病之方，及反覆詳細觀之，乃知《傷寒論》中，原有治溫病方，且亦明言治溫病方，特涉獵觀之不知耳。六十一節云「發汗後，不可更行桂枝湯。汗出而喘，無大熱者，可與麻黃、杏仁、甘草、石膏湯主之」，夫此證既汗後不解，必是用辛熱之藥，發不惡寒證之汗，即溫病提綱中，所謂若發汗已也（提綱中所謂若發汗，是用辛熱之藥強發溫病之汗）。其汗出而喘，無大熱者，即溫病提綱中，所謂若發汗已，身灼熱及後所謂自汗出、多眠睡、息必鼾也。睡而息鼾，醒則喘矣。此證既用辛熱之藥，誤發於前，仲景恐醫者見其自汗，再誤認為桂枝湯證，故特戒之曰「不可更行桂枝湯，而宜治以麻杏甘石湯」，此節與溫病提綱遙遙相應，合讀之則瞭如指掌。然麻杏甘石湯，誠為治溫病初得之的方矣，而愚於發表藥中不用麻黃，而用薄荷、蟬蛻者，曾於葛根黃芩黃連湯解後詳論之，茲不再贅。

今者論溫病之書甚伙，而鄭衛紅紫，適足亂真。愚本《內經》、仲景，間附以管見，知溫病大綱，當分為三端，今逐端詳論，臚列於下，庶分途施治，不至錯誤。

一為春溫。其證因冬月薄受外感，不至即病，所受之邪，伏於膜原之間，阻塞脈絡，不能宣通，暗生內熱。迨至春日陽生，內蘊之熱，原有萌動之機，而復薄受外感，與之相觸，則陡然而發，表裡俱熱，《內經》所謂「冬傷於寒，春必病溫」者是也，宜治以拙擬涼解湯（在後）。熱甚者，治以拙擬寒解湯（在後）。有汗者，宜仲景葛根黃連黃芩湯，或拙擬和解湯（在後），加生石膏。若至發於暑月，又名為暑溫，其熱尤甚。初得即有脈洪長，渴嗜涼水者，宜投以大劑白虎湯，或拙擬仙露湯（在第六卷）。

一為風溫。猶是外感之風寒也，其時令已溫，外感之氣已轉而為溫，故不名曰傷寒、傷風，而名風溫，即《傷寒論》中所謂風溫之為病者是也。然其證有得之春初者，有得之春暮者，有得之夏秋者，當隨時序之寒熱，參以脈象，而分別治之。若當春初秋末，時令在寒溫之間，初得時雖不惡寒，脈但浮而無熱象者，宜用拙擬清解湯，加麻黃一二錢，或用仲景大青龍湯。若當暑熱之日，其脈象浮而且洪者，用拙擬涼解湯，或寒解湯。若有汗者，用拙擬和解湯，或酌加生石膏。一為濕溫。其證多得之溽暑，陰雨連旬，濕氣隨呼吸之氣，傳入上焦，窒塞胸中大氣。因致營衛之氣不相貫通，其肌表有似外感拘束，而非外感也。其舌苔

白而滑膩，微帶灰色。當用解肌利便之藥，俾濕氣由汗與小便而出，如拙擬宣解湯（在後）是也。仲景之豬苓湯，去阿膠，加連翹亦可用。至濕熱蓄久，陽明府實，有治以白虎湯加蒼朮者，其方亦佳。而愚則用白虎湯，以滑石易知母，又或不用粳米，而以生薏米代之。至於「冬不藏精，春必病溫」，《內經》雖有明文，其證即寓於風溫、春溫之中，蓋內虛之人，易受外感，而陰虛蘊熱之人，尤易受溫病，故無論風溫、春溫之兼陰虛者，當其發表、清解、降下之時，皆宜佐以滋陰之品，若生山藥、生地黃、玄參、阿膠、生雞子黃之類均可酌用，或宜兼用補氣之品，若白虎湯之加人參，竹葉石膏湯之用人參，誠以人參與涼潤之藥並用，不但補氣，實大能滋陰也。

上所論溫病，乃別其大綱及其初得治法，至其證之詳悉，與治法之隨證變通，皆備於後之方案中。至於疫病，乃天地之癘氣，流行傳染，與溫病迥異。方中薄荷葉，宜用其嫩綠者。至其梗，宜用於理氣藥中，若以之發汗，則力減半矣。若其色不綠而蒼，則其力尤減。若果嫩綠之葉，方中用三錢即可。

薄荷氣味近於冰片，最善透竅，其力內至臟腑筋骨，外至腠理皮毛，皆能透達，故能治溫病中之筋骨作疼者。若謂其氣質清輕，但能發皮膚之汗，則淺之乎視薄荷矣。



蟬蛻去足者，去其前之兩大足也。此足甚剛硬，有開破之力。若用之退目翳消瘡瘍，帶此足更佳。若用之發汗，則宜去之，蓋不欲其於發表中，寓開破之力也。

蟬蛻性微涼、味淡，原非辛散之品，而能發汗者，因其以皮達皮也，此乃發汗中之妙藥，有身弱不任發表者，用之最佳。且溫病恆有兼癰疹者，蟬蛻尤善托癰疹外出也。

石膏性微寒，《本經》原有明文，雖係石藥，實為平和之品，且其質甚重，六錢不過一大撮耳。其涼力，不過與知母三錢等，而其清火之力則倍之，因其涼而能散也。嘗觀後世治溫之方，至陽明府實之時，始敢用石膏五六錢，豈能知石膏者哉！然必須生用方妥，煨者用至一兩，即足僨事。又此方所主之證，或兼背微惡寒，乃熱鬱於中，不能外達之徵，非真惡寒也。白虎湯證中，亦恆有如此者，用石膏透達其熱，則不惡寒矣。

或問「外感中於太陽則惡寒，中於陽明則不惡寒而發熱。時至春、夏，氣候溫熱，故外感之來，不與寒水相感召，而與燥金相感召，直從身前陽明經絡襲入，而為溫病。後世論溫病者，多是此說。而《傷寒論》溫病提綱，冠之以太陽病者何也？」答曰「溫病初得，亦多在太陽，特其轉陽明甚速耳。曾治一人，年二十餘，當仲夏夜寢，因夜涼，蓋單衾凍醒，發懶，仍如此睡去。須臾又凍醒，晨起微覺惡寒，至巳時已覺表裡大熱，兼喘促，脈洪長而浮。投以清解湯，方中生石

膏，改用兩半，又加牛蒡子（炒搗）三錢，服後得汗而愈。由斯觀之，其初非中於太陽乎，然不專在太陽也。人之所以覺涼者，由於衣衾之薄，其氣候究非寒涼，故其中於人不專在太陽，而兼在陽明。且當其時，人多蘊內熱，是以轉陽明甚速也，然此所論者風溫耳。若至冬受春發，或夏發之溫，恆有與太陽無涉者，故《傷寒論》溫病提綱中，特別之曰「風溫之為病」，明其異於「冬傷於寒，春必病溫」之溫病也。又杏仁與牛蒡子，皆能降肺定喘，而杏仁性溫、牛蒡子性涼，傷寒喘證，皆用杏仁，而溫病不宜用溫藥，故以牛蒡子代之。

【附錄】

直隸鹽山孫香蓀來函：

一九二五年春，一人來津學木工。因身體單薄，又兼天熱，得溫病，請為診視。脈浮數而滑，舌苔白濃，時時昏睡，為開清解湯，生石膏用一兩，為其脈數，又加玄參五錢，一劑病癒。

斯年仲春，俞品三君之三位女公子皆出瘟疹。生為診視，皆投以清解湯，加連翹、生地、滑石而愈。同時之患此證者，勢多危險。惟生投以此方，皆能隨手奏效。

【涼解湯】

治溫病，表裡俱覺發熱，脈洪而兼浮者。

薄荷葉（三錢）、蟬蛻（二錢，去足土）、生石膏（一兩，搗細）、甘草（一錢五分）。

春溫之證，多有一發而表裡俱熱者，至暑溫尤甚，已詳論之於前矣。而風溫證，兩三日間，亦多見有此脈、證者，此湯皆能治之，得汗即愈。

西人治外感，習用阿斯匹林法（第一卷參麥湯，第四卷曲直湯下皆論及此藥）。用阿斯匹林一瓦，和乳糖（可代以白蔗糖）服之，得汗即愈。愚屢次試之，其發汗之力甚猛，外感可汗解者，用之發汗可愈。若此涼解湯，與前清解湯，皆可以此藥代之，以其涼而能散也。若後之寒解湯，即不可以此藥代之，蓋其發汗之力有餘，而清熱之力，仍有不足也。

【寒解湯】

治周身壯熱，心中熱而且渴，舌上苔白欲黃，其脈洪滑。或頭猶覺疼，周身猶有拘束之意者。

生石膏（一兩，搗細）、知母（八錢）、連翹（一錢五分）、蟬蛻（一錢五分，去足土）。

或問「此湯為發表之劑，而重用石膏、知母，微用連翹、蟬蛻，何以能得汗」？答曰「用此方者，特恐其診脈不真，審證不確耳。果如方下所注脈證，服之覆杯可汗，勿庸慮此方之不效也。蓋脈洪滑而渴，陽明府熱已實，原是白虎湯證。特因頭或微疼，外表猶似拘束，是猶有一分太陽流連未去，故方中重用石膏、知母以清胃府之熱，而復少用連翹、蟬蛻之善達表者，引胃中化而欲散之熱，仍還太陽作汗而解。斯乃調劑陰陽，聽其自汗，非強發其汗也。況石膏性涼（《本經》謂其微寒即涼也）味微辛，有實熱者，單服之即能汗乎。曾治一少年，孟夏長途勞役，得溫病，醫治半月不效。後愚診視，其兩目清白，竟無所見，兩手循衣摸床，亂動不休，譫語不省人事，其大便從前滑瀉，此時雖不滑瀉，每日仍溏便一兩次。脈浮數，右寸之浮尤甚，兩尺按之即無。因此證目清白無見者，腎陰將竭也。手循衣摸床者，肝風已動也。病勢之危，已至極點。幸喜脈浮，為病還太陽。右寸浮尤甚，為將汗之勢。其所以將汗而不汗者，人身之有汗，如天地之有雨。天地陰陽和而後雨，人身亦陰陽和而後汗。此證尺脈甚弱，陽升而陰不能應，汗

何由作？當用大潤之劑，峻補真陰，濟陰以應其陽，必能自汗。遂用熟地、玄參、阿膠、枸杞之類，約重六七兩，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，一日連進二劑，即日大汗而愈。審是，則發汗原無定法。當視其陰陽所虛之處，而調補之，或因其病機而利導之，皆能出汗，非必發汗之藥始能汗也。

按：寒溫之證，原忌用粘膩滋陰、甘寒清火，以其能留邪也。而用以為發汗之助，則轉能逐邪外出，是藥在人用耳。

一人，年四十餘。為風寒所束不得汗，胸中煩熱，又兼喘促。醫者治以蘇子降氣湯，兼散風清火之品，數劑病益進。診其脈，洪滑而浮，投以寒解湯，須臾上半身即出汗。又須臾，覺藥力下行，至下焦及腿亦皆出汗，病若失。

一人，年三十許，得溫證，延醫治不效，遷延十餘日。愚診視之，脈雖洪而有力，仍兼浮象。問其頭疼乎？曰「然」！渴欲飲涼水乎？曰「有時亦飲涼水，然不至燥渴耳」，知其為日雖多，而陽明之熱，猶未甚實，太陽之表，猶未盡罷也。投以寒解湯，須臾汗出而愈。

一人，年三十餘。於冬令感冒風寒，周身惡寒無汗，胸間煩躁，原是大青龍湯證，醫者投以麻黃湯，服後汗無分毫，而煩躁益甚，幾至瘋狂。診其脈，洪滑異常，兩寸皆浮，而右寸尤甚。投以寒解湯，覆杯之頃，汗出如洗而愈。審是則寒解湯不但宜於溫病，傷寒現此脈者，投之亦必效也。

一叟，年七旬。素有勞疾，薄受外感，即發喘逆，投以小青龍湯去麻黃，加杏仁、生石膏輒愈。上元節後，因外感甚重，舊病復發，五六日間，熱入陽明之府，脈象弦長浮數，按之有力，而無洪滑之象（此外感兼內傷之脈）。投以寒解湯，加潞參三錢，一劑汗出而喘愈。再診其脈，餘熱猶熾，繼投以白虎加人參以山藥代粳米湯（在第六卷）一大劑，分三次溫飲下，盡劑而愈（此條亦係傷寒）。

一妊婦，傷寒兩、三日，脈洪滑異常，精神昏憤，間作譫語，舌苔白而甚厚，為開寒解湯方，有一醫者在座，問方中之意何居？愚曰「欲汗解耳」。曰「此方能汗解乎」？愚曰「此方遇此證，服之自能出汗，若泛作汗解之藥服之，不能汗也」，飲下須臾，汗出而愈，醫者訝為奇異。

門人高如璧曾治一媪，年近七旬。於春初得傷寒證，三四日間，煩熱異常。又兼白痢，晝夜滯下無度，其脈洪滑兼浮。如璧投以寒解湯，加生杭芍三錢，一劑微汗而熱解，痢亦遂愈。

按：用涼藥發汗，自古有之。唐志曰「袁州天慶觀，主首道士王自正傷寒旬餘，四肢乍冷乍熱，頭重氣塞，唇寒面青，累日不能食，勢已甚殆。醫者診之曰「脈極細虛，是為陰證，必須桂枝湯乃可」。及醫者去後，方將煎桂枝湯，若有語之者曰「何不服竹葉石膏湯」。四顧無人，惟小童在側。自正惑焉，急邀醫者還，告之曰「或教我服竹葉石膏湯何如」？醫者曰「竹葉石膏湯與桂枝湯，寒燠如冰炭。君之疾狀已危，不可再為藥誤」。方酬答間，復聞人語如前，自正心悚

然。醫者去後，即買竹葉石膏湯煎之，又聞所告如初。於是斷然曰：「神明三次告我，是賜我再生之路也」，湯成即服其半。先時身體重千斤，條而輕清，唇亦漸暖，咽隔通暢。遂悉服之，少頃汗出如洗，徑就睡，平旦脫然。自正為人素謹飭，常茹素，與人齋醮盡誠，故為神明所佑如此。

按：此雖陽證，狀與陰證無異。然當時若問其小便，必黃熱短澀，且必畏見沸湯，是其明證也。醫者不知辨此，竟欲以桂枝湯強發其汗，危哉！幸邀神佑，得服竹葉石膏湯，大汗而愈。此即拙擬寒解湯，所謂調其陰陽，聽其自汗也。

又按：桂枝湯亦非治陰證之藥，乃治傷風有汗之藥。然桂枝下嚥，陽盛則斃，叔和之言誠千古不易之論，故傷寒無汗者，誤服桂枝湯，猶大熱煩渴，變為白虎湯證，況內蘊實熱者乎！

又洪吉人曰：「昔一名醫成化年，新野疫癘，有鄰婦臥床數日，忽聞其家如羊嘶聲，急往視之。見數人用被覆其婦，床下置火一盆，令其出汗，其婦面赤聲啞，氣息幾斷。因叱之曰：『急放手，不然命殆矣』。眾不從，乃強拽被，其婦躍起，倚壁而喘，口不能言。曰：『飲涼水否』？頷之。與水一碗，一飲而盡，始能言，又索水，復與之。飲畢，汗出如雨，其病遂愈。或問其故？曰：「彼發熱數日，且不飲食，腸中枯涸，以火蒸之，是速其死也，何得有汗？試觀以火燃空鼎，雖赤而氣不升，沃之以水，則氣四達矣」。遇此等證，不可不知。

按：此案與案後之論皆妙，是知用之得當，涼水亦大藥也。其飲涼水而得汗之理，亦即寒解湯能發汗之理也。

又吳又可曰「裡證下後，脈浮而微數，身微熱，神思或不爽，此邪熱浮於肌表，裡無壅滯也。雖無汗，宜白虎湯，邪可從汗而解。若下後，脈空虛而數，按之豁然如無者，宜白虎加人參湯，覆杯則汗解」。

按：白虎湯與白虎加人參湯，皆非解表之藥，而用之得當，雖在下後，猶可須臾得汗，況在未下之前乎？不但此也，即承氣湯，亦可為汗解之藥，亦視乎用之何如耳。又洪吉人曰「餘嘗治熱病人，九日，用柴葛解之、芩連清之、硝黃下之，俱不得汗。昏憤擾亂，撮空摸床，危在頃刻。以大劑地黃湯（必係減去桂附者），重加人參、麥冬進之。不一時，通身大汗淋漓，惡證悉退，神思頓清」。

按：此條與愚用補陰之藥發汗相似，所異者，又加人參以助其氣分也。上論者皆發汗之理，果能匯通參觀，發汗之理，無餘蘊矣。

一婦人，年二十餘，得溫病，咽喉作疼，舌強直，幾不能言，心中熱而且渴，頻頻飲水，脈竟沉細異常，肌膚亦不發熱。遂舍脈從證，投以寒解湯，得微汗，病稍見愈。明晨又復如故，舌之強直更甚。知藥原對證，而力微不能勝病也。遂仍投以寒解湯，將石膏加倍，煎湯兩盅，分二次溫飲下，又得微汗，病遂愈。

按：傷寒脈若沉細，多係陰證。溫病脈若沉細，則多係陽證。蓋溫病多受於冬，至春而發，其病機自內向外。有時病機鬱而不能外達，其脈或即現沉細之象，



誤認為涼，必至誤事。又此證，寒解湯既對證見愈矣，而明晨，舌之強直更甚，乃將方中生石膏倍作二兩，分兩次前後服下，其病即愈。由是觀之，凡治寒溫之熱者，皆宜煎一大劑，分數次服下，效古人一劑三服之法也。

【附錄】

直隸鹽山李曰綸來函：

天津鍋店街東口義合勝皮店學徒奎祿，得溫病，先服他醫清解之藥數劑無效。弟診其脈象，沉浮皆有力，表裡壯熱無汗，投以寒解湯原方，遍身得汗而愈。由斯知方中重用生石膏、知母以清熱，少加連翹、蟬蛻以引熱透表外出，制方之妙遠勝於銀翹散、桑菊飲諸方矣。且由此知石膏生用誠為妙藥。從治癒此證之後，凡遇寒溫實熱諸證，莫不遵書中方論，重用生石膏治之。其熱實脈虛者，亦莫不遵書中方論，用白虎加人參湯，或用白虎加人參以生山藥代粳米湯，皆能隨手奏效。

直隸鹽山孫香蓀來函：

斯年初冬，適郭姓之女得傷寒證，三四日間陽明熱勢甚劇，面赤氣粗，六脈洪數，時作譫語。為開寒解湯，因胸中覺悶，加枳實仁一兩，一劑病癒。

【石膏阿斯匹林湯】

治同前證。

生石膏（二兩，軋細）、阿斯匹林（一瓦）。

上藥二味，先用白蔗糖沖水，送服阿斯匹林。再將石膏煎湯一大碗，待周身正出汗時，乘熱將石膏湯飲下三分之二，以助阿斯匹林發表之力。迨至汗出之後，過兩三點鐘，猶覺有餘熱者，可仍將所餘石膏湯溫飲下。若藥服完，熱猶未盡者，可用生石膏煎湯，或少加粳米煎湯，徐徐溫飲之，以熱全退淨為度，不用再服阿斯匹林也。

阿斯匹林，前曾再三論之矣。然此藥有優劣，其結晶堅實，粒粒若針尖形者，服一瓦必能出汗。若無甚結晶，多半似白粉末者，其發表之力稍弱，必服至一瓦強，或至一瓦半，方能出汗。用者宜視其藥之優劣，而斟酌適宜方好。

又此湯不但可以代寒解湯，並可以代涼解湯。若以代涼解湯時，石膏宜減半。

【附錄】

江蘇平臺王錫光來函：

小兒悅生，今年秋夏之交，陡起大熱，失常神呆，閉目不食。家慈見而駭甚。吾因胸有成竹定見，遂曰「此無憂」。即用書中石膏阿斯匹林湯，照原方服法，

服後即神清熱退。第二日午際又熱，遂放膽再用原方，因其痰多而咳，為加清半夏、牛蒡子，服之痊愈。

【和解湯】

治溫病表裡俱熱，時有汗出，舌苔白，脈浮滑者。

連翹（五錢）、蟬蛻（二錢，去足土）、生石膏（六錢，搗細）、生杭芍（五錢）、甘草（一錢）。

若脈浮滑，而兼有洪象者，生石膏當用一兩。

【宣解湯】

治感冒久在太陽，致熱蓄膀胱，小便赤澀。或因小便秘，而大便滑瀉，兼治濕溫初得，憎寒壯熱，舌苔灰色滑膩者。

滑石（一兩）、甘草（二錢）、連翹（三錢）、蟬蛻（三錢，去足土）、生杭芍（四錢）。

若滑瀉者，甘草須加倍。

一叟，年六十五，得風溫證。六七日間，周身悉腫，腎囊腫大似西瓜，屢次服藥無效。旬日之外，求為診視。脈洪滑微浮，心中熱渴，小便澀熱，痰涎上泛，微兼喘息，舌苔白濃。投以此湯，加生石膏一兩，周身微汗，小便通利，腫消其半，猶覺熱渴。遂將方中生石膏加倍，服後又得微汗，腫遂盡消，諸病皆愈。

按：此乃風溫之熱，由太陽經入於膀胱之府，阻塞水道，而陽明胃府亦將實也。由是觀之，彼謂溫病入手經、不入足經者，何其謬哉！

【滋陰宣解湯】

治溫病，太陽未解，漸入陽明。其人胃陰素虧，陽明府證未實，已燥渴多飲，飲水過多，不能運化，遂成滑瀉，而燥渴益甚。或喘，或自汗，或小便秘。溫疹中多有類此證者，尤屬危險之候，用此湯亦宜。其方即宣解湯加生山藥一兩，甘草改用三錢。

此乃胃府與膀胱同熱，又兼虛熱之證也。滑石性近石膏，能清胃府之熱，淡滲利竅，能清膀胱之熱，同甘草生天一之水，又能清陰虛之熱，一藥而三善備，故以之為君。而重用山藥之大滋真陰，大固元氣者，以為之佐使。且山藥生用，則汁漿稠粘，同甘草之甘緩者，能逗留滑石於胃中，使之由胃輸脾，由脾達肺，水精四布，循三焦而下通膀胱，則煩熱除，小便利，而滑瀉止矣。又兼用連翹、蟬蛻之善達表者，以解未罷之太陽，使膀胱蓄熱，不為外感所束，則熱更易於消散。且蟬之性，飲而不食，有小便無大便，故其蛻，又能利小便，而止大便也。愚自臨證以來，遇此等證，不知凡幾。醫者率多束手，而投以此湯，無不愈者。若用於溫疹兼此證者，尤為妥善，以連翹、蟬蛻，實又表散溫疹之妙藥也。

一媼，年近七旬，素患漫腫，為調治月餘，腫雖就愈，而身體未復。忽於季春得溫病，上焦煩熱，病家自剖鮮地骨皮，煮汁飲之稍愈，又飲數次，遂滑瀉不止，而煩熱益甚。其脈浮滑而數，重診無力。病家因病者年高，又素有疾病，加上焦煩熱，下焦滑瀉，惴惴惟恐不愈，而愚毅然以為可治。投以滋陰宣解湯，

一劑瀉止，煩熱亦覺輕。繼用拙擬白虎加人參以山藥代粳米湯，煎汁一大碗，一次只溫飲一大口，防其再滑瀉也。盡劑而愈。

一室女，感冒風熱，遍身癢疹，煩渴滑瀉，又兼喘促。其脈浮數無力。愚躊躇再四，亦投以滋陰宣解湯，兩劑諸病皆愈。

按：服滋陰宣解湯，皆不能出大汗，且不宜出大汗，為其陰分虛也。間有不出汗者，病亦可愈。

【滋陰清燥湯】

治同前證。外表已解，其人或下滑瀉，或兼喘息，或兼咳嗽，頻吐痰涎，確有外感實熱，而脈象甚虛數者。若前證，服滋陰宣解湯後，猶有餘熱者，亦可繼服此湯。其方即滋陰宣解湯，去連翹、蟬蛻。

一婦人，受妊五月，偶得傷寒，三四日間，胎忽滑下，上焦燥渴，喘而且呻，痰涎壅盛，頻頻咳吐。延醫服藥，病未去，而轉添滑瀉，晝夜十餘次。醫者辭不治，且謂危在旦夕。其家人惶恐，迎愚診視。其脈似洪滑，重診指下豁然，兩尺尤甚。本擬治以滋陰清燥湯，為小產才四五日，不敢遽用寒涼。遂先用生山藥二兩、酸石榴一個，連皮搗爛，同煎汁一大碗，分三次溫飲下。滑瀉見愈，他病如故。再診其脈，洪滑之力較實，因思此證雖虛，確有外感實熱，若不先解其實熱，他病何以得愈？時屆晚三點鐘，病人自言每日此時潮熱，又言精神困倦已極，晝夜苦不得睡。遂於斯日，復投以滋陰清燥湯。方中生山藥重用兩半，煎汁一大碗，徐徐溫飲下，一次只飲藥一口，誠以產後，脈象又虛，不欲寒涼侵下焦也。斯夜遂得安睡，渴與滑瀉皆愈，喘與咳亦愈其半。又將山藥、滑石各減五錢，加龍骨、牡蠣（皆不用煨）各八錢，一劑而愈。

一室女，傷寒過兩旬矣，而瘦弱支離，精神昏憤，過午發熱，咳而且喘，醫者辭不治。診其脈，數至七至，微弱欲無。因思此證，若係久病至此，不可為矣。然究係暴虛之證，生機之根祇當無損，勉強投以滋陰清燥湯，將滑石減半，又加



玄參、熟地黃各一兩，野臺參五錢，煎湯一大碗，徐徐溫飲下。飲完煎滓重飲，俾藥力晝夜相繼。兩日之間，連服三劑，滑石漸減至二錢，其病竟愈。

按：此證始終不去滑石者，恐當傷寒之餘，仍有餘邪未淨。又恐補藥留邪，故用滑石引之下行，使有出路也。

又按：凡煎藥若大劑，必需多煎湯數杯，徐徐服之，救險證宜如此，而救險證之陰分虧損者，尤宜如此也。

陸軍第二十八師，師長汲海峰之太夫人，年近七旬。身體羸弱，穀食不能消化，惟飲牛乳，或間飲米湯少許，已二年臥床，不能起坐矣。於戊午季秋，受溫病。時愚初至奉天，自錦州邀愚診視。脈甚細數，按之微覺有力。發熱咳嗽，吐痰稠粘，精神昏憤，氣息奄奄。投以滋陰清燥湯，減滑石之半，加玄參五錢，一劑病癒強半。又煎渣取清湯一茶盅，調入生雞子黃一枚，服之痊愈，愈後身體轉覺勝於從前。

奉天大東關，旗人號崧宅者，有孺子年四歲，得溫病，邪猶在表，醫者不知為之清解，遽投以苦寒之劑，服後滑瀉，四五日不止。上焦燥熱，閉目而喘，精神昏憤。延為診治，病雖危險，其脈尚有根柢，知可挽回。俾用滋陰清燥湯原方，煎汁一大茶杯，為其幼小，俾徐徐溫飲下，盡劑而愈。然下久亡陰，餘有虛熱，繼用生山藥、玄參各一兩以清之，兩劑熱盡除。大抵醫者遇此等證，清其燥熱，則滑瀉愈甚，補其滑瀉，其燥熱亦必愈甚。惟此方，用山藥以止滑瀉，而山藥實

能滋陰退熱，滑石以清燥熱，而滑石實能利水止瀉，二藥之功用，相得益彰。又佐以芍藥之滋陰血、利小便，甘草之燮陰陽、和中宮，亦為清熱止瀉之要品。彙集成方，所以效驗異常。愚用此方，救人多矣，即勢至垂危，投之亦能奏效。

奉天財政廳科員劉仙舫，年二十五六，於季冬得傷寒，經醫者誤治，大便滑瀉無度，而上焦煩熱，精神昏憤，時作譫語，脈象洪數，重按無力。遂重用生山藥兩半、滑石一兩、生杭芍六錢、甘草三錢，一劑瀉止。上焦煩熱不退，仍作譫語，爰用玄參、沙參諸涼潤之藥清之，仍復滑瀉，再投以前方一劑瀉又止，而上焦之煩熱益甚，精神亦益昏憤，毫無知覺。此時其家人畢至，皆以為不可復治。診其脈雖不實，仍有根柢，至數雖數，不過六至，知猶可治，遂慨切謂其家人曰：「果信服余藥，此病尚可為也」，其家人似領悟。為疏方，用大劑白虎加人參湯，更以生山藥一兩代粳米，大生地一兩代知母，煎湯一大碗，囑其藥須熱飲，一次止飲一口，限以六句鐘內服完，盡劑而愈。

津市錢姓小兒四歲，灼熱滑瀉，重用滋陰清燥湯治癒。

【附錄】

奉天鐵嶺楊鴻恩來函：

治李姓婦人膨脹證。先經他醫用蒼朮、檳榔、厚朴、枳實、香附、紫蔻之類辛燥開破，初服覺輕，七八劑後病轉增劇，煩渴泄瀉。又更他醫，投以紫朴琥珀丸，煩渴益甚，一日夜泄瀉十五六次，再診時，醫者辭不治。又延醫數人，皆諉

為不治。後乃一息奄奄，昇至床上兩次，待時而已。其姻家有知生者強生往視。其脈如水上浮麻，不分至數，按之即無，惟兩尺猶似有根，言語不真，彷彿可辨，自言心中大渴，少飲水即疼不可忍，蓋不食者已三日矣。先投以滋陰清燥湯，為脈象虛甚，且氣息有將脫之意，又加野臺參、淨萸肉一劑，諸病皆愈，可以進食。遂俾用一味薯蕷粥，送服生雞內金細末及西藥百布聖，取其既可作藥，又可作飯也。又即前方加減，日服一劑，旬日痊愈。

【滋陰固下湯】

治前證服藥後，外感之火已消，而渴與瀉仍未痊愈。或因服開破之藥傷其氣分，致滑瀉不止。其人或兼喘逆，或兼咳嗽，或自汗，或心中怔忡者，皆宜急服此湯。

生山藥（兩半）、懷熟地（兩半）、野臺參（八錢）、滑石（五錢）、生杭芍（五錢）、甘草（二錢）、酸石榴（一個，連皮搗爛）。

上藥七味，用水五盅，先煎酸石榴十餘沸，去滓再入諸藥，煎湯兩盅，分二次溫飲下。若無酸石榴，可用牡蠣（研）一兩代之。汗多者，加山萸肉（去淨核）六錢。

按：寒溫諸證，最忌誤用破氣之藥。若心下或胸脅疼痛，加乳香、沒藥、棟子、丹參諸藥，腹疼者加芍藥，皆可止疼。若因表不解，束其鬱熱作疼者，解表清熱，其疼自止。若誤服檳榔、青皮、鬱金、枳殼諸破氣之品，損其胸中大氣，則風寒乘虛內陷，變成結胸者多矣。即使傳經已深，而腸胃未至大實，可降下者，則開破與寒涼並用，亦易使大便滑瀉，致變證百出。愚屢見此等醫者誤人，心甚惻怛，故與服破氣藥而結胸者，制蕩胸湯（在第七卷）以救其誤。服破氣藥而滑瀉者，制此湯以救其誤。究之，誤之輕者可救，誤之重者實難挽回於垂危之際也。志在活人者，可不知其所戒哉。

【猶龍湯】

治胸中素蘊實熱，又受外感。內熱為外感所束，不能發泄。時覺煩躁，或喘、或胸脅疼，其脈洪滑而長者。

連翹（一兩）、生石膏（六錢，搗細）、蟬蛻（二錢，去足土）、牛蒡子（二錢，炒搗）。

喘者，倍牛蒡子。胸中疼者加丹參、沒藥各三錢。脅下疼者，加柴胡、川棟子各三錢。

按：用連翹發汗，必色青者方有力。蓋此物嫩則青，老則黃。凡物之嫩者，多具生發之氣，故凡發汗所用之連翹，必須青連翹。

此方所主之證，即《傷寒論》大青龍湯所主之證也。然大青龍湯宜於傷寒，此則宜於溫病。至傷寒之病，其胸中煩躁過甚者，亦可用之以代大青龍，故曰猶龍也。

一婦，年三十餘，胸疼連脅，心中發熱，服開胸、理氣、清火之藥不效。後愚診視，其脈浮洪而長。知其上焦先有鬱熱，又為風寒所束，則風寒與鬱熱相搏而作疼也。治以此湯，加沒藥、川棟子各四錢，一劑得汗而愈。

一叟，年過七旬。素有勞病。因冬令傷寒，勞病復發，喘而且咳，兩三日間，痰涎壅盛，上焦煩熱。診其脈，洪長浮數。投以此湯，加玄參、潞參各四錢，一劑汗出而愈。

門人劉子醞，曾治一人，年四十，外感痰喘甚劇，四五日間，脈象洪滑，舌苔白而微黃。子醞投以此湯，方中石膏用一兩，連翹用三錢。一劑周身得汗，外感之熱已退，而喘未痊愈。再診其脈，平和如常，微嫌無力。遂用拙擬從龍湯，去蘇子，加潞參三錢，一劑痊愈。愚聞之喜曰「外感痰喘，小青龍湯所主之證也。拙擬猶龍湯，原以代大青龍湯，今並可代小青龍湯，此愚之不及料也。將方中藥味輕重，略為加減，即能另建奇功，以斯知方之運用在人，慧心者自能變通也」。

按：連翹原非發汗之藥，即諸家本草，亦未有謂其能發汗者。惟其人蘊有內熱，用至一兩必然出汗，且其發汗之力緩而長。為其力之緩也，不至為汪洋之大汗，為其力之長也，晚睡時服之，可使通夜微覺解肌，且能舒肝氣之鬱，瀉肺氣之實，若但目為瘡家要藥，猶未識連翹者也。

〈 第 六 卷 〉

治傷寒溫病同用方

【仙露湯】

治寒溫陽明證，表裡俱熱，心中熱，嗜涼水，而不至燥渴，脈象洪滑，而不甚實，舌苔白濃，或白而微黃，或有時背微惡寒者。

生石膏（三兩，搗細）、玄參（一兩）、連翹（三錢）、粳米（五錢）。

上四味，用水五盅，煎至米熟，其湯即成。約可得清汁三盅，先溫服一盅。若服完一劑，病猶在者，可仍煎一劑，服之如前。使藥力晝夜相繼，以病癒為度。然每次臨服藥，必詳細問詢病人，若腹中微覺涼，或欲大便者，即停藥勿服。候兩三點鐘，若仍發熱未大便者，可少少與服之。若已大便，即非溏瀉而熱猶在者，亦可少少與服。

《傷寒論》白虎湯，為陽明府病之藥，而兼治陽明經病。此湯為陽明經病之藥，而兼治陽明府病。為其所主者，責重於經，故於白虎湯方中，以玄參之甘寒（《本經》言苦寒，細嚼之實甘而微苦，古今藥或有不同），易知母之苦寒，又去甘草，少加連翹，欲其輕清之性，善走經絡，以解陽明在經之熱也。

方中粳米，不可誤用糯米（俗名漿米）。粳米清和甘緩，能逗留金石之藥於胃中，使之由胃輸脾，由脾達肺，藥力四布，經絡貫通。糯米質粘性熱，大能固閉藥力，留中不散，若錯用之，即能誤事。



一叟年七十有一，因感冒風寒，頭疼異常，徹夜不寢。其脈洪大有力，表裡俱發熱，喜食涼物，大便三日未行，舌有白苔甚濃。知係傷寒之熱，已入陽明之府。因頭疼甚劇，且舌苔猶白，疑猶可汗解。治以拙擬寒解湯，加薄荷葉一錢。頭疼如故，亦未出汗，脈益洪實。恍悟曰「此非外感表證之頭疼，乃陽明經府之熱，相並上逆，而衝頭部也」。為制此湯，分三次溫飲下，頭疼愈強半，夜間能安睡，大便亦通。復診之，脈象餘火猶熾，遂用仲景竹葉石膏湯，生石膏仍用三兩，煎汁一大碗，分三次溫飲下，盡劑而愈。

按：竹葉石膏湯，原寒溫大熱退後，滌餘熱、復真陰之方，故其方不列於六經，而附載於六經之後。其所以能退餘熱者，不恃能用石膏，而恃石膏與參並用。蓋寒溫餘熱，在大熱鑠涸之餘，其中必兼有虛熱。石膏得人參，能使寒溫後之真陰頓復，而餘熱自消，此仲景制方之妙也。又麥冬甘寒粘滯，雖能為滋陰之佐使，實能留邪不散，致成勞嗽。而惟與石膏、半夏並用，則無忌，誠以石膏能散邪，半夏能化滯也。或疑炙甘草湯（亦名復脈湯）中亦有麥冬，卻無石膏、半夏。然有桂枝、生薑之辛溫宣通者，以駕馭之，故亦不至留邪。彼惟知以甘寒退寒溫之餘熱者，安能援以為口實哉！

又按：上焦煩熱太甚者，原非輕劑所能療。而投以重劑，又恐藥過病所，而病轉不愈。惟用重劑，徐徐飲下，乃為合法。

曾治一人，年四十餘。素吸鴉片，於仲冬得傷寒，兩三日間，煩躁無汗。原是大青龍湯證，因誤服桂枝湯，煩躁益甚。迎愚診視，其脈關前洪滑，兩尺無力。為開仙露湯，因其尺弱，囑其徐徐飲下，一次只飲藥一口，防其寒涼侵下焦也。病家忽愚所囑，竟頓飲之，遂致滑瀉數次，多帶冷沫。上焦益覺煩躁，鼻如煙熏，面如火炙。其關前脈，大於前一倍，又數至七至。知其已成戴陽之證，急用人參一兩，煎好兌童便半茶盅，將藥碗置涼水盆中，候冷頓飲之。又急用玄參、生地、知母各一兩，煎湯一大碗，候用。自服參後，屢診其脈，過半點鐘，脈象漸漸收斂，至數似又加數。遂急將候用之藥燉熱，徐徐飲下，一次飲藥一口，閱兩點鐘盡劑，周身微汗而愈。此因病家不聽所囑，致有如此之失，幸而救愈，然亦險矣。審是，則凡藥宜作數次服者，慎勿頓服也。蓋愚自臨證以來，無論內傷、外感，凡遇險證，皆煎一大劑，分多次服下。此以小心行其放膽，乃萬全之策，非孤注之一擲也。

溫病中，有當日得之，即宜服仙露湯者。一童子，年十六。暑日力田於烈日之中，午飯後，陡覺發熱，無汗，煩渴引飲。診其脈，洪而長，知其暑而兼溫也。投以此湯，未盡劑而愈。

按：此證初得，而胃府之熱已實。彼謂溫病入手經，不入足經者，何夢夢也！世醫以《傷寒論》有白虎湯方，以石膏為君，遂相傳石膏性猛如虎，而不敢輕用，甚或終身不敢一用。即用者，亦多將石膏煨如石灰，且只用二三錢。吁！

如此以用石膏，則石膏果何益乎？嘗考《傷寒》、《金匱》兩書，用石膏之方甚多。《傷寒論》白虎湯、竹葉石膏湯，皆用石膏一斤。即古今分量不同，亦約有今之五兩許。雖分作三次服，而病未愈者，必陸續服盡，猶一劑也。《金匱》治熱癰瘤，治瘡，治暑，治婦人乳中虛、煩亂嘔逆皆用石膏。《千金》用《傷寒論》理中湯治霍亂，名為治中湯，轉筋者加石膏，是石膏為尋常藥餌，諸凡有實熱之證，皆可用者也。又考《神農本草經》石膏氣味，辛微寒、無毒。夫既曰微寒，則性非大寒可知，既曰無毒，則性原純良可知。且又謂能治產乳，是較他涼藥尤為和平，故雖產後，亦可用也。愚生平重用石膏治驗之案不勝記，今略載數則於下，以釋流俗之惑。

長子蔭潮，七歲時感冒風寒，四五日身大熱，舌苔黃而帶黑。孺子苦服藥，強與之即嘔吐不止。遂但用生石膏兩許，煎取清汁，分三次溫飲下，病稍愈。又煎生石膏二兩，分三次飲下，又稍愈。又煎生石膏三兩，徐徐溫飲下，如前病遂痊愈。夫以七歲孺子，約一晝夜間，共用生石膏六兩，病癒後飲食有加，毫無寒中之弊，則石膏果大寒乎？抑微寒乎？

一媪，年六旬，得溫病，脈數而有力，舌苔黃而幹，聞藥氣即嘔吐，俾用生石膏六兩，煎水一大碗，恐其嘔吐，一次止飲藥一口，甫飲下，煩躁異常，病家疑藥不對證。愚曰「非也，病重藥輕故耳」。飲至三次，遂不煩躁，閱四點鐘，盡劑而愈。

一媼，年近七旬，於正月中旬，傷寒無汗，原是麻黃湯證，因誤服桂枝湯，遂成白虎湯證，而上焦煩熱太甚，聞藥氣即嘔吐，單飲所煎石膏清水亦吐出，俾用鮮梨片蘸生石膏細末嚼咽之，服盡二兩病遂愈。

一人，年三十餘，素有痰飲，得傷寒證，服藥調治而愈。後因飲食過度而復，三四日間，延愚診視。其脈洪長有力，而舌苔淡白，亦不燥渴。食梨一口，即覺涼甚，食石榴子一粒，心亦覺涼。愚舍證從脈，投以大劑白虎湯，為其素有痰飲，加半夏數錢。有醫者在座，問曰「此證心中不渴不熱，而畏食寒涼，以余視之，雖清解藥亦不宜用，子何所據而用白虎湯也」？愚曰「此脈之洪實，原是陽明實熱之證，治以白虎湯，乃為的方。其不覺渴與熱者，因其素有痰飲濕勝故也。其畏食寒涼者，因胃中痰飲與外感之熱互相膠漆，致胃腑轉從其化與涼為敵也。病家素曉醫理，信用愚方。兩日夜間，服藥十餘次，共用生石膏斤許，脈始和平，愚遂旋里。隔兩日復來迎愚，言病人反復甚劇，形狀異常，有危在頃刻之虞。因思此證治癒甚的，何驟如此反復，及至，見其痰涎壅盛，連連咳吐不竭，精神恍惚，言語錯亂，身體顫動。診其脈甚平和，微嫌胃氣不暢舒。愚恍悟曰「前因飲食過度而復，今必又戒飲食過度而復也。其家人果謂有鑒前失，所與飲食甚少。愚曰「此次無須用藥，飽食即可愈矣」。其時已屆晚八鐘，至明飲食三次，病若失。

石膏性本微寒，而以治寒溫之熱百倍於他藥者，以其味微辛，陰中含陽而善發汗也。然宜生用，而不宜煨用。煨之則辛散之力頓消，轉能收斂外邪，凝聚痰火使之不散（觀點豆腐者必用煨），用至一兩即足傷人，用石膏者當切戒之。至買此石膏時，又當細心考察，勿為藥坊所欺，致以煨者冒充生者。例言中石膏條下言之甚詳，可參觀。

寒溫為病中第一險證，而石膏為治寒溫第一要藥。愚生平慣用生石膏，未嘗少有失誤，而俗醫見愚重用生石膏之方，病雖治癒，亦駭為鹵莽，或目為行險僥倖。憶五年前，族家姊，年七旬有三，忽得癱瘓證。迎愚診視，既至見有醫者在座，用藥一劑，其方係散風補氣理痰之品，甚為穩善。愚亦未另立方。翌日，脈變洪長，知其已成傷寒證。先時愚外祖家近族有病者，訂於斯日迎愚，其車適至。愚將行，謂醫者曰「此證乃癱瘓基礎預伏於內，今因傷寒而發，乃兩病偕來之證。然癱瘓病緩，傷寒病急，此證陽明實熱已現於脈，非投以白虎加人參湯不可，君須放膽用之，斷無差謬」。後醫者終畏石膏寒涼，又疑癱瘓證不可輕用涼藥。遲延二日，病勢垂危，復急迎愚。及至則已夜半矣。診其脈，洪而且數，力能搏指，喘息甚促，舌強直，幾不能言。幸喜藥坊即在本村，急取白虎加人參湯一劑，方中生石膏用三兩，煎湯兩盅，分二次溫飲下，病稍愈。又單取生石膏四兩，煮汁一大碗，亦徐徐飲下，至亭午盡劑而愈。後癱瘓證調治不愈，他醫竟歸咎於愚。謂從前用過若干石膏，所以不能調治。吁！年過七旬而癱瘓者，愈者幾人？獨不

思愚用石膏之時，乃挽回已盡之人命也。且《金匱》治熱癰瘤有風引湯，原石膏與寒水石並用，彼謗愚者，生平蓋未見《金匱》也。

又嘗治一少年，素羸弱多病。於初夏得溫證，表裡俱熱，延醫調治不愈。適愚自他處治病歸，經過其處，因與其父素稔，入視之。其脈數近六至，雖非洪滑鼓指，而確有實熱。舌苔微黃，雖不甚乾，毫無津液。有煎就藥一劑未服，仍係發表之劑，乃當日延醫所疏方，其醫則已去矣。愚因謂其父曰「此病外感實熱，已入陽明之府。其脈象不洪滑者，元氣素虛故也。陽明府熱之證，斷無發表之理。況其脈數液短，兼有真陰虛損之象尤忌發汗乎？其父似有會悟，求愚另為疏方。本擬用白虎加人參湯，又思用人參即須多用石膏。其父素小心過度，又恐其生疑不敢服，遂但為開白虎湯，方中生石膏用二兩，囑其煎汁兩茶盅，分二次溫飲下，服後若餘火不淨，仍宜再服清火之藥，言畢愚即旋里。後聞其服藥後，病亦遂愈。遲十餘日，大便又燥結，兩腿微腫，將再迎愚診治，而其父友人有自謂知醫者，言其腿腫，係多服生石膏之過，而孰知係服石膏猶少之過哉！病家竟誤聽其言，改延他醫，投以大劑承氣湯，服後其人即不語矣，遷延數日而亡。夫自謂知醫者，不過欲炫己之長，而妄指他人之短。豈知其言之一出，即足誤人性命哉！於陰鷲獨無所損哉！

夫愚之被謗何足惜，獨惜夫石膏之功用，原能舉天下病熱之人，盡登之清涼之域而愚學淺才疏，獨不能為石膏昭雪，俾石膏之功用大顯於世。每一念及，曷

勝扼腕。因思《傷寒論》序中大意，謂其宗族素藩盛，自建安紀年以來，族人多患傷寒，大抵委付凡醫，恣其所措，以致戶口凋零，遂感憤而作《傷寒論》，故一百十三方中，救誤治之方，幾居其半。夫仲景為醫中之聖，猶任其族人之患傷寒者，為庸醫所誤而不能以苦口爭，何況於愚也。又何怪乎愚用生石膏而遭謗也。愚今師仲景感憤著書之意，僭成《醫學衷中參西錄》一書，於石膏治癒之案，不覺語長詞復，言之慨切，非過為石膏延譽也，實欲為患寒溫者，廣開生路也。天下後世之仁人君子覽斯編者，必當有所興起也。

《神農本經》藥性有寒、有微寒，微寒即後世所謂涼也。石膏之性，《本經》明言微寒，不過為涼藥中之一藥，且為石之膏，而並非石質，誠為涼藥中極純良之品。世俗醫者，何至畏之若是。能重用石膏一味，即能挽回寒溫中垂危之大證，此愚屢經試驗，上所列案中，已略舉一二。即使石膏果係大寒，而當陽明府熱方熾之時，用生石膏五六兩，煎湯一大碗，一次只飲藥一口，以火退為度。若覺微涼，即便停止，何至遽將人涼壞。況愚用此方以救寒溫之熱，其熱退至八九分，石膏即可停止，初不待其覺涼也。又嘗思之，寒溫中之實火，直等燔柴之烈，惟石膏則可比救燔柴之水，設使人在燔柴中不能出，救之者若不焦頭爛額，急用水潑滅其火，而復從容周旋，徐為調停，則其人必為忍人。乃何以本屬可救之實熱，而竟以不敢重用石膏者誤之耶？且愚於可重用石膏之證，又得一確實徵驗，其人

能恣飲新汲井泉水而不瀉者，即放膽用生石膏治之必愈，此百用不至一失之法也。

按：重用石膏治病，名醫之案甚夥。今略載數條於下，並今人之用石膏治驗之案數則，連類記之。以明愚之重用石膏，原非一己之私見也。

濮依雲曰「家君於壬午夏病熱，喜立日中，且惡涼飲，脈則皆伏。群醫咸謂三陰證，慈未之敢信，質於師陸九芝先生。先生驚曰『此溫熱之大證，陽極似陰也，誤用辛熱必殆』，乃迭進芩、連、膏、黃，熱象大顯。石膏用至斤許，熱乃漸退。竊思此疾當畏寒脈伏時，誰知其為大熱者。若非家君早令習醫，受吾師至教，篤信吾師之說，必為群醫所誤矣。」

紀文達曰「乾隆癸丑春夏間，京中多疫。以張景嶽法治之，十死八九。以吳又可法治之，亦不甚效驗。有桐城一醫，以重劑石膏治馮鴻臚星實之姬，人見者駭異。然呼吸將死，應手輒痊，踵其法者，活人無算。有一劑用至八兩，一人服至四斤者。雖劉守真之《原病式》，張子和之《儒門事親》，專用寒涼，亦未敢至是，實自古所未聞矣」。

按：桐城醫者，文達未詳其姓名。友人劉仲華告愚曰「此醫姓余名霖字師愚。於乾隆間著書，名《疫疹一得》，其間重用石膏方名清瘟敗毒散。後道光間，歸安江筆花著《醫鏡》，內有治一時疫發斑，用石膏至十四斤，而斑始透。蓋深得余師愚之法者」。



又曰「吳門顧松圃名靖遠，因父患熱病，為庸醫參、附所誤，發憤習醫，寒暑無間者，閱三十年。嘗著有《醫鏡》十六卷，惜無刊本。近見陸定圃進士《冷盧醫話》，載其治王纘功陽明熱證，主白虎湯，每劑石膏三兩，兩劑熱頓減。而遍身冷汗，肢冷發呃，別醫謂非參、附不克回陽，諸醫和之。群嘩曰『白虎再投必斃』，顧引仲景熱深厥亦深之文，及喻嘉言陽證變陰厥，萬中無一之說，諄諄力辯，諸醫固執不從，投參、附回陽斂汗之劑，汗益多，而體益冷，反詆白虎之害。微陽脫在旦暮，舉家驚惶，復求顧診。仍主白虎湯，連服兩大劑，汗止身溫。再以前湯加減，數服而痊。因著《辨治論》，以為溫熱病中，宜用白虎湯並不傷人，以解世俗之惑」。

按：此案服白虎湯兩劑後，而轉熱深厥深者，以方中所用三兩猶輕，不能勝此病也。若如前案中，每劑用石膏半斤，則無斯弊矣。幸其持論不移，卒能以大劑白虎湯挽回此證。又幸患此證者，必為壯實之人，其素日陰分無虧，不然服參附一劑之後，其病即不可問矣，豈猶容後日復用白虎湯哉。

徐靈胎曰「西濠陸炳若之夫人，產後感風熱，瘀血未盡。醫者執產後屬虛寒之說，用乾薑、熟地治之，汗出而身熱如炭，唇燥舌紫，仍用前藥。余是日偶步田間看菜花，近炳若之居，趨迎求診。余曰『生產血枯火熾，又兼風熱，復加剛燥滋膩之品，益火塞竅，凶危立見，非石膏則陽明之盛火不解』。遵仲景法，用竹皮、石膏等藥。余歸，而他醫至，笑且非之，謂自古無產後用石膏之理。蓋生

平未見仲景方也。其母素信余，立主服之，一劑而蘇，明日炳若求診，余曰「更服一劑，即痊愈矣，勿庸易方」，如言而愈。觀此案，則產後病寒溫者，石膏亦所不忌也」。

按：《金匱》有竹皮大丸，治婦人乳中虛，煩亂嘔逆，即此案所謂產後風熱也。竹皮大丸中，原有石膏，故徐氏謂遵仲景之法。而愚治產後寒溫之實熱，則用白虎加人參湯，以玄參代知母。蓋退寒溫之實熱，知母不如石膏，而其性實寒於石膏，當為產後所忌，故竹皮大丸中不用知母。至玄參則宜於產乳餘疾，《本經》有明文也。用白虎湯之例，汗吐下後，皆加人參，以其虛也。產後較汗吐下後更虛，故必加之方妥。

又曰「嘉興朱宗臣以陽勝陰虧之體，又兼痰凝氣逆。醫者以溫補治之，胸膈否塞，而陽道痿。群醫謂脾腎兩虧，將恐無治，就余於山中。余視其體豐而氣旺，陽升而陰不降，諸竅皆閉。笑謂之曰「此為肝腎雙實證，先用清潤之品，加石膏以降其逆氣，後以消痰開胃之藥，滌其中官，更以滋腎強陰之藥，鎮其元氣」。陽事既通，五月後，妻即懷孕，得一女。又一年，復得一男」。觀此案，則無外感而有實熱者，石膏亦可用也。俗醫妄談，謂石膏能寒人之下焦，令人無子，何其言之謬耶！

袁才子曰「丙子九月，余患瘧，飲呂醫藥，至日晡，忽嘔逆頭眩不止。家慈抱余起坐，覺血氣自胸膈起，性命在呼吸間，忽有徵友趙藜村來訪，家人以疾辭。

曰『我解醫』，乃延入診脈看方。笑曰容易。命速買石膏，加他藥投之。余甫飲一勺，如以千鈞之石，將腸胃壓下，血氣全消。未半盃，沉沉睡去，頭上微汗，朦朧中，聞家慈喏曰『豈非仙丹乎』！睡須臾醒，君猶在座，問思西瓜否。曰想，即買西瓜。曰『憑君儘量，我去矣』，食片許，如醍醐灌頂，頭目為輕，晚食粥。次日來曰『君所患者，陽明經瘧。呂醫誤為太陽經，以升麻、羌活二味升提之，將君妄血逆流而上，惟白虎湯可治，然亦危矣』。詳觀此案，石膏之功用直勝金丹，誠能挽回人命於頃刻也。以此普濟群生之藥，醫者果何所畏懼而不肯輕用也。

太醫院吏目楊榮春，號華軒，南皮人。曾治一室女，周身拘攣，四肢不能少伸，年餘未起床矣。診其脈，陽明熱甚。華軒每劑藥中，必重用生石膏，以清陽明之熱，共用生石膏四斤，其病竟愈。蓋此證必因素有外感之熱，傳入陽明經，醫者用甘寒滯泥之品，錮閉其熱於陽明經中，久而不散。夫陽明主宗筋，宗筋為熱所傷而拘攣，久之周身之筋皆病矣。此錮閉之熱，惟生石膏可清之內消，兼逐之外出，而他藥不能也。

友人毛仙閣曾治一少婦，產後十餘日，周身大熱無汗，心中熱而且渴。延醫調治，病勢轉增，甚屬危急。仙閣診其脈甚洪實，舌苔黃而欲黑，撮空摸床，內風已動。治以生石膏三兩，玄參一兩，野臺參五錢，甘草二錢。為服藥多嘔，取竹皮大丸之義，加竹茹二錢，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，盡劑而愈。觀此案，則

外感之熱，直如燎原，雖在產後，豈能從容治療乎。孫思邈曰「智欲圓而行欲方，膽欲大而心欲小」，世俗醫者，遇此等證，但知心小，而不知膽大，豈病人危急之狀，漠不關於心乎？

友人張少白曾治一閩姓叟，年近七旬，素有勞疾，發則喘而且嗽。於丙午冬，感冒風寒，上焦煩熱，勞疾大作，痰涎膠滯，喘促異常。其脈上部洪滑，按之有力。少白治以生石膏二兩，以清時氣之熱，因兼勞疾，加沉香五錢，以引氣歸腎。且以痰涎太甚，石膏能潤痰之燥，不行痰之滯，故又藉沉香辛溫之力，以為石膏之反佐也。一日連服兩劑，於第二劑加清竹瀝二錢，其病若失，勞疾自此亦愈，至今數年未嘗反復。觀此案，則石膏之功用，不幾令人不可思議哉！然非其人感冒傷寒，又孰能重用石膏，為袪除其勞疾哉！

【附錄】

湖北潛江紅十字分會張港義務醫院院長崔蘭亭來函：

壽甫老先生臺鑒：久仰仁術，普救蒼生，真乃醫中一大偉人也。漢唐以來，各家著述雖多，恒係理想，究少實驗，是以其方有效有不效，惟先生之著述，則屢試屢驗。今略舉用《衷中參西錄》中諸方，隨手奏效數則，敬呈臺端。丁卯仲夏，國民革命軍第二十軍四師七旅旅長何君身染溫病。軍醫以香薷飲、藿香正氣散治之，不效。迎僕診視，遵用《衷中參西錄》清解湯，一劑而愈。時因大軍過境，溫病盛行，以書中清解湯、涼解湯、寒解湯、仙露湯、從龍湯、留水石膏飲，

有嘔者，兼用代赭石。本此數方，變通而用，救愈官長目兵三千餘人，共用生石膏一千餘斤，並未償事。先生之《衷中參西錄》，真乃世界救命之書，而堪為醫界開一新紀元也。後學又自搜求兩方，亦甚奇異。一為服食松脂法。《抱朴子》內篇有上黨趙姓身患癩病，歷年不愈。後遇異人指示，服松脂百日，癩病痊愈。不但治病，而且延年。初不知松脂為何物，後參閱群書，知松脂即是松香，解毒、除濕消腫、止痛、生肌、化痰，久服輕身延年，辟穀不饑。萬國藥方久咳丸，係松脂、甘草並用。向曾患咳嗽，百藥不效，後每服松脂乾末一錢，用涼茶送服，月餘咳嗽痊愈，至今十年，未嘗反復，精神比前更強壯。觀此，松脂實有補髓健骨之力。又丁卯夏，川鄂戰爭，敝會出發至戰地，救一兵士，子彈由背透胸出，由傷處檢出碎骨若干，每日令食牛乳、山藥、數日飲食稍進，口吐臭膿，不能坐立，後每日令服松脂兩次，每次一錢，三日後臭膿已盡，傷口內另長新骨，月餘傷口全平，行步如常。敝會送路費及路票，回川來書道謝。又一兵士李兆元，過食生冷，身體浮腫，腹大如箕，百藥罔效。令每日服松脂三錢，分三次服下，五日痊愈。鄉村一男子，患肝癰潰破，醫治五年不愈，潰穿二孔，日出臭水碗許，口吐膿血，臭氣異常。戊辰孟夏，迎為診治，視其形狀，危險萬分，辭而不治。再三懇求，遂每早晚令服松脂一錢，五日臭膿減少，瘡口合平，照前服之，半月痊愈。又有患肺癰者，服林屋山人犀黃丸不效，而服松脂輒效者，難以枚舉矣。

又一方，家母年五十時患咳嗽，百藥不效，嚴冬時，臥不安枕。遇一老醫，傳授一方，係米穀四兩，北五味三錢，杏仁去皮炒熟五錢，枯礬二錢，共為細末，煉蜜為丸，梧桐子大，每服二十九，白糖開水送下。吞服數日，病若失，永不復發。家母生於甲辰，現年八十有六，貌若童顏。此丸不但止嗽，而且延年。以後用此丸療治咳嗽痊愈者，筆難悉述。此二方，皆為尋常藥品，而能愈此難愈之大證，且又屢試屢效，誠佳方也。深望先生，將此二方載於貴著，或兼登各處醫報，以公諸醫界，則幸甚矣。

按：此來函謂，共用生石膏千餘斤，治癒三千餘人，未嘗少有錯誤，是誠善用石膏者矣。錄之，足證愚喜重用生石膏，以治寒溫實熱，原非一偏之見。且足證石膏必須生用，始能有益無害，活人千萬，至所附載二方，皆甚奇異，試之有效，因並錄之。

按：《傷寒論》〈陽明篇〉中，白虎湯後，繼以承氣湯，以攻下腸中燥結，而又詳載不可攻下諸證。誠以承氣力猛，倘或審證不確，即足誤事。愚治寒溫三十餘年，得一避難就易之法。凡遇陽明應下證，亦先投以大劑白虎湯一兩劑。大便往往得通，病亦即愈。即間有服白虎湯數劑，大便猶不通者，而實火既消，津液自生，腸中不致乾燥，大便自易降下。用玄明粉三錢，加蜂蜜或柿霜兩許，開水沖調服下，大便即通。若仍有餘火未盡，而大便不通者，單用生大黃末一錢（若涼水調服生大黃末一錢，可抵煮服者一兩），蜜水調服，通其大便亦可。且通大

便於服白虎湯後，更無下後不解之虞。蓋下證略具，而脈近虛數者，遽以承氣下之，原多有下後不解者，以其真陰虧、元氣虛也。惟先服白虎湯或先服白虎加人參湯，去其實火，即以復其真陰，培其元氣，而後微用降藥通之，下後又何至不解乎。此亦愚百用不至一失之法也。

又按：重用石膏以退火之後，大便間有不通者，即可少用通利之藥通之。此固愚常用之法，而隨證制宜，又不可拘執成見。曾治一少年，傷寒已過旬日，陽明火實，大便燥結，投一大劑白虎湯，一日連進二劑，共用生石膏六兩，至晚九點鐘，火似見退，而精神恍惚，大便亦未通行，再診其脈，變為弦象，夫弦主火衰，亦主氣虛。知此證清解已過，而其大便仍不通者，因其元氣虧損，不能營運。白虎湯涼潤之力也。遂單用人參五錢，煎湯俾服之，須臾大便即通，病亦遂愈。蓋治此證的方，原是白虎加人參湯，因臨證時審脈不確，但投以白虎湯，遂致病有變更，幸迷途未遠，猶得急用人參，繼所服白虎湯後以成功。誠以日間所服白虎湯，盡在腹中，得人參以助之，始能運化。是人參與白虎湯，前後分用之，亦無異於一時同用之也。益歎南陽制方之神妙，誠有令人不可思議者也。吳又可謂「如人方肉食而病適來，以致停積在胃，用承氣下之，惟是臭水稀糞而已，於承氣湯中，單加人參一味，雖三四十日停積之物於是方下。蓋承氣借人參之力鼓舞胃氣，宿物始動也」。又可此論，亦即愚用人參於白虎湯後，以通大便之理也。

間有用白虎湯潤下大便，病仍不解，用大黃降之而後解者，以其腸中有匿藏之結糞也。曾治一媪，年七十餘，季冬得傷寒證，七八日間，延愚診視。其脈洪長有力，表裡俱熱，煩渴異常，大便自病後未行。投以白虎加人參湯二劑，大便遂通，一日降下三次，病稍見愈，而脈仍洪長。細審病情，當有結糞未下，遂單用大黃三錢，煮數沸服之，下結糞四五枚，病遂見愈，仍非脈淨身涼，又用拙擬白虎加人參以山藥代粳米湯（在後），服未盡劑而愈。然此乃百中之一二也，臨證者，不可因此生平僅遇之證，遂執為成法，輕視白虎，而重視承氣也。

又按：石膏用於外感之陽證，雖不當其時，亦無大患。惟用於陰盛格陽，真寒假熱證，則危不旋踵。然此等證，即誤用他涼藥，其害亦同，此非石膏之過，而醫者審證不確之過也。今錄古人治此等證驗案數則於下，以備參觀。庶不至誤用寒涼之藥，以治陰證也。

李東垣嘗治一陰盛格陽傷寒，面赤煩渴，脈七八至，但按之則散。用薑附湯加人參投之，得汗而愈。

按：陰盛格陽煩渴，與陽證煩渴確有分辨。陽證煩渴，喜用大碗飲涼水，飲後必輕快須臾。陰盛格陽煩渴，亦若嗜飲涼水，而飲至口中，又似不欲下嚥，不過一兩口而止。

李士材曰：一休甯吳文哉傷寒，煩躁面赤，昏亂悶絕，時索冷水。其弟日休，求余診視，手揚足擲，五六人制之，方得就診。其脈洪大無倫，按之如絲。余曰



『浮大沉小，陰證似陽也，與附子理中湯，當有生理』。日休駭曰『醫者十輩至，不曰柴胡、承氣，則曰竹葉石膏。今反用熱藥，惡乎敢』？余曰「溫劑猶生，涼劑立危矣。遂用理中湯，加人參四錢、附子三錢，煎成，將藥碗置冷水中，候冷與飲。服後一時，狂躁定矣。再劑而神爽，服參五斤而安。文哉遣以書曰『弟為俗醫所誤，既登鬼錄矣，而兄翁拯全之，大奇亦大幸也。方弟躁熱之時，醫以三黃湯人牛黃，服之轉加悶絕，舉室哀號，惟候目瞑而已。不意兄翁毅然以為可活，參附以投，陰霜見睨。荆妻稚子，含淚歡呼。父母生之，而兄翁再生之，大恩罔極，莫可言喻』。敢志巔末，乞附案帙，俾天下萬世，知藥不可輕投，命不可輕棄，何莫非大仁人回春之澤哉」。

按：此案中有曰，時索冷水，而不曰時飲涼水，蓋索者未必能飲也

喻嘉言曰「徐國楨傷寒六七日，身熱目赤，索水到前，復置不飲。異常煩躁，將門牖洞啟，身臥地上，輾轉不快，更求人井，一醫急以承氣與服。余診其脈，洪大無倫，按之無力。謂醫者曰『此用人參、附子、乾薑之證，奈何認為下證』？醫曰『身熱目赤，有餘之邪，躁急如此，再以人參、附子、乾薑服之，逾垣上屋矣』。余曰「陽欲暴脫，外顯假熱，內有真寒，以薑、附投之，尚恐不能勝回陽之任，況敢用純陰之藥，重劫其陽乎！觀其得水不欲咽，情已大露，豈水尚不欲咽，而可用大黃、芒硝乎？天地燠蒸，必有大雨，此證頃刻一身大汗，不可救矣。惟用薑、附，可謂補中有發，並可以散邪退熱，一舉兩得，至穩至當之法，何可

致疑？吾在此久坐，如有差誤，吾任其咎。於是以附子、乾薑各五錢，人參三錢，甘草二錢，煎湯冷服，服後寒戰，戛齒有聲。以重綿和頭覆之，縮手不肯與診，陽微之狀始著。再與前藥一劑，微汗熱退而安。

上所錄醫案，皆陰極似陽也。然其證百中不一見，愚臨證數十年，亦未嘗見，其證之少可知。至陽極似陰，外面雖見大寒之狀，仍須投以大劑寒涼者，愚曾治過數次，前哲醫案中，亦多有之。今復登數則於下，可與上列之案對觀，庶可分辨陰陽於毫釐之間也。

一人，年五十，周身發冷，兩腿疼痛。醫者投以溫補之藥，其冷益甚，欲作寒戰。診其脈，甚沉伏，重按有力。其舌苔黃厚，小便赤澀。時當仲春，知其春溫之熱，鬱於陽明而未發，故現此假像也。欲用白虎湯加連翹治之。病人聞之駭然。愚曰「但預購生石膏四兩，迨熱難忍時，煎湯飲之可乎？」病者曰「恐無其時耳」。愚曰「若取鮮白茅根，煎湯飲之，則冷變為熱，且變為大熱矣」。病者仍不確信，然欲試其驗否。遂剖取鮮白茅根，去淨皮，細切一大碗，煮數沸，取其湯，當茶飲之。有頃熱發，若難忍。須臾再診其脈，則洪大無倫矣。愚將所預購之四兩生石膏煎湯，分三次溫飲下，其熱遂消。蓋茅根中空，性涼能散，故飲之能將鬱熱達於外也。

一婦人，年二十餘，得溫病，咽喉作疼，舌強直，幾不能言，心中熱而且渴，頻頻飲水，脈竟沉細異常，肌膚亦不發熱。遂舍脈從證，投以拙擬寒解湯（在第

五卷），得微汗，病稍見愈。明晨又復如故，舌之強直更甚。知藥原對證，而力微不能勝病也。遂仍投以寒解湯，將石膏加倍，煎湯兩盅，分二次溫飲下，又得微汗，病遂愈。

按：傷寒脈若沉細，多係陰證。溫病脈若沉細，則多係陽證。蓋溫病多受於冬，至春而發，其病機自內向外。有時病機鬱而不能外達，其脈或即現沉細之象，誤認為涼必至誤事。又此證寒解湯既對證見愈矣，而明晨舌之強直更甚，乃將方中生石膏倍作二兩，分兩次前後服下，其病即愈。由是觀之，凡治寒溫之熱者，皆宜煎一大劑，分數次服下，效古人一劑三服之法也。

喻嘉言曰「黃長人犯房勞，病傷寒，守不服藥之戒，身熱已退，十餘日外，忽然昏沉，渾身戰慄，手足如冰。急請余至，一醫已合就薑、桂之藥矣。余適見而駭之，姑俟診結，再三辟其差謬。病家自疑陰證，言之不入，只得與醫者約曰『此病之安危只爭此藥一劑，所用當否性命有關，吾與丈各立擔承，倘至用藥差誤，責有所歸』。醫者曰『吾治傷寒三十餘年，不知甚麼擔承』。余笑曰『吾有明眼在此，不忍見人立就傾危，若不擔承，待吾用藥，病家方才心安，亟請用藥』。予以調胃承氣湯，約重五錢，煎成，熱服半盞，厥漸退，人漸蘇。仍與前藥，服至盡劑，人事大清，忽然渾身壯熱，再與大柴胡湯劑，熱退身安。門人問曰『病者云是陰證見厥，先生確認為陽證，而用下藥果應，其理安在』？答曰『凡傷寒病初得發熱，煎熬津液，鼻乾、口渴、便秘，漸至發厥者，不問而知為熱也。若

陽證忽變陰厥者，萬中無一，從古至今無一也。蓋陰厥得之陰證，一起便直中真陰經，唇青、面白、遍體冷汗、便利不渴、身倦多睡，醒則人事了了，與傷寒傳經之熱邪，轉人轉深人事昏惑者，萬萬不同也。」。

按：喻氏案後之論甚明晰，學者宜細觀之。

張令韶曰「余治一婦人，傷寒九日，發狂，面白，謔語不識人，循衣摸床，口目瞤動，肌肉抽搐，遍身手足盡冷，六脈皆無。諸醫皆辭不治。余因審視良久，聞其聲，重而且長，句句有力。乃曰『此陽明內實，熱鬱於內，故令脈道不通，非脫也。若脈真將無，則氣息奄奄，危在頃刻，安得有如許氣力，大呼疾聲，久而不絕乎？』遂用大承氣湯，啟齒灌下。夜間，解黑糞滿床，脈出，身熱，神清，舌燥而黑，更服小陷胸湯，二劑而愈。因思此證大類四逆，若誤投之立死。及死之後，必以為原係死證，服之不效數也，不知病人懷恨九原矣」。

按：此證易辨，其決非四逆湯證，徵以前案喻氏之論，自能了然。

李士材曰「社友韓茂遠傷寒，九日以來，口不能言，目不能視，體不能動，四肢俱冷，眾皆曰陰證。比余診之，六脈皆無，以手按腹，兩手護之，眉縐作楚。按其跌陽，大而有力，知其腹有燥糞，欲與大承氣湯。病家惶懼，不敢進。余曰『吾郡能辨是證者，唯施笠澤耳』。延至診之，與余言若合符節，遂投以大承氣湯，下燥糞六七枚。口能言，體能動。若『接手不及足』者，何以辨此證哉！」

按：《傷寒論》仲景原敘，原有「握手不及足」之戒。足上脈三部，趺陽為胃脈，太溪為腎脈，太衝為肝脈。三脈之中，又以趺陽為要。故其敘中趺陽與人迎並舉，凡臨證，其手上脈不見者，皆當取其趺陽脈為準，不但寒溫之證為然也。

上所列醫案，皆陽極似陰也。其理惟劉河間論之最透，其言曰「畜熱內甚，脈須疾數，以其熱畜極甚而脈道不利，反致脈沉細而欲絕。俗未明造化之理，反謂傳為寒極陰毒者，或始得之陽熱暴甚，而便有此證候者，或兩感熱甚者，通宜解毒，如大承氣湯下之後，熱稍退而未愈者，黃連解毒湯調之，或微熱未除者，涼解散調之」。

按：此論發揮陽極似陰之理甚妙，誠以河間生平治病主火，故能體會至此。至其所論用藥，則不必拘。

陰極似陽，陽極似陰之外，又有所謂戴陽證者。其人面赤煩躁，氣息甚粗，脈象雖大，按之無力，又多寸盛尺虛，乃下焦虛寒，孤陽上越之危候，頗類陰極似陽，而與陰極似陽微有不同。蓋陰極似陽，乃內外異致；戴陽證，乃上下異致也。愚曾治有戴陽證驗案，仙露湯方後，論藥宜分數次服者，不可頓服，曾引其案，以為炯戒，茲不再贅。而前人善治此證者，喻嘉言獨推陶節庵立法甚妙，用人參、附子等藥，收拾陽氣歸於下元，而加蔥白透表，以散外邪。如法用之，無不愈者。然其法實本仲景，特仲景未明言治戴陽證，而節庵則明言治戴陽證耳。嘉言何不祖述仲景，而但知推重節庵也。

按：《傷寒論》原有治戴陽證之方，通脈四逆湯是也。其方載《少陰篇》主「少陰病，下利清穀，裡寒外熱，手足厥熱，脈微欲絕，身反不惡寒，其人面赤色，或腹痛，或乾嘔，或咽痛，或利止脈不出者」，方用炙甘草二兩，生附子（經藥坊制過而未炮熟者，即是生附子，非野間剖取之生附子）大者一枚，去皮破八片，乾薑三兩，強人可四兩。上三味，以水三升煮取一升二合，分兩次服。面赤者，加蔥九莖。腹中痛者，去蔥加芍藥二兩。嘔者，加生薑三兩。咽痛者，去芍藥加桔梗一兩。利止脈不出者，去桔梗加人參三兩。

按：面赤即戴陽證，於通脈四逆湯中加蔥九莖，即治戴陽證之專方也。蓋上竄之元陽，原以下焦為宅窟，故用乾薑、附子之大辛大溫，直達下焦，據其故壘，張赤幟而招之。然恐元陽當煥散之際，不堪薑附之健悍，故又重用甘草之溫和甘緩者，以安養元氣，變理陰陽。且俾薑、附得甘草之甘而熱力愈長；得甘草之緩而猛力悉化。洵乎節制之師，掃蕩餘寇，即以招集流亡，則元陽自樂還其宅也。特是元陽欲還道途不無間隔，故又用蔥白之溫通，且取老陽之數，多至九莖，以導引介紹之，則上至九天，下至九淵，一氣貫通，毫無隔礙，而元陽之歸還自速也。至利止而脈不出者，其下焦之元氣必虛，故又加人參二兩以助元氣。後日陶氏之方，不過於此湯中並加蔥白、人參，何嘗出仲景之範圍哉！

按：治戴陽證，用通脈四逆湯必須加蔥，亦宜並加人參。而蔥九莖，可變為蔥白九寸。

又按：腹痛者加芍藥，若以治溫病中之戴陽證，雖不腹痛，亦宜加芍藥。曾治一少年，素傷於煙色，夏月感冒時氣，心中發熱，因多食西瓜，遂下利清穀，上焦煩躁異常。急迎愚診視，及至已昏不知人。其脈上盛下虛，搖搖無根，數至六至。為疏方用附子錢半，乾薑二錢，炙甘草三錢，人參四錢，蔥白五寸，生芍藥五錢，又加龍骨、牡蠣（皆不用煨）、玄參各四錢。煎湯一大盅，頓飲之。須臾蘇醒，下利與煩躁皆愈。時有醫者二人在座，皆先愚至而未敢出方，見愚治癒，問先生何處得此良方。答曰「此仲景方，愚不過加藥三味耳，諸君豈未之見耶」。遂為發明通脈四逆湯之精義，並謂其善治戴陽證。二醫者皆欣然，以為聞所未聞云。

又喻嘉言曰「石開曉病傷風，咳嗽，未嘗發熱，自覺氣迫欲死，呼吸不能相續。求余診之，見其頭面赤紅，躁擾不歇，脈亦豁大而空，謂曰『此證頗奇，全是傷寒戴陽證，何以傷風小恙亦有之』。急宜用人參、附子等藥溫補下元，收回陽氣。不然子丑時，身大汗，脫然而死矣。渠不以為然，及日落陽不用事，忙亂不能少支，忙服前藥，服後稍寧片刻。又為床側添同寢一人，逼出其汗，再用一劑，汗止身安，咳嗽俱不作。詢其所由，云『連服麻黃藥四劑，遂如此躁急』。然後知傷風亦有戴陽證，與傷寒無別，總因其人平素下虛，是以真陽易於上越耳。

按：此證由於連服麻黃四劑之後，而服藥後猶設法逼出其汗，豈服麻黃時未出汗乎，獨不慮其元陽因服藥甫收斂，又因出汗而浮越乎。愚曾治有類此之證，

其病因亦類此，愚重用山萸肉（去淨核）二兩，加人參、龍骨（不煨）各數錢而愈。其案詳拙擬來複湯（在第一卷）後，可參視。



【石膏粳米湯】

治溫病初得，其脈浮而有力，身體壯熱。並治一切感冒初得，身不惡寒而心中發熱者。若其熱已入陽明之腑，亦可用代白虎湯。

生石膏（二兩，軋細）、生粳米（二兩半）。

上二味，用水三大碗，煎至米爛熟，約可得清汁兩大碗。乘熱盡量飲之，使周身皆汗出，病無不愈者。若陽明腑熱已實，不必乘熱頓飲之，徐徐溫飲下，以消其熱可也。

或問「外感初得，即中有蘊熱，陽明胃腑，不至燥實，何至速用生石膏二兩」？答曰「此方妙在將石膏同粳米煎湯，乘熱飲之。俾石膏寒涼之性，隨熱湯發散之力，化為汗液盡達於外也。西人謂胃本無化水之能，亦無出水之路，而壯實之人，飲水滿胃，須與水氣旁達，胃中即空。蓋胃中原多微絲血管，能引水氣以入回血管（二管詳解在第二卷補絡補管湯下），由回血管過肝入心，以營運於周身，由肺升出為氣，由皮膚滲出為汗，餘透腎至膀胱為溺。石膏煎湯，毫無氣味，毫無汁漿，直與清水無異，且又乘熱飲之，則敷布愈速，不待其寒性發作，即被胃中微絲血管吸去，化為汗、為氣，而其餘為溺，則表裡之熱，亦隨之俱化。此寒因熱用，不使傷胃之法也。且與粳米同煮，其沖和之氣，能助胃氣之發達，則發汗自易。其稠潤之汁，又能逗留石膏，不使其由胃下趨，致寒涼有礙下焦。不但此也，清水煎開後，變涼甚速，以其中無汁漿，不能留熱也。此方粳米多至二兩半，

湯成之後，必然汁漿甚稠。飲至胃中，又善留蓄熱力，以為作汗之助也。是以人之欲發汗者，飲熱茶不如啜熱粥也。初擬此方時，惟用以治溫病。實驗既久，知傷寒兩三日後，身不惡寒而發熱者，用之亦效」。

丙辰正月上旬，愚自廣平移居德州。自邯鄲上火車，自南而北，復自北而南，一晝夜繞行千餘里。車窗多破，風寒徹骨。至德州，同行病者五六人，皆身熱無汗。遂用生石膏、粳米各十餘兩，飯甑煮爛熟，俾病者盡量飲其熱湯，皆周身得汗而愈，一時稱快。

瀋陽縣知事朱靄亭夫人，年五旬。於戊午季秋，得溫病甚劇。時愚初至奉天，求為診治。見其以冰囊作枕，復懸冰囊，貼面之上側。蓋從前求東人調治，如此治法，東人之所為也。合目昏昏似睡，大聲呼之，毫無知覺。其脈洪大無倫，按之甚實。愚謂靄亭曰「此病陽明腑熱，已至極點。外治以冰，熱愈內陷。然此病尚可為，非重用生石膏不可」。靄亭聽愚言，遂用生石膏細末四兩、粳米八錢，煎取清汁四茶杯，徐徐溫灌下。約歷十點鐘，將藥服盡，豁然頓醒。後又用知母、花粉、玄參、白芍諸藥，少加連翹以清其餘熱，服兩劑痊愈。靄亭喜甚，命其公子良佐，從愚學醫云。

【附錄】

江蘇崇明縣蔡維望來函：

季秋，敝處張氏之女得瘟病甚劇，服藥無效，醫言不治，病家以為無望。其母求人強僕往視，見其神昏如睡，高呼不覺，脈甚洪實。用先生所擬之石膏粳米湯，生石膏用三兩，粳米用五錢，見者莫不驚訝誹笑。且有一老醫揚言於人曰「蔡某年僅二十，看書不過年餘，竟大膽若此！石膏重用三兩，縱透用之亦不可，況生者乎？此藥下嚥，人即死矣」。有人聞此言，急來相告，僕曰「此方若用煨石膏，無須三兩，即一兩亦斷送人命而有餘。若用生者，即再多數兩亦無礙，況僅三兩乎」。遂急催病家購藥，親自監視，煎取清湯一大碗，徐徐溫灌下。病人霍然頓醒，其家人驚喜異常，直以為死後重生矣。繼而熱瘧流行，經僕重用生石膏治癒者不勝計。

【鎮逆白虎湯】

治傷寒、溫病邪傳胃腑，燥渴身熱，白虎證俱。其人胃氣上逆，心下滿悶者。生石膏（三兩，搗細）、知母（兩半）、清半夏（八錢）、竹茹粉（六錢）。用水五盅，煎汁三盅，先溫服一盅。病已愈者，停後服。若未痊愈者，過兩點鐘，再溫服一盅。

《傷寒論》白虎湯，治陽明腑熱之聖藥也。蓋外邪熾盛，勢若燎原，胃中津液，立就枯涸，故用石膏之辛寒以祛外感之邪，知母之涼潤以滋內耗之陰。特是石膏質重（雖煎作湯性亦下墜），知母味苦，苦降與重墜相並，下行之力速，胃腑之熱或難盡消，且恐其直趨下焦而為泄瀉也，故又借粳米之濃汁、甘草之甜味，緩其下趨之勢。以待胃中微絲血管徐徐吸去，由肺升出為氣，由皮膚滲出為汗，餘入膀胱為溺，而內蘊之熱邪隨之俱清，此仲景制方之妙也。然病有兼證，即用藥難拘成方。猶是白虎湯證也，因其人胃氣上逆，心下脹滿，粳米、甘草不可復用，而以半夏、竹茹代之，取二藥之降逆，以參贊石膏、知母成功也。

一婦人，年三十餘，得溫證。始則嘔吐，五六日間，心下滿悶，熱而且渴。脈洪滑有力，舌苔黃厚。聞其未病之先，曾有鬱怒未伸，因得斯證，俗名夾惱傷寒。然時當春杪，一得即不惡寒，乃溫病，非傷寒也。為疏此方，有一醫者在座，疑而問曰「此證因胃氣上逆作脹滿，始將白虎湯方，另為更定。何以方中不用開通氣分之藥，若承氣湯之用厚朴、枳實，而惟用半夏、竹茹乎」？答曰「白虎湯

用意，與承氣迥異。蓋承氣湯，乃導邪下行之藥，白虎湯乃托邪外出之藥，故服白虎湯後，多有得汗而解者。間有服後未即得汗，而大熱既消，其飲食之時，恆得微汗，餘熱亦由此盡解。若因氣逆脹滿，恣用破氣之藥，傷其氣分，不能托邪外出，將邪陷愈深，脹滿轉不能消，或更增劇。試觀《傷寒論》多有因誤下傷其氣分，成結胸，成心下痞硬證，不可不知也。再試觀諸瀉心，不輕用破氣之品，卻有半夏瀉心湯。又仲景治「傷寒解後，氣逆欲嘔」，有竹葉石膏湯，半夏與石膏並用。治「婦人乳、中虛、煩亂、嘔逆」，有竹皮大丸，竹茹與石膏並用，是半夏、竹茹善降逆氣可知也。今師二方之意，用之以易白虎湯中之甘草、粳米，降逆氣而不傷正氣，服後仍可托邪外出，由汗而解，而脹滿之證，亦即消解無餘。此方愚用之屢矣，未有不隨手奏效者。醫者聞言省悟，聽愚用藥，服後，病人自覺脹滿之處，如以手推排下行，病亦遂愈。

【白虎加人參以山藥代粳米湯】

治寒溫實熱已入陽明之府，燥渴嗜飲涼水，脈象細數者。

生石膏（三兩，搗細）、知母（一兩）、人參（六錢）、生山藥（六錢）、粉甘草（三錢）。

上五味，用水五盅，煎取清汁三盅，先溫服一盅。病癒者，停後服。若未痊癒者，過兩點鐘，再服一盅。至其服法詳細處，與仙露湯同。

按：傷寒法，白虎湯用於汗、吐、下後當加人參。究之脈虛者，即宜加之，不必在汗、吐、下後也。愚自臨證以來，遇陽明熱熾，而其人素有內傷，或元氣素弱，其脈或虛數，或細微者，皆投以白虎加人參湯。實驗既久，知以生山藥代粳米，則其方愈穩妥，見效亦愈速。蓋粳米不過調和胃氣，而山藥兼能固攝下焦元氣，使元氣素虛者，不至因服石膏、知母而作滑瀉。且山藥多含有蛋白之汁，最善滋陰。白虎湯得此，既祛實火，又清虛熱，內傷外感，須臾同愈。愚用此方救人多矣，略列數案於下，以資參考。

一叟，年近六旬，素羸弱，勞嗽，得傷寒證，三日，昏憤不知人。診其脈甚虛數，而肌膚烙手，確有實熱。知其脈虛證實，邪火橫恣，元氣又不能支持，故傳經猶未深入，而即昏憤若斯也。躊躇再四，乃放膽投以此湯。將藥煎成，乘熱徐徐灌之，一次只灌下兩茶匙。閱三點鐘，灌藥兩盅，豁然頓醒。再盡其餘，而病癒矣。

一叟，年六旬。素亦羸弱多病，得傷寒證，綿延十餘日。舌苔黃厚而乾，心中熱渴，時覺煩躁。其不煩躁之時，即昏昏似睡，呼之，眼微開，精神之衰憊可知。脈象細數，按之無力。投以涼潤之劑，因其脈虛，又加野臺參佐之。大便忽滑瀉，日下數次。因思此證，略用清火之藥，即滑瀉者，必其下焦之氣化不固。先用藥固其下焦，再清其上焦、中焦未晚也。遂用熟地黃二兩，酸石榴一個，連皮搗爛，同煎湯一大碗。分三次溫飲下，大便遂固。間日投以此方，將山藥改用一兩，以生地黃代知母，煎湯成，徐徐溫飲下，一次只飲藥一大口。閱八點鐘，始盡劑，病癒強半。翌日，又按原方，如法煎服，病又愈強半。第三日，又按其方服之，盡劑而愈。

按：熟地黃原非治寒溫之藥，而病至極危時，不妨用之，以救一時之急。故仲景治脈結代，有炙甘草湯，亦用乾地黃（即今生地），結代亦險脈也。如無酸石榴時，可用龍骨（搗）、牡蠣（搗）各五錢代之。

一叟，年六旬餘，素吸鴉片，羸弱多病，於孟冬感冒風寒，其脈微弱而浮。愚用生黃耆數錢，同表散之藥治之，得汗而愈。間日，因有緊務事，冒寒出門，汗後重感，比前較劇。病臥旅邸，不能旋里。因延彼處醫者診治，時身熱飲水，病在陽明之府。醫者因其脈微弱，轉進溫補，病益進。更延他醫，以為上有浮熱，下有實寒，用附子、吳茱萸，加黃連治之。服後，齒齦盡腫，且甚疼痛，時覺煩躁，頻頻飲水，不能解渴。不得已復來迎。愚至，診其脈細而數，按之略實，遂

投以此湯，加玄參六錢，以散其浮游之熱。一劑牙疼即愈，煩躁與渴亦見輕。翌日，用原方去玄參，將藥煎成，調入生雞子黃三枚，作三次溫飲下，大便秘通而愈。

一人，年二十，資稟素弱，偶覺氣分不舒，醫者用三稜、延胡等藥破之。自覺短氣，遂停藥不敢服。隔兩日，忽發喘逆，筋惕肉動，精神恍惚。脈數至六至，浮分搖搖，按之若無。肌膚甚熱，上半身時出熱汗，自言心為熱迫，甚覺怔忡。其舌上微有白苔，中心似黃。統觀此病情狀，雖陡發於一日，其受外感，已非一日。蓋其氣分不舒時，即受外感之時，特其初不自覺耳。為其怔忡太甚，不暇取藥，急用生雞子黃四枚，溫開水調和，再將其碗置開水盆中，候溫服之，喘遂止，怔忡亦見愈。繼投以此湯，煎汁一大碗，仍調入生雞子黃三枚，徐徐溫飲下。自晚十點鐘至早七點鐘，盡劑而病若失。因其從前服藥傷氣，俾用玄參一兩、潞參五錢，連服數劑以善其後。

一童子，年十七，於孟夏得溫證，八九日間，呼吸迫促，頻頻咳吐，痰血相雜。其咳吐之時，疼連胸脅，上焦微嫌發悶。診其脈，確有實熱，而數至七至，搖搖無根。蓋其資稟素弱，又兼讀書勞心，其受外感又甚劇，故脈象若是之危險也。為其胸脅疼悶兼吐血，遂減方中人參之半，加竹茹、三七（搗細沖服）各二錢。用三七者，不但治吐血，實又兼治胸脅之疼也。一劑血即不吐，諸病亦見愈，又服一劑痊愈。



一農家孺子，年十一。因麥秋農家忙甚，雖幼童亦作勞田間，力薄不堪重勞，遂得溫病，手足擾動，不能安臥，譫語不休，所言者皆勞力之事，晝夜目不能瞑。脈象雖實，卻非洪滑。擬投以此湯，又慮小兒少陽之體，外邪方熾，不宜遽用人參，遂用生石膏兩半、蟬蛻一錢，煎服後，諸病如故。復來詢方，且言其苦於服藥，昨所服者，嘔吐將半。愚曰「單用生石膏二兩，煎取清汁，徐徐溫飲之，即可不吐」。乃如言服之，病仍不愈。再為診視，脈微熱退，譫語益甚，精神昏昏，不省人事。急用野臺參兩半、生石膏二兩，煎汁一大碗，分數次溫飲下。身熱脈起，目遂得瞑，手足稍安，仍作譫語。又於原渣加生石膏、麥冬各一兩，煎汁二盅，分兩次溫飲下，降大便一次，其色甚黑，病遂愈。

按：此證若早用人參，何至病勢幾至莫救。幸即能省悟，猶能竭力挽回，然亦危而後安矣。愚願世之用白虎湯者，宜常存一加人參之想也。

又按：此案與前案觀之，凡用白虎湯而宜加人參者，不必其脈現虛弱之象也。凡諗知其人勞心過度，或勞力過度，或在老年，或有宿疾，或熱已入陽明之府，脈象雖實，而無洪滑之象，或脈有實熱，而至數甚數者，用白虎湯時，皆宜酌加人參。又寒溫證表裡皆虛，汗出淋漓，陽明胃腑，仍有實熱者，用此湯時，宜加龍骨、牡蠣。

一童子，年十六，於季冬得傷寒證，因醫者用發表藥太過，周身時時出汗，仍表裡大熱，心中怔忡，精神恍惚。脈象洪數，按之無力，遂用此湯，加龍骨、牡蠣（皆不煨）各一兩，煎汁一大碗，分數次溫飲下，盡劑而愈。

又仲景治傷寒脈結代者，用炙甘草湯，誠佳方也。愚治寒溫，若其外感之熱不盛，遇此等脈，即遵仲景之法。若其脈雖結代，而外感之火甚實者，亦用白虎加人參以山藥代粳米湯。曾治一叟，年六旬餘，於孟冬得傷寒證，五六日間，延愚診視。其脈洪滑，按之亦似有力。表裡俱覺發熱，間作呻吟，又兼喘逆，然不甚劇。投以白虎湯，一劑大熱稍減。再診其脈，或七八動一止，或十餘動一止，兩手皆然，而重按無力。遂於原方中加人參八錢，兼師炙甘草湯中用乾地黃之意，以生地代知母。煎汁兩盅，分二次溫飲下。脈即調勻，且較前有力，而熱仍如故。從前方中生石膏二兩遂加倍為四兩，煎汁一大碗，俾徐徐溫飲下，盡劑而愈。

按：治此證時，愚習用白虎湯，而猶未習用白虎湯加參也。自此以後，凡年過六旬之人，即脈甚洪實，用白虎湯時，亦必少加人參二三錢。

結代之脈雖並論，究之結脈輕於代脈，故結脈間有宜開通者。曾治一叟，年六十餘，大便下血，醫治三十餘日，病益進。日下血十餘次，且多血塊，精神昏憤。延為診視，脈洪實異常，至數不數，惟右部有止時，其止無定數，乃結脈也。其舌苔純黑，知係溫病大實之證。從前醫者，但知治其便血，不知治其溫病，可異也。投以白虎加人參以山藥代粳米湯，將石膏改用四兩，煎湯三盅，分三次溫

飲下，每次送服早三七細末一錢。如此日服一劑，兩日血止，大便仍滑瀉，脈象之洪實減半，而其結益甚，且腹中覺脹。詢其病因，知得諸惱怒之後，遂改用萊菔子六錢，而佐以白芍、滑石、花粉、茅根、甘草諸藥，一劑脹消。脈之至數調勻，仍稍有洪實之象，滑瀉亦減。再投以加味天水散，一劑瀉止，脈亦平和。

寒溫之證，最忌舌乾，至舌苔薄而乾，或乾而且縮者，尤為險證。而究其原因，卻非一致。有因真陰虧損者，有因氣虛不上潮者，有因氣虛更下陷者，皆可治以白虎加人參以山藥代粳米湯。蓋人參之性，大能補氣，元氣旺而上升，自無下陷之虞。而與石膏同用，又大能治外感中之真陰虧損，況又有山藥、知母，以濡潤之乎！若脈象虛數者，又宜多人參，減石膏一兩，再加玄參、生地滋陰之品。煎汁三四茶盅，徐徐溫飲下，一次只飲一大口，防其寒涼下侵致大便滑瀉。又欲其藥力息息上達，助元氣以生津液，飲完一劑，再煎一劑，使藥力晝夜相繼，數日舌潤火退，其病自愈。

一人年二十餘，素勞力太過，即覺氣分下陷，一歲之間，為治癒三次。至秋杪感冒時氣，胸中煩熱滿悶，燥渴引飲，滑瀉不止，微兼喘促。舌上無苔，其色鮮紅，兼有砂粒。延醫調治，投以半補半破之劑，意欲止其滑瀉兼治其滿悶也。服藥二劑，滑瀉不止。後愚為診視，其脈似有實熱，重按無力。遂先用拙擬加味天水散（在第三卷）止其滑瀉。方中生山藥用兩半，滑石用一兩，一劑瀉止。繼服滋陰清火之劑，數劑喘促亦愈，火亦見退。唯舌乾連喉，幾不能言，頻頻飲水，

不少濡潤，胸中仍覺滿悶。愚恍悟曰「此乃外感時氣，挾舊病復發，故其脈象雖熱，按之不實。其舌乾如斯者，津液因氣分下陷而不上潮也。其胸中滿悶者，氣分下陷，胸中必覺短氣，病人不善言病情，故漫言滿悶也」。此時大便不行已五日，遂投以白虎加人參以山藥代粳米湯，一劑病癒十之七八，而舌之乾亦減半。又服一劑，大便得通，病覺痊愈。舌上仍無津液，又用潞參一兩、玄參兩半，日服一劑，三日後舌上津液滋潤矣。

一童子，年十三，於孟冬得傷寒證，七八日間，喘息鼻煽動，精神昏憤，時作譫語，所言者皆勞力之事，其脈微細而數，按之無力。欲視其舌，乾縮不能外伸，啟齒探視，舌皮有癍點作黑色，似苔非苔，頻飲涼水，毫無濡潤之意。愚曰「此病必得之勞力之餘，胸中大氣下陷，故津液不能上潮，氣陷不能托火外出，故脈道瘀塞。不然，何以脈象若是，恣飲涼水而不滑瀉乎？」遂治以白虎加人參以山藥代粳米湯，煎汁一大碗，徐徐溫飲下，一晝夜間連進一劑，其病遂愈。

按：脈虛數而舌乾者，大便雖多日不行，斷無可下之理，即舌苔黃而且黑亦不可下。惟按上所載治法，使其大便徐徐自通，方為穩善。若大便通後，而火猶熾，舌仍乾者，可用潞參一兩、玄參二兩煮汁，徐徐飲之，以舌潤火退為度。若或因服藥失宜，大便通後，遂滑瀉，其虛火上逆，舌仍乾者，可用拙擬滋陰固下湯（在第五卷）去滑石，加沙參數錢。若其為日既久，外感之火全消，而舌乾神昏，或呼吸之間，常若氣不舒，而時作太息者，此大氣因服藥下陷，病雖愈而不

能自復也。宜單用人參兩許煎湯服之，或少加柴胡亦可（此證有案在第四卷升陷湯下宜參觀）。若微有餘熱，可加玄參佐之。

寒溫下後不解，醫者至此，恆多束手。不知《傷寒論》原有治此證的方，即白虎加人參湯也。其一百六十八節云「傷寒病，若吐、若下後，七、八日不解，熱結在裡，表裡俱熱，時時惡風，大渴、舌上乾燥而煩，欲飲水數升者，白虎加人參湯主之」。愚生平治寒溫，未有下後不解者，於仙露湯後曾詳論之。然恆有經他醫下後不解，更延愚為診治者，其在下後多日，大便未行，脈象不虛弱者，即按《傷寒論》原方。若在甫下之後，或脈更兼虛弱，即以山藥代粳米，或更以生地代知母，莫不隨手奏效。蓋甫下之後，大便不實，驟用寒涼，易至滑瀉。而山藥收澀，地黃粘潤，以之代粳米、知母，實有固下之力，而於脈之兼虛弱者，則尤宜也。況二藥皆能滋真陰，下後不解，多係陰分素虛之人，陰分充足，自能勝外感之餘熱也。

寒溫之證，過十餘日大熱已退，或轉現出種種危象，有宜單治以人參，不必加人參於白虎湯中者。王宇泰曰「余每治傷寒溫熱等證，為庸醫妄汗、誤下已成壞證，危在旦夕者，以人參二兩，童子小便煎之，水浸冰冷，飲之立效」。又張致和曾治一傷寒壞證，勢近垂危，手足俱冷，氣息將斷，用人參一兩、附子一錢，於石銚內煎至一碗，新汲水浸之冰冷，一服而盡。少頃病人汗出，鼻樑尖上涓涓如水。蓋鼻樑應脾，若鼻端有汗者可救，以土在人身之中周遍故也。

又愚曾治一溫證，已過兩旬，周身皆涼，氣息奄奄，確知其因誤治，胸中大氣下陷。遂用人參一兩、柴胡二錢，作湯灌之，兩劑痊愈。此證詳案，在拙擬升陷湯（在第四卷）下可參觀。

白虎湯加人參，又以山藥代粳米，既能補助氣分托邪外出，更能生津止渴，滋陰退熱，洵為完善之方。間有真陰太虛，又必重用滋陰之藥以輔翼之，始能成功者。

一媪，年過七旬，於孟夏得溫證，五六日間，身熱燥渴，精神昏憤，舌似無苔，而舌皮數處作黑色，乾而且縮，脈細數，按之無力。當此高年，審證論脈，似在不治。而愚生平臨證，明明見不可治之證，亦必苦心研究而設法治之，此誠熱腸所迫，不能自己，然亦往往多有能救者。躊躇再四，為疏兩方。一方即白虎加人參以山藥代粳米湯，一方用熟地黃二兩，生山藥、枸杞各一兩，真阿膠（不炒）五錢，煎湯後，調入生雞子黃四枚。二方各煎汁一大碗，徐徐輪流溫服，閱十點鐘，盡劑而愈。自言從前服藥，皆不知覺，此時則猶如夢醒。視其舌上猶乾黑，然不縮矣。其脈至數仍數，似有餘熱。又用玄參二兩、潞參一兩煎湯一大碗，徐徐溫服，一日一劑，兩日大便秘通。再視其舌，津液滿佈，黑皮有脫去者矣。隔數日，其夫年與相等，亦受溫病。四五日間，煩熱燥渴，遣人於八十里外致冰一擔，日夜食之，煩渴如故。復迎愚診治，其脈洪滑而長，重按有力，舌苔白厚，中心微黃，知其年雖高而火甚實也。遂投以白虎加人參以山藥代粳米湯，將方中

石膏改用四兩，連進兩劑，而熱渴俱愈。其家人疑而問曰「此證從前日食冰若干，熱渴分毫不退，今方中用生石膏數兩，連進兩劑而熱渴俱愈，是石膏之性涼於冰遠矣」。愚曰「非也。石膏原不甚涼，然盡量食冰不愈而重用生石膏即愈者，因石膏生用能使寒溫之熱有出路也。西人不善治寒溫，故遇寒溫實熱證最喜用冰，然多有不愈者。至石膏生用，性能發汗，其熱可由汗解。即使服後無汗，亦可宣通內蘊之熱，由腠理毛孔息息達出，人自不覺耳」。

按：此證與前證，年歲同，受病之時亦同，而一則輔以熟地、枸杞之類，以滋真陰；一則重加生石膏，以清大熱，此乃隨病、脈之虛實，活潑加減，所以投之輒效也。

又按：用熟地治寒溫，恒為醫家所訾。然遇其人真陰太虧，不能支持外感之熱者，於治寒溫藥中，放膽加熟地以滋真陰，恒能挽回人命於頃刻。曾治一室女，資稟素羸弱，得溫病五六日，痰喘甚劇，治以《金匱》小青龍湯加石膏，一劑喘頓止。時屆晚八點鐘，一夜安穩，至寅時喘復作，不若從前之劇，而精神恍惚，心中怔忡。再診其脈，如水上浮麻不分至數，按之即無，此將脫之候也。取藥不暇，幸有預購山藥兩許，急煎服之，病少愈。此際已疏方取藥，方係熟地四兩，生山藥一兩，野臺參五錢，而近處藥房無野臺參，並他參亦鬻盡，再至他處，又恐誤事，遂單煎熟地、山藥飲之，病癒強半。一日之內，按其方連進三劑，病遂痊愈。

按：此證原當用拙擬來復湯（在第一卷），其方重用山萸肉以收脫，而當時愚在少年，其方猶未擬出，亦不知重用萸肉，而自晨至暮，共服熟地十二兩，竟能救此垂危之證，熟地之功用誠偉哉。又此證初次失處，在服小青龍湯後，未用補藥。愚經此證後，凡遇當用小青龍湯而脈稍弱者，服後即以補藥繼之，或加人參於湯中，恐其性熱，可將所加之石膏加重。

又按：張氏《八陣》、趙氏《醫貫》、馮氏《錦囊》皆喜重用熟地，雖外感證亦喜用之，其立言誠有偏處。然當日必用之屢次見效，而後筆之於書。張氏書中載有治一老年傷寒，戰而不汗，翌日屆其時，猶有將汗之意。急與一大劑八味地黃湯以助其汗。服後，遂得大汗，閱數時周身皆涼，氣息甚微，汗猶不止。精神昏昏，復與原湯一劑，汗止而精神亦復。夫用其藥發，即用其藥止汗，運用之妙，頗見慧心。又趙氏書中謂「六味地黃湯能退寒溫之實熱」，致貽後世口實，然其言亦非盡不驗。憶昔乙酉、丙戌數年間之寒溫病，熱入陽明府後，凡於清解藥中，能重用熟地以滋陰者，其病皆愈，此乃時氣運使然，不可筆之於書以為定法也。又馮氏所著本草，謂熟地能大補腎中元氣，此亦確論。凡下焦虛損，大便滑瀉，服他藥不效者，單服熟地即可止瀉。然須日用四五兩，煎濃湯服之亦不作悶（熟地少用則作悶，多用轉不悶），少用則無效，又善治勞嗽氣不歸根。曾治一媪，勞喘甚劇，十年未嘗臥寢。俾每日用熟地煎湯，當茶飲之，數日即安臥。其家反懼甚，以為如此改常恐非吉兆，而不知其病之愈也。由是觀之，熟地能補腎中元氣可知。至陳修園則一概抹倒，直視熟地為不可用，豈能知熟地哉。寒溫



傳裡之後，其人下焦虛憊太甚者，外邪恒直趨下焦作泄瀉，亦非重用熟地不能愈。歲在癸巳，應試都門，曾謁一部郎，其家有女僕，年三十餘，得溫病十餘日，勢至垂危，將昇於外，問還有治否？因為診視，其證晝夜泄瀉，昏不知人，呼之不應，其脈數至七至，按之即無，而卻無大熱。遂用熟地二兩，生山藥、生杭芍各一兩，甘草三錢，煎湯一大碗，趁熱徐徐灌之，盡劑而愈。

至產後之證，忌用寒涼。而果係產後溫證，心中燥熱，舌苔黃厚，脈象洪實，亦宜投以白虎加人參以山藥代粳米湯，而更以玄參代知母則尤妥善。蓋愚於產後溫證之輕者，其熱雖入陽明之府，脈象不甚洪實，恒重用玄參一兩或至二兩，輒能應手奏效，若係劇者，必白虎加人參以山藥代粳米湯，而更以玄參代知母方能有效。誠以石膏、玄參《本經》皆明載其治產乳，故於產後溫病之輕者，可單用玄參，至溫病之劇者，不妨石膏、玄參並用也。然用石膏必須佐以人參，因其時當產後，其熱雖實，而體則虛也。不用知母者，《本經》未載其治產乳，不敢師心自用，漫以涼藥治產後也。

友人吳瑞五，深通醫學，尤篤信《衷中參西錄》諸方，用之輒能奏效。其侄文博亦知醫，有戚家延之治產後病。臨行瑞五囑之曰「果係產後溫熱，陽明胃腑大實，非用《衷中參西錄》中白虎加人參以山藥代粳米湯，更以玄參代知母不可」。及至診之，果係產後溫證，病脈皆甚實。文博遵所囑，開方取藥，而藥坊皆不肯

與，謂產後斷無用生石膏之理。病家因此生疑，文博辭歸。病家又延醫治數日，病勢垂危，復求為診治。攜藥而往，如法服之，一劑而愈。

憶五年前，族家姊，年七旬有三，忽得癱瘓證，迎愚診視。既至見有醫者在座。用藥一劑，其方係散風補氣理痰之品，甚為穩善，愚亦未另立方。翌日，脈變洪長，知其已成傷寒證。先時，愚外祖家近族有病者，訂於斯日迎愚，其車適至，愚將行，謂醫者曰「此證乃癱瘓基礎預伏於內，今因傷寒而發，乃兩病偕來之證。然癱瘓病緩，傷寒病急，此證陽明實熱，已現於脈，非投以白虎加人參湯不可，君須放膽用之，斷無差謬。後醫者終畏石膏寒涼，又疑癱瘓證不可輕用涼藥。遲延二日，病勢垂危，復急迎愚。及至，則已夜半矣。診其脈，洪而且數，力能搏指，喘息甚促，舌強直，幾不能言。幸喜藥坊即在本村，急取白虎加人參湯一劑，方中生石膏用三兩，煎湯兩盅，分二次溫飲下，病稍愈。又單取生石膏四兩，煮汁一大碗，亦徐徐飲下，至正午盡劑而愈，後癱瘓證調治不愈，他醫竟歸咎於愚，謂從前用過若干石膏，所以不能調治。吁！年過七旬而癱瘓者，愈者幾人？獨不思愚用石膏之時，乃挽回已盡之人命也。且《金匱》治熱癱瘓，有風引湯，原石膏與寒水石並用，彼謗愚者，生平蓋未見《金匱》也。

嘗治一少年，素羸弱多病，於初夏得溫證，表裡俱熱，延醫調治不愈。適愚自他處治病歸，經過其處，因與其父素稔，入視之。其脈數近六至，雖非洪滑鼓指，而確有實熱，舌苔微黃，雖不甚乾，毫無津液。有煎就藥一劑未服，仍係發

表之劑，乃當日診治所疏方，其醫則已去矣。愚因謂其父曰「此病外感實熱，已入陽明之府。其脈象不洪滑者，元氣素虛故也。陽明府熱之證，斷無發表之理。況其脈數液短，兼有真陰虛損之象，尤忌發汗乎」。其父似有會悟，求愚另為疏方，本擬用白虎加人參湯，又思用人參，即須多用石膏，其父素小心過度，又恐其生疑不敢服，遂但為開白虎湯，方中生石膏用二兩，囑其煎汁兩茶盅，分二次溫飲下，服後若餘火不淨，仍宜再服清火之藥。言畢，愚即旋里。後聞其服藥後，病亦遂愈。遲十餘日，大便又燥結，兩腿微腫，將再迎愚診治，而其父友人有自謂知醫者，言其腿腫，係多服生石膏之過，而孰知係服石膏猶少之過哉！病家竟誤聽其言，改延他醫，投以大劑承氣湯，服後其人即不語矣，遷延數日而亡。夫自謂知醫者，不過欲炫己之長，而妄指他人之短。豈知其言之一出，即足誤人性命哉！

【附錄】

滄縣董壽山來函：

邑趙家莊趙紹文，患溫病。醫者投以桂枝湯，覺熱渴氣促。又與柴胡湯，熱尤甚，且增喘嗽，頻吐痰涎，不得臥者六七日。醫者謂病甚重，不能為矣。舉家聞之，惶恐無措。伊弟紹義延為診治。既至，見病人喘促肩息，頭汗自出，表裡皆熱，舌苔深灰，縮不能言，急診其脈，浮數有力，重按甚空。因思此證陽明熱極，陰分將竭，實為誤服桂枝、柴胡之壞證。急投以白虎加人參以山藥代粳米湯，

更以玄參代知母。連服兩劑，渴愈喘止，脈不浮數，仍然有力，舌伸能言，而痰嗽不甚見輕。繼投以從龍湯，去蘇子，加人參四錢，天冬八錢，服七劑痊愈。

又一趙姓婦，年二十餘，產後八九日，忽得溫病。因誤用熱藥發汗，致熱渴喘促，舌苔乾黑，循衣摸床，呼索涼水，病家不敢與。脈弦數有力，一息七至。急投以白虎加人參以山藥代粳米湯，為係產後，更以玄參代知母。方中生石膏，重用至四兩。又加生地、白芍各數錢。煎湯一大碗，分四次溫飲下，盡劑而愈。當時有知醫者在座，疑而問曰「產後忌用寒涼，何以如此放膽，重用生石膏？且知母、玄參皆係寒涼之品，何以必用玄參易知母」？答曰「此理俱在《衷中參西錄》中」，遂於行篋中出書示知，醫者細觀移時，始喟然歎服。

又外祖家表妹，因產後病溫，服補藥二十餘劑，致大熱、大渴、大汗，屢索涼水。醫者禁勿與飲，急欲投井。及生視之，舌黑唇焦，目睛直視，譫語發狂。診其脈，細數有力。問其小便赤澀，大便紫黑粘滯，不甚通利。蓋以產後血虛，又得溫病，兼為補藥所誤，以致外邪無由而出，內熱如焚，陰血轉瞬告罄，急投以白虎加人參湯，仍用山藥、玄參代粳米、知母。服後，一夜安穩。黎明，旋又反覆，熱渴又如從前。細思產後血室空虛，邪熱乘虛而入，故大便紫黑，宜調以桃仁承氣湯，以下其瘀血，邪熱當隨之俱下。因小便赤澀，膀胱蓄熱，又加滑石四錢，甘草錢半。乃開藥局者係其本族，謂此藥斷不可服。病家疑甚，復延前醫相質。前醫謂「此病余連治三次，投以溫補藥轉劇，昨服白虎加人參湯，既稍見

輕，想服承氣湯亦無妨也」。病家聞之，始敢煎服。因方中大黃重用六錢，俾煎湯一盅半，分三次溫飲下。逾三點鐘，降下大便如膠漆者二次，鮮紅色者一次，小便亦清利，脈淨身涼而愈。

王禦史莊趙希賢之子，年十九歲，偶得溫病，醫者下之太早，大便轉不通者十八日，熱渴喘滿，舌苔乾黑，牙齦出血，目盲譫語，腹脹如鼓，臍突出二寸，屢治不效。忽大便自利，完穀不化，隨食隨即瀉出。診其脈，盡伏，身冷厥逆，氣息將無。乍臨茫然不知所措，細詢從前病狀及所服之藥，始悟為陽極似陰，熱深厥亦深也。然須用藥將其滑瀉止住，不復熱邪旁流，而後能治其熱厥。遂急用野臺參三錢，大熟地、生山藥、滑石各六錢。煎服後，瀉止脈出，洪長滑數，右部尤甚。繼擬以大劑白虎加人參湯，生石膏重用至八兩，竟身熱厥回，一夜甚安。至明晨，病又如故，試按其腹中，有堅塊，重按眉皺似疼，且其腹脹臍突若此，知其內有燥糞甚多，遂改用大黃一兩，芒硝六錢，赭石、萸仁各八錢，煎湯一大盅，分兩次溫飲下，下燥糞二十七枚而愈。

奉天鐵嶺楊鴻恩來函：

本村張氏婦，得溫病，繼而小產，猶不以為意。越四五日，其病大發。遍請醫生，均謂瘟病小產，又兼邪熱太甚，無方可治。其夫造門求為診治，生至其家，見病人目不識人，神氣恍惚，渴嗜飲水，大便滑瀉，脈數近八至，且微細無力，舌苔邊黃中黑，縮不能伸。為其燥熱，又兼滑瀉，先投以滋陰清燥湯，一劑瀉止，

熱稍見愈。繼投以大劑白虎加人參以山藥代粳米湯，為其產後，以玄參代知母，為其舌縮脈數，陰分大虧，又加枸杞、生地。煎湯一大碗，調入生雞子黃三枚，分數次徐徐溫飲下。精神清爽，舌能伸出，連服三劑痊愈。

【寧嗽定喘飲】

治傷寒溫病，陽明大熱已退，其人或素虛或在老年，至此益形怯弱，或喘，或嗽，或痰涎壅盛，氣息似甚不足者。

生懷山藥（兩半）、甘蔗自然汁（一兩）、酸石榴自然汁（六錢）、生雞子黃（四個）。

先將山藥煎取清湯一大碗，再將餘三味調入碗中，分三次溫飲下，約兩點鐘服一次。若藥已涼，再服時須將藥碗置開水中溫之。然不可過熱，恐雞子黃熟，服之即無效。

一 周姓叟，年近七旬，素有勞疾，且又有鴉片嗜好，於季秋患溫病，陽明府熱熾盛，脈象數而不實，喘而兼嗽，吐痰稠粘。投以白虎加人參湯，以生山藥代粳米，一劑，大熱已退，而喘嗽仍不愈，且氣息微弱，似不接續，其家屬惶恐，以為難愈，且言如此光景，似難再進藥。愚曰「勿須用藥，尋常服食之物即可治癒矣」。為開此方，病家視之，果係尋常食物，知雖不對證，亦無妨礙，遂如法服之，二劑痊愈。

【蕩胸湯】

治寒溫結胸，其證胸膈痰飲，與外感之邪互相凝結，上塞咽喉，下滯胃口，呼吸不利，滿悶短氣，飲水不能下行，或轉吐出，兼治疫證結胸。

葶仁（二兩，新炒者搗）、生赭石（二兩，研細）、蘇子（六錢，炒搗）、芒硝（四錢，沖服）。

用水四盅，煎取清汁兩盅，先溫服一盅。結開，大便通行，停後服。若其胸中結猶未開，過兩點鐘，再溫服一盅。若胸中之結已開，而大便猶未通下，且不覺轉矢氣者，仍可溫服半盅。

傷寒下早成結胸，至溫病未經下者，亦可成結胸，至疫病自口鼻傳入，遇素有痰飲者，其疹癘之氣，與上焦痰飲，互相膠漆，亦成結胸。《傷寒論》陷胸湯、丸三方，皆可隨證之輕重高下借用。特是大陷胸湯、丸中皆有甘遂，世俗醫者，恆望而生畏。至小陷胸湯，性雖平和，又有吳又可瘟疫忌用黃連之說存於胸中，遂亦不肯輕用。及遇此等證，而漫用開痰、破氣、利濕之品，若橘紅、萊菔、蒼朮、白芥、茯苓、厚朴諸藥，彙集成方，以為較陷胸諸湯、丸穩，而且病家服之，以為藥性和平，坦然無疑。不知破其氣而氣愈下陷，利其濕而痰愈稠粘，如此用藥，真令人長太息者也。愚不得已，將治結胸諸成方變通薈萃之，於大陷胸湯中取用芒硝，於小陷胸湯中取用薈實，又於治心下痞硬之旋復代赭石湯中取用赭石，



而復加蘇子以為下行之嚮導，可以代大陷胸湯、丸。少服之，亦可代小陷胸湯。非欲與《傷寒論》諸方爭勝也，亦略以便流俗之用云爾。

一媪，年六十餘。當孟夏晨飯之際，忽聞鄉鄰有斗者，出視之，見強者凌弱太甚，心甚不平，又兼飯後有汗受風，遂得溫證，表裡俱熱，胃口杜塞，腹中疼痛，飲水須臾仍吐出。七八日間，大便不通，其脈細數，按之略實。自言心中燥渴，飲水又不能受，從前服藥止吐，其藥亦皆吐出，若果能令飲水不吐，病猶可望愈。愚曰「易耳」。為開此湯，加生石膏二兩、野臺參五錢，煎湯一大碗，分三次溫飲下。晚間服藥，翌晨大便得通而愈。當大便未通時，曾俾用山萸肉（去淨核）二兩煎湯，以備下後心中怔忡及虛脫，及大便通後，微覺怔忡，服之即安。

一室女得溫病。兩三日間，痰涎鬱塞，胸膈滿悶異常，頻頻咳吐，粘若膠漆，且有喘促之意，飲水停滯胃口，間或吐出，其脈浮滑。問之微覺頭疼，知其表證猶未罷也。遂師河間雙解散之意，於蕩胸湯中加連翹、蟬蛻各三錢。服後微汗，大便得通而愈。

一室女，於中秋節後，感冒風寒。三四日間，胸膈滿悶，不受飲食，飲水一口亦吐出，劇時，恒以手自撓其胸。其脈象滑實，右部尤甚。本擬用蕩胸湯，恐其聞藥味嘔吐（蕩胸湯中不用大黃者，為其氣濃味苦。嘔吐者不待藥力施行即吐出。然仍不如單用赭石更穩妥），遂單用赭石兩半，煎湯飲下，頓飯頃，仍吐出。蓋其胃口皆為痰涎壅滯，僅用赭石兩半，藥不勝病，下行不通，復轉而吐出也。

又用赭石四兩，煎湯一大碗，分三次，陸續溫飲下。胸次雖通，飲水不吐，翌日脈變洪長，其舌苔從前微黃，忽改黑色。遂重用白虎湯，連進兩劑，共用生石膏半斤，大便得通而愈。

一童子，年十四歲，得溫病。六七日間胸膈痰涎壅滯，劇時杜塞咽喉，兩目上翻，身軀後挺，有危在頃刻之勢。其脈關前洪滑有力。其家固設有藥坊，愚因謂其父曰「此病雖劇，易治耳」。用新炒萆仁四兩（用新炒者，取其氣香）搗碎，煮湯一大碗，分兩次服下即愈矣。蓋彼時蕩胸湯，猶未擬出也。其家人聞愚言，私相計曰「如此重病，而欲用藥一味治癒之，先生果神仙乎」？蓋譽之而實疑之也。其父素曉醫理，力主服之，盡劑而愈。隔數日，其鄰家童子亦患此證，用新炒萆仁三兩，蘇子五錢，亦一劑而愈。

奉天鼓樓南，連奉澡塘曲玉軒得溫病。噁心嘔吐，五日不能飲食，來院求為診治，其脈浮弦，數近六至，重按無力，口苦心熱，舌苔微黃。因思其脈象浮弦者，少陽、陽明二經之氣化挾溫熱之氣上逆也。按之無力者，吐久不能飲食，缺乏水穀之氣也。至數近六至者，熱而兼虛，故呈此數象也。因思石膏之性能清熱鎮逆，且無臭味，但以之煮水飲之，或可不吐。遂用生石膏細末兩半，煎湯兩茶杯，分二次溫飲下。初次飲未吐，至二次仍吐出，病人甚覺惶恐，加以久不飲食，幾難支持。愚曰「勿恐。再用藥末數錢，必然能止嘔吐。遂單用生赭石細末四錢，俾以開水送下，須臾覺噁心立止，胸次通暢，饑而思食。遂食薄粥一甌，覺下行

順利，從此不復嘔吐，而心中猶覺發熱，舌根腫脹，言語不利，遂用生石膏一兩，丹參、乳香、沒藥、連翹各三錢，兩劑而愈。

奉天大東關安靴鋪，安顯之夫人，年四十許。臨產雙生，異常勞頓。噁心嘔吐，數日不能飲食，精神昏瞶，形勢垂危，群醫辭不治，延為診視。其脈洪實，面有火色，舌苔厚而微黃。愚曰「此產後溫也。其嘔吐若是者，乃陽明熱實，胃腑之氣上逆也」。投以生赭石、玄參（《本經》謂玄參主產乳）各一兩，一劑而嘔吐止，可進飲食。繼仍用玄參同白芍、連翹以清其餘熱，遂痊愈。

【一味萊菔子湯】

治同前證。

萊菔子（生者一兩，熟者一兩）。

共搗碎，煎湯一大茶杯，頓服之。

奉天煙酒公賣局科員許壽庵，年二十餘，得溫病。三四日覺中脘鬱結，飲食至其處不下行，仍上逆吐出。來院求為診治。其脈沉滑而實，舌苔白而微黃。表裡俱覺發熱，然不甚劇。自言素多痰飲，受外感益甚，因知其中脘之鬱結，確係外感之邪與痰飲相凝滯也。先投以蕩胸湯，兩點鐘後，仍復吐出。為擬此方，一劑結開，可受飲食，繼投以清火理痰之品，兩劑痊愈。

按：此證若服蕩胸湯，將方中赭石細末留出數錢，開水送下，再服湯藥亦可不吐，其結亦必能開，非萊菔子湯之力勝於蕩胸湯也，而試之偶效，尤必載此方者，為藥性較蕩胸湯尤平易，臨證者與病家，皆可放膽用之而無疑也。若此方不效者，亦可改用蕩胸湯，先將赭石細末送下數錢之法。

【鎮逆承氣湯】

治寒溫陽明府實，大便燥結，當用承氣下之，而嘔吐不能受藥者。

芒硝（六錢）、赭石（二兩，研細）、生石膏（二兩，搗細）、潞黨參（五錢）。

上藥四味，用水四盅，先煎後三味，湯將成，再加芒硝，煎一兩沸，取清汁二盅，先溫服一盅。過三點鐘，若腹中不覺轉動，欲大便者，再溫服餘一盅。

一鄰婦，年二十餘，得溫病已過十日，上焦燥熱，嘔吐，大便燥結，自病後未行。延醫數次服藥皆吐出。適愚自他處歸，診其脈，關前甚洪實，一息五至餘，其脈上盛於下一倍，所以作嘔吐。其至數者，吐久傷津液也。為擬此湯，一劑熱退嘔止，大便得通而愈。

或問「此證胃腑熱實大腸燥結，方中何以復用黨參」？答曰「此證多有嘔吐甚劇，並水漿不能存者，又有初病即嘔吐，十數日不止者，其胃氣與胃中津液，必因嘔吐而大有傷損，故用黨參補助胃中元氣，且與涼潤之石膏並用，大能滋胃中津液，俾胃中氣足液生，自能運轉藥力下至魄門以通大便也。愚用此方救人多矣，果遇此等證，放膽投之，無不效者」。

一人，年四十許。二便不通，嘔吐甚劇，不受飲食，請人詢方。疑係外感之熱所致，問其心中發熱否？言來時未嘗言及。遂為約略疏方，以赭石二兩以止其嘔吐，生杭芍一兩以通小便，芒硝三錢以通大便。隔日，其人復來，言服後嘔吐

即止，二便亦通，此時心中發熱且渴如故，既曰如故，是其從前原有熱渴之病，陽明之腑證已實，特其初次遣人未嘗詳言也。投以大劑白虎加人參湯，一劑而愈。

按：此證亦鎮逆承氣湯證，因其證兩次始述明，遂致將方中藥品前後兩次分用之，其病亦即前後兩次而愈矣。

〈 第 七 卷 〉

治瘟疫瘧疹方

【青孟湯】

治瘟疫表裡俱熱，頭面腫疼，其腫或連項及胸，亦治陽毒發斑疹。

荷葉（一個用周遭邊浮水者良，鮮者尤佳）、生石膏（一兩，搗細）、真羚羊角（二錢，另煎兌服）、知母（六錢）、蟬蛻（三錢，去足土）、殭蠶（二錢）、金線重樓（二錢，切片）、粉甘草（錢半）。

荷葉稟初陽上升之氣，為諸藥之舟楫，能載清火解毒之藥上至頭面，且其氣清鬱，更能解毒逐穢，施於疫毒諸證尤宜也。至於葉宜取其浮水者，以貼水而生，得水面輕氣最多，故善發表。如浮萍之生於水面，而善發汗也。

金線重樓，一名蚤休，一名紫河車草，味甘而淡，其解毒之功，可仿甘草。然甘草性溫，此藥性涼，以解一切熱毒，尤勝於甘草，故名蚤休。言若中一切蠱毒，或蠍螫蛇咬、或瘡瘍用之而皆可早早止住。古蚤與早，原相通也。古諺贊蚤休曰「七葉一枝花，深山是我家。癰疽遇著我，一似手捻拿」，蓋此物七葉對生莖腰，狀如蓮花一朵，自葉中心出莖，至巔開花一朵，形扁而黃，花上有黃絲下垂，故又名金線重樓。重樓者，其葉與花似各作一層也。其名紫河車草者，蓋紫河為初生之地點，其處蕃多，可採之盈車，俗名為草河車誤矣。其形狀皮色皆如乾薑。若皮不黃，而微帶紫色者，其味必微辣而不甘，含毒性，即不可用。若無佳者，方中不用此味亦可。



羚羊角與犀角，皆性涼而解毒，然犀稟水土之精氣而生，為其稟土之精，故能入胃，以消胃腑之實熱。為其稟水之精，故又能以水勝火兼入心中，以消心臟本體之熱力。而疫邪之未深入者，轉因服犀角後，心氣虛冷，不能捍御外邪，致疫邪之恣橫，竟犯君主之宮，此至緊要之關係，醫者不可不知。羚羊角善清肝膽之火，兼清胃腑之熱。其角中天生木胎，性本條達，清涼之中，大具發表之力。與石膏之辛涼，荷葉、連翹之清輕升浮者並用，大能透發溫疫斑疹之毒火鬱熱，而頭面腫處之毒火鬱熱，亦莫不透發消除也。曾治一六歲孺子，出疹三四日間，風火內迫，喘促異常，單投以羚羊角三錢，須臾喘止，其疹自此亦愈。夫疹之毒熱，最宜表散清解，乃至用他藥表散清解無功，勢已垂危，而單投以一味羚羊角，即能挽回，其最能清解而兼能表散可知也。且其能避蠱毒，《本經》原有明文。疫病發斑，皆挾有毒癘之氣也。

殭蠶乃蠶將脫皮時，因受風不能脫下，而僵之蠶。因其病風而僵，故能為表散藥之嚮導，而兼具表散之力。是以痘疹不出者，殭蠶最能表出之。不但此也，殭蠶僵而不腐，凡人有腫疼之處，恐其變為腐爛，殭蠶又能治之，此氣化相感之妙也。疫與寒溫不同，寒溫者，感時序之正氣。因其人衛生之道，於時序之冷暖失宜，遂感其氣而為病。其病者，偶有一二人，而不相傳染。疫者，感歲運之戾氣，因其歲運失和，中含毒氣，人觸之即病。《內經》〈刺法論〉所謂無問大小，病狀相似者是也。其病者，挨戶挨村，若搖役然，故名曰疫，且又互相傳染也。

《內經》〈本病論〉有五疫之名，後世約分為寒疫、溫疫。治溫疫，世習用東垣普濟消毒飲。治寒疫，世習用巢谷世聖散子。然溫疫多而寒疫少，拙擬之清孟湯，實專為治溫疫設也。

病疫相傳染者，以其氣自口鼻而人也。其初瀰漫於上焦，或煩熱頭疼，外薄於營衛，或身熱無汗，與溫病初得者相似。然溫病初得，用辛涼解肌即可，若疫病，則必須兼用解毒之藥。至其傳經已深，所現之證有與寒溫相似者，皆可用治寒溫之藥治之，然始終宜佐以解毒之藥。究之其變證多端，萬言難罄，方書中惟喻氏《醫門法律》、陸氏《世補齋》論之甚詳，今錄二家之說於下，以備參考。

喻嘉言曰「聖王禦世，春無愆陽，夏無伏陰，秋無淒風，冬無苦雨。乃至民無夭札，物無疵癘，太和之氣彌漫乾坤，安有所謂瘟疫哉。然而《周禮》『籩以逐疫，方氏掌之』，則瘟疫之由來，古有之矣。鄉人籩，孔子朝服而致其誠敬。蓋以裝演巨象為籩人，不過仿佛其形，聖人以正氣充塞其間，俾疫氣潛消，乃位育之實功耳。古人元旦汲清泉，以飲芳香之藥，上已採蘭草，以襲芳香之氣，重滌穢也。後漢張仲景著《傷寒論》欲明冬寒春溫，夏秋暑熱之正，自不能併入疫病以混常法，然至理已畢具於脈法中。夫四時不正之氣，感之者因而致病，初不名為疫也。因病致死，病氣屍氣，混合不正之氣，斯為疫矣。以故雞瘟死雞，豬瘟死豬，牛馬瘟死牛馬，推之於人，何獨不然。所以饑饉兵凶之際，疫病盛行，大率春夏之交為甚。蓋溫暑濕熱之氣交結互蒸，人在其中無隙可避。病者當之，

魄汗淋漓，一人病氣，足充一室。況連床並榻，沿戶闔境，共釀之氣，益以出戶屍蟲，載道腐瑾，燔柴掩席，委壑投崖，種種惡穢，上混蒼天清淨之氣，下敗水土物產之氣，人受之者，親上親下，病從其類，有必然之勢也。如世俗所稱大頭瘟者，頭面腮頤腫如瓜瓢者是也。所稱蝦蟆瘟者，喉痹失音，頸筋脹大者是也。所稱瓜瓢瘟者，胸高肋起，嘔汁如血者是也。所稱疔瘡瘟者，遍身紅腫，發塊如榴者是也。所稱絞腸瘟者，腹鳴乾嘔，水瀉不通者是也。所稱軟腿瘟者，便清泄白，足重難移者是也。小兒痘疹尤多。以上疫證，不明治法，咸諉之世運，良可傷悼。大率瘟疫痘疹，古昔無傳，不得聖言折衷，是以多人迷途。曾不若俗見，摸索病狀，反可顧名思義。昌幸微窺仲景一斑，其《平脈篇》（有謂係叔和所作者，然其文甚古奧）中云「寸口脈陰陽俱緊者，法當清邪中於上焦，濁邪中於下焦。清邪中上，名曰潔也。濁邪中下，名曰渾也。陰中於邪，必內栗也。表氣微虛，裡氣不守，故使邪中於陰也。陽中於邪，必發熱頭痛，項強頸攣，腰痛脛酸，所謂陽中霧露之氣，故清邪中上，濁邪中下，陰氣為栗，足膝逆冷，便溺妄出，表氣微虛，裡氣微急，三焦相溷，內外不通，上焦拂鬱，臟氣相熏，口爛食斷也。中焦不治，胃氣上衝，脾氣不能轉，胃氣為濁，營衛不通，血凝不流。若衛氣前通者，小便赤黃，與熱相搏，因熱作使，游於經絡，出入臟腑，熱氣所過，則為癰膿。若陰氣前通者，陽氣厥微，陰無所使，客氣入內，嚏而出之，聲啞咽塞，寒厥相逐，為熱為擁，血凝自下，狀如豚肝。陰陽相厥，脾氣孤弱，五液注下，

下焦不闔，清便下重，令便數難，臍築湫痛，命將難全。凡二百六十九字，闡發奧理，全非傷寒中所有之事，乃論疫邪從人之門，變病之總，所謂赤文綠字，開天闢地之寶符，人自不識耳。篇中大意謂，人之鼻孔通於天，故陽中霧露之邪者，為清邪自鼻氣而上入於陽，則發熱頭疼，頸攣，正與俗稱大頭瘟、蝦蟆瘟之說符也。人之口氣通於地，故陰中水土之邪者，為飲食濁味自口舌而下入於陰，則其人必先內栗，足膝逆冷，便溺妄出，清便下重，臍築湫痛，正與俗稱絞腸瘟、軟腳瘟之說符也。然從鼻口所入之邪，必先注中焦，以次分佈上下，故中焦受邪，因而不治，則胃中為濁，營衛不通，血凝不流，其釀變即現中焦，俗稱瓜瓢瘟、疙瘩瘟證，則又陽毒癰膿、陰毒遍身青紫之類也。此三焦定位之邪也。若三焦邪混而為一，內外不通，臟氣薰蒸，上焦拂鬱，則口爛食斷，若衛氣前通者，因熱作使，遊行經絡臟腑，則為癰膿。營氣前通者，因召客邪，噫而出之，聲啞咽塞，熱擁不行，而下血如豚肝。然以營衛漸通，故非危候。若上焦之陽下焦之陰兩不相接，則脾氣於中難以獨運，斯五液注下，下焦不闔，而命難全矣。傷寒之邪，先行身之背，次行身之前，次行身之側，由外廓而入。瘟疫之邪，則直行中道，流布三焦。上焦為清陽，故清邪從之上入。下焦為濁陰，故濁邪從之下入。中焦為陰陽交界，凡清濁之邪，必從此區分。甚者三焦相溷，上行極而下，下行極而上，故聲啞咽塞、口爛食斷者，亦復下血如豚肝。非定中上不及下，中下不及上也。傷寒邪中外廓，故一表即散。疫邪行在中道，故表之不散。傷寒邪入胃腑，

則腹滿便結，故可攻下。疫邪在三焦，散漫不收，下之復合。治法，未病前預飲芳香正氣藥，則邪不能入，此為上也。邪既入，即以逐穢為第一義。上焦如霧，升而逐之，兼以解毒。中焦如漚，疏而逐之，兼以解毒。下焦如瀆，決而逐之，兼以解毒。營衛既通，乘勢追拔，勿使潛滋」。

陸九芝曰「《內經》五疫之至，各隨其所值之年，由伏而發。其治盡於『木鬱達之、火鬱發之、土鬱奪之、金鬱泄之、水鬱折之』五法。蓋治疫獨講太少之五運，與司天主客之六氣，就寒溫兩面而言，卻是溫疫多而寒疫少，故五運之有木火土金水，半寒而半溫也。六氣之有濕寒、寒濕、風火、火風、燥火、火燥也，溫又多於寒也。然正不得以溫多於寒，而遂置寒疫於不問也。周禹載於溫獨說春溫，而於疫又獨說溫疫，則既不解溫之無寒，又不解疫之有寒故耳，黃坤載則知有寒疫矣，然於溫疫則曰無內熱，無內熱何以謂之溫乎？於寒疫則反用石膏，用石膏何以謂之寒乎？喻嘉言論疫專主三焦，頗得治疫之法。坤載於疫遍說六經。大疫之小者不分經絡，疫之大者頃刻變生，尚何六經傳遍之有。只是仲景六經之藥，不外溫清兩法，以之分治兩疫，亦為甚合。大抵以溫而疫，則論中苓、連、梔、柏之統於膏、黃者可用也。以寒而疫，則論中吳萸、蜀椒之統於薑、附者可用也。余獨舉運氣一方冠其首，而又舉普濟消毒飲之治溫疫者，以蓋清法。舉如聖散子之治寒疫者，以蓋溫法。而禹載之惑可解，坤載之混可別，及嘉言治溫而用薑、附，即鞠通本之而用桂枝者皆可刪。總而言之，不傳染而有熱無寒者，是

曰溫；傳染而有熱有寒者，是為疫。不得以治寒疫者治溫疫，更不得以治寒疫治溫病也。

一婦人，年四十許，得大頭瘟證，頭面腫大疼痛，兩目腫不能開，上焦煩熱，心中怔忡。彼家誤為瘡毒，竟延瘍醫治療。醫者自出藥末，敷頭面，疼稍愈。求其出方治煩熱怔忡，彼言專習外科，不管心中之病，時愚應他家延請，適至其村，求為診治。其脈洪滑有力，關前益甚，投以清盂湯，將方中石膏改用二兩，煎汁兩茶盅，分二次溫飲下，盡劑而愈。

一人，年三十餘，初則感冒發頤，數日頤下頸項皆腫，延至膺胸漸腫而下。其牙關緊閉，惟自齒縫可進稀湯，而咽喉腫疼又艱於下嚥。延醫調治，服清火解毒之藥數劑腫勢轉增。時當中秋節後，淋雨不止，因病勢危急，冒雨驅車迎愚。既至，見其頤下連項壅腫異常，狀類時毒（瘡中有時毒症），撫之硬而且熱，色甚紅，純是一團火毒之氣，下腫已至心口，自牙縫中進水半口，必以手掩口，十分努力始能下嚥，且痰涎壅滯胸中，上至咽喉，並無容水之處，進水少許必換出痰涎一口，且覺有氣自上下衝，常作呃逆，連連不止。診其脈洪滑而長，重按有力，兼有數象。愚謂病家曰「此世俗所稱蝦蟆瘟也。毒熱熾盛，盤踞陽明之府，若火之燎原，必用生石膏清之，乃可緩其毒熱之勢」。從前醫者在座，謂曾用生石膏一兩毫無功效。愚曰「石膏乃微寒之藥，《本經》原有明文，如此熱毒僅用兩許何能見效」？遂用生石膏四兩，清半夏四錢，金線重樓三錢，連翹、蟬退各

一錢，煎服後，覺藥停胸間不下，其熱與腫似有益增之勢，知其證兼結胸，火熱無下行之路，故益上衝也。幸藥坊即在本村，復急取生石膏四兩，赭石三兩，又煎湯徐徐溫飲下，仍覺停於胸間。又急取赭石三兩，萸仁二兩，芒硝八錢，又煎湯飲下，胸間仍不開通，此時咽喉益腫，再飲水亦不能下。病家惶恐無措，愚曉之曰「我所以亟亟連次用藥者，正為此病腫勢浸長，恐稍遲緩則藥不能進。今其胸中既貯如許多藥，斷無不下行之理。藥下行則結開便通，毒火隨之下降，而上焦之腫熱必消矣」，時當晚十點鐘，至夜半覺藥力下行，黎明下燥糞數枚，上焦腫熱覺輕，水漿可進，晨飯時牙關亦微開，服茶湯一碗。午後腫熱又漸增，撫其胸熱猶烙手，脈仍洪實，意其燥結必未盡下，遂投以大黃四錢，芒硝五錢，又下燥糞兼有溏糞，病遂大愈，而腫處之硬者仍不甚消，胸間撫之猶熱，脈象亦仍有餘熱，又用生石膏三兩，金銀花、連翹、金線重樓各數錢，煎汁一大碗，分數次溫飲下，日服一劑，三日痊愈（按此證二次用石膏、赭石之時即宜加大黃、芒硝）。

一人，年二十餘，得溫疫。三四日間頭面悉腫，其腫處，皮膚內含黃水，破後且潰爛。身上間有斑點，聞人言，此證名大頭瘟。其潰爛之狀，又似瓜瓢瘟，最不易治。懼甚，求為診視。其脈洪滑而長，舌苔白而微黃。問其心中，惟覺煩熱，嗜食涼物。遂曉之曰，此證不難治。頭面之腫爛，周身之斑點，無非熱毒入胃而隨胃氣外現之象。能放膽服生石膏，可保痊愈。遂投以青孟湯，方中石膏改

用三兩，知母改用八錢，煎汁一大碗，分數次溫飲下。一劑病癒強半。翌日，於方中減去荷葉、蟬蛻，又服一劑痊愈。

按：發斑之證異於疹者，以其發處不高，以手拂之，與膚平也。其證有陽毒、陰毒之分。陽毒發斑，係陽明毒熱傷血所致。陰毒發斑，或為寒疫之毒，或因汗吐下後中氣虛乏，或因過服涼藥，遂成陰證，寒伏於下，逼其無根之火上獨熏肺而發斑。其色淡紅，隱隱見於肌表，與陽證發斑色紫赤者不同。愚生平所治發斑，皆係陽證，至陰證實未之見，其證之甚少可知。然正不可因陰證者甚少，而陰陽之際不詳辨也。今採古人陽毒陰毒發斑治驗之案數條於下，以備參觀。庶幾胸有定見，臨證時不至誤治也。

呂滄洲云「一人傷寒十餘日，身熱而靜，兩手脈盡伏。醫者以為壞證，弗與藥。餘診之，三部脈舉按皆無，舌苔滑，兩顴赤如火，語言不亂，因告之曰『此子必大發赤斑，周身如錦紋』。夫血脈之波瀾也，今血為邪熱所搏，掉而為斑，外現於皮膚，呼吸之氣無形可倚，猶溝渠之水雖有風不能成波瀾也，斑消則脈出矣。及揭其衾，而赤斑爛然。與白虎加人參湯，化其斑脈乃復常」。

按：發斑至於無脈，其證可謂險矣。即遇有識者，細診病情，以為可治，亦必謂毒火鬱熱盤踞經絡之間以阻塞脈道之路耳。而滄洲獨斷為發斑則傷血，血傷則脈不見。是誠滄洲之創論，然其言固信而有徵也。憶己亥春，嘗治一少年吐血證，其人大口吐血，數日不止，脈若有若無，用藥止其血後，脈因火退，轉分毫



不見。愚放膽用藥調補之，竟得無恙（此證詳案在第二卷寒降湯下）。夫吐血過多可至無脈，以徵滄洲血傷無脈之說確乎可信，此陽毒發斑也。

許叔微治一人，內寒外熱而發斑，六脈沉細，肩背胸脅斑出數點，隨出隨隱，旋更發出，語言狂亂，非譫語也，肌表雖熱，以手按之，須臾冷透如冰，與薑附等藥數服後，得大汗而愈，此陰毒發斑也。

吳仁齋治一人，傷寒七八日，因服涼藥太過，遂變身冷，手足厥逆，通身黑斑，惟心頭溫暖，乃伏火也。診其六脈沉細，昏沉不知人事，亦不能言語，狀似屍厥。遂用人參三白湯，加熟附子半枚、乾薑二錢，水煎服下。待一時許，斑色漸紅，手足漸暖，而甦醒後，復有餘熱不清，此伏火後作也。以黃連解毒湯、竹葉石膏湯調之而愈，此陰毒發斑中有伏陽也。

虞天民曰「有內傷證，亦出斑疹，但微見紅，此胃氣極虛，一身之火遊行於外。當補益氣血，則中有主而氣不外游，榮有養而血不外散，此證尤當慎辨」。洪吉人解之曰「按此證與陽毒發斑不同，亦與陰毒發斑不同，其方當用補中益氣湯，加歸、芍之類」。

瘟毒之病，有所謂羊毛瘟者（亦名羊毛疹），其證亦係瘟疫，而心中兼有撩亂之證。若視其前後對心處有小瘰（俗名疙瘩），以針鼻點之，其頂陷而不起，其中即有白毛，當以針挑出之。若恐挑之不淨，可用發麵饅饅去皮，雜以頭髮，少蘸香油，周身搓擦。再審其證之虛實涼熱，投以治疫病之藥，即愈。此證古書

不載，而今人患此證者甚多。其白毛，即周身之汗毛，大抵因有汗受風閉其毛孔，而汗毛不能外出，因不外出，所以作白色（若用黃酒和蕎麥麵擦之更好）。

【護心至寶丹】

治瘟疫自肺傳心，其人無故自笑，精神恍惚，言語錯亂。

生石膏（一兩，搗細）、人參（二錢）、犀角（二錢）、羚羊角（二錢）、硃砂（三分，研細）、牛黃（一分，研細）。

將藥前四味共煎湯一茶盅，送服硃砂、牛黃末。

此證屬至危之候，非尋常藥餌所能療治，故方中多用珍異之品，借其寶氣以解人心之熱毒也。

瘟疫之毒未入心者，最忌用犀角，而既入心之後，犀角又為必須之藥。

按：瘟疫之毒，隨呼吸之氣傳入，原可入肺。心與肺同居膈上，且左心房之血脈管與右心房之回血管，又皆與肺循環相通，其相傳似甚易。而此證不常有者，因有包絡護於心上代心受邪，由包絡下傳三焦，為手厥陰，少陽臟腑之相傳，此心所以不易受邪也。愚臨證二十餘年，僅遇一媪患此證，為擬此方，服之而愈。

【清疹湯】

治小兒出疹，表裡俱熱，或煩躁引飲，或喉疼聲啞，或喘逆咳嗽。

生石膏（一兩，搗細）、知母（六錢）、羚羊角（二錢）、金線重樓（錢半，切片）、薄荷葉（二錢）、青連翹（二錢）、蟬蛻（錢半，去足土）、殭蠶（二錢）。

用水煎取清湯一盅半，分二次溫飲下，以服後得微汗為佳。若一次得微汗者，餘藥仍可再服。若服一次即得大汗者，餘藥當停服。此藥份量，係治七八歲以上者，若七八歲以下者，可隨其年之大小，斟酌少用。或將藥減半或用三分之一皆可。

喉疼聲啞者，可將石膏加重五錢，合前得兩半。若疹出不利者，用鮮葦根（活水中者更佳）一大握去節水煎沸，用其水煎藥。

疹證多在小兒，想小兒臟腑間原有此毒，又外感時令之毒氣而發，則一發表裡俱熱。若溫病初得之劇者，其陽明經府之間，皆為熱毒之所瀰漫。故治此證，始則發表，繼則清解，其有實熱者，皆宜用石膏。至喉疼聲啞者，尤為熱毒上衝，石膏更宜放膽多用。惟大便滑瀉者，石膏、知母皆不宜用，可去此二藥，加滑石一兩、甘草三錢。蓋即滑瀉亦非涼證，因燥渴飲水過多，脾胃不能運化故也，故加滑石以利其小便，甘草以和其脾胃，以緩水飲下趨之勢。若其滑瀉之甚者，可用拙擬滋陰宣解湯（在第五卷），既可止瀉，又可表疹外出也。然此證最忌滑瀉，

恐其毒因滑瀉內陷即不能外出。若服以上方而滑瀉不止，可用生山藥兩許，軋細煮作粥，再將熟雞子黃兩三枚捏碎，調粥中服之，其滑瀉必止。瀉止後，再徐徐以涼藥清補之。

羚羊角最為治疹良藥，於前青孟湯後曾論及之。惜此藥今昂貴，坊間且多以他角偽充。若係整者，其角上有節若螺紋，而非若螺紋之斜繞，至其角尖二寸許則無螺紋矣。其中有木胎，作蒼黃參半之色（其色似木非真木也），是為真者。可銼取其周遭及角尖，用時另煮，兌藥中服，或與所煮他藥，前後隨服皆可。蓋以其藥珍重，不欲以他藥渣混之也。若藥坊已切成片，真偽亦可辨。其真者，片甚硬，其中碎片甚多，以其硬而脆故也。其色有直白者，有間帶蒼黃色者，即其近木胎處也。以火燃之，無腥臭氣，而轉有清鬱之氣（角上之節有假作旋成者，細審可辨）。

壬寅之歲，曾訓蒙於邑之仁村，愚之外祖家也。季春夜半，表弟劉銘軒叩門求方，言其子（年六歲）於數日間出疹，因其苦於服藥，強令服即作嘔吐，所以未來詢方。今夜忽大喘不止，有危在頃刻之勢，不知還可救否，遂與同往視之。見其不但喘逆迫促，且精神恍惚，肢體騷擾不安。脈象搖搖而動，按之無根。知其毒火內攻，而肝風已動也。為其苦於服藥，遂但取羚羊角三錢，幸藥坊即在本村，須臾藥至，急煎成湯。視其服下，過二十分鐘即安然矣，其疹從此亦愈。其

舅孫寶軒滄州名醫也。翌日適來省視，見愚所用羚羊角，訝為仙方（此證於青孟湯下曾略言之）。

奉天北關友人，朱貢九之哲嗣文治，年五歲。於庚申立夏後，周身壯熱，出疹甚稠密，脈甚洪數，舌苔白厚，知其疹而兼瘟也。欲以涼藥清解之，因其素有心下作疼之病，出疹後，貪食鮮果，前一日猶覺疼，又不敢投以重劑。遂勉用生石膏、玄參各六錢，薄荷葉、蟬蛻各一錢，連翹二錢。晚間服藥，至翌日午後視之，其熱益甚，喉疼，氣息甚粗，鼻翅煽動，且自鼻中出血少許，有煩躁不安之意。愚不得已，重用生石膏三兩，玄參、麥冬（帶心）各四錢，仍少佐以薄荷葉、連翹諸藥。俾煎湯二茶盅，分三次溫飲下。至翌日視之，則諸證皆輕減矣。然餘熱猶熾，而大便雖下一次，仍係燥糞，詢其心猶發熱，脈仍有力，遂於涼解藥中，仍用生石膏一兩，連服兩劑，壯熱始退，繼用涼潤清解之劑調之痊愈。

按：此證初次投以生石膏、玄參各六錢，其熱不但不退而轉見增加，則石膏之性原和平，確非大涼可知也。至其證現種種危象，而放膽投以生石膏三兩，又立能挽回，則石膏對於有外感實熱諸證，直勝金丹可知。近世篤信西術者，恒目石膏為無用之物，彼亦曾親自試驗，若愚之放膽用生石膏乎！蓋彼所謂石膏無用者，不過用石膏四五錢，極多或至一兩，如此以治壯盛之火則誠無用矣。若更用煨者，則不惟無用，而且足害人矣。夫人非聖神，何能出言皆是，世人素重其人，

竟於其出言偶差者，亦篤信之，誤人即不可勝計。愚願負當世哲學之名者，其於出言之際，尚自加審慎哉。

又此證因心下素有疼痛，故石膏、玄參初止用六錢。若稍涉游移，並石膏、玄參亦不敢用，再認定疹毒，宜托之外出而多用發表之品，則翌日現證之危險，必更加劇，即後投以大劑涼藥，亦不易挽回也。目睹耳聞，知孺子罹瘟疫之毒，為俗醫藥誤者甚多，故於記此案時，而再四詳為申明。夫孺子何辜，疾厄可憫，孰任救人之責者，尚其深思愚言哉。

瘟疫之證，雖宜重用寒涼，然須謹防其泄瀉。若泄瀉，則氣機內陷，即無力托毒外出矣。是以愚用大劑寒涼，治此等證時，必分三四次徐徐溫服下，俾其藥力長在上焦，及行至下焦，其寒涼之性已為內熱所化，自無泄瀉之弊。而始終又須以表散之藥輔之，若薄荷、連翹、蟬蛻、殭蠶之類，則火消毒淨，疹愈之後亦斷無他患矣。至若升麻、羌活之藥，概不敢用。

友人劉仲華，精通醫學。曾治一孺子，出疹剛見點即回，醫者用一切藥，皆不能表出。毒氣內攻，勢甚危急，眾皆束手。仲華投以《傷寒論》麻杏甘石湯，一劑疹皆發出，自此遂愈。夫麻杏甘石湯，為汗後、下後、汗出而喘無大熱者之方，仲華用以治疹，竟能挽回人命於頃刻，可為善用古方者矣（用此方者，當視其熱度之高低，熱度高者石膏用一兩，麻黃用一錢，熱度低者石膏用一兩，麻黃用二錢）。

前賢善治小兒者，首推錢仲陽。方書載有睦親宮十太尉病瘡疹，眾醫治之。王曰「疹未出屬何臟腑」？一醫言胃氣熱，一醫言傷寒不退，一醫言疹在母腹中有毒。錢氏曰「若胃氣熱何以乍涼乍熱？若言在母腹中有毒屬何臟也」？醫曰「在脾胃」。錢氏曰「既在脾胃，何以驚悸？夫胎在腹中，月至六七，則已成形。食母穢液，入兒五臟，食至十月，滿胃脘中，至生之時，口有不潔，產母以手拭淨，則無疾病。俗以黃連汁壓之，方下臍糞及涎穢也。此亦母之不潔，餘氣入兒臟中，本先因微寒入而成，瘡疹未出，五臟皆見病證，內一臟受穢多者，乃出瘡疹。初欲病時，先呵欠、頓悶、驚悸、乍涼乍熱、手足冷、面腮赤、頰赤、嗽、噴嚏，此五臟證俱見。呵欠、頓悶，肝也；時發驚悸，心也；乍涼乍熱、手足冷，脾也；面赤、腮頰赤、噴嚏，肺也。惟腎無候，以在腑下，不能食穢，故凡瘡疹乃五臟毒，若出歸一證。肝水泡，肺膿皰，心斑，脾疹，惟腎不食穢毒而無諸證。瘡黑者屬腎，由不慎風冷而不飽，內虛也。又用抱龍丸數服愈。以其別無他候，故未發出，則見五臟證，既出則歸一臟矣」。

按：此論實能將疹之由來，闡發無餘蘊矣。嘗讀趙晴初醫話稿，謂斑疹之證，恒有發於腸胃嗌膈之間。因肌膚間不見，往往不知為斑疹而誤治者。愚初因無徵，未能確信，後見有豬病瘟死者，剖解視之，其臟腑間，皆有紅點甚多。由斯觀之，斑疹內發而外不見之說，確乎可信。斯在臨證者，精心考驗，見有若發斑疹病狀，而外不見斑疹，亦宜用治斑疹之法治之也。



治瘧疾方

【加味小柴胡湯】

治久瘧不愈，脈象弦而無力。

柴胡（三錢）、黃芩（二錢）、知母（三錢）、潞參（三錢）、鱉甲（三錢，醋炙）、清半夏（二錢）、常山（錢半，酒炒）、草果（一錢）、甘草（一錢）、酒麴（三錢）、生薑（三錢）、大棗（兩枚，捩開）。

瘧初起者減潞參、鱉甲。熱甚者，加生石膏五六錢或至一兩。寒甚者，再加草果五分或至一錢（神曲皆發不好，故方中用酒麴）。

瘧邪不專在少陽，而實以少陽為主，故其六脈恆露弦象。其先寒者，少陽之邪外與太陽並也，其後熱者，少陽之邪內與陽明並也。故方中用柴胡以升少陽之邪，草果、生薑以祛太陽之寒，黃芩、知母以清陽明之熱。又瘧之成也，多挾痰挾食，故用半夏、常山以豁痰，酒麴以消食也。用人參，因其瘧久氣虛，扶其正即所以逐邪外出。用鱉甲者，因瘧久則脅下結有痞積（方書名瘧母實由肝脾脹大），消其痞積，然後能斷瘧根株。用甘草、大棗者，所以化常山之猛烈而服之不至眩暈也。

或問「葉天士醫案，其治瘧之方，多不用柴胡。其門人又有根傳之說，謂不宜用柴胡治瘧。若誤用之，實足僨事。其說果可信乎？」答曰「葉氏當日聲價甚

高，瘧原小疾，初起之時，鮮有延之診治者。迨至瘧久，而虛證歧出，恆有瘧邪反輕，而他病轉重，但將其病之重者治癒，而瘧亦可隨愈，此乃臨證通變之法，非治瘧之正法也。至於病在厥陰，亦有先寒後熱，出汗少愈，形狀類瘧之證。此係肝氣虛極將脫，若誤認為瘧，用柴胡升之，凶危立見。此當重用山萸肉，以斂而補之（觀第一卷來復湯後醫案，自明其理），是以《本經》山茱萸，亦主寒熱也。葉氏門人所謂誤用柴胡足債事者，大抵指此類耳」。

或問「葉氏治瘧，遇其人陰虛燥熱者，恆以青蒿代柴胡。後之論者，皆贊其用藥，得化裁通變之妙。不知青蒿果可以代柴胡乎？」答曰「瘧邪伏於脅下兩板油中，乃足少陽經之大都會。柴胡之力，能入其中，升提瘧邪透膈上出，而青蒿無斯力也。若遇陰虛者，或熱入於血分者，不妨多用滋陰涼血之藥佐之。若遇燥熱者，或熱盛於氣分者，不妨多用清燥散火之藥佐之。曾治一人，瘧間日一發，熱時若燔，即不發瘧之日，亦覺心中發熱，舌燥口乾，脈象弦長（凡瘧脈皆弦）重按甚實，知其陽明火盛也。投以大劑白虎湯，加柴胡三錢。服後頓覺心中清爽，翌晨瘧即未發。又煎前劑之半，加生薑三錢，服之而愈。又嘗治一人得溫病，熱入陽明之府，舌苔黃厚，脈象洪長，又間日一作寒熱，此溫而兼瘧也。然其人素有鴉片嗜好，病雖實，而身體素虛。投以拙擬白虎加人參以麥冬代知母、山藥代粳米湯，亦少加柴胡，兩劑而愈」。

或問「太陽主皮膚，陽明主肌肉，少陽介於皮膚肌肉之間，故可外與太陽並，內與陽明並。今言瘧邪伏於脅下兩板油中，則在陽明之裡矣，又何能外與太陽並，內與陽明並」？答曰「此段理解，至精至奧，千古未發。今因數問，愚特詳悉言之。人身十二經，手足各六。其他手足同名之經，原各有界限。獨少陽經，《內經》謂之遊部。所謂遊部者，其手足二經，一脈貫通，自手至足，自足至手，氣化遊行，而毫無滯礙也。故方書論三陽之次第，外太陽，其內少陽，又其內陽明。是少陽在太陽之內，陽明之外也。此指手少陽而言，乃肥肉、瘦肉中間之脂膜，以三焦為府者也。至其傳經之先後，即由太陽而陽明，由陽明而少陽。是少陽不惟在太陽之內，並在陽明之內也。此指足少陽而言，即兩脅下之板油，以膽為府者也，瘧邪伏於其中，其初發也，由板油而達三焦，由三焦而及肥肉、瘦肉間之脂膜，遂可與太陽相並，而為表寒之證。此太陽指太陽之經而言，非指府也。迨至瘧邪不能外出，鬱而生熱，其熱由肌肉而內陷，緣三焦直達於胃（三焦即膜油，原與胃相連），遂可與陽明相並而成裡熱之證。此指陽明之府而言（胃為陽明之府），非指經也。若但認為陽明之經相並，其熱惟在於肌肉間，何以瘧當熱時，脈現洪實，不但周身發熱，胃中亦覺大熱，而嗜飲涼水乎？蓋古籍立言簡括，經府未嘗指明，後世方書，又不明少陽為遊部之理，而分手足少陽為二經，是以對於此等處，未有一顯明發揮者」。

西人治瘡，恆用金雞納霜，於未發瘡之日，午間、晚間各服半瓦，白糖水送下。至翌晨又如此服一次，其瘡即愈。

按：雞納霜，係用雞納樹皮熬煉成霜。其樹生於南美洲，其皮有紅者、黃者、金黃者。煉霜以其皮金黃者為上，故又稱金雞納霜。此藥又名規尼涅，若制以硫酸，名硫酸規尼涅；制以鹽酸，名鹽酸規尼涅，性皆涼，而鹽酸者較尤涼。若治瘡，宜用鹽酸者，省文曰鹽規。為其為樹皮之液煉成，故能入三焦，外達腠理而發汗（腠理係皮裡之膜，亦屬少陽，方書有謂係肥肉瘦肉中間之膜者，非是），為三焦為手少陽之府，原與足少陽一脈貫通，故又能入脅下板油之中，搜剔瘡邪之根蒂也。

治瘡便方，有單用密陀僧者，然其藥制之，不能如法，輕率服之，實與性命有關。《醫話稿》曾載有醫案可考也，即制之如法，服之為行險之道。

方書謂冬冷多溫病，夏熱多瘡疾，此言冬日過冷，人身有伏寒，至春隨春陽化熱，即多成溫病；夏日過熱，人身有伏暑，至秋為薄寒所激發，即多生瘡疾也。丁卯季夏，暑熱異常，京津一帶因熱而死者甚多，至秋果多瘡疾。服西藥金雞納霜亦可愈，而愈後恆屢次反覆。姻家王姓少年，寄居津門，服金雞納霜愈瘡三次後，又反覆。連服前藥數次，竟毫無效驗。診其脈，左右皆弦長有力。夫弦為瘡脈，其長而有力者，顯係有伏暑之熱也。為開白虎湯方，重用生石膏二兩，又加柴胡、何首烏各二錢，一劑而瘡愈。恐未除根，即原方又服一劑，從此而病不反

覆矣。此方用白虎湯以解伏暑，而又加柴胡、何首烏者，凡外感之證其脈有弦象者，必兼有少陽之病，宜用柴胡清之；而外邪久在少陽，其經必虛，又宜用何首烏補之。二藥並用，一扶正，一逐邪也。少陽與陽明並治，是以伏暑愈而瘧亦隨愈也。

治霍亂方

【急救回生丹】

治霍亂吐瀉轉筋，諸般痧證暴病，頭目眩暈，咽喉腫疼，赤痢腹疼，急性淋證。

硃砂（頂高者一錢五分）、冰片（三分）、薄荷冰（二分）、粉甘草（一錢細末）。

上藥四味共研細，分作三次服，開水送下，約半點鐘服一次。若吐劇者，宜於甫吐後急服之。若於將吐時服之，恐藥未暇展佈即吐出。服後溫覆得汗即愈。服一次即得汗者，後二次仍宜服之。若服完一劑未痊愈者，可接續再服一劑。若其吐瀉已久，氣息奄奄有將脫之勢，但服此藥恐不能挽回，宜接服後急救回陽湯。

朱砂為水銀、硫黃二原質合成，此二原質皆善消毒菌，化合為朱砂，又色赤人心，能解心中竄入之毒。且又重墜，善止嘔吐，俾服藥後不致吐出。

冰片出於杉樹及加爾普斯科樹，其次者，係樟腦煉成。此方中冰片，宜用樟腦煉成者。因樟腦之性，原善振興心臟，通活周身血脈，尤善消除毒菌。特其味稍劣，煉之為冰片，味較清馥。且經煉，而其力又易上升至腦，以清腦中之毒也。

薄荷冰善解虎列拉之毒，西人屢發明之。且其味辛烈香馥，無竅不通，無微不至，周身之毒皆能掃除。矧與冰片，又同具發表之性。服之能作汗解，使內蘊

之邪由汗透出。且與冰片皆性熱用涼，無論症之因涼因熱，投之咸宜也（西藥房名薄荷冰為薄荷腦）。

粉甘草最善解毒，又能調和中宮，以止吐瀉。且又能調和冰片、薄荷冰之氣味，使人服之不致過於苛辣也。

霍亂之證，西人所謂虎列拉也，因空氣中有時含有此毒，而地面積穢之處，又釀有毒氣與之混合（觀此證起點多在大埠不潔之處可知），隨呼吸之氣入肺，由肺傳心胞（即心肺相連之脂膜），由心胞傳三焦（上焦心下膈膜，中焦包脾連胃脂膜，下焦絡腸包腎脂膜），為手厥陰、少陽臟腑之相傳。然其毒入三焦，其中氣充盛，無隙可乘，猶伏而不動。有時或飲食過量，或因寒涼傷其脾胃，將有吐瀉之勢，毒即乘虛內襲，盤據胃腸，上下不通，遂揮霍撩亂，而吐瀉交作矣。吐瀉不已，其毒可由腸胃而入心，更由心而上竄於腦，致腦髓神經與心俱病。左心房輸血之力與右心房收血之力，為之頓減，是以周身血脈漸停，而通體皆涼也。其證多發於秋際者，因此毒氣釀成多在夏令。人當暑熱之時，周身時時有汗，此毒之伏於三焦者，猶得隨汗些些外出。迨至秋涼汗閉，其毒不得外出，是以蓄極而動，乘脾胃之虛而內攻也。故治此症者，當以解毒之藥為主，以助心活血之藥為佐，以調陰陽奠中土之藥為使。爰擬此方，名之曰急救回生丹。

己未秋，奉天霍亂盛行。時愚在奉天立達醫院，擬得此方，用之甚效。適值警務處長蓮波王君，任防疫總辦，問愚有何良方救此危險之證，因語以此方。王

君言，若藥坊間配製恐不如法，即煩院中為制三十劑，分於四路防疫所。若果效時，後再多制。愚遂親自監視，精製三十劑付之。豎日來信言，藥甚效驗，又俾制五十，又翌日來信言此藥效驗異常，又俾制一百二十劑。愚方喜此藥可以廣傳救人疾苦，孰意翌日自京都購得周氏回生丹到，此藥即停止矣。因思自古治霍亂無必效之方，此方既如此效驗，若不自我傳遍寰區，恐難告無罪於同胞。遂將霍亂之病由與治法及用法之意，詳書一紙，登諸報章。又將登報之文，寄於直隸故城縣知事友人袁霖普，而袁君果能用方救人若干，推行遍於直隸，山東諸州縣。

【附錄】

直隸故城縣袁霖普來函：

壽甫仁兄雅鑒：前次寄來急救回生丹方，不知何以斟酌盡善。初故城鬧疫，按方施藥六十劑，皆隨手輒效。後故城外鎮鄭家口鬧疫，又施藥二百劑，又莫不全活。繼遂將其方刷印數百張，直隸百餘縣，山東數十縣，每縣署寄去一張。目下又呈明省長登北洋公報矣。錫類推仁，我兄之功德真無量哉。



【衛生防疫寶丹】

治霍亂吐瀉轉筋，下痢腹疼，及一切痧症。平素口含化服，能防一切癘疫傳染。

粉甘草（十兩，細末）、細辛（兩半，細末）、香白芷（一兩，細末）、薄荷冰（四錢，細末）、冰片（二錢，細末）、硃砂（三兩，細末）。

先將前五味和勻，用水為丸如桐子大，晾乾（不宜日曬）。再用硃砂為衣，勿令餘剩。裝以布袋，雜以琉珠，來往撞蕩，務令光滑堅實。如此日久，可不走氣味。若治霍亂證，宜服八十九，開水送服。餘證宜服四五十丸。服後均宜溫復取微汗。若平素含化以防疫癘，自一丸至四五丸皆可。此藥又善治頭疼、牙疼（含化），心下、脅下及周身關節經絡作疼，氣鬱、痰鬱、食鬱、呃逆、嘔噦。醒腦養神，在上能清，在下能溫，種種利益，不能悉數。

以上二方，後方較前方多溫藥兩味。前方性微涼，後方則涼熱平均矣。用者斟酌於病因，涼熱之間，分途施治可也。後方若臨證急用，不暇為丸，可制為散，每服一錢，效更速。

【附錄】

直隸鹽山孫香蓀來函：

一九二四年六月，友人杜印三之母得霍亂證，上吐下瀉，轉筋腹疼，六脈閉塞。生診視後，為開衛生防疫寶丹方，共研作粉，每次服一錢。服第一次，吐瀉稍止。服第二次，病即痊癒。斯年初冬，鄧子輔之兒媳得霍亂證，時已夜半，請為診視。吐瀉轉筋，六脈皆無，心中迷亂，時作譫語。治以衛生防疫寶丹，初服仍吐，服至二次，脈即徐出而愈。

奉天撫順縣瓢爾屯，煤礦經理尚席珍君來函，論衛生防疫寶丹之效果。

壽甫仁兄偉鑒：向在院中帶來衛生防疫寶丹二百包，原備礦上工人之用，後值霍亂發生，有工人病者按原數服藥四十九，病癒強半，又急續服四十九，遂脫然痊愈。後有病者數人，皆服藥八十九。中有至劇者一人，一次服藥一百二十九，均完全治癒。近處有此證者，爭來購求此藥，亦服之皆愈。一方呼為神丹，二百包條忽告盡。乞於郵便再為寄數百包來，以救生命，是所切盼。

直隸故城縣知事袁霖普君來函，論衛生防疫寶丹之效果。

壽甫仁兄道鑒：前接衛生防疫寶丹方，弟照方配製，不料時疫盛行，各縣染此病者，傷人甚夥，弟除傳佈各縣各鄉之外，前後已配藥六大料，救活病人已及千矣。刻又陳請省長、警務處長，登之北洋公報，使各縣皆得知之。人之欲善，誰不如我，倘各縣均肯舍藥，則救人無算矣。弟雖費錢不少，然私心竊慰，愈徵我兄為救世之人，非偶然也。翹首北望，不勝欣頌，兼為群黎致謝，

【急救回陽湯】

治霍亂吐瀉已極，精神昏昏，氣息奄奄，至危之候。

潞黨參（八錢）、生山藥（一兩）、生杭芍（五錢）、山萸肉（八錢，去淨核）、炙甘草（三錢）、赭石（四錢，研細）、硃砂（五分，研細）。

先用童便半盅燉熱，送下硃砂，繼服湯藥。

以上二方，皆為治霍亂之要藥矣。然彼以祛邪為主，此以扶正為主。誠以得此證者，往往因治不如法，致日夜吐瀉不已，虛極將脫，危在目前。病勢至此，其從前之因涼因熱皆不暇深究，惟急宜重用人參以回陽，山藥、芍藥以滋陰，山萸肉以斂肝氣之脫（此證吐瀉之始肝木助邪侮土，吐瀉之極而肝氣轉先脫），炙甘草以和中氣之瀉，此急救回陽湯所以必需也。用赭石者，不但取其能止嘔吐，俾所服之藥不致吐出，誠以吐瀉已久，陰陽將離，赭石色赤入心，能協同人參，助心氣下降。而方中山藥，又能溫固下焦，滋補真陰，協同人參以回腎氣之下趨，使之上行也。用硃砂且又送以童便者，又以此時百脈閉塞，係心臟為毒氣所傷，將熄其鼓動之機，故用硃砂直入心以解毒，又引以童便使毒氣從尿道瀉出，而童便之性又能啟發腎中之陽上達，以應心臟也。是此湯為回陽之劑，實則交心腎和陰陽之劑也。服此湯後，若身溫脈出，覺心中發熱有煩躁之意者，宜急滋其陰分，若玄參、生芍藥之類，加甘草以和之，煎一大劑，分數次溫飲下。此《傷寒論》〈太陽篇〉，先用甘草乾薑湯繼用甘草芍藥湯之法也。

門人高如璧，曾治一少婦。吐瀉一晝夜，甚是困憊，濃煎人參湯，送服益元散而愈。蓋獨參湯能回陽，益元散能滋陰，又能和中（滑石甘草能和中以止吐瀉）解毒（甘草硃砂能解毒），且可引毒氣自小便出，是以應手奏效。此亦拙擬急救回陽湯之意也。

此證之轉筋者，多因吐瀉不已，肝木乘脾氣之虛而侮土，故方書治轉筋多用木瓜，以其酸能斂肝，即所以平肝也。然平肝之藥，不必定用木瓜。王寅秋際，霍亂流行，曾單用羚羊角三錢，治癒數人。因羚羊角善解熱毒，又為平肝之妙藥也。又曾有一人，向愚詢治泄瀉之方，告以酸石榴槿皮搗爛，煎湯服之。後值霍亂發生，其人用其方治霍亂初起之泄瀉者，服之瀉愈，而霍亂亦愈。由是觀之，石榴亦為斂肝之要藥，而斂肝之法，又實為治霍亂之要著也。

霍亂之證，有實熱者居多，其真寒涼者，不過百中之一二，即百脈閉塞，周身冰冷，但其不欲覆被，思飲涼水，即不可以涼斷，當先少少與以涼水，若飲後病增重者，其人雖欲復飲，而不至急索者，涼水可勿與也。若飲後病不增重，須與不與，有不能忍受之狀，可盡量與之，任其隨飲隨吐，借涼水將內毒換出，亦佳方也。曾遇有恣飲涼水而愈者，問之，言當病重之時，若一時不飲涼水，即覺不能復活，則涼水之功用可知矣。然涼水須用新汲井泉水方效，無井泉水處，可以冰水代之，或吞服小冰塊亦佳。

王孟英曰「雞矢白散為《金匱》治霍亂轉筋入腹之方」，愚仿其意，擬得蠶矢湯，治霍亂轉筋、腹疼、口渴、煩躁，危急之證甚效。方用晚蠶砂、木瓜各三錢，生薏仁、大豆芽（如無可代以生麥芽）各四錢，川黃連、炒山梔各二錢，醋炒半夏、酒炒黃芩、吳茱萸各一錢，以陰陽水煎，稍涼，徐徐服之。丁酉八九月間，吾杭盛行霍亂轉筋之證。有沈氏婦者，夜深患此，繼即音啞肢寒。比曉，其夫皇皇求為救治，診其脈弦細以澀，兩尺如無，口極渴而沾飲即吐不已，腓堅硬如石，其時疼楚異常。因擬此方治之，徐徐涼飲，藥入口竟得不吐。外以好燒酒令人用力摩擦轉筋僵硬之處，擦將一時許，其硬塊始漸軟散，而筋不轉，吐瀉亦減。甫時復與前藥半劑，夜間居然安寐矣。後治相類者多人，悉以是法獲效。

陸九芝曰「霍亂一證，有寒有熱，熱者居其九，寒者居其一。凡由高樓大廈，乘涼飲冷而得之者，仲景則有理中、四逆諸方，後世亦有漿水、大順、復元、冷香飲子諸方，病多屬寒，藥則皆宜熱。若夫春分以後，秋分以前，少陽相火，少陰君火，太陰濕土，三氣合行其令。天之熱氣則下降，地之濕氣則上騰，人在氣交之中，清氣在陰，濁氣在陽，陰陽反戾，清濁相干，氣亂於中，而上吐下瀉。治此者，宜和陰陽，釐清濁，以定其亂，亂定即無不愈」，此則病非寒也，而非盡用寒藥也。即如薤藿、平陳、胃苓等湯習用之劑，亦皆溫通，特不用薑附丁萸之大辛大熱者耳。又有不吐不瀉而揮霍撩亂者，則多得之飽食之後。凡夏月猝然冒暑，惟食填太陰，亦曰飽食填息，此證為病最速，為禍最酷，而人多忽之。

即有知者，亦僅以停食為言，絕不信其為閉證之急者。閉則手足肢冷，六脈俱伏，甚則喜近烈日。此乃邪閉而氣道不宣，其畏寒也，正其熱之甚也。此等證，只欠一吐法耳。自吐法之不講，本屬一吐即愈之病，而竟不知用也，此外更有四肢厥逆，甚至周身如冰，而竟不惡寒，反有惡熱者，此更是內真熱，外假寒，即厥陰中熱深厥深之象，豈獨不可用四逆、理中，即薑湯、米飲及五苓散中之桂枝，亦不可用。而且宜苦寒之劑，佐以挑痧、刮痧等法，刺出其惡血以泄熱毒者。

同治壬戌，江蘇滬瀆，時疫盛行，綿延而至癸亥。余嘗以石膏、芩、連，清而愈之者，則暑濕熱之霍亂也。以涼水調膽礬吐而愈之者，則飽食填息之霍亂也。其肢皆冷，而其脈皆伏，維時大醫，競用丁萸桂附，日誤數人，而竟不知改圖，豈不深可惜哉。

上所錄二則，皆於霍亂之證，有所發明，故詳志之，以備採擇。

霍亂之證，宜兼用外治之法，以輔藥餌所不逮。而外治之法，當以針灸為最要。至應針之處，若十宣、中腕、尺澤、足三里、陰陵、承山、太溪、太倉、太衝、公孫等穴（約略舉之，未能悉數），習針灸者大抵皆知。惟督脈部分，有素膠穴，刺同身寸之三分出血，最為治霍亂之要著。凡吐瀉交作，心中撩亂者，刺之皆效，諸針灸之書，皆未言其能治霍亂。世之能針灸者，間有知刺其處者，而或刺鼻準之尖，或刺鼻柱中間，又多不能刺其正穴。兩鼻孔中間為鼻柱，《內經》王注，謂此穴在鼻柱之上端，則非鼻準之尖，及鼻柱中間可知。然刺未中其正穴

者，猶恆有效驗，況刺中其正穴乎？蓋此穴通督脈，而鼻通任脈，刺此一處，則督、任二脈，可互相貫通，而周身之血脈，亦因之可貫通矣。

又宜佐以刮痧之法，蓋此證病劇之時，周身冰冷，回血管之血液凝滯不行。當用細口茶碗，將碗邊一處少塗香油，兩手執定其無油之處，先刮其貼脊兩旁，脊椎上亦可輕刮，以刮處盡紅為度。蓋以臟腑之係皆連於脊，而諸臟腑穴，亦貼脊兩旁，故以刮此處為最要。而刮時，又宜自上而下挨次刮之，可使毒氣下行，次刮其胸與脅，次刮其四肢曲處（尺澤委中）及腿內外，至頭額項肩，亦可用錢刮之。

又當兼用放痧之法，將四肢回血管之血，用手趕至腿臂曲處，用帶上下紮緊，於尺澤、委中兩旁回血管，用扁針刺出其血，以助其血脈之流通，且又放出炭氣，俾霍亂之毒菌，從此輕減也。

又宜佐以溫體之法，用滾水煮新磚八個，以熨腋下及四肢曲處，及兩腳湧泉穴。或水煮粗厚之布，乘熱迭數層，復於轉筋之處，即不轉筋者，亦可覆於少腹及腿肚之上，涼則易之。或以茶壺及水籠袋，滿貯熱水，以熨各處。或醋炒蔥白（切絲）、或醋炒乾艾葉（揉碎）熨之。或用手蘸火酒或燒酒，急速擦摩其周身及腿肚發硬之處。種種助暖之法不一，臨證者隨事制宜可也。

西人治霍亂用鴉片丁兒（酒也）、依的兒制纈草丁兒、芳香丁兒（即亞香淡酒善透竅通絡）各十瓦，薄荷油一瓦，混和為滴劑。每半小時，服十五滴至三十滴。

又有注射之法，樟腦、依的兒各五瓦，混溶於七十五倍之蒸餾水中，加三十八度之溫，以注射於兩臂尺澤穴以上之回血管，或胸側或腹部之皮下蜂窩織內。此方亦可於無病注射，為預防劑。然預防者不必盡劑，可用其三分之一或至一半。

又方，鹽酸莫兒比涅十分瓦之二，蒸餾水十瓦（藥水如此混和，用時不止此數），或一筒或半筒，注於皮下，如前。

又方，鹽酸歇魯因十分瓦之一，蒸餾水十瓦，或一筒或半筒，注於皮下，如前。

又方，碳酸那篤留謨一瓦，食鹽（煉淨無土垢者）六瓦，蒸餾水一千瓦，注於皮下，如前。

嘔吐太甚者，可用上列諸方注於當心窩之皮膚內。腿筋轉者，可用諸方注於腿肚之皮膚（承山穴處），腹中疼甚者可用諸方作灌腸之劑。又凡注於皮下者，亦可注於回血管。注於回血管者，亦可注於皮下，然皆溫用不宜涼用。

纈草，即中藥甘松，其功用詳載於加味補血湯（在後）下。至依的兒制纈草丁兒，乃纈草所浸之酒一分，混和以依的兒精五分。其用量，自十分瓦之三至一瓦，為虛脫狀態之興奮藥。依的兒為由硫酸及酒精制出之精液。其功用，先能奮



興，後則麻醉，為哥羅仿謨（行手術時蒙藥）之代用品。對於一切虛脫狀態及昏倒，用之立能奮興回蘇。又於種種疼痛胃疼、強劇之嘔吐及痙攣證狀等，一日用數次。用量自五滴至二十五滴（依的兒一滴為百分瓦之二）。

鹽酸莫兒比涅，即莫兒比涅而制以鹽酸者也。莫兒比涅，省文曰鹽莫。舊譯作嗎啡，原係由鴉片中煉出之精液。每乾燥鴉片十分，含有莫兒比涅一分強。以鹽酸制之，為色白中性極苦之針狀結晶。用量自千分瓦之一至百分瓦之一，可為奮興之藥，若再多用則麻醉，其毒較鴉片尤烈，不可輕用，小兒尤不宜輕用。

鹽酸歇魯因，係用鹽酸制歇魯因而成。歇魯因者，以莫兒比涅與鹽化亞含知爾加熱而制之。再以歇魯因溶解於鹽酸，而制為白色結晶性之粉末。肺勞家用為鎮咳定喘之要品。愈疼楚，催眠睡，善治氣管枝加答兒。其用量，一次千分瓦之一至千分瓦之五，一日數次。

碳酸那篤留謨，係碳酸制碳酸留謨而成，那篤留謨者，為金屬含鹽之藥品，制以碳酸，為無色半透明之菱角結晶。能振興胃中消化之機能，治呼吸器中之加答兒，膽汁排泄之障礙及膽道加答兒鬱積性黃疸，肝臟脹大。祛痰止嘔，通利大便。於糖尿病，用其大量有殊效。丁仲佑謂此藥內服，刺激食管黏膜過甚，往往誘起炎證。可以重碳酸那篤留謨代之。重碳酸那篤留謨，即那篤留謨，制以重碳酸，其功用與碳酸那篤留謨相似，較少刺激之性。每次用量，一瓦至一瓦五分。

西人對於緊要傳染之證，皆亟亟以撲滅毒菌為務。然其撲滅之法，惟知以毒攻毒而不知用化毒之藥，使毒菌暗消於無形。至於補正以勝毒，尤非西人所能知也。所謂以毒攻毒者，上所錄之西藥是也。遇身體壯實者，服之幸可救愈。若其身體本弱，吐瀉又至極點，有奄奄欲脫之勢，非補正以勝毒，與化毒之藥並用不可，所謂補正者，如拙擬急救回陽湯中人參、山藥、莢肉諸藥是也。所謂化毒者，如拙擬急救回生丹、衛生防疫寶丹及急救回陽湯中之朱砂是也。蓋凡藥中珍貴之品，皆有獨具之良能，如朱砂、珠、黃、犀、麝之類是也。其獨具之良能，化學家無從實驗，故西人皆不知用。

壬寅秋日，霍亂流行。執友毛仙閣之侄，受此證，至垂危，衣冠既畢，昇之床上。仙閣見其仍有微息，遂研朱砂錢許，和童便灌之，其病由此竟愈。

又一女子受此病，至垂危，醫者辭不治。時愚充教員於其處，求為診治，亦用藥無效。適有搖鈴賣藥者，言能治此證，亦單重用朱砂錢許，治之而愈。從此知朱砂善化霍亂之毒菌。至己未在奉天擬得急救回生丹、衛生防疫寶丹，兩方皆重用朱砂，治癒斯歲之患霍亂者若干，益信其有善化霍亂毒菌之專長也。若但以原質論，朱砂之原質為水銀、硫黃。今試以水銀、硫黃二藥並用，能治朱砂所治之證乎，吾知其必不能也。夫人命至重，國粹宜保，世之惟知重西醫者，尚其深思愚言哉。

治內外中風方

【搜風湯】

治中風。

防風（六錢）、真遼人參（四錢，另燉同服，或用野臺參七錢代之，高麗參不宜用）、清半夏（三錢）、生石膏（八錢）、殭蠶（二錢）、柿霜餅（五錢，沖服）、麝香（一分，藥汁送服）。

中風之證，多因五內大虛，或秉賦素虛，或勞力勞神過度，風自經絡襲入，直透膜原而達臟腑，令臟腑各失其職，或猝然昏倒，或言語謇澀，或洩便不利，或洩便不覺，或兼肢體痿廢偏枯，此乃至險之證。中之輕者，猶可遲延歲月，中之重者，治不如法，危在翹足間也。故重用防風引以麝香，深入臟腑以搜風。猶恐元氣虛弱，不能運化藥力以逐風外出，故用人參以大補元氣，扶正即以勝邪也。用石膏者，因風蘊臟腑多生內熱，人參補氣助陽分亦能生熱，石膏質重氣輕性復微寒，其重也，能深入臟腑，其輕也，能外達皮毛，其寒也，能祛臟腑之熱，而即解人參之熱也。用殭蠶者，徐靈胎謂邪之中人，有氣無形，穿經入絡，愈久愈深，以氣類相反之藥投之則拒而不入，必得與之同類者和入諸藥使為嚮導，則藥至病所，而邪與藥相從，藥性漸發，邪或從毛孔出，從二便出，不能復留，此從治之法也。殭蠶因風而僵，與風為同類，故善引祛風之藥至於病所成功也。用半夏、柿霜者，誠以此證皆痰涎壅滯，有半夏以降之，柿霜以潤之，而痰涎自息也。

此證有表不解，而浸生內熱者，宜急用發汗藥，解其表，而兼清其內熱。又兼有內風煽動者，可與後內中風治法匯通參觀，於治外感之中兼有熄內風之藥，方為完善。

中風之證，有偏寒者，有偏熱者，有不覺寒熱者。拙擬此方治中風之無甚寒熱者也。若偏熱者，宜《金匱》風引湯加減（乾薑、桂枝宜減半）。若偏寒者，愚別有經驗治法。曾治一媪，年五十許，於仲冬忽然中風昏倒，呼之不應，其胸中似有痰涎壅滯，大礙呼吸。診其脈，微細欲無，且遲緩，知其素有寒飲，陡然風寒襲入，與寒飲凝結為恙也。急用胡椒三錢搗碎，煎兩三沸，取濃汁多半茶杯灌之，呼吸頓覺順利。繼用乾薑六錢，桂枝尖、當歸各三錢，連服三劑，可作呻吟，肢體漸能運動，而左手足仍不能動。又將乾薑減半，加生黃耆五錢，乳香、沒藥各三錢，連服十餘劑，言語行動遂復其常。

若其人元氣不虛，而偶為邪風所中，可去人參，加蜈蚣一條、全蠍一錢。若其證甚實，而閉塞太甚者，或二便不通，或脈象鬱澀，可加生大黃數錢，內通外散，仿防風通聖散之意可也。徐靈胎曾治一人，平素多痰，手足麻木，忽昏厥遺尿、口噤手拳、痰聲如鋸。醫者進參附、熟地等藥，煎成末服。診其脈，洪大有力，面赤氣粗，此乃痰火充實，諸竅皆閉，服參附立危。遂以小續命湯去桂附，加生軍一錢為末，假稱他藥納之，恐旁人之疑駭也。三劑而有聲，五劑而能言。

然後以養血消痰之藥調之，一月後，步履如初。此案與愚所治之案對觀，則涼熱之間昭然矣。

又遺尿者多屬虛，而此案中之遺尿則為實，是知審證者，不可拘於一端也。然真中風證極少，類中風者極多，中風證百人之中真中風不過一二人。審證不確即凶危立見，此又不可不慎也。

【熄風湯】

治類中風。

人參五錢、赭石五錢煨研、大熟地一兩、山萸肉六錢去淨核、生杭芍四錢、烏附子一錢、龍骨五錢不用煨搗、牡蠣五錢不用煨搗。

類中風之證，其劇者忽然昏倒，不省人事，所謂屍厥之證也。秦越人論虢太子屍厥謂「上有絕陽之絡，下有破陰之紐」，妙哉其言也。蓋人之一身，陰陽原相維繫。陽性上浮而陰氣自下吸之，陰性下降而陽氣自上提之，陰陽互根，渾淪環抱，壽命可百年無恙也。有時保養失宜，下焦陰分虧損，不能維繫上焦陽分，則陽氣脫而上奔，又兼腎水不能濡潤肝木，則肝風煽動，痰涎上壅，而猝然昏倒，僵直如屍矣。故用赭石佐人參，以挽回其絕陽之絡，更有龍骨、牡蠣以收斂之，則陽能下濟。用萸肉佐熟地以填補其破陰之紐，更有附子以溫煦之，則陰可上達。用芍藥者，取其與附子同用，能收斂浮越之元氣歸藏於陰也。且此證肝風因虛而動，愈迫陽氣上浮。然此乃內生之風，非外來之風也。故宜用濡潤收斂之品以熄之。芍藥與龍骨、牡蠣、萸肉又為寧熄內風之妙品也。若其肝風雖動，而陰陽不至離絕，其人或怔忡不寧，或目眩頭暈，或四肢間有麻木之時可單將方中龍骨、牡蠣、萸肉各七八錢，更加柏子仁一兩以滋潤肝木，其風自熄。蓋肝為將軍之官，內寄龍雷之火，最難馴服，惟養之鎮之，恩威並用，而後驕將不難統馭也。

或問「中風之證，河間主火，東垣主氣，丹溪主濕，所論雖非真中風，亦係類中風，陳修園概目為小家技者何也」？答曰「以三子意中幾無所謂真中風，直欲執其方以概治中風之證也。如河間地黃飲子治少陰氣厥不至，舌暗不能言，足廢不能行，果其病固不差，其方用之多效。倘其證兼外感，服之轉能固閉風邪，不得外出，遺誤非淺。若《金匱》侯氏黑散、風引湯諸方，既治外感又治內傷，而其所用之藥，不但並行不悖，且能相助為理，超超玄著，神妙無窮，以視三子之方，寧非狹小。夫經方既如此超妙，而愚復有熄風湯與前搜風湯之擬者，非與前哲爭勝也。蓋為倉猝救急之計，與侯氏黑散諸方用意不同也」。

按：類中風之證不必皆因虛。王孟英曰「若其平素稟陽盛，過啖肥甘，積熱釀毒，壅寒隧絡，多患類中風、宜化痰清熱，流利機關。自始至終，忌投補滯。徐氏《洄溪醫案》中所治中風案最精當」。

【逐風湯】

治中風抽掣及破傷後受風抽掣者。

生箭耆（六錢）、當歸（四錢）、羌活（二錢）、獨活（二錢）、全蠍（二錢）、全蜈蚣（大者兩條）。

蜈蚣最善搜風，貫串經絡、臟腑無所不至，調安神經又具特長（因其節節有腦，是以善理神經）。而其性甚和平，從未有服之覺瞑眩者。曾治一媪，年六旬，其腿為狗咬破受風，周身抽掣。延一老醫調治，服藥十餘日，抽掣愈甚。所用之藥，每劑中皆有全蠍數錢，佐以祛風、活血、助氣之藥，彷彿此湯而獨未用蜈蚣。遂為擬此湯，服一劑而抽掣即止。又服一劑，永不反覆。又治一人，年三十餘，陡然口眼歪斜，其受病之邊，目不能瞬，俾用蜈蚣二條為末、防風五錢，煎湯送服，三次痊愈。審斯，則蜈蚣逐風之力，原迥異於他藥也。且其功效，不但治風也，愚於瘡癰初起甚劇者，恆加蜈蚣於托藥之中，莫不隨手奏效。雖《本經》謂有墮胎之弊，而中風抽掣，服他藥不效者，原不妨用。《內經》所謂「有故無殞，亦無殞也」。況此湯中，又有黃耆、當歸以保攝氣血，則用分毫何損哉？



【加味黃耆五物湯】

治歷節風證，周身關節皆疼，或但四肢作疼，足不能行步，手不能持物。

生箭耆（一兩）、於朮（五錢）、當歸（五錢）、桂枝尖（三錢）、秦艽（三錢）、廣陳皮（三錢）、生杭芍（五錢）、生薑（五片）。

熱者加知母，涼者加附子，脈滑有痰者加半夏。

《金匱》桂枝芍藥知母湯，治歷節風之善方也。而氣體虛者用之，仍有不效之時，以其不勝麻黃、防風之發也。今取《金匱》治風痺之黃耆五物湯，加白朮以健脾補氣，而即以逐痺（《本經》逐寒濕痺）。當歸以生其血，血活自能散風（方書謂血活風自去）。秦艽為散風之潤藥，性甚和平，祛風而不傷血。陳皮為黃耆之佐使，又能引肌肉經絡之風達皮膚由毛孔而出也。廣橘紅其大者皆柚也，非橘也。《本經》原橘、柚並稱，故用於藥中，橘、柚似無須分別（他處柚皮不可入藥）。且名為橘紅，其實皆不去白，誠以原不宜去也。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

湖北張某，患歷節風證，西醫名僂麻質斯，服其藥年餘無效，步履艱難，天未涼即著皮褲。診其脈，浮數有力，知為經絡虛而有熱之象。遂用加味黃耆五物湯，遵注熱者加知母，又加生薏米、鮮桑枝、牛膝、木通。服一劑覺輕減，三劑離杖，

五劑痊癒。近年用此方治痛風、歷節證，愈者甚多。若無熱者，即用書中原方，亦甚效驗。

江蘇平臺王錫光來函：

大樊莊顧子安，患肢體痿廢，時當溽暑，遍延中西醫診治無效，用加味黃五物湯治之，連服數劑痊愈。

【加味玉屏風散】

作湯服，治破傷後預防中風，或已中風而癱瘓，或因傷後房事不戒以致中風。生箭耆（一兩）、白朮（八錢）、當歸（六錢）、桂枝尖（錢半）、防風（錢半）、黃蠟（三錢）、生白礬（一錢）。

此方原為預防中風之藥，故用黃耆以固皮毛，白朮以實肌肉，黃蠟、白礬以護膜原，猶恐破傷時微有感冒，故又用當歸、防風、桂枝以活血散風。其防風、桂枝之份量特輕者，誠以此方原為預防中風而設，故不欲重用發汗之藥以開腠理也。蓋《本經》原謂黃耆主大風，方中重用黃耆一兩，又有他藥以為之佐使，宜其風證皆可治也。若已中風抽掣者，宜加全蜈蚣兩條。若更因房事不戒以致中風抽風者，宜再加真鹿角膠三錢（另煎兌服），獨活一錢半。若脈象有熱者，用此湯時，知母、天冬皆可酌加。自擬此方以來，凡破傷後恐中風者，俾服藥一劑，永無意外之變，用之數十年矣。

表侄高淑言之族人，被賊用槍彈擊透手心，中風抽掣，牙關緊閉。自牙縫連灌藥無效，勢已垂危。從前，其莊有因破傷預防中風，服此方者，淑言見而錄之。至此，淑言將此方授族人，一劑而愈。又一人，被傷後，因房事不戒，中風抽掣，服藥不效。友人毛仙閣治之，亦投以此湯而愈。夫愚擬此方，原但為預防中風，而竟如此多效，此愚所不及料者也。

【鎮肝熄風湯】

治內中風證（亦名類中風，即西人所謂腦充血證），其脈弦長有力（即西醫所謂血壓過高），或上盛下虛，頭目時常眩暈，或腦中時常作疼發熱，或目脹耳鳴，或心中煩熱，或時常噫氣，或肢體漸覺不利，或口眼漸形歪斜，或面色如醉，甚或眩暈，至於顛仆，昏不知人，移時始醒，或醒後不能復原，精神短少，或肢體痿廢，或成偏枯。

懷牛膝（一兩）、生赭石（一兩，軋細）、生龍骨（五錢，搗碎）、生牡蠣（五錢，搗碎）、生龜板（五錢，搗碎）、生杭芍（五錢）、玄參（五錢）、天冬（五錢）、川棟子（二錢，搗碎）、生麥芽（二錢）、茵陳（二錢）、甘草（錢半）。

心中熱甚者，加生石膏一兩。痰多者，加膽星二錢。尺脈重按虛者，加熟地黃八錢、淨萸肉五錢。大便不實者，去龜板、赭石，加赤石脂（喻嘉言謂石脂可代赭石）一兩。

風名內中，言風自内生，非風自外來也。《內經》謂「諸風掉眩，皆屬於肝」。蓋肝為木臟，木火熾盛，亦自有風，此因肝木失和，風自肝起。又加以肺氣不降，腎氣不攝，衝氣胃氣又復上逆，於斯，臟腑之氣化皆上升太過，而血之上注於腦者，亦因之太過，致充塞其血管而累及神經。其甚者，致令神經失其所司，至昏厥不省人事，西醫名為腦充血證，誠由剖解實驗而得也。是以方中重用牛膝以引

血下行，此為治標之主藥，而復深究病之本源，用龍骨、牡蠣、龜板、芍藥以鎮熄肝風，赭石以降胃降衝，玄參、天冬以清肺氣，肺中清肅之氣下行，自能鎮制肝木。至其脈之兩尺虛者，當係腎臟真陰虛損，不能與真陽相維繫。其真陽脫而上奔，並挾氣血以上衝腦部，故又加熟地、萸肉以補腎斂腎。從前所擬之方，原止此數味。後因用此方效者固多，間有初次將藥服下轉覺氣血上攻而病加劇者，於斯加生麥芽、茵陳、川棟子，即無斯弊。蓋肝為將軍之官，其性剛果，若但用藥強制，或轉激發其反動之力。茵陳為青蒿之嫩者，得初春少陽生發之氣，與肝木同氣相求，瀉肝熱兼舒肝鬱，實能將順肝木之性。麥芽為穀之萌芽，生用之亦善將順肝木之性使不抑鬱。川棟子善引肝氣下達，又能折其反動之力。方中加此三味，而後用此方者，自無他虞也。心中熱甚者，當有外感，伏氣化熱，故加石膏。有痰者，恐痰阻氣化之升降，故加膽星也。

按：內中風之證，曾見於《內經》。而《內經》初不名為內中風，亦不名為腦充血，而實名之為煎厥、大厥、薄厥。今試譯《內經》之文以明之，《內經》〈脈解篇〉曰「肝氣當治而未得，故善怒，善怒者名曰煎厥」，蓋肝為將軍之官，不治則易怒，因怒生熱，煎耗肝血，遂致肝中所寄之相火，掀然暴發，挾氣血而上衝腦部，以致昏厥。此非因肝風內動，而遂為內中風之由來乎？

又《內經》〈調經論〉曰「血之與氣，並走於上，此為大厥，厥則暴死。氣反則生，氣不反則死」。蓋血不自升，必隨氣而上升，上升之極，必至腦中充血。

至所謂氣反則生，氣不反則死者，蓋氣反而下行，血即隨之下行，故其人可生。若其氣上行不反，血必隨之充而益充，不至血管破裂不止，猶能望其復甦乎？讀此節經文，內中風之理明，腦充血之理亦明矣。

又《內經》〈生氣通天論〉曰「陽氣者，大怒則形絕，血宛（即鬱字）於上，使人薄厥」。觀此節經文，不待詮解，即知其為肝風內動，以致腦充血也。其曰薄厥者，言其腦中所宛之血，激薄其腦部，以至於昏厥也。細思三節經文，不但知內中風即西醫所謂腦充血，且更可悟得此證治法，於經文之中，不難自擬對證之方，而用之必效也。

特是證名內中風，所以別外受之風也。乃自唐、宋以來，不論風之外受、內生，渾名曰中風。夫外受之風為真中風，內生之風為類中風，其病因懸殊，治法自難從同，若辨證不清，本係內中風，而亦以祛風之藥發表之，其臟腑之血，必益隨發表之藥上升，則腦中充血必益甚，或至於血管破裂，不可救藥，此關未透，誠唐、宋醫學家一大障礙也。迨至宋末劉河間出，悟得風非皆由外中，遂創為五志過極動火而猝中之論，此誠由《內經》「諸風掉眩皆屬於肝」句悟出。蓋肝屬木，中藏相火，木盛火熾，即能生風也。大法，以白虎湯、三黃湯沃之，所以治實火也。以逍遙散疏之，所以治鬱火也（逍遙散中柴胡能引血上行最為忌用，是以鎮肝熄風湯中止用茵陳、生麥芽諸藥疏肝）。以通聖散（方中防風亦不宜用）、涼膈散雙解之，所以治表裡之邪火也。以六味湯滋之，所以壯水之主，以制陽光

也。以八味丸引之，所謂從治之法，引火歸源也（雖曰引火歸源，而桂、附終不宜用）。細審河間所用之方，雖不能絲絲入扣，然勝於但知治中風不知分內外者遠矣。且其謂有實熱者，宜治以白虎湯，尤為精確之論。愚治此證多次，其昏仆之後，能自甦醒者多，不能甦醒者少。其於甦醒之後，三四日間，現白虎湯證者，恆十居六七。因知此證，多先有中風基礎，伏藏於內，後因外感而激發，是以從前醫家，統名為中風。不知內風之動，雖由於外感之激發，然非激發於外感之風，實激發於外感之因風生熱，內外兩熱相並，遂致內風暴動，此時但宜治外感之熱，不可再散外感之風，此所以河間獨借用白虎湯，以瀉外感之實熱，而於麻桂諸藥概無所用。蓋發表之藥，皆能助血上行，是以不用，此誠河間之特識也。吾友張山雷（江蘇嘉定人），著有《中風斟詮》一書，發明內中風之證，甚為精詳。書中亦獨有取於河間，可與拙論參觀矣。

後至元李東垣、朱丹溪出，對於內中風一證，於河間之外，又創為主氣、主濕之說。東垣謂人之元氣不足，則邪湊之，令人猝倒僵仆，如風狀。夫人身之血，原隨氣流行，氣之上升者過多，可使腦部充血，排擠腦髓神經。至於昏厥，前所引《內經》三節文中已言之詳矣。若氣之上升者過少，又可使腦部貧血，無以養其腦髓神經，亦可至於昏厥。是以《內經》又謂「上氣不足，腦為之不滿，耳為之苦鳴，頭為之傾，目為之眩」。觀《內經》如此云云，其劇者，亦可至於昏厥，且其謂腦為之不滿，實即指腦中貧血而言也。由斯而論，東垣之論內中風，由於

氣虛邪湊，原於腦充血者之中風無關，而實為腦貧血者之中風，開其治法也。是則河間之主火，為腦充血，東垣之主氣，為腦貧血，一實一虛，迥不同也。至於丹溪則謂東南氣溫多濕，有病風者，非風也，由濕生痰，痰生熱，熱生風，此方書論中風者所謂丹溪主濕之說也。然其證原是痰厥，與腦充血、腦貧血皆無涉。即使二證當昏厥之時，間有挾痰者，乃二證之兼證，非二證之本病也。

按：其所謂因熱生風之見解，似與河間主火之意相同，而實則迥異。蓋河間所論之火生於燥，故所用之藥，注重潤燥滋陰。丹溪所論之熱生於濕，其所用之藥，注重去濕利痰。夫濕非不可以生熱，然因濕生熱，而動肝風者甚少矣（肝風之動多因有燥熱）。是則二子之說，仍以河間為長也。

又讀《史記》扁鵲傳，所治虢太子屍厥證，亦係內中風，而實為內中風之上盛下虛者，觀其未見太子也，而謂太子「其耳必鳴，其鼻必張」，其所以耳鳴、鼻張者，實因腦中氣血充盛之所排擠，豈非上盛乎。乃其見太子也，則謂上有絕陽之絡，下有破陰之紐，所謂上有絕陽之絡者，即謂腦中血管，為過盛之氣血排擠，將破裂也。所謂下有破陰之紐者，蓋謂其下焦陰分虧損，不能吸攝其陽分，是以前其真陽上脫，挾氣血而充塞腦部也。觀扁鵲之所云云，虢太子之屍厥，其為內中風之上盛下虛者，確乎無疑。當時扁鵲救醒虢太子，係用針砭法，後亦未言所用何藥，今代為擬方，當於鎮肝熄風湯中，加斂肝補腎之品。若方後所注加萸肉、熟地黃者，即為治此證之的方矣。



按：此證若手足漸覺不遂，口眼漸形歪斜，是其腦髓神經已為充血所累，其血管猶不至破裂也。若其忽然昏倒，移時復醒者，其血管或有罅漏，出血不多，猶不至破裂甚劇者也。若其血管破裂甚劇，即昏仆不能復蘇矣。是以此證宜防之於預，當其初覺眩暈頭疼，或未覺眩暈頭疼，而其脈象大而且硬，或弦長有力，即宜服鎮肝熄風湯。迨服過數劑後，其脈必漸漸和緩，後仍接續服之。必服至其脈與常脈無異，而後其中風之根蒂始除。若從前失治，至忽焉昏倒，而移時復蘇醒者，其肢體必有不遂之處。蓋血管所出之血，若黏滯其左邊司運動之神經，其右邊手足即不遂。若黏滯其右邊神經，而左邊手足即不遂（左邊神經管右半身，右邊神經管左半身）。若左右神經皆受傷損，其人恒至全體痿廢。治之者，亦宜用鎮肝熄風湯，服至脈象如常，其肢體即漸能動轉。然服過數劑之後，再於方中加桃仁、紅花、三七諸藥，以化其腦中瘀血，方能奏效。

又按：此證自唐宋以來，渾名之曰中風。治之者，亦不分其為內中外中，而概以風藥發之，誠為治斯證者之誤點。至清中葉王勳臣出，對於此證，專以氣虛立論。謂人之元氣，全體原十分，有時損去五分，所餘五分，雖不能充體，猶可支持全身。而氣虛者經絡必虛，有時氣從經絡虛處通過，並於一邊，彼無氣之邊，即成偏枯。爰立補陽還五湯，方中重用黃耆四兩，以峻補氣分，此即東垣主氣之說也。然王氏書中，未言脈象何如，若遇脈之虛而無力者，用其方原可見效。若其脈象實而有力，其人腦中多患充血，而復用黃耆之溫而升補者，以助其血愈上

行，必至凶危立見，此固不可不慎也。前者邑中有某孝廉，右手廢不能動，足仍能行。其孫出門，遇一在津業醫者甫歸，言此證甚屬易治，遂延之診視。所立病案言脈象洪實，已成癱證無疑。其方仿王氏補陽還五湯，有黃耆八錢。服藥之後，須臾昏厥不醒矣。夫病本無性命之憂，而誤服黃耆八錢，竟至如此，可不慎哉！五期《衷中參西錄》第三卷中，有論腦充血之原因及治法，且附有驗案數則，其所論者，實皆內中風證也。宜與上所論者，匯通參觀。

劉鐵珊將軍丁卯來津後，其腦中常覺發熱，時或眩暈，心中煩躁不寧，脈象弦長有力，左右皆然，知係腦充血證。蓋其憤激填胸，焦思積慮者已久，是以有斯證也。為其腦中覺熱，俾用綠豆實於囊中作枕，為外治之法。又治以鎮肝熄風湯，於方中加地黃一兩，連服數劑，腦中已不覺熱。遂去川棟子，又將生地黃改用六錢，服過旬日，脈象和平，心中亦不煩躁，遂將藥停服。

又天津鈴鐺閣街，於氏所娶新婦，過門旬餘，忽然頭疼。醫者疑其受風，投以發表之劑，其疼陡劇，號呼不止。其翁在中國銀行司賬，見同夥沈君閱五期《衷中參西錄》，見載有腦充血頭疼諸案，延愚為之診視，其脈弦硬而長，左部尤甚。知其肝膽之火上衝過甚也。遂投以鎮肝熄風湯，加龍膽草三錢，以瀉其肝膽之火。一劑病癒強半，又服兩劑，頭已不疼，而脈象仍然有力，遂去龍膽草，加生地黃六錢，又服數劑，脈象如常，遂將藥停服。

【附錄】

湖北天門崔蘭亭君來函：

張港楊新茂糧行主任患腦充血證，忽然仆地，上氣喘急，身如角弓，兩目直視。全家惶恐，眾醫束手，殮服已備，迎為診治。遵先生五期建瓴湯原方治之，一劑病癒強半，後略有加減，服數劑，脫然痊愈。

按：此鎮肝熄風湯，實由五期中建瓴湯加減而成，故附錄其來函於此，俾醫界同人，知此二方，任用其一，皆可治腦充血證也。

或問「中風無論內外，其肢體恒多痿廢，即其經絡必多閉塞，而方中重用龍骨牡蠣，獨不虞其收澀之性，益致經絡閉塞乎？」答曰「妙藥皆令人不易測，若但以收澀視龍骨、牡蠣，是未深知龍骨、牡蠣者也。《神農本經》謂龍骨能消癥瘕，其能通血脈、助經絡之流通可知。後世本草謂牡蠣能開關節老痰，其能利肢體之運動可知。是以《金匱》風引湯，原治熱癰癩，而方中龍骨、牡蠣並用也。曾治一叟，年近六旬，忽得痿廢證，兩手脈皆弦硬，心中騷擾不安，夜不能寐。每於方中重用龍骨、牡蠣，再加降胃之藥，脈始柔和，諸病皆減。二十劑外，漸能步履。審斯則龍骨、牡蠣之功用，可限量哉。又嘗治一媪，年過七旬，陡然左半身痿廢。其左脈弦硬而大，有外越欲散之勢（按：西法左半痿廢，當右脈有力，然間有脈有力與痿廢皆在一邊者）。投以鎮肝熄風湯，又加淨萸肉一兩，一劑而愈。夫年過七旬，痿廢鮮有愈者。而山萸肉味酸性溫，稟木氣最厚。夫木主疏通，《神農本經》謂其能逐寒濕痺，後世本草，謂其能通利九竅。在此方中，而其酸

收之性，又能協同龍骨、牡蠣，以斂戢肝火肝氣，使不上衝腦部，則神經無所擾害，自不失其司運動之機能，故痿廢易愈也。且此證，又當日得之即治，其轉移之機關，尤易為力也。統觀此二案，可無疑於方中之用龍骨、牡蠣矣。

【加味補血湯】

治身形軟弱，肢體漸覺不遂，或頭重目眩，或神昏健忘，或覺腦際緊縮作疼。甚或昏仆，移時甦醒，致成偏枯，或全身痿廢，脈象遲弱，內中風證之偏虛寒者（肝過盛生風，肝虛極亦可生風），此即西人所謂腦貧血病也。久服此湯當愈。

生箭耆（一兩）、當歸（五錢）、龍眼肉（五錢）、真鹿角膠（三錢，另燉同服）、丹參（三錢）、明乳香（三錢）、明沒藥（三錢）、甘松（一二錢）。

服之覺熱者，酌加天花粉、天冬各數錢。覺發悶者，加生雞內金錢半或二錢。服數劑後，若不甚見效，可用所煎藥湯送服麝香二厘（取其香能通竅）或真冰片半分亦可。若服後仍無甚效，可用藥湯，送制好馬錢子二分（製馬錢子法，詳后振頽丸下）。

腦充血者，其腦中之血過多，固能傷其腦髓神經。腦貧血者其腦中之血過少，又無以養其腦髓神經。是以究其終極，皆可使神經失其所司也。古方有補血湯，其方黃耆、當歸同用，而黃耆之份量，竟四倍於當歸，誠以陰陽互為之根，人之氣壯旺者，其血分自易充長。況人之腦髓神經，雖賴血以養之，尤賴胸中大氣上升以斡旋之。是以《內經》謂「上氣不足，腦為之不滿，耳為之苦鳴，頭為之傾，目為之眩」，所謂上氣者，即胸中大氣上升於腦中者也。因上氣不足，血之隨氣而注於腦者必少，而腦為之不滿，其腦中貧血可知。且因上氣不足，不能斡旋其神經，血之注於腦者少，無以養其神經，於是而耳鳴、頭傾、目眩，其人可忽至

昏仆可知。由此知因腦部貧血以成內中風證者，原當峻補其胸中大氣，俾大氣充足，自能助血上升，且能斡旋其腦部，使不至耳鳴、頭傾、目眩也。是以此方不以當歸為主藥，而以黃耆為主藥也。用龍眼肉者，因其味甘色赤，多含津液，最能助當歸以生血也。用鹿角膠者，因鹿之角原生於頭頂督脈之上，督脈為腦髓之來源，故鹿角膠之性善補腦髓。凡腦中血虛者，其腦髓亦必虛，用之以補腦髓，實可與補血之藥相助為理也。用丹參、乳香、沒藥者，因氣血虛者，其經絡多瘀滯，此於偏枯痿廢亦頗有關係，加此通氣活血之品，以化其經絡之瘀滯，則偏枯痿廢者自易愈也。用甘松者，為其能助心房運動有力，以多輸血於腦，且又為調養神經之要品，能引諸藥至腦以調養其神經也。用麝香、梅片者，取其香能通竅以開閉也。用制過馬錢子者，取其能動腦髓神經使之靈活也。

按：甘松，即西藥中之纈草，此係東人之名，西人則名為拉底克斯瓦洛倫內，其氣香，味微酸。《本經》謂其治暴熱、火瘡、赤氣、疥癩、疽痔、馬鞍、熱氣。《名醫別錄》謂其治癰腫、浮腫、結熱、風痺、不足、產後痛。甄權謂其治毒風瘡痺，破多年凝血，能化膿為水，產後諸病，止腹痛、餘疹、煩渴。《大明》謂其除血氣心腹痛、破結、催生、落胞、血暈、鼻血、吐血、赤白帶下、眼障膜、丹毒、排膿、補痿。西人則以為興奮之品，善治心臟麻痺、霍亂轉筋。東人又以為鎮靜神經之特效藥，用治癲狂、癩瘡諸病。蓋為其氣香，故善興奮心臟，使不至於麻痺，而其馨香透竅之力，亦自能開痺通瘀也。為其味酸，故能保安神經，

使不至於妄行，而酸化軟堅之力，又自能化多年之癥結，使盡消融也。至於其能補痿，能治霍亂轉筋者，即心臟不麻痺，神經不妄行之功效外著者也。孰謂中西醫理不相貫通哉！

鄰村龍潭莊高姓叟，年過六旬，漸覺兩腿乏力，浸至時欲眩仆，神昏健忘。恐成痿廢，求為診治。其脈微弱無力。為制此方服之，連進十劑，兩腿較前有力，健忘亦見愈，而仍有眩暈之時。再診其脈，雖有起色，而仍不任重按。遂於方中加野臺參、天門冬各五錢，威靈仙一錢，連服二十餘劑始愈。用威靈仙者，欲其運化參、之補力，使之靈活也。

門人張甲升曾治一人，年三十餘。於季冬負重貿易，日行百餘里，歇息時，又屢坐寒地。後覺腿疼，不能行步，浸至臥床不能動轉，周身筋骨似皆痿廢，服諸藥皆不效。甲升治以加味補血湯，將方中乳香、沒藥皆改用六錢，又加淨莢肉一兩。數劑後，腿即不疼。又服十餘劑，遂痊愈。

按：加味補血湯，原治內中風之氣血兩虧者，而略為變通，即治腿疼如此效驗，可謂善用成方者矣。

治小兒風證方

【定風丹】

治初生小兒綿風，其狀逐日抽掣，綿綿不已，亦不甚劇。

生明乳香（三錢）、生明沒藥（三錢）、硃砂（一錢）、全蜈蚣（大者一條）、全蠍（一錢）。

共為細末，每小兒哺乳時，用藥分許，置其口中，乳汁送下，一日約服藥五次。

此方以治小兒綿風或驚風，大抵皆效，而能因證制宜，再煮湯劑以送服此丹，則尤效。

一小兒，生後數日即抽綿風。一日數次，兩月不愈。為擬此方，服藥數日而愈。所餘之藥，又治癒小兒三人。

宗弟相臣，青縣之名醫也，喜用此丹以治小兒驚風。又恆隨證之涼熱虛實，作湯劑以送服此丹。其所用之湯藥方，頗有可採。爰錄其治驗之原案二則於下。

（原案一）己巳端陽前，友人黃文卿幼子，生六月，頭身胎毒終未癒。稟質甚弱，忽肝風內動，抽掣綿綿不休。凶門微凸，按之甚軟，微有赤色。指紋色紫為爪形。目睛昏而無神，或歪，脈浮小無根，此因虛氣化不固，致肝陽上衝腦部擾及神經也。文卿云「此證西醫已諉為不治，不知尚有救否」？答曰「此證尚可



為，聽吾用藥，當為竭力治癒」。遂先用定風丹三分，水調灌下，繼用生龍骨、生牡蠣、生石決明以潛其陽；鉤籐鉤、薄荷葉、羚羊角（銼細末三分）以熄其風；生箭耆、生山藥、山萸肉、西洋參以補其虛；清半夏、膽南星、粉甘草以開痰降逆和中。共煎湯多半杯，調入定風丹三分，頻頻灌之。二劑肝風止，又增損其方，四劑痊愈。

按：黃耆治小兒百病，明載《本經》，惟此方用之，微有升陽之嫌。然《本經》又謂其主大風，肝風因虛內動者，用之即能熄風可知。且與諸鎮肝斂肝之藥並用，若其份量止用二三錢，原有益而無損也。

（原案二）天津聶姓幼子，生七月，夜間忽患肝風，抽動喘息，不知啼。時當仲夏，天氣亢旱燥熱，察其風關、氣關紋紅有爪形，脈數身熱，知係肝風內動。急囑其乳母，將小兒置床上，不致懷抱兩熱相並。又囑其開窗，以通空氣。先用急救回生丹吹入鼻中，以鎮涼其腦係。遂灌以定風丹三分。又用薄荷葉、黃菊花、鉤籐鉤、梔子、羚羊角以散風清熱，生龍骨、生牡蠣、生石決明以潛陽鎮逆，天竹黃、牛蒡子、川貝母以利痰定喘。將藥煎好，仍調入定風丹三分，囑其作數次灌下，勿擾其睡。嗣來信，一劑風熄而病癒矣。

按：此二證，雖皆係肝風內動抽掣，而病因虛實迥異，相臣皆治以定風丹，而其煎湯送服之藥，因證各殊。如此善用成方，可為妙手靈心矣。又獻縣劉姓之

嬰孩，抽綿風不已，夜半詢方，知病危急，適存有按小兒風證方所制定風丹，與以少許，服之立止，永未再犯。後屢用此方皆效。

【附方】

鮑雲韶《驗方新編》預防小兒臍風散，方用枯礬、硼砂各二錢半、硃砂二分、冰片、麝香各五厘，共為末。凡小兒降生後，洗過，即用此末擦臍上。每小兒換襁布時，仍擦此末。臍帶落後，亦仍擦之。擦完一料，永無臍風之證。

按：此方最妙，愚用之多次皆效。真育嬰之靈丹也。

【鎮風湯】

治小兒急驚風，其風猝然而得，四肢搐溺，身挺頸痙，神昏面熱，或目睛上竄，或痰涎上壅，或牙關緊閉，或熱汗淋漓。

鉤藤鉤（三錢）、羚羊角（一錢，另燉兌服）、龍膽草（二錢）、青黛（二錢）、清半夏（二錢）、生赭石（二錢，軋細）、茯神（二錢）、殭蠶（二錢）、薄荷葉（一錢）、硃砂（二分，研細送服）。磨濃生鐵鏞水煎藥。

小兒得此證者，不必皆由驚恐。有因外感之熱，傳入陽明而得者，方中宜加生石膏；有因熱瘧而得者，方中宜加生石膏、柴胡。

急驚之外，又有所謂慢驚者，其證皆因寒，與急驚之因熱者，有冰炭之殊。方書恆以一方治急、慢驚風二證，殊屬差謬。慢驚之證，惟莊在田《福幼編》辨之最精，用方亦最妙。其辨慢驚風，共十四條。一、慢驚吐瀉，脾胃虛寒也。一、慢驚身冷，陽氣抑遏不出也。一、慢驚鼻風煽動，真陰失守，虛火燒肺也。一、慢驚面色青黃及白，氣血兩虛也。一、慢驚口鼻中氣冷，中寒也。一、慢驚大小便清白，腎與大腸全無火也。一、慢驚昏睡露睛，神氣不足也。一、慢驚手足抽掣，血不行於四肢也。一、慢驚角弓反張，血虛筋急也。一、慢驚乍寒乍熱，陰血虛少，陰陽錯亂也。一、慢驚汗出如洗，陰虛而表不固也。一、慢驚手足痙攣，血不足養筋也。一、慢驚凶門下陷，虛至極也。一、慢驚身雖發熱、口唇焦裂出血卻不喜飲冷茶水，進以寒涼，愈增危篤，以及所吐之乳、所瀉之物皆不甚消化，

脾胃無火可知。唇之焦黑，乃真陰之不足也明矣。其證多得之吐瀉之餘、久瘧、久痢，或痘後，或因風寒飲食積滯過用攻伐之藥傷脾，或稟賦本虛，或誤服涼藥，或因急驚而用藥攻降太過，或失於調養，皆可致此證也。其治法，先用逐寒蕩驚湯，大辛大熱之劑，衝開胸中寒痰，可以受藥不吐，然後接用加味理中地黃湯，諸證自愈。

脾風之證，亦小兒發瘧之證，即方書所謂慢驚風也。因慢驚二字欠解，近世方書有改稱慢脾風者，有但稱脾風者。二名較之，似但稱脾風較妥，因其證之起點由於脾胃虛寒也。蓋小兒雖為少陽之體，而少陽實為稚陽，有若草木之萌芽，嬌嫩畏寒。是以小兒或飲食起居多失於涼，或因有病過服涼藥，或久瘧、久痢，即不服涼藥亦可因虛生涼，浸成脾風之證。其始也，因脾胃陽虛，寒飲凝滯於賁門之間，阻塞飲食不能下行，即下行亦不能消化，是以上吐而下瀉。久之，則真陰虛損，可作灼熱，其寒飲充盛，迫其身中之陽氣外浮，亦可作灼熱，浸至肝虛風動，累及腦氣筋，遂至發瘧，手足抽掣。此證莊在田《福幼編》論之最詳，其所擬之逐寒蕩驚湯及加味理中地黃湯二方亦最善。先用逐寒蕩驚湯，大辛大熱之劑，衝開胸中寒痰，可以受藥不吐，然後接用加味理中地黃湯，諸證自愈。愚用其方救人多矣，而因證制宜又恆有所變通，方能隨手奏效。

【附方】

逐寒蕩驚湯：用胡椒、炮薑、肉桂各一錢，丁香十粒，共搗成細渣。以灶心土三兩煮湯，澄清，煎藥大半茶杯（藥皆搗碎不可久煎，肉桂又忌久煎，三四沸即可），頻頻灌之。接服加味理中地黃湯，定獲奇效。

按：此湯當以胡椒為君，若遇寒痰結胸之甚者，當用二錢，而稍陳者，又不堪用。族侄蔭霖六歲時，曾患此證。飲食下嚥，胸膈格拒，須臾吐出。如此數日，昏睡露睛，身漸發熱。投以逐寒蕩驚湯原方，盡劑未吐。欲接服加味理中地黃湯，其吐又作。恍悟此藥取之鄉間小藥坊，其胡椒必陳。且只用一錢，其力亦小，遂於食料鋪中，買胡椒二錢，炮薑、肉桂、丁香，仍按原方，煎服一劑。而寒痰開，可以受食。繼服加味理中地黃湯，一劑而愈。

又方中所用灶心土，須為變更。凡草木之質，多含碱味。草木燒化，其碱味皆歸灶心土中。若取其土煎湯，碱味濃厚，甚是難服，且與脾胃不宜。以灶壙內周遭火燎紅色之土代之，則無碱味，其功效遠勝於灶心土。

【附方】

加味理中地黃湯：用熟地五錢，焦白朮三錢，當歸、黨參、炙耆、故紙（炒搗）、棗仁（炒搗）、枸杞各二錢，炮薑、萸肉（去淨核）、炙草、肉桂各一錢，生薑三片，紅棗三枚（揀開），胡桃二個（用仁）打碎為引。仍用灶心土（代以灶壙土）二兩，煮水煎藥。取濃汁一茶杯，加附子五分，煎水攪入。量小兒大小，分數次灌之。如咳嗽不止者，加米殼、金櫻子各一錢。如大熱不退者，加生白芍

一錢。泄瀉不止，去當歸加丁香七粒。隔二三日，止用附子二三分。蓋因附子大熱，中病即宜去之。如用附子太多，則大小便閉塞不出。如不用附子，則臟腑沉寒，固結不開。若小兒虛寒至極，附子又不妨用一二錢。此所謂神而明之，存乎其人，用者審之。若小兒但瀉不止，或微見驚搐，尚可受藥，吃乳便利者，並不必服逐寒蕩驚湯，只服此湯一劑，而風定神清矣。若小兒尚未成慢驚，不過昏睡發熱，或有時熱止，或晝間安靜，夜間發熱，均宜服之。若新病壯實之小兒，眼紅口渴者，乃實火之證，方可暫行清解。但果係實火，必大便閉結，氣壯聲洪，且喜多飲涼水。若吐瀉交作，則非實火可知。此方補造化陰陽之不足，有起死回生之功。倘大虛之後，服一劑無效，必須大劑多服為妙。方書所謂天吊風、慢脾風皆係此證。

按：此原方加減治瀉不止者，但加丁香，不去當歸，而當歸最能滑腸，瀉不止者，實不宜用若減去當歸，恐滋陰之藥少，可多加熟地一、二錢（又服藥瀉仍不止者，可用高麗參二錢搗為末，分數次，用藥湯送服，其瀉必止）。

又按：慢驚風不但形狀可辨，即其脈亦可辨。族侄蔭棠七八歲時，瘧疾愈後，忽然吐瀉交作，時霍亂盛行，其家人皆以為霍亂證。診其脈弦細而遲，六脈皆不閉塞。愚曰「此非霍亂。吐瀉帶有黏涎否」，其家人謂偶有帶時。愚曰「此寒痰結胸，格拒飲食，乃慢驚風將成之兆也」。投以逐寒蕩驚湯、加味理中地黃湯各一劑而愈。

又此二湯治慢驚風，雖甚效驗。然治此證者，又當防之於預，乃為完全之策。一孺子，年五六歲。秋夏之交，恣食瓜果當飯。至秋末，其行動甚遲，正行之時，或委坐於地。愚偶見之，遂懇切告其家人曰「此乃慢驚風之先兆也。小兒慢驚風證，最為危險而此時調治甚易，服藥兩三劑，即無患矣」。其家人不以為然。至冬初，慢驚之形狀發現，嘔吐不能受食，又不即治。遷延半月，病勢垂危，始欲調治，而服藥竟無效矣。

又有狀類急驚，而病因實近於慢驚者。一童子，年十一二，咽喉潰爛。醫者用吹喉藥吹之，數日就愈。忽然身挺，四肢搖擗，不省人事，移時始醒，一日數次，診其脈甚遲濡。詢其心中，雖不覺涼，實畏食涼物，其呼吸似覺短氣。時當仲夏，以童子而畏食涼，且徵以脈象病情，其為寒痰凝結，瘀寒經絡無疑。投以《傷寒論》白通湯，一劑痊愈。

又治一未周歲小孩，食乳即吐，屢次服藥亦吐出，凶門下陷，睡時露睛，將成脾風。俾其於每吃乳時，用生硫黃細末一捻，置兒口中，乳汁送下，其吐漸稀，旬日痊愈。

治癩風方

【加味磁朱丸】

治癩風。

磁石（二兩，能吸鐵者，研極細水飛出，切忌火）、赭石（二兩）、清半夏（二兩）、硃砂（一兩）。

上藥各制為細末。再加酒麴半斤，軋細過羅，可得細麴四兩。炒熟二兩，與生者二兩，共和藥為丸，桐子大。鐵鑪水煎湯，送服二錢，日再服。

磁石為鐵、氧二種原質化合，含有磁氣。其氣和異性相引，同性相拒，頗類電氣，故能吸鐵。煨之則磁氣全無，不能吸鐵，用之即無效。然其石質甚硬，若生入丸散中，必制為極細末，再以水飛之，用其隨水飛出者方妥。或和水研之，若拙擬磨翳散（在第八卷）之研飛爐甘石法，更佳。

又硃砂無毒，而煨之則有毒。按化學之理，硃砂原硫黃、水銀二原質合成，故古方書，皆謂硃砂內含真汞，汞即水銀也。若之，則仍將分為硫黃、水銀二原質，所以有毒。又原方原用神麴，而改用酒麴者，因坊間神麴發皆未能如法，多帶酸味，轉不若造酒麴者，業有專門，麴發甚精，用之實勝於神麴也。



磁朱丸方，乃《千金方》中治目光昏耗、神水寬大之聖方也。李瀕湖解曰「磁石入腎，鎮養真陰，使腎水不外移。硃砂入心，鎮養心血，使邪火不上侵。佐以神麴，消化滯氣，溫養脾胃生發之氣」，乃道家媒合嬰兒姤女之理。

按：道家以腎為嬰兒，心為姤女，脾為黃婆。每當呼氣外出之時，腎氣隨呼氣上升，是嬰兒欲有求於姤女也。當此之際，即借脾土鎮靜之力，引心氣下降，與腎氣相會，此所謂心腎相交，即道家所謂黃婆媒合嬰兒姤女之理也。然從前但知治眼疾而不知治癩風，至柯韻伯稱此方治癩風如神，而愚試之果驗，然不若加赭石、半夏之尤為效驗也。

此方所以能治癩風者，因癩風之根伏藏於腎。有時腎中相火暴動，癩風即隨之而發。以致痰涎上湧，昏不知人。夫相火為陰中之火，與兩間之電氣為同類。夫電氣喜緣鐵傳遞，磁石中含鐵質，且能吸鐵，故能伏藏電氣，即兼能伏藏與電氣同類之相火也。又相火之發動，恒因君火之潛通，有朱砂之寧靜心火，則相火愈不妄動矣。又電氣入土則不能發聲。故喻嘉言謂，伏制陰分之火，當以培養脾土為主。蓋以土能制電，即能制水中之火，有神麴以溫補脾胃，則相火愈深潛藏矣。原方止此三味，為加赭石、半夏者，誠以癩風之證，莫不氣機上逆，痰涎上湧。二藥並用，既善理痰，又善鎮氣降氣也。送以鐵鏞湯者，以相火生於命門，寄於肝膽，相火之暴動實於肝膽有關，此肝膽為木臟，即為風臟，內風之煽動，

亦莫不於肝膽發軔。鐵鏽乃金之餘氣，故取金能制木之理，鎮肝膽以熄內風，又取鐵能引電之理，借其重墜之性，以引相火下行也。

友人祁伯卿之弟患癩風，百藥不效。後得一方，用乾熊膽若黃豆粒大一塊（約重分半），涼水少許浸開服之（冬月宜溫水浸開溫服），數次而愈。伯卿向愚述之，因試其方果效。

【通變黑錫丹】

治癩風。

鉛灰（二兩，研細）、硫化鉛（一兩，研細）、麥麩（兩半，炒熟）。

上三味，水和為丸，桐子大。每服五六丸，多至十丸。用淨芒硝四五分，沖水送服。若服藥後，大便秘利者（鉛灰硫化鉛皆能澀大便），芒硝又宜多用。

古方有黑錫丹，用硫黃與鉛化合，以治上熱下涼，上盛下虛之證，洵為良方。而猶未盡善者，因其雜以草木諸熱藥，其性易升浮，即不能專於下達。向曾變通其方，專用硫化鉛，和熟麥麩為丸，以治癩風數日一發者，甚有效驗。乃服至月餘，因覺熱停服，旬餘病仍反覆。遂又通變其方，多用鉛灰，少用硫化鉛，俾其久服不致生熱，加以累月之功，癩風自能除根。更佐以健脾，利痰、通絡、清火之湯劑，治法尤為完善（七卷中有愈癩丹方宜參觀）。

取鉛灰法：用黑鉛數斤，熔化後，其面上必有浮灰。屢次熔化，即可屢次取之。

制硫化鉛法：用黑鉛四兩，鐵鍋內熔化。再用硫黃細末四兩，撒於鉛上。硫黃皆著，急用鐵鏟拌炒。鉛經硫黃燒煉，結成砂子，取出晾冷，碾軋成餅者（係未化透之鉛）去之，餘者，再用乳鉢研極細。

【一味鐵養湯】

治癩風，及肝膽之火暴動，或脅疼，或頭疼目眩，或氣逆喘吐，上焦煩熱，至一切上盛下虛之證皆可。用其湯煎藥，又兼能補養血分。

方用長鑄生鐵，和水磨取其鏽，磨至水皆紅色，煎湯服之。

化學家名鐵鏽為鐵氧，以鐵與氧氣化合而成鏽也。其善於鎮肝膽者，以其為金之餘氣，借金以制木也。其善治上盛下虛之證者，因其性重墜，善引逆上之相火下行。相火為陰中之火，與電氣為同類，此即鐵能引電之理也。其能補養血分者，因人血中原有鐵鏽，且取鐵鏽嗅之，又有血腥之氣，此乃以質補質，以氣補氣之理。且人身之血，得氧氣則赤，鐵鏽原鐵與氧氣化合，故能補養血分也。西人補血之藥，所以有鐵酒。

一六歲幼女，初數月一發癩風，後至一日數發，精神昏昏若睡，未有醒時。且兩目露睛，似兼慢驚。遂先用《福幼編》治慢驚之方治之，而露睛之病除。繼欲治其癩風，偶憶方書有用三家磨刀水洗瘡法，因思三乃木數，可以入肝，鐵鏽能鎮肝，以其水煎藥，必能制肝膽上衝之火，以熄內風。乃磨水者，但以水貯罐中，而煎藥者，誤認為藥亦在內，遂但煎其水服之，其病竟愈。後知藥未服，仍欲煎服。愚曰「磨刀水既對證，藥可不服」。自此日煎磨刀水服兩次，連服數日，癩風永不再發。

一人，年三十許，癩風十餘年不愈，其發必以夜。授以前加味磁朱丸方，服之而愈。年餘其病又反覆，然不若從前之劇。俾日磨濃鐵鏽水，煎湯服之，病遂除根。

族家嫂，年六旬，夜間忽然嘔吐頭疼，心中怔忡甚劇，上半身自汗。其家人以為霍亂證。診其脈，關前浮洪，搖搖而動。俾急磨濃鐵鏽水，煎湯服下即愈。友人韓厘廷曾治一人，當惱怒之後，身軀忽然後挺，氣息即斷，一日數次。厘廷診其脈，左關虛浮。遂投以莢肉（去淨核）、龍骨、牡蠣（皆不用煨）、白芍諸藥，用三家磨刀水煎之，一日連服二劑，病若失。

西藥治癩風者，皆係麻醉腦筋之品，強制腦筋使之不發，鮮能拔除病根。然遇癩風之劇而且勤，身體羸弱，不能支持者，亦可日服其藥兩次，以圖目前病不反覆，而徐以健脾、利痰、通絡、清火之藥治之。迨至身形強壯，即可停止西藥，而但治以健脾、利痰、通絡、清火之品。或更佐以鎮驚（若硃砂、磁石類）、祛風（若蜈蚣、全蠍類）、透達臟腑（若麝香、牛黃類）之品，因證制宜，病根自能拔除無餘也。爰將西藥之可用者，開列於下。

臭剝，係貌羅謨與加留謨化合，故亦名貌羅加留謨。為光白色、方形結晶，無臭氣，有辛鹹味，乃麻醉鎮痙藥。在神經系統能呈鎮靜作用，故為神經諸病及癩癩病之特效藥。至因神經不眠、妊婦嘔吐、男子夢遺等證，用之皆效。每服一瓦，可漸加至三瓦。久服傷脾胃，昏人神智。此藥宜與臭素安母紐謨、臭素那篤

留謨同用（三藥等分可服兩瓦）。蓋三種皆為鹽基同性之藥，那篤留謨不損神智，傷脾胃較甚，安母紐謨不傷脾胃，力則稍遜。

抱水過魯拉兒，為無色透明斜條棱柱結晶。有特異之香氣，味微苦，兼苛辣。乃亞舍答兒、亞爾埵菲篤之三格兒化合物。長於催睡鎮瘳，功用與臭剝相近，而其力實猛於臭剝且長於臭剝，用之大量，一次不過半瓦。愚常用臭剝與臭素安母紐謨各兩瓦，抱水過魯拉兒一瓦，摻炒熟麥麵十瓦，為丸桐子大，名之曰抱水三物丸。每服十五六丸，以治癩瘡、不睡、夢遺甚效。

治肢體痿廢方

【補偏湯】

治偏枯。

生黃耆一兩五錢、當歸五錢、天花粉四錢、天冬四錢、甘松三錢、生明乳香三錢、生明沒藥三錢。

偏枯之證，因其胸中大氣虛損，不能充滿於全身，外感之邪即於其不充滿之處襲之經絡，閉塞血脈，以成偏枯之證。病在左者，宜用鹿茸（湯浸兌服）、鹿角（銼細炙服），或鹿角膠（另燉同服）作引。病在右者，宜用虎骨（銼細炙服）或虎骨膠（另燉同服）作引（作引之理詳第四卷活絡效靈丹下）。初服此湯時，宜加羌活二錢，全蜈蚣一條（焙焦研服），以祛風通絡，三四劑後去之。脈大而弦硬者，宜加山萸肉（核皆去淨）、生龍骨、生牡蠣各數錢，至脈見和軟後去之。服之覺悶者，可佐以疏通之品，如丹參、生雞內金（搗細）、陳皮、白芥之類，凡破氣之藥皆不宜用。覺熱者，可將花粉、天冬加重，熱甚者可加生石膏數錢，或至兩許。試觀《金匱》治熱癰癩有風引湯，方中石膏與寒水石並用，《千金》小續命湯為六經中風之通劑，去附子，加石膏、知母，名白虎續命湯，古法可考也。覺涼者，宜去花粉、天冬。涼甚者加附子、肉桂（搗細沖服）。

甘松西人名拉底克斯瓦洛倫內，東人名纈草，氣香味微酸。《本經》謂其治暴熱、火瘡、赤氣、疥癩、疽。《別錄》謂其除浮腫、結熱、風痺、不足。甄權

謂其治毒風、瘡痺、破多年凝血、產後諸病。《日華》謂其治血氣心腹疼、癥結、血動鼻衄、吐血、赤白帶下、赤眼障膜、丹毒，排膿補痿。西人則以為奮興之品，用治霍亂轉筋。東人謂有鎮靜神經之效，用治癲狂癩瘡。蓋甘鬆氣香能通，故善助心臟之奮興，味酸能斂，故善制腦筋之妄行，其性善化溼瘀活血脈，故能愈疼消癥，善治一切血證及風痺、瘡痺、痿廢也。且能助心臟調腦筋，尤為痿痺之要著也。

或問「王勳臣謂，偏枯原非中風，元氣全體原有十分，有時損去五分餘五分，雖不能充體，猶可支援全身，而氣虛者經絡必虛，有時氣從經絡虛處透過，並於一邊，彼無氣之邊即成偏枯。故患此證者，未有兼發寒熱頭疼諸證者。若執王氏之說，則《靈樞經》所謂虛邪偏客於半身，其人深者，內居榮衛，榮衛衰則真氣去，邪風獨留，發為偏枯，與《素問》所謂風中五臟六腑之俞，所中則為偏枯者，皆不足言歟」？答曰「王氏謂偏枯因氣虛誠為卓識，而必謂偏枯不因中風，乃王氏閱歷未到也。憶數年前，族家姊，年七旬有三，得偏枯證三四日間，脈象洪實，身熱燥渴，喘息迫促，舌強直幾不能言。愚曰『此乃癱瘓基礎預伏於內，今因外感而發也。然外感之熱已若燎原，宜先急為治癒，然後再議他證』。遂仿白虎加人參之意，共用生石膏十兩，大熱始退（詳案在第六卷仙露湯下），審是則偏枯之根源，非必由中風，而其初發之機，大抵皆由中風，特中風有輕重，輕者人自不覺有外感耳。



或又問曰「王氏之論既非吻合，而用其補陽還五湯者何以恒多試驗」？答曰「王氏之補陽還五湯以補氣為主，故重用黃耆四兩為君，而《神農本經》黃耆原主大風。許胤宗治中風不醒，不能進藥者，用黃耆、防風數斤，煮湯乘熱置病人鼻下熏之，病人即醒，則黃耆善治風可知。由是觀之，王氏之論非吻合，王氏之方實甚妥善也。且治偏枯當補氣分，亦非王氏之創論也。《金匱》治風痺身體麻木，有黃耆五物湯，方中亦以黃耆為君，實王氏補陽還五湯之權輿也」。

或問「偏枯之證既有外感襲人經絡，閉塞血脈，子方中複有時加龍骨、牡蠣、莢肉收澀之品其義何居」？答曰「龍骨斂正氣而不斂邪氣，此徐靈胎注《本經》之言，誠千古不刊之名論也。而愚則謂龍骨與牡蠣同用，不惟不斂邪氣，轉能逐邪氣使之外出，陳修園謂龍屬陽而潛於海，故其骨能引逆上之火、汨濫之水下歸其宅。若與牡蠣同用，為治痰之神品，而愚則謂龍骨、牡蠣同用，最善理關節之痰。凡中風者，其關節間皆有頑痰凝滯，是以《金匱》風引湯治熱癱瘓，而龍骨、牡蠣並用也。不但此也，嘗診此證，左偏枯者，其左脈必弦硬，右偏枯者，其右脈必弦硬。夫弦硬乃肝木生風之象，其內風兼動，可知龍骨、牡蠣大能寧靜內風，使脈之弦硬者變為柔和。曾治一叟，年近六旬，忽得痿廢證。兩手脈皆弦硬，心中騷擾不安，夜不能寐。每於方中重用龍骨、牡蠣，再加降胃之藥，脈始柔和，諸病皆減，二十劑外，漸能步履。審是則龍骨、牡蠣之功用可限量哉。至莢肉為補肝之主藥，其酸溫之性，又能引諸藥入肝以熄風。曾治一媪，年過七旬，陡然

左半身痿廢，其左脈弦硬而大，有外越欲散之勢，投以此湯加萸肉一兩，一劑而愈。夫年過七旬，癱瘓鮮而愈者，蓋萸肉稟木氣最厚，木主疏通，《神農本經》謂其逐寒濕痺，後世本草亦謂其能通利九竅。李士材治肝虛脅疼，與當歸同用，其方甚效。愚嘗治肝虛筋病，兩腿牽引作疼甚劇者，嘗重用至兩許，佐以活氣血之藥，即遂手奏效（詳案在第二卷曲直湯下），是萸肉既能補正又善逐邪，酸收之中，實大具條暢之性，故於偏枯之證，脈之弦硬而大者，特之亦即有捷效也。

按：過酸則傷筋，故病忌食酸。萸肉至酸，而轉能養筋，此亦藥性之特異者也。

或問「西人謂人身之知覺運動，皆腦氣筋主之，故於偏枯痿廢諸證，皆謂腦氣筋受病，而子之論則責重胸中大氣，豈西人腦氣筋之說不足憑歟」？答曰「人之胸中大氣，能斡旋全身，故司運動，能保合神明，故司知覺。西人不知胸中大氣，遂於百體之知覺運動專之屬腦氣筋，不知百體之知覺運動雖關乎腦氣筋，而腦筋之病與不病又關乎胸中大氣。《內經》云「上氣不足，腦為之不滿，耳為之苦鳴，頭為之傾，目為之眩」，由是觀之，腦氣筋為上氣之所統攘，即為大氣之所統攝，而深有賴於大氣斡旋之力也。且愚臨證體驗多年，遇有大氣猝然下陷，不能與外氣相接者，其人即呼吸頓停，昏不知人，而腦氣筋司知覺、司運動之良能，亦因而頓失。迨大氣徐徐上升，達於心部，神明有依，始能知覺，達於肺部，呼吸復常，始能運動。拙擬升陷湯（在第四卷）後，有友人趙厚庵自述之言可驗

也。由是知腦氣筋不過藉大氣斡旋之力，於人之能知覺、能運動者，以運用其驅，使之權而已，豈與大氣比哉！試再即前哲之言徵之，唐容川曰『西醫知腦髓之作，而不知腦髓之來歷，所謂腦氣筋，但言其去路，而不知髓有來路，所以西法無治髓之藥也。不知背脊一條髓筋，乃是髓入於腦之來路，蓋《內經》明言腎藏精，精生髓。細按其道路，則以腎係貫脊而生，脊髓上循入腦，於是而為腦髓，是腦非生髓之所，乃聚髓之所，故名髓海。既聚於此，而又散走臟腑肢體以供使用，是臟腑肢體能使腦髓，而非腦髓用臟腑肢體也』。又曰『腎係貫脊，通於脊髓。腎精足則入脊化髓，上循腦而為腦髓，是腦者，精氣之所會，髓足則精氣能供五臟六腑之驅使故知覺運動無不爽健』。即此論觀之，若其人大氣充盛，腎臟充實，腦氣筋亦斷無自病之理也。

【振頽湯】

治痿廢。

生黃耆（六錢）、知母（四錢）、野臺參（三錢）、於朮（三錢）、當歸（三錢）、生明乳香（三錢）、生明沒藥（三錢）、威靈仙（錢半）、乾薑（二錢）、牛膝（四錢）。

熱者，加生石膏數錢，或至兩許。寒者去知母，加烏附子數錢。筋骨受風者，加明天麻數錢。脈弦硬而大者，加龍骨、牡蠣各數錢，或更加山萸肉亦佳。骨痿廢者，加鹿角膠、虎骨膠各二錢（另燉同服）。然二膠偽者甚多，若恐其偽，可用續斷、菟絲子各三錢代之。手足皆痿者，加桂枝尖二錢。

痿證之大旨，當分為三端。有肌肉痺木，抑搔不知疼癢者。其人或風寒襲入經絡，或痰涎鬱塞經絡，或風寒痰涎，互相凝結經絡之間，以致血脈閉塞，而其原因，實由於胸中大氣虛損。蓋大氣旺，則全體充盛，氣化流通，風寒痰涎，皆不能為恙。大氣虛，則腠理不固，而風寒易受，脈管湮淤，而痰涎易鬱矣。有周身之筋拘攣，而不能伸者。蓋人身之筋，以宗筋為主，而能榮養宗筋者，陽明也。其人脾胃素弱，不能化穀生液，以榮養宗筋，更兼內有蘊熱以鑠耗之，或更為風寒所襲，致宗筋之伸縮自由者，竟有縮無伸，浸成拘攣矣。有筋非拘攣，肌肉非痺木，惟覺骨軟不能履地者，乃骨髓枯涸，腎虛不能作強也。方中用黃耆以補大氣，白朮以健脾胃，當歸、乳香、沒藥以流通血脈，靈仙以祛風消痰，恐其性偏

走泄，而以人參之氣血兼補者佐之，乾薑以開氣血之痺，知母以解乾薑、人參之熱，則藥性和平，可久服而無弊。其陽明有實熱者，加石膏以清陽明之熱，仿《金匱》風引湯之義也。營衛經絡有凝寒者，加附子以解營衛經絡之寒，仿《金匱》近效朮附湯之義也。至其脈弦硬而大，乃內風煽動，真氣不固之象，故加龍骨、牡蠣以熄內風斂真氣。骨痿者加鹿膠、虎膠取其以骨補骨也。筋骨受風者，加明天麻取其能搜筋骨之風，又能補益筋骨也。若其痿專在於腿，可但用牛膝以引之下行。若其人手足並痿者，又宜加桂枝兼引之上行。蓋樹之有枝，猶人之有指臂，故桂枝雖善降逆氣，而又能引藥力達於指臂間也。

或問「此方治痿之因熱者，可加生石膏至兩許，其證有實熱可知，而方中仍用乾薑何也」？答曰「《金匱》風引湯治熱癰瘰之的方，原石膏、寒水石與乾薑並用。蓋二石性雖寒而味則淡，其寒也能勝乾薑之熱，其淡也不能勝乾薑之辣。故痿證之因熱者，仍可借其異常之辣味，以開氣血之痺也」。

【振頹丸】

前證之劇者，可兼服此丸，或單服此丸亦可。並治偏枯、痺木諸證。

人參（二兩）、於朮（二兩炒）、當歸（一兩）、馬錢子（一兩，法制）、乳香（一兩）、沒藥（一兩）、全蜈蚣（大者五條，不用炙）、穿山甲（一兩，蛤粉炒）。

共軋細過羅，煉蜜為丸如桐子大。每服二錢，無灰溫酒送下，日再服。

馬錢子，即番本鱉，其毒甚烈，而其毛與皮尤毒。然治之有法，則有毒者，可至無毒，而其開通經絡，透達關節之力，實遠勝於他藥也。今將制馬錢子法，詳載於下。庶後有用此方者，如法制之，而不至誤人也。

法：將馬錢子先去淨毛，水煮兩三沸即撈出。用刀將外皮皆刮淨，浸熱湯中，旦、暮各換湯一次，浸足三晝夜取出。再用香油煎至純黑色，擊開視其中心微有黃意，火候即到。將馬錢子撈出，用溫水洗數次，將油洗淨。再用沙土，同入鍋內炒之，土有油氣，換土再炒，以油氣盡淨為度。

馬錢子為健胃妙藥。馬錢子性雖有毒，若制至無毒，服之可使全身動，以治肢體麻痺（此興奮神經之作用），若少少服之，但令胃腑動有力，則胃中之食必速消。此非但憑理想，實有所見而云然也。

滄州朱媼，年過六旬，素有癩風證，醫治數十年，先服中藥無效，繼服西藥麻醉腦筋之品，雖見效，然必日日服之始能強制不發。因諸藥性皆鹹寒，久服傷胃，浸至食量減少，身體羸弱。後有人授以王勳臣龍馬自來丹方，其方原以馬錢子為主藥，如法制好，服之數日，食量頓增，旬餘身體漸壯，癩病雖未即除根，而已大輕減矣。由斯知馬錢子健胃之功效迥異乎他藥也。特是龍馬自來丹，馬錢子伍以地龍，為治癩風設也。若用以健胃，宜去地龍，加炒白朮細末，其健胃之效益著。爰擬定其方於下：炒白朮（四兩，細末）、制好馬錢子（一兩，細末）。二藥調勻，水和為丸一分重（乾透足一分），飯後服五丸，一日再服，旬餘自見功效。

【薑膠膏】

治肢體受涼疼痛，或有凝寒阻遏血脈，麻木不仁。

鮮薑自然汁（一斤）、明亮水膠（四兩）。

上二味同熬成稀膏，攤於布上，貼患處，旬日一換。凡因受寒肢體疼痛，或因受寒肌肉麻木不仁者，貼之皆可治癒。即因受風，而筋骨疼痛，或肌肉麻木者，貼之亦可治癒。惟有熱腫疼者，則斷不可用。

有人因寢涼炕之上，其右腿外側時常覺涼，且有時疼痛。用多方治之不效。語以此方，貼至二十日痊愈。

又有人常在寒水中捕魚，為寒水所傷。自膝下被水浸處皆麻木，抑搔不知疼癢，漸覺行動乏力。語以此方，俾用長條布攤藥膏纏於腿上，其足趺、足底皆貼以此膏，亦數換而愈。蓋此等證心中無病，原宜外治。鮮薑之辛辣開通，熱而能散，故能溫暖肌肉，深透筋骨，以除其凝寒痼冷，而渙然若冰釋也。用水膠者，借其粘滯之力，然後可熬之成膏也。若證因受風而得者，擬用細辛細末摻於膏藥之中，或用他祛風猛悍之藥，摻於其中，其奏效當更捷也。



〈 第 八 卷 〉

治女科方

【玉燭湯】

治婦女寒熱往來或先寒後熱，汗出熱解，或月事不調，經水短少。

生黃耆（五錢）、生地黃（六錢）、玄參（四錢）、知母（四錢）、當歸（三錢）、香附（三錢，醋炒）、柴胡（一錢五分）、甘草（一錢五分）。

汗多者，以茵陳易柴胡，再加莢肉數錢。熱多者，加生杭芍數錢。寒多者，加生薑數錢。

婦女多寒熱往來之證，而方書論者不一說。有謂陽分虛則頭午寒，陰分虛則過午熱者。夫午前陽盛，午後陽衰而陰又浸盛。當其盛時，虛者可以暫實。何以其時所現之病狀，轉與時成反比例也？有謂病在少陽則寒熱往來，猶少陽外感之邪，與太陽並則寒，與陽明並則熱者。而內傷之病，原無外邪。又何者與太陽、陽明並作寒熱也？有謂肝虛則乍熱乍寒者。斯說也，愚曾驗過，遵《本經》山茱萸主寒熱之旨，單重用山茱萸（去淨核）二兩煎湯，服之立愈（驗案在第一卷來復湯下）。然此乃肝木虛極，內風將動之候，又不可以蓋尋常寒熱也。蓋人身之氣化，原與時序之氣化，息息相通。一日之午前，猶一歲之有春夏。而人身之陽氣，即感之發動，以敷佈於周身。婦女性多憂思，以致臟腑、經絡多有鬱結閉塞之處，阻遏陽氣不能外達，或轉因發動而內陷，或發動不遂，其發動排擠經絡愈加閉塞，於是周身之寒作矣。迨陽氣蓄極，終當憤發，而其憤發之機與抑遏之力，

相激相蕩於臟腑、經絡之間，熱又由茲而生。此前午之寒，所以變後午之熱也。黃耆為氣分之主藥，能補氣更能升氣。輔以柴胡之軒舉，香附之宣通，陽氣之抑遏者，皆暢發矣。然血隨氣行，氣鬱則血必瘀，故寒熱往來者，其月事恆多不調，經血恆多虛損，用當歸以調之，地黃以補之，知母、元參與甘草甘苦化陰以助之，則經血得其養矣。況地黃、知母諸涼藥與黃耆溫熱之性相濟，又為燮理陰陽、調和寒熱之妙品乎。至方書有所謂日晡發熱者，日晡者，申時也，足少陰腎經主令之候也。其人或腎經陰虛，至此而腎經之火乘時而動，亦可治以此湯。將黃耆減半，地黃改用一兩，有經閉結為癥瘕，阻塞氣化作寒熱者，可用後理衝湯。有胸中大氣下陷作寒熱者，其人常覺呼吸短氣，宜用拙擬升陷湯（在第四卷），方後治驗之案，可以參觀。

【附方】

西人鐵鏽雞納丸，治婦女經血不調，身體羸弱咳喘，或時作寒熱甚效。方用鐵鏽、沒藥（忌火）各一錢，金雞納霜、花椒各五分，共為細末，煉蜜為丸六十粒。每服三粒至五粒。

鐵鏽乃鐵與氧氣化合而成，人身之血得氧氣而赤。鐵鏽中含氧氣，而又色赤似血，且嗅之兼有血腥之氣，故能榮養血分，流通經脈。且人之血中，實有鐵鏽，以鐵鏽補血，更有以鐵補鐵之妙也。金雞納霜，加味小柴胡湯（在第七卷）下，曾詳其藥之原質及其治瘧之功用，此方中亦用之者，為其善治貧血，且又能入手、

足少陽之經，以調和寒熱也。又佐以花椒者，恐金雞納霜之性，偏於寒涼，而以辛熱濟之，使歸於和平也。

東亞人有中將湯，以調婦女經脈，恆有效驗。留學東亞者，曾以化驗得之。門人高如璧曾開其方相寄，藥品下未有份量。愚為酌定其份量，用之甚有功效。今將其方開列於下，以備選用。

延胡索醋炒三錢、當歸六錢、官桂二錢、甘草二錢、丁香二錢、山楂核醋炒三錢、鬱金醋炒二錢、沙參四錢、續斷酒炒三錢、肉蔻赤石脂炒三錢（去石脂不用）、苦參三錢、懷牛膝三錢，共十二味，軋作粗渣，分三劑。每用一劑，開水浸蓋碗中約半點鐘，將其湯飲下。如此浸服二次至第三次用水煎服。日用一劑，數劑經脈自調。此方中涼熱、補破、澀滑之藥皆有，愚所酌份量，俾其力亦適當，故凡婦女經脈不調證，皆可服之，而以治白帶證尤效。

【理衝湯】

治婦女經閉不行或產後惡露不盡，結為癥瘕，以致陰虛作熱，陽虛作冷，食少勞嗽，虛證沓來。服此湯十餘劑後，虛證自退，三十劑後，瘀血可盡消。亦治室女月閉血枯。並治男子勞瘵，一切臟腑癥瘕、積聚、氣鬱、脾弱、滿悶、痞脹、不能飲食。

生黃耆（三錢）、黨參（二錢）、於朮（二錢）、生山藥（五錢）、天花粉（四錢）、知母（四錢）、三稜（三錢）、莪朮（三錢）、生雞內金（三錢，黃者）。

用水三盅，煎至將成，加好醋少許，滾數沸服。

服之覺悶者，減去於朮。覺氣弱者，減三稜、莪朮各一錢。瀉者，以白芍代知母，於朮改用四錢。熱者，加生地、天冬各數錢。涼者，知母、花粉各減半，或皆不用。涼甚者，加肉桂（搗細沖服）、烏附子各二錢。瘀血堅甚者，加生水蛭（不用炙）二錢。若其人堅壯無他病，惟用以消癥積聚者，宜去山藥。室女與婦人未產育者，若用此方，三稜、莪朮宜斟酌少用，減知母之半，加生地黃數錢，以濡血分之枯。若其人血分雖瘀，而未見癥瘕或月信猶未閉者，雖在已產育之婦人，亦少用三稜、莪朮。若病人身體羸弱，脈象虛數者，去三稜、莪朮，將雞內金改用四錢，因此藥能化瘀血，又不傷氣分也。迨氣血漸壯，瘀血未盡消者，再用三稜、莪朮未晚。若男子勞瘵，三稜、莪朮亦宜少用或用雞內金代之亦可。初

擬此方時，原專治產後瘀血成癥瘕，後以治室女月閉血枯亦效，又間用以治男子勞瘵亦效驗，大有開胃進食，扶羸起衰之功。《內經》有四烏魚骨一茹蘆丸，原是男女並治，為調血補虛之良方，此方竊師《內經》之意也。

從來醫者調氣行血，習用香附，而不習用三稜、莪朮，蓋以其能破癥瘕，遂疑其過於猛烈，而不知能破癥瘕者，三稜、莪朮之良能，非二藥之性烈於香附也。愚精心考驗多年，凡習用之藥，皆確知其性情能力。若論耗散氣血，香附猶甚於三稜、莪朮。若論消磨癥瘕，十倍香附亦不及三稜、莪朮也。且此方中，用三稜、莪朮以消衝中瘀血，而即用參、耆諸藥，以保護氣血，則瘀血去而氣血不至傷損。且參、耆能補氣，得三稜、莪朮以流通之，則補而不滯，而元氣愈旺。元氣既旺，愈能鼓舞三稜、莪朮之力以消癥瘕，此其所以效也。

一婦人，年三十餘，癥瘕起於少腹，漸長而上。其當年長者稍軟，隔年即硬如石。七年之間，上至心口，旁塞兩脅，飲食減少，時覺昏瞶，劇時昏睡一晝夜，不飲不食。屢次服藥竟分毫無效。後愚為診視，脈雖虛弱，至數不數，許為治癒，授以此方。病人自揣其病，斷無可治之理，竟置不服。次年病益進，昏睡四日不醒。愚用藥救醒之，遂懇切告之曰「去歲若用愚方，病癒已久，何至危困若斯。然此病尚可為，甚勿再遲延也」，仍為開前方。病人喜，信愚言，連服三十餘劑，磊塊皆消。惟最初所結之病根，大如核桃之巨者尚在。又加生水蛭（不宜炙）一錢，服數劑痊愈。

人之臟腑，一氣貫通，若營壘聯繫，互為犄角。一處受攻，則他處可為之救應。故用藥攻病，宜確審病根結聚之處，用對證之藥一二味，專攻其處，即其處氣血偶有傷損，他臟腑氣血猶可為之輸將貫注，亦猶相連營壘之相救應也。又加補藥以為之佐使，是以邪去正氣無傷損。世俗醫者，不知此理，見有專確攻病之方，若拙擬理衝湯者，初不審方中用意何如，但見方中有三稜、莪朮，即望而生畏，不敢試用。自流俗觀之，亦似慎重，及觀其臨證調方，漫不知病根結於何處，惟是混開混破。恆集若香附、木香、陳皮、砂仁、枳殼、厚朴、延胡、靈脂諸藥，或十餘味或數十味為一方。服之令人臟腑之氣皆亂，常有病本可治，服此等藥數十劑而竟至不治者。更或見有浮火虛熱，而加芩、梔、萸實之屬，則開破與寒涼並用，雖脾胃堅壯者，亦斷不能久服，此其貽害尤甚也。愚目擊此等方，莫不直指其差謬，聞者轉以愚好詆毀醫輩，豈知愚心之憤惋，有不能自己者哉。

一婦人，年二十餘。癥瘕結於上脘，其大如橘，按之甚硬，時時上攻作疼，妨礙飲食。醫者皆以為不可消。後愚診視，治以此湯，連服四十餘劑，消無芥蒂（方中雞內金既善消積，又善為胃引經）。

一媪，年六旬。氣弱而且鬱，心腹滿悶，不能飲食，一日所進穀食，不過兩許，如此已月餘矣。愚診視之，其脈甚微細，猶喜至數調勻，知其可治。遂用此湯，將三稜、莪朮各減一錢，連服數劑，即能進飲食。又服數劑，病遂痊愈。

奉天省議員孫益三之夫人，年四十許，自幼時有癥瘕結於下脘，歷二十餘年。癥瘕之積，竟至滿腹，常常作疼，心中怔忡，不能飲食，求為診治。因思此證，久而且劇，非輕劑所能療。幸脈有根柢，猶可調治。遂投以理衝湯，加水蛭三錢。恐開破之力太過，參、耆又各加一錢，又加天冬三錢，以解參、耆之熱。數劑後，遂能進食。服至四十餘劑，下瘀積若干，癥瘕消有強半。益三柳河人，因有事與夫人還籍，藥遂停止。閱一載，腹中之積，又將復舊，復來院求為診治。仍照前方加減，俾其補破涼熱之間，與病體適宜。仍服四十餘劑，積下數塊。又繼服三十餘劑，瘀積大下。其中或片或塊且有膜甚厚，若胞形，此時身體覺弱，而腹中甚鬆暢。恐瘀猶未淨，又調以補正活血之藥，以善其後。

隔數月，益三又介紹其同邑友人王尊三之夫人，來院求為治癥瘕，自言瘀積十九年矣，滿腹皆係硬塊，亦治以理衝湯，為其平素氣虛，將方中參耆加重，三棱、莪朮減半。服數劑，飲食增加，將三棱、莪朮漸增至原定分量。又服數劑，氣力較壯，又加水蛭二錢，樗雞（俗名紅娘）十枚。又服二十餘劑，屆行經之期，隨經下紫黑血塊若干，病癒其半。又繼服三十劑，屆經期瘀血遂大下，滿腹積塊皆消。又俾服生新化瘀之藥，以善其後。

一少年，因治吐血，服藥失宜，瘀癖結於少腹（在女子為癥瘕在男子為瘀癖）大如錦瓜。按之甚堅硬，其上相連有如瓜蔓一條，斜衝心口，飲食減少，形體羸弱。其脈微細稍數。治以此湯，服十餘劑瘀癖全消。



【附錄】

廣西柳州賓仙園來函：

一婦人，十七歲，自二七出嫁，未見行經。先因腹、脅作疼求為診治，投以活絡效靈丹立愈。繼欲調其月事，投以理衝湯三劑，月經亦通，三日未止。猶恐瘀血未化，改用王清任少腹逐瘀湯，亦三劑，其人從此月事調順，身體強壯矣。

【理衝丸】

治同前證。

水蛭（一兩，不用炙）、生黃耆（一兩半）、生三稜（五錢）、生莪朮（五錢）、當歸（六錢）、知母（六錢）、生桃仁（六錢，帶皮尖）。

上藥七味，共為細末，煉蜜為丸桐子大，開水送服二錢，早晚各一次。

仲景抵當湯、大黃蟪蟲丸、百勞丸，皆用水蛭，而後世畏其性猛，鮮有用者，是未知水蛭之性也。《本經》曰「水蛭氣味鹹平無毒，主逐惡血、瘀血、月閉，破癥瘕、積聚、無子、利水道」。徐靈胎注云「凡人身瘀血方阻，尚有生氣者易治，阻之久則生氣全消而難治。蓋血既離經，與正氣全不相屬，投之輕藥，則拒而不納，藥過峻，又轉能傷未敗之血，故治之極難。水蛭最善食人之血，而性又遲緩善入。遲緩則生血不傷，善入則堅積易破，借其力以消既久之滯，自有利而無害也」。觀《本經》之文與徐氏之注，則水蛭功用之妙，為何如哉！特是徐氏所謂遲緩善入者，人多不解其理。蓋水蛭行於水中，原甚遲緩。其在生血之中，猶水中也，故生血不傷也。著人肌肉，即緊貼善入。其遇堅積之處，猶肌肉也，故堅積易消也。

水蛭破瘀血，而不傷新血，徐氏之論確矣。不但此也，凡破血之藥，多傷氣分，惟水蛭味鹹專入血分，於氣外絲毫無損。且服後腹不覺疼，並不覺開破，而

瘀血默消於無形，真良藥也。愚治婦女月閉癥瘕之證，其脈不虛弱者，恒但用水蛭軋細，開水送服一錢，日兩次。雖數年瘀血堅結，一月可以盡消。

水蛭、虻蟲皆為破瘀血之品。然愚嘗單用以實驗之，虻蟲無效，而水蛭有效。以常理論之，凡食血之物，皆能破血。然虻蟲之食血以嘴，水蛭之食血以身。其身與他物緊貼，即能吮他物之血，故其破瘀血之功獨優。至破瘀血而不傷新血者，徐氏之注詳矣而猶有剩義。蓋此物味鹹氣腐，與瘀血氣味相近，有同氣相求之妙。至新血雖亦味鹹卻無腐氣，且其質流通似水。水蛭之力，在新血之中，若隨水蕩漾而毫無著力之處，故不能傷新血也。

《本經》水蛭文中「無子」二字，原接上文「主」字，一氣讀下，言能主治婦人無子也。蓋無子之病，多因血瘀沖中，水蛭善消沖中瘀血，故能治之。而不善讀《本經》者，恒多誤解。友人韓厘廷治一少婦，月信不通，曾用水蛭。後有醫者謂婦人服過水蛭，即終身不育，病家甚是懊悔。後厘廷聞知，向愚述之。愚曰「水蛭主治婦人無子，《本經》原有明文，何醫者之昧昧也」。後其婦數月即孕，至期舉一男，甚胖壯。

近世方書，多謂水蛭必須炙透方可用，不然則在人腹中能生殖若干水蛭害人，誠屬無稽之談。曾治一婦人，經血調和，竟不產育，細詢之，少腹有癥瘕一塊。遂單用水蛭一兩，香油炙透，為末。每服五分，日兩次，服完無效。後改用生者，

如前服法。一兩猶未服完，癥瘕盡消，逾年即生男矣。此後屢用生者，治癒多人，亦未有貽害於病癒後者。

或問「同一水蛭也，炙用與生用，其功效何如此懸殊」？答曰「此物生於水中，而色黑（水色）肉味鹹（水味）氣腐（水氣），原得水之精氣而生。炙之則傷水之精氣，故用之無效。水族色之性，如龍骨、牡蠣、龜板大抵皆然，故王洪緒《證治全生集》調用龍骨者，宜懸於井中，經宿而後用之，其忌火可知，而在水蛭為尤甚。特是水蛭不多，為末甚難，若軋之不細，曬乾再軋或紙包置爐臺上令乾亦可。此須親自檢點，若委之藥坊，至軋不細時，必須火焙矣。西人治火熱腫疼，用活水蛭數條，置患處，覆以玻璃杯，使吮人毒血，亦良法也。

方中桃仁不去皮尖者，以其皮赤能入血分，尖乃生發之機，又善通氣分。楊玉衡《寒溫條辨》曾有斯說。愚疑其有毒，未敢遽信，遂將帶皮生桃仁，嚼服一錢，心中安然，以後始敢連皮尖用之。至於不炒用，而生用者，凡果中之仁，皆含生發之氣，原可借之以流通既敗之血也。《神農本草經百種錄》注曰「桃得三月春和之氣以生，而花鮮明似血，故凡血瘀血枯之疾，不能調和暢達者，此能入於其中而和之散之」。然其生血之功少，而去瘀之功多者，蓋桃核本非血類，實不能有所補益。若癥瘕皆已敗之血，非生氣不能流通，桃之生氣在於仁，而味苦又能開泄，故能逐舊而不傷新也。夫既借其生氣以流通氣血，不宜炒用可知也。若入丸劑，蒸熟用之亦可。

【附方】

秘傳治女子乾病方，用紅蚘螺（榆樹內紅蟲大如蠶）二個，樗樹（此樹如椿而味臭俗名臭椿）莢二個，人指甲全的，壯年男子髮三根。用樹莢夾蚘螺、指甲以髮纏之，將發面饅頭如大橘者一個，開一孔，去中瓢俾可容藥。納藥其中，仍將外皮原開下者杜孔上，木炭火煨存性為細末，用黃酒半斤燉開，兒童便半茶盅送服。忌腥冷、驚恐、惱怒。此方用過數次皆驗，瘀血開時必吐衄又兼下血，不必驚恐，移時自愈。以治經水一次未來者尤效。

【安衝湯】

治婦女經水行時多而且久，過期不止或不時漏下。

白朮（六錢，炒）、生黃耆（六錢）、生龍骨（六錢，搗細）、生牡蠣（六錢，搗細）、大生地（六錢）、生杭芍（三錢）、海螵蛸（四錢，搗細）、茜草（三錢）、川續斷（四錢）。

友人劉干臣其長子婦，經水行時，多而且久，淋漓八九日始斷，數日又復如故。醫治月餘，初稍見輕，繼又不愈。延愚診視，觀所服方，即此安衝湯，去茜草、螵蛸。遂仍將二藥加入，一劑即愈。又服一劑，永不反覆。干臣疑而問曰「茜草、螵蛸，治此證如此效驗，前醫何為去之」？答曰「彼但知茜草、螵蛸能通經血，而未見《內經》用此二藥雀卵為丸，鮑魚湯送下，治傷肝之病，時時前後血也。故於經血過多之證，即不敢用。不知二藥大能固澀下焦，為治崩之主藥也。海螵蛸為烏賊魚骨，其魚常口中吐墨，水為之黑，故能補益腎經，而助其閉藏之用。友人孫蔭軒夫人，曾患此證甚劇。蔭軒用微火將海螵蛸煨至半黑半黃為末，用鹿角膠化水送服，一次即愈，其性之收澀可知。茜草一名地血，可以染絳，《內經》名茹蘆，即茹蘆根也。蒲留仙《聊齋志異》載，有人欲烏其須，或戲授以茜草細末，其須竟成紫髯，洗之不去。其性之收澀，亦可知也」。干臣又問曰「二藥既收澀若此，而又能通經絡者何也」？答曰「螵蛸可以磋物，故能消瘀。茜草色赤似血，故能活血。且天下妙藥，大抵令人難測，如桂枝能升元氣，又能降逆

氣，山萸肉能固脫，又能通利九竅。凡若此者，皆天生使獨，而不可以氣形味色推求者也。曾遊東海之濱，見海岸茜草蕃生。其地適有隔上瘀血者，俾剖取茜草鮮根，煮汁，日日飲之，半月而愈」。

一婦人，年三十餘，夫妻反目，惱怒之餘，經行不止，且又甚多。醫者用十灰散加減，連服四劑不效。後愚診視，其右脈弱而且濡。詢其飲食多寡，言分毫不敢多食，多即泄瀉。遂投以此湯，去黃耆，將白朮改用一兩。一劑血止，而瀉亦愈。又服一劑，以善其後。

一婦人，年二十餘。小產後數日，惡露已盡，至七八日，忽又下血。延醫服藥，二十餘日不止。診其脈，洪滑有力，心中熱而且渴。疑其夾雜外感，詢之身不覺熱，又疑其血熱妄行，遂將方中生地改用一兩，又加知母一兩，服後血不止，而熱渴亦如故。因思此證，實兼外感無疑。遂改用白虎加人參湯以山藥代粳米。方中石膏重用生者三兩，煎湯兩盅，分兩次溫飲下，外感之火遂消，血亦見止，仍與安衝湯，一劑遂痊愈。又服數劑，以善其後。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

王氏婦，年十九歲，因殤子過痛，肝氣不暢，經水行時多而且久，或不時漏下。前服逍遙、歸脾等藥，皆無效。診其脈，左關尺及右尺皆浮弦，一息五至強。口乾不思食，腰疼無力，乃血虧而有熱也。遵將女科方安衝湯去耆、朮，加麥冬、

霍石斛、香附米，俾服之。二劑血止，六劑後食量增加，口乾腰疼皆愈。繼將湯劑製作丸藥，徐徐服之，月事亦從此調矣。

直隸鹽山孫香蓀來函：

一九二四年七月，友人張竹蓀君之令堂，因籌辦娶兒媳事勞心過度，小便下血不止，其血之來瀝瀝有聲，請為診視，舉止不定，氣息微弱，右脈弦細，左脈弦硬。為開安衝湯，服後稍愈。翌日晨起，忽然昏迷，其家人甚恐，又請診視。其脈尚和平，知其昏迷係黃耆升補之力稍過，遂仍用原方，加赭石八錢，一劑而愈。

家族嬸有下血證，醫治十餘年，時愈時發，終未除根。一九二六年六月，病又作，請為診視。治以《傳青主女科》治老婦血崩方，遵師訓加生地黃一兩，一服即愈。七月，病又反覆，治以安衝湯方，以其心中覺涼，加乾薑二錢，一劑病又愈。斯年初秋，李姓之女，年十七歲，下血不止，面唇皆白，六脈細數。治以安衝湯，重用山萸肉，三劑而愈。



【固衝湯】

治婦女血崩。

白朮（一兩，炒）、生黃耆（六錢）、龍骨（八錢，搗細）、牡蠣（八錢，搗細）、萸肉（八錢，去淨核）、生杭芍（四錢）、海螵蛸（四錢，搗細）、茜草（三錢）、棕邊炭（二錢）、五倍子（五分，軋細藥汁送服）。

脈象熱者加大生地一兩，涼者加烏附子二錢。大怒之後，因肝氣衝激血崩者，加柴胡二錢。若服兩劑不愈，去棕邊炭，加真阿膠五錢，另燉同服。服藥覺熱者宜酌加生地。

從前之方，龍骨、牡蠣皆生用，其理已詳於理衝丸下。此方獨用煨者，因煨之，則收澀之力較大，欲借之以收一時之功也。

一婦人，年三十餘，陡然下血，兩日不止。及愚診視，已昏憤不語，周身皆涼，其脈微弱而遲。知其氣血將脫，而元陽亦脫也。遂急用此湯，去白芍，加野臺參八錢、烏附子三錢。一劑血止，周身皆熱，精神亦復。仍將白芍加入，再服一劑，以善其後。

長子萌潮曾治一婦人，年四十許。驟得下血證甚劇，半日之間，即氣息奄奄，不省人事。其脈右寸關微見，如水上浮麻，不分至數，左部脈皆不見。急用生黃耆一兩，大火煎數沸灌之，六部脈皆出。然微細異常，血仍不止。觀其形狀，呼氣不能外出，又時有欲大便之意，知其為大氣下陷也（大氣下陷，詳第四卷升陷

湯下）。遂為開固衝湯方，將方中黃耆改用一兩。早十一點鐘，將藥服下，至晚三點鐘，即愈如平時（後萌潮在京，又治一血崩證，先用固衝湯不效，加柴胡二錢，一劑即愈，足見柴胡升提之力，可為治崩要藥）。

或問「血崩之證，多有因其人暴怒，肝氣鬱結，不能上達，而轉下衝腎關，致經血隨之下注者，故其病俗亦名之曰氣衝。茲方中多用澀補之品，獨不慮於肝氣鬱者，有妨礙乎？」答曰「此證雖有因暴怒氣衝而得者，然當其血大下之後，血脫而氣亦隨之下脫，則肝氣之鬱者，轉可因之而開。且病急則治其標，此證誠至危急之病也。若其證初得，且不甚劇，又實係肝氣下衝者，亦可用升肝理氣之藥為主，而以收補下元之藥輔之也」。

【附方】

《傳青主女科》，有治老婦血崩方，試之甚效。其方用生黃耆一兩，當歸一兩（酒洗），桑葉十四片，三七末三錢（藥汁送下），水煎服，二劑血止，四劑不再發。若覺熱者，用此方宜加生地兩許。

又諸城友人王肖舫，傳一治血崩秘方。用青萊菔生搗取汁，加白糖數匙，微火燉溫，陸續飲至三大盅，必愈。

又西藥中有麥角，原霉麥上所生之小角，其性最善收攝血管，能治一切失血之證，而對於下血者用之尤效。角之最大者，長近寸許，以一枚和乳糖（無乳糖可代以白蔗糖）研細，可作兩次服。愚常用之與止血之藥並服，恆有捷效。

附：治女子血崩有兩種草藥

一種為宿根之草，一根恆生數莖，高不盈尺，葉似地膚，微寬，濃則加倍，其色綠而微帶蒼色，孟夏開小白花，結實如杜梨，色如其葉，老而微黃，多生於宅畔路旁板硬之地，俗呼為犇牛蛋，又名臭科子，然實未有臭味，初不知其可入藥也。戊辰孟夏，愚有事回籍，有南關王氏婦，患血崩，服藥不效。有人教用此草連根實銼碎，煮湯飲之，其病頓愈。後愚回津言及此方，門生李毅伯謂「此方余素知之，若加黑豆一小握，用水、酒各半煎湯，則更有效矣」。

一種為當年種生之草，棵高尺餘，葉圓而有尖，色深綠，季夏開小白花，五出，黃蕊，結實大如五味，狀若小茄，嫩則綠，熟則紅，老則紫黑，中含甜漿可食，俗名野茄子，有山之處呼為山茄子。奉省醫者多採此草陰乾備用，若遇血崩時，將其梗葉實共切碎煎湯服之立愈。在津曾與友人張相臣言及此草，相臣謂「此即《本草綱目》之龍葵，一名天茄子，一名老鴉睛草者是也」，而愚查《本草綱目》龍葵，言治吐血不止，未嘗言治血崩。然治吐血之藥，恆兼能治下血，若三七、茜草諸藥是明徵也。以遍地皆有之草，而能治如此重病，洵堪珍哉。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

族姊適徐姓，年三十餘。有妊流產，已旬日矣。忽然下血甚多，頭暈腹脹，脈小無力，知為衝脈滑脫之徵證，予以固衝湯，加柴胡錢半，歸身二錢。服藥三劑即止。俾繼服坤順至寶丹以善其後。

直隸鹽山李曰綸來函：

天津趙稚堂君夫人，年四十餘歲，行經過期不止，諸治不效，延弟診視。見兩部之脈皆微細無力，為開固衝湯原方予之，服數劑即全收功。因思如此年歲，血分又如此受傷，諒從此斷生育矣。不意年餘又產一子，安然無恙。蓋因固衝湯止血兼有補血之功也。

又天津張華亭君夫人，年二十四歲，因小產後血不止者綿延月餘，屢經醫治無效。診其脈象，微細而數，為開固衝湯方，因其脈數，加生地一兩。服藥後，病雖見輕，而不見大功。反覆思索，莫得其故。細詢其藥價過賤，忽憶人言此地藥局所鬻黃耆，有真有假，今此方無顯著之功效，或其黃耆過劣也。改用口黃耆，連服兩劑痊愈。由斯知藥物必須地道真正方效也。

【溫衝湯】

治婦人血海虛寒不育。

生山藥（八錢）、當歸身（四錢）、烏附子（二錢）、肉桂（二錢，去粗皮後入）、補骨脂（三錢，炒搗）、小茴香（二錢，炒）、核桃仁（二錢）、紫石英（八錢，研）、真鹿角膠（二錢，另燉，同服，若恐其偽可代以鹿角霜三錢）。

人之血海，其名曰衝。在血室之兩旁，與血室相通。上隸於胃陽明經，下連於腎少陰經。有任脈以為之擔任，督脈為之督攝，帶脈為之約束。陽維、陰維、陽蹻、陰蹻，為之擁護，共為奇經八脈。此八脈與血室，男女皆有。在男子則衝與血室為化精之所，在女子則衝與血室實為受胎之處。《內經》《上古通天論》所謂「太衝脈盛，月事以時下，故有子」者是也。是以女子不育，多責之衝脈。鬱者理之，虛者補之，風襲者祛之，濕勝者滲之，氣化不固者固攝之，陰陽偏勝者調劑之。衝脈無病，未有不生育者。而愚臨證實驗以來，凡其人素無他病，而竟不育者，大抵因相火虛衰，以致衝不溫暖者居多，因為制溫衝湯一方。其人若平素畏坐涼處，畏食涼物，經脈調和，而艱於生育者，即與以此湯服之。或十劑或數十劑，遂能生育者多矣。

一婦人，自二十出嫁，至三十未育子女，其夫商治於愚，因細詢其性質稟賦，言生平最畏寒涼，熱時亦不敢食瓜果。至經脈則大致調和，偶或後期兩三日。知其下焦虛寒，因思《本經》謂紫石英「氣味甘溫，治女子風寒在子宮，絕孕十年

無子」，遂為擬此湯，方中重用紫石英六錢，取其性溫質重，能引諸藥直達於衝中，而溫暖之。服藥三十餘劑，而畏涼之病除。後數月遂孕，連生子女。益信《本經》所謂治十年無子者，誠不誤也。

【清帶湯】

治婦女赤白帶下。

生山藥（一兩）、生龍骨（六錢，搗細）、生牡蠣（六錢，搗細）、海螵蛸（四錢，去淨甲搗）、茜草（三錢）。

單赤帶，加白芍、苦參各二錢；單白帶，加鹿角霜、白朮各三錢。鹿角霜係鹿角沉埋地中，日久欲腐，掘地而得者。其性微溫，為補督任沖三脈之要藥。蓋鹿角甚硬，埋久欲腐，服之轉與腸胃相宜，而易得其氣化也。藥房鬻者多係用鹿角煨透為霜，其性燥，不如出土者，至謂係熬鹿角膠所餘之渣者，則非是。

帶下為衝任之證，而名謂帶者，蓋以奇經帶脈，原主合同束諸脈，衝任有滑脫之疾，責在帶脈不能約束，故名為帶也。然其病非僅滑脫也，若滯下然，滑脫之中，實兼有瘀滯。其所瘀滯者，不外氣血，而實有因寒因熱之不同。此方用龍骨、牡蠣以固脫，用茜草、海螵蛸以化滯，更用生山藥以滋真陰固元氣。至臨證時，遇有因寒者，加溫熱之藥，因熱者，加寒涼之藥，此方中意也。而愚擬此方，則又別有會心也。嘗考《神農本草經》龍骨善開癥瘕，牡蠣善消鼠瘦，是二藥為收澀之品，而兼具開通之力也。烏魚骨即海螵蛸，茹蘆即茜草，是二藥為開通之品，而實具收澀之力也。四藥彙集成方，其能開通者，兼能收澀，能收澀者，兼能開通，相助為理，相得益彰，此中消息之妙，有非言語所能罄者。

一婦人，年二十餘，患白帶甚劇，醫治年餘不愈。後愚診視，脈甚微弱。自言下焦涼甚，遂用此方，加乾薑六錢，鹿角霜三錢，連服十劑痊愈。

又一媪年六旬。患赤、白帶下，而赤帶多於白帶，亦醫治年餘不愈。診其脈甚洪滑，自言心熱頭昏，時覺眩暈，已半載未起床矣。遂用此方，加白芍六錢，數劑白帶不見，而赤帶如故，心熱、頭眩暈亦如故。又加苦參、龍膽草、白頭翁各數錢。連服七八劑，赤帶亦愈，而諸疾亦遂痊愈。自擬此方以來，用治帶下，愈者不可勝數。而獨載此兩則者，誠以二證病因，寒熱懸殊。且年少者用此方，反加大熱之藥，年老者用此方，反加苦寒之藥。欲臨證者，當知審證用藥，不可拘於年歲之老少也。

按：白頭翁不但治因熱之帶證甚效也。邑治東二十裡，有古城址基，周十餘里，愚偶登其上，見城背陰多長白頭翁，而彼處居人未之識也，剖取其鮮根，以治血淋、溺血與大便下血之因熱而得者甚效，誠良藥也。是以仲景治厥陰熱痢有白頭翁湯也。愚感白頭翁具此良材，而千百年埋沒於此不見用，因作俚語以記之曰「白頭翁住古城陰，埋沒英才歲月深，偶遇知音來勸駕，出為斯世起疴沉」。

帶證，若服此湯未能除根者，可用此湯送服秘真丹（在第二卷）一錢。

按：帶下似滯下之說，愚向持此論。後觀西法，亦謂大腸病則流白痢，子宮病則流白帶，其理相同。法用兒茶、白礬、石榴皮、沒石子等水洗之。若此證之劇者，兼用其外治之法亦可。又其內治白帶法，用沒石子一兩搗爛，水一斤半，



煎至一斤，每溫服一兩，日三次。或研細作粉，每服五分，日二次亦可。又可單以之熬水洗之，或用注射器注射之。

按：沒石子味苦而澀，苦則能開，澀則能斂，一藥而具此兩長，原與拙擬清帶湯之意相合。且其收斂之力最勝，凡下焦滑脫之疾，或大便滑瀉、或小便不禁、或男子遺精、或女子崩漏，用之皆效驗。今之醫者，多忽不知用惜哉。又東人中將湯，治白帶亦甚效。玉燭湯下，載有其方，可採用。若以治赤帶，方中官桂、丁香，宜斟酌少用，苦參宜多用。

赤白二帶，赤者多熱，白者多涼。而辨其涼熱，又不可盡在赤白也，宜細詢其自覺或涼或熱，參以脈之或遲或數，有力無力，則涼熱可辨矣。治法宜用收澀之品，而以化瘀通滯之藥佐之。清帶湯，證偏熱者，加生杭芍、生地黃；熱甚者，加苦參、黃柏，或兼用防腐之藥，若金銀花、旱三七、鴉膽子仁皆可酌用；證偏涼者，加白朮、鹿角膠；涼甚者，加乾薑、桂附、小茴香。

近閱《杭州醫報》，載有俗傳治白帶便方，用綠豆芽連頭根三斤，洗淨，加水兩大碗，煎透去渣，加生薑汁三兩、黃蔗糖四兩，慢火收膏，每晨開水沖服。約十二日服一料，服至兩料必愈。按：此方用之數次，頗有效驗。

【加味麥門冬湯】

治婦女倒經。

乾寸冬（五錢，帶心）、野臺參（四錢）、清半夏（三錢）、生山藥（四錢，以代粳米）、生杭芍（三錢）、丹參（三錢）、甘草（二錢）、生桃仁（二錢，帶皮尖搗）、大棗（三枚，擘開）。

婦女倒經之證，陳修園《女科要旨》借用《金匱》麥門冬湯，可謂特識。然其方原治「火逆上氣，咽喉不利」。今用以治倒經，必略為加減，而後乃與病證吻合也。

或問「《金匱》麥門冬湯所主之病，與婦人倒經之病迥別，何以能借用之而有效驗」？答曰「衝為血海，居少腹之兩旁。其脈上隸陽明，下連少陰。少陰腎虛，其氣化不能閉藏以收攝衝氣，則衝氣易於上干。陽明胃虛，其氣化不能下行以鎮安衝氣，則衝氣亦易於上干。衝中之氣既上干，衝中之血自隨之上逆，此倒經所由來也。麥門冬湯，於大補中氣以生津液藥中，用半夏一味，以降胃安衝，且以山藥代粳米，以補腎斂衝，於是衝中之氣安其故宅，衝中之血，自不上逆，而循其故道矣。特是經脈所以上行者，固多因衝氣之上干，實亦下行之路，有所壅塞。觀其每至下行之期，而後上行可知也，故又加芍藥、丹參、桃仁以開其下行之路，使至期下行，毫無滯礙。是以其方非為治倒經而設，而略為加減，即以治倒經甚效，愈以歎經方之函蓋無窮也。

按：用此方治倒經大抵皆效，而間有不效者，以其兼他證也。曾治一室女，倒經年餘不愈，其脈象微弱。投以此湯，服藥後甚覺短氣。再診其脈，微弱益甚。自言素有短氣之病，今則益加重耳。恍悟其胸中大氣，必然下陷，故不任半夏之降也。遂改用拙擬升陷湯（在第四卷），連服十劑。短氣愈，而倒經之病亦愈。一少婦，倒經半載不愈，診其脈微弱而遲，兩寸不起，呼吸自覺短氣，知其亦胸中大氣下陷，亦投以升陷湯，連服數劑，短氣即愈。身體較前強壯，即停藥不服，其月經水即順，逾十月舉男矣。

或問「倒經之證，既由於衝氣胃氣上逆，大氣下陷者，其氣化升降之機正與之反對，何亦病倒經乎？」答曰「此理甚微奧，人之大氣原能斡旋全身，為諸氣之綱領，故大氣常充滿於胸中，自能運轉胃氣使之下降，鎮攝衝氣使不上衝。大氣一陷，綱領不振，諸氣之條貫多紊亂，此乃自然之理也。是知衝氣胃氣之逆，非必由於大氣下陷，而大氣下陷者，實可致衝胃氣逆也。致病之因既不同，用藥者豈可膠柱鼓瑟哉」。

【壽胎丸】

治滑胎。

菟絲子（四兩，炒燉）、桑寄生（二兩）、川續斷（二兩）、真阿膠（二兩）。上藥將前三味軋細，水化阿膠和為丸一分重（乾足一分）。每服二十九，開水送下，日再服。氣虛者加人參二兩，大氣陷者加生黃耆三兩（大氣陷證詳第四卷升陷湯下），食少者加炒白朮二兩，涼者加炒補骨脂二兩，熱者加生地二兩。菟絲無根，蔓延草木之上，而草木為之不茂，其善吸他物之氣化以自養可知。胎在母腹，若果善吸其母之氣化，自無下墜之虞。且男女生育，皆賴腎臟作強。菟絲大能補腎，腎旺自能蔭胎也。寄生根不著土，寄生樹上，又復隆冬茂盛，雪地冰天之際，葉翠子紅，亦善吸空中氣化之物。且其寄生於樹上，亦猶胎之寄母腹中，氣類相感，大能使胎氣強壯，故《本經》載其能安胎。續斷亦補腎之藥，而其節之斷處，皆有筋骨相連，大有連屬維繫之意。阿膠係驢皮所熬，驢歷十二月始生，較他物獨遲。以其遲，挽流產之速，自當有效。且其膠係阿井之水熬成，阿井為濟水之伏流，以之熬膠，最善伏藏血脈，滋陰補腎，故《本經》亦載其能安胎也。至若氣虛者，加人參以補氣。大氣陷者，用黃耆以升補大氣。飲食減少者，加白朮以健補脾胃。涼者，加補骨脂以助腎中之陽（補骨脂善保胎修園曾詳論之）。熱者，加生地黃以滋腎中之陰。臨時斟酌適宜，用之無不效者。

友人張潔泉善針灸，其夫人素有滑胎之病。是以潔泉年近四旬，尚未育麟。偶與談及，問何以不治。潔泉謂每次服藥，皆無效驗，即偶足月，產下亦軟弱異常，數日而殤。此蓋關於稟賦，非藥力所能挽回也。愚曰「挽回此證甚易，特視用藥何如耳」。時其夫人受孕三四月，遂治以此方，服藥兩月，至期舉一男，甚強壯。

按：此方乃思患預防之法，非救急之法。若胎氣已動，或至下血者，又另有急救之方。曾治一少婦，其初次有妊，五六月而墜。後又有妊，六七月間，忽胎動下血，急投以生黃耆、生地黃各二兩，白朮、山萸肉（去淨核）、龍骨（煨搗）、牡蠣（煨搗）各一兩，煎湯一大碗，頓服之，胎氣遂安。將藥減半，又服一劑。後舉一男，強壯無恙。

流產為婦人恆有之病，而方書所載保胎之方，未有用之必效者。誠以保胎所用之藥，當注重於胎，以變化胎之性情氣質，使之善吸其母之氣化以自養，自無流產之虞。若但補助妊婦，使其氣血壯旺固攝，以為母強自能蔭子，此又非熟籌完全也。是以愚臨證考驗以來，見有屢次流產者，其人恆身體強壯，分毫無病，而身體軟弱者，恐生育多則身體愈弱，欲其流產，而偏不流產。於以知或流產，或不流產，不盡關於妊婦身體之強弱，實兼視所受之胎善吸取其母之氣化否也。由斯而論，愚於千百味藥中，得一最善治流產之藥，乃菟絲子是也。

壽胎丸，重用菟絲子為主藥，而以續斷、寄生、阿膠諸藥輔之，凡受妊之婦，於兩月之後徐服一料，必無流產之弊，此乃於最易流產者屢次用之皆效。至陳修園謂宜用大補大溫之劑，使子宮常得暖氣，則胎自日長而有成，彼蓋因其夫人服白朮、黃芩連墮胎五次，後服四物湯加鹿角膠、補骨脂、續斷而胎安，遂疑涼藥能墮胎，篤信熱藥能安胎。不知黃芩之所以能墮胎者，非以其涼也。《本經》謂黃芩下血閉，豈有善下血閉之藥而能保胎者乎？蓋漢、唐以前，名醫用藥皆謹遵《本經》，所以可為經方，用其方者鮮有流弊。迨至宋、元以還，諸家恆師心自智，其用藥或至顯背《本經》。是以醫如丹溪，猶粗忽如此，竟用黃芩為保胎之藥，俾用其方者不惟無益，而反有所損，此所以為近代之名醫也。所可異者，修園固篤信《本經》者也，何於用白朮、黃芩之墮胎，不知黃芩之能開血閉，而但謂其性涼不利於胎乎？究之胎得其養，全在溫度適宜，過涼之藥，固不可以保胎，即藥過於熱，亦非所以保胎也。惟修園生平用藥喜熱惡涼，是以立論稍有所偏耳。

【安胃飲】

治惡阻。

清半夏（一兩，溫水淘洗兩次毫無礬味然後入煎）、淨青黛（三錢）、赤石脂（一兩）。

用作飯小鍋，煎取清汁一大碗，調入蜂蜜二兩，徐徐溫飲下。一次只飲一口，半日服盡。若服後吐仍未止或其大便秘結者，去石脂加生赭石（軋細）一兩。若嫌青黛微有藥味者，亦可但用半夏、赭石。

或問「《本經》謂赭石能墮胎，此方治惡阻，而有時以赭石易石脂，獨不慮其有墮胎之弊乎」？答曰「惡阻之劇者，飲水一口亦吐出，其氣化津液不能下達。恆至大便秘結，旬餘不通。其甚者，或結於幽門（胃下口）、闌門（大小腸相接處），致上下關格不通，滿腹作疼，此有關性命之證也。夫病既危急，非大力之藥不能挽回。況赭石之性，原非開破，其鎮墜之力，不過能下有形滯物。若胎至六七個月，服之或有妨礙，至惡阻之時，不過兩三個月，胎體未成，惟是經血凝滯，赭石毫無破血之性，是以服之無妨。且嘔吐者，其衝氣胃氣皆上逆，借赭石鎮逆之力，以折其上逆之機，氣化乃適得其平，《內經》所謂「有故無殞亦無殞也」。愚治惡阻之證，遇有上脘固結，旬日之間勺飲不能下行，無論水與藥，入口須臾即吐出，群醫束手諉謂不治，而愚放膽重用生赭石數兩，煎湯一大碗，徐

徐溫飲下。吐止、結開、便通，而胎亦無傷。拙擬參赭鎮氣湯（在第二卷）下及赭石解下，載有詳案可考也。

半夏辛溫下行，為降逆止嘔之主藥。坊間皆制以白礬，服之轉令人嘔吐。清半夏其礬雖較少，然亦必淘洗數次，始無礬味。特是既經礬煮，又經淘洗，致半夏降逆止嘔之力大減。遇病之劇者，恒不能勝病，故必須以他藥輔之。愚有鑑於此，恒自製半夏用之。法用生半夏數斤，冷時用溫水浸之，日換水二次，熱時以井泉水，日換水三四次，約浸二十餘日。試嚼服半粒，覺辣味不甚猛烈，乘濕切片，曬乾囊裝，懸於透風之處。每用一兩，煎湯兩茶盅，調入淨蜂蜜二兩，徐徐咽之。無論嘔吐如何之劇，未有不止者。蓋古人用半夏，原湯泡七次即用。初未有用白礬制之者也。

西人治惡阻，慣用臭剝。此藥之性質及用量，皆詳於加味磁朱丸下（在第七卷）。然愚嘗試之，有效有無效。大抵惡阻之輕者，用之即效。而其劇者，徒用此藥，仍不能止嘔吐也。若用鐵氧湯（在第七卷）送服，則其效驗較大。



【大順湯】

治產難，不可早服，必胎衣破後，小兒頭至產門者，然後服之。

野黨參（一兩）、當歸（一兩）、生赭石（二兩，軋細）。

用衛足花子炒爆一錢作引，或丈菊花瓣一錢作引皆可，無二物作引亦可。

或疑赭石乃金石之藥，不可放膽重用。不知赭石性至和平，雖重墜下行，而不傷氣血。況有黨參一兩以補氣，當歸一兩以生血。且以參、歸之微溫，以濟赭石之微涼，溫涼調和愈覺穩妥也。矧產難者非氣血虛弱，即氣血壅滯，不能下行。人參、當歸雖能補助氣血，而性皆微兼升浮，得赭石之重墜，則力能下行，自能與赭石相助為理，以成催生開交骨之功也。至於當歸之滑潤，原為利產良藥，與赭石同用，其滑潤之力亦愈增也。

族侄婦，臨盆兩日不產，用一切催生藥，胎氣轉覺上逆，為制此湯，一劑即產下。

一婦人，臨產交骨不開，困頓三日，勢甚危急，亦投以此湯，一劑而產。自擬得此方以來，救人多矣，放膽用之，皆可隨手奏效。

附：衛足花即葵花，其子即冬葵子。緣此花若春日早種，當年即可結子。而用以催生，則季夏種之，經冬至明年結子者尤效，故名曰冬葵子。今藥坊所鬻者，皆以丈菊子為冬葵子，殊屬差誤。孔子曰「鮑莊子之智不如葵，葵猶能衛其足」。

誠以此花葉茂叢生，自葉中出莖，莖下邊皆被葉衛護，故亦名衛足花。俗呼為守足花，音雖異而義則同。有如促織，北方亦呼為趣織也。又名一丈紅，為其莖高一丈，而花色紅也。其花如木槿，葉如木芙蓉，故高麗詠一丈紅詩有「花與木槿花相似，葉共芙蓉葉一般，五尺欄杆遮不住，猶留一半與人看」之句。結實大如錢，作扁形，其中子如榆莢。至於丈菊莖長丈許，幹粗如竹，葉大如荷，花大如盤盂，單瓣黃色，其花心成窠如蜂房。迨中心結子成熟，而周遭花瓣不凋，一名迎陽花，一名西番葵，俗呼為向日葵。不知向日葵之名，古人原屬之衛足花，非屬之丈菊也。司馬溫公詩曰「四月清和雨乍晴，南山當戶轉分明，更無柳絮因風起，惟有葵花向日傾」。夫丈菊原無宿根，季春下種，四月苗不盈尺。而衛足花正開，溫公詩中所謂葵花向日傾者，確指衛足花無疑矣。或謂「群芳譜謂丈菊花有毒，能墜胎，孕婦忌經其下。子得花之餘氣，自當長於催生」。答曰「丈菊之花，雖有墜胎之弊，催生卻有功效，其子則用之無效，惟治淋有效。至於衛足之子，用鍋炒爆其甲，朝種之，暮即生出土外。物生之神速，以此為最，故尤為催生之妙品也。且丈菊春種秋收，不能經冬。若以其花向日，亦呼之曰葵則可，而斷不可名之曰冬葵也」。

按：葵菜古人推為百菜之長，以其宿根年年生長，且又發生最早，性甚耐旱，即不堪種植之處，種之無不番生。其葉春夏秋三時皆可食。且含汁黏滑，又能養人。八口之家，有葵二畝，荒年可以無饑。葵之關乎民命者如此，所以論荒政者，

以種葵為要圖。而「馬踐園葵，魯之民為之經歲不飽」也。今人不知種之以備荒薦，果何故耶？

附：衛足花即葵花，其子即冬葵子。緣此花若春日早種，當年即可結子。而用以催生，則季夏種之，經冬至明年結子者尤效，故名曰冬葵子。今藥坊所鬻者，皆以丈菊子為冬葵子，殊屬差誤。蓋古之所謂葵，與俗所謂向日葵者原非一種。古所謂葵即衛足花，俗呼為守足花者是也。因此花先生叢葉，自葉中心出莖，莖之下邊盡被叢葉衛護，故曰衛足。莖高近一丈，花多紅色，與木槿相似，葉大如木芙蓉。此為宿根植物，季夏下種，至次年孟夏始開花，結實大如錢，作扁形，其中子如榆莢，為其經冬依然發生，故其結之子名為冬葵子。須於鮮嫩之時採取，則多含蛋白質，故能有益於人。《聖惠方》謂採其子陰乾，是當鮮嫩之時採而陰乾之也。若過老則在科上自乾，而無事陰乾矣。又有一種，二、三月下種，至六月開花，其下無叢生之葉，不能衛足，而其莖、葉、花皆與葵無異，其治療之功效亦大致相同，即藥品中之蜀葵。《本草綱目》謂花之白者治瘡，是衛足葵與蜀葵皆治瘡也。

至於俗所謂向日葵者，各種本草皆未載，惟《群芳譜》載之，本名丈菊，一名西番葵，一名迎陽葵，且謂其性能墮胎。然用其墮胎之力以催生，則誠有效驗，是以大順湯用其花瓣作引也。向日葵莖長丈許，乾粗如竹，葉大如，花大如盤盂，單瓣黃色，其花心成窠如蜂房。迨中心結子成熟，而周遭花瓣不凋枯。其子人恆

炒食之，知其無毒，且知其性滑，曾單用以治淋甚效。後與鴉膽子同用（鴉膽子去皮四十粒，用丈菊子一兩炒搗，煎湯送下）治花柳毒淋，亦甚效，然不知其能治瘡也。近閱《紹興醫藥學報》載盧月潭述葵能醫瘡一節，則丈菊誠可列於藥品矣。丈菊花英，催生之力實勝於子，曾見有單用丈菊花英催生，服之即效者，惜人多不知耳。至於用衛足子催生，當分老嫩兩種。鮮嫩衛足子，須用數兩搗爛煮汁服，若用老者，當用兩許微火炒裂其甲，煎湯飲之。

【和血熄風湯】

治產後受風發搐。

當歸（一兩）、生黃耆（六錢）、真阿膠（四錢，不炒）、防風（三錢）、荊芥（三錢）、川芎（三錢）、生杭芍（二錢）、紅花（一錢）、生桃仁（錢半，帶皮尖搗）。

此方雖治產後受風，而實以補助氣血為主。蓋補正氣，即所以逐邪氣，而血活者，風又自去也（血活風自去方書成語）。若產時下血過多或發汗過多，以致發搐者，此方仍不可用，為其猶有發表之藥也，當滋陰養血，以榮其筋，熄其內風，其搐自止。若血虛而氣亦虛者，又當以補氣之藥輔之。而補氣之藥以黃耆為最，因黃耆不但補氣，實兼能治大風也（《本經》謂黃主大風）。

一婦人，產後七八日發搐，服發汗之藥數劑不效。詢方於愚，因思其屢次發汗不效，似不宜再發其汗，以傷其津液。遂單用阿膠一兩，水融化，服之而愈。一婦人，產後十餘日，周身汗出不止，且發搐，治以山萸肉（去淨核）、生山藥各一兩，煎服兩劑，汗止而搐亦愈。

東海漁家婦，產後三日，身冷無汗，發搐甚劇，時愚游海濱，其家人造寓求方。其地隔藥局甚遠，而海濱多產麻黃，可以採取。遂俾取麻黃一握，同魚鱈膠一具，煎湯一大碗，乘熱飲之，得汗而愈。用魚鱈膠者，亦防其下血過多，因陰虛而發搐，且以其物為漁家所固有也。

一婦人，產後發汗過多，覆被三層皆濕透，因致心中怔忡，精神恍惚，時覺身飄飄上至屋頂，此虛極將脫，而神魂飛越也。延愚診視，見其汗出猶不止，六脈皆虛浮，按之即無。急用生山藥、淨萸肉各一兩，生杭芍四錢，煎服。汗止精神亦定。翌日藥力歇，又病而反復。時愚已旋里，病家復持方來詢，為添龍骨、牡蠣（皆不用煨）各八錢，且囑其服藥數劑，其病必愈，孰意藥坊中，竟謂方中藥性過涼，產後斷不宜用，且言此證係產後風，彼有治產後風成方，屢試屢驗，慫恿病家用之。病家竟誤用其方，汗出不止而脫。夫其證原屬過汗所致，而再以治產後風發表之藥，何異鳩毒，斯可為發汗不審虛實者之炯戒矣。

《傳青主女科》曰「產後氣血暴虛，百骸少血濡養，忽然口緊牙緊，手足筋脈拘攣，類中風癱瘓，雖虛火泛上有痰，皆當以末治之。勿執偏門，而用治風消痰方，以重虛產婦也。當用生化湯，加參、以益其氣」。又曰「產後婦人，惡寒噁心，身體顫動，發熱作渴，人以為產後傷寒也，誰知其氣血兩虛，正不敵邪而然乎？大抵人之氣不虛，則邪斷難入，產婦失血過多，其氣必大虛，氣虛則皮毛無衛，邪原易入。不必戶外之風來襲體也，即一舉一動，風可乘虛而入。然產後之風，易入亦易出，凡有外感之邪，俱不必祛風。況產後之惡寒者，寒由內生也。發熱者，熱由內弱也。身顫者，顫由氣虛也。治其內寒，外寒自散。治其內弱，外熱自解。壯其元氣，而身顫自除也」。

按：傅氏之論甚超。特其雖有外感，不必祛風二句，不無可議。夫產後果有外感，原當治以外感之藥，惟宜兼用補氣生血之藥，以輔翼之耳。若其風熱已入陽明之府，表裡俱熱，脈象洪實者，雖生石膏亦可用，故《金匱》有竹皮大丸，治婦人乳中虛，煩亂嘔逆，方中原有石膏。《本經》石膏治產乳，原有明文。特不宜與知母並用，又宜仿白虎加人參湯之意，重用人參，以大補元氣，更以玄參代知母，始能托邪外出，則石膏之寒涼，得人參之溫補，能逗留胃中，以化燥熱，不至直趨下焦，而與產婦有礙也。拙擬仙露湯（在第六卷）後曾詳論之，且有名醫治驗之案可參視。

【附方】

《醫林改錯》治產後風，有黃耆桃紅湯，方用生黃耆半斤，帶皮尖生桃仁三錢搗碎，紅花二錢，水煎服。按產後風項背反張者，此方最效。

【附方】

俗傳治產後風方，當歸五錢，麻黃、紅花、白朮各三錢，大黃、川芎、肉桂、紫苑各二錢，煎服。

按：此方效驗異常，即至牙關緊閉，不能用藥者，將齒拗開灌之，亦多愈者。人多畏其有大黃而不敢用，不知西人治產後風，亦多用破血之藥。蓋以產後有瘀血者多，此證用大黃以破之，所謂血活風自去也。況猶有麻、桂之辛熱，歸、朮之補益以調燮之乎。

【滋陰清胃湯】

治產後溫病，陽明府實，表裡俱熱者。

玄參（兩半）、當歸（三錢）、生杭芍（四錢）、甘草（錢半）、茅根（二錢）。

上藥五味，煎湯兩盅，分二次溫服，一次即愈者，停後服。

產後忌用寒涼，而溫熱入陽明府後，又必用寒涼方解，因此醫者恆多束手。不知石膏、玄參《本經》皆明載治產乳。是以熱入陽明之重者，可用白虎加人參以山藥代粳米湯，更以玄參代知母。其稍輕者，治以此湯，皆可隨手奏效。愚用此兩方，救人多矣。臨證者當篤信《本經》，不可畏石膏、玄參之寒涼也。況石膏、玄參，《本經》原皆謂其微寒，並非甚寒涼之藥也。



【滋乳湯】

治少乳。其乳少由於氣血虛或經絡瘀者，服之皆有效驗。

生黃耆（一兩）、當歸（五錢）、知母（四錢）、玄參（四錢）、穿山甲（二錢，炒搗）、六路通（大者三枚，搗）、王不留行（四錢，炒）。  
用絲瓜瓢作引，無者不用亦可。若用豬前蹄兩個煮湯，用以煎藥更佳。

【消乳湯】

治結乳腫疼或成乳癰新起者，一服即消。若已作膿，服之亦可消腫止疼，俾其速潰。並治一切紅腫瘡瘍。

知母（八錢）、連翹（四錢）、金銀花（三錢）、穿山甲（二錢，炒搗）、栝萸（五錢，切絲）、丹參（四錢）、生明乳香（四錢）、生明沒藥（四錢）。

在德州時，有軍官張憲臣夫人，患乳癰，腫疼甚劇。投以此湯，兩劑而愈。然猶微有疼時，愆患其再服一兩劑，以消其芥蒂。以為已癒，不以為意。隔旬日，又復腫疼，復求為治療。愚曰：「此次服藥不能盡消，必須出膿少許，因其舊有芥蒂未除，至今已潰膿也。」後果服藥不甚見效，遂入西醫院中治療，旬日後，其瘡外破一口，醫者用刀闊之，以期便於敷藥。又旬日，內潰益甚，滿乳又破七八個口，醫者又欲盡闊之使通。病人懼，不敢治。強出院還家，復求治於愚。見其各口中皆膿、乳並流，外邊實不能敷藥。然內服湯藥，助其肌肉速生，自能排膿外出，許以十日可為治癒。遂將內托生肌散（在後），作湯藥服之，每日用藥一劑，煎服二次，果十日痊愈。

表侄劉子醞，從愚學醫，曾得一治結乳腫疼兼治乳癰方。用生白礬、明雄黃、松蘿茶各一錢半，共研細，分作三劑，日服一劑，黃酒送下，再多飲酒數杯更佳。此方用之屢次見效，真奇方也。若無松蘿茶，可代以好茶葉。

【升肝舒鬱湯】

治婦女陰挺，亦治肝氣虛弱，鬱結不舒。

生黃耆（六錢）、當歸（三錢）、知母（三錢）、柴胡（一錢五分）、生明乳香（三錢）、生明沒藥（三錢）、川芎（一錢五分）。

肝主筋，肝脈絡陰器，肝又為腎行氣。陰挺自陰中挺出，形狀類筋之所結。病之原因，為肝氣鬱而下陷無疑也，故方中黃耆與柴胡、芎藭並用，補肝（黃耆補肝之理詳第四卷醒脾升陷湯下）即以舒肝，而肝氣之陷者可升。當歸與乳香、沒藥並用，養肝即以調肝，而肝氣之鬱者可化。又恐黃耆性熱，與肝中所寄之相火不宜，故又加知母之涼潤者，以解其熱也。

一婦人，年三十餘，患此證，用陳氏《女科要旨》，治陰挺方，治之不效。因憶《傳青主女科》有治陰挺之方，其證得之產後。因平時過怒傷肝，產時又努力太過，自產門下墜一片，似筋非筋，似肉非肉，用升補肝氣之藥，其證可愈。遂師其意，為制此湯服之。數劑即見消，十劑痊愈。

一室女，年十五。因胸中大氣下陷，二便常覺下墜，而小便尤甚。乃誤認為小便不通，努力強便，陰中忽墜下一物，其形如桃，微露其尖，牽引腰際下墜作疼，夜間尤甚，劇時號呼不止。投以理鬱升陷湯（在第四卷），將升麻加倍，二劑疼止，十劑後，其物全消。蓋理鬱升陷湯，原與升肝舒鬱湯相似也。

【資生通脈湯】

治室女月閉血枯，飲食減少，灼熱咳嗽。

白朮（三錢，炒）、生懷山藥（一兩）、生雞內金（二錢，黃色的）、龍眼肉（六錢）、山萸肉（四錢，去淨核）、枸杞果（四錢）、玄參（三錢）、生杭芍（三錢）、桃仁（二錢）、紅花（錢半）、甘草（二錢）。

灼熱不退者，加生地黃六錢或至一兩。咳嗽者，加川貝母三錢，米殼二錢（嗽止去之）。泄瀉者，去玄參，加熟地黃一兩，雲苓片二錢，或更酌將白朮加重。服後瀉仍不止者，可於服藥之外，用生懷山藥細末煮粥，攪入捻碎熟雞子黃數枚，用作點心，日服兩次，瀉止後停服。大便乾燥者，加當歸、阿膠各數錢。小便不利者，加生車前子三錢（裝袋），地膚子二錢或將芍藥（善治陰虛小便不利）加重。肝氣鬱者，加生麥芽三錢，川芎、菝朮各一錢。汗多者，將萸肉改用六錢，再加生龍骨、生牡蠣各六錢。

《內經》謂「二陽之病發心脾，有不得隱曲，在女子為不月」，夫二陽者，陽明胃腑也。胃腑有病，不能消化飲食，推其病之所發，在於心脾。又推其心脾病之所發，在於有不得隱曲（凡不能自如者皆為不得隱曲）。蓋心主神，脾主思，人有不得隱曲，其神思鬱結，胃腑必減少酸汁（化食賴酸汁，歡喜則酸汁生者多，憂思則酸汁生者少），不能消化飲食，以生血液，所以在女子為不月也。夫女子不月，既由於胃腑有病，不能消化飲食。治之者，自當調其脾胃，使之多進飲食，

以為生血之根本，故方中用白朮以健胃之陽，使之動有力（飲食之消亦仗胃有動）。山藥、龍眼肉，以滋胃之陰，俾其酸汁多生。雞內金原含有酸汁，且能運化諸補藥之力，使之補而不滯。血虛者必多灼熱，故用玄參、芍藥以退熱。又血虛者，其肝腎必虛，故用萸肉、枸杞以補其肝腎。甘草為補脾胃之正藥，與方中萸肉並用，更有酸甘化陰之妙。桃仁、紅花為破血之要品，方中少用之，非取其破血，欲借之以活血脈通經絡也。至方後附載，因證加減諸藥，不過粗陳梗概，至於證之更改多端，尤貴臨證者，因時制宜耳。

滄州曹庄子曹姓女，年十六歲，天癸猶未至。飲食減少，身體羸瘦，漸覺灼熱。其脈五至，細而無力。治以資生通脈湯，服至五劑，灼熱已退，飲食加多。遂將方中玄參、芍藥各減一錢，又加當歸、懷牛膝各三錢。服至十劑，身體較前胖壯，脈象亦大有起色。又於方中加樗雞（俗名紅娘蟲）十枚，服至七八劑，天癸遂至。遂減去樗雞，再服數劑，以善其後。

奉天馬氏女，自十四歲，月事已通，至十五歲秋際，因食瓜果過多，泄瀉月餘方愈，從此月事遂閉，延醫診治，至十六歲季夏，病浸增劇，因求為診治。其身形瘦弱異常，氣息微喘，乾嗽無痰，過午潮熱，夜間尤甚，飲食減少，大便泄瀉。其脈數近六至，微細無力。俾先用生懷山藥細末八錢，水調煮作粥，又將熟雞子黃四枚，捻碎攪粥中，再煮一兩沸，空心時服。服後須臾，又服西藥百布聖二瓦，以助其消化，每日如此兩次，用作點心，服至四日，其瀉已止。又服數日，

諸病亦稍見輕。遂投以資生通脈湯，去玄參加生地黃五錢、川貝三錢，連服十餘劑，灼熱減十分之八，飲食加多，喘嗽亦漸愈。遂將生地黃換作熟地黃，又加懷牛膝五錢，服至十劑，自覺身體爽健，諸病皆無，惟月事猶未見。又於方中加鱘蟲（即土鱘蟲，背多橫紋者真，背光滑者非是）五枚、樗雞十枚，服至四劑，月事已通。遂去蟲、樗雞，俾再服數劑，以善其後。

甘肅馬姓，寓天津英租界安居里，有女十七歲。自十六歲秋際，因患右目生內障，服藥不愈，憂思過度，以致月閉。自臘月服藥，直至次年孟秋月底不愈，其兄向為陸軍團長，時賦閑家居，喜涉閱醫書。見愚新出版五期《衷中參西錄》，極為推許，遂來寓問詢，求為診治。其人體質瘦弱，五心煩熱，過午兩顴色紅，灼熱益甚，心中滿悶，飲食少許，即停滯不下，夜不能寐。脈搏五至，弦細無力。為其飲食停滯，夜不能寐，投以資生通脈湯，加生赭石（研細）四錢，熟棗仁三錢，服至四劑，飲食加多，夜已能寐，灼熱稍退，遂去棗仁，減赭石一錢，又加地黃五錢，丹皮三錢，服約十劑，灼熱大減。又去丹皮，將龍眼肉改用八錢，再加懷牛膝五錢，連服十餘劑，身體浸壯健。因其月事猶未通下，又加鱘蟲五枚、樗雞十枚。服至五劑，月事已通。然下者不多，遂去樗雞、地黃，加當歸五錢，俾服數劑，以善其後。

治眼科方

【蒲公英湯】

治眼疾腫疼，或胬肉遮睛，或赤脈絡目，或目睛脹疼，或目疼連腦，或羞明多淚，一切虛火實熱之證。

鮮蒲公英（四兩，根葉莖花皆用，花開殘者去之，如無鮮者，可用乾者二兩代之）。

上一味煎湯兩大碗，溫服一碗。餘一碗乘熱熏洗。

按：目疼連腦者，宜用鮮蒲公英二兩，加懷牛膝一兩煎湯飲之。

此方得之於姻兄於俊卿，言其母嘗患眼疾，疼痛異常，經延醫調治，數月不愈，有高姓媪，告以此方，一次即愈。愚自得此方後，屢試皆效。夫蒲公英遍地皆有，仲春生苗，季春開花色正黃，至初冬其花猶有開者，狀類小菊，其葉似大薊，田家採取生啖，以當菜蔬。其功長於治瘡，能消散癰疔毒火，然不知其能治眼疾也。使人皆知其治眼疾，如此神效，天下無瞽目之人矣。

古服食方，有還少丹。蒲公英連根帶葉取一斤，洗淨，勿令見天日，晾乾，用斗子解鹽（即《本經》大鹽曬於斗之中者，出山西解池）一兩，香附子五錢，二味為細末，入蒲公英，水內淹一宿，分為十二團，用皮紙三四層裹紮定，用六一泥（即蚯蚓泥）如法固濟，灶內焙乾，乃以武火通紅為度，冷定取出，去泥為

末。早晚擦牙漱之，吐咽任便，久久方效。年未及八十者，服之鬚髮反黑，齒落更生。年少服之，至老不衰。由是觀之，其清補腎經之功可知。且其味苦，又能清心經之熱，所以治眼疾甚效者，或以斯歟！



【磨翳水】

治目翳遮睛。

生爐甘石（一兩）、硼砂（八錢）、膽礬（二錢）、薄荷葉（三錢）、蟬蛻（三錢，帶全足去翅土）。

上藥五味，將前三味藥臼搗細，再將薄荷、蟬蛻煎水一大盅，用其水和所搗藥末，入藥鉢內研至極細，將浮水者隨水飛出，連水別貯一器，待片時，將浮頭清水，仍入鉢中，和所餘藥渣研細，仍隨水飛出，如此不計次數，以飛淨為度。若飛過者還不甚細，可再研再飛，以極細為度。制好連水貯瓶中，勿令透氣。用時將瓶中水藥調勻，點眼上，日五六次。若目翳甚濃，已成肉螺者，加真藏硃砂二分，另研調和藥水中。此方效力全在甘石生用，然生用則質甚硬，又恐與眼不宜，故必如此研細水飛，然後可以之點眼。

【磨翳散】

治目睛脹疼，或微生雲翳，或赤脈絡目，或目眇潰爛，或偶因有火視物不真。生爐甘石（三錢）、硼砂（二錢）、黃連（一錢）、人指甲（五分，鍋焙脆無翳者不用）。

上藥先將黃連搗碎，泡碗內，冷時兩三日，熱時一日，將泡黃連水過羅，約得清水半茶盅，再將餘三味搗細，和黃連水入藥鉢中研之，如研前藥之法，以極細為度。研好連水帶藥，用大盤盛之。白日置陰處晾之，夜則露之，若冬日微曬亦可。若有風塵時，蓋以薄紙。俟乾，貯瓶中，勿透氣。用時涼水調和，點眼上，日三四次。若有目翳，人乳調和點之。若目翳大而厚者，不可用黃連水研藥，宜用蟬蛻（帶全足去翅土）一錢，煎水研之。蓋微茫之翳，得清火之藥即退。若其翳已遮睛，治以黃連成冰翳，而不能消矣。

【明目蓬硝水】

治眼疾暴發紅腫疼痛。或眥多贅肉，或漸生雲翳，及因有火而眼即發乾昏花者。

硼砂（五錢）、芒硝（三錢，硝中若不明亮用水化開澄去其中泥土）。上藥和涼水多半盅，研至融化。用點眼上，一日約點三十次。若陳目病一日點十餘次。冬日須將藥碗置熱水中，候溫點之。

【清腦黃連膏】

治眼疾由熱者。

黃連（二錢）為細末，香油調如薄糊，常常以鼻聞之，日約二三十次。勿論左右眼患證，應須兩鼻孔皆聞。

目係神經連於腦，腦部因熱生炎，病及神經，必生眼疾。彼服藥無捷效者，因所用之藥不能直達腦部故也。愚悟得此理，借鼻竅為快捷方式，以直達於腦。凡眼目紅腫之疾，及一切目疾之因熱者，莫不隨手奏效。

【益瞳丸】

治目瞳散大昏耗，或覺視物乏力。

萸肉（二兩，去淨核）、野臺參（六錢）、柏子仁（一兩，炒）、玄參（一兩）、菟絲子（一兩，炒）、羊肝（一具，切片焙乾）。

上藥共為細末，煉蜜為丸桐子大。每服三錢，開水送下，日兩次。

一婦人，年三旬，瞳子散大，視物不真，不能針翳。屢次服藥無效，其脈大而無力，為制此丸，服兩月痊愈。

【羊肝豬膽丸】

治同前證，因有熱而益甚者。

羊肝一具，切片曬乾（冬日可用慢火焙乾）。

上一味軋細，用豬膽汁和為丸，桐子大，硃砂為衣。每服二錢，開水送下，日再服。

按：此方若用熊膽為丸更佳。內地鮮熊膽不易得，至乾者又難辨其真偽，不如徑用豬膽汁為穩妥也。

西人治瞳子散大，用必魯加兒必涅點之，瞳子立時收縮。然歷一日夜之後，則收縮仍復散大。日點一次，旬日之外，自能不散大矣。

按：必魯加兒必涅，一名波路加便，一名匹克邊，其原質出巴西所產芸香科耶僕蘭日葉中。若以鹽酸制之，為白色中性之結晶，名鹽酸必魯加兒必涅。其功用尤良，能收縮平滑肌，縮小瞳孔，增加唾液分泌，能泄瀉排除身體中蓄積之水分，自小便出。在耳科用於鼓室及迷路內有滲出物者，而改良其所覺。在眼科不但縮小瞳子，且能退炎清熱。然係猛悍之藥不可多用。內服一次之極量，為百分瓦之一。一日之極量，為百分瓦之五（溫水溶解），若外用為點眼藥，宜溶解於百倍蒸餾水中，或五十倍蒸餾水中（此為至濃之液）用之。

【附方】

護眉神應散，治一切眼疾。無論氣蒙、火蒙、肉螺、雲翳、或瞳人反背。未過十年者，皆見效。

方用爐甘石一兩煨透，童便淬七次。珍珠二顆，大如綠豆以上者，納通草中之，珠爆即速取出。血琥珀三分，真梅片二分，半兩錢、五銖錢（俗名馬鐙錢）、開元錢各一個，皆煨紅醋淬七次，共為細末，乳調塗眉上，日二三次。

一室女。病目年餘，醫治無效，漸生雲翳，愚為出方，服之見輕，停藥仍然反覆。後得此方，如法制好，塗數次即見輕，未盡劑而愈，妙哉！按此方若加薄荷冰二分更效。

瞳人反背之證，最為難治，以其係目係神經病也。蓋目係神經，若一邊縱，一邊縮，目之光線必斜，視物即不真。若縱、縮之距離甚大，其瞳人即可反背，治此證者，當以養其目係神經為主，此方多用金石珍貴之品，其中含有寶氣。凡物之含有寶氣者，皆善能養人筋肉，使筋肉不腐爛。目係神經，即腦氣筋之連於目者。以此藥塗眉上，中有冰片之善通竅透膜者，能引藥氣直達腦部，以養目係神經，目係神經之病者自愈。而瞳人反背及一切眼疾，亦自愈矣。

【附方】

治暴發眼便方。其眼疾初得腫疼者，用生薑三四錢、食鹽一大撮，同搗爛，薄布包住，蘸新汲井泉水，擦上下眼皮。屢蘸屢擦，以擦至眼皮極熱為度。擦完

用溫水將眼皮洗淨。輕者一次即愈，重者一日擦兩次亦可愈。然擦時須緊閉其目，勿令藥汁入眼中。

【附案】

晉書盛彥母氏失明，躬自侍養，母食必自哺之。母病既久，至於婢使，數見捶鞭。婢憤恨，伺彥暫行，取蟬螬炙飴之，母食以為美，然疑是異物，密藏以示彥。彥見之，抱母慟哭，絕而復甦。母目豁然，從此遂愈。

又陸定圃曰「余在曲江，有將官以瞽離軍，囑其子，俾饘事供蟬螬，須秘之防其父知，旬日後目明，趨庭申謝」。

按：蟬螬生糞土中，形狀如蠶（俗名地蠶）遍處皆有。《本經》謂「主目中淫膚、青翳、白膜」。其善治目翳可知。內障宜油炙服之，外障宜取其汁，滴目中。

西人點眼藥水，恒用皓礬和水為之，按皓礬一名硫酸亞鉛，一名鋅磺氧四。其狀為透映稜柱形結晶，有苛烈不快之味，乃亞鉛化合物中，最通用之藥物。其性微涼，善收斂，微有蝕腐作用。每用一瓦，融化以一百二十瓦之溫水，作點眼藥，能清火，治目皆潰爛，久之亦能消翳（若用皓瓦兩瓦，加硼酸一瓦，同融水，點眼更佳）。



治咽喉方

【咀華清喉丹】

治咽喉腫疼。

大生地黃（一兩，切片）、硼砂（錢半，研細）。

將生地黃一片，裹硼砂少許，徐徐嚼細咽之，半日許宜將藥服完。

生地黃之性能滋陰清火，無論虛熱實熱服之皆宜。硼砂能潤肺，清熱化痰，消腫止疼。二藥並用，功力甚大。而又必細細嚼服者，因其病在上，煎湯頓服，恐其力下趨，而病轉不愈。且細細嚼咽，則藥之津液常清潤患處也。此方愚用之屢矣，隨手奏效者不勝紀矣。

咽喉之證，有熱有涼，有外感有內傷。《白喉忌表抉微》一書，此時盛行於世，其所載之方，與所載宜用、宜忌之藥，皆屬穩善。惟其持論，與方中所用之藥，有自相矛盾處。諄諄言忌表矣，而其養陰清肺湯，用薄荷二錢半，豈非表藥乎？至於他方中，所用之葛根、連翹亦發表之品也。蓋白喉之證，原亦溫病之類。人之外膚肺主之，人之內膚三焦主之，蓋此證心肺先有蘊熱，外感之邪又襲三焦，而內逼心肺，則心肺之熱，遂與邪氣上並，而現證於喉。既有外邪，原宜發表，因有內熱，實大忌用辛熱之藥發表。惟薄荷、連翹諸藥，辛涼宣通，復與大隊涼潤之藥並用，既能散邪，尤能清熱，所以服之輒效也。若其內熱熾盛，外感原甚

輕者，其養陰清肺湯亦可用，特其薄荷，宜斟酌少用，不必定用二錢半也。至謂其喉間腫甚者加煨石膏四錢，微有可議。夫石膏之性，生則散、煨則斂。熾盛之火散之則消，斂之則實，此又不可不知也。況石膏生用，原不甚涼，故《本經》謂微寒，又何必如此之小心乎。今將其養陰清肺湯，詳錄於下，以備採用。

【附方】養陰清肺湯

大生地一兩、寸麥冬六錢、生白芍四錢、薄荷二錢半、玄參八錢、丹皮四錢、貝母四錢、生甘草二錢。

喉間腫甚者，加生石膏（原用煨石膏）四錢。大便燥結者，加清寧丸二錢、玄明粉二錢。胸下脹悶，加神麴、焦山楂各二錢。小便短赤者，加木通、澤瀉各一錢，知母二錢。燥渴者，加天冬、馬兜鈴各三錢。面赤身熱，或舌苔黃色者，加金銀花四錢，連翹二錢。

白喉之證，間有服《白喉忌表抉微》諸方不效，而反加劇者。曾治一貴州人，孫傳九，年二十，得白喉證。屢經醫治，不外《白喉忌表抉微》諸方加減。病日增重，醫者諉謂不治。後愚為診視，其脈細弱而數，粘涎甚多，須臾滿口，即得吐出。知係脾腎兩虛，腎虛氣化不攝，則陰火上逆，痰水上泛。而脾土虛損，又不能制之（若脾土不虛，不但能制痰水上泛，並能制陰火上逆），故其咽喉腫疼，粘涎若是之多也。投以六味地黃湯，加於朮，又少加蘇子，連服十劑痊愈。

咽喉之證，熱者居多，然亦兼有寒者，不可不知。王洪緒曰「咽喉之間，素分毫無病，頃刻之間，或疼或悶，此係虛寒陰火之證。用肉桂、炮薑、甘草各五分，置碗內浸以滾水，仍將碗置於滾水中，飲藥一口，徐徐嚥下立愈。或用烏附之片，塗以鮮蜜，火炙透至黑，取一片口含咽津，至片不甜時，再換一片，亦立愈」，按王氏之說，咽喉陡然疼悶者，皆係因寒，然亦有因熱者，或其人素有蘊熱，陡然為外感所束，或勞碌過度，或暴怒過度，皆能使咽喉驟覺疼悶。斯在臨證者，於其人之身體、性情、動作之際，細心考驗，再參以脈象之虛實涼熱，自無差謬。若仍恐審證不確，察其病因似寒，而尤恐病因是熱，可用蜜炙附子片試含一片，以細驗其病之進退亦可。

趙晴初曰「雞蛋能去喉中之風」，余治一幼童喉風證，與清輕甘涼法，稍加辛藥，時止時發。後有人教服雞蛋，頂上針一孔，每日生吞一枚，不及十枚，病癒不復發。

友人齊自芸曰「平陽何漢卿遊戎患喉疼，醫者治以苦寒之藥，愈治癒甚，漸至舌硬。後有人教用棉子油煎生雞蛋，煎至外熟，裡仍微生，日服二枚，未十日遂大愈」。

咽喉腫疼證，有外治異功散方甚效，其方用斑蝥一錢，真血竭、制乳香、制沒藥、上麝香、全蠍、大玄參、上梅片各分半，將斑蝥去翅足，糯米拌炒，以米色微黃為度，去糯米。用諸藥共研細，瓶收貯，勿令透氣。遇有咽喉腫疼證，將

藥捏作小塊，如黃豆粒大，置在小膏藥上，左腫貼右，右腫貼左，若左右俱腫，均貼在結喉（項間高骨）旁邊軟處。閱五六時，即揭去膏藥，有水泡，用銀針挑破，拭淨毒水，能消腫止痛，真救急之良方也。

治牙疳方

【古方馬乳飲】

治青腿牙疳。

用青白馬乳，早午晚隨擠隨服甚效。如無青白馬，雜色馬亦可。若馬乳自他處取來，可將碗置於開水盆中溫之。

此方出於《醫宗金鑒》，其原注云「此證自古方書罕載其名，僅傳於雍正年間。北路隨營醫官陶起麟謂『凡病腿腫色青者，其上必發牙疳，凡病牙疳腐血者，其下必發青腿，二者相因而至。推其病原，皆因上為陽火炎熾，下為陰寒閉鬱，以至陰陽上下不交，各自為寒為熱，凝結而生此證也。相近內地亦間有之，邊外雖亦有，而不甚多，惟內地人初居邊外，得此證者十居七八。蓋內地之人，本不耐邊外嚴寒，更不免坐臥濕地，故寒濕之痰生於下，致腿青腫。其病形如雲片，色似茄黑，肉體頑硬，所以步履艱難也。又緣邊外缺少五穀，多食牛羊等肉，其熱與濕合蒸，瘀於胃中，毒火上熏，致生牙疳。牙齦浮腫出血，若穿腮破唇，腐爛色黑，即為危候。惟相傳有服馬乳之法，用之頗有效驗云云』」。

按：此證愚未見過，友人毛仙閣曾遇此證治癒。其方愚猶記其大概，爰列於下，以備採用。金銀花（五錢）、連翹（三錢）、菊花（三錢）、明乳香（四錢）、明沒藥（四錢）、懷牛膝（五錢）、山楂片（三錢）、真鹿角膠（四錢，搗為細末分兩次用頭煎二煎湯藥送服）。

按：此方若服之出汗，即可見愈，然方中連翹、菊花發汗之力甚微，恐服之不能出汗，當於服藥之後，再服西藥阿斯匹林一瓦，則無不出汗矣。至汗後服第二劑時，宜將菊花減半。

【敷牙疳散藥方】

煨甘石（二錢）、鏡面硃砂（二分）、牛黃（五厘）、珍珠（五厘）。  
共研細，日敷三次。

【牙疳敷籐黃法】

己巳春，閱滬上《幸福醫學報》載有時賢章成之言，有誤用籐黃，治癒走馬牙疳之事，甚為奇異。茲特錄其原文於下，以供醫界之研究。

丁卯三月，余偕友數人，偶至仁溏觀優。有潘氏子，年四歲，患走馬牙疳，起才三日，牙齦腐化，門牙已脫數枚，下唇已潰穿，其勢甚劇。問尚有可救之理否？詢其由，則在發麻之後，實為邪熱入胃，毒火猖狂，一發難遏，證情危險。告以只有白馬乳涼飲，並不時洗之，塗以人中白，內服大劑白虎湯，或有可救。但勢已穿唇，效否不敢必耳。因書生石膏、生知母、生打寒水石、象貝等為方與之。其時同游者，有老醫倪君景遷，因謂之曰「牛黃研末，外摻腐爛之處，亦或可治」，遂彼此各散。後數日，則此兒竟已痊癒，但下唇缺不能完。因詢其用何物療治，乃得速效若斯，則曰「用倪先生說，急購籐黃屑而摻之，果然一摻腐勢即定，血水不流，漸以結靨落痂，只三日耳。內服石膏等一方，亦僅三服」，此兒獲愈，因知鄉愚無識，誤聽牛黃為籐黃。然以此一誤，而竟治癒極重之危證。開藥學中從古未有之實驗，胡可以不志也。嘗考李氏《本草綱目》，蔓草中曾載籐黃，而功用甚略。至趙恕軒《本草綱目拾遺》，言之甚詳。雖曰有毒，而可為內服之品，且引《粵志》謂，其性最寒，可治眼疾，味酸澀，治癰腫，止血化毒，斂金瘡，能除蟲，同麻油、白蠟熬膏，敷金瘡、湯火等傷，止疼收口，其效如神。而其束瘡消毒之用又甚多，可知此藥，竟是外科中絕妙良藥，而世多不知用者，



誤於李氏《海藥本草》有毒之兩字，而張石頑更以能治蛀齒，點之即落，而附會為毒，損骨傷腎，於是畏之甚於蛇蠍，實不知石頑不可信。今之畫家，常以入口，雖曰與花青並用，可解其毒，餘以為亦理想之談耳。既曰性寒，毒於何有？然後知能愈牙疳，正是寒涼作用，且其味酸澀，止血、止疼、收口、除蟲皆其能治牙疳之切實發明也。

按：走馬牙疳之原因，有內傷外感之殊，得於由內傷者輕而緩，由外感者重而急，此幼童得於麻疹之後，其胃中蘊有瘟毒上攻，是以三日之間，即腐爛如此。幸內服石膏、寒水石，外敷籐黃，內外夾攻，皆中要肯，是以其毒易消，結痂亦在三日內也。若當牙疳初起之時，但能用藥消其內蘊之毒熱，即外不敷藥，亦可治癒。曾治天津於氏幼童，年六七歲，身出麻疹，旬日之外熱不退，牙齦微見腐爛。其家人懼甚，恐成走馬牙疳，延愚診視。脈象有力而微弦，知毒熱雖實，因病久者，氣分有傷也。問其大便，三日未行。遂投以大劑白虎加人參湯，方中生石膏用三兩，野黨參用四錢，又加連翹數錢，以托疹毒外出。煎湯三茶盅，俾分三次溫飲下。又用羚羊角一錢，煎水一大茶盅，分數次當茶飲之，盡劑熱退而病癒。牙齦腐爛之處，亦遂自愈。

治瘡科方

【消瘰丸】

治瘰癧。

牡蠣（十兩煨）、生黃耆（四兩）、三稜（二兩）、莪朮（二兩）、朱血竭（一兩）、生明乳香（一兩）、生明沒藥（一兩）、龍膽草（二兩）、玄參（三兩）、浙貝母（二兩）。

上藥十味，共為細末，蜜丸，桐子大。每服三錢，用海帶五錢，洗淨切絲，煎湯送下，日再服。

瘰癧之證，多在少年婦女，日久不愈，可令信水不調，甚或有因之成勞瘵者。其證係肝膽之火上升，與痰涎凝結而成，初起多在少陽部位，或項側，或缺盆，久則漸入陽明部位。一顆壘然高起者為瘰，數顆歷歷不斷者為癧，身體強壯者甚易調治。曾治一少年，項側起一瘰癧，其大如茄，上連耳，下至缺盆。求醫治療，言服藥百劑，亦不能保其必愈。而其人家貧傭力，為人芸田，不惟無錢買如許多藥，即服之亦不暇。然其人甚強壯，飲食甚多，俾於一日三餐之時，先用飯湯送服牡蠣細末七八錢，一月之間消無芥蒂。又治一婦人，在缺盆起一瘰癧，大如小橘。其人亦甚強壯無他病，俾煮海帶湯，日日飲之，半月之間，用海帶二斤而愈。若身體素虛弱者，即煮牡蠣、海帶，但飲其湯，脾胃已暗受其傷。蓋其鹹寒之性，與脾胃不宜也。此方重用牡蠣、海帶，以消痰軟堅，為治瘰癧之主藥，恐脾胃弱

者，久服有礙，故用黃耆、三稜、莪朮以開胃健脾（三藥並用能開胃健脾，第一卷十全育真湯下曾詳言之），使脾胃強壯，自能運化藥力，以達病所。且此證之根在於肝膽，而三稜、莪朮善理肝膽之鬱。此證之成，堅如鐵石，三稜、莪朮善開至堅之結。又佐以血竭、乳香、沒藥，以通氣活血，使氣血毫無滯礙，癰癤自易消散也。而猶恐少陽之火熾盛，加膽草直入肝膽以瀉之，玄參、貝母清肅肺金以鎮之。且貝母之性，善於療鬱結，利痰涎，兼主惡瘡。玄參之性，《名醫別錄》謂其散頸下核，《開寶本草》謂其主鼠瘦，二藥皆善消癰癤可知。族侄女患此證，治數年不愈，為制此方，服盡一料而愈。

按：方書謂牡蠣左顧者佳，然左顧右顧辨之頗難，此物乃海中水氣結成，億萬相連，或覆或仰，積聚如山，古人謂之蠔山。覆而生者其背凸，仍覆置之，視其頭向左回者為左顧。仰而生者其背凹，仍仰置之，其頭亦向左回者為右顧。若不先辨其覆與仰何以辨其左右顧乎？然癰癤在左邊左顧者佳，若癰癤在右邊，用左顧者未必勝於右顧者也。

血竭，色赤味辣，色赤故入血分，味辣故入氣分，其通氣活血之效，實較乳香、沒藥為尤捷。諸家本草，未嘗言其辣，且有言其但入血分者，皆未細心實驗也。然此藥偽者甚多，必未研時微帶紫黑，若血乾之色。研之紅如雞血，且以置熱水中則溶化，須臾復凝結水底成塊者，乃為真血竭。

【消癰膏】

消癰癰。

生半夏（一兩）、生山甲（三錢）、生甘遂（一錢）、生馬錢子（四錢，剪碎）、皂角（三錢）、朱血竭（二錢）。

上藥前五味，用香油煎枯去渣，加黃丹收膏，火候到時將血竭研細攪膏中熔化和勻，隨瘡大小攤作膏藥。臨用時每藥一帖加麝香少許。

友人之女年五歲，項間起癰癰數個，年幼不能服藥，為制此藥，貼之痊愈。凡膏藥中用黃丹，必以火炒過，然後以之熬膏，其膠粘之力始大，而麝香不早加入膏藥中者，以麝香忌火也。

【化腐生肌散】

治療癰已潰爛者，用此藥擦之。他瘡破後者亦可用之。

爐甘石（六錢煨）、乳香（三錢）、沒藥（三錢）、明雄黃（二錢）、硼砂（三錢）、硃砂（二分）、冰片（三分）。

共研細，收貯瓶中勿令透氣。日擦患處三四次，用此藥長肉。將平時收口不速者，可加珍珠一分，煨研細攪入，其煨法詳護眉神應散後。

西藥之防腐生肌者，首推沃度仿謨，以之和於十倍或二十倍之脂肪油中，日塗瘡上二三次，或作藥棉塞瘡孔，其防腐生肌之力甚優。

又治皮膚瘡瘍毒瘰火毒，恒用海碘酒塗之，兩三次即消。海碘酒者，用海碘、沃剝等分，而溶以二十五倍之燒酒也。

沃度仿謨一名黃碘，為有光澤，黃色小葉形或小板形之結晶，有燒臭味，為防腐生肌之要品。係用沃度製成，沃度即海碘也。其原質存於海草中，若昆布、海帶、海藻之類。其形狀為灰黑色菱形小板形狀，或葉狀之乾燥結晶，有金屬樣光澤，放特異之臭氣。其性善變物質，以之接觸於皮膚，皮膚即變褐色。二三日後作屑脫落，故善消皮膚之毒。

沃剝即沃度加留謨之省文，一名沃度加里。其原質存於海水之海產動物、植物或礦泉中，其人工的制法，於加里鹵液中溶解沃度，同時其生成之沃度酸鹽，

以木炭還原之，即成白色乾燥毚形之結晶，有特異之辛鹹味。其功用近於沃度，而無沃度之腐蝕性，故宜與沃度同用。

【內托生肌散】

治療癰瘡瘍破後，氣血虧損不能化膿生肌，或其瘡數年不愈，外邊瘡口甚小，裡邊潰爛甚大，且有串至他處不能敷藥者。

生黃耆（四兩）、甘草（二兩）、生明乳香（一兩半）、生明沒藥（一兩半）、生杭芍（二兩）、天花粉（三兩）、丹參（一兩半）。

上七味共為細末，開水送服三錢，日三次。若將散劑變作湯劑，須先將花粉改用四兩八錢，一劑分作八次煎服，較散劑生肌尤速。

從來治外科者，於瘡瘍破後不能化膿生肌者，不用八珍即用十全大補。不知此等藥若遇陽分素虛之人服之猶可，若非陽分素虛或兼有虛熱者，連服數劑有不滿悶煩熱，飲食頓減者乎？夫人之後天，賴水穀以生氣血，賴氣血以生肌肉，此自然之理也。而治瘡瘍者，欲使肌肉速生，先令飲食頓減，斯猶欲樹之茂而先戕其根也。雖瘡家陰證，亦可用辛熱之品，然林屋山人陽和湯，為治陰證第一妙方，而重用熟地一兩以大滋真陰，則熱藥自無偏勝之患，故用其方者，連服數十劑而無弊也。如此方重用黃耆，補氣分以生肌肉，有丹參以開通之，則補而不滯，有花粉、芍藥以涼潤之，則補而不熱，又有乳香、沒藥、甘草化腐解毒，贊助黃耆以成生肌之功。況甘草與芍藥並用，甘苦化合味同人參，能雙補氣血，則生肌之功愈速也。至變散劑為湯劑，花粉必加重者，誠以黃耆煎之則熱力增，花粉煎之

則涼力減，故必加重而其涼熱之力始能平均相濟也。至黃耆必用生者，因生用則補中有宣通之力，若炙之則一於溫補，固於瘡家不宜也。

林屋山人《證治全生集》黃耆、甘草皆忌炙用。集中載治一王姓媳，頸內瘰癧數個，兩腋惡核三個，又大腿患一毒不作腫疼，百日餘漸發大，形大如斗，按之如石，皮現青筋，常作抽疼，經治數人皆稱曰瘤。余曰「瘤乃軟者，世無石硬之瘤，而此是石疽也」。問可治否？答曰「初起時皆可消，日久發大，上現青筋紋，雖按之如故，然其根下已成膿矣，如偶作一抽之疼，乃有膿之證也。上現青筋者，其內已作黃漿可知。如上現小塊高低如石岩者不治。如現紅筋者，其內已通血海不治。倘生斑點即自潰之證，若潰即放血，三日內斃。今患處現青筋者，醫至半軟為半功，潰後膿濃厚，可冀收功也」。遂外以鮮商陸搗塗，內服陽和湯，十日則一抽之疼止，十三劑裡外作癢，十六劑頂軟，十八劑連根皆軟，其頸項之瘰癧兩腋之惡核皆消。止剩石疽高起，內膿垂下。令服參一錢，因在筋絡之處，先以銀針刺穿，後以刀闊其口，以紙釘塞孔內。次日兩次流水斗許，大劑滋補托裡，則去人參倍增黃耆，連服十劑亦見愈。適有伊戚亦外科家，令其耆草換炙者，服不三日，四圍發腫，內作疼痛。復延余治，仍令照前方服二十劑，外以陽和膏隨其根盤貼滿，獨留瘡口，且以布條緊束。人問因何用膏貼又加布束？答曰「凡屬陰疽，外皮活，內膜生，開深傷膜，膜爛則無治，所出之膿在皮裡膜外，僅似空弄，又不能以生肌藥放入，故內服溫補滋陰活血之劑，外貼活血溫暖膏藥，



加之以緊束，使其皮膜相連，易於膿盡，且易於接連生肌，果束後數日，內腔濃厚，加參服兩月收功。

一人年二十餘。因抬物用力過度，腰疼半年不愈。忽於疼處發出一瘡，在脊樑之旁，微似紅腫，狀若覆盂，大徑七寸。瘍醫以為腰疼半年，始現此瘡，其根蒂必深而難治。且其內外發熱，飲食懶進，舌苔黃厚，脈象滑數，知其證兼外感實熱，投以白虎加人參湯，熱退能食。數日，又復虛汗淋漓，晝夜不止，遂用龍骨、牡蠣（皆不用煨）、生杭芍、生山藥各一兩為方，兩劑汗止。繼治以清火、消腫、解毒之藥，若拙擬消乳湯，去栝萸加金線重樓、三七（沖服）之類，更加鹿角霜錢許，以引經。惟消乳湯以知母為君重八錢，茲則所用不過五六錢。外用五倍子、三七、枯礬、金線重樓、白芨為末，以束其根；乳香、沒藥、雄黃、金線重樓、三七為末，以敷其頂，皆用醋調之。旬日瘡消三分之二，其頂甚軟。遂以烏金膏（以雄黃炒巴豆仁至黑色研細名烏金膏）調香油敷其軟處。二日，瘡破出稠膿若干。將此內托生肌散改作湯劑，投之，外敷拙擬化腐生肌散。七八日間瘡口長平，結痂而愈。自言其瘡自始至終未嘗覺疼，蓋因用藥節節得著也。然徒精外科者，又怎能治此瘡。

徐靈胎治瘡最重圍藥。以圍藥束住瘡根，不使毒勢散漫，又能阻隔周身之熱力，不貫注於瘡，則瘡必易愈。愚治此瘡所用束根之藥，實師徐氏之意也。

【洗髓丹】

治楊梅瘡毒蔓延周身，或上至頂，或下至足，或深入骨髓，無論陳、新、輕、劇，服之皆有奇效。三四日間瘡痂即脫落。

淨輕粉（二錢，炒至光色減去三分之二，研細，蓋此藥炒之則烈性少緩，若炒之過度，又恐無力，火候宜中，用其大片即淨輕粉）、淨紅粉（一錢，研細，須多帶紫黑片者用之，方有效驗）、露蜂房（如拳大者一個，大者可用一半，小者可用兩個，炮至半黑半黃色，研細，炮時須用物按之著鍋）、核桃（十個，去皮搗碎，炮至半黑半黃色，研細，紙包數層，壓去其油，蓋油多即不好為丸用）。

上諸藥用熟棗肉為丸，黃豆粒大，曬乾，分三次服之。服時，須清晨空心開水送下，至午後方可飲食，忌腥半月。服後，口含柳棍，有痰涎即吐出，愈多吐愈好。睡時將柳棍橫含，兩端各係一繩，兩繩之端結於腦後，防睡著掉落。又須將柳棍勤換，即將藥服完仍須如此，必待不吐痰涎時，方可不含柳棍。其藥日服一次，若噁心太甚者，可間日一服，制此藥時，須自經手，將輕粉、紅粉稱極準，其秤當以庫秤為定法，輕粉須稱準後再炒。

此方人多有疑其服之斷生育者，非也。輕粉雖烈，煨之則烈性頓減，紅粉雖性近輕粉而止用一錢，且分作三日服之，又有棗肉之甘緩以解毒，核桃仁多用至十枚，峻補腎經以防患，配合得宜，服之自有益無害。此方愚用屢矣，服後生男女者，不勝紀也。

楊梅之毒先中於精室之中，其處在大腸之前膀胱之後，有脂膜兩片相並。在男子為精室，女子為血室，原男以化精，女以係胞之所。此與下焦脂膜相連，其毒即可由下焦蔓延於中焦、上焦以外達於周身。且下焦脂膜與腸相連，其毒可由下焦而入腸。中焦脂膜絡脾連胃，其毒可由中焦脂膜入脾以達於胃，或由與胃相連處直達於胃。夫毒在腸胃可用降藥下之，而其散漫於周身者不能下也。且精室通腎，腎原主骨，而其毒之由腎入骨者愈不能下也。惟輕粉係水銀同礬石升煉而成，紅粉亦係水銀同礬石、硝石諸藥升煉而成，其質本重墜，故能深入，其成於升煉，故能飛揚。是以內浹骨髓，中通臟腑，外達皮膚，善控周身之毒涎，借徑於陽明經絡，自齒齦（上齦屬足陽明，下齦屬手陽明）而出也。蜂房乃蜂採取窗紙、腐木與其口中毒涎黏結而成，能引人身之毒涎透退出口齒，且有以毒攻毒之妙用，為輕粉、紅粉之佐使。毒涎之出者愈多，即內毒之消者愈速矣。核桃乃果核最大者，夫果之有核猶人之有骨，是以骨稱骸骨，其字旁皆從亥也。核桃之核若是其大，其仁潤而多脂，性能補骨益髓可知。且又善解疥癬之毒，其能解他瘡之毒亦可知。加於此藥之中，補正兼以逐邪，毒之深入骨髓者亦不難消除矣。至於丸以棗肉，取其甘緩之性，能緩二粉之猛悍，又能補助腸胃使不為毒藥所傷也。

服藥之後，其牙齦必腫，間有爛者，因毒涎皆從此出故也。然內毒既清，外證不治自愈，或用甘草、硼砂、金銀花熬水漱之亦可。

蜂房有三種，有黃色大蜂其房上下恆作數層，其毒甚大不宜用。曾見有以之煎水漱牙疼者，其牙齦遂皆潰爛脫牙十餘枚。有黃色小蜂其房甚小，房孔僅如綠豆，雖無大毒而力微，又不堪用。惟其蜂黃而兼紅，大近寸許，恆在人家屋中壘房，俗呼為馬蜂，其房入藥最宜。然其房在樹上者甚少，若無在樹上之露蜂房，在屋中者亦可用，特稍宜加重耳。

馬姓，年四十餘，先染淋毒，後變為梅毒，求為診治。其毒周身不現形跡，惟覺腦際沉昏頗甚，心中時或煩躁，骨節多有疼痛之處，所甚異者，其眉稜眼梢及手指之節多生軟骨，西人亦謂係梅毒所凝結也。愚對此證，不敢謂其必治癒，猶幸身體不甚羸弱，遂將洗髓丹一劑俾分四次服完。歇息旬日，再服一劑，將其份量減三分之一。歇息旬日，又服一劑，較二次所服之份量又減三分之一，皆四日服完，其病遞次消除。凡軟骨將消者，必先發起，然後徐徐消腫，化為無有。共計四浹辰，諸病皆愈。

又治一郝姓小孩，因食乳傳染，咽喉潰爛，至不能進食，肛門亦甚潰爛，其腸胃之潰爛可知。其父來院細言其病狀，問還有救否？答曰「果信用余方，仍能救」，遂與以洗髓丹六粒，俾研細水調服三次，痊愈。

又奉天一幼童，有遺傳性梅毒，年六歲不能行，遍身起瘡若小癩，愈而復發，在大連東人醫院住近一年不愈。後來院求治，其身體羸弱，飲食甚少，先用藥理其脾胃，俾能飲食。漸加以解毒之藥，若金銀花、連翹、天花粉諸品，身體漸壯，

瘡所發者亦漸少，然毒之根蒂仍未除也。遂將洗髓丹五分許研細（將製成丸藥復研末者，因孺子不能服丸藥也），開水調服，三日服一次，仍每日服湯藥一劑。後將洗髓丹服至十次，瘡已不發。繼又服湯藥月餘，兼用滋陰補腎之品，每劑中有核桃仁三個，取其能健骨也（食酸齒者嚼核桃仁立愈是能健骨之明徵），從此遂能步履行動如常童矣。

觀此二案，則洗髓丹奇異之功效，誠可於解梅毒藥中首屈一指，且凡解梅毒藥，無論或注射、或服藥，愈後又恆肢體作疼，以其能清血中之毒，不能清骨中之毒，是以愈後其骨節猶疼也。因其骨中猶含有毒性，恆遲至日久而復發，或遲至十餘年而復發者，若再投以此丹，則骨疼立愈，且以後永不反覆，此又愚屢經試驗而確知其然者也。

【服硫磺法】

嘗觀葛稚川《肘後方》，首載扁鵲玉壺丹，係硫黃一味九轉而成，治一切陽分衰憊之病，而其轉法所需之物頗難備具，今人鮮有服者。愚臨證實驗以來，覺服制好之熟硫黃，猶不若徑服生者其效更捷。蓋硫黃制熟則力減，少服無效，多服又有燥渴之弊，服生硫黃少許，即有效而又無他弊也。十餘年間，用生硫黃治癒沉寒錮冷之病不勝計。蓋硫黃原無毒，其毒也即其熱也，使少服不令覺熱，即於人分毫無損，故不用制熟即可服，更可常服也。且自古論硫黃者，莫不謂其功勝桂、附，惟徑用生者係愚之創見，而實由自家徐徐嘗驗，確知其功效甚奇，又甚穩妥，然後敢以之治病。今邑中日服生硫黃者數百人，莫不飲食加多，身體強壯，皆愚為之引導也。

今略舉生硫黃治驗之病數則於下：

一孺子三歲失乳，頻頻滑瀉，米穀不化，瘦弱異常。俾嚼服生硫黃如綠豆粒大兩塊，當日滑瀉即愈，又服數日，飲食加多，肌肉頓長。後服數月，嚴冬在外嬉戲，面有紅光，亦不畏寒。

一叟年近六旬，得水腫證，小便不利，周身皆腫，其脈甚沉細，自言素有疝氣，下焦常覺寒涼。愚曰「欲去下焦之寒，非服硫黃不可。且其性善利水，施之火不勝水而成水腫者尤為對證」。為開芩桂朮甘湯加野臺參三錢、威靈仙一錢，

一日煎渣再服，皆送服生硫黃末二分。十日後，小便大利，腫消三分之二。下焦仍覺寒涼，遂停湯藥，單服硫黃試驗，漸漸加多，一月共服生硫黃四兩，周身腫盡消，下焦亦覺溫暖。

一人年十八九，常常嘔吐涎沫，甚則吐食。診其脈象甚遲濡，投以大熱之劑毫不覺熱，久服亦無效驗。俾嚼服生硫黃如黃豆粒大，徐徐加多，以服後移時覺微溫為度。後一日兩次服，每服至一錢，始覺溫暖，共服生硫黃四斤，病始除根。

一數月孺子，乳汁不化，吐瀉交作，常常啼號，日就羸瘦，其啼時蹙眉，似有腹痛之意，俾用生硫黃末三厘許，乳汁送服，數次而愈。

一人年四十許，因受寒，腿疼不能步履，投以溫補宣通之劑，愈後，因食豬頭（豬頭鹹寒與豬肉不同）反覆甚劇，疼如刀刺，再服前藥不效。俾每於飯前嚼服生硫黃如玉稊粒大，服後即以飯壓之。試驗加多，後每服至錢許，共服生硫黃二斤，其證始愈。

一叟年六十有一，頻頻咳吐痰涎，兼發喘逆，人皆以為勞疾，未有治法。診其脈甚遲，不足三至，知其寒飲為恙也。投以拙擬理飲湯加人參、附子各四錢，喘與咳皆見輕而脈之遲仍舊。因思脈象如此，非草木之品所能挽回，俾服生硫黃少許，不覺溫暖，則徐徐加多，兩月之間，服生硫黃斤餘，喘與咳皆愈，脈亦復常。

一婦人年五旬，上焦陽分虛損，寒飲留滯作嗽，心中怔忡，飲食減少，兩腿畏寒，臥床不起者已二年矣。醫者見其咳嗽怔忡，猶認為陰分虛損，復用熟地、阿膠諸滯泥之品，服之病益劇。後愚診視，脈甚弦細，不足四至，投以拙擬理飲湯加附子三錢，服七八日咳嗽見輕，飲食稍多而仍不覺熱，知其數載沉疴，非程功半載不能愈也。俾每日於兩餐之前服生硫黃三分，體驗加多，後服數月，其病果愈。

按：古方中硫黃皆用石硫黃，而今之硫黃皆出於石，其色黃而亮，砂粒甚大，且無臭氣者，即堪服食。且此物燃之雖氣味甚烈，嚼之實無他味，無論病在上在下，皆宜食前嚼服，服後即以飯壓之。若不能嚼服者，為末開水送服亦可，且其力最長，即一日服一次，其熱亦可晝夜不歇。



【解砒石毒兼解洋火毒方】

初受其毒者，在胃上脘，用生石膏一兩，生白礬五錢共軋細，先用雞子清七枚調服一半即當吐出。若猶未吐或吐亦不多，再用生雞子清七枚調服餘一半，必然湧吐。吐後若有餘熱，單用生石膏細末四兩，煮湯兩大碗，將碗置冰水中或新汲井泉水中，俾速冷分數次飲下，以熱消為度。若其毒已至中脘，不必用吐藥，可單用生石膏細末二三兩，如前用雞子清調服，酌熱之輕重或兩次服完，或三四次服完，毒解不必盡劑。且熱消十之七八即不宜再服石膏末，宜仍如前煮生石膏湯飲之，以消其餘熱。若其毒已至下脘，宜急導之下行自大便出，用生石膏細末二兩，芒硝一兩，如前用雞子清調服，毒甚者一次服完，服後若有餘熱，可如前飲生石膏湯，此方前後雖不同，而總以石膏為主，此乃以石治石，以石之涼者治石之熱者。愚用此方救人多矣，雖在垂危之候，放膽用之，亦可挽救。

【治夢遺運氣法】

語有之「心病難醫」，少年夢遺之病所謂心病也，故治此病者用藥頗難見功。曾見方書載有人患此病百藥不效，有僧教以自尾閭（脊骨盡處）將氣提起如忍大便之狀，且聳肩縮頸如用力頂重物，其病遂愈。

按：人之腦髓神經，循脊下行，而後人有夢遺之患。僧所云云，仿佛若道家逆轉河車工夫，是以有效。然此僧特約略言之，今若更能借呼吸之外氣，以運內氣之升降，其法始備，而以治此證尤驗。欲行其法者，當收視返聽，一志凝神，使所吸之氣下行歸根。當其吸氣下行之時，即以意默運真氣，轉過尾閭，循夾脊而上貫腦部，略停一停又乘氣外出之機，以意送此氣下歸丹田。真氣之升降，借助於呼吸之外氣，而實與呼吸外氣之升降，息息逆行，《丹經》所謂異風倒吹也。如此呼吸如環，督任流通，氣化團結，夢遺自除也。

或問「《道書真詮》謂通督任之法，當默默凝神，常照氣穴（《丹經》云凝神人氣穴）。迨至元氣充滿，自能衝開督脈，循脊上行至腦，復轉而下行與任脈相通。由是觀之，當精勤內煉以聽督任之自通，而非有所矯強於其間也。今謂通督任之法如此，果真能通督任乎？若非督任真通，何以謂小周天乎？」答曰「道家以氣通督任之法，有以意通督任之法。氣通督任者，純憑先天內煉工夫，一毫不著後天跡象。迨至日積月累，元氣充足，勃然而動，衝開督脈以通任脈。有水到渠成之妙，誠有如子所云者，然若此則金丹基礎已立，功候不易到也。至於

意通督任者，即愚上所云云者是也。此道家因向道者不能盡除其欲心，致有夢遺之病，乃設此意通督任之法，遵而行之，可以清心寡欲，可以秘氣藏真，雖係後天有跡象工夫，以之修道規不足，以之治病則有餘也。亦名之小周天者，美其名以動人之信仰而厚其篤行之力也」。

或問「意通督任之法，必藉呼吸之氣以升降矣。至氣通督任者，亦有藉於呼吸之氣否」？答曰「子所問者，乃道家至要至秘之處，各丹書皆未明揭，因非其人不傳也。愚原門外漢，何能道其精詳，然可為子約略言也。方元氣之通督脈也，恒在人不及防備之時，其氣陡然起於虛危，過尾閭、透夾脊、循督、貫腦，此時無所借於呼吸，亦不暇用其呼吸也。迨積之又久，此氣發動十餘次，不能自通於任脈，轉有蓄極下行之勢，於斯知其火候已到，默默靜候。迨其氣又發動，即可助以呼吸之氣，立定天心之主宰，藉巽風倒吹以默運法輪，其氣自能由督脈而達任脈。然此乃隨元氣自然發動之機而默為輔相，非有所矯強於其間也。有志之士，由此約略者而深求之，自能得其精詳矣」。

夢遺之證，若治以藥餌，宜於臨睡時，濃煎龍骨牡蠣湯，送服抱水三物丸（附載於第七卷一味鐵氧湯後）二十九，頗有效驗，連服一月可以除根。

《醫學衷中參西錄》八卷，鹽山張君壽甫，余與君素不識，戊午榷稅瀋陽，斯書由天地新學社出版印行。購而閱之，喜其所立各方，附以論說醫案，多有發前人所未發者，洵醫中巨擘也。會友人妻，患癥瘕數年未愈，疊更多醫，浸至食少疼劇，纏綿床褥者一月，向余索方。錄書中理衝湯方與之，與十餘劑，飲食日進，疼止魂消，病遂愈。益信君之方誠歷試不爽，確有心得者也。以奉省良醫之少也謀之，劉君海泉乃介天地新學社友人，聘君來奉開辦立達醫院，為拯救一方疾苦計。果治癒垂危之證多人，聲譽大起。今春斯書再版行印，余任校讎之役，爰將與君相知及用君方效之故，綴數語於卷末。

己未暮春宛平齊福田自芸敬跋於瀋陽榷稅公所

民國九年於役運城，維新醫院院長姚君匯川，出鹽山張壽甫先生所著《醫學衷中參西錄》，見贈曰「此作醫中濟世慈航也」。受而讀之，覺語語具有至理，脈脈無不貫通，遵古更與古為新，喜新更獨辟機緘。欣忭之餘，恨未一見其人。戊辰春遊津沽，聞人傳四大名醫，壽甫先生其一，追念曩事，益用神往，然猶未悉懸壺所在也。及卜居東門內，乃稍稍知中西匯通醫社為先生著書傳道之地，斯社去蝸居非遙遙，久乃得知，豈景仰不誠耶？抑天之慳我緣耶？喜極趨謁，即日訂交。慨自先君理亭公，心精農軒，玉札丹砂待用無遺，翼不能肯構，顧一行作吏，遑遑交城、平陸間。俄而從戎，俄而司侯，醫國不稱，並先人所傳，醫人者

亦俱墜，甯不愧顏！今邂逅先生於海角，雖遲之又久，終邀天假，或者先人之澤之未泯歟。夫醫理至微也，中西得其一已不易，況融會貫通，更獨出己見，先生誠醫界之偉人乎！茲值先生重印《醫學衷中參西錄》前三期將竣，因綴數行於末，以志平素景仰之忱。

民國十八年秋晉城桐皋張鳳翼謹跋於天津特別市公安局

中  
篇

醫 學 衷 中 參 西 錄 第 四 期

序

今之研究醫學，著書立說者多矣，而其所著之書，誠能推之四海而准，傳之千秋可法者，原曠世不一見也。吾師張壽甫先生，鹽山名儒，自弱冠研究經學，於書無所不讀，而又兼通醫學。初志本期以注疏五經名世，後慨醫學頹廢，人多夭枉，遂專注重醫學，以振興中華醫學為己任。著《醫學衷中參西錄》一書，出版三次，每次增加二十餘萬言，不脛而走，風行海內，遠至臺灣、香港，亦多有購此書者，宜《山西醫學雜誌》稱為「醫書中第一可法之書」也，近時各省所立醫學校，多以此書為講義，各處醫學社會所出志報，又莫不以為得登先生撰著為榮。即儂編《如臯醫學報》亦蒙先生時惠鴻篇，若先生者，誠執全國醫壇之牛耳者也。近因四方學者，見先生醫學迥異恒流，而函催四期《醫學衷中參西錄》者日益加多。先生感同人熱忱，鳩集數年撰著約三十餘萬言，卷帙浩繁，付梓不易，乃分為三種：曰藥物講義、曰醫論、曰醫案。今先出藥物講義為四期版，於中西藥物皆備其要，而於中藥尤能獨辟新義，發千古所未發，於生平得力之處，盡情披露無遺，足見先生嘉惠醫林之意至為深切矣。儂也不才，自慚失學，每一思之，輒覺汗顏。幸祖遺薄田數頃，躬耕餘暇時，研究書畫、詩文、醫學，多泛覽，無師承。邇來書師鄭先生海藏，畫師林先生畏廬，詩師吳先生東圖，醫即師我壽甫先生。然詩文、書畫即不佳，亦無甚關重，醫學則人命所關，故又三致意，幸蒙我



師時惠教言，因得稍識醫學門徑，他日有成，終不敢忘先生之賜也。儂愧不文，勉為之序。

癸亥季冬如皋門生李慰農敬序於如不及齋

例言

一、此書為四期《醫學衷中參西錄》，因專講中西藥物，是以又名藥物講義。  
二、《醫學衷中參西錄》共出版四次，其二期、三期版，皆即原本增加，故三期之中一期、二期皆備。至此四期，則各自為書，不增加於三期之中，而實於三期互相發明。

三、此書中藥，於常用之品亦多未備，非略也。蓋凡所載者，皆自抒心得，於尋常講解之外，另有發明，其不能另有發明者，雖常用之藥亦不載。

四、此書中藥，未詳地道及成色優劣，因諸家本草，於此等處，皆詳載之，出書非為初習本草者設，為精研藥性者設，故不載也。

五、此書於西藥，無多發明，以愚原非西醫專家，不過於緊要之藥，略錄數十味，間附以論說，思為中醫欲兼學西醫者之嚆矢。

六、此書無論中西藥品，凡所言之氣味，與他書不同者，皆自嘗試而得，以求藥味之實際，非敢妄為改易也。

七、中藥大抵宜食前服，西藥則皆宜食後服，以其性多劇烈之品，故不宜空腹服之。

八、西藥為其劇烈，所以少服，少服又恐藥力不能接續，所以皆宜日服數次，至藥下未明言者，亦應如此服法。

九、用西藥，即宜用西藥分量，書中所謂瓦，

係中量二外六厘四毫，其作一·〇式者，一瓦也，作一〇·〇式者，十瓦也，作一〇〇·〇式者，百瓦也。點上為整數，故皆足一瓦以上之數。至不足一瓦之分數，則皆在點下，其作〇·一式者，十分瓦之一也，其作〇·五式者，十分瓦之五也（即半瓦），作〇·〇五式者，百分瓦之五也，蓋按算數之定式，原點上為整數，點下為分數也。

十、葷澄茄中西藥中皆有之，而此書載於西藥之中，因西人論此藥功用與中說不同，且其所論之功用，又確實可以徵信，至購此藥時，又必購於西藥房中，用之方效。蓋此藥在中藥為背用之藥，皆陳腐不堪用，而西人最慣用之，且所制之末又精工也。

十一、斯書前曾出版於民紀十三年，今已盡售，因即原版，增加藥味，講論若干，出再版，故名為《增廣衷中參西錄》四期，所以別於初出之版也。

〈 第 一 卷 〉

石膏解

石膏之質原為硫氧輕鈣化合而成，其性涼而能散，有透表解肌之力，為清陽明胃腑實熱之聖藥，無論內傷、外感用之皆效，即他臟腑有實熱者用之亦效。《本經》原謂其微寒，其寒涼之力遠遜於黃連、龍膽草、知母、黃柏等藥，而其退熱之功效則遠過於諸藥。《本經》謂其微寒，則性非大寒可知。且謂其宜於產乳，其性尤純良可知。蓋言其性不甚寒涼，可用於產後也。乃後世注《本經》者，不知產乳之乳字原作生字解，而竟謂石膏能治婦人無乳，支離殊甚。要知產後無外感之熱，石膏原不可用。若確有外感實熱，他涼藥或在所忌，而獨不忌石膏，以石膏之性非大寒，乃微寒也。是以漢季張仲景所著《金匱》中有竹皮大丸，治婦人乳中虛、煩亂、嘔逆，中有石膏。夫乳中者，生子之時也，其煩亂嘔逆必有外感之實熱也，此實通《本經》石膏主產乳之義以立方也。石膏醫者多誤認為大寒而煨用之，則宣散之性變為收斂（點豆腐者必用，取其能收斂也），以治外感有實熱者，竟將其痰火斂住，凝結不散，用至一兩即足傷人，是變金丹為鴆毒也。迨至誤用石膏債事，流俗之見，不知其咎在不在石膏，轉謂石膏用之其猛烈猶足傷人，而不者更可知矣。於是一倡百和，遂視用石膏為畏途，即有放膽用者，亦不過七八錢而止。夫石膏之質甚重，七八錢不過一大撮耳。以微寒之藥，欲用一大撮撲滅寒溫燎原之熱，又何能有大效。是以愚用生石膏以治外感實熱，輕證亦必至兩許，若實熱熾盛，又恆重用至四五兩，或七八兩，或單用，或與他藥同用，

必煎湯三四茶杯，分四五次徐徐溫飲下，熱退不必盡劑。如此多煎徐服者，欲以免病家之疑懼，且欲其藥力常在上焦、中焦，而寒涼不至下侵致滑瀉也。蓋石膏生用以治外感實熱，斷無傷人之理，且放膽用之，亦斷無不退熱之理。惟熱實脈虛者，其人必實熱兼有虛熱，仿白虎加人參湯之義，以人參佐石膏亦必能退熱。蓋諸藥之退熱，以寒勝熱也，而石膏之退熱，逐熱外出也。是以將石膏煎服之後，能使內蘊之熱，息息自毛孔透出，且因其含有硫氧氫，原具發表之性，以之煮湯又直如清水，服後其寒涼之力俱隨發表之力外出，而毫無汁漿留中以傷脾胃，是以遇寒溫之大熱，勢若燎原，而放膽投以大劑白虎湯，莫不隨手奏效。其邪實正虛者，投以白虎加人參湯，亦能奏效。蓋石膏之所以善治寒溫者，原恃其原質中之硫氧氫也。若之，其硫氧氫皆飛去，所餘之鈣經即變質，若誤服之，能將人外感之痰火及周身之血脈皆為凝結錮閉。是以見有服石膏數錢脈變結代，浸至言語不遂，肢體痿廢者；有服石膏數錢其證變結胸，滿悶異常，永不開通者；有服石膏數錢，其周身肌肉似分界限，且又突起者。蓋自有石膏不傷胃之語，醫者輕信其說以誤人性命者實不勝計矣。故凡用生石膏者，宜買其整塊明亮者，自監視軋細（凡石質之藥不軋細，則煎不透）方的。若購自藥局中難辨其煨與不煨，迨將藥煎成，石膏凝結藥壺之底，傾之不出者，必係石膏，其藥湯即斷不可服。且嘗歷觀方書，前哲之用石膏，有一證而用至十四斤者（見《筆花醫鏡》）；有一證

而用至數十斤者（見《吳鞠通醫案》）；有產後亦重用石膏者（見徐靈胎醫案然須用白虎加人參湯以玄參代知母生山藥代粳米）。然所用者皆生石膏也。

【附案】

長子萌潮，七歲時，感冒風寒，四五日間，身大熱，舌苔黃而帶黑。孺子苦服藥，強與之即嘔吐不止。遂單用生石膏兩許，煎取清湯，分三次溫飲下，病稍愈。又煎生石膏二兩，亦徐徐溫飲下，病又見愈。又煎生石膏三兩，徐徐飲下如前，病遂痊愈。夫以七歲孺子，約一晝夜間，共用生石膏六兩，病癒後飲食有加，毫無寒中之弊，則石膏果大寒乎？抑微寒乎？此係愚初次重用石膏也。故第一次只用一兩，且分三次服下，猶未確知石膏之性也。世之不敢重用石膏者，何妨若愚之試驗加多以盡石膏之能力乎？

同邑友人趙厚庵之妻，年近六旬得溫病，脈數而洪實，舌苔黃而乾，聞藥氣即嘔吐。俾單用生石膏細末六兩，以作飯小鍋（不用藥甌，恐有藥味復嘔吐）煎取清湯一大碗，恐其嘔吐，一次只溫飲一口，藥下嚥後，覺煩躁異常，病家疑藥不對證。愚曰「非也，病重藥輕故也」，飲至三次，遂不煩躁，閱四點鐘盡劑而愈。

同邑友人毛仙閣之三哲嗣印棠，年三十二歲，素有痰飲，得傷寒證，服藥調治而愈。後因飲食過度而復，服藥又愈。後數日又因飲食過度而復，醫治無效。四五日間，延愚診視，其脈洪長有力，而舌苔淡白，亦不燥渴，食梨一口即覺涼

甚，食石榴子一粒，心亦覺涼。愚捨證從脈，為開大劑白虎湯方，因其素有痰飲，加清半夏數錢，其表兄高夷清在座，邑中之宿醫也，疑而問曰「此證心中不渴不熱，而畏食寒涼如此，以余視之雖清解藥亦不宜用，子何所據而用生石膏數兩乎？」答曰「此脈之洪實，原是陽明實熱之證，其不覺渴與熱者，因其素有痰飲濕勝故也。其畏食寒涼者，因胃中痰飲與外感之熱互相膠漆，致胃府轉從其化與涼為敵也」。毛仙閣素曉醫學，信用愚言，兩日夜間服藥十餘次，共用生石膏斤餘，脈始和平，愚遂旋里。隔兩日復來相迎，言病人反覆甚劇，形狀異常，有危在頃刻之慮。因思此證治癒甚的，何至如此反覆。既至（相隔三里強），見其痰涎壅盛，連連咳吐不竭，精神恍惚，言語錯亂，身體顫動，診其脈平和無病，惟右關胃氣稍弱。愚恍然會悟，急謂其家人曰「此證萬無閃失，前因飲食過度而復，此次又因戒飲食過度而復也」，其家人果謂有鑒前失，數日之間，所與飲食甚少。愚曰「此無須用藥，飽食即可愈矣。」其家人慮其病狀若此，不能進食。愚曰「無庸如此多慮，果係由餓而得之病，見飲食必然思食」，其家人根據愚言，時已屆晚八句鐘，至黎明進食三次，每次撙節與之，其病遂愈。

西藥有安知歇貌林，又名退熱冰。究其退熱之效，實遠不如石膏。蓋石膏之涼，雖不如冰，而其退熱之力，實勝冰遠甚。鄰村龍潭莊張叟，年過七旬，於孟夏得溫病，四五日間煩熱燥渴，遣人於八十里外致冰一擔，日夜放量食之，而煩



渴如故。其脈洪滑而長，重按有力，舌苔白厚，中心微黃，投以白虎加人參湯，方中生石膏重用四兩，煎湯一大碗，分數次溫飲下，連進二劑，煩熱燥渴痊愈。又瀋陽縣尹朱靄亭夫人，年過五旬，於戊午季秋得溫病甚劇。先延東醫治療，所服不知何藥，外用冰囊以解其熱。數日熱益盛，精神昏昏似睡，大聲呼之亦無知覺，其脈洪實搏指。俾將冰囊撤去，用生石膏細末四兩，粳米八錢，煎取清汁四茶杯，約歷十句鐘，將藥服盡，豁然頓醒。靄亭喜甚，命其公子良佐，從愚學醫。

友人毛仙閣夫人，年近七旬，於正月中旬，傷寒無汗，原是麻黃湯證，因誤服桂枝湯，汗未得出，上焦陡覺煩熱噁心，聞藥氣即嘔吐，但飲石膏所煮清水及白開水亦嘔吐。惟晝夜吞小冰塊可以不吐，兩日之間，吞冰若干，而煩熱不減，其脈關前洪滑異常。俾用鮮梨片，蘸生石膏細末嚼咽之，遂受藥不吐，服盡二兩而病癒。

石膏之性，又善清瘟疹之熱。奉天友人朱貢九之哲嗣文治，年五歲，於庚申立夏後，周身壯熱，出疹甚稠密，脈象洪數，舌苔白厚，知其疹而兼瘟也。欲用涼藥清解之，因其素有心下作疼之病，出疹後貪食鮮果，前一日猶覺疼，又不敢投以重劑，遂勉用生石膏、玄參各六錢，薄荷葉、蟬退各一錢，連翹二錢。晚間服藥，至翌日午後視之，氣息甚粗，鼻翅煽動，咽喉作疼，且自鼻中出血少許，大有煩躁不安之象。愚不得已，重用生石膏三兩，玄參、麥冬（帶心）各六錢，

仍少佐以薄荷、連翹諸藥，俾煎湯三茶盅，分三次溫飲下。至翌日視之，則諸證皆輕減矣。然餘熱猶熾，其大便雖行一次，仍係燥糞，其心中猶發熱，脈仍有力。遂於清解藥中，仍加生石膏一兩，連服二劑，壯熱始退，繼用涼潤清毒之藥，調之痊愈。

石膏之性，又善清咽喉之熱，滄州友人董壽山，年三十餘，初次感冒發頤，數日頤下頸項皆腫，延至膺胸，復漸腫而下。其牙關緊閉，惟自齒縫可進稀湯，而咽喉腫疼，又艱於下嚥。延醫調治，服清火解毒之藥數劑，腫熱轉增。時當中秋節後，淋雨不止，因病勢危急，冒雨驅車三十里迎愚診治。見其頤下連項，壅腫異常，狀類時毒（瘡家有時毒證），撫之硬而且熱，色甚紅，純是一團火毒之氣，下腫已至心口，自牙縫中進水半口，必以手掩口，十分努力方能下嚥，且痰涎壅滯胸中，上至咽喉，並無容水之處，進水少許，必換出痰涎一口。且覺有氣自下上衝，時作呃逆，連連不止，診其脈洪滑而長，重按有力，兼有數象。愚曰「此病俗所稱蝦蟆瘟也，毒熱熾盛，盤踞陽明之府，若火之燎原，必重用生石膏清之，乃可緩其毒熱之勢」。從前醫者在座，謂「曾用生石膏一兩，毫無功效」，愚曰「石膏乃微寒之藥，《本經》原有明文，如此熱毒，僅用兩許，何能見效」。遂用生石膏四兩，金錢重樓（此藥須色黃、味甘、無辣味者方可用，無此則不用亦可）、清半夏各三錢，連翹、蟬退各一錢（為咽喉腫甚，表散之藥，不敢多用），煎服後，覺藥停胸間不下，其熱與腫似有益增之勢，知其證兼結胸，火熱無下行

之路，故益上衝也。幸藥房即在本村，復急取生石膏四兩，生赭石三兩，又煎湯徐徐溫飲下，仍覺停於胸間，又急取生赭石三兩，萸仁二兩，芒硝八錢，又煎湯飲下，胸間仍不開通。此時咽喉益腫，再飲水亦不能下，病家惶恐無措。愚曉之曰「我所以亟亟連次用藥者，正為此病腫勢浸增，恐稍遲緩，則藥不能進，今其胸中既貯如許多藥，斷無不行之理，藥下行則結開便通，毒火隨之下降，而上焦之腫熱必消矣」。時當晚十句鐘，至夜半藥力下行，黎明下燥糞數枚，上焦腫熱覺輕，水漿可進。晨飯時，牙關亦微開，服茶湯一碗。午後，腫熱又漸增，撫其胸熱猶烙手，脈仍洪實。意其燥結必未盡下，遂投以大黃六錢，芒硝五錢，又下燥糞兼有溏糞，病遂大愈。而腫處之硬者，仍不甚消，胸間撫之猶熱，脈象亦仍有餘熱。又用生石膏三兩，金銀花、連翹各數錢，煎湯一大碗，分數次溫飲下，日服一劑，三日痊愈（按此証二次即當用芒硝、大黃）。

石膏之性，又善清頭面之熱。愚在德州時，一軍士年二十餘，得瘟疫，三四日間，頭面悉腫，其腫處皮膚內含黃水，破後且潰爛，身上間有斑點。聞人言此證名大頭瘟，其潰爛之狀，又似瓜瓢瘟，最不易治。懼甚，求為診視。其脈洪滑而長，舌苔白而微黃，問其心中，惟覺煩熱，嗜食涼物。遂曉之曰「此證不難治，頭面之腫爛，周身之斑點，無非熱毒入胃，而隨胃氣外現之象，能放膽服生石膏可保痊愈」。遂投以拙擬青孟湯（方載三期七卷，係荷葉一個用周遭邊，生石膏一兩，羚羊角二錢，知母六錢，蟬退、僵蠶、金線重樓、粉甘草各錢半），方中

石膏改用三兩，知母改用八錢，煎汁一大碗，分數次溫飲下，一劑病癒強半，翌日於方中減去荷葉、蟬退，又服一劑痊愈。

外感痰喘，宜投以《金匱》小青龍加石膏湯。若其外感之熱，已入陽明之府，而小青龍中之麻、桂、薑、辛諸藥，實不宜用。曾治奉天同善堂中孤兒院劉小四，年八歲。孟秋患溫病，醫治十餘日，病益加劇。表裡大熱，喘息迫促，脈象洪數，重按有力，知猶可治。問其大便，兩日未行，投以大劑白虎湯，重生石膏二兩半，用生山藥一兩以代方中粳米。且為其喘息迫促，肺中伏邪，又加薄荷葉一錢半以清之。俾煎湯兩茶盅，作兩次溫飲下，一劑病癒強半，又服一劑痊愈。

又邑北境於常莊，於某，年四十餘。為風寒所束不得汗，胸中煩熱，又兼喘促，醫者治以蘇子降氣湯，兼散風清火之品，數劑，病益進。診其脈，洪滑而浮，投以拙擬寒解湯（方載三期五卷，係生石膏一兩，知母八錢，連翹、蟬退各錢半），須臾上半身即出汗，又須臾覺藥力下行，其下焦及腿亦皆出汗，病若失。

用生石膏以退外感之實熱，誠為有一無二之良藥。乃有時但重用石膏不效，必仿白虎加人參湯之義，用人參以輔之，而其退熱之力始大顯者，茲詳陳數案於下，以備參觀。

傷寒定例，汗、吐、下後，用白虎湯者加人參，渴者用白虎湯亦加人參。而愚臨證品驗以來，知其人或年過五旬，或壯年在勞心勞力之餘，或其人素有內傷，或稟賦羸弱，即不在汗、吐、下後與渴者，用白虎湯時，亦皆宜加人參。曾治邑

城西傅家莊傅壽朋，年二十。身體素弱，偶覺氣分不舒。醫者用三棱、延胡等藥破之，自覺短氣，遂停藥不敢服。隔兩日忽發喘逆，筋惕肉動，精神恍惚。脈數至六至，浮分搖搖，按之若無，肌膚甚熱，上半身時出熱汗。自言心為熱迫，甚覺怔忡。其舌上微有白苔，中心似黃。統觀此病情狀，雖陡發於一日，其受外感已非一日，蓋其氣分不舒時，即受外感之時，特其初不自覺耳。為其怔忡太甚，不暇取藥，急用生雞子黃四枚，溫開水調和，再將其碗置開水盆中，候溫服之，喘遂止，怔忡亦見愈。繼投以大劑白虎加人參湯，方中生石膏用三兩，人參用六錢，更以生懷山藥代方中粳米，煎湯一大碗，仍調入生雞子黃三枚，徐徐溫飲下，盡劑而愈。

又邑北六間房王姓童子，年十七，於孟夏得溫病。八九日間呼吸迫促，頻頻咳痰血相雜。其咳吐之時疼連胸肋，上焦微嫌發悶。診其脈確有實熱，而數至七至（凡用白虎湯者，見其脈數至七至或六至餘者，皆宜加參），搖搖無根。蓋其資稟素弱，又兼讀書勞心，其受外感又甚劇，故脈象若是之危險也。為其胸肋疼悶，兼吐血，擬用白虎加人參湯，以生山藥代粳米，而人參不敢多用。方中之生石膏仍用三兩，人參用三錢，又加竹茹、三七（搗細沖服）各二錢，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，一劑血即止，諸病亦見愈。又服一劑痊愈。用三七者，不但治吐血，實又兼治胸脅之疼也。

寒溫之證，最忌舌乾，至舌苔薄而乾，或乾而且縮者，尤為險證。而究其原因，卻非一致，有因真陰虧損者，有因氣虛不上潮者，有因氣虛更下陷者，皆可治以白虎加人參湯，更以生山藥代方中粳米，無不效者。蓋人參之性，大能補氣，元氣旺而上升，自無下陷之虞。而與石膏同用，又大能治外感中之真陰虧損。況又有山藥、知母以濡潤之呼？若脈象虛數者，又宜多用人參，再加玄參、生地滋陰之品，煎湯四五茶盅，徐徐溫飲下。一次只飲一大口，防其寒涼下侵，致大便滑瀉，又欲其藥力息息上達，升元氣以生津液，飲完一劑，再煎一劑，使藥力晝夜相繼，數日火退舌潤，其病自愈。曾治鄰村劉姓童子，年十三歲，於孟冬得傷寒證，七八日間，喘息鼻煽動，精神昏憤，時作譫語，所言皆勞力之事。其脈微細而數，按之無力。欲視其舌，乾縮不能外伸。啟齒視舌，皮若癩點作黑色，似苔非苔，頻飲涼水，毫無濡潤之意。愚曰「此病必得之勞力之餘，胸中大氣下陷，故津液不能上潮，氣陷不能托火外出，故脈道瘀塞，不然何以脈象若是，恣飲涼水而不滑瀉乎？」病家曰「先生之言誠然，從前延醫服藥分毫無效，不知尚可救否」？曰「此證按尋常治法一日只服藥一劑，即對證亦不能見效，聽吾用藥勿阻，定可挽回。遂用生石膏四兩，黨參、知母、生山藥各一兩，甘草二錢，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，一晝夜間，連進二劑，其病遂愈。

仲景治傷寒脈結代者，用炙甘草湯，誠佳方也。愚治寒溫，若其外感之熱不盛，遇此等脈，即遵仲景之法。若其脈雖結代，而外感之熱甚實者，宜用白虎加人參湯，若以山藥代粳米，生地代知母更佳、有案詳人參解中，可參觀。

從來產後之證，最忌寒涼。而果係產後溫病，心中燥熱，舌苔黃厚，脈象洪實，寒涼亦在所不忌。然所用寒涼之藥，須審慎斟酌，不可漫然相投也。愚治產後溫證之輕者，其熱雖入陽明之府，而脈象不甚洪實，恒重用玄參一兩，或至二兩，輒能應手奏效。若係劇者，必用白虎加人參湯方能退熱。然用時須以生山藥代粳米、玄參代知母，方為穩妥。處方編中白虎加人參以山藥代粳米湯下附有驗案可參觀。蓋以石膏、玄參，《本經》皆明言其治產乳，至知母條下則未嘗言之，不敢師心自用也。

鐵嶺友人吳瑞五精醫學，尤篤信拙著《衷中參西錄》中諸方，用之輒能奏效。其侄文博亦知醫。有戚家延之治產後病，臨行瑞五囑之曰「果係產後溫熱、陽明胃腑大實，非用白虎加人參湯不可，然用時須按《醫學衷中參西錄》中講究，以生山藥代粳米，玄參代知母，方為萬全之策，審證確時，宜放膽用之，勿為群言所阻撓也」。及至診視，果係產後溫病，且證脈皆大實，文博遵所囑開方取藥，而藥房皆不肯與，謂產後斷無用石膏之理，病家因此生疑。文博辭歸，病家又延醫治數日，病勢垂危，復求為診治。文博攜藥而往，如法服之，一劑而愈。

又滄州友人董壽山曾治一趙姓婦，產後八九日，忽得溫病，因誤汗致熱渴喘促，舌苔乾黃，循衣摸床，呼索涼水，病家不敢與。脈弦數有力，一息七至。急投以白虎加人參湯，以山藥代粳米，為係產後，更以玄參代知母。方中生石膏重用至四兩，又加生地、白芍各數錢，煎湯一大碗，分四次溫飲下，盡劑而愈。當時有知醫者在座，疑而問曰「產後忌用寒涼，何以能放膽如此，重用生石膏，且知母、玄參皆係寒涼之品，何以必用玄參易知母乎？」答曰「此理俱在《醫學衷中參西錄》中」，因於行篋中出書示之，知醫者觀書移時，始喟然嘆服。

又鐵嶺門生楊鴻恩，曾治其本村張氏婦，得溫病繼而流產。越四五日，其病大發。遍請醫生，均謂溫病流產，又兼邪熱太甚，無方可治。有人告以鴻恩自奉天新歸，其夫遂延為診治。見病人目不識人，神氣恍惚，渴嗜飲水，大便滑瀉，脈數近八至，且微細無力，舌苔邊黃中黑，縮不能伸，其家人泣問「此病尚可愈否」？鴻恩答曰「按常法原在不治之例，然予受師傳授，竭吾能力，或可挽回」，為其燥熱，又兼滑瀉，先投以《醫學衷中參西錄》滋陰清燥湯（方見山藥解），一劑瀉止，熱稍見愈。繼投以大劑白虎加人參湯，為其舌縮，脈數，真陰大虧，又加枸杞、玄參、生地之類，煎湯一大碗，調入生雞子黃三枚，分數次徐徐溫飲下。精神清爽，舌能伸出，連服三劑痊愈。眾人皆曰「神醫」，鴻恩曰「此皆遵予師之訓也，若拘俗說，產後不敢用白虎湯，庸有幸乎？特用白虎湯，須依汗、吐、下後之例加人參，予師《醫學衷中參西錄》中論之詳矣」。



在女子有因外感之熱內迫，致下血不止者，亦可重用白虎加人參湯治之。鄰村泊北莊李氏婦，產後數日，惡露已盡，至七八日，忽又下血。延醫服藥，二十餘日不止，其脈洪滑有力，心中熱而且渴。疑其夾雜外感，詢之身不覺熱，舌上無苔，色似微白，又疑其血熱妄行，投以涼血兼止血之藥，血不止而熱渴亦如，因思此證實夾雜外感無疑，遂改用白虎加人參湯，方中生石膏重用三兩，更以生山藥代粳米，煎湯三盅，分三次溫飲下，熱渴遂愈，血亦見止，又改用涼血兼止血之藥而愈。

痢證身熱不休，服一切清火之藥，而熱仍不休者，方書多謬為不治，夫治果對證，其熱焉有不休之理。此乃因痢證夾雜外感，其外感之熱邪，隨痢深陷，彌漫於下焦經絡之間，永無出路，以致痢為熱邪所助，日甚一日而永無愈期。夫病有兼證，即治之宜有兼方也，斯非重用生石膏更助以人參以清外感之熱不可。

曾治邑諸生王荷軒，年六十七，於中秋得痢證，醫治二十餘日不效。後愚診視，其痢赤白膠滯下行，時覺腸中熱而且乾，小便亦覺發熱，腹中下墜，並迫其脊骨盡處亦下墜作疼，且眩暈，其脈洪長有力，舌有白苔甚厚。愚曰「此外感之熱，挾病毒之熱下迫，故現種種病狀，非治痢兼治外感不可」，遂用生石膏二兩，生杭芍八錢，生懷山藥六錢，野黨參五錢，甘草二錢，此即白虎加人參湯以芍藥代知母、山藥代粳米也（此方載三期三卷名通變白虎加人參湯）。煎湯兩茶盅，分二次溫飲下，日進一劑，兩日痊愈。而脈象猶有餘熱，擬再用石膏清之，病家

疑年高之人，石膏不可屢服。愚亦應聘他往，後二十餘日其痢復作。延他醫治療，於治痢藥中，雜以甘寒濡潤之品，致外感餘熱永留不去，其痢雖愈，屢次反復。延至明年季夏，反復甚劇，復延愚診治，其脈象病證皆如前。因謂之曰「去歲若肯多服生石膏數兩，何至有以後屢次反復，今不可再留邪矣」，仍投以原方，連服三劑病癒，而脈亦安和。

按：此證兩次皆隨手奏效者，誠以石膏得人參之助，能使深陷之熱邪，徐徐上升外散，消解無餘。加以芍藥、甘草，以理下重腹疼，山藥以滋陰固下，所以熱消而痢亦愈也。又此證因初次外感之熱邪未清，後雖經屢次服涼藥清解，其熱仍固結莫解。迨蓄至期年之久，熱邪勃然反復，必俟連次重用生石膏，始能消解無餘。因悟得凡無新受之外感，而其脈象確有實熱，屢服涼藥不效，即稍效而後仍反復者，皆預有外感邪熱伏藏其中，均宜重用生石膏清之，或石膏與人參並用以清之也。不然，則外邪溜滯，消鑠真陰，經年累月而浸成虛勞者多矣。志在活人者，何不防之於預，而有採於芻蕘之言也。

又表兄張申甫之妻高氏。年五十餘，素多疾病。於季夏晨起偶下白痢，至暮十餘次。秉燭後，忽然渾身大熱，不省人事，循衣摸床，呼之不應。其脈洪而無力，肌膚之熱烙手。知其係氣分熱痢，又兼受暑，多病之身不能支持，故精神昏憤如是也。急用生石膏三兩，野黨參四錢，煎湯一大碗，徐徐溫飲下。至夜半盡劑而醒，痢亦遂愈，詰朝煎渣再服，其病脫然。

上所載痢證醫案二則，皆兼外感之熱者也，故皆重用生石膏治之，非概以其方治痢證也。拙著《醫學衷中參西錄》中，治痢共有七方，皆隨證變通用之，確有把握，前案所用之方，乃七方之一也。愚用此方治人多矣，脈證的確，用之自無差忒也。

嘗觀丁仲佑所譯東人《赤痢新論》，有醫案二則，一為宮野某女，一為田中某女，皆痢而兼瘟，身發劇熱，心機亢進，脈搏百一十至，神昏譫語。若投以拙擬重用生石膏之方皆可隨手奏效，乃東人不知治瘟，但知治痢，致二證皆至不起。夫著《赤痢新論》者，為志賀潔係東人，著名醫學博士，能於痢証中考驗出阿米巴赤痢，謂起於熱帶而漸及於溫帶、寒帶。其痢毒為動物之菌，寄居人腹為其為慢性之痢。且為動物之菌，故其治法與尋常赤痢不同（治法詳三期三卷）。其研究痢證可謂精矣，而竟於痢而兼瘟之證研究未到，誠以東人崇尚西法，不善治瘟且不知用石膏，故於痢證兼瘟者猶一間未達也。

瘧疾雖在少陽，而陽明兼有實熱者，亦宜重用生石膏。曾治鄰村李釀泉，年四十許，瘧疾間日一發，熱時若燔，即不發之日亦覺表裡俱熱。舌燥口乾，脈象弦長，重按甚實，此少陽邪盛，陽明熱盛，瘧而兼溫之脈也。投以大劑白虎湯加柴胡三錢，服後頓覺清爽。翌晨瘧即未發，又煎服前劑之半，加生薑三錢，溫瘧從此皆愈，至脈象雖不至甚實，而按之有力，常覺發熱懶食者，愚皆於治瘧劑中，加生石膏兩許以清之，亦莫不隨手奏效也。

且重用石膏治瘧，亦非自愚昉也。袁簡齋曰「丙子九月，余患瘧，飲呂醫藥，至日昃忽嘔吐，頭眩不止。家慈抱餘起坐，覺血氣自胸憤起，性命在呼吸間。忽有征友趙藜村來訪，家人以疾辭。曰『我解醫』，乃延入診脈看方，笑曰『容易』，命速買石膏，加他藥投之。余甫飲一勺，如以千鈞之石，將腸胃壓下，血氣全消。未半盂，沉沉睡去，頭上微汗，朦朧中聞先慈喏曰『豈非仙丹乎』？睡須臾醒，君猶在座。問『思西瓜否』？曰『想甚』，即買西瓜。曰『憑君儘量，我去矣』，食片許，如醍醐灌頂，頭目為清，晚食粥。次日來曰『君所患者陽明經瘧，呂醫誤為太陽經，以升麻、羌活二味升提之，將君氣血逆流而上，惟白虎湯可治，然亦危矣』」。詳觀此案，石膏用之得當，直勝金丹，誠能挽回人命於頃刻也。

石膏之性，又善治腦漏。方書治腦漏之證，恒用辛夷、蒼耳。然此證病因，有因腦為風襲者，又因肝移熱於腦者。若因腦為風襲而得，其初得之時，或可用此辛溫之品散之，若久而化熱，此辛溫之藥即不宜用，至為肝移熱於腦，則辛溫之藥尤所必戒也。近治奉天大西關溥源醬房郭玉堂，得此證半載不愈。鼻中時流濁涕，其氣腥臭，心熱神昏，恒覺眩暈。其脈左右皆弦而有力，其大便恒乾燥，知其肝移熱於腦，其胃亦移熱於腦矣。恐其病因原係風襲，先與西藥阿斯必林瓦許以發其汗，頭目即覺清爽。繼為疏方，用生石膏兩半，龍膽草、生杭芍、玄參、知母、花粉各四錢，連翹、金銀花、甘草各二錢，薄荷葉一錢。連服十劑，石膏皆用兩半，他藥則少有加減，其病遂脫然痊愈。

又治奉天測量局護兵某，得此證七八日，其脈浮而有力，知其因風束生熱也。亦先用阿斯必林瓦許汗之。汗後，其鼻中濁涕即減，亦投以前方，連服三劑痊愈。

《本經》謂石膏能治腹痛，誠有效驗。曾治奉天清丈局司書劉錫五腹疼，三年不愈，其脈洪長有力，右部尤甚，舌心紅而無皮，時覺頭疼眩暈，大便乾燥，小便黃澀，此乃伏氣化熱，阻塞奇經之經絡，故作疼也。為疏方生石膏兩半，知母、花粉、玄參、生杭芍、川棟子各五錢，乳香、沒藥各四錢，甘草二錢，一劑疼愈強半。即原方略為加減，又服數劑痊愈。

又愚弱冠，後出遊津門，至臘底還里，有本村劉氏少年，因腹疼臥病月餘，晝夜號呼，勢極危險。延醫數人，皆束手無策。聞愚歸，求為診視。其脈洪長有力，蓋從前之疼猶不至如斯，為屢次為熱藥所誤，故疼益加劇耳。亦投以前方，惟生石膏重用二兩，一劑病大輕減。後又加鮮茅根數錢，連服兩劑痊愈。蓋此等證，大抵皆由外感伏邪竄入奇經，久而生熱。其熱無由宣散，遂鬱而作疼。醫者為其腹疼，不敢投以涼藥，甚或以熱治熱，是以益治益劇。然證之涼熱，脈自有分，即病人細心體驗，亦必自覺。臨證者盡心詢問考究，自能得其實際也。

石膏之性，又最宜與西藥阿斯必林並用。蓋石膏清熱之力雖大，而發表之力稍輕。阿斯必林之原質，存於楊柳樹皮津液中，味酸性涼，最善達表，使內鬱之熱由表解散，與石膏相助為理，實有相得益彰之妙也。如外感之熱，已入陽明胃腑，其人頭疼，舌苔猶白者，是仍帶表證。愚恒用阿斯必林一瓦（合中量二分六

厘四毫），白蔗糖化水送服以汗之。迨其汗出遍體之時，復用生石膏兩許，煎湯乘熱飲之（宜當汗正出時飲之），在表之熱解，在裡之熱亦隨汗而解矣。若其頭已不疼，舌苔微黃，似無表證矣，而脈象猶浮，雖洪滑而按之不實者，仍可用阿斯必林汗之。然宜先用生石膏七八錢，或兩許，煮湯服之，俾熱勢少衰，然後投以阿斯必林，則汗既易出，汗後病亦易解也。若其熱未隨汗全解，仍可徐飲以生石膏湯，清其餘熱。不但此也，若斑疹之毒，鬱而未發，其人表裡俱熱，大便不滑瀉者，可用生石膏五六錢，煎湯沖服阿斯必林半瓦許，俾服後，微似有汗，內毒透徹，斑疹可全然托出。若出後壯熱不退，胃腑燥實，大便燥結者，又可用生石膏至二三兩許，煎湯一大碗（約有三四茶杯），沖阿斯必林一瓦，或一瓦強，一次溫飲數羹匙。初飲略促其期，迨熱見退，或大便通下，尤宜徐徐少飲，以壯熱全消，仍不至滑瀉為度。如此斟酌適宜，斑疹無難愈之證矣。石膏與阿斯必林，或前後互用，或一時並用，通變化裁，存乎其人，果能息息與病機相赴，功效豈有窮哉！

西人、東人，治熱性關節腫疼，皆慣用阿斯必林。而關節腫疼之挾有外感實熱者又必與石膏並用，方能立見奇效。奉天陸軍參謀長趙海珊之侄，年六歲。腦後生瘡，漫腫作疼，繼而頭面皆腫，若赤遊丹毒。繼而作抽掣，日甚一日。浸至周身僵直，目不能合，亦不能瞬，氣息若斷若續，吟呻全無。其家人以為無藥可治，待時而已。閱兩晝夜，形狀如故，試灌以勺水，似猶知下嚥。因轉念或猶可

治，而彼處醫者，咸皆從前延請而屢次服藥無效者也。其祖父素信愚，因其向患下部及兩腿皆腫，曾為治癒。其父受瘟病甚險，亦昇至院中治癒。遂亦昇之來院（相距十裡許），求為診治。其脈洪數而實，肌膚發熱。知其夾雜瘟病，陽明府證已實，勢雖垂危，猶可挽回。遂用生石膏細末四兩，以蒸汽水煎湯兩茶杯，徐徐溫灌之。周十二時劑盡，脈見和緩，微能作聲。又用阿斯必林半瓦，仍以汽水所煎石膏湯，分五次送下，限一日夜服完。服至末二次，皆周身微見汗，其精神稍明瞭，肢體能微動。從先七八日不食，且不大便，至此可少進茶湯，大便亦通下矣。繼用生山藥細末煮作稀粥，調以白蔗糖，送服阿斯必林三分瓦之一，日兩次，若見有熱，即間飲汽水所煮石膏湯。又以蜜調黃連末，少加薄荷冰，敷其頭面腫處，生肌散敷其瘡口破處，如此調養數日，病勢減退，可以能言。其左邊手足仍不能動，試略為屈伸，則疼不能忍。細驗之，關節處皆微腫，按之覺疼，知其關節之間，因外感之熱而生炎也。遂又用鮮茅根煎濃湯（無鮮茅根可代以鮮蘆根），調以白蔗糖，送服阿斯必林半瓦，日兩次。俾服藥後周身微似有汗，亦間有不出汗之時，令其關節中之炎熱，徐徐隨發表之藥透出。又佐以健補脾胃之藥，俾其多進飲食。如此旬餘，左手足皆能運動，關節能屈伸，以後飲食復常，停藥勿服，靜養半月，行動如常矣。此證共用生石膏三斤，阿斯必林三十瓦，始能完全治癒。愚用阿斯必林治熱性關節腫疼者多矣，為此證最險，故詳記之。

丁仲佑《西藥實驗談》載，東人用阿斯必林治癒關節急性癱麻質斯（即熱性關節腫痛）之案甚夥，而其證之險，皆遠遜於此證。若遇此證，不能重用生石膏，尚有何藥能與阿斯必林並用，以挽回此極險之證乎？彼欲廢棄中藥者，尚其詳觀此案也。

上所錄諸案，其為證不同，然皆兼有外感熱實者也。乃有其人純係內傷，臟腑失和，而前哲具有特識，亦有重用石膏者，徐靈胎曰「嘉興朱宗臣，以陽盛陰虧之體，又兼痰凝氣逆。醫者以溫補治之，胸膈痞塞，而陽道痿。群醫謂脾腎兩虧，將恐無治，就余於山中。余視其體，豐而氣旺，陽升而陰不降，諸竅皆閉。笑謂之曰「此為肝腎雙實證，先用清潤之藥，加石膏以降其逆氣，後以消痰開胃之藥滌其中宮，更以滋腎強陰之藥鎮其元氣，陽事即通」，五月後，妾即懷孕，得一女，又一年復得一男。

近治奉天南市場俊記建築公司經理王海山，其證亦與前案朱宗臣之病相似。愚師徐氏之意，亦先重用生石膏以清其痰火，共服藥十餘劑痊愈。海山年四十餘，為無子，納寵數年，猶未生育，今既病癒，想亦育麒不遠矣。

吳鞠通曰「何叟年六十二歲，手足拘攣。誤服桂、附、人參、熟地等補陽，以致面赤，脈洪數，小便閉，身重不能轉側，手不能上至鬢，足蜷曲，絲毫不能轉側移動。細詢病情，因縱飲食肉而然。所謂「濕熱不攘，大筋軟短，小筋弛長，軟短為拘，弛長為痿」者也。與極苦通小腸、淡滲利膀胱之方，用生石膏八兩，



飛滑石一兩，茯苓皮六錢，桑枝、防己各五錢，晚蠶砂、龍膽草各四錢，穿山甲、胡黃連、洋蘆薈、杏仁、地龍各三錢，白通草二錢，煮三碗，分三次服，日盡一劑。至七日後，小便紅黑而濁。半月後手漸動，足漸伸。一月後下床，扶桌椅能行。四十日後走至簷前，不能下階。又半月始下階。三月後能行四十步，後因痰飲，用理脾肺之藥收功」。楊華軒（南皮人，清同治時太醫院醫官）曰「同邑某氏室女，周身拘攣，四肢不能少伸，年餘未起床矣。診其脈，陽明熱甚，每劑藥中必重用生石膏以清陽明之熱，共用生石膏四斤，其病竟愈」，觀此二案，石膏治外感兼治內傷，功用何其弘哉！

窮極石膏之功用，恒有令人獲意外之效者。曾治奉天大西關馬姓叟，年近六旬，患痔瘡，三十餘年不愈。後因傷寒證，熱入陽明之府，投以大劑白虎湯數劑，其病遂愈，痔瘡竟由此除根。

又治奉天商埠局旁呂姓幼童。年五六歲，每年患眼疾六七次，皆治於東人醫院。東人謂此關於稟賦，不能除根，後患癩疹，毒熱甚恣，投以托毒清火之品。每劑中用生石膏兩半，病癒後，其眼疾亦從此不再反復。

又友人張少白，曾治京都閻姓叟。年近七旬，素有勞疾，發則喘而且嗽。於冬日感冒風寒，上焦煩熱，勞疾大作，痰涎膠滯，喘促異常。其脈關前洪滑，按之有力。少白治以生石膏二兩以清時氣之熱，因其勞疾，加沉香五錢，以引氣歸腎。且以痰涎太盛，石膏能潤痰之燥，不能行痰之滯，故又借其辛溫之性，以為

石膏之反佐也。一日連服二劑，於第二劑加清竹瀝二錢，病若失。勞疾亦從此除根永不反復。夫勞疾至年近七旬，本屬不治之證，而事出無心，竟以重用石膏治癒之，石膏之功用，何其神哉。愚因聞此案，心有會悟，擬得治肺勞黃耆膏方（載處方編中），其中亦用生石膏，服者頗有功效。

寒溫陽明府病，原宜治以白虎湯，醫者畏不敢用，恒以甘寒之藥清之，遇病之輕者，亦可治癒，而恒至稽留餘熱（甘寒藥滯泥，故能閉塞外感熱邪），變生他證。迨至病久不愈，其脈之有力者，仍可用白虎湯治之，其脈之有力而不甚實者，可用白虎加人參湯治之。曾治奉天中街內賓升靴鋪中學徒，年十四五，得勞熱喘嗽證。初原甚輕，醫治數月，病勢浸增，醫者諉謂不治。遂來院求為診視，其人羸弱已甚，而脈象有力，數近六至，疑其有外感伏熱，詢之果數月之前，曾患瘟病，經醫治愈，乃知其決係外感留邪，問其心中時覺發熱，大便乾燥，小便黃澀，遂投以白虎加人參湯，去粳米加生懷山藥一兩，連服數劑，病若失。見者訝為奇異，不知此乃治其外感，非治其內傷，而能若是之速效也。

《內經》謂「冬傷於寒，春必病溫」，是言伏氣為病也。乃有伏氣伏於膈膜之下（《內經》所謂橫連膜原也），逼近胃口，久而化熱，不外發為溫病，轉上透膈膜，薰蒸肺臟，致成腫病者。若其脈有力，亦宜重用生石膏治之。曾治奉天小南關趙某年四十許。始則發熱懶食，繼則咳嗽吐痰腥臭，醫治三月，浸至不能起床。脈象滑實，右脈尤甚（伏邪之熱，亦如寒溫之脈，多右盛於左），舌有黃

苔，大便數日一行。知係伏氣為病，投以大劑白虎湯，以生山藥代粳米，又加利痰解毒之品，三劑後病癒強半。又即其方加減，服至十餘劑痊愈。

又有伏氣下陷於奇經諸脈中，久而化熱，其熱亦不能外發為溫，有時隨奇經之脈上升，在女子又有熱入血室而子宮潰爛者，爰錄兩案於下以證之。

安東尉之鳳，年二十餘。時覺有熱，起自下焦，上衝腦部。其腦部為熱衝激，頭巔有似腫脹，時作眩暈，心中亦時發熱，大便乾燥，小便黃澀。經醫調治，年餘無效。求其處醫士李亦泉寄函來問治法，其開來病案如此。且其脈象洪實，飲食照常，身體亦不軟弱。知其伏有外感熱邪，因其身體不弱，俾日用生石膏細末四兩，煮水當茶飲之，若覺涼時即停服。後二十餘日，其人忽來奉，言遵示服石膏六七斤，上衝之熱見輕，而大便微溏，因停藥不服。診其脈仍然有力，問其心中仍然發熱，大便自停藥後即不溏矣。為開白虎加人參湯，方中生石膏重用三兩，以生懷山藥代粳米，連服六七劑，上衝之熱大減，因出院還家。囑其至家，按原方服五六劑，病當除根矣。

南皮張文襄公第十公子溫卿夫人，年三十餘。十年前，恒覺少腹切疼。英女醫謂係子宮炎證，用藥數次無效，繼乃謂此病如欲除根，須用手術剖割，將生炎之處其腐爛者去淨，然後敷藥能愈。病人懼而辭之。後至奉，又延東女醫治療，用坐藥兼內服藥，數年稍愈，至壬戌夏令，病浸增劇，時時疼痛，間下膿血。癸亥正初，延愚診治。其脈弦而有力，尺脈尤甚。自言疼處覺熱，以涼手熨之稍愈。

上焦亦時覺煩躁。恍悟此證，當係曾受外感熱入血室，醫者不知，治以小柴胡湯加石膏，外感雖解，而血室之熱未清，或伏氣下陷入於血室，阻塞氣化，久而生熱，以致子宮生炎，浸至潰爛，膿血下注。為疏方，用金銀花、乳香、沒藥、甘草以解其毒，天花粉、知母、玄參以清其熱，復本小柴胡湯之義，少加柴胡提其下陷之熱上出，諸藥煎湯，送服三七細末一錢，以化腐生新。連服三劑病似稍輕，其熱仍不少退。因思此證，原係外感稽留之熱，非石膏不能解也。遂於原方中加生石膏一兩，後漸加至二兩，連服數劑，熱退強半，疼亦大減。遂去石膏，服數劑，漸將涼藥減少，復少加健胃之品，共服藥三十劑痊愈。後在天津治馮氏婦此證，亦用此方。中有柴胡，即覺膿血不下行，後減去柴胡，為之治癒。

愚臨證四十餘年，重用生石膏治癒之證當以數千計。有治一證用數斤者，有一證而用至十餘斤者，其人病癒之後，飲食有加，毫無寒胃之弊。又曾見有用煨石膏數錢，其脈即數動一止，浸至言語遲澀，肢體痿廢者；有服煨石膏數錢，其胸脅即覺鬱疼，服通氣活血之藥始愈者。至於傷寒瘟疫、痰火充盛，服煨石膏後而不可救藥者，尤不勝紀。世之喜用煨石膏者，尚其閱僕言而有所警戒哉！

或問「石膏一物也，其於煨與不煨何以若是懸殊」？答曰「石膏原質為硫氧氫鈣化合，為其含有硫氧氫，所以有發散之力，煨之則硫氧氫之氣飛騰，所餘者惟鈣。夫鈣之性本斂而且澀，煨之則斂澀之力益甚，所以辛散者變為收斂也」。

或問「丁仲佑譯西人醫書，謂石膏不堪入藥，今言石膏之效驗如此，豈西人之說不足憑歟」？答曰「石膏之原質為硫氧氫鈣化合。西人工作之時，恒以硫氧鈣為工作之料。迨工作之餘即得若干石膏，而用之治病無效，以其較天產石膏，猶缺一原質，而不成其為石膏也。後用天產石膏，乃知其效驗非常，遂將石膏及從前未信之中藥兩味，共列於石灰（即鈣）基中。是故碳氧石灰牡蠣也，磷氧石灰鹿角霜也，硫氧氫石灰石膏也。其向所鄙棄者，今皆審定其原質而列為要藥，西人可為善補過矣。何吾中華醫界猶多信西人未定之舊說，而不知石膏為救顛扶危之大藥乎？」

《本經》謂石膏治金瘡，是外用以止其血也。愚嘗用煨石膏細末，敷金瘡出血者甚，蓋多年壁上石灰，善止金瘡出血，石膏經煨與石灰相近，益見煨石膏之不可內服也。

奉天陸軍營長趙海珊君之封翁，年過六旬，在臍旁生癰，大徑三寸，五六日間煩躁異常，自覺屋隘莫容。其脈左關弦硬，右關洪實，知係伏氣之熱與瘡毒俱發也。問其大便數日未行，投以大劑白虎湯加金銀花、連翹、龍膽草，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，連服三劑，煩躁與瘡皆愈。

又在籍時，本村張氏女因家庭勃怒吞砒石，未移時，作嘔吐。其兄疑其偷食毒物，詭言無他，惟服皂礬少許耳。其兄聞其言，急來詢解救之方。愚曰皂礬原係硫氧與鐵化合，分毫無毒，嘔吐數次即愈，斷無閃失，但恐未必是皂礬耳。須

再切問之。其兄去後，遲約三點鐘復來，言此時腹中絞疼，危急萬分，始實言所吞者是砒石，非皂礬也。急令買生石膏細末二兩，用涼水送下。乃村中無藥鋪，遂至做豆腐家買得生石膏，軋細末，涼水送下，腹疼頓止。猶覺腹中燒熱，再用生石膏細末半斤，煮湯兩大碗，徐徐飲之，盡劑而愈。後又遇吞火柴中毒者，治以生石膏亦愈，然以其毒緩，但煎湯飲之，無用送服其細末也。

一人患梅毒，在東人醫院治療二十餘日，頭面腫大，下體潰爛，周身壯熱，謔語不省人事，東人謂毒已走丹不可治。其友人警務處科員孫俊如，邀愚往東人院中為診視。疑其證夾雜溫病，遂用生石膏細末半斤，煮水一大瓶，偽作葡萄酒攜之至其院中，託言探友，蓋不欲東人知為療治也。及入視病人，其頭面腫而且紅，診其脈洪而實，知係夾雜溫病無疑，囑將石膏水徐徐溫服。翌日，又往視，其頭面紅腫見退，脈之洪實亦減半，而較前加數，仍然昏憤謔語，分毫不省人事。所飲石膏之水尚餘一半，俾自購潞黨參五錢，煎湯兌所餘之石膏水飲之。翌日，又往視之，則人事大清，脈亦和平。病人遂決意出彼院來院中調治，後十餘日其梅毒亦愈。此證用潞黨參者，取其性平不熱也。

一人，年五十，周身發冷，兩腿疼痛。醫者投以溫補之藥，其冷益甚，欲作寒戰。診其脈，甚沉伏，重按有力。其舌苔黃厚，小便赤澀。當時仲春，知其春溫之熱，鬱於陽明而未發，故現此假象也。欲用白虎湯加連翹治之，病人聞之，駭然。愚曰「但預購生石膏四兩，迨熱難忍時，煎湯飲之可乎」？病者曰「恐無

其時耳」。愚曰「若取鮮白茅根，煎湯飲之，則冷變為熱，且變為大熱矣」。病者仍不確信，然欲試其驗否，遂剖取鮮白茅根，去淨皮，細銼一大碗，煮數沸，取其湯，當茶飲之。有頃熱發，若難忍。須臾再診其脈，則洪大無倫矣。愚將所預購之四兩生石膏煎湯，分三次溫飲下，其熱遂消。石膏之性，又善清瘟疹之熱（參閱清疹湯後附案），又善清頭面之熱（參閱青孟湯後附案），又善清咽喉之熱（參閱「詳論咽喉證治法」所載治滄州友人董壽山一案）。

【附錄】

直隸鹽山孫香蓀來函：

民國十三年八月，財政廳友人張竹蓀之女公子，發熱甚劇，來詢方。為開生石膏一兩半，煎湯飲之。其熱仍不稍退，又來詢方。答以多煎石膏水飲之，必能見愈。竹蓀購石膏數兩，煮湯若干，渴則飲之，數日而愈。

直隸鹽山李日綸來函：

丁卯中秋，曾治天津傅姓少年，患溫證，胃熱氣逆，無論飲食藥物下嚥即吐出。延醫治療，皆因此束手。弟忽憶《衷中參西錄》石膏解載治毛姓媪醫案，曾用此方以止嘔吐，即以清胃府之大熱，遂仿而用之。食梨一顆，蘸生石膏細末七錢餘，其吐頓止，可以進食。然心中猶覺熱，再投以白虎加人參湯，一劑痊愈。

江蘇崇明縣刁繼沖來函：

近治一伏溫病，壯熱煩渴，脈來洪實兼數，大解十日未行，欲透其邪，則津液已衰，恐有汗脫之虞，欲通其便，則並無承氣確徵。細思此證，乃陽明熱久，真陰鑠耗。遵先生重用生石膏之訓，即用生石膏二兩，合增液湯，加鮮金釵石斛、香青蒿各三錢。病家疑忌，見者皆以為藥性過寒涼。餘憤然曰「擇醫宜慎，任醫宜專，既不信餘藥，請余何為」？病家不得已，購藥一劑，俾煎湯兩盅，作兩次服下，而熱勢益熾，病家疑藥不對證。余曰「此非藥不對證，乃藥輕不勝病耳」，遂俾將兩劑並作一劑，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，移時汗出便通，病若失。



人參解

人參之種類不一，古所用之人參，方書皆謂出於上黨，即今之黨參是也。考《本經》載，人參味甘，未嘗言苦，今黨參味甘，遼人參則甘而微苦，古之人參其為今之黨參無疑也。特是，黨參之性，雖不如遼人參之熱，而其性實溫而不涼，乃因《本經》謂其微寒，後世之篤信《本經》者，亦多以人參之性果然微寒，即釋古方之用人參者，亦本微寒之意以為詮解，其用意可謂尊經矣。然古之篤信《本經》而尊奉之者莫如陶弘景，觀其所著《名醫別錄》，以補《本經》所未備，謂人參能療腸胃中冷，已不遵《本經》以人參為微寒可知。因此疑年湮代遠，古經字句或有差訛，吾人生今之世，當實事求是，與古為新。今試即黨參實驗之，若與玄參等分並用，可使藥性無涼熱，即此可以測其熱力矣（此即臺黨參而言，若潞黨參其熱稍差）。然遼東亦有此參，與遼人參之種類迥別，為其形狀性味與黨參無異，故藥行名之為東黨參，其功效亦與黨參同。至於遼人參，其補力、熱力皆倍於黨參，而其性大約與黨參相似，東人謂過服之可使腦有充血之病，其性補而上升可知。至化學家實驗參之成分，謂中有灰色糖質，其能補益之力在此，不知所謂灰色糖質者，乃人參之所以能滋陰補血也。至人參補氣之力，實倍於補血，特其補氣之良能無原質可驗，東人遂不信其有補氣之力。即其卓卓名醫豬子氏，竟謂人參徵諸病床上之實驗，若在病危急時毫無作用，惟數日或數周間接續服之始覺營養稍佳。夫人參為救危扶顛之大藥，原能於呼吸之間挽回人命，豬子氏猶

昧而不知甚矣，醫學之難也。方書謂人參，不但補氣，若以補血藥輔之亦善補血。愚則謂「若輔以涼潤之藥即能氣血雙補，蓋平其熱性不使耗陰，氣盛自能生血也」。至《本經》謂其主補五臟、安精神、定魂魄、止驚悸、除邪氣、明目、開心、益智，無非因氣血充足，臟腑官骸各得其養，自有種種諸效也。

當時之習尚雖皆珍重遼人參，然其品類不齊，野山自生者性近和平，而價值甚昂，原非常用品。至種植之秧參，其性燥熱，又不可輕用，以愚臨證慣用黨參，輔佐得宜，自能挽回驗證也。

凡藥之性熱而乾燥者，恒生於熱地，桂、附之生於川廣者是也。物之性熱而濡潤者，恒生於寒地，人參之生於遼東山陰者是也。蓋其本性既熱，若復生於熱地，即不能保其濡潤之津液也。且既名為人參，必能參贊人身之氣化而後名實相符，人身之氣化，固陰陽俱備者也。彼因人參生於陰寒之地，而謂其偏於補陰者，於此義蓋未之審也。

【附：人參形狀考】

人參無論野山、移山、種秧，其色鮮時皆白，曬乾則紅，浸以白冰糖水，曬乾則微紅，若浸之數次，雖曬乾亦白矣。野山之參，其蘆頭（生苗之處，亦名露土）長而細，極長者可至二寸，細若韭莖，且多齟齬，有蘆頭短者則稍粗。至秧參之蘆頭，長不過七八分，其粗則過於箸矣。

人參之鮮者，皆有粗皮，制時用線七八條作一縷為弓弦，用此弦如拉鋸狀，來回將其粗皮磨去，其皮色始光潤，至皮上之橫紋以細密而深者為佳。野山之參一寸有二十餘紋，秧參則一寸不過十餘紋，且其紋形破裂，有似刀劃，野山參之紋則分毫無破裂。然無論野參、秧參，其紋皆係生成，非人力所能為也。

人參之鬚以堅硬者為貴，蓋野參生於堅硬土中，且多歷歲月，其鬚自然堅硬。若秧參則人工種植，土松年淺，故其鬚甚軟也。

至於野參之性溫和，秧參之性燥熱，人所共知，究其所以然之故，非僅在歷年之淺深也。因種秧參者多撒砒石末於畦中，以防蟲蟻之損傷，參得砒石之氣故甚燥熱，是以愚於治寒溫方中當用參者，從不敢投以秧參，恆以野黨參代之，亦能立起沉疴。至於西洋參，多係用秧參偽制，此愚在奉目睹，用者亦當審慎也。

山西黨參，種植者多，野生者甚少。凡野生者其橫紋亦如遼人參，種植者則無橫紋，或蘆頭下有橫紋僅數道，且種者皮潤肉肥，野者皮粗肉鬆，橫斷之中心有紋作菊花形。其蘆頭以粗大者為貴，名曰獅頭黨參，為其歷年久遠，屢次自蘆

頭發生，故作此形。其參生於五臺山者名臺黨參，色白而微黃，生於潞州太行紫團山者名潞黨參，亦名紫團參，色微赤而細，以二參較之，臺黨參力稍大，潞黨參則性平不熱，以治氣虛有熱者甚宜。然潞黨參野生者甚少，多係人種植者，至遼東所出之黨參（為其形若黨參，故俗名東黨參）。狀若臺黨參，皆係野生，其功用與山西之野臺黨參相近。

【附案】

邑中高某年四十許，於季春得溫病。屢經醫者調治，大熱已退，精神益憊，醫者諉為不治。病家亦以為氣息奄奄，待時而已。乃遲旬日而病狀如故，始轉念或可挽回。迎愚診視，其兩目清白無火，竟昏憤不省人事，舌乾如磋，卻無舌苔，問之亦不能言，撫其周身皆涼，其五六呼吸之頃，必長出氣一口，其脈左右皆微弱，至數稍遲，知其胸中大氣因服開破降下藥太過而下陷也。蓋大氣不達於腦中則神昏，大氣不潮於舌本則舌乾。神昏舌乾，故問之不能言也。其周身皆涼者，大氣陷後不能宣佈營衛也。其五六呼吸之頃必長出氣者，大氣陷後胸中必覺短氣，故太息以舒其氣也。遂用野臺參一兩、柴胡二錢，煎湯灌之，一劑見輕，兩劑痊愈。

外甥王竹孫年二十時，臥病數月不愈，精神昏憤，肢體酸懶，微似短氣，屢次延醫服藥莫審病因，用藥亦無效驗。一日忽然不能喘息，張口呼氣外出而氣不上達，其氣蓄極下迫，肛門突出，約二十呼吸之頃，氣息方通，一晝夜間如是者

八九次。診其脈關前微弱不起，知其胸中大氣下陷，不能司肺臟呼吸之樞機也。遂投以人參一兩，柴胡三錢，知母二錢，一劑而呼吸順，又將柴胡改用二錢，知母改用四錢，再服數劑，宿病亦愈。

按：拙著《醫學衷中參西錄》治大氣下陷多重用生黃耆，取其補氣兼能升氣也。而此案與前案皆重用參者，因一當外感之餘，津液鑠耗，人參兼能滋津液；一當久病之餘，元氣虧損，人參兼能固元氣也。

瀋陽縣署科長某，患梅毒，在東人醫院治療二十餘日，頭面腫大，下體潰爛，周身壯熱，謔語不省人事，東人謂毒已走丹不可治。其友人警務處科員孫俊如，邀愚往東人院中為診視。疑其證夾雜溫病，遂用生石膏細末半斤，煮水一大瓶，偽作葡萄酒攜之至其院中，托言探友，蓋不欲東人知為療治也。及入視病人，其頭面腫而且紅，診其脈洪而實，知係夾雜溫病無疑，囑將石膏水徐徐溫服。翌日又往視，其頭面紅腫見退，脈之洪實亦減半，而較前加數，仍然昏憤謔語，分毫不省人事。所飲石膏之水尚餘一半，俾自購潞黨參五錢，煎湯兌所餘之石膏水飲之，翌日又往視之，則人事大清，脈亦和平。病人遂決意出彼院來院中調治，後十餘日其梅毒亦愈。此證用潞黨參者，取其性平不熱也。

縣治西曾家莊丁叟，年過六旬，於孟冬得傷寒證。五六日間，延愚診視，其脈洪滑，按之亦似有力，表裡俱覺發熱，間作呻吟，氣息微喘，投以白虎湯一劑，大熱稍減。再診其脈，或七八動一止，或十餘動一止，兩手皆然，重按無力，遂

於原方中加入人參八錢，兼師炙甘草湯（亦名復脈湯）中重用乾地黃之意，以生地代知母，煎汁兩茶杯，分二次溫飲下，脈即調勻，且較前有力，而熱仍如故。又將方中石膏加倍（原作是二兩，倍作四兩），煎湯一大碗，俾徐徐溫飲下，盡劑而愈。

本村崔姓童子，年十一歲。其家本業農，因麥秋忙甚，雖幼童亦作勞田間，力薄不堪重勞，遂得溫病。手足擾動，不能安臥，譫語不休，所言者皆勞力之事，晝夜自不能瞑，脈雖有力，卻非洪實。擬投以白虎加人參湯，又慮小兒少陽之體，外邪方熾，不宜遽用人參，遂用生石膏兩半、蟬退一錢。煎服後諸病如故，復來詢方，且言其苦於服藥，昨所服者嘔吐將半。愚曰「單用生石膏二兩，煎取清湯徐徐溫飲之，即可不吐」。乃如言服之，病仍不愈。再為診視，脈微熱退，譫語益甚，精神昏昏，不省人事。急用野臺參兩半，生石膏二兩，煎汁一大碗，分數次溫飲下，身熱脈起，目遂得瞑，手足稍安，仍作譫語。又於原渣加生石膏、麥冬各一兩，煎湯兩盅，分兩次溫飲下，降大便一次，其色甚黑，病遂愈。

按：治此證及上證之時，愚慣用白虎湯，猶未慣用白虎加人參湯也。經此兩證後，凡其人年過六旬，及勞心勞力之餘，患寒溫證，而宜用白虎湯者必加人參。且統觀以上三案，未用參之先，皆病勢垂危，甫加參於所服藥中，即轉危為安，用之得當功效何其捷哉。

表兄王瑞亭年四十三歲，素吸鴉片，於仲冬得傷寒證。兩三日間，煩躁無汗，原是大青龍湯證，因誤服桂枝湯，煩躁益甚。迎愚診視，其脈關前洪滑，而兩尺無力，遂投以大劑涼潤之品，而少用透表和中之藥佐之，因其尺脈不實，囑其煎湯二茶杯，作十餘次飲下，一次止溫飲一大口，防其寒涼侵下焦也。病家忽愚所囑，竟頓飲之，遂致滑瀉數次，多帶冷沫，上焦益煩躁，鼻如煙熏，面如火炙，其關前脈大於從前一倍，數至七至，知其已成戴陽之證。急用人參一兩，煎湯兌童便半茶杯（須用食鹽醬童子之便，取其味鹹能制參），置藥杯於涼水盆中，候冷頓飲之，又急用玄參、生地、知母各一兩，煎湯一大碗備用。自服參後，屢診其脈，過半點鐘脈象漸漸收斂，至數似又加數，遂急將備用之藥燉極熱，徐徐飲下，一次飲藥一口，閱兩點鐘盡劑，周身微汗而愈。

吐血過多者，古方恆治以獨參湯，謂血脫者先益其氣也。然吐血以後，多虛熱上升，投以獨參湯恐轉助其虛熱，致血證仍然反覆。愚遇此等證，亦恆用人參而以鎮墜涼潤之藥輔之（保元寒降湯一案可參閱）。人參之性，用之得宜，又善利小便（濟陰湯後一案可參閱）。曾治鄰村曾氏叟，年六十四歲，素有勞疾。因勞嗽過甚，嘔血數碗，其脈搖搖無根，或一動一止，或兩三動一止，此氣血虧極將脫之候也。診脈時，見其所咳吐者痰血相雜，詢其從前嘔吐之時，先覺心中發熱。為疏方，用野臺參三錢，生山藥一兩，生赭石細末八錢，知母六錢，生杭芍、

牛蒡子各四錢，三七細末二錢（藥汁送服，方載三期三卷，名保元寒降湯），煎服一劑而血止，又服數劑脈亦調勻。

人參之性，雖長於補而有時善通。曾治鄰村毛姓少年，傷寒已過旬日，陽明火實，大便燥結，原是承氣湯證。然下不妨遲，愚對於此證，恒先用白虎湯清之，多有因服白虎湯大便得通而愈者。於是投以大劑白虎湯，一日連進二劑，至晚九句鐘，火似見退而精神恍惚，大便亦未通行。診其脈變為弦象，夫弦主火衰，亦主氣虛，知其證清解已過，而其大便仍不通者，因其氣分虧損，不能運行白虎湯涼潤之力也。遂單用人參五錢煎湯俾服之，須臾大便即通，病亦遂愈。

受業張方輿按：此段所謂人參善通，乃氣足而大便自下也，非具有開破之力也。蓋肺與大腸為表裡，其化機斡運之氣貫通，肺氣不降者，大便多不通暢，而肺氣虛弱不能斡旋運行，大便亦不通。此證熱已清，而大便又不下者，氣虛故也。故得人參之補氣，而大便遂通。

按：凡服白虎湯後，大熱已退，其大便猶未通者，愚恒用大黃細末一錢，或芒硝細末二錢，蜜水調服，大便即通，且通下即愈，斷無降後不解之虞。而此證不用硝黃通其大便，轉用人參通其大便，此《內經》所謂「塞因塞用」也。審脈無誤，投藥即隨手奏效，誰謂中法之以脈斷病者不足憑乎？



又按：此證氣分既虛，初次即宜用白虎加人參湯，因火盛之時，辨脈未真，遂致白虎與人參前後分用，幸而成功。因此，自咎脈學之疏，益歎古人制方之精矣。

人參之性，用之得宜，又善利小便。曾治滄州劉姓媪，年過六旬，小便不利，周身皆腫。醫者投以末藥，下水數桶，周身腫盡消，言忌鹹百日，蓋方中重用甘遂也。數日腫復如故，一連服藥三次皆然，此時小便滴瀝全無，亦不敢再服前藥，又延他醫，皆以為服此等藥愈後又反復者，斷難再治，況其屢次服藥而屢次反復者乎？後延愚診視，其脈數而無力，按之即無，因謂病家曰「脈數者陰分虛也，無力者陽分虛也。水飲緣三焦下達必藉氣化流通，而後能滲入膀胱出為小便。此脈陰陽俱虛，其氣化必虛損，不能流通小便，所以滴瀝全無也。欲治此證，非補助其氣化而兼流通其氣化不可。《易》有之「日往則月來，月往則日來，日月相推而明生，寒往則暑來，暑往則寒來，寒暑相推而歲成，往者屈也，來者信（讀作伸）也。屈信相感而利生焉」。此天地之氣化，即人身之氣化。爰本此義以立兩方。一方以人參為主，輔以麥冬以濟參之熱，靈仙以行參之滯，少加地膚子為嚮導，名之曰宣陽湯，以象日象暑。一方以熟地為主，輔以龜板以助熟地之潤，芍藥以行熟地之泥，亦少加地膚子為嚮導，名之曰濟陰湯，以象月象寒。二方輪流服之，以象日月寒暑往來屈伸之義。俾先服濟陰湯，取其貞下起元也，服至三

劑，小便見利。服宣陽湯亦三劑，小便大利。又接服濟陰湯三劑，小便直如泉湧，腫遂盡消。

西洋參解

西洋參：味甘微苦，性涼。能補助氣分，兼能補益血分，為其性涼而補，凡欲用人參而不受人參之溫補者，皆可以此代之。惟白虎加人參湯中之人參，仍宜用黨參而不可代以西洋參，以其不若黨參具有升發之力，能助石膏逐邪外出也。且《本經》謂人參味甘，未嘗言苦，適與黨參之味相符，是以古之人參，即今之黨參，若西洋參與高麗參，其味皆甘而兼苦，故用於古方不宜也。西洋參產於法蘭西國，外帶粗皮則色黃，去粗皮則色白，無論或黃或白，以多有橫紋者為真。愚用此參，皆用黃皮多橫紋者，因偽造者能造白皮西洋參，不能造黃皮西洋參也。

黃耆解

黃耆性溫，味微甘，能補氣，兼能升氣，善治胸中大氣（即宗氣，為肺葉辟之原動力）下陷。《本經》謂主大風者，以其與發表藥同用，能祛外風，與養陰清熱藥同用，更能熄內風也。謂主癰疽、久敗瘡者，以其補益之力能生肌肉，其潰膿自排出也。表虛自汗者，可用之以固外表氣虛。小便不利而腫脹者，可用之以利小便。婦女氣虛下陷而崩帶者，可用之以固崩帶。為其補氣之功最優，故推為補藥之長，而名之曰耆也。

【附案】

滄州董氏女，年二十餘。胸脅滿悶，心中怔忡，動則自汗，其脈沉遲微弱，右部尤甚，為其脈遲，疑是心肺陽虛，詢之不覺寒涼，知其為胸中大氣下陷也。其家適有預購黃耆一包，俾用一兩煎湯服之。其族兄媿亭在座，其人頗知醫學，疑藥不對證。愚曰「勿多疑，倘有差錯，余職其咎」，服後，果諸病皆愈。媿亭疑而問曰「《本經》黃耆原主大風，有透表之力，生用則透表之力益大，與自汗證不宜，其性升而能補，有膨脹之力，與滿悶證不宜，今單用生黃耆兩許，而兩證皆愈，並心中怔忡亦愈，其義何居」？答曰「黃耆誠有透表之力，氣虛不能逐邪外出者，用於發表藥中，即能得汗，若其陽強陰虛者，誤用之則大汗如雨不可遏抑。惟胸中大氣下陷，致外衛之氣無所統攝而自汗者，投以黃耆則其效如神。至於證兼滿悶而亦用之者，確知其為大氣下陷，呼吸不利而作悶，非氣鬱而作悶

也。至於心與肺同懸胸中，皆大氣之所包舉，大氣升則心有所根據，故怔忡自止也。董生聞之，欣喜異常曰「先生真我師也」，繼加桔梗二錢，知母三錢，又服兩劑以善其後。

奉天大東關於氏女，年近三旬，出嫁而孀，依於娘門。其人善英文英語，英商之在奉者，延之教其眷屬。因病還家，夜中忽不能言，並不能息。其同院住者王子崗係愚門生，急來院扣門求為挽救。因向曾為診脈，方知其氣分甚弱，故此直斷為胸中大氣下陷，不能司肺臟之呼吸，是以氣息將停而言不能出也。急為疏方，用生箭耆一兩，當歸四錢，升麻二錢，煎服，須臾即能言語。翌晨，昇至院中，診其脈沉遲微弱，其呼吸仍覺氣短，遂用原方減升麻之半，又加山藥、知母各三錢，柴胡、桔梗各錢半（此處去山藥，即拙擬升陷湯，載處方編中四卷專治大氣下陷），連服數劑痊愈。

按：此證脈遲而仍用知母者，因大氣下陷之脈，大抵皆遲，非因寒涼而遲也。用知母以濟黃耆之熱，則藥性和平，始能久服無弊。

一婦人產後四五日，大汗淋漓，數日不止，情勢危急，氣息奄奄，其脈微弱欲無，問其短氣乎？心中怔忡且發熱乎？病人不能言而頷之。知其大氣下陷，不能吸攝衛氣，而產後陰分暴虛，又不能維繫陽分，故其汗若斯之脫出也。遂用生黃耆六錢，玄參一兩，淨莢肉、生杭芍各五錢，桔梗二錢，一劑汗減，至三劑諸病皆愈。從前五六日未大便，至此大便亦通下。

邑王氏女，年二十餘，心中寒涼，飲食減少，延醫服藥，年餘無效，且益羸瘦。後愚診視，其左脈微弱不起，斷為肝虛證。其父知醫，疑而問曰「向延醫診治，皆言脾胃虛弱，相火衰損，故所用之方皆健脾養胃，補助相火，曾未有言及肝虛者，先生獨言肝虛，但因左脈之微弱乎？抑別有所見而云然乎？」答曰「肝臟之位置雖居於右，而其氣化實先行於左，試問病人，其左半身必覺有不及右半身處，是其明徵也」。詢之，果覺坐時左半身上墜，臥時不敢向左側，其父方信愚言，求為疏方。遂用生黃耆八錢，柴胡、川芎各一錢，乾薑三錢，煎湯飲下，須臾左側即可安臥，又服數劑，諸病皆愈。惟素有帶證尚未除，又於原方加牡蠣數錢，服數劑帶證亦愈。其父復疑而問曰「黃耆為補肺脾之藥，今先生用以補肝，竟能隨手奏效，其義何居」？答曰「同聲相應，同氣相求，孔子之言也。肝屬木而應春令，其氣溫而性喜條達，黃耆之性溫而上升，以之補肝，原有同氣相求之妙用。愚自臨證以來，凡遇肝氣虛弱不能條達，用一切補肝之藥皆不效，重用黃耆為主，而少佐以理氣之品，服之，覆杯即見效驗，彼謂肝虛無補法者，原非見道之言也」。

《本經》謂黃耆主大風者，誠有其效。奉天鐵嶺傅光德夫人，年二十餘。夏日當窗寢而受風，覺半身麻木，其麻木之邊，肌肉消瘦，浸至其邊手足若不隨用。診其脈，左部如常，右部似有鬱象，而其麻木之邊適在右，知其經絡為風所襲不

能宣通也。為疏方用生黃耆一兩，當歸八錢，羌活、知母、乳香、沒藥各四錢，全蠍一錢，全蜈蚣三條，煎湯服一劑見輕，又服兩劑痊愈。

《本經》謂黃耆主久敗瘡，亦有奇效。奉天高等師範書記張紀三，年三十餘。因受時氣之毒，醫者不善為之清解，轉引毒下行，自臍下皆腫，繼又潰爛，舉丸露出，少腹出孔五處，小便時五孔皆出尿。中西醫者皆以為不可治，遂昇之至院中求為治療，惴惴惟恐不愈。愚曉之曰「此證尚可為，非多服湯藥，俾其自內長肉以排膿外出不可」，為疏方生黃耆、花粉各一兩，乳香、沒藥、銀花、甘草各三錢，煎湯連服二十餘劑。潰爛之處，皆生肌排膿外出，結疤而愈，始終亦未用外敷生肌之藥。

又在德州時，有軍官張憲宸夫人，患乳癰，腫疼甚劇，投以消腫、清火、解毒之品，兩劑而愈。然猶微有疼時，愆愆其再服一兩劑以消其芥蒂。以為已愈，不以為意，隔旬日又復腫疼，復求為治療。愚曰「此次服藥，不能盡消，必須出膿少許，因其舊有芥蒂未除，至今已潰膿也」，後果服藥不甚見效，遂入西人醫院中治療。旬日後其瘡外破一口，醫者用刀闊之，以期便於敷藥。又旬日潰益甚，滿乳又破七八個口，醫者又欲盡闊之使通，病人懼不敢治，強出院還家，求治於愚。見其各口中皆膿乳並流，外邊實不能敷藥，然內服湯藥助其肌肉速生，自能排膿外出，許以十日可為治癒。遂用生黃耆、花粉各五錢，生杭芍三錢，乳香、沒藥、丹參各二錢，俾煎湯服之，每日用藥一劑，煎服二次，果十日痊愈。

黃耆之性，又善利小便。奉天本溪湖煤鐵公司科員王雲錦，年四十餘。溺道艱澀滴瀝不能成溜，每小便一次，必須多半點鐘。自兩脅下連腿作疼，劇時有如錐刺。其脈右部如常，左部甚微弱，知其肝氣虛弱，不能條達，故作疼痛，且不能疏泄（《內經》謂肝主疏泄），故小便難也。為疏方用生黃耆八錢，淨莢肉、知母各六錢，當歸、丹參、乳香、沒藥、續斷各三錢，煎服一劑，便難與腿脅疼皆見愈。又為加柴胡錢半，連服二十劑痊愈。至於莢肉酸斂之性，或有疑其用於此方不宜者，觀後山莢肉解自明矣。

奉天大西關萬順興同事傅學詩，周身漫腫，自言常覺短氣，其脈沉濡，右部尤甚知其胸中大氣下陷，氣化不能升降，因之上焦不能如霧，所以下焦不能如瀆，而濕氣彌漫也。投以升陷湯，知母改用五錢，又加玄參、天冬、地膚子各三錢，連服數劑痊愈。

又鄰村李邊務莊李晶波之夫人，產後小便利，倩人詢方，俾用生化湯加白芍治之不效。復來詢方，言時或噁心嘔吐，小便可通少許，恍悟此必因產時努力太過，或撐擠太甚，以致胞係了戾，是以小便不通，噁心嘔吐，則氣機上逆，胞係有提轉之勢，故小便可以稍通也。為擬方用生黃耆五錢，當歸四錢，升麻、柴胡各二錢，煎湯服一劑而愈。此因黃耆協同升、柴，大能升舉氣化，胞係之了戾者，可因氣化升舉而轉正也。



黃耆之性，又善開寒飲。臺灣醫士嚴坤榮來函，言其友避亂山中，五日未得飲食，甫歸，恣飲新汲涼水，遂成寒飲結胸，喘嗽甚劇。醫治二十餘年，吐之下之、溫之，皆分毫無效。乞為疏方，並問《醫學衷中參西錄》載有服生硫磺法，不知東硫磺亦可服否？因作書以答之曰「詳觀來案，知此證乃寒飲結胸之甚者。拙著《醫學衷中參西錄》理飲湯（載三期三卷）原為治此證的方，特藥味與分量當稍變更，今擬用生黃耆一兩，乾薑八錢，於朮四錢，桂枝尖、茯苓片、炙甘草各三錢，川朴、陳皮各二錢，煎湯服。方中之義，用黃耆以補胸中大氣，大氣壯旺，自能運化水飲，仲景所謂「大氣一轉其氣乃散」也。而黃耆生用，同乾薑、桂枝又能補助心肺之陽，心肺陽足，如日麗中天，陰霾自開也。更用白朮、茯苓以理脾之濕，厚朴、陳皮以通胃之氣，氣順溫消，痰飲自除。用炙甘草者，取其至甘之味，能調乾薑之辣，而乾薑得甘草且能逗留其勢力，使之綿長，並能和緩其熱力使不猛烈也。至東硫磺，擇其純黃無雜質者，亦可生服，特其熱力甚微，必一次服至錢許方能有效，若於服湯藥之外，兼用之以培下焦之陽，奏效當更捷也。此信去後，兩閱月又接其函，言遵方用藥，十餘劑病即脫然痊愈。」

黃耆不但能補氣，用之得當，又能滋陰。本村張媪年近五旬，身熱勞嗽，脈數至八至，先用六味地黃丸加減煎湯服不效，繼用左歸飲加減亦不效。躊躇再四忽有會悟，改用生黃耆六錢，知母八錢，煎湯服數劑，見輕，又加丹參、當歸各三錢，連服十劑痊愈。蓋人稟天地之氣化以生，人身之氣化即天地之氣化。天地

將雨之時，必陽氣溫暖上升，而後陰雲四合，大雨隨之，黃耆溫升補氣，乃將雨時上升之陽氣也。知母寒潤滋陰，乃將雨時四合之陰雲也，二藥並用，大具陽升陰應、雲行雨施之妙。膏澤優渥，煩熱自退，此不治之治也。況虛勞者多損腎，黃耆能大補肺氣以益腎水之上源，使氣旺自能生水，而知母又大能滋肺中津液，俾陰陽不至偏勝，而生水之功益普也。至數劑後，又加丹參、當歸者，因血痺虛勞，《金匱》合為一門，治虛勞者當防其血有痺而不行之處，故加丹參、當歸以流行之也。

黃耆之性熱矣，有時轉能去熱。奉天安東劉仲友，年五十許。其左臂常覺發熱，且有酸軟之意。醫者屢次投以涼劑，發熱如故，轉覺脾胃消化力減，其右脈如常，左脈微弱，較差於右脈一倍，詢其心中不覺涼熱，知其肝木之氣虛弱，不能條暢敷榮，其中所寄之相火鬱於左臂之經絡而作熱也。遂治以生黃耆、淨莢肉各八錢，知母五錢，當歸、丹參、乳香、沒藥、赤芍各三錢，兩劑左脈見起，又服十劑痊愈。

黃耆之性，又善治肢體痿廢，然須細審其脈之強弱，其脈之甚弱而痿廢者，西人所謂腦貧血證也。蓋人之肢體運動雖腦髓神經司之，而其所以能司肢體運動者，實賴上注之血以涵養之。其脈弱者，胸中大氣虛損，不能助血上升以養其腦髓神經，遂致腦髓神經失其所司，《內經》所謂「上氣不足，腦為之不滿」也。拙擬有加味補血湯、乾頹湯，方中皆重用黃耆。凡脈弱無力而痿廢者，多服皆能

奏效。若其脈強有力而痿廢者，西人所謂腦充血證，又因上升之血過多，排擠其腦髓神經，俾失所司，《內經》所謂「血菀（同鬱）於上，為薄厥」也。如此等證，初起最忌黃耆，誤用之即凶危立見。迨至用鎮墜收斂之品，若拙擬之鎮肝熄風湯、建瓴湯治之。其脈柔和而其痿廢仍不愈者，亦可少用黃耆助活血之品以通經絡，若服藥後，其脈又見有力，又必須仍輔以鎮墜之品，若拙擬之起痿湯，黃耆與赭石、蟲諸藥並用也。

黃耆升補之力，尤善治流產、崩帶。縣治西傅家莊王耀南妻，初次受妊，五月，滑下二次，受妊至六七月時，覺下墜見血。時正為其姑治病，其家人倉猝求為治療，急投以生黃耆、生地黃各二兩，白朮、淨萸肉、煨龍骨、煨牡蠣各一兩，煎湯一大碗頓服之，胎氣遂安，又將藥減半，再服一劑以善其後。至期舉一男，強壯無恙。

瀋陽縣尹朱公之哲嗣際生，愚之門生也，黎明時來院扣門，言其妻因行經下血不止，精神昏憤，氣息若無。急往診視，六脈不全彷彿微動，急用生黃耆、野臺參、淨萸肉各一兩，龍骨、牡蠣各八錢，煎湯灌下，血止強半，精神見復，過數點鐘將藥劑減半，又加生懷山藥一兩，煎服痊愈。

同莊劉氏婦，四十許，驟然下血甚劇，半日之間氣息奄奄不省人事。求為診治，時愚他出，小兒蔭潮往視之，其左脈三部皆不見，右寸微見，如水上浮麻，莫辨至數，觀其形狀，呼吸不能外出，知其胸中大氣下陷也。急用生黃耆一兩，

大火煎數沸灌之，遲須臾再診其脈，六部皆出，微細異常，血仍未止。投以固衝湯原方，將方中黃耆改用一兩，一劑痊愈。

邑北境大仁村劉氏婦，年二十餘，身體羸弱，心中常覺寒涼，下白帶甚劇，屢治不效，脈甚細弱，左部尤甚。投以生黃耆、生牡蠣各八錢，乾薑、白朮、當歸各四錢，甘草二錢，數劑痊愈。蓋此證因肝氣太虛，肝中所寄之相火亦虛，因而氣化下陷，濕寒下注而為白帶。故重用黃耆以補肝氣，乾薑以助相火，白朮扶土以勝濕，牡蠣收澀以固下，更加以當歸之溫滑，與黃耆並用，則氣血雙補，且不至有收澀太過之弊（在下者因而竭之），甘草之甘緩，與乾薑並用，則熱力綿長，又不至有過熱僭上之患，所以服之有捷效也。

又《紹興醫學報》載有胡適之者，以勤力用功過度，得消渴證，就治於京都協和醫院，西醫云是糖尿證，不可為矣。胡君歸，殊焦灼，蓋因西醫某素有名，信其言之必確也。其友謂可請中醫一治，胡謂中醫無科學統係，殊難信用。友曰「此證西醫已束手，與其坐以待斃，曷必不屑一試也」。胡勉從之，中醫至，診畢曰「此易事也，可服黃耆湯，若不愈惟我是問」。胡服後，病竟霍然愈。後西醫聞之，托人介紹向中醫取所用黃耆化驗，此時正在化驗中也。

按：爐心有氫氣，人腹中亦有氫氣，黃耆能引氫氣上達於肺，與吸入之氧氣相合而化水，又能鼓胃中津液上行，又能統攝下焦氣化，不使小便頻數，故能治消渴。三期二卷有玉液湯、滋腴飲，皆治消渴之方，原皆重用黃耆。

黃耆入湯劑，生用即是熟用，不必先以蜜炙。若丸散劑中宜熟用者，蜜炙可也。若用治瘡瘍，雖作丸散，亦不宜炙用。王洪緒《外科證治全生集》曾詳言之。至於生用發汗、熟用止汗之說，尤為荒唐。蓋因氣分虛陷而出汗者，服之即可止汗，因陽強陰虛而出汗者，服之轉大汗汪洋。若氣虛不能逐邪外出者，與發表藥同服，亦能出汗。是知其止汗與發汗不在生、熟，亦視用之者何如耳。

【附錄】

柳河仲曉秋來函：

庚午季秋，偶覺心中發涼，服熱藥數劑無效。遷延旬日，陡覺涼氣上衝腦際，頓失知覺，移時始蘇。日三四發。屢次延醫診治不愈。乃病不犯時，心猶清白，遂細閱《衷中參西錄》，忽見夫子治坐則左邊下墜，睡時不敢向左側之醫案，斷為肝虛。且謂黃耆與肝木有同氣相求之妙用，遂重生黃耆治癒。乃恍悟吾睡時亦不能左側，知病源實為肝虛，其若斯之涼者，肝中所寄之相火衰也。爰用生箭耆二兩，廣條桂五錢，因小便稍有不利，又加椒目五錢。煎服一劑，病大見愈。遂即原方連服數劑，痊愈。

〈 第 二 卷 〉

山萸肉解

山萸肉味酸性溫。大能收斂元氣，振作精神，固澀滑脫。因得木氣最厚，收澀之中兼具條暢之性，故又通利九竅，流通血脈，治肝虛自汗，肝虛脅疼腰疼，肝虛內風萌動，且斂正氣而不斂邪氣，與他酸斂之藥不同，是以《本經》謂其逐寒濕痺也。其核與肉之性相反，用時務須將核去淨，近閱醫報有言核味澀，性亦主收斂，服之恆使小便不利，椎破嘗之，果有有澀味者，其說或可信。

山茱萸得木氣最厚，酸收之中，大具開通之力，以木性喜條達故也。《本經》謂主寒濕痺，諸家本草，多謂其能通利九竅，其性不但補肝，而兼能利通氣血可知，若但視為收澀之品，則淺之乎視山茱萸矣。

【附案】

友人毛仙閣之哲嗣印棠，年二十餘。於孟冬得傷寒證，調治十餘日，表裡皆解。忽遍身發熱，頓飯頃，汗出淋漓熱頓解，須臾又熱又汗，若是兩晝夜，勢近垂危。倉猝迎愚診治，及至見汗出，渾身如洗，目上竄不露黑睛，左脈微細模糊，按之即無，此肝膽虛極，而元氣欲脫也。蓋肝膽虛者，其病象為寒熱往來，此證之忽熱忽汗，亦即寒熱往來之意。急用淨萸肉二兩煎服，熱與汗均愈其半，遂為疏方用淨萸肉二兩，生龍骨、生牡蠣各一兩，生杭芍六錢，野臺參四錢，炙甘草二錢（此方載三期一卷，名來復湯），連服兩劑病若失。

一人年四十餘，外感痰喘，愚為治癒。但脈浮力微，按之即無。愚曰「脈象無根，當服峻補之劑，以防意外之變」。病家謂病人從來不受補藥，服之則發狂疾，峻補之藥，實不敢用。愚曰「既畏補藥如是，備用亦可」。病家根據愚言。遲半日忽發喘逆，又似無氣以息，汗出遍體，四肢逆冷，身軀後挺，危在頃刻。急用淨萸肉四兩，爆火煎一沸，即飲下，汗與喘皆微止。又添水再煎數沸飲下，病又見愈。復添水將原渣煎透飲下，遂汗止喘定，四肢之厥逆亦回。

鄰村李子勳，年五旬，偶相值，求為診脈，言前月有病服藥已愈，近覺身體清爽未知脈象何如。診之，其脈尺部無根，寸部搖搖有將脫之勢，因其自謂病癒，若遽悚以危語，彼必不信，姑以脈象平和答之。遂秘謂其侄曰「令叔之脈甚危險，當服補斂之藥，以防元氣之暴脫」。其侄向彼述之，果不相信。後二日，忽遣人迎愚，言其驟然眩暈不起，求為診治。既至見其周身顫動，頭上汗出，言語錯亂，自言心怔忡不能支持，其脈上盛下虛之象較前益甚，急投以淨萸肉兩半，生龍骨、生牡蠣、野臺參、生赭石各五錢，一劑即愈。繼將萸肉改成一兩，加生山藥八錢，連服數劑，脈亦復常。

按：此方赭石之分量，宜稍重於臺參。

鄰村李志綰，年二十餘，素傷煙色，偶感風寒，醫者用表散藥數劑治癒。間日，忽遍身冷汗，心怔忡異常，自言氣息將斷，急求為調治。診其脈浮弱無根，左右皆然。愚曰「此證雖危易治，得萸肉數兩，可保無虞」。急取淨萸肉四兩，



人參五錢。先用莢肉二兩煎數沸，急服之，心定汗止，氣亦接續，又將人參切作小塊，用所餘莢肉煎濃湯，送下病若失。

邑許孝子莊趙叟，年六十三歲，於仲冬得傷寒證，痰喘甚劇。其脈浮而弱，不任循按，問其平素，言有勞病，冬日恆發喘嗽。再三籌思，強治以小青龍湯去麻黃，加杏仁、生石膏，為其脈弱，俾預購補藥數種備用。服藥後喘稍愈，再診其脈微弱益甚，遂急用淨莢肉一兩，生龍骨、生牡蠣各六錢，野臺參四錢，生杭芍三錢為方，皆所素購也。煎湯甫成，此時病人呼吸俱微，自覺氣息不續，急將藥飲下，氣息遂能接續。

又其族弟某，年四十八，大汗淋漓，數日不止，衾褥皆濕，勢近垂危，詢方於愚。俾用淨莢肉二兩，煎湯飲之，汗遂止。翌晨，迎愚診視，其脈沉遲細弱，而右部之沉細尤甚，雖無大汗，遍體猶濕。疑其胸中大氣下陷，詢之，果覺胸中氣不上升，有類巨石相壓，乃恍悟前次之大汗淋漓，實係大氣陷後，衛氣無所統攝而外泄也，遂用生黃耆一兩，莢肉、知母各三錢，一劑胸次豁然，汗亦盡止，又服數劑以善其後。

按：此證若非胸中大氣虛陷，致外衛之氣無所統攝而出汗者，投以生黃耆一兩，其汗出必愈甚，即重用炙黃耆，汗出亦必愈甚也。然此中理蘊甚深，三期四卷升陷湯後，發明大氣之作用，大氣下陷之病狀，及黃耆所以能止汗之理，約數千言，茲不勝錄也。

一妊婦得霍亂證，吐瀉約一晝夜，病稍退，胎忽滑下。覺神氣頓散，心搖搖似不能支持，迎愚診視。既至則病勢大革，殮服在身，將昇諸床，病家欲竟不診視。愚曰「一息猶存，即可挽回」。診之脈若有若無，氣息奄奄，呼之不應，取藥無及。其東鄰為愚表兄劉玉珍，家有購藥二劑未服，亦係愚方，共有莢肉六錢，急揀出煎湯灌下，氣息稍大，呼之能應。又購取淨莢肉、生山藥各二兩，煎湯一大碗，徐徐飲下，精神頓復。

鄰村黃龍井莊周某，年三十許。當大怒之後，漸覺腿疼，日甚一日，兩月之後，臥床不能轉側。醫者因其得之惱怒之餘，皆用舒肝理氣之藥，病轉加劇。診其脈左部微弱異常，自言凡疼甚之處皆熱，恍悟《內經》調過怒則傷肝，所謂傷肝者，乃傷肝經之氣血，非必鬱肝經之氣血也，氣血傷則虛弱隨之，故其脈象如是也。其所以腿疼且覺熱者，因肝主疏泄，中藏相火，肝虛不能疏泄，相火即不能逍遙流行於周身，以致鬱於經絡之間，與氣血凝滯而作熱作疼，所以熱劇之處疼亦劇也。投以淨莢肉一兩，知母六錢，當歸、丹參、乳香、沒藥各三錢（方載三期四卷名曲直湯），連服十劑，熱消疼止，步履如常。

邑友人丁翊仙之令堂，年近七旬，陡然腿疼，不能行動，夜間疼不能寐。翊仙驅車迎愚，且謂脈象有力，當是火鬱作痛，及診其脈，大而且弦，問其心中，亦無熱意。愚曰「此脈非有火之象，其大也乃脾胃過虛，真氣外泄也。其弦也肝

膽失和，木盛侮土也」。為疏方用淨萸肉、白朮各六錢，人參、白芍各三錢，當歸、陳皮各二錢，厚朴、乳香、沒藥各錢半，煎服數劑痊愈。

邑六間房村王某，年二十餘，資稟羸弱，又耽煙色，於秋初病瘧，兩旬始愈。一日大便滑瀉數次，頭面汗出如洗，精神頹廢，昏昏似睡，其脈上盛下虛，兩寸搖搖，兩尺無根，數至七至，延醫二人，皆不疏方。愚後至為擬方：淨萸肉、大熟地各一兩，生山藥、生龍骨、生牡蠣各六錢，茯苓、生杭芍各三錢，烏附子一錢（三期一卷載此方名既濟湯），服一劑而醒，又服兩劑遂復初。

滄州友人張壽田，曾治一少年，素患心疼，發時晝夜號呼。醫者屢用藥開通，致大便滑瀉，虛氣連連下泄，汗出如洗，目睛上泛，心神驚悸，周身暈動，須人手按，而心疼如故。延醫數人，皆不疏方。壽田投以前方，將萸肉倍作二兩，連進兩劑，諸病皆愈，心疼竟從此除根。

壽田之侄甲升，從愚學醫。曾治一人，年三十餘，於季冬負重貿易，日行百里，歇息時又屢坐寒地，後覺腿疼不能行步，浸至臥床不能轉側，周身筋骨似皆痿廢，延醫調治罔效。甲升治以曲直湯，方中當歸、丹參、乳香、沒藥皆改用四錢，去知母，加黃耆一兩，服至五劑後，腿即不疼，又服十餘劑痊愈。

奉天開原友人，田聘卿之夫人，年五十餘，素有心疼證，屢服理氣活血之藥，未能除根。一日反覆甚劇，服藥數劑，病未輕減。聘卿見既濟湯後，載有張壽田所治心疼醫案，心有會悟，遂用其方加沒藥、五靈脂各數錢，連服數劑痊愈，至

此二年，未嘗反覆。由是觀之，萸肉誠得木氣最厚，故味雖酸斂，而性仍條暢，凡肝氣因虛不能條暢而作疼者，服之皆可奏效也。

按：山茱萸酸斂之性，以之止汗固脫，猶在人意中，以之治心腹肢體疼痛，誠出人意外。然山茱萸主寒濕痹，《本經》原有明文，凡心腹肢體有所疼痛，皆其氣血之痹而不行也。遵《本經》之旨以制方，而果能投之即效，讀本草者，曷弗注意於《本經》哉！

山萸肉之性，又善治內部血管，或肺絡破裂，以致咳血吐血久不愈者。曾治滄州路家莊馬氏少婦，咳血三年，百藥不效，即有愈時，旋復如故。後愚為診視，其夜間多汗，遂用淨萸肉、生龍骨、生牡蠣各一兩，俾煎服，擬先止其汗，果一劑汗止，又服一劑咳血亦愈。蓋從前之咳血久不愈者，因其肺中之絡，或胃中血管有破裂處，萸肉與龍骨、牡蠣同用，以澀之、斂之，故咳血亦隨之愈也。又治本村表弟張權，年三十許，或旬日，或浹辰之間，必吐血數口，浸至每日必吐，亦屢治無效，其脈近和平，微有芤象，亦治以此方，三劑痊愈。後又將此方加三七細末三錢，煎藥湯送服，以治咳血吐血之久不愈者，約皆隨手奏效。因將其方登於三期二卷名補絡補管湯，若遇吐血之甚者，宜再加赭石五六錢，與前三味同煎湯，送服三七細末更效。

山萸肉之性，又善熄內風。族家嫂，產後十餘日，周身汗出不止，且四肢發搖，此因汗出過多而內風動也。急用淨萸肉、生山藥各二兩，俾煎湯服之，兩劑愈。

至外感之邪不淨而出汗者，亦可重用山萸肉以斂之。邑進士張日睿之子，年十八九，因傷寒服表藥太過，汗出不止，心中怔忡，脈洪數不實，大便數日未行。為疏方用淨萸肉、生山藥、生石膏各一兩，知母、生龍骨、生牡蠣各六錢，甘草二錢，煎服兩劑痊愈。

門生萬澤東，曾治一壯年男子，因屢經惱怒之餘，腹中常常作疼。他醫用通氣、活血、消食、祛寒之藥，皆不效。診其脈左關微弱，知係怒久傷肝，肝虛不能疏泄也。遂用淨萸肉二兩，佐以當歸、丹參、柏子仁各數錢，連服數劑，腹疼遂愈。後凡遇此等證，投以此方皆效。

山茱萸之核原不可入藥，以其能令人小便利也。而僻處藥坊所賣山茱萸，往往核與肉參半，甚或核多於肉。即方中注明去淨核，亦多不為去，誤人甚矣。斯編重用山茱萸治險證之處甚多。凡用時愚必自加檢點，或說給病家檢點，務要將核去淨，而其份量還足，然後不至誤事。又山萸肉之功用，長於救脫，而所以能固脫者，因其味之甚酸，然間有嘗之微有酸味者，此等萸肉實不堪用。用以治險證者，必須嘗其味極酸者然後用之，方能立建奇效。

白朮解

白朮性溫而燥，氣香不竄，味苦微甘微辛。善健脾胃，消痰水，止泄瀉。治脾虛作脹，脾濕作渴，脾弱四肢運動無力，甚或作疼。與涼潤藥同用，又善補肺；與升散藥同用，又善調肝；與鎮安藥同用，又善養心；與滋陰藥同用，又善補腎，為後天資生之要藥。故能於肺、肝、腎、心四臟皆能有所補益也。

【附案】

一婦人年三十許，泄瀉半載，百藥不效，脈象濡弱，右關尤甚，知其脾胃虛也，俾用生白朮軋細焙熟，再用熟棗肉六兩，和為小餅，爐上炙乾，當點心服之，細細嚼咽，未盡劑而愈。

一婦人因行經下血不止，服藥旬餘無效，勢極危殆。診其脈象浮緩，按之即無，問其飲食不消，大便滑瀉。知其脾胃虛甚，中焦之氣化不能健運統攝，下焦之氣化因之不固也。遂於治下血藥中加白朮一兩，生雞內金一兩，服一劑血即止，又服數劑以善其後。

一室女腿疼，幾不能步，治以三期四卷健運湯而愈。次年舊病復發，又兼腰疼，再服前方不效。診其脈，右關甚濡弱，詢其飲食甚少，遂用白朮六錢，當歸、陳皮各二錢，厚朴、乳香、沒藥各錢半（載三期四卷名振中湯），服後飲食加多，至旬餘，腰腿之疼痊愈。

一媪年過六旬，陡然腿疼不能行動，夜間疼不能寐。其左部之脈大而弦，右部之脈大而浮，重診之似有力非真有力，問其心中不覺涼熱。乃知此非有火之脈，其大而浮也，乃脾胃過虛，真氣外泄也；其大而弦也，乃肝膽失和，木盛侮土也。治以前方，加人參、白芍、淨莢肉各數錢，補脾胃之虛，即以抑肝膽之盛，數劑而愈。

一人年二十二，喘逆甚劇，脈數至七至，投以滋陰兼納氣降氣之劑，不效。後於方中加白朮數錢，將藥煎出，其喘促亦至極點，不能服藥，將藥重溫三次，始強服下，一劑喘即見輕，連服數劑痊愈。後屢用其方以治喘證之劇者，多有效驗。

一少年咽喉常常發乾，飲水連連不能解渴。診其脈微弱遲濡，當係脾胃濕寒，不能健運，以致氣化不升也。投以四君子湯加乾薑、桂枝尖，方中白朮重用兩許，一劑其渴即止。

赭石解

赭石色赤，性微涼，能生血兼能涼血，而其質重墜，又善鎮逆氣，降痰涎，止嘔吐，通燥結，用之得當，能建奇效。其原質為鐵氧化合而成，其結體雖堅而層層如鐵鏽（鐵鏽亦鐵氧化合），生研服之不傷腸胃，即服其稍粗之末亦與腸胃無損。且生服則氧氣純全，大能養血，故《本經》謂其治赤沃漏下。《日華諸家本草》謂其治月經不止也。若煨用之即無斯效，煨之復以醋淬之，尤非所宜。且性甚和平，雖降逆氣而不傷正氣，通燥結而毫無開破，原無需乎煨也。其形為薄片，迭迭而成，一面點點作凸形，一面點點作凹形者，方堪入藥。

赭石為鐵氧化合，性同鐵鏽，原不宜煨。徐靈胎謂若煨之復用醋淬，即能傷肺。此書諸方中有赭石者，皆宜將生赭石軋細用之。

【附案】

鄰村遲某，年四十許，當上腕處發瘡，大如核桃，破後調治三年不愈。瘡口大如錢，自內潰爛，循脅漸至背後，每日自背後排擠至瘡口流出膿水若干。求治於愚，自言患此瘡後三年未嘗安枕，強臥片時，即覺有氣起自下焦，上逆衝心。愚曰「此即子瘡之病根也」。俾用生芡實一兩，煮濃汁送服生赭石細末五錢，遂可安臥。又服數次，徹夜穩睡。蓋氣上逆者乃衝氣之上衝，用赭石以鎮之，芡實以斂之，衝氣自安其宅也。繼用活絡效靈丹，加生黃耆、生赭石各三錢煎服，日進一劑，半月痊愈。



鄰村毛姓少年，於傷寒病瘥後，忽痰涎上壅，杜塞咽喉，幾不能息。其父知醫，用手大指點其天突穴（宜指甲貼喉，指端著穴，向下用力，勿向內用力），息微通，急迎愚調治。遂用香油二兩，燉熱調麝香一分灌之，旋灌旋即流出痰涎若干。繼用生赭石一兩，人參六錢，蘇子四錢，煎湯，徐徐飲下，痰涎頓開。

天津楊柳青陸軍連長周良坡夫人，年三十許，連連嘔吐，五六日間，勺水不存，大便亦不通行，自覺下腕之處疼而且結，凡藥之有味者，入口即吐，其無味者，須臾亦復吐出，醫者辭不治。後愚診視其脈有滑象，上盛下虛，疑其有妊，詢之月信不見者五十日矣，然結證不開，危在目前，《內經》謂「有故無殞亦無殞也」。遂單用赭石二兩，煎湯飲下，覺藥至結處不能下行，復返而吐出。繼用赭石四兩，又重羅出細末兩許，將餘三兩煎湯，調細末服下，其結遂開，大便亦通，自此安然無恙，至期方產。

或問「赭石《名醫別錄》謂其墮胎，今治妊婦竟用赭石如此之多，即幸而奏效，豈非行險之道乎？」答曰「愚生平治病，必熟籌其完全而後為疏方，初不敢為孤注之一擲也。赭石質重，其鎮墜之力原能下有形滯物，若胎至六七個月時，服之或有妨礙，至受妊之初，因惡阻而成結證，此時其胞室之中不過血液凝結，赭石毫無破血之弊，且有治赤沃與下血不止之效，重用之亦何妨乎？況此證五六日間，勺飲不能下行，其氣機之上逆，氣化之壅滯，已至極點，以赭石以降逆開壅，不過調臟腑之氣化使之適得其平，又何至有他虞乎？」

或曰「赭石用於此證不虞墜胎，其理已昭然矣，至《本經》謂赭石治赤沃，《日華》謂其治下血不止，不知重墜下行之藥，何以有此效乎」？答曰「此理甚深，欲明此理，當溯本窮源，先知人身之元氣為何氣。蓋凡名之為氣，雖無形而皆有質，若空氣扇之則成風，拋物其中能阻物力之動轉是其質也。人臟腑中之氣，大抵類斯，惟元氣則不惟無形，而並無質，若深究其果係何氣，須以天地間之氣化徵之。夫天地間無論氮、氧、碳、電諸氣，皆有質，獨磁氣無質，故諸氣皆可取而貯之，而磁氣不能貯也，諸氣皆可設法阻之（如電氣可阻以玻璃），而磁氣不能阻也（磁氣無論隔何物皆能吸鐵）。是以北極臨地之中央，下蓄磁氣以維繫全球之氣化，丹田為人之中央，內藏元氣以維繫全身之氣化。由是觀之，磁氣者即天地之元氣，而人身之元氣，亦即天地間之磁氣類也。其能與周身之血相係戀者，因血中含有鐵銹，猶之磁石吸鐵之理也。赭石為鐵氧化合而成，服之能補益血中鐵銹，而增長其與元氣係戀之力，所以能治赤沃及下血不止也。

戊寅年秋，穆蔭喬君之如夫人金女士。患經漏淋漓不止者三閱月，延醫多人，百方調治，寒熱補澀均無效，然亦不加劇，並無痛苦。予用壽師固衝湯加重分量，服數劑亦無效，又以《金鑒》地榆苦酒湯試之，終不應，技已窮矣。忽憶壽師此說，乃以磁石細末八錢，生赭石細末五錢，加入滋補藥中，一劑知，二劑已。是知藥能中病，真有立竿見影之妙。蓋赭石既能補血中鐵質，以與人身元氣相係戀，而磁石吸鐵能增加人身元氣之吸力，且色黑入腎，黑能止血。磁石、赭石二者同

用，實有相得益彰之妙。藥雖平易，而中含科學原理甚矣。中醫之理實包括西醫，特患人不精心以求之耳。受業張方與謹注。

廣平縣教員呂子融夫人，年二十餘，因惡阻嘔吐甚劇。九日之間飲水或少存，食物則盡吐出。時方歸寧，其父母見其病劇，送還其家，醫者皆以為不可治。時愚初至廣平寓學舍中，子融固不知愚能醫也。因曉之曰「惡阻焉有不可治者，亦視用藥何如耳」。子融遂延為診視，脈象有力，舌有黃苔，詢其心中發熱，知係夾雜外感，遂先用生石膏兩半，煎湯一茶杯，防其嘔吐，徐徐溫飲下，熱稍退。繼用生赭石二兩，煎湯一大茶杯，分兩次溫飲下，覺行至下脘作疼，不復下行轉而上逆吐出，知其下脘所結甚堅，原非輕劑所能通。亦用生赭石細末四兩，從中再羅出極細末一兩，將餘三兩煎湯，送服其極細末，其結遂開，從此飲食順利，及期而產。

一室女，中秋節後，感冒風寒，三四日間，胸膈滿悶，不受飲食，飲水一口亦吐出，劇時恆以手自撓其胸。脈象滑實，右部尤甚，遂單用生赭石細末兩半，俾煎湯溫飲下，頓飯頃仍吐出。蓋其胃口皆為痰涎壅滯，藥不勝病，下行不通復轉而吐出也。遂更用赭石四兩，煎湯一大碗，分三次陸續溫飲下，胸次遂通，飲水不吐。翌日，脈象洪長，其舌苔從先微黃，忽變黑色，又重用白虎湯連進兩大劑，每劑用生石膏四兩，分數次溫飲下，大便得通而愈。

一媪年過六旬。當孟夏晨飯時，忽聞鄉鄰有鬥者，出視之，見強者凌弱太過，心甚不平，又兼飯後有汗受風，遂得溫病，表裡俱熱，心滿腹疼，飲水須臾仍吐出。七八日間，大便不通，脈細數，按之略實。自言心中煩渴，飲水又不能受。從前服藥止吐，其藥亦皆吐出。若果飲水不吐，猶可望愈。愚曰「易耳」。遂用赭石、萸仁各二兩，蘇子六錢，又加生石膏二兩，野臺參五錢，煎湯一大碗，俾分三次溫飲下。晚間服藥，翌晨大便秘通而愈。當其服藥之先，曾俾用淨莢肉二兩煎湯，以備下後心中怔忡及虛脫，迨大便秘通後，心中微覺怔忡，服之而安。

奉天小南門里，連奉澡塘司張曲玉軒，年三十餘，得瘟病，兩三日噁心嘔吐，五日之間飲食不能下嚥，來院求為診治。其脈浮弦，數近六至，重按無力，口苦心熱，舌苔微黃。因思其脈象浮弦者，陽明與少陽合病也，二經之病機相並上衝，故作嘔吐也，心熱口苦者，內熱已實也，其脈無力而數者，無穀氣相助又為內熱所迫也。因思但用生赭石煮水飲之，既無臭味，且有涼鎮之力，或可不吐。遂用生赭石二兩，煎水兩茶杯，分二次溫飲下，飲完仍復吐出，病人甚覺惶恐，加以久不飲食，形狀若莫可支持。愚曰「無恐，再用藥末數錢，必能立止嘔吐」。遂單用生赭石細末五錢，開水送服，覺噁心立止，須臾胸次通暢，進薄粥一杯，下行順利。從此飲食不復嘔吐，而心中猶發熱，舌根腫脹，言語不利，又用生石膏一兩，丹參、乳香、沒藥、連翹各三錢，連服兩劑痊愈。

癸亥秋，愚在奉天同善堂醫學校講藥性，有學生李慶霖之族姊來奉，病於旅邸。屢經醫治無效，病勢危急，慶霖求為診治。其周身灼熱，脈象洪實，心中煩躁怔忡，飲食下嚥即嘔吐，屢次所服之藥，亦皆嘔吐不受。視其舌苔黃濃，大便數日未行，知其外感之熱已入陽明之府，又挾胃氣上逆，衝氣上衝也。為疏方，用生赭石細末八錢，生石膏細末兩半，萸仁一兩，玄參、天冬各六錢，甘草二錢，將後五味煎湯一大茶杯，先用開水送服赭石細末，繼將湯藥服下，遂受藥不吐，再服一劑痊愈。

拙著《醫學衷中參西錄》有醴泉飲方，治虛勞發熱，或喘或嗽，脈數而弱。方用生山藥一兩，大生地五錢，人參、玄參、天冬、生赭石各四錢，牛蒡子三錢，甘草二錢。初制此方時原無赭石有丹參三錢，以運化人參之補力，用之多效。後治一少婦信水數月不行，時作寒熱，乾嗽連連，且兼喘逆，胸膈滿悶，不思飲食，脈數幾至七至。治以有丹參原方不效，遂以赭石易丹參，一劑嗽與喘皆愈強半，胸次開通，即能飲食。又服數劑，脈亦和緩，共服二十劑，諸病痊愈。後凡治婦女月閉血枯，浸至勞嗽，或兼滿悶者，皆先投以此湯。俾其飲食增加，身體強壯，經水自通。間有瘀血暗阻經道，或顯有癥瘕可徵者，繼服拙擬理衝湯丸（皆在三期八卷），以消融之，則婦女無難治之病矣。

瀋陽商人婁順田，年二十二，虛勞咳嗽，形甚羸弱，脈數八至，按之即無。細詢之，自言曾眠熱炕之上，晨起覺心中發熱，從此食後即吐出，夜間咳嗽甚劇，

不能安寢，因二十餘日寢食俱廢，遂覺精神恍惚，不能支持。愚聞之，知脈象雖危，仍係新證，若久病至此，誠難挽回矣。遂投以醴泉飲，為其嘔吐將赭石改用一兩，一劑吐即止，可以進食，嗽亦見愈，從前多日未大便，至此大便亦通下。如此加減服之，三日後，脈數亦見愈，然猶六至餘，心中猶覺發熱。遂將玄參、生地皆改用六錢，又每日於午時用白蔗糖沖水，送服阿斯必林七厘許，數日諸病皆愈，脈亦復常。

瀋陽蘇惠堂年三十許，勞嗽二年不愈，動則作喘，飲食減少，更醫十餘人，服藥數百劑，分毫無效，羸弱轉甚。其姊丈李生在京師見《醫學衷中參西錄》，大加賞異，急郵函俾其來院診治。其脈數六至，雖細弱仍有根柢，知其可治，自言上焦恒覺發熱，大便四五日一行，時或乾燥，投以醴泉飲。為其便遲而燥，赭石改用六錢，又加雞內金二錢，恐其病久臟腑經絡多瘀滯也。數劑後，飯量加增，心中仍有熱時，大便已不燥，間日一行。遂去赭石二錢，加知母二錢，俾於晚間服湯藥後，用白蔗糖水送服阿斯必林四分瓦之一，得微汗後，令於日間服之，不使出汗，數日不覺發熱，脈亦復常。惟咳嗽未能痊愈，又用幾阿蘇六分，薄荷冰四分，和以綠豆粉為丸，梧桐子大，每服三丸，日兩次，湯藥仍照方服之，五六日後，咳嗽亦愈，身體從此康健。

人參可以救氣分之脫，至氣欲上脫者，但用人參轉有助氣上升之弊，必與赭石並用，方能引氣歸原，更能引人參補益之力下行，直至湧泉。友人毛仙閣次男

媳，勞心之後，兼以傷心，忽喘逆大作，迫促異常。仙閣知醫，自治以補斂元氣之藥，覺胸中窒礙不能容受，更他醫以為外感，投以小青龍湯喘益甚。延愚診視，其脈浮而微數，按之即無知為陰陽兩虛之證。蓋陽虛則元氣不能自攝，陰虛而肝腎又不能納氣，故其喘若是之劇也。遂用赭石、龍骨、牡蠣、萸肉各六錢，野臺參、白芍各四錢，山藥、芡實各五錢，蘇子二錢，惟蘇子炒熟，餘皆生用（方載三期二卷名參赭鎮氣湯），煎服後，未及覆杯，病人曰「吾有命矣」。詢之，曰「從前呼吸惟在喉間，今則轉落丹田矣」。果一劑病癒強半，又服數劑痊愈。後用此方治內傷之喘，愈者不勝紀。

參、赭並用，不但能納氣歸原也，設如逆氣上干，填塞胸臆，或兼嘔吐，其證之上盛下虛者，皆可參、赭並用以治之。友人毛仙閣治一婦人，胸次鬱結，飲食至胃不能下行，時作嘔吐，其脈浮而不任重按。仙閣用赭石細末六錢，濃煎人參湯送下，須臾腹中如爆竹之聲，胸次、胃中俱覺通豁，從此飲食如常，傳為異事。

一婦人，年近五旬，得溫病，七八日表裡俱熱，舌苔甚薄作黑色，狀類舌斑，此乃外感兼內虧之證。醫者用降藥兩次下之，遂發喘逆。令其子兩手按其心口，即可不喘。須臾又喘，又令以手緊緊按住，喘又少停。診其脈尺部無根，寸部搖搖，此將脫之候也。時當仲夏，俾用生雞子黃四枚，調新汲井泉水服之，喘稍定。

可容取藥。遂用赭石細末二錢同生雞子黃二枚，溫水調和服之，喘遂愈，脈亦安定。繼服參赭鎮氣湯以善其後。

友人高夷清曾治一人，上焦滿悶，不能飲食，常覺有物窒塞。醫者用大黃、萸實陷胸之品十餘劑，轉覺胸中積滿，上至咽喉，飲水一口即溢出。夷清用赭石二兩，人參六錢為方煎服，頓覺窒塞之物降至下焦。又加當歸、肉苁蓉，再服一劑，降下瘀滯之物若干，病若失。

《內經》謂「陽明厥逆，喘咳，身熱，善驚，衄、嘔血」。黃坤載衍《內經》之旨，謂血之失於便溺者，太陰之不升也；亡於吐衄者，陽明之不降也。是語深明《內經》者也。蓋陽明胃氣，以息息下降為順，時或不降，則必壅滯轉而上逆，上逆之極，血即隨之上升而吐衄作矣。治吐衄之證，當以降胃為主，而降胃之藥，實以赭石為最效。然胃之所以不降，有因熱者，宜降之以赭石，而以萸仁、白芍諸藥佐之；其熱而兼虛者，可兼佐以人參；有因涼者宜降以赭石而以乾薑、白芍諸藥佐之（因涼猶用白芍者，防乾薑之熱侵肝膽也，然吐衄之證，由於胃氣涼而不降者甚少）；其涼而兼虛者，可兼佐以白朮；有因下焦虛損，衝氣不攝上沖胃氣不降者，宜降以赭石而以生山藥、生芡實諸藥佐之；有因胃氣不降，致胃中血管破裂，其證久不愈者，宜降以赭石，而以龍骨、牡蠣、三七諸藥佐之（諸方及所治之案，皆詳於三期二卷），無論吐衄之證，種種病因不同，疏方皆以赭石為主，而隨證制宜，佐以相當之藥品，吐衄未有不愈者。



近治奉天商埠警察局長張厚生，年近四旬，陡然鼻中衄血甚劇，脈象關前洪滑，兩尺不任重按，知係上盛下虛之證，自言頭目恒不清爽，每睡醒舌乾無津，大便甚燥，數日一行。為疏方赭石、生地黃、生山藥各一兩，當歸、白芍、生龍骨、生牡蠣、懷牛膝各五錢，煎湯送服早三七細末二錢（凡用生地治衄血者，皆宜佐以三七，血止後不至瘀血留於經絡），一劑血頓止。後將生地減去四錢，加熟地、枸杞各五錢，連服數劑，脈亦平和。

傷寒下早成結胸，瘟疫未下亦可成結胸。所謂結胸者，乃外感之邪與胸中痰涎互相凝結，滯塞氣道，幾難呼吸也。仲景有大陷胸湯丸，原為治此證良方，然因二方中皆有甘遂，醫者不敢輕用，病家亦不敢輕服，一切利氣理痰之藥，又皆無效，故恒至束手無策。向愚治此等證，俾用新炒萆仁四兩，搗碎煮湯服之，恒能奏效。後擬得一方，用赭石、萆仁各二兩，蘇子六錢（方載三期六卷，名蕩胸湯），用之代大陷胸湯丸，屢試皆能奏效。若其結在胃口，心下滿悶，按之作疼者，係小陷胸湯證，又可將方中分量減半以代小陷胸湯，其功效較小陷胸湯尤捷。自擬此方以來，救人多矣，至寒溫之證已傳陽明之府，卻無大熱，惟上焦痰涎壅滯，下焦大便不通者，亦可投以此方（分量亦宜斟酌少用），上清其痰，下通其便，誠一舉兩得之方也。

至寒溫之證，不至結胸及心下滿悶，惟逆氣挾胃熱上衝，不能飲食，並不能受藥者，宜赭石與清熱之藥並用。曾治奉天大東關安家靴鋪安顯之夫人，年四十

餘，臨產雙生，異常勞頓，噁心嘔吐，數日不能飲食，服藥亦恒嘔吐，精神昏憤，形勢垂危，群醫辭不治。延愚診視，其脈洪實，面有火色，舌苔黃厚，知係產後溫病，其嘔吐若是者，陽明府熱已實，胃氣因熱而上逆也。遂俾用玄參兩半，赭石一兩，同煎服，一劑即熱退嘔止，可以受食。繼用玄參、白芍、連翹以清其餘熱，病遂痊愈。至放膽用玄參而無所顧忌者，以玄參原宜於產乳，《本經》有明文也。

下有實寒，上有浮熱之證，欲用溫熱之藥以祛其寒，上焦恒格拒不受，惟佐以赭石使之速於下行，直達病所，上焦之浮熱轉能因之下降。曾治鄰村星馬村劉某，因房事後恣食生冷，忽然少腹抽疼，腎囊緊縮，大便不通，上焦兼有煩熱。醫者投以大黃附子細辛湯，上焦煩熱益甚，兩脅疼脹，便結囊縮，腹疼如故。病家甚覺惶恐，求為診視。其脈弦而沉，兩尺之沉尤甚。先用醋炒蔥白熨其臍及臍下，腹中作響，大有開通之意，囊縮腹疼亦見愈，便仍未通。遂用赭石二兩，烏附子五錢，當歸、蘇子各一兩，煎湯飲下，即覺藥力下行，過兩句鐘俾煎渣飲之，有頃降下結糞若干，諸病皆愈。

膈食之證，千古難治之證也。《傷寒論》有旋覆代赭石湯，原治傷寒汗吐下解後，心下痞硬噫氣不除。周揚俊、喻嘉言皆謂治膈證甚效。然《本經》謂旋覆花味鹹，若真好旋覆花實鹹而兼有辛味（敝邑武帝臺汗所產旋覆花鹹而辛），今藥坊間所鬻旋覆花皆甚苦，實不堪用。是以愚治膈證，恒用其方去旋覆花，將赭

石加重，其衝氣上衝過甚，兼大便甚乾結者，赭石恒用至兩許，再加當歸、柿霜、天冬諸藥以潤燥生津，且更臨時制宜，隨證加減，治癒者不勝錄（三期二卷載治癒之案六則，並詳記其加減諸法）。蓋此證因胃氣衰弱，不能撐懸賁門，下焦衝氣又挾痰涎上沖，以杜塞之，是以不受飲食。故用人參以壯胃氣，氣壯自能撐懸賁門，使之寬展。赭石以降衝氣，衝降自挾痰涎下行，不慮杜塞，此方之所以效也。若藥房間偶有鹹而且辛之旋覆花，亦可斟酌加入，然加旋覆花又須少減赭石也。此證有因賁門腫脹，內有瘀血致賁門窄小者，宜於方中加蘇木、廔蟲（俗名土鱉）各二錢。

頭疼之證，西人所謂腦氣筋病也，然恒可重用赭石治癒。近在奉天曾治安東何道尹猶女，年二十餘歲，每日至巳時頭疼異常，左邊尤甚，過午則愈。先經東人治之，投以麻醉腦筋之品不效。後求為診視，其左脈浮弦有力者，係少陽之火挾心經之熱，乘陽旺之時而上升，以衝突腦部也。為疏方赭石、龍骨、牡蠣、龜板、萸肉、白芍各六錢，龍膽草二錢，藥料皆用生者，煎服一劑，病癒強半，又服兩劑痊愈。隔數日，又治員警廳書記鞠一鳴夫人，頭疼亦如前狀，仍投以此方兩劑痊愈。

癲狂之證，亦西人所謂腦氣筋病也，而其腦氣筋之所以病者，因心與腦相通之道路（心有四支血管通腦）為痰火所充塞也。愚恒重用赭石二兩，佐以大黃、朴硝、半夏、鬱金，其痰火甚實者，間或加甘遂二錢（為末送服），輒能隨手奏

效。誠以赭石重墜之力，能引痰火下行，俾心腦相通之路毫無滯礙，則腦中元神，心中識神自能相助為理，而不至有神明昏亂之時也。在奉天曾治洮昌都道尹公子鳳巢，年近三旬，癲狂失心，屢經中西醫治療，四載分毫無效。來院求為診治，其脈象沉實，遂投以上所擬方，每劑加甘遂二錢五分，間兩日一服（凡藥中有甘遂，不可連服），其不服湯藥之二日，仍用赭石、朴硝細末各五錢，分兩次服下，如此旬餘而愈。

癩風之證，千古難治之證也。西人用麻醉腦筋之品，日服數次，恒可強制不發，然亦間有發時，且服之累年不能除根，而此等藥常服，又有昏精神、減食量之弊。庚申歲，在奉天立達醫院因診治此等證，研究數方，合用之，連治數人皆愈。一方用赭石六錢，於朮、酒麴（用神麴則無效，且宜生用）、半夏、龍膽草、生明沒藥各三錢，此係湯劑，一方用真黑鉛四兩，鐵鍋內溶化，再加硫黃細末二兩，撒於鉛上，硫黃皆著，急用鐵鏟拌炒之，鉛經硫黃燒煉，皆成紅色，因拌炒結成砂子，取出涼冷，碾軋成餅者（係未化透之鉛）去之，餘者再用乳鉢研極細末，攪朱砂細末與等分，再少加蒸熟麥麵（以僅可作丸為度），水和作丸，半分量（乾透足半分）。一方用西藥臭剝、臭素、安母紐謨各二錢，抱水過魯拉爾一錢，共研細，攪蒸熟麥麵四錢，水和為丸，桐子大。上藥早晚各服西藥十四丸，午時服鉛硫朱砂丸十二丸，日服藥三次，皆煎湯劑送下，湯藥一劑可煎三次，以遞送三次所服丸藥，如此服藥月餘，癩風可以除根。《內經》云「諸風掉眩，皆

屬於肝」，肝經風火挾痰上衝，遂致腦氣筋頓失其所司，周身抽掣，知覺全無，赭石含有鐵質，既善平肝，而其降逆之力又能協同黑鉛、朱砂以墜痰鎮驚，此其所以效也。而必兼用西藥者，因臭剝、臭素諸藥，皆能強制腦筋以治病之標，俾目前不至反復，而後得徐以健脾、利痰、祛風、清火之藥以剷除其病根也。

方書所載利產之方，無投之必效者，惟方中重用赭石，可應手奏效。族侄蔭棠媳，臨產三日不下，用一切催生藥，胎氣轉覺上逆。因其上逆，心忽會悟，為擬方用赭石二兩，野臺參、當歸各一兩，煎服後，須臾即產下。後用此方，多次皆效，即骨盤不開者，用之開骨盤亦甚效。蓋赭石雖放膽用至二兩，而有人參一兩以補氣，當歸一兩以生血，且以參、歸之微溫，以濟赭石之微涼，溫涼調和，愈覺穩妥也。矧產難者，非氣血虛弱，即氣血壅滯不能下行，人參、當歸雖能補助氣血，而性皆微兼升浮，得赭石之重墜則力能下行，自能與赭石相助為理，以成催生之功也。至於當歸之滑潤，原為利產良藥，與赭石同用，其滑潤之力亦愈增也。此方載三期八卷名大順湯。用此方時，若加衛足花子（炒爆），或丈菊花瓣更效。至二藥之性及其形狀與所以奏效之理，皆詳載於大順湯後，茲不俱錄。

人之廉於飲食者，宜補以健脾之藥，而純用健補脾臟之品，恒多礙於胃氣之降，致生脹滿，是以補脾者宜以降胃之藥佐之，而降胃之品又恒與氣分虛弱者不宜，惟赭石性善降胃，而分毫不傷氣分，且補藥性多溫，易生浮熱，赭石性原不涼而能引熱下行（所以諸家本草多言其性涼）。是以愚慣用赭石，不但以之降胃

也，凡遇有虛熱之證，或其人因熱痰嗽，或其人因熱怔忡，但問其大便不滑瀉者，方中加以赭石，則奏效必速也。

內中風之證，忽然昏倒不省人事，《內經》所謂「血之與氣並走於上」之大厥也。亦即《史記·扁鵲傳》所謂「上有絕陽之絡，下有破陰之紐」之屍厥也。此其風非外來，誠以肝火暴動與氣血相並，上衝腦部（西人剖驗此證，謂腦部皆有死血或兼積水），惟用藥鎮斂肝火，寧熄內風，將其上衝之氣血引還，其證猶可挽回，此《金匱》風引湯所以用龍骨、牡蠣也。然龍骨、牡蠣，雖能斂火熄風，而其性皆澀，欠下達之力，惟佐以赭石則下達之力速，上逆之氣血即可隨之而下。曾治奉天大北關開醋房者杜正卿，忽然頭目眩暈，口眼歪邪，舌強直不能發言，脈象弦長有力，左右皆然，視其舌苔白厚微黃，且大便數日不行，知其證兼內外中風也。俾先用阿斯必林瓦半，白糖水送下以發其汗，再用赭石、生龍骨、生牡蠣、蔓仁各一兩，生石膏兩半，菊花、連翹各二錢，煎湯，趁其正出汗時服之，一劑病癒強半，大便亦通。又按其方加減，連服數劑痊愈。

又治鄰村韓姓媪，年六旬。於外感病癒後，忽然胸膈連心下突脹，腹臍塌陷，頭暈項強，妄言妄見，狀若瘋狂，其脈兩尺不見，關前搖搖無根，數至六至，此下焦虛憊，衝氣不攝，挾肝膽浮熱上干腦部，亂其神明也。遂用赭石、龍骨、牡蠣、山藥、地黃（皆用生者）各一兩，野臺參、淨莢肉各八錢，煎服一劑而愈。又少為加減再服一劑以善其後。

又治鄰村生員劉樹幟，年三十許，因有惱怒，忽然昏倒不省人事，牙關緊閉，唇齒之間有痰涎隨呼氣外吐，六脈閉塞若無，急用作嚏之藥吹鼻中，須臾得嚏，其牙關遂開。繼用香油兩餘燉溫，調麝香末一分灌下，半句鐘時稍醒悟能作呻吟，其脈亦出，至數五至餘，而兩尺弱甚，不堪重按。知其腎陰虧損，故肝膽之火易上衝出。遂用赭石、熟地、生山藥各一兩，龍骨、牡蠣、淨萸肉各六錢，煎服後豁然頓愈。繼投以理肝補腎之藥數劑，以善其後。

按：此等證，當痰火氣血上壅之時，若人參、地黃、山藥諸藥，似不宜用，而確審其係上盛下虛，若扁鵲傳所云云者，重用赭石以輔之，則其補益之力直趨下焦，而上盛下虛之危機旋轉甚速，莫不隨手奏效也。

友人李景南曾治一人，寒痰壅滯胃中，嘔吐不受飲食，大便旬日未行。用人參八錢、乾薑六錢、赭石一兩，一劑嘔吐即止。又加當歸五錢，大便得通而愈。門人高如璧曾治一叟，年七十餘，得呃逆證，兼小便不通，劇時覺杜塞咽喉，息不能通，兩目上翻，身軀後挺，更醫數人治不效。如璧診其脈浮而無力，遂用赭石、臺參、生山藥、生芡實、牛蒡子為方投之，呃逆頓愈。又加竹茹服一劑，小便亦通利。

歷觀以上諸治驗案，赭石誠為救顛扶危之大藥也。乃如此良藥，今人罕用，間有用者，不過二三錢，藥不勝病，用與不用同也。且愚放膽用至數兩者，非鹵莽也。誠以臨證既久，凡藥之性情能力及宜輕宜重之際，研究數十年，心中皆有

定見，而後敢如此放膽，百用不至一失。且赭石所以能鎮逆氣，能下有形瘀滯者，以其饒有重墜之力，於氣分實分毫無損。況氣虛者又佐以人參，尤為萬全之策也。參、赭並用，不但能納氣歸原也，設於逆氣上干，填塞胸臆，或兼嘔吐，其證之上盛下虛者，皆可參、赭並用以治之。

【附錄】

直隸青縣張相臣來函：

族嫂年三十餘歲，身體甚弱，於季春忽患頭疼，右邊疼尤劇，以致上下眼瞼皆疼，口中時溢涎沫，唾吐滿地，經血兩月未見，舌苔粘膩，左脈弦硬而浮，右脈沉滑。知係氣血兩虛，內有蘊熱，挾肝膽之火上衝頭目，且有熱痰杜塞中焦也。為疏方用赭石解下所載治何姓女之方加減，生赭石細末六錢，淨山萸肉五錢，野臺參、生杭芍、生龜板、當歸身各三錢。一劑左邊疼頓減，而右邊之疼如故。遂用前方加丹皮二錢，赭石改用八錢。服後不但頭疼悉愈，且口內涎沫亦無，惟月經仍未見，又改用赭石至一兩，加川芎二錢。服下，翌日月事亦通。夫赭石向在藥物中為罕用之品，而此方用之以治頭疼，以治痰涎杜塞，以治月事不見，皆能隨手奏效，實赭石之力居多。



山藥解

山藥色白入肺，味甘歸脾，液濃益腎。能滋潤血脈，固攝氣化，寧嗽定喘，強志育神，性平可以常服多服。宜用生者煮汁飲之，不可炒用，以其含蛋白質甚多，炒之則其蛋白質焦枯，服之無效。若作丸散，可軋細蒸熟用之，處方篇一味薯蕷飲後，附有用山藥治癒之驗案數則可參觀。

【附案】

一室女，月信年餘未見，已成勞瘵，臥床不起，治以拙擬資生湯（方載三期一卷）復俾日用生山藥四兩煮汁當茶飲之，一月之後，體漸復初，月信亦通，見者以此證可愈，訝為異事。

一婦人產後十數日，大喘大汗，身熱勞嗽，醫者用黃耆、熟地、白芍等藥，汗出愈多。後愚診視，脈甚虛弱，數至七至，審證論脈，似在不治。俾其急用生山藥六兩，煮汁徐徐飲之，飲完添水重煮，一晝夜所飲之水皆取於山藥中，翌日又換山藥六兩，仍如此煮飲之，三日後諸病皆愈。

一人年四十餘，得溫病十餘日，外感之火已消十之八九，大便忽然滑下，喘息迫促，且有煩渴之意，其脈甚虛，兩尺微按即無，急用生山藥六兩，煎汁兩大碗，徐徐溫飲下，以之當茶，飲完煎渣再飲，兩日共用山藥十八兩，喘與煩渴皆愈，大便亦不滑瀉。

鄰村泊莊高氏女，年十六七，稟賦羸弱，得外感痰喘證，投以《金匱》小青龍加石膏湯，一劑而愈。至翌日忽似喘非喘，氣短不足以息，診其脈如水上浮麻，不分至數，按之即無。愚駭曰「此將脫之證也」，鄉屯無藥局，他處取藥無及，適有生山藥兩許，係愚向在其家治病購而未服者，俾急煎服之，下嚥後氣息既能接續，可容取藥，仍重用生山藥，佐以人參、萸肉、熟地諸藥，一劑而愈。

一婦人年三十許，泄瀉數月不止，病勢垂危，倩人送信於其父母。其父將往瞻視，詢方於愚，言從前屢次延醫治療，百藥不效。俾用生山藥軋細，煮粥服之，日三次，兩日痊愈，又服數日，身亦康健。

一娠婦，日發癇風，其脈無受娠滑象，微似弦而兼數，知陰分虧損血液短少也。亦俾煮山藥粥服之即愈，又服數次，永不再發。

奉天大東關關氏少婦，素有勞疾，因產後暴虛，喘嗽大作。治以山藥粥，日服兩次，服至四五日，喘嗽皆愈，又服數日，其勞疾自此除根。

奉天大東關學校教員鄭子綽之女，年五歲，秋日為風寒所束，心中發熱。醫者不知用辛涼表散，而純投以苦寒之藥，連服十餘劑，致脾胃受傷，大便滑下，月餘不止，而上焦之熱益熾。醫者皆辭不治，始求愚為診視。其形狀羸弱已甚，脈象細微浮數，表裡俱熱，時時噁心，不能飲食，晝夜猶瀉十餘次，治以山藥粥，俾隨便飲之，日四五次，一次不過數羹匙，旬日痊愈。

寒溫之證，上焦燥熱、下焦滑瀉者，皆屬危險之候。因欲以涼潤治燥熱，則有礙於滑瀉，欲以澀補治滑瀉，則有礙於燥熱。愚遇此等證，亦恒用生山藥，而以滑石輔之，大抵一劑滑瀉即止，燥熱亦大輕減。若仍有餘熱未盡除者，可再徐調以涼潤之藥無妨。

奉天大東關旗人號崧宅者，有孺子，年四歲，得溫病，邪猶在表，醫者不知為之清解，遽投以苦寒之劑，服後連四五日滑瀉不止，上焦燥熱，閉目而喘，精神昏瞶。延為診治，病雖危險，其脈尚有根柢，知可挽回。遂用生山藥、滑石各一兩，生杭芍四錢，甘草三錢（方載三期五卷名滋陰清燥湯），煎湯一大茶杯，為其幼小，俾徐徐溫飲下，盡劑而愈。然下久亡陰，餘有虛熱，繼用生山藥、玄參各一兩以清之，兩劑熱盡除。

同莊張氏女，適鄰村郭氏，受妊五月，偶得傷寒，三四日間，胎忽滑下。上焦燥渴，喘而且呻，痰涎壅盛，頻頻咳吐，延醫服藥，病未去而轉增滑瀉，晝夜十餘次，醫者辭不治，且謂危在旦夕。其家人惶恐，因其母家介紹迎愚診視。其脈似洪滑，重按指下豁然，兩尺尤甚，然為流產才四五日，不敢劇用山藥滑石方。遂先用生山藥二兩，酸石榴一個，連皮搗爛，同煎汁一大碗，分三次溫飲下，滑瀉見愈，他病如故。再診其脈，洪滑之力較實，因思此證雖虛，且當忌用寒涼之時，然確有外感實熱，若不解其熱，他病何以得愈。時屆晚三句鐘，病人自言每

日此時潮熱，又言精神困倦已極，晝夜苦不得睡。遂放膽投以生山藥兩半，滑石一兩，生杭芍四錢，甘草三錢，煎湯一大碗，

徐徐溫飲下，一次止飲藥一口，誠以產後脈象又虛，欲其藥力常在上焦，不欲其寒涼侵下焦也。斯夜遂得安睡，渴與滑瀉皆愈，喘與咳亦愈其半。又將山藥、滑石各減五錢，加生龍骨、生牡蠣各八錢，一劑而愈。

一媪年近七旬，素患漫腫，愚為調治，餘腫雖就愈而身體未復。忽於季春得溫病，上焦煩熱，病家自剖鮮地骨皮煮汁飲之，稍愈，又飲數次遂滑瀉，數日不止，而煩熱益甚。延為診視，脈浮滑而數，重按無力。病家因病者年高，又素有疾病，惴惴惟恐不愈，而愚毅然許為治癒。遂治以山藥、滑石、白芍、甘草，山藥、滑石皆重用一兩，為其表證猶在，加連翹、蟬退各三錢（方載三期五卷名滋陰宣解湯），一劑瀉止，煩熱亦覺輕。繼用拙擬白虎加人參以山藥代粳米湯（方載三期六卷），煎汁一碗，一次止溫飲一大口，防其再滑瀉也，盡劑而愈。

鄰村生員李子咸先生之女，年十四五，感冒風熱，遍身疹癩，煩渴滑瀉，又兼喘促，其脈浮數無力。愚躊躇再四，他藥皆不對證，亦重用生山藥、滑石，佐以白芍、甘草、連翹、蟬退，兩劑諸病皆愈。蓋疹癩最忌滑瀉，滑瀉則疹毒不能外出，故宜急止之。至連翹、蟬退，在此方中不但解表，亦善治疹癩也。

奉天財政廳科員劉仙舫，年二十五六，於季冬得傷寒，經醫者誤治，大便滑瀉無度，而上焦煩熱，精神昏聩，時作謔語，脈象洪數，重按無力。遂重用生山

藥兩半，滑石一兩，生杭芍六錢，甘草三錢，一劑瀉止，上焦煩熱不退，仍作譫語。爰用玄參、沙參諸涼潤之藥清之，仍復滑瀉，再投以前方一劑瀉又止，而上焦之煩熱益甚，精神亦益昏憤，毫無知覺。仙舫家營口，此時其家人畢至，皆以為不可復治。診其脈雖不實，仍有根柢，至數雖數，不過六至，知猶可治，遂慨切謂其家人曰「果信服余藥，此病尚可為也」，其家人似領悟。為疏方用大劑白虎加人參湯，更以生山藥一兩代粳米，大生地一兩代知母，煎湯一大碗，囑其藥須熱飲，一次止飲一口，限以六句鐘內服完，盡劑而愈。

山藥又宜與西藥白布聖並用。蓋凡補益之藥，皆兼有壅滯之性，山藥之壅滯，較參、朮、耆有差，而脾胃弱者多服、久服亦或有覺壅滯之時。佐以白布聖以運化之，則毫無壅滯，其補益之力乃愈大。奉天緝私督察處調查員羅蔭華，年三十許，虛弱不能飲食，時覺眩暈，步履恒仆，自覺精神常欲渙散，其脈浮數細弱，知倉猝不能治癒。俾用生懷山藥細末一兩，煮作粥，調入白布聖五分服之，日兩次，半月之後病大輕減，月餘痊愈。

滄州興業布莊劉俊卿之夫人，年五十餘，身形瘦弱，廉於飲食，心中怔忡則汗出，甚則作抽掣，若癘風。醫治年餘，病轉加甚。馳書詢方，愚為寄方數次，病稍見輕，旋又反復。後亦俾用生山藥末煮粥，調白布聖服之，四十餘日病癒，身體健康。

友人朱鉢文，灤州博雅士也，尤精於醫。其來院中時，曾與論及山藥與白布聖同服之功效。後鉢文還里，值其孫未周歲失乳，食以牛乳則生熱。鉢文俾用山藥稠粥，調以白布聖及白糖哺之，數月後其孫比吃乳時轉胖。後將其方傳至京師，京中用以哺小兒者甚多，皆胖壯無病。

法庫萬澤東之母，自三十餘歲時，即患痰喘咳嗽，歷三十年，百藥不效，且年愈高，病亦愈進，至一九二一年春，又添發燒、咽乾、頭汗出、食不下等證。延醫診視，云是痰盛有火，與人參清肺湯加生地、丹皮等味，非特無效，反發熱如火，更添泄瀉，有不可終日之勢。後忽見《衷中參西錄》一味薯蕷飲，遂用生懷山藥四兩，加玄參三錢，煎湯一大碗，分數次徐徐溫服，一劑即見效，至三劑病癒強半，遂改用生懷山藥細末一兩，煮作粥服之，日兩次，間用開胃藥，旬餘而安，宿病亦大見輕，大約久服宿病亦可除根。又萬澤東夫人，大便泄瀉數年不愈，亦服山藥粥而愈。

按：民紀辛未，內子大病半年，一日垂危，似喘非喘，氣短不足以息，自知不起，囑趕備後事。二女德清翻閱四期《醫學衷中參西錄》，見山藥各條如是神奇，值家中購有生山藥四兩，急濃煎一小碗，灌服，過十分鐘氣息即能接續，諸證亦較輕減。自是每日仍服山藥四兩，作一日之飲料，接服四閱月，計用生山藥五十余斤痊愈。至今體氣較未病之前為健。

受業高崇勳謹注

按：山藥之功效，一味薯蕷飲後曾詳言之。至治泄瀉，必變飲為粥者，誠以山藥汁本稠粘，若更以之作粥，則稠粘之力愈增，大有留戀腸胃之功也。憶二十年前，歲試津門，偶患泄瀉，飲食下嚥，覺與胃腑不和，須臾腸中作響，遂即作瀉。濃煎甘草湯，調赤石脂細末，服之不效。乃用白粳米，慢火煮爛熟作粥，盡量食之，頓覺脾胃舒和，腹中亦不作響，泄瀉遂愈。是知無論何物作粥，皆能留戀腸胃，而山藥性本收澀，故煮粥食之，其效更捷也。且大便溏瀉者，多因小便不利。山藥能滋補腎經，使腎陰足，而小便自利，大便自無溏瀉之患。

地黃解

鮮地黃性寒，微苦微甘。最善清熱、涼血、化瘀血、生新血，治血熱妄行、吐血、衄血、二便因熱下血。其中含有鐵質，故曬之、蒸之則黑，其生血、涼血之力，亦賴所含之鐵質也。

乾地黃（即藥局中生地黃），經日曬乾，性涼而不寒，生血脈，益精髓，聰明耳目，治骨蒸勞熱，腎虛生熱。

熟地黃（用鮮地黃和酒，屢次蒸曬而成），其性微溫，甘而不苦，為滋陰補腎主藥。治陰虛發熱，陰虛不納氣作喘，勞瘵咳嗽，腎虛不能漉水，小便短少，積成水腫，以及各臟腑陰分虛損者，熟地黃皆能補之。

【附案】

地黃之性，入血分不入氣分，而馮楚瞻謂其大補腎中元氣，論者多訾其說，然亦無可厚非也。

又鄰村李邊務李媪，年七旬，勞喘甚劇，十年未嘗臥寢。俾每日用熟地煎湯當茶飲之，數日即安臥，其家人反懼甚，以為如此改常，恐非吉兆，而不知其病之愈也。

又奉天省長公署科長侯壽平之哲嗣，五歲，因服涼瀉之藥太過，致成慢驚，胃寒吐瀉，常常瘕瘕，精神昏憤，目睛上泛，有危在頃刻之象。為處方，用熟地



黃二兩，生山藥一兩，乾薑、附子、肉桂各二錢，淨萸肉、野臺參各三錢，煎湯一杯半，徐徐溫飲下，吐瀉痠癢皆止，精神亦振，似有煩躁之意，遂去乾薑加生杭芍四錢，再服一劑痊愈。

一童子，年十四五，傷寒已過旬日，大便滑瀉不止，心中怔忡異常，似有不能支持之狀。脈至七至，按之不實。醫者辭不治。投以熟地、生山藥、生杭芍各一兩，滑石八錢，甘草五錢，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，亦盡劑而愈。

統觀以上諸案，馮氏調地黃大補腎中元氣之說，非盡無憑。蓋陰者陽之守，血者氣之配，地黃大能滋陰養血，大劑服之，使陰血充足，人身元陽之氣，自不至上脫下陷也。

用熟地治寒溫，恆為醫家所訾，然遇其人真陰太虧，不能支持外感之熱者，於治寒溫藥中，放膽加熟地以滋真陰，恆能挽回人命於頃刻。曾治一室女，資稟素羸弱，得溫病五六日，痰喘甚劇。治以《金匱》小青龍湯加石膏，一劑喘頓止。時屆晚八點鐘，一夜安穩。至寅時喘復作，不若從前之劇，而精神恍惚，心中怔忡。再診其脈，如水上浮麻不分至數，按之即無，此將脫之候也。取藥不暇，幸有預購山藥兩許，急煎服之，病少愈。此際已疏方取藥，方係熟地四兩、生山藥一兩、野臺參五錢。而近處藥局無野臺參，並他參亦鬻盡。再至他處，又恐誤事。遂單煎熟地、山藥飲之，病癒強半。一日之內，按其方連進三劑，病遂痊愈。

按：此證原當用拙擬來復湯，其方重用山萸肉以收脫。而當時愚在少年，其方猶未擬出，亦不知重用萸肉。而自晨至暮，共服熟地十二兩，竟能救此垂危之證，熟地之功用誠偉哉。當時方中若有野臺參，功效未必更捷，至病癒之後，救脫之功將專歸於野臺參矣。又此證初次失處，在服小青龍湯後，未用補藥。愚經此證後，凡遇當用小青龍湯而脈稍弱者，服後即以補藥繼之。或加人參於湯中，恐其性熱，可將所加之石膏加重。《張氏八陣》、趙氏《醫貫》、《馮氏錦囊》皆喜重用熟地，雖外感證，亦喜用之。其立言誠有偏處。然當日必用之屢次見效，而後筆之於書。張氏書中載有治一老年傷寒，戰而不汗，翌日屆其時，猶有將汗之意。急與一大劑八味地黃湯以助其汗。服後，遂得大汗，閱數時周身皆涼，氣息甚微，汗猶不止。精神昏昏，復與原湯一劑，汗止而精神亦復。夫用其藥發汗，即用其藥止汗，運用之妙，頗見慧心。

又趙氏書中謂六味地黃湯能退寒溫之實熱，致貽後世口實，然其言亦非盡不驗。憶昔乙酉、丙戌數年間之寒溫病，熱入陽明府後，凡於清解藥中，能重用熟地以滋陰者，其病皆愈。此乃一時氣運使然，不可筆之於書以為定法也。

又馮氏所著本草，謂熟地能大補腎中元氣，此亦確論。凡下焦虛損，大便滑瀉，服他藥不效者，單服熟地即可止瀉。然須日用四五兩，煎濃湯服之亦不作悶（熟地少用則作悶多用轉不悶），少用則無效。至陳修園則一概抹倒，直視熟地為不可用，豈能知熟地哉。

寒溫傳裡之後，其人下焦虛憊太甚者，外邪恆直趨下焦作泄瀉，亦非重用熟地不能愈。癸巳秋，一女年三十許，得溫病，十餘日，勢至垂危，將昇於外。同坐賈佩卿謂愚知醫，主家延為診視。其證晝夜泄瀉，昏不知人，呼之不應，其脈數至七至，按之即無。遂用熟地黃二兩，生山藥、生杭芍各一兩，甘草三錢，煎湯一大碗，趁溫徐徐灌之，盡劑而愈。

甘草解

甘草性微溫，其味至甘。得土氣最全。萬物由土而生，復歸土而化，能解一切毒性。甘者主和，故有調和脾胃之功，甘者主緩，故雖補脾胃而實非峻補。灸用則補力較大，是以方書謂脹滿證忌之。若軋末生服，轉能通利二便，消脹除滿。若治瘡瘍亦宜生用，或用生者煎服亦可。仲景有甘草瀉心湯，用連、苓、半夏以瀉心下之痞，即用甘草以保護心主，不為諸藥所傷損也。至白虎湯用之，是借其甘緩之性以緩寒藥之侵下。通脈湯、四逆湯用之，是借其甘緩之性，以緩熱藥之僭上。與芍藥同用，能育陰緩中止疼，仲景有甘草芍藥湯。與乾薑同用，能逗留其熱力使之綿長，仲景有甘草乾薑湯。與半夏、細辛諸藥同用，能解其辛而且麻之味，使歸和平。惟與大戟、芫花、甘遂、海藻相反，餘藥則皆相宜也。

古方治肺癰初起，有單用粉甘草四兩，煮湯飲之者，恆有效驗。愚師其意，對於肺結核之初期，咳嗽吐痰，微帶腥臭者，恆用生粉甘草為細末，每服錢半，用金銀花三錢煎湯送下，日服三次，屢屢獲效。若肺病已久，或兼吐膿血，可用粉甘草細末三錢，浙貝母、三七細末各錢半，共調和為一日之量，亦用金銀花煎湯送下。若覺熱者，可再加玄參數錢，煎湯送服。皮黃者名粉甘草，性平不溫，用於解毒清火劑中尤良。

己未孟冬，奉天霍亂盛行，官銀號總辦劉海泉君謂當擬方登報以救疾苦，愚因擬得兩方登之於報，一為急救回生丹，用甘草細末一錢，朱砂細末錢半，冰片

三分，薄荷冰（亦名薄荷腦）二分，共調勻，作三次服，約多半點鐘服一次。一為衛生防疫寶丹，用甘草細末十兩，細辛細末兩半，香白芷細末一兩，薄荷冰四錢，冰片二錢，水泛為丸，梧桐子大，用朱砂細末三兩為衣，每服八十粒，多至一百二十粒。二方在奉天救人多矣。時桓仁友人袁霖普，為直隸故城縣尹，致函問方，遂開兩方與之。後來信用急救回生丹，施藥二百六十劑，即治癒二百六十人，至第二年其處又有霍亂，袁君復將衛生防疫寶丹方製藥六大料，治癒千人。二次袁君將其方傳遍近處各縣，救人尤多，二方中皆重用甘草，則甘草之功用可想也。然亦多賴將甘草軋細生用，未經蜜炙、水煮耳。誠以暴病傳染，皆挾有毒氣流行，生用則其解毒之力較大，且甘草熟用則補，生用則補中仍有流通之力，故於霍亂相宜也。至於生用能流通之說，可以事實徵之。

【附案】

開原王姓幼童，脾胃虛弱，飲食不能消化，恆吐出，且小便不利，周身漫腫，腹脹大，用生甘草細末與西藥百布聖各等分，每服一錢，日三次，數日吐止便通，腫脹皆消。

又鐵嶺友人魏紫紱，在通遼鎮經理儲蓄會，其地多甘草，紫紱日以甘草置茶壺中當茶葉沖水飲之，旬日其大小便皆較勤，遂不敢飲。後與愚覲面，為述其事，且問甘草原有補性，何以通利二便？答曰「甘草熟用則補，生用則通，以之置茶壺中雖衝以開水，其性未熟，仍與生用相近故能通也」。

門生李子博言，曾有一孺子患腹疼，用暖臍膏貼之，後其貼處潰爛，醫者謂多飲甘草水可愈。復因飲甘草水過多，小便不利，身腫腹脹，再延他醫治之，服藥無效。其地近火車站，火車恆裝卸甘草，其姊攜之拾甘草嚼之，日以為常，其腫脹竟由此而消。觀此，則知甘草生用、熟用，其性竟若是懸殊，用甘草者，可不於生、熟之間加之意乎？

附：甘草反鱧魚之質疑

近閱《遁園醫案》（長沙蕭琢如著）載鱧魚反甘草之事。謂當遜清末葉，醫士顏君意祥，篤實人也，一日告余，曾在某邑為人治病，見一奇案，令人不解。有一農家人口頗眾，冬月塘涸取魚，煮食以供午餐，丁壯食魚且盡，即散而赴工。婦女童稚數人復取魚烹治佐食。及晚，有一婦初覺飽悶不適，臥床歇息，眾未介意。次日呼之不起，審視則已僵矣。舉家驚訝，莫明其故。再四考查，自進午餐後並未更進他種食物，亦無纖芥事故，乃取前日烹魚之釜細察視之，除魚汁骨肉外，惟存甘草一條約四五寸許。究問所來，據其家婦女云，小孩啼哭每以甘草與食，釜中所存必係小兒所遺落者。又檢所烹之魚，皆係鱧魚，並非毒物。且甘草亦並無反鱧魚之說，矧同食者若干人，何獨一人偏受其災，頃刻鄰里咸集。又久之，其母家亦至，家人據實以告眾，一少年大言於眾曰「甘草鱧魚同食斃命，千古無此奇事，豈得以謊言搪塞？果爾，則再用此二物同煮，與我食之」。言已，即促同來者照辦，並親自手擎二物置釜中。煮熟，取盤箸陳列席間，旁人疑阻者

輒怒斥之，即席大啖，並笑旁觀者愚闇膽怯，屆晚間固無甚痛苦，亦無若何表示，至次晨則僵臥不起矣，由斯其母家嫌疑解釋。按鱧魚為常食之物，甘草又為藥中常用之品，苟此二物相反，疏方用甘草時即當戒其勿食鱧魚。

硃砂解

硃砂味微甘性涼，為汞五硫一化合而成。硫屬陽，汞屬陰，為其質為陰陽團結，性涼體重，故能養精神、安魂魄、鎮驚悸、熄肝風；為其色赤入心，能清心熱，使不耗血，故能治心虛怔忡及不眠；能消除毒菌，故能治暴病傳染、霍亂吐瀉；能入腎導引腎氣上達於心，則陰陽調和，水火既濟，目得水火之精氣以養其瞳子，故能明目；外用之，又能敷瘡瘍疥癩諸毒，亦藉其原質為硫汞化合之力。

鄒潤安曰「凡藥所以致生氣於病中，化病氣為生氣也。凡用藥取其稟賦之偏，以救人陰陽之偏勝也。是故藥物之性，未有不偏者」。徐洄溪曰「藥之用，或取其氣，或取其味，或取其色，或取其形，或取其質，或取其性情，或取其所生之時，或取其所成之地」。愚謂丹砂則取其質與氣與色為用者也。質之剛是陽，內含汞則陰氣之寒是陰，色純赤則陽，故其義為陽抱陰，陰承陽，稟自先天，不假作為。人之有生以前，兩精相搏即有神，神根據於精乃有氣，有氣而後有生，有生而後知識具以成其魂，鑒別昭以成其魄，故凡精氣失其所養，則魂魄遂不安，欲養之安之，則捨陰陽緊相抱持，密相承接之丹砂又奚取乎？然謂主身體五臟百病，養精神，安魂魄，益氣明目何也？夫固以氣寒，非溫煦生生之具，故僅能於身體五臟百病中，養精神安魂魄益氣明目耳。若身體五臟百病中，其不必養精神安魂魄益氣明目者，則不必用丹砂也。血脈不通者，水中之火不繼續也，煩滿消渴者，火中之水失滋澤也，中惡腹痛陰陽不相保抱，邪得乘間以入，毒氣疥諸瘡，



陽不畜陰而反灼陰，得惟藥之陽抱陰，陰函陽者治之，斯陽不為陰賊，陰不為陽累，諸疾均可已矣」。按此為鄒氏釋《本經》之文，可謂精細入微矣。

【附案】

壬寅秋月，霍亂流行。友人毛仙閣之侄，受此證至垂危，衣冠既畢，舁之床上。仙閣見其仍有微息，遂研硃砂錢許，和童便灌之，其病由此竟愈。

又一女子得霍亂至垂危，醫者辭不治，時愚充教員於其處，求為診治，亦用藥無效。適有搖鈴賣藥者，言能治此證，亦單重用硃砂錢許，治之而愈。愚從此知硃砂善化霍亂之毒菌。至己未在奉天擬得急救回生丹、衛生防疫寶丹兩方，皆重用硃砂，治癒斯歲之患霍亂者不勝紀，傳之他省亦救人甚伙，可徵硃砂之功效神奇矣。然須用天產硃砂方效，若人工所造硃砂（色紫成大塊作錠形者，為人工所造硃砂），止可作顏料用，不堪入藥。

鴉膽子解

鴉膽子（俗名鴨蛋子，即苦參所結之子）。味極苦，性涼，為涼血解毒之要藥，善治熱性赤痢（赤痢間有涼者），二便因熱下血，最能清血分之熱及腸中之熱，防腐生肌，誠有奇效。愚生平用此藥治癒至險之赤痢不勝紀，用時去皮，每服二十五粒，極多至五十粒，白糖水送下。鴨蛋子味甚苦，服時若嚼破，即不能下嚥。若去皮時破者，亦不宜服。恐服後若下行不速，或作噁心嘔吐。故方書用此藥，恆以龍眼肉包之，一顆龍眼肉包七數，以七七之數為劑。然病重身強者，猶可多服，常以八八之粒為劑，然亦不必甚拘。鴨蛋子連皮搗細，醋調，敷疔毒甚效，立能止痛。其仁搗如泥，可以點痣。拙擬毒淋湯又嘗重用之，以治花柳毒淋。其化療解毒之力如此，治病所以有奇效也。

按：鴉膽子諸家未言治瘡解毒，而愚用之以治梅毒及花柳毒淋皆有效驗，搗爛醋調敷疔毒，效驗異常，洵良藥也。

受業張方與按：鴨蛋子又善治疣，疣即俗所謂瘰子也。以鴨蛋子去皮，取白仁之成實者，杵為末，以燒酒和塗少許，小作瘡即愈。予面部生疣，以他法治癒，次年復發，凡三四年後，求治於壽師，師告以此方，按法塗之，二日患處燒爛如蓮子大一塊，並不覺痛，旋結痂而愈，永不復發。

龍骨解

龍骨味淡，微辛，性平，質最粘澀，具有翕收之力（以舌舐之即吸舌不脫，有翕收之力可知），故能收斂元氣、鎮安精神、固澀滑脫。凡心中怔忡、多汗淋漓、吐血衄血、二便下血、遺精白濁、大便滑瀉、小便不禁、女子崩帶，皆能治之。其性又善利痰，治肺中痰飲咳嗽，咳逆上氣，其味微辛，收斂之中仍有開通之力，故《本經》謂其主瀉利膿血，女子漏下，而又主瘕堅結也。龍齒與龍骨性相近，而又饒鎮降之力，故《本經》謂主小兒大人驚癇，癲疾狂走，心下結氣，不能喘息也。

龍之為物，歷載於上古、中古各書，原可確信其有也。而西人則謂天地間決無此物，所謂龍骨者，乃山礦中之石類。誠如西人之說，則藥肆所鬻之龍骨，何以宛有骨節，且有齒與角乎？愚嘗與內煉諸道友談及，而道友之內煉功深者，則謂兩眉之間恒自見有陽光外現作金色，仿佛若龍。愚乃恍然悟會，古人所謂屍居龍見者，即此謂也。並悟天地間之所謂龍，原係天地間元陽之氣，稟有元陽之靈，即有時得諸目睹，無非元陽之光外現也。然其光有象無質（此《易》所謂，在天成象），故龍之飛騰變化，莫可端倪，此《易》之乾卦論純陽之天德，而取象於龍，使龍實有體質，仍藐然一物耳，豈可以仿天德哉？然氣化之妙用，恒陰陽互相應求，龍之飛也，太空之陰雲應之，與之化合而成，龍之潛也，地下之陰氣應之，與之化合而成形（此《易》所謂，在地成形），所成之形名為龍骨，實乃龍

身之模範也。迨陽氣萌動上升，龍之元陽乘時飛去，而其化合所成之形質仍留地中，於是取以入藥，最有翕收之力。凡人身陰陽將離，氣血滑脫，神魂浮越之證，皆能愈之。以其原為真陰真陽之氣化合而成，所以能使人身之陰陽互根，氣血相戀，神魂安泰而不飛越也。如謂係他物之骨，久埋地中，得山隴之氣化而為石性，若石蟹、石燕者，然而天地間何物之骨，有若是之巨者哉？

徐靈胎曰「龍得天地元陽之氣以生，藏時多，見時少，其性至動而能靜，故其骨最黏澀，能收斂正氣，凡心神耗散、腸胃滑脫之疾皆能已之。且斂正氣而不斂邪氣，所以仲景於傷寒之邪氣未盡者亦用之」。

上所錄徐氏議論極精微，所謂斂正氣而不斂邪氣，外感未盡亦可用之者，若仲景之柴胡加龍骨牡蠣湯、桂枝甘草龍骨牡蠣湯諸方是也。愚於傷寒、溫病，熱實脈虛，心中怔忡，精神騷擾者，恒龍骨與萸肉、生石膏並用，即可隨手奏效（有案載萸肉條下可參觀）。至其謂龍為元陽之氣所生，愚因之則別有會心，天地有元陽，人身亦有元陽，氣海中之元氣是也。此元氣在太極為未判陰陽，包括為先天生生之氣即無極也。由此陽氣上升而生心，陽氣下降而生腎，陰陽判而兩儀立矣。心陽也，而中藏血液；腎陰也，而中藏相火，陰中有陽，陽中有陰，而四象成矣。龍為天地之元陽所生，是以元氣將渙散者，重用龍骨即能斂住，此同氣感應之妙用也。且元氣之脫，多由肝經（肝係下與氣海相連，故元氣上脫者必由肝經），因肝主疏泄也。夫肝之取象為青龍，亦與龍骨為同氣，是以龍骨之性，既

能入氣海以固元氣，更能入肝經以防其疏泄元氣，此乃天生妙藥，是以《本經》列之上品也。且為其能入肝斂戢肝木，愚於忽然中風肢體不遂之證，其脈甚弦硬者，知係肝火肝風內動，恒用龍骨同牡蠣加於所服藥中以斂戢之，至脈象柔和其病自愈，三期七卷有鎮肝熄火湯，五期三卷有建瓴湯，皆重用龍骨，方後皆有驗案可參觀。

龍骨若生用之，凡心中怔忡、虛汗淋漓、經脈滑脫、神魂浮蕩諸疾，皆因元陽不能固攝，重用龍骨，借其所含之元陰以翕收此欲渙之元陽，則功效立見。若煨用之，其元陰之氣因煨傷損，縱其質本粘澀，煨後其粘澀增加，而其翕收之力則頓失矣。用龍骨者用其粘澀，誠不如用其吸收也。明乎此理，則龍骨之不宜煨益明矣。

王洪緒《外科證治全生集》謂「用龍骨者宜懸之井中經宿而後用之」，是可謂深知龍骨之性，而善於用之者矣。愚用龍骨約皆生用，惟治女子血崩，或將流產，至極危時恆用煨者，取其澀力稍勝以收一時之功也。

陳修園曰「痰，水也，隨火而上升，龍骨能引逆上之火汜濫之水下歸其宅，若與牡蠣同用，為治痰之神品，今人止知其性澀以收脫，何其淺也」。

牡蠣解

牡蠣味鹹而澀，性微涼，能軟堅化痰，善消瘰癧，止呃逆，固精氣，治女子崩帶。《本經》謂其主溫瘧者，因溫瘧但在足少陽，故不與太陽相並為寒，但與陽明相並為熱（此理參觀五期一卷少陽為遊部論始明）。

牡蠣之生，背西向東，為足少陽對宮之藥，有自然感應之理，能入其經而祛其外來之邪。主驚恚怒氣者，因驚則由於膽，怒則由於肝，牡蠣鹹寒屬水，以水滋木，則肝膽自得其養。且其性善收斂有保合之力，則膽得其助而驚恐自除，其質類金石有鎮安之力，則肝得其平而恚怒自息矣。至於筋原屬肝，肝不病而筋之或拘或緩者自愈，故《本經》又謂其除拘緩也。

牡蠣所消之瘰癧，即《本經》所謂鼠瘦，《本經》載之，盡人皆能知之，而其所以能消鼠瘦者，非因其鹹能軟堅也。蓋牡蠣之原質，為碳酸鈣化合而成，其中含有沃度（亦名海典），沃度者善消瘤贅瘰癧之藥也，處方篇消瘰丸下附有驗案可參觀。

龍骨、牡蠣，若專取其收澀可以煨用。若用以滋陰，用以斂火，或取其收斂，兼取其開通者（二藥皆斂而能開），皆不可煨。若作丸散，亦可煨用，因煨之則其質稍軟，與脾胃相宜也。然宜存性，不可過煨，若入湯劑仍以不煨為佳。今用者一概煨之，殊非所宜。

方書謂牡蠣左顧者佳，然左顧右顧辨之頗難，因此物乃海中水氣結成，億萬相連或覆或仰，積聚如山，古人謂之蠔山（蠔即牡蠣）。覆而生者，其背凸，仍覆置之，視其頭向左回者為左顧，仰而生者其背凹，仍仰置之，其頭亦向左回者為左顧，若不先辨其覆與仰，何以辨其左顧右顧乎？然以愚意測之，若瘰癧在左邊者用左顧者佳，若瘰癧在右邊者，左顧者亦未必勝於右顧者也。

【附案】

一少年，項側起一瘰癧，大如茄，上連耳，下至缺盆，求醫治療，言服藥百劑，亦不能保其必愈，而其人家貧傭工，為人耘田，不惟無錢買如許多藥，即服之亦不暇，然其人甚強壯，飲食甚多，俾於每日三餐之時，先用飯湯送服煅牡蠣細末七八錢，一月之間消無芥蒂。然此惟身體強壯、且善飯者，可如此單服牡蠣，若脾胃稍弱者，即宜佐以健補脾胃之藥，不然恐瘰癧未愈，而脾胃先傷，轉致成他病也。

石決明解

石決明味微鹹，性微涼，為涼肝鎮肝之要藥。肝開竅於目，是以其性善明目，研細水飛作敷藥，能除目外障，作丸散內服，熊消目內障（消內障丸散優於湯劑）。為其能涼肝，兼能鎮肝，故善治腦中充血作疼作眩暈，因此證多係肝氣肝火挾血上衝也。是以愚治腦充血證，恆重用之至兩許。其性又善利小便，通五淋，蓋肝主疏泄為腎行氣，用決明以涼之鎮之，俾肝氣肝火不妄動自能下行，腎氣不失疏泄之常，則小便之難者自利，五淋之澀者自通矣。此物乃鰓甲也，狀如蛤，單片附石而生，其邊有孔如豌豆，七孔九孔者佳，宜生研作粉用之，不宜煨用。



玄參解

玄參色黑，味甘微苦，性涼多液，原為清補腎經之藥，中心空而色白（此其本色，藥局多以黑豆皮水染之，則不見其白矣），故又能入肺以清肺家燥熱，解毒消火，最宜於肺病結核、肺熱咳嗽。《本經》謂其治產乳餘疾，因其性涼而不寒，又善滋陰，且兼有補性（凡名參者皆含有補性），故產後血虛生熱及產後寒溫諸證，熱入陽明者，用之最宜。愚生平治產後外感實熱，其重者用白虎加人參湯以玄參代方中知母，其輕者用拙擬滋陰清胃湯（方載三期八卷，係玄參兩半，當歸三錢，生杭芍四錢，茅根二錢、甘草錢半），亦可治癒。誠以產後忌用涼藥，而既有外感實熱，又不得不以涼藥清之，惟石膏與玄參，《本經》皆明載治產乳，故敢放膽用之。然用石膏又必加人參以輔之，又不敢與知母並用，至滋陰清胃湯中重用玄參，亦必以四物湯中歸芍輔之，此所謂小心放膽並行不悖也。《本經》又謂玄參能明目，誠以肝開竅於目，玄參能益水以滋肝木，故能明目，且目之所以能視者，在瞳子中神水充足，神水固腎之精華外現者也。以玄參與柏實、枸杞並用，以治肝腎虛而生熱視物不了了者，恆有捷效也。又外感大熱已退，其人真陰虧損、舌乾無津、胃液消耗、口苦懶食者，愚恆用玄參兩許，加潞黨參二三錢，連服數劑自愈。

當歸解

當歸味甘微辛，氣香，液濃，性溫，為生血、活血之主藥，而又能宣通氣分，使氣血各有所歸，故名當歸。其力能升（因其氣厚而溫）能降（因其味厚而辛），內潤臟腑（因其液濃而甘），外達肌表（因其味辛而溫）。能潤肺金之燥，故《本經》謂其主咳逆上氣；能緩肝木之急，故《金匱》當歸芍藥散，治婦人腹中諸疼痛；能補益脾血，使人肌膚華澤；生新兼能化瘀，故能治周身麻痺、肢體疼痛、瘡瘍腫疼；活血兼能止血，故能治吐血、衄血（須用醋炒取其能降也），二便下血（須用酒炒取其能升也）；潤大便兼能利小便，舉凡血虛血枯、陰分虧損之證，皆宜用之。惟虛勞多汗、大便滑瀉者，皆禁用。

受業孫靜明按：凡治痢疾於消導化滯藥中，加當歸一二錢，大便時必覺通暢，此足證當歸潤大便之功效也。

當歸之性雖溫，而血虛有熱者，亦可用之，因其能生血即能滋陰，能滋陰即能退熱也。其表散之力雖微，而頗善祛風，因風著人體恆致血痺，血活痺開，而風自去也。至於女子產後受風發搐，尤宜重用當歸，因產後之發搐，半由於受風，半由於血虛（血虛不能榮筋），當歸既能活血以祛風，又能生血以補虛，是以愚治此等證，恆重用當歸一兩，少加散風之品以佐之，即能隨手奏效。

【附案】

一少婦，身體羸弱，月信一次少於一次，浸至只來少許，詢問治法。時愚初習醫未敢疏方，俾每日單用當歸八錢煮汁飲之，至期所來經水遂如常，由此可知當歸生血之效也。

一人年四十餘，得溺血證，自用當歸一兩酒煮飲之而愈。後病又反覆，再用原方不效，求為診治，愚俾單用去皮鴉膽子五十粒，冰糖化水送下而愈。後其病又反覆，再服鴉膽子方兩次無效，仍用酒煮當歸飲之而愈。夫人猶其人，證猶其證，從前治癒之方，後用之有效有无效者，或因血證之前後涼熱不同也，然即此亦可知當歸之能止下血矣。

〈 第 三 卷 〉

芍藥解

芍藥味苦微酸，性涼多液（單煮之其汁甚濃）。善滋陰養血，退熱除煩，能收斂上焦浮越之熱下行自小便瀉出，為陰虛有熱小便不利者之要藥。為其味酸，故能入肝以生肝血；為其味苦，故能入膽而益膽汁；為其味酸而兼苦，且又性涼，又善瀉肝膽之熱，以除痢疾後重（痢後重者，皆因肝膽之火下迫），療目疾腫疼（肝開竅於目）。與當歸、地黃同用，則生新血；與桃仁、紅花同用，則消瘀血；與甘草同用則調和氣血，善治腹疼；與竹茹同用，則善止吐衄；與附子同用，則翕收元陽下歸宅窟。惟力近和緩，必重用之始能建功。

芍藥原有白、赤二種，以白者為良，故方書多用白芍。至於化瘀血，赤者較優，故治瘡瘍者多用之，為其能化毒熱之瘀血不使潰膿也。白芍出於南方，杭州產者最佳，其色白而微紅，其皮則紅色又微重。為其色紅白相兼，故調和氣血之力獨優。赤芍出於北方關東三省，各山皆有，肉紅皮赤，其質甚粗，若野草之根，故張隱庵、陳修園皆疑其非芍藥花根。愚向亦疑之，至奉後因得目睹，疑團方釋，特其花葉皆小，且花皆單瓣，其花或粉紅或紫色，然無論何色，其根之色皆相同。

【附案】

一童子年十五六歲，於季春得溫病，經醫調治，八九日間大熱已退，而心猶發熱，怔忡莫支，小便不利，大便滑瀉，脈象虛數，仍似外邪未淨，為疏方，用生杭芍二兩，炙甘草一兩半，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，盡劑而愈。夫《本經》

謂芍藥益氣，元素謂其止瀉利，即此案觀之洵不誤也。然必以炙草輔之，其功效乃益顯。

按：此證原宜用拙擬滋陰清燥湯，原有芍藥六錢，甘草三錢，又加生懷山藥、滑石各一兩，而當時其方猶未擬出，但投以芍藥、甘草幸亦隨手奏效。二方之中，其甘草一生用一炙用者，因一則少用之以為輔佐品，藉以調和藥之性味，是以生用；一則多用之至兩半，借其補益之力以止滑瀉，是以炙用，且《傷寒論》原有芍藥甘草湯為育陰之妙品，方中芍藥、甘草各四兩，其甘草亦係炙用也。

鄰村周寶和，年二十餘，得溫病，醫者用藥清解之，旬日其熱不退。診其脈左大於右者一倍，按之且有力。夫寒溫之熱傳入陽明，其脈皆右大於左，以陽明之脈在右也。即傳入少陽厥陰，其脈亦右大於左，因既挾有外感實熱，縱兼他經，仍以陽明為主也。此證獨左大於右，乃溫病之變證，遂投以小劑白虎湯（方中生石膏止用五錢），重加生杭芍兩半，煎湯兩茶杯頓飲之，須臾小便一次甚多，病若失。

鄰村霍氏婦，周身漫腫，腹脹小便不利，醫者治以五皮飲不效。其脈數而有力，心中常覺發熱，知其陰分虧損，陽分又偏盛也。為疏方，用生杭芍兩半，玄參、滑石、地膚子、甘草各三錢，煎服一劑即見效驗，後即方略為加減，連服數劑痊愈。

奉天大西關陳某，年四十餘，自正月月中旬，覺心中發熱懶食，延至暮春，其熱益甚，常常腹疼，時或泄瀉，其脈右部弦硬異常，按之甚實，舌苔微黃。知係外感伏邪，因春萌動，傳入胃府，久而化熱，而肝木復乘時令之旺以侮克胃土，是以腹疼且泄瀉也。其脈象不為洪實而現弦硬之象者，因胃土受侮，亦從肝木之化也。為疏方，用生杭芍、生懷山藥、滑石、玄參各一兩，甘草、連翹各三錢，煎服一劑，熱與腹疼皆愈強半，可以進食，自服藥後大便猶下兩次。診其脈象已近和平，遂將方中芍藥、滑石、玄參各減半，又服一劑痊愈。

奉天憲兵營陳連長夫人，年二十餘，於季春得溫病，四五日間延為診治。其證表裡俱熱，脈象左右皆洪實，腹中時時切疼，大便日下兩三次、舌苔厚而微黃，知外感邪熱已入陽明之府，而肝膽乘時令木氣之旺，又挾實熱以侮克中土，故腹疼而又大便勤也。亦投以前方，加鮮茅根三錢，一劑腹疼便瀉即止，又服一劑痊愈。觀此二案，《傷寒論》諸方，腹痛皆加芍藥，不待疏解而自明也。至於茅根入藥必須鮮者方效，若無鮮者可不用。

一婦人年三十許，因陰虛小便不利，積成水腫甚劇，大便亦旬日不通。一老醫投以八正散不效，友人高夷清為出方，用生白芍六兩，煎湯兩大碗，再用生阿膠二兩融化其中，俾病人盡量飲之，老醫甚為駭疑，夷清力主服之，盡劑而二便皆通，腫亦頓消。後老醫與愚晤面為述其事，且問此等藥何以能治此等病？答曰

「此必陰虛不能化陽，以致二便閉塞，白芍善利小便，阿膠能滑大便，二藥並用又大能滋補真陰，使陰分充足，以化其下焦偏盛之陽，則二便自能利也」。

長子萌潮，治一水腫證，其人年六旬，二便皆不通利，心中滿悶，時或煩躁，知其陰虛積有內熱，又兼氣分不舒也。投以生白芍三兩，橘紅、柴胡各三錢，一劑二便皆通。繼服滋陰理氣少加利小便之藥痊愈。



芎藭解

芎藭味辛、微苦、微甘，氣香竄，性溫。溫竄相並，其力上升、下降、外達、內透無所不至。故諸家本草，多謂其能走泄真氣，然無論何藥，皆有益有弊，亦視用之何如耳。其特長在能引人身清輕之氣上至於腦，治腦為風襲頭疼、腦為浮熱上衝頭疼、腦部充血頭疼。其溫竄之力，又能通活氣血，治周身拘攣，女子月閉無子。雖係走竄之品，為其味微甘且含有津液，用之佐使得宜，亦能生血。

或問「芎藭治腦為風襲頭疼，以其有表散之力也，治浮熱上衝頭疼，因其能引涼藥之力至腦以清熱也，二證用芎藭宜矣，至腦部充血頭疼而治以芎藭，不益引血上行乎？豈為其微苦而有降血下行之力乎？」答曰「此理之精微可即化學明之，天地間諸氣相並惟氫氣居最上一層，觀氫氣球在空氣之中能自上升是也。人之腦中原多氫氣，有時氫氣缺乏，諸重濁之氣即可乘腦部之空虛而上干，而上行養腦之血，或即因之而逾其常度，此腦充血之所由來也。芎藭引臟腑之氫氣上達腦部，自能排擠重濁之氣下降，而腦部之充血亦即可因之下降，猶無論何氣，在氫氣中自下沉也，此其所以治腦部充血頭疼也。然愚治腦部充血頭疼，另有妙方，不必重用芎藭也。牛膝條下附載治癒之案，可參觀。

四物湯中用芎藭，所以行地黃之滯也，所以治清陽下陷時作寒熱也。若其人陰虛火升，頭上時汗出者，芎藭即不宜用。

【附案】

友人郭省三夫人，產後頭疼，或與一方當歸、芎藭各一兩煎服即愈。此蓋產後血虛兼受風也。愚生平用芎藭治頭疼不過二三錢。一人年三十餘，頭疼數年，服藥或愈，仍然反覆，其脈弦而有力，左關尤甚，知其肝血虧損肝火熾盛也。投以熟地、柏實各一兩，生龍骨、生牡蠣、龍膽草、生杭芍、枸杞各四錢，甘草、芎藭各二錢，一劑疼止，又服數劑永不反覆。又治一人，因腦為風襲頭疼，用川芎、菊花各三錢，煎湯服之立愈。

大黃解

大黃味苦，氣香，性涼，能入血分，破一切瘀血。為其氣香故兼入氣分，少用之亦能調氣，治氣鬱作疼。其力沉而不浮，以攻決為用，下一切癥瘕積聚。能開心下熱痰以愈瘋狂，降腸胃熱實以通燥結，其香竄透竅之力又兼利小便（大黃之色服後入小便，其利小便可知）。性雖趨下而又善清在上之熱，故目疼齒疼，用之皆為要藥。又善解瘡瘍熱毒，以治療疔毒尤為特效之藥（疔毒甚劇，他藥不效者，當重用大黃以通其大便自愈）。其性能降胃熱，並能引胃氣下行，故善止吐衄，仲景治吐血、衄血有瀉心湯，大黃與黃連、黃芩並用。《本經》謂其能「推陳致新」，因有黃良之名。仲景治血痺虛勞，有大黃蠱蟲丸，有百勞丸，方中皆用大黃，是真能深悟「推陳致新」之旨者也。

按：《金匱》瀉心湯，誠為治吐血、衄血良方，惟脈象有實熱者宜之。若脈象微似有熱者，愚恆用大黃三錢，煎湯送服赤石脂細末四五錢。若脈象分毫無熱，且心中不覺熱者，愚恆用大黃細末、肉桂細末各六七分，用開水送服即愈。

凡氣味俱厚之藥，皆忌久煎，而大黃尤甚，且其質經水泡即軟，煎一兩沸藥力皆出，與他藥同煎宜後入，若單用之，開水浸服即可，若軋作散服之，一錢之力可抵煎湯者四錢。

大黃之力雖猛，然有病則病當之，恆有多用不妨者。是以治癲狂其脈實者，可用至二兩，治療毒之毒熱甚盛者，亦可用至兩許。蓋用藥以勝病為準，不如此則不能勝病，不得不放膽多用也。

【附案】

愚在籍時，曾至鄰縣海丰治病，其地有程子河為黃河入海故道，海中之船恒泊其處，其地有楊氏少婦，得奇疾，赤身臥帳中，其背腫熱，若有一縷著身，即覺熱不能忍，百藥無效。後有乘船自南來赴北闡鄉試者，精通醫術，延為診視。言係陽毒，俾用大黃十斤，煎湯十碗，放量飲之，數日飲盡，竟霍然痊愈。為其事至奇，故附記之。

受業高崇勳按：大黃為治療毒特效藥，見五期七卷論治疗宜重用大黃，其方業經同學遵用，取效頗捷。

朴硝、硝石解

朴硝味鹹，微苦，性寒。稟天地寒水之氣以結晶，水能勝火，寒能勝熱，為心火熾盛有實熱者之要藥。療心熱生痰，精神迷亂、五心潮熱，煩躁不眠。且鹹能軟堅，其性又善消，故能通大便燥結，化一切瘀滯。鹹入血分，故又善消瘀血，治妊婦胎殤未下。外用化水點眼，或煎湯熏洗，能明目消翳，愈目疾紅腫。《本經》謂煉服可以養生，所謂煉者，如法制為玄明粉，則其性尤良也。然今時之玄明粉，鮮有如法煉製者，凡藥房中所鬻之玄明粉，多係風化朴硝，其性與朴硝無異。

【附案】

一少年女子，得瘋疾癲狂甚劇，屢次用藥皆未能灌下。後為設方，單用朴硝當鹽，加於菜蔬中服之，病人不知，月餘痊愈，因將其方載於《醫學衷中參西錄》，後法庫門生萬澤東治一少女瘋狂，強灌以藥，竟將藥碗咬破，仍未灌下。澤東素閱《衷中參西錄》，知此方，遂用朴硝和鮮萊菔作湯，令病人食之，數日痊愈。

奉天清丈局科員劉敷陳，年四十餘，得結證，飲食行至下脘復轉而吐出，無論服何藥亦如茲，且其處時時切疼，上下不通者已旬日矣。俾用朴硝六兩，與鮮萊菔片同煮，至萊菔爛熟撈出，又添生片再煮，換至六七次，約用萊菔七八斤，將朴硝鹹味借萊菔提之將盡，餘濃汁四茶杯，每次溫飲一杯，兩點鐘一次，飲至三次其結已開，大便通下。其女時息痢疾，俾飲其餘，痢疾亦愈。

奉天財政廳科長於允恭夫人，年近五旬，因心熱生痰，痰火瘀滯，煩躁不眠，五心潮熱，其脈象洪實。遂用朴硝和炒熟麥麵煉蜜為丸，三錢重，每丸中約有朴硝一錢，早晚各服一丸，半月痊愈。蓋人多思慮則心熱氣結，其津液亦恆隨氣結於心下，經心火灼煉而為熱痰。朴硝鹹且寒，原為心經對宮之藥，其鹹也屬水，力能勝火，而又寒能勝熱，且其性善消，又能開結，故以治心熱有痰者最宜。至於必同麥麵為丸者，以麥為心穀，心臟有病以朴硝瀉之，即以麥麵補之，補破相濟為用，則藥性歸於和平，而後可久服也。

硝石即焰硝，俗名火硝。味辛微鹹，性與朴硝相近，其寒涼之力遜於朴硝，而消化之力勝於朴硝，若與皂礬同用，善治內傷黃膽，消膽中結石、膀胱中結石（即石淋）及鉤蟲病（鉤蟲及膽石病，皆能令人成黃膽），處方篇中有審定《金匱》硝石礬石散方，可參觀。

附：朴硝煉玄明粉法

用朴硝煉玄明粉，原用萊菔，然此法今人不講久矣。至藥局所鬻者，乃風化硝，非玄明粉也。今並載其法，以備參觀。其法：於冬至後，用潔淨朴硝十斤，白菜菔五斤切片，同入鍋中，用水一斗五升，煮至萊菔爛熟，將萊菔撈出。用竹篩一個，鋪綿紙二層，架托於新缸之上，將硝水濾過。在庭露三日，其硝凝於缸邊，將餘水傾出，曬乾。將硝取出，用砂鍋熬於爐上，融化後，攪以銅鏟，熬至將凝，用鏟鏟出。再裝以瓷罐，未滿者寸許，蓋以瓦片。用釘三個，釘地作鼎足

形，釘頭高二寸，罐置其上，用磚在罐周遭，砌作爐形，多留風眼，爐磚離罐三寸。將木炭火置於爐中，罐四圍上下都被炭火壅培，以至硝紅為度。次日取出，再用綿紙鋪於淨室地上，將硝碾細，用絹羅篩於紙上厚一分。將戶牖皆遮蔽勿透風，三日後取出，其硝潔白如粉，輕虛成片。其性最能降火化痰，清利臟腑。怪證服之可蠲，狂躁用之即愈。搜除百病，安斂心神。大人服二、三錢，小兒服五分至一錢，用白湯或蔥湯融化，空心服之。服藥之日，不宜食他物，惟飲稀粥。服二三次後、自然精神爽健，臟腑調和，津液頓生，百病如失。惟久病泄瀉者，服之不宜。

厚朴解

厚朴味苦辛，性溫，治胃氣上逆，噁心嘔噦，胃氣鬱結脹滿疼痛，為溫中下氣之要藥。為其性溫味又兼辛，其力不但下行，又能上升外達，故《本經》謂其主中風傷寒頭痛，《金匱》厚朴麻黃湯，用治咳而脈浮；與橘、夏並用，善除濕滿；與薑、朮並用，善開寒痰凝結；與硝、黃並用，善通大便燥結；與烏藥並用，善治小便因寒白濁。味之辛者屬金，又能入肺以治外感咳逆，且金能制木，又能入肝、平肝木之橫恣以愈脅下掀疼。其色紫而含有油質，故兼入血分，甄權謂其破宿血，古方治月閉亦有單用之者。諸家多謂其誤服能脫元氣，獨葉香巖謂「多用則破氣，少用則通陽」，誠為確當之論。

【附案】

一少婦因服寒涼開胃之藥太過，致胃陽傷損，飲食不化，寒痰瘀於上焦，常常短氣，治以苓桂朮甘湯加乾薑四錢、厚朴二錢，囑其服後若不覺溫暖，可徐徐將乾薑加重。後數月見其家人，言乾薑加至一兩二錢、厚朴加至八錢，病始脫然。問何以並將厚朴加重？謂「初但將乾薑加重則服之覺悶，後將厚朴漸加重至八錢始服之不覺悶，而寒痰亦從此開豁矣」。由是觀之，元素謂寒脹之病，於大熱藥中兼用厚朴，為結者散之之神藥，誠不誤也。



愚二十餘歲時，於仲秋之月，每至申、酉時腹中作脹，後於將作脹時，但嚼服厚朴六七分許，如此兩日，脹遂不作。服厚朴辛以散之，溫以通之，且能升降其氣化是以愈耳。

愚治衝氣上衝，並挾痰涎上逆之證，皆重用龍骨、牡蠣、半夏、赭石諸藥以降之、鎮之、斂之，而必少用厚朴以宣通之，則衝氣痰涎下降，而中氣仍然升降自若無滯礙。

麻黃解

麻黃味微苦，性溫，為發汗之主藥，於全身之臟腑經絡，莫不透達，而又以逐發太陽風寒為其主治之大綱，故《本經》謂其主中風傷寒頭痛諸證，又謂其主咳逆上氣者，以其善搜肺風兼能瀉肺定喘也。謂其破癥瘕積聚者，以其能透出皮膚毛孔之外，又能深入積痰凝血之中，而消堅化瘀之藥可借之以奏效也。且其性善利小便，不但走太陽之經，兼能入太陽之府，更能由太陽而及於少陰（是以傷寒少陰病用之），並能治瘡疽白硬，陰毒結而不消。

太陽為周身之外廓，外廓者皮毛也，肺亦主之。風寒襲人，不但入太陽，必兼入手太陰肺經，恆有咳嗽微喘之證。麻黃兼入手太陰為逐寒搜風之要藥，是能發太陽之汗者，不僅麻黃，而《傷寒論》治太陽傷寒無汗，獨用麻黃湯者，治足經而兼顧手經也。凡利小便之藥，其中空者多兼能發汗，木通、扁蓄之類是也。發汗之藥，其中空者多兼能利小便，麻黃、柴胡之類是也。傷寒太陽經病，恆兼入太陽之腑（膀胱），致留連多日不解，麻黃治在經之邪，而在腑之邪亦兼能治之。蓋在經之邪由汗而解，而在腑之邪亦可由小便而解，彼後世用他藥以代麻黃者，於此義蓋未之審也。

受風水腫之證，《金匱》治以越婢湯，其方以麻黃為主，取其能祛風兼能利小便也。愚平素臨證用其方，服藥後果能得汗，其小便即頓能利下，而腫亦遂消。特是其方因麻黃與石膏並用，石膏之力原足以監製麻黃，恆有服之不得汗者，今

變通其方，於服越婢湯之前，先用白糖水送服西藥阿斯匹林一瓦半，必能出汗，趁其正出汗時，將越婢湯服下，其汗出必益多，小便亦遂通下。

東人三浦博士，用麻黃十瓦，煎成水一百瓦，為一日之量，分三次服下，治慢性腎炎小便不利及腎臟萎縮小便不利，用之有效有無效，以其證之涼熱虛實不同，不知用他藥佐之以盡麻黃之長也。試觀《金匱》水氣門越婢湯，麻黃輔以石膏，因其脈浮有熱也（脈浮，故係有風，實亦有熱），麻黃附子湯輔以附子，因其脈沉而寒也。通變化裁，息息與病機相符，是真善用麻黃者矣。

鄒潤安曰「麻黃之實，中黑外赤，其莖宛似脈絡骨節，中央赤外黃白（節上微有白皮），實者先天，莖者後天，先天者物之性，其義為由腎及心；後天者物之用，其義為由心及脾胃，由腎及心，所謂腎主五液人心為汗也，由心及脾胃，所以分佈心陽，外至骨節肌肉皮毛，使其間留滯無不傾囊出也。故裁此物之地，冬不積雪，為其能伸陽氣於至陰之中，不為盛寒所遏耳」。

古方中有麻黃，皆先將麻黃煮數沸吹去浮沫，然後納他藥，蓋以其所浮之沫發性過烈，去之所以使其性歸和平也。

麻黃帶節發汗之力稍弱，去節則發汗之力較強，今時用者大抵皆不去節，至其根則純係止汗之品，本是一物，而其根莖之性若是迥殊，非經細心實驗，何以知之。

陸九芝謂「麻黃用數分，即可發汗，此以治南方之人則可，非所論於北方也。蓋南方氣暖，其人肌膚薄弱，汗最易出，故南方有麻黃不過錢之語；北方若至塞外，氣候寒冷，其人之肌膚強厚，若更為出外勞碌，不避風霜之人，又當嚴寒之候，恆用七八錢始能汗者。夫用藥之道，貴因時、因地、因人，活潑斟酌以勝病為主，不可拘於成見也」。

柴胡解

柴胡味微苦，性平。稟少陽生發之氣，為足少陽主藥，而兼治足厥陰。肝氣不舒暢者，此能舒之；膽火甚熾盛者，此能散之；至外感在少陽者，又能助其樞轉以透膈升出之，故《本經》謂其主寒熱，寒熱者少陽外感之邪也。又謂其主心腹腸胃中結氣，飲食積聚，誠以五行之理，木能疏土，為柴胡善達少陽之木氣，則少陽之氣自能疏通胃土之鬱，而其結氣飲食積聚自消化也。

《本經》柴胡主寒熱，山茱萸亦主寒熱。柴胡所主之寒熱，為少陽外感之邪，若傷寒瘧疾是也，故宜用柴胡和解之，山萸肉所主之寒熱，為厥陰內傷之寒熱，若肝臟虛極忽寒忽熱，汗出欲脫是也，故宜用山萸肉補斂之。二證之寒熱雖同，而其病因判若天淵，臨證者當細審之，用藥慎勿誤投也。

憶甲戌年，有王鳳卜者，德州人，作商津門，病寒熱，醫者不知其為肝虛之寒熱也，以為少陽傷寒，以柴胡、枳實等藥投之。服後約半小時，忽全身顫抖不止，怔忡煩亂。急延余治，余持其脈，則手振顫不能循按。問「何以遽爾致此」。曰「因服藥使然」。索方視之，曰「此必其肝陰素虛者也。更用柴胡、枳實，劫肝散氣，禍不旋踵矣」。因憶壽師之言，乃急取生杭萸肉一兩，煎湯送服朱砂細末五分而安。用柴胡者，不可不注意也。

受業張方輿謹注

柴胡非發汗之藥，而多用之亦能出汗。小柴胡湯多用之至八兩，按今時份量計之，且三分之一（古方一煎三服，故可三分），一劑可得八錢。小柴胡湯中如此多用柴胡者，欲借柴胡之力升提少陽之邪以透膈上出也。然多用之，又恐其旁行發汗，則上升之力不專，小柴胡湯之去渣重煎，所以減其發汗之力也。

或疑小柴胡湯既非發汗之藥，何以《傷寒論》百四十九節服柴胡湯後有汗出而解之語？不知此節文義，原為誤下之後服小柴胡湯者說法。夫小柴胡湯，係和解之劑，原非發汗之劑，特以誤下之後，脅下所聚外感之邪，兼散漫於手少陽三焦，因少陽為游部，手、足少陽原相貫徹也。此時仍投以小柴胡和解之，則邪之散漫於三焦者，遂可由手少陽外達之經絡作汗而解，而其留於脅下者，亦與之同氣相求，借徑於手少陽而汗解，故於發熱汗出上，特加一「卻」字，言非發其汗而卻由汗解也。然足少陽之由汗解原非正路，乃其服小柴胡湯後，脅下之邪欲上升透膈，因下後氣虛不能助之通過，而其邪之散漫於手少陽者，且又以同類相招，遂於蓄極之時而開旁通之路，此際幾有正氣不能勝邪氣之勢，故必先蒸蒸而振，大有邪正相爭之象，而後發熱汗出而解，此即所謂戰而後汗也。觀下後服柴胡湯者，其出汗若是之難，則足少陽之病由汗解，原非正路益可知也。是以愚生平臨證，於壯實之人用小柴胡湯時，恆減去人參，而於經醫誤下之後者，若用小柴胡湯必用人參以助其戰勝之力。

用柴胡以治少陽外感之邪，不必其寒熱往來也。但知其人純係外感，而有噁心欲吐之現象，是即病在少陽，欲借少陽樞轉之機透隔上達也。治以小柴胡可隨手奏效，此病機欲上者因而越之也。又有其人不見寒熱往來，亦並不喜嘔，惟頻頻多吐粘涎，斯亦可斷為少陽病，而與以小柴胡湯。蓋少陽之去路為太陰濕土，因包脾之脂膜原與板油相近，而板油亦脂膜，又有同類相招之義，此少陽欲傳太陰，而太陰濕土之氣經少陽之火鑠煉，遂凝為粘涎頻頻吐出，投以小柴胡湯，可斷其人太陰之路，俾由少陽而解矣。又柴胡為瘧疾之主藥，而小心過甚者，謂其人若或陰虛燥熱，可以青蒿代之，不知瘧邪伏於脅下兩板油中，乃足少陽經之大都會，柴胡能入其中，升提瘧邪透隔上出，而青蒿無斯力也。若遇陰虛者，或熱入於血分者，不妨多用滋陰涼血之藥佐之；若遇燥熱者，或熱盛於氣分者，不妨多用潤燥清火之藥佐之。是以愚治瘧疾有重用生地、熟地治癒者，有重用生石膏、知母治癒者，其氣分虛者，又有重用參、耆治癒者，然方中無不用柴胡也。

【附案】

一人年過四旬，脅下掀疼，大便七八日未行，醫者投以大承氣湯，大便未通而脅下之疼轉甚。其脈弦而有力，知係肝氣膽火恣盛也，投以拙擬金鈴瀉肝湯（方載三期四卷係川棟子五錢，乳香、沒藥各四錢，三棱、莪朮各三錢、甘草一錢）加柴胡、龍膽草各四錢，服後須臾大便通下，脅疼頓愈。審是，則《本經》謂「柴胡主腸胃中飲食積聚，推陳致新」者，誠非虛語也。且不但能通大便也，方書通

小便亦多有用之者，愚試之亦頗效驗。蓋小便之下通，必由手少陽三焦，三焦之氣化能升而後能降，柴胡不但升足少陽實兼能升手少陽也。



桂枝解

桂枝味辛微甘，性溫。力善宣通，能升大氣（即胸之宗氣），降逆氣（如衝氣肝氣上衝之類），散邪氣（如外感風寒之類）。仲景苓桂朮甘湯用之治短氣，是取其能升也；桂枝加桂湯用之治奔豚，是取其能降也；麻黃、桂枝、大小青龍諸湯用之治外感，是取其能散也。而《本經》論牡桂（即桂枝），開端先言其主咳逆上氣，似又以能降逆氣為桂枝之特長，諸家本草鮮有言其能降逆氣者，是用桂枝而棄其所長也。又小青龍湯原桂枝、麻黃並用，至喘者去麻黃加杏仁而不去桂枝，誠以《本經》原謂桂枝主吐吸（吐吸即喘），去桂枝則不能定喘矣。乃醫者皆知麻黃瀉肺定喘，而鮮知桂枝降氣定喘，是不讀《本經》之過也。桂枝善抑肝木之盛使不橫恣，又善理肝木之鬱使之條達也。為其味甘，故又善和脾胃，能使脾氣之陷者上升，胃氣之逆者下降，脾胃調和則留飲自除，積食自化。其宣通之力，又能導引三焦下通膀胱以利小便（小便因熱不利者禁用，然亦有用涼藥利小便而少加之作嚮導者），惟上焦有熱及恆患血證者忌用。

桂枝非發汗之品，亦非止汗之品，其宣通表散之力，旋轉於表裡之間，能和營衛、暖肌肉、活血脈，俾風寒自解，麻痺自開，因其味辛而且甘，辛者能散，甘者能補，其功用在於半散半補之間也。故服桂枝湯欲得汗者，必啜熱粥，其不能發汗可知，若陽強陰虛者，誤服之則汗即脫出，其不能止汗可知。

按：《傷寒論》用桂枝，皆注明去皮，非去枝上之皮也。古人用桂枝，惟取當年新生嫩枝，折視之內外如一，皮骨不分，若見有皮骨可以辨者去之不用，故曰去皮，陳修園之侄鳴岐曾詳論之。

【附案】

一婦人，年二十餘，因與其夫反目，怒吞鴉片，已經救愈，忽發喘逆，迫促異常，須臾又呼吸頓停，氣息全無，約十餘呼吸之頃，手足亂動，似有蓄極之勢，而喘復如故，若是循環不已，勢近垂危，延醫數人皆不知為何病。後愚診視，其脈左關弦硬，右寸無力，精思良久，恍然悟曰「此必怒激肝膽之火，挾下焦衝氣上衝胃氣。夫胃氣本下行者，因肝膽之火衝之轉而上逆，並迫肺氣亦上逆，此喘逆迫促所由來也，逆氣上干填塞胸膈，排擠胸中大氣使之下陷。夫肺懸胸中，以大氣為其闢之原動力，須臾胸中無大氣，即須臾不能呼吸，此呼吸頓停所由來也。迨大氣蓄極而通，仍上達胸中鼓動肺臟使得呼吸，逆氣遂仍得施其擊撞，此又病勢之所以循環也。欲治此證，非一藥而兼能升陷降逆不為功，遂單用桂枝尖四錢，煎湯飲下，須臾氣息調和如常。」

徐靈胎謂「受風有熱者，誤用桂枝則吐血」，是誠確當之論。憶曾治一媪，年六旬，春初感冒風寒，投以發表之劑，中有桂枝數錢，服後即愈。其家人為其方靈，貼之壁上。至孟夏，復受感冒，自用其方取藥服之，遂致吐血，經醫治療始愈。蓋前所受者寒風，後所受者熱風，故一則宜用桂枝，一則忌用桂枝，彼用

桂枝湯以治溫病者可不戒哉！特是徐氏既知桂枝誤用可致吐血，而其《洄溪醫案》中載，治一婦人外感痰喘證，其人素有血證，時發時止，發則微嗽（據此數語斷之，其血證當為咳血），因痰喘甚劇，病急治標，投以小青龍湯而愈。

按：用小青龍湯治外感痰喘，定例原去麻黃加杏仁，而此證則當去桂枝留麻黃，且仿《金匱》用小青龍湯之法，再加生石膏方為穩安。蓋麻黃、桂枝，皆能定喘，而桂枝動血分，麻黃不動血分，是以宜去桂枝留麻黃，再借石膏涼鎮之力以預防血分之妄動，乃為萬全之策，而當日徐氏用此方，未言加減，豈略而未言乎？抑用其原方乎？若用其原方，病雖治癒，亦幾等孤注之一擲矣。

三七味苦微甘，性平（諸家多言性溫，然單服其末數錢，未有覺溫者）。善化瘀血，又善止血妄行，為吐衄要藥。病癒後不至瘀血留於經絡證變虛勞（凡用藥強止其血者，恆至血瘀經絡成血痺虛勞）。兼治二便下血，女子血崩，痢疾下血鮮紅（宜與鴉膽子並用）久不愈，腸中腐爛，浸成潰瘍，所下之痢色紫腥臭，雜以脂膜，此乃腸爛欲穿（三七能化腐生新，是以治之）。為其善化瘀血，故又善治女子癥瘕，月事不通，化瘀血而不傷新血，允為理血妙品。外用善治金瘡，以其末敷傷口，立能血止疼愈。若跌打損傷，內連臟腑經絡作疼痛者，外敷、內服奏效尤捷，瘡瘍初起腫疼者，敷之可消（當與大黃末等分，醋調敷）。至《本草備要》所謂，近出一種，葉似菊艾而勁厚有歧尖，莖有赤稜，夏秋開花，花蕊如金絲，盤紐可愛，而氣不香，根小如牛蒡，味甘，極易繁衍，云是三七，治金瘡折傷血病甚效者，是劉寄奴非三七也。

三七之性，既善化血，又善止血，人多疑之，然有確實可徵之處。如破傷流血者，用三七末擦之則其血立止，是能止血也；其破處已流出之血，著三七皆化為黃水，是能化血。

【附案】

本邑留壇莊高姓童子，年十四五歲，吐血甚劇，醫治旬日無效，勢甚危急。倉猝遣人詢方，俾單用三七末一兩，分三次服下，當日服完其血立止。

本莊黃氏婦，年過四旬，因行經下血不止，彼時愚甫弱冠，為近在比鄰，延為診視，投以尋常治血崩之藥不效，病勢浸至垂危。後延鄰村宿醫高魯軒，投以《傳青主女科》中治老婦血崩方，一劑而愈。其方係黃耆、當歸各一兩，桑葉十四片，煎湯送服三七細末三錢。後愚用此方治少年女子血崩亦效，惟心中覺熱，或脈象有熱者，宜加生地黃一兩。

奉天大東關王姓少年，素患吐血，經醫調治已兩月不吐矣。而心中發悶，發熱，時覺疼痛，廉於飲食，知係吐血時醫者用藥強止其血，致留瘀血為恙也。為疏方，用滋陰養血健胃利氣之品，煎湯送服三七細末二錢，至二煎仍送服二錢，四劑後又復吐血，色多黑紫，然吐後則悶熱疼痛皆減，知為吉兆，仍與前方，數劑後又吐血一次，其病從此竟愈，此足徵三七化瘀之功也。

鄰村張馬村雇一牧童，夏日牧牛田間，眾牧童嬉戲，強屈其項背，納頭褲中，倒縛其手，戲名為看瓜。後經人救出，氣息已斷。為盤膝坐，捶其腰背，多時方蘇，惟覺有物填塞胸膈，壓其胸中大氣，妨礙呼吸，劇時氣息仍斷，目翻身挺。此必因在褲中悶極之時，努掙不出，熱血隨努掙之氣上溢而停於膈上也。俾單用三七細末三錢，開水送服，兩次痊愈。

按：三七之性，既善化血，又善止血，人多疑之，然有確實可徵之處。如破傷流血者，用三七末擦之則其血立止，是能止血也；其破處已流出之血，著三七皆化為黃水是能化血。

參觀。受業高崇勳按：三七另有精義，發揮見五期二卷（三七有殊異之功能），可

乙丑孟夏末旬，愚寢室窗上糊紗一方以透空氣，夜則以窗簾障之。一日寢時甚熱，未下窗簾。愚睡正當窗，醒時覺涼風撲面襲入右腮，因睡時向左側也。至午後右腮腫疼，知因風襲，急服西藥阿斯匹林汗之。乃汗出已透，而腫疼依然。遲至翌晨，病又加劇，手按其處，連牙床亦腫甚，且覺心中發熱。於斯連服清火、散風、活血消腫之藥數劑。心中熱退，而腫疼仍不少減，手撫之肌膚甚熱。遂用醋調大黃細末屢敷其上，初似覺輕。遲半日仍無效，轉覺其處畏涼。因以熱水沃巾熨之，又見輕。乃屢熨之，繼又無效。因思未受風之先，頭面原覺發熱，遽為涼風所襲，則涼熱之氣凝結不散。因其中涼熱皆有，所以乍涼之與熱相宜則覺輕，乍熱之與涼相宜亦覺輕也。然氣凝則血滯腫疼，久不愈必將化膿。遂用山甲、皂刺、乳香、沒藥、粉草、連翹諸藥迎而治之。服兩劑仍分毫無效。浸至其疼徹骨，夜不能眠。躊躇再四，恍悟三七外敷，善止金瘡作疼，以其善化瘀血也。若內服之，亦當使瘀血之聚者速化而止疼。遂急取三七細末二錢服之，約數分鐘其疼已見輕，逾一句鐘即疼愈強半矣。當日又服兩次，至翌晨已不覺疼，腫亦見消。繼又服兩日，每日三次，其腫消無芥蒂。

丙寅季春，表侄劉驥如，右腿環跳穴處，腫起一塊，大如掌，按之微硬，皮色不變，繼則漸覺腫處骨疼，日益加重。及愚診視時，已三閱月矣。愚因思其處

正當骨縫，其覺骨中作疼者，必其骨縫中有瘀血也。俾日用三七細末三錢，分作兩次服下。至三日，骨已不疼。又服數日，其外皮色漸紅而欲腐。又數日，瘡頂自潰，流出膿水若干，遂改用生黃耆、天花粉各六錢，當歸、甘草各三錢，乳香、沒藥各一錢。連服十餘劑，其瘡自內生肌排膿外出，結痂而愈。按此瘡若不用三七托骨中之毒外出，其骨疼不已，瘡毒內陷，或成附骨疽為不治之證。今因用三七，不但能托骨中之毒外出，並能化瘡中之毒使速潰膿（若早服三七並可不潰膿而自消），三七之治瘡，何若斯之神效哉！因恍悟愚之右腮腫疼時，其腫疼原連於骨，若不服三七將毒托出，必成骨槽風證無疑也。由此知凡瘡之毒在於骨者，皆可用三七托之外出也。

天津胡氏婦，信水六月未通，心中發熱，脹悶。治以通經之藥，數劑通下少許。自言少腹仍有發硬一塊未消。其家適有三七若干，俾為末，日服四五錢許，分數次服下。約服盡三兩，經水大下，其發硬之塊亦消矣。審斯，則凡人腹中有堅硬之血積，或婦人產後惡露未盡結為癥瘕者，皆可用三七徐消之也。

天津日租界劉問籌，偶患大便下血甚劇。西醫注射以止血藥針，其血立止。而血止之後，月餘不能起床，身體酸軟，飲食減少。其脈芤而無力，重按甚澀。因謂病家曰「西人所注射者，流動麥角膏也。其收縮血管之力甚大，故注射之後，其血頓止。然止後宜急服化瘀血之藥，則不歸經之血，始不至凝結於經絡之間為恙。今但知止血，而不知化血，積之日久必成勞瘵，不僅酸軟減食已也。然此時

尚不難治，下其瘀血即愈矣」。俾日用三七細末三錢，空心時分兩次服下。服至三次後，自大便下瘀血若干，色紫黑。從此每大便時，必有瘀血隨下。至第五日，所下漸少。至第七日，即不見瘀血矣。於斯停藥不服。旬日之間，身體復初。由斯觀之，是三七一味即可代《金匱》之下瘀血湯，且較下瘀血湯更穩妥也。

【附錄】

山東沂水劉惠民來函：

仲夏，楊姓女，年七歲，患疳疾兼大便下血，身形羸弱，不思飲食，甚為危險。前所服中西治疳積之藥若干，均無效，來寓求治。後學查看腹部，其回血管現露，色青微紫，腹脹且疼，兩顴發赤，潮熱有汗，目睛白處有赤絲，口乾不渴，六脈沉數，肌膚甲錯，毛髮焦枯。審證辨脈，知係瘀血為恙也。躊躇再四，忽憶及向閱《衷中參西錄》，見先生論用三七之特殊功能，歷數諸多奇效，不但善於止血，且更善化瘀血。遂俾用三七研為精粉，每服七分，朝夕空心時各服一次，服至五日，而大便下血愈。又服數日，疳疾亦愈。用三七一味，治癒中、西諸醫不能治之大病，藥性之妙用，真令人不可思議矣。



滑石解

滑石色白味淡，質滑而軟，性涼而散。《本經》謂其主身熱者，以其微有解肌之力也，謂其主癰閉者，以其饒有淡滲之力也，且滑者善通竅絡，故又主女子乳難；滑而能散，故又主胃中積聚，因熱小便不利者，滑石最為要藥，若寒溫外感諸證，上焦燥熱下焦滑瀉無度，最為危險之候，可用滑石與生山藥各兩許，煎湯服之，則上能清熱，下能止瀉，莫不隨手奏效（有附案載於山藥條下可參觀）。外感大熱已退而陰虧脈數不能自復者，可於大滋真陰藥中（若熟地黃、生山藥、枸杞之類）少加滑石，則外感餘熱不至為滋補之藥逗留，仍可從小便瀉出，則其病必易愈。若與甘草為末（滑石六錢，甘草一錢，名六一散，亦名天水散）服之，善治受暑及熱痢。若與赭石為末服之，善治因熱吐血、衄血。若其人蘊有濕熱，周身漫腫、心腹膨脹、小便不利者，可用滑石與土狗研為散服之，小便通利腫脹自消，至內傷陰虛作熱，宜用六味地黃湯以滋陰者，亦可少加滑石以代苓、澤，則退熱較速。蓋滑石雖為石類，而其質甚軟，無論湯劑丸散，皆與脾胃相宜，故可加於六味湯中以代苓、澤。其滲濕之力，原可如苓、澤行熟地之滯泥，而其性涼於苓、澤，故又善佐滋陰之品以退熱也。

天水散為河間治暑之聖藥，最宜於南方暑證。因南方暑多挾濕，滑石能清熱兼能利濕，又少加甘草以和中補氣（暑能傷氣），是以用之最宜。若北方暑證，

不必兼濕，甚或有兼燥，再當變通其方，滑石、生石膏各半，與甘草配製，方為適宜。

牛膝解

牛膝味甘微酸，性微溫。原為補益之品，而善引氣血下注，是以用藥欲其下行者，恆以之為引經。故善治腎虛腰疼、腿疼，或膝疼不能屈伸，或腿痿不能任地，兼治女子月閉血枯，催生下胎。又善治淋疼，通利小便，此皆其力善下行之效也。然《名醫別錄》又謂其「除腦中痛」，時珍又謂其「治口瘡齒痛者」何也？蓋此等證，皆因其氣血隨火熱上升所致，重用牛膝引其氣血下行，並能引其浮越之火下行，是以能愈也。愚因悟得此理，用以治腦充血證，伍以赭石、龍骨、牡蠣諸重墜收斂之品，莫不隨手奏效，治癒者不勝紀矣。為其性專下注，凡下焦氣化不固，一切滑脫諸證皆忌之。此藥懷產者佳，川產者有紫、白兩種色，紫者佳。

【附案】

在遼寧時，曾治一女子師範女教員，月信期年未見，方中重用牛膝一兩，後復來診，言服藥三劑月信猶未見，然從前曾有腦中作疼病，今服此藥腦中清爽異常，分毫不覺疼矣。愚聞此言，乃知其腦中所以作疼者，血之上升者多也。今因服藥而不疼，想其血已隨牛膝之引而下行，遂於方中加蠅蟲五枚，連服數劑，月信果通。

友人袁霖普，素知醫，時當季春，牙疼久不愈，屢次服藥無效。其脈兩寸甚實，俾用懷牛膝、生赭石各一兩，煎服後，疼愈強半，又為加生地黃一兩，又服兩劑，遂霍然痊愈。

遠志解

遠志味酸微辛，性平。其酸也能闢，其辛也能辟，故其性善理肺，能使肺葉之闢辟純任自然，而肺中之呼吸於以調，痰涎於以化，即咳嗽於以止矣。若以甘草輔之，誠為養肺要藥，至其酸斂之力，入肝能斂戢肝火，入腎能固澀滑脫，入胃又能助生酸汁，使人多進飲食，和平純粹之品，夫固無所不宜也。若用水煎取濃汁，去渣重煎，令其汁濃若薄糊，以敷腫疼瘡瘍及乳癰甚效，若恐其日久發酵，每一兩可加礪砂二錢溶化其中。愚初次細嚼遠志嘗之，覺其味酸而實兼有礬味，西人謂其含有林檎酸，而林檎酸中固無礬也。後乃因用此藥，若末服至二錢可作嘔吐，乃知其中確含有礬味，因悟礬能利痰，其所以能利痰者，亦以其含有礬味也。礬能解毒，《本草綱目》謂其解天雄、附子、烏頭毒，且並能除瘡瘍腫疼者，亦以其兼有礬味也。是以愚用此藥入湯劑時，未嘗過二錢，恐多用之亦可作嘔吐也。

龍膽草解

龍膽草味苦微酸，性寒，色黃屬土，為胃家正藥。其苦也能降胃氣、堅胃質，其酸也能補益胃中酸汁、消化飲食，凡胃熱氣逆、胃汁短少、不能食者，服之可以開胃進食，西人渾以健胃藥稱之，似欠精細。為其微酸屬木，故又能入膽肝、滋肝血、益膽汁、降肝膽之熱使不上炎，舉凡目疾、吐血、衄血、二便下血、驚癇、眩暈，因肝膽有熱而致病者，皆能愈之。其瀉肝膽實熱之力，數倍於芍藥，而以斂戢肝膽虛熱，固不如芍藥也。

半夏解

半夏味辛，性溫，有毒。凡味辛之至者，皆稟秋金收降之性，故力能下達為降胃安衝之主藥。為其能降胃安衝，所以能止嘔吐，能引肺中、胃中濕痰下行，納氣定喘。能治胃氣厥逆、吐血、衄血（《內經》謂「陽明厥逆衄血」，陽明厥逆，即胃氣厥逆也）。惟藥局因其有毒，皆用白礬水煮之，相制太過，毫無辛味，轉多礬味，令人嘔吐，即藥局所鬻之清半夏中亦有礬，以之利濕痰猶可，若以止嘔吐及吐血、衄血，殊為非宜。愚治此等證，必用微溫之水淘洗數次，然後用之，然屢次淘之則力減，故須將份量加重也。

愚因藥局半夏制皆失宜，每於仲春季秋之時，用生半夏數斤，浸以熱湯，日換一次，至旬日，將半夏剖為兩瓣，再入鍋中，多添涼水煮一沸，速連湯取出，盛盆中，候水涼，淨曬乾備用。每用一兩，煎湯兩茶盅，調入淨蜂蜜二兩，徐徐咽之。無論嘔吐如何之劇，未有不止者。蓋古人用半夏，原湯泡七次即用，初未有用白礬制之者也。

【附案】

鄰村王姓童子，年十二三歲，忽晨起半身不能動轉，其家貧無錢購藥，贈以自制半夏，俾為末每服錢半，用生薑煎湯送下，日兩次，約服二十餘日，其病竟愈。蓋以自制半夏辛味猶存，不但能利痰，實有開風寒濕痺之力也。

東洋野津猛男曰；「英國軍醫官阿來甫屢屢吐，絕食者久矣。其弟與美醫寧馬氏協力治療之，嘔吐卒不止」，乞診於余，當時已認患者為不起之人，但求余一決其死生而已。美醫寧馬氏等遂將患者之證狀及治療之經過，一一告余。余遂向兩氏曰「餘有一策，試姑行之」。遂辭歸檢查漢法醫書，制小半夏加茯苓湯，貯瓶令其服用，一二服後奇效忽顯，數日竟回復原有之康健。至今半夏浸劑，遂為一種之鎮嘔劑，先行於醫科大學，次及於各病院與醫家。

按：此證若用大半夏湯加赭石尤效，因吐久則傷津傷氣，方中人參能生津補氣，加赭石以助之，力又專於下行也。若有熱者，可再加天冬佐之，若無自製半夏，可用藥局清半夏兩許，淘淨礬味入煎。

栝 蒞 解

栝蒞味甘，性涼，能開胸間及胃口熱痰，故仲景治結胸有小陷胸湯，栝蒞與連、夏並用；治胸痺有栝蒞薤白等方，栝蒞與薤、酒、桂、朴諸藥並用，若與山甲同用，善治乳癰（栝蒞兩個，山甲二錢煎服）。若與赭石同用，善止吐衄（栝蒞能降胃氣胃火故治吐衄）。若但用其皮，最能清肺、斂肺、寧嗽、定喘（須用新鮮者方效）。若但用其瓢（用溫水將瓢泡開，揀出仁，餘煎一沸，連渣服之），最善滋陰、潤燥、滑痰、生津，若但用其仁（須用新炒熟者，搗碎煎服），其開胸降胃之力較大，且善通小便。

【附案】

鄰村高魯軒，邑之宿醫也。甲午仲夏，忽來相訪，言第三子年十三歲，於數日之間，痰涎鬱於胸中，煩悶異常，劇時氣不上達，呼吸即停，目翻身挺，有危在頃刻之狀。連次用藥，分毫無效，敢乞往為診視，施以良方。時患有急務未辦，欲遲數點鐘再去，彼謂此病已至極點，若稍遲延恐無及矣。於是遂與急往診視，其脈關前浮滑，舌苔色白，肌膚有熱，知其為溫病結胸，俾用栝蒞仁四兩，炒熟（新炒者其氣香而能通）搗碎，煎湯兩茶盅，分兩次溫飲下，其病頓愈。隔數日，其鄰高姓童子，亦得斯證，俾用新炒蒞仁三兩，蘇子五錢，煎服，亦一劑而愈。蓋傷寒下早成結胸，溫病未經下亦可成結胸，有謂栝蒞力弱，故小陷胸湯中必須



伍以黃連、半夏始能建功者，不知枯萋力雖稍弱，重用之則轉弱為強，是以重用至四兩，即能隨手奏效，挽回人命於頃刻也。

天花粉解

天花粉，栝蒌根也，色白而亮者佳，味苦微酸，性涼而潤。清火生津，為止渴要藥（《傷寒論》小柴胡湯，渴者去半夏加栝蒌根，古方書治消渴亦多用之）。為其能生津止渴，故能潤肺，化肺中燥痰，寧肺止嗽，治肺病結核。又善通行經絡，解一切瘡家熱毒，疔癰初起者，與連翹、山甲並用即消，瘡瘍已潰者，與黃耆、甘草（皆須用生者）並用，更能生肌排膿，即潰爛至深，旁串他處，不能敷藥者，亦可自內生長肌肉，徐徐將膿排出（有案附載黃耆解下可參觀）。大凡籐蔓之根，皆能通行經絡，而花粉又性涼解毒，是以有種種功效也。

乾薑解

乾薑，味辛，性熱，為補助上焦、中焦陽分之二要藥。為其味至辛，且具有宣通之力，與厚朴同用，治寒飲杜塞胃脘，飲食不化；與桂枝同用，治寒飲積於胸中，呼吸短氣；與黃耆同用，治寒飲漬於肺中，肺痿咳嗽；與五味子同用，治感寒肺氣不降，喘逆迫促；與赭石同用，治因寒胃氣不降，吐血、衄血；與白朮同用，治脾寒不能統血，二便下血，或脾胃虛寒，常作泄瀉；與甘草同用，能調其辛辣之味，使不刺激，而其溫補之力轉能悠長。《本經》謂其逐風濕痺，指風濕痺之偏於寒者而言也，而《金匱》治熱癰瘡，亦用乾薑，風引湯中與石膏、寒水石並用者是也。此乃取其至辛之味，以開氣血之凝滯也。有謂炮黑則性熱，能助相火者，不知炮之則味苦，熱力即減，且其氣輕浮，轉不能下達。觀後所引陳氏釋《本經》之文自明。

陳修園曰「乾薑氣溫，稟厥陰風木之氣，若溫而不烈，則氣歸平和而屬土矣。味辛得陽明燥金之味，若辛而不偏，則金能生水轉潤矣，故乾薑為臟寒之二要藥也。胸中者肺之分也，肺寒則金失下降之性，氣壅於胸中而滿也。滿則氣上，所以咳逆上氣之證生焉，其主之者辛散溫行也。中者土也，土虛則寒，而此能溫之，止血者（多指下血而言，若吐血衄血，亦間有因寒者，必與赭石同用方妥），以陽虛陰必走，得暖則血自歸經也。出汗者，辛溫能發散也，逐風濕痺者，治寒邪之留於筋骨也，治腸瀉下利者，除寒邪之陷於腸胃也。以上諸主治，皆取其雄烈之

用，如孟子所謂剛大浩然之氣，塞乎天地之間也。生則辛味渾全，故又申言之曰，生者尤良。即《金匱》治肺痿用甘草乾薑湯，自注炮用，以肺虛不能驟受過辛之味，炮之使辛味稍減，亦一時之權宜，非若後世炮黑炮炭，全失薑之本性也。」

徐靈胎曰「凡味厚之藥主守，氣厚之藥主散，乾薑氣味俱厚，故散而能守。夫散不全散，守不全守，則旋轉於經絡臟腑之間，驅寒除濕、和血通氣所必然矣，故性雖猛峻，不妨服食」。

【附案】

愚在滄州賈官屯張壽田家治病，見有制丸藥器具，問用此何為？答謂「舍妹日服礪石滾痰丸，恐藥鋪治不如法，故自製耳」。愚曰「礪石滾痰丸，原非常服之藥，何日日服之」。壽田謂「舍妹素多痰飲，杜塞胃院作脹滿，一日不服滾痰丸，即不欲進食，今已服月餘，亦無他變，想此藥與其氣質相宜耳」。愚再三駁阻，彼終不以為然。後隔數月，迎愚往為診治，言從前服滾痰丸飲食加多，繼則飲食漸減，後則一日不服藥即不能進食，今則服藥亦不能進食，日僅一餐，惟服稀粥少許，且時覺熱氣上浮，耳鳴欲聾。脈象浮大，按之甚軟，知其心肺陽虛，脾胃氣弱，為服苦寒攻瀉之藥太過，故病証脈象如斯，擬治以理飲湯（方在三期三卷，係乾薑五錢，於朮四錢，桂枝尖、生杭芍、茯苓片、炙甘草各二錢，陳皮、厚朴各錢半）。壽田謂「從前醫者用桂、附，即覺上焦煩躁不能容受」。愚曰「桂、附原非正治心肺脾胃之藥，況又些些用之，病重藥輕，宜其不受，若拙擬理飲湯，

與此證針芥相投，服之必效，若畏其藥不敢輕服，單用乾薑「五錢試服亦可。於斯遂單將乾薑五錢煎服，耳即不鳴，須更覺胸次開通，可以進食。繼投以理飲湯，服數劑後，心中轉覺甚涼，遂將乾薑改用一兩，甘草、厚朴亦稍加多，連服二十餘劑痊愈。

婦人年四十許，上焦滿悶煩躁，思食涼物，而偶食之則滿悶益甚，且又黎明泄瀉，日久不愈，心腹浸形膨脹，脈象弦細而遲。知係寒飲結胸，阻塞氣化，欲投以理飲湯。病家聞而遲疑，亦俾先煎乾薑數錢服之，胸中煩躁頓除。為其黎明泄瀉，遂將理飲湯去厚朴、白芍，加生雞內金錢半，補骨脂三錢，連服十劑諸病皆愈。

婦人年近五旬，常覺短氣，飲食減少，屢延醫服藥，或投以宣通，或投以升散，或投以健補脾胃兼理氣之品，皆分毫無效。浸至飲食日減，羸弱不起，奄奄一息，病家亦以為不治之證。後聞愚在鄰村屢救危險之證，延為診視。其脈弦細欲無，頻吐稀涎，心中覺有物杜塞，氣不上達，知為寒飲凝結。投以理飲湯，方中乾薑改用七錢，連服三劑，胃口開通，又覺呼吸無力，遂於方中加生黃耆三錢，連服十餘劑痊愈。

一婦人年四十許，胸中常覺滿悶發熱，或旬日或浹辰之間必大喘一兩日，醫者用清火理氣之藥，初服稍效，久服病轉增劇。其脈沉細，幾不可見，病家問係何病因？愚曰「此乃心肺陽虛，不能宣通脾胃，以致多生痰飲也。人之脾胃屬土，

若地輿然，心肺居臨其上，正當太陽部位（膈上屬太陽經，觀《傷寒論》〈太陽篇〉自知），其陽氣宣通敷布，若日麗中天，暖光下照，而胃中所納水穀，實藉其陽氣宣通之力，以運化精微而生氣血，傳送渣滓而為二便，清升濁降，痰飲何由而生。惟心肺陽虛，不能如離照當空，脾胃即不能藉其宣通之力以運化傳送，於是飲食停滯胃口，若大雨之後陰霧連旬，遍地汗淖不能乾滲而痰飲生矣。痰飲既生，日積月累，鬱滿上焦則作悶，漬滿肺竅則作喘，阻遏心肺陽氣不能四布則作熱。或逼陽氣外出則周身發熱，迫陽氣上浮則目眩耳聾。醫者不知病源，猶用涼藥清之，勿怪其久而增劇也。病家甚驢愚言，遂為開理飲湯方，服一劑心中熱去，數劑後轉覺涼甚，遂去芍藥，連服二十餘劑，胸次豁然，喘不再發。

歲在壬寅，訓蒙於邑北境劉仁村莊，愚之外祖家也。有學生劉玉良者，十三歲，一日之間，衄血四次，診其脈甚和平，詢其心中不覺涼熱。為血之證，熱者居多，且以童子少陽之體，時又當夏令，遂略用清涼止血之品，衄益甚，脈象亦現微弱。知其胃氣因寒不降，轉迫血上溢而為衄，（《內經》謂陽明厥逆衄血），投以溫降湯（方載三期二卷，係乾薑、白朮、清半夏各三錢，生懷山藥六錢，生赭石細末四錢，生抗芍，生薑各二錢，厚朴錢半），一劑即愈。

又有他學校中學生，年十四歲，吐血數日不愈。其吐血之時，多由於咳嗽，診其脈象遲滯，右關尤甚。疑其脾胃虛寒，不能運化飲食，詢之果然。蓋吐血之證，多由於胃氣不降，飲食不能運化。胃氣即不能下降，咳嗽之證，多由於痰飲

入肺，飲食遲於運化，又必多生痰飲，因痰飲而生咳嗽，因咳嗽而氣之不降者，更轉而上逆，此吐血之所由來也。亦投以溫降湯，一劑血止，接服數劑，飲食運化，咳嗽亦愈。

近在瀋陽醫學研究社，與同人論吐血、衄血之證，間有因寒者，宜治以乾薑。社友李子林謂從前小東關有老醫徐敬亭者，曾用理中湯治癒歷久不愈之吐血證，是吐血證誠有因胃寒者之徵也。然徐君但知用理中湯以暖胃補胃，而不知用赭石、半夏佐之，以降胃氣，是處方猶未盡善也。特是藥房製藥多不如法，雖清半夏中亦有礬，以治血證吐證，必須將礬味用微溫之水淘淨，然淘時必於方中原定之分量外加多數錢淘之，以補其淘去礬味所減之分量及所減之藥力。

鄰村高某年四十餘，小便下血，久不愈。其脈微細而遲，身體虛弱惡寒，飲食減少。知其脾胃虛寒，中氣下陷，黃坤載所謂「血之亡於便溺者，太陰不升也」。為疏方：乾薑、於朮各四錢，生山藥、熟地各六錢，烏附子、炙甘草各三錢，煎服一劑血見少，連服十餘劑痊愈。

生薑解

將鮮薑種於地中，秋後剖出去皮曬乾為乾薑；將薑上所生之芽種於地中，秋後剖出其當年所生之薑為生薑。是以乾薑為母薑，生薑為子薑，乾薑老而生薑嫩也。為生薑係嫩薑，其味之辛、性之溫，皆亞於乾薑，而所具生發之氣則優於乾薑，故能透表發汗。與大棗同用，善和營衛，蓋借大棗之甘緩，不使透表為汗，惟旋轉於營衛之間，而營衛遂因之調和也。其辛散之力，善開痰理氣，止嘔吐，逐除一切外感不正之氣。若但用其皮，其溫性稍減，又善通利小便。能解半夏毒及菌蕈諸物毒。食料中少少加之，可為健胃進食之品。瘡家食之，致生惡肉，不可不知。



附子、烏頭、天雄解

附子味辛，性大熱。為補助元陽之主藥，其力能升能降，能內達能外散，凡凝寒錮冷之結於臟腑，著於筋骨，痺於經絡血脈者，皆能開之、通之。而溫通之中，又大具收斂之力，故治汗多亡陽（汗多有亡陽亡陰之殊，亡陽者身涼，亡陰者身熱，臨證時當審辨。涼亡陽者，宜附子與萸肉、人參並用；熱亡陰者，宜生地與萸肉、人參並用），腸冷泄瀉，下焦陽虛陰走，精寒自遺，論者謂善補命門相火，而服之能使心脈跳動加速，是於君相二火皆能大有補益也。

種附子於地，其當年旁生者為附子，其原種之附子則成烏頭矣。烏頭之熱力減於附子，而宣通之力較優，故《金匱》治歷節風有烏頭湯；治心痛徹背、背痛徹心有烏頭赤石脂丸，治寒疝有烏頭煎、烏頭桂枝湯等方。若種後不旁生附子，惟原種之本長大，若蒜之獨頭無瓣者，名謂天雄，為其力不旁溢，故其溫補力更大而獨能稱雄也。今藥局中所鬻之烏附子，其片大而且圓者即是天雄，而其黑色較尋常附子稍重，蓋因其力大而色亦稍變也。附子、烏頭、天雄，皆反半夏。

陳修園曰「附子主寒濕，諸家俱能解到，而仲景用之，則化而不可知之謂神。且夫人之所以生者陽也，亡陽則死。亡字分二音，一無方切，音忘，逃也，即《春秋傳》『出亡』之義；一微夫切，音無，無也，《論語》『亡而為有』，《孟子》『一問有餘，曰亡矣，之義也。誤藥大汗不止為亡陽，如唐之幸蜀，仲景用四逆湯、真武湯等法以迎之；吐利厥冷為亡陽，如周之守府，仲景用通脈四逆湯、薑附湯

以救之。且太陽之標陽，外呈而發熱，附子能使之交於少陰而熱已，少陰之神機病，附子能使自下而上而脈生，周身通達而厥愈。合苦甘之芍、草而補虛，合苦淡之苓、芍而溫固，玄妙不能盡述。

按：其立法與《本經》之說不同，豈仲景之創見歟？然《本經》謂氣味辛溫有大毒七字，仲景即於此悟出附子大功用。溫得東方風木之氣，而溫之至則為熱，《內經》所謂「少陰之上君火主之」是也；辛為西方燥金之味，而辛之至則反潤，《內經》所謂「辛以潤之」是也。凡物性之偏處則毒，偏而至於無可加處則大毒，因「大毒」二字，知附子之溫為至極，辛為至極也。仲景用附子之溫有二法，雜於苓、芍、甘草中，雜於地黃、澤瀉中，如冬日可愛補虛法也，佐以薑、桂之熱，佐以麻、辛之雄，如夏日可畏救陽法也。用附子之辛又有三法，桂枝附子湯、桂枝附子去桂加白朮湯、甘草附子湯，辛燥以祛除風濕也；附子湯、芍藥甘草附子湯，辛潤以溫補水臟也。若白通湯、通脈四逆湯、加人尿豬膽汁湯，則取西方秋收之氣，得復元陽而有天封大固之妙矣。

【附案】

一少婦上焦滿悶煩躁，不能飲食，繞臍板硬，月信兩月未見。其脈左右皆弦細。仲景謂雙弦者寒，偏弦者飲，脈象如此，其為上有寒飲、下有寒積無疑。其煩躁者腹中寒氣充溢，迫其元陽浮越也，投以理飲湯（方載乾薑解下），去桂枝加附子三錢，方中芍藥改用五錢，一劑滿悶煩躁皆見愈。又服一劑能進飲食，且

覺腹中涼甚，遂去芍藥將附子改用五錢，後來又將乾薑減半，附子加至八錢，服逾十劑，大便日行四五次，所下者多白色冷積，湯藥仍日進一劑，如此五日，冷積瀉盡，大便自止。再診其脈，見有滑象，尺部較甚，疑其有妊，俾停藥勿服，後至期果生子。夫附子原有殞胎之說，此證服附子如此之多，而胎固安然無恙，誠所謂「有故無殞亦無殞也」。

肉桂解

肉桂味辛而甘，氣香而竄，性大熱純陽，為其為樹身近下之皮，故性能下達，暖丹田，壯元陽，補相火。其色紫赤，又善補助君火，溫通血脈，治周身血脈因寒而痺，故治關節腰肢疼痛及瘡家白疽。木得桂則枯，且又味辛屬金，故善平肝木，治肝氣橫恣多怒，若肝有熱者，可以龍膽草、芍藥諸藥佐之。《本經》謂其為諸藥之先聘通使，蓋因其香竄之氣，內而臟腑筋骨，外而經絡腠理，倏忽之間莫不周遍，故諸藥不能透達之處，有肉桂引之，則莫不透達也。

按：附子、肉桂，皆氣味辛熱，能補助元陽，然至元陽將絕，或浮越脫陷之時，則宜用附子而不宜用肉桂。誠以附子但味厚，肉桂則氣味俱厚，補益之中實兼有走散之力，非救危扶顛之大藥，觀仲景《傷寒論》少陰諸方，用附子而不用肉桂可知也。

肉桂氣味俱厚，最忌久煎，而坊間又多搗為細末，數沸之後，藥力即減，況煎至數十沸乎。至於石膏氣味俱淡，且係石質，非搗細煎之，則藥力不出，而坊間又多不為搗細。是以愚用石膏，必搗為細末然後煎之。若用肉桂，但去其粗皮，而以整塊入煎。至藥之類肉桂、類石膏者，可以肉桂、石膏為例矣。肉桂味辣而兼甜，以甜勝於辣者為佳，辣勝於甜者次之。然約皆從生旺樹上取下之皮，故均含有油性，皆可入藥，至其薄厚不必計也。若其味不但不甚甜，且不甚辣，又兼甚乾枯者，是係枯樹之皮，不可用也。

【附案】

奉天警務處長王連波夫人，年三十許，咳嗽痰中帶血，劇時更大口吐血，常覺心中發熱，其脈一分鐘九十至，按之不實，投以滋陰寧嗽降火之藥不效。因思此證若用藥專止其嗽，嗽愈其吐血亦當愈，遂用川貝兩許，煎取清湯四茶杯，調入生山藥細末一兩，煮作稀粥，俾於一日之間連進二劑，其嗽頓止，血遂不吐。數日後，證又反復，自言夜間睡時常作惱怒之夢，怒極或夢中哭泣，醒後必然吐血。據所云云，其肝氣必然鬱遏，遂改用舒肝瀉肝之品，而以養肝鎮肝之藥輔之，數劑病稍輕減，而猶間作惱怒之夢，夢後仍復吐血。再四躊躇，恍悟平肝之藥以肉桂為最要，因肝屬木，木得桂則枯也，而單用之則失於熱；降胃止血之藥以大黃為最要，胃氣不上逆，血即不逆行也，而單用之又失於寒。若二藥並用，則寒熱相濟，性歸和平，降胃平肝，兼顧無遺。況俗傳原有用此二藥為散治吐衄者，用於此證，當有捷效，若再以重墜之藥輔之，則力專下行，其效當更捷也。遂用大黃、肉桂細末各一錢和勻，更用生赭石細末六錢，煎湯送下，吐血頓愈，惱怒之夢亦無矣，即此觀之，肉桂真善於平肝哉！

濟南金姓，寓奉天大西關月窗胡同，得吐血證甚劇，屢次服藥無效。其人正當壯年，身體亦強壯，脈象有力，遂用大黃末二錢，肉桂末一錢，又將赭石細末六錢，和於大黃、肉桂末中，分三次用開水送服，病頓愈。後其方屢試皆效，遂將其方載於三期二卷，名秘紅丹，並附有治驗之案可參觀。

知母解

知母味苦，性寒，液濃而滑。其色在黃、白之間，故能入胃以清外感之熱，伍以石膏可名白虎（二藥再加甘草、粳米和之，名白虎湯，治傷寒溫病熱入陽明）。入肺以潤肺金之燥，而肺為腎之上源，伍以黃柏兼能滋腎（二藥少加肉桂嚮導，名滋腎丸），治陰虛不能化陽，小便不利。為其寒而多液，故能壯水以制火，治骨蒸勞熱，目病翳肉遮掩白睛。為其液寒而滑，有流通之性，故能消瘡瘍熱毒腫疼。《本經》謂主消渴者，以其滋陰壯水而渴自止也；謂其主肢體浮腫者，以其寒滑能通利水道而腫自消也；謂其益氣者，以其能除食氣之壯火而氣自得其益也。

知母原不甚寒，亦不甚苦，嘗以之與黃耆等分並用，即分毫不覺涼熱，其性非大寒可知。又以知母一兩加甘草二錢煮飲之，即甘勝於苦，其味非大苦可知。寒苦皆非甚大，而又多液，是以能滋陰也。有謂知母但能退熱，不能滋陰者，猶淺之乎視知母也。是以愚治熱實脈數之證，必用知母，若用黃耆補氣之方，恐其有熱不受者，亦恆輔以知母，惟液滑能通大便，其人大便不實者忌之。

天門冬解

天冬味甘微辛，性涼，津液濃厚滑潤。其色黃兼白，能入肺以清燥熱，故善利痰寧嗽；入胃以消實熱，故善生津止渴。津厚液滑之性，能通利二便、流通血脈、暢達經絡，雖為滋陰之品，實兼能補益氣分。

《本經》謂「天冬主暴風濕偏痺，強骨髓」二語，經後世注解，其理終未透徹。愚嘗嚼服天門冬毫無渣滓，盡化津液，且覺兼有人參氣味，蓋其津厚液滑之中，原含有生生之氣，其氣挾其厚滑之津液以流行於周身，而痺之偏於半身者可除，周身之骨得其濡養而骨髓可健。且入藥者為天冬之根，乃天冬之在內者也。其外生之蔓多有逆刺，若無逆刺者，其皮又必澀而戟手。天冬之物原外剛內柔也，而以之作藥則為柔中含剛，是以痺遇其柔中之剛，則不期開而自開，骨得其柔中之剛，不惟健骨且能健髓也。至《名醫別錄》謂其「保定肺氣，益氣力，冷而能補」諸語，實亦有以見及此也。

【附錄】

湖北天門縣崔蘭亭來函：

向染咳嗽，百藥不效，後每服松脂一錢，涼茶送服，不但咳嗽痊愈，精神比前更強。迨讀《衷中參西錄》藥物解，知天冬含有人參性味，外剛內柔，汁漿厚潤，遂改服天冬二錢，日兩次，今已三年，覺神清氣爽，氣力倍增，遠行不倦，

皮膚發潤，面上癍痕全消。至於用書中之講究，以挽回垂危之證者，尤不勝紀，誠濟世之慈航。



麥門冬解

麥冬味甘，性涼，氣微香，津液濃厚，色兼黃白。能入胃以養胃液，開胃進食，更能入脾以助脾，散精於肺，定喘寧嗽，即引肺氣清肅下行，統調水道以歸膀胱。蓋因其性涼、液厚、氣香，而升降濡潤之中，兼具開通之力，故有種種諸效也，用者不宜去心。

《本經》謂「麥冬主心腹結氣，傷中傷飽，胃絡脈絕，羸瘦短氣」，文義深奧，解者鮮能透徹，惟鄒潤安詮解最妙，其言謂「胃之為腑，多氣多血，凡有變動每患其實不比於虛。設使胃氣偏勝，所納雖多，轉輸稍不循序，則氣之壅結所不能免，是心腹結氣傷中傷飽所由來也。至胃絡脈絕，當以仲景「胃氣生熱，其陽則絕」為解。蓋心腹既有結氣，則輸送之機更滯，是以中氣無權，不患傷饑，每為飽困，由是胃氣益盛，孤陽生熱，漸致脈絡不與心肺相通，則食人不得為榮，形羸氣短諸恙叢生矣。麥冬質柔而韌，色兼黃白，脈絡貫心，恰合胃之形象，其一本間根株累累，四旁橫出，自十二至十六之多，則有似夫與他臟腑脈絡貫注之義。其葉隆冬愈茂，青蔥潤澤，鑿之有光，則其吸土中精氣，上滋梗葉，絕勝他物可知。且其味甘中帶苦，又合從胃至心之妙，是以胃得之而能輸精上行，自不與他臟腑相絕，肺得之而能敷布四臟，灑陳五腑，結氣自爾消熔，脈絡自爾聯續，飲食能養肌膚，穀神旺而氣隨之充也」。

黃連解

黃連味大苦，性寒而燥，為苦為火之味，燥為火之性，故善入心以清熱，心中之熱清，則上焦之熱皆清，故善治腦膜生炎、腦部充血、時作眩暈、目疾腫疼、胛肉遮睛（目生雲翳者忌用），及半身以上赤游丹毒。其色純黃，能入脾胃以除實熱，使之進食（西人以黃連為健胃藥，蓋胃有熱則噁心懶食，西人身體強壯且多肉食，胃有積熱，故宜黃連清之），更由胃及腸，治腸下利膿血。為其性涼而燥，故治濕熱鬱於心下作痞滿（仲景小陷胸湯，諸瀉心湯皆用之），女子陰中因濕熱生炎潰爛。

徐靈胎曰「苦屬火性宜熱，此常理也。黃連至苦而反至寒，則得火之味與水之性，故能除水火相亂之病，水火相亂者，濕熱是也。是故熱氣目痛、眇傷、淚出、目不明，乃濕熱在上者；腸澀、腹痛、下利，乃濕熱在中者；婦人陰中腫痛，乃濕熱在下者，悉能除之矣。凡藥能去濕者必增熱，能除熱者必不能去濕，惟黃連能以苦燥濕，以寒除熱，一舉而兩得焉」。

鄒潤安曰「《別錄》謂黃連調胃厚腸，不得渾稱之曰厚腸胃也（渾曰厚腸胃，此後世本草語）。夫腸胃中皆有脂膜一道，包裹其內，所以護導滓穢使下行者，若有濕熱混於其間，則脂膜消溶隨滓穢而下，古人謂之腸澀，後人目為刮腸痢，亦曰腸垢。胃體廣大容垢納汗，雖有所留，亦未必剝及脂膜，故但和其中之所有，邊際自不受傷，故曰調；腸勢曲折盤旋之處，更為濕氣留聚，濕阻熱益生，熱阻

脂膜益消，去其所阻，則消爍之源絕而薄者厚矣，故曰厚。此見古人造句之精，一字不混淆也」。

黃連治目之功不必皆內服也。愚治目睛脹疼者，俾用黃連淬水，乘熱屢用棉花瓢蘸擦眼上，至咽中覺苦乃止，則脹疼立見輕。又治目疾紅腫作疼者，將黃連細末調以芝麻油，頻頻聞於鼻中，亦能立見效驗。

黃芩解

黃芩味苦性涼，中空，最善清肺經氣分之熱，由脾而下通三焦，達於膀胱以利小便。又善入脾胃清熱，由胃而下及於腸，以治腸澀下利膿血。又善入肝膽清熱，治少陽寒熱往來（大小柴胡湯皆用之）。為其中空兼能調氣，無論何臟腑，其氣鬱而作熱者，皆能宣通之；為其中空又善清軀殼之熱，凡熱之伏藏於經絡散漫於腠理者，皆能消除之。治肺病、肝膽病、軀殼病，宜用枯芩（即中空之芩）；治腸胃病宜用條芩（即嫩時中空者，亦名子芩）。究之，皆為黃芩，其功用原無甚差池也。

李瀕湖曰「有人素多酒欲，病少腹絞痛不可忍，小便如淋諸藥不效，偶用黃芩、木通、甘草三味，煎服遂止」。

按：黃芩治少腹絞痛，《名醫別錄》原明載之，由此見古人審藥之精，非後人所能及也。然必因熱氣所迫致少腹絞痛者始可用，非可概以之治腹痛也。又須知太陰腹痛無熱證，必少陽腹痛始有熱證，《名醫別錄》明標之曰「少腹絞痛」，是尤其立言精細處。

瀕湖又曰「余年二十時，因感冒咳嗽既久，且犯戒，遂病骨蒸發熱，膚如火燎，每日吐痰碗許，暑月煩渴，寢食俱廢，六脈浮洪，遍服柴胡、麥冬、荊瀝諸藥，月餘益劇，皆以為必死矣。先君偶思李東垣治肺熱如火燎，煩躁引飲而晝盛者，氣分熱也，宜一味黃芩湯，以瀉肺經氣分之火。遂按方用片芩一兩，水二盅

煎一盅頓服，次日身熱盡退，而痰嗽皆愈，藥中肯綮，如鼓應桴，醫中之妙有如此哉」。觀瀕湖二段云云，其善清氣分之熱，可為黃芩獨具之良能矣。

〈 第 四 卷 〉

白茅根解

白茅根味甘，性涼，中空有節，根類萑葦而象震（《易》〈繫辭〉震為萑葦），最善透發臟腑鬱熱，托痘疹之毒外出；又善利小便淋澀作疼、因熱小便短少、腹脹身腫，又能入肺清熱以寧嗽定喘，為其味甘，且鮮者嚼之多液，故能入胃滋陰以生津止渴，並治肺胃有熱、咳血、吐血、衄血、小便下血，然必用鮮者其效方著。春前秋後剖用之味甘，至生苗盛茂時，味即不甘，用之亦有效驗，遠勝乾者。

作茅根湯法：用鮮白茅根去淨皮及節間細根，洗淨切細斤許，和涼水三斤煮一沸，候半句鐘再煮一沸，又候半句鐘，視茅根皆沉水底，湯即成，漉出為一日之量，渴當茶溫飲之。以治虛熱、實熱、外感之熱皆宜用。治因熱小便利，積成水腫，尤有奇效處方編中白茅根湯後載數案可參觀。若無鮮白茅根，可用藥房中幹者一斤，浸以開水，至水涼再用微火溫之，不可令開，約六十外鐘許，漉去渣，徐徐當茶溫飲之亦有效驗。

茅針即茅芽，初發猶未出土，形如巨針者，其性與茅根同，而稍有破血之力。凡瘡潰膿未破者，將茅針煮服其瘡即破，用一針破一孔，兩針破兩孔。

【附案】

一人年近五旬，受溫疹之毒傳染，痧疹遍身，表裡壯熱，心中煩躁不安，證實脈虛，六部不起，屢服清解之藥無效，其清解之藥稍重，大便即溏。俾用鮮茅根六兩，煮湯一大碗頓服之，病癒強半，又服一次痊愈。

一西醫得溫病，頭疼壯熱，心中煩躁，自服西藥別臘蜜童、安知歇貌林諸退熱之品，服後熱見退，旋又反覆。其脈似有力，惟在浮分、中分，俾用鮮茅根四兩、滑石一兩，煎三四沸，取湯服之，周身得微汗，一劑而諸病皆愈。

一婦人年近四旬，因陰虛發熱，漸覺小便不利，積成水腫，服一切通利小便之藥皆無效。其脈數近六至，重按似有力，問其心中常覺煩躁，知其陰虛作熱，又兼有實熱，以致小便不利而成水腫也。俾用鮮茅根半斤，煎湯兩大碗，以之當茶徐徐溫飲之，使藥力晝夜相繼，連服五日，熱退便利，腫遂盡消。



葦莖、蘆根解

葦與蘆原係一物，其生於水邊乾地，小者為蘆，生於水深之處，大者為葦。蘆因生於乾地，其色暗綠近黑，故字從蘆（蘆即黑色），葦因生於水中，其形長大，有偉然之意，故字從葦。《千金》葦莖湯：薏苡仁、瓜瓣（即甜瓜瓣）各半升，桃仁五十枚，葦莖切二升，水二斗煮取五升，去渣納前藥三味，煮取二升，服一升，當有所見，吐膿血。釋者謂葦用莖不用根者，而愚則以為不然。根居於水底，是因其性涼而善升，患大頭瘡者，愚常用之為引經要藥（無葦根者，可代以荷葉，義皆取其象震），是其上升之力可至腦部而沉於肺乎？且其性涼能清肺熱，中空能理肺氣，而又味甘多液，更善滋陰養肺，則用根實勝於用莖明矣。今藥局所鬻者名為蘆根，實即葦根也。其善發痘疹者，以其有振發之性也；其善利小便者，以其體中空且生水中自能行水也；其善止吐血衄血者，以其性涼能治血熱妄行，且血亦水屬（血中明水居多），其性能引水下行，自善引血下行也。其性頗近茅根，凡當用茅根而無鮮者，皆可以鮮蘆根代之也。

鮮小薊根解

鮮小薊根味微辛，氣微腥，性涼而潤，為其氣腥與血同臭，且又性涼濡潤，故善入血分，最清血分之熱。凡咳血、吐血、衄血、二便下血之因熱者，服者莫不立愈。又善治肺病結核，無論何期用之皆宜，即單用亦可奏效，並治一切瘡瘍腫疼，花柳毒淋，下血澀疼，蓋其性不但能涼血止血，兼能活血解毒，是以有以上種種諸效也。其涼潤之性，又善滋陰養血，治血虛發熱，至女子血崩赤帶，其因熱者用之亦效。

按：小薊各處皆有，俗名刺爾菜（小薊原名刺薊），又名青青菜，山東俗名萋萋菜，萋字當為薊字之轉音，奉天俗名槍刀菜，因其多刺如槍刀也。其葉長二寸許，寬不足一寸，葉邊多刺，葉上微有絨毛，其葉皆在莖上，其莖紫色高尺許，莖端開紫花，花瓣如絨絲，其大如錢作圓形狀，若小絨球，其花葉皆與紅花相似，嫩時可作羹，其根與莖葉皆可用，而根之性尤良。剖取鮮者搗爛，取其自然汁沖開水服之。若以人煎劑不可久煎，宜保存其新鮮之性，約煎四五沸即取湯飲之。又其莖中生蟲即結成疙瘩，狀如小棗，其涼血之力尤勝，若取其鮮者十餘枚搗爛，開水沖服，以治吐血、衄血之因熱者尤效。今藥局中有以此為大薊者，殊屬差誤，用時宜取其生農田之間嫩而白者。

【附案】

一少年素染花柳毒，服藥治癒，惟頻頻咳嗽，服一切理嗽藥皆不效。經西醫驗其血，謂仍有毒，其毒侵肺，是以作嗽。詢方於愚，俾用鮮小薊根兩許，煮湯服之，服過兩旬，其嗽遂愈。

一少年每年吐血，反覆三四次，數年不愈，診其脈，血熱火盛，俾日用鮮小薊根二兩，煮湯數盅，當茶飲之，連飲二十餘日，其病從此除根。

大麥芽解

大麥芽性平，味微酸（含有稀鹽酸，是以善消）。能入脾胃，消化一切飲食積聚，為補助脾胃藥之輔佐品（補脾胃以參、朮、耆為主，而以此輔之）。若與參、朮、耆並用，能運化其補益之力，不至作脹滿。為其性善消化，兼能通利二便，雖為脾胃之藥，而實善舒肝氣（舒肝宜生用，炒用之則無效）。蓋肝於時為春，於五行為木，原為人身氣化之萌芽（氣化之本在腎，氣化上達由肝，故肝為氣化之萌芽），麥芽與肝為同氣相求，故善舒之。夫肝主疏泄，為腎行氣，為其力能舒肝，善助肝木疏泄以行腎氣，故又善於催生。至婦人之乳汁為血所化，因其善於消化，微兼破血之性，故又善回乳（無子吃乳欲回乳者，用大麥芽二兩炒為末，每服五錢白湯下）。入丸散劑可炒用，入湯劑皆宜生用。化學家生麥芽於理石（即石膏）上，其根蟠曲之處，理石皆成微凹，可徵其消化之力。

【附案】

一婦人年三十餘，氣分素弱，一日忽覺有氣結於上脘，不能上達亦不下降，俾單用生麥芽一兩，煎湯飲之，頓覺氣息通順。

一婦人年近四旬，脅下常常作疼，飲食入胃常停滯不下行，服藥數年不愈，此肝不升胃不降也。為疏方，用生麥芽四錢以升肝，生雞內金二錢以降胃，又加生懷山藥一兩以培養臟腑之氣化，防其因升之、降之而有所傷損，連服十餘劑，病遂痊愈。

用麥芽應注意，視其生芽者，或未生芽而生根如白鬚者亦可。蓋大麥經水浸，先生根而後生芽借其生發之氣，比於春氣之條達，故舒肝頗效也。受業孫靜明識

附：麥苗善治黃膽

內子王氏，生平不能服藥，即分毫無味之藥亦不能服。於乙丑季秋，得黃膽症，為開好服之藥數味，煎湯，強令服之，下嚥即嘔吐大作，將藥盡行吐出。友人張某謂「可用鮮麥苗煎湯服之」，遂採鮮麥苗一握，又為之加滑石五錢，服後病即輕減，又服一劑痊愈。蓋以麥苗之性，能疏通肝膽，兼能清肝膽之熱，猶能消膽管之炎，導膽汁歸小腸也。因悟得此理後，凡遇黃膽症，必加生麥芽數錢於藥中，亦奏效頗著。然藥鋪中麥芽皆乾者，若能得鮮麥芽，且長至寸餘用之，當更佳。或當有麥苗時，於服藥之外，以麥苗煎湯當茶飲之亦可。

茵陳解

茵陳者，青蒿之嫩苗也。秋日青蒿結子，落地發生，貼地大如錢，至冬霜雪滿地，萌芽無恙，甫經立春即勃然生長，宜於正月中旬採之。其氣微香，其味微辛微苦，秉少陽最初之氣，是以涼而能散。《本經》謂其善治黃膽，仲景治疸證，亦多用之，為其稟少陽初生之氣，是以善清肝膽之熱，兼理肝膽之鬱，熱消鬱開，膽汁入小腸之路毫無阻隔也。《名醫別錄》謂其利小便，除頭熱，亦清肝膽之功效也。其性頗近柴胡，實較柴胡之力柔和，凡欲提出少陽之邪，而其人身弱陰虛不任柴胡之升散者，皆可以茵陳代之。

【附案】

一人因境多拂逆，常動肝氣、肝火，致腦部充血作疼，治以鎮肝、涼肝之藥，服後周身大熱，汗出如洗，恍悟肝為將軍之官，中寄相火，用藥強制之，是激動其所寄之相火而起反動力也。即原方為加茵陳二錢，服後即安然矣。

一少年常患頭疼，診其脈肝膽火盛，治以茵陳、川芎、菊花各二錢，一劑疼即止。又即原方為加龍膽草二錢，服兩劑覺頭部輕爽異常，又減去川芎，連服四劑，病遂除根。

受業孫靜明按：民國二十八年秋，同事胡君連奎之二弟連元，年十七歲，患虛勞病發熱甚劇，經中西醫調治旬餘無效。後邀余診視，余遵壽師治虛勞病方，加茵陳二錢，一劑熱減，二劑熱退，由是益知茵陳除陰虛作熱之特效也。

萊菔子解

萊菔子生用味微辛、性平，炒用氣香性溫，其力能升、能降，生用則升多於降，炒用則降多於升，取其升氣化痰宜用生者，取其降氣消食宜用炒者。究之，無論或生或炒，皆能順氣開鬱、消脹除滿，此乃化氣之品，非破氣之品，而醫者多謂其能破氣，不宜多服、久服，殊非確當之論。蓋凡理氣之藥，單服久服，未有不傷氣者，而萊菔子炒熟為末，每飯後移時服錢許，藉以消食順氣，轉不傷氣，因其能多進飲食，氣分自得其養也。若用以除滿開鬱，而以參、耆、朮諸藥佐之，雖多服、久服，亦何至傷氣分乎？

【附案】

一人年五旬，當極忿怒之餘，腹中連脅下突然脹起，服諸理氣開氣之藥皆不效。俾用生萊菔子一兩，柴胡、川芎、生麥芽各三錢，煎湯兩盅，分三次溫服下，盡劑而愈。

一人年二十五六，素多痰飲，受外感，三四日間覺痰涎凝結於上脘，阻隔飲食不能下行，須臾仍復吐出，俾用萊菔子一兩，生熟各半，搗碎煮湯一大盅，送服生赭石細末三錢，遲點半鐘，再將其渣重煎湯一大盅，仍送服生赭石細末三錢，其上脘頓覺開通，可進飲食，又為開辛涼清解之劑，連服兩劑痊愈。

附：胡萊菔英能解砒石毒

邑東境褚姓，因夫妻反目，其妻怒吞砒石，其夫出門未歸，夜間砒毒發作，覺心中熱渴異常。其鍋中有泡乾胡萊菔英之水若干，猶微溫，遂盡量飲之，熱渴頓止，迨其夫歸猶未知也。隔旬，其夫之妹，在婆家亦吞砒石，急遣人來送信，其夫倉猝將往視之。其妻謂，將乾胡萊菔英攜一筐去，開水浸透，多飲其水必愈，萬無一失。其夫問何以知之，其妻始明言前事。其夫果亦用此方，將其妹救愈。然所用者，是秋末所曬之乾胡萊菔英，在房頂迭次經霜，其能解砒毒或亦借嚴霜之力歟？至鮮胡萊菔英亦能解砒毒否，則猶未知也。



枸杞子、地骨皮解

枸杞子味甘多液，性微涼，為滋補肝腎最良之藥，故其性善明目，退虛熱，壯筋骨，除腰疼，久服有益，此皆滋補肝腎之功也。乃因古有隔家千里，勿食枸杞之諺，遂疑其能助陽道，性或偏於溫熱，而愚則謂其性決不熱，且確有退熱之功效，此從細心體驗而得，原非憑空擬議也。

愚自五旬後，臟腑間陽分偏盛，每夜眠時，無論冬夏床頭置涼水一壺，每醒一次，覺心中發熱，即飲涼水數口，至明則壺中水已所餘無幾。惟臨睡時，嚼服枸杞子一兩，涼水即可少飲一半，且晨起後覺心中格外鎮靜，精神格外充足，即此以論枸杞，則枸杞為滋補良藥，性未必涼而確有退熱之功效，不可斷言乎？

或問「枸杞為善滋陰，故能退虛熱，今先生因睡醒而覺熱，則此熱果虛熱乎？抑實熱乎？」答曰「餘生平胖壯，陰分不虧，此非虛熱明矣。然白晝不覺熱，即夜間徹夜不睡，亦不覺熱，惟睡初醒時覺心中發熱，是熱生於睡中也，其不同於泛泛之實熱又明矣。此乃因睡時心腎自然交感而生熱，乃先天元陽壯旺之現象，惟枸杞能補益元陰，與先天元陽相濟，是以有此功效。若謂其僅能退虛熱，猶淺之乎視枸杞矣。且其樹壽逾松柏，萬年不老，無論生於何地，其根皆能直達黃泉，莫不盛茂，從未見有自枯萎者，人服枸杞而壽，或亦因斯歟。」

【附方：金髓煎】

枸杞子，逐日擇紅熟者，以無灰酒浸之，蠟紙封固，勿令泄氣，兩月足，取入砂盆中，研爛濾取汁，同原浸之酒入銀鍋內，慢火熬之，不住箸攪，恐粘住不勻，候成餚，淨瓶密貯。每早溫酒服二大匙，夜臥再服，百日身輕氣壯，積年不輟，可以羽化。

地骨皮即枸杞根上之皮也。其根下行直達黃泉，稟地之陰氣最厚，是以性涼長於退熱。為其力優於下行有收斂之力，是以治有汗骨蒸，能止吐血、衄血，更能下清腎熱，通利二便，並治二便因熱下血。且其收斂下行之力，能使上焦浮游之熱因之清肅，而肺為熱傷作嗽者，服之可愈。是以諸家本草，多謂其能治嗽也。惟肺有風邪作嗽者忌用，以其性能斂也。

海螵蛸、茜草解

烏賊骨即海螵蛸，蘆茹即茜草。詳閱諸家本草，載此二藥之主治，皆謂其能治崩帶，是與《內經》用二藥之義相合也。又皆謂其能消癥瘕，是又與《內經》用二藥之義相反也。本草所載二藥之性，如此自相矛盾，令後世醫者並疑《內經》之方而不敢輕用，則良方幾埋沒矣。而愚對於此二藥，其能治崩帶洵有確實徵驗，其能消癥瘕與否，則又不敢遽斷也。

《內經》有四烏賊骨一蘆茹丸，治傷肝之病，時時前後血。方用烏賊骨四蘆茹一丸，以雀卵如小豆大，每服五丸，鮑魚湯送下。海螵蛸為烏賊魚骨，其魚常口中吐墨，水為之黑，故能補益腎經，而助其閉藏之用。

友人孫蔭軒夫人經水行時多而且久。蔭軒用微火，將海螵蛸煨至半黑、半黃為末，用鹿角膠化水送服，一次即愈，其性之收澀可知。茜草一名地血，可以染絳，《內經》名茹蘆，即茹蘆根也。

【附案】

憶在籍時，曾治滄州董姓婦人，患血崩甚劇，其脈象虛而無力，遂重用黃耆、白朮，輔以龍骨、牡蠣、萸肉諸收澀之品，服後病稍見愈，遂即原方加海螵蛸四錢，茜草二錢，服後其病頓愈，而分毫不見血矣。愚於斯深知二藥止血之能力，遂擬得安衝湯、固衝湯二方，於方中皆用此二藥，登於處方編中以公諸醫界。

又治鄰村星馬村劉氏婦，月信月餘不止，病家示以前服之方，即拙擬安衝湯去海螵蛸、茜草也，遂於原方中加此二藥，服一劑即愈。俾再服一劑以善其後。病家因疑而問曰「所加之藥如此效驗，前醫者如何去之」？答曰「此醫者轉是細心人，彼蓋見此二藥有能消癥瘕之說，因此生疑，而平素對於此二藥又無確實經驗，是以有此失也」。

至於海螵蛸、茜草之治帶證，愚亦有確實經驗。初臨證時，以婦女之帶證原係微末之疾，未嘗注意，後治一婦人，因病帶已不起床，初次為疏方不效，後於方中加此二藥遂大見效驗，服未十劑，脫然痊愈。於斯愚擬得清帶湯方，此二藥與龍骨、牡蠣、山藥藥並用，登於處方編中為治帶證的方。後在滄州治一媪年近六旬，患帶下赤白相兼，心中發熱，頭目眩暈，已半載不起床矣。診其脈甚洪實，遂於清帶湯中加苦參、龍膽草白頭翁各數錢，連服八劑痊愈，心熱眩暈亦愈。

本邑一少婦，累年多病，身形羸弱，繼又下白帶甚劇，屢經醫治不效。診其脈遲弱無力，自覺下焦涼甚，治以清帶湯，為加乾薑六錢、鹿角膠三錢、炙甘草三錢，連服十劑痊愈。統以上經驗觀之，則海螵蛸、茜草之治帶下不又確有把握哉。至其能消癥瘕與否，因未嘗單重用之，實猶欠此經驗而不敢遽定也。

罌粟殼解

罌粟殼即罌粟花所結之子外包之殼也。其所結之子形如罌，中有子如粟，可作粥，甚香美（炒之則香），故名其外皮為罌粟殼，藥局間省文曰米殼。其味微酸，性平。其嫩時，皮出白漿可制鴉片，以其猶含鴉片之餘氣，故其性能斂肺、澀腸、固腎，治久嗽、久痢、遺精、脫肛、女子崩帶。嗽、痢初起及咳嗽兼外感者，忌用。

罌粟殼，治久嗽、久痢，誠有效驗，如虛勞咳嗽證，但用山藥、地黃、枸杞、玄參諸藥以滋陰養肺，其嗽不止者，加罌粟殼二三錢，則其嗽可立見輕減，或少佐以通利之品，若牛蒡、射干諸藥尤為穩妥。至於久痢，其腸中或有腐爛，若用三七、鴉膽子，化其腐爛，而其痢仍不止者，當將罌粟殼數錢，與山藥、芍藥諸藥並用，連服數劑，其痢可痊愈。

竹茹解

竹茹味淡，性微涼。善開胃鬱，降胃中上逆之氣，使之下行（胃氣息息下行為順），故能治嘔吐、止吐血、衄血（皆降胃之功）。《金匱》治婦人乳中虛、煩亂嘔逆，有竹皮大丸，竹皮即竹茹也。為其為竹之皮，且涼而能降，故又能清肺利痰，宣通三焦水道，下通膀胱，為通利小便之要藥，與葉同功，而其力尤勝於葉。又善清腸中之熱，除下痢後重腹痛。為其涼而宣通，損傷瘀血腫疼者，服之可消腫愈疼，融化瘀血。醋煮口漱，可止齒齦出血。須用嫩竹外邊青皮，裡層者力減。

【附案】

族家孀母，年四旬，足大指隱白穴處，忽然破裂出血，且色紫甚多，外科家以為疔毒，屢次服藥不效。時愚甫習醫，診其脈洪滑有力，知係血熱妄行，遂用生地黃兩半、碎竹茹六錢，煎湯服之，一劑血止，又服數劑，脈亦平和。蓋生地黃涼血之力，雖能止血，然恐止後血瘀經絡，致生他病，輔以竹茹宣通消瘀，且其性亦能涼血止血，是以有益而無弊也。

友人劉干臣之女，得溫病，邀愚往視，其證表裡俱熱，胃口滿悶，時欲嘔吐，舌苔白而微黃，脈象洪滑，重按未實，問其大便，昨行一次微燥，一醫者欲投以調胃承氣湯，疏方尚未取藥。愚曰「此證用承氣湯尚早」，遂另為疏方，用生石

嘔吐，從前小便短少，自此小便如常，其病頓愈。膏一兩、碎竹茹六錢、青連翹四錢，煎湯服後，周身微汗，滿悶立減，亦不復欲。

沙參解

沙參味淡微甘，性涼，色白，質鬆，中空，故能入肺，清熱滋陰，補益肺氣，兼能宣通肺鬱，故《本經》謂其主血積，肺氣平而血之上逆者自消也。人之魂藏於肝，魄藏於肺，沙參能清補肺臟以定魄，更能使肺金之氣化清肅下行，鎮戢肝木以安魂，魂魄安定，驚恐自化，故《本經》又謂主驚氣也。

徐靈胎曰「肺主氣，故肺家之藥氣勝者為多。但氣勝之品必偏於燥，而能滋肺者又膩滯而不清虛，惟沙參為肺家氣分中理血藥，色白體輕，疏通而不燥，潤澤而不滯，血阻於肺者，非此不能清也」。

沙參以體質輕鬆，中心空者為佳，然必生於沙磧之上，土性鬆活，始能如此。渤海之濱，沙磧綿亙，純係蚌殼細末，毫無土質，其所長沙參，粗如拇指，中空大於藕孔。其味且甘於他處沙參，因其處若三四尺深即出甜水，是以所長之沙參，其味獨甘，鮮嚼服之，大能解渴，故以治消渴尤良。其葉光澤如鏡，七月抽莖開白花，純稟金氣，肺熱作嗽者，用之甚效，洵良藥也。

【附案】

近族曾孫女瑩姐，自動失乳，身形羸弱，自六七歲時恆發咳嗽，後至十一二歲，嗽浸增劇，概服治嗽藥不效。愚俾用生懷山藥細末熬粥，調以白糖令適口，送服生雞內金細末二三分，或西藥百布聖二瓦，當點心服之，年餘未間斷。勞嗽雖見愈，而終不能除根。診其脈，肺胃似皆有熱，遂俾用北沙參軋為細末，每服



二錢，日兩次。服至旬餘，咳嗽痊愈。然恐其沙參久服或失於涼，改用沙參三兩、甘草二兩，共軋細，亦每服二錢，以善其後。

連翹解

連翹味淡微苦，性涼，具升浮宣散之力，流通氣血，治十二經血凝氣聚，為瘡家要藥。能透表解肌，清熱逐風，又為治風熱要藥。且性能托毒外出，又為發表疹癰要藥。為其性涼而升浮，故又善治頭目之疾，凡頭疼、目疼、齒疼、鼻淵或流濁涕成腦漏證，皆能主之。為其味淡能利小便，故又善治淋證，溺管生炎。

仲景方中所用之連軹，乃連翹之根，即《本經》之連根也。其性與連翹相近，其發表之力不及連翹，而其利水之力則勝於連翹，故仲景麻黃連軹赤小豆湯用之，以治瘀熱在裡，身將發黃，取其能導引濕熱下行也。

按：連翹諸家皆未言其發汗，而以治外感風熱，用至一兩必能出汗，且其發汗之力甚柔和，又甚綿長。曾治一少年風溫初得，俾單用連翹一兩煎湯服，徹夜微汗，翌晨病若失。

連翹形圓而尖，其狀似心，故善清心熱。心與小腸相表裡，又能清小腸熱，通五淋而利小便。為其氣薄體輕，具有透表作用。殼內有房，房中有粒狀小點，撚碎嗅之辛香有油，是以藉此芳香之力可解鬱熱。因含油質，故發汗時較他藥柔和而綿長也。受業孫靜明謹注

連翹善理肝氣，既能舒肝氣之鬱，又能平肝氣之盛。曾治一媼，年過七旬，其手連臂腫疼數年不愈，其脈弦而有力，遂於清熱消腫藥中，每劑加連翹四錢，

旬日腫消疼愈，其家人謂媪從前最易憤怒，自服此藥後不但病癒，而憤怒全無，何藥若是之靈妙也！由是觀之，連翹可為理肝氣要藥矣。

川 楝 子 解

大如栗者是川楝子，他處楝子小而味苦，去核名金鈴子。

川楝子味微酸、微苦，性涼，酸者入肝，苦者善降，能引肝膽之熱下行自小便出，故治肝氣橫恣，膽火熾盛，致脅下掀疼。並治胃脘氣鬱作疼，木能疏土也。其性雖涼，治疝氣者恆以之為嚮導藥，因其下行之力能引諸藥至患處也。至他處之苦楝子，因其味苦有小毒，除蟲者恆用之。

薄荷解

薄荷味辛，氣清鬱香竄，性平，少用則涼，多用則熱（如以鮮薄荷汁外擦皮膚，少用殊覺清涼，多用即覺灼熱）。其力能內透筋骨，外達肌表，宣通臟腑，貫串經絡，服之能透發涼汗，為溫病宜汗解者之要藥。若少用之，亦善調和內傷，治肝氣膽火鬱結作疼，或肝風內動，忽然癩瘰瘰癧，頭疼目疼，鼻淵鼻塞，齒疼咽喉腫疼，肢體拘攣作疼，一切風火鬱熱之疾，皆能治之。痢疾初起挾有外感者，亦宜用之，散外感之邪，即以清腸中之熱，則其痢易愈。又善消毒菌（薄荷冰善消毒亂毒菌，薄荷亦善消毒菌可知），逐除惡氣，一切霍亂痧證，亦為要藥。為其味辛而涼，又善表疹癩，愈皮膚瘙癢，為兒科常用之品。

溫病發汗用薄荷，猶傷寒發汗用麻黃也。麻黃服後出熱汗，熱汗能解寒，是以宜於傷寒；薄荷服後出涼汗，涼汗能清溫，是以宜於溫病。若以麻黃發溫病之汗，薄荷發傷寒之汗，大抵皆不能出汗，即出汗亦必不能愈病也。

按：薄荷古原名苛，以之作蔬，不以之作藥，《本經》、《名醫別錄》皆未載之，至唐時始列於藥品，是以《傷寒論》諸方未有用薄荷者。然細審《傷寒論》之方，確有方中當用薄荷，因當時猶未列入藥品，即當用薄荷之方，不得不轉用他藥者。試取傷寒之方論之，如麻杏甘石湯中之麻黃，宜用薄荷代之，蓋麻杏甘石湯，原治汗出而喘無大熱，既云無大熱，其仍有熱可知，有熱而猶用麻黃者，取其瀉肺定喘也。然麻黃能瀉肺定喘，薄荷亦能瀉肺定喘（薄荷之辛能抑肺氣之

盛，又善搜肺風），用麻黃以熱治熱，何如用薄荷以涼治熱乎？又如凡有葛根諸湯中之葛根，亦可以薄荷代之，蓋葛根原所以發表陽明在經之熱，葛根之涼不如薄荷，而其發表之力又遠不如薄荷，則用葛根又何如用薄荷乎？斯非背古訓也，古人當藥物未備之時，所制之方原有不能盡善盡美之處，無他，時勢限之也。吾人當藥物既備之時，而不能隨時化裁與古為新，是仍未會古人制方之意也。醫界之研究傷寒者，尚其深思愚言哉。

茯苓、茯神解

茯苓氣味俱淡，性平，善理脾胃，因脾胃屬土，土之味原淡（土味淡之理，徐靈胎曾詳論之），是以《內經》謂淡氣歸胃，而《慎柔五書》上述《內經》之旨，亦謂味淡能養脾陰。蓋其性能化胃中痰飲為水液，引之輸於脾而達於肺，復下循三焦水道以歸膀胱，為滲濕利痰之主藥。然其性純良，瀉中有補，雖為滲利之品，實能培土生金，有益於脾胃及肺。且以其得松根有餘之氣，伏藏地中不外透生苗，故又善斂心氣之浮越以安魂定魄，兼能瀉心下之水飲以除驚悸，又為心經要藥。且其伏藏之性，又能斂抑外越之水氣轉而下注，不使作汗透出，兼為止汗之要藥也。其抱根而生者為茯神，養心之力，較勝於茯苓。

劉潛江曰「茯苓本古松靈氣綸結成形，盧子繇謂其精英不發於枝葉，返旋生氣吸伏於踵，若真人之息，若但視為利濕，殆有未然。蓋松之凌冬不凋，非以其稟真陽之性耶？乃其氣入土，久而結茯苓，是其質成於陰氣稟於陽也。陶隱居謂其無朽蛀，埋地中三十年，猶色理無異，不可見其堅貞哉」。

茯苓若入煎劑，其切作塊者，終日煎之不透，必須切薄片，或搗為末，方能煎透。

【附錄】

友人竹芷熙曰「嵯縣地固多山，在葛溪口。嵯東，山名也。本層巒疊嶂，峰回水繞之所，吳氏聚族而居，約四五十家，以種芩為業，其種芩之法，秘而不宣，

雖親戚不告焉。新嵒藥肆間，茯苓皆出於是。春間吳氏之媳病，蓋產後月餘，壯熱口渴不引飲，汗出不止，心悸不寐，延余往治。病人面現紅色，脈有滑象，急用甘草、麥冬、竹葉、柏子仁、浮小麥、大棗煎飲不效，繼用酸棗仁湯，減川芎加浮小麥、大棗，亦不效，又用歸脾湯加龍骨、牡蠣、萸肉則仍然如故。當此之時，余束手無策，忽一人進而言曰『何不用補藥以緩之』，余思此無稽之談，所云補藥者，心無見識也，姑漫應之。時已屆晚寢之時，至次日早起，其翁奔告曰『予媳之病昨夜用補藥醫痊矣』。余將信將疑，不識補藥究係何物，乃翁持渣來見，鉢中有茯苓四五兩，噫！茯苓焉，胡為云補藥哉？余半晌不能言，危坐思之，凡病有一線生機，皆可醫治。茯苓固治心悸之要藥，亦治汗出之主藥。仲景治傷寒汗出而渴者五苓散，不渴者茯苓甘草湯。傷寒厥而心下悸者宜先治水，當服茯苓甘草湯。可知心悸者汗出過多，心液內涸，腎水上救人心則悸，餘藥不能治水，故用茯苓以鎮之。是證心悸不寐，其不寐由心悸而來，即心悸亦從汗出而來，其壯熱口渴不引飲、脈滑，皆有水氣之象，今幸遇種苓家，否則汗出不止，終當亡陽，水氣凌心，必當滅火，是誰之過歟？余引咎而退。觀竹君此論，不惜暴一己之失，以為醫界說法，其疏解經文之處，能將仲景用茯苓之深意，彰彰表出，固其析理之精，亦見其居心之厚也。夫仁人之後必昌，君之哲嗣名余祥，青年英發，馳名醫界，時與愚有魚雁往來，其造就固未可量也。



湖北天門縣崔蘭亭來函云：民紀十九年，四十八師李團長夫人，頭目眩暈、心中怔忡、嘔吐涎沫，有時覺氣上衝，昏憤不省人事。軍醫治以安神之藥無效，繼又延醫十餘人皆服藥無效，危險已至極點。生診其脈，浮而無力，視其形狀無可下藥。恍悟《衷中參西錄》茯苓解中，所論重用茯苓之法，當可挽回此證。遂俾單用茯苓一兩煎湯服之，服後甫五分鐘，病即輕減，旋即煎渣再服，益神清氣爽，連服數劑，病即痊愈。後每遇類此證者，投此方皆可奏效。

木通解

木通味苦性涼。為籐蔓之梗，其全體玲瓏通徹，故能貫串經絡，通利九竅。能瀉上焦之熱，曲曲引之下行自水道達出，為利小便清淋濁之要藥。其貫串經絡之力，又能治周身拘攣，肢體痺疼，活血消腫，催生通乳，多用亦能發汗。

愚平素不喜用苦藥，木通諸家未嘗言苦，而其味實甚苦。因慮人嫌其苦口難服，故於木通未嘗獨用重用，以資研究，近因遇一肢體關節腫疼證，投以清熱利濕活血之品，更以西藥阿斯匹林佐之，治癒。適法庫門生萬澤東來奉，因向彼述之，澤東曰「《醫宗金鑒》治三痺（行痺、痛痺、著痺）有木通湯方，學生以治痛痺極有效驗，且服後必然出汗，曾用數次皆一劑而愈」。愚曰「我亦見其方，但未嘗試用，故不知如此神效，既效驗如此，當急錄出以公諸醫界」。爰列其方於下：

【木通湯】

用木通一味，不見水者（其整者皆未見水，搗碎用）二兩，以長流水二碗煎一碗，熱服取微汗，不愈再服，以愈為度。若其痛上下左右流走相移者，加羌活、防風以祛風邪；其痛涼甚者，有汗加附子，無汗加麻黃以去寒邪；其痛重著難移者，加防己以勝濕邪。其所應加之藥，不可過三錢，弱者俱減半服。

蒲黃解

蒲黃味淡微甘微辛，性涼，善治氣血不和、心腹疼痛、游風腫疼、顛仆血悶（用生蒲黃半兩，煎湯灌下即醒）、痔瘡出血（水送服一錢，日三次）、女子月閉腹痛、產後瘀血腹疼，為其有活血化瘀之力，故有種種諸效。若炒熟用之（不宜炒黑），又善治吐血、咳血、衄血、二便下血、女子血崩帶下。外用治舌脹腫疼，甚或出血，一切瘡瘍腫疼，蜜調敷之（皆宜用生者），皆有捷效。為其生於水中，且又味淡，故又善利小便。

鄒潤安曰「凡生水中之物，皆以水為父母，而聽其消漲以為榮枯。矧蒲黃又生於四五月大火得令時，能吸火氣以媾於水而成中五之色者，是能合水火之精以成土者也。人身惟水火不諧方小便不利，而為心腹膀胱寒熱。蒲黃象土，本可防水，且又生於水中，用之使調和水火，則寒熱於以解，小便遂自利，柔化之功反速於剛制也。若夫熱傍水勢而迫血妄行，熱阻水行而停血成瘀，則亦行者能止、瘀者能消，而均可無慮。故《本經》謂其主心腹膀胱寒熱，利小便，止血又消瘀血也」。詳觀此論，是蒲黃之性原善化瘀血，又善止血妄行，非炒至色紫黑，始能止血也。即欲炒用之以止血，亦惟炒熟而已，斷不宜過炒之以失其本性。

鄒潤安曰「《金匱》用蒲灰散，利小便，治厥而為皮水，解者或以為香蒲，或以為蒲席燒灰，然香蒲但能清上熱，不云能利水。敗蒲席，《名醫別錄》主筋溢惡瘡，亦非利水之物。蒲黃，《本經》主利小便，且《本事方》、《芝隱方》，

皆述其治舌脹神驗，予亦曾治多人，毫絲不爽，不正合治水之腫於皮乎？夫皮水為膚腠間病，不應有厥，厥者下焦病也。膀胱與腎為表裡，膀胱以水氣歸皮，致小便不利，氣阻而成寒熱，則腎亦承其弊為之陰壅而陽不得達，遂成厥焉。病本在外，非可用溫，又屬皮水，無從發散，計惟解心腹膀胱之寒熱，使小便得利，又何厥逆之有，以是知其為蒲黃無疑也。曰蒲灰者，蒲黃之質，固有似於灰也」。

按：蒲黃誠為妙藥，失笑散用蒲黃、五靈脂等分生研，每用五錢，水、酒各半，加醋少許，煎數沸連渣服之，能愈產後腹疼於頃刻之間。人多因蒲黃之質甚軟，且氣味俱淡，疑其無甚力量而忽視之，是皆未見鄒氏之論，故不能研究《本經》主治之文也。

三稜、莪朮解

三稜氣味俱淡，微有辛意。莪朮味微苦，氣微香，亦微有辛意。性皆微溫，為化瘀血之要藥。以治男子疝癖，女子癥瘕，月閉不通，性非猛烈而建功甚速。其行氣之力，又能治心腹疼痛，脅下脹疼，一切血凝氣滯之證。若與參、朮、耆諸藥並用，大能開胃進食，調血和血。若細核二藥之區別，化血之力三稜優於莪朮，理氣之力莪朮優於三稜。

藥物恆有獨具良能，不能從氣味中窺測者，如三稜、莪朮性近和平，而以治女子瘀血，雖堅如鐵石亦能徐徐消除，而猛烈開破之品轉不能建此奇功，此三稜、莪朮獨具之良能也。而耳食者流，恆以其能消堅開瘀，轉疑為猛烈之品而不敢輕用，幾何不埋沒良藥哉。

三稜、莪朮，若治陡然腹脅疼痛，由於氣血凝滯者，可但用三稜、莪朮，不必以補藥佐之；若治瘀血積久過堅硬者，原非數劑所能愈，必以補藥佐之，方能久服無弊。或用黃耆六錢，三稜、莪朮各三錢，或減黃耆三錢，加野臺參三錢，其補破之力皆可相敵，不但氣血不受傷損，瘀血之化亦較速，蓋人之氣血壯旺，愈能駕馭藥力以勝病也。

【附案】

鄰村武生李卓亭夫人，年三十餘，癥瘕起於少腹，漸長而上，其當年長者尚軟，隔年即硬如石，七年之間上至心口，旁塞兩肋，飲食減少，時而昏睡，劇時

昏睡晝夜，不飲不食，屢次服藥無效。後愚為診視，脈雖虛弱，至數不數，許為治癒，授以拙擬理沖湯方（方載三期八卷方中有三稜、莪朮各三錢），病人自揣其病斷無可治之理，竟置不服。次年病益進，昏睡四日不醒，愚用藥救醒之，遂懇切告之曰「去歲若用愚方，病癒已久，何至危困若此，然此病尚可為，慎勿再遲延也」。仍為開前方，病人喜，信愚言，連服三十餘劑，磊塊皆消。惟最初所結之病根，大如核桃之巨者尚在，又加水蛭（不宜炙），服數劑痊愈。

乳香、沒藥解

乳香氣香竄，味淡，故善透竅以理氣。沒藥氣則淡薄，味則辛而微酸，故善化痰以理血。其性皆微溫，二藥並用為宣通臟腑流通經絡之要藥，故凡心胃脅腹肢體關節諸疼痛皆能治之。又善治女子行經腹痛，產後瘀血作疼，月事不以時下。其通氣活血之力，又善治風寒濕痺，周身麻木，四肢不遂及一切瘡瘍腫疼，或其瘡硬不疼。外用為粉以敷瘡瘍，能解毒、消腫、生肌、止疼，雖為開通之品，不至耗傷氣血，誠良藥也。

乳香、沒藥不但流通經絡之氣血，諸凡臟腑中，有氣血凝滯，二藥皆能流通之。醫者但知其善入經絡，用之以消瘡瘍，或外敷瘡瘍，而不知用之以調臟腑之氣血，斯豈知乳香、沒藥者哉。

按：乳香、沒藥，最宜生用，若炒用之則其流通之力頓減，至用於丸散中者，生軋作粗渣入鍋內，隔紙烘至半熔，候冷軋之即成細末，此乳香、沒藥去油之法。

【附案】

一人年三十許，當臍忽結癥瘕，自下漸長而上，初長時稍軟，數日後即硬如石，旬日長至心口，向愚詢方，自言凌晨冒寒得於途間。愚再三思之，不得其證之主名，然即形跡論之，約不外氣血凝滯。為疏方用當歸、丹參、乳香、沒藥各五錢，流通氣血之中，大具融化氣血之力，連服十劑痊愈。以後用此方，治內外

瘡瘍、心腹肢體疼痛。凡病之由於氣血凝滯者，恒多奇效，因將其方登於三期四卷名活絡效靈丹。

一少婦左脅起一瘡，其形長約五寸，上半在乳，下半在肋，皮色不變，按之甚硬而微熱於他處。延醫詢方，調治兩月不效，且漸大於從前。後愚診視，閱其所服諸方，有遵林屋山人治白疽方治者，有按乳癰治者，愚曉病家曰「此證硬而色白者陰也，按之微熱者陰中有陽也，統觀所服諸方，有治純陰純陽之方，無治半陰半陽之方，勿怪其歷試皆不效也」。亦俾用活絡效靈丹作湯服之（此方原有作湯服、作散服兩種服法，若作散服，每次四錢，溫酒送下），數劑見消，服至三十劑，消無芥蒂。

一鄰村婦人，心腹疼痛異常，延醫服藥無效，勢近垂危。其家人夜走四五里叩門求方。適愚他出，長子蔭潮為開活絡效靈丹方授之。煎服一劑即愈。蓋擬得此方以來，十餘年間，治癒心腹疼痛者不勝紀矣。



常山解

常山性涼，味微苦，善消脾中之痰，為治瘧疾要藥（瘧疾皆係脾中多痰，凡久瘧脅下有硬塊，名瘧母者，皆係脾脹兼有痰也）。少服，則痰可徐消，若多服即可將脾中之痰吐出，為其多服即作嘔吐，故諸家本草皆謂其有毒，醫者用之治瘧，亦因此不敢多用，遂至有效有不效。若欲用之必效，當效古人一劑三服之法，用常山五六錢，煎湯一大盅，分五六次徐徐溫飲下，即可不作嘔吐，瘧疾亦有八九可愈。

【附案】

一九一七年，時當仲夏，愚因勞碌過度，兼受暑，遂至病瘧。乃於不發瘧之日清晨，用常山八錢，煎湯一大碗，徐徐溫飲之，一次止飲一大口，飲至日夕而劑盡，心中分毫未覺難受，而瘧亦遂愈。後遂變湯劑為丸劑，將常山軋細過羅，水泛為丸，桐子大，每服八分，一日之間自晨至暮服五次，共服藥四錢，瘧亦可愈。若病發時，熱甚劇者，可用生石膏一兩煎湯，初兩次服藥時，可用此湯送服。西人謂病瘧者有瘧蟲，西藥金雞納霜善除瘧蟲，故善治瘧，常山想亦善除瘧蟲之藥品歟？

山楂解

山楂味至酸微甘，性平。皮赤肉紅黃，故善入血分為化瘀血之要藥。能除痞癥瘕、女子月閉、產後瘀血作疼（俗名兒枕疼）。為其味酸而微甘，能補助胃中酸汁，故能消化飲食積聚，以治肉積尤效。其化瘀之力，更能蠲除腸中瘀滯，下痢膿血，且兼入氣分以開氣鬱痰結，療心腹疼痛。若以甘藥佐之（甘草、蔗糖之類，酸甘相合，有甲己化土之義），化瘀血而不傷新血，開鬱氣而不傷正氣，其性尤和平也。

女子至期，月信不來，用山楂兩許煎湯，沖化紅蔗糖七八錢服之即通，此方屢試屢效。若月信數月不通者，多服幾次亦通下。

痢疾初得者，用山楂一兩，紅白蔗糖各五錢，好毛尖茶葉錢半，將山楂煎湯，沖糖與茶葉在蓋碗中，浸片時，飲之即愈。

《本草綱目》山楂後載有兩方：一方治腸風下血，若用涼藥、熱藥、補脾藥俱不效者，獨用乾山楂為末，艾葉煎湯調下，應手即愈。一方治痘疹乾黑危困者，用山楂為末，紫草煎酒調服一錢。

按：此二方皆有效驗，故附載之。

石榴解

石榴有酸、甜二種，以酸者為石榴之正味，故入藥必須酸者。其性微涼，能斂戢肝火，保合肺氣，為治氣虛不攝，肺勞喘嗽之要藥。又為治肝虛風動，相火浮越之要藥。若連皮搗爛煮湯飲之，又善治大便滑瀉、小便不禁、久痢不止、女子崩帶，以其皮中之液最澀，故有種種諸效也。

愚在籍時，最喜用酸石榴，及至奉天，欲用此物，恒遣人搜羅鮮果輔數十家，僅得二枚，又恒有搜羅終日而一枚不得者。蓋酸石榴必來自關里，本地之石榴則無一酸者，此或土地攸關歟？抑或酸石榴之種未至東省歟？愚今言此，欲醫界同人若用石榴時，當自嘗其果係酸者，而後可以之人藥也。

【附案】

周姓叟，年近七旬，素有勞疾，且又有阿片嗜好。於季秋患溫病，陽明府熱熾盛，脈象數而不實，喘而兼嗽，吐痰稠黏，投以白虎加人參湯以生山藥代粳米，一劑大熱已退，而喘嗽仍不愈，且氣息微弱似不接續。其家屬惶恐以為難愈，且謂如此光景難再進藥。愚曰「此次無須用藥，尋常服食之物即可治癒」。為疏方用生懷山藥兩半，酸石榴自然汁六錢，甘蔗自然汁一兩，生雞子黃四個，先將山藥煎取清湯一大碗，再將餘三味調入碗中，分三次溫飲下，盡劑而愈。後屢用此方治癒多人，遂將其方登於《衷中參西錄》，名之曰寧嗽定喘飲。

門生高如璧之父，曾向愚問治泄瀉方，語以酸石榴槌皮搗爛，煮服甚效。後歲值壬寅，霍亂盛行，有甫受其病泄瀉者，彼與以服酸石榴方，泄瀉止而病亦遂愈。蓋霍亂之上吐下瀉，原係肝木挾外感之毒克伐脾胃，乃當其病勢猶未橫恣，急以酸石榴斂戢肝木，使不至助邪為虐，致吐瀉不已，則元氣不瀉，自可以抗禦毒菌，況酸石榴之味至酸，原有消除毒菌之力乎（凡味之至酸者，皆善消）！古方治霍亂多用木瓜，取其酸能斂肝也，酸石榴之酸遠勝木瓜，是以有效也。

鄰村張氏婦，年過四旬，素患肺勞喘嗽，夜不安枕者已數年矣。無論服何藥皆無效驗。一晚偶食酸石榴，覺夜間喘嗽稍輕，從此每晚服之，其喘嗽日輕，一連服過三月，竟脫然無累矣。

龍眼肉解

龍眼肉味甘，氣香，性平，液濃而潤，為心脾要藥，能滋生心血（凡藥之色赤液濃而甘者，皆能生血），兼能保合心氣（甘而且香者皆能助氣），能滋補脾血（味甘歸脾），兼能強健脾胃（氣香能醒脾），故能治思慮過度，心脾兩傷（脾主思，過思則傷脾），或心虛怔忡、寢不成寐，或脾虛泄瀉，或脾虛不能統血，致二便下血。為其味甘能培補脾土，即能有益肺金（土生金），故又治肺虛勞嗽、痰中帶血，食之甘香適口，以治小兒尤佳。

【附案】

一少年心中怔忡，夜不能寐，其脈弦硬微數，知其心脾血液短也，俾購龍眼肉，飯甑蒸熟，隨便當點心，食之至斤餘，病遂除根。

一六七歲童子，大便下血，數月不愈，服藥亦無效。亦俾蒸熟龍眼肉服之，約日服兩許，服旬日痊愈。

一婦人年四十許，初因心中發熱，氣分不舒，醫者投以清火理氣之劑，遂泄瀉不止。更延他醫投以溫補之劑，初服稍輕，久服則瀉仍不止，一日夜四五次，遷延半載以為無藥可醫。後愚為診視，脈雖濡弱而無弦數之象，知猶可治。但瀉久身弱，虛汗淋漓，心中怔忡，飲食減少，躊躇再四，為擬方用龍眼肉、生山藥、炒白朮各一兩，補脾兼補心腎，數劑瀉止，而汗則加多。遂於方中加生龍骨、生牡蠣各六錢，兩劑汗止，又變為漫腫。蓋從前瀉時小便短少，瀉止後小便仍少，

水氣下無出路，故蒸為汗，汗止又為漫腫也，斯非分利小便使水氣下行不可。特其平素常覺腰際涼甚，利小便之藥，涼者斷不可服，遂去龍骨、牡蠣，加椒目三錢，連服十劑痊愈。

柏子仁解

柏子仁味微甘微辛，氣香性平，多含油質。能補助心氣，治心虛驚悸怔忡，能涵濡肝木，治肝氣橫恣脅疼，滋潤腎水，治腎虧虛熱上浮。雖含油質甚多，而性不濕膩，且氣香味甘實能有益脾胃，《本經》謂其除風濕痺，胃之氣化壯旺，由中四達而痺者自開也。其味甘而兼辛，又得秋金肅降之氣，能入肺寧嗽定喘，導引肺氣下行。統言之，和平純粹之品，於五臟皆有補益，故《本經》謂安五臟也。宜去淨皮，炒香用之，不宜去油。

徐靈胎曰「柏得天地堅剛之性以生，不與物變遷，經冬彌翠，故能寧心神，斂心氣，而不為邪風遊火所侵克也」。又曰「人之生理謂之仁，仁藏於心，物之生機在於實，故實亦謂之仁，凡草木之仁，皆能補心氣，以類相應也」。

周伯度曰「柏為百木之長，葉獨西指，是為金木相媾，仁則色黃白而味甘辛，氣清香有脂而燥，雖潤不膩，故肝得之而風虛能去，脾得之而濕痺能通，肺得之而大腸虛秘能已。《金匱》竹皮大丸，喘加柏實者，肺病亦肝病也。蓋婦人乳中煩嘔，是肝氣之逆，逆則不下歸腎而上衝肺，柏實得西指之氣能降肺以戢肝，喘寧有不止者乎？此與他喘證不同，故用藥亦異也」。

凡植物皆喜陽光，故樹杪皆向東南，柏樹則獨向西北（不單西指），西北者金水合並之方也。且其實成於秋而採於冬，飽經霜露，得金水之氣尤多。肝臟屬木，中寄相火，性甚暴烈，《內經》名為將軍之官，如驕將悍卒，必恩威並用而

後能統馭之。柏子仁既稟金水之氣，水能滋木，如統師旅者之厚其餉也。金能鎮木，如統師旅者之嚴其律也。滋之鎮之，則肝木得其養兼得其平，將軍之官安其職矣。《本經》謂柏實能安五臟，而實於肝臟尤宜也。曾治鄰村毛姓少年，其肝臟素有傷損，左關脈獨微弱，一日忽脅下作疼，俾單用柏子仁一兩，煎湯服之立愈。觀此，則柏子仁善於理肝可知矣。



大棗解

大棗味甘微辛，性溫，其津液濃厚滑潤，最能滋養血脈、潤澤肌肉、強健脾胃、固腸止瀉、調和百藥，能緩猛藥健悍之性，使不傷脾胃。是以十棗湯、葶藶大棗湯諸方用之。若與生薑並用，為調和營衛之妙品，是以桂枝湯、柴胡湯諸方用之。《內經》謂其能安中者，因其味至甘能守中也。又謂其能通九竅者，因其津液滑潤且微有辛味，故兼有通利之能也。謂其補少氣少津液者，為其味甘能益氣，其津液濃厚滑潤，又能補人身津液之不足也。雖為尋常食品，用之得當能建奇功。

周伯度曰「生薑味辛色黃，由陽明入衛，大棗味甘色赤，由太陰入營。其能入營由於甘中有辛，惟其甘守之力多，得生薑乃不至過守；生薑辛通之力多，得大棗乃不至過通，二藥並用所以為和營衛主劑」。

《本經》名之為大棗者，別於酸棗仁之小棗也。凡棗之酸者皆小，甘者皆大，而大棗又非一種，約以生食不脆，乾食肉多、味極甘者為入藥之品。若用為服食之物，而日日食之者，宜先用水將棗煮兩三沸，遲一點鐘將棗撈出（此時嘗其煮棗之水甚苦，故先宜將苦水煮出），再用飯甑上蒸熟，則其味甘美，其性和平，可以多服久服，不至生熱。

【附案】

邑中友人趙厚庵，身體素羸弱，年屆五旬，飲食減少，日益消瘦，詢方於愚，俾日食熟大棗數十枚，當點心用之。後年餘覲面貌較前豐腴若干，自言「自聞方後，即日服大棗，至今未嘗間斷，飲食增於從前三分之一，是以身形較前強壯也」。

表叔高福亭，年過五旬，胃陽不足，又兼肝氣鬱結，因之飲食減少，時覺滿悶，服藥半載，毫無效驗。適愚遠遊還裡，覲面談及，俾用大棗六斤，生薑一斤，切片，同在飯甑蒸熟，白內搗如泥，加桂枝尖細末三兩，炒熟麥麵斤半，和勻捏成小餅，爐上炙乾，隨意當點心服之，盡劑而愈。

胡桃解

胡桃（亦名核桃），味微甘，氣香，性溫，多含油質，將油榨出，須臾即變黑色。為滋補肝腎、強健筋骨之要藥，故善治腰疼腿疼，一切筋骨疼痛。為其能補腎，故能固齒牙、烏鬚髮，治虛勞喘嗽、氣不歸元、下焦虛寒、小便頻數、女子崩帶諸證。其性又能消堅開瘀，治心腹疼痛、砂淋、石淋杜塞作疼、腎敗不能漉水、小便不利。或誤吞銅物，多食亦能消化（試與銅錢同嚼，其錢即碎，能化銅可知）。又善消瘡疽及皮膚疥癬頭上白禿，又能治瘡毒深入骨髓，軟弱不能步履。

果之有核，猶人之有骨，是以骨亦名骸，其偏旁皆從亥也。胡桃之核，較他核為最大，且其中之仁，又含有多脂而色黑，其善於補骨，更能補骨中之髓可知（齒為骨之餘，食酸齷齒者，嚼胡桃仁即愈，亦其能補骨之實證）。一幼童，五齡猶不能行，身多瘡瘍，治癒復發，知其父素有梅毒，此係遺傳性病在骨髓也。為疏方，每劑中用胡桃仁八錢，佐以金銀花、白鮮皮、土茯苓、川貝母、玄參、甘草諸藥，如此方少有加減，服藥二十餘劑，其瘡皆愈，從此漸亦能行步矣。

古方治虛寒喘嗽、腰腿酸痛，用胡桃仁二十兩爛研，補骨脂十兩酒蒸為末，密調如飴，每晨酒服一大匙，不能飲者熱水調服。汪訥庵謂「補骨脂屬火，入心包命門能補相火以通君火、暖丹田、壯元陽；胡桃屬木，能通命門、利三焦、溫肺潤腸、補養氣血，有木火相生之妙」。愚常用之以治下焦虛寒之證，誠有奇效。

又前方加杜仲一斤，生薑炒蒜四兩，同為丸，名青娥丸。治腎虛腰疼，而此方不但治腎虛腰疼也，以治虛寒腿疼亦極效驗。曾治一媪年過六旬，腿疼年餘不愈，其脈兩尺沉細，俾日服青娥丸月餘痊愈。若虛寒之甚者，可於方中加生硫黃三兩。至硫黃生用之理，觀三期八卷所載服生硫黃法自明。

五味子解

五味子性溫，五味俱備，酸、鹹居多。其酸也能斂肺，故《本經》謂主咳逆上氣；其鹹也能滋腎，故《本經》謂其強陰益男子精。其酸收之力，又能固攝下焦氣化，治五更泄瀉、夢遺失精，及消渴小便頻數，或飲一澗一，或飲一澗二。其至酸之味，又善入肝，肝開竅於目，故五味子能斂瞳子散大。然其酸收之力甚大，若咳逆上氣挾有外感者，須與辛散之藥同用（若乾薑、生薑、麻黃、細辛諸藥），方能服後不至留邪。凡人煎劑宜搗碎，以其仁之味辛與皮之酸味相濟，自不至酸斂過甚，服之作脹滿也。

鄒潤安曰「《傷寒論》中，凡遇咳者，總加五味子、乾薑，義甚深奧，經云『脾氣散精，上歸於肺』，是故咳雖肺病，而其源實主於脾，惟脾家所散上歸之精不清，則肺家通調水道之令不肅，後人治咳但知潤肺消痰，不知潤肺則肺愈不清，消痰則轉能傷脾，而痰之留於肺者究莫消也。乾薑溫脾肺，是治咳之來路，來路清則咳之源絕矣；五味使肺氣下歸於腎，是治咳之去路，去路清則氣肅降矣。合兩藥而言，則為一開一闔，當開而闔是為關門逐盜；當闔而開則恐津液消亡，故小青龍湯及小柴胡湯、真武湯、四逆散之兼咳者皆用之，不嫌其表裡無別也」。

萆 薢

萆薢味淡，性溫，為其味淡而溫，故能直趨膀胱溫補下焦氣化，治小兒夜睡遺尿，或大人小便頻數，致大便乾燥。其溫補之性，兼能澀精秘氣，患淋證者禁用，三期四卷醒脾升陷湯後曾詳論之。

萆薢為治失溺要藥，不可用之治淋。《名醫別錄》謂萆薢治陰萎、失溺、老人五緩。蓋失溺之證實因膀胱之括約筋少約束之力，此係筋緩之病，實為五緩之一，萆薢善治五緩，所以治之。拙擬醒脾升陷湯中，曾重用萆薢以治小便頻數不禁，屢次奏效，是萆薢為治失溺之要藥可知矣。乃萆薢分清飲竟用之以治膏淋，何其背謬若是？愚在籍時，鄰村有病淋者，醫者投以萆薢分清飲，兩劑，其人小便滴瀝不通，再服各種利小便藥，皆無效。後延愚診治，已至十日，精神昏憤，毫無知覺，脈數近十至，按之即無，因謂其家人曰「據此脈論，即小便通下，亦恐不救」。其家人懇求甚切，遂投以大滋真陰之劑，以利水之藥佐之。灌下移時，小便即通，床褥皆濕，再診其脈，微細欲無，愚急辭歸，後聞其人當日即亡。

近又在津治一淋證，服藥十劑已癒，隔兩月病又反覆，時值愚回籍，遂延他醫治療，方中亦重用萆薢。服兩劑，小便亦滴瀝不通，服利小便藥亦無效。遂屢用西法引溺管兼服利小便之藥，治近一旬，小便少通滴瀝，每小便一次，必須兩小時，繼又服滋陰利水之藥十劑始痊愈。

雞內金解

雞內金，雞之脾胃也，其中原含有稀鹽酸，故其味酸而性微溫，中有瓷、石、銅、鐵皆能消化，其善化瘀積可知。《內經》謂「諸濕腫滿，皆屬於脾」，蓋脾中多回血管，原為通徹玲瓏之體，是以居於中焦以升降氣化，若有瘀積，氣化不能升降，是以易致脹滿。用雞內金為臟器療法，若再與白朮等分並用，為消化瘀積之要藥，更為健補脾胃之妙品，脾胃健壯，益能運化藥力以消積也。且為雞內金含有稀鹽酸，不但能消脾胃之積，無論臟腑何處有積，雞內金皆能消之，是以男子疝瘕、女之癥瘕，久久服之皆能治癒。又凡虛勞之證，其經絡多瘀滯，加雞內金於滋補藥中，以化其經絡之瘀滯而病始可愈。至以治室女月信一次未見者，尤為要藥，蓋以其能助歸、芍以通經，又能助健補脾胃之藥，多進飲食以生血也。

女子乾血勞之證，最為難治之證也，是以愈者恆少。惟善用雞內金者，則治之多能奏效。愚向為婦女治病，其廉於飲食者，恆白朮與雞內金並用，乃有兩次遇有此藥者，一月間月信來三次，恍悟此過用雞內金之弊也。

蓋雞內金善化瘀血，即能催月信速於下行也。然月信通者服之，或至過通，而月信之不通者服之，即不難下通。況《內經》謂「中焦受氣取汁，變化而赤，是為血」，血之來源，原在脾胃能多消飲食。雞內金與白朮並用，原能健脾胃以消飲食也。況脾為後天資生之本，居中央以灌溉四旁。此證之多發勞嗽者，脾虛肺亦虛也，多兼灼熱者，脾虛而腎亦虛也。再加山藥、地黃、枸杞諸藥以補肺滋

腎，有雞內金以運化之，自能變其濃厚之汁漿為精液，以灌注於肺腎也。迨至服藥日久，臟腑諸病皆愈，身體已漸復原，而月信仍不至者，不妨再加螻蟲、水蛭諸藥。如嫌諸藥之猛悍，若桃仁、紅花亦可以替代。然又須多用補正之藥品以駕馭之，始能有益而無害也。愚向曾本此意擬一方，名資生通脈湯，後列用其方治癒之案數則，可參觀也。

《內經》謂「女子二七天癸至」，所謂二七者，十四歲也。然必足年足月十四歲，是則室女月信之通，當在年十五矣。若是年至十五月信不通，即當預為之防，宜用整條生懷山藥，軋細過羅，每用一兩或八錢，煮作茶湯，調以蔗糖令適口，以之送服生雞內金細末五分許，當點心用之。日兩次，久則月信自然通下。此因山藥善養血，雞內金善通血也。若至因月信不通，飲食減少，漸覺灼熱者，亦可治以此方，雞內金末宜多用至一錢，服茶湯後再嚼服天冬二三錢。

至於病又加重，身體虛弱勞嗽，宜用拙擬資生通脈湯，此方之後，載有數案，且用此方各有加減，若服資生通脈湯，病雖見愈月信仍不至者，可參觀所附案中加減諸方。

上所論諸方之外，愚有新擬之方，凡服資生通脈湯病見愈而月信不見者，可用生懷山藥四兩，煮濃汁，送服生雞內金細末三錢，所餘山藥之渣，仍可水煮數次，當茶飲之。久之月信必至，蓋雞內金生用，為通月信最要之藥，而多用又恐稍損氣分，故又多用山藥至四兩，以培氣分也。



【附案】

瀋陽龔慶齡，年三十歲，胃脘有硬物杜塞，已數年矣。飲食減少，不能下行，來院求為診治，其脈象沉而微弦，右部尤甚，為疏方，用雞內金一兩，生酒麴五錢，服數劑硬物全消。

奉天大東關史仲墳，年近四旬，在黑龍江充員警署長，為腹有積聚，久治不愈，還奉求為診治。其積在左脅下大徑三寸，按之甚硬，時或作疼，呃逆氣短，飲食減少，脈象沉弦。此乃肝積肥氣之類。俾用生雞內金三兩，柴胡一兩，共為末，每服一錢半，日服三次，旬餘痊愈。

奉天海龍秦星垣，年三十餘，胃中滿悶，不能飲食，自覺賁門有物窒礙，屢經醫治，分毫無效。脈象沉牢，為疏方：雞內金六錢，白朮、赭石各五錢，乳香、沒藥、丹參各四錢，生桃仁二錢，連服八劑痊愈。星垣喜為登報聲明。

奉天大東關宋氏女，年十九歲，自十七歲時，胃有瘀滯作疼，調治無效，浸至不能飲食。脈象沉而無力，右部尤甚，為疏方：雞內金一兩，生酒麴、黨參各五錢，三稜、莪朮、知母各三錢，樗雞（俗名紅娘子）十五個，服至八劑，大小二便皆下血，胃中豁然，其疼遂愈。

鹽山龍潭莊李氏婦，年三旬，胃脘舊有停積數年不愈，漸大如拳甚硬，不能飲食。左脈弦細，右脈沉濡，為疏方：雞內金八錢，生箭耆六錢，三稜、莪朮、乳香、沒藥各三錢，當歸、知母各四錢，連服二十餘劑積全消。

友人毛仙閣治一孺子，自兩三歲時腹即脹大，至五六歲益加劇，面目黃瘦，飲食減少，俗所謂大肚痞也。仙閣見拙擬期頤餅方後載，若減去芡實，可治小兒疳積痞脹、大人癥瘕積聚，遂用其方（方係生雞內金細末三兩，白麵半斤，白沙糖不拘多少，和作極薄小餅，烙至焦熟，俾作點心服之），月餘痊愈。

愚之來奉也，奉天稅捐局長齊自芸先生為之介紹也。時先生年已七旬，而精神矍鑠，公餘喜觀醫書，手不釋卷。歲在戊午，天地新學社友人，將《醫學衷中參西錄》初期稿印行於奉天，先生見書奇嘗之。適於局中書記之夫人患癥瘕證，數年不愈，浸至不能起床，向先生求方，先生簡書中理衝湯（方載三期八卷）與之，且按方後所注，若身體羸弱，脈象虛數者，去三棱、莪朮，將方中雞內金改用四錢，服至十餘劑痊愈。先生遂購書若干遍送友人，因聯合同志建立達醫院延愚來奉矣。

受業高崇勳按：五期二卷（論雞內金為治好乾血癆要藥）論雞內金善化瘀血，闡發益精，可參觀。

穿山甲解

穿山甲味淡，性平，氣腥而竄，其走竄之性無微不至，故能宣通臟腑、貫徹經絡、透達關竅，凡血凝、血聚為病皆能開之。以治療疔癰，放膽用之，立見功效。並能治癥瘕積聚、周身麻痺、二便閉塞、心腹疼痛。若但知其長於治瘡，而忘其他長，猶淺之乎視山甲也。

疔癰初起未成膿者，愚恆用山甲、皂刺各四錢，花粉、知母各六錢，乳香、沒藥各三錢，全蜈蚣三條，服之立消。以治橫痃（魚口便毒之類）亦極效驗。其已有膿而紅腫者，服之紅腫即消，膿亦易出。至癥瘕積聚、疼痛麻痺、二便閉塞諸證，用藥治不效者，皆可加山甲作嚮導。友人黃星樓謂，身上若有血箭證，或金傷出血不止者，敷以山甲末立止，屢次用之皆效，蛤粉炒透用，惟以之熬膏，藥用生者。

蜈蚣解

蜈蚣味微辛，性微溫，走竄之力最速，內而臟腑，外而經絡，凡氣血凝聚之處皆能開之。性有微毒，而轉善解毒，凡一切瘡瘍諸毒皆能消之。其性尤善搜風，內治肝風萌動、癩癘眩暈、抽掣瘰癧、小兒臍風；外治經絡中風、口眼歪斜、手足麻木。為其性能制蛇，故又治蛇症及蛇咬中毒。外敷治瘡甲（俗名雞眼為末敷之以生南星末醋調、敷四周），用時宜帶頭足，去之則力減，且其性原無大毒，故不妨全用也。

【附案】

一媪年六旬，其腿為狗咬破受風，周身抽掣，延一老醫調治，服藥十餘日抽掣愈甚。所用之藥，每劑中皆有全蠍數錢，佐以祛風活血助氣之藥，大致順適，而未用蜈蚣。因為疏方生黃耆六錢，當歸四錢，羌活、獨活、全蠍各二錢，全蜈蚣大者二條（方載三期七卷名逐風湯），煎服一劑抽掣即止，又服一劑永不反復。

奉天小西邊門外，煙卷公司司賬陳秀山之幼子，年五歲，周身壯熱，四肢拘攣，有抽掣之狀，渴嗜飲水，大便乾燥，知係外感之熱，引動其肝經風火上衝腦部，致腦氣筋妄行，失其主宰之常也。投以白虎湯，方中生石膏用一兩，又加薄荷葉一錢，鉤藤鉤二錢，全蜈蚣二條，煎湯一盅，分兩次溫飲下，一劑而抽掣止、拘攣舒，遂去蜈蚣，又服一劑熱亦退淨。

奉天北陵旁那姓幼子，生月餘，周身壯熱抽掣，兩日之間不食乳、不啼哭，奄奄一息，待時而已，來院求治，知與前證彷彿，為其係嬰孩，擬用前方將白虎湯減半，為其抽掣甚劇，薄荷葉、鉤籐鉤、蜈蚣其數仍舊，又加全蠍三個，煎藥一盅，不分次數徐徐溫灌之，歷十二小時，藥灌已而抽掣愈，食乳知啼哭矣。翌日，又為疏散風清熱鎮肝之藥，一劑痊愈。隔兩日其同族又有三歲幼童，其病狀與陳姓子相似，即治以陳姓子所服藥，一劑而愈。

奉天小西關長發源胡同吳姓男孩，生逾百日，周身壯熱，時作抽掣，然不甚劇，投以白虎湯，生石膏用六錢，又加薄荷葉一錢，蜈蚣一條，煎湯分三次灌下，盡劑而愈。此四證皆在暮春上旬，相隔數日之間，亦一時外感之氣化有以使之然也。

一人年三十餘，陡然口眼歪斜，受病之邊目不能瞬，用全蜈蚣二條為末，以防風五錢煎湯送服，三劑痊愈。

一小兒，生數日即抽綿風，一日數次，兩月不愈。為疏方用乳香、沒藥各三錢，朱砂、全蠍各一錢，全蜈蚣大者二條，共為細末，每小兒哺乳時，用藥分許，置其口中，乳汁送下，一日約服五六次，數日痊愈。後所餘藥，又治癒小兒如此證者三人。因將其方載於三期七卷名之曰定風丹

按：蜈蚣之為物，節節有腦，乃物類之至異者，是以性能入腦，善理腦髓神經，使不失其所司，而癱瘓之病自愈。諸家本草，多謂用時宜去頭足，夫去其頭，

即去其腦矣，更何恃上人腦部以理腦髓神經乎？且其頭足黃而且亮，饒有金色，原其光華外現之處，即其所恃以治病有效之處，是以愚凡用蜈蚣治病，而必用全蜈蚣也。

有病噎膈者，服藥無效，偶思飲酒，飲盡一壺而病癒。後視壺中有大蜈蚣一條，恍悟其病癒之由，不在酒實在酒中有蜈蚣也。蓋噎膈之證，多因血瘀上脘，為有形之阻隔（西人名胃癌，謂其處凸起如山石之有巖也），蜈蚣善於開瘀，是以能愈。觀於此，則治噎膈者，蜈蚣當為急需之品矣。為其事甚奇，故附記於此。

水 蛭 解

水蛭味鹹，色黑，氣腐，性平，為其味鹹，故善入血分；為其原為噬血之物，故善破血；為其氣腐，其氣味與瘀血相感召，不與新血相感召，故但破瘀血而不傷新血。且其色黑下趨，又善破衝任中之瘀，蓋其破瘀血者，乃此物之良能，非其性之猛烈也。《本經》謂主婦人無子，因無子者多係衝任瘀血，瘀血去自能有子也。特是，其味鹹為水味，色黑為水色，氣腐為水氣，純係水之精華生成，故最宜生用，甚忌火炙。凡破血之藥，多傷氣分，惟水蛭味鹹專入血分，於氣分絲毫無損。且服後腹不覺疼，並不覺開破，而瘀血默消於無形，真良藥也。《衷中參西錄》，三期八卷理衝丸論水蛭尤詳，宜參觀。

愚治婦女月閉癥瘕之證，其脈不虛弱者，恆但用水蛭軋細，開水送服一錢，日兩次。雖數年瘀血堅結，一月可以盡消。

水蛭、虻蟲皆為破瘀血之品。然愚嘗單用以實驗之，虻蟲無效，而水蛭有效。以常理論之，凡食血之物，皆能破血。然虻蟲之食血以嘴，水蛭之食血以身。其身與他物緊貼，即能吮他物之血，故其破瘀血之功獨優。

近世方書，多謂水蛭必須炙透方可用，不然則在人腹中，能生殖若干水蛭害人，誠屬無稽之談。曾治邑城西傅家莊傅壽朋婦人，經血調和，竟不產育。細詢之，少腹有癥瘕一塊，遂單用水蛭一兩，香油炙透，為末。每服五分，日兩次，服完無效。後改用生者，如前服法。一兩猶未服完，癥瘕盡消，逾年即生男矣。

惟氣血虧損者，宜用補助氣血之藥佐之。三期八卷理衝湯後，載有用水蛭治驗之案，宜參觀。

或問「同一水蛭也，炙用與生用，其功效何如此懸殊」？答曰「此物生於水中，而色黑（水色）味鹹（水味）氣腐（水氣），原得水之精氣而生。炙之，則傷水之精氣，故用之無效。水族之性，如龍骨、牡蠣、龜板大抵皆然，故王洪緒《外科證治全生集》謂用龍骨者，宜懸於井中，經宿而後用之，其忌火可知，而在水蛭為尤甚。特是水蛭不炙，為末甚難，若軋之不細，曬乾再軋或紙包置爐臺上令乾亦可。此須親自檢點，若委之藥坊，至軋不細時，必須火焙矣。西人治火熱腫疼，用活水蛭數條，置患處，復以玻璃杯，使吮人毒血，亦良法也。



蠍子解

蠍子色青，味鹹（本無鹹味，因皆醃以鹽水，故鹹），性微溫。其腹有小黃點，兩行之數皆八，夫青者木色，八者木數，原具厥陰風木之氣化，故善入肝經，搜風發汗，治瘰癧抽掣，中風口眼歪斜，或周身麻痺，其性雖毒，轉善解毒，消除一切瘡瘍，為蜈蚣之伍藥，其力相得益彰也。

按：此物所含之毒水即硫酸也，其入藥種種之效力，亦多賴此。中其毒螫者，敷以西藥重曹或鹼，皆可解之，因此二者皆能制酸也。

【附案】

本村劉氏女，額下起時毒甚腫硬，撫之微熱，時愚甫弱冠，醫學原未深造，投藥兩劑無甚效驗。後或授一方，用壁上全蠍七個，焙焦為末，分兩次用黃酒送下，服此方三日，其瘡消無芥蒂。蓋牆上所得之蠍子，未經鹽水浸醃，其力渾全，故奏效尤捷也。

又鄰莊張馬村一壯年，中風半身麻木，無論服何藥發汗，其半身分毫無汗。後得一方，用藥局中蠍子二兩，鹽炒軋細，調紅糖水中頓服之，其半身即出汗，麻木遂愈。然未免藥力太過，非壯實之人不可輕用。

蟬蛻解

蟬蛻無氣味，性微涼，能發汗，善解外感風熱，為溫病初得之要藥。又善托隱疹外出，有皮以達皮之力，故又為治隱疹要藥。與蛇蛻並用，善治周身癩癬瘙癢。若為末單服，又善治瘡中生蛆，連服數次其蛆自化。為其不飲食而時有小便，故又善利小便；為其為蟬之蛻，故又能脫目翳也。

按：蟬退之能發汗者，非僅以其皮以達皮也，如謂以皮達皮即能發汗，何以蛇退不能發汗。蓋此物體質輕而且鬆，其肉多風眼，中含氫氣，與空氣中氧氣化合，自能生水（氫二氧一化合即成水化），不待飲水而有小便，是以古人用蚱蟬（即蟬之身）亦能表發，以其所含之氫氣多也。其蛻之發汗，亦以其有氫氣耳。

蟬於晝鳴夜靜，蟬亦止小兒夜啼，蟬聲清脆，又善醫音啞。憶一九三六年秋，餘友姚君鶴泉供職於天津郵政總局，素日公務忙碌，偶為外感所襲，音啞月餘，余為擬方，用淨蟬蛻（去足土）二錢，滑石一兩，麥冬四錢，胖大海五個，桑葉、薄荷葉各二錢，囑其用水壺泡之代茶飲，一日音響，二日音清，三日痊愈。以後又用此方治癒多人，屢試屢驗。受業孫靜明謹識

羚羊角解

羚羊角天生木胎，具發表之力，其性又涼而解毒，為托表麻疹之妙藥。疹之未出，或已出而速回者，皆可以此表之，即表之不出而毒氣內陷者，即之亦可內消。

愚生平用此救人多矣，三期疹毒門、霍亂門，皆有重用羚羊角治癒之案可參觀。至於犀角亦可治吐衄、表麻疹，而此時真者極少，且其功效亦不如羚羊角也。五期二卷中載有羚羊角辨可參觀。

羚羊角性近於平不過微涼，最能清大熱，兼能解熱中之大毒。且既善清裡，又善透表，能引臟腑間之熱毒達於肌膚而外出，又善入肝經以治肝火熾盛，至生眼疾，及患吐衄者之妙藥，所最異者性善退熱卻不甚涼，雖過用之不致令人寒胃作泄瀉，與他涼藥不同。此乃具有特殊之良能，非可以尋常藥餌之涼熱相權衡也。或單用之，或雜他藥中用，均有顯效。今特將所用羚羊角治癒之病十餘則，詳錄於下以徵明之。

【附案】

壬寅之歲，季春夜半，表弟劉銘軒之子，年六歲，於數日間出疹，因其苦於服藥，強與之即作嘔吐，所以未求診視。今夜忽大喘不止，有危在頃刻之勢，不知還可救否。遂與同往視之，見其不但喘息迫促，且精神恍惚，肢體騷擾不安，脈象搖搖而動，按之無根，其疹出第三日即靨，微有紫痕，知其毒火內攻，肝風

已動也。因思熄風、清火，且托毒外出，惟羚羊角一味能兼擅其長，且色味俱無，煎湯直如清水，孺子亦不苦服。遂急取羚羊角三錢煎湯，視其服下，過十餘分鐘即安然矣。

奉天都護（清之護寢陵者）王六橋之孫女，年五六歲，患眼疾，先經東醫治數日不愈，延為診視。其兩目胥肉長滿，遮掩目睛，分毫不露，且疼痛異常，號泣不止。遂單用羚羊角二錢，俾急煎湯服之，時已屆晚九點鐘，至夜半已安然睡去，翌晨胥肉已退其半。又煎渣服之，痊愈。蓋肝開竅於目，羚羊角性原屬木，與肝有同氣相求之妙，故善入肝經以瀉其邪熱，且善伏肝膽中寄生之相火，為眼疾有熱者無上妙藥。

奉天韓姓媪，年六十餘，臂上生疔毒，外科不善治療，致令毒火內攻，熱痰上壅，填塞胸臆，昏不知人。有東醫數人為治，移時不愈，氣息益微。延為診視，知係痰厥，急用硼砂五錢，煮至融化，灌下三分之二，須臾嘔出痰涎若干，豁然頓醒，而患處仍腫疼，其疔生於左臂，且左脈較右脈洪緊，知係肝火熾盛，發為腫毒也。遂投以清火解毒之劑，又單將羚羊角二錢煎湯兌服，一劑而愈。

奉天同善堂（省立慈善總機）堂長王熙春之幼女，年五歲，因出疹倒靨過急，毒火內鬱，已過旬日，猶大熱不止，其形體病久似弱，而脈象確有實熱，且其大便乾燥，小便黃赤，知非輕劑所能治癒。將為疏方，為開羚羊角二錢，生石膏二兩，煎湯一大盅，俾徐徐飲下。連服兩劑，痊愈。

奉天大南門內官燒鍋胡同劉璽珊之幼女，年四歲，於孟夏時胸腹之間出白痧若干，旋即不見，周身壯熱，精神昏憤，且又泄瀉，此至危之候也。為疏方：生懷山藥、滑石各八錢，連翹、生杭芍各三錢，蟬蛻、甘草各二錢，羚羊角一錢（另煎兌服），煎湯一大盅，和羚羊角所煎之湯，共盅半，分三次溫服下，其白痧復出，精神頓爽，瀉亦遂止。繼又用解毒清火之品調之，痊愈。

奉天中學教員馬凌霄之幼子，年四歲，因出疹醫急，來院求為診治。其狀閉目喘促，精神昏昏，呼之不應，周身壯熱，大便數日未行。斷為疹毒內攻，其神明所以若斯昏沉，非羚羊角、生石膏並用不可。遂為疏方：生石膏一兩，玄參、花粉各六錢，連翹、金銀花各三錢，甘草二錢，煎湯一大盅，又用羚羊角二錢煎湯半盅，混合，三次溫服下，盡劑而愈。

奉天陳姓女，年六七歲，疹後旬餘，灼熱不退，屢服西藥不效。後愚視之，脈象數而有力，知其疹毒之餘熱未清也。俾單用羚羊角一錢煎湯飲之，其熱頓愈。天津特別三區三馬路俞孚尹之幼子，年四歲，出疹三日，似靨非靨，周身壯熱，渴嗜飲水，其精神似有恍惚不穩之意，其脈象有力，搖搖而動。恐其因熱發痧，為開清熱托毒之方，加羚羊角一錢以防其發痧，購藥至，未及煎而痧發，且甚劇，遂將羚羊角與諸藥同時各煎，取湯混合，連連灌下，其痧即愈。又將其方去羚羊角，再煎服一劑，痊愈。

滄州中學書記張雅曾，來院詢方，言其家有周歲小兒出疹，延醫調治數日，其疹倒靨皆黑斑，有危在旦夕之勢，不知尚可救否。細詢之，知毒熱內陷，為開羚羊角一錢及玄參、花粉、連翹各數錢，俾將羚羊角另煎湯半茶盅，與餘三味所煎之湯兌服，一劑而愈。

滄州河務局科員趙春山之幼子，年五歲，因感受溫病發瘧，昏昏似睡，呼之不應，舉家懼甚，恐不能救。其脈甚有力，肌膚發熱。因曉之曰「此證因溫病之氣循督脈上行，傷其腦部，是以發瘧，昏昏若睡，即西人所謂腦脊髓炎也。病狀雖危，易治也」。遂單用羚羊角二錢，煎湯一盅，連次灌下，發瘧遂愈，而精神亦明瞭矣。繼用生石膏、玄參各一兩，薄荷葉、連翹各一錢，煎湯一大盅，分數次溫飲下，一劑而脈靜身涼矣。蓋瘧之發由於督脈，因督脈上統腦髓神經也（督脈實為腦髓神經之根本）。羚羊之角乃其督脈所生，是以善清督脈與神經之熱也。

滄州興業布莊劉耀華之幼子，甫周歲，發生扁桃體炎喉證，不能食乳，劇時有礙呼吸，目睛上泛，急用羚羊角一錢，煎湯多半杯，灌下，須臾呼吸通順，食乳如常。

滄州李氏婦，年二十餘，因在西醫院割瘰癧，住其院中，得傷寒證甚劇，西醫不能治。延往診視，其喘息迫促，脈數近七至，確有外感實熱，而重診無力，因其割瘰癧已至三次，屢次聞麻藥，大傷氣分故也，其心中覺熱甚難支，其脅下疼甚。急用羚羊角二錢，煎一大盅，調入生雞子黃三枚，服下，心熱與脅疼頓止。

繼投以大劑白虎加人參湯，每劑煎湯一大碗，仍調入生雞子黃三枚，分數次溫服下，連服二劑痊愈。

內子王氏生平有病不能服藥，聞藥氣即思嘔吐。偶患大便下血甚劇，時愚自奉還籍，彼自留奉，因粗識藥性，且知羚羊角毫無藥味，自用羚羊角一錢煎湯服之，立愈。

友人毛仙閣，善治吐衄聞名。其治吐衄之方，多用羚羊角，曾詢其立方之義。仙閣謂「吐衄之證多因衝氣上衝，胃氣上逆，血即隨之妄行。其所以衝胃衝逆者，又多為肝火、肝氣之激發，用羚羊角以平肝火、肝氣，其衝氣不上衝，胃氣不上逆，血自不妄行而歸經矣」。愚深韙斯論，遇吐衄證仿用之，果效驗異常，所可慮者，羚羊角雖為挽回險證之良藥，然其價昂貴，愚因臨證細心品驗，遇當用羚羊角之證，原可以他藥三種並用代之，其藥力不亞羚羊角，且有時勝於羚羊角，則鮮茅根、生石膏與西藥阿斯匹林並用是也。今爰將此三藥並用之份量酌定於下，且為定一方名，以便於記憶。

【甘露清毒飲】

鮮茅根（六兩，去淨皮切碎）、生石膏（兩半，搗細）、阿斯匹林（半瓦）將前二味煎湯一大碗，分三次送服阿斯匹林，兩點鐘服一次。若初次服藥後遍身出汗，後兩次阿斯匹林宜少服，若分毫無汗，又宜稍多服，以服後微似有汗者方

佳。至石膏之份量，亦宜因證加減，若大便不實者宜少用，若瀉者石膏可不用，待其瀉止便實仍有餘熱者，石膏仍可再用。

壬申正月中旬，長男蔭潮兩臂及胸間肉皮微發紅，咽喉微疼，疑將出疹，又強被友人挽去，為治小兒發疹。將病治癒，歸家途中又受感冒，遂覺周身發冷，心中發熱。愚適自津還籍，俾用生石膏細末一兩，煎湯送服阿斯匹林一瓦，周身得汗，發冷遂愈，心中之熱亦輕，皮膚則較前益紅。遲半日又微覺發冷，心中之熱更增劇，遂又用生石膏細末二兩，煎湯送服阿斯匹林半瓦。服後微解肌，病又見愈。遲半日仍反覆如故，且一日之間下大便兩次，知其方不可再用。時地凍未解，遣人用開凍利器，剖取鮮茅根六兩，煎湯一大碗，分三次服，每次送服阿斯匹林三分之一瓦。服後未見汗而周身出疹若干，病癒十分之八九，喉已不疼。隔兩日覺所餘之熱又漸加重，且覺頭目昏沉，又剖取鮮茅根八兩，此時因其熱增，大便已實，又加生石膏兩半，共煎湯一大碗，仍分三次送服阿斯匹林如前。上半身又發出白泡若干，病遂痊愈。觀此可知此三藥並用之妙，誠可代羚羊角矣。後返津時，值瘟疹流行，治以此方，皆隨手奏效。

【附錄】

唐山趙利庭來函：

小女一年有餘，於季夏忽大便兩三次帶有粘滯，至夜發熱，日閉目昏睡，翌晨手足筋惕肉瞤，後學斷其肝風已動。因憶先生論羚羊角最善清肝膽之火，且歷



數其奇異之功效，真令人不可思議。為急購羚羊角尖一錢，上午九點煎服，至十  
一點周身得微汗，灼熱即退。為其藥甚珍貴，又將其渣煎服三次，筋惕亦愈。繼  
服滋陰清燥湯一劑，瀉痢均愈。

血餘炭解

血餘者，發也，不煨則其質不化，故必煨為炭，然後入藥。其性能化瘀血、生新血有似三七，故善治吐血、衄血，而常服之又可治勞瘵，因勞瘵之人，其血必虛而且瘀，故《金匱》謂之血痺虛勞。人之髮，原人心血所生，服之能自還原化，有以人補人之妙，則血可不虛，而其化瘀之力，又善治血痺，是以久久服之，自能奏效。其性又能利小便（《金匱》利小便之方，有膏髮煎），以人之小便半從血管滲出，血餘能化瘀血生新血，使血管流通故有斯效。其化瘀生新之力，又善治大便下血腥臭，腸中腐爛，及女子月信閉塞，不以時至。

制血餘炭法：用壯年剃下之發，鹼水洗淨，再用清水淘去鹼味，曬乾用鐵鍋炮至髮質皆化為膏，晾冷，軋細，過羅，其髮質未盡化者，可再炮之。

指 甲 解

指甲一名筋退，乃筋之餘也。剪碎炮焦，研細用之。其味微鹹，具有開破之性，瘡瘍將破未破者，敷之可速破。內服能催生下胎衣，鼻嗅之能止衄血，點眼上能消目翳。愚自製有磨翳藥水（載三期八卷），目翳厚者，可加指甲末與諸藥同研以點目翳，屢次奏效。

〈 第 五 卷 〉

阿斯必林

Aspirin，又作阿斯匹靈。

阿斯必林為白色針狀結晶，其純係結晶而無粉末者佳。其原質為撒裡矢爾酸及硝酸化合，故其味甚酸，其性最善發汗、散風、除熱及風熱著於關節作疼痛。其發表之力又善表痧疹，其退熱之力若少用之，又可治虛勞灼熱、肺病結核。

按：阿斯必林在西藥中為晚出，而其功用最著。其性少用則涼，多用則熱。溫病初得一瓦，白糖沖水送下，可得涼汗而解。若傷寒初得一瓦半，生薑、紅糖煎湯送下，可得熱汗而解。風熱留於關節作疼痛者，先服一瓦或一瓦強，白糖水送下，令周身皆出汗後，則每服半瓦，不令出汗，日服三次，或三次中有一次微似有汗者亦佳，如此數日，其疼可愈。若其人身體虛弱者，可用生懷山藥六七錢煮作茶湯送服，若脾胃虛弱者，可用健補脾胃之藥煎湯送服。大抵皆疼之因熱者宜之，而因寒者不宜也。至於善表痧疹尤有奇效，曾治一幼女，溫病旬餘不愈，先用涼藥清其熱，熱退仍煩燥不安，後與以阿斯必林，發出白痧若干而愈。又曾治一少年，溫病陽明府實，脈雖有力而兼弦，投以白虎加人參湯，大熱已退，精神轉形騷擾，亦與以阿斯必林，遍身出疹而愈。至於初病用之發表而出痧疹者，尤不勝紀也。至於虛勞發熱脈數，屢用滋陰退熱之藥不效，可於服湯藥後，少服阿斯必林（一瓦可分四次服）不令出汗，日服兩次，則發熱與脈數必易愈。又治

肺結核證，可用阿斯必林、朱砂等分，粉甘草細末與前二藥相並之外量，同水和為丸桐子大，每服十九，或多至十二三丸，日服三次。

受業孫靜明按：民國廿四年冬，內子偶感風寒遍體痛疼異常，且其痛無定處。余以諸活血散風藥與之不效，後服阿斯必林一片，隨將壽師之活絡效靈丹服下，霍然痊愈。

安知必林

Antipyrinum，省作安比又作安替派林。

安知必林為白色無臭結晶性之粉末，或為光澤如肪脂之白色小葉狀結晶。味微苦此藥由煤瀝用化法而得，為其解熱最有功效，故亦名解火冰。凡肺勞發熱，陰虛發熱，外感寒溫發熱，疹癰發熱，間歇熱，再歸熱皆能治之。又能鎮急性關節癱麻質斯，鎮疼鎮痙，愈偏正頭痛及氣管炎、肋膜炎、溺道炎一切熱證。然治外感之熱，仍宜與中藥石膏、知母諸藥並用。治內傷之熱，仍宜與中藥地黃、玄參諸藥並用。西藥治其標，中藥治其本，標本並治，奏效必速也。每日用數回，每回之量○·五多可至一·○，小兒斟酌少用，外用可為皮下注射劑及灌腸劑。

治熱性諸病關節癱麻質斯及神經痛安知必林三·○，桂皮舍利別二○·○，水五○·○，上混和視病之輕重，或日服三回，為二日之量，或日服六回，為一日之量。

○，治加答兒性肺炎之高度發熱安知必林二·○，單含二○·○，溜水一○·○·○，上調和，每三句鐘服一食匙。

按：安知必林具有發表之性，人服之，間有發疹者，然非若時氣之疹，藥力歇後即消。為其具有發表之性，服之亦能出汗，而其祛風之力究不如阿斯必林，故其治關節癱麻質斯遜於阿斯必林，而其鎮痛之力勝於阿斯必林。

別臘蜜童

Pyliarmidonum。

本品為白色微細之結晶，係奇美企兒亞米度及安考必林相合制出。其功用同於安知必林，而非常峻烈。其解熱之力較強於安知必林三倍，且其力持續甚久，為解熱之妙藥。對於腸窒扶斯之熱，尤有佳良之效。果能使全身熱狀輕減，睡眠安靜，神識明瞭並治一切臟腑炎證，皆有確實之效驗。又為鎮痛要藥，凡頭筋骨痛酸，兼神經痛、坐骨神經痛、三叉神經痛等，皆能治之。其用量每次○·二至○·五。

治腸窒扶斯別臘蜜童一·二，分為十二包，每兩時服一包。



安知歇貌林

Antifebrinum，省文歇貌林，又作阿司炭尼利。

安知歇貌林為無色無臭之菱角板狀及小葉狀結晶，微含燒味。其原質為有機酸與亞尼林之化合。為解熱之要藥，是以有退熱冰之名。實驗其退熱之力，較安知必林強四倍，服後能使人之溫度降下三度，脈搏亦減少。治急性關節癱麻質斯、神經疼、偏正頭疼、女子月經疼。外用於創傷，療法為撒布藥，制止其化膿。用量每次○·二五至○·五。

治肺勞發熱，安知歇貌林○·○五至○·○一，白糖○·三，混和一次服，三時服一次

治腸室扶斯（寒溫發熱時）安知歇貌林○·二五，白糖○·五，混和一次服，一日服四次。

按：安知歇貌林退熱之力最優，而稍有發表之性。曾治一五六歲幼女，外感灼熱，苦於服藥，強灌之則嘔吐，遂與以安知歇貌林十分瓦之三，和以乳糖，為一日之量，俾分三次服下。因甚忙碌不暇為之外包，切囑其到家自分。之後竟忽愚所囑，分作兩次服下，其周身陡然盡涼，指甲嘴唇皆現青色，其父急來詢問。愚曰「此無恐，須臾即愈矣」，果其父回視安然已愈。愚於斯自咎不慎，後凡以西藥與人，俾作幾次服者，必定分作幾包。

又治一三歲幼童，因失乳羸弱發熱，後又薄受外感，其熱益甚。為近在比鄰，先與以安知歇貌林十分瓦之一弱，俾和以白糖一次服下。至一點鐘許，周身微微似有汗，其熱頓解，遲半日其熱又作，又與以前藥，服後仍如舊。翌日又與以安知歇貌林十分瓦之弱，仍和白糖服下，迨微汗熱退後，急用生懷地黃一兩，煎湯一大鐘，俾分兩次溫服下，其熱從此不再反復。蓋此證有外感之實熱，兼有內傷之虛熱，以安知歇貌林退其實熱，即以生地黃退其虛熱，是以病能痊愈也。或疑西藥恐有難與中藥並用之處，此原近理，而愚恒中西藥並用者，因確知其藥之原質及其藥之功用，而後敢放膽並用也。

弗那攝精

Phenacetinum。

本品為無色有光澤小葉形結晶，係巴拉尼篤羅弗諾兒與那篤倫鹵液製成。其功用類似安知歇貌林，而性較和平，在有機性新藥中能保其地位者也。其解熱、鎮痙、鎮痛之效，無一不與安知歇貌林同。服其○·二五，已能減熱，服其○·四至○·六即大能解熱，無不快之副作用。然於虛熱之肺勞家，宜斟酌慎用，恐因出汗致虛脫形狀

撒裡矢爾酸那篤留謨

*Natrium\_Salicylicum*、省文撒曹，又作納柳礬。

本品為白色無臭鱗屑狀結晶，或結晶性粉末。味甘鹹而稍帶辛辣，其原質存於楊柳外皮中，後又可用忸酸鈉化炭氧強洽三者化合而得。性涼而散，善治急性癩麻質斯，退熱消炎、鎮神經疼、偏頭疼，又善治糖尿證，即消渴，外用敷癩瘡皮膚瘙癢。

時作一次服 治急性氣管炎、新傷風咳嗽，柳酸一·〇、白糖一·〇，混和為一包，臨臥

日三次。 治糖尿病，柳酸、臭曹、重曹各一五·〇，混合分作十三包，每次服一包，

撒魯兒

SALOLUM，又作撒婁。

本品為白色結晶，形如砂粒或粉末，每百分中有柳酸六十分，石碳酸四十分。嘗之無味，臭之微香，為解熱之品。用於關節痠麻質斯及赤痢虎列拉，皆有效力。又具有防腐之力，治膀胱加答兒及淋濁。外用治潰瘍，為撒布藥。又可為喉舌諸病含漱藥，其用量每次○·五至一·○。

按：撒魯兒治淋之效力，不如骨溼波，而清熱之力過之。淋證初得，多含有熱性，治以骨溼波，佐以撒魯兒最為得宜。

規尼涅

Chininum\_hydrochloricum，即金雞納霜。

本品其原質存於規那樹皮中，其樹產於南美及非洲，用其皮制為霜，有再制以鹽酸者，名鹽酸規尼涅，省文曰鹽規，為光澤白色細針狀結晶。有再制以硫酸者，名硫酸規尼涅，省文曰硫條，狀似粉末，微有光澤。味皆極苦，皆善退熱（二種鹽規較優）。對於間歇之熱尤宜，故為治瘧疾之特效藥。又能增長胃液，多進飲食，能增大紅血球，使血脈充足，故又為健胃養血要藥。其退熱之力，對於肺炎及腸窒扶斯之熱，亦能奏效。雖為退熱之藥，實為補益之品。其用量自〇・五至一・〇。

治慢性貧血鹽規一・〇，硫酸〇・五，單含三〇・〇，餾水一七〇・〇，混合為一日之量，分四次服。

按：規尼涅西人謂治腸窒扶斯之熱，然愚曾治一童子，溫而兼瘧，東醫屢治以規尼涅不效。後愚用白虎湯清溫病之熱，而間歇熱仍在，繼用鹽規一瓦半，於熱未發之前十句鐘作兩次服下，間歇之熱亦愈。由斯見規尼涅治寒溫之熱，遠遜於生石膏也。且自此病治癒後，因悟得規尼涅原可為治瘧疾良藥，而恒有屢次服之不愈者，其人不必要兼有溫病之熱，亦恒先有伏氣化熱，若在夏秋之交，又恒有暑氣之熱留中，但恃屢用規尼涅以退其熱，藥力原有不足之處。是以愚凡治瘧，遇脈象洪實者，必先重用生石膏清之，而後治以規尼涅，無不愈者。近治友人陳

麗生君，初秋病瘧。麗生原知醫，自覺熱盛，用生石膏二兩煎湯，以清其熱，至發瘧之日，於清晨又服規尼涅一瓦弱。其日瘧仍發，且瘧過之後，仍覺心中發熱，口苦舌乾，大便乾燥，小便短赤，因求愚為診治。其脈象左右皆弦，原是瘧之正脈，惟其右部弦而且長，按之甚硬。而其陽明鬱有實熱，因自言昨日服生石膏二兩心中分毫未覺涼，且大便仍然乾燥，小便仍然短赤者何也？答曰「石膏微寒《本經》原載有明文，兄之脈火熱甚實，以微寒之石膏僅用二兩以清之，其何能有濟乎！今欲治此瘧，宜急用生石膏細末一斤，煎湯兩大碗，分多次徐徐溫飲之，覺火退時即停飲，不必盡劑，翌晨再服規尼涅如舊量，瘧即愈矣」。麗生果如法服之，其瘧遂愈，所煮石膏湯已儘量飲盡，大便並未滑瀉，然此特蓄熱之甚重者也。若其輕者，於服規尼涅之前先用生石膏一二兩煮水飲之，則所蓄之熱可清，再服規尼涅以治其瘧自易愈也。

烏羅特羅賓

Urotropinum。

本品為白色結晶性之粉末，無臭氣味，初甘後略苦，係銓化與袱毛地海相合製成。有利尿、溶解尿酸及防腐之效。善治膀胱炎、腎盂炎，為散劑，或和於曹達水（即中水中少加曹達）而用之，若寒溫之熱在半表半裡，宜同規尼涅用之。其用量一日三次，每次○·五至一·○。



鹽 酸

Acidum\_hydrochloricum，又作鹽強酸。

本品為格魯兒水素瓦斯之水溶液，係澄明無色之液。在火氣中則發白霧，熱之則全行發揮。若用鹽酸一分，釋以餾水二分，為處方常用之鹽酸，藥房名為稀鹽酸。若用時仍須以餾水釋之，能制胃中異常發酵，夏月下利及一切發熱之證。此屬劇烈之品，貯藏宜密。

治急性胃加答兒稀鹽酸一·五，餾水一八〇·〇，皮舍二〇·〇，調和，每食後服一食匙。

鹽 酸 歌 魯 茵

Heroinum\_hydrochloricum，又作赫羅印。

鹽酸歌魯茵為白色結晶性粉末，微有苦味。係用莫兒比涅與鹽化亞舍知爾加熱而制。為歌魯茵又以歌魯茵溶解於鹽酸而得之，常為莫兒比涅及古埤乙涅之代用品。於氣管支加答兒，為鎮制咳嗽刺激之用。於肺勞者之咳嗽尤有良效。惟不可配合於重碳酸那篤留謨及亞爾加里性藥質同服。此屬劇烈之藥，宜用暗色瓶貯藏，其用量○·○·○一至○·○·○三。

○·三，共研，發作時作一次服。  
治氣管支喘息安知必林○·五，鹽酸歌魯茵○·○·○五至○·○·○一，乳糖

皮下注射料用半筒至一筒。  
治急性胃加答兒（疼痛時用之）鹽酸歌魯茵○·○·○五，鹽水一○·○·○，調為

旃那葉

Folium\_Sennae, 舊譯作辛那、森那、俗名瀉葉。

- 旃那葉狀如小淡竹葉，淡綠微帶黃色，無臭無味，產於印度伊及等處之次明科。其性能增進大腸之蠕動，又能增添膽汁（膽汁注於腸者，多則大便秘通），所以善通大便秘結，為緩下之品，實無猛烈之性，不至傷人氣分，兼治女子月閉。若煎服浸服（煎之一沸即可，浸之宜用蓋碗浸飲二次），其用量自一・〇多至三・〇，為末服之自一・〇多至二・〇。
- 治大便秘，旃那浸（二〇・〇）一五〇・〇 硫苦三〇・〇，覆盆子舍二〇・〇，上調和，每二時服一食匙。

蓖麻子油

*Oleum Ricini*，省文作蓖麻油，亦作蓖麻子油。

蓖麻子油為大戟科植物種子之脂肪，乃極濃厚之液，晶瑩透徹，近於無色有微帶黃色者。味微辛，其油不為腸壁所吸收，且滑能去著，味辛又善開通，故腸中之凝皆可隨之而下，為通腸結之要藥，兼治赤痢及腸急性加答兒（疼腫），用量每服一五・〇多至三〇・〇，用開水一鐘將油浮其上飲之。

治赤痢及腸性加答兒，蓖麻油一五・〇至二〇・〇，薄荷油一滴，作一次服。

按：蓖麻子在中藥原為劇烈之品，壯人止服五粒，若服過五粒即可吐瀉交作，而西人制為油，其性轉平和。聞西人制此油時，屢次將其浮頭之沫取出，想其劇烈之性皆在於沫，去其沫即所以去其毒也。愚治多日大便不通遍服他藥皆不效者，恒重用蓖麻子油八錢，服後並不覺瞑眩，大便遂即通行，又不至傷人氣分，其性甚和平可知。惟胃氣不降者（胃氣以息息下降為順），服後間有噁心之時，若欲防其噁心作嘔吐，可用生赭石細末三錢與蓖麻子油並服，既可止嘔吐，而其通便之力亦愈大。若不欲服生赭石末者，可用生赭石細末一兩，煎湯一大鐘，將蓖麻子油調其中服之。然既用赭石，蓖麻油分量亦宜斟酌少用。

硫苦

Magnesium\_Sulfurium，又名鎂硫強礬，又作鎂磺氧。

硫苦為無色棱柱狀或細針狀之結晶，味苦微鹹微辛，用朴硝同硫酸制出，故俗名洋朴硝。為下藥中清涼之品，不但瀉有形之積，並能瀉血液腸管中諸火藥。善治大便閉結、小便砂淋、急性胃加答兒、腸炎、腎炎、女子子宮炎、熱性痢疾、腳氣，又善瀉三焦水道之水。因其性寒有降下之力，兼有助腸蠕動之能，故有種種諸效也。其用量自一〇・〇至三〇・〇，若接觸於乾燥大氣，即稍稍風化，宜密封貯之。

治熱性赤痢：硫苦二〇・〇，苦丁（用陳皮、龍膽各五分豆蔻三分所浸之酒）二・〇，餾水二〇〇・〇，混和一日三次，二日分服。

治腳氣：硫苦二〇・〇，稀鹽酸一・〇，餾水二〇〇・〇，混和，一日三次，二日分服。

治砂淋：硫苦一〇・〇，火硝一〇・〇，混和，分三次服，為一日之量。

按：硫苦為西醫最常用之藥，且其服法恒一刻鐘服少許，使藥力接續不斷，其效尤易。

甘汞

Hydrargyrum\_Chloratum. 名亞格魯兒，又名水銀粉 (Calomelas) 即加路宋。

甘汞其制法種種不同，有以四分升汞與三分水銀製成者，有以硫酸酸化水銀三分，水銀、食鹽各一分製成者。為白色微帶黃色之重粉末，在大氣中不變化，酒精及依的兒皆可能溶解之。若著於黏膜及潰瘍而呈腐蝕作用，以少量續內服，則現水銀之固有作用而流涎。多服可通大便，少服亦可通小便。又善消除霍亂（西人名虎列拉）毒菌及梅毒入骨，遺傳性梅毒。能制腸胃之發酵，故善治赤痢初起，小兒夏月下痢用之尤宜也。惟不宜與貌羅謨化合物、沃度化合物、含青酸之藥物等同服。

治虎列拉：甘汞○·二，乳糖○·三，混和，為一包，每二十分鐘服一包。

治腦充血：甘汞○·五，乳糖○·五，作一次服

治赤痢甘汞○·五，乳糖三○·○，共分為四包，先服一包，與蓖麻子油二○·○同服，然後每三時單服甘汞一包。

治遺傳性梅毒：甘汞二○·○，白糖一○·○，分十五包，朝夕各服一包。

食鹽

Natrium\_Chloratum。

食鹽即格魯兒加留謨，非海中所出之鹽，火硝中所出之鹽也。其鹹亞於海鹽，為硝之性善消善通，故食鹽亦具通消之性，內服可促胃液分泌，並百布聖之析出，以助澱粉性及蛋白性食物之消化。外用為注射料，可愈霍亂。當血脈閉塞之時，以之注射於血管，其鹹也能益血（血味鹹），兼能除菌（凡毒物淹鹹則毒減），而其流行性，又能通血脈之閉也。又用為灌腸料，可通燥結。以其通消之性，既能開結，而其鹹寒之性，又能軟堅潤燥也。

抱水格魯拉爾

Chloralurn\_Hydratum，又名綠養冰，又名作哥拉。

抱水係亞舍答兒亞爾垚非篤三格魯兒之化合物，為無色透明菱角係之結晶，味微苦，有竄透性之臭氣，為催眠藥之最有力者。其性能麻痺腦筋，故能制止癩瘋及諸般抽掣痙攣諸證。屬劇烈之藥，感觸日光則呈酸性反應，在溫處亦稍揮散，宜避日光在冷處貯藏。有心臟疾患者不可多用，一次之極量為二·〇，一日之極量為六·〇。

治小兒急驚瘋：抱水一·〇，作一次服。

按：抱水治癩風，實強制其腦筋，不使妄行，藥力歇後仍然反復。愚治癩風恒用抱水與臭剝、臭素、安母紐謨各一瓦，共研，分一次服，為一日之量，強制癩風不發。又每兼服中藥，以除病根，愈者甚多，其法詳於赭石條下。



貌羅謨加留謨、貌羅謨安母紐謨、貌羅謨那篤留謨

Kalium\_Bromatum，一名臭素加里，省文臭剝。

Ammonium\_Bromatum，一名臭素安母紐謨，省文臭婭。

Natrium\_Bromatum，一名臭素那篤留謨，省文臭曹。

貌羅謨加留謨其原質為鹽基，係貌羅與加留謨相合製成，為光澤白色之結晶性骰子形，味鹹而兼辛，乃麻醉鎮痙、鎮疼藥也。在神經系統能呈鎮靜作用，故為神經性諸病及癲癇病之特效藥。至神經不眠、酒客譫妄、妊婦嘔吐、產婦急癇、小兒急驚、痙攣舞蹈、遺精等證用之皆有效。然多用、長用，則傷胃腸，損記憶知覺並黏膜腫，皮膚起疹。此為平和之品，尋常服量自一・〇至二・〇，若治癇瘋初起，日服五・〇，至三周可漸增至一日一〇・〇。

臭素安母紐謨有無色結晶或白色結晶性之粉末，味同臭剝，臭素那篤留謨為白色結晶性之粉末，一藥之主治與用量，大概與臭剝相同，以其皆為鹽基之藥也。因治法不同，其性亦微有異。那篤留謨不甚損人記憶知覺，傷胃則甚於臭剝。至安母紐謨則鮮害胃腸，故宜為臭剝那篤留謨之伍藥，醫者處方恒三者等分用之。

按：此三種藥，統名貌羅謨亞爾加里鹽，性原相似，而實以臭剝為主。愚恒單用之，功效頗著，以治夢遺不眠，可於臨睡時服一瓦半。以鎮諸疼可服兩瓦，以治破傷後劇疼可服三瓦，使傷處麻痺其疼立止。若用其漸漸加多，以治癲瘋之

法，亦恒有效。然愚治癰瘋，恒以西藥治其標，中藥治其本，則奏效尤速。至於治劇甚之嘔吐，愚常用臭剝兩瓦，再用赭石細末煎湯送之，較單用臭剝者更有效驗。

依的兒

Aether，一名伊打。

依的兒由硫酸及酒精制出，為無色透明流液，具有極強之揮發性，有特異之香氣，嘗之有熱力，易於燃著，用時宜遠火。其作用大半似阿羅芳謨，用於皮膚為局部之麻醉品，初覺灼熱，繼則清涼，又繼則全無知覺。若由鼻吸其蒸汽，可使全身麻醉，其用法詳於外科手術書。內服對於一切虛脫狀態及忽然昏倒用之，可以興奮回蘇。又善治痙攣嘔吐、諸般疼痛、膽石及石淋，用量三滴至五滴，服法或滴於白糖或盛於膠囊。

按：依的兒為麻醉之品，實具興奮之性，猝然昏倒者服之，或可奏回蘇之功，至虛脫之證其下脫者，或亦可用之。若其人孤陽上越，元氣游離，現種種上脫之證，此藥斷不宜用。此等證閱山萸肉解自知治法。

哥羅芳謨

Chloroform, 又作哥羅芳。

哥羅芳謨為易於流動澄明無色之液，味熱而甘。以化學家言之，其原質係三格兒美企兒。在皮膚上之作用類依的兒，然揮發之性少，故令人起清涼及失知覺之力，稍遜於依的兒。除依的兒之外，若吸其蒸汽為最佳之全身麻醉藥，內服所主之證，亦與依的兒相同，服其少量，兼能流通血脈，其極稀薄之液（即哥羅芳謨水）為最良之防腐藥。

治膽石：哥羅芳謨五・〇，濃厚酒精四〇・〇，護謨和劑一五〇・〇，調和，日服三次，每次一食匙。

按：此方可兼治石淋。

治女子月經困難：哥羅芳謨五・〇，樟腦〇・〇二，依的兒一・五，密兒拉一・五，護謨漿一・〇，餹水五〇・〇，調和，每十五分鐘服一食匙。

按：用哥羅芳謨等藥俾人全身麻醉，以便手術，間有性命危險。西醫研究其故，各有論說而紛不一致，以愚所見聞者，凡有危險多在氣分虛弱之人。曾在鄰村張家寨治少婦，大氣下陷證，服藥十餘劑始愈。隔一年又至其處，乃知此婦因手背生瘡，西醫欲用手術，先薰以蒙藥，竟未蘇醒。因其向日大氣之陷者雖復，

而其大氣，究欠充實也。愚所見聞，罹此險者，非僅此人。而胸中大氣之虛弱，大抵類於此人，欲施蒙藥者，尚其有鑑於此，而先詳核其胸中大氣之虛實哉。

實 芫 答 裡 斯 葉

Folium Digitalis, 俗名毛地黃，一作地治達利。

實芫答裡斯葉係歐洲所產玄參科二年生草之葉，葉體縐縮而薄，為長卵圓形，長三十仙迷，廣十五仙迷，為心臟強壯藥，最有效力，鎮制心機亢進，兼有利尿作用。於心臟諸病及炎性諸證，均為要藥。用量一次〇・〇二至〇・一五，極量一次為〇・二。通常多為浸劑，藥局制有實芫答裡斯丁兒（酒也）。

○・〇，調一日間分四次服之。

○・〇，調一日間分四次服之。

治心臟衰弱脈數無力：實芫葉浸（〇・五至一・〇）一〇〇・〇，斯獨落仿司丁幾嗟舍一〇・〇，調和，分三次至六次服。

按：助心之藥能使脈跳動有力，其跳動或因之加速，至治脈數之藥或為麻醉之劑或為退熱之品，又皆能使跳動減數。至實芫答裡斯能使脈搏舒緩，更能使脈體充實，真善於理心之藥也。

斯獨落仿斯精、斯獨落仿斯丁兒

Strophanthi。(毒毛旋花子)

Tinctura\_Strophanthi。(1%毒毛旋花甙溶液)

斯獨落仿斯精係白色結晶性之粉末。其原質存於熱帶亞斐利加所產夾竹桃科蔓生灌木之種之中，其作用頗似實答裡斯。用於心臟肌肉衰弱，心臟瓣膜障害，肺葉腫脹呼吸有礙，腎臟發炎瀉水不利者，皆為要藥。其用量一次〇・〇〇〇二至〇・〇〇〇五。

斯獨落仿斯丁兒係用斯獨落仿斯丁一分，浸於酒精十分所制之黃色、苦味液，醫者多用此代斯獨落仿斯精。其用量一次二滴至六滴。

治腎炎水腫：斯獨落仿斯丁二・一〇，日服三次，每次五滴至十滴。

治加答兒肺炎：斯獨落仿斯丁一・〇至二・〇，橙皮舍二〇・〇，餾水一八〇・〇，調和日三次，每服用量一食匙。

安母尼亞茴香精

*Spiritus\_Ammoniae\_foeniculatus.*

安母尼亞茴香精為澄明微黃色或黃色之液，以入水中則如乳色之白，味微鹹，有芳香之氣，其原質存於鹿角茸中。鹿角茸之補力，賴有安母尼亞火山之旁亦可取之制以茴香，則溫補之力愈大，服之如飲醇酒，令人面色頓紅，是以腦寒虧血者宜之，寒痰留滯者宜之。其用量自五滴至十滴。

治小兒吐瀉：安母尼亞茴香精一〇・〇，依的兒精一〇・〇，調和，半時服三滴至七滴。

治肺臟萎縮：安母尼亞茴香精二滴至五滴和於餾水而用之。



安息香酸那篤留謨

Natrium\_Benzoicum。(安息香酸鈉)

本品由安息香酸精製而出，為無色無晶形或結晶性粉末。蓋安息香酸為安息香脂主要之成分，占芳酸類之第一位。有防腐滅菌之功效，而內服則刺激黏膜誘起炎症，吸入其粉末則噴嚏咳嗽。制為那篤留謨則無斯弊，且能利痰、治尿酸，兼有助人興奮作用。其用量每次○·三至一·○。

治小兒吐瀉：安息香酸那篤留謨○·五，再餽酒精二·○，單舍一五·○○，餽水一○○·○，共調和，每一時服一小兒匙至二小兒匙。

含糖白布聖

Pepsinum\_Saccharatum。(胃蛋白酶)

含糖白布聖係吃乳小豬、小牛之胃液，攪糖製成白色澱粉，味甘性微溫。最能增益胃液消化飲食，為最和平之品，多服少服皆可。然日日服之以化食，則脾胃生依賴性，將有不服之，即難於化食之時，若欲久服者，以健補脾胃之藥輔之，則無斯弊。

按：白布聖消食之力仍不如雞內金，然加以糖制，其味甘甜雖似澱粉，水沃之仍為清液，以治小兒最易服食。愚恒用生山藥末熬粥送服此藥兩瓦，最能治虛勞發熱，或喘或嗽，或飲食不化乳糜，身體羸瘦。若不能多服粥者，可煮生山藥濃汁與此藥同服。

石 碳 酸

Acidum\_Carbolicum。

本品自石碳中制出，係細長尖銳無色之結晶，相集團結而為塊，有特異之臭氣及如燒之味，為防腐消毒最要之藥，制止發酵之力最強。以本品或濃厚溶液接觸於皮膚黏膜，則局部呈白色而失感覺，終則成為痂皮而剝離。遇胃腸異常發酵及糖尿等可內服，一次之極量為〇·一，一日之極量為〇·三。外用於諸般創傷之療法，以百分之三之溶液為製造繃帶之料，百分五之溶液為外科手術及器械消毒之用。然內服之時，往往起中毒作用，侵神經中樞，由呼吸器麻痹而致死。其吸收於創傷或黏膜者，亦往往起中毒證狀，是不可不注意者也。

治頑癬：石碳酸五〇，橄欖油一〇〇·〇，調和為塗擦料。

硼酸

Acidum\_Corricum，又作硼強酸。

硼酸即由硼砂制出，為無色鱗片狀結晶。其性之涼過於硼砂，而其防腐消毒之力亦勝於硼砂，故能制腸胃異常發酵，消化不良，潤大便利小便，除膀胱膿性炎。以之吹於咽喉，敷於皮膚可愈腫疼。和軟膏以敷潰，排膿生肌。與皓礬同用，又可為點眼藥。原為平和之品，過服能令人嘔吐。其用量〇·五至一·〇。外用洗滌含漱，防腐或消炎，每水一〇〇·〇可加藥二·〇。

治咽頭加答兒：硼酸九·〇，餹水三〇〇·〇，調和，含漱。

治諸般熱性瘡：硼酸二〇·〇，華設林八〇·〇，為膏敷之。

治熱性眼疾：硼酸二·〇，皓礬一·〇，和以水一〇〇·〇，點之。

單寧酸

Acidum\_Tannicum，名鞣酸。

本品為黃白色無晶形粉末，或為帶光澤鱗屑片，有最強收澀之味，感觸日光即漸呈黃色，或褐色。其原質存於沒食子及五倍子中。其收澀之性能止一切血證，凝固血液及分泌之蛋白質，又善治淋證久不愈者。不宜與鐵劑、金屬鹽類、膠類等混合用，恐成不溶性之化合物。

治腎臟炎，尿中多含蛋白質或兼尿血證者，用麥角〇・三，單寧酸〇・〇三，護謨散〇・五，混合為一包，與以六包，一日服三次，每次一包。

單那爾並

Tannalbin, 名鞣酸蛋白。

本品為黃褐色無味之粉末，係蛋白質化單寧酸而成，服之不甚溶解於胃中，至腸始分解為蛋白質及單寧酸，呈單寧酸之收斂作用，故不害胃之消化機能，為腸之收斂藥。本品淡而無味，適於小兒之治療。專用於大小腸加答兒腸濾囊之潰瘍轉機（下痢膿血黏膜腐爛者，為腸潰瘍轉機者，轉而有生機也），夏期小兒之下痢等證。其用量每次○·五至一·○，小兒斟酌少用。

治小兒急性消化不良：單那爾並○·五為一包，與以六包，每服一包，二日分服。

硫酸亞鉛

Zincum\_Sulfuricum, 硫酸鋅。

本品為硫酸化鉛而成，係無色透明棱柱形結晶，或細針形結晶，微有酸澀之味。其性於無恙之皮膚不呈作用，然有與蛋白質化合之性，能與分泌物及固有之蛋白體共成蛋白質化鉛，是以能限制分泌而奏治炎證之效也。此藥內服者少，外用之處極多，奏效亦顯著，以一分溶解於水五分，對於頑性及出血之潰瘍，各黏膜之糜爛性及肉芽性黏液漏等，用為塗敷劑及繃帶藥。其稀薄者之溶液對於鼻黏膜之疾患，可吸入鼻中。對於慢性耳漏，則注射於耳中。對於急性後之淋證，則注射於尿道。對於慢性膀胱炎及膀胱出血，則注射於膀胱。對於咽喉黏膜之疾患，又可為含漱藥。其溶液稀者，又可為點眼藥。其內服之量，每次〇・〇一至〇・〇二。

按：硫酸亞鉛點眼甚佳，善去翳肉及風淚眼疾。先用溫水溶化，用少許點眼上，若覺疼再攪以水，以點後微疼為度。

幾阿蘇

Krcoatum，蒸木油即結列阿曹篤。

幾阿蘇以精餾山毛櫟樹幹蒸而得之，色淺黃與洋橄欖油相似，味微辛似有煙熏氣味。每百分中含有怪阿寇六十分，幾蘇四十分，故名幾阿蘇。常用者多由煤瀝而得，力稍弱。此藥最有防腐之力，為肺病結核勞嗽之特效藥。其抑制腐敗發酵之力遠勝於石碳酸，其一次極大之用量為○·五，一日極大之用量為一·五。

按：幾阿蘇為治肺病第一要藥。愚恒用幾阿蘇、甘草末各六瓦，鏡面朱砂三瓦，混和，分作一百二十九丸，每服四丸，漸加至六丸、七丸，日服三次，以治肺勞咳嗽結核，再以治肺病之中藥湯劑與之，並用之屢奏奇效。



過滿俺酸加里

Kalium<sub>1</sub>Permanganicum，一作錳強鉞又鉞錳上礬。（高錳酸鉀）

本品為棕色積柱形結晶，有金屬樣光澤，遇潮則發酵，變其原質。以之敷於肌膚，發劇強之灼熱，大有防腐解毒之功，兼能逐除惡臭，為洗滌惡臭潰瘍之防腐藥。洗滌之水用千分之一至千分之五。內服可治糖溺證、閉經。

治惡臭鼻淵過滿俺酸○·二，餹水五○○○·○，調和，為吸入料。

百露拔爾撒謨

( Balsamum\_Peruvianum, 一名必魯脂。(秘魯香膠)

百露拔爾撒謨係美國一種蛾形花科屬樹皮部所得之物，製成暗褐色之液，香氣佳快，味辛而帶苦。外敷善掃除疥癬，消滅毒菌。

治白禿方：百露拔爾撒謨五・〇，酒精一〇・〇〇，混和，為塗敷料，一日二次。

麥角

*Secale\_Cornutum*，耳臥達，一名了葛，又名黴麥，又作麥奴。

麥角係黴麥上所生之菌，長約寸許，粗如韭莖，微彎似角形，色紫黑有豎紋，作瓦壘形。嘗之餘味微辣，具有收斂之力，能制止諸臟腑出血，而以二便下血及女子血崩尤效，然多服之能激動子宮使之痙攣，若有孕者，胎轉被逼而出。制為流膏可皮下注射，外用於直腸脫痔疾等，為坐劑而用之。係劇烈之品，大者一枚研細，可作三次服。若制為越幾斯服之，一次之極量為〇·二，一日之極量為〇·六。

治女子血崩月經過多麥角〇·五至一·〇，白糖二·〇，共研細，分三次服，為一日之量。

麥角制為越幾斯（膏也亦名耳臥達），有濃稀二種。濃者即麥角越幾斯，宜於丸劑，稀者名麥角越幾斯流膏，一名黴麥耳臥達水膏，宜用於水調服及注射料，二種皆褐色。

治肺出血：麥角越幾斯一·〇，單寧酸一·〇，阿片末一·三，用甘草末為丸，二十粒，每三時服二粒。

治流產血崩便血：麥角越二·〇，用甘草末調之適可，為丸，分作二十九，每服一丸，日服三次至四次。

治吐血衄血：麥角越一〇・〇，芳香硫酸一〇・〇，調和，以一酒杯之水，頻頻飲之。

治一切血證注射法：麥角流膏二・〇，餹水八・〇，為皮下注射，半筒至一筒，血淋禁用。

按：麥角治血證，注射較內服尤效。然其效處在能收縮諸血管，使之細小，此純屬治標之品，遇血證之劇者宜用之，以收目前之功，而繼用治本之藥，以清其本源，使病因之根柢剷除，血證自永愈矣。

斯智普智珍功用似麥角，而較為優勝，乃麥角之新製劑也，其用量同於麥角。按：麥角愚嘗嚼服小者一枚，以試其藥力，服後移時覺會陰穴處有收縮之力。由此知其收斂血管之力必甚大，所以善止下血。曾治一婦人，因行經下血不止，經醫多人診治逾兩旬，所下之血益多，已昏厥數次矣。及愚診視，奄奄一息，已不言語，其脈如水上浮麻，不分至數。遂急用麥角寸長者一枚，和乳糖研粉，又將拙擬固衝湯（載三期八卷）煎湯一大鐘送服，其血頓止，由此知麥角之能力。後則屢次單用之，以治下血亦頗能隨手奏效。至其流動稀膏之注射，愚未嘗用，乃因注射生弊。愚嘗治癒兩人，一人年近三旬，因大便下血甚劇，西醫注射以流動麥角膏，其血止之後，四十餘日未能起床，自覺腹中氣化不通，肢體異常酸懶，飲食減少，有日甚一日之慮。診其脈象沉澀，知係瘀血為恙也。俾日用三七細末

三錢，空心時分兩次服下，服至三日後，自大便下瘀血若干，其色紫黑，至五日所下之血漸少，至七日大便已不見血矣。從此停藥不服，病亦遂愈。

又治一婦人，年過三旬，因患血崩，經西醫為之注射流動麥角膏後，其血即止。血止之後，亦月餘不能起床，飲食減少，將成勞疾。診其脈澀而無力，亦俾日服三七細末，後亦下瘀血若干而愈。夫服麥角者不至瘀血，而制為稀膏注射恒多瘀血者，蓋因所注射之量過當也。若預防此弊，當於注射之後，即服三七末數次，自能安然無恙矣。愚因治此兩證後，再用麥角末為人治下血，止後亦俾服三七末數錢。愚向有中西藥原宜相助為理之論，載於五期二卷，今觀三七之與麥角不益確然可信歟。

醋酸鉛

Pi undum\_Acet-cum，鉛糖，一名鉛霜，又作鉛醋礬。

醋酸鉛為針狀板狀之白色結晶，其酸而兼甘，在鉛化合物中占最要之地位。欲用金屬藥收斂者，多用之。為其收斂之力最優，故善止血，於腸胃出血、咯血等用之皆有特效。外用為含漱劑、灌劑、點眼水。在藥局為製造鉛醋之用，製造諸鉛鹽類亦用之為基本。其用量一次之極量為〇·一二，日之極量為〇·三，其接觸大氣之時，往往吸收碳酸，宜密栓貯藏之。

治吐血：鉛糖二·〇，鹽莫〇·一，白糖二·〇，合研，分作十包，每二時服一包。

治急性腸加答兒：鉛糖〇·五，餹水一〇〇·〇，混和，用三分之一，以攝氏三十八度溫之，為一次灌腸料。

按：醋酸鉛之力長於治吐衄，以其質重墜且性涼也。嘗治一少年，仲春吐血，為調方治癒。次年仲春病又反復，其脈象弦硬，左部又弦硬而長。知係肝木承旺過於上升而血亦隨之上升也。遂用廣三七細末三錢，攙以醋酸鉛十分瓦之三，俾分作三次服，再用生杭芍八錢，甘草三錢，煎湯送下（湯藥遞煎三次，以送三次藥末）。服藥二日，其血即止。又為開柔肝滋陰藥，俾再服數劑，以善其後，至今三年病未反復。蓋醋酸鉛為金屬之藥，能制木又復涼而重墜，原與吐衄之證

相宜，更伍以最善治吐衄之三七，而又用涼肝之芍藥，緩肝之甘草煎湯送服，是  
以效也。

沃度仿謨·

Jodoformium, 即沃仿末, 又名磺碘。三碘鉀烷(碘仿)。

沃度仿謨為金樣光彩黃色小葉狀結晶, 味淡微甘, 有燒臭氣, 係沃度之化合物, 在治療上有最確實之防腐功效。內用現和緩之沃度作用而稍呈麻醉作用。其用量一次極量為○·二, 一日之極量為○·六。外用宜作軟膏敷於瘡面。於瘡傷療法尤為重要之藥, 繃帶料多用之。

治膿瘍: 磺碘五○·○, 依的兒二五○·○, 酒精七五○·○, 混以浸五○  
○·○之脫脂棉, 燥後為充填瘡孔之用。又磺碘一○·○, 屈裡設林一○○·○, 調和, 為瘡孔注射藥。又磺碘一○·○, 依的兒一○·○, 混和, 為塗布料。



沃度加留謨

Kalium\_jodatum, 舊譯恢碘，省文沃剝。碘化鉀。

沃度加留謨為白色乾燥方形結晶，有特異之辛鹹味。其原質存於海水及海產動植物或礦泉。制法於加里海液中，溶解沃度，同時取其生成之沃度酸鹽，以木炭還原之而成，在變質藥中獨佔最優之品。故凡瘰癧、瘤贅、結核、流注、胃癌（即胃口長疙瘩，致胃窄隘有礙飲食，在胃上口者成膈食，在胃下口者成反胃）改變形質之證。服之皆能變還原質，以治梅毒始二三期，皆著確實功效。凡臟腑炎證久服他藥不愈者，可服此藥，久之皆能愈也。

治療瘰方：沃剝一〇・〇，龍膽末三〇・〇，混和，分作七十二丸，每服三丸，日服三次。

按：此方去龍膽末，並治胃癌。胃癌在胃上口為膈食，在胃下口為倒食。按此分服分量，水溶化服之。

治梅毒方：沃剝八・〇，硫苦三・〇，苦丁五・〇，鯨水一五〇・〇，混和，溶化貯封，升十六次服，日服三次。

沃度丁儿

(Tinctunjodii)

(旧译海碘酒)

本品为暗褐色有沃度之液臭气，係用沃度所制之酒，内服者甚少，外用之涂敷则甚广，若肋膜炎、关节炎、横痃、癩癣等皆为涂敷料。若内服，一日数次，每次一滴至三滴，可治妊妇呕吐，此属剧烈之药，宜密贮置冷处。

重碳酸那篤留謨

*Natrium\_Bicarbonicum*，省文曰重曹。碳酸氫鈉。

本品為白色之結晶塊或粉末，乃亞爾加里類金屬之化合物。對於消化器之加答兒性疾患等，用之最多。較諸留謨鹽為無害，為亞爾加里藥中首屈一指之藥物。善治胃酸分泌過多，食後吞酸，消化不良。蓋其性與碱相近（可作碱用），故能治胃腸異常發酵也。其用量每次用○・五至二・○。

骨拜波拔爾撒謨

Balcanarum\_Copaiva, 英名哥拜巴油。

骨拜波拔爾撒謨為熱帶南美利加所產決明科之樹脂。西人謂樹脂為拔爾撒謨，其色淡黃或作褐色，其味苦而兼辣，微有香氣。為治淋第一要藥，能護水道黏膜，頗有防腐之力。其用量每次一。○，日三服。

按：骨拜波為治淋良藥，而對於初起有熱性者尤宜。愚恒用甘草末調之，適可作丸，桐子大，朱砂為衣。每服二十九，日三服。以治淋證初起極效。若淋證帶血者，可用鮮小薊根煮湯送服。

予見春生學兄，嘗用骨拜波脂和葶澄茄末為丸，如桐子大。治花柳毒淋慢性淋證，小便白濁及婦人白帶其效如神。每服三四丸，飯後服，白水送下，一日二次。惟制丸必以骨拜波脂稠黏如蜜狀者，若用其油，則不能為丸。購時須當注意。受業張方輿謹識

華澄茄末

Pulvis\_Cubedae。

華澄茄似胡椒之末，成實者氣味亦類胡椒，而不若胡椒之熱，其苛辣刺激之性亦減於胡椒。至西人所制之末，又兼甘苦之味。本是中藥，西人用之以治淋證、白濁及女子白帶甚效，且有利小便之功用，並治膀胱內皮發炎，日久不愈。其用量每服二・〇至四・〇，日三次，若小便因熱不利者，宜少用。

按：華澄茄性平，宜於慢性淋證，若久不愈者，可用華澄茄六瓦和以骨髒波三瓦為稠膏，為一日之量，分三次服，以之治白帶亦甚效。

白檀油

Oleum Santali，又作檀香油。

白檀油者為微黃色稠厚之油，係前印度及印度群島所產之檀科白檀木心蒸餾而得之發揮油也。其香氣特異而竄透，長久留存，稀釋之芳芬似薔薇味，苛烈稍苦。對於急性淋疾及淋毒性膀胱炎奏效較著。一日三次，每次二十滴，少和以薄荷油而用之，或以其二。○人於膠囊，日服二次，服三個至五個。

醫 學 衷 中 參 西 錄 第 五 期

序

醫學係乎人身之安危，原非空談玄理也。是以著醫書者，當以理想為起點，以事實為究竟。凡心有妙悟，必先驗諸臨證之際，屢試屢效，而後筆之於書，公諸醫界。迨醫界亦用其書屢效，而後可傳諸異祀，永為醫界法程。余嘗持斯心以盱衡醫界著述諸家，故於新出之書，最喜披閱，已不下百餘種矣。乃忽於漢皋友人處，得見《衷中參西錄》，披閱數篇，見其立方之奇、析理之精，堪為醫界偉人。蓋數百年來無此作矣，乃急觀著者，原係同宗，詳審地址，更係同郡，因僕常宦遊在外，故郡有名醫不知也。何幸生平所期望者，竟於壽甫宗兄之著作得賞也。蓋先生為鹽山名士，素懷濟世之心，而抱負莫展。於斯幡然改計，藉醫藥活人，以遂其利濟之懷，此范文正公「不為良相必為良醫」之義也。向著《醫學衷中參西錄》出版四次，每次增加，《山西醫志》稱為「第一可法之書」，《紹興醫報》稱為「醫家必讀之書」，《奉天醫志》載高麗人稱為「至貴至寶之救命書」，今又集其十餘年各省登醫學志報之論，細加修整，訂作八卷，為《衷中參西錄》五期。凡醫家難治之證，若肺病、噎膈、霍亂、鼠疫、腦充血等證，莫不融匯中西，參以己見，立有妙論，專方用之必效，而又時參以哲學，兼為養生家指明方針，此誠為醫界中，別開一新紀元也。

戊辰仲春同宗弟樹筠相臣氏於津沽紫竹林



題詞

自命生平原不凡，良醫良相總空談，轆軻無礙胸懷闊，遭際常憐國運艱。憂世心從灰後熱，活人理向靜中參，軒岐奧義存靈素，化作甘霖灑大千。

著者自詠

農軒事業久沉淪，國手挺生渤海濱，力挽狂瀾回造化，神州世界慶長春。

歙縣愚弟胡天宗敬題

醫家鉅子震當今，融會中西細討論，滿幅珠璣快先睹，抱慚曾許是知音。

績溪後學章洪鈞敬題

婆心苦口發慈悲，至理名言百世師，若非乾坤鐘秀氣，鹽山那得此名醫。

揚州徐韻英登杭州醫報詩三首錄

尋師萬里赴遼東，幸坐春風兩月中，八卷方書參造化，慈航普渡利無窮。

長沙受業朱靜恒敬題

書中景仰幾經年，千里尋師沈水邊，幸列門牆沾化雨，活人事業得真傳。

牟平受業劉純熙敬題

妙藥活人幾萬千，功參造化力回天，春風化雨私淑久，杖履追隨定有年。

涇南受業周榮珪禹錫敬題

農軒事業廢興秋，力挽狂瀾世莫儔，別派混淆風浪險，公為砥柱在中流。  
如皋受業李慰農敬題

國士原懷濟世心，權將靈素化甘霖，活人神術書千頁，字字釀成大地春。  
犍為受業葉培根敬題

漫道中西理不同，天生國手善溝通，從今開闢新醫界，著述直參造化功。

鹽山受業孫蕊榜敬題

醫融中外道通玄，祖述農軒紹正傳，濟救蒼生無限苦，安懷事業隱居年。

常德受業張右長敬題

醫界群推第一人（先生與江蘇陸晉笙、楊如侯、廣東劉蔚楚，稱當今張、陸、楊、劉四大家），三張名譽又津津（又與慈谿張生甫、嘉定張山雷稱為名醫三張）  
回生妙手功無量，寰海釀成不老春。

永定受業黃潤光雨岩敬題

書著活人幾度年，中西合撰費陶甄，門牆幸受庸愚拜，得識農軒一脈傳。

如皋受業黃杓星樓敬題

融會中西贊化工，活人國手仰高風，農軒事業今猶古，醫界重新賴有公。

天門受業崔壽康蘭亭敬題

立志學醫幾度年，農軒事業少真傳，幸逢國手傾心授，得識此中玄又玄。

文安受業薛潤珊敬題

莫訝農軒道不傳，重新醫界有高賢，匯通中外深陶鑄，造極登峰是此編。

後學許鹿蘋敬題

仙風道骨異凡胎，端為金針度世來，惠我寧馨深感德，活人不僅萬千孩。

許容玉女士敬題

翻陳診斷出新書，濟救蒼生信有餘，藥性屢更前案誤，醫方密補古人疏。瓊花芝草靈山瑞，〈金匱〉、〈玉函〉處士廬，立德立功言亦重，文章壽世永終譽。

桐柏愚弟朱萑壺山敬題

例言

一、此編為登各省醫學志報之論彙集而成，初次出版在民國十七年，今已盡售。茲又彙集數年登各處醫學志報之論，約六萬餘言，復加於此期之中故名為增廣五期。

二、此編之文，多有此篇與彼篇相重複者，因其上報原不在一處也。今匯為一編，欲節去其重複，而於全篇之文理，文氣似皆有不順，故皆仍其舊，閱者諒之。

三、諸論之作，或因觀醫報有所感發，或因人有所質問，或因時有其證，或因報社有所徵求，原非遍論各門病之書也。其有未論及者，可統諸期而匯通參觀之，則證之大略皆備矣。至從前諸期已論其證，而此則復論及者，大抵又更加詳也。

四、愚於諸藥多喜生用，欲存其本性也。有如石膏，為硫氧氫鈣化合，若煨之則硫氧氫皆飛去，其涼散之力頓失，而所餘之鈣，經煨即變為洋灰，斷不可服，故斯編之中，於生石膏之能救人，煨石膏之能傷人，反復論之，再三致意，以其關於人命之安危甚重也。又如赭石原鐵氧化合，其重墜涼鎮之力最善降胃止血，且又能生血，分毫不傷氣分。至藥房中所鬻之赭石，必煨以煤火，則鐵氧分離即不能生血，且更淬之以醋，轉成開破之性，多用之即可令人泄瀉。又如赤石脂原係粉末，宜興茶壺即用此燒成，為其質同粉末有黏滯之性，研細服之可保護腸胃

之內膜，善治大便泄瀉。而津沽藥房中，竟將石脂為細末，水和為泥，捏作小餅，煨以煤火，即與宜興壺瓦無異。若為末服之，其傷人脾胃也必矣。又如山萸肉其酸溫之性能補肝斂肝，治肝虛自汗，以固元氣之將脫，實能挽回人命於至危之候。藥房多酒浸蒸黑用之，其斂肝固氣之力頓減矣。如此者實難枚舉，此所以愚於藥品多喜生用，以存其本性也。

五、醫家常用之藥，愚恒不用，其不常用者，愚恒喜用。蓋用藥以能治病為宗旨，醫者疏方恒至藥品二十餘味，其分量約皆在二三錢之間，不甚差池，即將病治癒，亦不知係何藥之力，而愚初臨證時，恒擇對證之藥，重用一味煎湯數鐘，徐徐服之，恒能挽回極重之病，且得藉之以驗藥力之實際（拙編中，重用樂一味挽回險重者頗多）。是以非常用之藥，而愚喜用者，以曾用之有實效也。其為常用之藥，而愚從未一用者，因曾用之無實效也。凡事必實驗而後知，不敢人云亦云也。

六、中醫之理原多包括西醫之理，如《內經》所論諸厥證，所謂血之與氣並走於上及血菀於上為薄厥、肝當治不治為煎厥，即西人所謂腦充血也。中醫謂肺朝百脈，《難經》謂肺為五臟六腑之所終始，即西人所謂血脈管及回血管之迴圈也。然古人語意渾涵，且未經剖解實驗，言之終不能確鑿。及觀西人之說，則古書所云者，無事詮解皆能了然也。又中醫治病恒深究病之由來，是治病之本也；西醫治病務治其局部，是治病之標也。若遇急危之證及難治之證，正不妨以西藥

治其標，以中藥治其本，則見效必速。故凡西藥之性近和平，確知其原質者，不妨與中藥一時並用。至未知其原質者，慮其與中藥有所妨礙，正不妨中隔數點鐘而先後用之也。

七、凡藥性之和平者，非多用不能奏效。若地黃、山藥、萸肉、枸杞、龍眼肉諸藥是也。至石膏《本經》原謂其微寒，亦係和平之品，若遇寒溫大熱，為挽回人命計，有時不得不多用，彼見愚所擬之方，一劑恒至七八兩，畏其分量過重而不敢輕用，皆未知藥性者也。

八、編中來函多略起結，因起結為世故應酬，於醫學無益也。至於中間用拙擬之方，其加減具有精義者錄之，至泛泛者亦恒節去。蓋此編處處徵實，即三四句間，亦欲閱者有所心得，可實際施於臨證之間也。

九、各處藥房所鬻之藥，皆有差誤。戊午愚初至奉天，方中曾用白頭翁，檢視取來之藥，白頭翁純係白茸下帶根二分許，質之藥房，問其根作何用，答言根是漏蘆。從此在彼處臨證，如用白頭翁時，方中皆開漏蘆。又方中曾用赤小豆，檢視取來之藥係相思子，因此物亦名紅豆也（唐王維詩有紅豆生南國之句）。質之藥房，謂方中但開赤小豆皆與以此物。於斯再用赤小豆，必開明飯赤小豆。又丙寅愚至天津，方中曾用廔蟲，檢視取來之藥，係黑色光背甲蟲，質之藥房曰「廔蟲即土鼈何為給此」？答言「廔蟲與土鼈此地原分為兩物」，從此欲用廔蟲時，方中必改寫土鼈蟲。又曾欲用鮮小薊而未有，權以藥房中乾者代之，至檢視取來

之藥，竟係所食之曲麻菜，此大薊也。質之藥房，乃知此地原以小薊為大薊，大薊為小薊。此以外之差誤，又難悉數。由斯知，凡至生地臨證，開方當以親自檢視藥藥味為第一要著也。

十、學問之道，貴與年俱進，精益求精。愚向以胸中之氣即元氣，後乃知元氣在臍，大氣在胸，向以心中之神明為元神，後乃知元神在腦，識神在心，此編之論說，間有與前數期不同者，當以此編為是。

〈 第 一 卷 〉



學醫工夫，須先明人身之生理。全身之肢體、臟腑、經絡皆生理攸關也。是卷兼採中西生理之學，更參以哲學家談生理處，復以己意融合貫通之。生理既明，而養生之理寓其中矣。養生之理既明，而治病之理寓其中矣。

### 論中醫之理多包括西醫之理溝通中西原非難事

鄙人才質庸碌，而性好深思，自幼承家學淵源，醫學與讀書並重，是以自童年時即留心醫學，弱冠後即為人診病疏方。年過三旬始見西人醫書，頗喜其講解新異多出中醫之外。後又十餘年，於醫學研究功深，乃知西醫新異之理原多在中醫包括之中，特古籍語意渾含，有賴後人闡發耳。今不揣固陋，遠採古籍所載，近參時賢之說，臚列數則於下以證明之。

西人謂人身有血管、微絲血管、回血管。血脈自左上心房轉落左下心房，入於血管。由血管人微絲血管，以散佈於周身，內而臟腑，外而肌肉。迨臟腑肌肉濡潤之餘，又轉入回血管。由回血管收回右上心房，轉落右下心房，更由右下心房以上注於肺。此時因血中混有碳氣其色紫黑。迨注肺之後，隔肺膜呼出碳氣，吸進氧氣，其色乃赤，復還左上心房，如此迴圈不已。此說可謂奇辟生新矣。然此理固寓於扁鵲《難經》中也。其第一節云「十二經中皆有動脈，獨取寸口以決五臟六腑死生吉凶之法，何謂也？」然（答詞）寸口者，脈之大會，手太陰之動脈也。人一呼脈行三寸，一吸脈行三寸，呼吸定息脈行六寸。人一晝夜凡一萬三千五百息，脈行五十度，周於身，漏水下百刻。榮衛行陽二十五度，行

陰二十五度，故五十度復會於手太陰。寸口者，五臟六腑之所終始，故取法於寸口也」。

按：人之臟腑皆有血脈管與回血管。其回血管之血，由心至肺將碳氣呼出，是諸臟腑之回血管至此而終也。迨吸進氧氣，其血乃赤，歸於心而散佈於諸臟腑，是諸臟腑之血脈管自此而始也。故曰五臟六腑所終始也，為肺能終始諸臟腑，是以諸臟腑之病，可於肺之寸口動脈候之，而寸口之動脈遂可分其部位而應諸臟腑矣。

西人謂左右心房各有二，是心之體原四孔也，而《難經》謂心有七孔三毛。夫七孔之數既與心房之數不侔，三毛之說又毫無形跡可徵，此非中西之說顯然不同乎？不知《難經》此節之文，多被注疏家誤解。嘗考古訓，凡細微難察之物，恒比之於毛。《詩經》所謂「德輶如毛」，孟子論目之明而極之於能察秋毫之末，皆其明徵也。蓋人之心房雖只有四，而加心下血脈管及回血管與心相連之處，則為六孔矣。至心上血脈管、回血管與心相連之處，似又加兩孔而同一係之中，故古人仍以為一孔，是共七孔也。此言心之孔雖有七，所易見者只有四孔，其餘三孔則如毛之微細而不易視察，所謂如毛之微細而不易視察者，實指血脈管與回血管連心之處而言也。

中說謂人之神明在心，故安神之藥注重於心。西說謂人之神明在腦，故安神之藥注重於腦，及觀《內經》，知中西之說皆涵蓋其中也。《內經》〈脈要精微

論「曰「頭者精明之府」，為其中有神明，故能精明；為神明藏於其中，故名曰府。此西法神明在腦之說也。《內經》《靈蘭秘典》曰「心者君主之官，神明出焉」，所謂出者，言人之神明由此而發露也，此中法神明在心之說也。蓋神明之體藏於腦，神明之用發於心也。如必執定西說，謂心臟惟司血脈之迴圈，於人之神明毫無關涉者，可仍即西人之說以證明之。

西人生理學家勿阿尼氏研究靈魂之結果，謂靈魂者棲於人類各細胞中，其色濃紫，質不透明，比肉體重約千分之一，具運動之器關，能上達於地二百里以上之處，不待食物而生存，且具良心修養，其正義親切同情等之高等道德云云。其所謂各細胞中，其色濃紫、質不透明者，明明非灰白色之腦質髓與神經細胞可知矣，明明指迴圈係中之有色血液細胞更可知矣。又丁仲佑氏之譯述西說也，謂細胞之功用能將血液內之營養料及空氣分給全身，細胞又能服從性靈，而性靈亦能處處保護之。其所謂性靈，非即人之神明乎？心即為血液迴圈器之主，即可為細胞之主，而在保護細胞之性靈，自當以為心中樞，即西人之說而深為研究，與《內經》所謂「心者君主之官，神明出焉」者，何以異乎（此節採時賢蔣壁山氏說）。

中說謂肝左脾右，西說謂肝右脾左，此又中西顯然不同處也。不知肝右脾左之說早見於淮南子，扁鵲《難經》亦謂肝在右。（《難經》曰「肝之為臟，其治在左，其臟在右脅右腎之前，並胃，著脊之第九椎」，《金鑿》《刺灸心法篇》引《難經》有此二十五字，今本刪去）。夫肝在右，脾自當在左矣。而醫學家仍

據肝左脾右以治病者，誠以肝雖居右，而其氣化實先行於左，故肝之脈診於左關。脾雖居左，而其氣化實先行於右，故脾之脈診於右關。按此診脈治病則效，不按此診脈治病則不效。若不信肝之氣化先行於左，脾之氣化先行於右之說者，更可以西人生理學家之言徵之。

按：西人生理學家言，脾固居胃之左方下側，然其與胃通也，乃從脂膜相連處右行，輸送胃液腺於胃腑；其與脾通也，乃從脾尾端右行，輸送製造血液之原料於脾臟；其與肝通也，乃從脾靜脈右行，開口於肝門靜脈，輸送紅色血球中之紅色鐵質於肝臟，為造成膽汁之料；其上與肺通也，乃右行假道於胃膜以入於十二指腸；其與周身通也，乃從脾動脈右行，開口於大動脈幹，輸送白血球於毛細管以達於身體內外諸部，無所不到。是脾之本體雖居於左，而其功用無不在於右，是則謂脾居於右，誰曰不宜。如肝固居於腹腔之右側上部，而其吸收脾與胃中之血液以營提淨毒質之作用者，乃由肝門靜脈之大血管向左下方吸收而來也。且其既已提淨之血液，乃由肝靜脈之血管從肝臟之後緣而出，開口於大靜脈，向左上方入大靜脈幹以達右心室，是肝臟血液迴圈之機能皆在於左，是則謂肝居於左誰曰不宜（此節採時賢蔣壁山氏說）。《內經》謂「腎者作強之官，技巧出焉」，所謂作強技巧者，指其能生育而言也。西人則謂腎臟專司漉水，與生殖器毫無關涉。此又中西醫學顯然不同處也。然謂內腎與外腎不相關涉者，乃西人從前未定之論，非其近時實驗之言也。夫中醫之論腎，原取廣義，非但指左右兩枚也。今

西人於生理學研究功深，能悟副腎髓質之分泌素（即自命門分泌而出與督脈相通者），有迫血上行之作用，名之曰副腎碱，是悟腎中真火之用也。又悟副腎皮質之分泌素（即自胞脈分泌，而與任脈相通者），有引血下行之作用，名之曰確靈，是悟腎中真水之用也。既悟得腎中真火真水之作用，即當知腎之所以作強，所以技巧，無非賴此水火之氣以醞釀之、激發之、斡旋之，有如火車諸機輪之轉動，莫不以水火之氣為原動力也。

西人謂中醫不知有水道，不知西醫之所謂水道，即中醫之所謂三焦。其根蒂連於脊骨自上下數七節之處（其處即命門），在下焦為包腎絡腸之脂膜，在中焦為包脾連胃之脂膜，在上焦為心下之脂膜，統名為三焦，能引水液下注於膀胱。《內經》所謂「三焦者決瀆之官，水道出焉」者是也，夫《內經》即顯然謂三焦為水道，何謂不知水道也。蓋其名雖異，核其實則同也。

西人謂中醫不知有脾，不知古人不名脾而名為散膏。《難經》謂「脾重二斤三兩，扁廣為三寸，長五寸，有散膏半斤」，散膏即脾也，為脾之質為胰子，形如膏，而時時散其膏之液於十二指腸之中，以消胃輸於腸未化之餘食，故曰散膏，為脾之副臟。至脾之正臟，《內經》謂其「為營之所居」，即西人脾能制白血球之說也。由斯知，凡古書言脾統血者，指脾之正臟而言也。凡言脾化食者，指脾之副臟散膏而言也。凡言脾色黃脾味甘者，亦指散膏而言也。散膏與脾為一臟，

即脾與脾為一臟也。且以西說考之，脾尾銜接於脾門，其全體之動脈又自脾脈分支而來，即按西說脾與脾亦可合為一臟也（此節採時賢高思潛氏說）。

又西人有精蟲之說，似屬創論，然其說不自西人始也。《小乘治禪病秘要經》曰「筋色蟲，此蟲形體似筋，連持子藏，能動諸脈，吸精出入，男蟲青白，女蟲紅赤」。又《小乘法念處經》曰「十種蟲行於髓中，有形於經中」云云，此是精蟲之說始於印度久入中國。章氏叢書雜錄引而注解之，謂即胚珠，其說亦可為中說矣（此節採時賢楊如侯氏《靈素生理新論》）。且人為倮蟲（人為倮蟲之長）古書所載，以人資生之始為精蟲，不亦理明詞達乎。是西人精蟲之說原非創論，無庸驚其新奇也。

試再以病論之，如內傷黃疸證（黃疸有內傷外感之區別），中法謂係脾有濕熱，西法謂係膽石杜塞膽汁入小腸之路，或膽管腫脹窒塞膽汁入小腸之路，又有謂小腸有鈎蟲者。而投以《金匱》硝石礬石散，莫不立愈。蓋礬石能治脾中濕熱，硝石能消膽中結石，二藥並用又能除蟲及膽管腫脹，是以無論脾有濕熱，膽有結石，腸有鈎蟲或膽管因熱腫脹，投以此方皆愈。仲景當制此方時原對於此四種病因立方，非僅對於脾中濕熱立方也。且礬石為皂礬（《爾雅》名礬石為羽涅，又名為涅石，故知為皂礬），為其係鐵與硫氧化合而成，且又色青，故能人肝膽以斂膽汁之妄行，兼有以金制木之義。若但為治脾家濕熱，何為不用白礬？後世不明古人制方之義，而但以治脾中濕熱釋之，是知其一而遺其三也。至明季喻嘉言

出，深悟仲景之治黃疸，不但治脾，實兼治膽，遂於治錢小魯之案中顯然揭出，謂其嗜酒成病，膽之熱汁滿而溢於外，以漸滲於經絡，則身目俱黃云云。其原案載所著《寓意草》中，彼時猶未見西人之說，而實與西人論黃疸之病因責重於膽者相符合也。

又如中風證，其人忽然眩仆，更或昏不知人，其劇者即不能蘇復；其輕者雖能蘇復，恒至癱瘓偏枯。西人謂此非中風，乃腦充血也。此又中西顯然不同處也。不知此證名為中風，乃後世醫者附會之說，非古聖相傳之心法也。《內經》謂「血之與氣並走於上則為大厥，氣反則生，氣不反則死」。夫所謂厥者，即昏厥眩仆之謂也。大厥之證，既由於氣血相並上走，其上走之極，必至腦充血可知，此非中西之理相同乎？至謂氣反則生，氣不反則死者，蓋氣反則血隨氣下行，所以可生，若其氣上走不反，血必愈隨之上行，其腦中血管可至破裂，出血不止，猶可望其生乎。細繹《內經》之文，原與西人腦充血之議論句句符合，此不可謂不同也。又《史記》扁鵲傳所載虢太子屍厥，亦腦充血證。至扁鵲治之，亦知為腦充血證。觀其未見太子知其必耳鳴鼻張，蓋知其腦部充血之極，其排擠之力可使耳中作鳴，鼻形翕張也。及其見太子也，則謂「上有絕陽之絡，下有破陰之紐」，此蓋言人身之陰陽原相維繫，偶因陰紐破壞，不能維繫其陰中之真陽，其陰中之真陽脫而上奔，更挾氣血以上衝腦部，其充塞之極幾至腦中之絡破裂斷絕，故曰上有絕陽之絡也。此雖未明言腦充血，實不啻明言腦充血也。特是《內經》論大

厥，但言病因，未言治法，扁鵲治虢太子屍厥，其本傳所載者，係先用針砭救醒，後服湯藥，其所服者亦未詳何方。至西人對於此證雖有治法，亦難期必效。愚曾擬有建瓴湯方（載第三卷腦充血治法篇中），重用赭石、牛膝以引血下行，而輔以清火、鎮肝、降胃、斂沖之品，用之救人多矣。其腦中血管破裂不至甚劇者，皆可挽回也。

試更以藥論之，如石膏善退外感實熱，為藥中最緊要之品，而丁仲佑氏譯西人之說竟謂石膏不堪列於藥品，此又中西之說顯然不同處也。然謂石膏不堪列入藥品者，乃西人之舊說，至西人新出之說，實與其舊說迥異，而轉與中說相同。何則？硫氧氫鈣，石膏之原質也。西人工作之時恒以硫氧鈣為工作之料，迨工作之餘，所剩之硫氧鈣即結成若干石膏，較天生之硫氧氫鈣石膏猶缺一原質未備，此等石膏原與煨石膏無異（石膏經煨則硫氧氫多飛去，其鈣經煨又甚黏澀，可代鹵水點豆腐斷不可服），西人所謂石膏不堪入藥者，指此等石膏而言也。迨其後用天生石膏，知其涼而能散，大有功效，遂將石膏列於石灰基中（石灰即鈣），並將素所不信之中藥兩味亦列其中。是故碳氧石灰牡蠣也；磷氧石灰鹿茸角也；硫氧氫石灰石膏也，西人皆精驗其原質，而列為石灰基中要藥。西人可為善補過矣，而篤信西法者，猶確守西人未定之初說，與中說相齟齬，何夢夢也。

又如黃連、龍膽，中說以為退熱劇藥，用之過量能損胃減食，至西人則皆以為健胃藥，似又中西不同處也。然究其所以不同者，因西人以肉食為本，胃多積



熱，易至生炎（西人以紅熱腫疼為炎），二藥善治其腸胃生炎，故善助其腸胃化食，至吾人以穀食為本，胃氣原自沖和，若過服涼藥致腸胃中熱力不足，即難熟腐水穀，此中西論黃連、龍膽之所以不同也。然閱諸家本草，黃連能厚腸胃，其能助腸胃化食之理即在其中；龍膽能益肝膽，其能增補膽汁以為化食之資藉，又顯然也。由斯知，中西之論藥性，凡其不同之處，深究之又皆可以相通也。夫醫學以活人為宗旨，原不宜有中西之界限存於胸中。在中醫不妨取西醫之所長（如實驗器械化學等），以補中醫之所短；在西醫尤當精研氣化（如臟腑各有性情及手足六經分治主六氣等），視中醫深奧之理原為形上之道，而非空談無實際也。

自神明在腦之說倡於西人，近今講科學者鮮不謂其說至精至奧，為開天闢地之名論，而吾上古聖神猶未嘗見及，此誠所謂以管窺天，以蠡測海者也。詎知神明在腦之說，吾中華醫學早先西人數千百年而發明之，且其所發明者較西人尤為精奧，而於神明之體用，又能詳細鑒別，各得其實際也。醫學之書以《內經》為最古。《素問》〈脈要精微論〉曰「頭者精明之府」，夫精明即神明也。頭即腦之外廓，腦即頭之中心點也。國家之貨財藏於府，茲則名之為府者，確定其為神明所藏也。又《素問》靈蘭秘典曰「心者君主之官，神明出焉」。細繹經文，蓋言神明雖藏於腦，而用時實發露於心，故不曰藏而曰出，出者即由此發露之謂也。於以知〈脈要精微論〉所言者神明之體，〈靈蘭秘典〉所言者神明之用也。斯義也可兼徵之於《丹經》。夫《丹經》祖述黃帝，原與《內經》相表裡，歷代著作雖不一致，而莫不以腦中為元神，心中為識神。元神者無思無慮，自然虛靈也；識神者有思有慮，靈而不虛也。此中妙諦，慧心人可靜參也。又可徵之於字體。夫神明之用，在思，思古文作叒，叒者腦也，心者心也，蓋言心與腦神明貫通而後可以成思也。此與腦為元神，心為識神之義相符合，即與《內經》神明藏於腦而發於心之義相符合也。且更可徵之於實驗，神明為人身純陽之物，陽者性熱，腦藏神明，故腦不畏寒；心為神明發露之處，過用其心者，神明常常由心發露，故心恆發熱，此則人人皆能自覺，為未經發明，是以覺而不察耳。由此可悟養生之

道矣，凡人之享大年者，下元必常溫暖，氣血必常充足，人之神明固可由腦至心，更可以誠意導之而行於全身，是以內煉家有凝神入氣穴之語。誠以孟子謂志能帥氣，即神能帥氣；神明照臨之處，即真氣凝聚之處。神氣充足，丹田溫暖，壽命之根自然壯固，神明之功用何其弘哉！

人之始生也，綑縊化醇，胚胎初結，中間一點動氣，似有脂膜繞護，乃先天資始之氣，即氣海（胸中為氣海，藏後天之氣，此氣海在臍下，外當氣海穴，藏先天之氣）中之元氣也。此元氣得母蔭育，漸漸充盛，以生督任二脈，又漸漸充盛，其氣衝開督脈，由後上升，復通於任脈，由前下降（內煉者所以務通督任以返先天），以生全身。迨至官骸臟腑皆備，肺能呼吸，遂接後天之根（後天生命之根在呼吸），而脫離母腹矣。特是同一元氣也，其在先天之功用，與後天之功用迥殊。何者？元氣在先天，來源有自，故輸其有餘，與督任之脈常通，以融貫全身，為十月養胎之用，其功用在於能施。元氣在後天，來源既息，故保其所得，與督任之脈不通而坐鎮中宮（以全身論氣海當為中宮），握百年壽命之根，其功用在於能斂。夫地之中心有磁氣，所以斂吸全球之氣化，磁氣即地之元氣也。人身一小天地，由斯知人之元氣，即天地間之磁氣類也。其所以能鎮攝全身之氣化者，誠以全身之血脈皆含有鐵銹，磁鐵相戀，氣化自固，此造化生成之妙也。然其氣純屬先天，至精至微，不涉後天跡象，其氣不但無形且並無質（空氣扇之成風，電氣阻以玻璃，是皆有質之驗。惟磁氣無質，觸處透達，元氣似磁氣，故亦無質）。故一切補助氣分之藥，皆不能有益於元氣。若遇元氣之衰憊欲渙散者，宜保護以收澀之品，以助其吸攝之力。是以拙著中所載病案，凡於元氣之將脫者，

必重用淨萸肉四兩，或兼用他藥以輔之，即危至極點，亦能挽回，勝於但知用參、耆、朮者遠矣。

或問「參、耆、朮皆為補氣之品，子獨謂其不能補助元氣，是服之於元氣毫無益乎」？答曰「參、耆、朮諸藥皆補助後天氣化之品，故救元氣之將脫，但服補氣藥不足恃（喻嘉言謂「若氣上脫者，但知重用人參，轉令氣高不返」），惟以收斂之藥為主，若萸肉、龍骨、牡蠣之類，而以補氣之藥輔之。其上脫者，宜輔以人參、赭石（人參得赭石，能引氣下行），若陰虛不能係陽，更宜加熟地黃、生山藥以滋陰。其下脫者，宜輔以人參、黃耆，若下焦泄瀉不止，更宜加白朮以止瀉。此乃臨時救急之法。至於欲補助元氣於平時，當於靜坐之時，還虛凝神，常於精明之府（《內經》謂頭者精明之府），保此無念之正覺，如天道下濟，光明仍然，無心成化，久之元氣自有充盛之候，此乃內煉家初步工夫。此時靜坐之風盛行，不妨藉之以輔藥餌之不逮也。

或問「人未生為先天，已生為後天，據子之說，將母孩提之元氣與成人之元氣，其大小之量無以異乎」？答曰「非也。所謂以未生為先天，已生為後天者，此大略言之也。若細分之，猶有先天之先天，先天之後天，後天之後天，後天之先天。所謂先天之先天者，未生以前是也。所謂先天之後天者，自初生以至成立是也。蓋未生之前得母蔭育，其元氣固有日長之機；自初生以至成立，其全身日

日充長，其元氣亦即隨之日日充長，其充長之時間雖在後天，而其自然充長之機能仍得之先天，故可以先天統之而為先天之後天。

所謂後天之後天者，人自成立以後，全身充長之機能既停，而白晝之動作云為，復勞心勞力以耗其元氣，此誠後天之後天矣。所謂後天之先天者，其將睡未睡及將醒未醒，若有知若無知之時是也。蓋斯時也，萬慮皆空，神氣歸根，心腎相依，直與道家凝神入氣穴景況無異，故於晝間元氣之消耗者亦能些些補助，為此時有自後天返先天之機，故可名之為後天之先天也。不但此也，人之呼吸迴圈，自然之天機也，為其為自然之天機，故亦有先天存乎其中，而能於元氣稍有補益。藉曰不然，可徵之儒者之讀書與教員之宣講。夫儒者當幼學之時，鎮日讀書不輟，及長而謀舉業，又必選詩文數百篇，日夜高聲朗誦，未聞有傷氣者；至為教員，其每日登堂宣講之時間，遠少於讀書之時間也，其宣講之聲遠小於讀書之聲也，乃至因宣講而傷氣者，竟往往有之，此固極精細之問題也。蓋讀書必有聲調，當其呼氣外出之時，必心力下降以鎮其氣，而後其聲悠長，又必須丹田上升以助其氣，而後其聲高遠，此際之一升一降而心腎交矣。內煉家會合嬰兒姪女之功，即交心腎之功，亦即補助元氣之功也，是讀書者之於元氣，旋傷而旋能補之，此所以不傷氣也。至宣講則但用胸中之氣，其心氣不降，腎氣不升，有傷損而無補助，此所以多傷氣也。由此推之尋常呼吸，凡當呼氣外出之時，其心腎亦必微有升降（每呼氣外出之時，心必下降，腎必上升，是以內煉家有呼氣為補之說，細心體

會皆能自覺），雖升降之力甚微，心腎亦必相交而有益於元氣。蓋元氣雖坐鎮中宮，統攝氣化，而其統攝之力時時必需，即時時暗耗，端賴自然之呼吸心降腎升，以息息補助，此造化之妙，純為天機之自然，故亦可謂後天之先天。道書謂「呼吸分明了卻仙」，誠為見道之言也。果參透呼吸升降之奧旨，順呼吸之自然，而少加以人力主持，俾心降腎升之力息息互相凝結，有不延年益壽者乎。拙著《衷中參西錄》第二卷敦復湯後，載有論吸升呼降之理，以輔藥餌所不逮，用之治人多矣。其理原可與此互相發明，無非本呼吸之自然以推衍之也。

嘗觀抱朴子有煉氣之法，先自鼻間吸氣滿腹，停片時，又自鼻間吸氣少許，遂即自鼻間徐徐呼出所吸之氣。氣出時愈慢愈好，若以紙條粘鼻尖下，當鼻孔出氣之時，其紙不動方佳。愚向不知此法之用意，今乃知此即交心腎之功，亦即呼氣為補之功。欲明此理者，可按此法行之，以默參心腎升降之機，自知愚言為不謬也。

或問「當今為科學時代，即談醫理，必須有切實徵驗，子謂元氣有類磁氣，或仍屬想像之詞乎」？答曰「若以愚言為想像之詞，試觀《本草綱目》所載人魄之注解自明。蓋人魄即人元氣入地之所結，觀其所結之質，黑而且堅如石炭（《綱目》謂如麩炭，《洗冤錄》謂如石炭，麩炭即石炭之薄片），即其質有類磁石是其明徵。磁石即磁氣與地氣化合而凝結者也，且人魄之為物，雖隔樓板數層必結於地下，又非磁氣不能透達也。」

大氣詮

前所論元氣，先天之氣也。乃有其氣本於先天，而實成於後天，其於全身至切之關係，有與元氣同其緊要者，胸中大氣是也。夫元氣藏於臍下，為先天生命之根柢，道家所謂祖氣也。大氣積於胸中，為後天全身之禎幹，《內經》所謂宗氣也。祖為一身之遠命脈，宗為一身之近命脈，命脈雖有遠近，其關於人身之緊要同也。而漢唐以下諸書，但知注重元氣，不知注重大氣。即偶言及，亦略而不詳，於大氣在人身之真作用，及大氣下陷病之至危險，未嘗竭力闡發。是蓋未深研究《內經》之文，不知大氣關於人身之緊要也。

今試取《內經》之文繹之。《靈樞》《五味篇》曰「穀始入於胃，其精微者先出於胃之兩焦，以溉五臟，別出兩行營衛之道。其大氣之搏而不行者，積於胸中，命曰氣海，出於肺，循喉咽，故呼則出，吸則入，天地之精氣，其大數常出入一，故穀不入半日則氣衰，一日則氣少矣」，愚按：肺懸胸中，下無透竅，胸中大氣包舉肺外，上原不通於喉，亦並不通於咽，而曰出於肺，循喉咽，呼則出，吸則入者，蓋謂大氣能鼓動肺臟使之呼吸，而肺中之氣遂因之出人也。所謂天地之精氣，常出三人一者，蓋謂吸人之氣雖與胸中不相通，實能隔肺膜透過四分之一以養胸中大氣，其餘三分仍然吐出，即換出臟腑中渾濁之氣（即西人所謂吸進氧氣，呼出碳氣之理），此氣化之妙用也。至謂半日不食則氣衰，一日不食則氣少者，申明胸中大氣雖可藉天地之精氣以養之，然出三人一所得者甚少，故



又兼資穀氣以補助之也。然此篇專為五味養人而發，故第言飲食能養胸中大氣，而實未發明大氣之根源。愚嘗思之，人未生時，皆由臍呼吸，其呼吸之原動力在元氣，應無需乎大氣，其胸中亦未有大氣也。迨胎氣日盛，臍下元氣漸充，上達胸中而生大氣，大氣漸滿，能鼓舞肺臟使之呼吸，即脫離母腹由肺呼吸而通天地之氣矣。

至大氣即宗氣者，亦嘗考《內經》而得之。《素問》〈平人氣象論〉曰「胃之大絡名虛里，貫鬲絡肺，出於左乳下，其動應衣，脈宗氣也」，按虛裡之絡，即胃輸水穀之氣於胸中以養大氣之道路，而其貫鬲絡肺之餘，又出於左乳下為動脈，是此動脈當為大氣之餘波，而曰宗氣者，由是知宗氣即是大氣，為其為後天生命之宗主，故又尊之曰宗氣。其絡所以名虛里者，因其貫鬲絡肺，遊行於胸中空虛之處也。

又《靈樞》〈邪客篇〉曰「五穀入於胃，其糟粕、津液、宗氣升為三隧，故宗氣積於胸中，出於喉嚨，以貫心脈而行呼吸焉」。觀此節經文，謂宗氣亦積胸中，則宗氣即為大氣不待詮解。且與《五味篇》同為伯高之言，非言出兩人，或有異同。且細審以貫心脈而行呼吸之語，是大氣不但為後天諸氣之綱領，並為全身血脈之綱領矣。

統觀以上三節經文，可知大氣關於人者之緊要矣。至發明其緊要之至，讀之令人怵目驚心者，尤不在此數節也。《靈樞》〈五色篇〉「雷公問曰『人無病卒

死，何以知之？」？黃帝曰「氣入於臟腑者，不病而卒死」，夫人之膈上，心肺皆臟，無所謂腑也。經既統言臟腑，指膈下臟腑可知。以膈上之大氣，入於膈下臟腑，則膈上無大氣以鼓動肺臟之闔辟，其呼吸必然頓停，是以無病而猝死也。此乃胸中大氣下陷之證也。夫大氣下陷之證如此之重，其氣果全數下陷者，誠難挽回若其下陷或僅一半，其劇者或至強半，皆可挽回其下陷之氣以復其本位。而伊古以來，竟無挽回大氣下陷之方。誠以讀《內經》者，於此節經文皆忽不加察。至王氏注《內經》，又但注《素問》而不注《靈樞》。及後世之注《內經》者，又妄謂此節所謂大氣乃外感大邪之氣。夫其人果外感邪氣與無病之文不符，即所感之外邪甚重，亦必暝眩數刻，又與猝死之文不符。從古至今無切實闡發此節經文者，蓋因未明大氣下陷之證，是以無治大氣下陷之方也。

愚深憫大氣下陷之證醫多誤治，因制升陷湯一方，載於三期第四卷（處方編中）。方係生箭耆六錢，知母三錢，桔梗、柴胡各一錢五分，升麻一錢。氣分虛極下陷者，酌加人參數錢，或再加淨萸肉數錢，以斂收氣分之耗散，使已升者不至復陷更佳，若大氣下陷過甚，至少腹下墜，或更作疼者，宜將升麻倍用二錢。方中之義，以黃耆為主者，因黃耆既善補氣，又善升氣，且其質輕鬆中含氧氣，與胸中大氣有同氣相求之妙用。惟其性稍熱，故以知母之涼潤濟之。柴胡為少陽之藥，能引大氣之陷者自左上升。升麻為陽明之藥，能引大氣之陷者，自右上升。桔梗為藥中舟楫，能載諸藥之力上達胸中，故用之為嚮導也。至氣分虛極

者酌加人參，所以培氣之本也。或更加萸肉，所以防氣之渙也。至若少腹下墜，或更作疼，其人之大氣直陷至九淵，必需升麻之大力者以升提之，故又將升麻加倍也。方中之用意如此，至隨證活潑加減，尤在臨證者之善變通也。升陷湯後，又有回陽升陷湯、理鬱升陷湯二方，皆由升陷湯加減而成。此三升陷湯後，附載治癒之案二十餘則，其病之現狀，有呼吸短氣者，有心中怔忡者，有淋漓大汗者，有神昏健忘者，有聲顫身動者，有寒熱往來者，有胸中滿悶者（此因呼吸不利而自覺滿悶，若作滿悶治之立危），有努力呼吸似喘者（此種現狀尤多，乃肺之呼吸將停，其人努力呼吸以自救，若作喘證治之立危），有咽乾作渴者，有常常呵欠者，有肢體痿廢者，有食後易饑者，有二便不禁者，有癰閉身腫者，有張口呼氣外出而氣不上達，肛門突出者，在女子有下血不止者，更有經水逆行者（證因氣逆者多，若因氣陷致經水逆行者曾見有兩人，皆投以升陷湯治癒），種種病狀實難悉數。其案亦不勝錄。今惟即在奉治癒大氣下陷之案，略登數則於下，以備考徵。

西豐縣張繼昌，年十八九，患病數年不愈，來院診治。其證夜不能寐，飲食減少，四肢無力，常覺短氣。其脈關前微弱不起，知係胸中大氣下陷，故現種種諸證。投以升陷湯，為其不寐，加熟棗仁、龍眼肉各四錢，數劑痊愈。

開原史姓女子，在奉天女子師範讀書。陡然腹中作疼，呻吟不止。其脈沉而微弱，疑係氣血凝滯，少投以理氣之品，其疼益劇，且覺下墜，呼吸短氣。恍悟其

腹中疼痛原係大氣下陷，誤理其氣則下陷益甚，故疼加劇也。急投以升陷湯，一劑即愈。

奉天大東關於氏女，出嫁而孀，依居娘門，其人善英文英語，英商在奉者，延以教其眷屬。因病還家中，夜忽不能言，並不能息。其同院住者王子岡係愚門生，急來院扣門求為援救。因素為診脈調藥，知其大氣虛損，此次之證，確知其為大氣下陷，遂為疏方用生箭耆一兩，當歸四錢，升麻二錢，煎服，須臾即能言語。翌晨昇至院中，診其脈沉遲微弱，其呼吸仍覺短氣。遂將原方減升麻一錢，又加生山藥、知母各三錢，柴胡、桔梗各一錢，連服數劑痊愈。按：此證脈遲而仍用知母者，因大氣下陷之脈大抵皆遲，非因寒涼而遲也，用知母以濟黃耆之熱，則藥性和平，始能久服無弊。

奉天小北關袁姓少婦，小便處常若火炙，有時覺腹中之氣下墜，則炙熱益甚。診其脈關前微弱，關後重按又似有力。其呼吸恒覺短氣，心中時或發熱，知其素有外感伏邪，久而化熱，又因胸中大氣下陷，伏邪亦隨之下陷也。治以升陷湯加生石膏八錢，後漸加至二兩，服藥旬日痊愈。

或疑大氣下陷者，氣不上達也，喘者，氣不下降也，何以歷述大氣下陷之病狀，竟有努力呼吸有似乎喘者？答曰「此理不易驟解，仍宜以治癒之案征之。一少年因力田勞苦過度，致胸中大氣下陷，四肢懶動，飲食減少，自言胸中滿悶，其實非滿悶，乃短氣也，粗人不善述病情，往往如此。醫者不能自審病因，投以

開胸理氣之劑，服之增重，又改用半補半破之劑，服兩劑後，病又增重。又延他醫，投以桔梗、當歸、木香各數錢，病大見愈，蓋全賴桔梗升提氣分之力也。醫者不知病癒之由，再服時竟將桔梗易為蘇梗，升降易性，病驟反復。自此不敢服藥。遲延二十餘日，病勢垂危，喘不能臥，晝夜倚壁而坐，假寐片時，氣息即停，心下突然脹起，急呼醒之，連連喘息數口，氣息始稍續，倦極偶臥片時，覺腹中重千斤，不能轉側，且不敢仰臥，其脈乍有乍無，寸關尺或一部獨見，或兩部同見，又皆一再動而止，此病之危已至極點。因確知其為大氣下陷，遂放膽投以生箭耆一兩，柴胡、升麻、淨萸肉各二錢。煎服片時，腹中大響一陣，有似昏憤，蘇息片時，恍然醒悟。自此呼吸復常，可以安臥，轉側輕鬆，其六脈皆見，仍有雀啄之象。自言百病皆除，惟覺胸中煩熱，遂將方中升麻、柴胡皆改用錢半，又加知母、玄參各六錢，服後脈遂復常。惟左關三五不調，知其氣分之根柢猶未實也，遂用野臺參一兩，玄參、天冬、帶心麥冬各三錢，兩劑痊愈」。

蓋人之胸中大氣，實司肺臟之呼吸，此證因大氣下陷過甚，呼吸之機關將停，遂勉強鼓舞肺氣，努力呼吸以自救，其迫促之形有似乎喘，而實與氣逆之喘有天淵之分。觀此證假寐片時，肺臟不能努力呼吸，氣息即無，其病情可想也。設以治氣逆作喘者治此證之喘，以治此證之喘者治氣逆作喘，皆凶危立見。然欲辨此二證，原有確實徵驗，凡喘證，無論內傷外感，其劇者必然肩息（《內經》謂喘而肩上抬者為肩息）；大氣下陷者，雖至呼吸有聲，必不肩息。蓋肩息者，因喘

者之吸氣難；不肩息者，因大氣下陷者之呼氣難也。欲辨此證，可作呼氣難與吸氣難之狀，以默自體驗，臨證自無差謬。又喘者之脈多數，或有浮滑之象，或尺弱寸強；大氣下陷之脈，皆與此成反比例，尤其明徵。

升陷湯一方，不但愚用之有效也，凡醫界同人用此方以治大氣下陷者，莫不隨手奏效。安東醫士李亦泉，連用此方治癒大氣下陷者數證，曾寄函相告，即非醫界中人用此方以治大氣下陷者，亦能奏效。湖南教員席文介，因宣講傷氣，甚至話到舌邊不能說出，看書兩行即頭昏目眩，自閱《衷中參西錄》，服升陷湯十餘劑而愈，曾登於杭州《三三醫報》致謝。凡我醫界同人，尚其於大氣下陷證加之意乎。

西人謂延髓能司肺臟之呼吸。細考所謂延髓者，在人之腦後連項，實督脈將入腦之處，因此處督脈稍粗大，其中所容髓質飽滿，長約三寸，故名為延髓。腦神經實多由此分支。其所謂延髓能司肺臟之呼吸者，即其腦髓神經能司全身運動之說也。然《內經》謂「上氣不足，腦為之不滿，耳為之苦鳴，頭為之傾，目為之眩」，所謂上氣者，即胸中大氣上行，貫注於腦者也。由斯知延髓之功用，原在大氣斡旋之中。設若胸中無大氣，則延髓司呼吸之功能亦必立止。即使果如西人之說，肺臟呼吸延髓司之，而胸中大氣實又為其司呼吸之原動力也。

論人身君火相火有先後天之分

道家以丹田之火為君火，命門之火為相火；醫家以心中之火為君火，亦以命門之火為相火，二說各執一是，其將何以適從乎？不知君相二火，原有先天後天之分。所謂先天者，未生以前也。所謂後天者，既生以後也。因先天以臍呼吸，全身之生機皆在於下，故先天之君相二火在下。後天由肺呼吸，全身之功用多在於上，故後天之君相二火在上。蓋當未生之前，陽施陰受，胚胎之結先成一點水珠（是以天一生水），繼則其中漸有動氣，此乃臍下氣海（後天之氣海在膈上，先天之氣海在臍下）而丹田之元陽即發生於其中（元陽是火，是以地二生火），迨至元陽充足，先由此生督任二脈，命門者即督脈入脊之門也，是以其中所生之火與丹田之元陽一氣貫通，而為之輔佐，此道家以丹田之元陽為君火，以命門所生之火為相火論先天也。至於後天以心火為君火，自當以膽中寄生之火為相火。是以《內經》論六氣，止有少陽相火，而未嘗言命門相火。少陽雖有手足之別，而實以足少陽膽經為主。膽與心雖一在膈上，一在膈下，而上一下一係相連，其氣化即可相助為理，此《內經》以心中之火為君火，以膽中寄生之火為相火之理論後天也。夫水火之功用，最要在熟腐水穀，消化飲食。方書但謂命門之火能化食，而不知臍下氣海，居於大小腸環繞之中，其熱力實與大小腸息息相通，故丹田之元陽尤能化食。然此元陽之火與命門之火所化者，腸中之食也。至胃中之食，則又賴上焦之心火，中焦之膽火化之。蓋心為太陽之火，如日麗中天，照臨下土，

而胃中之水穀遂可藉其熱力以熟腐。至於膽居中焦，上則近胃，下則近腸，其汁甚苦，純為火味，其氣入胃，既能助其宣通下行（胃氣以息息下行為順，木能疏土，故善宣通之），其汁入腸，更能助其化生精液（即西人所謂乳糜）。是以愚治胃中熱力不足，其飲食消化不良，多生寒痰者則用藥補助其上焦之陽。方用《金匱》芩桂朮甘湯，加乾薑、厚朴，甚者加黃耆。臺灣醫士嚴坤榮代友函問二十六年寒痰結胸，喘嗽甚劇，為寄此方治癒，曾登杭州《三三醫報》第一期致謝。蓋桂枝、乾薑並用，善補少陰君火，而桂枝、黃耆並用，又善補少陽相火（即膽中寄生之相火）也。其腸中熱力不足，傳送失職，致生泄瀉者，則用藥補助其下焦之陽，方用《金匱》腎氣丸，加補骨脂、小茴香。蓋方中桂、附之熱力原直趨下焦，而小茴香善溫奇經脈絡，奇經原與氣海相繞護也。補骨脂之熱力原能補下焦真陽，而又能補益骨中之脂，俾骨髓充足，督脈強盛，命門之火自旺也。



腦氣筋辨

腦氣筋亦名腦髓神經。

西人謂人之知覺運動，其樞機皆關於腦氣筋，此尤拘於跡象之談，而非探本窮源之論也。夫腦氣筋者，腦髓之所滋生也。《內經》名腦為髓海，所謂海者乃聚髓之處，非生髓之處。究其本源，實由於腎中真陽、真陰之氣醞釀化合成，至精至貴之液體，緣督脈上升而貫注於腦者也。蓋腎屬水，水於五德為智，故善知覺。腎主骨，骨為全身楨幹，故善運動，此乃腦氣筋先天之本源也。至於後天之運用，則又全賴胸中大氣（即宗氣）。《內經》謂「上氣不足，腦為之不滿，耳為之苦鳴，頭為之傾，目為之眩」。夫上氣，乃胸中大氣由任脈而上注於腦之氣也。設或大氣有時輟其貫注，必即覺腦空、耳鳴、頭傾、目眩，此時腦氣筋固無恙也，而不能效其靈者何也？蓋胸中大氣，原能保合腦中之神明，斡旋全身之氣化，是以胸中大氣充足上升，而後腦氣筋始能有所憑藉。此非愚之出於想像而憑空擬議也，曾有實驗二則，詳錄於下以備考徵。

友人趙厚庵，邑諸生，其丁外艱時，哀毀過甚，忽覺呼吸之氣，自胸中近喉之處，如繩中斷。其斷之上半，覺出自口鼻，仍懸於凶門之上。其下半，則覺漸縮而下，縮至心口，胸中轉覺廓然，過心以下，即昏然罔覺矣。時已仆於地，氣息全無，旁人代為扶持，俾盤膝坐，片時覺縮至下焦之氣，又徐徐上升，升至心口，恍然覺悟，再升至胸，覺凶門所懸之氣，仍由口鼻入喉，與上升之氣相續，

其斷與續皆自覺有聲，仿佛小爆竹，自此遂呼吸復常。後向愚述其事，且問其所以然之故。因曉之曰「此乃胸中大氣下陷，而復自還也。夫大氣者，積於胸中，資始於先天元氣，而成於後天水穀之氣，以代先天元氣用事，能保合神明，斡旋全身，肺臟闢辟呼吸之中樞尤其所司。子因哀毀過甚，飲食不進，大氣失其所養而下陷，呼吸之中樞頓停，所以呼吸之氣中斷，於是神明失其保合而昏，肢體失其斡旋而僕矣。所幸先天元氣未虧，即大氣之根柢尤在，所以下陷之後仍能徐徐上升自還原處。升至於心而恍然醒悟者，心中之神明得大氣之保合也升至胸中覺與外氣相續者，肺臟之呼吸得大氣能自如也」，時愚行篋中帶有《衷中參西錄》未梓稿，因出示之，俾觀升陷湯後詮解及所載醫案。厚庵恍然悟會曰「十餘年疑團存於胸中，一朝被君為消去矣」。

又滄州中學校學生董炳文，吳橋人，氣分素虛。教員教以深呼吸之法，謂能補助氣分。其法將身軀後挺，努力將胸中之氣下壓，以求胸中寬闊，呼吸舒長。一日因用力逼壓其氣過甚，忽然仆地，毫無知覺，移時似覺呼吸不舒，尤不自知其仆也，又須臾呼吸方順，乃自知身仆地上。此因胸中大氣下陷，而呼吸、知覺、運動一時並已，則大氣之關於腦氣筋者，為何如哉。由斯觀之，腦氣筋先天之本源在於腎，腦氣筋後天之賴以保合斡旋者，在胸中大氣，其理固昭然也。西人於腦氣筋虛者，但知用藥補腦，而卒無效，此誠昧乎《內經》腦為髓海及上氣不足

則腦為不滿之理，西人生理之學雖精，較之《內經》，不又迴不如哉。吾人臨證遇有腦氣筋虛而欲培養補助之者，尚能究其本源與其功用之所以然乎。

三焦考

三焦為手少陽之府，既名為府，則實有其物可知，乃自漢唐以還，若《傷寒》、《金匱》、《千金》、《外臺》諸書，皆未明言三焦之形狀，遂使後世數千年暗中摸索，莫衷一是。至唐容川獨有會心，謂三焦即網油，其根蒂連於命門，誠為確當之論。而醫家仍有疑議者，因唐氏雖能確指出三焦，而未嘗博採旁引，徵明油網確係三焦也。愚不揣固陋，為特引數則以證明之。

《內經》〈論勇篇〉謂「勇士者，三焦理橫；怯士者，三焦理縱」，夫三焦之理，既明明可辨其橫縱，則其理之大且顯可知。而一身之內，理之大且顯者，莫網油若也。此三焦即網油之明徵也。又《內經》〈脹論篇〉謂「三焦脹者，氣滿皮膚中，輕輕然而不堅」，夫所謂皮膚中者，腠理之膜也。人身之膜，原內外縱橫，互相通貫。網油為膜之最大者，故網油有脹病，可外達於腠理。此亦三焦即網油之明徵也。

又《內經》〈本藏篇〉謂「密理厚皮者，三焦膀胱厚；粗理薄皮者，三焦膀胱薄；疏腠理者三焦膀胱緩皮急而無毛者，三焦膀胱急；毫毛美而粗者，三焦膀胱直；稀毛者，三焦膀胱結」。夫三焦既可辨其厚、薄、緩、急、直、結，則實有其物可知。且其厚、薄、緩、急、直、結皆與膀胱並論，則三焦亦如膀胱之以膜為質，且與膀胱相連可知。而以膜為質與膀胱相連者，即網油也。此又三焦即網油之明徵也。

又《內經》以三焦為手少陽之府，與心包為手厥陰之臟者相配偶。凡相偶之臟腑，與網油原相連絡，其經絡必然相連，而心胞亦係脂膜，此亦三焦即網油之明徵也。

又扁鵲謂「腎間動氣為三焦之原」。夫腎間動氣之處即相火也，為網油即是三焦，其根蒂與命門相連，故命門中之動氣，可為三焦之原也。

又王叔和《脈經》，相火、三焦、心胞之脈皆診於右尺，後世論脈者多非之。及觀唐氏三焦即網油，其根蒂連於命門之說，乃知三焦與心胞皆與相火同生於命門，故可同診於右尺。叔和晉人，去古未遠，其著《脈經》，定有師傳，必非憑空擬議。先賢後賢合符同揆，《脈經》得唐氏之說而《脈經》可信，即唐氏之說徵以《脈經》之部位而亦可確信也。

又王勳臣「嘗驗剖解物類者，若在甫飲水之後，其網油中必多水鈴鐺。若非在甫飲水之後，其網油中即少水鈴鐺」，是知網油為行水之道路，西人亦謂水道即是網油。徵之《內經》「三焦者決瀆之官，水道出焉」之文，不益明三焦即是網油乎。

又徐靈胎謂「《內經》言三焦者不一，皆歷言其紋理厚薄與其出入貫布，況既謂之腑，則明是藏蓄泌瀉之具。但其周布上下，包括臟腑，非若五腑之形各自成體也」，觀徐氏之論三焦，雖未明言三焦即是網油，而究其周布上下，包括臟腑，非若五腑之形各自成體數語，盡形容出網油之狀，特當時無網油之名詞，故

未明言出網油即三焦耳。徐氏於醫學考核最精，其所言者，固非無根據而虛為擬議也。

又陳無擇謂「三焦是臍下脂膜」，是明指網油為三焦矣。特其所言臍下脂膜惟係下焦耳。然觀書之法，不可以辭害意。由此推之，則包脾絡胃之脂膜即中焦，心下膈膜及連絡心肺之脂膜即上焦矣。統觀以上八則，三焦之為網油不誠信而有徵乎？

少陽為遊部論

人身之三陽經，外太陽，裡陽明，介於太陽陽明之間者為少陽，人之所共知也。及觀《內經》〈熱論篇論〉外感之來，「一日巨陽受之（巨陽即太陽），二日陽明受之，三日少陽受之」，其傳經之次第，又自太陽而陽明，自陽明而少陽者何也？蓋人身十二經，手足各六，其他手足同名之經，原各有界限，獨少陽《內經》謂之遊部。所謂遊部者，其手足二經，一脈貫通，自手至足，自足至手，氣化流行而毫無滯礙也。誠以少陽主膜，人身之膜發源於命門，下為包腎絡腸之膜，上為包脾連胃之膜，又上為膈膜及連絡心肺之膜，此為上中下三焦。由膈膜而下連兩脅為護板油之膜，又由膈膜而外出為人身肥肉瘦肉中間之膜，又外為皮內腠理之膜。脅下板膈之膜，為足少陽經，以膽為腑者也（是以膽皮亦膜體）。肥肉瘦肉間之膜與皮內腠理之膜，為手少陽經，以三焦為腑者也。由是知位次介於太陽、陽明之間者，指手少陽而言；傳經在太陽、陽明之後者，指足少陽而言。為其為遊部，故手、足少陽可並為一經，而其部不在一處也。斯議也可徵之《傷寒論》。

其百四十九節云「傷寒五六日，嘔而發熱者，柴胡證，而以他藥下之，柴胡證仍在者，復與小柴胡湯，必蒸蒸而振，卻發熱汗出而解」，夫小柴胡湯之功用，原藉少陽之樞轉，將脅下板油中伏藏之邪，俾其上升透膈發出。故小柴胡湯係和解之劑，原非汗解之劑。而此節經文謂由汗解者，誠以誤下後，脅下所聚外感之

邪兼散漫於三焦，因三焦為手少陽之府，此時仍投以小柴胡湯以和之，則邪之散漫於三焦者，遂可由手少陽外達於經絡以及皮膚作汗而解，而其留於脅下者，亦與之同氣相求，借徑於手少陽而汗解，故於汗出上特加一卻字，言非發其汗而卻由汗解也。其汗時必發熱蒸蒸而振者，有戰而後汗之意。蓋足少陽之病由汗解原非正路，乃至服小柴胡湯後，其脅下之邪欲上升透膈，因下後氣虛，不能助之透過，而其邪之散漫於手少陽者，且又以同類相招，遂於蓄極之時而開旁通之路，此際幾有正氣不能勝邪氣之勢，故有蒸熱振動之景象。此小柴胡湯中必有藉於人參之補益正氣，以助其戰勝之力。細審此節文義，手、足少陽原當並為一經，以遂其遊部之作用無疑也。

又可徵之瘧疾。夫瘧疾雖不在一經，而究以足少陽為瘧疾伏藏之處，故久病瘧者，其脅下恒結為瘧母（西人謂係脾臟脹硬，然實有若肝積肥氣之類，不必皆為脾之脹硬也），其證發動之時，外與太陽並則惡寒，此太陽當指太陽之經言（為其周身寒戰，其背之惡寒尤甚，顯係太陽經病也）。內與陽明並則發熱，此陽明當指陽明之府言（為其表裡壯熱，渴嗜涼水，顯係陽明府病也）。夫與陽明胃腑相近處者，原為足少陽經之板油，為其相近，是以相並。至與太陽經相近能相並者，惟手少陽腠理之膜。是知瘧邪之發動，必自足少陽經達於手少陽經，而後能與太陽之經相並。其繼也，又必自手少陽經返於足少陽經，而後能與陽明之府相並。瘧邪寒熱之往來，原貫串有手、足少陽二經，無所界限，則手足少陽二經，



誠可統同論之，而無事過為區別也。且其所以為遊部者，不但因二經相貫通也，人身之臟腑凡有不相貫通之處，此二經皆聯絡之而使之貫通，少陽為遊部之功用何其弘哉！

左傳育之上膏之下解及病在膏育之治法

《素問》〈刺禁篇〉曰「膈育之上中有父母（父母指胸中大氣言）」，是育即膈也。又《靈樞》〈九針十二原論〉曰「膏之原出於鳩尾」，夫鳩尾之內即育膜，乃三焦之上焦，為手少陽之府，與手厥陰心包臟腑相連，互為配偶。心包者即心肺相連之係，上有脂膜下垂，脂即膏也。為此係連於膈，自下而上，故曰「膏之原出於鳩尾」，言鳩尾而不言膈者，因鳩尾在外易見也。傳既云居育之上，膏之下，是其病定在胸中無疑，特是胸中之地，大氣之所貯藏也，雖不禁針，然止可針二三分，不敢作透針，以瀉大氣，故曰攻之不可。其外又皆硬骨衛護，不能用砭，故曰達之不及，又其處為空曠之府，上不通咽喉，下有膈膜承之，與膈下臟腑亦不相通，故曰藥不至，所以不可為也，不知胸中之疾，當以調補胸中大氣為主。後數百年張仲景出，其治胸痹也，有「大氣一轉，其氣乃散」之語，其識見誠出秦緩之上。蓋人之胸中無論何病，能調補其胸中大氣，使之充暢無病，諸病自化。秦緩當日不知出此，竟諉為不治。迨其後，晉景公因胸中之病傷其大氣，至覺腹脹則大氣陷至腹矣。因腹脹而入廁，大氣陷至魄門矣，此所以人廁不返也。欲明此段理解，參看《衷中參西錄》第四卷（處方編中）升陷湯後詮解及附載諸案自明。

答人問膜原

人腹內之膜，以三焦為最大。其膜根於命門，在下焦為包腎絡腸之膜，在中焦為包脾連胃之膜，在上焦為膈膜及連絡心肺之膜，此腹中之膜也。至身上之膜，肥肉瘦肉間之膜，為半表半裡之膜；與皮膚相連之膜，為在表腠理之膜，此二處之膜皆以三焦為府，即以三焦之膜為原，古原字即源字也。由是論之，三焦之膜統可名之為膜原。而《內經》之所謂膜原，實指上焦膈膜而言。何以知之？凡外感之來，大抵先侵上焦，故《內經》謂其「橫連膜原」，中、下兩焦之膜，其紋理大致皆縱，惟膈膜則旁連四圍，故其紋理獨橫，而外感之伏於其處者，亦遂與之橫連也。

答人問泌尿道路

人之飲入於胃，上下四旁敷布以灌溉濡潤諸臟腑，而其灌溉濡潤之餘，除化氣、化汗之外，皆下歸於膀胱而為小便，是以胃者小便之源，膀胱者小便之委，猶黃河之播為九河，其下又同為逆河也。今特即管見所及，縷析條分，以列於下。

《內經》謂「飲入於胃，遊溢精氣，上輸於脾，脾氣散精，上歸於肺，通調水道，下輸膀胱」，蓋胃中之食，必得水氣濡潤始能釀為精液。經不曰精液而曰精氣者，言精液之中含有氣化也。此精液既成之後，可於脾胃相連之處（《內經》謂脾胃相連以膜），輸入脾中，藉脾氣之散，以上達於肺，復由肺下降，以灌溉諸臟腑，而當其下降之時，即分泌水飲之含有廢質者，循三焦之脂膜以下歸膀胱。

又《內經》謂「食氣入胃，散精於肝，淫氣於筋」，所謂精者，亦水飲與食氣醞釀而成。蓋胃有肝膈大筋與之相連，而飲食所化之精液，遂得緣筋上之脂膜，以輸於肝，分潤諸筋（肝主筋，故能自肝分潤之），而其含廢質之水飲，遂循肝係下注，緣下焦脂膜歸於膀胱。二節經文雖有飲入於胃，食入於胃之不同，究之皆飲與食化合之精液，由肝脾以散佈於周身也。

又《內經》謂「食氣入胃，濁氣歸心，淫精於脈」，蓋濁氣者，即水氣含有食物之精液者也。所謂淫精於脈者，以心主脈也。此即西人所謂微絲血管能吸胃中水飲之理，蓋水飲被微絲血管吸去，隨血脈之迴圈以注於心，助心釀成血中明

水，以養赤白血輪而所餘之水亦多含有廢質，由回血管下行至腎，由腎漉過，歸於膀胱。

又《內經》謂「胃之大絡，名虛里，貫鬲絡肺」，按虛裡之絡為胃腑通於胸肺之道路。其貫鬲也，胃中穀氣可緣之上升，以養胸中大氣。其絡肺也，胃中水氣可緣之上升，以潤肺化氣。此由中焦如漚，以成上焦如霧也。迨至霧氣潤澤，復化為水而下注，循三焦以歸於膀胱，則又下焦如瀆矣。此與脾氣散精，所謂通調水道下歸膀胱者，其分泌之道路同也。

又飲食入胃以後，經胃中酸汁（似稀鹽酸）醞釀，化為稀糜，輸於小腸，其中原多含水氣，迨至此水助小腸釀成乳糜汁後，已歸無用，即從乳糜管中透出，循下焦脂膜以歸於膀胱。上共六則，泌尿之道路大約不外此矣。

或問「王勳臣言胃腑幽門之左寸許，有一門名津門，津門上有一管名津管，其處胃體甚厚，四圍靠擠縮小，所以水能出而食不能出。觀子所著《衷中參西錄》中，亦間取王氏之說，今論泌尿道路而獨未言及津門，豈王氏之說難確信歟？」答曰「津門之說，《內經》未言，西人剖解家亦未嘗言。愚曾用豬胃紮其下口，滿注以酒，復紮其上口，煮爛熟作藥用，未見其酒外出，其無顯然出水之門可知。夫物之胃無顯然出水門戶，自能消水，而人之胃必顯然有出水門戶，始能消水，是人胃體質之粗疏，轉不若物胃之精妙矣。又西人剖解之初，偶見胃有穿孔者，當時以為致死之由，後乃知為胃中酸汁所化。因酸汁之性能化死肉，不能化活肉，

故人生前之胃不畏酸汁，而死後之胃畏酸汁也。由是而論，王氏所言之津門，焉知非為酸汁所化之孔乎。

或問「西人合信氏謂『飲人於胃，被胃中微絲血管吸去，引人回血管，過肝人心，以布於周身，自肺達出為汽，自膚滲出為汗，餘入膀胱為溺』。今子則謂水飲過肝後無事人心，而即可由肝下達膀胱，果何所據而云然乎？」答曰「《內經》謂『肝熱病者，小便先黃』。又謂『肝壅，兩肱（脇也）滿，臥則驚悸，不得小便』。且芍藥為理肝之主藥，而最善利小便，又肝木氣躁，小便之氣亦躁，是皆其明徵也。況肝脈原下絡陰器，連於下焦。由是觀之，是水飲由胃入肝，原可直達於膀胱也。且西人謂回血管之尾與腎中溺管相接，回血管之水即用此透過腎臟，達於膀胱。夫回血管中水飲，若過肝之後皆上行人心，而實無自心復下行之回血管（凡回血管皆自他經收回心部），水飲又何能由之以達於腎乎？是知水飲由回血管入腎者，必其過肝之後，未盡隨上行之回血管歸心，而即隨自肝下行之回血管歸腎也。蓋西人此段議論原屬約略未詳之詞，愚特於其未詳者代為闡發耳。

答方寄齋問黃庭經後有幽闕前有命門

《內經》、《靈樞》兩言命門，一在《根結篇》，一在《衛氣篇》，皆明言命門者目也。至下焦之命門，《內經》實未言及。惟《素問》《刺禁篇》有七節之旁中有「小心」之語，似實指命門之處。其中有少火為心火之相（故曰相火），代心行化，以散佈於周身，是以謂之「小心」，其所生之火，居兩腎之間，有一陽陷於二陰之象，結為坎卦，以總司下焦水火之氣。是命門者，誠如君之所言，兩腎中間一竅，其中有動氣者是也。《難經》謂右腎為命門者非是。至黃庭經所謂後有幽闕者，實亦指貼脊之動氣處而言，所謂前有命門者指臍下氣海而言。其中藏有元氣，為人生命之本源，故丹家重之曰命門，尊元氣為祖氣，藉之以修內丹。其處原與貼脊動氣處前後相映，復一脈貫通，故黃庭經對待言之。嘗考針灸圖，任脈有氣海、石門兩穴，皆內當氣海之處，而石門又名命門，是命門即氣海之明徵也。

答劉希文問外腎與辜丸與何髒有密切之關係

人體之實驗，西人最精。然西人謂內腎但能漉水，不能化精，與外腎之作強毫無關涉，此囁語也。蓋西人但知重實驗，而不知重理想，但知考形跡，而不知究氣化，故西人論內腎、外腎及辜丸之締造，歷歷如在目前，而所詳者惟血脈管也，回血管也，精管也，溺管也，除諸管之外而別無發明也。彼蓋見外腎精管與內腎絕不相通，故直斷其不相涉也。夫人之胚胎初結，天一生水，腎臟先成，左右兩枚皆屬於水。而包腎之脂膜連於脊骨十四節處（自下數七節處）是為命門，中生相火，位居兩腎之間。兩腎屬陰，通任脈而主水；相火屬陽，通督脈而主火（督脈即從命門入脊），合為坎卦，以總司下焦水火之氣。而下焦之精、血、溺諸管，得此水火之氣主宰之，而後能各盡其用，猶如火車一切諸機輪之運轉，皆水火之氣所鼓動也。西人能創造火車，借水火之氣以成其利用，而不知人身之利用亦在水火，因人身水火之氣原非剖驗所能見，而又不能默契精微，參以理想，故但循其跡象而竟謂內腎與外腎不相涉也。且西人謂精係血之所化，然非血自能化精，必藉腎與命門水火之氣以醞釀之也。

按：西人謂精為血之所化，語甚膚淺。夫生精之處在大腸之前，膀胱之後，有脂膜兩片相並，男為精室，女為血室，其脂膜與臍下氣海相連，前任後督相通。任脈輸血藏於其中，以滋潤下焦諸經絡。氣海中所藏之氣，先天之元陽，即先天之君火也，有時其氣發動，命門相火亦隨之而動，則外腎勃興，此時腦中元神自



有知覺，若因此知覺欲念一生，元神即隨督脈下降至精室，與元氣會合而化精，此精室之血所以能化精之實際也。為精為元神元氣之所化合，故在人身最為寶貴。以此生育子女，傳我血脈，即以傳我性靈。試當房事將瀉身時，腦中必有異常之感覺，此上下相關之實驗也。

至舉丸，西人謂係藏精之所。又謂精蟲不運動於舉丸所分泌之精液中，必與其他生殖腺所分泌之精液相混而後運動。由是而論，是舉丸所藏之精液，非即成為媾精之精也。蓋舉丸之脈，前入腹、通於氣海，後人脊、達於腦部（觀《洗冤錄》謂因傷舉丸致命者，其腦頂必紅透血色是其明徵），實腦部與氣海之氣化搏結之處，以助腎臟之作強。其中所藏之液，實為留戀氣化之用（凡真氣所藏之處，必有精液涵濡以留戀之）。是以舉音高，即皋字之變體，訓同膏字，謂其中有膏油也。若所藏者純係媾精之精，則古人不當名為舉丸，宜名為精丸矣。況精室為化精之所，原可直達於外腎，精管何必若是之紆回曲折而取徑於舉丸乎。至唐容川謂係射精之機，亦助腎作強之一端也。

答人問胞室子宮氣海兒枕

胞室即子宮也。在膀胱之後，大腸之前，有脂膜兩片相合，其中即為胞室，其係連於命門。命門者在脊椎自下數第七節（在各節之旁左右各有一孔），胞係連於其處，即由命門上通於督脈，督脈者即脊髓袋也（凡物有脊樑者皆有此袋）。此胞室之脂膜在腹中又上連任脈，任脈者何？即心、肺、肝相連之總係也。此胞室男女皆有，男子督脈之髓注於此而化精，女子任脈之血注於此而化月信。究之男女生育之真種子，皆賴督、任之氣化同到胞中，惟男以督為主，女以任為主耳。特是命門處之脂膜，不但與胞室相連也，包腎之脂膜亦與之相連，臍下氣海之脂膜亦與之相連。氣海之形狀，如倒提雞冠花，故俗名之為雞冠油。此乃人生起點之處，當男女媾精之始，在女子胞中先結成一點水珠，此珠久久漸有動氣，即氣海也。由氣海而生督、任二脈，一行於前，一行於後，以生全身。至胞室之脂膜，原督、任二脈相合而成，故與督、任及氣海皆相貫通，遂為男以化精，女以係胞之要麟矣（《金匱》所言臟燥之臟即指此）。或有疑《內經》之所謂氣海者在膻中，膻中者，膈上也，何以氣海又在臍下？不知氣海有先天、後天之分，膈上之氣海，後天之氣海也，中所藏者大氣，《內經》又名之曰宗氣；臍下之氣海，先天之氣海也，中所藏者之氣，《丹經》又名之曰祖氣。為由先天而生後天，所以一為祖，一為宗也。且先天之呼吸在臍，是以氣海居下；後天之呼吸在肺，是以氣海居上也。至兒枕作疼之說，原屬荒謬之談，不過產後瘀血作疼，是以後世本

草謂山楂善治兒枕作疼，以其善化瘀血也。若果有兒枕，何以兒枕時不疼，而不枕時轉疼乎？明乎此理，則其說不攻自破矣。

答陳董塵疑《內經》十二經有名無質

天下之妙理寓於跡象之中，實超於跡象之外，彼拘於跡象以索解者，縱於理能窺其妙，實未能窮其極妙也。如九十六號（紹興星期報）陳董塵君，因研究剖解之學者於十二經之起止莫能尋其跡象，遂言《內經》所言十二經無可考據。非無據也，因其理甚玄妙，超於跡象之外，非常識所能索解也。夫《內經》之《靈樞》原名針經，故欲究十二經之奧妙，非精針灸者不能得其實際。愚於針灸非敢言精，而嘗與友人盧顯章（遼陽人，最精針灸、得之祖傳）談及此事，顯章謂斯可即余針愈疔毒之案以徵明之。庚申八月間，族妹左手少陽經關衝穴生疔，至二日疼甚，為刺耳門二穴立愈。關衝為手少陽經之所起，耳門為手少陽經之所止也。又辛酉七月中，族中男孫七歲，在右足太陰經隱白穴生疔，三日腫至膝下，疼甚劇，取右三陰交及公孫二穴刺之，立愈。隱白穴為足太陰經之所起，公孫、三陰交為足太陰經之所歷也。設若刺其處仍不愈者，刺太陰經止處之大包穴，亦無不愈矣。又於辛酉八月間，本村田姓婦，在手陽明二間穴生疔，腫過手腕，為刺曲池、迎香二穴，當時疼立止，不日即消。二間雖非陽明經起之處，距經起處之商陽穴不過二寸，曲池則經歷之處，迎香則經止之處也。又於九月中，第四中學學生吳貴春，在手太陰經太淵穴生疔，紅腫之線已至俠氣戶，木不知疼，噁心嘔吐，診其脈象洪緊，右寸尤甚，知係太陰之毒火所發，為刺本經尺澤、中府及肺俞，患處覺疼，噁心嘔吐立止，紅線亦立回，半日痊愈。太淵距本經起處之少商穴不

過三寸強，中府則本經之所起也，尺澤則本經之所歷也，肺俞則本經之所注也。由是觀之，疔生於經之起處，刺經之止處；生於經之止處，刺經之起處，皆可隨手奏效，則經之起處與止處非有一氣貫通之妙，何以神效如是。夫電線傳電西人所創造也，其法可為妙矣，然猶有跡象可尋，猶不若無線電之妙之尤妙。十二經之起止貫通，其猶無線電乎。夫西人能窮究天地之氣化而為無線電，而不能窮究人身之氣化而作針灸，誠以天地之氣化明而顯，人身之氣化隱而微也。由是而論，吾中華醫學貽自開天闢地之聖神，其精到之處，原迥出西人之上，而欲以西人形跡之學，以求吾中醫至奧之理，庸可得乎。世之輕棄國粹而篤信西法者，尚其深思愚言哉。

報駁左肝右脾解者書

閱庚申冬《紹興醫藥學報》，有褚君淵明駁拙擬左肝右脾之解，謂引證之四條皆不足憑。第一條駁日繞地而行之說，謂非日繞地乃地繞日也，是篤信西人之說也。若以西人之說為真可信，鄙人將有所疑問。若能切實明晰答此疑問，以後三條鄙人必詳細答復。若不能答此疑問，是鄙人之引證皆對，所駁者為妄駁，其餘諸條亦無暇再答覆矣。

西人謂地球運動有二種，一以南北極為軸，一年繞日一周，每晝夜旋轉一次，謂之自轉，一以太陽為中心，而自循軌道進行，謂之公轉。西人又謂日輪之大，其直徑八十方萬英里（一英里約為華里之三倍），大於地球一百三十五萬五千倍有奇，距地約九千二百八十九萬七千英里。夫北極為不動之恒星，中西所共認也。南行二百里測北極即低一度，北行二百里測北極即高一度，人之所共知也。乃西人又謂日亦恒星不動，地繞之而行。將平繞之乎？則或在日南或在日北，其南北相距之點當為一萬八千六百六十五萬四千英里（數為日距地之二倍加日徑）。將斜繞之乎？則或斜而上或斜而下，其上下斜繞之點亦應如前數。天地面相距二百里視北極即差一度，而地球自行一萬八千六百六十五萬四千英里，人在地之一處望北極者，其終歲高低之度竟無少差，此何故也？

人之視物遠則小，近則大，即仰觀星宿亦然，人之所共知也。地若果繞日而行，將繞至日南，與北極之距離即遠一萬八千六百六十五萬四千英里（數為日距

地之二倍加日徑），繞至日北，與北極之距離即近一萬八千六百六十五萬四千英里（或平繞或斜繞約皆相仿），地與北極距離之差其或遠或近若斯之多，何以人立地之一處，終歲視北極，其懸象之大小無少改易乎？

再者，地果繞日而行，則當其繞日而南之時，人在地上望北極，必為日輪所隔，即斜繞之，或偏上偏下，北極不至正為日輪所隔，而北極之光亦必為日光所奪，何以人居赤道北者（赤道南有不見北極之處），終歲之夜無不見北極乎？鄙人之友蘇明陽君，《天地新學社》主人也。曾於民國五年在北京開研究天地新學說之會，外國天文家到者甚多。蘇君歷舉西人天文家之種種謬說，還以質問西人，西人無一能答者。後又將其質問諸條以分寄各國天文家，亦未有能答者。由此知西國天文家亦明知從前之談天文者多悖謬，特不肯明揭其前人之短耳。而吾中華之篤信西人者，則猶昏昏在夢中也。且拙擬左肝右脾之解，原節錄拙著《衷中參西錄》之文，其前原有為友人劉仲友治癒之醫案在，按左肝右脾之理疏方，即隨手奏效，此皆確有實驗非徒托諸空言也。

深研肝左脾右之理

嘗思人稟天地之氣化以生，人身之氣化，即天地之氣化。若於人身之氣化不明，不妨即天地之氣化徵之，誠以人身之氣化微而隱，天地之氣化大而顯也（不知者轉因此相譏，實不能曲諒矣）。天地之氣化，伏羲曾畫卦以發明之，即先天圖之乾南、坤北、離東、坎西者是也。至文王衍易變為後天，則八卦各易其方矣。而後世惟堪輿家辨兩儀四象分界中諸雜氣，猶用先天卦位，其餘則一。且占卜術數之學，皆用後天卦位。因伏羲所定之卦位為體，文王所定之卦位為用，用體則無效，用用則有效。用也者，是氣化發露貫注之處也。天地之氣化有然，人身之氣化亦何莫不然。即如肝右脾左之說，《淮南子》早言之，扁鵲《難經》亦謂肝在右（《難經》云肝之為臟，其治在左，其藏在右脅右腎之前，並胃著脊之第九椎。《金鑿》〈刺灸篇〉曾引此數語，今本《難經》不知何人刪去），肝在右則脾在左矣。而後之醫家仍從《內經》肝左脾右之說者，亦體與用之區別也。肝之體居於右，而其氣化之用實先行於左，故肝脈見於左關。脾之體居於左，而其氣化之用，實先行於右，故脾脈見於右關。從其體，臨證疏方則無效，從其用，臨證疏方則有效，是以從用不從體也。藉曰不然，愚又有確實徵驗，如肝開竅於目，人左目之明勝右目（《內經》謂人之右耳目不如左明。實驗之，目之明誠如《內經》所云。至耳乃連帶之詞，如三過其門不入，實禹之事，孟子則並言禹稷者是也。且木工視線必用左目是其明徵），此肝之氣化先行於左之明徵也。脾主四肢，



人右手足之力勝於左手足，此脾之氣化先行於右之明徵也。試再以臨證驗之，鄰村友人王桐軒之女郎，因怒氣傷肝經，醫者多用理肝之品，致肝經虛弱，坐時左半身常覺下墜，臥時不能左側，診其脈，左關微弱異常，遂重生生箭耆八錢以升補肝氣，又佐以當歸、莢肉各數錢，一劑知，數劑痊愈。又鄰村友人毛仙閣之子，素患肝臟虛弱，恒服補肝之品，一日左脅下疼痛異常，左關弦硬，因其肝臟素弱不敢投以破氣疏肝之品，遂單用柏子仁一兩煎湯飲之，立愈。蓋柏之樹杪皆向西北，其實又冬日採取，飲經霜露，得金水之氣最多，肝木之橫恣用金以鎮之，水以滋之，其脈之弦硬悉化，所以其疼立止也。又奉天東關學校翟校長之叔父，右手足皆不利，似麻似疼，飯時不能持箸，行時需杖，飲食減少，脈象右關濡弱，知其脾胃虛弱，不能健運肢體也，投以四君子湯加生黃耆、當歸、乳香、沒藥，連服數劑痊愈。即此數案觀之，而肝主左，脾主右，不尤顯然可見乎。夫天下事理之蹟，非一一親身經過，且時時留心，必不能確切言之。若憑空擬議，動斥他人之非，且以輕薄出之，直譏其大言不慚，無論所譏者之失於妄誕也，即使其入果有其弊，又何不學古人之忠告善道，而必出語自傷其忠厚乎。況裘君費盡心血創此醫報，原為醫界同人研究醫學之資藉，而竟雜以灌夫罵座之語，閱報者亦將訝其不倫矣。再者醫學以活人為主，所著之書果能活人，即為最善之本。愚著《衷中參西錄》五十餘萬言，自擬一百六十餘方，醫界同人見此書者，有用一方而治癒疫病千人者（故城縣尹袁霖普），有用一方而治癒霍亂數百人者（撫順煤礦總

理尚習珍），至登各處醫學志報，用書中之方治癒各種驗證以相告者，尤不勝紀。近閱三三醫書時行伏陰芻言，亦用書中之方救愈多人。至山西平陸縣尹彭子益君推為醫書中第一可法之書，高麗慶南統營郡安鳳軒推為漢醫學中第一可靠之書，各醫學志報所載者彰彰可考，此豈醫界同人之阿好乎，抑實為此心此理之同耶？若謂變本加厲，益致醫學沉晦，可為獨拂公論，而為此毫無忌憚之談也。愚又思之，人果有志振興醫學，欲於狂瀾難挽之時，獨作中流砥柱，當自著書，發前人所未發，言今人所不能言，其書一出，俾醫界人人信仰，視為標準，原不必排擠他人以自鳴其識見之高也。是以愚生平著作論說不下百萬言，不敢是己之是，亦不敢非人之非，惟偶有會心，即筆之於書。其言之皆是也，人自信之；其言之皆非也，人自不信之。不然，則我方雄辯高談，以指人之疵謬，乃我之辯論未傳，而所指為疵謬者，轉能廣行於世，人人信用，返躬自思能無汗顏乎。

續申左肝右脾之研究

拙著《衷中參西錄》載有安東劉仲友臂熱一案，因其左臂熱而酸軟，重用補肝之藥治癒。恐人疑與西人左脾右肝之說不能溝通，遂解以「肝雖居右，其氣化實先行於左，脾雖居左，其氣化實先行於右」四語，此乃臨證得諸實驗，且欲溝通中西，非為古籍護短也。而篤信西醫之劉君，竟屢次駁辯，謂肝脾中原無空氣，而何以有氣化之行。不知氣化二字，為中文常用之名詞，其在天地為陰陽化合之所生，其在人身為氣血化合之所生，至為精微，有如帝載之無聲無臭。劉君竟以空氣當之，是劉君並不懂中文也。至謂肝之氣化不能透隔以達於左，脾之氣化不能透隔以達於右，尤為立言欠解。夫隔者所以別上下，非以分左右也，如劉君所謂，豈隔下無左右，必隔上乃有左右乎？況隔膜之上，原有微絲血管與全體之血管相通，隔下氣化原可由微絲血管達於隔上也。再者，氣化之透達，又不必顯然有隧道也。試以物理明之，如浮針於缸中，隔缸用磁石引之，針即隨磁石而動，此無他，磁石之氣化隔缸可透達也。又如屋中有暖氣管，外裹以鐵，其熱力之氣化自能外透，行於滿屋。若如劉君所謂，則屋中有十人，必於暖氣管中分出十個支管，以著於十人之身，而後其熱力之氣化始能遍及十人。劉君之用心不太拙乎？抑明知其非是而欲強詞奪理乎？藉曰不然，試更以針灸明之。夫中法針灸，西人所共認也，而各經諸穴，原無顯然脈絡相通貫。然疔瘡生於經之起處，針經之止處可愈；疔瘡生於經之止處，針經之起處可愈。此無他，有脈絡可循，而氣化能

貫通者，譬之有線電也。無脈絡可循，而氣化亦可貫通者，譬之無線電也。西人能察天地之氣化而為無線電，而不能察人身之氣化而作針灸，誠以天地之氣化顯而明，人身之氣化隱而微也。

且左右互易為用，不獨肝脾為然也。西人所最重者，腦髓神經也，然司身左邊運動之神經在腦之右，司身右邊運動之神經在腦之左。此說原出自西人，劉君自然深信，若為中人之說，劉君當亦嚴加駁議矣。由此推之，中法之治頭疼者，可用生萊菔汁注於鼻孔，然疼在左則注右鼻孔，疼在右則注左鼻孔。治倒睫毛者可用馬錢子末塞其鼻孔，然左睫毛倒則塞右鼻孔，右睫毛倒塞左鼻孔，其理固與腦髓神經之互司左右運動者無異也。由此知氣化之在人身，處處皆有左右互通之道路，此所以融匯全身之氣化，使之易於流通，正所以範圍全身之氣化，使之互相縮結也。此誠造化生成之妙也。夫愚之著書以衷中參西為名，原欲採西人之所長以補吾人之所短，豈復有中西之見橫互胸中？是以於西人之說可採者採之，其說之可溝通者尤喜溝通之，如此以精研醫學，醫學庶有振興之一日。若必如劉君之說，其中西醫學相異之點斷不可以溝通，將肝居右其氣化不能行於左，脾居左其氣化不能行於右，則左關之脈當為脾，右關之脈當為肝，如此診脈斷病，果有效乎？醫界同人果能共認乎？劉君試再思之，勿以愚為好辯也。

又近閱《三三醫報》，見有潮州許小士氏點草考古一則。言潮俗如患眼暴痛生翳星者，即覓採點草之葉，將一葉揉軟，再以銅錢一枚置寸口脈上，後以揉軟

之葉置錢孔中，外以布縛之，約一炷香久，解開視其錢孔處即發現一水泡，目中翳星遂消，屢試屢效。然左眼有病須置右手寸口，右眼有病須置左手寸口，又須即其眼暴痛時，速如此治之，遲則無效。點草之形狀，其葉作掌形，有三深裂，春暮開小黃花，五出，所結之果如欲綻青桑椹，其莖葉概生茸毛（查新植物學謂凡莖葉密生茸毛者有毒），葉味辛辣，多生田澤間，實與《本草綱目》毒草類中毛茛草形狀性味皆相似。然毛茛葉與薑搗塗腹上能除冷氣，揉碎縛臂上，男左女右，勿令近肉，能截瘡，搗敷瘡（勿入瘡），能消癰腫。而實未言其能除目翳。

觀此用點草治目，亦左右互相為用，益知人身之氣化皆左右互相為用也。由斯知肝居右而其氣化先行於左，脾居左其氣化先行於右，此人身氣化自然之理，愚豈無所徵驗而妄談也哉。

論醫士當用靜坐之功以悟哲學

今時學校中學生多有用靜坐之功者，誠以靜坐之功原為哲學之起點，不但可以衛生，實能淪我性靈，益我神智也。醫者生命所托，必其人具有非常聰明，而後能洞人身之精微，察天地之氣化，辯藥物之繁蹟，臨證疏方適合病機，救人生命。若是，則研究醫學者顧可不留心哲學，藉以淪我性靈、益我神智乎哉。愚生平訪道，幸遇良師益友指示法門，而生平得力之處，不敢自秘，特將哲學靜坐之真功夫詳細言之，以公諸醫界同人。

夫靜坐之功，當凝神入氣穴，人之所共知也。然所謂神者，實有元神、識神之別。元神者藏於腦，無思無慮，自然虛靈也。識神者發於心，有思有慮，靈而不虛也。靜坐者，當其凝神入氣穴時，宜用腦中之元神，不宜用心中之識神。蓋用識神則工夫落於後天，不能返虛入渾，實有著跡象之弊。釋家景禪師云「學道之人不識真，只為從前認識神」。又南泉禪師云「心不是佛，智不是道」，此皆言不可用心中識神也。用元神則工夫純屬先天，有光明下濟，無心成化之妙。元神者，腦中無念之正覺也。《陰符經》云「機在目」，蓋目連於腦，目與腦中之正覺融和，即為先天之性光。用此性光下照氣穴，是以先天之元神助先天之元氣，則元氣自能生長。是以佛經有「北斗裡看明星」之語。又《心經》曰「觀自在菩薩」，菩薩二字佛經恒藉以喻氣海元陽之氣，故柳華陽注云「觀乃我正覺中之靈光，菩薩即是慧命如來，大發慈悲，教大眾時時刻刻觀照此菩薩，菩薩得受此靈

光之慧力，久則自然如夢覺，融融然如薰蒸，活活然如盆珠」，觀柳華陽注心經之文，益知靜坐時用元神之妙。迨至靜坐功深，元陽充足，徵兆呈露，氣機外動，此時又宜用採陽生工夫。然陽之生也，多在睡眠之際，偶然知覺，宜急披衣起坐，先急呼氣數口，繼徐呼氣數口，又繼則徐而且長（欲呼氣長必先將氣吸足），細細呼氣數口，且當呼氣外出之時，宜將心中識神注意下降，與腎氣相團結，呼氣外出之時腎氣隨呼氣上升，自與下降之心神相遇，此道家所謂吸升呼降之功，亦即異風倒吹之功（拙著三期第二卷處方編中，敦復湯後論其理甚詳，宜參觀），以收回元陽。蓋靜坐之時，用腦中元神，所謂文火也。採陽生之時，用心中識神，所謂武火也。由斯而論，靜坐之時用文火，當名為凝神照氣穴；至採陽生時用武火，方可謂凝神入氣穴。蓋照惟照之以神光，不著跡象，故為腦中元神，人則意念注於其處，已著跡象，故為心中識神。如此區別言之，將顧名思義，閱者自易領悟也。至於用識神以採陽生而不嫌其暫時著跡象者，誠以內煉之功以先天為主，以後天為輔，識神雖屬後天，實能輔先天元神所不逮，故可用之以收一時之功也（張紫陽悟真篇所謂文武火左右分者，乃雙修者之文武火，用法與此論中所言之文武火迥異）。

從此文火、武火互用不熄，氣海之元陽充實旁溢，督脈必有驟開之一日。此時周身如醉，神情如癡，統體舒暢，愉快莫可言喻，道家所謂藥產者是也。從此工夫純粹，藥產屢見，又可由督脈以通任脈。蓋通督脈可愈身後之病，通任脈可

愈身前之病，督任皆通，元氣流行，法輪常轉，精神健旺，至此可以長生矣。特是督脈之通，火候到時，可純任天機之自然，至由督脈以通任脈，火候到時，又宜稍助以人力。至於火候如何為到，人力如何運用，此中原有師傅口訣，至為鄭重，不可輕泄，而愚幸得真傳，不肯自秘，拙著《衷中參西錄》第八卷之末論治夢遺運氣法，於意通督任法後，更論及實通督任之功，言之甚詳，閱者細觀自能領會，茲不復贅。靜坐工夫至此，骨格變化，聰明頓開，哲學會悟，若或啟誘。如欲藉醫學救世以求功德圓滿，自能妙悟非凡，臨證審機觸處洞然，用藥調方，隨手奏效。既能壽身，又能壽世，凡我醫界同人，何弗於靜坐之功加之意乎。



《內經》與《丹經》皆始於黃帝，然《內經》為世俗共用之書，故其書顯傳於後世。《丹經》為修士獨善之書，故其書秘傳有專家，所謂教外別傳也。其後分門別派，或書籍留貽，或口訣授受，著述雖紛不一致，而當其內視功深之候，約皆能洞見臟腑，朗若掣電，深究性命，妙能悟真，故其論說皆能與《內經》相發明。習醫者不必習其功，而實宜參觀其書也。愚今者特將《丹經》所言之理能與醫學相發明者，顛列數條於下，以徵實之。

中醫謂人之神明在心，故凡神明受病，皆注重治心。西人謂人之神明在腦，故凡神明受病，皆注重治腦，及觀《丹經》，則以腦中所藏者為元神，心中所發者為識神，此其義實可溝通中西，而與《內經》《脈要精微論》謂「頭者精明之府」及《靈蘭秘典》謂「心者君主之官，神明出焉」之文相符合也。蓋人之神明有體用，神明之體藏於腦，神明之用出於心也。

又中說溺道隔膀胱滲入，西說謂膀胱原有入水之口，在出水之口下，因有脂膜繞護故不易見。而丹家口授，則謂人之元氣藏於丹田，外有腓子包裹，即氣海也。氣海之狀，下有三足，居膀胱之上，三足之中間有紅點大如黃豆。而膀胱之上亦有此點，二點相對，溺道必然通利，若有參差，小便即不利。曾即物類驗之，初剖解之時，此點猶仿佛可見，作淡紅色，移時即不見矣。蓋元氣之功用，由上點透發以運行下焦之水飲，即由下焦滲入膀胱，雖膀胱之全體皆可滲入，而此點

又為滲人之正路也。至西人所謂入水之口者，原在若有若無之間，不過為滲入之別派，嘗見推拿家治小便不利，謂係膀胱稍偏（當即《金匱》所謂胞係了戾），用手法推而正之，小便即利，實暗合丹家所論之理也。若篤信西說，不信水飲滲人之理，可以實驗徵之。試取鮮豬脬滿貯以半溫之水，繩紮其口，置新剖解之豬肉上，其水仍可徐徐滲出，能滲出即可徵其能滲人也。

又西人謂人尿中多含碳氣，不可作藥用，而中法則謂之還原湯，男用女者，女用男者，獲益良多，且《傷寒論》方中亦用之。其故何也？及詳考丹家之說，知男子尿中含有硝質，女子尿中含有硫質，皆可設法取出。硝者，至陰之精所化，而出於男子尿中，是陽中有陰也。硫者，至陽之精所化，而出於女子尿中，是陰中有陽也。抱朴子謂男女之相成，猶天地之相生，即《易》所謂一陰一陽互為之根也。人果洞明其理而善修其道，則男女尿中硝質硫質皆無，蓋因其互相攝取，即能互相補益，雖高年夫婦行之，亦可同登仙錄（此段莫誤認為房術採補），由斯觀之，小便可作藥用，其理固昭然也。

又中法於腎臟重之曰先天，其說亦實本於《丹經》。丹家謂腎有兩枚，皆屬於水，而腎係連於脊椎自下數七節之上，名命門穴，是生相火，一火介於二水之間，一陽陷於二陰之間，即象應坎卦，與心臟之體為離卦者互相感應。丹家即取此坎離之精，以煉成還丹。為腎中具有水火之氣，實為先天之真陰真陽，而下焦之化精化氣，以及外腎之作強，二便之排泄，莫不賴此水火之氣以醞釀之鼓舞之，

猶如火車之諸機輪，其原動力皆在於水火也。而西人但以跡象求之，謂內腎惟司漉水，與外腎毫無關係，使明丹經之理，必不但執形跡，與中法駁辯也。

又醫家最重督任二脈，然督任二脈，針灸書但載其可針之經絡，至其在人身果係何物，方書固未嘗言及。及觀《丹經》，乃知督脈貼於脊樑，下連臍下氣海，上至腦際，俗名為脊髓袋者是也。任脈即喉管分支，下為心係，又下而透膈為肝係，又下而連衝及臍下氣海，即肺、心、肝一係相連之總提出。知此二脈，乃知衄血之證，血循督脈上行，透腦而下出於鼻；咳血之證亦不但出於肺，凡心、肝、衝之血皆可循任脈上行也。凡心、肝、衝之血皆可循任脈上行，是治吐血者當兼顧其心肝衝也。

論哲學與醫學之關係

近閱醫學志報，多有謂哲學可累醫學之進步者，其人蓋不知哲學作何用，並不知醫學所由昉也。詩云「既明且哲，以保其身」，此身不陷於罪戾為保身，此身不困於疾病亦為保身。觀詩之所云云，是其人必先有明哲之天資，及明哲之學問，而後能保其身也。而此明哲保身之天資學問，在修士原為養生之道，此修士之養生所以名為哲學也。特是仁人君子之存心，能養其生，又欲人人皆能自養其生。然人不皆明哲保身，其養生之道有虧，自不能不生疾病。於斯推廣哲學之理，以創立醫藥，為不能自養其生者之贊助，而哲學之包括始能恢弘無外，是以自古醫界著述諸家，若晉之葛稚川、南北朝之陶華陽、唐之孫思邈，諸人所著之書皆可寶貴，實皆為哲學家也。至明之李瀕湖著《本草綱目》，於奇經八脈獨取張紫陽之說，紫陽亦哲學家也。如以上所引徵者仍不足憑，更可進徵諸《內經》。

《內經》為黃帝講明醫學之書，而其首篇《上古天真論》曰「上古有真人者，提挈天地，把握陰陽，呼吸精氣，獨立守神，肌肉若一，故能壽敝天地」，此言真人秉天地之菁英，而能保護不失，有若提挈把握，且能呼吸精氣，以補助之，獨立守神，以凝固之，故能變化氣質，使肌肉若一，壽數無窮。此上古真人，誠為一大哲學家，不啻黃帝自現身說法也。夫《內經》既為黃帝講明醫學之書，而必以哲學開其端者，誠以哲學者保身之學也。人必先能自保其身，而後能代人保其身。保己之身用哲學，所以哲理，即己身之氣化也；保人之身用醫學，亦因先

洞悉己身之氣化，自能代人人變理其身中之氣化也。由斯知哲學實為醫學之本源，醫學即為哲學之究竟，此所以《內經》為講明醫學之書，而開端必先言哲學也。哲學又何至累醫學哉？然此非徒托空言也，更可進而徵諸事實，且可徵諸一己之事實。

愚資稟素強壯，心火頗旺，而相火似有不足。是以飲食不畏寒涼，恒畏坐涼處。年少時不以為意也，迨年過四旬，相火之不足益甚，偶坐涼處即泄瀉。因此，身體漸覺衰弱，然素以振興醫學為心，而著述未就，恐虛度此一生，遂於每飯之前服生硫黃少許以補相火，頗有效驗。然旬餘不服，則畏涼如故。後見道家書，有默運心火下行，可溫補下焦之語，效而行之，氣機初似不順。乃於呼吸之際，精心體驗，知每當呼氣外出之時，則腎必上升，心必下降。於斯隨其下降之機，而稍為注意，俾其心腎互相交感，行之數日，即覺丹田生暖，無庸再服硫黃矣。後讀《內經》《四氣調神篇》，至「使志若伏若匿，若有私意，若己有得」數語，益恍然悟會。乃知所謂「若伏若匿」者，即引心火下行也；所謂「若有私意者」，是既引心火下行，復俾心腎之氣互相交感，而有欣欣之意也。道家會合嬰兒姪女之法，即從此語悟出，所謂若己有得者，丹田真陽積久，元氣壯旺活潑，守臍不去，此實為己之所得，而永久不散失者也。因悟得《內經》此節真旨，遂專心遵行，今年已七十有三矣，膂力精神毫不衰老，即嚴冬之時食涼物、坐涼處，亦毫無顧忌，是哲學誠可濟醫藥之窮也。哲學又何至累醫學哉。

不但此也，醫者誠能深於哲學，其診病之際，直如飲上池之水，能洞鑿病源，毫無差謬，是以拙著《衷中參西錄》中，曾載有詳論靜坐之法（在前），欲醫者由靜坐之功以悟哲學也。若有以愚言為不可確信者，愚更引一事以為比例。

催眠術之術為中西所共認，而浸將加入科學者也。其行術時，必將其人之後天知識閉住，但用其先天之靈明，而後詢之，能知所未知，見所未見。至深於哲學者，後天之思慮淨盡，先天之靈明日開，所以凡事亦皆能未見而知。用他人先天之靈明者謂之術，用一己先天之靈明者謂之道，用道不遠勝於用術乎，善哉。山西中醫改進研究會長閻百川先生之言曰「中醫原出道家，初皆注重於修養。時候既深，能明瞭自身之臟腑，便能得生人氣血循環」，此誠開天闢地之名論也。是以拙著醫書中多論及哲學，非以鳴高也，實欲醫者兼研究哲學，自能於醫學登峰造極也。矧當時西人雖重科學，而其一二明哲之士，亦間悟欲求科學之登峰造極，亦必須輔以哲學，是以先總理有言謂「諸君都知道世界上學問最好是德國，但是德國現在研究學問的人，還要研究中國的哲學，去補救他們科學之偏」，先總理之言如此，豈猶不足憑信乎。由斯觀之，吾中華哲學之文明，數世之後將遍行於群國，則全球受哲學之陶融，世界已登於大同矣。

著醫書者多矣，而可為醫學正宗，試之皆效者，殊少也。吾師生平著作，風行全國，遵用皆效，久為醫界所共知，無事更為表揚也。至養生一道，凡吾師所發明者，亦皆自身體驗而有得也。吾師自弱冠時，本立志舉業，偶於丁酉元旦未

明，夢臥室門額懸「名元關意」四大字，醒後恍悟曰「古謂醫者意也，名元即關乎意，天殆欲吾為醫界領袖，昌明醫學，以救世乎」，從此專心醫學，著作成冊及各省登醫報之文，約近百萬言。今已七旬有三矣，而著作之精神，更與年俱進，分毫無衰老之意，此非養生有得，安能如此乎？受業孫蕊榜謹識

〈 第 二 卷 〉



嘗思用藥如用兵，善用兵者必深知將士之能力，而後可用之以制敵；善用藥者亦必深知藥性之能力，而後能用之以治病。是卷討論藥物，以《本經》為主，佐以實驗，舉凡炮製失宜、名實混淆之處，皆詳辨之。

### 石膏生用直同金丹煨用即同鳩毒說

石膏之原質為硫氧氫鈣化合而成，其性涼而能散，為清陽明胃腑實熱之聖藥，無論內傷外感用之皆效，即他臟腑有實熱者用之亦效。《神農本經》原謂其微寒，其寒涼之力遠遜於黃連、龍膽草、知母、黃柏等藥，而其退熱之功效則遠過於諸藥。蓋諸藥之退熱，以寒勝熱也，而石膏之退熱，逐熱外出也。是以將石膏煎服之後，能使內蘊之熱息息自毛孔透出。且因其含有硫氧氫，原具發表之性，以之煮湯又直如清水，服後其寒涼之力俱隨發表之力外出，而毫無汁漿留中以傷脾胃，是以遇寒溫之大熱，勢若燎原，而放膽投以大劑白虎湯，莫不隨手奏效。其邪實正虛者，投以白虎加人參湯亦能奏效，是以愚目石膏為寒溫實熱證之金丹，原非過也。

且嘗歷觀方書，前哲之用石膏，有一證而用至十四斤者（見《江筆花醫鏡》），有一證而用至數十斤者（見《吳鞠通醫案》），有產後亦重用石膏者（見《徐靈胎醫案》），然須用白虎加人參湯以玄參代知母，生山藥代粳米），然所用者皆生石膏也，即唐宋以前亦未有用煨石膏者。孰意後世本草之論石膏者，竟將《本經》之所謂微寒者改為大寒，且又多載其煨不傷胃。乃自此語一出，直誤盡天下蒼生

矣，蓋石膏之所以善治寒溫者，原恃其原質中之硫氧氫也。若煨之，其硫氧氫皆飛去，所餘之鈣經煨即變為洋灰（洋灰原料石膏居多），以水煮之即凝結如石，其水可代鹵水點豆腐，若誤服之，能將人外感之痰火及周身之血脈皆為凝結錮閉。是以見有服煨石膏數錢脈變結代，浸至言語不遂，肢體痿廢者；有服煨石膏數錢其證變結胸，滿悶異常，永不開通者；服煨石膏數錢其周身肌肉似分界限，且又突起者。蓋自有石膏煨不傷胃之語，醫者輕信其說以誤人性命者，實不勝計矣，目之為鳩毒，此非愚之苛論也。愚混跡醫界者五十年，對於各處醫學志報，莫不竭力提倡重用生石膏，深戒誤用煨石膏。醫界同人有與愚表同志者，不禁馨香祝之也。

至於石膏生用之功效，不但能治病，且善於治瘡，且善於解毒。奉天陸軍營長趙海珊君之封翁，年過六旬，在臍旁生癰，大徑三寸，五六日間煩躁異常，自覺屋隘莫容，其脈左關弦硬，右關洪實，知係伏氣之熱與瘡毒俱發也。問其大便數日未行，投以大劑白虎湯加金銀花、連翹、龍膽草，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，連服三劑，煩躁與瘡皆愈。

又在籍時，本村東鄰張氏女因家庭勃谿，怒吞砒石，未移時，作嘔吐。其兄疑其偷食毒物。詭言無他，惟服皂礬少許耳。其兄聞其言，急來詢解救之方。愚曰皂礬原係硫氧與鐵化合，分毫無毒，嘔吐數次即愈，斷無閃失，但恐未必是皂礬耳。須再切問之。其兄去後，遲約三點鐘復來，言此時腹中絞疼，危急萬分，

始實言所吞者是砒石，非皂礬也。急令買生石膏細末二兩，用涼水送下。乃村中無藥鋪，遂至做豆腐家買得生石膏，軋細末，涼水送下，腹疼頓止。猶覺腹中燒熱，再用生石膏細末半斤，煮湯兩大碗，徐徐飲之，盡劑而愈。後又遇吞洋火中毒者，治以生石膏亦愈，然以其毒緩，但煎湯飲之，無用送服其細末也。

所最可慮者，北方藥房中謬習，凡方中有石膏未開生，亦未開煨，率皆與以煨者，即明明方中開生石膏，亦恒以煨者偽充。因煨者之細末，其所素備，且以為煨之則性近和平，較用生者尤穩妥也。是以醫者欲用生石膏，宜加檢點，或說給病家檢點，親視藥房中將大塊生石膏軋細，然後可用。若軋細時未經監視，至將藥煮出，其石膏之渣凝結於罐底傾之不出者，必係煨石膏，宜急棄其藥湯勿服。慎之，慎之，人命所關非輕也。

石膏治病無分南北論

近閱南方名醫某君新出之著作，謂石膏之性宜於北，而不宜於南。愚閱之有不能已於言者，非好辯也，誠以醫學公開研究，然後能有進步，是以師弟之間亦不妨反復問難，愚與某君既同為醫界中分子，有閱愚此論者，視愚為某君之諍友可也。

嘗考《神農本草經》，謂石膏微寒，主產乳。蓋言其性不甚寒涼，可用於產後也，乃後世注《本經》者，不知產乳之乳字原作生字解，而竟謂石膏能治婦人無乳，支離殊甚。要知產後無外感之熱，石膏原不可用。若確有外感實熱，他涼藥或在所忌，而獨不忌石膏，以石膏之性非大寒，乃微寒也。是以漢季南陽夫子，原為醫中之聖，所著《金匱》中有竹皮大丸，治婦人乳中虛，煩亂嘔逆，中有石膏，夫乳中者，生子之時也，其煩亂嘔逆必有外感之實熱也，此實通《本經》石膏主產乳之義以立方也。愚生平臨證用藥皆竊師南陽夫子，凡遇產後寒溫證，其陽明府熱已實，皆治以白虎加人參湯，更以玄參代知母、生懷山藥代粳米，莫不隨手奏效。蓋凡用白虎湯之時，其邪實正虛者皆宜加人參，而以玄參代知母者，以《本經》原謂其治產乳餘疾也。以生山藥代粳米者，取其濃厚之汁漿既可代粳米和胃，其所含多量之蛋白質，又能補益產後者之腎虛也（拙著《衷中參西錄》附載有醫案若干可參觀），夫產後最忌寒涼，而果有外感實熱，石膏且為必需之藥，豈南方遇有寒溫實熱之證，獨不宜用石膏乎？如謂自古醫學皆起於大江以北，

《本經》論石膏或專為北方人設法，及仲聖之用石膏亦專為北方人立方者，試再與進徵諸南方名醫之用藥。

吳江徐靈胎南方名醫也，其治陸炳若之夫人產後風熱，重用石膏，其治朱炳臣陽痿，亦重用石膏。淮陰吳鞠通亦南方名醫也，其治何姓叟手足拘攣，誤服桂枝、人參熟地加劇，每劑藥中重用石膏八兩，至三月後始收功。又桐城余師愚亦南方名醫也，其所著《疫疹一得》，載有清瘟敗毒散，重用石膏八兩。又吳門江筆花亦南方名醫也，其所著《醫鏡》，載有時疫發斑一案，共用石膏十四斤始治癒。香山劉蔚楚南方當時名醫也，其所著《安齋證治叢錄》，載為其夫人治產後溫病，每劑重用石膏八兩，連服十八劑始愈。若斯者皆明明載於南方名醫著作中，固為醫界所共見也。不但此也，拙著之《衷中參西錄》遍行於南方諸省，南方同志用書中重用石膏之方，治癒寒溫險證致書相告者甚多，今復舉數則於下以徵明之。

湖北潛江紅十字分會張港義務醫院院長崔蘭亭君來函云「丁卯仲夏，國民革命軍第二十軍四師七旅旅長何君身染溫病，軍醫以香薷飲、藿香正氣散治之不效。迎為診視，遵用《衷中參西錄》清解湯（中有生石膏六錢），一劑而愈。時因大軍過境溫病盛行，以書中清解湯、涼解湯、寒解湯、仙露飲、從龍湯、溜水石膏飲，有嘔者兼用代赭石，本此數方變通而用之，救愈官長目兵三千餘人，共用生石膏一千餘斤，並無僨事」。

又江蘇崇明協平鄉保坍工程籌備處，蔡維望君來函云「今季秋敝處張氏女得溫病甚劇，服藥無效，醫言不治，病家以為無望。僕適在家叔經理之同德公司內，與為比鄰。其母乞求強仆往視。見其神昏如睡，高呼不覺，脈甚洪實。用先生所擬之石膏粳米湯，生石膏用三兩，粳米用五錢。見者莫不驚訝誹笑。且有一老醫揚言於人曰『蔡某年僅弱冠，看書不過逾年，竟大膽若此。石膏重用三兩，縱煨用之亦不可，況生者乎，此藥苟下嚥，病人即死矣』，有人聞此言，急來相告。僕曰『此方若用煨石膏，無須三兩，即一兩亦斷送人命而有餘。若用生者，即再多數兩亦無妨，況僅三兩乎』，遂急催病家購藥，自監視煎取清湯一大碗，徐徐溫飲下，病人霍然頓醒。其家人驚喜異常。聞其事者互相傳告，以為異事，又蘇州交通部電話局，張玉階夫人病重，電報連催至蘇診治。既至有醫在座，方開金銀花一兩，山梔八分，黃芩六分等藥十七味，加牛黃丸一粒。該醫請仆診斷，脈洪帶數，神昏煩躁，舌苔微黃，喉紅小疼，斷為春溫重證，已入陽明之府。因思蘇州病家畏石膏如虎，良藥埋沒已久，今次可為石膏昭雪，乃放膽投白虎湯加黨參，以生山藥代粳米，為其喉紅小疼，更以玄參代知母，生石膏用八兩。該醫大為駭異，因將先生所論石膏之理詳為講解，彼終不悟。遂催病家速購藥，石膏要整塊自製為末，以免藥房以煨者誤充，共煎湯一大碗，分數次徐徐溫飲下，至明晨熱退神清。該醫又來探視，則病人正食粥矣。該醫再三注目，一笑而去。揣該醫之意，必以為其愈非真愈也。何至若斯之惑歟？噫！

常德醫藥研究會撰述員張右長君來函云「邇年捧讀大著，手未釋卷，受益於吾師者良多。近治一腫病，其人由慈利來常，意專到廣德西醫院就診。西醫作水腫治之，兩旬無效。繼來生處求診。遵吾師診斷法，見其回血管現紫色，且現有紫色雞爪紋，知係血臟，即用吾師治血臟之法治之，二十五日痊愈。全市愕然，廣德西醫院聞之亦甚訝異。此外如重用山萸肉、生赭石、生石膏、生龍骨、牡蠣、生乳香、沒藥治癒之病，不勝計。而其中又以重用石膏治癒之險證尤夥。有一劑而用至五六兩者，有治癒一病而用至斤餘者。編有《適園醫案偶存》，後當呈師指正」。此三處來函皆來自南方，石膏之性於南之患寒溫者，有何不宜哉！

近又接平潭李健頤君贈所著《鼠疫新篇》一書，方中多用生石膏，有一劑之中用至八兩，有治癒一證共用生石膏二斤強者。其書且廣登於各處醫學志報，某君豈未之見耶。夫平潭為閩屬，為我國極南之地，而尚可用石膏如此者，是知果係當用石膏之證，何地不可放膽用之哉。

按：石膏原係硫氧氫鈣化合成，為其含硫氧氫，是以其性涼而能散（硫氧即硫酸，在西藥中，為清熱之品）。外感有實熱者服之，能使內蘊之熱息息自毛孔透出。凡寒溫陽明府實之證，用之直勝金丹。乃後世本草竟謂石膏煨不傷胃，則石膏經煨，其硫氧氫皆飛去，所餘之鈣經煨即成洋灰，能在水中結合，點豆腐者用之煮湯代鹵水，其不可服明矣。若誤用之，能將人之外感痰火凝結不散，並凝結人之血脈，使不流通。是以石膏煨後用至八錢即能誤人性命。某君之忌用石

膏，殆有鑒於煨石膏之誤人也，豈知若生用之與煨者有天淵之分乎，所最可異者，津沽諸藥房，凡於方中石膏未開明生或煨者，例皆以煨者與之，甚或方中明明開生者，而亦以煨者誤充。以煨者之細末其所素備也，且誤信煨不傷胃之言，以為煨者較生者尤良也愚為此事重要，定一甄別之法，凡將藥煎成，石膏之渣凝結於藥罐之底，而傾之不出者，必係煨石膏，宜速棄其藥勿服。凡方中用生石膏者，宜先將此甄別之法說給病家，亦救人之一道也。



答王隆驥君石膏生用煨用之研究

鄙人浮沉醫界者五十餘年，凡所目睹耳聞者，恒有病非難治，而誤用煨石膏以陷害之者，不知凡幾。又有其病本可治，而不知重用生石膏以挽救之者，又不知凡幾。因此深動悲憫，言難自秘，不覺語長心重，擬成石膏生用直同金丹煨用即同鳩毒篇，曾登於各處醫學志報，其中徵明煨石膏之不可用。因煨石膏所煮之水能代鹵水點豆腐，是其性與鹵水同也。乃於《醫界春秋》六十五期，江西王君謂愚所論不確，生石膏煮水亦可用點豆腐。愚因遍詢敝處作豆腐者，乃知生石膏雖亦可點豆腐，然凝結之力甚微，若煨者用一兩可將豆腐點成者，生者須得四兩，且終不若煨者所點之豆腐塊硬。五邑吃豆腐者，以塊硬如麵筋者為佳，是以敝處作豆腐者皆用煨石膏。一為省費計，一為易售計也。由斯觀之，石膏原為硫氧氫鈣化合，所含之鈣原有黏澀之性，是以多用之亦微有凝結之力，而其含之硫氧氫則大有表散之力，雖鈣之性微黏澀無傷也，若煨之則其硫氧氫皆飛去，所餘之鈣經煨即成洋灰（燒洋灰者必用石膏），若用湯劑煮之，即在罐底凝結為石，是其黏澀之性百倍於生者。又因硫氧氫皆飛去分，毫無宣散之力，則煨石膏之不可輕服彰彰明矣。而愚對於煨石膏之不可用，原有確實徵驗，非敢漫為論斷也。

愚在遼寧立達醫院時，有何裕孫君，為營口何道尹之胞兄。其人學問鴻博，人品端正，恒與愚互相過從，為研究玄學契友。因向充東三省測量局長，曾與吳子玉將軍同事。歲在辛酉，聞吳將軍在北京有事，欲與相商，遂晉京相訪，偶受

感冒發熱，自開解表清裡之方，中有石膏六錢。彼意中是用生石膏，而方中未開生字，北方藥鋪惡習，凡石膏未注明生字者，必與以煨者。及將藥煎服後，陡覺心不舒暢，檢視藥渣，見石膏凝結於罐底甚堅，乃知為煨石膏所誤。自診其脈數動一止，遂急還，求愚為診治無效，又經中西醫多方治療皆無效，浸至肢體不遂，言語蹇澀，竟至不起。

又遼寧張允孚，為黑龍江軍官養成所總辦，有事還家，得溫病求為診治。方中為開生石膏一兩，張君閱方大驚，謂在江省因有病服煨石膏五錢，驟成結胸之病，服藥十餘劑始轉危為安，今方石膏一兩且係生者，實不敢服。愚因為之詳細辯明石膏生熟之異性，彼仍遊移。其介紹人韓玉書，為陸軍次長韓麟春之胞兄，曾與張君同時在東洋留學，亦力勸其速服，謂前月家慈病溫，先生為開生石膏三兩，煎湯三杯，分三次服下，病若失，況此方中止用一兩乎。張君遂放膽服下，病遂愈。後張君頗感激，且深贊愚研究藥性之精確。就此兩案觀之，愚目煨石膏為鳩毒，原非過也。況此外服煨石膏而受害者，又不可勝數乎。

王君又謂生石膏雖可多用，然須有節制，而愚生平喜用生石膏亦非漫無節制也。蓋石膏性原微寒，《本經》明載，是以非多用不能清大熱。至愚重用生石膏之時，必煎湯數鐘，分多次徐徐溫飲下，病癒即停飲，此以小心行其放膽，即古人一煎三服之法，實於無節制之中而善用其節制也。

王君又謂《金匱》竹皮大丸及小青龍加石膏湯，皆所用石膏甚少，且謂竹皮大丸有三分之二石膏，即有七分之甘草，且以棗肉為丸，其意蓋可知矣。而愚對於二方之少用石膏及竹皮大丸之配製，則實別有擬議也。嘗閱行世《金匱》諸本，竹皮大丸石膏載用二分之一之外，又有載用一分者，又有載用一兩者，是知仲景之書不知幾經傳寫或口授，至宋始有印本。其中錯誤原甚多，其藥品之分量原不足憑，其方列於婦人產後門中，故其所主之病，為婦人乳中虛，煩亂嘔逆。此乳字當作生字解，謂婦人當生子之時也，生子之後而煩亂嘔逆，此中必有外感之熱已入陽明之府，是以方中用桂枝以散外感，用石膏以清內熱，用竹皮以止嘔逆。而必作丸劑者，因石膏性涼質重，若並其質服之，不但能清熱且善鎮嘔逆。然又恐其產後腎虛寒涼下侵，故又多用甘草，丸以棗肉，以緩其下行之勢，此仲聖制方之精義也。然須知石膏末服一錢之力，可抵半兩，少用勝於多用也。至於愚治產後外感之熱，終慮竹皮大丸中之石膏重墜下達，而不敢輕用，恒以白虎人參湯代之，且又將方中之知母代以玄參，粳米代以生山藥。蓋白虎湯用法在汗吐下後例加人參，以其虛也。渴者亦加人參，以其津液不上潮也。產後則虛之尤虛，其氣化下陷而不能上潮可知，以玄參代知母者，因《本經》謂玄參治產乳餘疾，而於知母未嘗言也。以生山藥代粳米者，因粳米但能留戀腸胃，俾石膏之寒涼不下趨，而生山藥之汁漿黏潤多含蛋白質，既能和胃，兼能補產後腎虛也。至於表證未罷者，又宜酌加薄荷葉錢餘，或送服西藥阿斯必林二分許，則裡清外解莫不隨手奏效。

拙著《志誠堂醫案》中，載有此證數案，皆煎藥一大劑分多次緩緩溫飲下，雖在產後，寒涼亦不至下侵。迨大熱退至十之七八，又急改用滋陰之品，以清其餘熱，是以百用不至一失也。

或疑後世注疏家之解竹皮大丸者，謂因有子食乳，其乳去過多，致生虛熱，故主以竹皮大丸，非正當產後因有外感之熱用竹皮大丸也，不知注疏家恒疑石膏不可用於產後，故將乳字不作生字講，而作乳汁講。且於《本經》石膏治產乳之句亦作乳汁講，此非以其說解經文，實以經文遷就其說也。藉曰不然，此可於《徐氏洄溪醫案》徵之。徐氏案中載有陸炳若之夫人，產後感風熱瘀血未盡。醫者執產後屬虛寒之說，用乾薑、熟地治之，汗出而身熱如炭，唇燥舌紫，仍用前藥。余斯日偶步田間，近炳若之居，趨迎求診。余曰產後血枯火熾，又加風熱、剛燥滋膩之品，益火塞竅，凶危立見，非石膏則陽明之盛不解，遵仲景法用竹皮、石膏等藥。余歸而他醫至，笑且非之，謂自古無產後用石膏之理，此蓋生平未見仲景方也。其母素信餘，力主服之，一劑而醒。俾用原方再服一劑痊愈。觀徐氏此案所謂遵仲景法，用竹皮、石膏等藥，非即指竹皮大丸而言乎！徐氏為清中葉名醫，其遇產後外感熱證，即仿用竹皮大丸，則經文中所謂乳中者，非即產後二字之代名詞乎！

蓋產後外感實熱之證，病者十人恒九人不起。誠以外感熾盛之熱，傳入陽明，非石膏不解。而世俗執定產後最忌寒涼之說，不惟石膏不敢用，即一切稍能清熱

之藥亦不敢用。夫產後氣血兩虧，為其氣虧，臟腑少抵抗之力，則外邪之入也必深；為其血虧，臟腑多陰虛之熱，則外熱之灼耗益烈。此乃內傷外感相並，為寒溫中至險之證，治法不師仲景其何能濟乎！至於愚治此證，改用白虎加人參湯加減者，此乃對於此證慎之又慎，百用不至一失也。其有信用愚言者，自能為產後患寒溫者廣開生路也。至於王君謂小青龍加石膏湯所加石膏亦甚少者，而愚則另有擬議也。按《金匱》小青龍加石膏湯與越婢加半夏湯並列於肺病門中，越婢加半夏湯所主之病為咳而上氣，此為肺脹，其人喘息如脫狀，脈浮大者，此湯主之。小青龍加石膏湯所主之病為肺脹，咳而上氣，煩而喘，脈浮者，此湯主之。是二方所主之病原相近也。越婢加半夏湯中言脈浮大，其為熱可知，而小青龍加石膏方中，雖但言脈浮未嘗言大，然病兼煩躁，此為太陽煩躁，與少陰煩躁不同，其為熱尤顯然也。由斯而論，是二病之熱亦相近，而越婢加半夏方中有石膏半斤，小青龍加石膏方中僅加石膏一兩，且其所用桂、辛、乾薑諸熱藥，原為越婢加半夏湯中所無，而其分量又皆重於石膏數倍，其為湯劑之熱者可知，以熱治熱其能有效乎？再徵以竹皮大丸中之石膏，各書之分量不同，則此方中所加石膏之分量必有差誤可斷言也，是以愚用此方時，石膏恒為諸熱藥之七八倍，方能隨手奏效。拙著《衷中參西錄》五期中，載有歷序用小青龍湯之經過及通變化裁之法，可參觀也。

王君又謂煨石膏治外感輕病亦能奏效，此說也愚非不知，拙著《衷中參西錄》三期有加味越婢加半夏湯治人素有勞嗽，因外感襲肺而勞嗽益甚，或微兼喘逆痰涎壅滯者。方中石膏三錢原係煨用，服後可將痰涎結成小塊易於吐出，後乃慮此方若誤以治外感稍劇之證，恐藥不能勝病，更將煨石膏加多，必至痰火凝結於胸中，而成結胸之險證，則甚可畏也。是以至再版時，遂改為生石膏四錢，其清上焦之力能使痰涎自化為水，隨小便瀉出，較之緊成小塊吐出者尤穩妥也。蓋愚生平志願，深望醫界同人盡用生石膏，藥房中亦皆不鬻煨石膏，乃為達到目的，復何忍倡用煨石膏以治外感之輕病乎！

論三七有殊異之功能

三七善止血妄行，又善化瘀血而不傷新血，拙著藥物學講義已詳悉言之。乃今於治血證之外，又得其殊異之功能，由自身試驗而知。既知之而不敢自秘，特詳錄其事於下。

乙丑孟夏末旬，愚寢室窗上糊紗一方以透空氣，夜則以窗簾障之。一日寢時甚熱，未下窗簾。愚睡正當窗，醒時覺涼風撲面襲人右腮，因睡時向左側也。至午後右腮腫疼，知因風襲，急服西藥阿斯必林汗之。乃汗出已透，而腫疼依然。遲至翌晨，病又加劇，手按其處，連牙床亦腫甚，且覺心中發熱，於斯連服清火、散風、活血消腫之藥數劑。心中熱退，而腫疼仍不少減，手撫之肌膚甚熱。遂用醋調大黃細末屢敷其上，初似覺輕，遲半日仍無效，轉覺其處畏涼。因以熱水沃巾熨之，又見輕，乃屢熨之，繼又無效。因思未受風之先，頭面原覺發熱，遽為涼風所襲，則涼熱之氣凝結不散。因其中涼熱皆有，所以乍涼之與熱相宜則覺輕，乍熱之與涼相宜亦覺輕也。然氣凝則血滯腫疼，久不愈必將化膿。遂用山甲、皂刺、乳香、沒藥、粉草、連翹諸藥迎而治之。服兩劑仍分毫無效。浸至其疼徹骨，夜不能眠。躊躇再四，恍悟三七外敷，善止金瘡作疼，以其善化瘀血也，若內服之，亦當使瘀血之聚者速化而止疼。遂急取三七細末二錢服之，約數分鐘其疼已見輕，逾一旬鐘即疼愈強半矣。當日又服兩次，至翌晨已不覺疼，腫亦見消。繼又服兩日，每日三次，其腫消無芥蒂。

愚於斯深喜病之得愈，且深歎三七之功能幾令人不可思議。內子王氏因語愚曰「余向在日本留學曾傷手出血，敷西藥磺碘（即沃度仿謨）少許，其疼立止，後歷三日始愈。迨來奉又傷手出血，敷三七末少許，移時疼方止，歷一日夜傷處痊愈。由斯觀之，三七治金瘡固勝於磺碘也。又在日本時，嘗見日人恒以物類試藥力，迨至奉僦居，居停杜氏所畜之犬，糞門潰爛流膿血，杜氏婦笑問有法治否？因思此正可為試驗藥力之資藉，遂答曰可治。俾用三七細末錢半，磺碘少許，摻粥中飼之，日兩次，連飼三日，犬竟愈。觀此二藥並用如此效驗，想以治人腸中生癰潰爛亦當有捷效」。愚因曉之曰「磺碘內服（一次之極量為六厘，劇烈之品慎勿多用）其性原善解梅毒。犬因食含有梅毒之人矢，所以腸中生癰，潰及糞門，外流膿血。治以黃碘原甚的，而與三七之化腐生新者並用，所以見效尤捷。此本為治人之良藥，特因一為中藥，一為西藥，故從前未有將此二藥並用者。今既並用之試於犬而有效，用於人亦何患不效乎！既可以治人有梅毒之腸癰有效，其無梅毒之腸癰，治之不更易乎」。而愚又思之，難治者莫如肺癰（肺結核之甚者即肺癰）及赤痢末期，腸中潰爛，所下者腥臭腐敗也。乃由腸癰而推及肺癰，且由腸中生癰潰爛，推及腸中赤痢潰爛，想用此二藥亦皆能奏效（此尚待試驗），為此段商榷實有益於醫學，故並錄之。此論成後，曾以示滄州友人李品三。品三曰「三七誠為良藥，余曾治一孔姓壯年心下疼痛，經他醫屢治不愈。俾用丹參、桃仁各三錢煎湯，送服三七細末二錢，一劑而愈。蓋因其心下血管為血所瘀，是以



作疼。三七長於化瘀血，故奏效甚捷也」。愚聞之喜曰「三七之功能，愚以為發揮無遺矣。今聞兄言，知三七又多一主治也」。

繼又實驗三七之功能，直如神龍變化，莫可端倪。丙寅季春，愚自滄州移居天津。有表侄劉驥如在津為德發米莊經理，其右腿環跳穴處腫起一塊，大如掌，按之微硬，皮色不變，繼則漸覺腫處骨疼，日益加重。及愚診視時，已三閱月矣。愚因思其處正當骨縫，其覺骨中作疼者，必其骨縫中有瘀血也。俾日用三七細末三錢，分作兩次服下。至三日，骨已不疼。又服數日，其外皮色漸紅而欲腐。又數日，瘡頂自潰，流出膿水若干，遂改用生黃耆、天花粉各六錢，當歸、甘草各三錢，乳香、沒藥各一錢。連服十餘劑，其瘡自內生肌排膿外出，結痂而愈。按：此瘡若不用三七托骨中之毒外出，其骨疼不已，瘡毒內陷，或成附骨疽為不治之證。今因用三七，不但能托骨中之毒外出，並能化瘡中之毒使速潰膿（若早服三七並可不潰膿而自消），三七之治瘡，何若斯之神效哉。因恍悟愚之右腮腫疼時，其腫疼原連於骨，若不服三七將毒托出，必成骨槽風證無疑也。由此知凡瘡證之毒在於骨者，皆可用三七托之外出也。

又天津英租界胡氏婦，信水六月未通，心中發熱脹悶。治以通經之藥，數劑通下少許。自言少腹仍有發硬一塊未消。其家適有三七若干，俾為末，日服四五錢許，分數次服下。約服盡三兩，經水大下，其發硬之塊亦消矣。審斯則凡人腹中有堅硬之血積，或婦人產後惡露未盡結為癥瘕者，皆可用三七徐消之也。

又天津日租界劉問籌，偶患大便下血甚劇。西醫注射以止血藥針，其血立止，而血止之後，月餘不能起床，身體酸軟，飲食減少。其脈芤而無力，重按甚澀。因謂病家曰，“西人所注射者，流動麥角膏也。其收縮血管之力甚大，故注射之後，其血頓止。然止後宜急服化瘀血之藥，則不歸經之血，始不至凝結於經絡之間為恙，今但知止血，而不知化血，積之日久必成勞瘵，不僅酸軟減食已也。然此時尚不難治，下其瘀血即愈矣。”俾日用三七細末三錢，空心時分兩次服下。服至三次後，自大便下瘀血若干，色紫黑。從此每大便時，必有瘀血隨下。至第五日，所下漸少。至第七日，即不見瘀血矣。於斯停藥不服。旬日之間，身體復初。由斯觀之，是三七一味即可代《金匱》之下瘀血湯，且較下瘀血湯更穩妥也。

羚羊角辨

以熱治涼，以涼治熱，藥性之正用也。至羚羊角性近於平不過微涼，而最能清大熱，兼能解熱中之大毒，且既善清裡，又善透表，能引臟腑間之熱毒達於肌膚而外出，此乃具有特殊之良能，非可以尋常藥餌之涼熱相權衡也。而世之醫者閱歷未久，從未單用羚羊角施之病證，偶用數分雜於他藥之中則其效不顯，即或單用之，而不能與所治之證吻合，則其效亦不顯，既與所治之證吻合矣，而所用者或為偽品，或成色有差，則其效仍不顯，為用羚羊角未嘗見其顯著之功效，遂至輕議羚羊角為無用，登諸醫學志報。愚非好辯，然既同為醫界中人，原有互相研究之責任，今特將從前所用羚羊角治癒之病十餘則，詳錄於下以徵明之。

壬寅之歲，曾訓蒙於邑之北境劉仁村，愚之外祖家也。季春夜半，表弟劉銘軒扣門求方，言其子（年六歲）於數日間出疹，因其苦於服藥，強與之即作嘔吐，所以未求診視，今夜忽大喘不止，有危在頃刻之勢，不知還可救否。遂與同往視之，見其不但喘息迫促，且精神恍惚，肢體騷擾不安，脈象搖搖而動，按之無根，其疹出第三日即靨，微有紫痕，知其毒火內攻，肝風已動也。因思熄風、清火、且托毒外出，惟羚羊角一味能兼擅其長，且色味俱無，煎湯直如清水，孺子亦不苦服。幸藥房即在本村，遂急取羚羊角三錢煎湯，視其服下，過十餘分鐘即安然，其舅孫寶軒滄州名醫也，翌日適來省視見愚所用羚羊角方，訝為仙方。其實非方之仙，乃藥之良也。

奉天都護（清之護寢陵者）王六橋之孫女，年五六歲，患眼疾。先經東醫治數日不愈，延為診視。其兩目胥肉長滿，遮掩目睛，分毫不露，且疼痛異常，號泣不止。遂單用羚羊角二錢，俾急煎湯服之。時已屆晚九點鐘，至夜半已安然睡去，翌晨胥肉已退其半。又煎渣服之，痊愈。蓋肝開竅於目，羚羊角性原屬木（謂角中有木胎者不確，蓋色似木而質仍角也），與肝有同氣相求之妙，故善入肝經以瀉其邪熱，且善伏肝膽中寄生之相火，為眼疾有熱者無上妙藥。

奉天陸軍次長韓芳辰之太夫人，年六十餘，臂上生疔毒，外科不善治療，致令毒火內攻，熱痰上壅，填塞胸臆，昏不知人。時芳辰督辦奉天兵工廠，有東醫數人為治，移時不愈，氣息益微，延為診視，知係痰厥。急用硼砂五錢，煮至融化，灌下三分之二，須臾嘔出痰涎若干，豁然頓醒，而患處仍腫疼，其疔生於左臂，且左脈較右脈洪緊，知係肝火熾盛，發為腫毒也。遂投以清火解毒之劑，又單將羚羊角二錢煎湯兌服，一劑而愈。

奉天小北門裡淡泊胡同，友人朱貢九之幼女，年五歲，出疹次日即靨，精神騷擾不安，自言心中難受。遂用連翹、蟬退、薄荷葉、金銀花諸藥表之，不出。繼用羚羊角二錢煎湯飲之，其疹復出。又將羚羊角渣重煎兩次飲之，痊愈。由此可知其表疹外出之力，迥異於他藥也。

奉天同善堂（省立慈善總機）堂長王熙春之幼女，年五歲，因出疹倒靨過急，毒火內鬱已過旬日，猶大熱不止，其形體病久似弱，而脈象確有實熱，且其大便

乾燥，小便黃赤，知非輕劑所能治癒。將為疏方，熙春謂孺子灌藥實難，若用好吃之藥，令其自服則尤善矣。於斯為開羚羊角二錢，生石膏二兩，煎湯一大盅，俾徐徐飲下。連服兩劑痊愈。

奉天大南門內官燒鍋胡同劉璽珊之幼女，年四歲，於孟夏時胸腹之間出白痧若干，旋即不見，周身壯熱，精神昏憤，且又泄瀉，此至危之候也。為疏方生懷山藥、滑石各八錢，連翹、生杭芍各三錢，蟬退、甘草各二錢，羚羊角一錢（另煎兌服），煎湯一大盅，和羚羊角所煎之湯共盅半，分三次溫服下，其白痧復出，精神頓爽，瀉亦遂止。繼又用解毒清火之品調之痊愈。

奉天中學教員馬凌霄之幼子，年四歲，因出疹醫急，來院求為診治。其狀閉目喘促，精神昏昏，呼之不應，周身壯熱，大便數日未行。斷為疹毒內攻，其神明所以若斯昏沉，非羚羊角、生石膏並用不可。遂為疏方生石膏一兩，玄參、花粉各六錢，連翹金銀花各三錢，甘草二錢，煎湯一大盅，又用羚羊角二錢煎湯半鐘，混合，三次溫服下，盡劑而愈。

奉天海關稅局文牘陳南雅之女，年六七歲，疹後旬餘灼熱不退，屢服西藥不效。後愚視之，脈象數而有力，知其疹毒之餘熱未清也。俾單用羚羊角一錢煎湯飲之，其熱頓愈。

天津特別三區三馬路俞孚尹之幼子，年四歲，出疹三日，似靨非靨，周身壯熱，渴嗜飲水，其精神似有恍惚不穩之意，其脈象有力，搖搖而動。恐其因熱發

瘰，為開清熱托毒之方，加羚羊角一錢以防其發瘰。購藥至，未及煎而瘰發，且甚劇，遂將羚羊角與諸藥同時各煎，取湯混和，連連灌下，其瘰即愈。又將其方去羚羊角，再煎服一劑痊愈。

滄州中學書記張雅曾，河西紀家屯人，來院詢方，言其家有周歲小兒出疹，延醫調治數日，其疹倒靨皆黑斑，有危在旦夕之勢。不知尚可救否。細詢之，知毒熱內陷，為開羚羊角一錢及玄參、花粉、連翹各數錢，俾將羚羊角另煎湯半茶盅，與餘三味所煎之湯兌服，一劑而愈。

滄州河務局科員趙春山之幼子，年五歲，因感受溫病發瘰，昏昏似睡，呼之不應，舉家懼甚，恐不能救。其脈甚有力，肌膚發熱。因曉之曰「此證因溫病之氣循督脈上行，傷其腦部，是以發瘰，昏昏若睡，即西人所謂腦脊髓炎也。病狀雖危，易治也」，遂單用羚羊角二錢，煎湯一盅，連次灌下，發瘰遂愈，而精神亦明瞭矣。繼用生石膏、玄參各一兩，薄荷葉、連翹各一錢，煎湯一大鐘，分數次溫飲下，一劑而脈靜身涼矣，蓋瘰之發由於督脈，因督脈上統腦髓神經也（督脈實為腦髓神經之根本）。羚羊之角乃其督脈所生，是以善清督脈與神經之熱也。

滄州興業布莊劉耀華之幼子，甫周歲，發生扁桃體炎喉證，不能食乳，劇時有礙呼吸，目睛上泛。急用羚羊角一錢，煎湯多半杯，灌下，須臾呼吸通順，食乳如常。

滄州西河沿李氏婦，年二十餘，因在西醫院割療癰，住其院中，得傷寒證甚劇，西醫不能治。延往診視，其喘息迫促，脈數近七至，確有外感實熱，而重診無力，因其割療癰已至三次，屢次聞麻藥，大傷氣分故也，其心中覺熱甚難支，其脅下疼甚。急用羚羊角二錢，煎一大鐘，調入生雞子黃三枚，服下，心熱與脅疼頓止。繼投以大劑白虎加人參湯，每劑煎湯一大碗，仍調入生雞子黃三枚，分數次溫服下，連服二劑痊愈。

歲在壬寅之孟秋，邑北境霍亂盛行。斯歲少陽相火司天，厥陰風木在泉，肝膽火盛，患病者多心熱，嗜飲涼水。愚遇其證之劇者，恒於方中加羚羊角三錢（另煎兌服），服者皆愈。或疑司天者管上半歲，在泉者管下半歲，霍亂發於孟秋似與司天無涉。不知霍亂之根皆伏於暑熱之時，且司天雖云管半歲，而究之一歲之氣候實皆與司天有關也。矧羚羊角之性，不但善平少陽之熱，亦善平厥陰之熱，況少陽之膽原與厥陰之肝原相連乎。

又愚在奉時，有安東王姓女學生來院診病，自言上焦常覺發熱，下焦則畏寒，且多白帶，家中存有羚羊角不知可服否。答以此藥力甚大，且為珍重之品，不必多服，可用五分煎服之，若下焦不覺涼，而上焦熱見退，乃可再服。後其人服羚羊角數次，不惟上焦熱消，其白帶亦見愈，下焦並不覺涼，是羚羊角性善退熱而又非寒涼之品可知也。

內子王氏生平有病不能服藥，聞藥氣即思嘔吐。偶患大便下血甚劇，時愚自奉還籍，彼自留奉，因粗識藥性，且知羚羊角毫無藥味，自用羚羊角一錢煎湯服之，立愈。

友人毛仙閣，邑中之儒醫也，以善治吐衄聞名。其治吐衄之方，多用羚羊角。曾詢其立方之義。仙閣謂吐衄之證多因衝氣上衝，胃氣上逆，血即隨之妄行。其所以衝胃衝逆者，又多為肝火、肝氣之激發，用羚羊角以平肝火、肝氣，其衝氣不上衝，胃氣不上逆，血自不妄行而歸經矣。愚深韙斯論，遇吐衄證仿用之，果效驗異常。夫犀角、羚羊角同為珍重之藥品。而犀角之出暹邏者，其價較羚羊角尤昂（無力者，真廣犀角亦可用），因其價昂，則偽者愈多，愚曾用治吐衄，用治溫熱竄入心宮，用治溫熱傳入陽明兼咳血，皆能隨手奏效，而實未嘗若羚羊角之單用屢用，以定其確實之功效。是以不敢輕加評議，姑懸為闕疑之條，以待同人之研究而已。蓋愚於藥性從不敢憑空擬議，必單用、屢用，精心實驗有得，而後登諸笱記，以為異日撰述之藍本。是以近著第四期《衷中參西錄》（藥物學講義），專講中西藥物，所載中藥不滿百種，而藥後講解已近十萬言，無非舉數十年精心實驗之所得，而盡情披露傾吐，以貢諸醫界同人也。

所可慮者，羚羊角雖為挽回險證之良藥，然四十年前其一錢之價值，不過同今日銀幣之半形，今則值銀幣十七八圓矣，其昂貴之價，後且有加無已，寒素之家何以能用。愚因臨證細心品驗，遇當用羚羊角之證，原可以他藥三種並用代之，



其藥力不亞羚羊角，且有時勝於羚羊角，則鮮茅根、生石膏與西藥阿斯必林並用是也。蓋羚羊角之特長在表疹癰外出及清肝膽之熱，而茅根稟少陽最初之氣，故發生最早，阿斯必林之原質存於楊柳樹皮中（用其樹皮中津液製成），楊柳之發生亦最早，故亦善入少陽也。至石膏雖為陽明正藥，因其含有硫氧氫原質，實善於清熱，而兼有發表之性，凡藥性之能發表者，皆與肝膽木性之喜條達者為同氣，且石藥質重，兼有鎮肝膽之力。是以此三藥並用可以代羚羊角也。今爰將此三藥並用之分量酌定於下，且為定一方名，以便於記憶。

【甘露清毒飲】

鮮茅根去淨皮切碎六兩、生石膏搗細兩半、阿斯必林半瓦。

將前二味煎湯一大碗，分三次送服阿斯必林，兩點鐘服一次。若初次服藥後遍身出汗，後兩次阿斯必林宜少服，若分毫無汗，又宜稍多服。以服後微似有汗者方佳。至石膏之外量，亦宜因證加減，若大便不實者宜少用，若瀉者石膏可不用，待其瀉止便實仍有餘熱者，石膏仍可再用。

壬申正月中旬，長男蔭潮兩臂及胸間肉皮微發紅，咽喉微疼，疑將出疹，又強被友人挽去，為治小兒發疹。將病治癒，歸家途中又受感冒，遂覺周身發冷，心中發熱。愚適自津還籍，俾用生石膏細末一兩，煎湯送服阿斯必林一瓦。周身得汗，發冷遂愈，心中之熱亦輕，皮膚則較前益紅。遲半日又微覺發冷，心中之熱更增劇，遂又用生石膏細末二兩，煎湯送服阿斯必林半瓦。服後微解肌，病又

見愈。遲半日仍反復如故，且一日之間下大便兩次，知其方不可再用。時地凍未解，遣人用開凍利器，剖取鮮茅根六兩，煎湯一大碗，分三次服，每次送服阿斯必林三分瓦之一。服後未見汗而周身出疹若干，病癒十分之八九，喉已不疼。隔兩日覺所餘之熱又漸增重，且覺頭目昏沉，又剖取鮮茅根八兩，此時因其熱增，大便已實，又加生石膏兩半，共煎湯一大碗，仍分三次送服阿斯必林如前。上半身又發出白泡若干，病遂痊愈。觀此可知此三藥並用之妙，誠可代羚羊角矣。後返津時，值瘟疹流行，治以此方，皆隨手奏效。

論馬錢子為健胃妙藥

西人以馬錢子為健胃之藥，吾醫界聞之莫不訝為異事。不知胃之所以能化食者，固賴其生有酸汁，又實因其能自潤動也。馬錢子性雖有毒，若制至無毒，服之可使全身潤動，以治肢體麻痺（此奮興神經之作用），若少少服之，但令胃腑潤動有力，則胃中之食必速消，此非但憑理想，實有所見而云然也。

滄州小南門外，朱媼，年過六旬，素有癩風證，醫治數十年，先服中藥無效，繼服西藥麻醉腦筋之品，若臭剝、臭素、抱水諸藥，雖見效，然必日日服之始能強制不發。因諸藥性皆鹹寒，久服傷胃，浸至食量減少，身體羸弱。後有人授以王勳臣龍馬自來丹方，其方原以馬錢子為主藥，如法制好，服之數日，食量頓增，旬餘身體漸壯，癩病雖未即除根，而已大輕減矣。由斯知馬錢子健胃之功效迥異乎他藥也。

特是龍馬自來丹，馬錢子伍以地龍，為治癩風設也。若用以健胃，宜去地龍，加炒白朮細末，其健胃之效益著。爰擬定其方於下。

炒白朮細末四兩、制好馬錢子細末一兩。

二藥調勻，水和為丸一分重（乾透足一分），飯後服五丸，一日再服，旬餘自見功效。

按：馬錢子誠有大毒，必制至無毒方可服。《醫林改錯》龍馬自來丹後所載制馬錢子法，似未能將毒去，至《證治全生集》製藥中所載制馬錢子法，又似制之太過，使藥無力。愚斟酌二書之間，擬一制法，載於《衷中參西錄》三期第七卷（處方編中）振頹丸下，有欲制此藥者，取用其法可也。

論龍骨不可煨用之理

龍者天地之元陽也，其飛騰之時原有氣無質，是以出沒變化，人莫窺測。至其潛藏地中，則元陽棲止之處必有元陰以應之，陰陽會合，得地氣而成形，遂生龍骨。是龍骨者，原龍全身之模型也。迨至龍潛既久，乘時飛去，元陽既升於空際，其所遺龍骨之中仍含有元陰，是以舌舐之，其力能吸舌，此元陰翕收之力也。若生用之，凡心中怔忡、虛汗淋漓、經脈滑脫、神魂浮蕩諸疾，皆因元陽不能固攝，重用龍骨，藉其所含之元陰以翕收此欲渙之元陽，則功效立見。若煨用之，其元陰之氣因煨傷損，縱其質本黏澀，煨後其黏澀增加，而其翕收之力則頓失矣。用龍骨者用其黏澀，誠不如用其吸收也。明乎此理，則龍骨之不宜煨益明矣。王洪緒《證治全生集》謂「用龍骨者，宜懸之井中，經宿而後用之」，是可謂深知龍骨之性，而善於用之者矣。

廔蟲辨

仲景治血痺虛勞，有大黃廔蟲丸，治血瘀腹中，有下瘀血湯，方亦有廔蟲。是廔蟲原為治療血之要藥，而其性和平，化瘀血則不傷新血，且又分毫無損氣分，實尤為治療血之妙藥也。乙丑冬，愚因診病來津，所開藥方中有廔蟲數錢，藥房與以黑色甲蟲，形似蜣螂而扁，其背光滑無紋，知係差誤。以質藥房，則謂「從前所售廔蟲，即土鼈蟲，後有南方醫者，謂此非廔蟲，必購於上海始得真廔蟲。後如言購來者，即此光背黑甲蟲，從此凡見方中寫廔蟲者，即與以此蟲。其開土鼈蟲者，始與以土鼈蟲，各藥房中皆如此，非獨敝號有然也。愚聞之，不禁愕然。夫廔蟲原為常用藥品，而天津又為北方名區，竟至混淆如此乎。嘗考《本經》，一名地鼈，《別錄》又名土鼈，是土鼈蟲即廔蟲之明徵也。又《本草綱目》謂廔蟲狀若鼠婦。按：鼠婦俗名濕濕蟲，生潮濕之地，鼠穴中恒有之，又生於井底泥中，古名伊威，《詩經》所謂伊威在室也，其背原多橫紋，廔蟲既與鼠婦相似，其非光背無紋之黑甲蟲，而為背多橫紋之土鼈，益可知矣。且可疑者，廔蟲近時藥行中亦名蘇蟲，為其產於蘇州者良也，豈南方醫者不識其土產乎？又其光背黑甲蟲購自上海，豈上海為南方最文明之區，竟誤以之為廔蟲乎？如此以配製古方，其將何以奏效乎？愚願醫界同人之用廔蟲者，尚其明辨之。

論雞內金為治女子乾血勞要藥

女子乾血勞之證，最為難治之證也。是以愈者恒少，惟善用雞內金者，則治之多能奏效。愚向為婦女治病，其廉於飲食者，恒白朮與雞內金並用。乃有兩次遇有用此藥者，一月間月信來三次，恍悟此過用雞內金之弊也。蓋雞內金善化瘀血，即能催月信速於下行也。然月信通者服之，或至過通，而月信之不通者服之，即不難下通。況《內經》謂「中焦受氣取汁，變化而赤，是為血」，血之來源，原在脾胃能多消飲食。雞內金與白朮並用，原能健脾胃以消飲食也。況脾為後天資生之本，居中央以灌溉四旁。此證之多發勞嗽者，脾虛肺亦虛也；多兼灼熱者，脾虛而腎亦虛也。再加山藥、地黃、枸杞諸藥以補肺滋腎，有雞內金以運化之，自能變其濃厚之汁漿為精液，以灌注於肺腎也。迨至服藥日久，臟腑諸病皆愈，身體已漸復原，而月信仍不至者，不妨再加廬蟲水蛭諸藥。如嫌諸藥之猛，若桃仁、紅花亦可以替代。然又須多用補正之藥品以駕馭之，始能有益而無害也。愚向曾本此意擬一方，名資生通脈湯，載於三期八卷（處方編中）後列用其方治癒之案數則，可參觀也。

答人疑洗髓丹中輕粉紅粉性過猛烈

洗髓丹方載三期《衷中（參西錄）》第八卷。

《神農本經》藥分上、中、下三品。上品者養生之藥也，中品者治病之藥也，下品者攻病之藥也。是故無病時宜服上品以調之，有病時宜服中品以治之，至其病甚劇烈非尋常藥餌所能治者，又當服下品之藥以攻之。梅毒之證可謂病中之劇烈者矣。而欲用尋常藥餌從容治之，可乎？然用猛烈之藥，原非毫無把握也。夫用藥之道等於用兵，驕將悍卒，在善駕馭。洗髓丹中之輕粉、紅粉，可謂驕將悍卒矣，用之以攻邪或有傷正之虞，而竟能信其有益無損者，因所以駕馭之者周且善也。人之畏輕粉、紅粉者，以其為金石之藥，與腸胃不宜，且畏其燥烈之性，足傷骨損髓也。故方中用棗肉為丸，以保腸胃，又多用核桃肉為佐，以補骨髓，更用露蜂房以引毒外出（引毒外出之理詳本方後），不使服藥之後，藥隨毒氣內陷，且將輕粉炒至光色減退。俾其性近和平，如法為丸，用之未有不應手奏效者。愚在軍中時，用此丹治癒軍官兵士不勝講，莫不身體康健，生育子女，毫無他變。後在奉省又用此丹治癒極重及特別之梅毒若干，略舉三則於下。

撫順馬姓，年四十餘，在京陸軍部充差，先染淋毒，後因淋毒變為梅毒。注射西人藥針十餘次，初則旋愈旋發，繼則連注數針亦不見效。據西人云，凡由淋毒變梅毒者，其毒深入骨髓，無論何藥不能拔除病根。本人聞之亦信為不可治之痼疾也。後經奉天其同寅友韓芳辰君介紹，來奉求為診治。其毒周身不現形跡，



惟覺腦際沉昏頗甚，心中時或煩躁，骨節多有疼痛之處，所甚異者，其眉稜眼梢及手指之節多生軟骨，西人亦謂係梅毒所凝結也。愚對於此證，不敢謂其必治癒，猶幸身體不甚羸弱，遂將洗髓丹一劑俾分四次服完，歇息旬日，再服一劑，將其分量減三分之一，歇息旬日，又服一劑，較二次所服之分量又減三分之一，皆四日服完，其病遞次消除。凡軟骨之將消者，必先發起，然後徐徐消腫，化為無有。共計四浹辰，諸病皆愈。

又治一郝姓小孩，因食乳傳染，咽喉潰爛，至不能進食，肛門亦甚潰爛，其腸胃之潰爛可知。其父為奉天師範學校教員，來院細言其病狀，問還有救否？答曰「果信用余方，仍能救」，遂與以洗髓丹六粒，俾研細水調服三次，痊愈。

又奉天一宦家公子，有遺傳性梅毒，年六歲不能行，遍身起瘡若小癬，愈而復發，在大連東人醫院住近一年不愈。後來院求治，其身體羸弱，飲食甚少，先用藥理其脾胃，俾能飲食，漸加以解毒之藥，若金銀花、連翹、天花粉諸品，身體漸壯，瘡所發者亦漸少。然毒之根蒂仍未除也，遂將洗髓丹五分許研細（將製成丸藥復研末者，因孺子不能服丸藥也），開水調服三日服一次，仍每日服湯藥一劑。後將洗髓丹服至十次，瘡已不發。繼又服湯藥月餘，兼用滋陰補腎之品，每劑中有核桃仁三個，取其能健骨也（食酸齷齒者，嚼核桃仁立愈，是能健骨之明徵），從此遂能步履行動如常童矣。觀此二案，則洗髓丹奇異之功效，誠可於解梅毒藥中首屈一指。且凡解梅毒藥，無論或注射、或服藥，愈後又恒肢體作疼，

以其能清血中之毒，不能清骨中之毒，是以愈後其骨節猶疼也。因其骨中猶含有毒性，恒遲至日久而復發，或遲至十餘年而復發者，若再投以此丹，則骨疼立愈，且以後永不反復，此又愚屢經試驗而確知其然者也。

讀高思潛氏野苧菜根對於霍亂之功效書後

嘗閱《紹興醫藥學報》，載有高思潛氏論野苧菜根有治霍亂之功效。其文云「清光緒二十八年秋季，吾鄉盛行霍亂。初覺腹中酸痛，嘔吐且瀉，繼則腿腓筋轉，手腳色紫，大肉盡消，眼珠深陷，後遂四末厥冷，周身出冷汗，以至不救者，不計其數。後有人傳方，用野苧菜根搗汁，沖水和服，雖奄奄一息者，亦可得慶重生」，考李時珍《本草綱目》云「苧菜味甘、冷利、無毒，赤苧主赤痢、射工、沙虱。紫苧殺蟲毒、治氣痢。六苧並利大小腸、治初痢」，而不及霍亂。嘗細繹之，野苧確有治霍亂之功效，特古人未明言，查霍亂之原因，為虎列拉桿菌繁殖腸內所致。其誘因則為濕熱侵襲，致人身抵抗力減少，故病毒得以倡狂。赤紫苧既能主赤痢、氣痢、射工、沙虱，而六苧又同治初痢，則野苧亦有同等之功效可知。諸書又以野苧療蜈蚣、蜂、蠶、諸蛇螫，是野苧惟一之功效在殺蟲解毒。以野苧菜治霍亂者，殺其菌而解其毒，治霍亂之原因也。野苧之性味為甘冷而利，大有滌熱利濕之能，剷除原因而外又能兼療誘因，誠霍亂對證之良藥也。

按：霍亂為最險之證，即治之如法，亦難期其必效，用野苧根搗汁沖水服之，果能隨手奏效，可為無上妙方。然野苧之種類甚多，當以形似圃中所種之苧菜，而葉綠，梗或微紅，其梗與葉上之筋比圃中所種之苧菜稍粗，其梗甚硬，葉可食而梗不可食，梗端吐小長穗，結子黑色，比苧菜子更小者，為真野苧菜。然此菜非到處皆有，若無此菜之處，擬可用馬齒苧代之。誠以馬齒苧除蟲解毒之力尤勝，

有被蠍螫者，愚教用馬齒莧搗爛敷之立瘥，是實驗也。且《綱目》謂「六月六日採馬齒莧曬乾，元旦煮熟，同鹽醋食之，可禳解疫氣」，霍亂亦疫氣也，馬齒莧可解疫氣，即當能解除霍亂之毒菌，是以愚謂無野莧菜之處，或可以馬齒莧代之也。然用馬齒莧時不必用根，宜取其葉搗汁沖飲之，因其葉之背面滿鋪水銀，水銀實為消除霍亂毒菌之要品也。特是馬齒莧，北方之人大抵知之，而其形實與莧菜及野莧菜迥異。北方人不喜食莧菜，故種莧菜者極少，荒僻之區恒有不知莧菜為何物者，焉能按其形以覓野莧菜。然花卉中之雞冠花、雁來紅（名雁來黃，一名老少年，俗名老來少），藥品中之青葙子，皆莧菜類也，故其葉皆似莧菜，若按此等物葉以覓野莧菜，野莧菜固不難辨認也。

野莧菜有名灰滌莧者（燒灰能滌衣，故名灰滌，俗呼為灰菜），狀似青藜而小，且無青藜赤心，含有鹼性甚多，食之助人消化力，原無毒。而奉天農村多有食野莧菜者，獨不食灰滌莧，言食之恒令人腫臉，此植物之因產地而異者也。

向閱典籍，見有鼠齒莧之名，未知何物。後聞人言即今花卉中所謂龍鬚海棠也。為其葉細圓而長如鼠齒，故名為鼠齒莧。其易於生長，無論有根無根，植於濕土中即活，亦灰馬齒莧。其莖原與馬齒莧無異，其花雖大於馬齒莧數倍，實亦四出，惟不知其性，尚待試驗也。

讀盧育和氏葵能治瘡述書後

閱紹興王戍《醫藥學報》，載有時賢盧育和氏葵能醫瘡述。言《本經》稱冬葵子氣味甘寒滑無毒，主治五臟六腑寒熱羸瘦、五癰、利小便，故《聖惠方》治咳嗽、瘡邪，取冬葵子陰乾為末，酒沖服。現西報載俄國鄉人患瘡，以向日葵鋪臥身下，上亦蓋之，其病若失，而俄醫取以試驗，又以花葉瀝汁和燒酒制之，凡患瘡者飲以此酒輒愈。

按：古之所謂葵，與俗所謂向日葵者原非一種。古所謂葵即衛足花，俗呼為守足花者是也。因此花先生叢葉，自葉中心出莖，莖之下邊盡被叢葉衛護，故曰衛足。孔子所謂「鮑莊子之智不如葵，葵猶能衛其足」者是也。俗呼為守足，守與衛音雖異而義則同也。其莖高近一丈，花多紅色，又名一丈紅。高麗人詠一丈紅詩云「花與木槿花相似，葉共芙蓉葉一般，五尺欄杆遮不住，猶留一半與人看」，此詩實能將葵之真象寫出，其葉之大誠如木芙蓉，而花之鮮妍亦與木槿無異。此為宿根植物，季夏下種，至次年孟夏始開花，為其經冬仍然發生，故其結之子名為冬葵子。須於鮮嫩之時採取，則多含蛋白質，故能有益於人。《聖惠方》謂採其子陰乾，是當鮮嫩之時採而陰乾之也。若過老則在科上自幹，而無事陰乾矣。又有一種，二三月下種，至六月開花，其下無叢生之葉，不能衛足，而其莖葉花皆與葵無異，其治療之功效亦大致相同，即藥品中之蜀葵也。《綱目》謂花之白者治瘡，是衛足葵與蜀葵皆治瘡也。

至於俗所謂向日葵者，各種本草皆未載，惟《群芳譜》載之，本名丈菊，一名西番葵，一名迎陽葵。為未列於藥品，是以不諳其性，而《群芳譜》謂其性能墜胎，開花時孕婦忌經其下。然用其墜胎之力以催生，則誠有效驗。是以拙擬之大順湯（在《衷中參西錄》第八卷，方係野臺參、當歸各一兩、生赭石細末二兩，衛足花子炒爆一錢作引，或丈菊花瓣一錢作引皆可，無二物作引亦可），用其花瓣作引也。因其子人恒炒食之，知其無毒，且知其性滑，曾單用以治淋，甚效。後與鴉膽子同用（鴉膽子去皮四十粒，用丈菊子一兩炒搗，煎湯送下），治花柳毒淋，亦甚效，然不知其能治瘡也。今俄人發明其能治瘡，丈菊誠可列於藥品矣。惟呼為向日葵，是仍係俗名，至古之所謂向日葵，原指衛足花言也。司馬溫公詩，「四月清和雨乍晴，南山當戶轉分明，更無柳絮因風起，惟有葵花向日傾」，夫丈菊原無宿根，季春下種，四月苗不盈尺，而其時衛足正開，溫公詩中所謂葵花向日傾者，確指衛足無疑也。蓋衛足葵當嫩時，莖心原隨日旋轉，可於其北指之時以定半夜，因半夜日在正北也。由斯知衛足花實古之所謂葵，丈菊花乃今之所謂葵也。至衛足花子，亦善催生，而大順湯中不採其鮮者陰乾用之，而將其成熟者炒爆用之者，誠以此物微炒令爆，淺淺種於濕地之處，朝種暮出，物生之神速莫過於此，此乃借其特異之氣化以為用也。

又按：此二種葵，種之皆易長，庭院中宜多植之，以備採用。而衛足葵其根、葉花、子皆為藥品，《綱目》載其主治多種病證。其葉可食，古人以為百菜之長，

因其宿根年年發生，故初春即茂長叢葉，饑饉之歲可用以救荒，於牆邊宅畔種葵畝許，八口之家可恃以無饑。其食法：用衛足葵葉，洗淨切碎，少拌以麵（五穀之麵皆可），蒸熟食之。因葉中多含蛋白質，故少加以五穀之麵即可養生，此種葵所以為荒政之一也。且其莖上之皮，可以績麻作繩作布，尤便農家。今人只知種此二種葵以看花，而竟不知其種種用處，醫界同人尚其廣為提倡哉。

冬 葵 子 辨

嘗思人之欲格物者，知其物之名，即當知其命名之義，此所謂顧名思義也。況其物為藥品，於人之衛生有關，尤當致其審慎平，有如冬葵子，藥中催生之要品也，然同為葵子而獨以冬別之，其生長之時必與冬令有涉也。愚初習醫時，見藥房中所鬻之冬葵子俗名向日葵，即丈菊（俗名向日葵，亦名朝陽花）所結之子，心甚疑之，疑此物春種，至秋開花結實，初不經冬，泛名為葵子猶可，何冬葵名也。詢諸醫界，亦未有能言之者。後細閱《本草綱目》，乃知將葵子季夏種之，至明年孟夏開花結子者名冬葵子，為其宿根自冬日經過也。若春種至秋結子者，其子不堪入藥。又細考所謂葵者，即尋常所種之守足花，古原名之為衛足花，因其葉叢生，自葉中心出莖，葉衛其下，若不見其足，故曰衛足，孔子所謂「鮑莊子之智不如葵，葵猶能衛其足」者是也，俗呼為守足花，其音雖異而義則同也。且本草明言其子狀若榆莢，是冬葵子確為衛足花子，而非丈菊花子無疑矣。特是衛足花子原非難得之物，而藥房中代以丈菊花子者，疑其中或有他因，為閱《群芳譜》，乃知丈菊一名迎陽葵，其開花時孕婦忌經其下，以其花能墜胎也。由斯知丈菊花原能催生，其子得花之餘氣亦當有催生之力，藥房中以丈菊子為冬葵子，雖係錯誤，而猶有所取義也。

後來津與友人張相臣言及此事。相臣謂天津藥房所鬻之冬葵子皆係繇子（亦麻類，梗葉粗大如丈菊，所績之麻不甚堅），繇亦麻類，梗葉粗大如丈菊，所績



之麻不甚堅，較之代以丈菊子者尤遠不如矣。愚曰「以津門名勝之區，藥品竟混淆至此乎？何醫界中亦未有明正其非者」？相臣曰「此事可勿深論。然未知衛足子與丈菊子，其催生之力孰優」？答曰「未經一一單用試驗，實未敢遽定其優劣。然丈菊花英，催生之力實勝於子，曾見有單用丈菊花英催生，服之即效者，惜人多不知耳。至於用衛足子催生，當分老嫩兩種。蓋衛足為滑菜，所主之病多取其性滑，若用其子催生，亦取其滑也，當用鮮嫩衛足子數兩，搗爛煮汁服之。若用其老者，則另有取義，當用兩許微火炒裂其甲，煎湯飲之，誠以此物若炒裂其甲種之，可以朝種暮生（須夏季種之方能如是），此乃植物發生之最神速者，借其發生之速，以治人生育之遲，自應有特效耳」。相臣聞之甚稱善。

論赤石脂煨用之可疑

凡石質之藥多煨用，因其質甚硬，煨之可化硬為軟也，未有其質本軟而設法煨之使硬者。然未有者而竟有之，此誠出人意外也。憶愚弱冠應試津門，偶為人疏方，中有石脂，病家購藥求檢視，見石脂圓薄如錢，中且有孔，堅如缶瓦，似水和石脂細末燒成者，時愚年少，閱歷見聞未廣，未敢直斥其非。迨丙寅來津，始知各藥房中所鬻石脂，皆係水和石脂細末煨成者。夫石脂之質原係粉末，性最黏澀，用煨之者大抵取其能固腸止瀉，若煨之成瓦，猶能固腸止瀉乎？且古方用石脂多末服，若煨之為瓦，以之煎湯，雖不能愈病，猶不至傷人，若為末服之必然有損於脾胃，此又不可不知也。夫石脂原為一種陶土，宜興人用石脂作原料，可燒為壺，即世俗所謂宜興壺也。若將石脂煨若缶瓦，可以入藥，是宜興壺之瓦亦可作藥用矣。然未審其與何病相宜而投之能有效也。

辨《傷寒論》方中所用之赤小豆是穀中小豆非相思子

《傷寒論》麻黃連翹赤小豆湯，治傷寒瘀熱在裡，身發黃。赤小豆與麻黃連翹並用，是分消濕熱自小便出，其為穀中之赤小豆無疑也。至《傷寒論》瓜蒂散，治病如桂枝證，頭不痛，項不強，寸脈微浮，胸中痛硬，氣上衝咽喉不得息者，此胸中有寒也，故以瓜蒂散吐之。人因其方赤小豆與瓜蒂並用，遂有疑其方中之赤小豆為相思子者，蓋以相思子服後能令人吐，而唐人詠相思子有紅豆發南國之句，因此方書中亦名之為赤小豆。然斯說也，愚嘗疑之。夫赤小豆之性，下行利水，相思子之性，上行湧吐，二藥之功用原判若天淵。若果二方中所用之赤小豆，一為穀中赤小豆，一為木實中相思子，仲景立方之時有不詳細注解者乎。且瓜蒂散中所以用赤小豆者，非取其能助瓜蒂湧吐也。陳修園此方詮解謂「小豆色赤而性降，香鼓色黑而氣升，能交心腎，雖大吐之時神志不憤」，善哉此解，誠能窺仲景制方之妙也。由此益知瓜蒂散中之赤小豆，亦確係穀中之赤小豆也。孰意戊午之秋，愚應奉天軍政兩界之聘，充立達醫院主任，採買中西藥品，所購赤小豆，竟是相思子，詢之藥行及醫界，皆言此地皆以相思子為赤小豆，未有用穀中赤小豆者，愚聞之不禁愕然。夫瓜蒂散中之赤小豆用相思子或者猶可，豈麻黃連翹赤小豆湯中之赤小豆亦可用相思子乎？吾知其誤人必多矣。諸行省愚未盡歷，他處亦有誤用赤小豆如奉天省者乎？斯未可知，愚深願醫界同人，皆留心於芻蕘之言，慎勿誤用相思子為赤小豆也。

論白虎湯中粳米不可誤用糯米

稻有兩種，粳稻與糯稻是也。粳者，硬也，其米性平不黏，善和脾胃，利小便，即尋常作飯之米也。糯者，濡也、軟也，其米性溫而黏，可以暖胃，固澀二便，即可以用之蒸糕熬粥之米也。白虎湯中用粳米者，取其能調和金石重墜之性，俾與脾胃相宜，而又能引熱下行自小便出也。若誤用糯米，其性之溫既與陽明熱實之證不宜，且其黏滯之力，又能逗留胃腑外感之熱，使不消散，其固澀二便之力，尤能阻遏胃腑外感之熱，不能自下瀉出，是以用之不惟無益而反有害也。愚曾治邑北鄭仁村鄭姓，溫熱內傳，陽明府實投以白虎湯原方不愈。再診視時，檢其藥渣，見粳米誤用糯米。因問病家曰「我昨日曾諄諄相囑，將煎藥時自加白米半兩，何以竟用漿米（北方謂粳米為白米，糯米為漿米）？病家謂「此乃藥房所給者。彼言漿米方是真粳米」，愚曰「何來此無稽之言也。為此粳米誤用，幾至耽誤病證，猶幸因檢察藥渣而得知也」，俾仍用原方加粳米煎之，服後即愈。又嘗閱長沙蕭琢如《遯園醫案》，載有白虎湯中用黏米之方，心疑其誤用糯米。後與長沙門生朱靜恒言及，靜恒言其地於粳米之最，有汁漿者即呼之為黏米，此非誤用糯米也。然既載於書，此種名稱究非所宜，恐傳之他處，閱者仍以糯米為黏米，誠以糯米之黏遠過於粳米也。凡著書欲風行寰宇者，何可以一方之俗語參其中哉。

麥奴、麥角辨

中藥麥奴，非西藥麥角也。近日醫學報中有謂麥奴即是麥角者，且疑《本草綱目》謂麥奴主熱煩，天行熱毒，解丹石毒，陽毒，溫毒熱極發狂、大渴及溫瘧，未嘗言能止血，而西藥麥角何以為止血之專藥乎？按醫報中謂麥奴即是麥角者，亦非無因。西人藥物書中謂麥角一名黴麥，而吾中華俗語，凡於禾穗之上生黑菌者，皆謂之穀黴，麥奴原是麥穗上生黑菌，名之為穀黴可，名之為麥黴亦可，即名之為黴麥亦無不可。此麥奴與麥角所以相混為一物也。

究其實際，麥奴即是麥黴無疑，而麥角係又在麥黴上生出小角，長四五分至七八分，狀類果中香蕉，故名為麥角。蓋麥為心穀，原善人心，化為黑色屬水，原有以水勝火之義，且其性善化，故能化心中之壯火大熱，使之暗消於無形，非必麥奴之性涼能勝熱也。

至麥角所以善止血者，誠以麥黴色黑，原有止血之理，而又自麥黴中化出特異之生機，以生此麥角，是有如反生之禾，其氣化上達，是以能升舉下陷之血而使之復其本位，故同為血證，而以之治吐衄，未有確實效驗，而以之治下血，則莫不隨手奏效也。

小茴香辨

古語云「問耕於奴，訪織於婢」，此語誠信然也。吾直俗習，皆喜食茴香菜，又恒喜用其子作食料以調和飲食，是以愚於因寒小便不通及奇經諸脈寒鬱作疼者，恒重用小茴香以溫通之。誠以其為尋常服食之物，雖多用之無傷也。後見《紹興醫學報》載有用小茴香二三錢即至誤人性命者，醫界中亦多隨聲附和，謂小茴香含有毒性，不可輕用，而愚心甚疑之。回憶生平屢次重用小茴香為人治病，約皆隨手奏效，服後未嘗少有暝眩，且為日用服食之物，何至有毒也。因之蓄疑於心，廣問醫界同人，亦未有能言其故者。後在奉醫院中，雇一鄒姓廚役，其人年過五旬，識字頗多，彼亦恒用小茴香調和食物，因與言及紹報所載之事。彼曰「小茴香原係兩種，有野生、家種之分。此物若為園圃中種者，其菜與子皆無毒，若為野山自生者，其菜與子皆有毒。此地人不喜食茴香，街市所鬻之茴香，多係關里人在奉者買去，因本地人鑒於野生之茴香有毒，並疑園圃中種者亦或有毒而不敢輕食也」，愚聞之，數年疑團渙然冰釋矣。由斯所欲用小茴香者，若確知其為園圃所種植者，不妨多用，若購自藥房，即當慎用、少用，恐其為野山自生之小茴香也。由斯知天地之間同一物，而其或有毒，或無毒，誠難確定。猶憶歲在丁丑，邑中棗樹林中多生蘑菇，其上皆有紫黑斑點，採取食之，人多吐瀉，且有多食致傷命者。此乃物之因形色偶異，而其性即迥異者也。又灰滌莧（俗名灰菜）為農家常服之野菜，愚在籍時亦喜食之，後至奉天見灰滌莧各空地皆是，而人不

敢食。詢之答云「此菜人食之則腫臉」，其性與關里生者，迥別也，此亦物性之因地各異者也。

又憶初學醫時，知蚤休之性有小毒，其用之極量不過二錢。至後初次用蚤休時，恐其有毒，親自檢驗其形狀、皮色皆如乾薑，其味甘而淡，毫無刺激性，嚼服錢許，心中泰然，知其分毫無毒，後恒用至四五錢，以治癱甚效。待至他處，再用此藥，其皮色紫而暗，有若紫參，其味辣而不甘，饒有刺激之力，嚼服五分許，心中似覺不穩，乃恍悟方書所謂有毒者，指此等蚤休而言也。同是蚤休，而其性味竟如此不同，凡用藥者尚其細心時時檢察，自能穩妥建功，不至有誤用藥品之失也。

論用藥以勝病為主不拘分量之多少

嘗思用藥所以除病，所服之藥病當之，非人當之也（惟用藥不對病者則人當之而有害矣），乃有所用之藥本可除病，而往往服之不效，間有激動其病癒加重者，此無他，藥不勝病故也。病足以當其藥而綽有餘力，藥何以能除病乎？愚感於醫界多有此弊，略舉前賢之醫案數則、時賢之醫案數則及拙治之醫案數則，以質諸醫界同人

明李士材治魯藩陽極似陰證，時方盛暑，寢門重閉，密設氈帷，身覆貂被，而猶呼冷。士材往視之曰「此熱證也。古有冷水灌頂法，今姑通變用之」，乃以生石膏三斤煎湯三碗，作三次服。一服去貂被，再服去氈帷，服至三次體蒸流汗，遂呼進粥，病若失矣。

清道光間，歸安江筆花著《醫鏡》，內載治一時疫發斑案，共用生石膏十四斤，其斑始透。

吳鞠通治何姓叟，手足拘攣，誤服桂、附、人參、熟地等補陽，以致面赤，脈洪數，小便閉，身重不能轉側，手不能上至鬢，足捲曲絲毫不能移動。每劑藥中重用生石膏半斤，日進一劑，服至三月後，始收全功。又治蠱脹無汗，脈象沉弦而細。投以《金匱》麻黃附子甘草湯行太陽之陽，即以瀉厥陰之陰。麻黃去節，重用二兩，熟附子兩六錢，炙甘草兩二錢，煎湯五飯碗。先服半碗得汗至眉，二次汗至眼，約每次其汗下出寸許。每次服藥後，即啜鯉魚熱湯以助其汗。一晝夜



飲完藥二劑，鯉魚湯飲一鍋，汗出至膝上，未能過膝。臍以上腫盡消，其腹仍大，小便不利。改用五苓散，初服不效，將方中肉桂改用新鮮紫油安邊青花桂四錢，又加遼人參三錢，服後小便大通，腹脹遂消。

山東海豐近海之處有程子河，為黃河入海故道，海船恆停其處。清咸豐時有楊氏少婦，得奇疾，脊背腫熱，赤身臥帳中，若有一縷著身，即熱不能支。適有宜興蘇先生乘海船赴北闡鄉試，經過其處。其人精醫術，延為診視，斷為陽毒，俾用大黃十斤，煎湯十斤，放量陸續飲之，盡劑而愈。

時賢蕭琢如，名伯璋，湖南長沙人，愚之聞名友也，以所著《遯園醫案》相贈。其案中最善用《傷寒》、《金匱》諸方，無愧為南陽私淑弟子。載有治其從妹腹中寒涼作疼，脈象沉遲而弦緊，每劑中重用烏附子二兩，連服附子近二十斤，其病始愈。又治漆工余某妻，左邊少腹內有塊，常結不散，痛時則塊膨脹如拳，手足痺軟，遍身冷汗，不省人事，脈象沉緊，舌苔白厚而濕滑，面色暗晦。與通脈四逆湯，烏附子八錢，漸增至四兩。煎湯一大碗，分數次飲下。內塊遞減，證亦皆見輕。病人以為藥既對證，遂放膽煎好一劑頓服下，頃之面熱如醉，手足拘攣，舌尖麻已而嘔吐汗出，其病脫然痊愈。

時賢劉蔚楚，名永楠，廣東香山人，醫界國手，兼通西法，名論卓議，時登醫學志報，久為閱者爭先快睹。所著《遇安齋證治叢錄》，愚曾為作序，其中用大劑治癒險證尤多。如其治極重鼠疫用白虎湯，生石膏一劑漸加至斤餘，治產後

溫熱，用白虎加人參湯，一劑中用生石膏半斤，連服十餘劑始愈。治陽虛汗脫，用朮附湯，每劑朮用四兩，漸加至一斤，天雄用二兩，漸加至半斤。如此膽識，俱臻極頂，洵堪為挽回重病者之不二法程也。

至於愚生平用大劑挽回重證之案甚多，其已載於前四期《衷中參西錄》者多為醫界所披閱，茲不復贅。惟即從前未登出者略錄數則，以質諸醫界同人。

奉天交涉署科員王禪唐之夫人，受妊惡阻嘔吐，半月勺水不存，無論何藥下嚥即吐出，勢極危險。爰用自製半夏二兩（自製者中無礬味，善止嘔吐），生赭石細末半斤，生懷山藥兩半，共煎湯八百瓦藥瓶一瓶（約二十兩強），或涼飲溫飲，隨病人所欲，徐徐飲下，二日盡劑而愈。

夫半夏、赭石皆為妊婦禁藥，而愚如此放膽用之毫無顧忌者，即《內經》所謂「有故無殞，亦無殞也」。然此中仍另有妙理，詳《衷中參西錄》第二卷參赭鎮氣湯下，可參觀。

又治西安縣煤礦司賬張子禹腿疼，其人身體強壯，三十未娶，兩腳腫疼，脛骨處尤甚。服熱藥則加劇，服涼藥則平平，醫治年餘無效。其脈象洪實，右脈尤甚，其疼痛之處皆發熱，斷為相火熾盛，小便必稍有不利，因致濕熱相並下注。宜投以清熱利濕之劑，初用生石膏二兩，連翹、茅根各三錢，煎湯服。後漸加至石膏半斤，連翹、茅根仍舊，日服兩劑，其第二劑石膏減半。如此月餘，共計用

生石膏十七斤，疼與腫皆大輕減，其飲食如常，大便日行一次，分毫未覺寒涼。旋因礦務忙甚，來函招其速返，臨行切囑其仍服原方，再十餘劑當脫然痊愈矣。

又奉天聯合煙捲公司看鍋爐劉某，因常受鍋爐之炙熱，陰血暗耗，腑臟經絡之間皆蘊有熱性，至仲春又薄受外感，其熱陡發，表裡俱覺壯熱，醫者治以滋陰清熱之藥，十餘劑分毫無效。其脈搏近六至，右部甚實，大便兩三日一行，知其陽明府熱甚熾，又兼陰分虛損也。投以大劑白虎加人參湯，生石膏用四兩，人參用六錢，以生山藥代方中粳米，又加玄參、天冬各一兩，煎湯一大碗，分三次溫飲下，日進一劑。乃服後其熱稍退，藥力歇後仍如故，後將石膏漸加至半斤，一日連進二劑，如此三日，熱退十之八九，其大便日下一次，遂改用清涼滋陰之劑，數日痊愈。共計所用生石膏已八斤強矣。

又愚在籍時曾治一壯年，癲狂失心，六脈皆閉，重按亦分毫不見（於以知頑痰能閉脈），投以大承氣湯加赭石二兩，煎湯送服甘遂細末三錢（此方在《衷中參西錄》名蕩痰加甘遂湯，以治癲狂之重者。若去甘遂名蕩痰湯，以治癲狂之輕者。二方救人多矣），服後大便未行。隔數日（凡有甘遂之藥不可連日服之，連服必作嘔吐）將藥劑加重，大黃、赭石各用三兩，仍送服甘遂三錢，大便仍無行動，遂改用巴豆霜五分，單用赭石細末四兩煎湯送下，間三日一服（巴豆亦不可連服，若連服則腸胃腐爛矣）。每服後大便行數次，雜以成塊之痰若干。服至兩

次，其脈即出。至五次，痰淨，其癲狂遂愈。復改用清火化瘀之藥，服數劑以善其後。

答朱靜恒問藥三則

一問：楊玉衡謂痧脹證不可用甘草，用之恐成痧塊。《溫熱經緯》十四條注，沈辛甫謂此條頗似痧證，六一散有甘草，慎用。據此二條，痧證似有不宜用甘草，尊著急救回生丹、衛生防疫寶丹，皆兼治痧證，而甘草獨重用，能無礙乎？答「凡用藥治病，每合數味成方，取其藥性化合，藉彼藥之長以濟此藥之短，而後乃能隨手奏效。如外感喘嗽忌用五味，而小青龍湯與乾薑、細辛並用則無礙；寒溫熱盛忌用人參，而白虎加人參湯與石膏知母並用則無礙。蓋急救回生丹與衛生防疫寶丹原為治霍亂必效之方，而兼治諸痧證亦有特效。其中所用藥品若冰片、薄荷、細辛、白芷皆極走竄之品，故重用甘草之甘緩者以和之，則暴邪之猝中者可因走竄而外透。至吐瀉已久，正氣將瀉者，更可藉甘草以保合正氣。況此等暴證皆含有毒菌，甘草又為解毒之要藥乎。且甘草生用，不經水煮火炙，其性補而不滯，而仍善流通。四期《衷中參西錄》甘草解可參觀也。

二問：妊婦禁忌歌（見《醫宗必讀》）謂朱砂損胎，急救回生丹、衛生防疫寶丹皆重用朱砂，不知妊婦可服乎？答「朱砂中含水銀，夫水銀固不利於胎者也，是以有忌用之說。究之係水銀與硫黃化合而成，其性當以朱砂論，不可復以水銀、硫黃論。朱砂之性，《本經》謂其養精神，安魂魄，益氣，明目，殺精魅邪惡鬼，久服通神明，不老。細思《本經》之文，朱砂於妊婦何損哉。況「有故無殞」《內

經》原有明訓，若遇危急之證，必需某藥者，原無所顧忌也。矧其藥本非當顧忌者乎。

三問：尊著補偏湯有全蜈蚣一條，他方書用蜈蚣皆去頭尾足，以其毒在頭尾足也，今並頭尾足全用之，獨不慮其中毒乎？答：凡用毒藥治病，皆取其性之猛烈可以勝病。蜈蚣頭尾足色黃而亮，當為其精華透露之處，若悉去之，恐其毒盡而氣力亦微，即不能勝病矣。況蜈蚣原無大毒，曾見有以治梅毒，一次服十條而分毫不覺瞑眩者，其性近和平可知，何必多所顧忌而去所不必去也。

牛肉反紅荊之目睹

敝邑多紅荊，而縣北泊莊尤多，各地阡塍皆有荊叢繞護。乙巳季春，牛多瘟死，剝牛者棄其臟腑，但食其肉，未聞有中毒者。獨泊莊因食牛肉，同時中毒者二百餘人，迎愚為之解救，既至（相距七里許）死者已三人矣。中毒之現象，發熱、噁心、暈眩、脈象緊數。投以黃連、甘草、金銀花、天花粉諸藥，皆隨手奏效。細詢其中毒之由，緣洗牛肉於溪中，其溪中多浸荊條，水色變紅，洗後復晾於荊條柵上，至煮肉時又以荊為薪，及鬻此肉，食者皆病，食多則病劇，食少則病輕耳。愚聞此言，因恍憶「老牛反荊花」，原係邑中相傳古語，想邑中古人必有中此毒者，是以其語至今留詒，人多知之，特其事未經見，雖知之，亦淡然若忘耳。然其相反之理，究係何因，須俟深於化學者研究也。因又憶曩時閱小說，見有田家婦饁於田間，行荊芥中，所饁之飯有牛肉，食者遂中毒，疑荊芥即係紅荊之訛，不然豈牛肉反荊花，而又反荊芥耶？醫界諸大雅，有能確知之者，又期不吝指教。

甘草反鯪魚之質疑

近閱《遯園醫案》（長沙蕭琢如著）載鯪魚反甘草之事。謂當遜清末葉，醫士顏君意祥，篤實人也，一日告余，曾在某邑為人治病，見一奇案，令人不解。有一農家人口頗眾，冬月塘涸取魚，煮食以供午餐，丁壯食魚且盡，即散而赴工。婦女童稚數人復取魚烹治佐食。及晚，有一婦初覺飽悶不適，臥床歇息，眾未介意，次日呼之不起，審視則已僵矣。舉家驚訝，莫明其故，再四考查，自進午餐後，並未更進他種食物，亦無纖芥事故，乃取前日烹魚之釜細察視之，除魚汁骨肉外，惟存甘草一條約四五寸許。究問所來，據其家婦女，小孩啼哭每以甘草與食，釜中所存必係小兒所遺落者。又檢所烹之魚，皆係鯪魚，並非毒物。且甘草亦並無反鯪魚之說，矧同食者若干人，何獨一人偏受其災。頃刻鄰里咸集，又久之，其母家亦至。家人據實以告眾，一少年大言於眾曰「甘草鯪魚同食斃命，千古無此奇事，豈得以謊言搪塞？果爾，則再用此二物同煮，與我食之」。言已，即促回來者照辦，並親自手擎二物置釜中。煮熟，取盤箸陳列席間，旁人疑阻者輒怒斥之，即席大啖，並笑旁觀者愚暗膽怯。屆晚間固無甚痛苦，亦無若何表示，至次晨則僵臥不起矣。由斯其母家嫌疑解釋。

按：鯪魚為常食之物，甘草又為藥中常用之品，苟此二物相反，疏方用甘草時即當戒其勿食鯪魚。



論中西之藥原宜相助為理

自西藥之入中國也，維新者趨之恐後，守舊者視之若浼，遂至互相牴牾，終難溝通。愚才不敏，而生平用藥多喜取西藥之所長，以濟吾中藥之所短，初無畛域之見存於其間。故拙著之書，以衷中參西為名也。蓋西醫用藥在局部，是重在病之標也；中醫用藥求原因，是重在病之本也。究之標本原宜兼顧，若遇難治之證，以西藥治其標，以中藥治其本，則奏效必捷，而臨證亦確有把握矣。今試略舉數端於下。

西藥之治吐血，以醋酸鉛為最效；治下血，以麥角為最效。然究其所以效者，謂二藥能收縮其血管也。至於病因之涼熱虛實則不問矣，是以愈後，恒變生他證。若以二藥收縮其血管，以中藥治其涼熱虛實，且更兼用化瘀消滯之品，防其血管收縮之後，致有瘀血為恙，則無難愈之血證矣。

西藥治癩風以臭素三種（臭素加里、臭素安母紐謨，那篤留膜）及抱水過魯拉兒為最效。然究其所以效者謂能麻醉腦筋（即腦髓神經）也，至病因之為痰、為氣、為火則不問矣，是以迨至腦筋不麻醉，則病仍反復。若以西藥臭素、抱水諸品麻醉其腦筋（每日服兩次可以強制不發），用中藥以清火理痰理氣，或兼用健脾鎮肝之品，無難愈之癩風矣。

西藥阿斯必林，為治肺結核之良藥，而發散太過，恒傷肺陰，若兼用玄參、沙參諸藥以滋肺陰，則結核易愈。又其藥善解溫病初得，然解表甚效，而清裡不

足，恒有服之周身得汗，因其裡熱未清，而病不愈者，若於其正出汗時，急用石膏兩許煎湯，乘熱飲之，則汗出愈多，而熱亦遂清，或用石膏所煎之湯送服阿斯必林，汗出後亦無不愈者。

又如白喉證，乃臟腑之熱上攻，鬱於喉間所致。上攻之鬱熱，宜散而消之，而實忌用表藥表散。若用生石膏、玄參諸藥煎湯送服西藥安知歇貌林半瓦，服藥之後可微似解肌而愈。蓋安知歇貌林雖亦有透表之力，而其清熱之力實遠勝其透表之力，而又有生石膏、玄參諸涼潤之藥以清內傷之燥熱，所以能穩妥奏效也。如爛喉痧證，外感之熱內侵，鬱於喉間所致。外感之鬱熱，宜表而出之，而實忌用辛熱發表，若亦用生石膏、玄參諸藥煎湯送服西藥阿斯必林一瓦，服藥之後必周身得涼汗而愈。蓋阿斯必林雖饒有發表之力，然實係辛涼解肌而兼有退熱之功，而又有石膏、玄參諸涼潤之藥以清外感之壯熱，故能隨手奏效也。

又如西藥骨滸波漿，為治淋證之妙藥，而單用之亦恒有不效之時，以淋證之原因及病候各殊也。若用中藥以濟其不逮，其為熱淋也，可與滑石、海金沙並用；其為寒淋也，可與川椒目、小茴香並用；其為血淋也，可與旱三七、鴉膽子仁並用；其淋而兼滑脫也，可與生龍骨、生牡蠣並用；其為傳染之毒淋也，可與朱砂、甘草並用（宜同朱砂、甘草末和為丸）。若毒淋兼以上諸淋者，亦可兼用以上諸藥，隨淋證之所宜而各加以相伍之藥，無難愈之淋證矣。若此者，難悉數也。或疑中藥與西藥迥不同，若並用之恐有不相宜之處。不知以上所臚列者，原非憑空

擬議也，蓋愚之對於西藥，實先詳考其原質性味，知其與所伍之中藥毫無齟齬，而後敢於一試，乃試之屢效，而後敢筆之於書也。由斯知中藥與西藥相助為理，誠能相得益彰，能匯通中西藥品，即漸能匯通中西病理，當今醫界之要務，洵當以此為首圖也。試觀西人近出之書，其取中藥制為藥水、藥酒、藥粉者幾等於其原有之西藥（觀西書治療學可知），是誠西人醫學之進步也。若吾人仍故步自封，不知採取西藥之所長，以補吾中藥之所短，是甘讓西人進步矣。夫天演之理，物競天擇，我則不競又何怨天之不擇哉。郭隗曰「請自隗始」，愚願吾醫界青年有志與西醫爭衡者，當深體拙著衷中參西之命名，則用功自能端其趨向矣。

論西藥不盡宜於中人

嘗讀《內經》至異法方宜論謂「西方水土剛強，其民不衣而褐薦，華食而脂肥，故邪不能傷其形體，其病生於內，其治宜毒藥，故毒藥者亦從西方來」，諸句云云，顯為今日西藥道著實際。蓋凡人生寒冷之地且多肉食，其脾胃必多堅壯。是以西藥之原質本多猛烈，而又恒制以硫酸、硝酸、鹽酸諸水以助其猛烈，是取其猛烈之性與堅壯之脾胃相宜故也。其取用中藥之處，若大黃、巴豆之開破，黃連、龍膽之寒涼，彼皆視為健胃之品，吾人用之果能強健脾胃乎？廿餘年來，愚亦兼用西藥，然必細審其原質本未含有毒性，且其性近和平，一次可用至半瓦以上者，至其用量或十分瓦之一及百分瓦之者，原具有極猛烈之性質，實不敢於輕試也。且其藥味雖多，至以之治病似仍未全備，如人之氣血原並重，而西藥中但有治貧血之藥，毫無治貧氣之藥，是顯然可徵者也。

祝華先生雅鑒：過蒙獎譽，感愧交集。僕自念學疏才淺，混跡醫界，徒為濫竽，又何敢為人師乎。然深感先生痛家庭之多故而發憤學醫，擔簦負芘，遍訪於江淮汝泗，以求師資之誠心，而僕生平稍有心得之處，誠有不能自秘者。夫學醫工夫原有數層，悉論之，累幅難終。今先就第一層工夫言之，則最在識藥性也。藥性詳於本草，諸家本草皆不足信，可信者惟《本經》，然亦難盡信也。試先即其可信者言之，如石膏《本經》言其微寒，且謂其宜於產乳，是以《金匱》治婦人乳中虛，煩亂嘔逆有竹皮大丸，中有石膏；徐靈胎治陸氏婦產後溫熱，用石膏；僕治產後寒溫證，其實熱甚劇者，亦恒用石膏（宜用白虎加人參湯去知母加玄參，且石膏必須生用）。而諸本草竟謂大寒，未有謂其可用於產後者。又如山茱萸《本經》謂其逐寒濕痺，僕遇肢體疼痛，或腹脅疼痛，脈虛者，重用萸肉其疼即愈（有案載《衷中參西錄》第四捲曲直湯下），因其氣血因寒濕而痺故作疼，痺開則疼自止也，而諸家本草不言其逐痺也。《本經》又謂其主寒熱，僕治肝虛極，寒熱往來，汗出欲脫，重用萸肉即愈（有案載三期第一卷來復湯下）。諸家本草不言其治寒熱往來也。又如桂枝，《本經》謂其主咳逆上氣吐吸，仲景桂枝湯用之以治奔豚上逆，小青龍湯用之治外感喘逆（用小青龍湯之例，喘者去麻黃加杏仁不去桂枝，則桂枝為外感痰喘之要藥可知）是深悟桂枝主上氣吐吸之理也，僕屢用此二方，亦皆隨手奏效，而諸家本草不言，其治上氣吐吸也。如此者難枚舉。試

再言其難盡信者，如人參，性本溫也，而《本經》謂其微寒；當歸本甘溫而微辛也，而《本經》謂其苦，諸如此類，或藥物年久有變遷歟？或其授受之際有差訛歟（古人之書皆以口授）？斯皆無從考究。惟於其可信者則信之，於其不能盡信者又須費研究也。是以僕學醫時，凡藥皆自嘗試，即毒若巴豆、甘遂，亦曾少嘗之。猶記曾嚼服甘遂一錢，連瀉十餘次後，所下者皆係痰水，由此悟為開頑痰之主藥，惟後噁心欲吐，遂與赭石並用（赭石重墜止嘔吐），以開心下熱痰，而癲狂可立愈。又曾嚼服遠志甚酸（《本經》言其味苦），且兼有礬味，知其性正能斂肺化痰，以治痰嗽果為妙品。惟多服者能令人嘔吐，亦其中含有礬質之徵也。語云良工心苦，僕於醫學原非良工，然已費盡苦心矣。近集四十餘年藥物之研究，編為《藥物學講義》一書，中西藥品皆備有其要，約有十萬餘言，已出版公諸醫界，於藥物一門庶有小補云。

芷熙先生道鑒：近閱《紹興醫報》十二卷六號，有與弟論藥二則。首則論僵蠶，條分縷析，議論精確，洵為僵蠶的解，捧讀之下，獲益良多。然《衷中參西錄》所載蠶因風僵之說，實採之徐靈胎所注《本經百種》僵蠶下之注疏，徐氏原浙江名醫，弟素信其醫學，故並信其所論僵蠶，此非弟之杜撰也。且古有蠶室之名，即室之嚴密不透風者，注者謂蠶性畏風，室透風則蠶病，是蠶因風僵之說，古書雖無明文，已寓有其意，徐氏之說亦非無據也。次論鮮小薊，因弟用鮮小薊根治吐血、衄血，治花柳血淋，治項下疙瘩皆隨手奏效，稱弟之用藥如宜寮弄丸，左宜右有。自謂曾用鮮小薊根治癒極險之肺癰，以為弟所用鮮小薊之徵驗。究之鮮小薊根之善治肺癰，弟猶未知也。夫肺癰為肺病之最劇者，西人甚畏此證，而諉為無可治，乃竟以一味鮮小薊根治建此奇功，何其神妙如斯哉。先生之哲嗣余祥少兄，既喜讀拙著之書，先生對於拙著若此注意，再三為之登於報章，洵為弟之知己也。古語云「人生得一知己可以無憾」，弟本北人，何幸南方知己之多也。

論鱉甲、龜板不可用於虛弱之證

《本經》論鱉甲主心腹癥瘕堅積。《金匱》鱉甲煎丸用之以消瘧母（脅下硬塊），其色青入肝，藥房又皆以醋炙，其開破肝經之力尤勝。向曾單用鱉甲末三錢，水送服，以治久瘧不愈，服後病者覺怔忡異常，移時始愈，由斯知肝虛弱者，鱉甲誠為禁用之品也。又龜板，《本經》亦主癥瘕，兼開濕痺。後世佛手散用之，以催生下胎。嘗試驗此藥，若用生者，原能滋陰潛陽，引熱下行，且能利小便（是開濕痺之效），而藥房中亦皆用醋炙之，若服至一兩，必令人泄瀉，其開破之力雖遜於鱉甲，而與鱉甲同用以誤治虛弱之證，實能相助為虐也。乃行世方書用此二藥以治虛勞之證者甚多，即名醫如吳鞠通，其治溫邪深入下焦，熱深厥深，脈細促，心中憺憺大動，此邪實正虛，肝風煽動將脫，當用白虎加人參湯，再加龍骨、牡蠣，庶可挽回，而吳氏竟治以三甲復脈湯，方中鱉甲、龜板並用，雖有牡蠣之收澀，亦將何補？此乃名醫之偶失檢點也。乃近在津沽，有公安局科長趙子登君介紹為其友之夫人治病。其人年近五旬，患溫病半月不愈。其左脈弦硬，有真氣不斂之象，右脈近洪而不任重按，此邪實證虛也，為擬補正祛邪之劑。病者將藥飲一口，嫌其味苦不服。再延他醫，為開三甲復脈湯方，略有加減，服後煩燥異常，此心腎不交陰陽將離也，醫者猶不省悟，竟於原方中加大黃二錢，服後汗出不止。此時若重用山萸肉二兩，汗猶可止，汗止後，病仍可治，惜該醫見不及此，竟至誤人性命也。



論萆薢為治失溺要藥不可用之治淋

《名醫別錄》謂萆薢治陰萎、失溺、老人五緩。蓋失溺之證實因膀胱之括約筋少約束之力，此係筋緩之病，實為五緩之一，萆薢善治五緩，所以治之。拙擬醒脾升陷湯中，曾重用萆薢以治小便頻數不禁，屢次奏效，因將其方載於《衷中參西錄》三期四卷，是萆薢為治失溺之要藥可知矣。乃萆薢分清飲竟用之以治膏淋，何其背謬若是？愚在籍時，鄰村有病淋者，醫者投以萆薢分清飲兩劑，其人小便滴瀝不通，再服各種利小便藥皆無效。後延愚診治，已至十日，精神昏憤，毫無知覺，脈數近十至，按之即無，因謂其家人曰「據此脈論，即小便通下，亦恐不救」，其家人懇求甚切，遂投以大滋真陰之劑，以利水之藥佐之。灌下移時，小便即通，床褥皆濕。再診其脈，微細欲無，愚急辭歸。後聞其人當日即亡。近在津治一淋證，服藥十劑已愈，隔兩月病又反復，時值愚回籍，遂延他醫治療，方中亦重用萆薢，服兩劑，小便亦滴瀝不通，服利小便藥亦無效。遂屢用西法引溺管兼服利小便之藥，治近一旬，小便少通滴瀝，每小便一次，必須兩小時。繼又服滋陰利水之藥十劑始痊愈。

論沙參為治肺勞要藥

近族曾孫女瑩姐，自幼失乳，身形羸弱，自六七歲時恒發咳嗽，後至十一二歲嗽浸增劇，概服治嗽藥不效。愚俾用生懷山藥細末熬粥，調以白糖令適口，送服生雞內金細末二三分，或西藥百布聖二瓦，當點心服之，年餘未間斷。勞嗽雖見愈，而終不能除根。診其脈，肺胃似皆有熱，遂俾用北沙參軋為細末，每服二錢，日兩次。服至旬餘，咳嗽痊愈。然恐其沙參久服或失於涼，改用沙參三兩，甘草二兩，共軋細，亦每服二錢，以善其後。

按：沙參出於吉林者良，其色白質堅，稱為北沙參。究之沙參為肺家要藥，其質宜空。吾邑海濱產有空沙參，實較北沙參尤良，惜歲出無多，不能遠及耳。

〈 卷 三 〉

此卷論人腦部及臟腑之病，內傷居多，亦間論及外感。要皆本《靈》、《素》之精微，以融貫中西之法，而更參以數十年臨證實驗，是以論病之處多有與舊說不同者。

### 論腦充血之原因及治法

腦充血病之說倡自西人，而淺見者流恆譏中醫不知此病，其人蓋生平未見《內經》者也。嘗讀《內經》至《調經論》，有謂「血之與氣，並走於上，則為大厥，厥則暴死，氣反則生，不反則死」云云，非即西人所謂腦充血之證乎？所有異者，西人但言充血，《內經》則謂「血之與氣並走於上」，蓋血必隨氣上升，此為一定之理，而西人論病皆得之剖解之餘，是以但見血充腦中，而不知輔以理想以深究病源，故但名為腦充血也。至《內經》所謂「氣反則生，不反則死」者，蓋謂此證幸有轉機，其氣上行之極，復反而下行，腦中所充之血應亦隨之下行，故其人可生，若其氣上行不反，升而愈升，血亦隨之充而愈充，腦中血管可至破裂，所以其人死也。又《內經》《厥論篇》謂「巨陽之厥則腫首，頭重不能行，發為（眩也）仆」、「陽明之厥，面赤而熱，妄言妄見」、「少陽之厥，則暴聾頰腫而熱」，諸現象皆腦充血證也。推之秦越人治虢太子屍厥，謂「上有絕陽之絡，下有破陰之紐」者，亦腦充血證也。特是古人立言簡括，恆但詳究病源，而不細論治法，然既洞悉致病之由，即自擬治法不難也。愚生平所治此證甚多，其治癒

者，大抵皆腦充血之輕者，不至血管破裂也。今略舉數案於下，以備治斯證者之參考。

在奉天曾治一人，年近五旬，因處境不順，兼勞碌，漸覺頭疼，日浸加劇，服藥無效，遂入西人醫院。治旬日，頭疼不減，轉添目疼。又越數日，兩目生翳，視物不明。來院求為診治，其脈左部洪長有力，自言腦疼徹目，目疼徹腦，且時覺眩暈，難堪之情莫可名狀，脈證合參，知係肝膽之火挾氣血上衝腦部，腦中血管因受衝激而膨脹，故作疼；目係連腦，腦中血管膨脹不已，故目疼，生翳且眩暈也。因曉之曰「此腦充血證也。深考此證之原因，腦疼為目疼之根，而肝膽之火挾氣血上衝，又為腦疼之根。欲治此證，當清火、平肝、引血下行，頭疼愈而目疼、生翳及眩暈自不難調治矣」，遂為疏方，用懷牛膝一兩，生杭芍、生龍骨、生牡蠣、生赭石各六錢，玄參、川棟子各四錢，龍膽草三錢，甘草二錢，磨取鐵鏽濃水煎藥。服一劑，覺頭目之疼頓減，眩暈已無，即方略為加減，又服兩劑，頭疼目疼痊愈，視物亦較真。其目翳原係外障，須兼外治之法，為制磨翳藥水瓶，日點眼上五六次，徐徐將翳盡消。

又在滄州治一賦閑軍官，年過五旬，當軍旅縱橫之秋，為地方籌辦招待所，應酬所過軍隊，因操勞過度，且心多抑鬱，遂覺頭疼。醫者以為受風，投以表散之藥，疼益甚，晝夜在地盤桓且呻吟不止。診其脈象弦長，左部尤重按有力，知其亦係肝膽火盛，挾氣血而上衝腦部也。服發表藥則血愈上奔，故疼加劇也。為

疏方大致與前方相似，而於服湯藥之前，俾先用鐵銹一兩煎水飲之，須臾即可安臥，不作呻吟，繼將湯藥服下，竟周身發熱，汗出如洗。病家疑藥不對證，愚思之，恍悟其故，因謂病家曰「此方與此證誠有齟齬，然所不對者幾微之間耳。蓋肝為將軍之官，中寄相火，驟用藥斂之、鎮之、瀉之，而不能將順其性，其內鬱之熱轉挾所寄之相火起反動力也。即原方再加藥味，自無斯弊」，遂為加茵陳二錢。服後遂不出汗，頭疼亦大輕減。又即原方略為加減，連服數劑痊愈。夫茵陳原非止汗之品（後世本草且有謂其能發汗者），而於藥中加之，汗即不再出者，誠以茵陳為青蒿之嫩者，採於孟春，得少陽發生之氣最早，與肝膽有同氣相求之妙，雖其性涼能瀉肝膽，而實善調和肝膽不復使起反動力也。

在滄州治一建築工頭，其人六十四歲，因包修房屋失利，心甚懊惱，於旬日前即覺頭疼，不以為意。一日晨起，忽仆於地，狀若昏厥，移時甦醒，左手足遂不能動，且覺頭疼甚劇。醫者投以清火通絡之劑，兼法王勳臣補陽還五湯之義，加生黃耆數錢，服後更覺腦中疼如錐刺，難忍須臾。求為診視，其脈左部弦長，右部洪長，皆重按甚實。詢其心中，恆覺發熱。其家人謂其素性嗜酒，近因心中懊惱，益以燒酒澆愁，饑時恆以酒代飯。愚曰「此證乃腦充血之劇者，其左脈之弦長，懊惱所生之熱也。右脈之洪長，積酒所生之熱也。二熱相並，挾臟腑氣血上衝腦部。腦部中之血管若因其衝激過甚而破裂，其人即昏厥不復醒，今幸昏厥片時甦醒，其腦中血管當不至破裂。或其管中之血隔血管滲出，或其血管少有罅

隙，出血少許而復自止。其所出之血著於司知覺之神經，則神昏；著於司運動之神經，則痿廢。此證左半身偏枯，當係腦中血管所出之血傷其司右邊運動之神經也。醫者不知致病之由，竟投以治氣虛偏枯之藥，而此證此脈豈能受黃耆之升補乎？此所以服藥後而頭疼益劇也。」遂為疏方，亦約略如前。為其右脈亦洪實，因於方中加生石膏一兩，亦用鐵鏽水煎藥。服兩劑，頭疼痊愈，脈已和平，左手足已能自動，遂改用當歸、赭石、生杭芍、玄參、天冬各五錢，生黃耆、乳香、沒藥各三錢，紅花一錢，連服數劑，即扶杖能行矣。方中用紅花者，欲以化腦中之瘀血也。為此時脈已和平，頭已不疼，可受黃耆之溫補，故方中少用三錢，以補助其正氣，即藉以助歸、芍、乳、沒以流通血脈，更可調玄參、天冬之寒涼，俾藥性涼熱適均，而可多服也。上所錄二案，用藥大略相同，而皆以牛膝為主藥者，誠以牛膝善引上部之血下行，為治腦充血證無上之妙品，此愚屢經試驗而知，故敢貢諸醫界。而用治此證，尤以懷牛膝為最佳。

論腦充血證可預防及其證誤名中風之由（附：建瓴湯）

腦充血證即《內經》之所謂厥證，亦即後世之誤稱中風證，前論已詳辯之矣。而論此證者謂其猝發於一旦，似難為之預防。不知凡病之來皆預有朕兆，至腦充血證，其朕兆之發現實較他證為尤顯著，且有在數月之前，或數年之前，而其朕兆即發露者。今試將其發現之朕兆詳列於下。

（一）其脈必弦硬而長，或寸盛尺虛，或大於常脈數倍，而毫無緩和之意。  
（二）其頭目時常眩暈，或覺腦中昏憤，多健忘，或常覺疼，或耳聾目脹。  
（三）胃中時覺有氣上衝，阻塞飲食不能下行，或有氣起自下焦，上行作呃逆。

（四）心中常覺煩躁不寧，或心中時發熱，或睡夢中神魂飄蕩。  
（五）或舌脹、言語不利，或口眼歪斜，或半身似有麻木不遂，或行動腳踏不穩、時欲眩仆，或自覺頭重足輕，腳底如棉絮。

上所列之證，偶有一二發現，再參以脈象之呈露，即可斷為腦充血之朕兆也。愚十餘年來治癒此證頗多，曾酌定建瓴湯一方，服後能使腦中之血如建瓴之水下行，腦充血之證自愈。爰將其方詳列於下，以備醫界採用。

【建瓴湯】



生懷山藥（一兩）、懷牛膝（一兩）、生赭石（八錢軋細）、生龍骨（六錢搗細）、生牡蠣（六錢搗細）、生懷地黃（六錢）、生杭芍（四錢）、柏子仁（四錢），磨取鐵鏽濃水以之煎藥。

方中赭石必一面點點有凸，一面點點有凹，生軋細用之方效。若大便不實者去赭石，加建蓮子（去心）三錢。若畏涼者，以熟地易生地。

在津曾治遲華章之令堂，年七旬有四，時覺頭目眩暈，腦中作疼，心中煩躁，恆覺發熱，兩臂覺撐脹不舒，脈象弦硬而大，知係為腦充血之朕兆，治以建瓴湯，連服數劑，諸病皆愈，惟脈象雖不若從前之大，而仍然弦硬。因苦於吃藥，遂停服。後月餘，病驟反覆。又用建瓴湯加減，連服數劑，諸病又愈。脈象仍未和平，又將藥停服。後月餘，病又反覆，亦仍用建瓴湯加減，連服三十餘劑，脈象和平如常，遂停藥勿服，病亦不再反覆矣。

天津王姓叟，年過五旬，因頭疼、口眼歪斜，求治於西人醫院，西人以表測其脈，言其脈搏之力已達百六十毫米汞柱，斷為腦充血證，服其藥多日無效，繼求治於愚。其脈象弦硬而大，知其果係腦部充血，治以建瓴湯，將赭石改用一兩，連服十餘劑，覺頭部清爽，口眼之歪斜亦愈，惟脈象仍未復常。復至西人醫院以表測脈，西醫謂較前低二十餘毫米汞柱，然仍非無病之脈也。後晤面向愚述之，勸其仍須多多服藥，必服至脈象平和，方可停服。彼覺病癒，不以介意。後四閱月未嘗服藥，繼因有事出門，勞碌數旬，甫歸後又連次竹戰，一旦忽眩仆於地而

亡。觀此二案，知用此方以治腦充血者，必服至脈象平和，毫無弦硬之意，而後始可停止也。

友人朱鉢文，灤州博雅士也，未嘗業醫而實精於醫。嘗告愚曰「腦充血證，宜於引血下行藥中加破血之藥以治之」，愚聞斯言，恍有悟會，如目疾其疼連腦者，多係腦部充血所致，至眼科家恆用大黃以瀉其熱，其腦與目即不疼，此無他，服大黃後腦充血之病即愈故也。夫大黃非降血兼能破血最有力之藥乎？由斯知凡腦充血證其身體脈象壯實者，初服建瓴湯一兩劑時，可酌加大黃數錢。其身形脈象不甚壯實者，若桃仁、丹參諸藥，亦可酌加於建瓴湯中也。天津於氏少婦，頭疼過劇，且心下發悶作疼，兼有行經過多症，以建瓴湯加減治癒。

至唐宋以來名此證為中風者，亦非無因。嘗徵以平素臨症實驗，知腦充血證恆因病根已伏於內，繼又風束外表，內生燥熱，遂以激動其病根，而猝發於一旦。是以愚臨此證，見有夾雜外感之熱者，恆於建瓴湯中加生石膏一兩，或兩三日後見有陽明大熱、脈象洪實者，又恆治以白虎湯或白虎加人參湯，以清外感之熱，而後治其腦充血證。此愚生平之閱歷所得，而非為唐宋以來之醫家諱過也。然究之此等證，謂其為中風兼腦充血則可，若但名為中風仍不可也。迨至劉河間出，謂此證非外襲之風，乃内生之風，實因五志過極，動火而猝中。大法以白虎湯、三黃湯沃之，所以治實火也；以逍遙散疏之，所以治鬱火也；以通聖散、涼膈散雙解之，所以治表裡之邪火也；以六味湯滋之，所以壯水之源以制陽光也；以八

味丸引之，所謂從治之法，引火歸原也；又用地黃飲子治舌暗不能言，足廢不能行。此等議論，似高於從前誤認腦充血為中風者一籌。蓋腦充血證之起點，多由於肝氣肝火妄動，肝屬木能生風，名之為內中風，亦頗近理。然因未悟《內經》所謂血之與氣並走於上之旨，是以所用之方，未能絲絲入扣，與病證吻合也。至其所載方中有防風、柴胡、桂、附諸品，尤為此證之禁藥。

又《金匱》有風引湯除熱癰瘰，夫癰既以熱名，明其病因熱而得也。其證原似腦充血也。方用石藥六味，多係寒涼之品，雖有乾薑、桂枝之辛熱，而與大黃、石膏、寒水石、滑石並用，藥性混合，仍以涼論（細按之桂枝乾薑究不宜用）。且諸石性皆下沉，大黃性尤下降，原能引逆上之血使之下行。又有龍骨、牡蠣與紫石英同用，善斂衝氣，與桂枝同用，善平肝氣。肝衝之氣不上干，則血之上充者自能徐徐下降也。且其方雖名風引，而未嘗用祛風之藥，其不以熱癰瘰為中風明矣。特後世不明方中之意，多將其方誤解耳。拙擬之建瓴湯，重用赭石、龍骨、牡蠣，且有加石膏之時，實竊師風引湯之義也（風引湯方下之文甚簡，似非仲景筆墨，故方書多有疑此係後世加入者，故方中之藥品不純）。

【附錄】

湖北天門崔蘭亭來函：

張港一人患腦充血證，忽然仆地，上氣喘急，身如角弓，兩目直視。全家惶恐，眾醫束手，殮服已備，迎為診治。遵建瓴湯原方治之，一劑病癒強半。後略有加減，服數劑，脫然痊愈。

按：鎮肝熄風湯，實由建瓴湯加減而成。

論腦貧血治法（附：腦髓空治法）

腦貧血者，其腦中血液不足，與腦充血之病正相反也。其人常覺頭重目眩，精神昏憤，或面黃唇白，或呼吸短氣，或心中怔忡，其頭與目或間有作疼之時，然不若腦充血者之脹疼，似因有收縮之感覺而作疼。其劇者亦可猝然昏仆，肢體頹廢或偏枯，其脈象微弱，或至數兼遲。西人但謂腦中血少，不能榮養腦筋，以致腦失其司知覺、司運動之機能。然此證但用補血之品，必不能愈。《內經》則謂「上氣不足，腦為之不滿」，此二語實能發明腦貧血之原因，並已發明腦貧血之治法。蓋血生於心，上輸於腦（心有四血管通腦），然血不能自輸於腦也。《內經》之論宗氣也，謂宗氣積於胸中，以貫心脈，而行呼吸，由此知胸中宗氣，不但為呼吸之中樞，而由心輸腦之血管亦以之為中樞。今合《內經》兩處之文參之，知所謂上氣者，即宗氣上升之氣也。所謂上氣不足腦為之不滿者，即宗氣不能貫心脈以助之上升，則腦中氣血皆不足也。然血有形而氣無形，西人論病皆從實驗而得，故言血而不言氣也。因此知腦貧血治法固當滋補其血，尤當峻補其胸中宗氣，以助其血上行。持此以論古方，則補血湯重用黃耆以補氣，少用當歸以補血者，可為治腦貧血之的方矣。今錄其方於下，並詳論其隨證宜加之藥品。

生箭耆一兩、當歸三錢。呼吸短氣者，加柴胡、桔梗各二錢。不受溫補者，加生地、玄參各四錢。素畏寒涼者，加熟地六錢、乾薑三錢。胸有寒飲者，加乾薑三錢、廣陳皮二錢。

按：《內經》「上氣不足，腦為之不滿」二語，非但據理想像也，更可實徵諸凶門未合之小兒。《靈樞》《五味篇》謂「大氣搏於胸中，賴穀氣以養之，穀不入半日則氣衰，一日則氣少」，大氣即宗氣也。觀小兒慢驚風證，脾胃虛寒，飲食不化，其宗氣之衰可知。更兼以吐瀉頻頻，虛極風動，其宗氣不能助血上升以灌注於腦更可知。是以小兒得此證者，其凶門無不塌陷，此非上氣不足頭為不滿之明徵乎？時賢王勉能氏謂「小兒慢驚風證，其脾胃虛寒，氣血不能上朝腦中，既有貧血之病，又兼寒飲填胸，其陰寒之氣上衝腦部，激動其腦髓神經，故發癇瘳」，實為通論。

又方書謂真陰寒頭疼證，半日即足損命。究之此證，實兼因宗氣虛寒，不能助血上升，以致腦中貧血乏氣，不能御寒，或更因宗氣虛寒之極而下陷，呼吸可至頓停，故至危險也（理亦參觀大氣詮自明）。審斯，知欲治此證，拙擬回陽升陷湯（方在三期第四卷處方編中係生箭耆八錢，乾姜、當歸各四錢，桂枝尖三錢、甘草一錢）可為治此證的方矣。若細審其無甚劇之實寒者，宜將乾薑減半，或不用亦可。《內經》論人身有四海，而腦為髓海。人之色慾過度者，其腦髓必空，人之腦髓空者，其人亦必頭重目眩，甚或猝然昏厥，知覺運動俱廢，因腦髓之質原為神經之本源也。其證實較腦貧血尤為緊要。治之者，宜用峻補腎經之劑，加鹿角膠以通督脈，督脈者何？即脊樑中之脊髓袋，上通於腦，下通命門，更由連命門之脂膜而通於胞室，為副腎臟，即為腎臟化精之處（論腎須取廣義，命門、

胞室皆為副腎，西人近時亦知此理，觀本書首篇論中可知。鹿角生腦後督脈上故善通督脈。患此證者果能清心寡欲，按此服藥不輟，還精補腦之功自能收效於數旬中也。

湯)

論腦貧血痿廢治法答內政部長楊階三先生（附：乾頹湯、補腦振痿

肢體痿廢，而其病因實由於腦部貧血也。按生理之實驗，人之全體運動皆腦髓神經司之，雖西人之說，而洵可確信。是以西人對於痿廢之證皆責之於腦部，而實有腦部充血與腦部貧血之殊。蓋腦髓神經原借血為濡潤者也，而所需之血多少，尤以適宜為貴。彼腦充血者，血之注於腦者過多，力能排擠其腦髓神經，俾失所司，至腦貧血者，血之注於腦者過少，無以養其腦髓神經，其腦髓神經亦恆至失其所司。至於腦中之所以貧血，不可專責諸血也，愚嘗讀《內經》而悟其理矣。《內經》謂「上氣不足，腦為之不滿，耳為之苦鳴，頭為之傾，目為之眩」。夫腦不滿者，血少也。因腦不滿而貧血，則耳鳴、頭目傾眩即連帶而來，其劇者能使肢體痿廢不言可知。是西人腦貧血可致痿廢之說原與《內經》相符也。然西醫論痿廢之由，知因腦中貧血，而《內經》更推腦中貧血之由，知因上氣不足。夫上氣者何？胸中大氣也（亦名宗氣）。其氣能主宰全身，斡旋腦部，流通血脈。彼腦充血者，因肝胃氣逆，挾血上衝，原於此氣無關，至腦貧血者，實因胸中大氣虛損，不能助血上升也。是以欲治此證者，當以補氣之藥為主，以養血之藥為輔，而以通活經絡之藥為使也。爰本此義擬方於下。

【乾頹湯】

治肢體痿廢，或偏枯，脈象極微細無力者。



生箭耆（五兩）、當歸（一兩）、甘枸杞果（一兩）、淨杭莢肉（一兩）、生滴乳香（三錢）、生明沒藥（三錢）、真鹿角膠（六錢搗碎）。

先將黃耆煎十餘沸，去渣。再將當歸、枸杞、莢肉、乳香、沒藥入湯同煎十餘沸，去渣。入鹿角膠末融化取湯兩大盞，分兩次溫飲下。

方中之義，重用黃耆以升補胸中大氣，且能助氣上升，上達腦中，而血液亦可隨氣上注。惟其副作用能外透肌表，具有宣散之性，去渣重煎，則其宣散之性減，專於補氣升氣矣。當歸為生血之主藥，與黃耆並用，古名補血湯，因氣旺血自易生，而黃耆得當歸之濡潤，又不至燥熱也。莢肉性善補肝，枸杞性善補腎，肝腎充足，元氣必然壯旺。元氣者，胸中大氣之根也（元氣為祖氣，大氣為宗氣，先祖而後宗，故宗氣以元氣為根，一先天一後天也）。且肝腎充足則自脊上達之督脈必然流通，督脈者又腦髓神經之根也。且二藥皆汁漿稠潤，又善贊助當歸生血也。用乳香、沒藥者，因二藥善開血痺，血痺開則痿廢者久瘵之經絡自流通矣。用鹿角膠者，誠以腦既貧血，其腦髓亦必空虛，鹿角其所熬之膠善補腦髓，腦髓足則腦中貧血之病自易愈也。此方服數十劑後身體漸漸強壯，而痿廢仍不愈者，可繼服後方。

【補腦振痿湯】

治肢體痿廢偏枯，脈象極微細無力，服藥久不愈者。

生箭耆（二兩）、當歸（八錢）、龍眼肉（八錢）、杭莢肉（五錢）、胡桃肉（五錢）、蟪蟲（三枚大者）、地龍（三錢去淨土）、生乳香（三錢）、生沒藥（三錢）、鹿角膠（六錢）、制馬錢子末（三分）。

共藥十一味，將前九味煎湯兩盅半，去渣，將鹿角膠入湯內融化，分兩次送服。制馬錢子末一分五厘。此方於前方之藥獨少枸杞，因胡桃肉可代枸杞補腎，且有強健筋骨之效也。又嘗閱《滬濱醫報》，謂腦中血管及神經之斷者，地龍能續之。愚則謂必輔以蟪蟲，方有此效。蓋蚯蚓（即地龍）善引，蟪蟲善接（斷之能自接），二藥並用能將血管神經之斷者引而接之，是以方中又加此二味也。加制馬錢子者，以其能觸動神經使靈活也。此方與前方若服之覺熱者，皆可酌加天花粉、天冬各數錢。

【附案】

天津特別三區三號路於遇順，年過四旬，自覺呼吸不順，胸中滿悶，言語動作皆漸覺不利，頭目昏沉，時作眩暈。延醫治療，投以開胸理氣之品，則四肢遽然痿廢。再延他醫，改用補劑而仍兼用開氣之品，服後痿廢加劇，言語竟不能發聲。愚診視其脈象沉微，右部尤不任循按，知其胸中大氣及中焦脾胃之氣皆虛陷也。於斯投以拙擬升陷湯加白朮、當歸各三錢。服兩劑，諸病似皆稍愈，而脈象仍如舊。因將耆、朮、當歸、知母各加倍，升麻改用錢半，又加黨參、天冬各六錢，連服三劑，口可出聲而仍不能言，肢體稍能運動而不能步履，脈象較前有起

色似堪循按。因但將黃耆加重至四兩，又加天花粉八錢，先用水六大盅將黃耆煎透，去渣，再入他藥，煎取清湯兩大盅，分兩次服下，又連服三劑，勉強可作言語，然恆不成句，人扶之可以移步。遂改用乾頹湯，惟黃耆仍用四兩，服過十劑，脈搏又較前有力，步履雖仍需人，而起臥可自如矣，言語亦稍能達意，其說不真之句，間可執筆寫出，從前之頭目昏沉眩暈者，至斯亦見輕。俾繼服補腦振痿湯，囑其若服之順利，可多多服之，當有脫然痊愈之一日也。

按：此證其胸滿悶之時，正因其呼吸不順也。其呼吸之所以不順，因胸中大氣及中焦脾胃之氣皆虛而下陷也。醫者竟投以開破之藥，是以病遽加重。至再延他醫，所用之藥補多開少，而又加重者，因氣分當虛極之時，補氣之藥難為功，破氣之藥易生弊也。愚向治大氣下陷證，病人恆自覺滿悶，其實非滿悶，實短氣也，臨證者細細考究，庶無差誤。

論心病治法

心者，血脈循環之樞機也。心房一動則周身之脈一動，是以心機亢進，脈象即大而有力，或脈搏更甚數；心臟麻痺，脈象即細而無力，或脈搏更甚遲。是脈不得其平，大抵由心機亢進與心臟麻痺而來也。於以知心之病雖多端，實可分心機亢進、心臟麻痺為二大綱。

今試先論心機亢進之病，有因外感之熱熾盛於陽明胃府之中，上蒸心臟，致心機亢進者，其脈象洪而有力，或脈搏加數，可用大劑白虎湯以清其胃，或更兼腸有燥糞，大便不通者，酌用大、小承氣湯以滌其腸，則熱由下瀉，心機之亢進者自得其平矣。

有下焦陰分虛損，不能與上焦陽分相維繫，其心中之君火恆至浮越妄動，以致心機亢進者，其人常苦眩暈，或頭疼、目脹、耳鳴，其脈象上盛下虛，或搖搖無根，至數加數，宜治以加味左歸飲。方用大熟地、大生地、生懷山藥各六錢，甘枸杞、懷牛膝、生龍骨、生牡蠣各五錢，淨萸肉三錢，雲苓片一錢。此壯水之源以制浮游之火，心機之亢者自歸於和平矣。

有心體之陽素旺，其胃腑又積有實熱，復上升以助之，以致心機亢進者，其人脈雖有力，而脈搏不數，五心恆作灼熱，宜治以鹹寒之品（《內經》謂熱淫於內治以鹹寒），若朴硝、太陰玄精石及西藥硫苦皆為對證之藥（每服少許日服三次，久久自愈）。蓋心體屬火，味之鹹者屬水，投以鹹寒之品，是以寒勝熱、水

勝火也。人之元神藏於腦，人之識神發於心。識神者，思慮之神也，人常思慮，其心必多熱，以人之神明屬陽，思慮多者，其神之陽常常由心發露，遂致心機因熱亢進，其人恆多迷惑，其脈多現滑實之象，因其思慮所生之熱恆與痰涎互相膠漆，是以其脈滑而有力也，可用大承氣湯（厚朴宜少用），以清熱降痰，再加赭石（生赭石兩半，軋細同煎）、甘遂（甘遂一錢研細，調藥湯中服）以助其清熱降痰之力。藥性雖近猛烈，實能穩建奇功，而屢試屢效也。

有心機亢進之甚者，其鼓血上行之力甚大，能使腦部之血管至於破裂，《內經》所謂「血之與氣並走於上之大厥也」，亦即西人所謂腦充血之險證也。推此證之原因，實由肝木之氣過升，肺金之氣又失於肅降，則金不制木，肝木之橫姿，遂上千心臟，以致心機亢進，若更兼衝氣上衝，其脈象之弦硬有力更迥異乎尋常矣。當此證之初露朕兆時，必先腦中作疼，或間覺眩暈，或微覺半身不利，或肢體有麻木之處，宜思患預防，當治以清肺、鎮肝、斂衝之劑，更重用引血下行之藥輔之，連服十餘劑或數十劑，其脈象漸變柔和，自無意外之患。向因此證方書無相當之治法，曾擬得建瓴湯一方，屢次用之皆效，即不能治之於預，其人忽然昏倒，須臾能自甦醒者，大抵腦中血管未甚破裂，急服此湯，皆可保其性命。連服數劑，其頭之疼者可以痊愈，即腦中血管不復充血，其從前少有破裂之處亦可自愈，而其肢體之痿廢者亦可徐徐見效。此方原用鐵鏞水煎藥，若刮取鐵鏞數錢，或多至兩許，與藥同煎服更佳。

有非心機亢進而有若心機亢進者，怔忡之證是也。心之本體，原長發動以營運血脈，然無病之人初不覺其動也，惟患怔忡者則時覺心中跳動不安。蓋人心中之神明原以心中之氣血為憑根據，有時其氣血過於虛損，致神明失其憑根據，雖心機之動照常，原分毫未嘗亢進，而神明恆若不任其震撼者，此其脈象多微細，或脈搏兼數，宜用山萸肉、酸棗仁、懷山藥諸藥品以保合其氣；龍眼肉、熟地黃、柏子仁諸藥以滋養其血；更宜用生龍骨、牡蠣、硃砂（研細送服）諸藥，以鎮安其神明。氣分虛甚者可加人參，其血分虛而且熱者可加生地黃。

有因心體腫脹，或有瘀滯，其心房之門戶變為窄小，血之出入致有激盪之力，而心遂因之覺動者，此似心機亢進而亦非心機亢進也。其脈恆為澀象，或更兼遲，宜治以拙擬活絡效靈丹（方載三期第四卷，係當歸、丹參、乳香、沒藥各五錢）加生懷山藥、龍眼肉各一兩，共煎湯服，或用節菖蒲三兩，遠志二兩，共為細末，每服二錢，紅糖沖水送下，日服三次，久當自愈。因菖蒲善開心竅，遠志善化瘀滯（因其含有稀鹽酸），且二藥並用實善調補心臟，而送以紅糖水者，亦所以助其血脈流通也。

至心臟麻痺之原因，亦有多端，治法亦因之各異，如傷寒溫病之白虎湯證，其脈皆洪大有力也，若不即時投以白虎湯，脈洪大有力之極，又可漸變為細小無力，此乃由心機亢進而轉為心臟麻痺，病候至此，極為危險，宜急投以大劑白虎加人參湯，將方中人參加倍，煎湯一大碗，分數次溫飲下，使藥力相繼不斷，一

日連服二劑，庶可挽回。蓋外感之熱，傳入陽明，其熱實脈虛者，原宜治以白虎加人參湯（是以傷寒汗吐下後用白虎湯時皆加人參），然其脈非由實轉虛也。至其脈由實轉虛，是其心臟為熱所傷而麻痺，已成壞證，故用白虎加人參湯時宜將人參加倍，助其心脈之跳動，即可愈其心臟之麻痺也。至西藥斯獨落仿斯實為強壯心臟之良藥，原為實芟答裡斯之代用品，其性不但能強心臟，且善治臟腑炎證，凡實芟答裡斯所主之證皆能治之，而其性又和平易用，以治心臟之因熱麻痺者，誠為至良之藥。

有心臟本體之陽薄弱，更兼胃中積有寒飲，溢於膈上，凌逼心臟之陽，不能用事，其心臟漸欲麻痺，脈象異常微細，脈搏異常遲緩者，宜治以拙擬理飲湯（方載三期第三卷，係乾薑五錢，於白朮四錢，桂枝尖、茯苓片、炙甘草各二錢，生杭芍、廣橘紅、川厚朴各錢半，病劇者加黃耆三錢），連服十餘劑，寒飲消除淨盡，心臟之陽自復其初，脈之微弱遲緩者亦自復其常矣（此證間有心中覺熱、或周身發熱、或耳鳴欲聾之種種反應像，須兼看理飲湯後所載治癒諸案，臨證診斷，自無差誤）。

有心臟為傳染之毒菌充塞以至於麻痺者，霍亂證之六脈皆閉者是也。治此證者，宜治其心臟之麻痺，更宜治其心臟之所以麻痺，則興奮心臟之藥，自當與掃除毒菌之藥並用，如拙擬之急救回生丹、衛生防疫寶丹是也（二方皆載於第六卷論霍亂治法篇中）。此二方中用樟腦所升之冰片，是興奮心臟以除其麻痺也。二

方中皆有硃砂、薄荷冰，是掃除毒菌以治心臟之所以麻痺也。是以無論霍亂之因涼因熱，投之皆可奏效也（急救回生丹藥性微涼，以治因熱之霍亂尤效，至衛生防疫寶丹其性溫用涼，無論病因涼熱用之皆有捷效）。

有心中神明不得寧靜，有若失其憑根據，而常驚悸者，此其現象若與心臟麻痺相反，若投以西藥麻醉之品，亦可取效於一時，而究其原因，實亦由心體虛弱所致，惟投以強心之劑，乃為根本之治法。當細審其脈，若數而兼滑者，當係心血虛而兼熱，宜用龍眼肉、熟地黃諸藥補其虛，生地黃、玄參諸藥瀉其熱，再用生龍骨、牡蠣以保合其神明，鎮靖其魂魄，其驚悸自除矣。其脈微弱無力者，當係心氣虛而莫支，宜用參、朮、耆諸藥以補其氣，兼用生地黃、玄參諸滋陰藥以防其因補生熱，更用酸棗仁、山萸肉以凝固其神明，收斂其氣化，其治法與前條脈弱怔忡者大略相同。特脈弱怔忡者，心機之發動尤能照常，而此則發動力微，而心之本體又不時顫動，猶人之力小任重而身顫也，其心臟弱似較怔忡者尤甚矣。

有其驚悸恆發於夜間，每當交睫甫睡之時，其心中即驚悸而醒，此多因心下停有痰飲，心臟屬火，痰飲屬水，火畏水迫，故作驚悸也，宜清痰之藥與養心之藥並用，方用二陳湯加當歸、菖蒲、遠志，煎湯送服硃砂細末三分。有熱者加玄參數錢，自能安枕穩睡而無驚悸矣。



論肺病治法（附：清金二妙丹、清肺三妙丹、治肺病便方）

肺病西人名為都比迦力，謂肺臟生有堅粒如砂，久則潰爛相連，即東人所謂肺結核，方書所謂肺癰也。蓋中醫不能剖解，當其初結核時，實無從考驗，迨至三期之時，所結之核已潰爛相連，至於咳吐膿血，乃始知為肺上生癰。豈知肺胞之上焉能生紅腫高大之癰，不過為肺體之潰爛而已。然肺病至於肺體潰爛，西人早諉為不治，而古方書各有治法，用之亦恒獲效，其故何哉？蓋以西人之治病，惟治局部，但知理其標，而不知清其本，本既不清，標亦終歸不治耳。愚臨證四十餘年，治癒肺病甚夥，即西人諉為不治者，亦恒隨手奏效，此無他，亦惟詳審病因，而務為探本窮源之治法耳，故今者論治肺病，不以西人之三期立論，而以病因立論，爰細列其條目於下。

肺病之因，有內傷外感之殊，然無論內傷外感，大抵皆有發熱之證，而後釀成肺病，誠以肺為嬌臟，且屬金，最畏火刑故也。有如肺主皮毛，外感風邪，有時自皮毛襲入肺臟，阻塞氣化，即暗生內熱，而皮毛為風邪所束，不能由皮毛排出炭氣，則肺中不但生熱，而且釀毒，肺病即由此起點。其初起之時，或時時咳嗽，吐痰多有水泡，或周身多有疼處，舌有白苔，或時覺心中發熱，其脈象恆浮而有力，可先用西藥阿斯匹林一瓦，白糖沖水送下，俾周身得汗，繼用玄參、天花粉各五錢，金銀花、川貝母各三錢，硼砂八分（研細分兩次送服），粉甘草細末三錢（分兩次送服），煎湯服。再每日用阿斯匹林一瓦，分三次服，白糖水送

下，勿令出汗，此三次中或一次微有汗者亦佳。如此服數日，熱不退者，可於湯藥中加生石膏七八錢。若不用石膏，或用湯藥送服西藥安知歇貌林半瓦亦可。

若此時不治，病浸加劇，吐痰色白而粘，或帶腥臭，此時亦可用阿斯匹林汗之。然恐其身體虛弱，不堪發汗，宜用生懷山藥一兩或七八錢煮作茶湯，送服阿斯匹林半瓦，俾服後微似有汗即可，仍用前湯藥送服粉甘草細末、三七細末各一錢，煎渣時再送服二藥如前。仍兼用阿斯匹林三分之一瓦（合中量八厘八毫），白糖沖水送下，或生懷山藥細末四五錢煮茶湯送下，日兩次。其嗽不止者，可用山藥所煮茶湯送服川貝細末三錢，或用西藥幾阿蘇四瓦，薄荷冰半瓦，調以粉甘草細末，以適可為丸為度（幾阿蘇是稀樹脂，摻以甘草末始可為丸）為丸桐子大，每服三丸，日再服，此藥不但能止嗽，且善治肺結核（薄荷冰味宜辛涼，若其味但辛辣而不涼者，可用好朱砂錢半代之）。至阿斯匹林，亦善治肺結核，而兼能發汗，且能使脈之數者變為和緩，是以愚喜用之，惟其人常自出汗者不宜服耳。至山藥之性亦最善養肺，以其含蛋白質甚多也。然忌炒，炒之則枯其蛋白質矣，煮作茶湯，其味微酸，欲其適口，可少調以白糖或柿霜皆可。若不欲喫茶湯者，可用生山藥片，將其份量加倍，煮取清湯，以代茶湯飲之。

若當此時不治，以後病又加劇，時時咳吐膿血，此肺病已至三期，非尋常藥餌所能療矣。必用中藥極貴重之品，若徐靈胎所謂用清涼之藥以清其火，滋潤之藥以養其血，滑降之藥以祛其痰，芳香之藥以通其氣，更以珠黃之藥解其毒，金

石之藥填其空，兼數法而行之，屢試必效。又邑中曾鈞堂孝廉，精醫術，嘗告愚曰「治肺癰惟林屋山人《外科證治全生集》中犀黃丸最效，余用之數十年，治癒肺癰甚多」，後愚至奉天，遇肺癰咳吐膿血服他藥不愈者，俾於服湯藥之外兼服犀黃丸，果如曾君所言，效驗異常。三期第二卷清涼華蓋飲後有案，可參觀。至所服湯藥，宜用前方加牛蒡子、栝蒌仁各數錢以瀉其膿，再送服三七細末二錢以止其血。至於犀黃丸配製及服法，皆按原書，茲不贅。

有外感伏邪伏膈膜之下，久而入胃，其熱上熏肺臟，以致成肺病者，其咳嗽吐痰始則稠粘，繼則腥臭，其舌苔或白而微黃，其心中燥熱，頭目昏眩，脈象滑實，多右勝於左。宜用生石膏一兩，玄參、花粉、生懷山藥各六錢，知母、牛蒡子各三錢，煎湯，送服甘草、三七細末如前。再用阿斯匹林三分之一瓦，白糖水送服，日兩次。若其熱不退，其大便不滑瀉者，石膏可以加重。曾治奉天大西邊門南徐姓叟肺病，其脈弦長有力，迥異尋常，每劑藥中用生石膏四兩，連服數劑，脈始柔和。由斯觀之，藥以勝病為準，其份量輕重，不可預為限量也。若其脈雖有力而至數數者，可於前方中石膏改為兩半，知母改為六錢，再加潞黨參四錢。蓋脈數者其陰分必虛，石膏、知母諸藥雖能退熱，而滋陰仍所非長，輔之以參，是仿白虎加人參湯之義，以滋其真陰不足（涼潤之藥得人參則能滋真陰），而脈之數者可變為和緩也。若已咳嗽吐膿血者，亦宜於服湯藥外兼服犀黃丸。

至於肺病由於內傷，亦非一致，有因脾胃傷損，飲食減少，土虛不能生金，致成肺病者。蓋脾胃虛損之人，多因肝木橫恣，侮克脾土，致胃中飲食不化精液，轉多化痰涎，溢於膈上，粘滯肺葉作咳嗽，久則傷肺，此定理也。且飲食少則虛熱易生，肝中所寄之相火，因肝木橫恣，更挾虛熱而刑肺，於斯上焦恆覺煩熱，吐痰始則粘滯，繼則腥臭，脅下時或作疼，其脈弦而有力，或弦而兼數，重按不實。方用生懷山藥一兩，玄參、沙參、生杭芍、柏子仁炒不去油各四錢，金銀花二錢，煎湯，送服三七細末一錢，西藥百布聖二瓦。湯藥煎渣時，亦如此送服。若至咳吐膿血，亦宜服此方，兼服犀黃丸，或因服犀黃丸，減去三七亦可。至百布聖，則不可減去，以其大有帮助脾胃消化之力也。然亦不必與湯藥同時服，每於飯後遲一句鐘服之更佳。

有因腎陰虧損而致成肺病者。蓋腎與肺為子母之臟，子虛必吸母之氣化以自救，肺之氣化即暗耗，且腎為水臟，水虛不能鎮火，火必妄動而刑金。其人日晚潮熱，咳嗽，懶食，或乾咳無痰，或吐痰腥臭，或兼喘促，其脈細數無力。方用生山藥一兩，大熟地、甘枸杞、柏子仁各五錢，玄參、沙參各四錢，金銀花、川貝各三錢，煎湯送服甘草、三七細末如前。若咳吐膿血者，去熟地，加牛蒡子、萸仁各三錢，亦宜兼服犀黃丸。若服藥後脈之數者不能漸緩，亦可兼服阿斯匹林，日兩次，每次三分之一瓦。蓋阿斯匹林之性既善治肺結核，尤善退熱，無論虛熱實熱，其脈象數者服之，可使其至數漸緩。然實熱服之，汗出則熱退，故可服至

一瓦。若虛熱，不宜出汗，但可解肌，服後或無汗，或微似有汗，方能退熱，故一瓦必須分三次服。若其人多汗者，無論虛熱實熱，皆分毫不宜用。若其人每日出汗者，無論其病因為內傷、外感、虛熱、實熱，皆宜於所服湯藥中加生龍骨、生牡蠣、淨山萸肉各數錢，或研服好硃砂五分，亦可止汗，蓋以汗為心液，硃砂能涼心血，故能止汗也。

有其人素患吐血衄血，陰血傷損，多生內熱，或醫者用藥失宜，強止其血，俾血瘀經絡亦久而生熱，以致成肺病者。其人必心中發悶發熱，或有疼時，廉於飲食，咳嗽短氣，吐痰腥臭，其脈弦硬，或弦而兼數，方用生懷山藥一兩，玄參、天冬各五錢，當歸、生杭芍、乳香、沒藥各三錢，遠志、甘草、生桃仁（桃仁無毒，宜帶皮生用，因其皮紅能活血也，然須明辨其果為桃仁，不可誤用帶皮杏仁）各二錢，煎湯，送服三七細末錢半，煎渣時亦送服錢半。蓋三七之性，不但善止血，且善化瘀血也。若咳吐膿血者，亦宜於服湯藥之外兼服犀黃丸。

此論甫擬成，法庫門生萬澤東見之，謂此論固佳，然《衷中參西錄》三期肺病門，師所擬之清金益氣湯、清金解毒湯二方尤佳，何以未載？愚曰「二方皆有黃耆，東省之人多氣盛，上焦有熱，於黃耆恒不相宜，是以未載」，澤東謂「若其人久服萸仁、杏仁、蘇子、橘紅諸藥以降氣利痰止嗽，致肺氣虛弱，脈象無力者，生常投以清金益氣湯，若兼吐痰腥臭者，投以清金解毒湯，均能隨手奏效。蓋東省之人雖多不宜用黃耆，而經人誤治之證，又恒有宜用黃耆者，然宜生用，

炙用則不相宜耳」。愚聞澤東之言，自知疏漏，爰將兩方詳錄於下以備治肺病者之採用。

【清金益氣湯】

治肺臟虛損，尅羸少氣，勞熱咳嗽，肺痿失音，頻吐痰涎，一切肺金虛損之病，但服潤肺寧嗽之藥不效，

方用生地黃五錢，生黃耆、知母、粉甘草、玄參、沙參、牛蒡子各三錢，川貝二錢。

【清金解毒湯】

治肺臟結核，浸至損爛，咳吐膿血，脈象虛弱者。

方用生黃耆、生滴乳香、生明沒藥、粉甘草、知母、玄參、沙參、牛蒡子各三錢，川貝細末、三七細末各二錢（二末和勻，分兩次另送服）。若其脈象不虛者，宜去黃耆，加金銀花三四錢。

或問「桔梗能引諸藥入肺，是以《金匱》治肺癰有桔梗湯。此論肺病諸方何以皆不用桔梗」？答曰「桔梗原提氣上行之藥，病肺者多苦咳逆上氣，恆與桔梗不相宜，故未敢加入方中。若其人雖病肺而不咳逆上氣者，亦不妨斟酌用之」。

或問「方書治肺癰，恆於其將成未成之際，用皂莢丸或葶藶大棗湯瀉之，將肺中之惡濁瀉去，而後易於調治。二方出自《金匱》，想皆為治肺良方，此論中

皆未言及，豈其方不可採用乎？」答曰「二方之藥性近猛烈，今之病肺者多虛弱，是以不敢輕用，且二方瀉肺，治肺實作喘原是正治。至瀉去惡濁痰涎，以防肺中腐爛，原是兼治之證。其人果肺實作喘且不虛弱者，葶藶大棗湯曾用過數次，均能隨手奏效。皂莢丸實未嘗用，因皂莢性熱，與肺病之熱者不宜也。至欲以瀉濁防腐，似不必用此猛烈之品，若拙擬方中之硼砂、三七及乳香、沒藥，皆化腐生新之妙品也。沉硼砂善治痰厥，曾治痰厥半日不醒，用硼砂四錢，水煮化灌下，吐出稠痰而愈。由斯知硼砂開痰瀉肺之力，固不讓皂莢、葶藶也。所可貴者，瀉肺臟之實，即以清肺金之熱，潤肺金之燥，解肺金之毒（清熱潤燥解毒皆硼砂所長），人但知口中腐爛者漱以硼砂則愈（冰硼散善治口瘡），而不知其治肺中之腐爛亦猶治口中之腐爛也。且拙制有安肺寧嗽丸，方用硼砂、嫩桑葉、兒茶、蘇子、粉甘草各一兩，共為細末，煉蜜為丸，三錢重，早晚各服一丸，治肺鬱痰火作嗽，肺結核作嗽，在奉天醫院用之數年，屢建奇效，此丸藥中實亦硼砂之功居多也」。

或問「古有單用甘草四兩煎湯治肺癰者，今所用治肺病諸方中，其有甘草者皆為末送服，而不以之入煎者何也？」答曰「甘草最善解毒瀉熱，然生用勝於熟用。因生用則其性平，且具有開通之力，拙著四期《衷中參西錄》中甘草解，言之甚詳，熟用則其性溫，實多填補之力，故其解毒瀉熱之力，生勝於熟。夫炙之為熟，水煮之亦為熟，若入湯劑是仍煎熟用矣，不若為末服之之為愈也。且即為

末服，又須審辨，蓋甘草軋細頗難，若軋之不細，而用火炮焦再軋，則生變為熟矣。是以用甘草末者，又宜自監視軋之。再者，愚在奉時曾制有清金二妙丹，方用粉甘草細末二兩，遠志細末一兩，和勻，每服錢半，治肺病勞嗽甚有效驗。肺有熱者，可於每二妙丹一兩中加好硃砂細末二錢，名為清肺三妙丹。以治病肺結核咳嗽不止，亦極有效。然初服三四次時，宜少加阿斯匹林，每次約加四分之一瓦，或五分之一瓦。若汗多，可無加也。

或問「西人謂肺病係杆形之毒菌傳染，故治肺病以消除毒菌為要務，又謂呼吸之空氣不新鮮，易成肺病，故患此病者宜先移居新鮮空氣之中，則病易愈。今論中皆未言及其說豈皆無足取乎？」曰「西人之說原有可取。然數十人同居一處，或獨有一人肺病，其餘數十人皆不病，且即日與肺病者居，仍傳染者少，而不傳染者多，此又作何解也？」古語云「木必先腐，而後蟲生」，推之於人，何莫不然。為其人先有此病因，而後其病乃乘虛而入。愚為嫌西人之說膚淺，故作深一層論法，更研究深一層治法，且亦以西人之說皆印於人之腦中，無煩重為表白也。矧上所用之藥，若西藥之幾阿蘇、阿斯必林、薄荷冰原可消除毒菌，即中藥之朱砂及犀黃丸亦皆消除毒菌之要藥，非於西說概無所取也。

【治肺病便方】

鮮白茅根去皮切碎一大碗，用水兩大碗煎兩沸，候半點鐘，視其茅根不沉水底，再煎至微沸。候須臾茅根皆沉水底，去渣，徐徐當茶溫飲之。



鮮小薊根二兩，銼細，煮兩三沸，徐徐當茶溫飲之，能愈肺病吐膿血者。白蓮藕一斤，切細絲，煮取濃汁一大碗，再用柿霜一兩融化其中，徐徐溫飲之。

以上尋常土物，用之皆能清滅肺病，恆有單用一方，浹辰之間即能治癒肺病者。醫方中有將鮮茅根、鮮小薊根、鮮藕共切碎煮汁飲之，名為三鮮飲，以治因熱吐血者甚效，而以治肺病亦有效，若再調以柿霜更佳。

三期第六卷載有寧嗽定喘飲，方用生懷山藥兩半，煮湯一大碗，再調入甘蔗自然汁一兩，酸石榴自然汁五錢，生雞子黃三個，徐徐飲下，治寒溫病陽明大熱已退，其人或素虛，或在老年，至此益形怯弱，或喘，或嗽，痰涎壅盛，氣息似不足者，此亦尋常服食之物。若去方中雞子黃，加葶薺自然汁一兩，調勻，徐徐溫服，亦治肺病之妙品也，而肺病之咳而兼喘者服之尤宜。

又北沙參細末，每日用豆腐漿送服二錢，上焦發熱者送服三錢，善治肺病及肺勞喘嗽。

又西藥有橄欖油，性善清肺，其味香美，病肺者可以之代香油，或滴七八滴於水中服之亦佳。

飲食宜淡泊，不可過食炮炙濃味及過鹹之物，宜多食菜蔬，若藕、鮮筍、白菜、萊菔、冬瓜，果品若西瓜、梨、桑椹、蘋果、荸薺、甘蔗皆宜。不宜桃、杏。

忌煙酒及一切辛辣之物。又忌一切變味，若糟魚、松花蛋、鹵蝦油、醬豆腐、臭豆腐之類，亦不宜食。

養生家有口念呵、呼、咽、噓、吹、嘻六字以卻臟腑諸病者，肺病者若於服藥之外兼用此法，則為益良多。其法當靜坐時，或睡醒未起之候，將此六字每一字念六遍，其聲極低小，惟己微聞，且念時宜蓄留其氣，徐徐外出，愈緩愈好，每日行兩三次，久久自有效驗。蓋道書有呼氣為補之說，其理甚深，拙撰元氣詮中發明甚詳。西人有深長呼吸法，所以擴胸膈以舒肺氣，此法似與深長呼吸法相近，且著意念此六字，則肺中碳氣呼出者必多，肺病自有易愈之理也。

論肺勞喘嗽治法

肺勞之證，因肺中分支細管多有瘀滯，熱時肺胞鬆容，氣化猶可宜通，故病則覺輕；冷時肺胞緊縮，其痰涎恒益杜塞，故病則加重。此乃肺部之錮疾，自古無必效之方。惟用曼陀蘿熬膏，和以理肺諸藥，則多能治癒。爰將其方詳開於下。

曼陀蘿正開花時，將其全科切碎，榨取原汁四兩，入鍋內熬至若稠米湯，再加入礬砂二兩，熬至融化，再用遠志細末、甘草細末各四兩，生石膏細末六兩，以所熬之膏和之，以適可為丸為度，分作小丸。每服錢半，若不效可多至二錢，白湯送下，一日兩次。久服病可除根。若服之覺熱者，石膏宜加重。

按：曼陀蘿俗名洋金花，譯西文者名為醉仙桃，因其大有麻醉之性也。科高三四尺許，葉大如掌，有有歧、無歧兩種。開花如牽牛稍大，有紅白二色，且其花有單層多層之分。結實大如核桃、有芒刺如包麻實，蒂有託盤如錢，中含細粒如麻仁。李時珍謂服之令人昏昏如醉，可作麻藥。又謂熬水洗脫肛甚效，蓋大有收斂之力也。入藥者以花白且單層者為佳。然其麻醉之力甚大，曾見有以之煎湯飲之傷命者，慎勿多服。

肺臟具闢之機，其闢之機自如，自無肺勞病症。遠志、礬砂最善化肺管之瘀，甘草末服，不經火炙、水煮，亦善宣通肺中氣化，此所以助肺臟之辟也。曼陀蘿膏大有收斂之力，此所以助肺臟之闢也。用石膏者，因曼陀蘿之性甚熱，

石膏能解其熱也。且遠志、甘草、硼砂皆為養肺之品，能多生津液，融化痰涎，俾肺臟闡辟之機靈活無滯，則肺勞之喘嗽自愈也。

同莊張島仙先生，邑之名孝廉也。其任東安教諭時，有門生患肺勞，先生教以念呵、呼、呬、噓、吹、嘻，每字六遍，日兩次，兩月而肺勞愈，愚由此知此法可貴。養生家謂此六字可分主臟腑之病，愚則謂不必如此分析，總之不外呼氣為補之理。因人念此六字皆徐徐呼氣外出，其心腎可交也，心腎交久則元氣壯旺，自能斡旋肺中氣化，而肺勞可除矣。欲肺勞速愈者，正宜兼用此法。

讀章太炎氏論肺病治法書後

讀本志（山西醫學雜誌），二十一期，章太炎先生論肺炎治法，精微透徹，古今中外融會為一，洵為醫學大家。其中有謂咳嗽發熱，未見危候，數日身忽壯熱，加以喘息，脈反微弱，直視撮空，喪其神守者，此肺雖臏滿，而脈反更垮落，血痹不利，心臟將絕。西人治此證，用強心劑數服，神清喘止，其熱漸退而愈，而未明言所用強心之劑，果為何藥。

按：此乃肺脹兼心痹之證，若用中藥，擬用白虎加人參湯。白虎湯以治肺脹，加參心痹。若用西藥，當用實芞答利斯及斯獨落仿斯。二藥皆為強心之藥，而與他強心之藥不同。蓋凡強心之藥，能助心之跳動有力，即能助心之跳動加速，獨此二藥又善治心機亢進，使脈之動速者轉為和緩。又凡強心之藥多熱，而此二藥能解熱，故又善治肺炎，肺臟炎愈而喘脹自愈也。至於傷寒溫病，熱入陽明，脈象洪實，醫者不知急用白虎湯或白虎加人參湯以解其熱，迨至熱極傷心，脈象由洪實而微弱，或兼數至七八至，神識昏憤者，急投以白虎加人參湯，再將方中人參加重，湯成後調入生雞子黃數枚，此正治之法也。西醫則治以實芞答利斯及斯獨落仿斯，亦為正治之法，而用之皆不易奏效，因其病至極危，心臟將絕也。擬將此中西之藥並用，庶可挽回此至重之證也。然此猶虛為擬議，而未嘗實驗於臨證。

【附錄】實芞答利斯及斯獨落仿斯用法

實芟答利斯葉之用量，一次服十分瓦之二（一瓦分為十分用其二分），若用其丁兒（酒也），一次可服半瓦。斯獨落仿斯丁兒之用量，亦一次服半瓦，皆宜一日服三次。實芟答利斯之性稍烈於斯獨落仿斯，若病輕可緩治者，可用斯獨落仿斯為實芟答利斯之代用品。若病重宜急治者，可將二藥按其原定分量作一劑並用，方能有效。斯獨落仿斯不宜生用，其製品有斯獨落仿斯精，其用量極少，不如用其丁兒穩妥。

總論喘證治法

俗語云喘無善證，誠以喘證無論內傷外感，皆為緊要之證也。然欲究喘之病因，當先明呼吸之樞機何臟司之。喉為氣管，內通於肺，人之所共知也，而吸氣之人，實不僅入肺，並能入心，入肝，入衝任，以及於腎。何以言之？氣管之正支入肺，其分支實下通於心，更透膈而下通於肝（觀肺心肝一係相連可知），由肝而下更與衝任相連以通於腎。倘曰不然，何以婦人之妊子者，母呼而子亦呼，母吸而子亦吸乎？呼吸之氣若不由氣管分支通於肝，下及於衝任與腎，何以子之臍帶其根蒂結於衝任之間，能以臍承母之呼吸之氣，而隨母呼吸乎？是知肺者發動呼吸之機關也。喘之為病，《本經》名為吐吸，因吸入之氣內不能容，而速吐出也。其不容納之故，有由於肺者，有由於肝腎者。試先以由於肝腎者言之。

腎主閉藏，亦主翕納，原所以統攝下焦之氣化，兼以翕納呼吸之氣，使之息歸根也。有時腎虛不能統攝其氣化，致其氣化膨脹於衝任之間，轉挾衝氣上衝，而為腎行氣之肝木（方書謂肝行腎之氣），至此不能疏通腎氣下行，亦轉隨之上衝，是以吸入之氣未受下焦之翕納，而轉受下焦之衝激，此乃喘之所由來，方書所謂腎虛不納氣也。當治以滋陰補腎之品，而佐以生肝血、鎮肝氣及鎮衝、降逆之藥。方用大懷熟地、生懷山藥各一兩，生杭芍、柏子仁、甘枸杞、淨萸肉、生赭石細末各五錢，蘇子、甘草各二錢。熱多者可加玄參數錢。汗多者可加生龍骨、生牡蠣各數錢。

有腎虛不納氣，更兼元氣虛甚，不能固攝，而欲上脫者，其喘逆之狀恆較但腎虛者尤甚，宜於前方中去芍藥、甘草，加野臺參五錢，萸肉改用一兩，赭石改用八錢。服一劑喘見輕，心中覺熱者，可酌加天冬數錢。或用拙擬參赭鎮氣湯亦可（方載三期第二卷，係野臺參、生杭芍各四錢，生赭石、生龍骨、生牡蠣、淨萸肉各六錢，生懷山藥、生芡實各五錢，蘇子二錢）。

有因猝然暴怒，激動肝氣、肝火，更挾衝氣上衝，胃氣上逆，迫擠肺之吸氣不能下行作喘者，方用川棟子、生杭芍、生赭石細末各六錢，厚朴、清夏、乳香、沒藥、龍膽草、桂枝尖、蘇子、甘草各二錢，磨取鐵鏽濃水煎服。

以上三項作喘之病因，由於肝腎者也，而其脈象則有區別。陰虛不納氣者，脈多細數；陰虛更兼元氣欲脫者，脈多上盛下虛；肝火肝氣挾衝氣胃氣上衝者，脈多硬弦而長，審脈辨證，自無差誤也。

至喘之由於肺者，因肺病不能容納吸入之氣，其證原有內傷外感之殊。試先論肺不納氣之由於內傷者。一闔一辟，呼吸自然之機關也。至問其所以能呼吸者，固賴胸中大氣（亦名宗氣）為之斡旋，又賴肺葉具有活潑機能，以遂其闔辟之用。乃有時肺臟受病，肺葉之闔辟活潑者變為易闔難辟，而成緊縮之性。暑熱之時其緊數稍緩，猶可不喘，一經寒涼，則喘立作矣，此肺勞之證，多發於寒涼之時也。宜用生懷山藥軋細，每用兩許煮作粥，調以蔗白糖，送服西藥百布聖七八分。蓋肺葉緊縮者，以其中津液減少，血脈凝滯也。有山藥蔗糖以潤之（山藥含蛋白質



甚多，故善潤），百布聖以化之（百布聖為小豬小牛之胃液製成，故善化），久當自愈。其有頑痰過盛者，可再用礪砂細末二分，與百布聖同送服。若外治，灸其肺腧穴亦有效，可與內治之方並用。若無西藥百布聖處，可代以生雞內金細末三分，其化痰之力較百布聖尤強。

有痰積胃中，更溢於膈上，浸入肺中，而作喘者，古人恆用葶藶大棗瀉肺湯或十棗湯下之，此乃治標之方，究非探本窮源之治也。拙擬有理痰湯，載於三期第三卷（方係生芡實一兩，清半夏四錢，黑脂麻三錢，柏子仁、生杭芍、茯苓片、陳皮各二錢），連服十餘劑，則此證之標本皆清矣。至方中之義，原方下論之甚詳，茲不贅。若其充塞於胸膈胃府之間，不為痰而為飲，且為寒飲者（飲有寒熱，熱飲脈滑，其人多有神經病，寒飲脈弦細，概言飲為寒者，非是），其人或有時喘，有時不喘，或感受寒涼病即反覆者，此上焦之陽分虛也，宜治以《金匱》苓桂朮甘湯，加乾薑三錢，厚朴、陳皮各錢半，俾其藥之熱力能勝其寒，其飲自化而下行，從水道出矣。又有不但上焦之陽分甚虛，並其氣分亦甚虛，致寒飲充塞於胸中作喘者，其脈不但弦細，且甚微弱，宜於前方中加生箭耆五錢，方中乾薑改用五錢。壬戌秋，臺灣醫士嚴坤榮為其友問二十六年寒飲結胸，時發大喘，極畏寒涼，曾為開去此方（方中生箭耆用一兩，乾薑用八錢，非極虛寒之證不可用此重劑），連服十餘劑痊愈。方中所以重用黃耆者，以其能補益胸中大氣，俾大氣壯旺，自能運化寒飲下行也。上所論三則，皆內傷喘證之由於肺者也。

至外感之喘證，大抵皆由於肺，而其治法，實因證而各有所宜。人身之外表，衛氣主之，衛氣本於胸中大氣，又因肺主皮毛，與肺臟亦有密切之關係。有時外表為風寒所束，衛氣不能流通周身，以致胸中大氣無所輸泄，驟生膨脹之力，肺懸胸中，因受其排擠而作喘。又因肺與衛氣關係密切，衛氣鬱而肺氣必鬱，亦可作喘，此《傷寒論》麻黃湯所主之證，多有兼喘者也。然用麻黃湯時，宜加知母數錢，汗後方無不解之虞，至溫病亦有初得作喘者，宜治以薄荷葉、牛蒡子各三錢，生石膏細末六錢，甘草二錢，或用麻杏甘石湯方亦可，然石膏萬勿用煨，而其份量又宜數倍於麻黃（石膏可用至一兩，麻黃治此證多用不過二錢）。此二證之喘同而用藥迥異者，因傷寒之脈浮緊，溫病之脈洪滑也。

有外感之風寒內侵，與胸間之水氣凝滯，上迫肺氣作喘者，此《傷寒論》小青龍湯證也。當必效《金匱》之小青龍加石膏法，且必加生石膏至兩許，用之方效。又此方加減定例，喘者去麻黃，加杏仁，而愚用此方治喘時，恆加杏仁，而仍用麻黃一錢。其脈甚虛者，又宜加野臺參數錢。三期第五卷載有更定後世所用小青龍湯份量，可參觀也。又第五卷中載有拙擬從龍湯方，治服小青龍湯後喘愈而仍反覆者，方係用生龍骨、生牡蠣各一兩，杭芍五錢，清半夏、蘇子各四錢，牛蒡子三錢，熱者酌加生石膏數錢，用之曾屢次奏效。上所論兩則治外感作喘之大略也。

有其人素有勞疾喘嗽，少受外感即發，此乃內傷外感相並作喘之證也，宜治以拙擬加味越婢加半夏湯（方載三期五卷，係麻黃二錢，生懷山藥、生石膏各五錢，寸冬四錢，清半夏、牛蒡子、玄參各三錢、甘草錢半，大棗三枚，生薑三片）。因其內傷外感相並作喘，故所用之藥亦內傷外感並用。

特是上所論之喘，其病因雖有內傷、外感、在肝腎、在肺之殊，約皆不能納氣而為吸氣難，即《本經》所謂吐吸也。乃有其喘不覺吸氣難而轉覺呼氣難者，其病由於胸中大氣虛而下陷，不能鼓動肺臟以行其呼吸，其人不得不努力呼吸以自救，其呼吸迫促之形狀有似乎喘，而實與不納氣之喘有天淵之分。設或辨證不清，見其作喘，復投以降氣納氣之藥，則凶危立見矣。然欲辨此證不難也，蓋不納氣之喘，其劇者必然肩息（肩上聳也）；大氣下陷之喘，縱呼吸有聲，必不肩息，而其肩益下垂，即此二證之脈論，亦迥不同，不納氣作喘者，其脈多數，或尺弱寸強；大氣下陷之喘，其脈多遲而無力，尺脈或略勝於寸脈。察其狀而審其脈，辨之固百不失一也。其治法當用拙擬升陷湯，以升補其胸中大氣，其喘自愈，方載第一卷大氣詮中，並詳載其隨證宜加之藥。

有大氣下陷作喘，又兼陰虛不納氣作喘者，其呼吸皆覺困難，益自強為呼吸而呈喘狀，其脈象微弱無力，或脈搏略數，或背發緊而身心微有灼熱，宜治以生懷山藥一兩，玄參、甘枸杞各六錢，生箭耆四錢，知母、桂枝尖各二錢，煎湯服。

方中不用桔梗、升、柴者，恐與陰虛不納氣有礙也。上二證之喘，同中有異，三期第四卷升陷湯後皆有驗案可參觀也。

有肝氣膽火挾衝胃之氣上衝作喘，其上衝之極至排擠胸中大氣下陷，其喘又頓止，並呼吸全無，須與忽又作喘，而如斯循環不已者，此乃喘證之至奇者也。曾治一少婦，因夫妻反目得此證，用桂枝尖四錢，恐其性熱，佐以帶心寸冬三錢，煎湯服下，即愈。因讀《本經》桂枝能升大氣兼能降逆氣，用之果效如影響。夫以桂枝一物之微，而升陷降逆兩擅其功，此誠天之生斯使獨也。然非開天闢地之聖神發之，其孰能知之。原案載三期第二卷參楮鎮氣湯下，可參觀。

論李東垣補中益氣湯所治之喘證

愚初讀方書時，至東垣補中益氣湯謂可治喘證，心甚疑之。夫喘者，氣上逆也，《本經》謂之吐吸，以其吸入之氣不能下行，甫吸入而即上逆吐出也。氣既苦於上逆，猶可以升麻、柴胡提之乎。乃以此疑義遍質所識宿醫，大抵皆言此方可治氣分虛者作喘，然氣實作喘者苦於氣上逆，氣虛作喘者亦苦於氣上逆，因其氣虛用參、朮、耆以補其氣則可，何為佐以升柴耶？如此再進一步質問，則無有能答者矣。迨後詳讀《內經》，且臨證既久，知胸中有積貯之氣為肺臟鬪辟之原動力，即《靈樞》《五味篇》所謂「搏而不行積於胸中」之大氣也，亦即《邪客篇》所謂「積於胸中，出於喉嚨，以貫心脈」之宗氣也。此氣一虛，肺臟之鬪辟原動力缺乏，即覺呼吸不利。若更虛而下陷，鬪辟之原動力將欲停止，其人必努力呼吸以自救。為其呼吸努力，其迫促之形有似乎喘，而實與氣逆之喘有天淵之分。若審證不確，而誤投以納氣定喘之藥，則凶危立見矣。故治此等證者，當升補其胸中大氣，至降氣、納氣之藥，分毫不可誤投。若投以補中益氣湯，雖不能十分吻合，其喘必然見輕，審是則補中益氣湯所主之喘，確乎為此等喘證無疑也。蓋東垣平素注重脾胃，是以但知有中氣下陷，而不知有大氣下陷，故於大氣下陷證，亦以補中益氣湯治之。幸方中之藥多半可治大氣下陷，所以投之亦可奏效。所可異者，東垣縱不知補中益氣湯所治之喘為大氣下陷，亦必知與氣逆作喘者有異，而竟不一為分疏，獨不慮貽誤後人，遇氣逆不降之真喘亦投以補中益氣湯乎？

愚有鑑於此，所以拙著《衷中參西錄》三期第四卷特立大氣下陷門，而制有升陷湯一方（見第一卷大氣詮），以升補下陷之大氣，使仍還胸中。凡因大氣下陷所出種種之險證，經愚治癒者數十則，附載於後。其中因大氣下陷而喘者，曾有數案，對與氣逆作喘不同之處，極為詳細辨明，若將其案細細參閱，臨證時自無差誤。

論胃病噎膈（即胃癌）治法及反胃治法（附：變質化瘀丸）

噎膈之證，方書有謂賁門枯乾者，有謂衝氣上衝者，有謂痰瘀者，有謂血瘀者。愚向謂此證係中氣衰弱，不能撐懸賁門，以致賁門縮如藕孔（賁門與大小腸一氣貫通，視其大便若羊矢，其賁門、大小腸皆縮小可知），痰涎遂易於壅滯，因痰涎壅滯衝氣更易於上衝，所以不能受食。向曾擬參赭培氣湯一方，仿仲景旋復代赭石湯之義，重用赭石至八錢，以開胃鎮衝，即以下通大便（此證大便多艱），而即用人參以駕馭之，俾氣化旺而流通，自能撐懸賁門使之寬展，又佐以半夏、知母、當歸、天冬諸藥，以降胃、利痰、潤燥、生津，用之屢見效驗。迨用其方既久，效者與不效者參半，又有初用其方治癒，及病又反覆再服其方不效者。再三躊躇，不得其解，亦以為千古難治之證，原不能必其痊愈也。後治一叟，年近七旬，住院月餘，已能飲食，而終覺不脫然。迨其回家年餘，仍以舊證病故，瀕危時吐出膿血若干，乃恍悟從前之不能脫然者，係賁門有瘀血腫脹也，當時若方中加破血之藥，或能痊愈。蓋愚於瘀血致噎之證，素日未有經驗，遂至忽不留心。今既自咎從前之疏忽，遂於此證細加研究，而於瘀血致噎之理，尤精採前哲及時賢之說以發明之，庶再遇此證，務拔除其病根，不使愈後再反復也。

吳鞠通曰「噎食之為病，陰衰於下，陽結於上。有陰衰而累及陽結者，治在陰衰。有陽結而累及陰衰者，治在陽結。其得病之由，多由怒鬱日久，致令肝氣橫逆，或酒客中虛，土衰木旺。木乘脾則下泄或噯氣，下泄久則陰衰，噯氣久則

陽結，噯氣不除，久成噎食。木克胃則逆上阻胸，食不得下，以降逆鎮肝為要。其夾痰飲而陽結者則善嘔反胃，一以通陽結、補胃體為要。亦有肝鬱致瘀血，亦有發瘕致瘀血，再有誤食銅物而致瘀血者。雖皆以化瘀血為要，然肝鬱則以條暢木氣，兼之活絡，肝逆則降氣鎮肝，發瘕須用敗梳菌，銅物須用葶薺。病在上脘，絲毫食物不下者，非吐不可。亦有食膈，因食時受大驚大怒，在上脘者吐之，在下脘者下之。再如單方中鹹韭菜鹵之治瘀血，牛乳之治胃燥，五汁飲之降胃逆，牛轉草之治胃槁，虎肚丸之治胃弱，獅子油之開錮結，活雞血之治老僧跌坐，精氣不得上朝泥丸宮，以成舍利，反化為頑白骨，結於胃脘，蓋雞血純陰能化純陽之頑結也，狗尿粟、狗寶以濁攻濁而又能補土。諸方不勝紀，何今人非用枳實、厚朴以傷殘氣化，即用六味之呆膩哉」。

楊素園曰「噎膈一證，昔人多與反胃混同立說，其實反胃乃納而復出，與噎膈之毫不能納者迥異，即噎與膈亦自有辨解，噎則原納穀而喉中梗塞，膈則全不納穀也。至其病原，昔人分為憂、氣、恚、食、寒，又有飲膈、熱膈、蟲膈，其說甚紛。葉天士則以陰液下竭，陽氣上結，食管窄隘使然。其說原本《內經》最為有據。徐洄溪以為瘀血頑痰、逆氣阻隔胃氣，其已成者無法可治，其義亦精，然以為陰竭而氣結，何虛勞證陰虧之極而陽不見其結？以為陰竭而兼憂愁思慮，故陽氣結而為瘕，則世間患此者大抵貪飲之流，尚氣之輩，乃毫不知憂，而憂愁抑鬱之人反不患此，此說之不可通者也。以為瘀血、頑痰、逆氣阻傷胃氣似矣。



然本草中行瘀、化痰、降氣之品，不一而足，何以已成者竟無法可治？此又說之不可通者也。予鄉有治此證者，於赤日之中縛病人於柱，以物撬其口，抑其舌，即見喉中有物如贅瘤然，正阻食管，以利刃鋤而去之，出血甚多，病者困頓累日始愈。又有一無賴，垂老患此，其人自恨極，以紫藤鞭柄探入喉以求速死，嘔血數升，所患竟愈。此二者雖不足為法，然食管中的係有形之物阻扼其間，而非無故窄隘也明矣。予意度之，此證當由肝過於升，肺不能降，血之隨氣而升堵，歷久遂成有形之瘀。此與失血異證同源。其來也暴，故脫然而為吐血；其來也緩，故留連不出而為噎膈。湯液入胃，已過病所，必不能去有形之物。其專治此證之藥，必其性專入咽喉，而力能化瘀解結者也。昔金溪一書賈患此，向予乞方，予茫無以應，思韭菜上露善治噤口痢，或可旁通其意。其人亦知醫，聞之甚悅，遂煎千金葦莖湯加入韭露一半，時時小啜之，數日竟愈。

上所引二則，吳氏論噎膈之治法，可謂博矣。楊氏發明噎膈之病因，可謂精矣，而又皆注重瘀血之說，似可為從前所治之叟亦有瘀血之確徵。而愚於此案，或從前原有瘀血，或以後變為瘀血，心中仍有游移。何者？以其隔年餘而後反復也。迨辛酉孟夏閱天津《盧氏醫學報》百零六期，謂胃癌由於胃瘀血，治此證者兼用古下瘀血之劑，屢屢治癒，又無再發之，覺胸中疑團頓解。蓋此證無論何因，其竇門積有瘀血者十之七八。其瘀之重者，非當時兼用治瘀血之藥不能愈。其瘀之輕者，但用開胃降逆之藥，瘀血亦可些些消散，故病亦可愈，而究之瘀血之根

蒂未淨，是以有再發之也。明乎此理，知盧君之言可為治噎膈之定論矣。盧君名謙，號抑甫，兼通中西醫學，自命為醫界革命家，嘗謂今業醫者當用西法斷病、用中藥治病，誠為不磨之論。

總核以上三家之論，前二家所論破瘀血之藥，似不能勝病。至盧抑甫謂宜兼用古下瘀血之方，若抵當湯、抵當丸、下瘀血湯、大黃蟪蟲丸諸方，可謂能勝病矣，而愚意以為欲治此證，必中、西之藥並用，始覺有把握。蓋以上諸方治瘀血雖有效，以消瘤贅恐難見效。西醫名此證為胃癌，所謂癌者因其處起凸若山之有巖也。其中果涵有瘀血，原可用消瘀血之藥消之。若非涵有瘀血，但用消瘀血之藥，即不能消除。夫人之腸中可生腸蕈，腸蕈即瘤贅也。腸中可生瘤贅，即胃中亦可生瘤贅。而消瘤贅之藥，惟西藥沃剝即沃度加留謨最效，此其在變質藥中獨佔優勝之品也。今愚合中、西藥品，擬得一方於下，以備試用。

【變質化瘀丸】

早三七（一兩細末）、桃仁（一兩炒熟細末）、硼砂（六錢細末）、粉甘草（四錢細末）、西藥沃剝（十瓦）、百布聖（二十瓦）。

上藥六味調和，煉蜜為丸，二錢重。服時含化，細細咽津。

今擬定治噎膈之法，無論其病因何如，先服參赭培氣湯兩三劑，必然能進飲食。若以後愈服愈見效，七八劑後，可於原方中加桃仁、紅花各數錢，以服至痊愈為度。若初服見效，繼服則不能遞次見效者，可於原方中加三稜二錢，蟪蟲錢

半，再於湯藥之外，每日口含化服變質化瘀丸三丸或四丸，久久當有效驗。若其瘀血已成潰瘍，而膿未盡出者，又宜投以山甲、皂刺、乳香、沒藥、花粉、連翹諸藥，以消散之。

此證之脈若見滑象者，但服參耨培氣湯必愈，而服過五六劑後，可用藥湯送服三七細末一錢，煎渣服時亦如此，迨愈後自無再發之矣。

又王孟英謂以新生小鼠新瓦上焙乾，研末，溫酒沖服，治噎膈極有效。蓋鼠之性能消瘕，善通經絡，故以治血瘀賁門成噎膈者極效也。

有一人患噎膈，偶思飲酒，飲盡一壺而脫然病癒。驗其壺中，有蜈蚣一條甚巨，因知其病癒非由於飲酒，實由於飲煮蜈蚣之酒也。聞其事者質疑於愚，此蓋因蜈蚣善消腫瘍，患者必因賁門瘀血成瘡致噎，故飲蜈蚣酒而頓愈也。欲用此方者，可用無灰酒數兩（白酒、黃酒皆可，不宜用燒酒）煮全蜈蚣三條飲之。

總論破瘀血之藥，當以水蛭為最，然此物忌炙，必須生用之方有效。乃醫者畏其猛烈，炙者猶不敢用，則生者無論矣。不知水蛭性原和平，而具有善化瘀血之良能。若服以上諸藥而病不愈者，想係瘀血凝結甚固，當於服湯藥、丸藥之外，每用生水蛭細末五分，水送服，日兩次。若不能服藥末者，可將湯藥中蟻蟲減去，加生水蛭二錢。

上所錄者，登《上海中醫雜誌》之文也。至第五期雜誌出，載有唐家祥君讀張君論噎膈一篇，於拙論深相推許，並於反胃之證兼有發明。爰錄其原文於下，以備參考。

【附錄】

唐君登醫志原文。讀雜誌第四期張錫純君論治噎膈，闡發玄微，於此證治法別開徑面，卓見名言，實深欽佩。及又讀侯文宗（西醫）反胃論（見第三中學第二期雜誌中），謂病原之最重要者，乃幽門之發生胃癌，妨礙食物入腸之道路。初時胃力尚佳，猶能努力排除障礙，以輸運食物於腸。久而疲勞，機能愈弱，病勢益進，乃成反胃。中醫謂火虛。證之生理，食物入胃，健康者由胃液消化而人腸，乃或吸收，或排出。一日胃液缺乏，則積食不化，是火虛之言亦良確。顧積食亦可下瀉，何為必上逆而反胃，所言甚當。其論噎膈以食道癌為主因，與盧氏胃癌說相符。二證之病原既同，治法亦同矣，然則張君之論，其理可通於反胃也。

上引西醫之論反胃，言其原因同於噎膈，可以治噎膈之法治之，固屬通論。然即愚生平經驗以來，反胃之證原有兩種，有因幽門生癌者，有因胃中虛寒兼胃氣上逆、衝氣上衝者。其幽門生癌者，治法原可通於噎膈。若胃中虛寒兼氣衝逆者，非投以溫補胃府兼降逆鎮衝之藥不可。且即以胃中生癌論，賁門所生之癌多屬瘀血，幽門所生之癌多屬瘤贅。瘀血由於血管凝滯，瘤贅由於腺管肥大，治法亦宜各有注重，宜於參耨培氣湯中加生雞內金三錢，三稜二錢，於變質化瘀丸

中加生水蛭細末八錢，再將西藥沃剝改作十五瓦，蜜為丸，桐子大，每服三錢。日服兩次。而後幽門所生之癌，若為瘤贅，可徐消，即為瘀血亦不難消除。

又治噎膈便方，用昆布二兩洗淨鹽，小麥二合，用水三大盞，煎至小麥爛熟，去渣，每服不拘時飲一小盞；仍取昆布不住口含兩三片咽津，極效。按：此方即用西藥沃度加留謨之義也。蓋西藥之沃度加留謨原由海草燒灰製出，若中藥昆布、海藻、海帶皆含有沃度加留謨之原質者也。其與小麥同煮服者，因昆布味鹹性涼，久服之恐與脾胃不宜，故加小麥以調補脾胃也。此方果效，則人之幽門因生瘤贅而反胃者，用之亦當有效也。

論胃氣不降治法

陽明胃氣以息息下行為順，為其息息下行也，實時時借其下行之力，傳送所化飲食達於小腸，以化乳糜，更傳送所餘渣滓，達於大腸，出為大便，此乃人身氣化之自然，自飛門以至魄門，一氣營運而無所窒礙者也。乃有時胃氣不下行而轉上逆，推其致病之由，或因性急多怒，肝膽氣逆上干，或因腎虛不攝，衝中氣逆上衝，而胃受肝膽衝氣之排擠，其勢不能下行，轉隨其排擠之力而上逆。迨至上逆習為故常，其下行之能力盡失，即無他氣排擠之時，亦恆因蓄極而自上逆。於斯飲食入胃，不能傳送下行，上則為脹滿，下則為便結，此必然之勢也。而治之者，不知其病因在胃府之氣上逆不下降，乃投以消脹之藥，藥力歇而脹滿依然。治以通便之劑，今日通而明日如故，久之兼證歧出，或為嘔噦，或為呃、為逆，或為吐衄，或胸膈煩熱，或頭目眩暈，或痰涎壅滯，或喘促咳嗽，或驚悸不寐，種種現證頭緒紛繁，則治之愈難。即間有知其致病之由在胃氣逆而不降者，而所用降胃之藥若半夏、蘇子、萹仁、竹茹、厚朴、枳實諸品，亦用之等於不用也。而愚數十年經驗以來，治此證者不知凡幾，知欲治此證非重用赭石不能奏效也。蓋赭石對於此證，其特長有六。其重墜之力能引胃氣下行，一也。既能引胃氣下行，更能引胃氣直達腸中以通大便，二也。因其饒有重墜之力，兼能鎮安衝氣使不上衝，三也。其原質係鐵養化合，含有金氣，能制肝木之橫恣，使其氣不上干，四也。為其原質係鐵養化合，更能引浮越之相火下行（相火具有電氣，此即鐵能

引電之理），而胸膈煩熱、頭目眩暈自除，五也。其力能降胃通便，引火下行，而性非寒涼開破，分毫不傷氣分，因其為鐵養化合轉能有益於血分（鐵養化合同於鐵鏽，故能補血中之鐵鏽），六也。是以愚治胃氣逆而不降之證，恆但重用赭石，即能隨手奏效也。

丙寅季春，愚自滄州移居天津。有南門外郭智庵者，年近三旬，造寓求診。自言心中常常滿悶，飲食停滯胃中不下，間有嘔吐之時，大便非服通利之品不行，如此者年餘，屢次服藥無效，至今病未增劇，因飲食減少則身體較前羸弱矣。診其脈，至數如常，而六部皆有鬱象。因曉之曰「此胃氣不降之證也，易治耳。但重用赭石數劑即可見效也」。為疏方，用生赭石細末一兩，生懷山藥、炒懷山藥各七錢，全當歸三錢，生雞內金二錢，厚朴、柴胡各一錢。囑之曰「此藥煎湯日服一劑，服至大便日行一次再來換方」，時有同縣醫友曰綸李君在座，亦為診其脈，疑而問曰「凡胃氣不降之病，其脈之現象恆弦長有力。今此證既係胃氣不降，何其六脈皆有鬱象，而重按轉若無力乎」？答曰「善哉問也，此中頗有可研究之價值。蓋凡胃氣不降之脈，其初得之時，大抵皆弦長有力，以其病因多係衝氣上衝，或更兼肝氣上干。衝氣上衝，脈則長而有力；肝氣上干，脈則弦而有力；肝衝並見，脈則弦長有力也。然其初為肝氣衝氣之所迫，其胃府之氣不得不變其下行之常而上逆，迨其上逆既久，因習慣而成自然，即無他氣衝之干之，亦恆上逆而不能下行。夫胃居中焦，實為後天氣化之中樞。故胃久失其職，則人身之氣化

必鬱，亦為胃久失其職，則人身之氣化又必虛，是以其脈之現象亦鬱而且虛也。為其鬱也，是以重用赭石以引胃氣下行，而佐以厚朴以通陽（葉天士謂厚朴多用則破氣，少用則通陽），雞內金以化積，則鬱者可開矣。為其虛也，是以重用山藥生、熟各半，取其能健脾兼能滋胃（脾濕勝不能健運，宜用炒山藥以健之，胃液少不能化食，宜用生山藥以滋之），然後能受開鬱之藥，而無所傷損。用當歸者，取其能生血兼能潤便補虛，即以開鬱也。用柴胡者，因人身之氣化左宜升、右宜降，但重用鎮降之藥，恐有妨於氣化之自然，故少加柴胡以宣通之，所以還其氣化之常也。曰綸聞之，深躉愚言。後其人連服此藥八劑，大便日行一次，滿悶大減，飲食加多。遂將赭石改用六錢，柴胡改用五分，又加白朮錢半。連服十劑痊愈。閱旬日，曰綸遇有此證，脈亦相同，亦重用赭石治癒。覲面時向愚述之，且深贊愚審證之確，制方之精，並自喜其醫學有進步也。



答劉希文問肝與脾之關係及肝病善作疼之理

肝脾者，相助為理之臟也。人多謂肝木過盛可以克傷脾土，即不能消食，不知肝木過弱不能疏通脾土，亦不能消食。蓋肝之係下連氣海，兼有相火寄生其中。為其連氣海也，可代元氣布化，脾胃之健運實資其輔助；為其寄生相火也，可借火以生土，脾胃之飲食更賴之熟腐，故曰肝與脾相助為理之臟也。特是肝為厥陰，中見少陽，其性剛果，其氣條達，故《內經》〈靈蘭秘典〉名為將軍之官。有時調攝失宜，拂其條達之性，恒至激發其剛果之性而近於橫恣，於斯脾胃先當其衝，向之得其助者，至斯反受其損。而其橫恣所及，能排擠諸臟腑之氣致失其和，故善作疼也。

於斯，欲制肝氣之橫恣，而平肝之議出，至平之，猶不足制其橫恣，而伐肝之議又出，所用之藥，若三棱、莪朮、青皮、延胡、鱉甲諸品，放膽雜投，毫無顧忌，獨不思肝木於時應春，為氣化發生之始，若植物之有萌芽，而竟若斯平之伐之，其萌芽有不挫折毀傷者乎？豈除此平肝伐肝之外，別無術以醫肝乎？何以本屬可治之證，而竟以用藥失宜者歸於不治乎？愚因目擊心傷，曾作論肝病治法在後，登於各處醫學志報。近又擬得肝脾雙理丸，凡肝脾不和，飲食不消，滿悶脹疼，或呃逆、噯氣、嘔吐，或泄瀉或痢疾，或女子月事不調，行經腹痛，關於肝脾種種諸證，服之莫不奏效。爰錄其方於下，以公諸醫界，庶平肝伐肝之盲論自此可蠲除也。

【肝脾雙理丸】

甘草細末十兩、生杭芍細末二兩、廣條桂去粗皮細末兩半、川紫朴細末兩半、薄荷冰細末三錢、冰片細末二錢、朱砂細末三兩。

上藥七味，將朱砂一兩與前六味和勻，水泛為丸，桐子大，晾乾（忌曬），用所餘二兩朱砂為衣，勿令餘剩，上衣時以糯米濃汁代水，且令堅實光滑方不走氣。其用量：常時調養，每服二十粒至三十粒，急用除病時，可服至百粒，或一百二十粒。

論肝病治法（附：新擬和肝丸）

肝為厥陰，中見少陽，且有相火寄其中，故《內經》名為將軍之官，其性至剛也。為其性剛，當有病時恆侮其所勝，以致脾胃受病，至有脹滿、疼痛、泄瀉種種諸證。因此方書有平肝之說，謂平肝即所以扶脾，若遇肝氣橫恣者，或可暫用而不可長用。因肝應春令，為氣化發生之始，過平則人身之氣化必有所傷損也。有謂肝於五行屬木，木性原善條達，所以治肝之法當以散為補（方書謂肝以斂為瀉，以散為補）。散者即升發條達之也，然升散常用，實能傷氣耗血，且又暗傷腎水以損肝木之根也。

有謂肝惡燥喜潤，燥則肝體板硬，而肝火肝氣即妄動，潤則肝體柔和，而肝火肝氣長寧靜，是以方書有以潤藥柔肝之法。然潤藥屢用，實與脾胃有礙，其法亦可暫用而不可長用。然則治肝之法將惡乎宜哉？

《內經》謂「厥陰不治，求之陽明」，《金匱》謂「知肝之病，當先實脾」，先聖後聖，其揆如一，此誠為治肝者之不二法門也。惜自漢、唐以還，未有發明其理者，獨至黃坤載，深明其理謂「肝氣宜升，膽火宜降。然非脾氣之上行，則肝氣不升，非胃氣之下行，則膽火不降」，旨哉此言，誠窺《內經》、《金匱》之精奧矣。由斯觀之，欲治肝者，原當升脾降胃，培養中宮，俾中宮氣化敦厚，以聽肝木之自理，即有時少用理肝之藥，亦不過為調理脾胃劑中輔佐之品，所以然者，五行之土原能包括金木水火四行，人之脾胃屬土，其氣化之敷布，亦能包

括金木水火諸臟腑，所以脾氣上行則肝氣自隨之上升，胃氣下行則膽火自隨之下降也。又《內經》論厥陰治法，有「調其中氣，使之和平」之語，所謂調其中氣者，即升脾降胃之謂也；所謂使之和平者，即升脾降胃而肝氣自和平也。至仲景著《傷寒論》，深悟《內經》之旨，其厥陰治法有吳茱萸湯，厥陰與少陽臟腑相根據，乃由厥陰而推之少陽治法，有小柴胡湯。二方中之人參、半夏、大棗、生薑、甘草，皆調和脾胃之要藥也。且小柴胡湯以柴胡為主藥，而《本經》謂其主腸胃中結氣，飲食積聚，寒熱邪氣，推陳致新。三復《本經》之文，則柴胡實亦為陽明胃府之藥，而兼治少陽耳。欲治肝膽之病者，易弗祖《內經》而師仲景哉！

獨是，肝之為病不但不利於脾，舉凡驚癇、癲狂、眩暈、腦充血諸證，西人所謂腦氣筋病者，皆與肝經有涉。蓋人之腦氣筋發源於腎，而分派於督脈，係淡灰色之細筋，肝原主筋，肝又為腎行氣，故腦氣筋之病實與肝臟有密切之關係也。治此等證者，當取五行金能制木之理，而多用五金之品以鎮之，如鐵鏽、鉛灰、金銀箔、赭石（赭石鐵養化合亦含有金屬）之類，而佐以清肝潤肝之品，若羚羊角、青黛、芍藥、龍膽草、牛膝（牛膝味酸入肝，善引血火下行，為治腦充血之要藥，然須重用方見奇效）諸藥，俾肝經風定火熄，而腦氣筋亦自循其常度，不至有種種諸病也。若目前不能速愈者，亦宜調補脾胃之藥佐之，而後金屬及寒涼之品可久服無弊，且諸證多係挾有痰涎，脾胃之升降自若而痰涎自消也。

又有至要之證，其病因不盡在肝，而急則治標，宜先注意於肝者，元氣之虛而欲上脫者是也。其病狀多大汗不止，或少止復汗，而有寒熱往來之象。或危極至於戴眼，不露黑睛，或無汗而心中搖搖，需人按住，或兼喘促，此時宜重用斂肝之品，使肝不疏泄，即能杜塞元氣將脫之路。至汗止、怔忡、喘促諸疾暫愈，而後徐圖他治法，宜重用山茱萸淨肉至二兩（《本經》山萸肉主治寒熱即指此證），斂肝即以補肝，而用人參、赭石、龍骨、牡蠣諸藥輔之。拙著來復湯後載有本此法挽回垂絕之證數則，可參閱也。

究之肝膽之為用，實能與脾胃相助為理，因五行之理，木能侮土，木亦能疏土也。曾治有飲食不能消化，服健脾暖胃之藥百劑不效，診其左關太弱，知係肝陽不振，投以黃耆（其性溫升，肝木之性亦溫升，有同氣相求之義，故為補肝之主藥）一兩，桂枝尖三錢，數劑而愈。又治黃膽，診其左關特弱，重用黃耆煎湯，送服《金匱》黃膽門硝石礬石散而愈，若是皆其明徵也。且膽汁入於小腸，能助小腸消化食物，此亦木能疏土之理。蓋小腸雖屬火，而實與胃腑一體相連，故亦可作土論。膽汁者，原由肝中回血管之血化出，而注之於膽，實得甲乙木氣之全，是以在小腸中能化胃中不能化之食，其疏土之效愈捷也。又西人謂肝中為回血管會合之處，或肝體發大，或肝內有熱，各管即多凝滯壅脹，由斯知疏達肝鬱之藥，若柴胡、川芎、香附、生麥芽、乳香、沒藥皆可選用，而又宜佐以活血之品，若桃仁、紅花、樗雞、蟪蟲之類，且又宜佐以瀉熱之品，然不可驟用大涼之藥，恐

其所瘀之血得涼而凝，轉不易消散，宜選用連翹、茵陳、川棟子、梔子（梔子為末，燒酒調敷，善治跌打處青紅腫疼，能消瘀血可知）諸藥，涼而能散，方為對證。

又近聞孫總理在京都協和醫院養病，西人謂係肝癰，須得用手術割洗敷藥。及開而視之，乃知肝體木硬，非肝癰也。由斯知中醫所用柔肝之法，當為對證治療。至柔肝之藥，若當歸、芍藥、柏子仁、玄參、枸杞、阿膠、鱉甲皆可選用，而亦宜用活血之品佐之。而活血藥中尤以三七之化瘀生新者為最緊要之品，宜煎服湯藥之外，另服此藥細末日三次，每次錢半或至二錢。則肝體之木硬者，指日可柔也。

又《內經》謂「肝苦急，急食甘以緩之」，所謂苦急者，乃氣血忽然相並於肝中，致肝臟有急迫難緩之勢，因之失其常司。當其急迫之時，肝體亦或木硬，而過其時又能復常，故其治法，宜重用甘緩之藥以緩其急，其病自愈，與治肝體長此木硬者有異。曾閱《山西醫志》二十四期，有人過服燥熱峻烈之藥，驟發瘧厥，角弓反張，口吐血沫。時賢喬尚謙遵《內經》之旨，但重用甘草一味，連煎服，數日痊愈，可謂善讀《內經》者矣。然此證若如此治法仍不愈者，或加以涼潤之品，若羚羊角、白芍，或再加鎮重之品，若硃砂（研細送服）、鐵鏽，皆可也。

【新擬和肝丸】

治肝體木硬，肝氣鬱結，肝中血管閉塞，及肝木橫恣侮克脾土。其現病或脅下脹疼，或肢體串疼，或飲食減少，嘔噦，吞酸，或噫氣不除，或呃逆連連，或頭疼目脹、眩暈、瘰癧，種種諸證。

粉甘草（五兩細末）、生杭芍（三兩細末）、青連翹（三兩細末）、廣肉桂（兩半去粗皮細末）、冰片（三錢細末）、薄荷冰（四錢細末）、片硃砂（三兩細末）。

上藥七味，將前六味和勻，水泛為丸，梧桐子大，晾乾（不宜曬），用硃砂為衣，勿餘剩，務令堅實光滑始不走味。每於飯後一點鐘服二十粒至三十粒，日再服。病急劇者，宜空心服，或於服兩次之後，臨睡時又服一次更佳。若無病者，但以為健胃消食藥，則每飯後一點鐘服十粒即可。

數年來肝之為病頗多，而在女子為尤甚，醫者習用香附、青皮、枳殼、延胡開氣之品，及柴胡、川芎升氣之品，連連服之，恆有肝病未除，元氣已弱，不能支持，後遇良醫，亦殊難為之挽救，若斯者良可慨也。此方用甘草之甘以緩肝，芍藥之潤以柔肝，連翹以散其氣分之結（嘗單用以治肝氣鬱結有殊效），冰片、薄荷冰以通其血管之閉，肉桂以抑肝木之橫恣，硃砂以制肝中之相火妄行，且合之為丸，其味辛香甘美，能醒脾健胃，使飲食加增。又其藥性平和，在上能清，在下能溫（此藥初服下覺涼及行至下焦則又變為溫性），故凡一切肝之為病，服他藥不愈者，徐服此藥，自能奏效。

論腎弱不能作強治法

《內經》謂「腎者作強之官，伎巧出焉」，蓋腎之為用，在男子為作強，在女子為伎巧，然必男子有作強之能，而後女子有伎巧之用也。是以欲求嗣續者，固當調養女子之經血，尤宜補益男子之精髓，以為作強之根基。彼方書所載助腎之藥，若海馬、獺腎、蛤蚧之類，雖能助男子一時之作強，實皆為傷腎之品，原不可以輕試也。惟鹿茸方書皆以為補腎之要品，然止能補腎中之陽，久服之亦能生弊。惟用鹿角所熬之膠，《本經》謂之白膠，其性陰陽俱補，大有益於腎臟，是以白膠在《本經》列為上品，而鹿茸止列於中品也。曾治一人，年近五旬，左腿因受寒作疼，教以日用鹿角膠三錢含化服之（鹿角膠治左腿疼，理詳三期第四卷活絡效靈丹下），閱兩月復覲面，其人言服鹿角膠半月，腿已不疼，然自服此藥後，添有興陽之病，因此輟服。愚曰「此非病也，乃腎臟因服此而壯實也」，觀此，則鹿角膠之為用可知矣。若其人相火衰甚，下焦常覺涼者，可與生硫黃並服（三期第八卷載有服生硫黃法可參觀）。鹿角膠仍含化服之，又每將飯之先，服生硫黃末三分，品驗漸漸加多，以服後移時微覺溫暖為度。

又腎之為體，非但左右兩枚也。腎於卦為坎，坎上下皆陰，即腎左右之兩枚也；其中畫為陽，即兩腎中間之命門也。《難經》謂命門之處，男以藏精，女以係胞。胞即胞室，與腎係同連於命門。西人之生理新發明家謂其處為副腎髓質，又謂其處為射精之機關，是中、西之說同也。又謂副腎髓質之分泌素名副腎鹼，



而雞子黃中實含有此物，可用以補副腎鹼之缺乏。此說愚曾實驗之，確乎可信。方用生雞子黃兩、三枚，調開水服之，勿令熟，熟則無效。

又愚曾擬一強腎之方，用建蓮子去心為末，焙熟，再用豬、羊脊髓和為丸，桐子大，每服二錢，日兩次，常服大有強腎之效，因名其方為強腎瑞蓮丸。蓋凡物之有脊者，其脊中必有一袋，即督脈也。其中所藏之液，即脊髓，亦即西人所謂副腎鹼，所以能助腎臟作強，且督脈之袋上通於腦，凡物之角與腦相連，鹿角最大，其督脈之強可知，是用鹿角膠以補腎，與用豬、羊脊髓以補腎其理同也。

又腎主骨，人之骨稱骸骨，謂猶果之有核也。果核之大者，莫過於胡桃，是以胡桃仁最能補腎，人之食酸齷齒者，食胡桃仁即愈，因齒牙為骨之餘，原腎主之，故有斯效，此其能補腎之明徵也。古方以治腎經虛寒，與補骨脂並用，謂有木火相生之妙（胡桃屬木，補骨脂屬火），若腎經虛寒，泄瀉、骨痠、腿疼用之皆效，真佳方也。

又枸杞亦為強腎之要藥，故俗諺有「隔家千里，勿食枸杞」之語，然素有夢遺之病者不宜單服、久服，以其善興陽也，惟與山萸肉同服，則無斯弊。

又紫稍花之性，人皆以為房術之藥，而不知其大有溫補下焦之功。凡下焦虛寒泄瀉，服他藥不愈者，恆服紫稍花即能愈，其能大補腎中元氣可知。久久服之，可使全體強壯，至服之上焦覺熱者，宜少佐以生地黃，然宜作丸散，不宜入湯劑煎服。曾治一人，年過四旬，身形羸弱，脈象細微，時患泄瀉，房事不能作強，

俾用紫稍花為末，每服二錢半，日兩次，再隨便嚼服枸杞子五六錢。兩月之後，其身形遽然強壯，泄瀉痿廢皆愈，再診其脈，亦大有起色，且從前覺精神腦力日浸衰減，自服此藥後則又覺日浸增加矣。

論治夢遺法

夢遺之病，最能使人之腎經虛弱。此病若不革除，雖日服補腎藥無益也。至若龍骨、牡蠣、萸肉、金櫻諸固澀之品，雖服之亦恒有效，而究無確實把握。此乃腦筋輕動妄行之病，惟西藥若臭剝、抱水諸品，雖為麻醉腦筋之藥，而少用之實可以安靖腦筋若再與龍骨、牡蠣諸藥同用，則奏效不難矣。愚素有常用之方，爰錄於下，以公諸醫界。

煨龍骨一兩，煨牡蠣一兩，淨萸肉二兩，共為細末，再加西藥臭剝十四瓦，煉蜜為百丸，每臨睡時服七丸，服至兩月病可永愈。

〈 第 四 卷 〉

此卷論人官骸、咽喉、肢體及腹內之病。原皆係登醫學志報之文。與已梓行之《衷中參西錄》互相發明，至論中所論之病有不周備之處，宜與前四期《衷中參西錄》參看。

### 論目疾由於腦充血者治法

愚識瞽者數人，問其瞽目之由，皆言病目時兼頭疼不已，醫者不能治癒頭疼，所以目終不愈，以至於瞽。因悟目係連腦，其頭疼不已者，腦有充血之病也。古方書無治腦充血之方，是以醫者遇腦充血頭疼皆不能治，因頭疼而病及於目，是病本在腦，病標在目，病本未清，無論有何等治目妙藥，亦等於揚湯止沸耳。愚在奉時，有高等檢察廳書記官徐華亭，年逾四旬，其左目紅脹腫疼，入西人所設施醫院中治數日，疼脹益，其疼連腦，徹夜不眠。翌晨視之，目上已生肉螺，嚴遮目睛，其脈沉部有力，而浮部似欠舒暢，自言胸中滿悶且甚熱，投以調胃承氣湯加生石膏兩半，柴胡二錢，下燥糞若干，悶熱頓除，而目之脹疼如故，再診其脈，變為洪長，仍然有力。恍悟其目之脹疼連其腦中亦覺脹疼者，必係腦部充血，因腦而病及於目也。急投以拙擬建瓴湯（方載第三卷論腦充血證可預防篇中），服一劑，目腦之疼脹頓愈強半。又服二劑，痊愈。至其目中所生肉螺，非但服藥所能愈。點以拙擬磨翳藥水（方載三期第八卷），月餘其肉螺消無芥蒂。

#### 【附錄】

#### 【磨翳藥水】

生爐甘石一兩，軋細過羅，研砂八錢，膽礬二錢，薄荷葉三錢，蟬退帶全足去翅土三錢。先將薄荷葉、蟬退煎水一茶盅，和甘石、研砂、膽礬同入藥鉢，研至數萬遍，所研之藥皆可隨水飛出，連水貯瓶中。用時連水帶藥點眼上，日六七次。

目疾由於伏氣化熱者治法

目疾有實熱之證，其熱屢服涼藥不解，其目疾亦因之久不愈者，大抵皆因伏氣化熱之後，而移熱於目也。丙寅季春，愚自滄來津，館於珍簠胡道尹家。有門役之弟李汝峯，為紡紗廠學徒，病日久不愈，眼瞼紅腫，胛肉遮睛，覺目睛脹疼甚劇，又兼耳聾鼻塞，見聞俱廢，跬步須人扶持。其脈洪長甚實，左右皆然。其心中甚覺發熱，舌有白苔，中心已黃，其從前大便原燥，因屢服西藥大便日行一次，知係冬有伏寒，感春陽而化熱，其熱上攻，目與耳鼻皆當其衝也。擬用大劑白虎湯以清陽明之熱，更加白芍、龍膽草兼清少陽之熱。病人謂廠中原有西醫，不令服外人藥，今因屢服其藥不愈，偷來求治於先生，或服丸散猶可，斷乎不能在廠中煎服湯藥。愚曰「此易耳。我有自製治眼妙藥，送汝一包，服之眼可立愈」，遂將預軋生石膏細末兩半與之，囑其分作六次服，日服三次，開水送下，服後又宜多喝開水，令微見汗方好。持藥去後，隔三日復來，眼疾已愈十之八九，耳聾鼻塞皆愈，心中已不覺熱，脈已和平。復與以生石膏細末一兩，俾仍作六次服。將藥服盡痊愈。至與以生石膏細末而不明言者，恐其知之即不敢服也。後屢遇因伏氣化熱病目者，治以此方皆效。

答郭炳恒問小兒耳聾口啞治法

小兒之耳聾口啞，乃連帶相關之證也。蓋小兒必習聞大人之言，而後能言，故小兒當未能言時或甫能言時，驟然耳聾不聞，必至啞不能言。是以治此證者，當專治其耳聾。然耳聾之證有可治者，有不可治者。其不可治者，耳膜破也。其可治者，耳中核絡有窒塞也。用靈磁石一塊口中含之，將細鐵條插耳內，磁鐵之氣相感，如此十二日，耳之窒塞當通。若仍不通，宜口含鐵塊，耳際塞磁石，如此十二日耳中之窒塞當通矣。



論鼻淵治法

《內經》謂「膽移熱於腦則辛鼻淵」者，鼻通腦之徑路也。辛，則中覺刺戟也。鼻淵者，鼻流濁涕如淵之不竭也。蓋病名鼻淵，而其病灶實在於額，因額中粘膜生炎，有似腐爛，而病及於腦也。其病標在上，其病本則在於下，故《內經》謂係膽之移熱。而愚臨證品驗以來，知其熱不但來自膽經，恆有來自他經者。而其熱之甚者，又恆來自陽明胃腑。膽經之熱，大抵由內傷積熱而成，胃腑之熱，大抵由伏氣化熱而成，臨證者若見其脈象弦而有力，宜用藥清其肝膽之熱，若膽草、白芍諸藥，而少加連翹、薄荷、菊花諸藥輔之，以宣散其熱，且以防其有外感拘束也。若見其脈象洪而有力，宜用藥清其胃腑之熱，若生石膏、知母諸藥，亦宜少加連翹、薄荷、菊花諸藥輔之，且濁涕常流，則含有毒性，若金銀花、甘草、花粉諸藥皆可酌加也。若病久陰虛，脈有數象者，一切滋陰退熱之藥皆可酌用也。後世方書治此證者，恆用蒼耳、辛夷辛溫之品，此顯與經旨相背也。夫經既明言為膽之移熱，則不宜治以溫藥可知，且明言辛額鼻淵，不宜更用辛溫之藥助其益辛，更可知矣，即使證之初得者，或因外感拘束，宜先投以表散之藥，然止宜辛涼而不可用辛溫也。是以愚遇此證之脈象稍浮者，恆先用西藥阿斯匹林瓦許汗之，取其既能解表又能退熱也。拙著石膏解中，載有重用生石膏治癒此證之案數則，可以參觀。又此證便方，用絲瓜蔓煎湯飲之，亦有小效。若用其湯當水煎治鼻淵諸藥，其奏效當尤捷也。

自述治癒牙疼之經過

愚素無牙疼病，丙寅臘底，自津回籍，因感冒風寒，覺外表略有拘束，抵家後又眠於熱炕上，遂陡覺心中發熱，繼而左邊牙疼。因思解其外表，內熱當消，牙疼或可自愈，服西藥阿斯匹林一瓦半（此藥原以一瓦為常量），得微汗，心中熱稍退，牙疼亦覺輕。遲兩日，心中熱又增，牙疼因又劇。方書謂上牙齦屬足陽明，下牙齦屬手陽明，愚素為人治牙疼有內熱者，恆重用生石膏少佐以宣散之藥清其陽明，其牙疼即愈，於斯用生石膏細末四兩，薄荷葉錢半，煮湯分兩次飲下，日服一劑。兩劑後，內熱已清，疼遂輕減。翌日因有重證應診遠出，時遍地雪深三尺，嚴寒異常，因重受外感，外表之拘束甚於初次，牙疼因又增劇，而心中卻不覺熱，遂單用麻黃六錢（愚身體素強壯是以屢次用藥皆倍常量非可概以之治他人也），於臨睡時煎湯服之。未得汗，繼又煎渣再服，仍未得汗，睡至夜半始得汗，微覺肌膚鬆暢，而牙疼如故，劇時覺有氣循左側上潮，疼徹輔頰，且覺發熱。有時其氣旁行，更疼如錐刺，恍悟此證確係氣血挾熱上衝，滯於左腮，若再上升至腦部，即為腦充血矣。遂用懷牛膝、生赭石細末各一兩煎湯服之，其疼頓愈，分毫不復覺疼，且從前頭面畏風，從此亦不復畏風矣。蓋愚向擬建瓴湯用治腦充血證甚效，方中原重用牛膝、赭石，今單用此二藥以治牙疼，更捷如影響，此誠能為治牙疼者別開一門徑矣，是以詳志之。

【附錄】

唐山趙利庭來函：

二小兒年十二歲，右邊牙疼，連右腮亦腫疼，因讀先生自述治癒牙疼之經過，知腮腫係外感受風，牙疼係胃火熾盛，遂先用西藥阿斯匹林一瓦，服後微見汗，繼用生石膏二兩，薄荷葉錢半，連服三劑，痊愈。

論喉證治法

愚弱冠時已為人疏方治病，然因年少，人多不相信，值里中有病喉者，延醫治療，煩愚作陪，病者喉腫甚，呼吸頗難，醫者猶重用發表之劑，而所用發表之藥又非辛涼解肌，愚甚不以為然，出言駁之。醫者謂係纏喉風證，非發透其汗不能消腫，病家信其說，誤服其藥，竟至不救。後至津門應試，值《白喉忌表抉微》書新出，閱之，見其立論以潤燥滋陰清熱為主，惟少加薄荷、連翹以散鬱熱，正與從前醫者所用之藥相反，因喜而試用其方，屢奏功效。後值邑中患喉證者頗多，用《白喉忌表抉微》治法，有效有不效。觀喉中，不必發白，恆紅腫異常。有言此係爛喉痧者，又或言係截喉癰者，大抵係一時之癘氣流行而互相傳染也。其病初得脈多浮而微數，或浮而有力，久則兼有洪象，此喉證兼瘟病也。此時愚年近三旬，臨證恆自有見解，遇脈之初得浮數有力者，重用玄參、花粉以清其熱，牛蒡、連翹以利其喉，再加薄荷葉二錢以透其表，類能奏效。其為日既深，脈象洪而有力者，又恆用白虎湯加銀花、連翹、乳香、沒藥治療。為其有截喉癰之名，間有加灸山甲，以消其癰腫者。其腫處甚劇，呼吸有窒礙者，恆先用鉞針刺出惡血，俾腫消然後服藥，針藥並施，其奏功亦愈速。然彼時雖治愈多人，而爛喉痧、截喉癰之名究未見諸書也。後讀《靈樞》〈癰疽篇〉謂「癰發於嗑中，名曰猛疽，猛疽不治，化為膿，膿不瀉，塞咽，半日死」，經既明言癰發嗑中，此後世截喉癰之名所由來也。至謂不瀉其膿則危在目前，是針刺瀉膿原為正治之法，即不待

其化膿，針刺以出其惡血亦可為正治之法矣。又閱《傷寒論》「陽毒之為病，面赤斑斑如錦紋，咽喉痛，唾膿血，五日可治，七日不可治」，王孟英解曰「陽毒即後世之爛喉痧耳」，是爛喉痧衍之傷寒，而相傳已久，截喉癰即爛喉痧之重者也。蓋白喉與爛喉痧證均有外感，特白喉證內傷重而外感甚輕，其外來之邪惟襲入三焦，三焦色白，是以喉現白色，故方中宣散之品但少用薄荷、連翹已能逐邪外出。至爛喉痧原即《傷寒論》之陽毒，其中挾有瘟毒之氣，初得之時，原宜重用宣散之品，然宜散以辛涼，而斷不可散以溫熱，且又宜重用涼藥以佐之，此為喉證之大略也。而愚臨證數十年，知喉證中原有諸多變證，今詳錄二則以備參觀。

愚在籍時，有劉姓童子，年逾十齡，咽喉腫疼，心中滿悶杜塞，劇時呼吸頓停，兩目上翻，身軀後挺，然其所以呼吸頓停者，非咽喉杜塞，實覺胸膈杜塞也。診其脈微細而遲，其胸膈常覺發涼，有時其涼上衝，即不能息而現目翻身挺之象。即脈審證，知係寒痰結胸無疑，其咽喉腫疼者，寒痰充溢於上焦，迫其心肺之陽上浮也。為擬方：生赭石細末一兩，乾薑、烏附子各三錢，厚朴、陳皮各錢半。煎服一劑，胸次頓覺開通，咽喉腫疼亦愈強半。又服兩劑痊愈。

又在奉天時，治高等師範學生孫搏九，年二十，得喉證，屢經醫治，不外《白喉忌表抉微》諸方加減，病日增重，醫者諉謂不治。後愚為診視，其脈細弱而數，粘涎甚多，須臾滿口，即得吐出。知係脾腎兩虛，腎虛則氣化不攝，陰火上逆，痰水上泛，而脾土虛損又不能制之（若脾土不虛，不但能制痰水上泛，並能制陰

火上逆），故其咽喉腫疼，粘涎若斯之多也。投以六味地黃湯加於朮，又少加蘇子。連服十劑痊愈。

詳論咽喉證治法

醫界春秋社征咽喉科專稿，因撰此論以應之。

咽喉之證，有內傷外感，或涼或熱，或虛或實，或有傳染或無傳染之殊，今試逐條詳論之於下。

傷寒病恆兼有咽喉之證，《傷寒論》〈陽明篇〉第二十節云「陽明病，但頭眩，不惡寒，故能食而咳，其人必咽痛。若不咳者，咽亦不痛」，按此節但言咽痛，未言治法，乃細審其文義，是由太陽初傳陽明，胃腑之熱猶未實（是以能食），其熱兼瀰漫於胸中（胸中屬太陽，當為陽明病連太陽），上熏肺臟，所以作咳，更因咳而其熱上竄，所以咽痛，擬治以白虎湯去甘草加連翹、川貝母。〈少陰篇〉第三節「病人脈陰陽俱緊，反汗出者，亡陽也，此屬少陰，法當咽痛」，此節亦未列治法。按少陰脈微細，此則陰陽俱緊，原為少陰之變脈。緊脈原不能出汗，因其不當出汗者而反自汗，所以知其亡陽。其咽痛者，無根之陽上竄也。擬用大劑八味地黃湯，以芍藥易丹皮，再加蘇子、牛膝，收斂元陽歸根，以止汗，而咽痛自愈也。

【加減八味地黃湯】

大懷熟地（一兩）、淨萸肉（一兩）、生懷山藥（八錢）、生杭芍（三錢）、大雲苓片（二錢）、澤瀉（錢半）、烏附子（二錢）、肉桂（二錢去粗皮後入）、懷牛膝（三錢）、蘇子（二錢研炒）。

煎湯盅半，分兩次溫服。

〈少陰篇〉第三十節云「少陰病，下利、咽痛、胸滿、心煩者，豬膚湯主之」，按此證乃少陰之熱瀰漫於三焦也。是在上與中，則為咽痛煩滿，因腎中真陰不能上升與陽分相濟，所以多生燥熱也；在下，則為下利，因臟病移熱於腑，其膀胱瘀滯，致水歸大腸而下利也。至治以豬膚湯者，以豬為水蓄，其膚可熬膠，汁液尤勝，原能助腎陰上升與心陽調劑以化燥熱，而又伍以白蜜之涼潤，小粉之沖和，熬之如粥，服後能留戀於腸胃，不致隨下利瀉出，自能徐徐敷布其氣化，以清三焦瀰漫之熱也。

〈少陰篇〉第三十一節云「少陰病二、三日，咽痛者，可與甘草湯。不瘥者與桔梗湯」，此亦少陰病之熱者也。用甘草湯取其能潤肺利咽，而其甘緩之性又能緩心火之上炎，則下焦之燥熱可消也。用桔梗湯者，取其能升提腎中之真陰，俾陰陽之氣互相接續，則上焦之陽自不浮越以鑠肺熏咽，且其上達之力又善散咽喉之鬱熱也。

按：後世治咽喉證者皆忌用桔梗，然果審其脈為少陰病之微細脈，用之固不妨也。況古所用之桔梗皆是苦桔梗，其性能升而兼能降，實具有開通之力也。

〈少陰篇〉第三十二節云「少陰病，咽中傷生瘡，不能言語，聲不出者，苦酒湯主之」，按少陰之脈原絡肺上循喉嚨，是以少陰篇多兼有咽喉之病。至治以苦酒湯，唐氏謂苦酒與半夏同用，可使咽中之瘡速破。苦酒即今之醋，醋調生半



夏末外敷原可消瘡，不必皆攻之使破之。至張氏注謂「雞卵殼堅白似金，故能入肺」，亦頗近理。惟陳古愚謂「所用生半夏破如棗核大十四枚，則雞子殼中不能容」，嘗閱古本謂將半夏一枚破為十四枚，則又未免太少，且「如棗核大」四字亦無交代，以愚意測之，棗核當為棗仁之誤，若謂如棗仁大十四枚，則雞卵殼中容之有餘矣。又古人用半夏，湯洗七次即用，故半夏下注有洗字。若今之制半夏用於此方，必然無效。如畏其有毒不敢用，可將生半夏破作數瓣，以水煮之，或換水煮兩三次，嘗之不甚辛辣，然後入藥亦可。

〈厥陰篇〉第九節云「傷寒，先厥後發熱，下利必自止，而反汗出，咽中痛，其喉為痺」，按此節之咽痛，以多亡陰也，與〈少陰篇〉之汗出亡陽者，原互相對照。蓋其人之肝臟蘊有實熱，因汗出過多耗其陰液，其熱遂上竄鬱於咽中而作痛，故曰其咽為痺。痺者，熱與氣血凝滯不散也。仲師當日未言治法，而愚思此證當用酸斂之藥以止其汗，涼潤之藥以復其液，宣通之藥以利其咽，彙集為方，庶可奏功。爰將所擬之方詳錄於下。

【斂陰瀉肝湯】

生杭芍（兩半）、天花粉（一兩）、射干（四錢）、浙貝母（四錢搗碎）、  
酸石榴（一個連皮搗爛）。

同煎湯一盅半，分兩次溫服下。

上所錄傷寒兼咽喉病者六節，傷寒中之咽喉證大略已備，而愚臨證多年，知傷寒兼病咽喉又有出於六節之外者，試舉治驗之案一則明之。

愚在奉時治一朱姓學生，患傷寒三四日，蜷臥昏昏似睡，間作譫語，呼之眼微開，舌上似無苔，而舌皮甚乾，且有黑斑，咽喉疼痛，小便赤而熱，大便數日未行，脈微細兼沉，心中時覺發熱，而肌膚之熱度如常，此乃少陰傷寒之熱證，因先有伏氣化熱，乘腎臟虛損而竄入少陰，遏抑腎氣不能上達，是以上焦燥熱而舌斑咽痛也，其舌上有黑斑者，亦為腎虛之現象。至其病既屬熱而脈微細者，誠以脈發於心，腎氣因病不能上達與心相濟，其心之跳動即無力，此所以少陰傷寒，無論或涼或熱其脈皆微細也。遂為疏方：生石膏細末二兩，生懷山藥一兩，大潞參六錢，知母六錢，甘草二錢，先用鮮茅根二兩煮水，以之煎藥，取清湯三盅，每溫服一盅，調入生雞子黃一枚。服藥一次後，六脈即起。服至二次，脈轉洪大。服至三次，脈象又漸和平，精神亦復，舌乾嚙痛亦見愈。翌日即原方略為加減，再服一劑，諸病痊愈。

按：上所用之方，即本期六卷鼠疫門中坎離互根湯，方之細解詳於本方後，茲不贅。

至於溫病，或溫而兼疹，其兼咽喉證者尤多，方書名其證為爛喉痧，其證多係有傳染之毒菌。治之者，宜注意清其溫熱，解其疹毒，其咽喉之證亦易愈。試舉治驗之案以明之。

戊辰在津，有第一中學教員宋志良君素喜閱拙著，孟夏時其長子慕濂患溫疹兼喉證，醫者皆忌重用涼藥，服其藥數劑，病轉增劇。繼延愚為診視，其脈洪長有力，純乎陽明胃腑蘊有實熱，其疹似靨未靨，視其咽喉兩旁紅，微有爛處，心中自覺熱甚，小便短赤，大便三日未行，為開大劑白虎湯，加連翹四錢，薄荷葉錢半以托疹外出。方中石膏重用生者四兩石，恐藥房中以煨者充之，囑取藥者視其將大塊生石膏搗細，且帶小塊來視其果係生石膏否。迨藥取至，其小塊果為生石膏，而細面灰白，乃係煨者，究問其故，是預製為末，非當面搗細者。愚因謂志良曰「石膏煨用，性同鴆毒。若用至一兩，即足誤人性命。可向雜貨鋪中買生者，自制細用之」，於是依愚言辦理，將藥煎湯三盅，分三次溫飲下，病大見愈，而脈仍有力，咽喉食物猶疼。繼又用原方，先取鮮白茅根二兩煮水以煎藥，仍分三次服下，盡劑而愈，大便亦通下。後其次子亦患溫疹喉證，較其兄尤劇。仍治以前方，初次即用茅根湯煎藥，藥方中生石膏初用三兩，漸加至五兩始愈。繼其幼女年七歲亦患溫疹喉證，較其兩兄尤重，其疹周身成一個，肉皮皆紅（俗謂此等疹皆不能治癒），亦治以前方，為其年幼，方中生石膏初用二兩，後加至六兩，其熱稍退而喉痛不減，其大便六日未行，遂單用淨芒硝俾淬水服下，大便即通，其熱大減，喉痛亦愈強半。再診其脈雖仍有力，實有浮而還表之象，遂用西藥阿斯匹林一瓦，因病機之外越而助其出汗。果服後周身得汗，霍然痊愈。志良因告

愚曰「余從前有子女四人，皆因此證而殤，今此子女三人，服先生藥完全得愈，始知醫術之精，洵有奪命之權也」。

按：溫疹之證，西人名為猩紅熱，有毒菌傳染，原不易治，而兼咽喉證者治之尤難。仲景所謂「陽毒為病，面赤斑斑如錦紋，咽喉痛，唾膿血」者，當即此證。近世方書中又名為爛喉痧，謂可治以《傷寒論》麻杏甘石湯。然麻杏甘石湯中石膏之份量原為麻黃之二倍。若借用其方，則石膏之份量當十倍於麻黃（石膏一兩麻黃一錢）；其熱甚者，石膏之份量又當二十倍於麻黃（石膏二兩麻黃一錢），然後用之無弊。本期第五卷中曾詳論之。近聞友人楊達夫言，有名醫精於傷寒，偶患喉證，自治以麻杏甘石湯，竟至不起。想其所用之分量皆按原方而未嘗為之通變也，使其早見拙論，又何至有此失乎。

又治滄州友人董壽山，年過三旬，初則感冒發頤，繼則漸腫而下延至胸膈，服藥無效。時當中秋節後，淋雨不止，因病勢危急，冒雨驅車迎愚。既至，見其頷下連頸，壅腫異常，撫之硬而且熱，色甚紅，純是一團火毒之氣，下腫已至心口，其牙關不開，咽喉腫疼，自牙縫進水半口，必以手掩口，十分用力始能下嚥，且痰涎填滿胸中，上至咽喉，並無容水之處，進水少許，必換出痰涎一口，且覺有氣自下上衝，常作呃逆，其脈洪滑而長，重按有力，一分鐘約近九十至，大便數日未行。愚曰「此俗所稱蝦蟆瘟也。其毒熱熾盛，盤踞陽明之府，若火之燎原，必重用生石膏清之，乃可緩其毒熱之勢」，從前醫者在座，謂曾用生石膏一兩，

毫無功效。愚曰「石膏乃微寒之藥，《本經》原有明文，僅用兩許何能清此熾盛之熱毒」，遂為疏方，用生石膏四兩，清半夏四錢，金線重樓三錢，連翹二錢，射干二錢。煎服後，覺藥停胸間不下，其熱與腫似有益增之勢。知其證兼結胸，火熱無下行之路，故益上衝也。復急取生石膏四兩，赭石三兩，又煎湯服下，仍覺停於胸間。又急取赭石三兩，萸仁二兩，芒硝八錢，又煎湯飲下，胸中仍不開通，此時咽喉益腫，再飲水亦不能下嚥，病家惶恐無措。愚曉之曰「余所以連次亟亟用藥者，正為此病腫勢浸長，恐稍緩則藥不能進，今其胸中既貯如許多藥，斷無不下行之理，藥下行則結開便通，毒火隨之下降，而上焦之腫熱必消矣」，時當晚十點鐘，至夜半覺藥力下行，黎明下燥糞若干，上焦腫熱覺輕，水漿可進，晨飯時牙關亦微開，服茶湯一碗。午後腫熱又漸增，撫其胸，熱又烙手，脈仍洪實。意其燥糞必未盡下，遂投以大黃四錢，芒硝五錢，又下燥糞，兼有溏糞，病遂大愈。而腫處之硬者仍不甚消，胸間撫之猶熱，脈象亦仍有餘熱。又用生石膏四兩，金銀花、連翹各五錢，煎湯一大碗，分數次溫飲下，日服一劑，三日痊愈。壽山從此憤志學醫，今已成名醫矣。

按：此病實溫疫（疫有寒溫兩種而寒者甚少），確有傳染至猛至烈之毒菌，是以難治。

又按：此證當二次用藥時，若加硝、黃於藥中，早通其大便，或不至以後如此危險，而當時閱歷未深，猶不能息息與病機相赴也。

有白喉證，其發白或至腐爛，實為傳染病之一端。其證大抵先有蘊熱，則易受傳染，為其證內傷為重，宜用涼潤滋陰清火之品，而忌用表散之劑，然用辛涼之藥以散其火鬱，若薄荷、連翹諸藥固所不忌也。《白喉忌表抉微》中之養陰清肺湯、神仙活命湯二方，原為治白喉良方，而神仙活命湯中宜加連翹三錢，熱甚者，可將方中生石膏加倍，或加兩倍，若大便不通者，大黃、芒硝皆可酌加。

白喉之病，又恆有與爛喉痧相並者，辛未仲春，天津法租界瑞雲裡沈姓學生，年十六歲，得溫疹兼喉痧證。其得病之由，因其身體甚胖，在體育場中遊戲努力過度，周身出汗，為風所襲。初微覺惡寒頭疼，翌日表裡俱壯熱，咽喉悶疼。延醫服藥，病未見輕，喉中疼悶似加劇，周身又復出疹，遂延愚為診治。其肌肉甚熱，出疹甚密，連無疹之處其肌肉亦發紅色，誠西人所謂猩紅熱也。其心中亦自覺熱甚，其喉中扁桃處皆有紅腫，其左邊有如榆莢一塊發白。自謂不惟飲食疼痛難下嚥，即呼吸亦甚覺有礙。其脈左右皆洪滑有力，一分鐘九十八至。愚為刺其少商出血，復為針其合谷，又為擬一清咽、瀉火之方俾服之。

生石膏搗細二兩、玄參六錢、天花粉六錢、射干三錢、牛蒡子搗細三錢、浙貝母搗碎三錢、青連翹三錢、鮮茅根三錢無鮮茅根可代以鮮蘆根、甘草錢半、粳米三錢。

共煎湯兩大盅，分兩次溫服下。

翌日復為診視，其表裡之熱皆稍退，脈象之洪滑亦稍減，疹出又稍加多，前三日未大便，至此則通下一次，再視其喉，其紅腫似加增，其白處則大如錢矣。病人自謂「此時飲水必須努力始能下嚥，呼吸之滯礙似又加劇」，愚曰「此為極危險之候，非刺患處出血不可」，遂用圭式小刀尖於喉左右紅腫之處各刺一長口，放出紫血若干，呼吸驟覺順利。繼再投以清熱、消腫、托表疹毒之劑，病遂痊愈。

又《靈樞》〈癰疽篇〉謂「癰發於嗌中，名曰猛疽，猛疽不治，化為膿，膿不瀉，塞咽，半日死」，按此證即後世所謂截喉癰。初起時，咽喉之間紅腫甚劇，宜用消瘡之藥散之，兼用扁針刺之使多出血。若待其膿成而後瀉之，恐不容待其成膿即有危險也。

【消腫利咽湯】

天花粉（一兩）、連翹（四錢）、金銀花（四錢）、丹參（三錢）、射干（三錢）、玄參（三錢）、乳香（二錢）、沒藥（二錢）、炙山甲（錢半）、薄荷葉（錢半）。

脈象洪實者加生石膏一兩，小便不利者加滑石六錢，大便不通者加大黃三錢。

咽喉之證熱者居多，然亦間有寒者，愚在籍時有姻家劉姓童子，年逾十齡，咽喉腫疼，胸中滿悶堵塞，劇時呼吸停頓，兩目上翻，身軀後挺。然細審其所以呼吸停頓者，非因咽喉堵塞，實因胸膈堵塞也。診其脈微細而遲，其心中常覺發

涼，有時其涼上衝，即不能息，而現目翻身挺之象。即脈審證，知係寒痰結胸無疑。其咽喉腫疼者，寒痰充溢於上焦，迫其心肺之陽上浮也。為擬方生赭石細末一兩，乾薑、烏附子各三錢，厚朴、陳皮各錢半。煎服一劑，胸次頓覺開通，咽喉腫疼亦愈強半，又服兩劑痊愈。又咽喉兩旁微高處，西人謂之扁桃腺，若紅腫西人謂之扁桃腺炎，若其處屢次紅腫，漸起疙瘩，服清火藥則微消，或略有感冒，或稍有內熱復起者，此是扁桃腺炎已有根蒂，非但服藥所能愈，必用手朮割去之，再投以清火消腫之藥，始能除根。若不割去，在幼童可累其身體之發達。

《金匱》謂婦人咽中如有炙臠（吐之不出，吞之不下，俗謂之梅核氣病），此亦咽喉證之一也。

按：此證注疏家謂係痰氣阻塞咽喉之中，然此證實兼有衝氣之衝也。原方半夏厚朴湯主之，是以半夏降衝，厚朴開氣，茯苓利痰，生薑、蘇葉以宣通其氣化。愚用此方時，恆加赭石數錢，兼針其合谷，奏效更速（此證不但婦人男子亦間有之）。

【附錄】

前哲治喉奇案一則。憶愚少時，出診鄰縣慶雲，見案頭多書籍，中有記事閒書，載有名醫某（書與醫皆忘其名）外出，偶歇第門旁，其門中人出入甚忙迫，詢之，言其家只有少年公子一人，患喉證奄奄一息，危在目前，急為備其身後事，故忙迫也。醫者謂此證我善治，雖至危亦能挽救，可為傳達。其人聞言而入，須



與宅主出肅客人。視病人，見其脖項腫甚劇，閉目昏昏似睡，呼之不應，牙關緊閉，水漿亦不能入。詢其家人，知不食將周旬矣。醫者遂俾其家人急煮稠粥一盆，晾半溫，待其病人愈後服之。又令備細木棍數條及斧鋸之囑。其家人皆竊笑，以為斯人其瘋癲乎！醫者略不瞻顧，惟用鋸與斧將木棍截短，一端削作鴨嘴形，且催將所煮之粥盛來視涼熱可食否，遂自嘗之曰「猶熱可少待」。乃徐用所制鴨嘴之最細薄者撬病人齒，齒少啟，將鴨嘴填入，須臾又填以略粗略厚之鴨嘴，即將初次所填者抽出。如此填抽至五次，其口可進食矣，而驟以制鴨嘴所鋸之木屑投病人喉中，其家人見之大驚，欲加惡聲，病人遂大咳連連，須臾吐膿血碗餘，遂能言呼饑，進以所備粥，涼熱適口，連進數碗。舉家歡喜感謝。因問「病至如此，先生何以知猶可救」？答曰「病者六脈有根而洪緊，洪者為熱，緊者為毒。且其脖項腫熱，因喉生癰毒，為日已多，又確知其癰已潰膿。然咽喉腫滿藥不能入，以針透膿，不知自吐，亦所出有限，不能救眼前之急，故深思而得此法。嘗見咳之劇者，能將肺咳破吐血，況喉中已熟之瘡瘍乎，此所謂醫者意也。惟仁人君子始可以學醫，為其能費盡苦心以救人也」，病家乃大嘆服。

按：此案用法甚奇，又若甚險，若預先言明，病家未必敢用，然診斷確實，用之自險而能穩也。

閱劉華封《爛喉痧證治辨異》書後

丙寅中秋後，接到劉華封自濟南寄贈所著《爛喉痧證治辨異》一書。細閱一過，其辯證之精，用藥之妙，立論之通，於喉證一門實能令人起觀止之歎。咽喉為人身緊要之處，而論喉證之書向無善本。自耐修子托之鸞語，著《白喉忌表抉微》，盛行於一時，初則用其方效者甚多，繼而用其方者有效有無效，更有用之不惟不效而病轉增劇者，於斯議論紛起，有謂白喉忌表散，但宜表以辛涼，而不可表以溫熱者。又有謂白喉原宜表散，雖麻黃亦可用，但不可與升提之藥並用者。

按：其人或有嚴寒外束不得汗，咽喉疼而不腫者，原可用麻黃湯解其表，然麻黃可用，桂枝不可用，若用麻黃湯時，宜去桂枝，加知母、連翹，至升提之藥，惟忌用升麻。若桔梗亦升提之藥，而《傷寒論》有桔梗湯治少陰病咽痛，因其能開提肺氣散其咽喉鬱熱也。若與涼藥並用，又能引涼藥之力至咽喉散熱。惟咽喉痛而且腫者，似不宜用。

又有於《白喉忌表抉微》一書痛加詆毀，謂其毫無足取者，而劉華封則謂白喉證原分兩種，耐修子所謂白喉忌表者，內傷之白喉也。其病因確係煤毒、紙煙及過服煎炒辛熱之物，或貪色過度，以致陰液虧損虛火上炎所致，用藥養陰清肺原為正治。其由外感傳染者，為爛喉痧，喉中亦有白腐，乃係天行時氣入於陽明，上蒸於肺，致咽喉潰爛，或兼有疹子，正是溫熱欲出不得所致，正宜疏通發表使

毒熱外出。二證之辨，白喉則咽中乾，喉痧則咽中多痰涎。白喉止五心煩熱，喉痧則渾身大熱云云。誠能將此二證，一內因，一外因，辨別極精。及至後所載治喉痧諸方，詳分病之輕重淺深，而措施咸宜，洵為喉科之金科玉律也。惟其言今日之好人參難得，若用白虎加人參湯及小柴胡湯，方中人參可以沙參代之，似非確論，蓋小柴胡湯中之人參或可代以沙參，若當下後小柴胡湯證仍在者，用小柴胡湯時，亦不可以沙參代人參。至白虎加人參湯，若其熱實脈虛者，以沙參代人參其熱必不退，此愚由經驗而知，非想當然爾之談也。且古方中人參即係今之黨參，原非難得之物，若恐人工種植者不堪用，凡黨參之通體橫紋者（若胡萊菔之紋）皆野生之參也。至其後論喉證原有因下焦虛寒迫其真陽上浮致成喉證者，宜治以引火歸原之法，洵為見道之言。

論結胸治法

結胸之證，有內傷外感之殊，內傷結胸，大抵係寒飲凝於賁門之間，遏抑胃氣不能上達，阻隔飲食不能下降，當用乾薑八錢，赭石兩半，川朴、甘草各三錢開之。其在幼童，脾胃陽虛，寒飲填胸，嘔吐飲食成慢驚，此亦皆寒飲結胸證。可治以莊在田《福幼編》逐寒蕩驚湯，若用其方寒痰仍不開，嘔吐仍不能止者，可將方中胡椒倍用二錢，若非寒飲結胸，或為頑痰結胸，或為熱痰結胸者，阻塞胸中之氣化不能升降，甚或有礙呼吸，危在目前，欲救其急，可用礪砂四錢開水融化服之，將其痰吐出。其為頑痰者，可再用栝蒌仁二兩，苦葶藶三錢（袋裝）煎湯飲之，以滌蕩其痰。其為熱痰者，可於方中加芒硝四錢。有胸中大氣下陷，兼寒飲結胸者，其證尤為難治。曾治一趙姓媪，年近五旬，忽然昏倒不語，呼吸之氣大有滯礙，幾不能息，其脈微弱而遲。詢其生平，身體羸弱，甚畏寒涼，恒覺胸中滿悶，且時常短氣，即其素日資稟及現時病狀以互勘病情，其為大氣下陷兼寒飲結胸無疑。然此時形勢將成痰厥，住在鄉村取藥無及，遂急用胡椒二錢搗碎煎兩三沸，澄取清湯灌下。須臾胸中作響，呼吸頓形順利，繼用乾薑八錢煎湯一盅，此時已自能飲下。須臾氣息益順，精神亦略清爽，而仍不能言，且時作呵欠，十餘呼吸之頃必發太息，知其寒飲雖開，大氣之陷者猶未復也，遂投以拙擬回陽升陷湯（方在三期第四卷，係生箭耆八錢，乾薑六錢，當歸四錢、桂枝尖三錢、甘草一錢）。服數劑，呵欠與太息皆愈，漸能言語。

按：此證初次單用乾薑開其寒飲，而不敢佐以赭、朴諸藥以降下之者，以其寒飲結胸又兼大氣下陷也。設若辨證不清而誤用之，必至凶危立見，此審證之當細心也。

至於外感結胸，傷寒與溫病皆有。傷寒降早可成結胸，溫病即非降早亦可成結胸，皆外感之邪內陷與胸中痰飲互相膠漆也。無論傷寒、溫病，其治法皆可從同。若《傷寒論》大陷胸湯及大陷胸丸，俱為治外感結胸良方，宜斟酌病之輕重淺深，分別用之。至拙擬之蕩胸湯（載三期六卷，係瓜蒌仁新炒者搗細二兩、生赭石細末二兩，蘇子六錢，病劇者加芒硝五錢，煎盅半徐徐飲下），亦可斟酌加減，以代諸陷胸湯、丸。

有內傷結胸與外感結胸相並而成一至險之結胸證者。在奉天時曾治警務處科長郝景山，年四十餘，心下痞悶杜塞，飲食不能下行，延醫治不效。繼入東人醫院，治一星期，仍然無效。浸至不能起床，吐痰腥臭，精神昏憤。再延醫診視，以為肺病已成，又兼胃病，不能治療。其家人惶恐無措，迎愚診治。其脈左右皆弦，右部則弦而有力，其舌苔白厚微黃，撫其肌膚發熱，問其心中亦覺熱，思食涼物，大便不行者已四五日，自言心中滿悶異常，食物已數日不進，吐痰不惟腥臭，且又覺涼。愚籌思再四，知係溫病結胸。然其脈不為洪而有力，而為弦而有力量，且所吐之痰臭而且涼者何也？蓋因其人素有寒飲，其平素之脈必弦，其平素吐痰亦必涼（平素忽不自覺，今因病溫咽喉發熱覺痰涼耳），因有溫病之熱與之

混合，所以脈雖弦而仍然有力，其痰雖涼，而為溫病之熱熏蒸，遂至腥臭也。為疏方用萹仁、生赭石細末各一兩，玄參、知母各八錢，蘇子、半夏、黨參、生薑各四錢，煎湯沖服西藥留苦四錢。一劑胸次豁然，可進飲食，右脈較前柔和，舌苔變白，心中猶覺發熱，吐痰不臭，仍然覺涼。遂將原方前四味皆減半，加當歸三錢，服後大便通下，心中益覺通豁。惟有時覺有涼痰自下發動，逆行上衝，周身即出汗。遂改用赭石、黨參、乾薑各四錢，半夏、白芍各三錢。川朴、五味、甘草各二錢，細辛一錢，連服數劑，寒痰亦消矣，此證原寒飲結胸與溫病結胸相並而成，而初次方中但注重溫病結胸，惟生薑一味為治寒飲結胸之藥。因此二病之因，一涼一熱，原難並治，若將方中之生薑改為乾薑，則溫病之熱必不退。至若生薑之性雖熱，而與涼藥並用實又能散熱。迨至溫病熱退，然後重用乾薑以開其寒飲，此權其病勢之緩急先後分治，而仍用意周匝，不至顧此失彼，是以能循序奏效也。

論腸結治法

腸結最為緊要之證，恆於人性命有關，或因常常嘔吐，或因多食生冷及硬物，或因怒後飽食，皆可致腸結，其結多在十二指腸及小腸間，有結於幽門者。其證有腹疼者，有嘔吐者，尤為難治，因投以開結之藥，不待藥力施展而即吐出也。亦有病本不吐，因所服之藥行至結處不能通過，轉而上逆吐出者，是以治此證者，當使服藥不使吐出為第一要著。愚於此證吐之劇者，八九日間杓飲不存，曾用赭石細末五兩，從中又羅出極細者一兩，將所餘四兩煎湯，送服極細者，其吐止而結亦遂開，若結證在極危急之時，此方宜放膽用之。雖在孕婦惡阻嘔吐者，亦可用之（赭石解參赭鎮氣湯後載有數案可參觀），有謂孕婦惡阻，無論如何嘔吐，與性命無關者，乃閱歷未到之言也。

有患此證急欲通下者，愚曾用赭石細末三兩、芒硝五錢，煎湯送服甘遂細末錢半，服後兩點半鍾其結即通下矣。後有醫者得此方以治月餘之腸結證，亦一劑而愈。後聞此醫自患腸結，亦用此方煎湯先服一半，甘遂亦送下一半，藥力下行，結不能開，仍復吐出，繼服其餘一半，須臾仍然吐出，竟至不起，由此知用藥一道，過於放膽固多失事，若過於小心亦多誤事也。況甘遂之性，無論服多服少，初次服之尚可不吐，若連次服之，雖佐以赭石，亦必作吐，是以拙擬蕩胸加甘遂湯（方在三期三卷癲狂門），原用大劑大承氣湯加赭石二兩煎湯，送服甘遂細末二錢。方下注云：若服一劑不愈者，須隔三日方可再服，此固欲緩服以休養其

正氣，實亦防其連服致吐也。至於赭石可如此多用者，以其原質為鐵養化合，性甚和平，且善補血，不傷氣分，雖多用於人無損也。特是藥局中赭石，必火醋激，然後軋細，如此製法，則氧氣不全，不如徑用生者之為愈也。況其雖為石類，與鐵鏽相近（鐵鏽亦鐵養化合），即服生赭石細末，亦於人腸胃毫無傷損。若嫌上方中甘遂之性過猛烈者，本書載有硝菝通結湯方，藥性甚穩善，惟制此藥時，略費手續。方用淨芒硝六兩，鮮萊菝八斤，用水將芒硝入鍋中融化，再將萊菝切片，分數次入鍋中煮之，至爛熟，將萊菝撈出，再換以生萊菝片，屢換屢煮，所備萊菝片不必盡煮，但所煮之水餘一大碗許，嘗之不至甚鹹者，其湯即成。若嘗之仍甚鹹者，可少攪以涼水，再加生萊菝片煮一次。分作兩次服下。服一次後，遲三點鐘若不見行動，再將二次溫服下。

方後載有治驗兩則，後又遇此證多次，皆以此方治癒。此方愚在籍時曾用之治癒腸結之險證數次，本方後載有治驗之案二則。後至奉天遇腸結證數次，皆以此方治癒。曾治警務處科員孫俊如，年四十餘，其人原管考取醫生，精通醫學。得腸結後，自用諸藥以開其結，無論服何等猛烈之藥，下行至結處皆轉而上逆吐出。勢至危急，求為診治，為制此湯，服未盡劑而愈，愈後喜甚，稱為神方。又治清丈局科員劉敷陳，年近五旬，患腸結旬餘不愈，腹疼痛甚劇，飲水移時亦吐出。亦為制此湯，服一半其結即通下。適其女公子得痢證，俾飲其所餘之一半，痢亦頓愈。敷陳喜曰「先生救余之命，而更惠及小女，且方本治腸結，而尤善治



痢，何制方若是之妙也」，蓋此湯純係萊菔濃汁而微鹹，氣味甚佳，且可調以食料，令其適口，是以服他藥恒吐者，服此湯可不作吐，且芒硝軟堅破瘀之力雖峻，而有萊菔濃汁以調和之，故服後並不覺有開破之力，而其結自開也。

又丁卯孟夏，愚因有事自天津偶至小站，其處有醫士祝君，字運隆，一方之良醫也。初見如舊相識，言數年來最喜閱《衷中參西錄》，其中諸方用之輒隨手奏效。有其處商務會長許翁，年過六旬，得結證，百藥不效，病勢極危，已備身後諸事。運隆視其脈象有根，謂若服此湯，仍可治癒。病家疑藥劑太重，運隆謂「病危至此，不可再為遲延，若嫌藥劑過重，可分三次服下，病癒不必盡劑」，此以小心行其放膽也。遂自監視，為制此湯，服至兩次後，結開通下，精神頓復其舊，有若未病者然。

論肢體痿廢之原因及治法（附：起痿湯、養腦利肢湯）

《內經》謂「五臟有病，皆能使人痿」，至後世方書，有謂係中風者，言風中於左，則左偏枯而痿廢，風中於右則右偏枯而痿廢。有謂係氣虛者，左手足偏枯痿廢，其左邊之氣必虛，右手足偏枯痿廢，其右邊之氣必虛。有謂係痰瘀血有謂係血瘀者，有謂係風寒濕相並而為痺，痺之甚者即令人全體痿廢，因痰瘀血瘀及風寒濕痺皆能阻塞經絡也。乃自腦髓神經司知覺運動之說倡自西人，遂謂人之肢體痿廢皆係腦髓神經有所傷損，而以愚生平所經驗者言之，則中西之說皆不可廢。今試列舉素所經驗者於下，以徵明之。

憶在籍時，曾見一豬，其兩前腿忽不能動，須就其臥處飼之，半月後始漸愈。又旬餘解此豬，見其肺上新愈之瘡痕宛然可辨，且有將愈未盡愈者，即物測人，原可比例，此即《內經》所謂因肺熱葉焦發為痿者也。由斯知五臟有病皆使人痿者，誠不誤也。

在奉天曾治一婦人，年近三旬，因夏令夜寢當窗，為風所襲，遂覺半身麻木，其麻木之邊，肌膚消瘦，浸至其一邊手足不遂，將成偏枯。其脈左部如常，右部則微弱無力，而麻木之邊適在右，此因風襲經絡，致其經絡閉塞不相貫通也。不早祛其風，久將至於痿廢，為疏方用生箭耆二兩（用黃耆者為其能去大風，《本經》有明文也），當歸八錢（用當歸者，取其血活風自去也），羌活、知母、乳

香、沒藥各四錢，全蠍二錢，全蜈蚣三條。煎服一劑即見輕，又服數劑痊愈，此中風能成痿廢之明徵也。

又在本邑治一媪，年過六旬，其素日氣虛，呼吸常覺短氣。偶因勞力過度，忽然四肢痿廢，臥不能起，呼吸益形短氣，其脈兩寸甚微弱，兩尺重按仍有根柢，知其胸中大氣下陷，不能斡旋全身也，為疏方用生箭耆一兩，當歸、知母各六錢，升麻、柴胡、桔梗各錢半，乳香、沒藥各三錢，煎服一劑，呼吸即不短氣，手足略能屈伸。又即原方略為加減，連服數劑痊愈，此氣虛成痿廢之明徵也。

又在本邑治一媪，年五旬，於仲冬之時忽然昏倒不知人，其胸中似有痰涎，大礙呼吸。診其脈，微細欲無，且甚遲緩，其家人謂其平素常覺心中發涼，咳吐粘涎，知其胸中素有寒飲，又感冬日嚴寒之氣，其寒飲愈凝結杜塞也。急用胡椒三錢搗碎，煎兩三沸，取濃汁多半杯灌下，呼吸頓形順利，繼用乾薑六錢，桂枝尖、當歸各三錢，連服三劑，可作呻吟，肢體漸能運動，而左手足仍不能動。繼治以助氣消痰活絡之劑，左手足亦漸復舊，此痰瘀能成痿廢之明徵也。

又在本邑治一室女，素本虛弱，醫者用補斂之藥太過，月事閉塞，兩腿痿廢，浸至抑搔不知疼癢，其六脈皆有澀象，知其經絡皆為瘀血閉塞也。為疏方用拙擬活絡效靈丹（方載三期四卷，係當歸、丹參、乳香、沒藥各五錢），加懷牛膝五錢，紅花錢半，蟻蟲五個。煎服數劑，月事通下，兩腿已漸能屈伸，有知覺。又

為加生黃耆、知母各三錢，服數劑後，腿能任地。然此等證非倉猝所能痊愈，俾將湯劑作為丸劑，久久服之，自能脫然，此血瘀能成痿廢之明徵也。

又治族兄世珍，冬令兩腿作疼，其腿上若胡桃大疙瘩若干。自言其少時恃身體強壯，恆於冬令半冰半水之中捕魚。一日正在捕魚之際，朔風驟至，其寒徹骨，遂急還家歇息，片時兩腿疼痛不能任地，因臥熱炕上，復以厚被。數日後，覺其疼在骨，皮膚轉麻木不仁，浸至兩腿不能屈伸。後經醫調治，兼外用熱燒酒糠熨之，其疼與木漸癒，亦能屈伸，惟兩腿皆不能伸直。有人教坐椅上，腳踏圓木棍來往，令木棍旋轉，久之腿可伸直。如法試演，迨至春氣融和，兩腿始恢復原狀。然至今已三十年，每屆嚴寒之時，腿仍覺疼，必服熱藥數劑始愈，至腿上之疙瘩，乃當時因凍凝結，至今未消者也。愚曰「此病猶可除根。然其寒在骨，非草木之品所能奏效，必須服礦質之藥，因人之骨中多涵礦質也」，俾先用生硫黃細末五分，於食前服之，日兩次，品驗漸漸加多，以服後覺心中微溫為度，果用此方將腿疼之病除根，此風寒濕痺能成痿廢之明徵也。

至西人謂此證關乎腦髓神經者，愚亦確有經驗，原其神經之所以受傷，大抵因腦部充血所致，蓋腦部充血之極，可至腦中血管破裂，至破裂之甚者，管中之血溢出不止，其人即昏厥不復甦醒，若其血管不至破裂，因被充血排擠隔管壁將血滲出，或其血管破裂少許，出血不多而自止，其所出之血若粘滯於左邊司運動之神經，其右邊手足即痿廢，若粘滯其右邊司運動之神經，其左邊之手足即痿廢，

因人之神經原左右互相攝也。此證皆臟腑氣血挾熱上衝，即《內經》所謂血之與氣並走於上之大厥也。其人必有劇烈之頭疼，其心中必覺發熱，其脈象必然洪大或弦長有力。《內經》又謂此證「氣反則生，不反則死」，蓋氣反則氣下行，血亦下行，血管之未破裂者，不再虞其破裂，其偶些些破裂者，亦可因氣血之下行而自愈，若其氣不反，血必隨之上升不已，將血管之未破裂者可至破裂，其已破裂者更血流如注矣。愚因細參《內經》之旨，而悟得醫治此證之方，當重用懷牛膝兩許，以引腦中之血下行，而佐以清火降胃鎮肝之品，俾氣與火不復相並上衝，數劑之後，其劇烈之頭疼必愈，脈象亦必和平。再治以化瘀之品以化其腦中瘀血，而以宣通氣血、暢達經絡之藥佐之，肢體之痿廢者自能徐徐愈也。特是因腦充血而痿廢者，本屬危險之證，所慮者辨證不清，當其初得之時若誤認為氣虛而重用補氣之品，若王勳臣之補陽還五湯，或誤認為中風而重用發表之品，若《千金》之續命湯，皆益助其氣血上行，而危不旋踵矣。至用藥將其腦充血治癒，而其肢體之痿廢或仍不愈，亦可少用參耆以助其氣分，然必須用鎮肝、降胃、清熱、通絡之藥輔之，方能有效。因擬兩方於下，以備採用。

【起痿湯】

治因腦部充血以致肢體痿廢，迨腦充血治癒，脈象和平，而肢體仍痿廢者。徐服此藥，久自能愈。

生箭耆（四錢）、生赭石（六錢軋細）、懷牛膝（六錢）、天花粉（六錢）、玄參（五錢）、柏子仁（四錢）、生杭芍（四錢）、生明沒藥（三錢）、生明乳香（三錢）、蟪蟲（四枚大的）、制馬錢子末（二分）。

共藥十一味。將前十味煎湯，送服馬錢子末，至煎渣再服時，亦送服馬錢子末二分。

【養腦利肢湯】

治同前證，或服前方若干劑後肢體已能運動而仍覺無力者。

野臺參（四錢）、生赭石（六錢軋細）、懷牛膝（六錢）、天花粉（六錢）、玄參（五錢）、生杭芍（四錢）、生明乳香（三錢）、生明沒藥（三錢）、威靈仙（一錢）、蟪蟲（四枚大的）、制馬錢子末（二分）。

共藥十一味。將前十味煎湯，送服馬錢子末。至煎渣再服時，亦送服馬錢子末二分。上所錄二方，為愚新擬之方，而用之頗有效驗，恆能隨手建功，試舉一案以明之。

天津賀某，得腦充血證，左手足驟然痿廢，其脈左右皆弦硬而長，其腦中疼而且熱，心中異常煩躁，投以建瓴湯（見前），為其腦中疼而且熱，更兼煩躁異常，加天花粉八錢，連服三劑後，覺左半身筋骨作疼，蓋其左半身從前麻木無知覺，至此時始有知覺也。其脈之弦硬亦稍愈，遂即原方略為加減，又服數劑，脈象已近和平，手足稍能運動，從前起臥轉身皆需人，此時則無需人矣。於斯改用

起痿湯，服數劑，手足之運動漸有力，而脈象之弦硬又似稍增，且腦中之疼與熱從前服藥已癒，至此似又微覺疼熱，是不受黃耆之升補也，因即原方將黃耆減去，又服數劑，其左手能持物，左足能任地矣，頭中亦分毫不覺疼熱。再診其脈已和平如常，遂又加黃耆，將方中花粉改用八錢，又加天冬八錢，連服六劑可扶杖徐步，仍覺乏力。繼又為擬養腦利肢湯，服數劑後，心中又似微熱，因將花粉改用八錢，又加帶心寸麥冬七錢，連服十劑痊愈。

按：此證之原因不但腦部充血，實又因腦部充血之極而至於溢血，迨至充血溢血治癒，而痿廢仍不愈者，因從前溢出之血留滯腦中未化，而周身經絡兼有閉塞處也。是以方中多用通氣化血之品，又恐久服此等藥或至氣血有損，故又少加參助之，且更用玄參、花粉諸藥以解參、耆之熱，赭石、牛膝諸藥以防參之升，可謂熟籌完全矣。然服後猶有覺熱之時，其脈象仍有稍變弦硬之時，於斯或減參、耆，或多加涼藥，精心酌斟，息息與病機相赴，是以終能治癒也。至於二方中藥品平均之實偏於涼，而服之猶覺熱者，誠以參、耆之性可因補而生熱，兼以此證之由來，又原因臟腑之熱挾氣血上衝也。

論四肢疼痛其病因涼熱各異之治法

從來人之腿疼者未必臂疼，臂疼者未必腿疼，至於腿臂一時並疼，其致疼之因，腿與臂大抵相同矣，而愚臨證四十餘年，治癒腿臂一時並疼者不勝記。獨在奉曾治一媪，其腿臂一時並疼，而致腿疼臂疼之病因則各異，今詳錄其病案於下，以廣醫界之見聞。

奉天西塔郵務局局長佟世恒之令堂，年五十七歲，於仲冬漸覺四肢作疼，延醫服藥三十餘劑，浸至臥床不能轉側，晝夜疼痛不休，至正月初旬，求為診視，其脈左右皆浮而有力，舌上微有白苔，知其兼有外感之熱也。西藥阿斯匹林善發外感之汗，又善治肢體疼痛，俾用一瓦半，白糖水送下，以發其汗。翌日視之，自言汗後疼稍愈，能自轉側，而其脈仍然有力，遂投以連翹、花粉、當歸、丹參、白芍、乳香、沒藥諸藥，兩臂疼愈強半，而腿疼則加劇，自言兩腿得熱則疼減，若服熱藥其疼當愈，於斯又改用當歸、牛膝、續斷、狗脊、骨碎補、沒藥、五加皮諸藥，服兩劑後腿疼見愈，而臂疼又加劇。是一人之身，腿畏涼、臂畏熱也。夫腿既畏涼，其疼也必因有凝結之涼；臂既畏熱，其疼也必因有凝結之熱。籌思再三，實難疏方，細診其脈，從前之熱像已無，其左關不任重按，恍悟其上熱下涼者，因肝木稍虛，或肝氣兼有鬱滯，其肝中所寄之相火不能下達，所以兩腿畏涼；其火鬱於上焦，因肝虛不能敷布，所以兩臂畏熱。向曾治友人劉仲友左臂常常發熱，其肝脈虛而且鬱，投以補肝兼舒肝之劑而愈，以彼例此，知旋轉上熱下



涼之機關，在調補其肝木而已。遂又為疏方用淨莢肉一兩，當歸、白芍各五錢，乳香、沒藥、續斷各四錢，連翹、甘草各三錢，每日煎服一劑。又俾於每日用阿斯匹林一瓦分三次服下，數日痊愈。方中重用莢肉者，因莢肉得木氣最全，酸斂之中大具條暢之性，是以善補肝又善舒肝。《本經》謂其逐寒濕痺，四肢之作疼，亦必有痺而不通之處也。況又有當歸、白芍、乳香、沒藥以為之佐使，故能奏效甚捷也。

答余姚周樹堂為母問疼風證治法

詳觀六十二號《紹興醫報》所登病案，曾患兩膝腫疼，愈而復發，膝踝趾骨皆熱腫痛，連臀部亦腫，又兼目痛。此誠因心肝皆有鬱熱，而關節經絡之間又有風濕熱相並，陰塞血脈之流通，故作腫疼也。後見有胡君天中、張君汝偉皆有答覆，所論病因及治法又皆盡善盡美，似無庸再為擬議。然愚從前治此等證，亦純用中藥，後閱東人醫報見治急性癱麻質斯（即熱性歷節風），喜用西藥阿斯匹林，載有歷治諸案可考驗，後乃屢試其藥，更以中藥駕馭之，尤效驗異常。在奉曾治一幼童得此證，已危至極點，奄奄一息，數日未斷，昇至院中亦治癒（詳案在三期四卷熱性關節疼痛用阿斯匹林治法中）。由斯知西藥之性近和平，試之果有效驗，且洞悉其原質者，固不妨與中藥並用也。爰擬方於下，以備採擇。

阿斯匹林一瓦半，生懷山藥一兩，鮮茅根去淨皮切碎二兩，將山藥、茅根煎湯三茶杯，一日之間分三次溫服，每次送服阿斯匹林半瓦。若服一次周身得汗後，二次阿斯匹林可少用，至翌日三次皆宜少用，以一日間三次所服之阿斯匹林有一次微似有汗即可，不可每次皆有汗也。如此服之，大約兩旬即可愈矣。

按：阿斯匹林之原質存於楊柳皮中，西人又制以硫酸，其性涼而能散，最善治人之肢體關節因風熱腫疼。又加生山藥以滋陰，防其多汗傷液，加鮮茅根以退熱，即以引濕熱自小便出也（後按方服愈，登紹興醫報致謝）。

肢體受寒疼痛可熨以坎離砂及坎離砂製法

藥局中所鬻坎離砂，沃之以醋自能發熱，以熨受寒腿疼及臂疼，頗有效驗，而醫者猶多不知其所以然之故。究其實際，不外物質化合之理也。

按：此砂純係用鐵屑製成，其製法將鐵屑煨紅，即以醋噴滅之，晾乾收貯。用時復以醋拌濕，即能生熱。蓋火非氧氣不著，當鐵屑紅之時，鐵屑中原具有氧氣，經醋噴滅，其氧氣即永留鐵中。況氧氣為酸素，醋味至酸，其含氧氣頗多，以之噴滅紅之鐵，醋中之氧氣亦盡歸鐵中。用時再沃之以醋，其從前所蘊之氧氣，遂感通發動而生熱。以熨因寒痺疼之處，不惟可以驅逐凝寒，更可流通血脈，以人之血脈得氧氣則赤，而血脈之瘀者可化也。

答宗弟相臣問右臂疼治法

據來案云云，臂疼當係因熱。而愚再三思之，其原因斷乎非熱，或經絡間因瘀生熱，故乍服辛涼之品似覺輕也。蓋此證純為經絡之病，治之者宜以經絡為重，而兼顧其臟腑，蓋欲藥力由臟腑而達經絡也。西人治急性關節疼痛，恆用阿斯匹林，然用其藥宜用中藥健運脾胃通行經絡之品輔之。又細閱素服之方皆佳，所以不見效者，大抵因少開痺通竊之藥耳，今擬一方於下。

於白朮（此藥藥局中多用麩炒殊非所宜，當購生者自炒熟，其大小片分兩次炒之軋細）取淨末一兩，乳香、沒藥（二藥須購生者軋成粗渣，隔紙在鍋內烘融化，取出晾乾軋細）各取淨末四錢，朱血竭（此藥未研時外皮作黑色，若研之色若硃砂者方真）研細三錢，當歸身（紙裹置爐旁候乾軋細）淨末七錢，細辛、香白芷細末各錢半，冰片（用樟腦升成者，不必用梅片）、薄荷冰細末各三分，諸藥和勻，貯瓶密封，每服一錢半，絡石籐（俗名爬山虎，能蔓延磚壁之上，其須自粘於壁上不落者方真）煎湯送服，日兩次。方中之義以白朮健脾開痺為主（《本經》謂白朮逐風寒濕痺），佐以白芷去風，細辛去寒，當歸、乳香、沒藥、血竭以通氣活血，冰片、薄荷冰以透竅即以通絡，且脾主四肢，因其氣化先行於右（右關候脾脈是明徵），故右臂尤為脾之所主。丁氏《化學本草》謂沒藥善養脾胃，其溫通之性不但能治氣血痺疼，更可佐白朮以健補脾胃，故於此證尤宜也。至阿

斯匹林，初次宜服半瓦，以得微汗為度，以後每日服兩次，樽節服之，不必令其出汗，宜與自製末藥相間服之，或先或後皆可（後接來函按法治癒）。

論治偏枯者不可輕用王勳臣補陽還五湯

今之治偏枯者多主氣虛之說，而習用《醫林改錯》補陽還五湯，然此方用之有效有不效，更間有服之即僨事者，其故何也？蓋人之肢體運動原腦髓神經為之中樞，而腦髓神經所以能司運動者，實賴腦中血管為之濡潤，胸中大氣為之斡旋。乃有時腦中血管充血過度，甚或至於破裂，即可累及腦髓神經，而腦髓神經遂失其司運動之常職，又或有胸中大氣虛損過甚，更或至於下陷，不能斡旋腦髓神經，而腦髓神經亦恆失其司運動之常職。此二者，一虛一實，同為偏枯之證，而其病因實判若天淵，設或藥有誤投，必至凶危立見。是以臨此證者，原當細審其脈，且細詢其未病之先狀況何如。若其脈細弱無力，或時覺呼吸短氣，病發之後並無心熱頭疼諸證，投以補陽還五湯，恆見效，即不效，亦必不至有何弊病。若其脈洪大有力，或弦硬有力，更預有頭疼眩暈之病，至病發之時，更覺頭疼眩暈益甚，或兼覺心中發熱者，此必上升之血過多，致腦中血管充血過甚，隔管壁泌出血液，或管壁少有罅漏流出若干血液，若其所出之血液，粘滯左邊司運動之神經，其右半身即偏枯，若粘滯右邊司運動之神經，其左半身即偏枯，此時若投以拙擬建瓴湯（方載第二卷腦充血證可預防篇中），一二劑後頭疼眩暈即愈，繼續服之，更加以化痰活絡之品，肢體亦可漸愈。若不知如此治法，惟確信王勳臣補陽還五之說，於方中重用黃耆，其上升之血益多，腦中血管必將至破裂不止也，可不慎哉！如以愚言為不然，而前車之鑒固有醫案可徵也。

邑中孝廉某君，年過六旬，患偏枯，原不甚劇，欲延城中某醫治之，不遇。適有在津之老醫初歸，造門自薦，服其藥後，即昏不知人，遲延半日而卒，後其家人持方質愚，係仿補陽還五湯，重用黃耆八錢。知其必係腦部充血過度以致偏枯也，不然服此等藥何以僨事哉？

又嘗治直隸商品陳列所長王仰泉，其口眼略有歪斜，左半身微有不利，時作頭疼，間或眩暈，其脈象洪實，右部尤甚，知其係腦部充血，問其心中，時覺發熱，治以建瓴湯，連服二十餘劑痊愈。王君愈後甚喜，而轉念忽有所悲，因告愚曰「五舍弟從前亦患此證，醫者投以參、耆之劑，竟至不起。向以為病本不治，非用藥有所錯誤，今觀先生所用之方，乃知前方固大謬也」，統觀兩案及王君之言，則治偏枯者不可輕用補陽還五湯，不愈昭然哉！而當時之遇此證者，又或以為中風而以羌活、防風諸藥發之，亦能助其血益上行，其弊與誤用參、耆者同也。蓋此證雖有因兼受外感而得者，然必其外感之熱傳入陽明，而後激動病根而猝發，是以雖挾有外感，亦不可投以發表之藥也。

答徐韻英問腹疼治法

少年素有痲癖，忽然少腹脹疼，屢次服藥，多係開氣行氣之品，或不效，或效而復發，脈象無力，以愚意見度之，不宜再用開氣行氣之藥。近在奉天有治腹疼二案，詳錄於下，以備參考。

一為門生張德元，少腹素有寒積，因飲食失慎，腸結，大便不下，少腹脹疼，兩日飲食不進，用蓖麻油下之，便行三次而疼脹如故。又投以溫暖下焦之劑，服後亦不覺熱，而疼脹如故，細診其脈，沉而無力。詢之，微覺短氣。疑係胸中大氣下陷，先用柴胡二錢煎湯試服，疼脹少瘥，遂用生箭耆一兩，當歸、黨參各三錢，升麻、柴胡、桔梗各錢半，煎服一劑，疼脹全消，氣息亦順，惟覺口中發乾。又即原方去升麻、黨參，加知母三錢，連服數劑痊愈。

一為奉女師範天史姓學生，少腹疼痛頗劇，脈左右皆沉而無力，疑為氣血凝滯，治以當歸、丹參、乳香、沒藥各三錢，萊菔子二錢，煎服後疼益甚，且覺短氣，再診其脈，愈形沉弱，遂改用升陷湯一劑而愈，此亦大氣下陷，迫擠少腹作疼，是以破其氣則疼益甚，升舉其氣則疼自愈也。

若疑因有痲癖作疼，愚曾經驗一善化痲癖之法。憶在籍時，有人問下焦虛寒治法，俾日服鹿角膠三錢，取其溫而且補也。後月餘晤面，言服藥甚效，而兼獲意外之效，少腹素有積聚甚硬，前竟忘言，因連服鹿角膠已盡消。蓋鹿角膠具溫



補之性，而又善通血脈，林屋山人陽和湯用之以消硬疽，是有效也。又嘗閱喻氏《寓意草》，載有袁聚東痞塊危證治驗，亦宜參觀。

論腰疼治法

方書謂「腰者腎之府，腰疼則腎將憊矣」，夫謂腰疼則腎將憊，誠為確論。至謂腰為腎之府，則尚欠研究。何者？凡人之腰疼，皆脊樑處作疼，此實督脈主之。督脈者，即脊樑中之脊髓袋，下連命門穴處，為人之副腎臟（是以不可名為腎之府）。腎虛者，其督脈必虛，是以腰疼。治斯證者，當用補腎之劑，而引以入督之品。曾擬益督丸一方，徐徐服之，果係腎虛腰疼，服至月餘自愈。

【益督丸】

杜仲四兩酒浸炮黃，菟絲子三兩酒浸蒸熟，續斷二兩酒浸蒸熟，鹿角膠二兩，將前三味為細末，水化鹿角膠為丸，黃豆粒大。每服三錢，日兩次。服藥後，嚼服熟胡桃肉一枚。

諸家本草皆謂「杜仲宜炒斷絲用」，究之，將杜仲炒成炭而絲仍不斷，如此製法殊非所宜，是以此方中惟用生杜仲炮黃為度。胡桃仁原補腎良藥，因其含油質過多，不宜為丸，故於服藥之後單服之。

若證兼氣虛者，可用黃耆、人參煎湯送服此丸。若證兼血虛者，可用熟地、當歸煎湯送服此丸。

有因瘀血腰疼者，其人或過於任重，或自高墜下，或失足閃跌，其脊樑之中存有瘀血作疼，宜治以活絡效靈丹（方載三期第四卷，係當歸丹參、乳香、沒藥各五錢），加蠮蟲三錢，煎湯服，或用蔥白作引更佳。

天津保安隊長李雨霖君依蘭鎮守使李君之弟，腰疼數年不愈，適鎮守使署中書記賈蔚青來津求為治病，因介紹為之診治，其疼劇時心中恆覺滿悶，輕時則似疼非疼，綿綿不已，亦恆數日不疼。其脈左部沉弦，右部沉牢。自言得此病已三年，服藥數百劑，其疼卒未輕減，觀從前所服諸方，雖不一致，大抵不外補肝腎強筋骨諸藥，間有雜以祛風藥者，因思《內經》謂通則不痛，而此則痛則不通也。且即其脈象之沉弦、沉牢，心中恆覺滿悶，其關節經絡必有瘀而不通之處可知也。爰為擬利關節通絡之劑，而兼用補正之品以輔助之。

生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（八錢）、當歸（四錢）、丹參（四錢）、生明沒藥（四錢）、生五靈脂（四錢）、穿山甲（二錢炒搗）、桃仁（二錢）、紅花（錢半）、蠮蟲（五枚）、廣三七（二錢搗細）。

藥共十一味。先將前十味煎湯一大盅，送服三七細末一半，至煎渣再服時，仍送服其餘一半，此藥服至三劑，腰已不疼，心中亦不發悶，脈較前緩和，不專在沉分。遂即原方去山甲，加胡桃肉四錢。連服十劑，自覺身體輕爽。再診其脈，六部調勻，腰疼遂從此除根矣。就此證觀之，凡其人身形不羸弱而腰疼者，大抵係關節經絡不通，其人顯然羸弱而腰疼者，或肝腎有所虧損而然也。

在婦女又恆有行經時腰疼者，曾治一人，年過三旬，居恆呼吸覺短氣，飲食似畏寒涼，當行經時覺腰際下墜作疼。其脈象無力，至數稍遲，知其胸中大氣虛而欲陷，是以呼吸氣短，至行經時因氣血下注大氣亦隨之下陷，是以腰際覺下墜作疼也，為疏方用生箭耆一兩，桂枝尖、當歸、生明沒藥各三錢，連服七八劑，其病遂愈。

又治一婦人行經腰疼且兼腹疼，其脈有澀象，知其血分瘀也。治以當歸、生雞內金各三錢，生明沒藥、生五靈脂、生箭耆、天花粉各四錢，連服數劑痊愈。

論足趾出血治法

族嬭母，年過三旬，右足大趾甲角近隱白穴處，忽流出紫黑之血，強纏以帶，血止不流即脹疼不堪。求治於外科，言此名血箭，最為難治。服其藥數劑分毫無效。時愚甫弱冠，診其脈洪滑有力，知血分蘊有實熱，詢之果覺灼熱，用生地一兩，天花粉、生杭芍各六錢，黃芩、龍膽草、甘草各二錢，連服數劑痊愈。

論骨雷治法

骨雷之證他書未見，獨明季錢塘錢君穎國賓著《經歷奇證》載鎮江錢青藜，中年無病，一日足跟後作響，數日漸響至頭，竟如雷聲。醫者不識何病，適余南歸，阻泊京口，會青藜於涼亭，偶言此證，余以骨雷告之，候其脈獨腎脈亢大，舉之始見，按之似無此腎敗也。自下響而上者，足少陰腎經之脈起於足小趾，下斜走足心，出然谷之下，循內踝上行，且腎主骨，虛則髓空，髓空則鳴，所以骨響自腳跟上達至頭，此雷從地起回應天上也。以六味丸和紫河車膏、虎骨膏、豬髓、枸杞、杜仲萬示之，次年冬複之京口，問之已痊愈矣。

答黃兩岩問接骨方並論及接筋方

接骨之方甚多，然求其效而速者，獨有一方可以公諸醫界。方用甜瓜子、生菜子各一兩，小榆樹的鮮嫩白皮一兩，再加真芝麻油一兩，同搗如泥，敷患處，以布纏之，不過半點鐘，覺骨接上即去藥，不然恐骨之接處起節。自得此方後，門人李子博曾用以治馬甚效，想用以治人亦無不效也。且試驗可在數刻之間，設有不效，再用他方亦未晚也。

人之筋骨相著，然骨以剛而易折，筋以韌而難斷，是以方書中治接骨之方甚伙，而接筋之方甚鮮也。諸家本草多言旋覆花能續斷筋，《群芳譜》謂菑根能續斷筋。菑根愚未試過，至旋覆花邑中有以之治牛馬斷筋者，甚效。其方初則秘而不傳，當耕地之時，牛馬多有因驚駭奔逸被犁頭鏟斷腿上筋者，敷以所制之藥，過兩旬必愈，後愚為其家治病，始詳言其方。且言此方受之異人，本以治人，而以治物類亦無不效。因將其方詳錄於下。

方用旋覆花細末五六錢，加白蔗糖兩許，和水半茶杯同熬成膏。候冷加麝香少許（無麝香亦可），攤布上，纏傷處。至旬日，將藥揭下，筋之兩端皆長一小疙瘩。再換藥一帖，其兩小疙瘩即連為一，而斷者續矣。若其筋斷在關節之處，又必須設法閉住，勿令其關節屈伸，筋方能續。

按：《外臺秘要》有急續斷筋方，取旋覆花根洗淨搗敷創上。日一二易，瘡止，是取其鮮根搗爛用之也。因藥局無旋覆花根，是以後世用者權用其花，想性

亦相近，故能奏效。然旋覆花各處皆有，多生澤邊。科高二尺許，葉如棉柳（編筐之柳），多斜紋，六月開黃花，作圓形，瓣細如絲，大如小銅錢，故亦名金錢菊。



〈 第 五 卷 〉

此卷論傷寒、溫病、溫疹及傷暑、瘧疾。傷寒治法以《傷寒論》為主，而於論中緊要之方多所發明，溫病則於葉、吳諸家之外另有見解，實由熟讀《傷寒論》悟出。暑、瘧二證各錄一則，亦皆得諸實驗。

論傷寒脈緊及用麻黃湯之變通法

《傷寒論》之開卷，謂傷風脈浮，傷寒脈緊。夫脈浮易辨矣，惟脈緊則殊難形容，論者多謂形如轉索，而轉索之形指下又如何摸尋也。蓋此脈但憑空形容，學者卒無由會解，惟講明其所以緊之理，自能由理想而得緊脈之實際矣。

凡脈之緊者必有力。夫脈之跳動，心臟主之，而其跳動之有力，不但心主之也，諸臟腑有熱皆可助脈之跳動有力，營衛中有熱亦可助脈之跳動有力。特是脈之有力者，恒若水之有浪，大有起伏之勢，而緊脈雖有力，轉若無所起伏。誠以嚴寒束其外表，其收縮之力能逼營衛之熱內陷與脈相並，以助其有力，而其收縮之力又能遏抑脈之跳動，使無起伏。是緊脈之真相，原於平行中見其有力也。至於緊脈或左右彈者，亦蓄極而旁溢之象也。仲師治以麻黃湯，所以解外表所束之寒也。特是用麻黃湯以解其外寒，服後遍體汗出，惡寒既愈，有其病從此遂愈者，間有從此仍不愈，後浸發熱而轉為陽明證者，其故何也？愚初為人診病時，亦未解其故，後乃知服麻黃湯汗出後，其營衛內陷之熱，若還表隨汗消散，則其病即愈。若其熱不復還表而內陷益深，其熱必將日增，此即太陽轉陽明之病也。悟得此理後，再用麻黃湯時，必加知母數錢以解其內陷之熱，服後未有不愈者矣。三期五卷傷寒門中載有麻黃加知母湯，方後另有發明，可參觀也。

上所論者，麻黃湯原宜加知母矣，而間有不宜加者，此又不得不斟酌也。己巳臘底，曾治天津鼓樓東萬德永面莊理事張金鐸，年近四旬，先得傷寒證，延醫

治愈。繼出門作事，又冒寒，其表裡俱覺寒涼，頭疼，氣息微喘，身體微形寒戰。診其脈，六部皆無，不禁愕然。問其心中，猶平穩，知猶可治。蓋此證屬重感，氣體虛弱，寒邪侵入甚深，阻其經絡之流通，故六脈皆閉也。投以麻黃湯加生黃耆一兩，服後周身得汗，其脈即出，病亦遂愈。

又曾治一人，年過三旬，身形素羸弱，又喜吸鴉片。於冬令得傷寒證，因粗通醫學，自服麻黃湯，分毫無汗。求為診視，脈甚微細，無緊象。遂即所用原方，為加生黃耆五錢，服後得汗而愈。此二證皆用麻黃湯是不宜加知母，宜加黃耆者也。

又嘗治一少年，於季冬得傷寒證，其人陰分素虧，脈近六至，且甚弦細，身冷惡寒，舌苔淡白。延醫診視，醫者謂脈數而弱，傷寒雖在初得，恐不可用麻黃強發其汗。此時愚應其近鄰之聘，因邀愚至其家，與所延之醫相商。愚曰「麻黃發汗之力雖猛，然少用則無妨，再輔之補正之品，自能穩妥奏功矣」。遂為疏方麻黃錢半，桂枝尖一錢，杏仁、甘草各錢半，又為加生懷山藥、北沙參各六錢。囑其煎湯服後，若至兩點鐘不出汗，宜服西藥阿斯必林二分許，以助其出汗。後果如法服之，周身得汗而愈矣。

又曾治鄰村李姓少年，得傷寒證已過旬日，表證未罷，時或惡寒，頭猶微疼，舌苔猶白，心中微覺發熱，小便色黃，脈象浮弦，重按似有力，此熱入太陽之府（膀胱）也。投以麻黃湯，為加知母八錢，滑石六錢，服後一汗而愈。

按：此證雖在太陽之表與府，實已連陽明，故方中重用知母以清陽明之熱，而仍用麻黃解其表，俾其餘熱之未盡清者，仍可由汗而消散，此所以一汗而愈也。至於《傷寒論》中載有其病重還太陽者，仍宜以麻黃湯治之，而愚遇此證，若用麻黃湯時亦必重加知母也，至於麻黃當用之分量，又宜隨地點而為之輕重。愚在籍時，用麻黃發表至多不過四錢，後南遊至漢皋，用麻黃不過二錢，迨戊午北至奉天，用麻黃發表恒有用至六錢始能出汗者，此宜分其地點之寒熱，視其身體之強弱，尤宜論其人或在風塵勞苦，或在屋內營生，隨地隨人斟酌定其所用之多寡，臨證自無差謬也。

論大青龍湯中之麻黃當以薄荷代之

古時藥品少，後世藥品多，如薄荷之辛涼解肌，原為治外感有熱者之要藥，而《神農本草經》未載，《名醫別錄》亦未載，是以《傷寒論》諸方原有當用薄荷而仲師不用者，因當時名薄荷為苛，間有取其苛辣之味，少用之以調和食品，猶未嘗用之入藥也。曾治鄰村武生夏彭齡，年過三旬，冬令感冒風寒，周身惡寒無汗，胸中則甚覺煩躁，原是大青龍湯證，醫者誤投以麻黃湯，服後汗無分毫而煩躁益甚，幾至瘋狂，其脈洪滑而浮，投以大青龍湯，以薄荷葉代麻黃，且因曾誤服麻黃湯，方中原有桂枝，並桂枝亦權為減去。煎服後，覆杯之頃，汗出如洗，病若失。

按：此證當係先有蘊熱，因為外寒所束，則蘊熱益深，是以煩躁，方中重用石膏以化其蘊熱，其熱化而欲散，自有外越之機，再用辛涼解肌之薄荷以利導之，是以汗出至易也。若從前未誤服麻黃湯者，用此方時不去桂枝亦可，蓋大青龍之原方所用桂枝原無多也。

用小青龍湯治外感痰喘之經過及變通之法

傷寒、溫病心下蓄有水飲作喘者，後世名之為外感痰喘，此外感中極危險之證也。醫者若診治此等證自逞其私智，無論如何利痰、如何定喘，遇此證之輕者或可幸愈，至遇此證之劇者皆分毫無效。惟投以傷寒論小青龍湯則必效。特是小青龍湯兩見於《傷寒論》（太陽篇），其所主之證為表不解，心下有水氣，乾嘔，發熱而咳。其兼證有六，亦皆小青龍湯加減主之，而喘證附於其末。因此，閱者多忽不加察。又醫者治外感之喘，多以麻黃為要藥，五味子為忌藥，小青龍湯中麻黃、五味並用，喘者轉去麻黃加杏仁，而不忘五味之斂住外邪，此尤其心疑之點而不敢輕用，即愚初為人診病時，亦不知用也。猶憶歲在乙酉，鄰村武生李杏春，年三十餘，得外感痰喘證，求為診治。其人體豐，素有痰飲，偶因感冒風寒，遂致喘促不休，表裡俱無大熱，而精神不振，略一合目即昏昏如睡，胸膈又似滿悶，不能飲食，舌苔白膩，其脈滑而濡，至數如常。投以散風清火利痰之劑，數次無效。繼延他醫數人診治，皆無效。遷延日久，勢漸危險，復商治於愚。愚診一老醫皮隆伯先生，年近八旬，隱居渤海之濱，為之介紹延至。診視畢，曰「此易治，小青龍湯證也」，遂開小青龍湯原方加杏仁三錢，仍用麻黃一錢，一劑喘定繼用苓桂朮甘湯加天冬、厚朴，服兩劑痊愈。

愚從此知小青龍湯之神妙，自咎看書未到，遂廣閱《傷寒論》諸家注疏，至喻嘉言《尚論篇》論小青龍湯處，不覺狂喜起舞，因歎曰「使愚早見此名論，何

至不知用小青龍湯也」，從此以後，凡遇外感喘證可治以小青龍湯者，莫不投以小青龍湯。而臨證細心品驗，知外感痰喘之挾熱者，其肺必脹，當仿《金匱》用小青龍湯之加石膏，且必重加生石膏方效。迨至癸巳，李杏春又患外感痰喘，復求愚為診治，其證脈大略如前，而較前熱盛，投以小青龍湯去麻黃，加杏仁三錢，為其有熱又加生石膏一兩，服後其喘立止。藥力歇後，而喘仍如故，連服兩劑皆然，此時皮姓老醫已沒，無人可以質正，愚方竭力籌思，將為變通其方，其岳家滄州為送醫至，愚即告退。後經醫數人，皆延自遠方，服藥月餘，竟至不起。

愚因反復研究，此證非不可治，特用藥未能吻合，是以服藥終不見效。徐靈胎謂「龍骨之性，斂正氣而不斂邪氣」，故《傷寒論》方中，仲景於邪氣未盡者，亦用之。外感喘證服小青龍湯愈而仍反復者，正氣之不斂也，遂預擬一方，用龍骨、牡蠣（皆不煨）各一兩以斂正氣，蘇子、清半夏各五錢以降氣利痰，名之曰從龍湯，謂可用於小青龍湯之後。甫擬成，適有愚外祖家近族舅母劉媪得外感痰喘證，迎為診治，投以小青龍湯去麻黃、加杏仁，為脈象有熱，又加生石膏一兩，其喘立愈。翌日喘又反復，而較前稍輕。又投以原方，其喘止後遲四五點鐘，遂將從龍湯煎服一劑，其喘即不反復而脫然痊愈矣。

因將其方向醫界同人述之。有毛仙閣者，邑中宿醫，與愚最相契，聞愚言醫學，莫不確信。聞此方後，旋為邑中盧姓延去。其處為疫氣傳染，患痰喘者四人已死其三，盧叟年過六旬，得病兩日，其喘甚劇，仙閣投以小青龍湯去麻黃，加



杏仁、生石膏，服後喘定，迨藥力歇後，似又欲作喘，急將從龍湯煎服，其病遂愈，由斯用二方治外感痰喘，誠覺確有把握，而臨證品驗既久，益知從龍湯方若遇脈虛弱者，宜加淨萸肉、生山藥，或更加人參、赭石；其脈有熱者，宜加生石膏、知母；若熱而且虛者，更宜將人參、生石膏並加於方中，或於服小青龍湯之先，即將諸藥備用，以防服小青龍湯喘止後轉現虛脫之象，或汗出不止，或息微欲無，或脈形散亂如水上浮麻，莫辨至數（若此者皆愚臨證經驗所遇。不早備藥恐取藥無及）。至於小青龍湯除遵例加杏仁、石膏之外，若人參、萸肉諸補藥之加於從龍湯者，猶不敢加於其中，誠以其時外感未淨，裡飲未清，不敢參以補藥以留邪也。孰意愚不敢用者，而閱歷未深者轉敢用之，為治斯證者別開捷徑，亦云奇哉。爰詳錄之於下。

門人高如璧曾治一外感痰喘，其喘劇脈虛，醫皆諉為不治。如璧投以小青龍湯，去麻黃，加杏仁，又加生石膏一兩，野臺參五錢。一劑而喘定。恐其反復，又繼投以從龍湯，亦加人參與生石膏，其病霍然頓愈。

又長男蔭潮治鄰莊張馬村曲姓叟，年六十餘，外感痰喘，十餘日不能臥。醫者投以小青龍湯兩劑，病益加劇（脈有熱而不敢多加生石膏者其病必加劇）。蔭潮視之，其脈搏一息六至，上焦煩躁，舌上白苔滿布，每日大便兩三次，然非滑瀉。審證論脈，似難挽回，而蔭潮仍投以小青龍湯，去麻黃，加杏仁，又加野臺參三錢，生龍骨、生牡蠣各五錢，生石膏一兩半。一劑病癒強半，又服一劑痊愈。

按：前案但加補氣之藥於小青龍湯中，後案並加斂氣之藥於小青龍湯中，似近於少年鹵莽，而皆能挽回至險之證，亦可為用小青龍湯者多一變通之法矣。特是古今之分量不同，欲將古之分量變為今之分量，諸家之說各異。今將古小青龍湯之分量列於前，今人常用小青龍湯之分量列於後，以便人之採取。

【小青龍湯原方】

麻黃去節三兩、芍藥三兩、五味子半升、乾薑三兩、甘草炙三兩、細辛三兩、桂枝去皮三兩、半夏半升湯洗。

上八味，以水一斗，先煮麻黃，減二升，去上沫，納諸藥，煮取三升，去滓，溫服一升，若微利者，去麻黃，加薤花如雞子大，熬令赤色（熬即炒也，今無此藥可代以滑石），若渴者，去半夏，加栝蒌根三兩。若噎者（即呃逆），去麻黃，加附子一枚炮。若小便不利，少腹滿，去麻黃，加茯苓四兩。喘者，去麻黃，加杏仁半升去皮。

【小青龍湯後世所用分量】

麻黃二錢、桂枝尖二錢、清半夏二錢、生杭芍三錢、甘草錢半、五味子錢半、乾薑一錢、細辛一錢。

此後世方書所載小青龍湯分量，而愚略為加減也。喘者原去麻黃，加杏仁。愚於喘證之證脈俱實者，又恒加杏仁三錢，而仍用麻黃一錢，則其效更捷，若證

雖實而脈象虛弱者，麻黃即不宜用，或只用五分，再加生山藥三錢以佐之亦可。惟方中若加生石膏者，仍可用麻黃一錢，為石膏能監製麻黃也。

《傷寒論》用小青龍湯無加石膏之例，而《金匱》有小青龍加石膏湯，治肺脹，咳而上氣，煩躁而喘，脈浮者，心下有水。是以愚治外感痰喘之挾熱者，必遵《金匱》之例，酌加生石膏數錢，其熱甚者又常用至兩餘。《傷寒論》小青龍湯治喘，去麻黃加杏仁者，因喘者多兼元氣不能收攝，故不取麻黃之溫散，而代以杏仁之苦降。至《金匱》小青龍加石膏湯，有石膏之寒涼鎮重，自能監製麻黃，不使過於溫散，故雖治喘而肺脹兼煩躁者，不妨仍用麻黃，為不去麻黃，所以不必加杏仁也。惟此湯與越婢加半夏湯，皆主肺脹作喘，而此湯所主之證又兼煩躁，似更熱於越婢加半夏湯所主之證，乃越婢加半夏湯中石膏半斤，小青龍湯所加之石膏只二兩，且又有桂枝、薑、辛諸藥為越婢加半夏湯中所無，平均其藥性，雖加石膏二兩，仍當以熱論，又何以治肺脹煩躁作喘乎？由斯知其石膏之分量必有差誤，是以愚用此方時，必使石膏之分量遠過於諸藥之分量，而後能勝熱定喘，有用此湯者尚其深思愚言哉。

外感之證多忌五味，而兼痰飲喘嗽者尤忌之，以其酸斂之力，能將外感之邪錮閉肺中，而終身成勞嗽也。惟與乾薑並用，濟之以至辛之味，則分毫無礙。按五行之理，辛能勝酸，《內經》原有明文，若不宜用乾薑之熱者，亦可代以生薑，

《金匱》射干麻黃湯生薑與五味並用可知也。若恐五味酸斂過甚，可連核搗爛，取核味之辛以濟皮味之酸，更穩妥。

喻嘉言曰「桂枝、麻黃湯無大小，而青龍湯有大小者，以桂枝、麻黃湯之變法多，大青龍湯之變法不過於麻桂二方內施其化裁，或增或去，或饒或減，其中神化莫可端倪。又立小青龍一法，散邪之功兼乎滌飲，取義山澤小龍養成頭角，乘雷雨而翻江攪海，直奔龍門之意，用以代大青龍而擅江河行水之力，立法誠大備也。因經叔和之編次，漫無統紀，昌於分篇之際，特以大青龍為綱，於中麻、桂諸法悉統於青龍項下，擬為龍背、龍腰、龍腹，然後以小青龍尾之。或飛、或潛，可彌、可伏，用大、用小，曲暢無遺，居然仲景通天手眼馭龍心法矣。昔有善畫龍者，舉筆凝思，而青天忽生風雨，吾不知仲景制方之時，其為龍乎，其為仲景乎，必有倏焉雷雨滿盈（大青龍湯），倏焉密雲不雨（桂枝二越婢一湯），倏焉波浪奔騰（小青龍湯），倏焉天日開朗（真武湯），以應其生心之化裁者。神哉青龍等方，即擬為九天龍經可也」。

又曰「婁東胡貞臣先生，昌所謂賢士大夫也。夙昔痰飲為恙，夏日地氣上升，痰即內動，設有外感，隔間痰即不行，兩三日瘥後，當胸尚結小座，無醫不詢，無方不考，乃至夢寐懇求大士治療，因而聞疾思苦，深入三摩地位，薦分治病手眼，今且仁智兼成矣。昌昔謂膀胱之氣流行，地氣不升，則天氣常朗，其偶受外感，則仲景之小青龍湯一方，與大士水月光中大圓鏡智，無以異也。蓋無形之感，

挾有形之痰，互為膠漆，其當胸窟宅，適在太陽經位，惟於麻、桂方中倍加五味、半夏以滌飲而收陰，加乾薑、細辛以散結而分邪，合而用之，令藥力適在痰飲結之處，攻擊片時，則無形之感從肌膚出，有形之痰從水道出，頃刻分解無餘，而膺胸空曠，不復叢生小瘞矣。若泥麻、桂甘溫，減去不用，則不成為龍矣。將恃何物為翻波鼓浪之具乎？觀喻氏二節之論，實能將小青龍湯之妙用盡行傳出。其言詞之妙，直勝於生公說法矣。

小青龍湯為治外感痰喘之神方。其人或素有他證，於小青龍湯不宜，而至於必須用小青龍湯時，宜將其方善為變通，與素有之證無妨，始能穩妥奏功。徐靈胎曰「松江王孝賢夫人，素有血證，時發時止，發則微嗽。又因感冒，變成痰喘，不能著枕，日夜俯几而坐，竟不能支持矣。斯時有常州名醫法丹書調治不效，延余至，余曰『此小青龍湯證也』，法曰『我固知之，但體弱而素有血證，麻、桂諸藥可用乎』？余曰『急則治標，若更喘數日殆矣。且治其新病，愈後再治其本病可也』，法曰『誠然，病家焉能知之。如用麻、桂而本病復發，則不咎病本無治，而恨用麻、桂誤之矣。我乃行道者，不能任其咎。君不以醫名，我不與聞，君獨任之可也』，余曰『然，服之有害我自當之。但求先生不阻之耳』，遂與服。飲畢而氣平，終夕安然。後以消痰潤肺養陰開胃之方調之，體乃復舊」。

按：血證雖並忌麻、桂，然所甚忌者桂枝，而不甚忌麻黃，且有風熱者誤用桂枝則吐衄，徐氏曾於批葉天士醫案中諄諄言之。其對於素有血證者投以小青龍

湯，必然有所加。特其《洄溪醫案》凡於用藥之處皆渾括言之，略舉大意，用古方縱有加減，而亦略而不言也。至愚若遇此證用小青龍湯時，則必去桂枝，留麻黃，加龍骨、牡蠣（皆生用）各數錢，其有熱者加知母，熱甚者加生石膏。則證之陳新皆顧，投之必效，而非孤注之擲矣。

小青龍湯雖善治外感作喘，而愚治外感作喘亦非概用小青龍湯也。今即愚所經驗者，縷析條分，臚列於下，以備治外感作喘者之採用。

（一）氣逆迫促，喘且呻，或兼肩息者，宜小青龍湯減麻黃之半，加杏仁。熱者加生石膏。若其脈虛而兼數者，宜再加知母。

（二）喘狀如前，而脈象無力者，宜小青龍湯去麻黃，加杏仁，再加人參、生石膏。

（三）喘不至呻，亦不肩息，惟吸難呼易，苦上氣，其脈虛而無力或兼數者，宜拙擬滋陰清燥湯（方載三期五卷）。

（四）喘不甚劇，呼吸無聲，其脈實而至數不數者，宜小青龍湯原方加生石膏。若脈數者，宜減麻黃之半，加生石膏、知母。

（五）喘不甚劇，脈洪滑而浮，舌苔白厚，胸中煩熱者，宜拙擬寒解湯（方載三期第五卷）。服後自然汗出，其喘即愈。

（六）喘不甚劇，脈象滑實，舌苔白厚，或微兼黃者，宜白虎湯少加薄荷葉。

(七)喘而發熱，脈象洪滑而實，舌苔白或兼黃者，宜白虎湯加瓜蒌仁。  
(八)喘而發熱，其脈象確有實熱，至數兼數，重按無力者，宜白虎加人參，再加川貝、蘇子。若虛甚者，宜以生山藥代粳米。

(九)喘而結胸者，宜酌其輕重，用《傷寒論》中諸陷胸湯丸，或拙擬蕩胸湯（方載三期第六卷）以開其結，其喘自愈。

(十)喘而煩躁，胸中滿悶，不至結胸者，宜越婢加半夏湯，再加瓜蒌仁。若在暑熱之時，宜以薄荷葉代方中麻黃。

至於麻黃湯證恒兼有微喘者，服麻黃湯原方即愈。業醫者大抵皆知，似無庸愚之贅言。然服藥後喘雖能愈，不能必其不傳陽明。惟於方中加知母數錢，則喘愈而病亦必愈。

平均小青龍湯之藥性，當以熱論，而外感痰喘之證又有熱者十之八九，是以愚用小青龍湯三十餘年，未嘗一次不加生石膏。即所遇之證分毫不覺熱，亦必加生石膏五六錢，使藥性之涼熱歸於平均。若遇證之覺熱，或脈象有熱者，則必加生石膏兩許或一兩強。若因其脈虛用人參於湯中者，即其脈分毫無熱，亦必加生石膏兩許以輔之，始能受人參溫補之力。至其證之或兼煩躁，或表裡壯熱者，又宜加生石膏至兩半或至二兩，方能有效。曾有問治外感痰喘於愚者，語以當用小青龍湯及如何加減之法，切囑其必多加生石膏然後有效。後其人因外感病發，自治不愈，勢極危殆，倉惶迎愚。既至知其自服小青龍湯兩劑，每劑加生石膏三錢，

服後其喘不止，轉加煩躁，惴惴惟恐不愈，乃仍為開小青龍湯，去麻黃，加杏仁，又加生石膏一兩。一劑喘止，煩躁亦愈十之八九。又用生龍骨、生牡蠣各一兩，蘇子、半夏、牛蒡子各三錢，生杭芍五錢（此方係後定之從龍湯），為其仍有煩躁之意又加生石膏一兩。服後霍然痊愈。此證因不敢重用生石膏，幾至病危不起。彼但知用小青龍湯以治外感痰喘，而不重用生石膏以清熱者，尚其以茲為鑒哉。



論白虎湯及白虎加人參湯之用法

白虎湯方三見於《傷寒論》。一在《太陽篇》，治脈浮滑。一在《陽明篇》，治三陽合病自汗出者。一在《厥陰篇》，治脈滑而厥。注家於陽明條下，謂苟非自汗，恐表邪抑塞，亦不敢鹵莽而輕用白虎湯。自此說出，醫者遇白虎湯證，恒因其不自汗出即不敢用，此誤人不淺也。蓋寒溫之證，邪愈深入則愈險，當其由表入裡，陽明之府漸實，急投以大劑白虎湯，皆可保完全無虞。設當用而不用，由胃實以至腸實而必須降下者，已不敢保其完全無虞也。況自汗出之文惟《陽明篇》有之，而《太陽篇》但言脈浮滑，《厥陰篇》但言脈滑而厥，皆未言自汗出也。由是知其脈但見滑象，無論其滑而兼浮、滑而兼厥，皆可投以白虎湯，經義昭然，何醫者不知尊經，而拘於注家之謬說也。

特是白虎湯證，《太陽》、《厥陰篇》皆言其脈，而《陽明篇》未嘗言其脈象何如。然以《太陽篇》之浮滑、《厥陰篇》之滑而厥，比例以定其脈，當為洪滑無疑。夫白虎湯證之脈象既不同，至用白虎湯時，即不妨因脈象之各異而稍為變通，是以其脈果為洪滑也，知係陽明府實，投以大劑白虎湯原方，其病必立愈。其脈為浮滑也，知其病猶連表，於方中加薄荷葉錢，或加連翹、蟬退各一錢，服後須臾即可由汗解而愈（此理參看三期第五卷寒解湯下詮解自明）。其脈為滑而厥也，可用白茅根煮湯以之煎藥，服後須臾厥回，其病亦遂愈，此愚生平經驗有得，故敢確實言之也。至白虎加人參湯兩見於《傷寒論》。一在《太陽上篇》，

當發汗之後，一在《太陽下篇》，當吐下之後，其證皆有白虎湯證之實熱，而又兼渴，此因汗吐下後傷其陰分也。為其陰分有傷，是以《太陽上篇》論其脈處，但言洪大，而未言洪大而不滑，其傷陰分可知也。至《太陽下篇》，未嘗言脈，其脈與上篇同，又可知也。於斯加人參於大隊寒潤之中，能濟腎中真陰上升，協同白虎以化燥熱，即以生津止渴，渴解熱消，其病自愈矣。

獨是白虎加人參湯宜用於汗、吐、下後證兼渴者，亦有非當汗、吐、下後，其證亦非兼渴，而用白虎湯時亦有宜加人參者。其人或年過五旬，或氣血素虧，或勞心勞力過度，或陽明府熱雖實而脈象無力，或脈搏過數，或脈雖有力而不數，仍無滑象，又其脈或結代者，用白虎湯時皆宜加人參。至於婦人產後患寒溫者，果係陽明胃腑熱實，亦可治以白虎湯，無論其脈象何如，用時皆宜加人參，而愚又恒以玄參代知母，生山藥代粳米，用之尤為穩妥。誠以產後腎虛，生山藥之和胃不讓粳米，而汁漿稠黏兼能補腎，玄參之清熱不讓知母，而滋陰生水亦善補腎也。況石膏、玄參《本經》原謂其可用於產乳之後，至知母則未嘗明言，愚是以謹遵《本經》而為之變通。蓋膽大心小，醫者之責。凡遇險證之猶可挽救者，固宜毅然任之不疑，而又必熟籌完全，不敢輕視人命，為孤注之一擲也。至方中所用之人參，當以山西之野黨參為正，藥房名為獅頭黨參，亦名野黨參，生苗處狀若獅頭，皮上皆橫紋，吉林亦有此參，形狀相似，亦可用，至若高麗參、石柱參（亦名別直參），性皆燥熱，不可用於此湯之中。

按：白虎湯、白虎加人參湯皆治陽明胃實之藥，大、小承氣湯皆治陽明腸實之藥，而愚治寒溫之證，於陽明腸實大便燥結者，恒投以大劑白虎湯，或白虎加人參湯，往往大便得通而愈，且無下後不解之虞。間有服藥之後大便未即通下者，而少投以降下之品，或用玄明粉二三錢和蜜沖服，或用西藥旃那葉錢半開水浸服，其大便即可通下。蓋因服白虎湯及服白虎加人參湯後，壯熱已消，燥結已潤，自易通下也。

論大承氣湯厚朴分量似差及變通法

傷寒之證，初得易治，以其在表也。迨由表而裡，其傳遞漸深，即病候浸險。為其險也，所用之方必與病候息息吻合，始能化險為夷，以挽回生命。有如大承氣湯一方，《傷寒論》中緊要之方也，陽明熱實大便燥結，及陽明熱實汗多者用之。少陰熱實下利清水，色純青，心下痛者用之。其方大黃四兩，厚朴半斤，枳實五枚，芒硝三合。上四味，以水一斗，先煮厚朴、枳實，取五升，去滓，納大黃，煮二升，納芒硝，更上微火煮一兩沸，分溫再服。

按：此方分兩次服，則大黃二兩當為今之六錢（古一兩為今之三錢），厚朴四兩為當今之一兩二錢。夫陽明病用此方者，乃急下之以清陽明之燥熱也，少陰病用此方者，急下之以存少陰之真陰也。清熱存陰，不宜再用燥熱之藥明矣。厚朴雖溫而非熱，因其有燥性，溫燥相合即能化熱，方中竟重用之使倍於大黃，混同煎湯，硝、黃亦不覺其涼矣。況厚朴味辛，又具有透表之力，與陽明病汗多者不宜，誠恐汗多耗津，將燥熱益甚也。以愚意揣之，厚朴之分量其為傳寫之誤無疑也。且小承氣湯，厚朴僅為大黃之半，調胃承氣湯，更減去厚朴不用，是知承氣之注重藥在大黃，不在厚朴，比例以觀，益知厚朴之分量有差誤也。

再者，大承氣湯方載於《陽明篇》第三十節後，此節之文原以「陽明病脈遲」五字開端，所謂脈遲者，言其脈象雖熱而至數不加數也（非謂其遲於平脈）。此乃病者身體素壯，陰分尤充足之脈，病候至用大承氣湯時，果能有如此脈象，投

以大承氣湯原方，亦可隨手奏效，而今之大承氣湯證如此脈象者，實不多見也。此乃半關天時、半關人事，實為古今不同之點，即厚朴之分量原本如是，醫者亦當隨時制宜為之通變化裁，方可為善師仲景之人。非然者，其脈或不遲而數，但用硝、黃降之猶恐降後不解，因陰虛不能勝其燥熱也，況更重用厚朴以益其燥熱乎！又或其脈縱不數，而熱實脈虛，但用硝、黃降之，猶恐降後下脫，因其氣分原虧，不堪硝、黃之推蕩也，況敢重用厚朴同枳實以破其氣乎！昔葉香岩用藥催生，曾加梧桐葉一片作引，有效之者，轉為香岩所笑。或問其故，香岩謂「余用梧桐葉一片時，其日為立秋，取梧桐一葉落也。非其時，將用梧桐葉何為」？由斯知名醫之治病，莫不因時制宜，原非膠柱鼓瑟也。是以愚用承氣湯時，大黃、芒硝恒皆用至七八錢，厚朴、枳實不過用二錢，或仿調胃承氣湯之義，皆減去不用，外加生赭石細末五六錢，其攻下之力不減大承氣原方，而較諸原方用之實為穩妥也。至其脈象數者，及脈象雖熱而重按無力者，又恒先投以大劑白虎加人參湯，煎湯一大碗，分數次溫飲下，以化胃中燥熱，而由胃及腸即可潤其燥結，往往有服未終劑，大便即通下者，且下後又無虞其不解，更無慮其下脫也。其間有大便未即通下者，可用玄明粉三錢，或西藥硫苦四錢，調以蜂蜜，開水沖服，或外治用豬膽汁導法，或用食鹽（若用熱火硝所出之鹽更佳）融水灌腸，皆可通下。至通下之後，亦無不愈者，《衷中參西錄》第六卷所載治癒寒溫諸案可考也。

《傷寒論》大承氣湯病脈遲之研究及脈不遲轉數者之變通下法

嘗讀《傷寒論》大承氣湯證，其首句為陽明病脈遲，此見陽明病脈遲為當下之第一明徵也，而愚初度此句之義，以為凡傷寒陽明之當下者，若其脈數，下後恒至不解，此言脈遲，未必遲於常脈，特表明其脈不數，無慮其下後不解，迨至閱歷既久，乃知陽明病當下之脈原有遲者，然其脈非為遲緩之象，竟若蓄極而通，有遲而突出之象。蓋其脈之遲，因腸中有阻塞也，其遲而轉能突出者，因陽明火盛，脈原有力，有阻其脈之力而使之遲者，正所以激其脈之力而使有跳躍之勢也。如此以解脈遲，則脈遲之當下之理自明也。

然愚臨證實驗以來，知陽明病既當下，其脈遲者固可下，即其脈不遲而亦不數者亦可下。惟脈數及六至則不可下，即強下之病必不解，或病更加劇。而愚對於此等證，原有變通之下法，即白虎加人參湯，將石膏不煎入湯中，而以所煎之湯將石膏送服者是也。愚因屢次用此方奏效，遂名之為白虎承氣湯，爰詳錄之於下，以備醫界採用。

生石膏八錢搗細，大潞黨參三錢，知母八錢，甘草二錢，粳米二錢，藥共五味。將後四味煎湯一盅半，分兩次將生石膏細末用溫藥湯送下。服初次藥後，遲兩點鐘，若腹中不見行動，再服第二次。若腹中已見行動，再遲點半鐘大便已下者，停後服。若仍未下者，再將第二次藥服下。至若其脈雖數而洪滑有力者，用此方時亦可不加黨參。

愚從前遇寒溫證之當下而脈象數者，恒投以大劑白虎湯，或白虎加人參湯，其大便亦可通下。然生石膏必須用至四五兩，煎一大碗，分數次溫服，大便始可通下。間有服數劑後大便仍不通下者，其人亦恒脈淨身涼，少用玄明粉二三錢和蜜沖服，大便即可通下。然終不若白虎承氣湯用之較便也。

按：生石膏若服其研細之末，其退熱之力一錢可抵煎湯者半兩。若以之通其大便，一錢可抵煎湯者一兩，是以方中只用生石膏八錢，而又慎重用之。必分兩次服下也。

寒溫陽明病，其熱甚盛者，投以大劑白虎湯，其熱稍退，翌日恒病仍如故。如此反復數次，病家遂疑藥不對證，而轉延他醫，因致病不起者多矣。愚後擬得此方，凡遇投以白虎湯見效旋又反復者，再為治時即用石膏為末送服。其湯劑中用五六兩者，送服其末不過一兩，至多至兩半，其熱即可全消失。

論《傷寒論》大柴胡湯原當有大黃無枳實

《傷寒論》大柴胡湯，少陽兼陽明之方也。陽明胃腑有熱，少陽之邪又複挾之上升，是以嘔不止，心下急，鬱鬱微煩，欲用小柴胡湯提出少陽之邪，使之透膈上出，恐其補胃助熱而減去人參，更加大黃以降其熱，步伍分明，出奇致勝，此所以為百戰百勝之師也。乃後世畏大黃之猛，遂易以枳實。迨用其方不效，不得不仍加大黃，而竟忘去枳實，此大柴胡一方，或有大黃或無大黃之所由來也。此何以知之？因此方所主之病宜用大黃，不宜用枳實而知之。蓋方中以柴胡為主藥，原欲升提少陽之邪透膈上出，又恐力弱不能直達，故小柴胡湯中以人參助之。今因證兼陽明，故不敢復用人參以助熱，而更加大黃以引陽明之熱下行，此陽明與少陽並治也。然方名大柴胡，原以治少陽為主，而方中既無人參之助，若復大黃、枳實並用，以大施其開破之力，柴胡猶能引邪透膈乎？此大柴胡湯中斷無大黃、枳實並用之理也。至此方若不用枳實而大黃猶可用者，因其入血分，不入氣分，能降火，不至傷氣，故猶不妨柴胡之上升也。



答徐韻英陽旦湯之商榷

陽旦湯即桂枝加桂湯再加附子，蓋此係他醫所治之案，其失處在證原有熱，因腳攣誤認為寒，竟於桂枝中增桂加附，以致汗出亡陽，遂至厥逆，仲景因門人之問，重申之而明其所以厥逆之故，實因汗出亡陽。若欲挽回此證使至夜半可愈，宜先急用甘草乾薑湯以回其陽，雖因汗多損液以致咽乾，且液傷而大便燥結成陽明之譫語，亦不暇顧。迨夜半陽回腳伸，惟脛上微拘急，此非陽之未回，實因液傷不能濡筋也。故繼服芍藥甘草湯以復其津液，則脛上拘急與咽喉作乾皆愈。更用承氣湯以通其大便，則譫語亦遂愈也。所用之藥息息與病機相符，故病雖危險可挽回也。

論少陰傷寒病有寒有熱之原因及無論涼熱脈皆微細之原因

傷寒以六經分篇，惟少陰之病最難洞悉。因其寒熱錯雜，注疏家又皆有講解而莫衷一是。有謂傷寒直中真陰則為寒證，若自三陽經傳來則為熱證者，而何以少陰病初得即有宜用黃連阿膠湯及宜用大承氣湯者？有謂從足少陰水化則為寒，從手少陰火化則為熱者。然少陰之病，病在腎，而非病在心也，且少陰病既分寒熱，其脈象當迥有判別，何以無論寒熱其脈皆微細也？蓋寒氣侵人之重者，可直達少陰，而為直中真陰之傷寒，寒氣侵人之輕者，不能直達少陰，伏於包腎脂膜之中，暗阻氣化之升降，其處氣化因阻塞而生熱，致所伏之氣亦隨之化熱而竄入少陰，此少陰傷寒初得即發熱者也。為其竄入少陰，能遏抑腎氣不能上升與心氣相濟，是以其證雖熱，而其脈亦微細無力也。愚曾擬有坎離互根湯（在後鼠疫門），可用之以代黃連阿膠湯。初服一劑，其脈之微細者即可變為洪實。再服一劑，其脈之洪實者又復歸於和平，其病亦遂愈矣。參看鼠疫中用此方之發明，應無不明徹之理矣。

或問「《內經》謂『冬傷於寒，春必溫病』，此言伏氣可隨春陽化熱為溫病也。然其伏氣化熱之後，恒竄入少陽陽明諸經，何冬令伏氣之化熱者獨入少陰以成少陰之傷寒乎？」答曰「善哉問也。此中理之精微，正可為研究醫學之資藉也。蓋春主升發，冬主閉藏。伏氣在春令而化熱，可隨春氣之升發而上升，若在冬令

化熱，即隨冬氣之閉藏而下降，為其下降故陷入少陰，而為少陰傷寒也。此時令之證，原恒隨時令之氣化為轉移也」。

《傷寒論》〈少陰篇〉桃花湯是治少陰寒痢非治少陰熱痢解

少陰之病寒者居多，故《少陰篇》之方亦多用熱藥。其中桃花湯治少陰病下痢膿血，又治少陰病三四日至四五日，腹痛，小便不利，下膿血者。

按：此二節之文，未嘗言寒，亦未嘗言熱。然桃花湯之藥，則純係熱藥無疑也，乃釋此二節者，疑下利膿血與小便不利必皆屬熱，遂強解桃花湯中藥性，謂石脂性涼，而重用一斤，乾薑雖熱而只用一兩，合用之仍當以涼論者。然試取石脂一兩六錢、乾薑一錢煎服，或涼或熱必能自覺，藥性豈可重誤乎。有謂此證乃大腸因熱腐爛致成潰瘍，故下膿血，《本經》謂石脂能消腫去瘀，故重用一斤以治潰瘍，復少用乾薑之辛烈，以消潰瘍中之毒菌。然愚聞之，毒菌生於熱者，惟涼藥可以消之，黃連、苦參之類是也；生於涼者，惟熱藥可以消之，乾薑、川椒之類是也。桃花湯所主之下膿血果係熱毒，何以不用黃連、苦參佐石脂，而以乾薑佐石脂乎？雖乾薑只用一兩，亦可折為今之三錢，雖分三次服下，而病未愈者約必當日服盡。夫一日之間服乾薑三錢，其熱力不為小矣，而以施之熱痢下膿血者，有不加劇者乎？蓋下利膿血原有寒證，即小便不利亦有寒者。注疏諸家疑便膿血及小便不利皆為熱證之發現，遂不得不於方中藥品強為之解，斯非其智有便捷，實因臨證未多耳。今特錄向所治之驗案二則以徵之。

奉天陸軍連長何閣臣，年三十許，因初夏在鄭州駐防多受潮濕，患痢數月不愈。至季秋還奉，病益加劇，多下紫血，雜以脂膜，腹疼下墜，或授以龍眼肉包

鴉膽子吞服方，服後下痢與腹疼益劇，來院求為診治。其脈微弱而沉，左脈幾不見，俾用生硫黃細末攪熟麵少許為小丸，又重用生山藥、熟地黃、龍眼肉煎濃湯送服。連服十餘劑，共服生硫黃二兩半，其痢始愈。

按：此證脈微弱而沉，少陰之脈也。下紫血脂膜（初下膿血，久則變為紫血脂膜），較下膿血為尤甚矣。因其為日甚久，左脈欲無，寒而且弱，病勢極危，非徑用桃花湯所能勝任，故師其義而變通之，用生山藥、熟地黃、龍眼肉以代石脂、粳米，用生硫黃以代乾薑。數月沉疴，竟能隨手奏效。設此證初起時投以桃花湯，亦必能奏效也。

奉天省公署護兵石玉和，忽然小便不通，入西醫院治療，西醫治以引溺管，小便通出。有頃，小便復存蓄若干，西醫又納以橡皮管，使久在其中，有溺即通出，乃初雖稍利，繼則小便仍不能出，遂來院求為診治。其脈弦遲細弱，自言下焦疼甚且涼甚，知其小便因涼而凝滯也，為擬方用人參、椒目、懷牛膝各五錢，附子、肉桂、當歸各三錢，乾薑、小茴香、威靈仙、甘草、沒藥各二錢。連服三劑，腹疼及便閉皆愈，遂停湯藥，俾日用生硫黃細末錢許分兩次服下，以善其後。方中之義人參、靈仙並用，可治氣虛小便不利；椒目、桂、附、乾薑並用，可治因寒小便不利；又佐以當歸、牛膝、茴香、沒藥、甘草諸藥，或潤而滑之，或引而下之，或馨香以通竅，或溫通以開瘀，或和中以止疼，眾藥相濟為功，所以奏

效甚速也。觀此二案，知桃花湯所主之下利膿血、小便不利皆為寒證，非熱證也明矣。

答人問《傷寒論》以六經分篇未言手經足經及後世論溫病者言入手經不入足經，且謂溫病不宜發汗之義

《內經》之論手足各經也，凡言手經必名之為手某經，至言足經，恒但名為某經，而不明指為足某經故凡《內經》渾曰某經而未明言其為手經、足經者，皆足經也。仲師《傷寒論》以六經分篇，其為足經、手經亦皆未明言，而以《內經》之例推之，其確為足經無庸再議。誠以人之足經長、手經短，足經原可以統貫全身，但言足經，手經亦即寓其中矣。至其既以足六經分篇而不明言足六經者，在仲師雖循《內經》定例，而實又別具深心也。夫傷寒之證固屬於足經者多，而由足經以及手經者亦時有之。誠以人之手、足十二經，原無處不相貫通，是以六經分篇之中，每篇所列之證皆有連及手經之病。若於分篇之際顯以足某經名之，將有時兼有手經之病人亦誤認為足經矣。惟渾之曰某經，是原以足經為主，實即容納手經於足經之中，此著書者提綱挈領之法，不欲頭緒紛繁，令人難於領略也。後世未窺仲師之深意，竟有謂傷寒人足經不入手經者。而麻黃湯中麻黃與杏仁同用，非因其所治之證於手太陰有涉乎？承氣湯中大黃與朴、硝同用，非因其所治之證於手陽明有涉乎？知此二方，餘可類推也。

至謂溫病入手經不入足經者，其說尤為不經。何以言之？《傷寒論》第六節曰「太陽病，發熱而渴，不惡寒者為溫病」，此太陽為手太陽乎？抑為足太陽乎？此固無容置辯者也。蓋溫病以風溫為正，亦以風溫為多，故本節繼曰「若發汗已，

身灼熱者，名曰風溫」云云。夫溫以風成，必足太陽先受之，此一定之理也。惟患風溫之人多係臟腑間先有蘊熱，因其冬日薄受外感，未能遽發，所感之邪伏於三焦脂膜之中，隨春陽而化熱，繼又薄受外感，所化之熱邪受激動而驟發，初則外表略有拘束，歷數小時即表裡俱壯熱。此近代論溫病者多忌用藥汗解，而惟投以清解之劑，若銀翹散、桑菊飲諸方是也。然此等方在大江以南用之，原多效驗，因其地暖氣和，人之肌膚鬆淺，溫邪易解散也。而北人之用其方者，恒於溫病初得不能解散，致溫病傳經深入，浸成危險之證。愚目睹心傷，因自擬治溫病初得三方，一為清解湯（方係薄荷葉三錢，蟬退三錢，生石膏六錢，甘草錢半），一為涼解湯（方係薄荷葉三錢，蟬退二錢，生石膏一兩，甘草錢半），一為寒解湯（方係生石膏一兩，知母三錢，連翹錢半，蟬退錢半）。一方皆以汗解為目的，視表邪內熱之輕重為分途施治，其表邪重內熱輕者，用第一方，表邪內熱平均者，用第二方，表邪輕內熱重者，用第三方。方證吻合，服之皆一汗而愈。後南遊至漢皋，用此三方以治溫病之初得者，亦莫不隨手奏效，由斯知南方於溫病之初得，亦非不可發汗，特視所用發汗之藥何如耳，且其方不獨治春溫有效也。拙著《衷中參西錄》初出版於奉天，戊午仲秋奉天溫病盛行，統戶口全數計之，病者約有三分之一，其病狀又皆相似，是溫而兼疫矣。有天地新學社友人劉子修者，在奉天開原行醫，彼見《衷中參西錄》載此三方，遂斟酌用之，救愈之人不勝計，一



方驚為神醫，為之建立醫院於開原車站。由斯知春溫、秋溫及溫而兼疫者，其初得之時皆可汗解也。

至於伏氣成溫，毫無新受之外感者，似不可發汗矣。然伏氣之伏藏皆在三焦脂膜之中，其化熱後乘時萌動，若有向外之機，正可因其勢而利導之，俾所用之藥與內蘊之熱化合而為汗（涼潤與燥熱化合即可作汗），拙擬之三方仍可隨證施用也。若其伏氣內傳陽明之府而變為大渴大熱之證，此宜投以白虎湯或白虎加人參湯，為傷寒、溫病之所同，固不獨溫病至此不宜發汗也。且既為醫者，亦皆知此證不可發汗也，然服藥後而能自汗者固屢見耳。至其人因冬不藏精而病溫，伏氣之邪或乘腎虛下陷而成少陰之證者，其蘊熱至深，脈象沉細，當其初得固不可發汗，亦非銀翹、桑菊等方清解所能愈也。愚師仲師之意，恒將《傷寒論》中白虎加人參湯與黃連阿膠湯並為一方，為有石膏，可省去芩、連、芍藥，而用鮮白茅根湯煎，恒隨手奏效。蓋此證因下陷之熱邪傷其腎陰，致腎氣不能上潮於心，其陰陽之氣不相接續，是以脈之跳動無力，用阿膠、雞子黃以滋補腎陰，白虎湯以清肅內熱，即用人參以助腎氣上升，茅根以透內邪外出，服後則脈之沉細者自變為緩和，復其常度，脈能復常，病已消歸無有矣。夫傷寒、溫病西人之所短，實即吾人之所長也。惟即所長者而益加精研，庶於醫學淪胥之秋而有立定腳跟之一日。此愚所以不避好辯之名，雖與前哲意見有所齟齬而亦不暇顧也。

溫病之治法詳於傷寒論解

傷寒、溫病之治法始異而終同。至其病之所受，則皆在於足經而兼及於手經。乃今之論寒溫者，恆謂傷寒入足經不入手經，溫病入手經不入足經。夫人之手足十二經原相貫通，謂傷寒入足經不入手經者，固為差謬，至謂溫病入手經不入足經者，尤屬荒唐。何以言之？《傷寒論》之開始也，其第一節渾言太陽之為病，此太陽實總括中風、傷寒、溫病在內，故其下將太陽病平分為三項，其第二節論太陽中風，第三節論太陽傷寒（四節五節亦論傷寒，當歸納於第三節中），第六節論太陽溫病，故每節之首皆冠以太陽病三字。此太陽為手太陽乎？抑為足太陽乎？此固無容置辯者也。由斯知，中風、傷寒、溫病皆可以傷寒統之（《難經》謂傷寒有五，中風、溫病皆在其中），而其病之初得皆在足太陽經，又可渾以太陽病統之也。蓋所謂太陽之為病者，若在中風、傷寒，其頭痛、項強、惡寒三證可以並見。若在溫病，但微惡寒即可為太陽病（此所謂證不必具，但見一證即可定為某經病也），然惡寒須臾即變為熱耳。曾治一人，於季春夜眠之時因衾薄凍醒，遂覺周身惡寒，至前午十句鐘表裡皆覺大熱，脈象浮洪，投以拙擬涼解湯一汗而愈。又嘗治一人，於初夏晨出被雨，遂覺頭疼周身惡寒，至下午一句鐘即變為大熱，渴嗜飲水，脈象洪滑，投以拙擬寒解湯亦一汗而愈。至如此涼藥而所以能發汗者，為其內蘊之燥熱與涼潤之藥化合，自然能發汗，又少用達表之品以為之引導，故其得汗甚速，汗後熱亦盡消也。此二則，皆溫病也，以其初得猶須與

惡寒，故仍可以太陽病統之。即其化熱之後病兼陽明，然亦必先入足陽明，迨至由胃及腸，大便燥結，而後傳入手陽明，安得謂溫病入手經不入足經乎？

由斯知，《傷寒論》一書，原以中風、傷寒、溫病平分三項，特於太陽首篇詳悉言之，以示人以入手之正路，至後論治法之處，則三項中一切諸證皆可渾統於六經，但言某經所現之某種病宜治以某方，不復別其為中風、傷寒、溫病，此乃納繁於簡之法，亦即提綱挈領之法也。所尤當知者，諸節中偶明言中風者，是確指中風而言。若明言為傷寒者，又恆統中風、溫病而言。以傷寒二字為三項之總稱，其或為中風，或為傷寒，或為溫病，恆於論脈之處有所區別也。至於六經分編之中，其方之宜於溫病者不勝舉，今將其顯然可見者約略陳之於下。

一為麻杏甘石湯。其方原治汗出而喘無大熱者，以治溫病，不必有汗與喘之兼證也，但其外表未解，內有蘊熱者即可用。然用時須斟酌其熱之輕重，熱之輕者，麻黃宜用錢半，生石膏宜用六錢。若熱之重者，麻黃宜用一錢，生石膏宜用一兩。至愚用此方時，又恆以薄荷葉代麻黃（薄荷葉代麻黃時其份量宜加倍），服後得微汗，其病即愈，蓋薄荷葉原為溫病解表最良之藥，而當仲師時猶未列於藥品，故當日不用也。

一為大青龍湯。《傷寒論》中用大青龍湯者有二節，一為第三十七節，其節明言太陽中風脈浮緊。夫《傷寒論》首節論太陽之脈曰浮，原統中風、傷寒而言。至第二節則言脈緩者為中風，是其脈為浮中之緩也，第三節則言脈陰陽俱緊者為

傷寒，是其脈為浮中之緊也。今既明言中風，其脈不為浮緩而為浮緊，是中風病中現有傷寒之脈，其所中者當為凜冽之寒風，而於溫病無涉也。一為第三十八節，細審本節之文，知其確係溫病。何以言之？以脈浮緩、身不疼、但重、無少陰證也。蓋此節開端雖明言傷寒，仍是以傷寒二字為中風、傷寒、溫病之總稱，是以傷寒初得脈浮緊，溫病初得脈浮緩。傷寒初得身多疼，溫病初得身恆不疼而但重（《傷寒論》第六節溫病提綱中原明言身重）。傷寒初得恆有少陰證，溫病則始終無少陰證（少陰證有寒有熱，此指少陰之寒證言，為無少陰寒證，所以敢用大青龍湯，若少陰熱證，溫病中恆有之，正不妨用大青龍湯矣），此數者皆為溫病之明徵也。況其病乍有輕時，若在傷寒必不復重用生石膏，惟係溫病則仍可重用生石膏如雞子大，約有今之四兩，因溫病當以清燥熱救真陰為急務也。至愚用此方時，又恆以連翹代桂枝。雖桂枝、連翹均能逐肌肉之外感，而一則性熱，一則性涼，溫病宜涼不宜熱，故用桂枝不如用連翹。而當日仲師不用者，亦因其未列入藥品也（《傷寒論》方中所用之連翹是連翹根，能利水不能發汗）。況大青龍湯中桂枝之份量，僅為麻黃三分之一，仲師原因其性熱不欲多用也。

一為小青龍湯。其方外能解表，內能滌飲，以治外感痰喘誠有奇效，中風、傷寒、溫病皆可用，然宜酌加生石膏，以調麻、桂、薑、辛之熱方效。是以《傷寒論》小青龍湯無加石膏之例，而《金匱》有小青龍加石膏湯，所以補《傷寒論》之未備也。至愚用此湯時，遇挾有實熱者，又恆加生石膏至一兩強也。

一為小柴胡湯。其方中風、傷寒病皆可用，而溫病中小柴胡湯證，多兼嘔吐粘涎，此少陽之火與太陰之濕化合而成也（少陽傳經之去路為太陰）。宜於方中酌加生石膏數錢或兩許，以清少陽之火，其粘涎自能化水，從小便中出。夫柴胡既能引邪上出，石膏更能逐熱下降，如此上下分消，故服藥後無事汗解，即霍然痊愈也。

以上所述諸方，大抵宜於溫病初得者也。至溫病傳經已深，若清燥熱之白虎湯、白虎加人參湯，通腸結之大小承氣湯，開胸結之大、小陷胸湯，治下利之白頭翁湯、黃芩湯，治發黃之茵陳梔子柏皮等湯，及一切涼潤清火育陰安神之劑，皆可用於溫病者，又無庸愚之贅語也。

至於伏氣之成溫者，若《內經》所謂「冬傷於寒，春必病溫」、「冬不藏精，春必病溫」之類，《傷寒論》中非無其證，特其證現於某經，即與某經之本病無所區別。仲師未嘗顯為指示，在後世原難明辨，且其治法與各經之本病無異，亦無須乎明辨也，惟其病在少陰則辨之甚易。何者？因少陰之病，寒熱迴分兩途，其寒者為少陰傷寒之本病，其熱者大抵為伏氣化熱之溫病也。若謂係傷寒入少陰久而化熱，何以少陰病兩三日，即有宜用黃連阿膠湯、大承氣湯者？蓋伏氣皆伏於三焦脂膜之中，與手足諸經皆有貫通之路，其當春陽化熱而萌動，恆視臟腑虛弱之處以為趨向，所謂「邪之所湊，其氣必虛」也。其人或因冬不藏精，少陰之臟必虛，而伏氣之化熱者即乘虛而入，遏抑其腎氣不能上升與心氣相接續，致心

臟跳動無力，遂現少陰微細之脈，故其脈愈微細，而所蘊之燥熱愈甚。用黃連以清少陰之熱，阿膠、雞子黃以增少陰之液，即以助少陰腎氣之上達，俾其陰陽之氣相接續，脈象必驟有起色，而內陷之邪熱亦隨之外透矣。至愚遇此等證時，又恆師仲師之意而為之變通，單用鮮白茅根四兩，銼碎，慢火煎兩三沸，視茅根皆沉水底，其湯即成，去渣取清湯一大碗，頓服下，其脈之微細者必遽變為洪大有力之象，再用大劑白虎加人參湯，煎湯三茶杯，分三次溫飲下，每服一次調入生雞子黃一枚，其病必脫然痊愈。用古不必泥古，仲師有知，亦當不吾嗔也。

按：西人新生理學家謂副腎髓質之分泌素減少，則脈之跳動必無力，所謂副腎髓質者，指兩腎之間命門而言也。蓋命門為督脈入脊之門，因督脈含有脊髓，故曰副腎髓質。其處為腎係之根蒂，脂膜相連，共為坎卦，原與兩腎同為少陰之隣。其中分泌素減少，脈即跳動無力，此即少陰病脈微細之理。西人又謂雞子黃中含有副腎鹹。副腎鹹者，即所謂副腎髓質之分泌素也。此即黃連阿膠湯中用雞子黃以滋腎之理。且雞子黃既含有副腎髓質之分泌素，是其性能直接補腎，此又黃連阿膠湯中雞子黃生用之理。以西人費盡研究工夫所得至精至奧之新生理，竟不能出《傷寒論》之範圍，誰謂吾中華醫學陳腐哉。

稿)

《傷寒論》中有治溫病初得方用時宜稍變通說（應漢皋冉雪峰君徵

傷寒與溫病始異而終同，故論者謂《傷寒論》病入陽明以後諸方，皆可用之於溫病，而未傳陽明以前諸方，實與溫病不宜，斯說也，善則善矣。然細閱《傷寒論》諸方，愚又別有會心也。《傷寒論》謂「太陽病，發熱而渴，不惡寒者，為溫病。若發汗已，身灼熱者，名風溫。風溫之為病，脈陰陽俱浮，自汗出，身重多眠睡，息必鼾，言語難出」，此仲景論溫病之提綱也。乃提綱詳矣，而其後未明言治溫病之方，後世以為憾事。及反復詳細觀之，乃知《傷寒論》中原有治溫病之方，匯通參觀，經義自明。其第六十一節云「發汗後，不可更行桂枝湯。汗出而喘，無大熱者，可與麻杏甘石湯」，夫此節之所謂發汗後，即提綱之所謂若發汗也。此節之所謂喘，即提綱之所謂息必鼾也。由口息而喘者，由鼻息即鼾矣。此節之所謂無大熱，即提綱之所謂身灼熱也，為其但身灼熱，是其熱猶在表，心中仍無大熱，兩兩比較，此節原與提綱之文大略相同，而皆為溫病無疑也。其所以汗後不解而有種種諸病者，必其用溫熱之藥強發其汗，以致汗出之後病轉加劇，仲景恐人見其有汗誤認為桂枝湯證而再投以桂枝湯，故特戒之曰不可更行桂枝湯，宜治以麻杏甘石湯。則麻杏甘石湯實為溫病表證之方，雖經誤治之後，其表證尤在者，仍可用之以解表也。蓋古人立言簡貴，多有互文以見義者，為此節所言之病狀，即溫病提綱所言之病狀，故此節不再申明其為溫病。為提綱未言

治法，而此節特言明治法，以補提綱所未備，此將二節相並讀之，無待詮解自明也。然此所論者，風溫初得之治法（提綱明言風溫之為病）。若至冬傷於寒及冬不藏精至春乃發之溫病，或至夏秋乃發之溫病恒有初發之時即於表證無涉者，又不必定用麻杏甘石湯也。

或問「此節經文注疏家有疑其有差誤者，以為既言汗出，何以複用麻黃？既無大熱，何以重用石膏？此誠可疑之點，敢以相質」。答曰「此方之用麻黃者，原藉以治喘，兼以助石膏之力使達於表也。用石膏者，雖藉以清熱，亦以調麻黃之性使不過發也。蓋此證之熱在胃者少，在胸者多，胸居上焦，仍為太陽部位，即此證仍屬表證。方中麻黃、石膏並用，石膏得麻黃則涼不留中，麻黃得石膏則發有監製，服後藥力息息上達，旋轉於膈胸之間，將外感邪熱徐徐由皮毛透出，而喘與汗遂因之自愈。仲景制方之妙，實具有化機，而又何疑乎？且石膏性微寒，原非大寒，《本經》載有明文，是以白虎湯用之以清陽明之大熱，必佐以知母而後能建奇功。為此證無大熱，所以不用知母也。況此節之文兩見於《傷寒論》，所微異者，一在發汗後，一在下後也。豈一節之文差，而兩節之文皆差乎？特此節經文雖無差誤，而愚用麻杏甘石湯時，於麻黃、石膏之分量恒有變通。原分量，石膏為麻黃之兩倍，而愚遇此證熱之劇者，必將麻黃減輕，石膏加重，石膏恒為麻黃之十倍，即其熱非劇，石膏之分量亦必五倍於麻黃也。



或問「麻杏甘石湯既可為溫病表證之的方，何以《衷中參西錄》治溫病初得諸方，薄荷、連翹、蟬退諸藥與石膏並用，而不以麻黃與石膏並用乎？」答曰「此當論世知人而後可與論古人之方。仲景用藥多遵《本經》，薄荷古原名苛，《本經》不載，《別錄》亦不載，當仲景時猶未列於藥品可知。蚱蟬雖載於《本經》，然古人只知用蟬，不知用蛻，較之蟬退皮以達皮者，實遠不如，故仲景亦不用。至連翹古惟用根，即麻黃連軹赤小豆湯之連軹也，其發表之力，亦不如連翹也。故身發黃病者，仲景用之以宣通內熱，利水去濕，非用以發表也。為此三種藥當仲景時皆未嘗發明，故於溫病之初候原宜辛涼解肌者，亦以麻黃發之，且防麻黃之熱，而以石膏佐之也。若仲景生當今日，則必不用麻黃而用薄荷、連翹、蟬退諸藥矣。即初起之證兼喘者，似必賴麻黃之瀉肺定喘，而代以薄荷亦可奏效（觀小青龍湯證兼喘者，去麻黃加杏仁，是治外感之喘，不必定用麻黃）。蓋此節所言之病狀，若在傷寒，原宜麻黃與石膏並用，而在溫病，即宜薄荷與石膏並用。若其喘甚輕者，在溫病中更宜以牛蒡代杏仁也。

按：麻杏甘石湯柯韻伯亦謂係治溫病之方，而愚作此說時猶未見柯氏之說也。為拙說復於柯氏說外另有發明，故仍錄之。

論傷寒溫病神昏譫語之原因及治法

傷寒溫病皆有譫語神昏之證，論者責之陽明胃實，然又當詳辨其脈象之虛實，熱度之高下，時日之淺深，非可概以陽明胃實論也。

其脈象果洪而有力，按之甚實者，可按陽明胃實治之。蓋胃腑之熱上蒸，則腦中之元神，心中之識神皆受其累，是以神昏譫語，不省人事，或更大便秘結，不但胃實，且又腸實，阻塞腎氣不能上交於心，則亢陽無制，心神恍惚，亦多譫妄，或精神不支，昏憤似睡。若斯者，可投以大劑白虎湯，遵《傷寒論》一煎三服之法，煎湯三盅，分三次溫飲下。其大便秘結之甚者，可酌用大、小承氣湯（若大便秘結不甚者但投以大劑白虎湯大便即可通下），其神昏譫語自愈也。

有脈象確有實熱，其人神昏譫語，似可用白虎湯矣，而其脈或兼弦、兼數，或重按仍不甚實者，宜治以白虎加人參湯。曾治一農家童子，勞力過度，因得溫病，脈象弦而有力，數近六至，譫語不休，所言皆勞力之事。本擬治以白虎加人參湯，因時當仲夏，且又童年少陽之體，遂先與以白虎湯，服後脈搏力減，而譫語益甚。幸其大便猶未通下，急改用白虎加人參湯，將方中人參加倍，煎湯三茶杯，分三次溫飲下，盡劑而愈。蓋脈象弦數，真陰必然虧損，白虎加人參湯能於邪熱熾盛之中滋其真陰，即以退其邪熱。蓋當邪熱正熾時，但用玄參、沙參、生地諸藥不能滋陰，因其不能勝邪熱，陰分即無由滋長也。惟治以白虎加人參湯，

則滋陰退熱一舉兩得，且能起下焦真陰與上焦亢甚之陽相濟，是以投之有捷效也。

其證若在汗吐下後，脈雖洪實，用白虎湯時亦宜加人參。曾治一縣署科長，溫病之熱傳入陽明，脈象洪實有力，譫語昏瞶，投以大劑白虎湯，熱退強半，脈力亦減，而其至數轉數，一息六至，譫語更甚。細詢其病之經過，言數日前因有梅毒服降藥兩次。遂急改用白虎加人參湯，亦倍用人參（此兩案中用白虎加人參湯皆將人參倍加者，因從前誤用白虎湯也，若開首即用白虎加人參湯，則人參無事加倍矣），煎湯三杯，分三次溫飲下，亦盡劑而愈。

有伏氣為病，因腎虛竄入少陰，遏抑腎氣不能上升與心相濟，致心脈跳動無力，燥熱鬱中不能外透，閉目昏昏似睡，間作譫語，此在冬為少陰傷寒之熱證，在春為少陰溫病，宜治以大劑白虎加人參湯，用鮮白茅根煮水以之煎藥，取湯三盅，分數次飲下自愈。

有患寒溫者，周身壯熱，脈象洪實，神昏不語，迨用涼藥清之，熱退，脈近和平，而仍然神昏或譫語者，必兼有腦髓神經病，當繼用治腦髓神經之藥。曾治一學校學生，溫病熱入陽明，脈象甚實，神昏不語，臥床並不知轉側，用白虎湯清之，服兩劑後熱退十之七八，脈象之洪實亦減去強半，自知轉側，而精神仍不明瞭，當係溫病之熱上蒸，致其腦膜生炎而累及神經也。遂改用小劑白虎加人參湯，又加羚羊角二錢（另煎兌服），一劑而愈。又治一幼童，得溫病三日，熱不

甚劇，脈似有力，亦非洪實，而精神竟昏昏似睡，不能言語，此亦溫病兼腦膜炎也。因其溫病甚輕，俾但用羚羊角錢半煎湯服之，其病霍然頓愈。蓋羚羊角中生木胎，性善解熱而兼有條達上升之性，況其角生於頭，原與腦部相連，故善人之腦中以清熱也。

有寒溫之病，傳經已遍，將欲作汗，其下焦陰分虛損，不能與上焦之陽分相濟以化汗，而神昏譫語者。曾治一壯年，仲夏長途勞役，因受溫病已過旬日，精神昏憤，譫語不省人事，且兩手亂動不休，其脈弦而浮，一息近六至，不任循按，兩尺尤甚。投以大滋真陰之品，若玄參、生地黃、生山藥、甘枸杞、天門冬之類，共為一大劑煎服，一日連進二劑，當日得汗而愈。

有寒溫之病服開破降下之藥太過，傷其胸中大氣，迨其大熱已退，而仍然神昏或譫語者。曾治一壯年得溫病，延醫服藥二十餘日，外感之熱盡退，精神轉益昏沉。及愚視之，周身皆涼，奄奄一息，呼之不應，舌乾如磋，毫無舌苔，其脈象微弱而遲，不足四至，五六呼吸之頃必長出氣一次，此必因服開降之藥太過，傷其胸中大氣也。蓋胸中大氣因受傷下陷，不能達於腦中，則神昏；不能上潮於舌本，則舌乾。其周身皆涼者，大氣因受傷不能宣佈於營衛也；其五六呼吸之頃必長出氣一次者，因大氣傷後不能暢舒，故太息以舒其氣也。遂用野臺參一兩，柴胡一錢，煎湯灌之，連服兩劑痊愈。又治一少年，於初春得傷寒，先經他醫治癒，後因飲食過度，病又反復，投以白虎湯治癒。隔三日，陡然反復甚劇，精神

恍惚，肢體顫動，口中喃喃皆不成語。診其脈，右部寸關皆無力而關脈尤不任循按。愚曰此非病又反覆，必因前次之過食病復，而此次又戒飲食過度也，飽食即可愈矣。其家人果謂有鑒前失，數日所與飲食甚少，然其精神昏憤若斯，恐其不能飲食。愚曰果係因餓而成之病，與之食必然能食。然仍須撙節與之，多食幾次可也。其家人果根據愚言，十小時中連與飲食三次，病若失。蓋人胸中大氣原借水穀之氣以為培養，病後氣虛，又乏水穀之氣以培養之，是以胸中大氣虛損而現種種病狀也。然前案因服開降之藥傷其大氣，故以補氣兼升氣之藥治之。後案因水穀之氣缺乏虛其大氣，故以飲食治之。斯在臨證者精心體驗，息息與病機相符耳。

有溫而兼疹，其毒熱內攻脅亂其神明者。曾治一少年，溫病熱入陽明，連次用涼藥清之，大熱已退強半，而心神騷擾不安，合目恆作譫語。其脈有餘熱，似兼緊象，因其脈象熱而兼緊，疑其伏有疹毒未出，遂投以小劑白虎湯，送服羚羊角細末一錢，西藥阿斯匹林二分，表出痧粒滿身而愈。又治一幼女患溫疹，其疹出次日即靨，精神昏昏似睡，時有驚悸，脈象數而有力。投以白虎湯加羚羊角錢半（另煎兌服），用鮮蘆根三兩煮水以之煎藥，取湯兩茶盅，分三次溫飲下，其疹得出，病亦遂愈。

有其人素多痰飲，其寒溫之熱熾盛與痰飲互相膠漆，以亂其神明者，栝蒌解下附有治驗之案可參觀。有溫疫傳染之邪由口鼻傳入，自肺傳心，其人恆無故自

笑，精神恍惚，言語錯亂，妄言妄見者。曾治一媪患此證，脈象有力，關前搖搖而動。投以拙擬護心至寶丹（方載三期七卷，係生石膏一兩、潞黨參、犀角、羚羊角各二錢、朱砂三分、東牛黃一外，將前四味煎湯送服後二味），一劑而愈。以上所謂寒溫諸證，其精神昏憤譫語之原因及治法大略已備，至於變通化裁，相機制宜，又在臨證者之精心研究也。

傷寒風溫始終皆宜汗解說

傷寒初得宜用熱藥發其汗，麻黃、桂枝諸湯是也。風溫初得宜用涼藥發其汗，薄荷、連翹、蟬蛻諸藥是也。至傳經已深，陽明熱實，無論傷寒、風溫，皆宜治以白虎湯，而愚用白虎湯時，恆加薄荷少許，或連翹、蟬蛻少許，往往服後即可得汗，即但用白虎湯，亦恆有服後即汗者。因方中石膏原有解肌發表之力（因含有硫氧氫原質），故其方不但治陽明府病，兼能治陽明經病，況又少加辛涼之品引之，以由經達表，其得汗自易也。

曾治鄰村夏姓，年三十余，於冬令感冒風寒，周身惡寒無汗，胸間煩躁，原是大青龍湯證。醫者投以麻黃湯，服後分毫無汗，而煩躁益甚，幾至瘋狂，其脈洪滑異常，兩寸皆浮，而右寸尤甚，投以拙擬寒解湯（方載三期五卷），覆杯之頃，汗出如洗而愈。又治邑北境常莊於姓，年四旬，為風寒所束不得汗，胸間煩熱，又兼喘促，醫者治以蘇子降氣湯兼散風清火之品，數劑病益進。診其脈，洪滑而浮，投以寒解湯，須臾上半身即汗，又須臾覺藥力下行，其下焦及腿亦皆出汗，病若失。又治邑中故縣李姓少年，得溫病，延醫治不效，遷延旬餘。診其脈，洪而實，仍兼浮象。問其頭疼乎？曰「然」。渴欲飲涼水乎？曰「有時亦飲涼水，然不至燥渴」，知其為日雖多，陽明之熱猶未甚實，表證尤未盡罷也，投以寒解湯，病人畏服藥，先飲一半，即汗出而愈，仍俾服餘一半以清未淨之熱。然其大熱已消，再服時亦不出汗矣。又治一妊婦傷寒三日，脈洪滑異常，右脈關前兼浮，

舌苔白厚，精神昏瞶，間作譫語，為開寒解湯方。有一醫者在座，問方中之意何居？答曰「欲汗解耳」，問此方能得汗乎？曰「此方用於此等證脈，必能得汗。若泛作汗解之藥服之，不能汗也」，飲下須臾汗出而愈，醫者訝為奇異。愚因曉之曰「此方在拙著《衷中參西錄》中，原治寒溫證周身壯熱，心中熱而且渴，舌苔白而欲黃，其脈洪滑或兼浮，或頭猶覺疼，或周身猶有拘束之意者。果如方下所注證脈，服之覆杯可汗，勿庸慮其不效也。蓋脈象洪滑，陽明府熱已實，原是白虎湯證，至洪滑兼浮，舌苔猶白，是仍有些些表證未罷，故方中重用石膏、知母以清胃府之熱，復少用連翹、蟬蛻之善達表者，引胃中化而欲散之熱仍還於表，作汗而解，斯乃調劑陰陽，聽其自汗，非強發其汗也，醫者聞之甚悅服。

至其人氣體弱者，可用補氣之藥助之出汗，曾治本村劉叟，年七旬，素有勞疾，薄受外感即發喘逆，投以小青龍湯去麻黃加杏仁、生石膏輒愈。上元節後，因外感甚重，舊病復發，五六日間，熱入陽明之府，脈象弦長浮數，按之有力，卻無洪滑之象（此外感兼內傷之脈），投以寒解湯加潞參三錢，一劑汗出而喘愈。再診其脈，餘熱猶熾，繼投以白虎加人參湯，以生山藥代粳米，煎一大劑，分三次溫飲下，盡劑而愈。

若陰分虛損者，可用滋陰之藥助之出汗，曾治鄰村高姓少年，因孟夏長途勞役得溫病，醫治半月無效。其兩目清白，竟無所見，兩手循衣摸床，亂動不休，譫語不省人事，其大便從前滑瀉，此時雖不滑，每日仍溏便一兩次，脈象浮數，



右寸之浮尤甚，兩尺按之即無。因思此證目清白無見者，腎陰將竭也。手循衣摸床者，肝風已動也。病熱已危至極點，幸喜脈浮為病有還表之機，右寸浮尤甚，為將汗之勢。其所以將汗而不汗者，人身之有汗如天地之有雨，天地陰陽和而後雨，人身亦陰陽和而後汗，此證尺脈甚弱，陽升而陰不應，汗何由作。當用大潤之劑峻補真陰，濟陰以應其陽，必能自汗，遂用熟地、玄參、生山藥、枸杞之類約六七兩，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，一日連進二劑，即日大汗而愈。

至其人陽分陰分俱虛，又宜並補其陰陽以助之出汗。張景岳曾治一叟得傷寒證，戰而不汗，於其翌日發戰之時，投以大劑八味地黃湯，須臾戰而得汗。繼因汗多亡陽，身冷汗猶不止，仍投以原湯，汗止病亦遂愈。用其藥發汗，即用其藥止汗，是能運用古方入於化境者也。

至少陽證為寒熱往來，其證介於表裡之間，宜和解不宜發汗矣。然愚對於此證，其熱盛於寒者，多因證兼陽明，恆於小柴胡湯中加玄參八錢，以潤陽明之燥熱。其陽明之燥熱化而欲散，自能還於太陽而作汗，少陽之邪亦可隨汗而解。其寒盛於熱者，或因誤服降下藥虛其氣分，或因其氣分本素虛，雖服小柴胡湯不能提其邪透膈上出，又恆於小柴胡湯中加薄荷葉二錢，由足少陽引入手少陽，借徑於游部（手足少陽合為游部）作汗而解，此即《傷寒論》所謂「柴胡證具，而以他藥下之，柴胡證仍在者，復與小柴胡湯，必蒸蒸而振，卻發熱汗出而解也」，然助以薄荷則出汗較易，即由汗解不必蒸蒸而振，致有戰汗之狀也。

至於當用承氣之證，卻非可發汗之證矣，然愚臨證經驗以來，恆有投以三承氣湯，大便猶未降下而即得汗者。蓋因胃府之實熱既為承氣衝開，其病機自外越也。若降之前未嘗得汗，既降之後亦必於飲食之時屢次些些得汗，始能脈淨身涼。若降後分毫無汗，其熱必不能盡消，又宜投以竹葉石膏湯，或白虎加人參湯，將其餘熱消解將盡，其人亦必些些汗出也，此所謂傷寒、風溫始終皆宜汗解也。

答徐韵英讀《傷寒論》質疑四則

古人之書不可不信，又不可盡信。孟子曰「吾於武成，取二三冊而已矣」，大孟子為周人，武成為其當代之書，而猶云然，況其為上下數千年，中間更歷十餘代，又幾經變亂之餘，且成於後世之編輯，如仲景之《傷寒論》者乎。愚不揣固陋，敢將徐君所疑《傷寒論》四則，反復陳之。

第一疑在《太陽下編》第二十節，其節為病在太陽之表，而不知汗解，反用涼水噴之、灌之，其外感之寒已變熱者，經內外之涼水排擠，不能出，入鬱於肉中而煩熱起粟，然其熱在肌肉，不在胃府，故意欲飲水而不渴，治宜文蛤散。夫文蛤散乃蛤粉之未經煉者也。服之，其質不化，藥力難出，且雖為蛤殼，而實則介蟲之甲，其性沉降，達表之力原甚微，藉以消肉上之起粟似難奏功，故繼曰「若不瘥者，與五苓散」，其方取其能利濕兼能透表，又能健運脾胃以助利濕透表之原動力，其病當瘥矣。然又可慮者，所灌之涼水過多，與上焦外感之邪互相膠漆而成寒實結胸，則非前二方所能治療矣，故宜用三物小陷胸湯或白散。夫白散之辛溫開通，用於此證當矣。至於三物小陷胸湯，若即係小陷胸湯，用於此證，以寒治寒，亦當乎？注家謂此係反治之法。夫反治者，以熱治寒，恐其格而少用涼藥為引，以為熱藥之反佐，非純以涼藥治寒也。蓋注者震攝於古人之隆名，即遇古書有舛錯遺失之處，亦必曲為原護，不知此正所以誤古人而更貽誤後人也。是以拙著《衷中參西錄》，於古方之可確信者，恆為之極力表彰，或更通變化裁，

推行盡致，以窮其妙用；於其難確信者，則恆姑為懸疑，以待識者之論斷。蓋欲為醫學力求進化，不得不如斯也。

按：此節中三物小陷胸湯，唐容川疑其另為一方，非即小陷胸湯，然傷寒太陽病實鮮有用水噀、水灌之事，愚疑此節非仲景原文也。

第二疑在「太陽下編」三十二節，其節為「太陽病，醫發汗，遂發熱惡寒，因復下之，心下痞，表裡俱虛，陰陽氣並竭，無陽則陰獨，復加燒針，因胸煩，面色青黃，膚濶者難治，今色微黃，手足溫者，易治」。按此節文義，必有訛遺之字。陰陽氣並竭句，陳氏釋為陰陽氣不交，甚當。至無陽則陰獨句，鄙意以為獨下當有結字，蓋言誤汗誤下，上焦陽氣衰微，不能宣通，故陰氣獨結於心下而為痞也。夫郭公夏五三豕渡河之類，古經迭見，若必句句按文解釋，不亦難乎！

第三疑在「太陽下編」五十四節，其節為傷寒脈浮滑。夫滑則熱入裡矣，乃滑而兼浮，是其熱未盡入裡，半在陽明之府，半在陽明之經也。在經為表，在府為裡，故曰表有熱，裡有寒。《內經》謂「熱病者，皆傷寒之類也」，又謂「人之傷於寒也，則為病熱」，此所謂裡有寒者，蓋謂傷寒之熱邪已入裡也。陳氏之解原如斯，愚則亦以為然。至他注疏家，有謂此寒熱二字宜上下互易，當作外有寒裡有熱者。然其脈象既現浮滑，其外表斷不至惡寒也。有謂此寒字當係痰之誤，因痰寒二音相近，且脈滑亦為有痰之證也。然在寒溫，其脈有滑象原主陽明之熱

已實，且足徵病者氣血素充，治亦易愈。若因其脈滑而以為有痰，則白虎湯豈為治痰之劑乎？

第四疑在〈陽明篇〉第七十六節，其節為病人無表裡證，蓋言無頭痛項強惡寒之表證，又無腹滿便硬之裡證也。繼謂「發熱七八日，雖脈浮數者，可下之」，此數語殊令人詫異。夫脈浮宜汗，脈數忌下，人人皆知，況其脈浮數並見而竟下之，其病不愈而脈更加數也必矣，故繼言「假令已下，脈數不解」云云，後則因消谷善饑，久不大便而復以抵當湯下之。夫寒溫之證脈數者，必不思飲食，未見有消穀善饑者，且即消穀善饑，不大便，何以見其必有瘀血，而輕投以抵當湯乎？繼則又言「若脈數仍不解而下不止」云云，是因一下再下而其人已下脫也。夫用藥以解其脈數，其脈數未解，而轉致其下脫，此其用藥誠為節節失宜，而猶可信為仲景之原文乎？試觀〈陽明篇〉第三十一節，仲景對於下證如何鄭重，將兩節文對觀，則此節為偽作昭然矣。夫古經之中，猶不免偽作（如《尚書》之今文），至方術之書，其有偽作也，原無足深訝，所望注疏家審為辨別而批判之，不至貽誤於醫界，則幸甚矣！

答王景文問《神州醫藥學報》何以用真武湯治其熱日夜無休止立效

《傷寒論》真武湯乃仲景救誤治之方，其人本少陰煩躁，醫者誤認為太陽煩躁而投以大青龍湯，清之散之太過，遂至其人真陽欲脫，而急用真武湯以收回其欲脫之元陽，此真武湯之正用也。觀《神州醫藥學報》所述之案，原係外感在表半里，中無大熱，故寒熱往來，脈象濡緩，而投以濕溫之劑，若清之散之太過，證可變為裡寒外熱（即真寒假熱），其元陽不固較少陰之煩躁益甚，是以其熱雖日夜無休止，口唇焦而舌苔黃膩，其脈反細數微浮而濡也。若疑脈數為有熱，而數脈與細浮濡三脈並見實為元陽搖搖欲脫之候，猶火之垂垂欲滅也。急用真武湯以迎回元陽，俾復本位，則內不涼而外不熱矣。是投以真武湯原是正治之法，故能立建奇功，此中原無疑義也。特其語氣激昂，務令筆鋒搖曳生姿，於病情之更改，用藥之精義皆未發明，是以閱者未能了然也。

論吳又可達原飲不可以治溫病

北方醫者治溫病，恆用吳又可達原飲，此大謬也。吳氏謂崇禎辛巳，疫氣流行，山東、浙江南北兩道感者尤多，遂著《瘟疫論》一書，首載達原飲，為治瘟疫初得之方，原非治溫病之方也。疫者，天地戾氣，其中含有毒菌，遍境傳染若役使然，故名為疫。因疫多病熱，故名為瘟疫（病寒者名為寒疫），瘟疫即溫也，是以方中以逐不正之氣為主。至於溫病，乃感時序之溫氣，或素感外寒伏於膜原，久而化熱，乘時發動，其中原無毒菌，不相傳染。治之者惟務清解其熱，病即可愈，若於此鑒別未精，本係溫病而誤投以達原飲，其方中檳榔開破之力既能引溫氣內陷，而厚朴、草果之辛溫開散，大能耗陰助熱，尤非病溫者所宜（病溫者多陰虛，尤忌耗陰之藥），雖有知母、芍藥、黃芩各一錢，其涼力甚輕，是以用此方治溫病者，未有見其能愈者也。且不惟不能愈，更有於初病時服之即陡然變成危險之證者，此非愚之憑空擬議，誠有所見而云然也。

愚初習醫時，曾見一媪，年過六旬，因傷心過度，積有勞疾，於仲春得溫病，醫者投以達原飲，將方中草果改用一錢，謂得汗則愈，乃服後汗未出而病似加重，醫者遂將草果加倍，謂服後必然得汗，果服後頭面汗出如洗，喘息大作，須臾即脫，或疑此證之僨事，當在服達原飲將草果加重，若按其原方份量，草果只用五分，即連服數劑亦應不至汗脫也。答曰「草果性甚猛烈，即五分亦不為少。愚嘗治脾虛泄瀉服藥不效，因思四神丸治五更瀉甚效，中有肉果，本草謂其能健脾澀

腸，遂用健補脾胃之藥煎湯送服肉果末五分，須臾覺心中不穩，六脈皆無，遲半點鐘其脈始見，恍悟病人身體虛弱，不勝肉果辛散之力也。草果與肉果性原相近，而其辛散之力更烈於肉果，雖方中止用五分，而與檳榔、厚朴並用，其猛烈之力固非小矣。由斯觀之，達原飲可輕用哉！



論吳氏《溫病條辨》二甲復脈三甲復脈二湯

《金匱》瘧病門有鱉甲煎丸，治瘧病以月一日發，當十五日愈，設不愈，當月盡解如其不瘥，結為癥瘕，名曰瘧母，此丸主之。夫鱉甲煎丸既以鱉甲為主藥，是其破癥瘕之力多賴鱉甲，則鱉甲具有開破猛烈之性明矣。愚曾治久瘧不愈，單用鱉甲細末四錢，水送服，服後片時，覺心中怔忡殊甚，移時始愈。夫瘧當未發之先，其人原似無病，而猶不受鱉甲之開破，況當病劇之候，邪實正虛，幾不能支，而猶可漫投以鱉甲，且重用鱉甲乎？審斯則可進而與論吳氏《溫病條辨》中二甲復脈及三甲復脈二湯矣。

吳氏二甲復脈湯所主之證，為熱邪深入下焦，脈沉數，舌乾齒黑，手指但覺蠕動，急防痙厥，二甲復脈湯主之。其方中重用鱉甲八錢，夫溫病之邪下陷，大抵皆體弱之人，為其體弱又經外感之邪熱多日鑠耗，則損之又損，以致氣血兩虧，肝風欲動。其治法當用白虎加人參湯，再加生龍骨、生牡蠣各八錢，方中之義以人參補其虛，白虎湯解其熱，龍骨、牡蠣以鎮肝熄風，此用白虎加人參湯兼取柴胡加龍骨牡蠣湯之義，以熟籌完全，自能隨手奏效也。

其三甲復脈湯，於二甲復脈湯中再加龜板一兩，所主之證亦熱邪深入下焦，熱深厥甚，脈細促，心中憺憺大動，甚則心中痛者，三甲復脈湯主之。

按：此證邪益盛，正益虛，肝風已動，乃肝經虛極將脫之候。鱉甲色青入肝，其開破之力注重於肝，尤所當忌。宜治以前方，以生山藥八錢代方中粳米（生山

藥能代粳米和胃兼能滋真陰固氣化），再用所煎藥湯送服朱砂細末五分，亦可奏效。或問「吳氏為近代名醫，何以治此二證不能擬方盡善」？答曰「吳氏誠為近代名醫，此非虛譽，然十全之醫，世所罕覩，吳氏所短者，不善用白虎湯，而多所禁忌，是以書中謂脈浮而弦細者，不可用白虎湯；脈沉者，不可用白虎湯；汗不出者，不可用白虎湯；不渴者，不可用白虎湯。今觀其二甲、三甲所主之證，一則脈沉數，一則脈細促，而皆不見有汗，皆未言渴，是皆在其禁用白虎例中，是以對於此二證不用白虎湯加減，而用復脈湯加減也。獨不思龜板在《本經》亦主癥瘕，藥房又皆用醋炙，其開破之力亦非輕也。

特是吳氏禁用白虎諸條，有可信者，有顯與經旨背者，此尤不可不知。吳氏謂脈浮弦而細者禁用白虎，此誠不可用矣。至其謂脈沉者，汗不出者、不渴者皆禁用白虎，則非是。即愚素所經驗者言之，其脈沉而有力數，當係熱邪深陷，其氣分素有傷損，不能托邪外出。治以白虎加人參湯，補氣即以清熱，服後其脈之沉者即起，而有力者亦化為和平矣。其脈或沉而微細數，若確審其蘊有實熱，此少陰腎虛，伏氣化熱乘之，致腎氣不能上潮以濟心脈之跳動，是以其脈若與證相反，亦可治以白虎加人參湯，用鮮茅根二三兩煮水以煎藥（若無鮮茅根，乾茅根亦可用），其性能發伏熱外出，更能引藥力自上下達，服後則脈之沉者即起，而微細者亦自復其常度矣。其汗不出者，若內蘊有實熱，正可助以白虎湯以宣佈其熱外達，是以恒有病熱無汗，服後即汗出而愈者，其有不能服即得汗，而其外達

之力，亦能引內蘊之熱息息自皮膚透出，使內熱暗消於無形。且吳氏原謂白虎湯為達熱出表之劑，何以又謂無汗者禁用白虎乎？再者，白虎湯所主之證，兩見於《傷寒論》，在《太陽篇》，一在《陽明篇》。《太陽篇》提綱中，未言出汗，至《陽明篇》提綱中始有自汗出之文，由斯知外感之熱，深人已實，無論有汗無汗，皆可投之，此為用白虎湯之定法。豈吳氏但記《陽明篇》用白虎湯之法，而忘《太陽篇》用白虎湯之法乎？又《傷寒論》用白虎湯之例，渴者加人參，其不渴而有實熱者，單用白虎湯可知矣。吳氏則謂不渴者不用白虎湯，是渴者可但用白虎湯無須加人參也由斯而論，吳氏不知白虎湯用法，並不知白虎加人參湯用法矣。夫白虎湯與白虎加人參湯，原為治溫病最緊要之方，吳氏欲辨明溫病治法，而對於此二方竟混淆其用法如此，使欲用二者者至望其所設禁忌而卻步，何以挽回溫病中危險之證乎？愚素於吳氏所著醫案原多推許，恒於醫界力為提倡，以廣其傳，而茲則直揭其短者，為救人計，不敢為前賢諱過也。

嘗考吳氏醫案作於《溫病條辨》之後，其作《溫病條辨》時，似猶未深知石膏之性，故於白虎湯多所禁忌而不敢輕用，其方中生石膏分量只一兩，又必煎湯三杯，分三次飲下，至其醫案中所載之案，若中風、痿痺、痰飲、手足拘攣諸證，凡其脈洪實者，莫不重用生石膏，或數兩，或至半斤，且恒連服，若此有膽有識，誠能深知石膏之性也。善哉！吳氏之醫學可謂與年俱進矣。

論冬傷於寒春必病溫及冬不藏精春必病溫治法

嘗讀《內經》有「冬傷於寒，春必病溫」之語，此中原有深義，非淺學人所易窺測也。乃篤信西說者，據病菌潛伏各有定期之說，謂病菌傳於人身，未有至一月而始發動者，況數月乎？因此一倡百和，遂謂《內經》皆荒渺之談，分毫不足憑信，不知毒氣之傳染有菌，而冬令嚴寒之氣，為寒水司天之正氣，特其氣嚴寒過甚，或人之居處衣服欠暖，或冒霜雪而出外營生，即不能御此氣耳。是以寒氣之中人也，其重者，實時成病，即冬令之傷寒也。其輕者，微受寒侵，不能即病，由皮膚內侵，潛伏於三焦脂膜之中，阻塞氣化之升降流通，即能暗生內熱。迨至內熱積而益深，又兼春回陽生，觸發其熱，或更薄受外感，以激發其熱，是以其熱自內暴發而成溫病，即後世方書所謂伏氣成溫也。

至於治之之法，有清一代名醫多有謂此證不宜發汗者，然仍宜即脈證之現象而詳為區別。若其脈象雖有實熱，而仍在浮分，且頭疼、舌苔猶白者，仍當投以汗解之劑，然宜以辛涼發汗，若薄荷葉、連翹、蟬蛻諸藥，且更以清熱之藥佐之，若拙擬之清解湯、涼解湯、寒解湯三方，斟酌病之輕重，皆可選用也。此乃先有伏氣又薄受外感之溫病也。

若其病初得即表裡壯熱，脈象洪實，其舌苔或白而欲黃者，宜投以白虎湯，再加宣散之品若連翹、茅根諸藥，如此治法，非取汗解，然恆服藥後竟自汗而解，即或服藥後不見汗，其病亦解，因大隊寒涼之品與清輕宣散之品相並，自能排逐

內蘊之熱，息息自腠理達於皮毛以透出也（此乃伏氣暴發，自內達外之溫病，春夏之交多有之）。蓋此等證皆以先有伏氣，至春深萌動欲發，而又或因暴怒，或因勞心勞力過度，或因作苦於烈日之中，或因酣眠於暖室內，是以一發表裡即壯熱，治之者，只可宣散清解，而不宜發汗也，此冬傷於寒春必病溫之大略治法也。

《內經》又謂「冬不藏精，春必病溫」，此二語不但為西醫所指摘，即中醫對此節經文亦恆有疑意，謂冬不藏精之人，若因腎虛而寒入腎中，當即成少陰傷寒，為直中真陰之劇證，何能遲至春令而始成溫病？不知此二句經文原有兩解，其所成之溫病亦有兩種，至其治法又皆與尋常治法不同。今試析言之，並詳其治法。

冬不藏精之人，其所患之溫病，有因猝然感冒而成者。大凡病溫之人，多係內有蘊熱，至春陽萌動之時，又薄受外感拘束，其熱即陡發而成溫。冬不藏精之人，必有陰虛，所生之熱積於臟腑，而其為外感所拘束而發動，與內蘊實熱者同也。其發動之後，脈象多數，息多微喘，舌上微有白苔，津液短少，後或乾黃，或舌苔漸黑，狀如斑點（為舌苔甚薄，若有若無，故見舌皮變黑），或頻飲水不能解渴，或時入陰分益加潮熱，此證初得其舌苔白時，亦可汗解，然須以大滋真陰之藥輔之。愚治此證，恆用連翹、薄荷葉各三錢，玄參、生地黃各一兩，煎湯服之，得汗即愈，若服藥後，汗欲出仍不能出，可用白糖水送服西藥阿斯匹林二分許，其汗即出，或單將玄參、生地黃煎湯，送服阿斯匹林一瓦，亦能得汗。若

至熱已傳裡，舌苔欲黃，或至黃而兼黑，脈象數而有力，然按之弦硬，非若陽明有實熱者之洪滑，此陰虛熱實之象，宜治以白虎加人參湯，更以生地黃代知母，生山藥代粳米，煎一大劑，取湯一大碗，分多次溫飲下（拙著傷寒溫病同用方後載有此方，附載治癒之案若干。可參觀也）。

又有因伏氣所化之熱先伏藏於三焦脂膜之中，迨至感春陽萌動而觸發，其發動之後，恆因冬不藏精者，其腎臟虛損，伏氣乘虛而竄入少陰，其為病狀，精神短少，喜偃臥，昏昏似睡，舌皮乾，毫無苔，小便短赤，其熱鬱於中而肌膚卻無甚熱。其在冬令，為少陰傷寒，即少陰證，初得宜治以黃連阿膠湯者也。在春令，即為少陰溫病，而愚治此證，恆用白虎加人參湯，以生地黃代知母，生懷山藥代粳米，更先用鮮白茅根三兩煎湯以之代水煎藥，將藥煎一大劑，取湯一大碗，分三次溫飲下，每飲一次調人生雞子黃一枚。初飲一次後，其脈當見大，或變為洪大，飲至三次後，其脈又復和平，而病即愈矣。此即冬不藏精春必病溫者之大略治法也。

上所論各種溫病治法，原非憑空擬議也，實臨證屢用有效，而後敢公諸醫界同人也。

有溫病初得即表裡大熱，宜治以白虎湯或白虎加人參湯者，其證發現恆在長夏，或在秋夏之交，而愚生平所遇此等證，大抵在烈日之中，或田間作苦，或長途勞役，此《傷寒論》所謂暍病也，亦可謂之暑溫也。其脈洪滑有力者，宜用白

虎湯。若脈雖洪大而按之不實者，宜用白虎加人參湯。又皆宜煎一大劑，分數次溫飲下，皆可隨手奏效。

論伏氣化熱未顯然成溫病者之治法

《內經》謂「冬傷於寒，春必溫病」，此言伏氣化熱成溫病也。究之伏氣化熱成溫病者，大抵因復略有感冒，而後其所化之熱可陡然成溫，表裡俱覺壯熱。不然者，雖伏氣所化之熱深入陽明之府，而無外感束其表，究不能激發其肌肉之熱，是以治之者恆不知其為伏氣化熱，放膽投以治溫病之重劑，是以其熱遂永留胃府致生他病。今試舉一案以明之。

天津建設廳科長劉敷陳君，愚在奉時之舊友也，於壬申正月上旬，覺心中時時發熱，而周身又甚畏冷。時愚回籍，因延他醫診治，服藥二十餘劑，病轉增劇，二便皆閉，再服他藥，亦皆吐出，少進飲食，亦恆吐出，此際愚適來津，診其脈，弦長有力，然在沉分，知其有伏氣化熱，其熱不能外達於表，是以心中熱而外畏冷，此亦熱深厥深之象也。俾先用鮮茅根半斤切碎，水煮三四沸，視茅根皆沉水底，其湯即成，取清湯三杯，分三次服，每服一次，將土狗三個搗為末，生赭石三錢亦為細末，以茅根湯送下，若服過兩次未吐，至三次赭石可以不用，及將藥服後，嘔吐即止，小便繼亦通下，再診其脈，變為洪長有力，其心中仍覺發熱，外表則不畏冷矣。其大便到此已半月未通下，遂俾用大潞參五錢煎湯，送服生石膏細末一兩。翌晨大便下燥糞數枚，黑而且硬，再診其脈，力稍緩，知心中猶覺發熱，又俾用潞黨參四錢煎湯，送服生石膏細末八錢。翌晨又下燥糞二十餘枚，仍未見溏糞。其心中不甚覺熱，脈象仍似有力，又俾用潞黨參三錢煎湯，送服生



石膏細末六錢。又下燥糞十餘枚，後則繼為溏糞，病亦從此痊愈矣。蓋凡伏氣化熱竄入胃府，非重用石膏不解，《傷寒論》白虎湯原為治此證之的方也。然用白虎湯之例，汗吐下後皆加人參，以其虛也，而此證病已數旬，且頻嘔吐，其元氣之虛可知，故以人參煎湯送石膏，此亦仿白虎加人參湯之義也。至石膏必為末送服者，以其涼而重墜之性善通大便，且較水煮但飲其清湯者，其退熱之力又增數倍也。是以凡伏氣化熱，其積久所生之病，有成肺病者，有成喉病者，有生眼疾者，有患齒疼者，有病下痢者，有病腹疼者（即盲腸炎），其種種病因若皆由於伏氣化熱，恆有用一切涼藥，其病皆不能愈，而投以白虎湯或投以白虎加人參湯，再因證加減，輔以各病當用之藥，未有不隨手奏效者，此治伏氣化熱之大略也。至於拙著全書中，所載伏氣化熱之病甚多，其治法亦各稍有不同，皆可參觀。

詳論猩紅熱治法

自入夏以來，各處發生猩紅熱，互相傳染，天氣炎熱而病益加多加劇，治不如法，恆至不救。夫猩紅熱非他，即痧疹而兼溫病也。嘗實驗痧疹之證，如不兼溫病，其將出未出之先，不過微有寒熱，或頭微疼，或眼胞微腫，或肢體微酸懶，或食慾不振。其疹既出之後，其表裡雖俱覺發熱，而實無熾盛之劇熱，治之者始終投以清表（痧疹始終宜用表藥，然宜表以辛涼，不宜表以溫熱）解毒之劑，無不愈者，即或始終不服藥，聽其自出自醫，在一星期間亦可自愈，此以其但有疹毒之熱，而無溫病之熱相助為虐，故其病易愈耳。

至於疹而兼溫者，則與斯迥異，其初病之時疹猶未出，即表裡壯熱，因疹毒之熱尚未萌芽，而溫病之熱已熾盛也，治之者宜將薄荷、連翹、蟬蛻諸托表之藥，與玄參、沙參、天花粉諸清裡之藥並用，其連翹可用三錢，薄荷葉、蟬蛻可各用錢半，玄參、沙參、花粉可各用五錢，再少加金銀花、甘草解毒。若慮其痧疹不能透達，可用鮮茅根二兩（如無可代以鮮蘆根）水煮數沸，取清湯數盅，以之代水煎藥，煎湯一大盅，溫服，其疹必完全透出矣，或以外更用鮮茅根數兩煎四五沸以其湯代茶，更佳。

若其痧疹雖皆透發於外，而火猶熾盛，且深入陽明之府，其舌從前白者至此則漸黃，心中煩熱異常，或氣粗微喘，鼻翹動，或神昏譫語，腦膜生炎，其大便乾燥，小便赤澀，此乃陽明胃腑大實之候，而欲治陽明胃腑之實熱，《傷寒論》

白虎湯原為千古不祧之良方，為其兼有疹毒，可於方中加連翹二錢，羚羊角一錢（另煎兌服，或銼細末送服，或以金銀花二錢代之），再用鮮茅根或鮮蘆根煮湯，以之代水煎藥。方中若用生石膏二兩，可煎湯兩盅，分兩次溫服，若用生石膏三兩，可煎湯三盅，分三次溫服。一劑熱未清者，可服至數劑，以服後熱退，大便仍不滑瀉為度。

若其胃腑雖有大熱，因小便不利而大便滑瀉者，白虎湯又不可驟服，宜先用滑石、生懷山藥各一兩，生杭芍八錢，連翹、蟬蛻各錢半，甘草三錢（此方即拙擬滋陰宣解湯），煎湯一大盅服之，其滑瀉當即止。瀉止之後，熱猶不退者，宜於初次方中加滑石六錢，服之以退其熱，仍宜煎湯數盅，徐徐溫服。至於大熱已退，疹已見靨，而其餘熱猶盛者，宜再治以滋陰清熱解毒之劑，而仍少加托表之藥佐之，方用玄參八錢，沙參、花粉各五錢，連翹、金銀花、鮮蘆根各三錢，甘草二錢，可連服數劑。其熱遞減，藥劑亦宜隨之遞減，迨服至其熱全消停服。以上諸方，若遇證兼喉痧者，宜於方中加射干、生蒲黃各三錢。惟治大便滑瀉方中不宜加，可外用硼砂、生寒水石各二錢，梅片、薄荷冰各一分，共研細吹喉中。

按：猩紅熱本非危險之證，而所以多危險者，以其證現白虎湯證時，醫者不敢放膽用白虎湯治之也。至愚治此證時，不但胃腑大實之候可放膽投以大劑白虎湯，即當其疹初見點，其人表裡壯熱，脈象浮洪，但問其大便實者，恆用生石膏一兩或兩半煎湯，送服西藥阿斯匹林二分，周身得微汗，其疹全發出而熱亦退矣。

曾治一六七歲幼女，病溫半月不愈，其脈象數而有力，肌膚熱而乾澀，其心甚煩躁，輾轉床上不能安臥，疑其病久陰虧，不堪外感之灼熱，或其痧疹之毒伏藏未能透出，是以其病之現狀若斯。問其大便，三日未行，投以大劑白虎加人參湯，以生山藥代粳米，又為加連翹二錢，蟬蛻一錢，煎湯兩盅，分數次溫飲下。連服二劑，大便通下，大熱已退，心中仍騷擾不安。再診其脈，已還浮分，疑其餘熱可作汗解，遂用阿斯匹林一瓦和白糖沖水服之，周身得微汗，透出白痧若干，病遂愈。由斯知阿斯匹林原可為透發痧疹之無上妙藥，而石膏質重氣輕，原亦具透表之性，又伍以最善發表之阿斯匹林，其涼散之力盡透於外，化作汗液而不復留中（石膏煮水毫無汁漿是以不復留中），是以胃腑之熱未實而亦可用也。愚臨證五十年，治此證者不知凡幾，其始終皆經愚一人治者，約皆能為之治癒也。

愚初來津時，原在陸軍為醫正，未嘗掛牌行醫，時有中學教員宋志良，其兩兒一女皆患猩紅熱，延醫治療無效，因其素閱拙著《衷中參西錄》，遂造寓懇求為之診治，即按以上諸法為之次第治癒。其女年方九歲，受病極重，周身肌膚皆紅。細審之，為所出之疹密佈不分個數。醫者見之，謂凡出疹若斯者，皆在不治之例，志良亦深恐其不治。愚曰「此勿憂，放膽聽吾用藥，必能挽救，不過所用之白虎湯中分量加重耳」，方中所用之生石膏自三兩漸加至六兩（皆一劑分作數次服），始完全將病治癒（凡如此連次重用生石膏者，皆其大便甚實也，若大便

不實者，不能如此重用）。志良喜甚，遂多刷廣告數千張言明其事，以遍佈於津沽，且從此授課之餘勤苦習醫，今已醫術精通，救人夥矣。

按：白虎湯方原以石膏為主藥，其原質係硫氧氫鈣化合而成，宜生用最忌煨用。生用之則其硫氧氫之性涼，而能散，以治外感有實熱者，直勝金丹。若煨之，則其所含之硫氧氫皆飛去，所餘之鈣經煨即成洋灰（洋灰原料石膏居多），能在水中結合，點豆腐者用之以代鹵水。若誤服之，能將人之血脈凝結，痰水錮閉，故煨石膏用至七八錢，即足誤人性命。迨至僨事之後，猶不知其誤在煨，不在石膏，轉以為石膏煨用之其猛烈猶足傷人，而不煨者更可知矣。於斯一倡百和，皆視用石膏為畏途，是以《傷寒論》白虎湯原可為治猩紅熱有一無二之良方，而醫者遇常用之時，竟不敢放膽一用，即或有用者，縱不至誤用煨石膏，而終以生石膏之性為大寒，重用不過三四錢，不知石膏性本微寒，明載於《神農本草經》，且質又甚重，三四錢不過一小撮耳，以微寒之藥欲止用一小撮，以救熾盛之毒熱，杯水車薪，用之果何益乎。是以愚十餘年來，對於各省醫學志報莫不提倡重用生石膏，深戒誤用煨石膏，而河北全省雖設有醫會，實無志報宣傳，縱欲革此積弊，恒苦無所憑藉，殊難徒口為之呼籲。今因論猩紅熱治法論及石膏，實不覺心長詞費也。

或問「諸家本草皆謂石膏煨用之則不寒胃，今謂若用煨石膏至七八錢即足誤人性命，是諸家本草之說皆不可信歟」？答曰「本草當以《本經》為主，其石膏

條下未言煨用，至《名醫別錄》原附《本經》而行者，於石膏亦未言煨用，至到宋時雷氏本草炮製書出，對於各藥之制法論之最詳，於石膏亦未言煨用。迨有明李氏《綱目》出始載「近人因其性寒火煨過用之，不傷脾胃」。夫曰近人不過流俗之傳說耳，從此以後之撰本草者，載其語而並將「近人」二位元組去，似謂石膏之制法亙古如斯，不復研究其可否。此誠所謂人云亦云，以訛傳訛者也。且即用古人成方，原宜恪遵古人規矩，《傷寒論》白虎湯石膏下，止注打碎綿裹，未嘗言煨，其徑用生者可知。且煨者煮湯可代鹵水點豆腐，是其性與鹵水同也。友人桑素村（唐山人）曾言其姊曾飲鹵水一兩殉夫盡節，是鹵水不可服明矣，豈性同鹵水之煨石膏獨可服乎？

或問「硫氧之性原熱，石膏中既含有硫氧，何以其性轉涼乎」？答曰「硫氧之性雖熱，而參之以氫與氧化合，即為水素，水之性原涼也。且硫氧相合即為西藥硫酸，原與鹽酸、硝酸同列於解熱藥中，既能解熱，其性不當以涼論乎！不但此也，又如西藥阿斯必林，最能解熱者也，其原料為楊柳皮液加硫酸製成也，西藥規尼涅亦解熱藥也，其原料為雞納霜加硫酸製成（名硫酸規尼涅），或加鹽酸製成（名鹽酸規尼涅）也，又如犀角性涼為中西所共認，而化學家實驗此物之原質，為石灰質少含硫質，既含有硫質又何以涼乎？而強為之解者，有謂硫氧之性少用則涼，多用則熱者；有謂眾原質相合可以化熱為涼者。究之天之生物，凡具

有特異之性者，其功效恒出於原質之外也。此乃物性之良能，關於氣化之精微，而不可徒即形跡之粗以推測也。

【附案】

天津許姓學生，年八歲，於庚申仲春出疹，初見點兩日即靨，家人初未介意，遲數日，忽又發熱，其父原知醫，意其疹毒未透，自用藥表之，不效。延他醫治療，亦無效，延愚診視，其脈象細數有力，肌膚甚熱，問其心中，亦甚熱，氣息微喘，乾咳無痰，其咽喉覺疼，其外咽喉兩旁各起疙瘩大如桃核之巨者，撫之則疼，此亦疹毒未透之所致也。且視其舌苔已黃，大便數日未行，知其陽明府熱已實，必須清熱與表散之藥並用，方能有效。遂為疏方：鮮茅根半斤（切碎），生石膏二兩（搗細），西藥阿斯匹林一瓦半。先將茅根、石膏水煮四五沸，視茅根皆沉水底，其湯即成，取清湯一大碗，分三次溫飲下，每飲一次，送服阿斯匹林半瓦。初次飲後，遲兩點鐘再飲第二次。若初服後即出汗，後二次阿斯匹林宜少用，如法將藥服完，翌日視之，上半身微見紅點，熱退強半，脈亦較前平和，喉疼亦稍輕，其大便仍未通下，遂將原方茅根改用五兩，石膏改用兩半，阿斯匹林改用一瓦，仍將前二味煎湯分三次送服阿斯匹林，服後疹出見多，大便通下，表裡之熱已退十之八九，咽喉之疼又輕，惟外邊疙瘩則仍舊。愚恐其所出之疹仍如從前之靨急，俾每日用鮮茅根四兩以之煮湯當茶外，又用金銀花六錢，甘草三錢，

煎湯一大杯，分三次溫服，每次送梅花點舌丹一九（若在大人可作兩次服每次送服二丸），如此四日，疙瘩亦消無芥蒂矣。

按：此證脈僅細數有力，原非洪大有力，似石膏可以少用，而方中猶用生石膏二兩及兩半者，因與若干之茅根同煮，而茅根之渣可以減去石膏之力也。

又按：此證若於方中多用羚羊角數錢，另煎湯兌藥中服之，亦可再將疹表出，而其價此時太昂，無力之家實辦不到，是以愚擬得茅根、石膏、阿斯匹林並用以代之。凡證之宜用羚羊角者，可將此三味為方治之也。且此三味並用，又有勝於但用羚羊角之時也。第二卷羚羊角辨，後附有治癒之案可參觀。



論天水散（即六一散）治中暑宜於南方，北方用之宜稍變通

河間天水散，為清暑之妙藥，究之南方用之最為適宜，若北方用之，原宜稍為變通。蓋南方之暑多挾濕，故宜重用滑石，利濕即以瀉熱。若在北方，病暑者多不挾濕，或更挾有燥氣，若亦重用滑石以利其濕，將濕去而燥愈甚，暑熱轉不易消也。愚因是擬得一方，用滑石四兩，生石膏四兩，粉甘草二兩，朱砂一兩，薄荷冰一錢，共為細末，每服二錢，名之曰加味天水散。以治北方之暑病固效，以治南方之暑病，亦無不效也。方中之義用滑石、生石膏以解暑病之熱，而石膏解熱兼能透表，有薄荷冰以助之，熱可自肌膚散出，滑石解熱兼能利水，有甘草以和之（生甘草為末服之，最善利水，且水利而不傷陰），熱可自小便瀉出，又恐暑氣內侵，心經為熱所傷，故仿益元散之義加朱砂（天水散加朱砂名益元散）以涼心血，即以鎮安神明，使不至怔忡昏亂也。

又人受暑熱未必即病，亦恒如冬令伏氣伏於膜原，至秋深感涼氣激薄而陡然暴發，腹疼作瀉，其瀉也，暴注下迫，恒一點鐘瀉十餘次，亦有吐瀉交作者。其甚者，或兩腿轉筋。然身不涼，脈不閉，心中惟覺熱甚，急欲飲涼食冰者，此仍係暑熱為病，實與霍亂不同。丁卯季夏暑熱異常，中秋節後發現此等證甚多，重用生石膏煎湯送服益元散，其病即愈。腹中疼甚者，可用白芍、甘草（益元散中甘草甚少，故加之）與石膏同煎湯，送服益元散。若瀉甚者，可用生山藥、甘草與石膏同煎湯，送服益元散，或用拙擬滋陰潤燥湯（方在三期五卷，係滑石、生

山藥各一兩，生杭芍六錢，甘草三錢）加生石膏兩餘或二兩，同煎服，病亦可愈。其欲食冰者，可即與之以冰，欲飲井泉涼水者，可即與之以井泉水，聽其儘量食之飲之無礙也。且凡吐不止者，若欲食冰，聽其儘量食之，其吐即可止，腹疼下瀉亦可並愈，其間有不並愈者，而其吐既止，亦易用藥為之調治也。

論伏暑成瘧治法

方書謂冬冷多溫病，夏熱多瘧病。此言冬日過冷，人身有伏寒，至春隨春陽化熱，即多成溫病；夏日過熱，人身有伏暑，至秋為薄寒所激發，即多生瘧疾也。丁卯季夏暑熱異常，京津一帶因熱而死者甚多，至秋果多瘧疾，服西藥金雞納霜亦可愈，而愈後恒屢次反復。姻家王姓少年，寄居津門，服金雞納霜愈瘧三次後，又反復。連服前藥數次，竟毫無效驗，診其脈，左右皆弦長有力。夫弦為瘧脈，其長而有力者，顯係有伏暑之熱也，為開白虎湯方，重用生石膏二兩，又加柴胡、何首烏各二錢，一劑而瘧愈，恐未除根，即原方又服一劑，從此而病不反復矣。此方用白虎湯以解伏暑，而又加柴胡、何首烏者，凡外感之證其脈有弦象者，必兼有少陽之病，宜用柴胡清之，而外邪久在少陽，其經必虛，又宜用何首烏補之，二藥並用，一扶正，一逐邪也。少陽與陽明並治，是以伏暑愈而瘧亦隨愈也。後旬日，病者至寓致謝，言從前服西藥愈後，仍覺頭昏、神瞶、心中煩躁，自服大劑石膏後，頓覺精神清爽，俯仰之間似別有天地，石膏之功用何其弘哉。愚曰「石膏為藥品中第一良藥，真有起死回生之功。然止宜生用，而不可煨用，余屢次登各處醫學志報論之詳矣。彼西人謂其不堪列於藥品者，原其初次未定之論（近今西人，已知石膏有大用，詳於二卷石膏煨用即同鹵水說篇）。而崇西法者，至今猶盛傳其說，何其大夢猶醒也」。

〈 第 六 卷 〉

此卷論黃疸、痢疾、霍亂、鼠疫四證。黃疸原分內傷、外感兩種。疾似屬內傷，然多感初秋之氣而成，是亦兼外感也。霍亂、鼠疫雖為外感傳染之證，而病霍亂者多先脾胃傷損，病鼠疫者多先腎臟虛弱，是亦恒兼內傷也。因將四證匯為一編，細細論之。

### 論黃膽有內傷外感及內傷外感之兼證並詳治法

黃膽之證，中說謂脾受濕熱，西說謂膽汁濫行，究之二說原可溝通也。黃膽之載於方書者，原有內傷、外感兩種，試先以內傷者言之。內傷黃膽，身無熱而發黃，其來以漸，先小便黃，繼則眼黃，繼則周身皆黃，飲食減少，大便色白，恆多閉塞，乃脾土傷濕（不必有熱）而累及膽與小腸也。蓋人身之氣化由中焦而升降，脾土受濕，升降不能自如以敷布其氣化，而肝膽之氣化遂因之湮瘀（黃坤載謂肝膽之升降由於脾胃，確有至理），膽囊所藏之汁亦因之湮瘀而蓄極妄行，不注於小腸以化食，轉溢於血中而周身發黃，是以仲景治內傷黃膽之方，均是膽脾兼顧。試觀《金匱》黃膽門，其小柴胡湯顯為治少陽膽經之方無論矣。他如治穀疸之茵陳蒿湯，治酒疸之梔子黃柏湯，一主以茵陳，一主以梔子，非注重清肝膽之熱，俾肝膽消其炎腫而膽汁得由正路以入於小腸乎？至於女勞疸之硝石礬石散，浮視之似與膽無涉，深核之實亦注重治膽之藥。何以言之？硝石為焰硝，亦名火硝，性涼而味辛，得金之味。礬石為皂礬，又名青礬、綠礬（礬石是皂礬，不是白礬，解在三期第三卷審定《金匱》硝石礬石散下），係硫酸與鐵化合，得

金之質，肝膽木盛，膽汁妄行，故可借含有金味金質之藥以制之（皂礬色青味酸，尤為肝膽專藥）。彼訾中醫不知黃疸之原因在於膽汁妄行者，其生平未見仲景之書，即見之而亦未能深思也。

硝石礬石散為治女勞疸之的方，實可為治內傷黃膽之總方，其方硝石（俗名火硝，亦名焰硝）、礬石等分為散，大麥粥汁和服方寸匕（約重一錢），日三服，病隨大小便去，小便正黃色，大便正黑色是也。特是方中礬石，釋者皆以白礬當之，不無遺議。考《本經》礬石一名羽涅，《爾雅》又名涅石。徐氏說文釋涅字，謂黑土在水中，當係染黑之色。礬石既名為涅石，亦當為染黑色所需之物，豈非今之皂礬乎？是知皂礬、白礬，古人皆名為礬石，而愚臨症體驗以來，知以治黃膽，白礬之功效，誠不如皂礬。蓋黃膽之證，中法謂由脾中蘊蓄濕熱，西法謂由膽汁溢於血中。皂礬退熱燥濕之力，不讓白礬，故能去脾中濕熱，而其色綠且青（亦名綠礬，又名青礬），能兼入膽經，借其酸收之味，以斂膽汁之妄行。且此物化學家原可用硫酸水化鐵而成，是知礦中所產之皂礬，亦必多含鐵質。尤可借金鐵之餘氣，以鎮肝膽之本也。硝石性寒，能解臟腑之實熱，味鹹入血分，又善解血分之熱，且其性善消，遇火即燃，又多含氧氣。人身之血，得氧氣則赤。又善借硝石之消力，以消融血中之渣滓，則血之因膽汁而色變者，不難復於正矣。矧此證大便難者甚多，得硝石以軟堅開結，濕熱可從大便而解，而其鹹寒之性，善

清水腑之熱，即兼能使濕熱自小便解也。至用大麥粥送服者，取其補助脾胃之土以勝濕，而其甘平之性，兼能緩硝礬之峻，猶白虎湯中之用粳米也。

按：原方礬石下注有「燒」字，蓋以礬石酸味太烈，制為枯礬則稍和緩，而愚實驗以來，知徑用生者，其效更速。臨證者，相其身體強弱，斟酌適宜可也。

或曰「硝石、朴硝性原相近，仲景他方皆用朴硝，何此方獨用硝石」？答曰「朴硝味鹹，硝石則鹹而兼辛，辛者金之味也。就此一方觀之，礬石既含有鐵質，硝石又具有金味，既善理脾中之濕熱，又善制膽汁之妄行，中、西醫學之理，皆包括於一方之中，所以為醫中之聖也。且朴硝降下之力多，硝石消融之力多（理詳砂淋丸下）。膽汁之溢於血中者，佈滿周身難盡降下，實深賴硝石之善消融也。又朴硝為水之精華結聚，其鹹寒之性，似與脾濕者不宜。硝石遇火則燃，兼得水則中真陽之氣。其味之鹹不若朴硝，且兼有辛味。似能散濕氣之鬱結，而不致助脾濕也。特是《金匱》治內傷黃膽，雖各有主方，而愚臨證經驗以來，知治女勞疸之硝石礬石散不但治女勞疸甚效，即用以治各種內傷黃膽，亦皆可隨手奏效。惟用其方時，宜隨證制宜而善為變通耳」。

按：硝石礬石散原方，用硝石、礬石等分為散，每服方寸匕（約重一錢），大麥粥送下。其用大麥粥者，所以調和二石之性，使之與胃相宜也。至愚用此方時，為散藥難服，恆用炒熟大麥麵，或小麥麵亦可，與二石之末等分，和水為丸，如五味子大，每服二錢，隨證擇藥之相宜者，數味煎湯送下（因藥中已有麥麵為

丸，不必再送以大麥粥。其有實熱者，可用茵陳、梔子煎湯送服。有食積者，可用生雞內金、山楂煎湯送服。大便結者，可用大黃、麻仁煎湯送服。小便閉者，可用滑石、生杭芍煎湯送服。噁心嘔吐者，可用赭石、青黛煎湯送服。左脈沉而無力者，可用生黃耆、生薑煎湯送服。右脈沉而無力者，可用白朮、陳皮煎湯送服。其左右之脈沉遲而弦，且心中覺涼，色黃黯者，附子、乾薑皆可加入湯藥之中。脈浮有外感者，可先用甘草煎湯送服西藥阿斯匹林一瓦，出汗後再用甘草湯送服丸藥。又凡服此丸藥而嫌其味劣者，皆可於所服湯藥中加甘草數錢以調之。

至內傷黃疸證皆宜用此丸者，其原因有數端。脾臟為濕所傷者，其膨脹之形有似水母。嘗見漁人得水母，敷以礬末，所含之水即全然流出。因此散中有礬石，其控治脾中之水，亦猶水母之敷以礬末也。又黃膽之證，西人謂恆有膽石阻塞膽囊之口，若尿道之有淋石也。硝石、礬石並用，則膽石可消。又西人謂小腸中有鉤蟲亦可令人成黃膽，硝石、礬石並用，則鉤蟲可除，此所以用此統治內傷黃膽，但變通其送服之湯藥，皆可隨手奏效也。

至外感黃膽，約皆身有大熱，乃寒溫之熱，傳入陽明之府，其熱旁鑠，累及膽脾，或脾中素有積濕，熱入於脾與濕合，其濕熱蘊而生黃，外透肌膚而成疸，或膽中所寄之相火素熾，熱入於膽與火並，其膽管因熱腫閉，膽汁旁溢混於血中，亦外現成疸。是以仲景治外感黃膽有三方，皆載於《傷寒論》〈陽明篇〉，一為茵陳蒿湯，二為梔子柏皮湯，三為麻黃連翹赤小豆湯，皆膽脾並治也。且統觀仲



景治內傷、外感黃膽之方，皆以茵陳蒿為首方，誠以茵陳蒿性涼色青，能入肝膽，既善瀉肝膽之熱，又善達肝膽之鬱，為理肝膽最要之品，即為治黃膽最要之品。

至愚生平治外感黃膽，亦即遵用《傷寒論》三方，而於其熱甚者，恆於方中加龍膽草數錢。又用麻黃連翹赤小豆湯時，恆加滑石數錢，恐連翹利水之力不足，故加滑石以助之。至赤小豆，宜用作飯之赤小豆，斷不可誤用相思子。至於奉天藥房皆用相思子亦名紅豆者為赤小豆，誤甚。若其證為白虎湯或白虎加人參湯證及三承氣湯證，而身黃者，又恆於白虎承氣中，加茵陳蒿數錢。其間有但用外感諸方不效者，亦可用外感諸方煎湯，送服硝石礬石散。

黃膽之證又有先受外感未即病，迨釀成內傷而後發現者。歲在乙丑，客居滄州，自仲秋至孟冬一方多有黃膽證，其人身無大熱，心中滿悶，時或覺熱，見飲食則噁心，強食之恆作嘔吐，或食後不能下行，劇者至成結證，又間有腹中覺涼，食後飲食不能消化者。愚共治六十餘人，皆隨手奏效。其脈左似有熱，右多鬱象，蓋其肝膽熱而脾胃涼也。原因為本年秋季夏陰雨連旬，空氣之中所含水分過度，人處其中，臟腑為濕所傷。肝膽屬木，稟少陽之性，濕鬱久則生熱，脾胃屬土，稟太陰之性，濕鬱久則生寒，此自然之理也。為木因濕鬱而生熱，則膽囊之口腫脹，不能輸其汁於小腸以化食，轉溢於血分，色透肌表而發黃。為土因濕鬱而生寒，故脾胃火衰，不能熟腐水穀，運轉下行，是以恆作脹滿，或成結證。為疏方用茵陳、梔子、連翹各三錢，瀉肝膽之熱，即以消膽囊之腫脹；厚朴、陳皮、生麥芽

（麥芽生用不但能開胃，且善舒肝膽之鬱）各二錢，生薑五錢，開脾胃之鬱，即以祛脾胃之寒；茯苓片、生薏米、赤小豆、甘草各三錢，瀉臟腑之濕，更能培土以勝濕，且重用甘草即以矯茵陳蒿之劣味也（此證聞茵陳之味多噁心嘔吐，故用甘草調之）。服一劑後，心中不覺熱者，去梔子，加生杭芍三錢，再服一劑，若仍不能食者，用乾薑二錢以代生薑，若心中不覺熱轉覺涼者，初服即不用梔子，以乾薑代生薑。涼甚者，乾薑可用至五六錢。嘔吐者，加赭石六錢或至一兩。服後吐仍不止者，可先用開水送服赭石細末四五錢，再服湯藥。胃脘腸中結而不通者，用湯藥送服牽牛（炒熟）為末三錢，通利後即減去。如此服至能進飲食，即可停藥。黃色未退，自能徐消。此等黃膽，乃先有外感內伏，釀成內傷，當於《傷寒論》、《金匱》所載之黃膽以外另為一種矣。

或問「醫學具有科學性質，原貴證實，即議論之間，亦貴確有實據。仲景治黃膽雖云膽脾並治，不過即其所用之藥揣摩而得。然嘗考之《傷寒論》，謂『傷寒脈浮而緩，手足自溫，是為繫在太陰，太陰者，身當發黃』，是但言發黃證由於脾也。又嘗考之《金匱》，謂『寸口脈浮而緩，浮則為風，緩則為痺，痺非中風，四肢苦煩，脾色必黃，瘀熱以行』，是《金匱》論黃膽亦責重脾也。夫古人立言原多渾括，後世注疏宜為詳解，當西醫未來之先，吾中華方書之祖述仲景者，亦有顯然謂黃膽病由於膽汁溢於血中者乎？答曰「有之。明季喻嘉言著《寓意草》，其論錢小魯嗜酒成病，謂膽之熱汁滿而溢於外，以漸滲於經絡，則身目俱

黃，為酒疸之病云云。豈非顯然與西說相同乎？夫西人對於此證必剖驗而後知，喻氏則未經剖驗而已知。非喻氏之智遠出西人之上，誠以喻氏最深於《金匱》、《傷寒論》，因熟讀仲景之書，觀其方中所用之藥而有所會心也。由斯觀之，愚謂仲景治黃膽原膽脾並治者，固非無稽之談也」。

徐伯英論審定硝石礬石散

《金匱》硝石礬石散方，原治內傷黃膽，張錫純氏之發明功效卓然大著。至礬石即皂礬，張石頑亦曾於《本經達源》論及，而先生則引《本經》兼名涅石、《爾雅》又名羽涅，即一涅字，知其當為皂礬，又即其服藥後大便正黑色，愈知其當為皂礬，可謂具有特識。又於臨證之時，見其左脈細弱者，知係肝陽不能條暢，則用黃耆、當歸、桂枝尖諸藥煎湯送服，若見其右脈濡弱者，知係脾胃不能健運，則用白朮、陳皮、薏米諸藥煎湯送服，不拘拘送以大麥粥，此誠善用古方，更能通變化裁者也。友人史九神州，治一婦人病黃病五六年，肌膚面目俱黃，癸亥秋感受客邪，寒熱往來，周身浮腫。九州與柴胡桂枝湯和解之，二劑腫消，寒熱不作，遂配硝石礬石散一劑，俾用大麥粥和服。數日後復來云「此藥入腹似難容受，得無有他慮否」？九神州令放膽服之，倘有差錯，吾願領咎。又服兩劑其黃盡失。九神州欣然述之於予。予曰「仲聖之方固屬神矣，苟非張先生之審定而闡發之，則亦沉潛汨沒，黯淡無光耳」。噫！古人創方固難，而今人用方亦豈易易哉！

論痢證治法（附：開胃資生丹）

唐容川曰「《內經》云『諸嘔吐酸，暴注下迫，皆屬於熱』，下迫與吐酸同言，則知其屬於肝熱也。仲景於下利後重便膿血者，亦詳於《厥陰篇》中，皆以痢屬肝經也。蓋痢多發於秋，乃肺金不清，肝木遏鬱。肝主疏泄，其疏泄之力太過，則暴注裡急，有不能待之勢。然或大腸開通，則直瀉下矣。乃大腸為肺金之腑，金性收澀，秋日當令，而不使瀉出，則滯塞不得快利，遂為後重。是以治痢者，開其肺氣，清其肝火，則下痢自愈」。

按：此論甚超妙，其推詳痢之原因及治痢之法，皆確當。愚今特引伸其說，復為詳悉言之。蓋木雖旺於春，而其發榮滋長實在於夏，故季夏六月為未月，未者，木重葉也，言木至此旺之極也。而肝臟屬木，故於六月亦極旺。肝木過旺而侮克脾土，是以季夏多暴注下瀉之證，而痢證甚少，因肺金猶未當令，其收澀之力甚微也。即其時偶有患痢者，亦多係濕熱釀成，但利濕清熱，病即可愈，是以六一散為治暑痢之定方，而非所論於秋日之痢也。迨至已交秋令，金氣漸伸，木氣漸斂，人之臟腑原可安於時序之常，不必發生痢證也。惟其人先有蘊熱，則肝木乘熱恣肆，當斂而不斂，又於飲食起居之間感受寒涼，肺金乘寒涼之氣，愈施其肅降收澀之權，則金木相犯，交迫於腸中，而痢作矣。是知痢之成也，固由於金木相犯，而金木之相犯，實又因寒火交爭之力以激動之也。若唐氏所謂開肺清肝，原為正治之法，然止可施於病之初起，非所論於痢病之已深也。且統觀古今

治痢之方，大抵皆用之於初期則效，用之於末期則不效。今特將痢證分為數期，詳陳其病之情況及治法於下。

痢之初得也，時時下利膿血，後重，腸疼，而所下膿則甚稠，血則甚鮮，腹疼亦不甚劇，脈之滑實者，可用小承氣湯加生杭芍四錢，甘草二錢下之。蓋方中朴、實原可開肺，大黃、芍藥又善清肝，且厚朴溫而黃、芍涼，更可交平其寒熱，以成滌腸蕩滯之功，加甘草者，取其能調胃兼能緩肝，即以緩承氣下降之力也。

其脈按之不實者，可治以拙擬化滯湯（方載三期痢疾門，係生杭芍一兩，當歸、山楂各六錢，萊菔子五錢，甘草、生薑各二錢），方中之意用芍藥以泄肝之熱，甘草以緩肝之急，萊菔子以開氣分之滯，當歸、山楂以化血升之滯，生薑與芍藥並用又善調寒熱之互相凝滯，且當歸之汁液最滑，痢患滯下而以當歸滑之，其滯下愈而痢自愈也。

若當此期不治，或治以前方而仍不愈，或遷延數旬或至累月，其腹疼浸劇，所下者雖未甚改色，而間雜以脂膜，其脈或略數或微虛，宜治以拙擬變理湯（方載三期痢疾門，係生懷山藥八錢，生杭芍六錢，金銀花五錢，牛蒡子、甘草各二錢，黃連、肉桂各錢半）。方中之意，黃連、肉桂（煎時後入）等分並用，能交陰陽於頃刻，以化其互爭，實為變理陰陽之主藥，即為解寒火凝滯之要品，況肉桂原善平肝，黃連原善厚腸，二藥相助為理，則平肝不失於熱，厚腸不失於涼，又佐以芍藥、甘草，善愈腹疼，亦即善解寒火凝滯也，用山藥者，下痢久則陰分

必虧，山藥之多液，可滋臟腑之真陰，且下痢久則氣化不固，山藥之益氣，更能固下焦之氣化也，用金銀花、牛蒡子者，因所下者雜以脂膜，腸中似將腐爛，二藥善解瘡瘍熱毒，即可預防腸中腐爛也。其脈象若有實熱，或更兼懶進飲食者，宜用此藥湯送服去皮鴉膽子三十粒。

痢證雖因先有積熱後為涼迫而得，迨其日久，又恒有熱無涼，猶傷於寒者之轉病熱也。所以此方雖黃連、肉桂等分並用，而肉桂之熱究不敵黃連之涼。沉重用白芍以為黃連之佐使，見其脈象有熱者，又以之送服鴉膽子仁，是此湯為燮理陰陽之劑，而實則清火之劑也。愚生平用此方治癒之人甚多，無論新痢、久痢皆可用。鐵嶺醫士田聘卿，用此方治癒痢證多人，曾登《紹興醫報》聲明。乙丑春在滄州，遇滄州城南宜卿白君，非業醫而好閱醫書，言其族弟年三十余，患痢近一年，百藥不效，浸至臥床不起，為開此方授之，服三劑痊愈。

用上方雖新痢、久痢皆可奏效，而其腸中大抵未至腐爛也。乃有腹中時時切疼後重，所下者多如爛炙，雜以脂膜，是其腸中已腐爛矣，當治以拙擬通變白頭翁湯（方載三期痢疾門，係生山藥一兩，白頭翁、生杭芍各四錢，秦皮、生地榆、三七各三錢，鴉膽子去皮六十粒，甘草二錢，先用白糖水送服三七、鴉膽子一半，再將餘藥煎服，至將藥煎渣時，仍先用白糖水送服三七、鴉膽子餘一半）。方中之意，用白頭翁、秦皮、芍藥、生地榆以清熱，三七、鴉膽子以化瘀生新，治腸中腐爛，而又重用生山藥，以滋其久耗之津液，固其已虛之氣化，所以奏效甚捷

也。愚在奉時，有陸軍團長王劍秋君下痢甚劇，住東人南滿醫院中兩旬無效，曾以此方治癒，其詳案載此方之後可考也。至素有鴉片嗜好者，無論其痢之初得及日久，皆宜治以此方，用之屢建奇功。至地榆方書多炒炭用之，而此方生用者，因生用性涼，善保人之肌膚，使不因熱潰爛，是以被湯火傷肌膚者，用生地榆為末，香油調敷立愈。痢之熱毒侵入腸中肌膚，久至腐爛，亦猶湯火傷人肌膚至潰爛也，此地榆之所以生用也。至白頭翁湯原方，原白頭翁、秦皮與黃連、黃柏並用，方中藥品若此純用苦寒者，誠以其方本治厥陰熱痢，原挾有傷寒實熱。今用以治痢久腸中腐爛，故不得不為變通也。

上之痢證，又可治以拙擬生化丹（方載三期痢疾門，係金銀花一兩，生杭芍六錢，粉甘草三錢，三七細末三錢，鴉膽子去皮六十粒）。為其虛甚，加生懷山藥一兩。先用白糖水送服三七、鴉膽子各一半，再將餘四味煎湯服。至煎渣服時，仍先用白糖水送服所餘之三七、鴉膽子，再煎服湯藥。蓋痢證至此，西人謂之腸潰瘍，不可但以痢治，宜半從瘡治，是以用金銀花、粉甘草以解瘡家之熱毒，三七、鴉膽子以化瘀生新；而鴉膽子味至苦，且有消除之力（搗膏能點疣），又可除痢證傳染之毒菌，用芍藥泄肝火，以治痢之本病，又恐其痢久傷陰，及下焦氣化不固，是以又重用生山藥，以滋陰液，固氣化，此所以投之必效也（第三期本方後載有醫案可參觀）。當愚初擬此方時，猶未見西人腸潰瘍之說，及後見西書，其所載治法，但注重腸潰瘍，而不知兼用藥清痢之本源，是以不如此方之效也。



有下痢日久，虛熱上蒸，飲食減少，所下者形如爛炙，雜以脂膜，又兼腐敗之色，腥臭異常，腹中時時切疼益甚者，此腹中生機將斷，其為病尤重矣。宜治以前方，再加潞黨參、天門冬各三錢。此用參以助其生機，即用天冬以調劑參之熱也。

又有原素傷煙色，腎經虛憊，復下痢日久，腸中欲腐爛，其下焦之氣化愈虛脫而不能固攝者，宜治以拙擬三寶粥（方載三期痢疾門，係生懷山藥細末一兩煮作粥，送服去皮鴉膽子五十粒、三七細末二錢）。方中之意，用三七、鴉膽子以治腸中之腐爛，用山藥粥以補下焦之虛脫也。

戊午中秋，愚初至奉天，有鐵嶺少年李濟臣者，素有嗜好，又多內寵，患病四十餘日，屢次延醫服藥而病勢浸增亦以為無藥可醫矣。後愚診治，其脈細弱而數，兩尺重按即無所下者膿血相雜，或似爛炙，亦間有見好糞之時。治以三寶粥方，服後兩點鐘腹疼一陣，下膿血若干。其家人疑藥不對證。愚曰「非也，腸中瘀滯下盡則愈矣」，俾再用白糖水送服鴉膽子仁五十，時已屆晚九點鐘，一夜安睡，至明晨大便不見膿血矣。後俾用山藥粥送服鴉膽子仁二十粒，連服數次，將鴉膽子仁遞減至六七粒，不惟病癒，身體亦漸強壯矣。聞濟臣愈後，其舉家欣喜之餘，又忽痛哭，因濟臣之尊翁（本溪湖煤礦總辦）於前一歲因痢病故，今因濟臣得救而愈，轉悲從前之未遇良醫而枉死也。由斯知藥果對證，誠有奪命之權也。

有下痢或赤、或白、或赤白參半，後重腹疼，表裡俱覺發熱，服涼藥而熱不退，痢亦不愈，其脈確有實熱者。此等痢證原兼有外感之熱，其熱又實在陽明之腑，非〈少陰篇〉之桃花湯所能愈，亦非〈厥陰篇〉之白頭翁湯所能愈也。惟治以拙擬通變白虎加人參湯（方載三期痢疾門，係生石膏二兩，生杭芍八錢，生懷山藥六錢，野臺參五錢，甘草二錢，煎湯兩盅，分三次溫飲下）則隨手奏效。痢證身熱不休，服清火藥而熱亦不休者，方書多諉為不治，然治果對證，其熱焉有不休之理？此誠因外感之熱邪隨痢深陷，永無出路，以致痢為熱邪所助，日甚一日，而永無愈期，治以此湯，以人參助石膏，能使深陷之熱邪徐徐上升外散，消解無餘，加以芍藥、甘草以理後重腹疼，生山藥以滋陰固下，連服數劑，熱退而痢亦遂愈。方中之藥原以芍藥代知母，生山藥代粳米，與白虎加人參湯之原方猶相彷彿，故曰通變白虎加人參湯也。愚生平用此方治癒此等痢證甚多，第三期本方後載有數案可參觀也。

按：此外感之熱與痢相並，最為險證。嘗見東人志賀洁著有《赤痢新論》，大為丁仲祜所推許。然其中載有未治癒之案二則。一體溫至三十八度七分，脈搏至百一十至，神識蒙昏，言語不清，舌腫大乾燥，舌苔剝離，顯然夾雜外感之實熱可知，乃東人不知以清其外感實熱為要務，而惟日注射以治痢之血清，竟至不救。其二發劇熱，夜發躁狂之舉動，後則時發譫語，體溫達四十度二分，此又顯然有外感之大熱也。案中未載治法，想其治法，亦與前同，是以亦至不救。設此

二證若治以拙擬之通變白虎加人參湯，若慮病重藥輕，可將兩劑並作一劑，煎湯四五茶杯，分多次徐徐溫飲下，病癒不必盡劑，其熱焉有不退之理？大熱既退，痢自隨愈，而東人見不及此者，因東人盡棄舊日之中學，而專尚西學也。蓋中西醫學原可相助為理，而不宜偏廢，吾國果欲醫學之振興，固非溝通中、西不可也。

上所論之痢證乃外感之熱已入陽明之腑者也，然痢證初得，恆有因外感束縛而激動其內傷者，臨證者宜細心體察。果其有外感束縛也，宜先用藥解其外感，而後治痢，或加解表之藥於治痢藥中，或用治痢藥煎湯送服西藥阿斯匹林瓦許亦可解表。設若忽不加察，則外感之邪隨痢內陷，即成通變白虎加人參湯所主之險證，何如早治為愈也。

痢證雖為寒熱凝滯而成，而論者多謂白痢偏寒，赤痢偏熱，然此為痢證之常，而又不可概論也。今試舉治癒之案以明之。同莊張申甫表兄之夫人，年近六旬，素多疾病，於季夏晨起，偶下白痢，至暮十餘次。秉燭後，忽周身大熱，昏不知人，循衣摸床，呼之不應，其脈洪而無力，肌膚之熱烙手，知其痢因傷暑而成，且多病之身不禁暑熱之熏蒸，所以若是昏沉也。急用生石膏三兩，野臺參四錢，煎湯一大碗，俾徐徐溫飲下，至夜半盡劑而醒。詰朝煎渣再服，熱退痢亦遂愈。此純係白痢而竟若是之熱也。

又奉天陸軍連長何閣臣，年三十許，因初夏在鄭州駐防多受潮濕，患痢數月不愈。至季秋還奉，病益加劇，下多紫血，雜以脂膜，間似爛炙，腹中時時切疼。或授以龍眼肉包鴉膽子仁方，服之益增重，來院求為診治。其脈微弱而沉，左脈幾不見，俾用生硫黃細末攪熟麥面少許作丸，又重用生山藥、熟地黃、龍眼肉煎湯送服，日兩次，每次服硫黃約有七八分，服至旬餘始愈。此純係赤痢而竟若是之寒也。

有前後連兩次病痢，其前後寒熱不同者，為細診其脈，前後迥異，始能用藥各得其宜，無所差誤，今複舉兩案於下以徵明之。

歲己巳，在德州，有盧雅兩公曾孫女，適桑園鎮吳姓，年五十六歲，於季夏下痢赤白，延至仲冬不愈，延醫十餘人，服藥百劑，皆無效驗。其弟盧月潭，素通醫學，偶與愚覲面談及，問還有治否。答曰「此病既可久延歲月，並非難治之證，但視用藥何如耳」，月潭因求往視，其脈象微弱，至數略數，飲食減少，頭日時或眩暈，心中微覺煩熱，便時下墜作疼，惟不甚劇，所下者赤白參半，間有脂膜相雜。詢其生平下焦畏涼，是以從前服藥略加溫補，上即煩熱，略為清解，下即泄瀉也。乃為初次擬得三寶粥方治之，藥雖偏於涼，而有山藥粥以補其下焦，服後必不至泄瀉。上午服一劑，病覺輕。至晚間又服一劑，其病遂愈。後旬日，因登樓受涼，其痢陡然反復，日下十餘次，腹疼劇於從前，其脈象微弱如前，而

至數不數，俾仍用山藥粥送服生硫黃細末三分，亦一日服二次。病大見愈，脈象亦較前有力。翌晨又服一次，心微覺熱，又改用三寶粥方，一劑而愈。

又愚在奉天時，有二十七師炮兵第一營營長劉鐵山，於初秋得痢證甚劇。其痢膿血稠粘，脈象弦細，重診仍然有力，治以通變白頭翁湯，兩劑痊愈。隔旬餘，痢又反覆，自用原方治之，病轉增劇，復來院求診，其脈弦細兼遲，不任循按，知其已成寒痢，所以不受原方也。俾用生懷山藥細末煮粥，送服小茴香細末一錢、生硫黃細末四分，數次痊愈。

上所治二案，皆前病痢則熱、後病痢則寒者也。而治之者隨病機之轉移，而互治以涼熱之藥，自能隨手奏效。至於第一案，初次用涼藥治癒，後用熱藥治之將愈，而又以涼藥收功，此又在臨證時細心研究，息息與病機相符也。

有痢證，上熱下涼，所用之藥宜上下分途，以涼治上，以熱治下者。曾治天津張姓媪，年近五旬，於孟秋患痢，兩旬不愈，所下者赤痢雜以血水，後重腹疼，繼則痢少瀉多，亦兼瀉血水，上焦煩熱，噤口不食，聞食味即噁心欲嘔，頭目眩暈，不能起床，其脈關前浮弦，重診不實，兩尺則微弱無根，一息五至，病人自覺心中怔忡，精神恍惚，似難支持，此乃虛極將脫之兆也。遂急用淨萸肉、生懷山藥各一兩，大熟地、龍眼肉、白龍骨各五錢，生杭芍、雲苓片、炙甘草各二錢，俾煎湯兩盅，分兩次溫服下。初服一次，心神即覺安穩。盡劑後，少進飲食，瀉

痢亦少止。又即原方加生地黃四錢，炙甘草改用三錢，煎湯兩盅，分兩次溫服下，每服一次送服生硫黃細末二分半，日服一劑，數日痊愈。

至於暑天熱痢，宜治以六一散，前已言之，然南方之暑熱兼濕，用六一散誠為至當，北方之暑熱恆不兼濕，且有兼燥之時，若用六一散時，原當有所變通。愚嘗擬得一方，用之甚效，方用滑石、生石膏各五錢，硃砂、粉甘草細末各二錢，薄荷冰一分，共和勻，每服二錢，開水送下。熱甚痢劇者，一日可服五六次。名之曰加味益元散，蓋以六一散加硃砂為益元散，茲則又加石膏、薄荷冰也。

按：暑熱之痢恆有噤口不食者，而治以加味益元散，即可振興其食慾，若非暑熱之痢而亦不思飲食者，宜用硃砂、粉甘草細末等分，少加薄荷冰，每服一錢，竹茹煎湯送下，即可思食。蓋此等證多因肝膽之火挾胃氣上逆，其人聞食味即噁心欲嘔，所以不能進食，用硃砂以降胃鎮肝，甘草以和胃緩肝，竹茹以平其逆氣，薄荷冰以散其鬱熱，所以服之即效也。因此方屢次奏功，遂名之曰開胃資生丹。

又有當暑熱之時，其肝膽腸胃先有蘊熱，又更奔走作勞於烈日之中，陡然下痢，多帶鮮血，其脈洪大者。宜治以大劑白虎湯，煎數盅，分數次溫飲下，每次送服鴉膽子仁三十粒。若其脈雖洪大而按之虛者，宜治以大劑白虎加人參湯，送服鴉膽子仁。

又有痢久清陽下陷者，即胸中大氣因痢下陷也，其病情常覺下墜腹疼（此氣分下陷，迫其下焦腹疼），或痢或瀉，多帶虛氣，呼吸短氣，或兼有寒熱往來，

其脈象遲弱者，宜治以拙擬升陷湯（方載三期第四卷，係生箭耆六錢，知母三錢，柴胡、桔梗各錢半，升麻一錢），去知母，加生懷山藥六錢，白頭翁三錢。蓋原方之意，原用生箭耆以升補胸中大氣，而以柴胡、桔梗、升麻之善升清陽者以輔之，更加知母以調劑黃耆之熱也。茲因下焦瀉痢頻頻，氣化不固，故以白頭翁易知母，而更以山藥輔之。因知母之性寒而滑，白頭翁之性涼而澀，其涼也能解黃耆之熱，其澀也能固氣化之脫，且為治痢要藥，伍以山藥，又為止瀉之要藥也。又方書中論痢證，有所謂奇恒痢者，言其迥異乎恒常之痢也。愚於此證未見過，特錄前哲之說以補之。

張隱庵曰「奇恒痢證，三陽並至，三陰莫當，九竅皆塞，陽氣旁溢，咽乾喉塞痛，並於陰則上下無常，薄為腸澀，其脈緩小遲澀。血溫身熱者死，熱見七日者死。蓋因陽氣偏劇，陰氣受傷，是以脈小沉澀，此證急宜用大承氣湯瀉陽養陰，緩則不救。若不知奇恒之因，見脈氣平緩而用平易之劑，必至誤事」。

陳修園曰「嘉慶戊午，夏泉王孝廉患痢七日，忽於寅卯之交，聲微啞，謔語半刻即止，酉刻死。七月，榕城葉廣文觀風之弟患同前證來延，言伊弟患痢不甚重，飲食如常，惟早晨咽微疼，如見鬼狀，午刻即止。時屆酉刻，告以不必往診，令其速回看視，果於酉戌之交死，此皆奇恒痢也。若早投以大承氣湯，猶可挽回」。細審隱庵、修園所言奇恒痢之病狀病情，知當係少陰熱痢，蓋冬傷於寒未即發，或他時所受之寒未即發，伏於三焦脂膜之中，久而化熱，下陷於少陰，若在冬令，

則為少陰傷寒（此少陰傷寒之熱證，初得之即宜治以涼藥者也），若在他時，則為少陰溫病（即溫病中其熱甚實而脈反細者），若再有肝火乘之，可純下青色之水。宜急用大承氣湯下之，《傷寒論》有明文也。蓋乙癸同源，腎熱而肝亦恒熱，當此少陰病熱之時，肝腎之火相並，可迫膽汁妄行而下青水，即可累腸中生炎下利膿血。下青水者宜治以大承氣湯，下膿血者亦宜治以大承氣湯，固可比例而知也。況修園所遇之兩證，皆年在戊午，天干為火運，地支又為少陰司天，腎中之火必旺（司天者，可主一歲之令，不但主上半年，況其病發於秋，而其病根多伏於夏）至七月，則陽明燥金在泉，熱而且燥，其熱愈甚。前證未詳病發何月，而後證之發則在於七月也。至二證之危皆在酉時者，燥金正旺之時也。隱庵謂此病之危在於七日，修園所錄二案亦一死於七日，因火之數生於二而成於七也。

特是隱庵之論奇恒痢雖甚確，然仍係渾同言之，須代為剖析，其理始明。蓋渾曰三陽並至，其脈象當浮大，何以反沉而小乎？渾曰三陰莫當，凡陽盛陰虛者，脈搏必數，何以其脈之沉小者又復兼澀，澀非近於遲乎？惟確知其係少陰熱痢（少陰有寒痢，桃花湯所主之證是也），其可疑之處自渙然冰釋。蓋少陰之熱證，因伏氣之熱下陷耗其真陰，致腎中陰氣不能上潮與心中陽氣相濟，則心脈之跳動必無力，是以少陰之病無論或涼或熱，其脈皆微細，此證之脈小沉澀，與少陰病之脈微細者同也。少陰之病因陰氣不上潮，其上焦多生燥熱，致咽痛，咽中傷生瘡。此證之咽乾、微痛、微啞，與少陰病之咽痛、咽中傷生瘡者同也。至其所謂偶發



譫語，如見鬼狀者，誠以少陰病因陰陽之氣不相接續，所以多兼煩躁，其煩躁之極，言語狀態或至狂妄，而仍與陽明大熱譫語不省人事者不同，是以旋發而旋止也。夫少陰病原多險證，以其陰陽之氣果分毫不相接續，其危險即可生於頃刻之間，而奇恆痢證又加以肝膽之火，與伏氣下陷之熱相助為虐，是以較他少陰證尤險。隱庵謂治以大承氣湯，乃急下之以存真陰也。若下後而真陰不能自復，其脈仍不起，熱仍不退者，擬以大劑白虎加人參湯，去粳米，代以生懷山藥一兩，煎湯數盅，分數次徐徐溫飲下，自當脈起熱退，而痢亦遂愈也。方中之義用白虎湯以清肝腎之熱，而山藥以滋腎中真陰，兼可代粳米調胃，協同甘草以緩白虎之下趨，其滋腎之力，又能協同人參，以助陰氣之上潮，其陰陽之氣互相接續，脈之跳動自然舒暢，臟腑之鬱熱亦即隨脈外透矣。

又東人志賀潔《赤痢新論》謂熱帶之地有阿米巴赤痢。阿米巴之現狀，為球形或為橢圓之結核，與尋常赤痢菌之為杆狀者不同。其外有包，為玻璃透明形。其內結之核為血球，間有膿球。取新便下之混血黏液一滴置玻璃片上，加以生理的食鹽水，更以小玻璃片輕覆其上，以顯微鏡視之，若有假足之伸縮助其活動，即為阿米巴赤痢之原蟲。其劇者，痢中混有壞疽潰瘍片，而帶有腐肉樣之臭氣，或為污泥色。至其證狀之經過，與慢性赤痢大略相似，其身體大率無過熱之溫度，或遲至累年累月而猶可支援者。此證治法，宜日服甘汞十分瓦之三（當分三次服），連服七八日。但須注意於中毒狀，稍發現中毒形狀宜速停。又可服硫黃半瓦，一

日三次。又宜用金雞納霜為注腸劑，惟不可即用濃厚之液，最初當用五千倍之溶液，繼乃可用至千倍水者，數日後則用至五百倍水者。

觀東人此段議論，可謂於痢證研究甚細。愚未至熱帶，所以未治過阿米巴痢，然彼又云間有傳至溫帶者，而愚生平所治之痢，若彼所述阿米巴之狀況者亦恒有之，而但用自所制諸方亦皆治癒，其中有阿米巴痢與否，原難決定，以後再遇此等證當亦用其法驗之。至彼謂阿米巴痢當治以硫黃，而愚生平治痢原恒有用硫黃之時，非因見其書而始知用硫黃也。

諸痢之外又有所謂休息痢者，其痢大抵皆不甚重而不易除根，治癒恆屢次反覆，雖遷延日久而猶可支持，有若阿米巴痢之輕者，至累年累月不愈而猶可支持也，或此等痢即阿米巴痢歟？須待後實驗。然其所以屢次反覆者，實因有原蟲伏於大小腸曲折之處，是以愈而復發，惟用藥除淨其原蟲則不反覆矣。至除之之法，證之近於熱者，可用鴉膽子仁，以治痢之藥佐之；近於涼者，可用硫黃末，而以治痢之藥佐之。再者，無論或熱或涼，所用藥中皆宜加木賊一錢，為其性善平肝，又善去腸風止血，故後世本草謂其善治休息痢也。其脾胃不健壯者，又宜兼用健補脾胃之藥以清痢之上源，自能拔除病根也。

又有非因痢之毒菌未淨，實因外感之熱潛伏未淨，而成休息痢者。邑中諸生王荷軒，年六十七歲，於中秋得痢證，醫治二十餘日不效。後愚診視，其痢赤白膠滯，下行時覺腸中熱而且乾，小便亦覺發熱，腹疼下墜，並迫其脊骨盡處亦下

墜作疼，且時作眩暈，其脈洪長有力，舌有白苔甚厚。愚曰「此外感之熱挾痢毒之熱下迫，故現種種病狀，非治痢兼治外感不可」，投以通變白虎加人參湯，兩劑諸病皆愈。診其脈，猶有餘熱，擬再用石膏清之。病家疑年高之人，石膏不可屢服，愚亦應聘他往。後二十餘日痢復作，延他醫治療，於治痢藥中雜以甘寒濡潤之品，致外感之餘熱永留不去，其痢雖愈而屢次反復。延至明年仲夏，反復甚劇，復延愚診治。其脈象病證皆若從前。因謂之曰「去歲若肯多服生石膏數兩，何至有以後屢次之反復，今不可再留邪矣」，仍投以通變白虎加人參湯，連服三劑痊愈，而脈亦和平，自此永不反復。

痢證又有曰下痢頻頻，其腸中仍有燥結，必去其燥結而痢始愈者，此固屬罕見之證，而治痢者實不可不知也。表弟劉昌緒，年二十四歲，於中秋下痢，膿血稠粘，一日十五六次，腹疼後重甚劇。治以化滯湯，連服兩劑，下痢次數似少減，而後重腹疼如舊。細診其脈，尺部重按甚實，疑其腸有結糞，投以小承氣湯加生杭芍數錢，下燥糞長約四寸，後重腹疼頓愈十之八九。再與以化滯湯一劑，病若失。

治痢最要藥品，其痢之偏熱者，當以鴉膽子為最要之藥，其痢之偏寒者，當以硫黃為最要之藥，以此二藥皆有消除痢中原蟲之力也。此二種藥，上所錄方案中已屢言之，今再詳細論之。

鴉膽子，一名鴨蛋子，其性善涼血，止血，兼能化瘀生新。凡痢之偏於熱者，用之皆有捷效，而以治下鮮血之痢，瀉血水之痢，則尤效。鴉膽子又善清胃腑之熱，凡胃脘有實熱充塞、噤口不食者，服之即可進食。服時須去其硬皮，若去皮時其中仁破者，即不宜服，因破者服後易消，其苦味遽出，恆令人嘔吐，是以治痢成方，有用龍眼肉包鴉膽子仁囫圇吞服者。藥局中秘方，有將鴉膽子仁用益元散為衣，名之為菩提丹者，是皆防其入胃即化出其苦味也，若以西藥局中膠囊盛之吞服，雖破者亦可用。其性善涼血止血，兼能化瘀生，凡痢之偏於熱者，用之皆有捷效，而以治下鮮血之痢，瀉血水之痢則尤效。歲在壬寅，有滄州友人滕玉可，設教於鄰村。其年過五旬，當中秋時下赤痢甚劇，且多鮮血，服藥二十餘日無效。適愚他出新歸，過訪之，求為診治。其脈象洪滑，知其純係熱痢。彼時愚雖深知鴉膽子之功效，而猶以為苦參子係通行共知之名，因謂之曰「此易治，買苦參子百餘粒去皮，揀其仁之成實者，每服六十粒，白糖水送下，兩次即愈矣」，翌日愚復他出，二十餘日始歸，又訪之，言「遍詢藥房皆無苦參子，後病益劇，遣人至敝州購來，果如法服之兩次痊愈，真仙方也」，愚曰「前因粗心，言之未詳。苦參子即鴉膽子，藥房中又名為鴨蛋子，各藥房中皆有，特其見聞甚陋，不知其為苦參子耳」，後玉可旋里，其族人自奉天病重歸來者，大便下血年餘，一身悉腫，百藥不效，玉可授以此方，如法服之，三次痊愈。

鴉膽子又善清胃腑之熱，凡胃脘有實熱充塞、噤口不食者，服之即可進食。鄰村武生李佐廷，年五旬，素有嗜好，身形羸弱。當霍亂盛行之時，忽然腹中覺疼，噁心嘔吐，下利膿血，懼甚，以為必是霍亂證。診其脈，毫無閉塞之象，惟弦數無力，左關稍實，遂曉之曰「此非霍亂，乃下焦寒火交迫，致腹中作疼下膿血，上焦虛熱壅滯，故噁心嘔吐，實係痢證之劇者」，遂投以生杭芍六錢，竹茹、清半夏各三錢，甘草、生薑各二錢。一劑嘔吐即愈，腹疼亦輕，而痢猶不愈，不思飲食。俾但用鴉膽子仁二十五粒，一日服兩次，白糖水送下，病若失。審斯知鴉膽子不但善理下焦，即上焦鬱熱用之亦妙，此所以治噤口痢而有捷效也。

硫黃原稟火之精氣，其挾有雜質者時有毒，若其色純黃，即純係硫質，分毫無毒，為補相火暖下焦之主藥。痢證下焦涼者，其上焦恆有虛熱，硫黃質重，其熱力直達下焦而不至助上焦之虛熱，且痢之寒者雖宜治以熱藥，而仍忌溫補收澀之品。至硫黃，諸家本草謂其能使大便潤、小便長，西人謂係輕瀉藥之品，是其性熱而能通，故以治寒痢最宜也。愚屢次品驗此藥，人之因寒作瀉者，服之大抵止瀉之時多，更有五更瀉證，服他藥不效，而放膽服硫黃即愈者。又間有本係因寒作瀉，服硫黃而瀉轉劇者，惟與乾薑、白朮、五味等藥同用，則確能治因寒作瀉而無更瀉之弊。古方書用硫黃皆係制用，然制之則熱力減，必須多服，有時轉因多服而生燥，實不如少服生者之為愈也。且擇其純係硫質者用之，原分毫無毒，亦無須多方制之也。至其用量，若以治寒痢，一次可服二三分，極量至五六

分，而以治他證，則不在此例。曾治鄰村泊北莊張氏婦，年二十餘，胃寒作吐，所吐之食分毫不能消化（凡食後半日吐出不消化者，皆係胃寒），醫治半年無效，雖投以極熱之藥亦分毫不覺熱，脈甚細弱，且又沉遲，知其胃寒過甚，但用草木之品恐難療治，俾用生硫黃細末一兩，分作十二包，先服一包，過兩句鍾不覺熱，再服一包。又為開湯劑乾薑、炙甘草各一兩，烏附子、廣油桂、補骨脂、於朮各五錢，厚朴二錢，日煎服一劑。其硫黃當日服至八包，猶不覺熱，然自此即不吐食矣。後數日，似又反覆，遂於湯劑中加代赭石細末五錢，硫黃仍每日服八包，其吐又止。連服數日，覺微熱，俾將硫黃減半，湯劑亦減半，惟赭石改用三錢。又服二十餘日，其吐永不反覆。愚生平用硫黃治病，以此證所用之量為最大。至於西藥中硫黃三種，其初次制者名昇華硫黃，只外用於瘡瘍，不可內服。用昇華硫黃再制之，為精製硫黃，用精製硫黃再制之為沉降硫黃，此二種硫黃可以內服。然欲其熱力充足，服之可以補助元陽、溫暖下焦，究不若擇純質生硫黃服之為愈也。三期第八卷載有服生硫黃法，附有醫案若干可參觀。

至西法治痢之方，謂初期宜用下劑，若甘汞、蓖麻子油、大黃、硫苦等是也，而最佳者惟甘汞及蓖麻子油。方用甘汞半瓦，一次服下，再用蓖麻子油十五瓦，一次服下，當覺輕快，或先服蓖麻子油一次，後每間三時服甘汞半瓦，服至三次後，再服蓖麻子油一次，為赤痢初期療法中之最佳者。若於服下劑之後，而仍未痊癒者，宜用次硝酸蒼鉛二瓦，重曹一瓦半，安知必林一瓦半，白糖一瓦半，和

勻，為一日之量，均分三次服下。此方若仍未痊愈者，宜再用次硝酸蒼鉛三瓦，單那爾並二瓦，重曹一瓦半，和勻，為一日之量，均分三次服下，或用次硝酸蒼鉛三瓦，瓦魯貌拉兒並兩瓦，和勻，為一日之量，均分三次服下。

按：次硝酸蒼鉛對於腸壁肌膚最有被覆保護之功用，又能減少腸之運動，又有防腐之力，故為止瀉要藥。重曹外用為含漱品，於呼吸器之加答兒為吸入藥，內用於種種之消化不良，為制酸藥，其他用於尿酸、疼風、癱瘓質斯、膀胱加答兒等。安知必林為確實普通之解熱藥，凡肺勞之發熱，腸室扶斯熱、間歇熱、再歸熱及一切熱病皆用之，又為急性關節癱瘓質斯特效藥，又為鎮痛藥，凡癱瘓質斯性骨節痛、頭痛、偏頭痛、神經痛、痛風、月經痛等均用之。又有鎮痙之作用，故能治喘息病，與鹽酸歇魯因並用，尤為特效。外用為防腐藥及止血藥。單那爾並不甚溶解於胃中，下至腸中始分解為蛋白與單寧酸，呈單寧酸之收斂作用，故不害胃之消化機能，為腸之收斂藥。本品為無味之藥物，最適於小兒之治療，專用於大小腸加答兒腸瀉囊之潰瘍機轉，肺勞患者之下，慢性赤痢，腸室扶斯，夏期小兒之下痢等。瓦魯貌拉兒並係臭化沒食子酸與蛋白質之新化生物，為黑褐色粉末，有芳香之氣，入人腸內之後，始現其收斂作用。其收斂之性，略似單寧酸，而為次硝酸蒼鉛之伍藥。

觀上所錄三方中之藥性，知其第一方為解熱化滯防腐收斂之劑，其第二方、第三方則但為防腐收斂之劑。其制方之妙，當以第一方為最善。蓋痢證多熱，安

知必林善解腸中炎熱，且有防腐之效。痢證因氣化凝滯，恒後重腹痛，重曹力善化滯（性與鹹同）可除後重腹痛。至次硝酸蒼鉛，雖有收斂之性，似與痢證之滯下者不相宜，而為痢證防腐之主藥，故亦為治痢要藥。至於第二、三方雖亦能防腐，而其收斂之力較重，似有留邪之弊，縱能將痢治癒，必多需時日。是以西醫治痢證，即尋常痢證亦必歷旬日或至兩旬始能收功。西學醫書所載治痢之案可考也。近今用西藥治痢者，於服通下藥後，恒遽服乙必格散（即阿片吐根散）止之，尤無足取。夫痢證原名滯下，其下本患滯，而更投以收斂過劇之品，滯者不愈滯乎！惟治痢至將愈時，因下焦氣化不固，而兼泄瀉者，始不防用止瀉之藥。然所謂止瀉之藥，亦非必收斂之品也，或壯健其脾胃，或補益其氣血，或調節其飲食，其泄瀉愈而痢亦隨愈矣。至西醫治痢用防腐除菌藥以浣腸，用痢門血清藥以注射，則皆佳方也。



論霍亂治法

霍亂為最險要緊急之證，且其證分陰陽，陰證宜治以溫藥，陽證宜治以涼藥，設或辨證不清，而涼熱誤投，必凶危立見。即辨證清矣，而用藥涼熱不爽，亦未必能救其強半也。己未孟秋，奉天霍亂盛行，吐瀉轉筋，甚者脈閉，身冷如冰，而心中發熱，嗜飲涼水。愚斷為陽證，而擬得急救回生丹一方，藥性雖涼，然善發汗，且善解毒，能使內伏之毒熱透表外出，而身之涼者可溫，脈之閉者可現，服此方者，大抵皆愈。繼又擬得衛生防疫寶丹方，於前方之中加辛香溫通之藥兩味，俾其藥性涼熱適均，日服數十粒可暗消病根於無形。若含數粒，可省視病人不受傳染。時有劉耀華者，滄州城裡人，充奉天財政廳司書，見病者臥街頭，吐瀉轉筋，病勢垂危，而耀華適帶有衛生防疫寶丹，與以數十粒，復至茶館尋開水半盞，俾送下，須臾吐瀉轉筋皆愈，而可起坐矣。繼有扶順縣飄爾屯煤礦經理尚習珍，來院購防疫之藥，即將衛生防疫寶丹二百包與之。其煤礦工人患霍亂者，或服八十粒，或服一百二十粒，皆完全救愈，一方競托尚君來購此藥，呼為神丹。由斯知衛生防疫寶丹之於霍亂，既可防之於未然，又可制之於既發，其功效亦不減急救回生丹也。

且此二方不獨用於奉天一方有效也，斯歲直隸、山東亦多此證，直隸故城縣尹袁霖普君寄函問治此證之方，因開急救回生丹方與之，袁君按方施藥二百六十劑，即救愈二百六十人。又將其方遍傳直隸、山東各縣，且又呈明省長登之北洋

公報，袁君可謂好行其德者矣。次年直南數十縣又有此證，袁君復來問方。審其所述病之情狀，似陽中伏陰，又為寄去衛生防疫寶丹方，袁君按方自製藥六大劑，救愈千人，仍復傳遍各縣，呈明省長登之北洋公報，且此兩次，本籍鹽山亦有此證，愚曾寄方於長子蔭潮，亦按方施治，皆奏效。

按：以上諸徵驗，則急救回生丹與衛生防疫寶丹可為治陽霍亂之定方矣，而實未嘗以之治陰霍亂也。即有時霍亂或陽中伏陰，或陰陽交爭，亦止治以衛生防疫寶丹，而未嘗治以急救回生丹也。近時杭州裘吉生君所梓三三醫書，其初集第八種為《時行伏陰芻言》，著此書者為田雲槎，未詳何時何地人。評此書者為當陽李貢三（名振聲），其所謂時行伏陰者，吐瀉轉筋、肌消目陷、脈沉遲、四肢拘緊、腹疼心不覺熱。此與陰證霍亂幾無以異，而李君謂衛生防疫寶丹善治此證，若兼有外感者，急救回生丹亦可用。此誠愚制方時所念不及此者也，今錄其原文於下以備參觀。

【《時行伏陰芻言》李君貢三評語原文】

辛酉六月三十日，余方就診戚家，不意長兒大新（現年十二）大瀉不止，及余回家，而吐亦作矣。其脈尤緊而遲，四末微麻，頭疼，身熱，無汗，口渴，此伏陰而兼外感也，遂投以先生所創之急救回生丹。小兒此證雖屬伏陰，因有兼證，須兼解表，且先生謂此丹服之可溫復得汗，故與之。從此可知無論伏陰霍亂，其病初起時，可先與此丹，令其得汗以減其勢，而後再分途治之可也（若但係伏陰

證，先與以先生所制衛生防疫寶丹更妙。乃服藥後，須臾汗出，吐瀉之勢亦稍緩，繼與以漂蒼朮三錢，枳殼二錢，厚朴錢半，西砂仁、廣陳皮、炙甘草、蘇葉各一錢，薄荷八分，加生薑、大棗，煎湯服之，未盡劑而愈。

按：其子兼外感，所以身熱口渴。若但為伏陰，初則吐瀉，繼則身冷、轉筋、目眶塌陷，無一不與霍亂相同，惟心中不覺發熱，且四肢有拘急之象耳。斯實彷彿陰證霍亂，與《傷寒論》所載之霍亂相似，故其書所載復陽消陰法，即係附子理中湯。今李君於其初得，謂可治以急救回生丹，且謂若治以衛生防疫寶丹更妙。蓋衛生防疫寶丹，初服下覺涼，繼則終歸於熱，因冰片、薄荷冰皆性熱用涼也，況細辛、白芷原屬溫熱之品，是以此丹之妙用，在上能清，在下能溫耳。至急救回生丹，無辛、芷之熱，硃砂又加重，藥性似偏於涼矣，然硃砂原汞硫化合，涼中含有熱性，況冰片、薄荷冰亦加多，發汗甚捷，服後無論新受之外感，久伏之邪氣，皆可由汗透出。由斯觀之，若果係陽證霍亂，即放膽投以急救回生丹，必能回生。若不能斷其為陰為陽，即投以衛生防疫寶丹，亦無不效也。夫方自愚制，經李君發明之而其用愈廣，亦愈妙，李君真愚之益友矣。爰將二方之制法服法詳列於下。

【急救回生丹】

頂好朱砂一錢半，粉甘草細末一錢，冰片三分，薄荷冰二分。共為細末，分三次服。多半點鐘服一次，開水送下，溫覆得汗即愈。若初服即得汗者，後二次可徐徐服之。吐劇者，宜於甫吐後服之。

【衛生防疫寶丹】

粉甘草細末十兩，細辛細末兩半，香白芷細末一兩，薄荷冰細末四錢，冰片細末三錢，頂好朱砂細末三兩。將前五味水泛為丸，綠豆大，陰乾（不宜曬），朱砂為衣，勿令餘剩，務令外皮堅實、光滑，可不走味。霍亂輕者，服一百二十粒，重者服一百六十粒或二百粒，開水送下，服一次未痊愈者，可繼續服至數次。一方皆宜服之痊愈然後停服。

又按：衛生防疫寶丹多服亦可發汗，無論霍亂因涼因熱，用之皆效，並治一切暴病痧證，頭疼，心煩，四肢作疼，泄瀉，痢疾，呃逆（治此證尤效）。若無病者，每飯後服二十粒，能使飲食速消，飯量驟加，實為健胃良藥。且每日服之，尤能預防一切雜證，不受傳染。

霍亂之證，有但用上二方不效者，其吐瀉已極，奄奄一息將脫者是也。方書有謂霍亂為脫疫者，實指此候。此時無論病因為涼為熱，皆當急用人參八錢以復其陽，生山藥一兩、生杭芍六錢以滋其陰，山萸肉八錢以斂肝氣之脫（此證吐瀉之始，肝木助邪侮土，吐瀉之極而肝氣轉先脫，將肝氣斂住而元氣可固），炙甘草三錢以和中氣之瀉，赭石細末四錢引人參之力下行即以防其嘔吐，朱砂、童便

（先用溫熱童便送服硃砂細末五分，再煎服前藥）以交其心腎。此方載三期第四卷名急救回陽湯，實陰陽俱補也。心中覺熱者，加天冬六七錢。身涼、脈不見、心中分毫不覺熱者，去芍藥，加烏附子一錢。若心中猶覺熱，雖身涼脈閉，不可投以熱藥。汗多者，萸肉可用至兩餘。方中人參，若用野臺參，即按方中份量，若用野山參，份量宜減半，另燉兌服。

按：此方當用於吐瀉既止之後，若其勢雖垂危，而吐瀉猶未止，仍當審其涼熱，用前二方，以清內毒，然後以此方繼之。其服藥距離時間，約在多半點鐘。曾治奉天小南關寇姓媪，霍亂吐瀉一日夜，及愚診視時，吐瀉已止，周身皆涼，六脈閉塞，精神昏憤，閉目無聲，而呼之仍有知覺，且恆蹙其額，知霍亂之毒猶擾亂於其心中也。問其吐瀉時情狀，常覺心中發熱，頻頻嗜飲涼水，知其確係陽證。先與以急救回生丹三分之一，和溫開水灌下。遲半點鐘，視其形狀較安，仍身涼無脈，俾煎急救回陽湯一劑，徐徐灌下，且囑其服藥以後，且不時少與以溫開水。至翌晨，復為診視，身熱脈出，已能言語，仍自言心中熱甚，遂用玄參二兩，潞參一兩，煎湯一大碗，俾徐徐溫飲下，盡劑而愈。詳觀此案，當知用急救回陽湯之方針矣。

上所擬治霍亂三方，急救回生丹宜於霍亂之偏熱者，衛生防疫寶丹宜於霍亂之偏涼者，急救回陽湯以救霍亂之將脫者。治霍亂之方，似已略備，然霍亂中間有大涼、大熱之證，似宜另商治法，今更進而申論之。

《傷寒論》之論霍亂也，主於寒，且主於大寒，若理中加附子、通脈四逆加人參諸方，皆治大寒之藥也。然其各節中多言惡寒，四肢拘急，厥冷，或吐利汗出，或寒多不用水，必其病象中現如此形狀，且脈象沉細欲無者，方可酌用《傷寒論》中諸方以急回其陽。陽回之後，間有覺煩熱者，又宜急服涼潤滋陰之藥，以善其後。蓋陽回其心臟跳動有力，則脈可復，身可熱，吐瀉亦可止。因其從前吐瀉過劇，傷其陰分，是以陽回之後恆有覺煩熱者，故又宜服涼潤滋陰之藥以善其後也。然此等證極少，愚經歷霍亂多次，所治若此等證者不過四五焉。

至霍亂之大熱者，則恆有之。憶昔壬寅孟秋，邑中霍亂盛行，按涼治者多僨事，按熱治者亦愈否參半，惟放膽恣飲新汲井泉水者皆愈，愚則重用羚羊角治癒此證若干。後愚問恣飲井泉水愈者數人，皆言彼時雖吐瀉交作，脈微身涼，而心中則熱而且渴，須臾難忍，惟恣飲涼水可稍解，飲後須臾復吐出，又須再飲，過半日涼水飲近一大水桶，熱渴漸愈而吐瀉亦止矣。

按：此原當飲以冰水，或食冰塊，而鄉村無冰，故以井泉水代之。

丁卯季夏，天氣炎熱非常，愚臨睡時偶食西瓜數塊，睡至黎明，覺心中擾亂噁心，連吐三次，繼又作瀉。急服急救回生丹錢許，心中稍安。須臾病又如舊，且覺心中發熱，火氣上騰，右腿轉筋，而身不涼，脈不閉，自知純係熱證。《千金方》治霍亂用治中湯（即理中湯），轉筋者加石膏，是霍亂之兼熱者原可重用石膏也。遂煎白虎加人參湯一大劑，服後病又稍愈。須臾仍然反覆，心中熱渴，

思食冰，遂買冰若干，分作小塊吞之，閱點半鐘，約食冰一斤，熱渴、吐瀉俱止，而病若失矣。此雖因食涼物激動伏暑之熱，然吐瀉轉筋非霍亂而何也？上二案皆證之大熱者也，若無井泉水與無冰之處，可用鮮梨片或西瓜蘸生石膏細末食之，此愚治寒溫之病，陽明大熱且嘔不受藥者之方也。究之其病發動之時，其大涼者仍宜先服衛生防疫寶丹，其大熱者仍宜先服急救回生丹，因此二藥皆能除毒菌、助心臟，使心臟不至受毒麻痺，病自無危險也。

時賢申濟人（順義縣人）曰「霍亂有陰陽之辨。若於六、七月間，或棲當樓窗，或夜臥露地，忽患上吐下瀉、兩腿筋抽、眼窩青、唇黑、身涼、有汗、脈沉伏者，此陰證也，急以針刺尺澤、少澤、委中（此穴宜深寸許）、十宣，若吐瀉不止，刺中腕、水分，其病立愈。若身熱、無汗、脈沉緊、腹疼甚、嘔而不得上出、脹而不得下瀉，此陽證也，急用針刺少商、委中、尺澤，腹疼不止，刺氣海、章門、足三里，根據法灸刺，無不愈者。」

按：此論辨陰陽之證頗精確，其謂陰證腿筋抽者，非轉筋也，即《傷寒論》所謂四肢拘急也。若轉筋，則陰陽之證皆有矣。其謂眼窩青、唇黑者，斯實陰證之明徵。其謂身涼、脈沉伏者，陽證亦間有之，然陰證至此時恆惡寒，身欲厚覆；陽證則始終不惡寒，即復以單被亦不欲。至其謂陰證有汗，陽證無汗，此論最確。又其論陰證，未言腹疼，論陽證則言腹疼甚，蓋陽證邪正相爭，仍有抗拒之力，其吐不得吐、瀉不得瀉者必然腹疼，即吐瀉頻頻者亦恆腹疼，至陰證則邪太盛，

正太衰，毫無抗拒之力，初得或猶有腹疼者，至吐瀉數次後即不腹疼矣。至其以腹疼、吐不能吐、瀉不能瀉，名為乾霍亂者，專屬於陽證，尤具有特識。所論針刺十餘穴皆為治此證要著，即不諳針灸者亦宜單習此十餘穴，以備不時之需，且臨時果能針藥並用，證愈必速。總之證無論涼熱，凡驗其病原蟲若蝌蚪形而曲其尾者，皆霍亂也。又天津鮑雲卿曰「余遇純陰霍亂，分毫不覺熱者，恆用大塊生薑切成方片，密排臍上兩層，搏艾絨如棗大灸之，其吐瀉轉筋可立止」。

從前壬寅歲，少陽相火司天，厥陰風木在泉，風火相煽，歲氣主熱，其歲孟秋發生霍亂，傳染甚廣，其病皆肝膽之火熾盛，前已言之。今歲壬申，其天干與壬寅年皆為木運（丁壬化木），地支寅與申，其司天在泉皆同，是以發生之霍亂亦多肝膽火盛，因之嘔吐恒甚劇。曾治一婦人，得斯病即飲水一口下嚥亦即吐出，醫者皆窮於用藥。後愚視之，其六脈若有若無，自言心中熱不能支。問想食冰否？答言想甚。遂俾買冰若干，屬其儘量吞服小冰塊，約食冰斤半，其嘔吐止矣。與以急救回生丹一劑，俾分三次服下，病遂愈。

按：《內經》司天在泉之說，當時醫者多不信。然臨證之際固不必拘拘本此，而病證與氣運之會合，恒有顯然可徵者，千古詒留之聖訓，豈可盡視為荒渺哉！今歲霍亂過後，有河南公安局劉鎮南君來函言，當霍亂盛行之時，偶披閱《衷中參西錄》，得衛生防疫寶丹，自出資配藥一料，服者皆愈。同人見藥甚效，又共



集資配藥若干，廣為施捨，並登本市民報，且將方送全省賑務會，以分送各縣分會，廣為施捨，而同時災黎之賴以全活者不勝計矣。

又山東煙臺同善社高硯樵來函言，其處當霍亂猖獗之時，紳商富戶共計配衛生防疫寶丹一百六十餘料，約計治癒一萬多人，且遇吐瀉已極將脫者，兼治以急救回陽湯，其陽回後，間有發生火熱，急投以白虎加人參湯治癒者。其詳函在後第八卷中可參觀。

論鼠疫之原因及治法（附：坎離互根湯）

自鼠疫之證流毒甚烈，醫者對於此證未之前聞，即治療此證未有專方，致國家一遇此證之發生，即設局防疫委之西醫，而西醫又毫無確實療法，惟置之隔離所中聽其自死，致患此證者百中難愈二三，良可慨也。不知此證發生之初，原係少陰傷寒中之熱證類，至極點始醞釀成毒，互相傳染。今欲知此證之原因及治法，須先明少陰傷寒之熱證。

嘗讀《傷寒論》（少陰篇），所載之證有寒有熱，論者多謂寒水之氣直中於少陰，則為寒證，自三陽傳來，則為熱證。執斯說也，何以陰病兩三日即有用黃連阿膠湯及大承氣湯者？蓋寒氣侵人之重者，若當時竄入陰為少陰傷寒之寒證。其寒氣侵人之輕者，伏於三焦脂膜之中，不能使人即病，而阻塞氣化之流通，暗生內熱，後因腎臟虛損，則伏氣所化之熱即可乘虛而入腎，或腎中因虛生熱，與伏氣所化之熱相招引，伏氣為同氣之求，亦易入腎，於斯虛熱實熱，相助為虐，互傷腎陰，致腎氣不能上潮於心，多生煩躁（此少陰病有心中煩躁之理）。再者，心主脈，而屬火，必得腎水之上濟，然後陰陽互根，跳動常旺，今既腎水不上潮，則陰陽之氣不相接續，失其互根之妙用，其脈之跳動多無力（此少陰病無論寒熱其脈皆微細之理）。人身之精神與人身之氣化原相憑根據，今因陰陽之氣不相接續，則精神失其憑根據，遂不能振作而昏昏欲睡（此少陰病但欲寐之理）。且腎陰之氣既不能上潮以濡潤上焦，則上焦必乾而發熱，口舌無津，肺臟因乾熱而咳

嗽，咽喉因乾熱而作痛，此皆少陰之兼證，均見於〈少陰篇〉者也。《內經》謂「冬傷於寒，春必病溫」，此言伏氣化熱為病也，然其病未必入少陰也。《內經》又謂「冬不藏精，春必病溫」，此則多係伏氣化熱，乘虛入少陰之病，因此病較伏氣入他臟而為病者難於辨認，且不易治療，故於冬傷於寒春必溫病之外，特為明辨而重申之也。蓋同是伏氣發動，竄入少陰為病，而有未屆春令先發於冬令者，則為少陰傷寒，即係少陰傷寒之熱證，初得之即宜用涼藥者也；其感春陽之萌動而後發，及發於夏，發於秋者，皆可為少陰溫病，即溫病之中有鬱熱，其脈象轉微細無力者也，其病雖異而治法則同也。既明乎此，試再進而論鼠疫。

鼠疫之證初起，其心莫不煩躁也；其脈不但微細，恆至數兼遲（間有初得脈洪數者，乃鼠疫之最輕者）；其精神頹敗異常，閉目昏昏，不但欲睡，且甚厭人呼喚；其口舌不但發乾，視其舌上，毫無舌苔，而舌皮乾亮如鏡；其人不但咳嗽咽痛，其肺燥之極，可至腐爛，嘔吐血水（奉天人言辛亥年此證垂危時多嘔吐血水），由斯而論，鼠疫固少陰熱證之至重者也。雖其成鼠疫之後，釀為毒菌，互相傳染，變證歧出，有為結核性者，有為敗血性者。而當其起點之初，大抵不外上之所述也，然此非愚之憑空擬議也，試舉一案以徵之。

民國十年黑龍江哈爾濱一帶鼠疫盛行，奉天防範甚嚴，未能傳染入境。惟中國銀行與江省銀行之間互相交通，鼠疫之毒菌因之有所傳染。其行中經理施蘭孫者，浙江人，年三十餘，發生肺炎性鼠疫，神識時明時憤，恆作譫語，四肢逆冷，

心中發熱，思食涼物，小便短赤，大便數日未行。其脈沉細而遲，心雖發熱，而周身肌膚之熱度無異常人，且閉目昏昏似睡，呼之眼微開，此誠《傷寒論》少陰篇所謂但欲寐之景象也。其舌上無苔，乾亮如鏡，喉中亦乾甚，且微覺疼，時作乾咳，此乃因燥生熱，腎氣不能上達，陰陽不相接續，故證象、脈象如此，其為鼠疫無疑也。此證若燥熱至於極點，肺葉腐爛，咳吐血水，則不能治矣。猶幸未至其候，急用藥調治，尚可挽回。其治之之法，當以潤燥清熱為主，又必須助其腎氣，使之上達，與上焦之陽分相接續而成坎離相濟之實用，則脈變洪大，始為吉兆。爰為疏方於下：生石膏（三兩搗細）、知母（八錢）、玄參（八錢）、生懷山藥（六錢）、野臺參（五錢）、甘草（三錢）。共煎湯三茶盅，分三次溫飲下。

按：此方即即拙著《衷中參西錄》三期六卷中白虎加人參湯以山藥代粳米，而又加玄參也。方中之意，用石膏以清外感之實熱，用山藥、知母、玄參以下滋腎陰、上潤肺燥，用人參者，誠以熱邪下陷於少陰，遏抑腎氣不能上達，而人參補而兼升之力，既能助腎氣上達，更能助石膏以逐除下陷之熱邪，使之上升外散也，且凡陰虛兼有實熱者，恆但用白虎湯不能退熱，而治以白虎加人參湯始能退熱，是人參與石膏並用，原能立復真陰於邪熱熾盛之時也。

將藥三次服完，身熱，脈起，舌上微潤，精神亦明瞭，惟大便猶未通下，內蘊之熱猶未盡清。俾即原方再服一劑，其大便遂通下，餘熱亦遂盡消矣。為此證無結核敗血之現象，而有肺燥、舌乾、喉疼之徵，故可名之為肺炎性鼠疫也。

後又治一人，其病之狀況大致皆與前證同，惟其脈之沉細及咽喉之乾疼則較前尤甚，仍投以前方，俾用鮮白茅根煎湯，以之代水煎藥，及將藥煎成，又調入生雞子黃同服，服後效驗異常，因名其方為坎離互根湯。爰將其方詳細錄出，以備醫界之採用。

【坎離互根湯】

生石膏（三兩搗細）、知母（八錢）、玄參（八錢）、野臺參（五錢）、生懷山藥（五錢）、甘草（二錢）、雞子黃（三枚）、鮮茅根（四兩切碎）。

先將茅根煎數沸，視茅根皆沉水底，取其湯以之代水，煎方中前六味，取湯三盅，分三次溫服下。每服一次，調入生雞子黃一枚。此方比前方多雞子黃，而又以茅根湯煎藥者，因雞子黃生用善滋腎潤肺，而茅根稟少陽最初之氣，其性涼而上升，能發起脈象之沉細也。上方，乃取《傷寒論》〈少陰篇〉黃連阿膠湯與《太陽篇》白虎加人參湯之義，而合為一方也。黃連阿膠湯原黃連、黃芩、芍藥、阿膠、雞子黃並用，為此時無真阿膠，故以玄參代之；為方中有石膏、知母，可以省去黃連、黃芩諸藥。西人謂雞子黃中含有副腎髓質之分泌素，故能大滋腎中真陰，實為黃連阿膠湯中之主藥，而不以名湯者，以其宜生調入而不可煎湯也。

是以單用此一味，而黃連阿膠湯之功用仍在。至於白虎加人參湯中去粳米，而以生山藥代之，以山藥之性既能和胃（原方用粳米，亦取其和胃），又能助玄參、雞子黃滋腎也。用白虎湯以解伏氣之熱，而更加人參者，取人參與石膏並用，最善生津止渴，以解寒溫之燥熱，而其補益之力，又能入於下焦，以助腎氣之上達，俾其陰陽之氣相接續，其脈之微細者可變為洪大，而邪可外透矣。繼又服之，脈之洪大者漸臻於和平，而病即痊愈矣。

咳嗽者，加川貝母三錢。咽喉疼者，加射干三錢。嘔吐血水者，加三七細末二錢，犀角、羚羊角細末各一錢，三味和勻，分三次送服，或但用三七亦可。其大便不實者，宜斟酌緩服。若大便滑瀉者，非下焦有寒，實因小便不利，宜服拙擬滋陰清燥湯（方載三期五卷，係生懷山藥、滑石各一兩，生杭芍藥五錢、甘草三錢），滑瀉止後，再服前方，又宜將方中石膏減作二兩，生山藥倍作一兩，緩與服。其脈象間有不微細遲緩，而近於洪數者，此乃鼠疫之最輕者，治以此方，一服當即速愈。總之，此證燥熱愈甚，則脈愈遲弱，身轉不熱。若服藥後脈起身熱，則病機已向愈矣。愚初治此證時，曾但用白虎加人參湯，以生山藥代粳米，治癒後，擬得此方，奏效尤捷。

或疑寒溫之證皆不傳染，鼠疫既為少陰寒溫證之劇者所成，何以獨易傳染？不知其傳染之毒菌，皆生於病終不愈，甚至臟腑潰敗，或因陰陽之氣久不接續，血脈之流通可至閉塞，因閉塞而成腐敗，此皆足以釀毒以相傳染也，少陰寒溫之

未變鼠疫者，其劇不至此，所以不傳染也。至此證之因傳染而成者，其毒愈醞釀而愈甚，即病不甚劇而亦可傳他人，所以此病偶有見端，即宜嚴為防範也。

按：此證之傳變，又分數種。後觀哈爾濱斯年報告之病狀，實甚複雜，今錄其原文於下，以備參考。

【民國十年春，哈爾濱防疫醫官趙含章君報告文】

斯年鼠疫之病狀：染後三日至七日，為潛伏期。先有頭痛、眩暈、食慾不振、倦怠、嘔吐等前驅證，或有不發前驅證者，繼則惡寒、戰慄，忽發大熱，達三十九度至四十度以上，或稽留，或漸次降下，淋巴管發生腫脹。在發熱前或發熱之一二日內，即發腫塊一個，有時一側同發兩個，如左股腺與左腋窩腺而並發是也。該腫塊或化膿，或消散，殊不一定。大部沉嗜眠睡（此即少陰證之但欲寐之理），夜間每發譫語。初期多泄瀉二三次，尿含蛋白（此傷腎之徵），病後一二日，肝脾常見肥大，輕證三四日體溫下降可愈，重證二日至七日多心臟麻痺（其脈象細微，同於少陰病脈可知）。此證可分腺腫性、敗血性、肺炎性百斯篤（即鼠疫）三種。腺腫百斯篤最佔多數，一處或各處之淋巴管並其周遭組織俱發炎證，其鼠腺及大腿上三角部之淋巴腺尤易罹之，腋窩腺及頭部腺次之，又間侵後頭腺、肘前後腺、耳前後腺、膝腺等。其敗血性百斯篤，發大如小豆之斑，疼痛頗甚，且即變為膿，或更進而變壞疽性潰瘍，又有誘起淋巴腺炎者。肺炎性百斯篤之證，

劇烈殊甚，一如加答兒性肺炎或格魯布肺炎，咯出之痰中含有百斯篤菌，乃最猛惡者也。

按：上段述鼠疫之情狀，可為詳悉盡致，而竟未言及治法，想西醫對於此證並無確實之治法也。且其謂輕證三四日體溫下降可愈，至其重證，體溫不下降，豈不可用藥使之下降？至言重證垂危，恆至心臟麻痺，推其麻痺之由，即愚所謂腎氣不上達於心，其陰陽之氣不相接續，心臟遂跳動無力，致脈象沉遲細弱也。此證若當其大熱之初，急投以坎離互根湯，既能退熱，又能升達腎氣，其心臟得腎氣之助，不至麻痺，即不難轉危為安也。又其謂大部嗜睡，與愚所經歷者之狀似昏睡，皆有少陰病但欲寐之現象，亦足徵愚謂此證係伏氣化熱入腎變成者，原非無稽之談也。特是愚前用之方，因在奉天未見傳染之毒，所以治法不備，後閱《山西醫志》，載有廈門吳錫璜《鼠疫消弭及療法》一篇，其用藥注重解毒，實能匡愚所不逮，爰詳錄之於下，以備治斯證者之採取。

【吳錫璜君登志原文】

疫菌既染，危險萬狀，大略分為腺鼠疫、肺鼠疫二種。其為證也，先犯心臟，使心力衰弱，凡脈搏如絲，即為疫毒侵犯心臟唯一之確據。其次體溫速升，頭痛眩暈，或作嘔吐，漸漸意識朦朧，陷於昏睡譫語，狀態癡呆，行步蹣跚，眼結膜強度充血，舌帶白色，如鍛石撒上，或污紫如熟李，頸腺、腋窩、大腿上近陰處



起腫脹疼痛，劇烈者三日即死。其神氣清者，可多遷延數日。尋常用方，有效有不效。茲將歷試有效者，詳細錄出，以公諸醫界。

【王孟英治結核法】

初起用王孟英治結核方合神犀丹多服累效，方用金銀花二兩，蒲公英二兩，皂刺錢半，粉甘草一錢。嘔者，去甘草，加鮮竹茹一兩，若無鮮竹茹，可以淨青黛三錢代之。大便秘、熱重者，加大黃三錢，水煎合神犀丹服，如仍不止，用藏紅花二錢煎湯，送服真熊膽二分，即止。此方用蒲公英、金銀花、皂刺合神犀丹，不但解毒，兼能解血熱、散血滯，實為治鼠疫結核之聖藥。若白泡疔，本方去皂刺，加白菊花一兩。兼黑痘，用神犀丹、紫金錠間服。

達樵云「病者發頭疼，四肢倦怠，骨節禁錮，或長紅點，或發丹疹，或嘔或瀉，舌乾喉痛，間有猝然神昏、痰湧、竅閉者，此係穢毒內閉，毒氣攻心，宜用芳香辟穢、解毒護心之品，辟穢驅毒飲主之」。

【辟穢驅毒飲】

西牛黃（八分研沖）、人中黃（三錢）、九節菖蒲（五分）、靛葉（錢半）、忍冬蕊（五錢鮮者蒸露亦可）、野鬱金（一錢）。

水煎服。如見結核，或發斑，或生疔，加藏紅花八分、桃仁三錢、熊膽四分（送服）。大渴引飲，汗多，加犀角、金汁。神昏譫語，宜用至寶丹或安宮牛黃丸，開水和服，先開內竅。此證初起，不可即下，審其口燥，神昏，熱熾，有下

證者，先辟穢解毒，然後議下，每獲效。下法用大黃煮湯，泡紫雪丹五分良。忌早用大苦大寒，以致冰閉。若脈道阻滯，形容慘淡，神氣模糊，惡核痛甚者，宜用解毒活血湯。

連翹（三錢）、柴胡（二錢）、葛根（二錢）、生地（五錢）、赤芍（三錢）、紅花（五錢）、桃仁（八錢）、川朴（一錢後下）、當歸（錢半）、甘草（二錢）蘇木（二兩）。

輕證初起，每三點鐘服一次。危證初起，兩點鐘服一次，或合數劑熬膏，連服之。或熱，或渴，或出汗，或吐血，加生石膏一兩，蘆根汁一杯，和藥膏服，並多服羚羊角及犀角所磨之汁。孕婦加桑寄生一兩、黃芩一兩，略減桃仁、紅花。熱甚口燥無津，脈象洪數，唇焦大渴者，用清瘟敗毒飲。項腫者，俗名蝦蟆瘟，用普濟消毒飲（二方俱見《溫熱經緯》），多服必效。吐紅涎者，鮮蘆根取汁和服。便秘者，加大黃三錢。

按：上所論者，開端雖外肺鼠疫、腺鼠疫，至後則渾論鼠疫，實未明言何者為肺鼠疫，何者為腺鼠疫。至西人則謂肺百斯篤，由鼻腔肺胃腸中而吸收其毒於血中，其證狀因種類而殊，多有陡然惡寒，繼則發熱，一二日間或頭痛，或有劇烈之腦證，發狂而死者；有狀似昏睡，而起嘔吐，腹痛雷鳴，或大便泄瀉，或便秘，或便血者。腺百斯篤，首侵股腺，鼠蹊發腫痛，或先犯腋下腺而後及其他，該腫腺鄰近之皮膚潮紅灼熱，終則呈敗血證狀而死。無論何地，苟發生此種病，

當盡力防其傳染。觀此論，言肺鼠疫毒侵臟腑，由口鼻傳入，而腺鼠疫止言其毒侵入之腺，而未言其侵入之路，以愚斷之，亦由口鼻隨呼吸之氣傳入。蓋人身之腺，為衛氣通行之道路，衛氣固與肺氣相貫通者也。其人若先有伏氣之邪在內，則同氣相招，疫毒即深入臟腑。其人若無伏氣之邪，疫毒由口鼻傳入，即隨衛氣流轉，侵入腺中，發生毒核。其果發生毒核也，固宜用吳君所言消核逐穢解毒諸方，其非結核而毒氣內陷也，欲清熱兼托毒外出，仍宜用拙擬之坎離互根湯。蓋如西人之所謂狀似昏睡，趙君之所謂心臟麻痺，吳君之所謂熱甚口渴無津者，皆與愚所論少陰證變鼠疫之狀況相似也。為其心腎不相濟，上焦燥熱，肺先受傷，而治斯病者遂名之為肺鼠疫也。若其人肺鼠疫與腺鼠疫並見者，則愚與吳君之方又當並用，或相其所緩急而或先或後接續用之亦可。

由少陰寒溫以變鼠疫，是實愚之創論，而近閱中古方書，似早寓有此說。《千金方》曰「惡核病者，肉中忽有核，累大如李核，小如豆粒，皮肉痛，壯熱癢索，惡寒是也，與諸瘡根癩癰結筋相似。其瘡根癩癰因瘡而生，似緩無毒。惡核病猝然而起，有毒，若不治，入腹煩悶殺人，皆由冬受溫風，至春夏有暴寒相搏，氣結成此毒也」，觀此論所謂惡核，似即係鼠疫之惡核。觀其所謂冬受溫風，至春夏又感寒而發，又似愚所謂伏氣化熱下陷少陰，由寒溫而變鼠疫也。蓋伏氣化熱之後，恆有因薄受外感而後發者。由斯知鼠疫之證，自唐時已有，特無鼠疫之名耳。

又鼠疫之名，非起自西人也。德州李保初《藥言隨筆》曰「滇黔兩粵，向有時疫癘子證，患者十中難愈二三，甚至舉家傳染。俗名耗子（為鼠能消耗物是以俗呼為耗子）病，以其鼠先感受，如見有斃鼠，人觸其臭氣則病，室中或不見鼠時，證必流行。所感病象，無論男女壯弱，一經發熱，即生癘子，或在腋下，或現兩胯、兩腮，或痛而不見其形，遲則三五日，速則一晝夜即斃。辛丑夏邑，適有患此證者，診之其脈輕則細數，重則伏澀，遂悟時證之由，其所以鼠先感受者，非有奇異之毒，實感天地之氣偏耳。以鼠穴居之性，晝伏夜動，藉地氣以生存，如地氣不達，陰氣失職，鼠失其養，即不能居，是以他徙，不徙則斃。人居天地氣交之中，必二氣均調，臟腑始順，適無病。設或二氣有偏，其偏之極，更至於孤獨，人處其間即大為所累。是以天地之氣通則為泰，塞則為否，泰則萬物生，否則萬物枯，此自然之理也。今即物性以證人病，則知二氣何者偏勝，何者偏虛，補偏救弊，必能奏效」。

觀《藥言隨筆》之所云云，知滇黔兩粵早有鼠疫之病，亦早知其病起點於鼠，故名為耗子病。其所謂生癘子者，或在腋下，或現兩胯、兩腮，即結核也。且其謂地氣不達，陰氣失職，則鼠病，又謂二氣偏之極，則人即不堪。又謂天地之氣通則為泰，而萬物生，塞則為否，而萬物枯，諸多名論，皆可與愚所謂少陰寒溫病，因陰陽之氣不相接續，致變鼠疫之理相發明也。蓋彼所論者，天地之氣化，愚所論者，人身之氣化，究之人身之氣化實隨天地之氣化為轉移。當此地氣不達，

陰氣失職之時，人身下焦之氣化亦必不能上達，此時有病少陰寒溫者，其為鼠疫之起點固易易也。至《藥言》謂鼠因穴居，故先受病，是又謂由鼠起點也。總之自鼠起點，或自人起點，原無二理。其起點之後，愈傳愈廣，亦愈傳愈毒，則一也。《藥言隨筆》一書，誠於醫學多所發明，惟其流傳不廣，醫界多未見耳。

又嘗考鼠疫之毒菌為杆形，兩端實而中空。凡鐵杆之含有電氣者，必一端為陽電，一端為陰電，今觀鼠疫毒菌之狀，其兩端實者，一端為陽，一端為陰可知，其中空者，陰陽之氣不相接觸可知，病因如此，毒菌之現狀亦如此，是氣化之實際，亦可以跡象求也。由斯知陰陽之氣相合，即為生旺之氣；陰陽之氣離，即為腐敗之氣，為其身有腐敗之氣，故內則氣化否塞，致心臟麻痺，肺臟潰爛，外則血脈凝滯，而或為結核，或為敗血性也。是以治此證者，仍當以變和陰陽為保身立命之基，使身中氣化生旺，自能逐毒氣外出，而又佐以清火、消毒、逐穢之品，鼠疫雖至險，亦可隨手奏效也。

愚初作此鼠疫論時，猶未見此《藥言隨筆》也，故論成之後猶遊移未遽以示人。後見此書，繼又見漢皋友人冉雪峰《鼠疫問題解決》，謂水不濟火則為陽燥，火不蒸水則又為陰燥，火衰不交於水固為陰燥，水凝自不與火交亦為陰燥。鼠疫之病，陰凝成燥，燥甚化毒之為病也。又謂「他證以脈洪數為熱進，微弱為熱退，此證則以微弱為熱進，洪數為熱退」，皆與愚所論少陰證可變鼠疫，其病情脈狀莫不吻合。至冉雪峰所著之書，詳悉精微，無理不徹，無法不備，洵可為治鼠疫

者之金科玉律，而拙論中未採用其方者，正以全書之方皆宜遵用，非僅可採用其一二也，欲研究鼠疫之治法者，取冉雪峰之書與拙論參觀可也。

又香山友人劉蔚楚，治鼠疫結核之劇者，曾重用麝香六分，作十餘次，用解毒活血清火之藥煮湯，連連送下而愈。冉雪峰治鼠疫方中，亦有用所煮湯藥送服麝香，以通絡透毒者，又可補吳錫璜方中所未備也。

又欒州友人朱鉢文告愚曰「余有善消鼠疫結核之方，用川大黃五錢，甘草五錢，生牡蠣六錢（搗碎），栝萸仁四十粒（搗碎），連翹三錢。煎湯服之，其核必消」。

按：此方大黃五錢似近猛烈，而與甘草等分並用，其猛烈之性已化為緩和矣，所以能穩善建功也。

紹興何廉臣所編《全國名醫驗案類編》，最推重廣東羅氏芝園，謂其經驗弘富，細心揣摩，剖察病情如老吏斷獄，羅列治法如名將談兵，以活血去瘀之方，劃清鼠疫主治界限，允推卓識，爰為節述其因、證、方、藥，俾後學有所取法。

#### 【一探原因】

城市污穢必多，鬱而成，其毒先見，鄉村污穢較少，鬱而成，其毒次及，故熱毒重蒸，鼠先受之，人隨感之，由毛孔氣管入達於血管，所以血壅不行也。血已不行，漸紅漸腫，微痛微熱，結核如癰癤，多見於頸脅臑膀大腿之間，亦見於手足頭面腹背，爾時體雖不安，猶可支持，病尚淺也。由淺而深，愈腫愈大，邪

氣與正氣相搏，而熱作矣。熱作而見為頭痛身痺，熱甚而見為大汗作渴，則病已重矣。

【二辨證候】

鼠疫初起，有先惡寒者，有不惡寒者，既熱之後即不惡寒，有先核而後熱者，有先熱而後核者，有熱核同見者，有見核不見熱者，有見熱不見核者，有汗有不汗者，有渴有不渴者，皆無不頭痛、身痛、四肢酸痺，其兼見者疔、瘡、斑、疹、衄、嗽、咯、吐，甚則煩躁、懊懣、昏譫、癲狂、痞滿、腹痛、便結旁流、舌焦起刺、鼻黑如煤、目瞑耳聾、骨痠足腫、舌唇裂裂、脈厥體厥，種種惡證，幾難悉數，無非熱毒迫血成瘀所致，然其間亦有輕重。核小、色白、不發熱，為輕證。核小而紅、頭微痛、身微熱、體微酸，為稍重證。單核紅腫、大熱、大渴、頭痛、身痛、四肢酸痺，為重證。或陡見熱渴痛痺四證，或初惡寒旋見四證，未見結核，及舌黑起刺，循衣摸床，手足擺舞，脈厥體厥，與疫證盛時，忽手足抽搐，不省人事，面身紅赤，不見結核，感毒最盛，壞人至速，皆至危證。

【三論治法方藥】

古方如普濟消毒飲、銀翹敗毒散，近方如銀翹散、代賑普濟散等，雖皆能清熱解毒，而無活血去瘀之藥，用之多不效。惟王清任活血解毒湯，桃仁八錢去皮尖打，紅花五錢，當歸錢半，川朴一錢，柴胡一錢，連翹三錢，赤芍三錢，生地五錢，葛根一錢，生甘草一錢。方以桃仁為君，而輔以當歸，去瘀而通壅；連、

芍為臣，而兼以地，清熱而解毒，朴、甘為佐使，疏氣而和藥，氣行則血通；柴、葛以解肌退熱而拒邪，邪除則病癒，惟其對證用藥，故能投無不效。蓋此證熱毒本也，瘀血標也，而標實與本同重，故標本未甚者，原方可愈，標本已甚者，傳表宜加白虎，傳裡宜加承氣，毒甚宜加羚羊、犀。如連進後，汗出熱清，可減除柴、葛；毒下瘀少，可減輕桃、紅，其他當隨證加減。輕證照原方一服，稍重證，日夜二服，加金銀花、竹葉各二錢，如口渴微汗，加石膏五錢，知母三錢。重證、危證、至危證，於初起惡寒，照原方服，柴胡、葛根各加一錢，若見大熱，初加金銀花、竹葉各三錢，西藏紅花一錢，危證錢半，或加紫草三錢，蘇木三錢。疔瘡，加紫花地丁三錢，洋菊葉汁一杯沖。小便不利，加車前子三錢。痰多加川貝母三錢，生萊菔汁兩杯沖。若痰壅神昏，又非前藥可治，當加鮮石菖蒲汁一瓢沖，鮮竹瀝兩瓢沖，或礞石滾痰丸三錢包煎。若見癲狂，雙劑合服，加重白虎，並竹葉心、羚羊、犀角、西藏紅花各三錢。血從上逆，見衄咯等證，加犀角、丹皮各三錢，鮮茅根、鮮蘆根各四兩。見斑加石膏一兩，知母五錢，元參二錢，犀角二錢。見疹加金銀花、牛蒡子各三錢，竹葉、大青葉、丹皮各二錢。老弱幼小，急進只用單劑，日夜惟二服，加石膏，大黃減半。所加各藥，小兒皆宜減半。五六歲，一劑同煎，分二次服，重危之證，一劑作一服。幼小不能服藥，用針刺結核三四刺，以如意油調經驗塗核散（山慈菇三錢，真青黛一錢，生黃柏錢半，浙貝錢半，赤小豆二錢，共研細末）日夜頻塗十餘次可愈。婦女同治，惟孕婦加黃



芩、桑寄生各三錢以安胎。初起即宜急服，熱甚尤宜急進，熱久胎必墜。若疑桃仁、紅花墮胎，可改用紫草、紫背天葵各三錢。惟宜下者除芒硝。以上諸法，俱從屢次試驗得來，證以強壯者為多，故於人屬強壯，毒盛熱旺，每於重危之證，必加羚羊、犀角、西藏紅花，取其見效較捷耳。無如人情多儉，富者聞而退縮，貧者更可知矣。茲為推展，分別熱盛毒盛兩途，隨證加藥，亦足以治病。如初係熱盛之證，加石膏、知母、淡竹葉或螺靨菜（或名雷公根）、龍膽草、白茅根之類，便可清熱。如兼有毒盛之證，加金銀花、牛蒡子、人中黃之類，便可以解毒。若熱毒入心包，羚羊、犀角、藏紅花雖屬緊要，然加生竹葉心、生燈心、黃芩、梔子、麥冬心、蓮子心、元參心之類，便可除心包之熱毒。若熱毒入裡，加大黃、朴硝、枳殼以瀉之，便可去腸胃之熱毒。

平潭友人李健頤，著有《鼠疫新篇》一書，蒙贈一冊，論鼠疫之病，謂係有一種黑蟻傳染於鼠，再傳於人。其中所載之醫案治法，莫不精良，而遇此證之熱甚者，恆放膽重用生石膏，有一劑而用至八兩者，有治癒一證而用至二斤強者，可為有膽有識。爰錄其治癒之案一則，以為治斯病者之標準。平潭觀音井蔡瑞春，年五十八歲，初起惡寒，旋即發熱，熱甚口渴，手足痺疼，胯下贅生一核，熱痛非常，胸脹嘔血，目赤神昏，脈數苔黃。因其先觸睹死鼠，毛竅大開，毒氣傳入血管，潛伏體內，復因外感春陽之氣而為引線，是以胃熱則嘔逆，肺傷則噴血，熱深內竄肺絡，肺與心近，影響阻礙，心不守舍，故昏迷譫語，此證涉危篤，急

宜清胃、瀉肺、攻毒、解熱重劑急進，庶能挽救。方擬用加減解毒活血湯加石膏、蘆根。

荊芥穗（三錢）、連翹（三錢）、金銀花（五錢）、浙貝母（三錢）、生地黃（五錢）、赤芍藥（三錢）、桃仁（五錢）、川紅花（三錢）、紫草（三錢）、生石膏（二兩搗細）、鮮蘆根（一兩）、雄黃精（一錢）、冰片（五分）。

將前十一味煎湯兩盅，分兩次溫服。後二味共研細末，分兩次用湯藥送服。將藥連服二劑，嘔平血止，熱退胸舒。將原方減雄黃，加錦紋大黃五錢，以瀉胃中餘毒，服兩劑，諸恙悉解。

〈 第 七 卷 〉

此卷論痰飲、咳嗽、水腫、氣腫、吐血諸雜證，多與前四期互相發明。至於治血臟、治療、治癩、治革脈諸論，則補從前所未備也。後論婦女子科、小兒科，亦宜與從前諸編匯通參觀。末則附以治瘋犬傷方、解觸電氣方、救外傷方，皆活人之要術也。

答臺灣嚴坤榮代友問痰飲治法

詳觀來案，知此證乃寒飲結胸之甚者。拙擬理飲湯，原為治此證的方，特其藥味與份量宜稍為更改耳。今擬一方於下，以備採擇。方用生箭耆一兩，乾薑八錢，於朮四錢，桂枝尖、茯苓片、炙甘草各三錢，厚朴、陳皮各二錢，煎湯服。方中之義，用黃耆以補胸中大氣，大氣壯旺，自能運化水飲，仲景所謂「大氣一轉，其氣（指水飲之氣）乃散」也，而黃耆協同乾薑、桂枝，又能補助心肺之陽，使心肺陽足，如日麗中天，陰霾自開，更用白朮、茯苓以理脾之濕，厚朴、陳皮以通胃之氣，氣順濕消，痰飲自除，用炙甘草者，取其至甘之味，能調乾薑之辛辣，而乾薑得甘草，且能逗留其熱力，使之綿長，並能緩和其熱力，使不猛烈也。

按：此方即《金匱》苓桂朮甘湯，加黃耆、乾薑、厚朴、陳皮，亦即拙擬之理飲湯（方在三期第三卷）去芍藥也。原方之用芍藥者，因寒飲之證，有迫其真陽外越，周身作灼，或激其真陽上竄，目眩耳聾者，芍藥酸斂苦降之性，能收斂上竄外越之元陽歸根也（然必與溫補之藥同用方有此效）。此病原無此證，故不

用白芍。至黃耆在原方中，原以痰飲既開、自覺氣不足者加之。茲則開始即重用黃耆者，誠以寒飲固結二十餘年，非有黃耆之大力者，不能斡旋諸藥以成功也。

又按：此方大能補助上焦之陽分，而人之元陽，其根柢實在於下，若更兼服生硫黃，以培下焦之陽，則奏效更速，所言東硫黃亦可用，須擇其純黃者方無雜質，惟其熱力減少，不如中硫黃耳。其用量，初次可服細末一錢，不覺熱則漸漸加多，一日之極量，可至半兩，然須分四五次服下，不必與湯藥同時服，或先或後均可。

【附原問】

向讀尊著《醫學衷中參西錄》，所擬諸方，皆有精義，每照方試用，莫不奏效。敝友患寒飲喘嗽，照方治療未效。據其自述病因，自二十歲六月遭兵燹，困山澤中，絕飲食五日夜，歸家急汲井水一小桶飲之，至二十一歲六月，遂發大喘。一日夜後，飲二陳湯加乾薑、細辛、五味漸安，從此痰飲喘嗽，成為痼疾，所服之藥，大燥大熱則可，涼劑點滴不敢下嚥。若誤服之，即胸氣急而喘作，須咳出極多水飲方止。小便一點鐘五六次，如白水，若無喘，小便亦照常。飲食無論肉味菜蔬，俱要燥熱之品，粥湯、菜湯概不敢飲。其病情喜燥熱而惡冷濕者如此。其病狀暑天稍安，每至霜降後朝朝發喘，必屆巳時吐出痰飲若干，始稍定，或飲極滾之湯，亦能咳出痰飲數口，胸膈略寬舒，迄今二十六七載矣。近用黎蘆散吐法及十棗湯等下法，皆出痰飲數升，證仍如故，《金匱》〈痰飲篇〉及寒水所關

等劑，服過數十次，證亦如故，想此證既能延歲月，必有療法，乞先生賜以良方，果能拔除病根，感佩當無既也。又《衷中參西錄》載有服生硫黃法，未審日本硫黃可服否？

【服藥愈後謝函】

接函教，蒙授妙方，治療敝友奇異之宿病，連服四五劑，呼吸即覺順適。後又照方服七八劑，寒飲消除，喘證痊愈。一豎經藥驅逐，竟歸於無何有之鄉矣。後敝友沾再造之恩，愧無以報。茲值歲暮將屆，敬具敝處土產製造柑餅二甌，付郵奉上，聊申謝忱，伏乞笑納，幸勿見麾是荷。

答張汝偉問其令尊咳嗽治法

閱第九期（杭州醫報）所登之案，原係失血陰虧之體，所用之藥非不對證，而無大效者，藥力不專也。治此等證者，宜認定宗旨，擇藥之可用者兩三味，放膽用之，始能有效。今擬兩方於下，以備採用。

一方用懷熟地二兩，炒薏米一兩，此藥須購生者，自炒作老黃色，旋炒旋用，搗成粗渣，將二味頭次煎湯兩茶杯，二次煎湯一杯半，同調和，為一日之量，分三次溫服。方中之意，重用熟地以大滋真陰，恐其多用泥胃，故佐以薏米，以健胃利濕，即以行熟地之滯也。曾治鄰村武生李佐亭之令堂，年七旬，自少年即有勞疾，年益高疾益甚，浸至喘嗽，夜不能臥。俾用熟地切成小片，細細嚼咽之，日盡兩許，服月餘，忽然氣息歸根，喘嗽頓止，徹底安睡。其家人轉甚惶恐，以為數十年積勞，一日盡愈，疑非吉兆，倉猝迎為診視，六脈和平無病，因笑謂其家人曰「病癒矣，何又懼為？此乃熟地之功也」，後果勞疾大見輕減，壽逾八旬。

一方生懷山藥軋為細末，每用一兩，涼水調入小鍋煮作茶湯，送服西藥含糖百布聖八分（若百布聖不含糖者，宜斟酌少用），日服兩次，若取其適口，可少用白糖調之。方中之意，用山藥以補肺、補脾、補腎，恐其多服久服或有滯泥，故佐以百布聖，以運化之，因此藥原用豬、牛之胃液製成，是以饒有運化之力也。

按：山藥雖係尋常服食之物，實為藥中上品，拙著《衷中參西錄》三期、四期所載重用山藥治癒之險證甚夥，而之以治虛勞喘嗽，尤為最要之品，兄素喜閱拙著，想皆見之。今更伍以西藥百布聖，以相助為理，實更相得益彰矣。



答張汝偉服藥有效致謝書

閱本報第十七期，知尊大人服拙擬之方有效，不勝欣喜。其方常服，當必有痊愈之日。誠以熟地黃與炒薏米並用，並非僅仿六味丸而取其君也（仿六味而取其君是謝書中語）。古之地黃丸，原用乾地黃，即今之生地黃，其性原涼，而以桂、附濟之，則涼熱調和，且桂用桂枝，即《本經》之牡桂，其力上升下達，宣通氣分，是以方中雖有薯蕷之補，萸肉之斂，而不失於滯泥。後世改用熟地黃，其性已溫，再用桂、附佐之，無大寒者服之，恒失於熱。於斯有錢仲陽之六味地黃丸出，其方雖近平易，然生地黃變為熟地黃，其性原膩，既無桂、附之宣通，又有蕷、萸之補斂，其方即板滯不靈矣。是以拙擬方中，既重用熟地黃，而薯蕷、萸肉概不敢用，惟佐以薏米，因薏米之性，其滲濕利痰有似苓、澤。苓、澤原為地黃之輔佐品，而以薏米代之者，因其為尋常食物，以佐味甘汁濃之熟地黃，可常服之而不厭也。且炒之則色黃氣香，可以醒脾健胃，俾中土之氣化壯旺，自能行滯化瘀，雖以熟地黃之滯泥，亦可常服而無弊也。

論水臑氣臑治法（附：表裡分消湯）

水臑、氣臑形原相近。《內經》謂「按之而窅不起者，風水也」，愚臨證品驗以來，知凡水證，以手按其腫處成凹，皆不能隨手而起。至氣臑，以手重按成凹，則必隨手而起。惟單腹脹病，其中水臑、氣臑皆有，因其所鬱氣與水皆積腹中，不能外透肌肉，按之亦不成凹，似難辨其為水、為氣。然水臑必然小便短少，氣臑必覺肝胃氣滯，是明徵也。今試進論其治法。

《金匱》論水病，分風水、皮水、正水、石水。謂風水、皮水脈浮，正水、石水脈沉，然水病之劇者，脈之部位皆腫，必重按之成凹其脈方見，原難辨其浮沉，及觀其治法，脈浮者宜發汗，恆佐以涼潤之藥；脈沉者宜利小便，恆佐以溫通之藥，是知水腫原分涼熱，其涼熱之脈，可於有力、無力辨之。愚治此證，對於脈之有力者，亦恆先發其汗，曾擬有表裡分消湯，爰錄其方於下。

【表裡分消湯】

麻黃三錢，生石膏、滑石各六錢，西藥阿斯匹林一瓦。將前三味煎湯，送服阿斯匹林。若服藥一點鐘後不出汗者，再服阿斯匹林一瓦。若服後仍不出汗，還可再服，當以汗出為目標。

麻黃之性，不但善於發汗，徐靈胎謂能深入積痰凝血之中，凡藥力所不到之處，此能無微不至，是以服之外透肌表，內利小便，水病可由汗、便而解矣。惟其性偏於熱，似與水病之有熱者不宜，故用生石膏以解其熱。又其力雖云無微不

至，究偏於上升，故又用滑石引之以下達膀胱，即其利水之效愈捷也。至用西藥阿斯匹林者，因患此證者，其肌膚為水錮閉，汗原不易發透，多用麻黃又恐其性熱耗陰，阿斯匹林善發汗，又善清熱，故可用為麻黃之佐使，且其原質存於楊柳皮液中，原與中藥並用無礙也。

若汗已透，腫雖見消，未能痊愈者，宜專利其小便。而利小便之藥，以鮮白茅根湯為最效，或與車前並用，則尤效。憶辛酉臘底，自奉還籍，有鄰村學生毛德潤，年二十，得水腫證，醫治月餘，病益劇，頭面周身皆腫，腹如抱甕，夜不能臥，依壁喘息，蓋其腹之腫脹異常，無容息之地，其氣幾不能吸入，故作喘也。其脈六部細數，心中發熱，小便不利，知其病久陰虛，不能化陽，致有此證。俾命人力剖凍地，取鮮茅根，每日用鮮茅根六兩，銼碎，和水三大碗，以小鍋煎一沸，即移置爐旁，仍近爐眼徐徐溫之，待半點鐘，再煎一沸，猶如前置爐旁，須與茅根皆沉水底，可得清湯兩大碗，為一日之量，徐徐當茶溫飲之。再用生車前子數兩，自炒至微熟，三指取一撮，細細嚼咽之，夜間睡醒時亦如此，嚼服一晝夜，約盡七八錢。如此二日，小便已利，其腹仍膨脹板硬。俾用大蔥白三斤，切作絲，和醋炒至將熟，乘熱裹以布，置臍上熨之。若涼，則仍置鍋中，加醋少許炒熱再熨。自晚間熨至臨睡時止，一夜小便十餘次，翌晨按其腹如常人矣。蓋茅根如此煎法，取其新鮮涼潤之性大能滋陰清熱（久煎則無此效）。陰滋熱清，小便自利。若遇證之輕者，但用徐服車前子法亦可消腫，曾用之屢次奏功矣。

按：此證雖因病久陰虛，究非原來陰虛，若其人平素陰虛，以致小便不利，積成水腫者，宜每用熟地黃兩半，與茅根同煎服。若恐兩沸不能將地黃煎透，可先將地黃煮十餘沸，再加茅根同煮。至車前子，仍宜少少嚼服，一日可服四五錢。

至於因涼成水臃者，其脈必細微遲弱，或心中覺涼，或大便泄瀉，宜用花椒目六錢，炒熟搗爛，煎湯送服生硫黃細末五分。若服後不覺溫暖，可品驗加多，以服後移時微覺溫暖為度。蓋利小便之藥多涼，二藥乃性溫能利小便者也。若脾胃虛損，不能運化水飲者，宜治以健脾降胃之品，而以利小便之藥佐之。

總之，水臃之證，未有小便通利而成者。是以治此證者，當以利小便為要務。今特錄素所治癒小便不利之案兩則，以備治水證者之參觀。

鄰村劉叟，年六旬，先小便帶血數日，忽小便不通，以手揉擠小腹，流血水少許，數次揉擠，疼痛不堪，求為診治，其脈沉而有力。時當仲夏，覆厚被猶覺寒涼，知其實熱鬱於下焦，溺管因熱而腫脹也。為疏方滑石、生杭芍各一兩，知母、黃柏各八錢。煎劑，小便通利。又加木通、海金沙各二錢，服兩劑痊愈。

又奉天省公署護兵石玉和，忽然小便不通，入西醫院治之。西醫治以引溺管，小便通出。有頃，小便復存蓄若干，西醫又納一橡皮管使久在其中，有溺即通出。乃初雖稍利，繼則小便仍不能出，西醫辭不治，遂來院求為診治，其脈弦遲細弱，自言下焦疼甚，知其小便因涼而凝也。為疏方用黨參、椒目、懷牛膝各五錢，烏附子、廣條桂、當歸各三錢，乾薑、小茴香、沒藥、威靈仙、甘草各二錢。連服

三劑，小便利而腹疼亦愈。遂停藥，俾日用生硫黃錢許，分兩次服下，以善其後。方中之義黨參、靈仙並用，可治氣虛小便不利，椒目與桂、附、乾薑並用，可治因寒小便不利，又佐以當歸、牛膝、茴香、沒藥、甘草諸藥，或潤而滑之，或引而下之，或辛香以透竅，或溫通以開瘀，或和中以止疼，眾藥相濟為功，所以奏效甚速也。此與前案均係小便不通，而病因之涼熱判若天淵，治之者能勿因證疏方哉。

有因胞繫了戾，致小便不通者。其證偶因嘔吐咳逆，或側臥欠伸，仍可通少許，俗名為轉胞病。孕婦與產後及自高墜下者，間有此病。拙擬有升麻黃耆湯（方載三期二卷係生箭耆五錢當歸四錢，升麻三錢，柴胡二錢），曾用之治癒數人，此升提胞係而使之轉正也。

又華元化有通小便秘方，愚知之而未嘗試用，後閱杭報，見時賢蕭介青言用其方加升麻一錢，曾治癒其令妹二日一夜小便不通及陶姓男子一日夜小便不通，皆投之即效，方係人參、蓮子心、車前子、王不留行各三錢，甘草一錢，肉桂三分，白果十二枚。

按：方中白果，若以治咳嗽，可連皮搗爛用之，取其皮能斂肺也，若以利小便，宜去皮搗爛用之，取其滑而能降也。

至於氣臟，多係脾有瘀滯所致。蓋脾為後天之主，居中央以運四旁，其中原多回血管，以流通氣化。若有瘀滯以阻其氣化，腹中即生脹滿，久則積為氣臟，

《內經》所謂「諸濕腫滿皆屬脾也」。拙擬有雞脰湯（方載三期二卷，係生雞內金、白朮、生杭芍各四錢，柴胡、陳皮各錢半，生薑三錢），曾用之屢次奏效。方中之意，用雞內金以開脾之瘀，白朮以助脾之運，柴胡、陳皮以升降脾氣，白芍以利小便，防有蓄水，生薑以通竅絡兼和營衛也。統論藥性，原在不涼不熱之間。然此證有偏涼者，則桂、附、乾薑可以酌加；有偏熱者，則芩、連、梔子可以酌加。若其脈證皆實，服藥數劑不見愈者，可用所煎藥湯送服黑丑頭次所軋細末錢半，服後大便通行，病即稍愈，然須服原方數日，日用一次，連用恐傷氣分。此水臧氣臧治法之大略也（第三期二卷載有治水臧氣臧諸方案宜參觀）。

論血臟治法

水臟、氣臟之外，又有所謂血臟者，其證較水臟、氣臟尤為難治。然其證甚稀少，醫者或臨證數十年不一遇，即或遇之，亦止認為水臟、氣臟，而不知為血臟。是以方書鮮有論此證者，誠以此證之腫脹形狀，與水臟、氣臟幾無以辨，所可辨者，其周身之回血管紫紋外現耳。

血臟之由，多因努力過甚，激動氣血，或因暴怒動氣，血隨氣升，以致血不歸經，而又未即吐出瀉出，遂留於臟腑，阻塞經絡，周身之氣化因之不通，三焦之水飲因之不行，所以血臟之證初起，多兼水與氣也。迨至瘀血漸積漸滿，周身之血管皆為瘀血充塞，其回血管膚淺易見，遂呈紫色，且由呈紫色之處，而細紋旁達，初則兩三處，浸至遍身皆是紫紋。若於回血管紫色初見時，其身體猶可支持者，宜先用《金匱》下瘀血湯加野臺參數錢下之。其腹中之瘀血下後，可再用藥消其血管中之瘀血，而輔以利水理氣之品，程功一月，庶可奏效。若至遍身回血管多現紫色，病候至此，其身體必羸弱已甚，即投以下瘀血湯，恐瘀血下後轉不能支持，可用拙擬化瘀通經散（方在後論女子癥瘕治法篇中），再酌加三七末服之，或用利水理氣之藥煎湯送服，久之亦可奏效。若腹中瘀血已下，而周身之紫紋未消者，可用丹參、三七末各一錢，再用山楂四錢煎湯，沖紅糖水送服，日兩次，久自能消。

《金匱》下瘀血湯：大黃三兩（當為今之九錢），桃仁三十個，蟪蟲二十枚去足熬（炒也）。上三味末之，煉蜜和為四丸，以酒一升（約四兩強）煮一丸，取八合頓服之，瘀血下如豚肝。

按：此方必先為丸而後作湯服者，是不但服藥汁，實兼服藥渣也。蓋如此服法，能使藥之力緩而且大，其腹中瘀久之血，可一服盡下，有用此方者，必按此服法方效。又杏仁之皮有毒，桃仁之皮無毒，其皮色紅，活血之力尤大，此方桃仁，似宜帶皮生用，然果用帶皮生桃仁時，須審辨其確為桃仁，勿令其以帶皮之杏仁誤充。至於廕蟲，藥方中尤多差誤，第二卷中前有廕蟲辨，細閱之自能辨廕蟲之真偽。

究之，病血臑者，其身體猶稍壯實，如法服藥，原可治癒，若至身體羸弱者，即能將其瘀治淨，而轉有危險，此又不可不知。臨證時務將此事言明，若病家懇求，再為治之未晚也。



論吐血衄血之原因及治法

《內經》〈厥論篇〉謂「陽明厥逆衄嘔血」，此陽明指胃腑而言也。蓋胃腑以熟腐水穀，傳送飲食為職，其中氣化，原以息息下行為順，乃有時不下行而上逆，胃中之血亦恆隨之上逆。其上逆之極，可將胃壁之膜排擠破裂，而成嘔血之證，或循陽明之經絡上行，而成衄血之證。是以《內經》謂「陽明厥逆衄嘔血也」。由此知，無論其證之或虛或實，或涼或熱，治之者，皆當以降胃之品為主，而降胃之最有力者，莫赭石若也，故愚治吐衄之證，方中皆重用赭石，再細審其胃氣不降之所以然，而各以相當之藥品輔之。茲爰將所用之方，詳列於下。

【平胃寒降湯】

治吐衄證脈象洪滑重按甚實者，此因熱而胃氣不降也。

生赭石（一兩軋細）、枳萇仁（一兩炒搗）、生杭芍（八錢）、嫩竹茹（三錢細末）、牛蒡子（三錢搗碎）、甘草（錢半）。

此拙著第三期吐衄門中寒降湯，而略有加減也。服後血仍不止者，可加生地黃一兩，三七細末三錢（分兩次，用頭煎、二煎之湯送服）。

吐衄之證，忌重用涼藥及藥炭強止其血。因吐衄之時，血不歸經，遽止以涼藥及藥炭，則經絡瘀塞，血止之後，轉成血痺虛勞之證，是以方中加生地黃一兩，即加三七之善止血兼善化瘀血者以輔之也。

【健胃溫降湯】

治吐衄證脈象虛濡遲弱，飲食停滯胃口，不能下行，此因涼而胃氣不降也。生赭石（八錢軋細）、生懷山藥（六錢）、白朮（四錢炒）、乾薑（三錢）、清半夏（三錢溫水淘淨礬味）、生杭芍（二錢）、厚朴（錢半）。此方原名溫降湯，茲則於其份量略有加減也。方中猶用芍藥者，防肝中所寄之相火不受乾薑之溫熱也。

吐衄之證因涼者極少，愚臨證四十餘年，僅遇兩童子，一因涼致胃氣不降吐血，一因涼致胃氣不降衄血，皆用溫降湯治癒，其詳案皆載原方之後，可參觀。

【瀉肝降胃湯】

治吐衄證左脈弦長有力，或肋下脹滿作疼，或頻作呃逆，此肝膽之氣火上衝胃腑，致胃氣不降而吐衄也。

生赭石（八錢搗細）、生杭芍（一兩）、生石決明（六錢搗細）、枳萸仁（四錢炒搗）、甘草（四錢）、龍膽草（二錢）淨青黛（二錢）。

此方因病之原因在膽火肝氣上衝，故重用芍藥、石決明及龍膽、青黛諸藥，以涼之、鎮之。至甘草多用至四錢者，取其能緩肝之急，兼以防諸寒涼之藥傷脾胃也。

【鎮衝降胃湯】

治吐衄證右脈弦長有力，時覺有氣起在下焦，上衝胃腑，飲食停滯不下，或頻作呃逆，此衝氣上衝，以致胃不降而吐衄也。

生赭石（一兩軋細）、生懷山藥（一兩）、生龍骨（八錢搗細）、生牡蠣（八錢搗細）、生杭芍（三錢）、甘草（二錢）、廣三七（細末二錢，分兩次用頭煎二煎之湯送服）。

方中龍骨、牡蠣，不但取其能斂衝，且又能鎮肝，因衝氣上衝之由，恆與肝氣有關係也。

【滋陰清降湯】

治吐衄證失血過多，陰分虧損，不能潛陽而作熱，不能納氣而作喘，甚或衝氣因虛上干，為呃逆、眩暈、咳嗽，心血因不能內榮，為怔忡、驚悸、不寐，脈象浮數重按無力者。

生赭石（八錢軋細）、生懷山藥（一兩）、生地黃（八錢）、生龍骨（六錢搗細）、生牡蠣（六錢搗細）、生杭芍（四錢）、甘草（二錢）、廣三七（細末二錢，分兩次用頭煎二煎之湯送服）。

比方即三期吐衄門中清降湯，加龍骨、牡蠣、地黃、三七也。原方所主之病，原與此方無異，而加此數味治此病尤有把握。此因臨證既多，屢次用之皆驗，故於原方有所增加也。

【保元清降湯】

治吐衄證血脫氣亦隨脫，言語若不接續，動則作喘，脈象浮弦，重按無力者。生赭石（一兩軋細）、野臺參（五錢）、生地黃（一兩）、生懷山藥（八錢）、淨萸肉（八錢）、生龍骨（六錢搗細）、生杭芍（四錢）、廣三七（細末三錢，分兩次用頭煎二煎之湯送服）。

此方曾載於第三期吐衄門，而茲則略有加減也。

【保元寒降湯】

治吐衄證血脫氣亦隨脫，喘促咳逆，心中煩熱，其脈上盛下虛者。

生赭石（一兩軋細）、野臺參（五錢）、生地黃（一兩）、知母（八錢）、淨萸肉（八錢）、生龍骨（六錢搗細）、生牡蠣（六錢搗細）、生杭芍（四錢）、廣三七（細末三錢搗，分兩次用頭煎二煎藥湯送服）。

此方亦載於三期吐衄門中，而茲則略有更改也。至於第三期所載此二方之原方，非不可用，宜彼宜此之間，細為斟酌可也。

上所列諸方，用之與病因相當，大抵皆能奏效，然病機之呈露多端，病因即隨之各異，臨證既久，所治癒吐衄之驗案，間有不用上列諸方者，今試舉數案以明之。

奉天警務處長王連波君夫人，患吐血證，來院診治。其脈微數，按之不實。其吐血之先，必連聲咳嗽，劇時即繼之以吐血。因思此證若先治癒其咳嗽，其吐血當自愈，遂用川貝八錢，煎取清湯四盅，調入生懷山藥細末一兩，煮作粥，分數次服之。一日連進二劑，咳嗽頓止。以後日進一劑，嗽愈吐血亦愈。隔旬日，夜中夢被人凌虐過甚，遂於夢中哭醒，病驟反復，因知其肝氣必遏鬱也，治以調肝、養肝兼鎮肝之藥，數劑無效，且夜中若作夢惱怒，其日吐血必劇。精思再四，恍悟平肝之藥，以桂為最要，單用之則失於熱；降胃之藥，以大黃為最要，單用之則失於寒，若二藥並用，則寒熱相濟，性歸和平，降胃平肝，兼顧無遺，必能奏效。遂用大黃、肉桂細末各一錢和勻，更用生赭石細末八錢煎湯送服，從此吐血遂愈，惡夢亦不復作矣。

繼又有濟南金姓少年，寓居奉天，其人身體強壯，驟得吐血證，其脈左右皆有力。遂變通上用之方，用生赭石細末六錢，與大黃、肉桂細末各一錢和勻，開水送服，其病立愈，後因用此方屢次見效，遂將此方登於三期《衷中參西錄》，名之為秘紅丹。至身形不甚壯實者，仍如前方服為妥。

又治滄州城東路莊子馬氏婦，咳血三年不愈，即延醫治愈，旋又反復。後愚診視其夜間多汗，遂先用生龍骨、生牡蠣、淨萸肉各一兩，以止其汗。連服兩劑，汗止而咳血亦愈。自此永不反復。繼有表弟張印權出外新歸，言患吐血證，初則旬日或浹辰吐血數口，浸至每日必吐，屢治無效。其脈近和平，微有芤象，亦治

以此方，三劑痊愈。後將此方傳於同邑醫友趙景山、張康亭，皆以之治癒咳血、吐血之久不愈者。後又將其方煎湯送服三七細末二錢，則奏效尤捷。因名其方為補絡補管湯，登於第三期吐衄門中。蓋咳血者，多因肺中絡破；吐血者，多因胃中血管破，其破裂之處，若久不愈，咳血、吐血之證亦必不愈，龍骨、牡蠣、莢肉皆善斂補其破裂之處，三七又善化瘀生新，使其破裂之處速愈，是以愈後不再反復也。若服藥後血仍不止者，可加生赭石細末五六錢，同煎服。

又治舊滄州北關趙姓，年過四旬，患吐血證，從前治癒，屢次反復，已歷三年，有年重於一年之勢。其脈濡而遲，氣息虛，常覺呼氣不能上達，且少腹間時覺有氣下墮，此胸中宗氣（亦名大氣）下陷也。《內經》謂宗氣積於胸中，以貫心脈而行呼吸，是宗氣不但能統攝氣分，並能主宰血分，因其下陷，則血分失其統攝，所以妄行也。遂投以拙擬升陷湯（方在三期四卷，係生箭耆六錢，知母四錢，桔梗、柴胡各錢半、升麻一錢），加生龍骨、生牡蠣各六錢。服兩劑後，氣息即順，少腹亦不下，遂將升麻減去，加生懷山藥一兩，又服數劑，其吐血證自此除根。

按：吐衄證最忌黃耆、升、柴、桔梗諸藥，恐其能助氣上升血亦隨之上升也。若確知病係宗氣下陷，可以放膽用之，然必佐以龍骨、牡蠣，以固血之本源，始無血隨氣升之虞也。

吐衄證之因宗氣下陷者極少，愚臨證四十餘年，僅遇趙姓一人，再四斟酌，投以升陷湯加龍骨、牡蠣治癒，然此方實不可輕試也。近津沽有張姓，年過三旬，患吐血證，醫者方中有柴胡二錢，服後遂大吐不止，倉猝迎愚診視，其脈弦長有力，心中發熱，知係胃氣因熱不降也，所攜藥囊中，有生赭石細末約兩餘，俾急用水送服強半，候約十二分鐘，覺心中和平，又送服其餘，其吐頓止，繼用平胃寒降湯調之，痊愈。是知同一吐血證也，有時用柴胡而愈，有時用柴胡幾至誤人性命，審證時豈可不細心哉。

至於婦女倒經之證，每至行經之期，其血不下行而上逆作吐衄者，宜治以四物湯去川芎，加懷牛膝、生赭石細末，先期連服數劑可愈，然其證亦間有因氣陷者，臨證時又宜細察。曾治一室女吐血，及一少婦衄血，皆係倒行經證，其脈皆微弱無力，氣短不足以息，少腹時有氣下墜，皆治以他止血之藥不效，後再三斟酌，皆投以升陷湯，先期連服，數日痊愈。總之，吐衄之證，大抵皆因熱而氣逆，其因涼氣逆者極少，即兼衝氣肝氣衝逆，亦皆挾熱，若至因氣下陷致吐衄者，不過千中之一二耳。

又天津北甯路材料科委員趙一清，年近三旬，病吐血，經醫治癒，而飲食之間若稍食硬物，或所食過飽，病即反覆，診其六脈和平，重按似有不足，知其脾胃消化弱，其胃中出血之處，所生肌肉猶未復原，是以被食物撐擠，因傷其處而復出血也。斯當健其脾胃，補其傷處，吐血之病庶可除根。為疏方用生山藥、赤

石脂各八錢，龍骨、牡蠣、淨莢肉各五錢，白朮、生明沒藥各三錢，天花粉、甘草各二錢。按此方加減，服之旬餘，病遂除根。

按：此方中重用石脂者，因治吐衄病，凡其大便不實者，可用之以代赭石降胃，蓋赭石能降胃而兼能通大便，赤石脂亦能降胃而轉能固大便，且其性善保護腸胃之膜，而有生肌之效，使胃膜因出血而傷者可速愈也。此物原是陶土，宜與茶壺即用此燒成，津沽藥房恒將石脂研細，水和捏作小餅，煤火煨之，是將陶土變為陶瓦矣，尚可以入藥乎？是以愚在天津，每用石脂，必開明生赤石脂，夫石脂亦分生熟，如此開方，實足貽笑於大雅也。

或問「吐血、衄血二證，方書多分治。吐血顯然出於胃，為胃氣逆上無疑。今遵《內經》『陽明厥逆衄嘔血』一語，二證皆統同論之，所用之方無少差別，《內經》之言果信而有征乎？」答曰「愚生平研究醫學，必有確實徵驗，然後筆之於書，即對於《內經》亦未敢輕信。猶憶少年時，在外祖家，有表兄劉慶甫，年弱冠，時患衄血證，始則數日一衄，繼則每日必衄，百藥不效。適其比鄰有少年病勞瘵者，常與同坐閒話，一日正在衄血之際，忽聞哭聲，知勞瘵者已死，陡然驚懼寒戰，其衄頓止，從此不再反復。夫恐則氣下，《本經》原有明文，其理實為人所共知。因驚懼氣下而衄止，其衄血之時，因氣逆可知矣。蓋吐血與衄血病狀不同而其病因則同也，治之者何事過為區別乎」。



或問「方書治吐衄之方甚多，今詳論吐衄治法，皆係自擬，豈治吐衄成方皆無可取乎」？答曰「非也。《金匱》治吐衄有瀉心湯，其方以大黃為主，直入陽明，以降胃氣，佐以黃芩，以清肺金之熱，俾其清肅之氣下行，以助陽明之降力，黃連以清心火之熱，俾其亢陽默化潛伏，以保少陰之真液，是瀉之適所以補之也。凡因熱氣逆吐衄者，至極危險之時用之，皆可立止。血止以後，然後細審其病因，徐為調補未晚也。然因方中重用大黃，吐衄者皆不敢輕服，則良方竟見埋沒矣。不知大黃與黃連並用，但能降胃，不能通腸，雖吐衄至身形極虛，服後斷無泄瀉下脫之弊，乃素遇吐衄證，曾開此方兩次，病家皆不敢服，遂不得已另擬平胃寒降湯代之，此所以委曲以行其救人之術也」。

又《金匱》有柏葉湯方，為治因寒氣逆以致吐血者之良方也，故其方中用乾薑、艾葉以暖胃，用馬通汁以降胃，然又慮薑、艾之辛熱，宜於脾胃，不宜於肝膽，恐服藥之後，肝膽所寄之相火妄動，故又用柏葉之善於鎮肝，且善於涼肝者以輔之，此所謂有節制之師，先自立於不敗之地，而後能克敵致勝也。至後世薛立齋謂，因寒吐血者，宜治以理中湯加當歸，但知暖胃，不知降胃，並不知鎮肝涼肝，其方遠遜於柏葉湯矣。然此時有喜服西藥，恆譏中藥為不潔，若雜以馬通汁，將益嫌其不潔矣，是以愚另擬健胃溫降湯以代之也。

近時醫者治吐衄，喜用濟生犀角地黃湯，然其方原治傷寒胃火熱盛以致吐血、衄血之方，無外感而吐衄者用之，未免失於寒涼，其血若因寒涼而驟止，轉成血

痺虛勞之病。至愚治寒溫吐衄者，亦偶用其方，然必以其方煎湯送服三七細末二錢，始不至血瘀為恙，若其脈左右皆洪實者，又宜加羚羊角二錢，以瀉肝膽之熱，則血始能止。

至葛可久之十灰散，經陳修園為之疏解，治吐衄者亦多用之。夫以藥炭止血，原為吐衄者所甚忌，猶幸其雜有大黃炭（方下注灰存性即是炭），其降胃開瘀之力猶存，為差強人意耳。其方遇吐衄之輕者，或亦能奏效，而愚於其方，實未嘗一用也。至於治吐衄便方，有用其吐衄之血作炭服者，有用髮髻（即剃下之短髮）作炭服者，此二種炭皆有化瘀生新之力，而善止血，勝於諸藥之炭但能止血而不能化瘀血以生新血者遠矣。

又方書有調血脫者，當先益其氣，宜治以獨參湯，然血脫須有分別，若其血自二便下脫，其脈且微弱無力者，獨參湯原可用，若血因吐衄而脫者，縱脈象微弱，亦不宜用。夫人身之陰陽原相維繫，即人身之氣血相維繫也。吐衄血者因陰血虧損，維繫無力，原有孤陽浮越之虞，而復用獨參湯以助其浮越，不但其氣易上奔（喻嘉言謂氣虛欲脫者，但服人參，轉令氣高不返），血亦將隨之上奔而復吐衄矣。是拙擬治吐衄方中，凡用參者，必重用赭石輔之，使其力下達也。

尋常服食之物，亦有善止血者，鮮藕汁、鮮萊菔汁是也。曾見有吐衄不止者，用鮮藕自然汁一大盅溫飲之（勿令熟），或鮮萊菔自然汁一大盅溫飲之，或二汁並飲之，皆可奏效。

有堂兄贊宸，年五旬，得吐血證，延醫治不效，脈象滑動，按之不實。時患年少，不敢輕於疏方，遂用鮮藕、鮮白茅根各四兩，切碎，煎湯兩大碗，徐徐當茶飲之，數日痊愈。自言未飲此湯時，心若虛懸無著，既飲之後，若以手按心還其本位，何其神妙如是哉！隔數日，又有鄰村劉姓少年患吐血證，其脈象有力，心中發熱，遂用前方，又加鮮小薊根四兩，如前煮湯飲之，亦愈。因名前方為二鮮飲，後方為三鮮飲，皆登於三期吐衄門中。

按：小薊名刺薊，俗名刺爾菜，一名青青菜，嫩時可以作羹，其葉長，微有絨毛，葉邊多刺，莖高尺許，開花紫而微藍，狀若小絨球，津沽藥房皆以之為大薊，實屬差誤。至大薊，鹽邑藥房中所鬻者，在本地名曲曲菜，狀若蒲公英而葉微縐，嫩時可生啖，味微苦，莖高於小薊數倍，開黃花，亦如蒲公英。津沽藥房轉以此為小薊，即以形象較之，亦可知其差誤。曾採其鮮者用之治吐衄，亦有效，然不如小薊之效驗異常耳。後遊漢皋，見有狀類小薊而其莖葉花皆大於小薊一倍，疑此係真大薊，未暇採用。後門生高如璧，在丹徒亦曾見此，採其鮮者以治吐衄極效，向愚述之，亦疑是真大薊。則葉如蒲公英而微縐者，非大薊矣。然此實猶在懸揣未定之中，今登諸報端，深望醫界博物君子能辨別大薊之真偽者，詳為指示也。

又按：凡大、小薊須皆用鮮者，若取其自然汁代開水飲之更佳。至藥房中之乾者，用之實無甚效驗。

近在津沽治吐衄，又恒有中西藥並用之時，因各大工廠中皆有專醫，若外醫開方煎服湯藥不便，恒予以生赭石細末一兩，均分作三包，又用醋酸鉛十分瓦之二，分加於三包之中，為一日之量，每服一包，開水送下。若脈象有力，心中發熱者，又恒於每包之中加芒硝六七分，以瀉心經之熱。連服兩三日，大抵皆能治癒。

至於咳血之證，上所錄醫案中或連帶論及，實非專為咳血發也。因咳血原出於肺，其詳細治法皆載於前第三卷肺病門中，茲不贅。

論治吐血、衄血不可但用涼藥及藥炭強止其血

嘗思治吐血、衄血者，止其吐衄非難，止其吐衄而不使轉生他病是為難耳。蓋凡吐衄之證，無論其為虛、為實、為涼（此證間有涼者）、為熱，約皆胃氣上逆（《內經》謂陽明厥逆衄血），或胃氣上逆更兼衝氣上衝，以致血不歸經，由吐衄而出也。治之者，或以為血熱妄行，而投以極涼之品；或以為黑能勝紅，而投以藥炒之炭。如此治法，原不難隨手奏效，使血立止，迨血止之後，初則有似發悶，繼則飲食減少，繼則發熱勞嗽。此無他，當其胃氣上逆，衝氣上衝之時，排擠其血離經妄行，其上焦、中焦血管盡為血液充塞，而驟以涼藥及藥炭止之，則血管充塞之血強半凝結其中，而不能流通，此所以血止之後，始則發悶減食，繼則發熱勞嗽也。此時若遇明醫理者，知其為血痹虛勞，而急投以《金匱》血痹虛勞門之大黃廬蟲丸，或陳大夫所傳仲景之百勞丸，以消除瘀血為主，而以補助氣血之藥輔之，可救十中之六七。然治此等證而能如此用藥者，生平實不多見也。至見其發悶而投以理氣之藥，見其食少而投以健胃之藥，見其發熱勞嗽而投以滋陰補肺之藥，如此治法百中實難愈一矣，而溯厥由來，何莫非但知用涼藥及用藥炭者階之厲也。然涼藥亦非不可用也，試觀仲景瀉心湯，為治吐血、衄血之主方，用黃連、黃芩以清熱，而必倍用大黃（原方芩、連各一兩，大黃二兩）以降胃破血，則上焦、中焦血管之血不受排擠，不患凝結，是以芩、連雖涼可用也。至於藥炭亦有可用者，如葛可久之十灰散，其中亦有大黃，且又燒之存性，不至過燒

為灰，止血之中，仍寓降胃破血之意也，其差強人意耳。愚臨證四十餘年，瀉心湯固常用之，而於十灰散實未嘗一用也。然嘗仿十灰散之意，獨用血餘燬之存性（將剃下短髮洗淨，鍋炒至融化，晾冷軋細過羅用之，《本經》髮髮即靠頭皮之髮），用之以治吐衄既善止血又能化瘀血、生新血，勝於十灰散遠矣。

至《金匱》之方，原宜遵用，亦不妨遵古方之義而為之變通，如瀉心湯方，若畏大黃之力稍猛，可去大黃，加三七以化瘀血、赭石以降胃鎮衝。曾擬方用黃芩、黃連各三錢，赭石六錢，煎湯送服三七細末二錢。若不用黃連，而用瓜蒌仁六錢代之，更佳。蓋黃連有澀性，終不若蒺藜仁能開蕩胸膈、清熱降胃，即以引血下行也。至欲用大黃廬蟲丸，而畏水蛭、乾漆之性甚烈，可仿其意，用生懷山藥二兩，山楂一兩，煎湯四茶杯，調以蔗糖，令其適口，為一日之量，每飲一杯，送服生雞內金末一錢，既補其虛，又化其瘀，且可以之當茶，久服自見功效。

或問「濟生犀角地黃湯，今之治吐衄者，奉為不祧之良方，其方原純係涼藥，將毋亦不可用乎」？答曰「犀角地黃湯，原治傷寒、溫病熱入陽明之府，其胃氣因熱上逆，血亦隨之上逆，不得不重用涼藥以清胃腑之熱，此治外感中吐衄之方，非治內傷吐衄之方也。然犀角之性原能降胃地黃之性亦能逐痹（《本經》謂逐血，然必生地黃作丸藥服之能有斯效，煎湯服則力減，若制為熟地黃則逐痹之力全無），若吐衄之證胃腑有實熱者，亦不妨暫用，迨血止之後，又宜急服活血化瘀之藥數劑，以善其後。至愚用此方，則仿陶節庵加當歸、紅花之意，將藥煎湯送服三七

細末二錢。究之，涼藥非不可用，然不可但用涼藥，而不知所以駕馭之耳。上論吐血治法，不過其約略耳，至於咳血治法，又與此不同，三期第二卷論吐血、衄血、咳血治法甚詳，宜參觀。

論吐血、衄血證間有因寒者

《內經》〈厥論篇〉謂「陽明厥逆衄嘔血」，所謂陽明者，指胃腑而言也，所謂厥逆者，指胃腑之所上行而言也。蓋胃以消化飲食，傳送下行為職，是以胃氣以息息下行為順。設或上行則為厥逆，胃氣厥逆，可至衄血、嘔血，因血隨胃氣上行也，然胃氣厥逆因熱者固多，因寒者亦間有之。歲在壬寅，曾訓蒙於邑之北境劉仁村，愚之外祖家也。有學生劉玉良者，年十三歲，一日之間衄血四次。診其脈甚和平，詢其心中不覺涼熱，因思吐衄之證熱者居多，且以童子少陽之體，時又當夏令，遂略用清涼止血之品，衄益甚，脈象亦現微弱，知其胃氣因寒不降，轉迫血上逆而為衄也。投以拙擬溫降湯，方見前論吐血、衄血治法中，一劑即愈。隔數日又有他校學生，年十四歲，吐血數日不愈，其吐之時，多由於咳嗽，診其脈，甚遲濡，右關尤甚，疑其脾胃虛寒，不能運化飲食，詢之果然。蓋吐血之證多由於胃氣不降，飲食不能運化，胃氣即不能下降。咳嗽之證，多由於痰飲入肺，飲食遲於運化，又必多生痰飲，因痰飲而生咳嗽，因咳嗽而氣之不降者，更轉而上逆，此吐血之所由來也，亦投以溫降湯，一劑血止，接服數劑，飲食運化，咳嗽亦愈。

近在瀋陽醫學研究會論及此事，會友李進修謂「從前小東關有老醫徐敬亭者，曾用理中湯治癒歷久不愈之吐血證」，是吐血誠有因寒者之明徵也。然徐君但用理中湯以暖胃補胃，而不知用赭石、半夏佐之以降胃氣，是處方猶未盡善也。特



是藥房製藥，多不如法，雖清半夏中亦有礬，以治吐衄及嘔吐，必須將礬味用微溫之水淘淨。淘時，必於方中原定之分量外多加數錢，以補其淘去礬味所減之分量及藥力。

又薛立齋原有血因寒而吐者，治用理中湯加當歸之說。特其因寒致吐血之理，未嘗說明，是以後世間有駁其說者。由斯知著醫書者宜將病之原因仔細發透，俾讀其書者易於會悟，不至生疑為善。

證在疑是之間，即名醫亦未必審證無差，至疏方投之仍無甚閃失者，實賴方中用意周密、佐伍得宜也。如此因寒吐衄之證，若果審證不差，上列三方服之皆可奏效。若或審證有誤，服拙擬之溫降湯方，雖不能愈，吐衄猶或不至加劇。若服彼二方，即難免於危險矣。愚非自矜制方之善，因此事於行醫之道甚有關係，則疏方之始不得不審思熟慮也。

不惟吐衄之證有因寒者，即便血之證亦有因寒者，特其證皆不多見耳。鄰村高邊務高某，年四十餘，小便下血久不愈，其脈微細而遲，身體虛弱，惡寒，飲食減少，知其脾胃虛寒，中氣下陷，黃坤載所謂「血之亡於便溺者，太陰不升也」，為疏方乾薑、於朮各四錢，生山藥、熟地黃各六錢，烏附子、炙甘草各三錢。煎服一劑血即見少，連服十餘劑痊愈。此方中不用肉桂者，恐其動血分也。

論衝氣上衝之病因病狀病脈及治法

衝氣上衝之病甚多，而醫者識其病者甚少，即或能識此病，亦多不能洞悉其病因，而施以相當之治法。衝者，奇經八脈之一，其脈在胞室之兩旁，與任脈相連，為腎臟之輔弼，氣化相通，是以腎虛之人，衝氣多不能收斂，而有上衝之弊。況衝脈之上係原隸陽明胃府，因衝氣上衝，胃府之氣亦失其息息下行之常（胃氣以息息下行為常），或亦轉而上逆，阻塞飲食，不能下行，多化痰涎，因腹中膨悶、噦氣、呃逆連連不止，甚則兩肋疼脹、頭目眩暈，其脈則弦硬而長，乃肝脈之現象也。蓋衝氣上衝之證，固由於腎臟之虛，亦多由肝氣恣橫，素性多怒之人，其肝氣之暴發，更助衝胃之氣上逆，故脈之現象如此，治此證者，宜以斂衝、鎮衝為主，而以降胃、平肝之藥佐之。其脈象數而覺熱者，宜再輔以滋陰退熱之品。愚生平治癒此證已不勝紀，近在滄州連治癒數人，爰將治癒之案詳列於下，以備參觀。

滄州中學學生安瑰奇，年十八九，胸脅滿悶，飲食減少，時作噦逆，腹中漉漉有聲，蓋氣衝痰涎作響也，大便乾燥，脈象弦長有力。為疏方，用生龍骨、牡蠣、代赭石各八錢，生山藥、生芡實各六錢，半夏、生杭芍各四錢，芒硝、蘇子各二錢，厚朴、甘草各錢半。一劑後，脈即柔和，按方略有加減，數劑痊愈。陳修園謂龍骨、牡蠣為治痰之神品，然泛用之多不見效，惟以治此證之痰，則效驗非常，因此等痰涎，原因衝氣上衝而生，龍骨、牡蠣能鎮斂衝氣，自能引導痰涎

下行也。蓋修園原謂其能導引逆上之火、氾濫之水，下歸其宅，故能治痰。夫火逆上，水氾濫，其中原有衝氣上衝也。

又天津南馬廠所住陸軍營長趙松如，因有衝氣上衝病，來滄求為診治，自言患此病已三年，百方調治，毫無效驗。其病脈情狀大略與前案同，惟無痰聲漉漉，而尺脈稍弱。遂於前方去芒硝，加柏子仁、枸杞子各五錢，連服數劑痊愈。

又滄州一叟，年七十四歲，性浮躁，因常常忿怒，致衝氣上衝，劇時覺有氣自下上衝，杜塞咽喉，有危在頃刻之勢，其脈左右皆弦硬異常。為其年高，遂於前第二方中加野臺參三錢，一劑見輕。又服一劑，衝氣遂不上衝，又服數劑以善其後。為治此證多用第二方加減，因名為降胃鎮衝湯。

論火不歸原治法

方書謂下焦之火生於命門，名為陰分之火，又謂之龍雷之火，實膚淺之論也。下焦之火為先天之元陽，生於氣海之元氣，蓋就其能撐持全身論，則為元氣；就其能溫暖全身論，則為元陽，此氣海之元陽，為人生命之本源，無論陰分、陽分之火，皆於此肇基。氣海，純係脂膜護繞搏結而成，其脂膜旁出一條，與脊骨自下數第七節相連。夾其七節兩旁，各有一穴，《內經》謂七節之旁中有小心也，而氣海之元陽由此透入脊中，因元陽為生命之本，故於元陽透脊之處謂之命門。由斯觀之，命門之實用，不過為氣海司管鑰之職，下焦之火，仍當屬於氣海之元陽，論下焦之火上竄不歸原，亦氣海元陽之浮越也。然其病渾名火不歸原，其病因原有數端，治法各有所宜，爰詳細臚列於下，以質諸醫界同人。

有氣海元氣虛損，不能固攝下焦氣化，致元陽因之浮越者，其脈尺弱寸強，浮大無根，其為病，或頭目眩暈，或面紅耳熱，或心熱怔忡，或氣粗息賁，宜治以淨萸肉、生山藥各一兩，人參、玄參、代赭石、生龍骨、生牡蠣各五錢。心中發熱者，酌加生地黃、天冬各數錢，補而斂之，鎮而安之，元陽自歸其宅也。方中用赭石者，因人參雖饒有溫補之性，而力多上行，與赭石並用，則力專下注，且赭石重墜之性，又善佐龍骨、牡蠣以潛陽也。

有下焦真陰虛損，元陽無所繫戀而浮越者，其脈象多弦數，或重按無力。其證時作灼熱，或口苦舌乾，或喘嗽連連，宜用生山藥、熟地黃各一兩，玄參、生

龍骨、生牡蠣、生龜板、甘枸杞各五錢，生杭芍三錢，生雞內金、甘草各錢半。此所謂壯水之主，以制陽光也。

若其下焦陰分既虛，而陽分亦微有不足者，其在上焦常熱，下焦間有覺涼之時，宜治以《金匱》崔氏八味丸，以生地易熟地（原方乾地黃，即是藥局中生地），更宜將茯苓、澤瀉份量減三分之二，將丸劑一料，分作湯藥八劑服之。

有氣海元陽大虛，其下焦又積有沉寒錮冷，逼迫元陽如火之將滅，而其焰轉上竄者，其脈弦遲細弱，或兩寸浮分似有力。其為證，心中煩躁不安，上焦時作灼熱，而其下焦轉覺涼甚，或常作泄瀉，宜用烏附子、人參、生山藥各五錢，淨萸肉、胡桃肉各四錢，赭石、生杭芍、懷牛膝各三錢，雲苓片、甘草各錢半。泄瀉者宜去赭石，此方書所謂引火歸原之法也。方中用芍藥者，非以解上焦之熱，以其與參、附並用，大能收斂元陽，下歸其宅。然引火歸原之法，非可概用於火不歸原之證，必遇此等證與脈，然後可用引火歸原之法，又必須將藥晾至微溫，然後服之，方與上焦之燥熱無礙。

有因衝氣上衝兼胃氣上逆，致氣海元陽隨之浮越者，其脈多弦長有力，右部尤甚，李士材脈訣歌括所謂直上直下也。其證覺胸中滿悶煩熱，時作呃逆，多吐痰涎，劇者覺痰火與上衝之氣杜塞咽喉，幾不能息，宜治以拙擬降胃鎮衝湯（在前論衝氣上衝治法中），俾衝、胃之氣下降，而諸病自愈矣。

有因用心過度，心中生熱，牽動少陽相火（即膽肝中所寄之相火），上越且外越者，其脈寸關皆有力，多兼滑象，或脈搏略數。其為病，心中煩躁不安，多生疑惑，或多忿怒，或覺熱起脅下，散於周身，治用生懷山藥細末六七錢，煮作粥，晨間送服芒硝三錢，晚送服西藥臭剝兩瓦。蓋芒硝鹹寒，善解心經之熱，以開心下熱痰（此證心下多有熱痰）。臭剝性亦鹹寒，能解心經之熱，又善制相火妄動。至送以山藥粥者，因鹹寒之藥與脾胃不宜，且能耗人津液，而山藥則善於養脾胃、滋津液，用之送服硝、剝，取其相濟以成功，猶《金匱》之硝石礬石散送以大麥粥也。

有因心肺脾胃之陽甚虛，致寒飲停於中焦，且溢於膈上，逼迫心肺脾胃之陽上越兼外越者，其脈多弦遲細弱，六部皆然，又間有浮大而軟，按之豁然者。其現證，或目眩耳聾，或周身發熱，或覺短氣，或咳喘，或心中發熱，思食鮮果，而食後轉覺心中脹滿病加劇者，宜用拙擬理飲湯（方見本卷首篇中）。服數劑後，心中不覺熱、轉覺涼者，去芍藥。或覺氣不足者，加生箭耆三錢。

按：此證如此治法，即方書所謂用溫燥健補脾胃之藥可以制伏相火，不知其所伏者非相火，實係溫燥之藥能掃除寒飲，而心肺脾胃之陽自安其宅也。

上所列火不歸原之證，其病因雖不同，而皆係內傷，至外感之證，亦有火不歸原者，傷寒、溫病中之戴陽證是也。其證之現狀，面赤、氣粗、煩躁不安，脈象雖大，按之無力，又多寸盛尺虛，此乃下焦虛寒，孤陽上越之危候，頗類寒溫

中陰極似陽證。然陰極似陽，乃內外異致，戴陽證乃上下異致也，宜用《傷寒論》通脈四逆湯，加蔥、加人參治之（原方原謂面赤者加蔥，面赤即戴陽證）。

特是戴陽之證不一，使果若少陰脈之沉細，或其脈非沉細而按之指下豁然毫無根柢，且至數不數者，方可用通脈四逆湯方。若脈沉細而數或浮大而數者，其方即斷不可用。曾治手表兄王瑞亭，年四十餘，身形素虛，傷寒四五日間，延為診視，其脈關前洪滑，兩尺無力，為開拙擬仙露湯，因其尺弱，囑其將藥徐徐飲下，一次只溫飲一大口，防其寒涼侵下焦也。病家忽愚所囑，竟頓飲之，遂致滑瀉數次，多帶冷沫，上焦益覺煩躁，鼻如煙熏，面如火炙，其關前脈大於從前一倍，數至七至，知其已成戴陽之證，急用野臺參一兩，煎湯八分茶盅，兌童便半盅（須用五歲以下童子便），將藥碗置涼水盆中，候冷頓飲之。又急用知母、玄參、生地各一兩，煎湯一大碗候用。自服參後，屢診其脈，過半點鐘，脈象漸漸收斂，脈搏似又加數，遂急用候服之藥燉極熱，徐徐飲下，一次只飲藥一口，閱兩點鐘盡劑，周身微汗而愈。

按：此證上焦原有燥熱，因初次涼藥頓服，通過病所，直達下焦，上焦燥熱仍留。迨下焦滑瀉，元陽上浮，益助上焦之熱，現種種熱象，脈數七至。此時不但薑、附分毫不敢用，即單用人參，上焦之燥熱亦必格拒不受。故以童便之性下趨者佐之，又復將藥候至極涼頓服下。迨遲之有傾，脈象收斂，至數加數，是下焦得參溫補之力而元陽收回，其上焦因參反激之力而燥熱益增也，故又急用大涼

大潤之藥，乘熱徐徐飲之，以清上焦之燥熱，而不使其寒涼之性復侵下焦，此於萬難用藥之際，仍欲用藥息息吻合，實亦費盡躊躇矣。上所列火不歸原之治法共七則，已略舉其大凡矣。



虛勞溫病皆忌橘紅說

半夏、橘紅皆為利痰之藥，然宜於濕寒之痰，不宜於燥熱之痰，至陰虛生熱有痰，外感溫熱有痰，尤所當忌。究之伍藥得宜，半夏或猶可用，是以《傷寒論》竹葉石膏湯、《金匱》麥門冬湯皆用之，至橘紅則無論伍以何藥，皆不宜用。試略舉數案於下以明之。

本邑於姓媪，勞熱喘嗽，醫治數月，病益加劇，不能起床，脈搏近七至，心中熱而且乾，喘嗽連連，勢極危險，所服之方，積三十餘紙，曾經六七醫生之手，而方中皆有橘紅，其餘若玄參、沙參、枸杞、天冬、貝母、牛蒡、生熟地黃諸藥，大致皆對證，而其心中若是之熱而乾者，顯係橘紅之弊也。愚投以生懷山藥一兩，玄參、沙參、枸杞、龍眼肉、熟地黃各五錢，川貝、甘草各二錢，生雞內金錢半，煎服一劑，即不覺乾，即其方略為加減，又服十餘劑，痊愈。

又治奉天商業學校校長李葆平，得風溫證，發熱、頭疼、咳嗽，延醫服藥一劑，頭疼益劇，熱嗽亦不少減。其脈浮洪而長，知其陽明經府皆熱也。視所服方，有薄荷、連翹諸藥以解表，知母、玄參諸藥以清裡，而雜以橘紅三錢，諸藥之功盡為橘紅所掩矣。為即原方去橘紅，加生石膏一兩，一劑而愈。

又治滄州益盛鐵工廠翻沙工人孫連瑞，肺臟受風，咳嗽吐痰，醫者投以散風利痰之劑，中有毛橘紅二錢，服後即大口吐血，咳嗽益甚，其脈浮而微數，右部寸關皆有力，投以《傷寒論》麻杏甘石湯，方中生石膏用一兩，麻黃用一錢，煎

湯送服早三七細末二錢。一劑血止。又去三七，加丹參三錢，再服一劑，痰嗽亦愈。方中加丹參者，恐其經絡中留有瘀血，釀成異日虛勞之證，故加丹參以化之。

統觀以上三案，橘紅為虛勞溫病之禁藥，不彰彰可考哉！而醫者習慣用之，既不能研究其性於平素，至用之病勢增進，仍不知為誤用橘紅所致，不將夢夢終身哉！喻南昌曰「彼病未除，我心先瘁」，是誠仁人之言，凡我醫界同人，倘其不惜腦力心血，以精研藥性於居恒，更審機察變於臨證，救人之命即以造己之福，豈不美哉。

論治疔宜重用大黃（附：大黃掃毒湯）

瘡瘍以疔毒為最緊要，因其毒發於臟腑，非僅在於經絡，其脈多見沉緊。緊者毒也，緊在沉部，其毒在內可知也。至其重者，發於鳩尾穴處，名為半日疔，言半日之間即有關於人性命也。若係此種疔毒，當於未發現之前，其人或心中怔忡，或鳩尾處隱隱作疼，或其處若發炎熱，似有漫腫形跡，其脈象見沉緊者，即宜預防鳩尾穴處生疔，而投以大劑解毒清血之品。其大便實者，用大黃雜於解毒藥中下之，其疔即可暗消於無形。此等疔毒，若待其發出始為療治，恒有不及治者矣。

至若他處生疔，原不必如此預防，而用他藥治之不效者，亦宜重用大黃降下其毒。憶愚少時，見同里患疔者二人，一起於腦後，二日死，一起於手三里穴，三日死。彼時愚已為人疏方治病，而聲名未孚於鄉里，病家以為年少無閱歷，不相延也。後愚堂侄女於口角生疔，疼痛異常，心中忙亂，投以清熱解毒藥不效，脈象沉緊，大便三日未行，恍悟寒溫之證，若脈象沉洪者，可用藥下之，以其熱在裡也。今脈象沉緊，夫緊為有毒（非若傷寒之緊脈為寒也），緊而且沉，其毒在裡可知。律以寒溫脈之沉洪者可下其熱，則疔毒脈之沉緊者當亦可下其毒也，況其大便三日未行乎。遂為疏方大黃、天花粉各一兩，皂刺四錢，穿山甲、乳香、沒藥（皆不去油），各三錢，薄荷葉一錢，全蜈蚣三大條。煎服一劑，大便通下，疼減心安，遂去大黃，又服一劑痊愈。

按：用大黃通其大便，不必其大便多日未行，凡脈象沉緊，其大便不滑瀉者皆可用。若身體弱者，大黃可以斟酌少用。愚用此方救人多矣，因用之屢建奇效，遂名之為大黃掃毒湯。

友人朱鉢文傳一治療方，大黃、甘草各一兩，生牡蠣六錢，瓜蒌仁四十粒搗碎，疔在上者，川芎三錢作引，在兩臂者，桂枝尖三錢作引，在下者，懷牛膝三錢作引，煎服立愈。身壯實者，大黃可斟酌多用，此亦重用大黃，是以奏效甚捷也。

又第一卷答陳董塵書篇中有刺疔法，宜參觀。

論 治 癩

癩之為證，方書罕載，愚初亦以為猶若疥癬不必注意也。自戊午來奉天，診病於立達醫院，遇癩證之劇者若干，有患證數年，費藥資甚巨，不能治癒者，經愚手，皆服藥數劑痊愈，後有錦州縣署傳達處戎寶亭患此證，在其本地服藥無效，來奉求為診治，服藥六劑即愈，隔三年，其證陡然反復。先起自面上，狀若頑癬，搔破則流黃水，其未破之處，皮膚片片脫落，奇癢難熬，歌哭萬狀。在其本處服藥十餘日，分毫無效，復來奉求為診治，其脈象洪實，自言心中煩躁異常，夜間尤甚，膚愈癢而心愈躁，徹夜不眠，若再不愈，實難支援，遂為疏方用蛇退四條，蟬退、僵蠶、全蠍、甘草各二錢，黃連、防風和三錢，天花粉六錢，大楓子十二粒，連皮搗碎。為其脈洪心躁，又為加生石膏細末兩半。煎湯兩茶盅，分兩次溫飲下，連服三劑，面上流黃水處皆結痂，其有舊結之痂皆脫落，癢癢煩躁皆愈強半，脈之洪實亦減半，遂去石膏，加龍膽草三錢，服一劑，從前周身之似有似無者，其癩亦皆發出作瘙癢，仍按原方連服數劑，痊愈，愈後病人心甚感激。夫先賢伯牛之疾，自古先儒傳說謂是癩病，素嘗疑之，今乃知癩之為病，誠與性命有關也。至方中之藥，諸藥皆可因證加減，或用或不用，而蛇退則在所必需，以其既善解毒（以毒攻毒），又善去風，且有以皮達皮之妙也。若畏大楓子有毒，不欲服者，減去此味亦可。

駁方書貴陽抑陰論

嘗思一陰一陽，互為之根，天地之氣化也。人稟天地之氣化以生，即人身各具一小天地，其氣化何獨不然，是以人之全身，陰陽互相維繫，上焦之陽藏於心中血，中焦之陽函於胃液，下焦之陽存於腎水，凡心血、胃液、腎水皆陰也。充類言之，凡全身津液脂膏脈腺存在之處，即元陽留蓄之處。陽無陰則飛越，陰無陽則凝滯，陽盛於陰則熱，陰盛於陽則冷，由斯知陰陽偏盛則人病，陰陽平均則人安，陰陽相維則人生，陰陽相離則人死。彼為貴陽抑陰之論者，竟謂陽一分未盡則人不死，陰一分未盡則人不仙，斯何異夢中說夢也。然此則論未病之時，陰陽關於人身之緊要，原無軒也。若論已病，又恆陽常有餘，陰常不足（朱丹溪曾有此論）。醫者當調其陰陽，使之歸於和平，或滋陰以化陽，或瀉陽以保陰，其宜如此治者，又恆居十之八九。倘曰不然，試即諸病徵之。

病有內傷外感之殊，而外感實居三分之二，今先以外感言之，傷寒、溫病、疫病皆外感也，而傷寒中於陰經，宜用熱藥者，百中無二三也；溫病則純乎溫熱，已無他議；疫病雖間有寒疫，亦百中之一二也。他如或瘧，或疹，或痧證，或霍亂，亦皆熱者居多，而暑暈之病更無論矣。

試再以內傷言之，內傷之病，虛勞者居其半，而勞字從火，其人大抵皆陰虛陽盛，究之亦非真陽盛，乃陰獨虛致陽偏盛耳。他如或吐衄，或淋痢，或肺病、喉病、眼疾，或黃膽，或水病、腫脹、二便不利，或嗽，或喘，或各種瘡毒，以

上諸證，已為內傷之大凡，而陽盛陰虛者實為十之八九也。世之業醫者，能無於臨證之際，以急急保其真陰為先務乎？即其病真屬陽虛，當用補陽之藥者，亦宜少佐以滋陰之品，蓋上焦陰分不虛而後可受參、耆，下焦陰分不虛而後可受桂、附也。

此稿甫成，適有客至，閱一過而問曰「醫家貴陽抑陰之說誠為差謬，原可直斥其非。至陰一分未盡不仙之說，亦並斥之，而仙家有號紫陽，號純陽者，又作何解乎？」答曰「所謂仙者，乃凝煉其神明，使之終不磨滅也。《內經》謂『兩精相搏謂之神』，道經謂『煉精化氣，煉氣化神』，所謂精者，果陰也陽也？蓋仙家修成內丹，神明洞徹，如日麗中天，光景長新，而自號為紫陽、純陽者，欲取法乎懸象也。然日為太陽，在地為火，火之燃燒，心賴氧氣（火非氧氣不著），火之上炎，具有氫氣（爐心有氫氣），氫氧相合，即為水素。火中既含有真水，火原非純陽也，且日於卦為離，離之象，外陽而內陰，是以日之體外明而內暗，其暗處猶火之有燃燒料也。更徵之日月相望，月若正對日之暗處，其光明即立減，由斯知日中含有真陰，日亦非純陽也。況天干中之甲乙，皆為東方之生氣，甲為陽而乙為陰，人之所知也。乃仙家內丹修成之後，不曰太甲金丹，而曰太乙金丹者，因道書不為女子說法，多為男子說法。若為女子說法，自當名為太甲金丹，陰資於陽也；為多為男子說法，則必需乎太乙金丹，陽資於陰也。究之，仍不外陰陽互根之理也，蓋自太極朕兆以來，兩儀攸分，而少陰、少陽即互涵於太陽、

太陰之中（太陽中有少陰，太陰中有少陽）。陰陽互根，即陰陽互生，生天地此理，生人物此理，醫學、仙學亦莫不本乎此理。彼謂陰一分未盡則人不仙者，亦知仙家所謂太乙金丹者作何解乎？愚向曾論學醫者當兼用靜坐之功，以悟哲學，是以今論醫學而兼及仙學，仙學亦哲學也」。



治虛勞證宜慎防汗脫說

人身之汗，猶天地之有雨也。天地陰陽和而後雨，人身亦陰陽和而後汗。然雨不可過，過雨則田禾淹沒，汗亦不可過，過汗則身體虛弱。是以微汗之解肌者，可以和營衛、去灼熱、散外感、通經絡、消腫脹、利小便、排泄惡濁外出。汗之為用亦廣矣。若大汗淋漓，又或因之亡陽，因之亡陰，甚或陰陽俱亡，脫其元氣，種種危機更伏於汗之中矣，而在陰虛勞熱者，為尤甚。虛勞之證，有易出汗者，其人外衛氣虛，一經發熱汗即隨熱外泄，治之者，宜於滋補藥中，加生龍骨、牡蠣、山萸肉以斂其汗。有分毫不出汗者，其人肌膚乾澀，津液枯短，陰分虛甚，不能應陽升而化汗，其灼熱之時，肌膚之乾澀益甚，亦宜少加龍骨、牡蠣、萸肉諸藥，防其出汗。何者？蓋因其汗蓄久不出，服藥之後，陰分滋長，能與陽分洽浹，其人恒突然汗出，若其為解肌之微汗，病或因之減輕，若為淋漓之大汗，病必因之加重，甚或至於不治。是以治此等證者，皆宜防其出汗。其服藥至脈有起色時，尤宜謹防，可預購淨萸肉二兩，生龍骨、生牡蠣各一兩備用。其人將汗時，必先有煩躁之意，或周身兼覺發熱，即速將所備之藥煎湯兩盅，先溫服一盅，服後汗猶不止者，再溫服一盅，即出汗亦必不至虛脫也。至其人或因泄瀉日久致虛者，若用藥將其大便補住後，其臟腑之氣化不復下溜，即有轉而上升之機，此時亦宜預防其出汗，而購藥以備之，或更於所服藥中兼用斂汗之品。

答翁義方問呃逆氣鬱治法

詳觀一百一十一號（紹興醫藥學星期報）所登之案，其呃逆終不愈者，以其虛而兼鬱也。然觀其飽時加重，饑時見輕，知病因之由於鬱者多，由於虛者少。若能令其分毫不鬱，其呃當止。鬱開呃止，氣化流通，雖有所虛，自能漸漸復原。特是理虛中之鬱最為難事，必所用之藥分毫不傷氣化，俾其鬱開得一分，其氣化自能復原一分，始克有效。拙著《衷中參西錄》載有衛生防疫寶丹（方詳本期第六卷論霍亂治法後），原係治霍亂急證之方，無論其證因涼因熱，皆屢試屢驗。後值瀋陽趙海珊營長之兄峻峰，得溫病甚劇，昇至院中求為診治，數日就愈，忽作呃逆，晝夜不止，服藥無效。因思衛生防疫寶丹，最善行氣理鬱，俾一次服五十粒，呃逆頓止。又數日有奉天督署衛隊旅陳姓軍人患呃逆證，旬日不止，眠食俱廢，旅中醫官屢次用藥無效，辭令回家靜養，因來院中求為治療，精神疲憊，幾不能支。亦治以衛生防疫寶丹，俾服八十粒，亦一次即愈。由斯知衛生防疫寶丹，治呃逆確有把握，無論其為虛、為鬱，用之皆可奏效也。蓋方中冰片、薄荷冰為透竅通氣之妙藥，而細辛善降逆氣，白芷善達鬱氣，硃砂能鎮衝氣之衝逆，甘草能緩肝氣之忿激，藥非為呃逆專方，而無一味非治呃逆必需之品，是以投之皆效也。若其人下元虛甚者，可濃煎生山藥汁送服。其挾熱者，白芍、麥冬煎湯送服。其挾寒者，乾薑、厚朴煎湯送服。愚用之數十次，未有不隨手奏效者。若倉猝不暇作丸藥，可為末服之。

論治癩瘋

癩瘋最為難治之證，因其根蒂最深（論者謂此病得於先天未降生之時），故不易治耳。愚平素對於此證，有單用磨刀水治癒者，有單用熊膽治癒者，有單用蘆薈治癒者，有用磁朱丸加赭石治癒者，有日用西藥臭素加里、抱水格魯拉爾諸藥強制其腦筋使不暴發，而徐以健脾利痰清火鎮驚之藥治癒者。然如此治法，效者固多，不效者亦恆有之，仍覺對於此證未有把握。後治奉天小西邊門外王氏婦，年近三旬，得癩瘋證，醫治年餘不愈，浸至每日必發，且病勢較重。其證甫發時作狂笑，繼則肢體抽掣，昏不知人，脈象滑實，關前尤甚，知其痰火充盛，上並於心，神不守舍，故作狂笑，痰火上並不已，迫激腦筋，失其所司，故肢體抽掣，失其知覺也。先投以拙擬蕩痰湯（方在三期三卷，係生赭石細末二兩，大黃一兩，朴硝六錢，清半夏、鬱金各三錢），間日一劑。三劑後，病勢稍輕，遂改用丸藥，硫化鉛、生赭石、芒硝各二兩，朱砂、青黛、白礬各一兩，黃丹五錢，共為細末，復用生懷山藥四兩為細末，焙熟，調和諸藥中，煉蜜為丸，二錢重。當空心時，開水送服一丸，日兩次，服至百丸痊愈。

又治奉天女師範劉姓學生，素患癩瘋，愚曾用羚羊角加清火、理痰、鎮肝之藥治癒。隔二年，證又反復，再投以原方不效，亦與以此丸，服盡六十九丸痊愈。又治一瀋陽縣鄉間童子，年七八歲夜間睡時騷擾不安，似有抽掣之狀，此亦癩風也，亦治以此丸，服至四十九丸痊愈。

此丸不但治癩風，又善治神經之病，奉天陸軍軍官趙嘏齋，年五十許，數年頭迷心亂，精神恍惚，不由自主，屢次醫治不愈，亦治以此丸，惟方中白礬改為礬砂，仍用一兩，亦服至百丸痊愈。因此丸屢用皆效，遂名此丸為愈癩丸，而以礬砂易白礬者，名為息神丸。

【附制硫化鉛法】

用真黑鉛、硫黃細末各一斤。先將鉛入鐵鍋中熔化，即將硫黃末四五兩撒在鉛上，硫黃即發焰，急用鐵鏟拌炒，所熔之鉛即結成砂子。其有未盡結者，又須將硫黃末接續撒其上，勿令火熄，仍不住拌化之，鉛盡結成砂子為度。待晾冷，所結砂子色若鉛灰，入藥鉢細研為粉，去其研之成餅者，所餘之粉用芒硝半斤，分三次沖水，將其粉煮過三次，然後入藥。

論癲狂失心之原因及治法

人之元神在腦，識神在心，無病之人識神與元神息息相通，是以能獨照庶務，鑒別是非，而毫無錯謬。乃有時元神、識神相通之路有所隔闕，其人之神明艱險失其所用，恒至顛倒是非，狂妄背戾，而汨沒其原來之知覺，此何故也？蓋腦中之元神，體也，心中識神，用也。人欲用其神明，則自腦達心；不用其神明，則仍由心歸腦。若其心腦之間有所隔闕，則欲用其神明，而其神明不能由腦達心，是以神明頓失其所司，而究其隔闕者果為何物，則無非痰涎凝滯而已。

蓋人之神明屬陽而性熱，凡其人心中有不釋然，或憂思，或忿怒，或用心過度，其神明常存於心中，必致其心中生熱，灼耗水飲，而為膠痰，其甚或成頑痰，此痰隨心血上行，最易凝滯於心腦相通之路。其凝滯之甚者，元神與識神即被其隔闕而不相通矣。

是以愚治此證，其脈甚洪實者，恒投以大劑承氣湯，而重用赭石輔之，大黃可用至一兩，生赭石可用至二兩，名之為蕩痰湯。其證極重者，又恒用所煎湯藥送服甘遂細末一錢，名之為蕩痰加甘遂湯。其方皆載於第三期三卷，茲不復詳論。惟近在天津，治河東李公樓劉姓女子，得失心病，然有輕時，每逢大便乾燥時則加劇，遂俾用生赭石細末，每服三錢，日兩次，連服月餘，大便之乾燥除，而病亦遂愈矣。誠以赭石重墜之性，能引其隔闕元神、識神之痰涎下行也。

又愚在籍時，曾治一室女得失心病甚劇，不知服藥，其家人又不欲強灌之，遂俾用以朴硝當鹽，置於其所日用飲食中，月餘其病亦愈。蓋朴硝味鹹性寒，原為心經對宮之藥，故大能清心經之熱，而其開通消化之力，又善清頑痰、膠痰，是以服之亦立見功效也，因其方簡便易用，遂載於三期書中。後醫界同人亦用此方有效，致書相告者數處焉，由斯觀之，若遇癲狂失心之劇者，又不妨兩方並作一方用。

特是上所論者，皆癲狂失心之實證也。有其人上盛下虛，其下焦之真陰真陽不相維繫，又加肝風內動為引，陡然痰火上奔，致迷亂其本性者，其治法詳於三期三卷中，且附載有治癒之案，可參觀也。

論革脈之形狀及治法

革脈最為病脈中之險脈，而人多忽之，以其不知革脈之真象，即知之，亦多不知治法也。其形狀如按鼓革，外雖硬而中空，即弦脈之大而有力者。因其脈與弦脈相近，是以其脈雖大而不洪（無起伏，故不洪），雖有力而不滑（中空，故不滑），即此以揣摩此脈，其真像可得矣。其主病為陰陽離絕，上下不相維繫，脈至如此，病將變革（此又革脈之所以命名），有危在頃刻之勢。丁卯在津，治癒革脈之證數次，惟有一媪八旬有六，治之未癒，此乃年歲所關也。今特將其脈之最險者詳錄一則於下，以為治斯證者之嚆矢。

外孫王竹孫年五十，身體素羸弱，於仲夏得溫病，心中熱而煩躁，忽起忽臥，無一息之停，其脈大而且硬，微兼洪象，其舌苔薄而微黑，其黑處若斑點，知其內傷與外感並重也。其大便四日未行，腹中脹滿，按之且有硬處，其家人言，腹中滿硬係宿病，已逾半載，為有此病，所以身形益羸弱，因思宿病宜從緩治，當以清其溫熱為急務。為疏方用白虎加人參湯，方中石膏用生者兩半，人參用野臺參五錢，又以生山藥八錢代方中粳米，煎湯兩盅，分三次溫飲下。一劑，外感之熱已退強半，煩躁略減，仍然起臥不安，而可睡片時。脈之洪像已無，而大硬如故，其大便尤未通下，腹中脹益甚，遂用生赭石細末、生懷山藥各一兩，野臺參六錢，知母、玄參各五錢，生雞內金錢半，煎湯服後，大便通下，遲兩點鐘，腹中作響，覺瘀積已開，連下三次，皆係陳積，其證陡變，脈之大與硬，較前幾加

兩倍，周身脈管皆大動，幾有破裂之勢，其心中之煩躁，精神之騷擾，起臥之頻，頻不安，實有不可言語形容者。其家人環視懼甚，愚毅然許為治癒，遂急開淨莢肉、生龍骨各兩半，熟地黃、生山藥各一兩，野臺參、白朮各六錢，炙甘草三錢。煎湯一大碗，分兩次溫飲下，其狀況稍安，脈亦見斂，當日按方又進一劑，可以安臥。須臾，其脈漸若瘀積未下時，其腹亦見軟，惟心中時或發熱，繼將原方去白朮，加生地黃八錢，日服一劑。三劑後，脈象已近平和，而大便數日未行，且自覺陳積未淨，遂將莢肉、龍骨各減五錢，加生赭石六錢，當歸三錢。又下瘀積若干，其脈又見大，遂去赭石、當歸，連服十餘劑痊愈。



答人問鐵汁與四物湯補血之比較

鐵汁所以能補血者，因人血中有鐵銹，鐵汁入腹，與腹中氧氣化合，即成鐵銹以補血中鐵質之缺乏。然人血中之鐵質僅居千分之一，即常飲鐵汁，不過將血中之鐵質補足，若再於其原有之定分補之加多，臟腑間轉生重墜之病，此愚得諸目睹實驗者也。至於血球為血中之重要分子，明水為血中之最大分子，皆非鐵汁所能補益，而四物湯實能補益之，且地黃中原含有鐵質，故曬之其色純黑，由斯知四物湯不但能補血中血球明水，並能補血中鐵質也。鐵汁補血之功用，安能及四物湯哉！

答人問四物湯能補血中血球及明水之理

當歸色紅似血，其汁稠黏有似血液，且微有血腥之氣，《本經》謂煮汁飲之尤良，是為取與血相類之汁液，以補血分之不足也。芍藥能引腹中氫氣上達，與吸入之氧氣化合而生水，水氣涵濡，則血脈自得其養，且其氣香能升清，味辛能降濁，故上至頭目，下至血海，調暢血氣，俾無凝滯，雖非生血之主藥，亦生血之輔佐品也。地黃性涼多液，色黑又含有鐵質，既能大滋真陰，尤善引浮越之火下行（相火類電氣，故鐵能引之下行），以清上焦燥熱，則心君常得陰精之奉（《內經》謂「陰精所奉其人壽」），生血之功必益溥也。芍藥華於春夏之交其味酸而兼苦，其酸也能斂肝火，其苦也能瀉心熱，實能調養木火之麟，使不至相助熾盛，且其汁漿稠黏，亦係滋陰之品，滋陰即能養血也。要之，歸、芍溫而地、芍涼，涼溫相調，性始和平。地、芍專養血分，歸、芍兼理氣分，氣血雙理，而人始無病，《內經》謂「中焦受氣取汁，變化而赤是為血」，故凡物之汁漿濃厚、性味和平者，皆可由胃達於小腸乳糜管中，而多化乳糜汁，此汁上升於心，即可變化而為血球、明水矣。況四物湯諸藥，更善於養血、調血者乎！

論女子癥瘕治法（附：化瘀通經散）

女子癥瘕，多因產後惡露未淨，凝結於衝任之中，而流走之新血，又日凝滯其上以附益之，遂漸積而為癥瘕矣。癥者，有實可徵，在一處不移。瘕者，猶可移動，按之或有或無，若有所假托。由斯而論，癥固甚於瘕矣。此證若在數月以裡，其身體猶強壯，所結之癥瘕猶未甚堅，可用《金匱》下瘀血湯下之。然必如《金匱》所載服法，先制為丸，再煎為湯，連渣服之方效。若其病已逾年，或至數年，癥瘕積將滿腹，硬如鐵石，月信閉塞，飲食減少，浸成癆瘵，病勢至此，再投以下瘀血湯，必不能任受，即能任受，亦不能將瘀血通下，惟治以拙擬理衝湯（方載三期第八卷）補破之藥並用，其身形弱者服之，更可轉弱為強，即十餘年久積之癥瘕，硬如鐵石，久久服之，亦可徐徐盡消。本方後附載有治癒之案若干，可參觀也。近在津門，用其方因證加減，治癒癥瘕數人。爰錄一案於下，以為治斯病之粗規。

天津特別一區三義莊張氏婦，年近四旬，自言「五年之前，因產後惡露未淨，積為硬塊，其大如橘，積久漸大。初在臍下，今則過臍已三四寸矣。其後積而漸大者，按之猶軟。其初積之塊，則硬如鐵石，且覺其處甚涼，初猶不疼，自今年來漸覺疼痛，從前服藥若干，分毫無效，轉致飲食減少，身體軟弱，不知還可治否」？言之似甚懼者。愚曰「此勿憂，保必愈」，因問其月信猶通否，言從前猶按月通行，今雖些許通行，已不按月，且其來浸少，今已兩月未見矣。診其脈，

澀而無力，兩尺尤弱。爰為疏方：生黃耆四錢，黨參、白朮、當歸、生山藥、三稜、莪朮、生雞內金各三錢，桃仁、紅花、生水蛭各二錢，蟪蟲五個，小茴香錢半。煎湯一大盅，溫服，將藥連服四劑，腹已不疼，病處已不覺涼，飲食加多，脈亦略有起色，遂即原方去小茴香，又服五劑，病雖未消而周遭已漸軟。惟上焦覺微熱，因於方中加玄參三錢，樗雞八枚。又連服十餘劑，其癥瘕全消。

然癥瘕不必盡屬瘀血也。大抵瘀血結為癥瘕者，其人必礙生育，月信恆閉，若其人不礙生育，月信亦屢見者，其癥瘕多係冷積。其身形壯實者，可用炒熟牽牛頭次所軋之末三錢下之，所下之積恆為半透明白色，狀若綠豆粉所熬之糊。若其身形稍弱者，亦可用黃耆、人參諸補氣之藥煎湯，送服牽牛末。若畏服此峻攻之藥者，亦可徐服丸藥化之。方用胡椒、白礬各二兩，再用炒熟麥麵和之為丸，桐子大。每服錢半，日兩次。服至月餘，其癥瘕自消。

若其處覺涼者，多服溫暖宣通之藥，其積亦可下。曾治滄州賈官屯張氏婦上焦滿悶，煩躁，不能飲食，下焦板硬，月信逾兩月未見，脈象左右皆弦細。仲師謂雙弦者寒，偏弦者飲，脈象如此，其為上有寒飲，下有寒積無疑。其煩躁乃假像，寒飲逼心肺之陽上浮也。為疏方用乾薑五錢，於白朮四錢，烏附子三錢，雲苓片、炙甘草各二錢，陳皮、厚朴各錢半，為其煩躁加生白芍三錢以為反佐。一劑滿悶煩躁皆見愈。又服一劑能進飲食，且覺腹中涼甚，遂去芍藥，將附子改用五錢。後又將乾薑減半，附子加至八錢。服逾十劑，大便日行數次，多係白色冷

積，湯藥仍日進一劑。如此五日，冷積瀉盡，大便自止，再診其脈，見有滑象，尺部按之如珠，知係受孕，俾停藥勿服，至期生子無恙。夫附子原有損胎之說，此證服附子若此之多，而胎竟安然，誠所謂「有故無殞，亦無殞」者也。

又無論血瘀冷積，日服真鹿角膠四五錢（分兩次燉化服之），日久亦可徐消，蓋鹿角膠原能入衝任以通血脈，又能入督脈以助元陽，是以無論瘀血冷積，皆能徐為消化也。

近又擬一消癥兼通經閉方，用炒白朮、天冬、生雞內金等分，為細末。以治癥瘕堅結及月事不通，每服三錢，開水送下，日再服。若用山楂片三錢煎湯，沖化紅蔗糖三錢，以之送藥，更佳，因用之屢有效驗，爰名為化瘀通經散。

雞內金原饒有化瘀之力，能化瘀當即善消癥瘕，然向未嘗單用之以奏效也。因所擬理衝湯中原有生雞內金三錢，方後注雲「若虛弱者，宜去三稜、莪朮，將雞內金改用四錢」。此書初梓於奉天，奉天稅捐局長齊自芸先生，博學通醫，用此方按注中如此加減，治癒癥瘕垂危之證，因商之省長海泉劉公，延愚至奉為建立達醫院。由此知雞內金之消癥瘕，誠不讓三稜、莪朮矣。夫能消癥瘕，即能通月信，此原一定之理，然未經臨證實驗，不敢但憑理想確定也，後來津治河東車站旁楊氏女，因患癥瘕，過服寒涼開散之藥，傷其脾胃，以致食後脹滿，不能消化，重用溫補脾胃之劑，加生雞內金二錢，以運化藥力。後服數劑來更方，言病甚見愈，惟初服此藥之夜，經即通下，隔前經期未旬日耳。因其病已見愈，聞此

言未嘗注意，更方中仍有生雞內金二錢。又服數劑，來求更方，言病已痊愈，唯一月之內，行經三次，後二次在服藥之後，所來甚少，仍乞再為調治，愚恍悟此誠因用雞內金之故，由此可確知雞內金通經之力。因憶在奉時，曾治大東關宋氏女，胃有瘀積作疼，方中重用生雞內金，服數劑後，二便下血而愈，此固見雞內金消瘀之力，實並見雞內金通經之力也。總前後數案參觀，雞內金消瘀通經之力，洵兼擅其長矣。此方中伍以白朮者，恐脾胃虛弱，不任雞內金之開通也。更輔以天冬者，恐陰虛有熱，不受白朮之溫燥也。然雞內金必須生用，方有效驗，若炒熟用之則無效矣。因其含有稀鹽酸，是以善於化物，炒之則其稀鹽酸即飛去，所以無效也。

論帶證治法

女子帶證，來自衝任或胞室，而名為帶者，責在帶脈不能約束也。方書辨其帶下之色，分為五帶，而究之赤白二帶可分括之。赤者多熱，白者多涼，而辨其涼熱，又不可盡在赤白也。宜細詢其自覺或涼或熱，參以脈之或遲或數，有力無力，則涼熱可辨矣。治法宜用收澀之品，而以化瘀通滯之藥佐之。曾擬有清帶湯（方載三期八卷，係生山藥一兩，生龍骨、生牡蠣各六錢，海螵蛸去甲四錢，茜草二錢）證偏熱者，加生杭芍、生地黃；熱甚者，加苦參、黃柏，或兼用防腐之藥若金銀花、旱三七、鴉膽子仁皆可酌用。證偏涼者，加白朮、鹿角膠；涼甚者，加乾薑、桂、附、小茴香。

又擬有清帶丸方，用龍骨、牡蠣皆煨透，等分為細末，和以西藥骨泔波拔爾撒謨（亦名哥拜巴脂）為丸，黃豆粒大，每服十九丸，日兩次。滄州西美陳氏婦，過門久不育，白帶證甚劇，為制此丸，服之即愈，未逾年即生子矣。

近閱《杭州醫報》，載有俗傳治白帶便方，用綠豆芽連頭根三斤，洗淨，加水兩大碗，煎透去渣，加生薑汁三兩、黃蔗糖四兩，慢火收膏，每晨開水沖服。約十二日服一料，服至兩料必愈。

按：此方用之數次，頗有效驗。

論血崩治法

女子血崩，因腎臟氣化不固，而衝任滑脫也。曾擬有固衝湯（方載三期八卷，係白朮一兩、生箭耆、淨萸肉、龍骨、牡蠣各六錢，生杭芍、海螵蛸去甲各四錢，茜草、棕邊炭各二錢，煎湯送服五倍子細末一錢），脈象熱者，加大生地一兩；涼者加烏附子二錢；大怒之後，因肝氣衝激血崩者，加柴胡二錢。若服兩劑不愈，去棕邊炭，加真阿膠五錢，另燉同服。服藥覺熱者，宜酌加生地。有用此方嫌螵蛸、茜草有消瘀之力，而減去之者，服藥數劑無效，求愚為之診治。俾服原方，一劑而愈。醫者與病家，皆甚詫異。愚曰「海螵蛸即烏賊骨。茜草即蘆茹（《詩經》作茹蘆）。《內經》四烏賊骨一蘆茹丸，以雀卵鮑魚湯送下，原治傷肝之病，時時前後血。固衝湯中用此，實遵《內經》之旨也」。

按：此方肝氣衝者，宜加柴胡，即非肝氣衝者，亦可加柴胡。小兒蔭潮在京，曾治廣西黃姓婦人，患血崩甚劇。投以固衝湯未效。遂加柴胡二錢，助黃耆以升提氣化，服之即愈。因斯知病非由於肝氣衝者，亦宜加柴胡於方中也。

《傳青主女科》有治老婦血崩方：生黃耆、當歸身（酒洗）各一兩，桑葉十片，三七細末三錢（藥湯送服），煎服，藥服二劑血止，四劑不再發。

按：此方治少年婦女此病亦效，然多宜酌加生地黃，若有熱者，必加至兩餘方能奏效。



又諸城友人王肖舫傳一治血崩秘方，用青萊菔生搗取汁，加白糖數匙，微火燉溫，陸續飲至三大盅，必愈。

按：此方肖舫曾治有極重驗案，登於《紹興醫報》。

又西藥中有麥角，原黴麥上所生之小角，其性最善收攝血管，能治一切失血之證，而對於下血者用之尤效。角之最大者，長近寸許，以一枚和乳糖（無乳糖可代以白蔗糖）研細，可作兩次服。愚常用之與止血之藥並服，恒有捷效。西人又制有麥角流膏，盛以玻璃小管每管一瓦，用以注射臂上靜脈管，一切下血之證，用之皆效。惟血立止後，宜急服三七細末數次，每次二錢，方無他虞。不然，恒有因血止脈痺，而變為虛勞證者，此又不可不知也。

論治女子血崩有兩種特效藥

一種為宿根之草，一根恆生數莖，高不盈尺，葉似地膚微寬，厚則加倍，其色綠而微帶蒼色，孟夏開小白花，結實如杜梨，色如其葉，老而微黃，多生於宅畔路旁板硬之地，俗呼為牡牛蛋，又名臭科子，然實未有臭味，初不知其可入藥也。戊辰孟夏，愚有事回籍，有縣治南關王氏婦，患血崩，服藥不效，有人教用此草連根實切碎，煮湯飲之，其病頓愈。後愚回津言及此方。門生李毅伯謂「此方余素知之，若加黑豆一小握，用水、酒各半煎湯，則更有效矣」。

一種為當年種生之草，棵高尺餘，葉圓而有尖，色深綠，季夏開小白花，五出黃蕊，結實大如五味，狀若小茄，嫩則綠，熟則紅，老則紫黑，中含甜漿可食，俗名野茄子，有山之處呼為山茄子，奉省醫者多採此草陰乾備用。若遇血崩時，將其梗葉實共切碎煎湯服之立愈。在津曾與友人張相臣言及此草，相臣謂「此即《本草綱目》之龍葵，名天茄子，一名老鴉晴草者是也」，而愚查《綱目》龍葵，言治吐血不止，未嘗言治血崩。然治吐血之藥，恆兼能治下血，若三七、茜草諸藥是明徵也。以遍地皆有之草，而能治如此重病，洵堪珍哉。

論婦人不妊治法

婦人不妊之原因甚多，至其人經脈調和，素無他病，而竟多年不妊者，大抵由於血海中元陽不足，失其溫度。其人或畏坐涼處，或畏食涼物，或天氣未寒而背先惡冷，或脈遲因而尺部不起，皆其外徵也。葉天士治此等證，恒重用紫石英，此誠由熟讀《本經》得來，嘗考《本經》謂「紫石英甘溫無毒，主心腹呃逆，邪氣，補不足，女子風寒在子宮，絕孕十年無子」，蓋因紫石英性溫質重，且又色紫似血，故能直入衝任以溫暖血分，俾婦人易於受妊，以治血海虛寒不妊者，誠為對證良藥也。特是此藥近世用者極少，是以藥房恒不備此藥，即備之亦恒陳蠹數十年，且因其非常用習見之品，即偶用之亦莫辨其真偽，是以愚治此證，恒本《本經》之義而變通之，以硫黃代石英，其功效更捷。蓋硫黃、石英皆為礦質，其沉重下達之力同，而較其熱力，則硫黃實優於石英，且為人所習見，未有真假。惟揀其純黃無雜色者，即無雜質，亦即分毫無毒。凡婦人因血海虛寒不妊者，食前每服二三分，品驗漸漸加多，以服後移時覺微溫，為每次所服之定量計。平素用硫黃之經過，有一次服之五六分而始覺溫者，有一次服至錢餘而始覺溫者。迨服至元陽充足，身體強壯，自然受妊，且生子又必長命，此愚屢經試驗，而確知其然者也。然硫黃須用生者，制之則無效。三期第八卷載有服生硫黃法，可參觀。

又衝任中有瘀血，亦可以妨礙受妊，當用《金匱》下瘀血湯下之，或單用水蛭為細末，少少服之，瘀血亦可徐消，然水蛭必須生用，若炙用之無效。曾治一

婦人不妊，其人強壯無病，惟臍下有積一塊。疑是瘀血，俾買水蛭一兩，自用麻油炙透，為末，每服五分，日兩次，服盡無效，後改用生者一兩，軋細，仍如從前服法，未盡劑而積盡消，逾年即生男矣。若其人身形稍弱者，可用党參數錢煎湯，送服水蛭末。若服黨參發熱者，可與天冬同煎湯送服。蓋《本經》水蛭，原主婦人無子（注疏家謂瘀血去則易妊），且其性化瘀血而不傷新血，誠為理血妙藥。若有疑其性猛烈者，參觀三期第八卷理衝湯後跋語，自能渙然冰釋，而無釋慮矣。

論治婦人流產

流產為婦人恒有之病，而方書所載保胎之方，未有用之必效者，誠以保胎所用之藥，當注重於胎，以變化胎之性情氣質，使之善吸其母之氣化以自養，自無流產之虞，若但補助妊婦，使其氣血壯旺固攝，以為母強自能蔭子，此又非熟籌完全也。是以愚臨證考驗以來，見有屢次流產者，其人恒身體強壯，分毫無病，而身體軟弱者，恐生育多則身體愈弱，欲其流產而偏不流產，於以知或流產，或不流產，不盡關於妊婦身體之強弱，實兼視所受之胎善吸取其母之氣化否也。由斯而論，愚於千百味藥中，得一最善治流產之藥，其為菟絲子乎。何以言之？凡植物之生，皆恃有根，獨菟絲子初生亦有根，及其蔓纏禾稼之上，被風搖動，其根即斷，而其根斷之後，益蕃延盛茂於禾稼之上，致禾稼為之黃落，此誠善取所托者之氣化以自養者也。藉此物之性質，以變化胎之性質，能使所結之胎善於吸取母氣，此所以為治流產之最良藥也。

愚擬有壽胎丸，重用菟絲子為主藥，而以續斷、寄生、阿膠諸藥輔之（伍以諸藥皆有精義，詳於本方下注解），凡受妊之婦，於兩月之後徐服一料，必無流產之弊，此乃於最易流產者屢次用之皆效，故敢確信其然也。至陳修園調宜用大補大溫之劑，使子宮常得暖氣，則胎自日長而有成，彼蓋因其夫人服白朮、黃芩連墜胎五次，後服四物湯加鹿角膠、補骨脂、續斷而胎安，遂疑涼藥能墜胎，篤信熱藥能安胎，不知黃芩之所以能墜胎者，非以其涼也。《本經》謂黃芩下血閉，

豈有善下血閉之藥而能保胎者乎？蓋漢唐以前，名醫用藥皆謹遵《本經》，所以可為經方，用其方者鮮有流弊，迨至宋元以還，諸家恒師心自智，其用藥或至顯背《本經》，是以醫如丹溪，猶粗忽如此，竟用黃芩為保胎之藥，俾用其方者不惟無益，而反有所損，此所以為近代之名醫也。所可異者，修園固篤信《本經》者也，何於用白朮、黃芩之墜胎，不知黃芩之能開血閉，而但謂其性涼不利於胎乎？究之胎得其養，全在溫度適宜，過涼之藥，固不可以保胎，即藥過於熱，亦非所以保胎也。惟修園生平用藥喜熱惡涼，是以立論稍有所偏耳。

論難產治法

向治難產，曾擬有大順湯（方載三期八卷，係黨參、當歸各一兩、生赭石細末一兩），用之多次，皆能隨手奏效。因病家不知制方之義，恒有欲用之而畏赭石過多者。夫赭石之原質，為鐵氧化合，其性甚和平，矧又重用人參、當歸以駕馭之，雖用至二兩，亦何危險之有哉。丙寅在津，有胡氏婦，臨產二日未下，自備有利產藥服之無效，治以此方，加蘇子、懷牛膝各四錢。服後半點鐘即產下。又丁卯在津治河東車站旁陳氏婦，臨產三日未下，亦治以此方，加蘇子四錢、懷牛膝六錢，亦服藥後半點鐘即產矣。且此方不獨愚用之有效，他醫士用之亦皆有效。天門友人崔蘭亭來函謂「庚午仲冬，曾治潛邑張截港劉德猷之媳，臨盆四日不產，甚至胎氣上衝，神昏不語，嘔吐不止，諸藥皆不能受，危險萬分。殮服均備，以為無法可治，待時而已，乃因有人介紹，來院求方，遂為開大順湯原方，加冬葵子二錢，炒爆作引。服後而嘔吐止，氣息順，精神已明瞭。遲半日，胎猶未下，俾按原方再服一劑，胎雖下而已死，產母則安然無恙。又其年臘月上旬，同業羅俊華之夫人，臨盆三日不下，醫藥不效。全家驚惶，迎為診治，亦投以大順湯，服後未半點鐘，其胎即下，母子安然，由斯知《衷中參西錄》真可為救命之書也。

答鮑槎法問女子陰挺治法

陰挺之證，大抵因肝氣鬱而下陷。蓋肝主筋，肝脈絡陰器，肝又為腎行氣，陰挺自陰中挺出，狀類筋之所結，其病因肝氣鬱而下陷無疑也。愚向遇此證，用方書中成方不效，因擬得升肝舒鬱湯方（方在三期八卷，藥係生箭耆五錢，知母四錢，當歸、乳香、沒藥各三錢，川芎、柴胡各錢半）服數劑即全消，以後屢次用之皆效，醫界中有採用此方者，亦莫不效。邑中友人邵俊卿，寄居津門，原非業醫，而好觀方書，於拙著《衷中參西錄》尤喜閱之，其友家眷屬有患此證者，屢延醫治不效，因求治於俊卿。俊卿治以此方，亦數劑即愈。後與愚覲面述之，以為奇異，蓋此方雖皆為尋常藥餌，而制方之意實甚周匝。方中黃耆與川芎、柴胡並用，補肝即以舒肝，而肝氣之陷者可升；當歸與乳香、沒藥並用，養肝即以調肝，而肝氣之鬱者可化，又恐黃耆性熱，與肝中所寄之相火不宜，故又加知母之涼潤滋陰者，與黃耆相濟以解其熱也。此方不惟治陰挺有特效，凡肝氣鬱而兼虛者，用之皆可奏效也。



《內經》謂「女子二七天癸至」，所謂二七者，十四歲也。然必足年足月十四歲，是則室女月信之通，當在年十五矣。若是年至十五月信不通，即當預為之防，宜用整條生懷山藥，軋細過羅，每用一兩或八錢，煮作茶湯，調以蔗糖令適口，以之送服生雞內金細末五分許，當點心用之，日兩次，久則月信自然通下，此因山藥善養血，雞內金善通血也。若至因月信不通，飲食減少，漸覺灼熱者，亦可治以此方，雞內金末宜多用至一錢，服茶湯後再嚼服天冬二三錢。

至於病又加重，身體虛弱勞嗽，宜用拙擬資生通脈湯，方係生山藥一兩，龍眼肉六錢，淨萸肉、甘枸杞各四錢，炒白朮、玄參、生杭芍各三錢，生雞內金、桃仁、甘草各二錢，紅花錢半。灼熱甚者，加生地一兩。嗽不止者，加川貝三錢，生罌粟殼二錢。此方之後，載有數案，且用此方各有加減，若服資生通脈湯，病雖見愈，月信仍不至者，可參觀所附案中加減諸方。上所論諸方之外，愚有新擬之方，凡服資生通脈湯病見愈而月信不見者，可用生懷山藥四兩，煮濃汁，送服生雞內金細末三錢，所餘山藥之渣，仍可水煮數次，當茶飲之，久之月信必至。蓋雞內金生用，為通月信最要之藥，而多用又恐稍損氣分，故又多用山藥至四兩，以培氣分也。

論小兒痙病治法

小兒為少陽之體，於時為春，春氣固上升者也，於五行為木，木性喜上達者也，是以或灼熱作有驚駭，其身中之元陽，恒挾氣血上衝以擾其腦部，致其腦筋妄行，失其所司而痙證作矣。痙者，其頸項硬直也，而或角弓反張，或肢體抽掣，亦皆概其中矣。此證治標之藥中，莫如蜈蚣（宜用全的），以其節節有腦也。西藥中，莫如臭素加里（一名臭剝）及抱水格魯拉兒（一名綠養冰），以其能麻醉腦筋也。用治標之藥以救其急，即審其病因，兼用治本之藥以清其源，則標本並治，後自不反復也。

癸亥季春，愚在奉天立達醫院，旬日之間，遇幼童溫而兼痙者四人。愚皆以白虎湯治其溫，以蜈蚣治其痙，其痙之劇者，全蜈蚣用至三條，加白虎湯中同煎服之，分數次飲下，皆隨手奏效（其詳案皆在藥物講義蜈蚣解後案中，又皆少伍以他藥。然其緊要處，全在白虎湯蜈蚣並用），又乙丑季夏，愚在籍，有南門里張姓幼子患暑溫兼痙，其痙發時，氣息皆閉，日數次，灼熱又甚劇，精神異常昏憤，延醫數人皆諉為不治。小兒蔭潮投以大劑白虎湯，加全蜈蚣三條，俾分三次飲下，亦一劑而愈。

又丙寅季春，愚因應友人延請，自滄來津，有河東俞姓童子病溫兼出疹，周身壯熱，渴嗜飲水，疹出三日，似靨非靨，觀其神情，恍惚不安，脈象有力，搖

搖而動，似將發瘧。為開白虎湯加羚羊角錢半（另煎兌服以此預防其發瘧，所以未用蜈蚣）。藥未及煎，已抽搐大作。急煎藥服下，頓愈。

至瘧之因驚駭得者，當以清心、鎮肝、安魂，定魄之藥與蜈蚣並用，若朱砂、鐵銹水、生龍骨、生牡蠣諸藥是也。有熱者，加羚羊角、青黛。有痰者，加節菖蒲、膽南星。有風者，加全蠍、僵蠶。氣閉塞及牙關緊者，先以藥吹鼻得嚏，後灌以湯藥。

至於西藥臭素加里及抱水格魯拉兒，其麻醉腦筋之力，原善鎮驚使暫不發，可容徐用中藥，以除病之根蒂。壬戌季秋，有奉天北陵旁艾姓孺子患瘧證，一日數發，其發時瘧攣甚劇，知覺全無，來院求為診治。脈象數而有力，左部尤甚，右部兼有浮滑之象，知其肝有積熱，胃有痰飲，又兼受外感之熱以激動之，則痰火相並上衝，擾其腦部而發瘧也，與以臭素加里三瓦，作三次服，為一日之量。又為疏方用生石膏二兩，生杭芍八錢，連翹三錢，薄荷葉錢半，煎湯兩盅，分三次飲下。每服臭素加里一次，即繼服湯藥次。一日夜間，病未反復。翌晨再診，脈已和平，又與以西藥一瓦，將湯藥煎渣再服，病遂痊愈，蓋臭素加里及抱水格魯拉兒，皆鹽基之藥，平和無毒，故可與中藥並用也。

答胡天宗問小兒暑天水瀉及由瀉變痢由瘧轉痢之治法

小兒少陽之體，不堪暑熱，恆喜食涼飲冷以解暑，飲食失宜，遂多泄瀉，瀉多亡陰，益至燥渴多飲，而陰分虛損者，其小溲恆不利，所飲之水亦遂盡歸大腸，因之泄瀉愈甚，此小兒暑天水瀉所以難治也，而所擬之方，若能與證吻合，則治之亦非難事。方用生懷山藥一兩，滑石八錢，生杭芍六錢，甘草三錢，煎湯一大盅，分三次溫飲下。一劑病減，再劑痊愈矣。方中之意，山藥滋真陰，兼固其氣，滑石瀉暑熱，兼利其水，甘草能和胃，兼能緩大便，芍藥能調肝，又善利小便，肝胃調和，其泄瀉尤易愈也，此方即拙擬滋陰清燥湯，原治寒溫之證，深入陽明之府，上焦燥熱，下焦滑瀉，而小兒暑天水瀉，其上焦亦必燥熱，是以宜之。至於由瀉變痢，由瘧轉痢者，治以此方，亦能隨手奏效。何者？暑天熱痢，最宜用天水散，方中滑石，甘草同用，固河間之天水散也。又可治以芍藥甘草湯，方中白芍、甘草同用，即仲景之芍藥甘草湯也。且由瀉變痢，由瘧轉痢者，其真陰必然虧損，氣化必不固攝，而又重用生山藥為之滋陰固氣化，是以無論由泄變痢，由瘧轉痢者皆宜，若服此藥間有不效者，可加白頭翁三錢，因白頭翁原為治熱痢之要藥也。

論脾風治法

脾風之證，亦小兒發瘧之證，即方書所謂慢驚風也。因慢驚二字欠解，近世方書有改稱慢脾風者，有但稱脾風者。一名較之，似但稱脾風較妥，因其證之起點由於脾胃虛寒也。蓋小兒雖為少陽之體，而少陽實為稚陽，有若草木之萌芽，嬌嫩畏寒，是以小兒或飲食起居多失於涼，或因有病過服涼藥，或久瘧久痢，即不服涼藥，亦可因虛生涼，浸成脾風之證。其始也，因脾胃陽虛，寒飲凝滯於賁門之間，阻塞飲食不能下行，即下行亦不能消化，是以上吐而下瀉。久之，則真陰虛損，可作灼熱，其寒飲充盛，迫其身中之陽氣外浮，亦可作灼熱，浸至肝虛風動，累及腦氣筋，遂至發瘧，手足抽掣。此證莊在田《福幼編》論之最詳，其所擬之逐寒蕩驚湯及加味理中地黃湯二方亦最善，愚用其方救人多矣，而因證制宜又恒有所變通，方能隨手奏效，試略錄數則如下。

其第一方之逐寒蕩驚湯，原為不受飲食者衝開胸膈之寒痰而設，是以將藥搗碎，煎數沸，其藥力即煎出，此防其久煎無力，不能衝開寒飲也。愚治一六歲幼童患脾風，飲食下嚥，移時即吐出，投以逐寒蕩驚湯不效。因思此方當以胡椒為主藥，在藥房中為罕用之品，或陳而減力，俾於食料鋪中另買此味，且加倍用二錢，與諸藥同煎服。一劑即將寒痰衝開，可以受食，繼服加味理中地黃湯，數劑痊愈。

又治一五歲幼童，先治以逐寒蕩驚湯，可進飲食矣，而滑瀉殊甚，繼投以加味理中地黃湯，一日連進兩劑，泄瀉不止，連所服之藥亦皆瀉出，遂改用紅高麗參大者一支，軋為細末，又用生懷山藥細末六錢煮作粥，送服參末一錢強，如此日服三次，其瀉遂止。翌日仍用此方，恐作脹滿，又於所服粥中調入西藥百布聖六分，如此服至三日，病痊愈。又治一未周歲小孩，食乳即吐，屢次服藥亦吐出，額門下陷，睡時露睛，將成脾風，俾其於每吃乳時，用生硫黃細末一擦，置兒口中，乳汁送下，其吐漸稀，旬日痊愈。莊在田之《福幼編》，業醫者大約皆熟閱其書，而參以愚所經歷者數則，以治幼科脾風之證，大抵皆能治癒也。

治幼年溫熱證宜預防其出痧疹

幼年溫熱諸證，多與痧疹並至。然溫熱之病，初得即知。至痧疹初得，其毒恒內伏而外無現象，或遲至多日始出，又或不能自出，必俟服托表之藥而後能出。若思患預防，宜於治溫熱之時，少用清表痧疹之藥。不然恐其毒盤結於內不能發出，其溫熱之病亦不能愈也。愚臨證數十年，治癒溫熱兼痧疹者不勝計，莫不於治溫熱藥中，時時少加以清表痧疹之品，以防痧疹之毒內蘊而不能透出。故恒有溫熱之病，經他醫治療旬日不愈，勢極危險，後經愚為診治，遂發出痧疹而愈者。今略登數案於下，以為徵實。

奉天小南關馬氏幼女，年六七歲，得溫病，屢經醫治，旬餘病勢益進，亦遂委之於命，不復治療。適其族家有幼子得險證，經愚治癒，因轉念其女病猶可治，殷勤相求，其脈象數而有力，肌膚熱而乾澀，臥床上輾轉不安，其心中似甚煩躁。以為病久陰虧，不堪外感之灼熱，或其痧疹之毒伏藏於內，久未透出，是以其病之現狀如是也。問其大便，數日一行。遂為疏方生石膏細末二兩，潞黨參四錢，玄參、天冬、知母、生懷山藥各五錢，連翹、甘草各二錢，蟬退一錢，煎湯兩盅，分數次溫飲下。連服二劑，大熱已退，大便通下，其精神仍似騷擾不安。再診其脈，較前無力而浮，擬其病已還表，其餘熱當可汗解，用西藥阿斯必林二分強，和白蔗糖水沖服下。周身微汗，透出白痧若干而愈。乃知其從前輾轉騷擾不安者，

因其白痧未發出也。為每劑中皆有透表之品，故其病易還表，而其痧疹之毒復亦易隨發汗之藥透出也。

又奉天大南關燒鍋胡同劉世忱之幼女，年五歲，周身發熱，上焦燥渴，下焦滑瀉，遷延日久，精神昏憤，危至極點，脈象數而無力，重診即無，為疏方用生懷山藥一兩，滑石八錢，連翹、生杭芍、甘草各三錢，蟬退、羚羊角（此一味另煎當水飲之，煎至數次尚有力）各一錢半，煎湯一盅半，分三次溫服下，周身發出白痧，上焦煩渴，下焦滑瀉皆愈。

按：此方即三期第五卷滋陰宣解湯加羚羊角也。凡幼年得溫熱病即滑瀉者，尤須防其痧疹之毒內伏不能外出（滑瀉則身弱，恒無力托痧疹之毒外出），此方既能清熱止瀉，又能表毒外出，所以一藥而愈也。

奉天糧秣廠科員王嘯岑之子，年二十八歲，周身發熱，出白痧甚密。經醫調治失宜，遷延至旬日，病益加劇。醫者又欲用大青龍湯減去石膏，嘯岑疑其性熱不敢用，延愚為之診治。其周身發熱，卻非大熱，脈數五至，似有力而非洪實，舌苔乾黑，言語不真，其心中似怔忡，又似煩躁，自覺難受莫支。其家人謂其未病之時，實勞心過度，後遂得此病，參之脈象病情，知其真陰內虧，外感之實熱又相鑱耗，故其舌乾如斯，心中之怔忡煩躁又如斯也。問其大便，數日未行，似欲便而不能下通，遂疏方用生石膏細末三兩，潞黨參五錢，生山藥五錢，知母、天花粉各八錢，連翹、甘草各二錢，生地黃兩半，蟬退一錢，俾煎湯三盅，分三



次溫飲下，又囑其服藥之後，再用豬膽汁少調以醋，用灌腸器注射之，以通其大便。病家果皆如所囑，翌日視之，大便已通下，其灼熱、怔忡、煩躁皆愈強半，舌苔未退而乾黑稍瘥。又將原方減石膏之半，生地黃改用一兩，連服三劑，忽又遍身出疹，大便又通下，其灼熱、怔忡、煩躁始痊愈，恐其疹出回急，復為開清毒托表之藥，俾服數劑以善其後。

按：此證既出痧矣，原不料其後復出疹，而每劑藥中皆有透表之品者，實恐其蘊有痧毒未盡發出也，而疹毒之終能發出，實即得力於此，然非臨時細細體察，擬方時處處周密，又何能得此意外之功效哉。

按：此證非幼科，因亦溫而兼疹，故連類及之，且俾人知溫而兼疹之證，非獨幼科有之，即壯年亦間有之也。

論治瘋犬傷方

瘋犬傷證甚為危險，古方用斑蝥雖能治癒，然百日之內忌見水，忌聞鑼聲，忌食諸豆，忌行糞麻之地及手摩糞麻，又須切忌房事百日，犯以上所忌，其證仍反復，如此保養甚不易也。歙縣友人胡天宗，深憫患此證者不易挽救，曾登《紹興醫報》徵求良方，繼有江東東子嘉氏登報相告，謂曾用《金匱》下瘀血湯治癒二人，又繼有江西黃國材氏登報相告，謂係異人傳授一方，用大蜈蚣一條，大黃一兩，甘草一兩，煎湯服甚驗，如服後病者稍安靜，未幾又發，再依此方續服，病必愈，乃可止。後附有治驗之案二則，皆瘋已發動，服此藥治癒者。

按：此方誠為至善良方。大宗謂「俗傳冬令蛇藏土洞，口銜或泥或草，迨至春日出蟄，口吐所銜之物，犬嗅之即成瘋犬」，此理可信，蓋犬性善嗅，有殊異之氣味，輒喜嗅之，是以獨中其毒，而瘋後咬人，是蛇之毒遞傳於人也，方中用蜈蚣一條，則蛇毒可解矣。又此證，東氏謂曾用《金匱》下瘀血湯治癒兩人，由斯知此證必有瘀血，下之則可，方中大黃一兩，其瘀血當可盡下，又加甘草一兩，既善解毒，又能緩大黃之峻攻，此所以為良方也，然此方善矣，而未知愈後亦多禁忌否，若仍然有禁忌，是善猶未盡善也。而愚在奉天時，得其地相傳之方，凡用其方者，服後即脫然無累，百無禁忌，真良方也，其方用片灰（即槍藥之軋成片者，係硫黃、火硝、木炭製成）三錢，鮮枸杞根三兩煎湯送下，必自小便下惡濁之物若干而愈，愈後惟禁房事旬日，然藥不可早服，必被傷後或五六日，或

七八日，覺內風萌動，騷擾不安，然後服之方效，此乃屢試屢效之方，萬無閃失也。枸杞根即藥中之地骨皮，然地骨但用根上之皮，茲則連皮中之木用之。

又吳縣友人陸晉笙，於丁卯中秋相遇於津門，論及此證。晉笙言，凡瘋狗脊骨中皆有毒蟲，若將其脊骨中脂膜刮下，炮作炭服之，可自二便中下惡濁之物即愈。有族孫患此證，治以此方，果愈。然所慮者，吃人之瘋犬，未必能獲之也。

又無錫友人周小農，曾登《山西醫學雜誌》，論治瘋犬咬傷之方。謂歲己丑，象邑多瘋犬，遭其害者治多無效，適有耕牛亦遭此患而斃。剖其腹，有血塊大如斗，鰐紫，攪之蠕蠕然動，一方驚傳異事。有張君者，曉醫理，聞之悟曰「仲景云『瘀熱在裡其人發狂』，又云『其人如狂者，血證諦也，下血狂乃愈』。今犯此證者，大抵如狂如癲，得非瘀血為之乎？不然，牛腹中何以有此怪物耶？吾今得其要矣」，於斯用仲景下瘀血湯治之，不論證之輕重，毒之發與未發，莫不應手而愈，轉以告人，百不失一。其所用之方，將古時分量折為今時分量，而略有變通。方用大黃三錢，桃仁七粒，地鰐蟲去足炒七個，共為細末，加蜂蜜三錢，用酒一茶碗煎至七分，連渣服之。如不能飲酒者，水酒各半煎服亦可。服後二便當下惡濁之物。日進一劑，迨二便如常，又宜再服兩劑，總要大小便無纖毫惡濁為度。服此藥者，但忌房事數日，其餘則一概不忌，若治小兒，藥劑減半，妊婦亦可放膽服之，切莫計較。

按：服此方果如上所云，誠為佳方，而張君竟於牛腹中血塊悟出，其功德固無量也。惜傳此事者，但詳其姓，未詳其名耳。

東人有預防狂犬傷病注射藥，裝以玻璃小管，重一瓦，名狂犬注射液，遇有狂犬傷者，於傷處皮下注射一管，可無他患，須忌房事旬餘，他無所忌，亦佳方也。

香蓀附記：同邑友人張俊軒據周筱峰君云，其戚某，得一治瘋犬咬傷秘法。其方係用白雄雞一隻，取其嘴及腿之下截連爪，及其膽、肫皮、翅尖翎、尾上翎，加銀朱三錢，鰾須三寸，用綿紙三四張裹之，縞麻紮緊，用香油四兩浸透，以火燃之，餘油亦澆其上，燒為炭，研末，黃酒送服，通身得汗即愈，愈後除忌房事旬日外，餘無所忌，屢試屢驗，真仙方也。

解觸電氣

將平地掘二尺深，長寬可臥一人，用水潑濕，將人置其中，手足皆綁上鐵條（凡鐵器之長者皆可用），鐵條之兩端，一靠手足之心，一埋地中，所受之電氣即可由四根鐵條引人地中。其人雖至無氣，但視其全體無破處，即可救活，或身有破處，而頭面無傷，亦可救活，此係奉天相傳之方，似甚有理。愚曾將此方登於《紹興醫報》一百十二期至一百十九期，有古歙某村報告（原署名處即此六字）言，年前在歙，鄰村湖田有一賣魚竿者，將午觸電死於路。其弟為之即時扛回，置家門外泥土上，因窶貧不能殮，多方告貸，夜半殮具始備，行將殮矣，其人忽醒，共相驚異，後知所觸電氣久之為泥引出，是以復活，今參閱張君解觸電之方，信為確有效驗。總之若有觸電而死者，不可即時入殮，須照張君所登之方救之，最好去衣，令仰臥泥窟中，兼用綁鐵條之法，當可能救活也。

閱此報告之文，因憶愚在籍時，有鄰村星馬村於姓壯年，赴城趕集，三人同行，途中逢雨，於姓行在前，後行者見前有電光下徹，且有聲如小爆竹（雷聲遠聽則大，近聽則甚小），於姓忽仆於地，視之無氣。其二人，一為看守，一往家送信，及家中來人，於姓已復活，此亦因久臥濕泥中而電氣盡解也。後愚與晤面，詢之，言仆時初不自覺，及醒後則周身骨筋作疼，數日方愈。由斯觀之，觸電氣者但久臥濕泥中，即可救愈，若更用手足綁鐵條之法，救愈當更速也。雖云頭面破者難救，然亦當以此法救之，不可輕棄人命也。

外傷甚重救急方

神授普濟五行妙化丹治外傷甚重，其人呼吸已停，或因驚嚇而猝然罔覺，甚至氣息已斷，急用此丹一厘，點大眼角，男左女右，再有三分，以開水吞服。其不知服者開水沖藥灌之，須臾即可蘇醒，並治一切暴病、霍亂、痧證、小兒瘧癩、火眼、牙疳紅白痢疾等證，皆效，爰錄其方於下。

火硝八兩、皂礬二兩、明雄黃一兩、辰砂三錢、真梅片二錢。  
共為極細末，瓶貯勿令洩氣。

此方為天門縣友人崔蘭亭所傳，崔君為湖北潛江紅十字分會張港義務醫院院長，恒以此方救人，爰錄其來函於下。

戊辰冬，本鎮有吳姓幼童，年六歲，由牛馬廠經過，一牛以角抵人幼童口中，破至耳邊，血流不止，幼童已死。此童無祖無父，其祖母及其母聞之，皆嚇死，急迎為挽救，即取食鹽炒熱熨丹田，用妙化丹點大眼角，幼童即活，再用妙化丹點其祖母及其母大眼角，須臾亦活，再用灰錳氧將幼童內外洗淨，外以膠布貼之，加綁紮，內食牛乳，三日後視之，已生肌矣。又每日用灰錳氧沖水洗之，兩旬痊愈，愈後並無疤痕。

又民國六年四月中旬，潛邑張港一婦人，二十餘歲，因割麥爭界，言語不周，被人舉足一踢，僕地而死，經數醫生，有用吹鼻者，有用鵝翎換氣者，有用烏梅

擦牙者，百方千方，種種無效，惹事者全家監押於法廳，其家所請律師謝龍文君求為往視，其身冷如冰，牙關緊閉，一日有餘矣，而其胸猶微溫，急用妙化丹點其大眼角，用食鹽二斤炒熱，作兩包，熨其丹田，輪流更換，得暖氣以助生氣。一炷香之久，牙關已開，遂用紅糖沖開水服之即活。用妙化丹點大眼角，男左女右，因大眼角名睛明穴，此處竅通則百竅皆通，起死回生之術，實自熟讀《內經》中來也。

又乙丑季夏上旬，曾治劉衣福，年過四旬，因分家起爭，被其弟用刀傷臍下，其腸流出盈盆，忽然上氣喘急，大汗如雨，經數醫診治，皆無把握，因迎生速往診視，觀其形狀危險，有將脫之勢，遂急用生黃耆、淨莢肉、生山藥各一兩，固其氣以防其脫。煎湯服後，喘定汗止，檢視其腸已破，流有糞出，遂先用灰錳氧沖水，將糞血洗淨，所破之腸，又急用桑根白皮作線為之縫好，再略上磺碘，將其腸慢慢納進，再用洋白線將肚皮縫好，又用紗布浸灰錳氧水中，候溫，覆其上，用白士林少調磺碘作藥棉，覆其上，用繃帶紮住，一日一換，內服用《衷中參西錄》內托生肌散，變為湯劑，一日煎渣再服，三星期痊愈。

按：此證未嘗用妙化丹，因其傷重而且險，竟能救愈，洵堪為治此重傷者之表准，故連類及之，且所用內托生肌散，為愚治瘡毒破後生肌之方，凡瘡破後潰爛，不速生肌者，用之最效。其方係生黃耆四兩，天花粉三兩，粉甘草二兩，丹參、乳香、沒藥各兩半，共為細末，每服三錢，開水送下，日服三次。若欲將散

劑變為湯劑，宜先將天花粉改為四兩，一劑分作八劑，一日之間煎渣再服，其生肌之力較服散藥尤效。又愚答友人陸晉笙書中（在後），有臍下生瘡破後出尿之方，較此方少丹參，用之亦甚效驗，能治癒至險之瘡證，可參觀。



〈第八卷〉

此卷前半為致醫界同人之書，或論醫學，或論養生或論學醫之法，或論醫學教授之法。後半為醫界同人來函，皆係用本書中諸方，或即原方略有加減，以治癒諸病而來函相告，或登諸各處醫學志報相告者。

致陸晉笙書

晉笙先生道鑒：鯉溪諸著作，炳照寰區，弟捧讀之際，恒殷景慕，獨惜方域遙隔，未得面聆金玉耳。近閱《紹興醫報》，登有慎重性命之論，洋洋數千言，歷指西醫之弊，宜如溫太真燃犀，光徹牛渚，而論中徵求同志，歷序醫界之溝通中西者，弟名僭列其中。夫弟本庸才，原非能溝通中西也，然讀先生之論，未嘗不撫掌稱快也。蓋西人雖講實驗，然能驗人身之血，不能驗人身之氣，故西人有治貧血之藥，無治貧氣之藥。夫人之身中氣血並重，而氣尤為生命之根本，較血更為緊要，西人因無治貧氣之藥，是以遇氣分虛陷之證，即束手無策，此固西醫之大缺陷也，且不獨治內傷有然也。外科原為西人之所長，至瘡瘍非重用補氣之藥不愈者，西人亦恒對之束手，奉天高等師範學校書記張紀三，因瘡病服藥錯誤，少腹腫疼，後破孔五個，小便時五孔中皆出尿，西人謂須得割剖縫補，大施手術，然用手術時，須先自立情願書，是不敢保其必無閃失也，因此未敢遽治。遲延數日，腎囊亦腫而潰爛，睪丸透露，遂昇來院中求為診治。因曉之曰「此瘡潰爛深而旁達，無由敷藥，而下焦為元氣所存，又不可輕施割剖，然亦無須割剖也，惟多服補助氣血之藥，而少佐以化癥解毒之品，俾氣血壯旺，自能自內生肌，排膿

外出，至所破之孔皆愈，小便自歸正路矣」，為疏方生箭耆、天花粉各一兩，金銀花、乳香、沒藥、甘草各三錢，煎湯連服二十餘劑，潰爛之孔皆自內生肌，排膿外出，結痂痊愈，此證始終未嘗敷藥，而生肌若斯之速者，全賴黃耆補氣之力也。西人為無治貧氣之藥，是以對此等證而不得不為之割剖縫補，以輕試其行險之手術也。

又西人對於癲狂瘵癩神昏等證，皆謂係腦髓神經病，然用藥或麻醉其神經，或調補其神經，鮮克有愈者。奉天林布都道尹之哲嗣鳳巢，患癲狂證，居大連東人醫院，調治年餘，東人治以西法，日飲以纈草（即中藥之甘松）丁兒，謂係為調養神經之妙品，然終分毫無效。後來奉至院中求治，知係頑痰過盛，充塞其心腦相通之路，因以隔闔其神明也。投以大承氣湯，加生赭石細末兩半，同煎湯，送服甘遂細末錢半，降下痰涎若干，後間三日服一次，服至四次痊愈。

又小兒蔭潮自京都來信言，治一陸軍書記官王竹孫，年四十餘，每至晚八點鐘，即不省人事，四肢微有抽掣，甚畏燈光，軍中醫官治以鎮安神藥罔效。後蔭潮治以鐵銹、生地各六錢，煎湯送服人參小塊三錢，約服二十劑，病遂脫然。蓋此證乃胸中大氣（即宗氣）虛損，不能上達腦部，以斡旋其神經，保合其神明，所以昏不知人，而復作抽掣也。病發於晚間者，因其時身中之氣化下降，大氣之虛者益虛也。其畏燈光者，因其肝血虛而生熱，其中所寄之相火乘時上擾腦部，

腦中苦煩熱，故畏見燈光也。是以用人參以補大氣之虛，鐵銹、生地以鎮肝、生血、涼血，未嘗用藥理其腦部，而腦部自理也。

合之以上數則，皆係探本窮源之治法，西人亦知焉否乎？夫弟所著之書，原以衷中參西為名，非無取於西法也，特深異今之崇尚西法者，直以其法無所不善，無所不備，然以弟視之，西醫尚在幼稚時代耳。

復宗弟相臣書

深承厚意贈以冉雪峰《溫病鼠疫問題解決》一書。細閱之，見其論溫病及鼠疫皆精確。其論溫病也，詳論其脈之變化，及謂喉證痘疹皆屬於溫，誠為具有特識。其論鼠疫也，謂其毒發源於腎，其究歸於肺燥，而有陽燥陰燥之殊，實毫絲不爽。至引證《內經》，又頗見費盡苦心為世說法。蓋觀寒熱篇一歲二歲之文，原為瘰癧致發寒熱者言，而其毒發於腎水名鼠瘦，即疫毒發於腎水名鼠疫，其理原相通也。愚在奉，曾治中國銀行施蘭孫，浙江人，患鼠疫，肢冷、脈沉遲，舌乾亮如鏡，精神時明時憤恒作譫語，知其熱鬱在中，兼腎中真陰不能上達，投以《衷中參西錄》白虎加人參以山藥代粳米湯，又以玄參代知母（玄參不但補腎，其中心白而且空，其味甘勝於苦，又為清補肺臟之要藥）。一劑手不涼而脈起，再劑而愈。及觀冉君所論鼠疫，肢冷脈沉遲則熱進，厥回脈浮數則熱退，與弟所治者若合符節，冉君誠近世醫界之翹楚也。楚國有才，其信然乎。

復傳鶴皋書

鶴皋先生雅鑒：弟居恒嘗謂，衛生之道在培養精神，使精神壯旺以保合全身，自不為外邪所襲，此乃衛生之要著也。及閱本報（杭州三三醫報）十五期，讀先生之論衛生，誠為先得我心，至論西人之衛生，謂皆求諸外，非能保養人身之本髓，尤為不磨之論。至謂石膏可以消暑，每當熱時，日煎服生石膏兩餘，以消除暑熱，識見更高人數等矣。以視夫病遇陽明大熱，而猶不敢放膽重用生石膏者，其識見之高下，豈可同日語哉。至弟對於佛老之道，原屬門外漢，然心焉好之，偶有所見而登於志報者，非以傳道也，實欲藉以訪友也。及觀先生書中云云，知於佛老之道研究極深，特因功候未到，故心不免有出入耳。《金剛經》云「無所住而生其心」，當日佛家六祖即因此一語而悟道，則此語之妙可知。蓋無所住之心，即腦中虛靈之元神也。所謂無所住而復生其心者，謂此虛靈之元神，時隨目光下照，雖若天道下濟光明，無心成化，而仍覺與下焦元氣有欣欣相戀之情，其心自不他走，且不落頑空，即抱朴子所謂「一意雙則和，和則增壽也」。弟之見解如此，質諸先生，以為然否？

敬復者：因令友腎虛不能作強，有礙求嗣，代為問，此誠不易治療之證也。按此證向因勞心勞力過度，且夏日汗出如洗，當此之際，元氣已傷，其腳腫者，乃氣分因虛不能宣通且下陷也。醫者不知，投以滋泥補腎之品，氣分愈不宣通矣。夫男子之生殖器，名之為勢，純係氣化之貫注以充舉之。茲因氣分不能宣通，所以氣化不能貫注，而更服當歸蘆薈丸、龍膽瀉肝湯以傷其陽分，致陽虛自汗，日久不已，元氣益因之傷損，所以其陽不但痿而且縮矣。蓋前之陽痿，偶因氣化不能貫注，此猶易治；後之陽縮，誠因元氣虧損，其元陽之根柢已傷，所以分毫不能用事。夫元陽之根既在元氣，若欲元陽壯旺者，自當以培補元氣為主。特是人元氣稟於先天（觀第一卷元氣詮自明），非若後天之氣，可以藥餌補助也。惟內煉家有補助元氣之法，靜坐之功是也。愚幸粗識門徑，試為詳細陳之。其法每當靜坐之時，閉目存神，默運腦中，自然之知覺隨目光下注丹田，《丹經》所謂凝神入氣穴也，《佛經》所謂北斗裡看明星也。此法要處，在勿忘勿助。蓋忘之則一曝十寒，工夫間斷；助之則著於跡象，已落後天，故善用此功者，但用腦中之元神，不用心中之識神。元神者，無思無慮，自然虛靈，靈而曰虛，仍屬先天。識神者，有思有慮，靈而不虛。靈既不虛，則已落後天矣。元氣本為先天之氣，惟常照以先天之性光，則元氣自然生長，陽事自然興舉矣，所尤當知者，若靜坐時心神易走，宜暫持以後天工夫，用心腎交感之法，使心降腎升，意念欣欣，如

嬰兒姪女之相戀，移時其心不外馳，可再用功如前。此乃文火、武火相濟而為用者也。究之此中消息，宜善自體驗，非可盡以言語傳也。

至其心跳、耳鳴、便濁諸證，治以日用服食之品，亦即可愈，宜用生懷山藥軋作粉，每用一兩，或七八錢，涼水調和，煮成茶湯，饑時當點心用之。欲其適口，可加白蔗糖。久之諸病自愈。



復胡劍華書

劍華仁兄雅鑒：著靈子術者係東人，為著此書，精思十晝夜未嘗進食，因悟得此術，不但能使周身跳動，即一切器皿，手撫之皆能令其跳動。究之，吾中華之哲學，彼固分毫無心得，故於衛生之道亦毫無補益，雖周身跳動時，亦形愉快，然適足耗擾精神，是以其人未及中壽而亡。欲明衛生之理，當明以術延命之法。而以術延命法中，有清修雙修之殊。伍冲虛之《天仙正理》、《仙佛合宗》，柳華陽之《金仙證論》、《慧命經》，清修法也。魏伯陽之《參同契》，張紫陽之《悟真篇》，雙修法也。至衛生妙之尤妙者，則又以呂純陽之妙丹法為最（純陽書中有更有妙丹法云云），此乃本陰陽互根之理，以行陰陽裁接之術，只此夫婦居室之常，即均在花甲之年，勤而修之，亦可同登仙篆，此《佛經》所謂「軀殼禪」也，所謂「色即是空，空即是色」也。《丹經》所謂「知其雄，守其雌」也，所謂「無欲以觀其妙，有欲以觀其竅」也。然其道仍須得名師傳授，不然雖聰明過顏閔，徒索諸篇章無益也。

至貴友之咯血六年，病勢已危，原屬不治之證。初所用瀉心湯，雖係治吐血之良方，而用於此證實難取效。後所用之山藥、赭石、花蕊石、龍骨、牡蠣諸藥，亦極穩妥，其如病證之不可挽回何？事後追維，自疑用藥之未能盡善，此乃仁人君子之用心，究之用藥何嘗有誤哉，因思凡咳而吐血者，其治法當先注意止其咳嗽。弟凡遇咳嗽而吐血者，若其脈象虛數，恒用生懷山藥細末煮作粥，送服川貝

母細末，一日之間，山藥約服至二兩，川貝末約服至六七錢（川貝不苦，不難多服）。若服之覺悶者，可服西藥含糖百布聖錢許，如無此藥，可服雞內金細末錢許。若覺熱者，可嚼服天門冬二三錢，其咳嗽往往能愈，咳血之證恒隨之同愈。其有咳血仍不愈者，可再用三七細末與赭石（忌用醋淬，宜用生者軋細）細末等分和勻，開水送服二錢。其有熱者，用生地數錢煎湯送服，輒能奏效。因其咳嗽既愈，咳血亦不難治矣，然此仍論尋常咳血也。若兄之友，其咳血六年，虛弱已極，又不可以此概論也。

複王肖舫問《內經》注疏何家最善書

昨蒙寄書，虛懷下問《內經》以何家注疏為最善，弟於《內經》注疏諸家，所見無多，自陳修園於注《內經》家獨推張隱庵。考張氏之注，原鳩合其一時同人共成之，似較他家注疏為優，然其中謬誤穿鑿之處，亦復不少。蓋《內經》一書，雖傳自開天闢地之聖神，實互相授受，至春秋之末，始筆之於書。其迭次授受之際，約皆有所附會，與經文以俱傳，是以《內經》之文有非聖神不能言者，有近於戰國策士誇張之語，殊鮮實際者。而注之者，必皆一一視為聖神語錄，逐句細為詮解，此謬誤穿鑿之所由來也。是以愚生平讀《內經》，雖挨篇遍讀，實非遍記，亦不留意注疏，而每讀至精華之處，直覺其言包羅萬有，不但為醫學鼻祖，一切後世種種學問，實皆屬於《內經》之中。至偶有會心之處，恒若迴出注疏之外者，有如弟生平慕哲學，而泛覽群書莫得宗旨，後讀《內經》至《四氣調神篇》，有曰「使志若伏若匿、若有私意、若已有得」，乃恍悟養生之道，更觸類旁通，並知《佛經》所謂應「無所住而生其心」者，亦此義，道書所謂「意雙則和，和則增壽」者，亦此義也。又嘗觀西人論地為球形，人處於地之上下，實無分於上下，其語甚奇。及讀《內經》《五運行大論》，帝問「地之為下否乎？」岐伯曰「地為人之下，太虛之中也」。帝曰「馮（音憑）乎？岐伯曰「大氣舉之也」數語，乃知人在地上者，固以地為下，即人在地下者，亦以地為下，故岐伯謂地為人之下也。繼之，又釋之為太虛之中，原大氣之所包舉，實無所為上下也。

西人之講地學者，早包括於《內經》數語中也。兄果有志研究《內經》，正不妨尋章摘句，擇其至精至純之處，藉以瀹我性靈、益我神智，此所謂會心處不在多也。況《內經》精純之處，其光華流露，如日月經天，朗朗照人，令人心目俱爽，無事費心索解，自能豁然貫通，又何須乎諸家之注疏哉！

復相臣哲嗣毅武書

毅武老世講青及：來函已收到矣。志學情殷，懇懇欲奉愚為師，夫愚之醫學，豈足為人師哉。然良驥呈材，志在千里，而識途之效，或有時少資於老馬。愚今年過花甲矣，少承家訓，自幼學即留心醫藥，至弱冠即為人疏方，浮沉醫界者，四十餘年。猶幸精神不衰，記憶如舊，診病餘暇，即研究醫學，而心力能到之處，亦時啟新悟。今特即管窺所見及者，為世講粗陳習醫門徑，其大綱約有三則。

一在明藥性。《神農本經》為講藥性之祖，勝於後世本草遠矣，然亦間有不可靠之時，或藥性古今有變更，或地道生殖有優劣，或因古人書皆口授，次第相傳，至筆之於書時，其中不無差誤，故欲審定藥性，須一一自家親嘗，或臨證時檢對證之藥但以一味投之，以觀其效力。拙著《衷中參西錄》中，恒單用生石膏數兩，退寒溫大熱；單用山萸肉數兩，治氣虛汗脫；單用生山藥數兩，治陰虛灼熱；曾單用萸仁數兩，治外感結胸；曾單用赭石數兩，治嘔吐兼結證上下不通，若此者非行險也，皆幾經嘗試，確知其藥之能力性質，而後敢放膽用之，百用不至一失也。至於猛烈有毒之藥，雖不敢輕施於人，亦必自少少嘗試，漸漸加多，以確定其藥性何如，乃知書之所謂猛烈者，未必皆猛烈；所謂有毒者，未必皆有毒，故《衷中參西錄》中所用生硫黃、生水蛭諸藥，而皆另有發明也。

一在調藥方。古人之方，恒大寒大熱並用，如《傷寒論》梔子乾薑湯，梔子、乾薑並用；附子瀉心湯，附子、黃連並用；生薑瀉心湯、甘草瀉心湯，皆乾薑、

黃連並用，又如《金匱》風引湯、小青龍加石膏湯，皆乾薑、石膏並用，至腎氣丸，本方原乾地黃（即藥房生地）與桂、附同用，取其涼熱相濟、水火均調以奏功也。後世改用熟地，因其性偏於熱，又恒去桂、附為六味丸，性雖和平，而一派滯泥，較之八味之原方迥不如矣。由斯知古方大寒、大熱並用，原各具精義，《衷中參西錄》中拙擬之方百餘，多係步趨先民規矩而少參新解，可細閱也。

一在審病機。一證之隨時更變，始終原不一致，貴以吾人之精神息息與病機相赴，如《衷中參西錄》第六卷載治一少年傷寒，已過旬日，陽明熱實，大便燥結，原是承氣湯證。因脈數，恐降後不解，投以白虎湯，一日連進二劑，冀其大便因涼潤自通也。至晚九點鐘，火似見退，而精神恍惚，大便仍未通下，再診其脈，變為弦象。夫弦主火衰，亦主氣虛，知此證清解已過而大便仍不通者，因氣分虛弱，不能運行白虎湯涼潤之力也。遂俾單用野臺參五錢煎湯服之，須臾大便即通，病亦遂愈。又載治一年過七旬之媪，得傷寒七八日間，其脈洪長有力，表裡俱熱，煩渴異常，大便自病後未行。因其年高且煩渴太甚，不敢遽用降藥，投以白虎加人參湯。一劑，大便隨通，一日降下三次病稍見愈，而脈仍洪長。細審病因，當有結糞未下，遂單用大黃三錢煮數沸服之，下結糞四五枚，病從此遂愈。又載治一少年患傷寒，經醫治愈，因飲食過度反復，三四日間，求為診視。其脈洪長有力，投以大劑白虎湯治癒，脈靜身涼，毫無他證。隔兩日，復來相迎，言病人反復甚劇，有危在頃刻之虞，因思此證治癒甚的，何遽如此反復？及至見其

痰涎壅盛，連連咳吐不竭，精神恍惚，言語錯亂，身體顫動，殮服已備，診其脈象和平，微嫌胃氣不能暢行脈中。因恍悟曰「前因飲食過度而復，此必又因飲食過少而復也」，其家人果謂有鑒前失，所與飲食誠甚少。愚曰「此次無須用藥，飽食即可愈矣」，時已屆晚八點鐘，至明飲食三次，每次仍樽節與之，病若失。統觀以上三案，若少涉粗心，不能細審病機，即可誤人性命。是以愚每臨一險證，恒心力盡瘁。古人云良工苦心，愚於醫道原非良工，然對於病機疑似之間，莫不慘澹經營，固四十年如一日也，此不足為外人道，可為世講粗陳之耳。

復冉雪峰問創建醫學堂規則書

雪峰仁兄雅鑒：為創建醫校，殷殷馳書下問，足見提倡醫學之深心也。特是弟才庸識淺，何敢言千慮一得，而重違兄命，敢略陳芻蕘之言以備採擇。漢趙充國云「百聞不如一見」，此論用兵也，而用藥等於用兵，故學醫者亦耳聞不如目睹。醫學校當與醫院並立，合為一事，以醫院中大夫充醫學校中教員。眾學生平日聞於師者，及見師之臨證處方與所言者，若合符節，所治之病又皆能隨手奏效，則學生對於經見之證，異日經手自療，自然確有把握也。所可慮者，教員講衍，無善本講義可遵，不得不仍取《內經》、《難經》、《傷寒》、《金匱》諸書為講義，然如此以教學生，取徑太遠，非闡十年之功於此等書，不能卒業，即使能卒業矣，果能得心皆應手乎？是以弟在醫院中教導學生，不敢徒慕高遠，惟授以拙著《醫學衷中參西錄》，俾其自閱，於難領略處亦間為講解。其中一百六十餘方，需以三年之久，大抵學生能歷睹弟用諸方以治癒諸證，是以三年期滿，皆能行道救人，此非謂《內經》、《難經》諸書可廢也，因古籍緊要之處，已粗搜羅於拙著之中而便於領會也。我兄醫界國手，負時重望，當廣搜群籍擷其精，參以西學擇其粹，獨出見解，發古人所未發，補中西所未備，撰為醫學新講義，以教導生徒，誠千古之慧業也，濟世之仁術也，豈不美哉。兄其勉旃，弟日望之矣。



復劉希憲書

捧讀瑤章，對於拙著溢分譽揚，不禁感愧交集，至推為知道，尤不敢任受。今之同善社非不佳，而弟未入者，誠以自古設壇講道，對大說法，止言清修工夫，此性學也。至有能於性學甚了悟者，而後秘密傳以命學，此在釋家為秘宗，在道家為教外別傳，試觀釋家五祖傳六祖時，因其偈語悟徹性功，然後夜半放舟湖中，授以命功，其慎密竟至如此。今即入同善社，其秘密者能驟聞乎？蓋但修性功，可使靈魂長存而不能化身，若性命雙修，此身可化為玲瓏，體步日月而無影。久之，此身化為清氣，可步雲凌空，古所謂「白日飛升」者此也。究其道之入手，不外大易一陰一陽互為之根二語，蓋陰以陽為根，則陰可長存，陽以陰為根，則陽可長存，此天地之所以永久不敝也。人果能學天地互根長存之理，則亦可長存矣。由此知獨修一身者，固非房術採煉損人利己者更非矣。

宗弟相臣來函（名樹筠，直隸青縣張家營人）

自庚申年在鄂督署得覽《衷中參西錄》第一期大著，欽羨無似。歷試諸方，莫不應手奏效，如鼓桴之相應，真活人之金丹，濟世之慈航也。今聞我兄又撰醫論，凡同人本大著諸方及或有加減治癒之病證，皆可附載篇末，藉資參考，弟謹將數年來仿照《衷中參西錄》治癒之案，擇錄數則寄呈，如有可採，並乞附載醫論之後，實為榮幸之至。

定縣吳錫三偕眷寓漢皋，其妻病，服藥罔效，時弟服武昌督署務，診其脈，浮而無力，胸次鬱結，如有物杜塞，飲食至胃間，恒覺燒熱不下，仿第二卷首方參赭鎮氣湯之義，用野臺參六錢，赭石細末二兩。將二藥煎服，胸次即覺開通。服至二劑，飲食下行無礙。因其大便猶燥，再用當歸、肉苁蓉各四錢，俾煎服，病若失。

蘆臺北澗李子芳，年四十二歲，壬戌五月間，因勞碌暑熱，大便下血，且腹疼。醫者多用西洋參、野於朮、地榆炭、柏葉炭溫澀之品投之，愈服愈危。

小站王紹圃，余友也，代寄函詢方，並將病源暨前方開示。余閱畢，遂為郵去痢疾門中所載菩提丹四服，每服六十粒，日服一次。未幾，接復函，謂服畢血止，腹疼亦愈，極贊藥之神妙，近年用此丹治赤痢及二便下血，愈者甚多，神妙之譽非溢美也。

胞妹路姑，年四十餘歲，體素瘦弱，久患脾胃濕寒，胃脘時覺疼痛，飲食減少，常作泄瀉，完穀不化。因照泄瀉門中益脾餅原方，為制一料，服之即愈。為善後計，又服一料，永久祓除病根。

侄女秀姑，已於歸數載，因患瘰癧證成勞，喘嗽不休，或自汗，或心中怔忡，來函索方。余揣此係陰分虧損已極所致，俾先用虛勞門一味薯蕷飲，每日用生懷山藥四兩，煮汁兩大碗，當茶頻頻溫飲之。不數劑，喘定汗止，咳嗽亦見輕。繼又兼服泄瀉門中薯蕷粥，作點心用之，漸漸痊愈。其祖翁亦業醫，問此妙方出何醫書，答以二方皆出自友人新著《衷中參西錄》。因索書觀之，大為嘆服，余亦因知此二方之妙，後恒用之以治虛勞，救人甚夥。

河間裘幻因，年二十八歲，聰敏善書，寓天津，患咳嗽吐血，且咯吐甚多，氣分太虛，喘息迫促，上焦煩熱，其脈大而無力，右部尤甚，蓋血脫而氣亦將脫也，急用吐衄門保元寒降湯，加青竹茹、麥門冬各三錢，一劑血止。至第二劑，將臺參五錢易為西洋參一錢，服之而愈，方病相投，效如影響，洵不誤也。

河間劉君仲章，久仕鄂，年五十餘歲，漏瘡甚劇，屢治不痊，後兼泄瀉不止，蓋腸滑不固，故醫藥無靈，診其脈甚小弱，漸已成勞。囑其用泄瀉門薯蕷雞子黃粥，一劑瀉止，三服，精神煥發，十數日後，身體復原，此後凡遇虛瀉久不愈者，用之屢收特效。

湖北督署韓承啟，慶軒寅友也，其夫人年六旬，素多肝鬱，浸至胸中大氣下陷，其氣短不足以息，因而努力呼吸，有似乎喘，喉乾作渴，心中滿悶怔忡，其脈甚沉微，知其胸中大氣下陷過甚，肺中呼吸幾有將停之勢，非投以第四卷首方升陷湯以升補其大氣不可，為錄出原方，遵注大氣陷之甚者將升麻加倍服。一劑後，吐出黏涎數碗，胸中頓覺舒暢。又於方中加半夏、陳皮，連服三劑，病遂霍然，蓋此證因大氣下陷，其胸肺胃脘無大氣以斡旋之，約皆積有痰涎，迨服藥後，大氣來復，故能運轉痰涎外出，此《金匱》水氣門所謂「大氣一轉，其氣（水氣即痰涎）乃散」也，從此知《衷中參西錄》實為醫學家不可不備之要書也。後大氣下陷證數見不鮮，莫不用升陷湯加減治癒。

鄂督王子春將軍之如夫人，年十九歲，因殤子過痛，肝氣不暢，經水行時多而且久，或不時漏下，前服逍遙、歸脾等藥，皆無效，診其脈，左關尺及右尺皆浮弦，一息五至強，口乾不思食，腰疼無力，乃血虧而有熱也。遵將女科調經門安沖湯去耆、朮，加麥冬、霍石斛、香附米，俾服之。二劑血止，六劑後食量增加，口乾腰疼皆愈，繼將湯劑製作丸藥，徐徐服之，月事亦從此調矣。

湖北醫兵張某，患歷節風證，西醫名樓麻質斯，服其藥年餘無效，步履艱難，天未涼即著皮褲，診其脈，浮數有力，知為經絡虛而有熱之象，遂用痿廢門加味黃耆五物湯，遵注，熱者加知母，又加生薏米、鮮桑枝、牛膝、木通。服一劑覺

輕減，三劑離杖，五劑痊癒。近年用此方治痛風、歷節證，愈者甚多，若無熱者，即用書中原方，亦甚效驗。

津寓獻縣劉姓之嬰孩，抽綿風不已，夜半詢方，知病危急，適存有滄州敝號春和堂按小兒風證門所制定風丹，與以少許，服之立止，永未再犯，後屢用此方皆效，真保赤之良方也。凡藥局中皆宜照《衷中參西錄》所載原方，預製此丹，以備不時之需。

相臣哲嗣毅武來函（名燕傑）

前閱《紹興醫報》，有我師賜示習醫門徑三則，捧讀之下，頓開茅塞。尊著《衷中參西錄》第三期，受業反復細閱，方案之後所加精微詮解，莫不口誦心維。偶有會悟，輒能得心應手，臨證之際，即獲效果，是知《衷中參西錄》一書，奧妙無窮，特患不能精心探索以領取也。今敢即管窺所得，可實見諸臨證者，詳錄數則，以質夫子，至審病用藥之處有未盡合者，仍乞賜教。

族嫂年三十餘歲，身體甚弱，於季春忽患頭疼，右邊疼尤劇，以致上下眼瞼皆疼，口中時溢涎沫，唾吐滿地，經血兩月未見，舌苔黏膩，左脈弦硬而浮，右脈沉滑，知係氣血兩虛，內有蘊熱，挾肝膽之火上衝頭目，且有熱痰杜塞中焦也。為疏方用尊著藥性解赭石下所載治安東何道尹猶女之方加減，生赭石細末六錢，淨山萸肉五錢，野臺參、生杭芍、生龜板、當歸身各三錢。一劑左邊疼頓減，而右邊之疼如故，遂用前方加丹皮二錢，赭石改用八錢，服後不但頭疼悉愈，且口內涎沫亦無，惟月經仍未見。又改用赭石至一兩，加川芎二錢服下，翌日月事亦通。夫赭石向在藥物中為罕用之品，而此方用之以治頭疼，以治痰涎杜塞，以治月事不見，皆能隨手奏效，實赭石之力居多，然非吾師對於赭石盡力提倡，極口讚揚，燕傑何能用之而左宜右有哉。

又津埠三條石宋氏婦，年將四旬，身體羸弱，前二年即咳嗽吐痰，因不以為事，未嘗調治。今春證浸加劇，屢次服藥無效，診其脈，左部弦細，右部微弱，

數近六至，咳嗽，吐痰白色，氣腥臭，喘促自汗，午後發熱，夜間尤甚，胸膈滿悶，飲食減少，大便秘結，知其已成勞瘵而兼肺病也。從前所服藥十餘紙，但止嗽藥治其肺病，而不知子虛補母之義，所以無效，為疏方用《衷中參西錄》首方資生湯加減，生山藥八錢，玄參、大生地、淨萸肉各六錢，生牡蠣、生杭芍、生赭石各四錢，於朮、生雞內金、甘草各二錢。煎服二劑，汗止喘輕，發熱咳嗽稍愈，遂將前方去牡蠣，加萸仁、地骨皮各三錢，山藥改用一兩，赭石改用六錢，連服十劑，諸病皆愈，為善後計，俾用《衷中參西錄》泄瀉門薯蕷粥方，用生山藥細末八錢煮粥，調白糖服之，早晚各一次。後月餘，與介紹人晤面，言此時宋氏婦飲食甚多，身體較前健壯多矣，然此病本不易治，故服他醫之藥數十劑，寸效不見，乃病者喘逆迫促，竟能重用赭石以鎮安其氣，何用藥之奇而奏效之捷也。燕傑答曰「余得名師傅授耳」，介紹人似未遽信，因為詳細述之，乃大嘆服。

又族兄泰，年三十餘，素強壯無病，壬戌中秋，因在田間掘壑，勞苦過甚，自覺氣力不支，即在壑中吃煙休息，少緩須臾，又復力作，至晚歸家時，途中步行，覺兩腿酸木不仁，及至夜間，兩腿抽疼甚劇，適生在里，其弟扣門求為往治，診其脈，遲滯而細，號呼不已，氣逆不順，身冷，小溲不利，遂用《衷中參西錄》活絡效靈丹方，加白芍三錢，桂枝尖二錢，生薑三片。一劑腿疼大減，小便即利，身冷亦退，再劑，霍然痊愈。

又天津西門外王媪，年五十七歲，右膝蓋部發炎，紅熱腫疼，食減不眠，其嗣如珍延為診視，至其家，聞病者呼號不止，口稱救命。其右脈洪數有力，心悸頭眩，舌苔白而膩，大便三日未行，小便赤熱，按此足徵濕熱下注，予以活絡效靈丹，加生石膏六錢，知母、懷牛膝、生薏米各四錢，甘草梢一錢，囑服一劑。次日自能來寓，其疼減腫消，夜已成寐，尚云右臂酸疼，又即原方加青連翹、金銀花、油松節各二錢，服之痊愈。

又族侄婦，年二十餘，素性謹言，情志抑鬱，因氣分不舒，致四肢痙攣顫動，呼吸短促，胸中脹悶，約一晝夜，先延針科醫治，云是雞爪風，為刺凶門及十指尖，稍愈，旋即復作如故。其脈左部弦細，右部似有似無，一分鐘數至百至，其兩肩抬動，氣逆作喘，詢知其素不健壯，廉於飲食，蓋肝屬木而主筋，肝鬱不舒則筋攣；肝鬱恒侮其所勝，故脾土受傷而食少，遂為開《衷中參西錄》培脾舒肝湯，為有逆氣上干，又加生赭石細末五錢。囑服二劑，痙攣即愈，氣息亦平，遂去赭石，照原方又服數劑，以善其後。

又族姊適徐姓，年三十餘，有妊流產，已旬日矣，忽然下血甚多，頭暈腹脹，脈小無力，知為衝脈滑脫之徵。予以《衷中參西錄》固衝湯，加柴胡錢半，歸身二錢，服藥三劑即止。俾繼服坤順至寶丹以善其後。

又族孀母，年四十餘歲，身體素弱，因境遇不順，又多抑鬱，癸亥十月下旬，忽患頭疼甚劇，已三日矣。族叔來舍，俾生往診，及至聞呻吟不已，臥床不起，



言已針過百會及太陽兩處，均未見效，其左脈微細如絲，按之即無，右脈亦無力，自言氣息不接，胸悶不暢，不思飲食，自覺精神恍惚，似難支持，知其胸中之大氣下陷也。其頭疼者，因大氣陷後，有他經之逆氣乘虛上干也。遵用《衷中參西錄》升陷湯原方，升提其下陷之大氣，連服數劑痊愈。

又天津裕姓堂藥局同事曹希賢，年二十五歲，自春日患吐血證，時發時愈，不以介意，至仲冬忽吐血較前劇，咳嗽音啞，面帶貧血，胸中煩熱，食少倦怠，屢治罔效，來寓求診、左脈細弱，右脈則弦而有力，知其病久生熱，其胃氣因熱上逆，血即隨之上升也，為開《衷中參西錄》寒降湯方，為其咳嗽音啞，加川貝三錢，連服二劑，病大輕減。又服二劑，不但吐血已止，而咳嗽音啞諸病皆愈。又族嫂年三十五歲，初患風寒咳嗽，因懶於服藥，不以為事，後漸至病重，始延醫診治，所服之藥，皆溫散燥烈之品，不知風寒久而化熱，故越治越劇，幾至不起，後生於臘底回里，族兄邀為診視，脈象虛而無力，身瘦如柴，咳嗽微喘，飲食減少，大便泄瀉，或兼白帶，午後身熱顴紅，確係勞瘵已成，授以《衷中參西錄》第一卷首方資生湯，加炒薏仁、茯苓片、生龍骨、生牡蠣各三錢，茵陳、炙甘草各錢半，服二劑，身熱顴紅皆退，咳嗽泄瀉亦見愈，後仍按此方加減，又服六劑，諸病皆痊，囑其每日用生懷山藥細末煮粥，調以白糖服之，以善其後。

孫香蓀來函（名蕊榜，直隸鹽山趙毛陶人）

受業深痛家人遭遇疾病多為藥誤，於斯立志研究醫學，上自農軒，下至近代著述諸家，莫不詳閱深思，而卒未有心得。後讀我師《衷中參西錄》，如飲上池之水，覺心俱爽，對於醫理隔閡之處，莫不豁然貫徹，而臨證亦遂覺確有把握。噫！我師著述之功效，於醫界中可謂獨有千古矣，今將遵用師方所治大證驗案，擇尤列下，敬祈教正，藉供研究。

一、用衛生防疫寶丹治霍亂驗案

民國十三年六月，友人杜印三君之令堂得霍亂證，上吐下瀉，轉筋腹疼，六脈閉塞，生診視後，為開衛生防疫寶丹方，共研作粉，每次服一錢。服第一次，吐瀉稍止。服第二次，病即痊癒。

斯年初冬，陳列所第一科科长鄧子輔君之兒媳得霍亂證，時已夜半，請為診視。吐瀉轉筋，六脈皆無，心中迷亂，時作譫語，治以衛生防疫寶丹，初服仍吐，服至二次，脈即徐出而愈。

民國十四年六月，友人劉香南君之令正得霍亂證，香南冒雨至陳列所，請為診視，因日前其長子得熱瀉病，經津埠名醫數人，治皆不效，生為治之立愈，故其心中甚相信也。適天津縣地方物產展覽會是日開幕，實不能往，細詢病狀，為開衛生防疫寶丹方，服之即愈。

民國十六年五月，陳列所第三科科长趙信臣君之令堂得霍亂證，先延針醫放血不愈，請為診視。其手足逆冷、脈乍有乍無，頭出冷汗，吐瀉轉筋，俾服衛生防疫寶丹八十粒，藥力未行即吐出，繼服一百二十粒，吐瀉即止，翌日病大見，胸中覺悶，仍欲作嘔，診其脈細數，又因年高，為疏急救回陽湯方，重用赭石、朱砂，一劑而愈。

按：霍亂一證，古今中外無必效之方，惟我師所擬之衛生防疫寶丹，如金針暗渡，無論病因之或涼或熱，病勢之如何危險，投以此丹，莫不立愈，效如桴鼓之應，真千古未有之奇方，普渡眾生之慈航也。

## 二、用升陷湯治大氣下陷驗案

民國十五年冬，河東友人翟桐生之令堂，乳部生瘡，疼痛難忍，同事王德三君約往診視。翟君言「昨日請醫診治，服藥一劑，亦不覺如何，惟言誓不再服彼醫方藥」。生診視時，其脈左關弦硬，右寸獨微弱，口不能言，氣息甚微，病勢已危險萬分。生斷為年高，因病瘡大氣下陷，為開升陷湯，以升舉其氣，又加連翹、丹參諸藥，以理其瘡。一劑能言，病人喜甚，非按原方再服一劑不可，後生又診數次，即方略為加減，數服痊愈，後遇此證數次，亦皆用升陷湯加減治癒。

按：大氣下陷之理，古今方書皆未發明，是以遇此證而誤治者比比皆是。獨我師本生平大慧力以發為大慈悲，擬得升陷湯諸方，能使大氣之陷於九淵者可升

至九天，雖病至垂危之候，服之皆立能回生，即擬之九還神丹，曷以過焉，凡醫界同人，志在活人者，可不於此諸方加之意乎。

### 三、用安衝湯治癒下血證驗案

民國十三年七月，友人張竹蓀君之令堂，因籌辦娶兒媳事勞心過度，小便下血不止，其血之來瀝瀝有聲，請為診視，舉止不定，氣息微弱，右脈弦細，左脈弦硬，為開安衝湯，服後稍愈，翌日晨起，忽然昏迷，其家人甚恐，又請診視。其脈尚和平，知其昏迷係黃耆升補之力稍過，遂仍用原方，加赭石八錢，一劑而愈。

家族嬸有下血證，醫治十餘年，時愈時發，終未除根，民國十五年六月，病又作，請為診視，治以《傳青主女科》治老婦血崩方，遵師訓加生地黃一兩，一服即愈。七月，病又反復，治以安衝湯方，以其心中覺涼，加乾薑二錢。一劑病又愈。

斯年初秋，佃戶李姓之女，年十七歲，下血不止，面唇皆白，六脈細數。治以安衝湯，重用山萸肉，三劑而愈。

### 四、用生石膏治溫病驗案

民國十三年八月，財政廳友人張竹蓀之女公子，發熱甚劇，來詢方，為開生石膏一兩半，煎湯飲之，其熱仍不稍退，又來詢方，答以多煎石膏水飲之，必能見愈，竹蓀購石膏數兩，煮湯若干，渴則飲之，數日而愈。

斯年初冬，因兵革不靖，請假旋里，適生佃戶郭姓之女得傷寒證，三四日間陽明熱勢甚劇，面赤氣粗，六脈洪數，時作譫語，為開寒解湯，因胸中覺悶，加瓜蒌仁一兩，一劑病癒。

民國十四年春，同所俞品三君傭嫗之子，來津學木工，因身體單薄，又兼天熱，得溫病，請為診視，脈浮數而滑，舌苔白厚，時時昏睡，為開清解湯，生石膏用一兩，為其脈數，又加玄參五錢，一劑病癒。

民國十六年孟春，同事趙明仲君，江蘇人，得溫病，請為診視，滿面及口內皆腫，舌苔灰膩而厚，兩寸脈大於尺部一倍，為開白虎加人參湯，生石膏用二兩，以其舌苔灰膩，以生杭芍代知母，又加雲苓、滑石各五錢。其令親實業廳秘書張惠臣君適在座，見生石膏二兩，為之咋舌，趙君因知生治病多效，服之不疑，連服二劑，病始痊癒。以後張君有病，亦請為診治。

斯年仲春，俞品三君之三位女公子皆出瘟疹，生為診視，皆投以清解湯，加連翹、生地、滑石而愈。同時之患此證者，勢多危險，惟生投以此方，皆能遂手奏效，誠良方之可以活人也。

斯年仲夏，舍親傅立鐘得暑熱病，請為診視，面紅氣粗，兩寸脈弦硬而浮，兩尺細數，身體顫動，為開白虎加人參湯，生石膏用二兩。因其陰分虧損，為加大生地五錢，玄參五錢。又因脈浮，加青連翹三錢，一劑遍身涼汗而愈。

按：後世本草謂石膏煨不傷胃，此誠謬說，乃一倡百和，流毒無窮，直使患寒溫者皆入危險之境，此醫學中一大障礙也。我師為悲憫所迫，大聲急呼，喚醒醫界，謂石膏生用直同金丹，煨用即同鳩毒（謂煨石膏可代鹵水點豆腐，是以不可用），廣登報章，舉世醫界奉為圭臬，而流俗醫者，不明化學，猶堅執舊說，蠱惑病家，誤人性命，是誠孽由自作矣。

馬秀三來函（奉天義縣南關人）

去歲（乙丑）舍侄洪升患膈食，延醫診治，年餘無效，及病至垂危，諸醫束手無策，有舊戚贈一良方，言係《衷中參西錄》所載之方，名參赭培氣湯，服之立見功效，連服十劑，其病痊愈，後購全書讀之，見書中所載共計一百六十餘方，皆先生自擬，方後詮解精妙，驗案屢載，無一非挽回人命之金丹也。

蕭介青來函（漢口太和橋屏藩裡人）

三年前在黃陂，曾代友人田壽先作脈案一則，呈請夫子賜方，治其腹脹病。蒙賜一方，藥只三味（當歸、丹參、代赭石），無異金丹。服後，瘀血由大便而下者數升，旋即病癒。由此田君習醫，請精畫肖象者，照《衷中參西錄》所載尊容放大，懸於中堂，早晚朝拜，青每日陪參，因同席研究醫學數年，不敢以瑣屑上呈者，知夫子診務紛繁，著述匆碌恐瀆清聽耳。七八年來，讀夫子《衷中參西錄》及分載各醫報之鴻論，遵法施治，全活無算，真是無方不效。其所最效者，用十全育真湯治癒同學朱鳳岩之夫人虛勞病，此病曾經漢臬著名西醫江徐二君診治年餘，化費千元，不但無效，而且備後事矣。青見其所患與十全育真湯主治之病相同，為書原方服之，四劑病若失，群驚為神，因將《衷中參西錄》遍示眾人，即迷信西醫者閱之，無不服夫子立方之善，醫學之精矣。又用《瀋陽醫志》所載夫子論肺病治法，按期用藥，治癒余香亭、周丁氏二人，此皆西醫辭而不治之證也，夫子費盡心血，著書傳方，全活生命已不勝計，善人得厚報，青拭目而待焉。所有懇者，夫子前撰之西藥注射法，用以止血、清血，治痢疾、霍亂等證，載於泰縣鐸聲醫報，有益醫林非淺，不幸此報青所存者不知何以忽失，今欲照法學習，依據無從，此時泰縣醫報已停止出版，無處購買，不得已仍敬求夫子將注射之法及注射所需之藥料，並注射後以何中藥善後，撰一篇登諸各處醫學志報，以公諸



醫界，俾學者皆有所取法，不惟青一人感激莫名，凡我醫界中人，應莫不爭先快睹，欣喜異常也。夫子以啟迪後進為懷，諒能俯允所請歟。

周禹錫來函（名榮珪，四川涇南人）

久承師訓，獲益良多，景慕之誠，莫可名狀。今特將仿用《衷中參西錄》中諸方論治癒險證數則，謄清恭呈函丈，其有病雖治癒，而所用之方未盡吻合者，仍乞夫子多賜指教，是所切盼。

楊姓女，年十九歲，出嫁二載，月事猶未見，身體羸瘦，飲食減少，乾咳無痰，五心煩熱，診其脈細數有力，仿用《衷中參西錄》資生湯方，用生山藥一兩，於朮二錢，牛蒡子三錢，玄參五錢，生地黃四錢，生雞內金一錢。連服五劑，熱退咳減，食欲增加，遂於原方中去生地，倍於朮。又服三劑，汛潮忽至，共服二十劑痊愈。

程姓男孩，年五歲，乳哺不足，脫肛近四載，醫不能治，其面白神疲，身體孱弱，大腸墜出二寸許，用手塞入，旋又墜出，其脈濡弱無力，呼吸促短，狀若不能接續。知其胸中大氣下陷，下焦之氣化，因之不能固攝也，仿用《衷中參西錄》升陷湯方，用生箭耆四錢，知母二錢，桔梗、柴胡、升麻各一錢，潞參、淨萸肉各三錢，煎湯一盅，分兩次溫飲下。連服二劑，肛即收縮，乃減去升麻，再服三劑，痊愈。

熊姓叟，年近七旬，精神矍鑠，平素喜服熱藥，桂、附、參、茸諸品，未嘗一日去口。十餘年間，安泰無病，自以為服熱藥之功，而不知其因稟賦敦厚也。客秋患白痢，醫者見其平素多服溫補，疑其體弱受寒，治以附子理中湯，不效。

旋又利下清穀，腹中痛滿，直認為寒瀉無疑，仍投以大劑附子理中湯，雜以消導之藥，服後病益劇，繼增發厥，醫者斷為高年氣血兩虧，病在不治。其婿魏君倩生往診以決吉凶。其脈沉伏幾不見，莫辨虛實，舌上無津，惟目光閃灼有神，言語急促似喘，所下極惡臭，直斷為熱邪內伏，陽極似陰之候。擬用生石膏四兩，生山藥、鮮石斛各一兩，白頭翁、天花粉各五錢為方。病家睹方駭甚，生曉之曰：「尊翁資稟甚厚，宜享高年，其平素過服熱藥而能受者，亦稟賦過厚之故，然附子有大毒，含麻醉性，如鴉片然，久服雖未見害，而藥癮已成，其毒性與血化合，真陰已暗耗甚多矣。今病若此，顯係腸胃之陰液（中含有稀鹽酸能化食）已竭，而失其濡潤消化之力，故下利清穀，以其惡臭似熱釀成，故確斷其為熱無疑。且四肢發厥，熱傷筋也。熱深者厥亦深，因內有伏熱，故厥而手足搖擗也。目為五臟之精華，今日光閃灼，陽有餘也。言語急迫，火逆上衝也。若不急急瀉熱救陰，恐有頃刻亡陰之勢」，病家聞之似有會悟，始敢將藥煎服，服後諸病未退，轉加煩躁，知藥劑猶輕，不能勝病也，遂仍用前方，將生石膏倍作八兩，煎湯數杯，徐徐服下，一日夜連進二劑，厥止手足已溫，下痢亦疏，再倍加生山藥為二兩，又服二劑，其痢已愈強半，乃將石膏減為二兩，去白頭翁，加白芍五錢，甘草三錢，又服三劑，病始霍然。

按：醫界多忌用生石膏，謂煨之始不傷胃，獨夫子則謂石膏生用，其性涼而能散，以治外感實熱直同金丹，若煨之則性專收斂，能將外感之痰火斂住，直同

鳩毒，此誠開天闢地之名論也。惟篤信師訓，故敢放膽重用生石膏，以挽回此垂絕之人命也。

曾姓媪，年過六旬，春間患溫病，醫者見其年老體弱，於桂、麻、羌、獨發表藥中，雜以歸、芎養血等藥，服後神識漸昏，舌苔燥黑，身熱而厥，其家人惶急，日更十餘醫，咸云莫救，延生往視時，氣息奄奄，僅存一線，其脈細數欲絕，動而中止，心愴愴然大動，舌卷乾黑，煩躁不寧，汗出如油，證本不救，躊躇再四，強為擬復脈法，以救其逆。方用生龜板、生龍骨、生牡蠣、生地黃各一兩，生杭芍六錢，生棗仁五錢，大麥冬、粉甘草各八錢，花旗人參四錢，濃煎汁一大盅，俾分兩次服。初服一次，煩躁益甚，病家恐極。生曉之曰「此勿恐，藥輕不勝病也，再服一次即安矣」，遲片時，將餘半服下，沉沉睡去，約三點鐘始醒，醒後神識漸清。再診其脈，猶無起色，俾將藥渣煎服。明晨往診，脈息稍和，仍有結象，據云昨夜思食，已進藕粉羹半盞、生俾其再服時，可改用山藥粥。至所服之藥仍用前方。一劑病勢大減，三劑後已起床矣。繼用益胃養陰之藥，調理數日痊愈。生因熟讀《衷中參西錄》，見書中之方，龜板、龍骨、牡蠣芍藥諸藥皆生用，取其涼潤滋陰，本性純全，生效而用之，如此重病，竟能隨手奏效誠得力於師訓者多也。

張讓軒來函（直隸唐山老莊之人）

自去秋得讀貴著，朝夕研究，深歎先生於軒岐妙法，獨具機杼，而仲景之心傳，昭然若揭，融貫中西，抉精闡微，涵蓋群倫，莫名崇仰。鄙人得之，茅塞頓開，奉之如至寶，茲有大證三人，用先生法而起者，備陳於下。

張灼芳，年二十八歲，小學教員，於去歲冬月初，得膏淋，繼之血淋，所便者，或血條，或血塊，後則繼以鮮血，溺頻莖疼，屢經醫者調治，病轉加劇。其氣色青黑，六脈堅數，肝脈尤甚，與以淋濁門理血湯，俾連服三劑，血止，脈稍平，他證仍舊，繼按淋濁門諸方加減治之，十餘劑痊愈。灼芳謝曰「予得此證，食少不寐，肌肉消瘦，月有餘，屢治不效，病勢日增。不意先生用藥如此神妙，竟能挽回垂危之命」，愚謂之曰「此非我之能，乃著《衷中參西錄》張壽翁之大德也」，如以此證言之，非先生之妙方，未有能治癒者。

又堂弟價儒，年二十九歲，因去秋土匪橫起，焚莊搶掠，晝夜戒嚴，價儒在城經理商務，焦勞尤甚，寢食不安，今正遂得極虛之證。兩顴泛紅，氣短聲微，精神頹憊。醫者用玄參、生地、丹皮等以滋其陰，乃誤以氣短為鬱，又加枳殼以開之，其氣益弱，胸益滿，遂迎愚往治，診畢謂之曰「此病以內外之證觀之，陰陽俱虛之候也。且脈象沉細而澀，名曰虛中兼澀，平日有鬱故也。胸脅雖有阻滯，非有實物，乃腎不納，肺不降也，氣短聲微可徵也。何堪再用開破之藥以重虛之

乎」？遂遵虛勞門諸方，補其肝腎，化其凝滯，數劑向愈。又養之百日，而始恢復原狀。

又價儒之內，以其夫病勢沉重，深恐難起，憂慮成疾，心內動悸，痞塞短氣。醫者為痰鬱，用二陳湯加減清之，病益加劇。因鑒其父為藥所誤（其父為尊郡名儒，因下痢十餘日，醫用大黃四錢降之，覆杯而卒），遂停藥不敢服。此際愚正在城中為價儒調治餘病。俟愚來家求診，見其滿面油光，兩手尺寸之脈皆極沉，惟關脈堅而有力。愚曰「此乃胸中大氣下陷，何醫者不明如是，而用清痰之二陳也。今兩關脈之堅弦，乃彼用藥推蕩之力」，診際，大氣一陷，遂全身一戰，冷汗滿額，心即連次跳動十餘次。遂用大氣下陷門中之升陷湯，再仿逍遙散、炙甘草湯之意，提其下陷之氣，散其中宮之滯，並以交其心腎。一劑而三部平，大氣固。嗣因尺中太微，而理氣藥及升、柴等藥皆不敢用，遂按大氣下陷門之意及虛勞門之法，精心消息，調治而愈，今食量增加，氣日壯矣。此三人病癒甚喜，屢請愚函謝先生著書以治人之德，故將三人之病詳細報告於上下也。

席文介來函（湖北當陽縣人）

壽甫夫子德鑒敬啟者：介自幼小，身體羸弱，氣力極不充足。民紀己未秋畢業於湖北省立荊南中學校，庚申夏即在家設立國民學校，因學童年幼不會聽講，每上堂必大聲講演，務使能懂方休，如是三年，已覺勞苦。迨至今春，忝列為敝縣模範高小學國文教員，兼高二年級主任，早起遲眠，疲憊異常，每上堂授課恒覺氣短舌蹇，講解困難，有時話到舌邊不能說出，因之不敢對人談話。每看書不到兩行，即頭目眩暈，必倒床小睡，如此狀況頗感苦痛。暑期歸家讀夫子《衷中參西錄》至升陷湯，始知其病為胸中大氣下陷，遂用原方連服七劑，即覺神清氣爽，逢人談話亦不畏難，現到校中仍服此湯，不能舍去。噫！惟夫子則介之病不能治，獨恨路程遙遠不能親來受教，謹草此蕪語，藉作感謝云爾。

章叔和來函（名洪均，安徽績溪長安人）

言之不能適諸實用，雖揚厲鋪張，動人聽聞，終難取信而遠傳也。學之不能有益世界者，雖文章錦繡，風靡一時，亦難久存而罔替也，故惟經濟之學，賴以治平戡亂，醫藥之學，賴以卻疾衛生，其學不同，而愛國救民之心則同，所以古豪傑之士不得大用於世者，類皆從事醫藥，藉以伸其平生之願力，此范文正之矢志不為良相必為良醫也。均不幸生而體弱多病，初曾攻習儒業，屢與儕輩角逐文場，繼以幾為藥誤，憤而銳志學醫，惟良師難逢，欲然以未得真傳為憾。因廣購書籍，朝夕鑽研，更訂閱醫藥各報，冀擴新知，且得以諗識時賢之學問，心折於先生者已數年矣。吾道長城，巍然在望，獨恨未能早讀先生之書，僅於諸報端少睹先生之零星筭記，碎錦瓣香，盡屬佳珍，迴圈涵詠，新義迭出，一再觀摩，不覺五體之投地也。去歲仲冬，旬日之間，遵先生大氣詮、赭石解二著之論治方法，治癒兩大危險之證，敢附崖略，以昭確效云。

一距均家二里之朱家村，有馮順昌者，務農而家小康，其母章氏，年正八秩，體豐善飯，一日忽覺左手麻痺，漸至不能持碗。越朝，方食面餅，攸然僵厥，坐向下墮，肢冷額汗，氣息僅屬，人皆以為猝中也，聚商救治，自午至晡，逐見危殆，來請均為籌挽救簡方，以老人素不服藥，且口噤鼻塞，恐藥汁亦難下嚥耳。均意謂年老久厥，詎能回陽，姑囑以紅靈丹少許吹鼻中，倘嚏氣能宣通，再議用藥，乃藥甫入而嚏作，似漸蘇醒，然呼吸甚微，如一線遊絲，恐風吹斷，先按口



鼻，溫度甚低，音在喉中，猶言誓不服藥。診其脈，則沉微，察其瞳，亦渙散，遂確定為大氣下陷，但值老年，勢難遽投重峻之劑，爰照升陷湯方而小其劑，用生箭耆一錢五分，知母八分，淨萸肉一錢，柴胡四分，升麻三分，煎服須臾，即漸有轉機，續進兩劑，逐次平復，繼俾服潞黨參，每日二錢，加五味子五粒，廣陳皮少許，頻飲代茶，今春見之，較未病前更倍康強矣。

又距均家五里之魚鱗溪，有洪瑞璋者，年五十餘，家素貧苦，曾吸鴉片，戒未多年，由咳而成喘疾，勉強操勞，每屆冬令則加劇，然病發時亦往往不服藥而自愈。茲次發喘，初由外感，兼發熱頭痛，醫者投以二活、防、葛，大劑表散，遂汗出二日不止，喘逆上衝，不能平臥，胸痞腹脹，大便旬餘未行，語不接氣，時或癱瘓，種種見證，已瀕極險，診其脈，微細不起，形狀頹敗殊甚，詳細勘視，誠將有陰陽脫離之虞。適日前閱赭石解，記其主治，揣之頗合，但恐其性太重鎮而正氣將隨以下陷也，再四躊躇，因配以真潞黨參、生懷山藥、野茯神、淨萸肉、廣橘紅、京半夏、龍骨、牡蠣、蘇子、葶子等，皆屬按證而擬，竟與《衷中參西錄》中之參赭鎮氣湯大致相同，一劑病癒大半，兩劑即扶杖起行，三劑則康復如恒矣。前月遇之，自言冬不知寒，至春亦未反復，似有返老還童之嘉概，感頌均德不輟口。蓋其有生以來，從未服過功力大著之藥，今連投數重劑，復與病機吻合，宜乎效倍尋常，不亞瓊漿玉液也。綜此兩證，皆瀕極危地步，乃因先生之方，遂得著手回生，忝獲嘉譽，先生殊大有造於均，寸衷銘感，固當永矢弗諼矣。

嗣此仰慕先生之情愈切，思見先生之書倍殷，幸近承無錫周小農先生郵來大著《衷中參西錄》三期及《藥物學講義》，至寶乍得，夙願喜償，盥薇敬誦，茅塞頓開。且欣悉尚有醫論、醫案二編，亦陸續出版，改良醫藥，樹之先聲，嘉惠學者，示以門徑，前途之造就，正未可量也。若夫以成績言之，則經先生親手所治療，暨用書中之方治療者，人數當以萬億計，此書誠先生傳道之準繩，所以卻疾以保命、衛生以延齡，識藥而加格致，附案而存為法程者，靡不盡係於茲也。竊嘗細繹大，議論則扼要而簡，制方則妥切而必效，遠紹軒岐長沙之統緒，旁採西歐東亞之菁華，經數十年之躬親試驗，成數十萬言之美善模型，誠屬醫林之木鐸，不啻苦海之慈航也，爰不揣蕪陋，抒誠紀實，冒昧呈質，深冀先生之不我遐棄，進而有以益之，並願藉以告諸同道，凡抱有愛國救民之熱忱者，盍爽然省悟，共取師資於斯編，行見國學昌明，人壽增進，可翹足而俟也。

盧月潭來函（名保圻，山東德州人）

上月中旬，四弟專差送來《衷中參西錄》三期全部。急展讀，有我夫子尊象，猶如覲面受教，景慕異常，不覺以首投地，再拜致敬，侄數年遵斯書治癒各大證不勝紀，茲略陳數則，其有用藥未吻合處，尤乞賜教。

族侄孫雲倬，患腸結證，纏綿兩月有餘，城內外及德州附近各名醫，無人可請，更醫數十人，服藥百餘劑，不但無效，轉大增劇。伊亦以為無人能治，無藥可醫，氣息奄奄，殮服已備。後接夫子信（曾為去信服《衷中參西錄》中赭遂攻結湯），即攜《衷中參西錄》往視，幸伊心神未昏，將赭遂攻結湯方查出示之。伊素知醫，臥觀一小時，即猛起一手拍胸，言我病即愈，幸不當死。立急派人取藥，服後片刻，腹中大響一陣，自覺其結已開，隨即大瀉兩三盆，停約兩句鐘，又瀉數次，其病竟愈，隨即食山藥粉稀粥兩茶杯，繼用補益濡潤之藥數劑以善其後。伊之全家，至今永感不忘。

崇臺五家兄，患偏枯，延醫十餘人，調治兩年餘，終未見效，後又添眩暈，終日自覺不舒，後侄查照《衷中參西錄》各方加減，用臺參、黃耆、淨莢肉各一兩，龍骨、牡蠣各六錢，玄參五錢，秦艽、虎骨膠、鹿角膠（二膠融化兌服）各三錢，共九味為方，日日常服。雖未大愈，而頗見輕減，至今一離此藥，即覺不舒，去年八月，因數日未服藥，忽然眩暈，心神忙亂，大汗淋漓，大有將脫之勢。猶幸家中存有斯藥兩劑，趕緊隨煎隨服，頭煎服完，心神大定，汗亦即止，一夜

安睡，明日照常。蓋家兄之證，陰陽俱虛，故一離此藥，即危險如是也。然治病貴乎除根，擬得暇自到院中，面述詳細，敬求夫子特賜良方，家兄之病當有痊愈之日也。

又五家嫂及內子兩人，係因家務心力煎勞，自覺無日不病者，五家嫂怔忡異常，每犯此病，必數日不能起床，須人重按其心，終日面目虛浮，無病不有，而內子則不但怔忡，寒熱往來，少腹重墜，自汗、盜汗，亦無定時，面目手足及右腿無日不腫，而兩人丸藥日不離口，不但無效，更漸加劇。後侄查《衷中參西錄》大氣下陷一切方案，確知兩人皆係大氣下陷無疑，服升陷湯數劑，並加滋補之味，而各病若失，現今均健壯如常矣。

又介受族嫂，因逃荒驚恐，又兼受暑，致患痢兩月餘，服藥無效，益加沉重。侄為開烏梅六個，山楂兩半，煎湯送服益元散四錢，去皮鴉蛋子四十，煎藥渣時，亦如此送服。一劑病若失。後介受兄見侄云「我弟如此妙方，果從何處得來？真不亞仙丹矣」，侄即答云「此有名師傳授，非弟之能也」，因詳述得力之由，介受兄亦殊嘆服，略將家族中所治癒者數則錄出，以敬質諸夫子，其餘所治諸案，容異日進謁時覲面述之。

董壽山來函（名仁清，滄縣董程家林人）

壽甫夫子函文：睽違塵教，轉瞬一載，景仰之忱，時形夢寐。曩蒙惠賜《衷中參西錄》三期版，診治之暇，即捧讀不釋於手，但學陋識淺，難悟玄妙，惟遇有與書中證脈顯然者，遵法施治，無不應手奏效。《衷中參西錄》一書，真可為濟世之慈航也。謹將所治緊要之案，詳列於下，病雖治癒而用藥有未盡合，仍乞賜教。

邑趙家莊趙紹文，患溫病，醫者投以桂枝湯，覺熱渴氣促，又與柴胡湯，熱尤甚，且增喘嗽，頻吐痰涎，不得臥者六七日。醫者謂病甚重，不能為矣，舉家聞之，惶恐無措。伊弟紹義延為診治，既至見病人喘促肩息，頭汗自出，表裡皆熱，舌苔深灰，縮不能言，急診其脈，浮數有力，重按甚空，因思此證陽明熱極，陰分將竭，實為誤服桂枝、柴胡之壞證，急投以白虎加人參以山藥代粳米湯，更以玄參代知母。連服兩劑，渴愈喘止，脈不浮數，仍然有力，舌伸能言，而痰嗽不甚見輕，繼投以從龍湯，去蘇子，加人參四錢，天冬八錢。服七劑痊愈。

又紹文之族弟婦，年三十二，偶得外感，醫者與以麻黃湯，出大汗二次，竟身軟無力，胸滿氣短，寒熱如瘧，間日一發，非大汗一身，熱不能解，解後汗仍不止，有本莊醫者投以截瘧七寶飲，寒熱更甚，診其脈，浮大無力，沉部緊澀。謂病家曰「此非瘧疾。脈浮大無力者，大汗亡陽也。沉部緊澀者，血塞凝滯也」，病人云「曩以產後受寒，致少腹作疼，已二年矣」，答曰「亡陽急證，宜先回其

陽，瘀血證從緩，從末治之可也」，為開生黃耆八錢，野臺參五錢，知母、附子、於朮各三錢，肉桂、甘草各二錢。服二劑，而寒熱不發，汗止思食。逾三日，又為開理衝湯，知母減半，加附子二錢，生水蛭三錢。進七八劑，瘀血行而愈，今生一女矣。

又一趙姓婦，年二十餘，產後八九日，忽得溫病，因誤用熱藥發汗，致熱渴喘促，舌苔乾黑，循衣摸床，呼索涼水，病家不敢與，脈弦數有力，一息七至，急投以白虎加人參以山藥代粳米湯，為係產後，更以玄參代知母。方中生石膏重用至四兩，又加生地、白芍各數錢，煎湯一大碗，分四次溫飲下，盡劑而愈。當時有知醫者在座，疑而問曰「產後忌用寒涼，何以如此放膽，重用生石膏？且知母、玄參皆係寒涼之品，何以必用玄參易知母」？答曰「此理俱在《衷中參西錄》」，遂於行篋中出書示之，醫者細觀移時，始喟然嘆服。

又馬家莊外祖家表妹，字於孫慶屯張姓，因產後病溫，服補藥二十餘劑，致大熱大渴、大汗，屢索涼水，醫者禁勿與飲，急欲投井，及生視之，舌黑唇焦，目睛直視，譫語發狂，診其脈，細數有力，問其小便赤澀，大便紫黑黏滯，不甚通利，蓋以產後血虛，又得溫病，兼為補藥所誤，以致外邪無由而出，內熱如焚，陰血轉瞬告罄，急投以白虎加人參湯，仍用山藥、玄參代粳米、知母。服後一夜安穩，黎明旋又反復，熱渴又如從前，細思產後血室空虛，邪熱乘虛而入，故大便紫黑，宜調以桃仁承氣湯，以下其瘀血，邪熱當隨之俱下，因小便赤澀，膀胱

蓄熱，又加滑石四錢，甘草錢半，乃開藥房者係其本族，謂此藥斷不可服。病家疑甚，復延前醫相質，前醫謂「此病余連治三次，投以溫補藥轉劇，昨服白虎加人參湯，既稍見輕，想服承氣湯亦無妨也」，病家聞之，始敢煎服，因方中大黃重用六錢，俾煎湯一盅半，分三次溫飲下，逾三點鐘，降下大便如膠漆者二次，鮮紅色者一次，小便亦清利，脈淨身涼而愈。

又外祖家觀濤表弟，由過力而得溫病，五六日竟熱渴飲冷，譫語不識人，脈洪數有力，左寸尤甚。夫溫病之脈，右盛於左者其常也，今則脈象如此，當係熱邪傳心，亂其神明，是以昏憤殊甚，急用犀角三錢，羚羊角二錢，生石膏二兩，甘草錢半，煎湯一大碗，分三次溫服，每次送服朱砂細末四分，盡劑而愈。

又王禦史莊趙希賢之子，年十九歲，偶得溫病，醫者下之太早，大便轉不通者十八日，熱渴喘滿，舌苔乾黑，牙齦出血，目盲譫語，腹脹如鼓，臍突出二寸，屢治不效，忽大便秘利，完穀不化，隨食隨即瀉出，診其脈盡伏，身冷厥逆，氣息將無，乍臨茫然不知所措，細詢從前病狀及所服之藥，始悟為陽極似陰，熱深厥亦深也。然須用藥將其滑瀉止住，不復熱邪旁流，而後能治其熱厥，遂急用野臺參三錢，大熟地、生山藥、滑石各六錢，煎服後，瀉止脈出，洪長滑數，右部尤甚，繼擬以大劑白虎加人參湯，生石膏重用至八兩，竟身熱厥回，一夜甚安。至明晨，病又如故，試按其腹中，有堅塊，重按眉皺似疼，且其腹脹臍突若此，

知其內有燥糞甚多。遂改用大黃一兩，芒硝六錢，赭石、萸仁各八錢，煎湯一大盅，分兩次溫飲下，下燥糞二十七枚而愈。

又朱程家林朱姓婦，產後旬餘，甚平順，適伊弟來視，午後食煮包一大碗，伊弟去後，竟猝然昏倒，四肢抽搐，不省人事，延為診視，六脈皆伏，當係產後五內空虛，驟而飽食填息，胸中大氣不能宣通，諸氣亦因之閉塞，故現此證。取藥不及，急用點天突穴及捏結喉法，又用針刺十宣及少商穴，須臾咳吐稠痰若干，氣順腹響，微汗而愈。



閻兆元來函（名國慶，奉天桓仁縣女子師範校長）

前歲有門人因事至沈，歸以先生所著之《衷中參西錄》相贈，慶每於課餘之際，捧讀不置，所謂實獲我心者也。繼有鄰居求為治病，辭之不獲，因採用書中各方，無不立奏膚功，而尤以治大氣下陷及痢證為最有效。客歲家慈得大氣下陷證，慶以向未行醫，未敢率爾用藥，遂聘本縣名流再三診治，終無效驗，遲至今歲正月初二日，氣息奄奄，迫不及待，遂急用第四卷之升陷湯，遵方後所注更番增減，按證投藥，數月沉疴，數日痊愈，此皆先生所賜也。獨恨雲山遙隔，未得追隨杖履，以親承教益耳。

楊鴻恩來函（奉天鐵嶺人，曾在奉天醫院從習醫學）

自離函丈，每懷教誨，時時無忘，生刻下所醫之病，俱用《衷中參西錄》方，莫不立竿見影，大起沉痾。本村張氏婦，得溫病，繼而小產，猶不以為意。越四五日，其病大發，遍請醫生，均謂溫病小產，又兼邪熱太甚，無方可治。有人告以生自奉天新歸，其夫遂造門求為診治。生至其家，見病人目不識人，神氣恍惚，渴嗜飲水，大便滑瀉，脈數近八至，且微細無力，舌苔邊黃中黑，縮不能伸。舉家泣問「此病尚可救否」？答曰「此病按常法原在不治之例，然余受名師傳授，竭吾能力，或可挽回」，為其燥熱，又兼滑瀉，先投以《衷中參西錄》滋陰清燥湯。一劑瀉止，熱稍見，繼投以大劑白虎加人參以山藥代粳米湯，為其產後，以玄參代知母，為其舌縮脈數，陰分大虧，又加枸杞、生地。煎湯一大碗，調入生雞子黃三枚，分數次徐徐溫飲下。精神清爽，舌能伸出。連服三劑痊愈。眾人皆曰神醫。生曰「此皆遵余師之訓也。若拘俗說，產後不敢用石膏，庸有幸乎。特是用石膏必須仿白虎加人參湯之義，而以參佐之耳，余師所著《衷中參西錄》中論之詳矣」。

又治本城李茶館婦人膨脹證，先經他醫用蒼朮、檳榔、厚朴、枳實、香附、紫葳之類辛燥開破，初服覺輕，七八劑後病轉增劇，煩渴泄瀉，又更他醫，投以紫朴琥珀丸，煩渴益甚，一日夜泄瀉十五六次，再診時，醫者辭不治，又延醫數人，皆諉為不治，後乃一息奄奄，昇至床上兩次，待時而已。其姻家有知生者，

強生往視。其脈如水上浮麻，不分至數，按之即無，惟兩尺猶似有根，言語不真，仿佛可辯，自言心中大渴，少飲水即疼不可忍，蓋不食者已三日矣。先投以滋陰清燥湯，為脈象虛甚，且氣息有將脫之意，又加野臺參、淨萸肉，一劑諸病皆愈，可以進食，遂俾用《衷中參西錄》一味薯蕷粥，送服生雞內金細末及西藥百布聖，取其既可作藥，又可作飯也。又即前方加減，日服一劑，旬日痊愈。

萬澤東來函（名沛霖，奉天法庫縣人）

壽甫夫子惠鑒：久違尊范，時深孺慕，自讀尊著《衷中參西錄》後，聊慰癡思，蓋日讀吾師之書，即不啻受教於尊前也。門生遵用書中各方，恒多奇效，而其奇之尤奇，直令門生感佩無已時者，更在一味薯蕷飲一方也。今敬為吾師詳細述之。

家慈患痰喘咳嗽病，三十年於茲矣，百方不效，且年愈高，病癒進，門生日夜憂思，以為不能救堂上之厄，不孝孰甚焉，然亦無可如何也。乃於今春宿病既發，又添發灼、咽乾、頭汗出、食不下等證。生雖習醫，此時惟戰兢不敢處方，遂請一宿醫診視，云是痰盛有火，孰知是肺氣與脾陰腎陰將虛竭也，與人參清肺湯，加生地、丹皮等味，服二劑，非特未效，遂發灼如火，更添泄瀉，有不可終日之勢，於是不敢延醫，自選用《衷中參西錄》資生湯方，服一劑，亦無顯效，轉思此時方中於朮、牛蒡、雞內金等味有未合也。因改用一味薯蕷飲，用生懷山藥四兩，加玄參三錢，服一劑見效，二劑大見效，三劑即病癒強半矣，後乃改用薯蕷粥，用生懷山藥一兩為細末，煮作粥，少調以白糖，每日兩次當點心服之。又間進開胃之藥，旬餘而安，似此，足見山藥之偉功，迥異於尋常藥品也。夫《衷中參西錄》中既有薯蕷飲，又復有薯蕷粥，方後各載有單用之治癒險證若干，以尋常服食之物，而深知其有殊異之功能，非吾師之卓識，何以及此哉。

又十年春，族弟婦產後虛羸少食，遷延月餘，漸至發灼、自汗、消瘦、乏氣、乾嘔、頭暈等證，此方書所謂葶勞也。經醫四人治不效，並添顴紅作瀉。適生自安東歸，為之診視，六脈虛數，檢閱所服之方，有遵《金鑒》三合飲者，有守用養榮湯者，要皆平淡無奇，然病勢至此，誠難入手，幸脈雖虛數未至無神，顴雖紅，猶不搏聚（若搏聚則陰陽離矣，不搏聚是其陰陽猶未離），似尚可治。此蓋素即陰虛，又經產後亡血，氣亦隨之，陰不中守，陽不外固，故汗出氣乏，其陰陽不相維繫，陰愈虧而陽愈浮，故發燒、咳嗽、頭暈。其顴紅者，因其部位應腎，腎中真陽上浮，故發現於此，而紅且熱也。其消瘦作瀉者，以二陽不納，無以充肌肉，更不特腎陰虛，而脾陰胃液均虛，中權失司，下陷不固，所必然者。此是病之原委歟？再四思維，非《衷中參西錄》資生湯不可，遂處方用生懷山藥二兩，於朮三錢，玄參四錢，雞內金、牛蒡子各二錢（此係資生湯原方稍加重），外加淨萸肉、龍骨、牡蠣各五錢，止汗並以止瀉。五劑後，汗與瀉均止，飲食稍進，惟乾咳與發熱僅去十之二三。又照原方加粉甘草、天冬生地等味，連服七劑，再照方減萸肉，加黨參二錢，服四劑後，飲食大進，並能起坐矣。惟經尚未行，更按資生湯原方，加當歸四錢，服數劑後，又復少有加減，一月經脈亦通。

又本年六月，生在輯安外岔溝緝私局充文牘，有本街邱雲閣之女，年十五，天癸已至，因受驚而經閉，兩閱月，發現心熱、心跳、膨脹等證，經醫治療未效，更添翻胃吐食、便燥、自汗等證。又經兩月，更醫十數，病益劇，適友人介紹為

之診視，脈浮數而濡，尺弱於寸，面色枯槁，肢體消瘦，不能起床。蓋兩月間食人即吐，或俟半日許亦必吐出，不受水穀之養，並灼熱耗陰，無怪其支離若是也。思之再四，此必因受驚氣亂而血亦亂，遂至遏其生機，且又在童年，血分未充，即不能應月而潮，久之不下行，必上逆，氣機亦即上逆，況衝為血海，隸屬陽明，陽明有升無降，衝血即隨之上逆，瘀而不行，以至作灼作脹。其心跳者，為上衝之氣血所擾也。其出汗吐食者，為上衝之氣血所迫也。其津液因汗吐過多而消耗，所以大便乾燥也。勢非降逆、滋陰、鎮心、解瘀之藥並用不可。查《衷中參西錄》第二卷參赭鎮氣湯及參赭培氣湯二方，實為治斯證之津梁，爰即二方加減，赭石兩半，當歸、淨萸肉、龍骨、牡蠣各五錢，白芍、肉蓯蓉、黨參、天冬、生雞內金各三錢，磨取鐵銹之水煎服。一劑病似覺甚，病家譁然，以為藥不對證，欲另延醫，惟介紹人主持甚力，勉又邀生再診，此中喧變生固未之知也。既診脈如故，決無病進之象，後聞有如此情形，生亦莫解，因反復思之，恍悟此必胃虛已極，兼胃氣上逆過甚，遽投以如此重劑，其胃虛不能運化，氣逆更多衝激，想有一番暝眩，故病似加重也。於斯將原方減半，煎湯一盅，又分兩次溫服下，並送服柿霜三錢，其第次服，仍吐藥一半，二次即不吐，服完此劑後，略進薄粥，亦未吐。病家始歡然相信，又連服三劑，汗與吐均止，心跳膨脹亦大見輕，惟灼熱猶不甚減，遂去淨萸肉、龍骨、牡蠣，加生地、玄參各四錢，服五劑後，灼熱亦愈強半，

如此加減服之，一月後遂能起床矣。適緝私局長調換，生將旋里，囑其仍守服原方，至諸病痊愈後可停藥勿服，月事至期亦當自至也。

賓仙園來函（名啟榮，廣西柳州人）

壽甫道長雅鑒：向閱醫報，屢睹名論卓卓，為醫界獨辟新境，大放光明，先生誠醫學之師表也。去歲仲秋，得睹大著《衷中參西錄》，盥手捧讀，如獲異珍。因試其方，遇心腹疼痛者數人，投以活絡效靈丹，皆隨手奏效。

又治一婦人，十七歲，自二七出嫁，未見行經。先因腹脅作疼求為診治，投以活絡效靈丹立愈。繼欲調其月事，投以理衝湯三劑，月經亦通，三日未止。猶恐瘀血未化，改用王清任少腹逐瘀湯，亦三劑，其人從此月事調順，身體強壯矣。

又治一婦人，年四十三歲，素因家務勞心，又兼傷心，遂患吐血。後吐血雖愈，而喘嗽殊甚，夜不能臥。諸醫率用枇杷葉、款冬花、杏仁、紫菀、貝母等藥治之。其後右邊面顴淡紅腫起，嗽喘仍不少愈，後仆為診治，先投以王清任少腹逐瘀湯加蘇子、沉香二劑，繼服書中參麥湯八劑，喘嗽皆愈。

又治一男子，年四十六歲，心中發熱作喘，醫治三年無效，僕為診視，先投以書中首方資生湯，遵注加生地黃六錢。一劑見輕，數劑病癒強半，繼用參麥湯數劑，病癒十之八九。然病已數年，身體羸弱，非倉猝所能復原，望先生賜惠，為擬一善後之方，既可治病，又可衛生，有病無病，皆可常服，則幸甚矣。僕年齒已加長，腦力記憶已非少年，恨未於十年之前得讀先生書耳，今蠢子嘉祥、嘉聖皆學醫數年，自睹先生醫書後，已命於尊照前行弟子禮矣。深望不棄，俾得側身私淑之列，異日或有問難，賜以片牘以當提示，栽培之恩，固當永矢弗諼也。



田聘卿來函（名毓珍，奉天開原人）

乙未春訪友赴省，在作新印書局購得貴著《衷中參西錄》攜歸，因忙碌未暇細閱，繼有汪漢章之內人患血痢十分危險，惡候俱見，醫皆束手。後珍診視，躊躇之間，忽憶《衷中參西錄》中有治痢之方，名變理湯，遂照原方俾煎服，其證頓覺輕減，又服一劑病若失，後照此方治痢，莫不隨手奏效，活人甚多。由此知此書誠堪寶貴，深加研究，恍若夜行得燈，撥雲見日，洵振古未有之奇編也。珍內子常患腹疼，疼劇時則嘔吐，屢次服藥不能除根，近遵書中既濟湯方，加赭石、吳茱萸、生薑，服後卻不疼不吐，後又減去赭石、吳茱萸連服三劑，至今數月未嘗反復，計迄今遵用書中之方將至一年，凡治癒喘證、噎證、心腹疼痛、歷節風證約近百人，而來日方長，以後遵用先生之書，又不知能拯救幾何人命也。

張右長來函（湖南常德縣神武巷人）

本年（乙丑）敝省久旱，數月不雨，赤地千里，秋收失望，哀鴻遍野，嗷嗷待哺，時下癘氣為災，霍亂流行，城鄉人民染此證而死於頃刻者，隨處有之。生將吾師《衷中參西錄》中急救回生丹、衛生防疫寶丹、急救回陽湯三方詳細錄出，呈請縣長印刷佈告，遍貼城鄉，並勸殷實紳商出款備藥，救活之人不勝數。又將三方詳登本埠報章，傳送各縣災區，無不欽佩吾師三方之效驗神奇，統核此次活人約以千計，多係三方所救也，宜袁霖普君稱為錫類推仁，功德無量也，惟城區人民病勢最重者，生主張先送往美立廣德醫院，注射鹽酸挽回生命於俄頃，注射後鼻歸再用中藥調治，甚為得法。其病因久旱不雨，燥氣伏於人身，乘秋涼汗少發現。唇焦、口渴，舌苔灰黑而有芒刺，餘皆為霍亂恒有之現象。生用連翹心、金銀花、晚蠶沙、玄參、生芍藥、麥門冬、石菖蒲、明雄精益元散諸藥，臨證擇宜投之，頗覺有效。其燥熱之甚者，亦間用生石膏，未知當否希訓示。

蔡維望來函（江蘇崇明縣協平鄉西新鎮人）

前蒙賜教，恍然會悟，繼得先生大著，益能心領神會，回憶畢業中學時，勞心過度，致患吐血，雖家祖世醫，終難療治，遍求名醫診治，亦時止時吐，及肄業大學時，吐血更甚，醫者多勸輟學靜養，方可望痊，乃為性命計，遂強抑壯志，輟學家居，服藥靜養，病仍如舊，計無所施，自取數世所藏醫書遍閱之，又汗牛充棟，渺茫無涯，況玉石混雜，瑜瑕莫辨，徒增望洋之歎也。幸今秋自周小農處購得《衷中參西錄》三期，閱至吐衄門補絡補管湯，知為治僕病的方，抄出以呈家祖父，命將藥劑減半煎服，頗見效驗，遂放膽照原方，兼取寒降湯之義加赭石六錢，連服三劑痊愈，從前半月之間，必然反復，今已月餘安然無恙，自覺身體漸強，精神倍加，不禁欣喜若狂而言曰「苦海浮沉，六度春秋。自顧殘軀，靈丹莫救，孰意得此妙方，沉痾頓消。從此前途餘生，皆先生之所賜也。惜關山遠隔，難報洪恩，惟深印腦海，神明常照而已」。僕今奉尊著若圭臬，日夜披讀，始知我崇風氣，畏石膏如猛虎而煨用，縱用生者不過二三錢，乳、沒、龍、牡等藥，煨用亦不過錢，即用之對證，亦何能愈病。

今季秋，敝處張氏之女得瘟病甚劇，服藥無效，醫言不治，病家以為無望。僕適在家叔經理之同德公司內，與為比鄰，其母乞求強僕往視，見其神昏如睡，高呼不覺，脈甚洪實，用先生所擬之石膏粳米湯（方載三期五卷），生石膏用三兩，粳米用五錢。見者莫不驚訝誹笑，且有一老醫揚言於人曰「蔡某年僅二十，

看書不過年餘，竟大膽若此！石膏重用三兩，縱煨透用之亦不可，況生者乎？此藥下嚥，人即死矣」，有人聞此言，急來相告。僕曰「此方若用煨石膏，無須三兩，即一兩亦斷送人命而有餘。若用生者，即再多數兩亦無礙，況僅三兩乎」，遂急催病家購藥，親自監視，煎取清湯一大碗，徐徐溫灌下，病人霍然頓醒，其家人驚喜異常，直以為死後重生矣。聞其事者，互相傳告以為異事，且有來相質問者。因曉之曰「《神農本經》原謂石膏微寒，非多用不能奏功，且其性涼而能散，故以清外感實熱，直勝金丹，煨之則涼散之性變為收斂，可代鹵水點豆腐，若外感有實熱者服之，能使人痰火凝滯，固結不散，外感之熱永無消路，其不死何待。蓋人皆誤信後世本草，謂石膏大寒，且言煨不傷胃，遂畏其大寒而煨用之。不知自後世本草有此數語，遂誤盡天下蒼生矣。余向者亦未能知，近因閱現時名醫著作，乃能豁然貫通」，因取《衷中參西錄》例言中所論石膏示之，其人細觀一過，喟然悅服，繼而熱瘧流行，經僕重用生石膏治癒者不勝計。浸至求治者無虛日，均照先生之方治之，莫不隨手奏效，未知何以能立諸多妙方以概治諸病，真令人欣佩無已也。然學無止境，願先生以後益廣為著作，遍行醫界，喚醒夢夢，斯固僕之馨香默祝者也。

李品三來函（名金恒，直隸滄縣城東孫家莊子人）

弟長男媳，年二十四歲，於本年（丙寅）正月間患寒熱往來，自因素畏服藥，故隱忍不肯言，迨兵革稍靜，弟赴滄時尚未知也。至四月初，家人來迓弟，言兒媳病劇，回家視之，雖未臥床不起，而瘦弱實難堪矣。診其脈，弦而浮數，細詢病情，言每逢午後先寒後熱，時而微咳無痰，日夜作瀉十餘次，黎明則頭汗出，胸間綿綿作疼，食一下嚥，即脹滿難堪，而諸虛百損之狀，顯然盡露。籌思良久，為立逍遙散方，服兩劑無效，因復至滄取藥，適逢張相臣先生自津來滄，遂將兒媳之病細述本末，因相臣先生為當世之名醫，故虛心以相質也。相臣先生曰「以弟之意，將用何方以治之」？答曰「余擬將《衷中參西錄》中資生湯、十全育真湯二方，匯通用之，可乎」？相臣先生曰「得之矣。此良方也，服之必效」，弟遂師二方之義，用生懷山藥八錢，生白朮、淨萸肉、生雞內金、生龍骨、生牡蠣、鮮石斛各三錢，丹參四錢，連服四劑，諸證皆大輕減。又於原方加三棱、莪朮（十全因虛勞之證用血痹藥）各一錢，粉丹皮、地骨皮各二錢。又連服八劑，諸病悉退，飲食增加，今已完全成功矣。此病治癒之後，恒喜不成寢，玩索籌思，始悟《衷中參西錄》有曰「至哉坤元，萬物資生」，此言天地間之萬物，莫不藉土德而生長，而人之臟腑氣血，亦莫不藉脾土而生長也。由此知我兄不徒精醫學，而尤深《易》理，闡明人之未發，啟後人之蒙昧，《衷中參西錄》一書誠於醫界大有裨益，醫界同人果皆於此書精心研究，醫學何患不振興哉。

李曰綸來函（名思綽，直隸鹽山花寨人）

壽甫仁兄道鑒：弟讀書之暇，喜觀方書，以為有關於衛生者甚大也。無如上古之書，簡奧難明，自漢季以後之書，又互相駁辯，令人無所適從，是以十餘年間，所閱之書近百種，而對於臨證，終覺毫無把握。戊午春得讀大著《衷中西參錄》，直如暗室得燈，撥雲見日，胸中疑團豁然盡釋，從此臨證，雖未能見垣一方，而已覺確有把握矣。今特將本《衷中參西錄》中方論治癒之證數則，詳陳於下，以明生平之所得力，其有疵瑕之處，尤乞不吝指教。

天津鍋店街東口義合勝皮店學徒奎祿，得溫病，先服他醫清解之藥數劑無效。弟診其脈象，沉浮皆有力，表裡壯熱無汗，投以書中寒解湯原方，遍身得汗而愈，由斯知方中重用生石膏、知母以清熱，少加連翹，蟬退以引熱透表外出，制方之妙遠勝於銀翹散、桑菊飲諸方矣，且由此知石膏生用誠為妙藥。從治癒此證之後，凡遇寒溫實熱諸證，莫不遵書中方論，重用生石膏治之。其熱實脈虛者，亦莫不遵書中方論，用白虎加人參湯，或用白虎加人參以生山藥代粳米湯，皆能隨手奏效，以之救人多矣。推本溯源，實皆我兄德惠所及也。

天津趙稚堂君夫人，年四十餘歲，行經過期不止，諸治不效，延弟診視。見兩部之脈皆微細無力，為開固衝湯原方予之，服數劑即全收功。因思如此年歲，血分又如此受傷，諒從此斷生育矣，不意年餘又產一子，安然無恙。蓋因固衝湯止血兼有補血之功也。又天津張華亭君夫人，年二十四歲，因小產後血不止者綿

延月餘，屢經醫治無效。診其脈象，微細而數，為開固衝湯方。因其脈數，加生地一兩，服藥後，病雖見輕，而不見大功，反復思索，莫得其故。細詢其藥價過賤，忽憶人言此地藥房所鬻黃耆，有真有假，今此方無顯著之功效，或其黃耆過劣也，改用口黃耆，連服兩劑痊愈，由斯知藥物必須地道真正方效也。

天津南關下頭王媪，得病月餘，困頓已極，求治於弟。診其脈，六部皆弦硬有力更粗大異常，詢其病，則胸膈滿悶，食已即吐，月餘以來，未得一飯不吐，且每日大便兩三次，所便少許有如雞矢，自云心中之難受，莫可言喻，不如即早與世長辭，脫此苦惱。細思胸膈滿悶，頗似實證者，然而脈象弦硬粗大，無一點柔和之象，遂憶《衷中參西錄》鎮攝湯下注云「治胸膈滿悶，其脈大而弦，按之有力，此脾胃真氣外泄，衝脈逆氣上干之證，慎勿以實證治之」云云，即抄鎮攝湯原方予之。服一劑，吐即見減，大便次數亦見減，脈遂有柔和之象，四五劑，即諸病痊愈，以後遇此等脈象，即按此湯加減治之，無不效如桴鼓，然非我兄精研脈理，諄諄為醫界說法，弟何由能辨此脈也。

活絡效靈丹治氣血凝滯諸疾，按方加減，大抵皆效，弟用之屢效，然間有不效之時，非方之不效，實因審證未細，所用之方未能與證吻合也。去歲仲冬，吾邑西崔莊劉耀南兄，係弟之同學，病左脅掀疼，諸治無效，詢方於弟，授以活絡效靈丹方，服之不應，因延為診視，脈象他部皆微弱，惟左關沉而有力，治以金

鈴瀉肝湯，加當歸數錢服一劑，翌日降下若干綠色黏滯之物，遂豁然而愈，蓋此湯原注明治脅下掀疼，由此知兄所擬方各有主治，方病相投，莫不神效也。

至諸方之中，效而且奇者，用鮮梨片蘸生石膏細末，以止寒溫證之嘔吐是也。丁卯中秋，曾治天津西廣開傅姓少年，患溫證，胃熱氣逆，無論飲食藥物下嚥即吐出，延醫治療，皆因此束手，弟忽憶《衷中參西錄》溫病門載治毛姓媪醫案，曾用此方以止嘔吐，即以清胃腑之大熱，遂仿而用之。食梨一顆，蘸生石膏細末七錢餘，其吐頓止，可以進食，然心中猶覺熱，再投以白虎加人參湯，一劑痊愈。以茲小小便方，能挽回人命於頃刻，即名之為奪命金丹，亦不為過也。



楊學忱來函（名繡章，天津北營門外曹家胡同五號住址）

繡章素習西醫，於中醫之書雖常披閱，實無心得，自在天津陸軍軍醫處充差，見夫子用自製衛生防疫寶丹治癒若干緊急危險之證，乃訝中醫藥中竟有如此靈妙出人意料之外者。丁卯季夏，小兒佐朝，年甫兩歲，因飲食不慎，偶染泄瀉，已服胃腸緩和藥三次未效，忽憶夫子所贈衛生防疫寶丹尚在囊中，先用十粒研細俾服下，瀉遂減少，隔四時又服十粒，即痊愈。後十餘日，侄女，年三歲，亦患泄瀉，與以十五粒服之，一次即愈。夫衛生防疫寶丹原為治霍亂良藥，而以治諸暴病皆效，以治小孩暑日泄瀉亦莫不效，因歎衛生防疫寶丹之妙用，幾於無病不宜也。

刁繼沖來函（江蘇崇明縣人）

素讀大著，字字金玉，中醫之賴以不取締者，先生之力居多也。繼沖近治一伏溫病，壯熱煩渴，脈來洪實兼數，大解十日未行，欲透其邪，則津液已衰，恐有汗脫之虞，欲通其便，則並無承氣確徵，細思此證，乃陽明熱久，真陰鑠耗。遵先生重用生石膏之訓，即用生石膏二兩，合增液湯，加鮮金釵石斛、香青蒿各三錢。病家疑忌，見者皆以為藥性過寒涼。余憤然曰「擇醫宜慎，任醫宜專，既不信余藥，請余何為」？病家不得已，購藥一劑，俾煎湯兩盅，作兩次服下，而熱勢益熾，病家疑藥不對證。余曰「此非藥不對證，乃藥輕不勝病耳」，遂俾將兩劑並作一劑，煎湯一大碗，徐徐溫飲下，移時汗出便通，病若失，眾人競推余重用生石膏之功，然不讀先生書，何能如此放膽，故詳書以報知先生，而先生提倡重用生石膏之功德，真無量哉！使醫界中人皆以先生之心為心，救人愈多矣。

高 硯 樵 來 函 ( 名 崇 勳 ， 煙 臺 同 善 社 )

夫子之書，博大精深，包含弘富固也。然一種仁慈愷惻之情浩瀚無極，而語本諸實驗，不設疑陣，不尚空談，果能心小膽大，遵用方論，莫不左右逢源，遂使讀斯書者，苟無先人之見橫互於胸，皆能心悅誠服，臨風膜拜也。勳於醫學，本無深切之研究，去秋於友人處得見大著，如獲拱璧，立即函購，並盡力宣傳，以為斯書多流通一部，即可多救無數之人命。是以會中同人，為先生忠純信徙者，已不乏人，皆能遵信書中方論，屢愈大證。其尤者，則為海關秦君甲先，此君年力方壯，勇於任事，實具心小膽大之天然資格，當夏秋之交，虎疫倡狂，被聘為煙臺防疫醫院救濟醫生，每遇霍亂之輕者，皆以衛生防疫寶丹取效，凡至吐瀉已極，氣息頻危之候，均放膽用急救回陽湯挽救，有照原方加至半倍者。又多有並非霍亂，經粗野針師，用寬扁之針放血至數碗，以致奄奄欲脫者，率以數兩莢肉、生山藥救其急，而以大劑既濟湯善其後。其有證本溫病，誤針放血欲脫，服既濟湯後脈象轉實，大熱大渴，輒用大劑白虎加人參以山藥代粳米湯，石膏有用至三兩者，率能得燥糞而愈。且衛生防疫寶丹方，傳諸四鄉，救人無算，據藥房云，紳商富家配製此藥施捨者，竟至一百六十餘料，每料以百服計，當治癒輕重之證萬人以上，我夫子制此方之功德，為何如哉！至於勳，因心鈍公忙，臨證之機會轉少，然內子大病半年，凡經危急三次，分別以石膏、莢肉、山藥大劑轉危為安，以有今日，此洵為舉家感德永世不忘者。再則以曲直湯，治癒肝虛腿疼兩月不能

覆地者一人。以清降湯加三七，治癒吐血甚重者一人。以重用赭石及既濟湯加三七，治癒大口吐血頻危者一人。以玉液湯，再每日用生山藥四兩煮水當茶，治癒數年糖尿證一人。以升陷湯加減，治癒大氣下陷者三人。以建瓴湯，治癒腦充血者四人。以雙理湯加三七，治癒血痢二人。以理衝湯，治癒小女數年癥瘕。至於衝氣上衝、胃氣不降，以降胃鎮沖湯加減治癒者，指不勝屈。是以同善社中同人，若王惠安、曲殿卿、徐航塵、林書丹、秦甲先、曲祖誼諸君，皆極信仰夫子，平常談及，皆以張老師相稱，據見傾倒之至也。

劉惠民來函（山東沂水城西鄉胡家莊協濟中西藥房）

今歲仲夏，沂水第一學區胡家莊初級小學教員楊希古先生之次女公子淑儒，年七歲，患疳疾兼大便下血，身形羸弱，不思飲食，甚為危險。前所服中西治疳積之藥若干均無效，來寓求治。後學檢視腹部，其回血管現露，色青微紫，腹脹且疼，兩顴發赤，潮熱有汗，目睛白處有赤絲，口乾不渴，六脈沉數，肌膚甲錯，毛髮焦枯，審證辨脈，知係瘀血為恙也。躊躇再四，忽憶及向閱《衷中參西錄》，見先生論用三七之特殊功能歷數諸多奇效，不但善於止血，且更善化瘀血。遂俾用三七研為精粉，每服七分，朝夕空心時各服一次，服至五日，而大便下血，又服數日，疳疾亦愈。用三七一味，治癒中西諸醫不能治之大病，藥性之妙用，真令人不可思議矣，然非先生提倡之，又孰知三七之功能如斯哉。

趙利庭來函（唐山啟新洋灰公司收發課）

自觀尊著後，治得驗案二則，敢敬報告。小女一年有餘，於季夏忽大便兩三次帶有黏滯，至夜發熱，日閉目昏睡，翌晨手足驚惕肉瞤，後學斷其肝風已動。因憶尊著第五期二卷中，先生論羚羊角最善清肝膽之火，且歷數其奇異之功效，真令人不可思議，為急購羚羊角尖一錢。上午九點煎服，至十一點周身得微汗，灼熱即退，為其藥甚珍貴，又將其渣煎服三次，驚惕亦愈，繼服三期五卷滋陰清燥湯一劑，瀉痢均愈。又二小兒年十二歲，右邊牙疼，連右腮亦腫疼，因讀先生自述治癒牙疼之經過，知腮腫係外感受風，牙疼係胃火熾盛，遂先用西藥阿斯必林一瓦，服後微見汗。繼用生石膏二兩，薄荷葉錢半，連服三劑痊愈。內子見兩次用《衷中參西錄》方治癒兒女之病，遂含淚言曰「《衷中參西錄》之方，用之對證，無異金丹。若早有此書，三小兒不至夭折」！言之若甚痛惜，舉家為之慘然，因從前三小兒之病，與小女相似，而竟未能治癒也。僕今言此，欲人知先生之書，若早置一編，以備查閱，洵堪為舉家護命之寶符，甚勿若僕有晚置此書之悔也。

吳宏鼎來函（安徽當陽護駕墩鎮）

孟夏二十三日，赤日晴天，鑠人臟腑，有太平圩陶國榮者，因業商，斯日出外買糧，午後忽於路中患吐血，迨抵家尚嘔不止，凌晨來院求治，診其脈象洪滑，重按甚實，知其為熱所迫而胃氣不降也。因夫子嘗推《金匱》瀉心湯為治吐衄良方，遂俾用其方煎湯，送服黑山梔細末二錢。服後病稍愈而血仍不止，診其脈仍然有力。遂為開夫子所擬寒降湯，加廣三七細末三錢，俾將寒降湯煎一大盅，分兩次將三七細末送服。果一劑而愈。由此知夫子對於醫藥新舊智識，可謂左右逢源。凡我同道研究古聖經方者，豈可不參觀時賢驗方哉。

王錫光來函（江蘇平臺）

自觀名著《衷中參西錄》以來，臨證之時奉為圭臬，皆應手奏效，今試略述之。

（一）大樊莊顧子安，患肢體痿廢，時當溽暑，遍延中西醫診治無效。錫光用《衷中參西錄》加味黃耆五物湯治之，連服數劑痊愈。

（二）鴻賓旅館主婦，產後乳上生癰，腫疼殊甚，延西醫治不效，繼延錫光診治，其膿已成，用針刺之，出膿甚多，第二日已眠食俱安矣。至第三日，忽神昏不食，並頭疼。其母曰「此昨日受風寒以致如此」，診其脈，微細若無，身無寒熱，心跳，少腹微疼，知非外感，當係胸中大氣下陷，投以《衷中參西錄》升陷湯，兩劑痊愈。

（三）小兒悅生，今年秋夏之交，陡起大熱，失常神呆，閉目不食，家慈見而駭甚，錫光因胸有成竹定見，遂曰「此無憂」，即用書中石膏阿斯必林湯，照原方服法，服後即神清熱退。第二日午際又熱，遂放膽再用原方，因其痰多而咳，為加清半夏、牛蒡子，服之痊愈。

（四）龍姓婦人，產後腹疼兼下，用通變白頭翁湯合活絡效靈丹治之，腹疼與下痢皆愈。

以上各節，設不讀尊著之書，何以能如此神效哉。



仲曉秋來函（柳河孤山子郵政局局長）

曉秋素羸，為防身計，故喜閱醫書。庚午季秋，偶覺心中發涼，服熱藥數劑無效，遷延旬日，陡覺涼氣上衝腦際，頓失知覺，移時始蘇，日三四發，屢次延醫診治不愈。乃病不犯時，心猶清白，遂細閱《衷中參西錄》，忽見夫子治坐則左邊下墜，睡時不敢向左側之醫案，斷為肝虛，且謂黃耆與肝木有同氣相求之妙用，遂重用生黃耆治癒，乃恍悟曉秋睡時亦不能左側，知病源實為肝虛，其若斯之涼者，肝中所寄之相火衰也。爰用生箭耆二兩，廣條桂五錢，因小便稍有不利，又加椒目五錢，煎服一劑，病大見愈，遂即原方連服數劑痊愈。於以歎夫子斷病之確，審藥之精，此中當有神助，宜醫界推第一人。

高麗安鳳軒來函（高麗慶南統營郡光道面竹林裡一二七六番地）

謹啟者：今偶得先生所著《衷中參西錄》及《藥物學講義》，拜覽一過，知實為醫學上至貴至寶之救命書也。漢醫自五千年流來，多憑虛論理，恒少實用。而西人實驗雖精，又未能深究性理，所以世界醫學，終未至昌明地位。天憐生命，假國手以著斯書，醫學從此昌明，非偶然也。使人人早知斯書之出現，生命何慮乎？閱之又閱，欣心自湧，口莫能言，中心敬謝先生之救此蒼生也。四期序中言有醫論、醫案，猶未付梓，若再出版時，可將尊著共合為一編，紙質菁勒，目錄詳明，每篇之首皆有題綱，以表內容，如此精印不拘內外，廣迅流傳，以救生命，修成佛身，萬首仰慕，極致美勳矣，鄙人亦甚願在東方為先生傳此書也。

山西平陸縣尹彭子益致山西醫學會理事長書（論《衷中參西錄》之內容）

奉天立達醫院張壽甫所著《衷中參西錄》，其中皆本人多年實驗之方，較之醫校中各家講義，錄古人成書案，而不斷無裨實際者，實高出萬萬，即如近今晉省發生溫病，本可用石膏，而往往服之致泄瀉者，此非石膏之過，用石膏不當之過，所謂不當者，既用石膏又用破氣耗津、寒中敗脾之藥，隨之不解其非也。張君之用石膏，則皆用顧元氣、養津液之藥以輔之，所以自言屢次實驗情形，苦口婆心獨負責任，知事所見醫書，實以《衷中參西錄》為第一可法之書。其他內傷各方，亦皆與山西之空氣及地點相宜，擬求理事長於專校學生傳習，學生每人發給一部，必可救許多枉死之人。此書奉天立達醫院發售，如經費無餘，請令各縣解送學生飯費內多解送一元五角，即將此善舉做好，且學生都必佩服此書，個個熟習此書，則風同道一，可立而待也。

盛澤王鏡泉登《紹興醫報》論《衷中參西錄》為醫家必讀之書

古今書籍極博矣，此不獨各書為然也，即醫書亦何獨不然？《本經》、《內經》、《傷寒》、《金匱》、《金匱》、《外臺》、《外臺》、《外臺》搜羅弘富，足備稽考，至金元間劉、張、李、朱四子出，雖不無偏倚處，然著書立說亦卓然成家。他如吳又可、戴麟郊之研究瘟疫，李瀕湖、趙恕軒之研究本草，喻嘉言之研究肺燥，魏柳洲之研究肝病，聶久吾、葉香岩之研究痘科，王洪緒、徐洄溪之研究外科，吳鞠通之研究溫病，王潛齋之研究霍亂，其中名言精理，一經開卷獲益靡窮。蓋業軒岐者，果能精熟以上各書，則已不勝用矣，乃自歐風東漸，譯本之書紛至沓來，若解剖學、生理學、病理學、黴菌學、衛生學種種，諸說引人入勝，而新學說與舊學說交訐，遂有冰炭不相容之勢。在守舊派，每訾新學為呆滯；在維新派，輒詆舊學為空虛，此固當世醫學一大障礙也。求其能融貫中西，匯通新舊，以求醫學之盡善盡美，而無偏私之見，存於其中者，則余於張君壽甫之《衷中參西錄》，見之斯書共八卷，自擬新方百六十有奇，將以其方為理想而設乎，則未嘗不施諸實驗而來也。將以其方為實驗而成乎，則未嘗不根諸理想而致也。蓋理想以實驗徵之而自確，實驗以理想索之而愈明，是真能知氣化又知形質，取中西學說，合一爐而熔冶之，故用其方者，能確審脈證不差，莫不藥到病除也。

虬湖盧逸軒登如皋醫報論第四期書藥物學講義之內容

名醫著作，多言治驗方案及藥性發明，以其為生平得力之處，不忍泯沒無聞，故舉之以垂示後人也，然歷觀古人驗方藥性，往往不言其所以然，則雖技通神明，心參造化，後世閱之震其名者，訝為驚奇，疑其術者，視若譎語，烏足開示後學法程乎。惟壽甫張氏《衷中參西錄》藥物學一書，歷舉諸藥功能，所驗特效，各案詳晰標示，末附西藥四十餘種，以補中藥之不逮，使後學得有指歸，發古人之未發，說理精博，妙論絕倫，誠足為軒岐以後之功臣，近代醫壇之執牛耳者也。夫醫之道，首重理論，次重實驗，不尚理論，不足以參古人奧義，不講實驗，不足以見臨證措施，斯書每說一藥，必先反復於性味、形質、效能、炮製用量。末附驗案、病之表裡、虛實、寒熱，確確鑿鑿，見地分明。豈彼剿幾句陰陽，竊幾句氣運，遂率爾操觚，著書立說，空言襲取所可比擬者哉。吾願今之醫界著作者，當如張君之語語尚理論、講實驗，勿空空侈談五運六氣也。月朔同文顏小屢氏以道院纂職赴如皋，囑於醫報社購獲斯書，反復環誦廿餘日，如飲芝露與味無窮，因記之。

時乙丑小陽春月廿七日虬湖盧逸軒書於仙芝堂之南隅

跋重刊第五期《醫學衷中參西錄》

第五期《衷中參西錄》，為吾師張公壽甫夫子應各處醫報徵稿之作，初印於民國十七年戊辰，再版於二十一年壬申。今又三次重刊，以廣流傳，予忝任校讎之役，書成，諸同學謂予曰「子事先師久，於先師之嘉言懿行，知之較詳，盍記之以刊書後」，予不獲辭，僅就所知者略述之。吾師治醫，素不尚浮誇，凡論一證、立一方，必屢經實驗，信而有徵，然後筆之於書，絕無空談玄理之論，故世之用其方者，罔不效。讀古人書，能擴而充之，於古方多所化裁，而起古人不治之，性剛介，好直言，儉約尚義，冬一裘，夏一葛，浣濯補綴，僅蔽寒暑而已。曰「吾不欲以衣冠炫世也」，見人有過，恒以禮責之。沽上某醫，以事與其弟子訟，嘗訴其事於吾師，師哂然曰「是亦羿有罪焉，薄乎云爾」，某醫嘆服，遂罷訟。早年客豫中，歲大饑，有盧氏子名俊升，年尚幼，父母相繼喪，孤苦無以自存，吾師見而憫之，收為義子，以養以教，相從二十餘年，來津為之授室，始令自立門戶。俊升今已逾四十，吾師之歿也，哀毀至廢餐眠，其感人之深，以至於此。歲癸酉，設函授醫校於津門，預定課程，先授《傷寒》，次論《溫病》，再次及《金匱》，然後上述《內》、《難》，近採時賢，而以《醫話》殿。曰「四年而後，吾門人才輩出，可以息影田園矣」，不料授《傷寒》甫畢，因勞致疾，夏曆八月初八日卒，享壽七十有四。翌年，春生學兄與予糾合諸同學彙集講義付印，為《衷中參西錄》第七期成師志也。吾師於時賢少所推許，獨心折漢皋冉雪

峰先生。嘗曰「真能改造國醫者，雪公一人而已」，病危時猶諄諄相囑曰「生等如欲深造，此老可師也」，以故予與同學李允中、孫靜明二君，於翌年均得通函列入冉先生之門，讀其書，益信吾師知人之明。戊寅予以臨證所得，述成《三願盧研醫就正錄》二卷，其間頗得春生兄之指正，及銘勳世兄之校勘。銘勳字韞華，乃春生學兄哲嗣，英年好學，其辨證立方，膽識過人，有乃祖若父風，今已嶄然露頭角於醫界，是真能繩祖武傳家學於不墜者也。嗚呼！吾師歸道山八年於茲矣，而國事蝸蟻，憂患日深，予不才，手無斧柯，不能醫國傷，惟日費精神，向故紙中討生活，廁身於巫祝卜筮之流，亦自歉矣。深願讀吾師之書者，簡練揣摩，融洽古今，匯通中外，神明而變化之，觸類而引申之，救斯民之疾苦，登同胞於壽域，雖無益於國家，尚裨補於社會，要亦時賢所贊許也。

時民國二十九年庚辰仲秋深縣張堃方輿謹識於沽上三願盧

下  
篇



醫 學 衷 中 參 西 錄 第 六 期

序

嘗思醫者濟世活人之實學也，乃有半生學醫，迨用之臨證之際，徵諸實驗而仍毫無把握，此無他，「醫者意也」，通變化裁之妙，原運乎一心，若不能審機觀變，息息與病機相赴，縱醫病皆本《靈》、《素》，用藥皆遵《本經》，制方皆師仲景，亦難隨手奏效也。鹽山張壽甫先生，素裕經猷，本懷濟世深心，而遭逢不偶，遂一變方針，托醫藥活人，以償其濟世之初念，是以所著《衷中參西錄》，自一期以至五期，醫界莫不奉為金科玉律，無待僕之表彰也。今又著成《志誠堂醫案》為六期，所出之書，其審病也，洞見隔垣，纖微悉徹；其用藥也，化裁因心，措施咸宜，故無論證之至危、至險、至奇、至變，一經診治，莫不立起沉疴，先生誠神明於醫者哉！且自西法輸入以來，中西醫士恒相齟齬，而先生獨博採兼收，舉中醫之理想、西醫之實驗，以互相發明。凡醫理深奧之處，莫不昭然盡揭，如此匯通中西，先生以前未有也。是以醫學志報，有稱先生為醫學革命家，當為醫學開新紀元者，洵不誤也。且先生書中，常發明養生之理，以輔醫藥所不逮。僕素讀先生之書，於所論養生之處，初未知注意也，後因下焦常覺寒涼，每服補助相火之品，亦似有效，而旬餘不服藥則寒涼依舊，先生授以吸升呼降之法（在三期敦復湯後），習之旬日，頓覺下焦元陽壯旺，始知凡經先生所發明者，皆可令人遵行。舉凡欲習醫者，果能於先生之書熟讀深思，又何患不得真門徑哉！

通縣後學李重儒澍田敬序於津沽紫竹林學舍

題詞

活人事業本農黃，學富五車醫更良，考據精深追漢代，詩歌典雅重三唐。韓康手制壺中藥，抱朴心裁肘後方，著作等身參造化，群生普濟同慈航。

桓仁愚弟袁澍滋霖普敬題  
先生同姓是長沙，作述當然為一家，仲景替人欣得見，從今醫界增光華。

東臺後學王錫先敬題  
獨創奇方妙入神，農軒事業不沉淪，從今識得真門徑，化雨春風惠我深。

天津受教弟宋志良謹識  
濟世經綸抱未伸，安懷小試起疴沉，良醫良相原無二，書著活人字字春。

獻縣受業宗弟煥文雲衢謹識  
名著釀成萬古春，中西合撰妙通神，同胞沉疴憑公挽，的是名醫第一人。

武清受業趙伯驤雲卿謹識  
心血結晶書等身，名山著作起疴沉，不朽事業留天地，字字釀成萬古春。

武清受業孫尚義雨亭謹識  
合撰中西妙理傳，名山書著活人篇，風行寰海消炎癘，億萬蒼生躋大年。

遼源受業王守信止孚謹識

醫學混淆頹廢年，挺生國手挽狂瀾，活人書著消災癘，普濟群生遍海寰。

青縣受業張燕傑毅武謹識

醫國醫人理可通，良醫良相本相同，生平抱負托靈素，立德立言更立功。

瀋陽受業李春元子博謹識

費盡心神五十秋，中西合撰幾研究，瑤編字字皆珠玉，普濟蒼黎遍九州。

邑中受業孫蕊榜香蓀謹識

醫界重開新紀年，中西合撰費陶甄，功堪救世功無量，書可活人書自傳。一  
掬慈心同旭照，全憑國手挽狂瀾，名山著作留終古，普濟群生造化參。

天津受業劉誠柱砥中謹識

例言

一、石膏為硫氧氫鈣化合，宜生用不宜煨用。生用其性涼而能散，煨之則成洋灰，即為鳩毒，斷不可用。是以案中石膏皆生用，然又須防藥房以煨者偽充，當細辨。

二、赤石脂原為陶土，津沽藥房恒和以水燒成陶瓦，以入丸散必傷脾胃，故在津沽用此藥，必須加生字。然生石脂之名難登於書，是以案中石脂皆生者，而不便加生字也。

三、杏仁之皮有毒，桃仁之皮無毒，故桃仁可帶皮用，取其色紅能活血也。然恐藥房以帶皮杏仁誤充，故案中桃仁亦開去皮，若真知其為桃仁帶皮用之更佳。

四、廔蟲即土鼈，曾見於《名醫別錄》，津沽藥房竟分之為二種，若方中開廔蟲皆以光背黑甲蟲偽充，必開土鼈始與以真廔蟲，是以案中用廔蟲皆開土鼈蟲。

五、鮮小薊根最能止血治肺病，而案中未用者，因藥房無鮮小薊根也。若至地鄰山野，可自剖取鮮者加入肺病及吐血藥中，若不識小薊者，四期藥物講義曾詳言其形狀。

六、凡案中所用大劑作數次服者，用其方時亦必須按其服法方為穩妥，又宜切囑病家如法服藥，不可疏忽，病癒藥即停服，不必盡劑也。

〈 第 一 卷 〉

虛勞喘嗽門

【虛勞證陽亢陰虧】

天津南門外升安大街張媪，年九十二歲，得上焦煩熱病。

病因：平素身體康強，所稟元陽獨旺，是以能享高年，至八旬後陰分浸衰，陽分偏盛，胸間恆覺煩熱，延醫服藥多用滋陰之品始愈。迨至年過九旬，陰愈衰而陽愈亢，仲春陽氣發生煩熱，舊病反覆甚劇。

證候：胸中煩熱異常，劇時若屋中莫能容，恆至堂中，當戶久坐以翕收庭中空氣。有時，覺心為熱迫怔忡不寧。大便乾燥四五日一行，甚或服藥始通。其脈左右皆弦硬，間現結脈，至數如常。

診斷：證脈細參，純係陽分偏盛陰分不足之象，然所以享此大年，實賴元陽充足，此時陽雖偏盛，當大滋真陰以潛其陽，實不可以苦寒瀉之。至脈有結象，高年者雖在所不忌，而究係氣分有不足之處，宜以大滋真陰之藥為主，而少加補氣之品以調其脈。

處方：生懷山藥（一兩）、玄參（一兩）、熟懷地黃（一兩）、生懷地黃（八錢）、天冬（八錢）、甘草（二錢）、大甘枸杞（八錢）、生杭芍（五錢）、野臺參（三錢）、赭石（六錢軋細）、生雞內金（二錢黃色的搗）。共煎三大盅，為一日之量，徐徐分多次溫飲下。



方解：方中之義，重用涼潤之品以滋真陰，少用野臺參三錢以調其脈。猶恐參性溫升不宜於上焦之煩熱，又倍用生赭石以引之下行，且此證原艱於大便，赭石又能降胃氣以通大便也。用雞內金者，欲其助胃氣以運化藥力也。用甘草者，以其能緩脈象之弦硬，且以調和諸涼藥之性也。

效果：每日服藥一劑至三劑，煩熱大減，脈已不結，且較前柔和。遂將方中玄參、生地黃皆改用六錢，又加龍眼肉五錢，連服五劑，諸病皆愈。

【虛勞兼勞碌過度】

天津二區寧氏婦，年近四旬，素病虛勞，偶因勞碌過甚益增劇。

病因：處境不順，家務勞心，飲食減少，浸成虛勞，已病倒臥懶起床矣。又因訟事，強令公堂對質，勞苦半日，歸家病大加劇。

證候：臥床閉目，昏昏似睡，呼之，眼微開不發言語，有若能言而甚懶於言者。其面色似有浮熱，身間溫度三十八度八分，問其心中發熱乎？覺怔忡乎？皆頷之。其左脈浮而弦硬，右脈浮而芤，皆不任重按，一息六至。兩日之間，惟少飲米湯，大便數日未行，小便亦甚短少。

診斷：即其脈之左弦右芤，且又浮數無根，知係氣血虧極有陰陽不相維繫之象。是以陽氣上浮而面熱，陽氣外越而身熱，此乃虛勞中極危險之證也。所幸氣息似稍促而不至於喘，雖有咳嗽亦不甚劇，知尤可治。斯當培養其氣血，更以收斂氣血之藥佐之，俾其陰陽互相維繫，即可安然無虞矣。

處方：野臺參（四錢）、生懷山藥（八錢）、淨萸肉（八錢）、生龍骨（八錢）搗碎、大甘枸杞（六錢）、甘草（二錢）、生懷地黃（六錢）、玄參（五錢）、沙參（五錢）、生赭石（五錢）軋細、生杭芍（四錢）。共煎湯一大盅，分兩次溫飲下。

複診：將藥連服三劑，已能言語，可進飲食，浮越之熱已斂，溫度下降至三十七度六分，心中已不發熱，有時微覺怔忡，大便通下一次，小便亦利，遂即原方略為加減俾再服之。

處方：野臺參（四錢）、生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（八錢）、淨萸肉（六錢）、生懷地黃（五錢）、甘草（二錢）、玄參（五錢）、沙參（五錢）、生赭石（四錢軋細）、生杭芍（三錢）、生雞內金（錢半黃色的搗）。共煎湯一大盅，溫服。

方解：方中加雞內金者，因虛勞之證，脈絡多瘀，《金匱》所謂血痺虛勞也。用雞內金以化其血痺，虛勞可以除根，且與臺參並用，又能運化參之補力不使作脹滿也。

效果：將藥連服四劑，新得之病痊愈，其素日虛勞未能盡愈。俾停服湯藥，日用生懷山藥細末煮粥，少加白糖當點心服之。每服時送服生雞內金細末少許以善其後。

【肺勞咳嗽由於伏氣化熱所傷證】

高瑞章，瀋陽戶口登記生，三十二歲。因伏氣化熱傷肺，致成肺勞咳嗽證。病因：臘底感受寒涼，未即成病，而從此身不見汗，繼則心中漸覺發熱，至仲春其熱加甚，飲食懶進，發生咳嗽，浸成肺勞病。

證候：其咳嗽晝輕夜重，時或咳而兼喘，身體羸弱，筋骨酸疼，精神時昏憤，腹中覺饑而飲食恆不欲下嚥，從前惟心中發熱，今則日時身恆覺熱，大便燥，小便短赤，脈左右皆弦長，右部重按有力，一息五至。

診斷：此病之原因，實由伏氣化熱久留不去，不但傷肺而兼傷及諸臟腑也。按此證自述，因臘底受寒，若當時即病，則為傷寒矣。乃因所受之寒甚輕，不能即病，惟伏於半表半裏三焦脂膜之中，阻塞氣化之升降流通，是以從此身不見汗，而心漸發熱，迨時至仲春，陽氣萌動，原當隨春陽而化熱以成溫病（《內經》謂「冬傷於寒，春必病溫」），乃其所化之熱又非如溫病之大熱暴發能自裡達表，而惟緣三焦脂膜散漫於諸臟腑，是以胃受其熱而懶於飲食，心受其熱而精神昏憤，腎受其熱而陰虛潮熱，肝受其熱而筋骨酸疼，至肺受其熱而咳嗽吐痰，則又其顯然者也。治此證者，當以清其伏氣之熱為主，而以滋養津液藥輔之。

處方：生石膏（一兩搗碎）、黨參（三錢）、天花粉（八錢）、玄參（八錢）、生杭芍（五錢）、甘草（錢半）、連翹（三錢）、滑石（三錢）、鮮茅根（三錢）、

射干（三錢）、生遠志（二錢）。共煎湯一大盅半，分兩次溫服。若無鮮茅根，可以鮮蘆根代之。

方解：方中之義，用石膏以清伏氣之熱，而助之以連翹、茅根，其熱可由毛孔透出，更輔之以滑石、杭芍，其熱可由水道瀉出，加花粉、玄參者，因石膏但能清實熱，而花粉、玄參兼能清虛熱也，用射干、遠志者，因石膏能清肺寧嗽，而佐以射干、遠志，更能利痰定喘也，用甘草者，所以緩諸涼藥之下趨，不欲其寒涼侵下焦也，至加黨參者，實仿白虎加人參湯之義，因身體虛弱者，必石膏與人參並用，始能逐久匿之熱邪外出也。

複診：將藥連服四劑，熱退三分之二，咳嗽吐痰亦愈強半，飲食加多，脈象亦見緩和。知其伏氣之熱已消，所餘者惟陰虛之熱也，當再投以育陰之方，俾多服數劑自能痊愈。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（八錢）、玄參（五錢）、生懷地黃（五錢）、沙參（五錢）、生杭芍（三錢）、生遠志（二錢）、川貝母（二錢）、生雞內金（錢半黃色的搗）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅溫服，方中加雞內金者，不但欲其助胃消食，兼欲借之以化諸藥之滯泥也。

效果：將藥連服五劑，病遂痊愈。而夜間猶偶有咳嗽之時，俾停服湯藥，日用生懷山藥細末煮作粥，調以白糖當點心服之以善其後。

【虛勞咳嗽兼外感實熱證】

撫順姚旅長公子，九歲，因有外感實熱久留不去，變為虛勞咳嗽證。

病因：從前曾受外感，熱入陽明，醫者純用甘寒之藥清之，致病癒之後，猶有些餘熱稽留臟腑，久之陰分虧耗，浸成虛勞咳嗽證。

證候：心中常常發熱，有時身亦覺熱，懶於飲食，咳嗽頻吐痰涎，身體瘦弱，屢服清熱寧嗽之藥，即稍效病仍反覆，其脈象弦數，右部尤弦而兼硬。

診斷：其脈象弦數者，熱久涸陰血液虧損也。其右部弦而兼硬者，從前外感之餘熱，猶留滯於陽明之腑也。至其咳嗽吐痰，亦熱久傷肺之現象也。欲治此證，當以清其陽明餘熱為初步，熱清之後，再用藥滋養其真陰，病根自不難除矣。

處方：生石膏（兩半搗細）、大潞參（三錢）、玄參（五錢）、生懷山藥（五錢）、鮮茅根（三錢）、甘草（二錢）。共煎湯一盅半，分兩次溫飲下。若無鮮茅根時，可用鮮蘆根代之。

方解：此方即白虎加人參湯以玄參代知母，生山藥代粳米，而又加鮮茅根也。蓋陽明久鬱之邪熱，非白虎加人參湯不能清之，為其病久陰虧，故又將原方少為變通，使之兼能滋陰也。加鮮茅根者，取其具有升發透達之性，與石膏並用，能清熱兼能散熱也。

復診：將藥煎服兩劑，身心之熱大減，咳嗽吐痰已愈強半，脈象亦較前和平，知外邪之熱已清，宜再用藥專滋其陰分，俾陰分充足自能盡消其餘熱也。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（八錢）、生懷地黃（五錢）、玄參（四錢）、沙參（四錢）、生杭芍（三錢）、生遠志（二錢）、白朮（二錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、甘草（錢半）。共煎湯一盅溫服。

效果：將藥連服三劑，飲食加多，諸病皆愈。

方解：陸九芝謂「凡外感實熱之證，最忌但用甘寒滯泥之藥治之。其病縱治癒，亦恆稽留餘熱，永錮閉於臟腑之中，不能消散，致熱久耗陰，浸成虛勞，不能救藥者多矣」，此誠見道之言也。而愚遇此等證，其虛勞不至過甚，且脈象仍有力者，恆治以白虎加人參湯，復略為變通，使之退實熱兼能退虛熱，約皆可隨手奏效也。

【勞熱咳嗽】

鄰村許姓學生，年十八歲，於季春得勞熱咳嗽證。

病因：秉性剛強，勞心過度，又當新婚之餘，或年少失保養，迨至春陽發動，漸成勞熱咳嗽證。

證候：日晡潮熱，通夜作灼，至黎明得微汗其灼乃退。白晝咳嗽不甚劇，夜則咳嗽不能安枕，飲食減少，身體羸瘦，略有動作即氣息迫促，左右脈皆細弱，重按無根，數逾七至。夫脈一息七至，即難挽回，況復逾七至乎？猶幸食量猶佳，大便乾燥（此等證忌滑瀉），知猶可治。擬治以峻補真陰之劑，而佐以收斂氣化之品。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（八錢）、玄參（六錢）、生懷地黃（六錢）、沙參（六錢）、甘草（三錢）、生龍骨（六錢搗碎）、淨萸肉（六錢）、生杭芍（三錢）、五味子（三錢搗碎）、牛蒡子（三錢搗碎）。共煎湯一大盅，溫服。

方解：五味入湯劑，藥局照例不搗，然其皮味酸，核味辛，若囫圇入煎則其味過酸，服之恆有滿悶之弊，故徐靈胎謂宜與乾薑之味辛者同服。若搗碎入煎，正可惜其核味之辛以濟皮味之酸，無事伍以乾薑而亦不發滿悶，是以欲重用五味以治嗽者，當注意令其搗碎，或說給病家自檢點。至於甘草多用至三錢者，誠以



此方中不但五味酸，萸肉亦味酸，若用甘草之至甘者與之化合，可增加其補益之力（如酸能齒，得甘則不齒是明徵），是以多用至三錢。

複診：將藥連服三劑，灼熱似見退，不復出汗，咳嗽亦稍減，而脈仍七至強。因恍悟此脈之數，不但因陰虛，實亦兼因氣虛，猶若力小而強任重者其體發顫也。擬仍峻補其真陰，再輔以補氣之品。

處方：生懷山藥（一兩）、野臺參（三錢）、大甘枸杞（六錢）、玄參（六錢）、生懷地黃（六錢）、甘草（三錢）、淨萸肉（五錢）、天花粉（五錢）、五味子（三錢搗碎）、生杭芍（三錢）、射干（二錢）、生雞內金（錢半黃色的搗）。共煎一大盅溫服，為方中加臺參恐服之作悶，是以又加雞內金以運化之。且凡虛勞之甚者，其脈絡間恆多瘀滯，雞內金又善化經絡之瘀滯也。

三診：將藥連服四劑，灼熱咳嗽已愈十之七八，脈已緩至六至，此足徵補氣有效也。爰即原方略為加減，多服數劑，病自除根。

處方：生懷山藥（一兩）、野臺參（三錢）、大甘枸杞（六錢）、玄參（五錢）、生懷地黃（五錢）、甘草（二錢）、天冬（五錢）、淨萸肉（五錢）、生杭芍（三錢）、川貝母（三錢）、生遠志（二錢）、生雞內金（錢半黃色的搗）。共煎一大盅溫服。

效果：將藥連服五劑，灼熱咳嗽痊愈，脈已復常，遂停服湯劑。俾日用生懷山藥細末煮作茶湯，兌以鮮梨自然汁，當點心服之，以善其後。

【肺勞喘嗽遺傳性證】

陳林生，江蘇浦口人，寓天津一區玉山里，年十八歲，自幼得肺勞喘嗽證。病因：因其母素有肺勞病，再上推之，其外祖母亦有斯病。是以自幼時，因有遺傳性亦患此病。

證候：其證，初時猶輕，至熱時即可如常人，惟略有感冒，即作喘嗽，治之即愈，不治則兩三日亦可自愈。至過十歲則漸加重，熱時亦作喘嗽，冷時則甚於熱時，服藥亦可見輕，旋即反覆。至十六七歲時，病又加劇，屢次服藥亦無效，然猶可支持也。迨愚為診視，在民紀十九年仲冬，其時病劇已難支持，晝夜伏几，喘而且嗽，咳吐痰涎，連連不竭，無論服何中藥，皆分毫無效。惟日延西醫注射藥針一次，雖不能止咳喘而可保當日無虞，診其脈左右皆弦細，關前微浮，兩尺重按無根。

診斷：此等證原因，肺臟氣化不能通暢，其中諸細管即易為痰涎滯塞，熱時肺胞鬆緩，故病猶輕，至冷時肺胞緊縮，是以其病加劇。治之者當培養其肺中氣化，使之闡辟有力，更疏瀹其肺中諸細管，使之宣通無滯，原為治此病之正則也。而此證兩尺之脈無根，不但其肺中有病，其肝腎實亦有病，且病因又為遺傳性，原非一蹴所能治癒，當分作數步治之。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（一兩）、天花粉（三錢）、天冬（三錢）、生杭芍（三錢）、細辛（一錢）、射干（三錢）、杏仁（二錢去皮）、五

味子（二錢搗碎）、葶藶子（二錢微炒）、廣三七（二錢搗細）。藥共十一味，前十味煎湯一大盅，送服三七末一錢，至煎渣再服時仍送服餘一錢。

方解：方中用三七者，恐肺中之氣窒塞，肺中之血亦隨之凝滯，三七為止血妄行之聖藥，更為流通瘀血之聖藥，故於初步藥中之加。

複診：將藥連服四劑，咳喘皆愈三分之二，能臥睡兩三點鐘。其脈關前不浮，至數少減，而兩尺似無根，擬再治以納氣歸腎之方。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（一兩）、野黨參（三錢）、生赭石（六錢軋細）、生懷地黃（六錢）、生雞內金（錢半黃色的搗）、淨萸肉（四錢）、天花粉（四錢）、天冬（三錢）、牛蒡子（三錢搗碎）、射干（二錢）。共煎湯一大盅溫服。

方解：參之性補而微升，惟與赭石並用，其補益之力直達湧泉，況咳喘之劇者，其衝胃之氣恆因之上逆，赭石實又為降胃鎮衝之要藥也。至方中用雞內金者，因其含有稀鹽酸，原善化肺管中之瘀滯以開其閉塞，又兼能運化人參之補力不使作滿悶也。

三診：將藥連服五劑，咳喘皆愈，惟其脈仍逾五至，行動時猶覺氣息微喘，此乃下焦陰分猶未充足，不能與陽分相維繫也，此當峻補其真陰，俾陰分充足自能維繫其陽分，氣息自不上奔矣。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（一兩）、熟懷地黃（一兩）、淨萸肉（四錢）、玄參（四錢）、生遠志（錢半）、北沙參（四錢）、懷牛膝（三錢）、大雲苓片（二錢）、蘇子（二錢炒搗）、牛蒡子（二錢搗碎）、生雞內金（錢半）。共煎湯一大盞溫服。

效果：將藥連服八劑，行走動作皆不作喘，其脈至數已復常，從此停服湯藥，俾日用生懷山藥細末，水調煮作茶湯，少調以生梨自然汁，當點心用之以善其後。

【肺勞痰喘】

徐益林，住天津一區，年三十四歲，得肺勞痰喘證。

病因：因弱冠時遊戲競走，努力過度傷肺，致有喘病，入冬以來又兼咳嗽。證候：平素雖有喘證，然安養時則不犯，入冬以來，寒風陡至，出外為風所襲，忽發咳嗽，咳嗽不已，喘病亦發，咳喘相助為虐，屢次延醫，服藥不愈，夜不能臥。其脈左部弦細而硬，右部濡而兼沉，至數如常。

診斷：此乃氣血兩虧，並有停飲之證，是以其左脈弦細者，氣虛也。弦細兼硬者，肝血虛津液短也。其右脈濡者，濕痰留飲也。濡而兼沉者，中焦氣化亦有所不足也。其所以喘而且嗽者，亦痰飲上溢之所迫致也。擬用小青龍湯，再加滋補之藥治之。

處方：生懷山藥（一兩）、當歸身（四錢）、天冬（四錢）、寸麥冬（四錢）、生杭芍（三錢）、清半夏（三錢）、桂枝尖（二錢五分）、五味子（二錢搗碎）、杏仁（二錢去皮）、乾薑（錢半）、細辛（一錢）、甘草（錢半）、生薑（三片）。共煎一大盅溫飲下。

方解：凡用小青龍湯，喘者去麻黃加杏仁，此定例也。若有外感之熱者，更宜加生石膏，此證無外感之熱，故但加二冬以解薑桂諸藥之熱。

複診：將藥煎服一劑，其喘即愈，又繼服兩劑，咳嗽亦愈強半，右脈已不沉，似稍有力，左脈仍近弦硬，擬再以健胃養肺滋生血脈之品。

處方：生懷山藥（一兩）、生百合（五錢）、大枸杞子（五錢）、天冬（五錢）、當歸身（三錢）、蘇子（錢半炒搗）、川貝母（三錢）、白朮（三錢炒）、生薏米（三錢搗碎）、生遠志（二錢）、生雞內金（錢半黃色的搗）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅溫服。

效果：將藥連服四劑，咳嗽痊愈，脈亦調和如常矣。

【肺勞喘咳】

羅金波，天津新旅社理事，年三十四歲，得肺勞喘咳病。

病因：數年之前，曾受肺風發咳嗽，治失其宜，病雖暫愈，風邪錮閉肺中未去，致成肺勞喘咳證。

證候：其病在暖燠之時甚輕，偶發喘咳一半日即愈，至冬令則喘咳連連，必至天氣暖和時始漸愈，其脈左部弦硬，右部濡滑，兩尺皆重按無根。

診斷：此風邪錮閉肺中，久而傷肺，致肺中氣管滯塞，暖時肌肉鬆緩，氣管亦隨之鬆緩，其呼吸猶可自如；冷時肌肉緊縮，氣管亦隨之緊縮，遂至吸難呼易而喘作，更因痰涎壅滯而嗽作矣。其脈左部弦硬者，肝腎之陰液不足也。右部濡滑者，肺胃中痰涎充溢也。兩尺不任重按者，下焦氣化虛損，不能固攝，則上焦之喘嗽益甚也。欲治此證，當先宣通其肺，俾氣管之鬱者皆開後，再投以滋陰培氣，肺腎雙補之劑以拔除其病根。

處方：麻黃（錢半）、天冬（三錢）、天花粉（三錢）、牛蒡子（三錢搗碎）、杏仁（二錢去皮搗碎）、甘草（錢半）、蘇子（二錢炒搗）、生遠志（二錢去心）、生麥芽（二錢）、生杭芍（二錢）、細辛（一錢）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：將藥煎服兩劑，喘嗽皆愈，而勞動時仍微喘，其脈左部仍似弦硬，右部仍濡，不若從前之滑，兩尺猶虛，此病已去而正未復也。宜再為謀根本之治法，而投以培養之劑。

處方：野臺參（三錢）、生赭石（八錢軋細）、生懷山藥（一兩）、熟懷地黃（一兩）、生懷地黃（一兩）、大雲苓片（二錢）、大甘枸杞（六錢）、天冬（六錢）、淨萸肉（五錢）、蘇子（三錢炒搗）、牛蒡子（三錢搗碎）。共煎一大盅溫服。

方解：人參為補氣主藥，實兼具上升之力。喻嘉言謂「氣虛欲上脫者專用之，轉氣高不返」，是以凡喘逆之證，皆不可輕用人參，惟重用赭石以引之下行，轉能納氣歸腎，而下焦之氣化，遂因之壯旺而固攝。此方中人參、赭石並用，不但欲導引肺氣歸腎，實又因其兩尺脈虛，即藉以培補下焦之氣化也。

效果：將藥連服十餘劑，雖勞動亦不作喘。再診其脈，左右皆調和無病，兩尺重按不虛，遂將赭石減去二錢，俾多服以善其後。



【肺勞喘嗽兼不寐證】

天津一區竹遠里，於姓媪，年近五旬，咳嗽有痰微喘，且苦不寐。

病因：夜間因不能寐，心中常覺發熱，久之，則肺臟受傷，咳嗽多痰，且微作喘。

證候：素本夜間不寐，至黎明時始能少睡，後因咳嗽不止，痰涎壅盛，且復作喘，不能安臥，恆至黎明亦不能睡。因之心中發熱益甚，懶於飲食，大便乾燥，四五日一行，兩旬之間大形困頓，屢次服藥無效，其脈左部弦而無力，右部滑而無力，數逾五至。

診斷：此真陰虧損，心腎不能相濟，是以不眠。久則心血耗散，心火更易妄動以上鑱肺金，是以咳嗽有痰作喘，治此證者，當以大滋真陰為主，真陰足則心腎自然相交，以水濟火而火不妄動；真陰足則自能納氣歸根，氣息下達，而呼吸自順，且肺腎為子母之臟，原相連屬，子虛有損於母，子實即有益於母，果能使真陰充足，則肺金既不受心火之鑱耗，更可得腎陰之津潤，自能復其清肅下行之常，其痰涎咳嗽不治自愈也。若更輔以清火潤肺化痰寧嗽之品，則奏效當更捷矣。

處方：沙參（一兩）、大枸杞（一兩）、玄參（六錢）、天冬（六錢）、生赭石（五錢軋細）、甘草（二錢）、生杭芍（三錢）、川貝母（三錢）、牛蒡子（一錢搗碎）、生麥芽（三錢）、棗仁（三錢炒搗）射干（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

復診：將藥連服六劑，咳喘痰涎愈十分之八，心中已不發熱，食慾已振，夜能睡數時，大便亦不甚燥。診其脈至數復常，惟六部重按仍皆欠實，左脈仍有弦意，擬再峻補其真陰以除病根，所謂上病取諸下也。

處方：生懷山藥（一兩）、大枸杞（一兩）、遼沙參（八錢）、生懷地黃（六錢）、熟懷地黃（六錢）、甘草（二錢）、生赭石（六錢軋細）、淨萸肉（四錢）、生杭芍（三錢）、生麥芽（三錢）、生雞內金（針半黃色的搗）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服二劑，諸病皆愈，俾用珠玉二寶粥常常當點心服之，以善其後。

或問「兩方中所用之藥，若滋陰、潤肺、清火、理痰、止嗽諸品，原為人所共知，而兩方之中皆用赭石、麥芽，且又皆生用者其義何居」？答曰「胃居中焦，原以傳送飲食為專職，是以胃中之氣，以息息下行為順，果其氣能息息下行，則衝氣可阻其上衝，膽火可因之下降，大便亦可按時下通，至於痰涎之壅滯，咳嗽喘逆諸證，亦可因之遞減，而降胃之藥，固莫赭石若也。至於麥芽，炒用之善於消食，生用之則善於升達肝氣。人身之氣化原左升右降，若但知用赭石降胃，其重墜下行之力或有礙於肝氣之上升，是以方中用赭石降胃，即用麥芽升肝，此所以順氣化之自然，而還其左升右降之常也」。

【肺病咳嗽吐血】

張耀華，年二十六歲，鹽山人，寓居天津一區，業商，得肺病咳嗽吐血。病因：經商勞心，又兼新婚，失於調攝，遂患勞嗽。繼延推拿者為推拿兩日，咳嗽分毫未減，轉添吐血之證。

證候：連聲咳嗽不已，即繼以吐血，或痰中帶血，或純血無痰，或有咳嗽兼喘，夜不能臥，心中發熱，懶食，大便乾燥，小便赤澀，脈搏五至強，其左部弦而無力，右部浮取似有力，而尺部重按豁然。

處方：生懷山藥（一兩）、大潞參（三錢）、生赭石（六錢軋細）、生懷地黃（六錢）、玄參（六錢）、天冬（五錢）、淨萸肉（五錢）、生杭芍（四錢）、射干（二錢）、甘草（二錢）、廣三七（二錢軋細）。藥共十一味，將前十味煎湯一大盅，送服三七末一半，至煎渣重服時，再送服其餘一半。

複診：此藥服兩劑後，血已不吐，又服兩劑，咳嗽亦大見愈，大小便已順利，脈已有根，不若從前之浮弦，遂即原方略為加減，俾再服之。

處方：生懷山藥（一兩）、大潞參（三錢）、生赭石（六錢軋細）、生懷地黃（六錢）、大甘枸杞（六錢）、甘草（二錢）、淨萸肉（五錢）、沙參（五錢）、生杭芍（二錢）、射干（二錢）、廣三七（錢半軋細）。藥共十一味，將前十味煎湯一大盅，送服三七末一半，至煎渣重服時，再送其餘一半。

加熟懷地黃五錢，俾再服數劑以善其後。

效果：將藥連服五劑，諸病皆愈，脈已復常，而尺部重按仍欠實，遂於方中

【肺病咳吐膿血】

葉鳳桐，天津估衣街文竹齋經理，年三十二歲，得肺病咳吐膿血。

病因：其未病之前數月，心中時常發熱，由此浸成肺病。

證候：初覺發熱時，屢服涼藥，熱不減退，大便乾燥，小便短赤，後則漸生咳嗽，繼則痰中帶血，繼則痰血相雜，又繼則膿血相雜。診其脈左部弦長，右部洪長，皆重按頗實。

診斷：此乃伏氣化熱，竄入陽明之腑。醫者不知病因，見其心中發熱，而多用甘寒滯膩之品，稽留其熱，俾無出路。久之，上熏肺部，至肺中結核因生咳嗽，潰爛遂吐膿血，斯必先清其胃腑之熱，使不復上升熏肺而後肺病可愈。特是，此熱為伏氣之熱所化，原非輕劑所能消除，當先投以治外感實熱之劑。

處方：生石膏（兩半搗細）、大潞參（三錢）、生懷山藥（六錢）、天花粉（六錢）、金銀花（四錢）、鮮蘆根（四錢）、川貝母（三錢）、連翹（二錢）、甘草（二錢）、廣三七（二錢軋細）。藥共十味，將前九味煎湯一大盅，送服三七末一錢，至煎渣再服時，仍送服餘一錢。

方解：此方實仿白虎加人參湯之義而為之變通也。方中以天花粉代知母，以生山藥代粳米，仍與白虎加人參湯無異，故用之以清胃腑積久之實熱，而又加金銀花、三七以解毒，蘆根、連翹以引之上行，此肺胃雙理之劑也。

復診：將藥連服三劑，膿血已不復吐，咳嗽少愈，大便之乾燥，小便之短赤亦見愈，惟心中仍覺發熱，脈象仍然有力，擬再投以清肺瀉熱之劑。

處方：天花粉（八錢）、北沙參（五錢）、玄參（五錢）、鮮蘆根（四錢）、川貝母（三錢）、牛蒡子（三錢搗碎）、五味子（二錢搗細）、射干（三錢）、甘草（二錢軋細）。藥共九味，將前八味煎湯一大盅，送服甘草末一錢，至煎渣再服時，仍送服餘一錢。方中五味子，必須搗碎入煎，不然則服之恆多發悶。方中甘草，無論紅者黃者，皆可用至軋之不細時，切忌鍋炮，若炮則其性即變，非此方中用甘草之意矣。用此藥者，宜自監視軋之，或但羅取其頭次所軋之末亦可。

效果：將藥連服五劑，諸病皆愈，惟心中猶間有發熱之時，脈象較常脈似仍有力。為善後計，俾用生懷山藥軋細，每用七八錢或兩許，煮作茶湯，送服離中丹錢許或至錢半（多少宜自酌），當點心用之。後此方服閱兩月，脈始復常，心中亦不復發熱矣。離中丹為愚自製之方，即益元散方以生石膏代滑石也。蓋滑石宜於濕熱，石膏宜於燥熱，北方多熱而兼燥者，故將其方變通之，凡上焦有實熱者，用之皆有捷效。

或問「伏氣化熱，原可成溫，即無新受之外感，而忽然成溫病者是也。此證伏氣所化之熱，何以不成溫病而成肺病」？答曰「伏氣之侵人，伏於三焦脂膜之中，有多有少，多者化熱重，少者化熱輕，化熱重者當時即成溫病，化熱輕者恆循三焦脂膜而竄入各臟腑。愚臨證五十年，細心體驗，知有竄入肝膽病目者，竄

入腸中病下痢者，有竄入腎中病虛勞者，竄入肺中病咳嗽久而成肺病者，有竄入胃中病吐衄，而其熱上熏亦可成肺病者，如此證是也。是以此證心中初發熱時，醫者不知其有伏氣化熱入胃，而泛以涼藥治之，是以不效，而投以白虎加人參湯即隨手奏效。至於不但用白虎湯而必用白虎加人參湯者，誠以此證已閱數月，病久氣化虛損，非人參與石膏並用，不能托深陷之熱外出也。

【肺病咳吐痰血】

喬邦平，年三十餘，天津河東永和蛀木廠分號經理，得咳吐痰血病。

病因：前因偶受肺風，服藥失宜，遂息咳嗽，咳嗽日久，繼患咳血。

證候：咳嗽已近一年，服藥轉浸加劇，繼則痰中帶血，又繼則間有嘔血之時，然猶不至於傾吐。其心中時常發熱，大便時常燥結，幸食慾猶佳，身形不至羸弱，其脈左部近和平，右部寸關俱有滑實之象。

診斷：證脈合參，知係從前外感之熱久留肺胃，金畏火刑，因熱久而肺金受傷，是以咳嗽，至於胃腑久為熱鑱，致胃壁之膜腐爛連及血管，是以嘔血，至其大便恆燥結者，因其熱下輸腸中，且因胃氣因熱上逆失其傳送之職也。治此證者，當以清肺胃之熱為主，而以養肺降胃之藥輔之。

處方：生石膏（二兩細末）、粉甘草（六錢細末）、鏡面硃砂（二錢細末）。共和勻每服一錢五分。

又方：生懷山藥（一兩）、生赭石（八錢軋細）、天冬（六錢）、玄參（五錢）、沙參（五錢）、天花粉（五錢）、生杭芍（四錢）、川貝母（三錢）、射干（二錢）、兒茶（二錢）、甘草（錢半）、廣三七（二錢軋細）。共藥十二味，將前十一味煎湯送服三七一錢，至煎渣再服時再送服一錢。每日午前十點鐘服散藥一次，臨睡時再服一次，湯藥則晚服頭煎，翌晨服次煎。



效果：服藥三日，咳血吐血皆愈，仍然咳嗽，遂即原方去沙參加生百合五錢、米穀錢半，又服四劑，咳嗽亦愈，已不發熱，大便已不燥結。俾將散藥惟頭午服一次，又將湯藥中赭石減半，再服數劑以善後。

氣病門

【大氣下陷兼小便不禁】

陳禹廷，天津東四里沽人，年三十五歲，在天津業商，於孟冬得大氣下陷兼小便不禁證。

病因：稟賦素弱，恆覺呼吸之氣不能上達，屢次來社求診，投以拙擬升陷湯，即愈。後以出外勞碌過度，又兼受涼，陡然反覆甚劇，不但大氣下陷，且又小便不禁。

證候：自覺胸中之氣息息下墜，努力呼之猶難上達，其下墜之氣行至少腹，小便即不能禁，且覺下焦涼甚，肢體無力，其脈左右皆沉濡，而右部寸關之沉濡尤甚。

診斷：此胸中大氣下陷之劇者也。此證因大氣虛陷，心血之循環無力，是以脈象沉濡而遲，肺氣之呼吸將停，是以努力呼氣外出而猶難上達。不但此也，大氣雖在膈上，實能斡旋全身統攝三焦，今因下陷而失位無權，是以全身失其斡旋，肢體遂酸軟無力，三焦失其統攝，小便遂泄瀉不禁。其下焦涼甚者，外受之寒涼隨大氣下陷至下焦也。此證之危已至極點，當用重劑升舉其下陷之大氣，使復本位，更兼用溫暖下焦之藥，祛其寒涼庶能治癒。

處方：野臺參（五錢）、烏附子（四錢）、生懷山藥（一兩）。煎湯一盅溫服，此為第一方。

又方：生箭耆（一兩）、生懷山藥（一兩）、白朮（四錢炒）、淨萸肉（四錢）、草薢（二錢）、升麻（錢半）、柴胡（錢半）。共煎藥一大盅，溫服。此為第二方。先服第一方，後遲一點半鍾即服第二方。

效果：將藥如法各服兩劑，下焦之涼與小便之不禁皆愈，惟呼吸猶覺氣分不足，肢體雖不酸軟，仍覺無力，遂但用第二方，將方中柴胡減去，加桂枝尖錢半，連服數劑，氣息已順。又將方中升麻、桂枝，皆改用一錢，服至五劑，身體健康如常，遂停藥勿服。

或問「此二方前後相繼服之，中間原為時無多，何妨將二方並為一方」？答曰「凡欲溫暖下焦之藥，宜速其下行，不可用升藥提之。若將二方並為一方，附子與升、柴並用，其上焦必生煩躁，而下焦之寒涼轉不能去。惟先服第一方，附子得人參之助，其熱力之敷布最速，是以為時雖無多，下焦之寒涼已化其強半，且參附與山藥並用，大能保合下焦之氣化，小便之不禁者亦可因之收攝，此時下焦受參附山藥之培養，已有一陽來復，徐徐上升之機。已陷之大氣雖不能因之上升，實已有上升之根基。遂繼服第二方，黃耆與升柴並用，升提之力甚大，借之以升提下陷之大氣，如人欲登高山則或推之，或挽之，縱肢體軟弱，亦不難登峰

造極也。且此一點餘鐘，附子之熱力已融化於下焦，雖遇升柴之升提，必不至上  
升作煩躁，審斯則二方不可相並之理由，及二方前後繼服之利益不昭然乎。

或問「葶藶之性，《別錄》謂其治失溺，是能縮小便也；《甄權》謂其治腎  
間膀胱縮水，是能利小便也，今用於第二方中，欲藉之以治小便不禁明矣，是則  
《別錄》之說可從，《甄權》之說不可從歟？」答曰「二書論葶藶之性相反，而  
愚從《別錄》不從《甄權》者，原從實驗中來也。曾治以小便不通證，其人因淋  
疼，醫者投以葶藶分清飲兩劑，小便遂滴瀝不通。後至旬月，迎愚為診視，既至  
已昇諸床，奄奄一息，毫無知覺，脈細如絲，一息九至。愚謂病家曰『此證小便  
不通，今夜猶可無礙，若小便通下則危在目前矣』，病家再三懇求，謂小便通下  
縱有危險，斷不敢怨先生。愚不得已為開大滋真陰之方，而少以利小便之藥佐之。  
將藥灌下，須臾小便通下，其人遂脫，果如所料。由此深知，葶藶果能縮小便，  
斷不能通小便也。然此藥在藥房中，恒以土茯苓偽充。土茯苓固利小便者也，若  
恐此藥無真者，則方中不用此藥亦可。再者，凡藥方之名美而藥劣者，醫多受其  
誤，葶藶分清飲是也。其方不但葶藶能縮小便，即益智之澀、烏藥之溫亦皆與小  
便不利，嘗見有以治水腫，而水腫反加劇，以之治淋病，而淋病益增疼者，如此  
等方宜嚴加屏斥，勿使再見於方書，亦掃除醫學障礙之一端也」。

或問「人身之血，原隨氣運行，如謂心血之迴圈大氣主之，斯原近理，至肺  
之呼吸，西人實驗之，而知關於延髓，若遵《內經》之謂呼吸亦關大氣，是西人

實驗亦不足憑歟」？答曰「西人之實驗原足憑，〈內經〉之所論亦宜確信。譬如火車，延髓者，機輪也，大氣者，水火之蒸汽也，無機輪，火車不能行，無水火，之蒸汽火車亦不能行。《易》云『形而上者謂之道，形而下者謂之氣』，西人注重形下，是以凡事皆求諸實見；中醫注重形上，恒由所見而推及於所不見。《內經》謂『上氣不足，腦為之不滿，耳為之苦鳴，頭為之傾，目為之眩』，夫上氣者，即胸中大氣也，細審《內經》之文，腦部原在大氣斡旋之中，而延髓與腦相連，獨不在大氣斡旋之中乎？由斯知延髓之能司呼吸，其原動力固在大氣也。《內經》與西說原不相背，是以當今欲求醫學進步，當匯通中西以科學開哲學之始，即以哲學濟科學之窮，通變化裁，運乎一心，自於醫學能登峰造極也。

【大氣下陷】

李登高，山東恩縣人，年三十二歲，寓天津河東里安街，拉洋車為業，得大氣下陷證。

病因：腹中覺饑，未吃飯，枵腹奔走七八里，遂得此病。

證候：呼吸短氣，心中發熱，懶食，肢體酸懶無力，略有動作，即覺氣短不足以息。其脈左部弦而兼硬，右部則寸關皆沉而無力。

診斷：此胸中大氣下陷，其肝膽又蘊有鬱熱也。蓋胸中大氣，原為後天宗氣，能代先天元氣主持全身，然必賴水穀之氣以養之。此證因忍饑勞力過度，是以大氣下陷，右寸關之沉而無力其明徵也。其舉家數口生活皆賴一人勞力，因氣陷不能勞力繼將斷炊，肝膽之中遂多起急火，其左脈之弦而兼硬是明徵也。治之者當用拙擬之升陷湯（在《衷中參西錄》三期四卷），升補其胸中大氣，而輔以涼潤之品以清肝膽之熱。

處方：生箭耆（八錢）、知母（五錢）、桔梗（二錢）、柴胡（二錢）、升麻（錢半）、生杭芍（五錢）、龍膽草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服兩劑，諸病脫然痊愈。

【大氣下陷身冷】

天津東門里東箭道，宋氏婦，年四旬，於仲夏得大氣下陷，周身發冷證。

病因：稟賦素弱，居恆自覺氣分不足，偶因努力搬運重物，遂覺呼吸短氣，周身發冷。

證候：呼吸之間，恆覺氣息不能上達，時當暑熱，著袂衣猶覺寒涼，頭午病稍輕，午後則漸劇，必努力始能呼吸，外被大氅猶或寒戰，飲食少許，猶不消化。其脈關前沉細欲無，關後差勝亦在沉分，一息不足四至。

診斷：此上焦心肺之陽虛損，又兼胸中大氣下陷也。為其心肺陽虛，是以周身惡寒而飲食不化，為其胸中大氣下陷，是以呼吸短氣，頭午氣化上升之時是以病輕，過午氣化下降之時所以增劇也。擬治以回陽升陷湯（方在三期四卷）加黨參之大力者以補助之。

處方：生箭耆（八錢）、野臺黨參（四錢）、乾薑（四錢）、當歸身（四錢）、桂枝尖（三錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服三劑，氣息已順，而兼有短氣之時，周身已不發冷，惟晚間睡時仍須厚覆，飲食能消化，脈象亦大有起色。遂即原方去黨參，將乾薑、桂枝皆改用二錢，又加生懷山藥八錢，俾再服數劑，以善其後。

說明：心為君火，全身熱力之司命，肺與心同居膈上，一係相連，血脈之循環又息息相通，是以與心相助為理，同主上焦之陽氣。然此氣雖在上焦，實如日麗中天，照臨下土，是以其熱力透至中焦，胃中之飲食因之熟腐，更透至下焦，命門之相火因之生旺，內溫臟腑，外暖周身，實賴此陽氣為布護宣通也。特是，心與肺皆在胸中大氣包舉之中，其布護宣通之原動力，實又賴於大氣，此證心肺之陽本虛，向賴大氣為之保護，故猶可支持，迨大氣陷而失其保護，遂致虛寒之象頓呈，此方以升補胸中大氣為主，以培養心肺之陽為輔，病藥針芥相投，是以服之輒能奏效也。



【大氣陷兼消食】

李景文，年二十六歲，北平大學肄業生，得大氣下陷兼消食證。

病因：其未病之前二年，常覺呼吸短氣，初未注意。繼因校中功課勞心，短氣益劇，且覺食量倍增，因成消食之證。

證候：呼吸之間，覺吸氣稍易而呼氣費力，夜睡一點鐘許，即覺氣不上達，須得披衣起坐，遲移時，氣息稍順，始能再睡。一日之間，進食四次猶饑，饑時若不急食，即覺怔忡，且心中常覺發熱，大便乾燥，小便短赤，其脈浮分無力，沉分稍實，至數略遲。

診斷：此乃胸中大氣下陷，兼有伏氣化熱，因之成消食也。為其大氣下陷，是以脈象浮分無力，為其有伏氣化熱，是以其沉分猶實，既有伏氣化熱矣，而脈象轉稍遲者，因大氣下陷之脈原多遲也。蓋胃中有熱者，恆多化食，而大氣下陷其胃氣因之下降甚速者，亦恆能多食。今既病大氣下陷，又兼伏氣化熱，侵入胃中，是以日食四次猶饑也。此宜升補其胸中大氣，再兼用寒涼之品以清其伏氣所化之熱，則短氣與消食原不難並愈也。

處方：生箭耆（六錢）、生石膏（一兩搗細）、天花粉（五錢）、知母（五錢）、玄參（四錢）、升麻（錢半）、柴胡（錢半）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅溫服。

複診：將藥連服四劑，短氣已愈強半，發熱與消食亦大見愈，遂即原方略為加減俾再服之。

處方：生箭耆（六錢）、天花粉（六錢）、知母（六錢）、玄參（六錢）、淨萸肉（三錢）、升麻（錢半）、柴胡（錢半）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅，溫服。

方解：方中去石膏者，以伏氣所化之熱所餘無多也。既去石膏而又將花粉、知母諸涼藥加重者，因花粉諸藥原用以調劑黃耆之溫補生熱，而今則兼用之以清伏氣所化之餘熱，是以又加重也。至於前方之外，又加萸肉者，欲以收斂大氣之渙散，俾大氣之已升者不至復陷，且又以萸肉得木氣最厚，酸斂之中大具條暢之性，雖伏氣之熱猶未盡消，而亦不妨用之也。

效果：將藥又連服四劑，病遂痊愈，俾停服湯藥，再用生箭耆、天花粉等分軋為細末，每服三錢，日服兩次以善其後。

或問「脈之遲數，恆關於人身之熱力，熱力過盛則脈數，熱力微弱則脈遲，此定理也。今此證雖有伏氣化熱，因大氣下陷而脈仍遲，何以脈之遲數與大氣若斯有關係乎？」答曰「胸中大氣亦名宗氣，為其實用能斡旋全身，故曰大氣，為其為後天生命之宗主，故又曰宗氣。《內經》謂宗氣積於胸中以貫心脈而行呼吸，深思《內經》之言，知肺葉之闢辟，固為大氣所司，而心機之跳動，亦為大氣所

司也。今因大氣下陷而失其所司，是以不惟肺受其病，心機之跳動亦受其病而脈遂遲也」。

【大氣陷兼疝氣】

陳邦啟，天津鹽道公署科員，年三十八歲，得大氣下陷兼疝氣證。

病因：初因勞心過度，浸覺氣分不舒，後又因出外辦事勞碌過甚，遂覺呼吸短氣，猶不以為意也。繼又患疝氣下墜作疼，始來寓求為診治。

證候：呼吸之際，常覺氣短似難上達，勞動時則益甚。夜間臥睡一點鐘許，即覺氣分不舒，披衣起坐移時將氣調勻，然後能再睡。至其疝氣之墜疼，恆覺與氣分有關，每當呼吸不利時，則疝氣之墜疼必益甚。其脈關前沉而無力，右部尤甚，至數稍遲。

診斷：即此證脈參之，其呼吸之短氣，疝氣之下墜，實皆因胸中大氣下陷也。此氣一陷則肺臟之闢失其斡旋，是以呼吸短氣，三焦之氣化失其統攝，是以疝氣下墜。斯當升補其下陷之大氣，俾仍還其本位，則呼吸之短氣，疝氣之墜疼自皆不難愈矣。

處方：生箭耆（六錢）、天花粉（六錢）、當歸（三錢）、荔枝核（三錢）、生明沒藥（三錢）、生五靈脂（三錢）、柴胡（錢半）、升麻（錢半）、小茴香（一錢炒搗）。共煎湯一大盅，溫飲下。

複診：將藥連服三劑，短氣之病已大見愈，惟與人談話多時，仍覺短氣。其疝氣已上升，有時下墜亦不作疼，脈象亦大有起色。此藥已對證，而服藥之功候未到也，爰即原方略為加減，俾再服之。

處方：生箭耆（六錢）、天花粉（六錢）、淨萸肉（四錢）、當歸（三錢）、荔枝核（三錢）、生明沒藥（三錢）、生五靈脂（三錢）、柴胡（錢半）、升麻（錢半）、廣砂仁（一錢搗碎）。共煎一大盅溫服。

效果：將藥連服四劑，呼吸已不短氣，然仍自覺氣分不足，疝氣亦大輕減，猶未全消。遂即原方去萸肉，將柴胡、升麻皆改用一錢，又加黨參、天冬各三錢，俾多服數劑以善其後。

【衝氣上衝兼奔豚】

張繼武，住天津河東吉家胡同，年四十五歲，得衝氣上衝兼奔豚證。

病因：初秋之時，患赤白痢證，醫者兩次用大黃下之，其痢愈而變為此證。證候：每夜間當丑寅之交，有氣起自下焦挾熱上衝，行至中焦覺悶而且熱，心中煩亂，遲十數分鐘其氣上出為呃，熱即隨之消矣。其脈大致近和平，惟兩尺稍浮，按之不實。

診斷：此因病痢時，連服大黃下之，傷其下焦氣化，而下焦之衝遂挾腎中之相火上衝也。其在丑寅之交者，陽氣上升之時也，宜用仲師桂枝加桂湯加減治之。

處方：桂枝尖（四錢）、生懷山藥（一兩）、生芡實（六錢搗碎）、清半夏（四錢水洗三次）、生杭芍（四錢）、生龍骨（四錢搗碎）、生牡蠣（四錢搗碎）、生麥芽（三錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、黃柏（二錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥煎服兩劑，病癒強半，遂即原方將桂枝改用三錢，又加淨莢肉、甘枸杞各四錢，連服三劑痊愈。

說明：凡氣之逆者可降，鬱者可升，惟此證衝氣挾相火上衝，則升降皆無所施。桂枝一藥而升降之性皆備，凡氣之當升者遇之則升，氣之當降者遇之則降，此誠天生使獨而為不可思議之妙藥也。山藥、芡實，皆能補腎，又皆能斂戢下焦

氣化；龍骨、牡蠣，亦收斂之品，然斂正氣而不斂邪氣，用於此證初無收斂過甚之虞，此四藥並用，誠能於下焦之氣化培養而鎮安之也。用芍藥、黃柏者，一瀉腎中之相火，一瀉肝中之相火，且桂枝性熱，二藥性涼，涼熱相濟，方能奏效。用麥芽、雞內金者，所以運化諸藥之力也。用甘草者，欲以緩肝之急，不使肝木助氣衝相火上升也。至於服藥後病癒強半，遂減輕桂枝加莢肉、枸杞者，俾肝腎壯旺自能掃除病根。至醫界同人，或對於桂枝升降之妙用而有疑義者，觀本書三期二卷參赭鎮氣湯後所載單用桂枝治癒之案自能了然。

【胃氣不降】

大城王家口，王佑三夫人，年近四旬，時常嘔吐，大便遲下，數年不愈。病因：其人稟性暴烈，處境又多不順，浸成此證。

證候：飯後每覺食停胃中，似有氣上衝，阻其下行，因此大便恆至旬日始下。至大便多日不下時，則恆作嘔吐，即屢服止嘔通便之藥，下次仍然如故。佑三因愚曾用藥治癒其腹中冷積，遂同其夫人來津求為診治，其脈左右皆弦，右脈弦而且長，重診頗實，至數照常。

診斷：弦為肝脈，弦而且長則衝脈也。弦長之脈，見於右部，尤按之頗實，此又為胃氣上逆之脈。肝胃衝三經之氣化皆有升無降，宜其下焦便秘而上焦嘔吐也。此當治以瀉肝、降胃、鎮衝之劑，其大便自順，嘔吐自止矣。

處方：生赭石（兩半軋細）、生杭芍（六錢）、柏子仁（六錢）、生懷山藥（六錢）、天冬（六錢）、懷牛膝（五錢）、當歸（四錢）、生麥芽（三錢）、茵陳（二錢）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：服藥一劑，大便即通下，即原方略為加減，又服數劑，大便每日一次，食後胃中已不覺停滯，從此病遂除根。

或問「麥芽生用能升肝氣，茵陳為青蒿之嫩者亦具有升發之力，此證即因臟腑之氣有升無降，何以方中復用此二藥乎」？答曰「肝為將軍之官，中寄相火，



其性最剛烈，若強制之，恆激發其反動之力，麥芽、茵陳，善舒肝氣而不至過於升提，是將順肝木之性使之柔和，不至起反動力也」。

【肝氣鬱兼胃氣不降】

姚景仁，住天津鼓樓東，年五十二歲，得肝鬱胃逆證。

病因：其近族分支多門，恒不自給，每月必經心為之補助，又設有買賣數處，亦自經心照料，勞心太過，因得斯證。

證候：腹中有氣，自下上衝，致胃脘滿悶，胸中煩熱，脅下脹疼，時常呃逆，間作嘔吐，大便燥結，其脈左部沉細，右部則弦硬而長，大於左部數倍。

診斷：此乃肝氣鬱結，衝氣上衝，更迫胃氣不降也。為肝氣鬱結，是以左脈沉細，為衝氣上衝，是以右脈弦長，衝脈上隸陽明，其氣上衝不已，易致陽明胃氣不下降，此證之嘔吐呃逆，胃脘滿悶，胸間煩熱，皆衝胃之氣相並衝逆之明徵也。其脅下脹疼，肝氣鬱結之明徵也。其大便燥結者，因胃氣原宜息下行，傳送飲食下為二便，今其胃氣既不下降，是以大便燥結也。擬治以舒肝降胃安衝之劑。

處方：生赭石（一兩軋細）、生懷山藥（一兩）、天冬（一兩）、寸麥冬（六錢去心）、清半夏（四錢水洗三次）、碎竹茹（三錢）、生麥芽（三錢）、茵陳（二錢）、川續斷（二錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、甘草（錢半）。煎湯一大盅，溫服。

方解：肝主左而宜升，胃主右而宜降，肝氣不升則先天之氣化不能由肝上達，胃氣不降則後天之飲食不能由胃下輸，此證之病根，正因當升者不升，當降者不

降也。故方中以生麥芽、茵陳以升肝；生赭石、半夏、竹茹以降胃，即以安衝；用續斷者，因其能補肝，可助肝氣上升也；用生山藥二冬者，取其能潤胃補胃，可助胃氣下降也，用雞內金者，取其能化瘀止痛，以營運諸藥之力也。

復診：上方隨時加減，連服二十餘劑，肝氣已升，胃氣已降，左右脈均已平安，諸病皆愈。惟肢體乏力，飲食不甚消化，擬再治以補氣健胃之劑。

處方：野臺參（四錢）生懷山藥（一兩）生赭石（六錢軋細）天冬（六錢）寸麥冬（六錢）生雞內金（三錢黃色的搗）生麥芽（三錢）、甘草（錢半）。煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥煎服三劑，飲食加多，體力漸復。於方中加枸杞五錢，白朮三錢，俾再服數劑以善其後。

說明：身之氣化，原左升右降，若但知用赭石降胃，不知用麥芽升肝，久之，肝氣將有鬱遏之弊，況此證之肝氣原鬱結乎？此所以方中用赭石，即用麥芽，赭石生用而麥芽亦生用也。且諸家本草調麥芽炒用者，為丸散計也，若入湯劑何須炒用，蓋用生者煮汁飲之，則消食之力愈大也。

或問「升肝之藥，柴胡最效，今方中不用柴胡而用生麥芽者，將毋別有所取乎」？答曰「柴胡升提肝氣之力甚大，用之失宜，恆並將胃氣之下行者提之上逆。曾有患陽明厥逆吐血者，初不甚劇，醫者誤用柴胡數錢即大吐不止，須臾盈一痰盂，有危在頃刻之懼，取藥無及，適備有生赭石細末若干，俾急用溫開水送下，

約盡兩半，其血始止，此柴胡並能提胃氣上逆之明徵也。況此證之胃氣原不降乎？至生麥芽雖能升肝，實無妨胃氣之下降，蓋其萌芽發生之性，與肝木同氣相求，能宣通肝氣之鬱結，使之開解而自然上升，非若柴胡之純於升提也」。

【胃氣不降】

掖縣任維周夫人，年五旬，得胃氣不降證，因維周在津經商，遂來津求為診治。

原因：舉家人口眾多，因其夫在外，家務皆自操勞，恆動肝火，遂得此證。證候：食後停滯胃中，艱於下行，且時覺有氣挾火上衝，口苦舌脹，目眩耳鳴，恆有呃欲嘔逆或噁心，胸膈煩悶，大便六七日始行一次，或至服通利藥始通，小便亦不順利。其脈左部弦硬，右部弦硬而長，一息搏近五至，受病四年，屢次服藥無效。

診斷：此肝火與肝氣相並，衝激胃腑，致胃腑之氣不能息息下行傳送飲食，久之，胃氣不但不能下行，且更轉而上逆，是以有種種諸病也。宜治以降胃理衝之品，而以滋陰清火之藥輔之。

處方：生赭石（兩半軋細）、生懷山藥（一兩）、生杭芍（六錢）、玄參（六錢）、生麥芽（三錢）、茵陳（二錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：每日服藥一劑，三日後大便日行一次，小便亦順利。上焦諸病亦皆輕減，再診其脈，頗見柔和。遂將赭石減去五錢，又加柏子仁五錢，連服數劑，霍然痊愈。

血病門

【吐血證】

張煥卿，年三十五歲，住天津特別第一區三義莊，業商，得吐血證，年餘不愈。

病因：稟性褊急，勞心之餘又兼有拂意之事，遂得斯證。

證候：初次所吐甚多，屢經醫治，所吐較少，然終不能除根。每日或一次或兩次，覺心中有熱上衝，即吐血一兩口，因病久身羸弱，臥床不起，亦偶有扶起少坐之時，偶或微喘，幸食慾猶佳，大便微溏，日行兩三次，其脈左部弦長，重按無力，右部大而芤，一息五至。

診斷：凡吐血久不愈者，多係胃氣不降，致胃壁破裂，出血之處不能長肉生肌也。再即此脈論之，其左脈之弦，右脈之大，原現有肝火浮動挾胃氣上衝之象，是以前其吐血時，覺有熱上逆，至其脈之弦而無力者，病久而氣化虛也。大而兼芤者，失血過多也。至其呼吸有時或喘，大便日行數次，亦皆氣化虛而不攝之故。治此證者，當投以清肝、降胃、培養氣血、固攝氣化之劑。

處方：赤石脂（兩半）、生懷山藥（一兩）、淨萸肉（八錢）、生龍骨（六錢搗碎）、生牡蠣（六錢搗碎）、生杭芍（六錢）、大生地黃（四錢）、甘草（二錢）、廣三七（二錢）。藥共九味，將前八味煎湯送服三七末。

方解：降胃之藥莫如赭石，此愚治吐衄恆用之藥也。此方中獨重用赤石脂者，因赭石為鐵養化合其重墜之力甚大，用之雖善降胃，而其力達於下焦，又善通大便，此證大便不實，赭石似不宜用。赤石脂之性，重用之亦能使胃氣下降，至行至下焦，其粘滯之力又能固澀大便，且其性能生肌，更可使腸壁破裂出血之處早愈，誠為此證最宜之藥也。

效果：將藥煎服兩劑，血即不吐，喘息已平，大便亦不若從前之勤，脈象亦較前和平，惟心中仍有覺熱之時。遂即原方將生地黃改用一兩，又加熟地黃一兩，連服三劑，諸病皆愈。

【咳血兼吐血證】

堂侄女住姑，適鄰村王氏，於乙酉仲春，得吐血證，時年三十歲。

病因：因家務自理，勞心過度，且稟賦素弱，當此春陽發動之時，遂病吐血。

證候：先則咳嗽痰中帶血，繼則大口吐血，其吐時覺心中有熱上衝，一日夜吐兩三次，劇時可吐半碗。兩日之後，覺精神氣力皆不能支持，遂急迎愚診治。自言心中搖搖似將上脫，兩顴發紅，面上發熱，其脈左部浮而動，右部浮而濡，兩尺無根，數逾五至。

診斷：此肝腎虛極，陰分陽分不相維繫，而有危在頃刻之勢。遂急為出方取藥以防虛脫。

處方：生懷山藥（一兩）、生懷地黃（一兩）、熟懷地黃（一兩）、淨萸肉（一兩）、生赭石（一兩軋細）。急火煎藥取湯兩盅，分兩次溫服下。

效果：將藥甫煎成未服，又吐血一次，吐後忽停息閉目，昏然罔覺。診其脈跳動仍舊，知能甦醒，約四分鐘呼吸始續，兩次將藥服下，其血從此不吐。俾即原方再服一劑，至第三劑即原方加潞黨參三錢、天冬四錢，連服數劑，身形亦漸復原。繼用生懷山藥為細面，每用八錢煮作茶湯，少調以白糖，送服生赭石細末五分，作點心用之以善其後。



【吐血兼咳嗽】

王寶森，天津裕大紡紗廠理事，年二十四歲，得咳嗽吐血證。

病因，稟賦素弱，略有外感，即發咳嗽，偶因咳嗽未癒，繼又勞心過度，心中發熱，遂至吐血。

證候，先時咳嗽猶輕，失血之後則嗽益加劇，初則痰中帶血，繼則大口吐血，心中發熱，氣息微喘，脅下作疼，大便乾燥，其脈關前浮弦，兩尺重按不實，左右皆然，數逾五至。

診斷：此證乃肺金傷損，肝木橫恣，又兼胃氣不降，腎氣不攝也。為其肺金受傷，是以咳嗽痰中帶血；為胃氣不降，是以血隨氣升，致胃中血管破裂而大口吐血；至脅下作疼，乃肝木橫恣之明證；其脈上盛下虛，氣息微喘，又腎氣不攝之明徵也。治之者，宜平肝、降胃、潤肺、補腎，以培養調劑其臟腑，則病自愈矣。

處方：生懷山藥（一兩）、生赭石（六錢軋細）、生懷地黃（一兩）、生杭芍（五錢）、天冬（五錢）、大甘枸杞（五錢）、川貝母（四錢）、生麥芽（三錢）、牛蒡子（三錢搗碎）、射干（二錢）、廣三七（三錢細末）、粉甘草（二錢細末）。藥共十二味，將前十味煎湯一大盅，送服三七、甘草末各一半，至煎渣再服，仍送服其餘一半。

十餘劑，其嗽始除根，身體亦漸壯健。效果：服藥一劑，吐血即愈，諸病亦輕減，後即原方隨時為之加減，連服三

【吐血兼咳嗽】

孫星橋，天津南開義聚成鐵工廠理事，年二十八歲，得吐血兼咳嗽證。

病因：因事因天津南小站分有支廠，彼在其中經理，因有官活若干，工人短少，恐誤日期，心中著急起火，遂致吐血咳嗽。

證候：其吐血之始，至今已二年矣。經醫治癒，屢次反覆，少有操勞，心中發熱即復吐血。又頻作咳嗽，嗽時吐痰亦恆帶血。肋下恆作刺疼，嗽時其疼益甚，口中發乾，身中亦間有灼熱，大便乾燥。其脈左部弦硬，右部弦長，皆重按不實，一息搏近五至。

診斷：此證左脈弦硬者，陰分虧損而肝膽有熱也，右部弦長者，因衝氣上衝並致胃氣上逆也。為其衝衝胃逆，是以胃壁血管破裂以至於吐血咳血也。其脈重按不實者，血虧而氣亦虧也。至於口無津液，身或灼熱，大便乾燥，無非血少陰虧之現象。擬治以清肝、降胃、滋陰、化痰之劑。

處方：生赭石（八錢軋細）、生懷地黃（一兩）、生懷山藥（一兩）、生杭芍（六錢）、玄參（五錢）、川棟子（四錢搗碎）、生麥芽（三錢）、川貝母（三錢）、甘草（錢半）、廣三七（二錢細末）。藥共十味，將前九味煎湯一大盅，送服三七末一半，至煎渣重服時，再送服其餘一半。

方解：愚治吐血，凡重用生地黃，必用三七輔之，因生地黃最善涼血，以治血熱妄行，猶恐妄行之血因涼而凝，瘀塞於經絡中也。三七善化瘀血，與生地黃並用，血止後自無他虞，且此證肋下作疼，原有瘀血，則三七尤在所必需也。

複診：將藥連服三劑，吐血痊愈，咳嗽吐痰亦不見血，肋疼亦愈強半，灼熱已無，惟口中仍發乾，脈仍有弦象。知其真陰猶虧也，擬再治以滋補真陰之劑。

處方：生懷山藥（一兩）、生懷地黃（六錢）、大甘枸杞（六錢）、生杭芍（四錢）、玄參（四錢）、生赭石（四錢軋細）、生麥芽（二錢）、甘草（二錢）、廣三七（二錢細末）。服法如前。

效果：將藥連服五劑，病痊愈，脈亦復常，遂去三七，以熟地黃易生地黃，俾多服數劑以善其後。

【吐血證】

馮松慶，年三十二歲，原籍浙江，在津充北寧鐵路稽查，得吐血證久不愈。病因：處境多有拂意，繼因辦公勞心勞力過度，遂得此證。

證候：吐血已逾二年，治癒，屢次反覆。病將發時，覺胃中氣化不通，滿悶發熱，大便滯塞，旋即吐血，兼咳嗽多吐痰涎。其脈左部弦長，右部長而兼硬，一息五至。

診斷：此證當係肝火挾衝胃之氣上衝，血亦隨之上逆，又兼失血久而陰分虧也。為其肝火熾盛，是以左脈弦長；為其肝火挾衝胃之氣上衝，是以右脈長而兼硬；為其失血久而真陰虧損，是以其脈既弦硬（弦硬即有陰虧之象）而又兼數也。此宜治以瀉肝降胃之劑，而以大滋真陰之藥佐之。

處方：生赭石（一兩軋細）、玄參（八錢）、大生地（八錢）、生懷山藥（六錢）、栝藹仁（六錢炒搗）、生杭芍（四錢）、龍膽草（三錢）、川貝母（三錢）、甘草（錢半）、廣三七（二錢細末）。藥共十味，先將前九味煎湯一大盅，送服三七細末一半，至煎渣重服時，再送服其餘一半。

效果：每日煎服一劑，初服後血即不吐，服至三劑咳嗽亦愈，大便順利。再診其脈，左右皆有和柔之象，問其心中悶熱全無。遂去藹仁、龍膽草，生山藥改用一兩，俾多服數劑，吐血之病可從此永遠除根矣。

【吐血證】

張姓，年過三旬，寓居天津南門西沈家臺，業商，偶患吐血證。

病因：其人性嗜酒，每日必飲，且不知節。初則飲酒過量即覺胸間煩熱，後則不飲酒時亦覺煩熱，遂至吐血。

證候：其初吐血之時，原不甚劇，始則痰血相雜，因咳吐出，即或純吐鮮血，亦不過一日數口，繼復因延醫服藥，方中有柴胡三錢，服藥半點鐘後，遂大吐不止，倉猝迎愚往視。及至，則所吐之血已盈痰盂，又復連連嘔吐，若不立為止住，實有危在目前之懼。幸所攜藥囊中有生赭石細末一包，俾先用溫水送下五錢，其吐少緩須臾，又再送下五錢遂止住不吐。診其脈弦而芤，數逾五至，其左寸搖搖有動意，問其心中覺怔忡乎？答曰「怔忡殊甚，幾若不能支持」。

診斷：此證初傷於酒，繼傷於藥，臟腑之血幾於傾囊而出。猶幸速為立止，宜急服湯藥以養其血，降其胃氣保其心氣，育其真陰，連服數劑，庶其血不至再吐。

處方：生懷山藥（一兩）、生赭石（六錢軋細）、玄參（六錢）、生地黃（六錢）、生龍骨（六錢搗碎）、生牡蠣（六錢搗碎）、生杭芍（五錢）、酸棗仁（四錢炒搗）、柏子仁（四錢）、甘草（錢半）、廣三七（三錢細末）。此方將前十味煎湯，三七分兩次用，頭煎及二煎之湯送服。

無，至數仍略數，遂將生地黃易作熟地黃，俾再服數劑以善其後。效果：每日服藥一劑，連服三日血已不吐，心中不復怔忡。再診其脈孔動皆

〈 第 二 卷 〉



血病門

【大便下血】

袁鏡如，住天津河東，年三十二歲，為天津統稅局科員，得大便下血證。

病因：先因勞心過度，心中時覺發熱，繼又因朋友宴會，飲酒過度遂得斯證。證候：自孟夏下血，歷六月不止，每日六七次，腹中覺疼即須入廁，心中時或發熱，懶於飲食。其脈浮而不實有似芤脈，而不若芤脈之硬，兩尺沉分尤虛，至數微數。

診斷：此證臨便時腹疼者，腸中有潰爛處也。心中時或發熱者，陰虛之熱上浮也。其脈近芤者，失血過多也。其兩尺尤虛者，下血久而陰虧，更兼下焦氣化不固攝也。此宜用化腐生肌之藥治其腸中潰爛，滋陰固氣之藥固其下焦氣化，則大便下血可愈矣。

處方：生懷山藥（兩半）、熟地黃（一兩）、龍眼肉（一兩）、淨萸肉（六錢）、樗白皮（五錢）、金銀花（四錢）、赤石脂（四錢研細）、甘草（二錢）、鴉膽子仁（八十粒成實者）、生硫黃（八分細末）。藥共十味，將前八味煎湯，送服鴉膽子、硫黃各一半，至煎渣再服時，仍送服其餘一半，至於硫黃生用之理，詳於敦復湯下。

方解：方中鴉膽子、硫黃並用者，因鴉膽子善治下血，而此證之脈兩尺過弱，又恐單用之失於寒涼，故少加硫黃輔之，況其腸中脂膜，因下血日久易至腐敗釀毒，二藥之性皆善消除毒菌也。又其腹疼下血，已歷半載不愈，有似東人志賀潔所謂阿米巴赤痢，硫黃實又為治阿米巴赤痢之要藥也。

複診：前藥連服三劑，下血已癒，心中亦不發熱，脈不若從前之浮，至數如常。而其大便猶一日溏瀉四五次，此宜投以健胃固腸之劑。

處方：炙箭耆（三錢）、炒白朮（三錢）、生懷山藥（一兩）、龍眼肉（一兩）、生麥芽（三錢）、建神麴（三錢）、大雲苓片（二錢）。共煎湯一大盅溫服。

效果：將藥連服五劑，大便已不溏瀉，日下一次，遂停服湯藥。俾用生懷山藥細末煮作粥，調以白糖，當點心服之以善其後。

【大便下血】

高福亭，年三十六歲，膠濟路員警委員，得大便下血證。

病因：冷時出外辦事，寢於寒涼屋中，床衾又甚寒涼遂得斯證。

證候：每日下血數次，或全是血，或兼有大便，或多或少，其下時多在夜間，每覺腹中作疼，即須入廁，夜間恆苦不寐，其脈遲而芤，兩尺尤不堪重按，病已二年餘，服溫補下元藥則稍輕，然終不能除根，久之，則身體漸覺羸弱。

診斷：此下焦虛寒太甚，其氣化不能固攝而血下陷也。視其從前所服諸方，皆係草木之品，其質輕浮，溫暖之力究難下達，當以礦質之品溫暖兼收澀者投之。

處方：生硫黃（半斤色純黃者）、赤石脂（半斤純係粉末者）。將二味共軋細過羅，先空心服七八分，日服兩次，品驗漸漸加多，以服後移時微覺腹中溫暖為度。

效果：後服至每次二錢，腹中始覺溫暖，血下亦漸少。服至旬餘，身體漸壯，夜睡安然，可無入廁。服至月餘，則病根被除矣。

方解：按硫黃之性，溫暖下達，誠為溫補下焦第一良藥，而生用之尤佳，惟其性能潤大便（本草謂其能使大便潤、小便長，西醫以為輕瀉藥），於大便滑瀉者不宜，故輔以赤石脂之粘膩收澀，自有益而無弊矣。

【大便下血】

天津公安局，崔姓工友之子，年十三歲，得大便下血證。

病因：仲夏天熱，賽球競走，勞力過度，又兼受熱，遂患大便下血。

證候：每日大便，必然下血，便時腹中作疼，或輕或劇，若疼劇時，則血之下者必多，已年餘矣。飲食減少，身體羸弱，面目黃白無血色，脈搏六至，左部弦而微硬，右部濡而無力。

診斷：此證當因脾虛不能統血，是以其血下陷至其腹，所以作疼，其腸中必有損傷潰爛處也。當用藥健補其脾胃，兼調養其腸中潰爛。

處方：生懷山藥（一兩）、龍眼肉（一兩）、金銀花（四錢）、甘草（三錢）、廣三七（二錢半軋細末）、鴉膽子（八十粒去皮揀其仁之成實者）。共藥六味，將前四味煎湯，送服三七、鴉膽子各一半，至煎渣再服時，仍送服其餘一半。效果：將藥如法服兩次，下血病即除根矣。

【大便下血】

杜澧芑，年四十五歲，阜城建橋鎮人，湖北督署秘書，得大便下血證。

病因：因勞心過度，每大便時下血，服藥治癒。因有事還籍，值夏季暑熱過甚，又復勞心過度，舊證復發，屢治不愈。遂來津入西醫院治療，西醫為其血在便後，謂係內痔，服藥血仍不止，因轉而求治於愚。

證候：血隨便下，且所下甚多，然不覺疼墜，心中發熱懶食，其脈左部弦長，右部洪滑。

診斷：此因勞心生內熱而牽動肝經所寄相火，致肝不藏血而兼與溽暑之熱相並，所以血妄行也。宜治以清心涼肝兼消暑熱之劑，而少以培補脾胃之藥佐之。

處方：生懷地黃（一兩）、白頭翁（五錢）、龍眼肉（五錢）、生懷山藥（五錢）、知母（四錢）、秦皮（三錢）、黃柏（二錢）、龍膽草（二錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：上方煎服一劑，血已不見，服至兩劑，少腹覺微涼，再診其脈，弦長與洪滑之象皆減退，遂為開半清半補之方以善其後。

處方：生懷山藥（一兩）、熟懷地黃（八錢）、淨莢肉（五錢）、龍眼肉（五錢）、白頭翁（五錢）、秦皮（三錢）、生杭芍（三錢）、地骨皮（三錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

當可除根。效果：將藥煎服一劑後，食慾頓開，腹已不疼，俾即原方多服數劑，下血病

【瘀血短氣】

劉書林，鹽山城西八里莊人，年二十五歲，業泥瓦工，得瘀血短氣證。

病因：因出外修工，努力抬重物，當時覺脅下作疼，數日疼愈，仍覺脅下有物妨礙呼吸。

證候：身形素強壯，自受病之後，遲延半載，漸漸羸弱，常覺右脅之下有物阻礙呼吸之氣，與人言時恆半句而止，候至氣上達再言，若偶忿怒則益甚，脈象近和平，惟稍弱不能條暢。

診斷：此因努力太過，致肝經有不歸經之血瘀經絡之間，阻塞氣息升降之道路也。喜其脈雖稍弱，猶能支持，可用化瘀血之藥，徐徐化其瘀結，氣息自能調順。

處方：廣三七（四兩）。軋為細末，每服錢半，用生麥芽三錢煎湯送下，日再服。

方解：三七為止血妄行之聖藥，又為化瘀血之聖藥，且又化瘀血不傷新血，單服久服無礙，此乃藥中特異之品，其妙處直不可令人思議。愚恆用以消積久之瘀血，皆能奏效，至麥芽原為消食之品，生煮服之則善舒肝氣，且亦能化瘀。試生麥芽於理石（即石膏）上，其根盤曲之狀，理石皆成凹形，為其根含有稀鹽酸，是以有此能力，稀鹽酸固亦善化瘀血者也。是以用之煎湯，以送服三七也。

然痊愈。效果：服藥四日後，自鼻孔中出紫血一條，呼吸較順，繼又服至藥盡，遂脫

或問「人之呼吸在於肺，今謂肝經積有瘀血，即可妨礙呼吸，其義何居」？答曰「按生理之學，人之呼吸可達於衝任，方書又謂呼出心肺，吸入肝腎，若謂呼吸皆在於肺，是以上兩說皆可廢也。蓋心、肺、肝，原一係相連，下又連於衝任，而心肺相連之係，其中原有兩管，一為血脈管，一為回血管，血脈管下行，回血管上行。肺為發動呼吸之機關，非呼吸即限於肺也，是以吸入之氣可由血脈管下達，呼出之氣可由回血管上達，無論氣之上達下達，皆從肝經過，是以血瘀肝經，即有妨於升降之氣息也。據斯以論呼吸之關於肺者固多，而心肺相連之係亦司呼吸之分支也」。



腦充血門

【腦充血頭疼】

談丹崖，北平大陸銀行總理，年五十二歲，得腦充血頭疼證。

病因：稟性強幹精明，分行十餘處多經其手設立，因此勞心過度，遂得腦充血頭疼證。

證候：臟腑之間恆覺有氣上衝，頭即作疼，甚或至於眩暈，其夜間頭疼益甚，恆至疼不能寐。醫治二年無效，浸至言語謇澀，肢體漸覺不利，飲食停滯胃口不下行，心中時常發熱，大便乾燥。其脈左右皆弦硬，關前有力，兩尺重按不實。

診斷：弦為肝脈，至弦硬有力無論見於何部，皆係有肝火過升之弊。因肝火過升，恆引動衝氣胃氣相並上升，是以其臟腑之間恆覺有氣上衝也。人之血隨氣行，氣上升不已，血即隨之上升不已，以致腦中血管充血過甚，是以作疼。其夜間疼益劇者，因其脈上盛下虛，陰分原不充足，是以夜則加劇，其偶作眩暈亦職此也。至其心常發熱，肝火熾，其心火亦熾也。其飲食不下行，大便多乾燥者，又皆因其衝氣挾胃氣上升，胃即不能傳送飲食以速達於大腸也。其言語肢體蹇澀不利者，因腦中血管充血過甚，有妨礙於司運動之神經也。此宜治以鎮肝、降胃、安衝之劑，而以引血下行兼清熱滋陰之藥輔之。又須知肝為將軍之官，中藏相火，強鎮之恆起其反動力，又宜兼用舒肝之藥，將順其性之作引也。

處方：生赭石（一兩軋細）、生懷地黃（一兩）、懷牛膝（六錢）、大甘枸杞（六錢）、生龍骨（六錢搗碎）、生牡蠣（六錢搗碎）、淨萸肉（五錢）、生杭芍（五錢）、茵陳（二錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：將藥連服四劑，頭疼已愈強半，夜間可睡四五點鐘，諸病亦皆見愈，脈象之弦硬已減，兩尺重診有根，擬即原方略為加減俾再服之。

處方：生赭石（一兩軋細）、生懷地黃（一兩）、生懷山藥（八錢）、懷牛膝（六錢）、生龍骨（六錢搗碎）、生牡蠣（六錢搗碎）、淨萸肉（五錢）、生杭芍（五錢）、生雞內金（錢半黃色的搗）、茵陳（錢半）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

三診：將藥連服五劑，頭已不疼，能徹夜安睡，諸病皆愈。惟辦事，略覺操勞過度，頭仍作疼，脈象猶微有弦硬之意，其心中仍間有覺熱之時，擬再治以滋陰清熱之劑。

處方：生懷山藥（一兩）、生懷地黃（八錢）、玄參（四錢）、北沙參（四錢）、生杭芍（四錢）、淨萸肉（四錢）、生珍珠母（四錢搗碎）、生石決明（四錢搗碎）、生赭石（四錢軋細）、懷牛膝（三錢）、生雞內金（錢半黃色的搗）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫飲下。

效果：將藥連服六劑，至經理事務時，頭亦不疼，脈象已和平如常。遂停服湯藥，俾日用生山藥細末，煮作茶湯調以白糖令適口，送服生赭石細末錢許，當點心服之以善其後。

說明：腦充血之病名，倡自西人，實即《內經》所謂諸厥證，亦即後世方書所謂內中風證，三期七卷鎮肝熄風湯後及五期三卷建瓴湯後皆論之甚詳，可參觀。至西人論腦充血證，原分三種，其輕者為腦充血，其血雖充實於血管之中，猶未出於血管之外也，其不過過頭疼，或兼眩暈，或口眼略有歪斜，或肢體稍有不利。其重者為腦溢血，其血因充實過甚，或自分支細血管中溢出少許，或隔血管之壁因排擠過甚滲出少許，其所出之血著於司知覺之神經，則有累知覺，著於司運動之神經，則有累運動，治之得宜，其知覺運動亦可徐徐復其舊。其又重者為腦出血，其血管充血至於極點，而忽然破裂也，其人必忽然昏倒，人事不知，其稍輕者，或血管破裂不劇，血甫出即止，其人猶可徐徐蘇醒。若其人不能自醒，亦可急用引血下行之藥使之蘇醒。然蘇醒之後，其知覺之遲頓，肢體之痿廢，在所不免矣。此證治之得宜，亦可漸愈，若欲治至脫然無累，不過百中之一二耳。至於所用諸種治法，五期三卷中論之頗詳可參觀。

【腦充血頭疼】

天津李氏婦，年過三旬，得腦充血頭疼證。

病因：稟性褊急，家務勞心，常起暗火，因得斯證。

證候：其頭疼或左或右，或左右皆疼，劇時至作呻吟。心中常常發熱，時或煩躁，間有眩暈之時，其大便燥結，非服通下藥不行。其脈左右皆弦硬而長，重診甚實，經中西醫診治二年，毫無功效。

診斷：其左脈弦硬而長者，肝膽之火上升也。其右脈弦硬而長者，胃氣不降而逆行，又兼衝氣上衝也。究之，左右脈皆弦硬，實亦陰分有虧損也。因其臟腑之氣化有升無降，則血隨氣升者過多，遂至充塞於腦部，排擠其腦中之血管而作疼，此《內經》所謂血之與氣，並走於上之厥證也，亦即西人所謂腦充血之證也。其大便燥結不行者，因胃氣不降，失其傳送之職也。其心中發煩躁者，因肝胃之火上升也。其頭部間或眩暈者，因腦部充血過甚，有礙於神經也。此宜清其臟腑之熱，滋其臟腑之陰，更降其臟腑之氣，以引腦部所充之血下行，方能治癒。

處方：生赭石（兩半軋細）、懷牛膝（一兩）、生懷山藥（六錢）、生懷地黃（六錢）、天冬（六錢）、玄參（五錢）、生杭芍（五錢）、生龍齒（五錢搗碎）、生石決明（五錢搗碎）、茵陳（錢半）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅，溫服。

方解：赭石能降胃平肝鎮安衝氣，其下行之力，又善通大便燥結而毫無開破之弊。方中重用兩半者，因此證大便燥結過甚，非服藥不能通下也。蓋大便不通，是以胃氣不下降，而肝火之上升，衝氣之上衝，又多因胃氣不降而增劇，是治此證者，當以通其大便為要務，迨服藥至大便自然通順時，則病癒過半矣。牛膝為治腿疾要藥，以其能引氣血下行也，而《名醫別錄》及《千金翼方》，皆謂其除腦中痛，蓋以其能引氣血下行，即可輕減腦中之充血也。愚生平治此等證必此二藥並用，而又皆重用之。用玄參、天冬、芍藥者，取其既善退熱兼能滋陰也。用龍齒、石決明者，以其皆為肝家之藥，其性皆能斂戢肝火，鎮熄肝風，以緩其上升之勢也。用山藥、甘草者，以二藥皆善和胃，能調和金石之藥與胃相宜，猶白虎湯用甘草粳米之義，而山藥且善滋陰，甘草亦善緩肝也。用茵陳者，因肝為將軍之官，其性剛果，且中寄相火，若但用藥平之鎮之，恆至起反動之力，茵陳最能將順肝木之性，且又善瀉肝熱，李氏《本草綱目》謂善治頭痛，是不但將順肝木之性使不至反動，且又為清涼腦部之要藥也。諸藥彙集為方，久服之自有殊效。

複診：將藥連服二十餘劑（其中隨時略有加減），頭已不疼，惟夜失眠時則仍疼，心中發熱、煩躁皆無，亦不復作眩暈，大便屆時自行，無須再服通藥，脈象較前和平而仍有弦硬之意，此宜注意滋其真陰以除病根。

處方：生赭石（一兩軋細）、懷牛膝（八錢）、生懷山藥（八錢）、生懷地黃（八錢）、玄參（六錢）、大甘枸杞（六錢）、淨萸肉（五錢）、生杭芍（四

錢)、柏子仁(四錢)、生麥芽(三錢)、甘草(二錢)。共煎湯一大盅，溫服。方中用麥芽者，藉以宣通諸藥之滯膩也。且麥芽生用原善調和肝氣，亦猶前方用茵陳之義也。

常矣。效果：將藥又連服二十餘劑(亦隨時略有加減)，病遂痊愈，脈象亦和平如

【腦充血頭疼】

天津北馬路西首，於氏婦，年二十二歲，得腦充血頭疼證。

病因：其月信素日短少，不調，大便燥結，非服降藥不下行，浸至臟腑氣化有升無降，因成斯證。

證候：頭疼甚劇，恆至夜不能眠，心中常覺發熱，偶動肝火即發眩暈，胃中飲食恆停滯不消，大便六七日不行，必須服通下藥始行。其脈弦細有力而長，左右皆然，每分鐘八十至，延醫診治歷久無效。

診斷：此因陰分虧損，下焦氣化不能固攝，衝氣遂挾胃氣上逆，而肝臟亦因陰分虧損，水不滋木，致所寄之相火妄動，恆助肝氣上衝。由斯臟腑之氣化有升無降，而自心注腦之血為上升之氣化所迫，遂至充塞於腦中血管而作疼作暈也。其飲食不消，大便不行者，因衝胃之氣皆逆也；其月信不調且短少者，因衝為血海，肝為衝任行氣，脾胃又為生血之源，諸經皆失其常司，是以月信不調且少也；《內經》謂「血菀（同鬱）於上，使人薄厥」，言為上升之氣血逼薄而厥也，此證不急治則薄厥將成，宜急治以降胃、鎮衝、平肝之劑，再以滋補真陰之藥輔之，庶可轉上升之氣血下行不成薄厥也。

處方：生赭石（一兩軋細）、懷牛膝（一兩）、生懷地黃（一兩）、大甘枸杞（八錢）、生懷山藥（六錢）、生杭芍（五錢）、生龍齒（五錢搗碎）、生石

決明（五錢搗碎）、天冬（五錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、蘇子（二錢炒搗）、茵陳（錢半）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：將藥連服四劑，諸病皆見輕，脈象亦稍見柔和。惟大便六日仍未通行，因思此證必先使其大便如常，則病始可愈，擬將赭石加重，再將餘藥略為加減以通其大便。

處方：生赭石（兩半軋細）、懷牛膝（一兩）、天冬（一兩）、黑芝麻（八錢炒搗）、大甘枸杞（八錢）、生杭芍（五錢）、生龍齒（五錢搗碎）、生石決明（五錢搗碎）、蘇子（三錢炒搗）、生雞內金（錢半黃色的搗）、甘草（錢半）、淨柿霜（五錢）。藥共十二味，將前十一味煎湯一大盅，入柿霜融化溫服。

三診：將藥連服五劑，大便間日一行，諸證皆愈十之八九，月信適來，仍不甚多，脈象仍有弦硬之意，知其真陰猶未充足也。當即原方略為加減，再加滋陰生血之品。

處方：生赭石（一兩軋細）、懷牛膝（八錢）、大甘枸杞（八錢）、龍眼肉（六錢）、生懷地黃（六錢）、當歸（五錢）、玄參（四錢）、沙參（四錢）、生懷山藥（四錢）、生杭芍（四錢）、生雞內金（一錢黃色的搗）、甘草（二錢）、生薑（三錢）、大棗（三枚掰開）。共煎湯一大盅，溫服。



效果：將藥連服四劑後，心中已分毫不覺熱，脈象亦大見和平，大便日行一次，遂去方中玄參、沙參，生赭石改用八錢，生懷山藥改用六錢，俾多服數劑以善其後。

【腦充血兼腿痿弱】

崔華林，天津金鋼橋旁德興木廠理事，年三十八歲，得腦充血兼兩腿痿弱證。病因：出門採買木料，數日始歸，勞心勞力過度，遂得斯證。

證候：其初常覺頭疼，時或眩暈，心中發熱，飲食停滯，大便燥結，延醫治療無效。一日早起下床，覺痿弱無力，痿坐於地，人扶起坐床沿休息移時，自扶杖起立，猶可徐步，然時恐顛仆，其脈左部弦而甚硬，右部弦硬且長。

診斷：其左脈弦硬者，肝氣挾火上升也。右脈弦硬且長者，胃氣上逆更兼衝氣上衝也。因其臟腑間之氣化有升無降，是以血隨氣升充塞於腦部作疼作眩暈。其腦部充血過甚，或自微細血管溢血於外，或隔血管之壁，些些滲血於外，其所出之血，若著於司運動之神經，其重者可使肢體痿廢，其輕者亦可使肢體軟弱無力，若此證之忽然痿坐於地者是也。至其心中之發熱，飲食之停滯，大便之燥結，亦皆其氣化有升無降之故，此宜平肝、清熱、降胃、安衝，不使臟腑之氣化過升，且導引其腦中過充之血使之下行，則諸證自愈矣。

處方：生赭石（一兩軋細）、懷牛膝（一兩）、生懷地黃（一兩）、生珍珠母（六錢搗碎）、生石決明（六錢搗碎）、生杭芍（五錢）、當歸（四錢）、龍膽草（二錢）、茵陳（錢半）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：將藥連服七劑，諸病皆大見愈，脈象亦大見緩和，惟其步履之間仍須用杖，未能復常，心中仍間有發熱之時。擬即原方略為加減，再佐以通活血脈之品。

處方：生赭石（一兩軋細）、懷牛膝（一兩）、生懷地黃（一兩）、生杭芍（五錢）、生珍珠母（四錢搗碎）、生石決明（四錢搗碎）、丹參（四錢）、生麥芽（三錢）、土鱉蟲（五個）、甘草（一錢）。共煎湯一大盅溫服。

效果：將藥連服八劑，步履復常，病遂痊愈。

【腦充血兼痰厥】

駱義波，住天津東門裡謙益里，年四十九歲，業商，得腦充血兼痰厥證。

病因：平素常患頭暈，間有疼時，久則精神漸似短少，言語漸形謇澀，一日外出會友，飲食過度，歸家因事有拂意，怒動肝火，陡然昏厥。

證候：閉目昏昏，呼之不應，喉間痰涎杜塞，氣息微通，診其脈左右皆弦硬而長，重按有力，知其證不但痰厥，實素有腦充血病也。

診斷：其平素頭暈作疼，即腦充血之現證也。其司知覺之神經為腦充血所傷，是以精神短少。其司運動之神經為腦充血所傷，是以言語謇澀。又凡腦充血之人，其臟腑之氣多上逆，胃氣逆則飲食停積不能下行，肝氣逆則痰火相並易於上干，此所以因飽食動怒而陡成痰厥也。此其危險即在目前，取藥無及當先以手術治之。

手術：治痰厥之手術，當以手指點其天突穴處，穴在結喉下宛宛中，即頸與胸交際之處也。點法用右手大指端著穴，指肚向外，指甲貼頸用力向下點之（不可向裏），一點一起，且用指端向下向外撓動，令其杜塞之痰活動，兼可令其喉中發癢作嗽，兼用手指捏其結喉以助其發癢作嗽。近八分鐘許，即咳嗽嘔吐。約吐出痰涎飲食三碗許，豁然頓醒，自言心中發熱，頭目脹疼，此當繼治其腦部充血以求痊愈。擬用建瓴湯方（在五期三卷）治之，因病脈之所宜而略為加減。

處方：生赭石（一兩軋細）、懷牛膝（一兩）、生懷地黃（一兩）、天花粉（六錢）、生杭芍（六錢）、生龍骨（五錢搗碎）、生牡蠣（五錢搗碎）、生麥芽（三錢）、茵陳（錢半）、甘草（錢半）。磨取生鐵鏽濃水，以之煎藥，煎湯一盅，溫服下。

複診：將藥服三劑，心中已不發熱，頭疼目脹皆愈，惟步履之時覺頭重足輕，腳底如踏棉絮。其脈象較前和緩似有上盛下虛之象，爰即原方略為加減，再添滋補之品。

處方：生赭石（一兩軋細）、懷牛膝（一兩）、生懷地黃（一兩）、大甘枸杞（八錢）、生杭芍（六錢）、淨萸肉（六錢）、生龍骨（五錢搗碎）、生牡蠣（五錢搗碎）、柏子仁（五錢炒搗）、茵陳（錢半）、甘草（錢半）。磨取生鐵鏽濃水以之煎藥，煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服五劑，病遂脫然痊愈。將赭石、牛膝、地黃皆改用八錢，俾多服數劑以善其後。

【腦充血兼偏枯】

孫聘卿，住天津東門裡季家大院，年四十六歲，業商，得腦充血證遂至偏枯。病因：稟性褻急，又兼處境不順，恆觸動肝火致得斯證。

證候：未病之先恆覺頭疼，時常眩暈，一日又遇事有拂意，遂忽然昏倒，移時醒後，左手足皆不能動，並其半身皆麻木，言語謇澀。延醫服藥十個月，手略能動，其五指則握而不伸，足可任地而不能行步，言語仍然謇澀，又服藥數月病仍如故，診其脈左右皆弦硬，右部似尤甚，知雖服藥年餘，腦充血之病猶未除也。問其心中發熱乎？腦中有時覺疼乎？答曰「心中有時覺有熱上衝胃口，其熱再上升則腦中可作疼，然不若病初得時腦疼之劇也」。問其大便兩三日一行，證脈相參，其腦中猶病充血無疑。

診斷：按此證初得，不但腦充血，實兼腦溢血也。其溢出之血，著於左邊司運動之神經，則右半身痿廢，著於右邊司運動之神經，則左半身痿廢，此乃交叉神經以互司其身之左右也。想其得病之初，脈象之弦硬，此時尤劇，是以頭疼眩暈由充血之極而至於溢血，因溢血而至於殘廢也。即現時之證脈詳參，其腦中溢血之病想早就愈，而腦充血之病根確未除也。宜注意治其腦充血，而以通活經絡之藥輔之。

處方：生懷山藥（一兩）、生懷地黃（一兩）、生赭石（八錢研細）、懷牛膝（八錢）、生杭芍（六錢）、柏子仁（四錢炒搗）、白朮（三錢炒）、滴乳香

（三錢）、明沒藥（三錢）、土鱉蟲（四大個搗）、生雞內金（錢半黃色的搗）茵陳（一錢）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：將藥連服七劑，腦中已不作疼，心中間有微熱之時，其左半身自覺肌肉鬆活，不若從前之麻木，言語之蹇澀稍愈，大便較前通順，脈之弦硬已愈十之七八，擬再注意治其左手足之痿廢。

處方：生箭耆（五錢）、天花粉（八錢）、生赭石（六錢軋細）、懷牛膝（五錢）、滴乳香（四錢）、明沒藥（四錢）、當歸（三錢）、絲瓜絡（三錢）、土鱉蟲（四大個搗）、地龍（二錢去土）。共煎湯一大盅，溫服。

三診：將藥連服三十餘劑（隨時略有加減），其左手之不伸者已能伸，左足之不能邁步者今已舉足能行矣。病人問從此再多多服藥可能復原否？答曰「此病若初得即治，服藥四十餘劑即能脫然，今已遲延年餘，雖服數百劑亦不能保痊愈，因關節經絡之間瘀滯已久也。然再多服數十劑，仍可見愈，遂即原方略為加減，再設法以動其神經，補助其神經當更有效。

處方：生箭耆（六錢）、天花粉（八錢）、生赭石（六錢軋細）、懷牛膝（五錢）、滴乳香（四錢）、明沒藥（四錢）、當歸（三錢）、土鱉蟲（四大個搗）、地龍（二錢去土）、真鹿角膠（二錢軋細）、廣三七（二錢軋細）、制馬錢子末（三分）。藥共十二味，先將前九味共煎湯一大盅，送服後三味各一半，至煎渣再服時，仍送服其餘一半。

方解：方中用鹿角膠者，因其可為左半身引經（理詳三期四卷活絡效靈丹後），且其角為督脈所生，是以其性善補益腦髓，以滋養腦髓神經也，用三七者，關節經絡間積久之瘀滯，三七能融化之也。用制馬錢子者，以其能動神經使靈活也（制馬錢子法，詳三期七卷振頹丸下）。

效果：將藥又連服三十餘劑，手足之舉動皆較前便利，言語之謇澀亦大見愈，可勉強出門作事矣。遂俾停服湯藥，日用生懷山藥細末煮作茶湯，調以白糖令適口，送服黃色生雞內金細末三分許，當點心用之以善其後。此欲用山藥以補益氣血，少加雞內金以化瘀滯也。

說明：按腦充血證，最忌用黃耆，因黃耆之性補而兼升，氣升則血必隨之上升，致腦中之血充而益充，排擠腦中血管可至溢血，甚或至破裂而出血，不可救藥者多矣。至將其腦充血之病治癒，而肢體之痿廢仍不愈者，皆因其經絡瘀塞血脈不能流通也。此時欲化其瘀塞，通其血脈，正不妨以黃耆輔之，特是其腦中素有充血之病，終嫌黃耆升補之性能助血上升，故方中仍加生赭石、牛膝，以防血之上升，即所以監製黃耆也。又慮黃耆性溫，溫而且補即能生熱，故又重用花粉以調劑之也。



腸胃病門

【噎膈】

天津鍋店街老德記西藥房理事，年五旬，得噎膈證。

病因：處境恆多不順，且又秉性褊急，易動肝火，遂得斯證。

證候：得病之初期，覺飲食有不順時，後則常常如此，始延醫為調治，服藥半年，更醫十餘人皆無效驗，轉覺病勢增劇，自以為病在不治，已停藥不服矣。適其友人何翼雲孝廉（何子貞公曾孫）來津，其人雅博通醫，曾閱拙著《衷中參西錄》，力勸其求愚為之診治，其六脈細微無力，強食餅乾少許，必嚼成稀糜方能下嚥，咽時偶覺齟齬即作嘔吐，帶出痰涎若干。惟飲粳米所煮稠湯尚無阻礙，其大便燥結如羊矢，不易下行。

診斷：楊素園謂「此病與失血異證同源，血之來也暴，將胃壁之膜衝開則為吐血；其來也緩，不能衝開胃膜，遂瘀於上脘之處，致食管窄隘即成噎膈」。至西人則名為胃癌，所謂癌者，如山石之有巖，其形凸出也。此與楊氏之說正相符合，其為瘀血致病無疑也。其脈象甚弱者，為其進食甚少氣血兩虧也。至其便結如羊矢，亦因其飲食甚少，兼胃氣虛弱不輸送下行之故也。此宜化其瘀血兼引其血下行，而更輔以培養氣血之品。

處方：生赭石（一兩軋細）、野臺參（五錢）、生懷山藥（六錢）、天花粉（六錢）、天冬（四錢）、桃仁（三錢去皮搗）、紅花（二錢）、土鱉蟲（五枚搗碎）、廣三七（二錢搗細）。藥共九味，將前八味煎湯一大盅，送服三七末一半，至煎渣再服時，再送服其餘一半。

方解：方中之義，桃仁、紅花、土鱉蟲、三七諸藥，所以消其瘀血也。重用生赭石至一兩，所以引其血下行也。用臺參、山藥者，所以培養胃中之氣化，不使因服開破之藥而有傷損也。用天冬、天花粉者，恐其胃液枯槁，所瘀之血將益乾結，故借其涼潤之力以滋胃液，且即以防臺參之因補生熱也。

效果：將藥服至兩劑後，即可進食，服至五劑，大便如常，因將赭石改用八錢，又服數劑，飲食加多，仍覺胃口似有阻礙不能脫然。俾將三七加倍為四錢，仍分兩次服下，連進四劑，自大便瀉下膿血若干，病遂痊愈。

說明：按噎膈之證，有因痰飲而成者，其胃口之間生有痰囊（即喻氏《寓意草》中所謂窠囊），本方去土鱉蟲、三七，加清半夏四錢，數劑可愈。有因胃上脘枯槁痿縮致成噎膈者，本方去土鱉蟲、三七，將赭石改為八錢，再加當歸、龍眼肉、枸杞子各五錢，多服可愈。有因胃上脘生瘤贅以致成噎膈者（「論胃病噎膈治法及反胃治法」中曾詳論），然此證甚少，較他種噎膈亦甚難治，蓋瘤贅之生，恆有在胃之下脘成反胃者，至生於胃之上脘成噎膈者，則百中無一二也。

【反胃吐食】

陳景三，天津河北人，年五十六歲，業商，得反胃吐食證，半年不愈。

病因：初因夏日多食瓜果致傷脾胃，廉於飲食，後又因處境不順心多抑鬱，致成反胃之證。

證候：食後消化力甚弱，停滯胃中不下行，漸覺噁心，久之，則覺有氣自下上衝，即將飲食吐出。屢經醫診視，服暖胃降氣之藥稍愈，仍然反覆，遷延已年餘矣。身體羸弱，脈弦長，按之不實，左右皆然。

診斷：此證之飲食不能消化，固由於脾胃虛寒，然脾胃虛寒者，食後恆易作泄瀉，此則食不下行而作嘔吐者，因其有衝氣上衝，並迫其胃氣上逆也。當以溫補脾胃之藥為主，而以降胃鎮衝之藥輔之。

處方：生懷山藥（一兩）、白朮（三錢炒）、乾薑（三錢）、生雞內金（三錢黃色的搗）、生赭石（六錢軋細）、炙甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥煎服後，覺飲食下行，不復嘔吐，翌日頭午，大便下兩次，再診其脈不若從前之弦長，知其下元氣化不固，不任赭石之鎮降也。遂去赭石加赤石脂五錢（用頭煎和次煎之湯，分兩次送服）、蘇子二錢，日煎服一劑，連服十劑霍然痊愈。蓋赤石脂為末送服，可代赭石以降胃鎮衝，而又有固澀下焦之力，故服後不復滑瀉也。

【胃脘疼痛】

天津十區寶華里，徐氏婦，年近三旬，得胃脘疼痛證。

病因：本南方人，出嫁隨夫，久居北方，遠懷鄉里，歸寧不得，常起憂思，因得斯證。

證候：中焦氣化凝鬱，飲食停滯艱於下行，時欲呃逆，又苦不能上達，甚則蓄極綿綿作疼。其初病時，惟覺氣分不舒，服藥治療三年，病益加劇，且身形亦漸羸弱，呼吸短氣，口無津液，時常作渴，大便時常乾燥，其脈左右皆弦細，右脈又兼有牢意。

診斷：《內經》謂脾主思，此證乃過思傷脾以致脾不升胃不降也。為其脾氣不上升，是以口無津液，呃逆不能上達；為其胃氣不降，是以飲食停滯，大便乾燥。治之者當調養其脾胃，俾還其脾升胃降之常，則中焦氣化舒暢，疼脹自愈，飲食加多而諸病自除矣。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（八錢）、生箭耆（三錢）、生雞內金（三錢黃色的搗）、生麥芽（三錢）、玄參（三錢）、天花粉（三錢）、天冬（三錢）、生杭芍（二錢）、桂枝尖（錢半）、生薑（三錢）、大棗（三枚掰開）。共煎湯一大盅，溫服。

方解：此方以山藥、枸杞、黃耆、薑、棗培養中焦氣化，以麥芽升脾（麥芽生用善升），以雞內金降胃（雞內金生用善降），以桂枝升脾兼以降胃（氣之當

升者遇之則升，氣之當降者遇之則降，又用玄參，花粉諸藥，以調劑薑、桂、黃耆之溫熱，則藥性歸於和平，可以久服無弊。

復診：將藥連服五劑，諸病皆大輕減，而胃疼仍未脫然，右脈仍有牢意。度其疼處當有瘀血凝滯，擬再於升降氣化藥中加消瘀血之品。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（八錢）、生箭耆（三錢）、玄參（三錢）、天花粉（三錢）、生麥芽（三錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、生杭芍（二錢）、桃仁（二錢去皮炒搗）廣三七（二錢軋細）。藥共十味，將前九味煎湯一大盅，送服三七末一半，至煎渣再服時，仍送服其餘一半。

效果：將藥連服四劑，胃中安然不疼，諸病皆愈，身形漸強壯，脈象已如常人，將原方再服數劑以善其後。

或問「藥物之性原有一定，善升者不能下降，善降者不能上升，此為一定之理，何以桂枝之性既善上升，又善下降乎？」答曰「凡樹枝之形狀，分鹿角、蟹爪兩種，鹿角者屬陽，蟹爪者屬陰。桂枝原具鹿角形狀，且又性溫，溫為木氣，為其得春木之氣最厚，是以善升，而其味又甚辣，辣為金味，為其得秋金之味最厚，是以善降。究之其能升兼能降之理，乃天生使獨，又非可僅以氣味相測之。且愚謂氣之當升不升者，遇桂枝則升，氣之當降不降者，遇桂枝則降，此雖從實驗中得來，實亦讀《傷寒》、《金匱》而先有會悟。今試取《傷寒》、《金匱》凡用桂枝之方，匯通參觀，自曉然無疑義矣。

【冷積腹疼】

王佑三，大城王家口人，年五十歲，在天津業商，少腹冷疼，久服藥不愈。病因：自幼在家慣睡火炕，後在天津業商，棲處寒涼，飲食又多不慎，遂得此證。

證候：其少腹時覺下墜，眠時須以暖水袋熨臍下，不然則疼不能寐。若屢服熱藥，上焦即覺煩躁，已歷二年不愈。脈象沉弦，左右皆然，至數稍遲。

診斷：即其兩尺沉弦涼而且墜論之，知其腸中當有冷積，此宜用溫通之藥下之。

處方：與以自制通徹丸（係用牽牛頭末和水為丸如秫米粒大）三錢，俾於清晨空心服下。

效果：閱三點鐘，腹中疼似加劇，須臾下如綠豆糊所熬涼粉者若干。疼墜脫然痊愈，亦不覺涼，繼為開溫通化滯之方，俾再服數劑以善其後。

【腸結腹疼】

李連榮，天津泥沽人，年二十五歲，業商，於仲春得腹結作疼證。

病因：偶因惱怒觸動肝氣，遂即飲食停腸中，結而不下作疼。

證候：食結腸中，時時切疼，二十餘日大便不通，始猶少進飲食，繼則食不能進，飲水一口亦吐出。延醫服藥，無論何藥下嚥亦皆吐出，其脈左右皆微弱，猶幸至數照常，按之猶有根柢，知猶可救。

療法：治此等證，必止嘔之藥與開結之藥並用，方能直達病所，又必須內外兼治，則久停之結庶可下行。

處方：用硝菴通結湯（方載三期三卷係用淨朴硝四兩，鮮萊菔五斤，切片，將萊菔片和朴硝用水分數次煮爛即撈出，再換生萊菔片，將萊菔片煮完，可得濃汁一大碗，分三次服），送服生赭石細末，湯分三次服下（每五十分鐘服一次），共送服赭石末兩半，外又用蔥白四斤切絲，醋炒至極熱，將熱布包熨患處，涼則易之。又俾用淨莢肉二兩，煮湯一盅，結開下後飲之，以防虛脫。

效果：自晚八點鐘服，至夜半時將藥服完，炒蔥外熨，至翌日早八點鐘下燥糞二十枚，後繼以溏便。知其下淨，遂將莢肉湯飲下，安然痊愈。若虛甚者，結開欲大便時，宜先將莢肉湯服下。

【腸結腹疼兼外感實熱】

瀋陽張姓媪，年過六旬，住小南門外風雨臺旁，腸結腹疼，兼心中發熱。

病因：素有肝氣病，因怒肝氣發動，恆至大便不通，必服瀉藥始通下。此次舊病復發而嘔吐不能受藥，是以病久不愈。

證候：胃下臍上似有實積，常常作疼，按之則疼益甚，表裡俱覺發熱，噁心嘔吐。連次延醫服藥，下嚥須臾即吐出，大便不行已過旬日，水漿不入者七八日矣。脈搏五至，左右脈象皆弱，獨右關重按似有力，舌有黃苔，中心近黑，因問其得病之初曾發冷否？答云「旬日前曾發冷兩日，至三日即變為熱矣」。

診斷：即此證脈論之，其陽明胃腑當蘊有外感實熱，是以表裡俱熱，因其腸結不通，胃氣不能下行，遂轉而上行與熱相並作嘔吐。治此證之法，當用鎮降之藥止其嘔，鹹潤之藥開其結，又當輔以補益之品，俾其嘔止、結開，而正氣無傷始克有濟。

處方：生石膏（一兩軋細）、生赭石（一兩軋細）、玄參（一兩）、潞參（四錢）、芒硝（四錢）、生麥芽（二錢）、茵陳（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：煎服一劑，嘔止結開，大便通下燥糞若干，表裡熱皆輕減，可進飲食。診其脈仍有餘熱未淨，再為開滋陰清熱之方，俾服數劑以善其後。



頭部病門

【頭疼】

李姓，住天津一區，業商，得頭疼證，日久不愈。

病因：其人素羸弱，因商務操勞遇事又多不順，心肝之火常常妄動，遂致頭疼。

證候：頭疼不起床者已逾兩月，每日頭午猶輕，過午則浸加重，夜間疼不能寐，雞鳴後疼又漸輕可以少睡，心中時或覺熱，飲食懶進。脈搏五至，左部弦長，關脈猶弦而兼硬，右脈則稍和平。

診斷：即此脈象論之，顯係肝膽之熱上衝腦部作疼也。宜用藥清肝火、養肝陰、鎮肝逆，且兼用升清降濁之藥理其腦部。

處方：生杭芍（八錢）、柏子仁（六錢）、玄參（六錢）、生龜板（六錢、細）、龍膽草（三錢）、川芎（錢半）、甘菊花（一錢）、甘草（三錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：服藥一劑，病癒十之七八，脈象亦較前和平，遂將龍膽草減去一錢，又服兩劑痊愈。

或問「川芎為升提氣分之品，今其頭疼既因肝膽之熱上衝，復用川芎以升提之，其熱不益上衝乎？何以服之有效也？」答曰「川芎升清氣者也，清氣即氫氣

也。按化學之理，無論何種氣，若在氫氣之中必然下降，人之臟腑原有氫氣，川芎能升氫氣上至腦中，則腦中熱濁之氣自然下降，是以其疼可愈也」。

【眼疾】

李汝峰，年二十歲，文安人，在天津恒源紡紗廠學徒，得眼疾久不愈。

病因：廠中屋宇窄狹，人口眾多，不得空氣，且工作忙碌，致發生眼疾。

證候：眼瞼紅腫，胛肉遮睛甚劇，目睛脹疼，不但目不能見，且耳聾鼻塞見聞俱廢，跬步須人扶持。其脈象洪長，按之甚實，兩部皆然，其心中甚覺發熱，舌有白苔，中心已黃。其從前大便原秘，因屢次服西醫之藥，大便日行兩次。

診斷：此證當係先有外感伏氣積久化熱，又因春陽萌動，屋宇氣濁，激動伏氣竄入陽明，兼入少陽，此《傷寒論》〈陽明篇〉中所謂少陽陽明也。是以脈象若斯之洪實，其熱上衝遂至目疼、鼻塞、耳聾也。當用藥清其伏氣之熱而諸病自愈矣。

處方：擬用大劑白虎湯以清陽明之熱，更加白芍、龍膽草以清少陽之熱。病人謂廠中原有西醫，不令服外人藥，今因屢次服其藥而病浸加劇，故偷來求治於先生，或服丸散猶可，斷乎不能在廠中煎服湯藥。愚曰「此易耳，我有自製治眼妙藥送汝一包，服之必愈」，遂將預軋生石膏細末二兩與之，囑其分作六次服，日服三次，開水送下，服後宜多飲開水，令微見汗方好。

效果：隔三日復來，眼疾已愈十之八九，耳聾鼻塞皆愈，心已不覺熱，脈已和平。復與以生石膏細末兩半，俾仍作六次服，將藥服盡痊愈，至與以生石膏而不欲明言者，恐明言之彼將不敢服矣。

【目病乾疼】

崔振之，天津東興街永和姓木廠同事，年三十四歲，患眼乾，間有時作疼。病因：向因外感之熱傳入陽明之府，服藥多甘寒之品，致外感之邪未淨，痞閉胃中永不消散，其熱上衝遂發為眼疾。

證候：兩目乾澀，有時目睛脹疼，漸至視物昏花，心中時常發熱，二便皆不通順，其脈左右皆有力，而右關重按有洪實之象，屢次服藥已近二年，仍不少愈。

診斷：凡外感之熱傳裡，最忌但用甘寒滯泥之藥，痞閉其外感之邪不能盡去，是以陸九芝謂如此治法，其病當時雖愈，後恆變成癆瘵。此證因其稟賦強壯，是以未變癆瘵而發為眼疾，醫者不知清其外感之餘熱，而泛以治眼疾之藥治之，是以歷久不愈也。患有自製離中丹（即益元散以生石膏代滑石），再佐以清熱托表之品，以引久蘊之邪熱外出，眼疾當愈。

處方：離中丹（一兩）、鮮蘆根（五錢）、鮮茅根（五錢）。藥共三味，將後二味煎湯三杯，分三次溫服，每次服離中丹三錢強，為一日之量，若二種鮮根但有一種者，可倍作一兩用之。

效果：將藥如法服之，至第三日因心中不發熱，將離中丹減半，又服數日眼之乾澀疼脹皆愈，二便亦順利。

【牙疼】

王姓，年三十餘，住天津東門裡二道街，業商，得牙疼病。

病因：商務勞心，又兼連日與友宴飲，遂得斯證。

證候：其牙疼甚劇，有礙飲食，夜不能寐，服一切治牙疼之藥不效，已遷延二十餘日矣。其脈左部如常，而右部弦長，按之有力。

診斷：此陽明胃氣不降也。上牙齦屬足陽明胃，下牙齦屬手陽明大腸。究之，胃氣不降，腸中之氣亦必不降，火隨氣升，血亦因之隨氣上升，並於牙齦而作疼，是以牙疼者牙齦之肉多腫熱也。宜降其胃氣兼引其上逆之血下行，更以清熱之藥輔之。

煎湯服。處方：生赭石（一兩軋細）、懷牛膝（一兩）、滑石（六錢）、甘草（一錢）。

效果：將藥煎服一劑，牙疼立愈，俾按原方再服一劑以善其後。

說明：方書治牙疼未見有用赭石牛膝者，因愚曾病牙疼以二藥治癒，後凡遇胃氣不降致牙疼者，方中必用此二藥。其陽明胃腑有實熱者，又恆加生石膏數錢。

肢體疼痛門

【脅疼】

陳錫周，安徽人，寓天津一區，年六旬，得脅下作疼證。

病因：因操勞過度，遂得脅下作疼病。

證候：其疼或在左脅或在右脅或有時兩脅皆疼，醫者治以平肝、舒肝、柔肝之法皆不效。遷延年餘，病勢浸增，疼劇之時。覺精神昏憤。其脈左部微細，按之即無，右脈似近和平，其搏動之力略失於弱。

診斷：人之肝居脅下，其性屬木，原喜條達，此因肝氣虛弱不能條達，故鬱於脅下作疼也。其疼或在左或在右者，《難經》云「肝之為臟其治在左，其藏在右脅右腎之前，並脊著於脊之第九椎（《醫宗金鑒》〈刺灸篇〉曾引此數語，今本《難經》不知被何人刪去）」。所謂臟者，肝臟所居之地也，謂治者肝氣所行之地也。是知肝雖居右而其氣化實先行於左。其疼在左者，肝氣鬱於所行之地也；其疼在右者，肝氣鬱於所居之地也；其疼劇時精神昏憤者，因肝經之病原與神經有涉也（肝主筋，腦髓神經為灰白色之筋，是以肝經之病與神經有涉）。治此證者，當以補助肝氣為主，而以升肝化鬱之藥輔之。

處方：生箭耆（五錢）、生杭芍（四錢）、玄參（四錢）、滴乳香（三錢炒）、明沒藥（三錢不炒）、生麥芽（三錢）、當歸（三錢）、川芎（二錢）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅，溫服。

方解：方書有謂肝虛無補法者，此非見道之言也。黃耆為補肝之主藥，何則？黃之性溫而能升，而臟腑之中秉溫升之性者肝木也，是以各臟腑氣虛，黃耆皆能補之，而以補肝經之氣虛，實更有同氣相求之妙，是以方中用之為主藥。然因其性頗溫，重用之雖善補肝氣，恐並能助肝火，故以芍藥、玄參之滋陰涼潤者濟之。用乳香、沒藥者，以之融化肝氣之鬱也。用麥芽、芎者，以之升達肝氣之鬱也。究之，無論融化升達，皆通行其經絡，使之通則不痛也。用當歸者，以肝為藏血之臟，既補其氣，又欲補其血也。且當歸味甘多液，固善生血，而性溫味又兼辛，實又能調和氣分也。用甘草者，以其能緩肝之急，而甘草與芍藥並用，原又善治腹疼，當亦可善治脅疼也。

再診：將藥連服四劑，脅疼已愈強半，偶有疼時亦不甚劇。脈象左部重按有根，右部亦較前有力，惟從前因脅疼食量減少，至此仍未增加，擬即原方再加健胃消食之品。

處方：生箭耆（四錢）、生杭芍（四錢）、玄參（四錢）、於白朮（三錢）、滴乳香（三錢炒）、明沒藥（三錢不炒）、生麥芽（三錢）、當歸（三錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、川芎（二錢）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅，溫服。

三診：將藥連服四劑，脅下已不作疼，飲食亦較前增加，脈象左右皆調和無病，惟自覺兩腿筋骨軟弱，此因病久使然也。擬再治以舒肝、健胃、強壯筋骨之劑。

處方：生箭耆（四錢）、生懷山藥（四錢）、天花粉（四錢）、胡桃仁（四錢）、於白朮（三錢）、生明沒藥（三錢）、當歸（三錢）、生麥芽（三錢）、寸麥冬（三錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、真鹿角膠（三錢）。藥共十一味，將前十味煎湯一大盅，再將鹿角膠另用水燉化和勻，溫服。

效果：將藥連服十劑，身體浸覺健壯，遂停服湯藥，俾用生懷山藥細末七八錢，或至一兩，涼水調和煮作茶湯，調以蔗糖令其適口，當點心服之。服後再嚼服熟胡桃仁二三錢，如此調養，宿病可以永愈。



【脅下疼兼胃口疼】

齊斐章，縣尹，吉林人，寓天津二區，年五旬，得脅下作疼，兼胃口疼病。病因：素有肝氣不順病，繼因設買賣賠累，激動肝氣，遂致脅下作疼，久之胃口亦疼。

證候：其初次覺疼恆在申酉時，且不至每日疼，後浸至每日覺疼，又浸至無時不疼。屢次延醫服藥，過用開破之品傷及脾胃，飲食不能消化，至疼劇時恆連胃中亦疼。其脈左部沉弦微硬，右部則弦而無力，一息近五至。

診斷：其左脈弦硬而沉者，肝經血虛火盛而肝氣又鬱結也。其右脈弦而無力者，土為木傷，脾胃失其蠕動健運也。其脅疼之起點在申酉時者，因肝屬木申酉屬金，木遇金時其氣化益遏抑不舒也。《內經》謂「厥陰不治，求之陽明」。夫厥陰為肝，陽明為胃，遵《內經》之微旨以治此證，果能健補脾胃，俾中焦之氣化營運無滯，再少佐以理肝之品，則胃疼可愈，而脅下之疼亦即隨之而愈矣。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（六錢）、玄參（五錢）、寸麥冬（四錢帶心）、於白朮（三錢）、生杭芍（三錢）、生麥芽（三錢）、桂枝尖（二錢）、龍膽草（二錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、厚朴（錢半）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：將藥連服四劑，胃中已不作疼，脅下之疼亦大輕減，且不至每日作疼，即有疼時亦須與自愈。脈象亦見和緩，遂即原方略為加減俾再服之。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（六錢）、玄參（四錢）、寸麥冬（四錢帶心）、於白朮（三錢）、生杭芍（三錢）、當歸（三錢）、桂枝尖（二錢）、龍膽草（二錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、醋香附（錢半）、甘草（錢半）、生薑（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服五劑，脅下之疼霍然痊愈，肝脈亦和平如常矣。遂停服湯藥，俾日用生懷山藥細末兩許，水調煮作茶湯，調以蔗糖令適口，以之送服生雞內金細末二分許，以善其後。

或問「人之手足皆有陽明經與厥陰經，《內經》渾言厥陰陽明，而未顯指其為足經手經，何以知其所稱者為足厥陰肝、足陽明胃乎？」答曰「此有定例，熟讀《內經》者自能知之。蓋人之足經長、手經短，足經原可以統手經也。是《內經》之論六經，凡不言手經、足經者，皆指足經而言，若所論者為手經則必明言為手某經矣。此不但《內經》為然，即如《傷寒論》以六經分篇，亦未嘗指明為手經、足經，而所載諸方大抵皆為足經立法也」。

或問「理肝之藥莫如柴胡，其善舒肝氣之鬱結也。今治脅疼兩方中皆用桂枝而不用柴胡，將毋另有取義？」答曰「桂枝與柴胡雖皆善理肝，而其性實有不同之處。如此證之疼肇於脅下，是肝氣鬱結而不舒暢也，繼之因脅疼累及胃中亦疼，是又肝木之橫恣而其所能勝也。柴胡能舒肝氣之鬱，而不能平肝木之橫恣，桂枝其氣溫升（溫升為木氣），能舒肝氣之鬱結則脅疼可愈，其味辛辣（辛辣為金味），

更能平肝木橫恣則胃疼亦可愈也。惟其性偏於溫，與肝血虛損有熱者不宜，故特加龍膽草以調劑之，俾其性歸和平而後用之，有益無損也。不但此也，拙擬兩方之要旨，不外升肝降胃，而桂枝之妙用，不但為升肝要藥，實又為降胃要藥。《金匱》桂枝加桂湯，治腎邪奔豚上干，直透中焦，而方中以桂枝為主藥，是其能降胃之明徵也。再上溯《本經》，謂桂枝主上氣咳逆及吐吸（吸不歸根即吐出，即後世所謂喘也），是桂枝原善降肺氣，然必胃氣息息下行，肺氣始能下達無礙。細繹經旨，則桂枝降胃之功用，更可借善治上氣咳逆吐吸而益顯也。蓋肝升胃降，原人身氣化升降之常，順人身自然之氣化而調養之，則有病者自然無病，此兩方之中所以不用柴胡皆用桂枝也」。

【脅疼】

鄰村李姓婦，年近四旬，得脅下疼證。

病因：平素肝氣不舒，繼因暴怒，脅下陡然作疼。

證候：兩脅下掀疼甚劇，呻吟不止，其左脅之疼尤甚，倩人以手按之，則其疼稍愈，心中時覺發熱，噁心欲作嘔吐，脈左右兩部皆弦硬。

診斷：此肝氣膽火相助橫恣，欲上升而不能透隔，鬱於脅下而作疼也。當平其肝氣瀉其膽火，其疼自愈。

處方：川棟子（八錢搗碎）、生杭芍（四錢）、生明沒藥（四錢）、生麥芽（三錢）、三稜（三錢）、莪朮（三錢）、茵陳（二錢）、龍膽草（二錢）、連翹（三錢）。磨取生鐵鏽濃水，煎藥取湯一大盅，溫服。

方解：方中川棟、芍藥、龍膽，引氣火下降者也。茵陳、生麥芽，引氣火上散者也。三稜、莪朮，開氣火之凝結。連翹、沒藥，消氣火之瀰漫。用鐵鏽水煎藥者，借金之餘氣，以鎮肝膽之木也。

效果：煎服一劑後其疼頓止，而仍覺氣分不舒，遂將川棟、三稜、莪朮各減半，再加柴胡二錢，一劑痊愈。

【腰疼】

天津保安隊長李雨霖，遼陽人，年三十四歲，得腰疼證。

病因：勞心過度，數日懶食，又勉強遠出，操辦要務，因得斯證。

證候：其疼劇時不能動轉，輕時則似疼非疼，綿綿不已，亦恆數日不疼，或動氣或勞力時則疼劇。心中非常發悶，其脈左部沉弦，右部沉牢，一息四至強。觀其從前所服之方，雖不一致，大抵不外補肝腎強筋骨諸藥，間有雜似祛風藥者，自謂得病之初，至今已三年，服藥數百劑，其疼卒未輕減。

診斷：《內經》謂通則不痛，此證乃痛則不通也。肝腎果係虛弱，其脈必細數，今左部沉弦，右部沉牢，其為腰際關節經絡有瘀而不通之氣無疑，擬治以利關節通經絡之劑。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（八錢）、當歸（四錢）、丹參（四錢）、生明沒藥（四錢）、生五靈脂（四錢）、穿山甲（二錢炒搗）、桃仁（二錢去皮搗碎）、紅花（錢半）、土鱉蟲（五枚搗碎）、廣三七（二錢軋細）。藥共十一味，先將前十味煎湯一大盅，送服三七細末一半，至煎渣重服時，再送其餘一半。

效果：將藥連服三劑腰已不疼，心中亦不發悶，脈象雖有起色，仍未復常，遂即原方去山甲加川續斷、生杭芍各三錢，連服數劑，脈已復常，自此病遂除根。

說明：醫者治病不可預有成見，臨證時不復細審病因。方書謂腰者腎之府，腰疼則腎臟衰憊，又謂肝主筋，腎主骨，腰疼為筋骨之病，是以肝腎主之。治腰疼者，因先有此等說存於胸中，恆多用補肝腎之品。究之，此在由於肝腎虛者甚少，由於氣血瘀者頗多，若因努力任重而腰疼者尤多瘀證。曾治一人因擔重物後腰疼，為用三七、土鱉蟲等分共為細末，每服二錢，日兩次，服三日痊愈。又一人因抬物用力過度，腰疼半年不愈，忽於疼處發出一瘡，在脊樑之旁，微似紅腫，狀若復盂，大徑七寸。瘍醫以為腰疼半年始發現此瘡，其根蒂必深，不敢保好，轉求愚為治療，調治兩旬始愈（詳案載三期八卷內托生肌散後）。然使當腰初覺疼之時，亦服三七、土鱉以開其瘀，又何至有後時之危險乎？又嘗治一婦，每當行經之時腰疼殊甚，診其脈氣分甚虛，於四物湯中加黃耆八錢，服數劑而疼愈，又一婦腰疼綿綿不止，亦不甚劇，診其脈知其下焦虛寒，治以溫補下焦之藥，又於服湯藥之外，俾服生硫黃細末一錢，日兩次，硫黃服盡四兩，其疼除根。是知同是腰疼而其致病之因各異，治之者安可膠柱鼓瑟哉。

【腿疼】

竇英如，鄰村蒙館教員，年過三旬，於孟冬得腿疼證。

病因：稟賦素弱，下焦常畏寒涼，一日因出門寢於寒涼屋中，且鋪蓋甚薄，晨起遂病腿疼。

證候：初疼時猶不甚劇，數延醫服藥無效，後因食豬頭肉，其疼陡然加劇，兩腿不能任地，夜則疼不能寐，其脈左右皆弦細無力，兩尺尤甚，至數稍遲。

診斷：此證因下焦相火虛衰，是以易為寒侵，而細審其脈，實更兼氣虛不能充體，即不能達於四肢以運化藥力，是以所服之藥縱對證亦不易見效也。此當助其相火祛其外寒，而更加補益氣分之藥，使氣分壯旺自能營運藥力以勝病也。

處方：野黨參（六錢）、當歸（五錢）、懷牛膝（五錢）、胡桃仁（五錢）、烏附子（四錢）、補骨脂（三錢炒搗）、滴乳香（三錢炒）、明沒藥（三錢不炒）、威靈仙（錢半）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：將藥連服五劑，腿之疼稍覺輕而仍不能任地，脈象較前似稍有力。問其心中服此熱藥多劑後仍不覺熱，因思其疼在於兩腿，當用性熱質重之品，方能引諸藥之力下行以達病所。

處方：野黨參（五錢）、懷牛膝（五錢）、胡桃仁（五錢）、烏附子（四錢）、白朮（三錢炒）、補骨脂（三錢炒搗）、滴乳香（三錢炒）、明沒藥（三錢不炒）、

生硫黃（一錢研細）。藥共九味，將前八味煎湯一大盅，送服硫黃末五分，至煎渣再服時，又送服所餘五分。

效果：將藥連服八劑，腿疼大見輕減，可扶杖行步，脈象已調和無病，心中微覺發熱，俾停服湯藥，每日用生懷山藥細末七八錢許，煮作茶湯，送服青娥丸三錢，或一次或兩次皆可，後服至月餘，兩腿分毫不疼，步履如常人矣。

或問「豬肉原為尋常服食之物，何以因食豬頭肉而腿疼加劇乎？」答曰「豬肉原有苦寒有毒之說，曾見於各家本草。究之，其肉非苦寒，亦非有毒，而豬頭之肉實具有鹹寒開破之性（豬嘴能起土成溝，故有開破之性），是以善通大便燥結，其鹹寒與開破皆與腿之虛寒作疼者不宜也，此所以食豬頭肉後而腿之疼加劇也」。



腫脹門

【受風水腫】

邑北境常莊劉氏婦，年過三旬，因受風得水腫證。

病因：時當孟夏，農家忙甚，將飯炊熟，復自田間，因作飯時受熱出汗，出門時途間受風，此後即得水腫證。

證候：腹中脹甚，頭面周身皆腫，兩目之腫不能開視，心中發熱，周身汗閉不出，大便乾燥，小便短赤。其兩腕腫甚不能診脈，按之移時，水氣四開，始能見脈。其左部弦而兼硬，右部滑而頗實，一息近五至。

診斷：《金匱》辨水證之脈，謂風水脈浮，此證脈之部位腫甚，原無從辨其脈之浮沉，然即其自述，謂於有汗受風之後，其為風水無疑也。其左脈弦硬者，肝膽有鬱熱也，其右脈滑而實者，外為風束胃中亦浸生熱也。至於大便乾燥，小便短赤，皆肝胃有熱之所致也，當用《金匱》越婢湯加減治之。

處方：生石膏（一兩搗細）、滑石（四錢）、生杭芍（四錢）、麻黃（三錢）、甘草（二錢）、大棗（四枚掰開）、生薑（二錢）、西藥阿斯匹林（一瓦）。中藥七味，共煎湯一大盅，當煎湯將成之時，先用白糖水將西藥阿斯匹林送下，候周身出汗（若不出汗，仍可再服一瓦），將所煎之湯藥溫服下，其汗出必益多，其小便當利，腫即可消矣。

複診：如法將藥服完，果周身皆得透汗，心中已不發熱，小便遂利，腹脹身腫皆愈強半，脈象已近和平，擬再治以滋陰利水之劑以消其餘腫。

處方：生杭芍（六錢）、生薏米（六錢搗碎）、鮮白茅根（一兩）。藥共三味，先將前二味水煎十餘沸，加入白茅根，再煎四五沸，取湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服十劑，其腫全消，俾每日但用鮮白茅根一兩，煎數沸當茶飲之以善其後。

或問「前方中用麻黃三錢原可發汗，何必先用西藥阿斯匹林先發其汗乎？」答曰「麻黃用至三錢雖能發汗，然有石膏、滑石、芍藥以監製之，則其發汗之力頓減，況肌膚腫甚者，汗尤不易透出也。若因其汗不易出，擬復多加麻黃，而其性熱而且燥，又非所宜。惟西藥阿斯匹林，其性涼而能散，既善發汗又善清熱，以之為麻黃之前驅，則麻黃自易奏功也」。

或問「風襲人之皮膚，何以能令人小便不利積成水腫」？答曰「小便出於膀胱，膀胱者，太陽之腑也。襲入之風由經傳腑，致膀胱失其所司，是以小便不利。麻黃能祛太陽在腑之風，佐以石膏、滑石，更能清太陽在腑之熱，是以服藥汗出而小便自利也。況此證肝中亦有蘊熱，《內經》謂『肝熱病者，小便先黃』，是肝與小便亦大有關係也。方中兼用芍藥以清肝熱，則小便之利者當益利。至於薏米、茅根，亦皆為利小便之輔佐品，彙集諸藥為方，是以用之必效也」。

【陰虛水腫】

鄰村霍氏婦，年二十餘，因陰虛得水腫證。

病因：因陰分虛損，常作灼熱，浸至小便不利，積成水腫。

證候：頭面周身皆腫，以手按其腫處成凹，移時始能復原。日晡潮熱，心中亦恆覺發熱。小便赤澀，一日夜間不過通下一次。其脈左部弦細，右部弦而微硬，其數六至。

診斷：證因陰分虛損，腎臟為虛熱所傷而生炎，是以不能瀉水以利小便，且其左脈弦細，則肝之疏泄力減，可致小便不利，右脈弦硬，胃之蘊熱下溜，亦可使小便不利，是以積成水腫也。宜治以大滋真陰之品，俾其陰足自能退熱，則腎炎可愈，胃熱可清。肝木得腎水之函濡，而其疏泄之力亦自充足，再輔以利小便之品作嚮導，其小便必然通利，所積之水腫亦不難徐消矣。

處方：生懷山藥（一兩）、生懷地黃（六錢）、生杭芍（六錢）、玄參（五錢）、大甘枸杞（五錢）、沙參（四錢）、滑石（三錢）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：將藥連服四劑，小便已利，頭面周身之腫已消弱半，日晡之熱已無，心中仍有發熱之時，惟其脈仍數逾五至，知其陰分猶未充足也。仍宜注重補其真陰而少輔以利水之品。

處方：熟懷地黃（一兩）、生杭芍（六錢）、生懷山藥（五錢）、大甘枸杞（五錢）、柏子仁（四錢）、玄參（四錢）、沙參（三錢）、生車前子（三錢裝袋）、大雲苓片（二錢）、鮮白茅根（五錢）。藥共十味，先將前九味水煎十餘沸，再入鮮白茅根，煎四五沸取湯一大盅，溫服。若無鮮白茅根，可代以鮮蘆根。至兩方皆重用芍藥者，因芍藥性善滋陰，而又善利小便，原為陰虛小便不利者之主藥也。

效果：將藥連服六劑，腫遂盡消，脈已復常，遂停服湯藥，俾日用生懷山藥細末兩許，熬作粥，少兌以鮮梨自然汁，當點心服之以善其後。

【風水有痰】

馬朴臣，遼寧大西關人，年五旬，業商，得受風水腫兼有痰證。

病因：因秋末遠出，勞碌受風遂得斯證。

證候：腹脹，周身漫腫，喘息迫促，咽喉膈胸之間時有痰涎杜塞，舌苔淡白，小便赤澀短少，大便間日一行，脈象無火而微浮，擬是風水，當遵《金匱》治風水之方治之。

處方：生石膏（一兩搗細）、麻黃（三錢）、甘草（二錢）、生薑（二錢）、大棗（四枚掰開）、西藥阿斯匹林（三分）。藥共六味，將前五味煎湯一大盅，沖化阿斯匹林，溫服被復取汗。

方解：此方即越婢湯原方加西藥阿斯匹林也。當時冬初，北方天氣寒涼汗不易出，恐但服越婢湯不能得汗，故以西藥之最善發汗兼能解熱者之阿斯匹林佐之。

複診：將藥服後，汗出遍體，喘息頓愈，他證如故，又添心中熱渴不思飲食。診其脈仍無火象，蓋因痰飲多而濕勝故也。斯當捨脈從證，而治以清熱之重劑。

處方：生石膏（四兩搗細）、天花粉（八錢）、薄荷葉（錢半）。共煎湯一大碗，俾分多次徐徐溫飲下。

三診：將藥服後，熱渴痰涎皆愈強半，小便亦見多，可進飲食，而漫腫腹脹不甚見輕，斯宜注重利其小便以消漫腫，再少加理氣之品以消其腹脹。

處方：生石膏（一兩搗細）、滑石（一兩）、地膚子（三錢）、丈菊子（三錢搗碎）、海金沙（三錢）、檳榔（三錢）、鮮茅根（三錢）。共煎湯一大盅半，分兩次溫服下。丈菊，俗名向日葵。究之，向日葵之名當屬之衛足花，不可以名丈菊也。丈菊子，《本草綱目》未收，因其善治淋疼利小便，故方中用之。

效果：將藥煎服兩劑，小便大利，腫脹皆見消，因將方中石膏、滑石、檳榔皆減半，連服三劑病痊愈。

黃膽門

【黃膽兼外感】

天津北大關下首，蘇媼，年六十六歲，於仲春得黃膽證。

病因：事有拂意，怒動肝火，繼又薄受外感，遂遍身發黃成疸證。

證候：周身黃色如橘，目睛黃尤甚，小便黃可染衣，大便色白而乾，心中發熱作渴，不思飲食。其脈左部弦長有力且甚硬，右部脈亦有力而微浮，舌苔薄而白無津液。

診斷：此乃肝中先有蘊熱，又為外感所束，其熱益甚，致膽管腫脹，不能輸其膽汁於小腸，而溢於血中隨血運遍周身，是以周身無處不黃，迨至隨血營運之餘，又隨水飲滲出歸於膀胱，是以小便亦黃，至於大便色白者，因膽汁不入小腸以化食，大便中既無膽汁之色也。《金匱》有硝石礬石散，原為治女勞疸之專方，愚恆借之以概治疸證皆效，而煎湯送服之藥須隨證更改。其原方原用大麥粥送服，而此證肝膽之脈太盛，當用瀉肝膽之藥煎湯送之。

處方：淨火硝（一兩研細）、皂礬（一兩研細）、大麥麵（二兩焙熱，如無可代以小麥麵）水和為丸，桐子大，每服二錢，日兩次，此即硝石礬石散而變散為丸也。

湯藥：生懷山藥（一兩）、生杭芍（八錢）、連翹（三錢）、滑石（三錢）、梔子（二錢）、茵陳（二錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，送服丸藥一次，至第二次服丸藥時，仍煎此湯藥之渣送之。再者，此證舌苔猶白，右脈猶浮，當於初次服藥後遲一點鐘，再服西藥阿斯匹林一瓦，俾周身得微汗以解其未罷之表證。

方解：按硝石礬石散，服之間有作嘔吐者，今變散為丸，即無斯弊。又方中礬石解者多謂係白礬，而茲方中用皂礬者，因本方後有病隨大小便去，小便正黃，大便正黑數語，解者又謂大便正黑係瘀血下行，夫果係瘀血下行，當為紫黑何為正黑，蓋人惟服皂礬其大便必正黑，礬石係為皂礬之明徵。又嘗考《本經》，硝石一名羽涅，《爾雅》又名為涅石，夫涅者，染物使黑也，礬石既為染黑色所需之物，則為皂礬，非白礬尤無疑矣。且此病發於肝膽，皂礬原為硫酸化鐵而成，化學家既名之為硫酸鐵，方中用礬石原借金能制木之義以制膽汁之妄行也。又嘗閱西學醫書，其治黃疸亦多用鐵基之藥，即中西醫理匯通參觀，則礬石為皂礬，而決非白礬不更分毫無疑哉。

複診：將藥連服四劑，阿斯匹林服一次已周身得汗，其心中已不若從前之渴熱，能進飲食，大便已變黑色，小便黃色稍淡，周身之黃亦見退，脈象亦較前和緩。俾每日仍服丸藥兩次，每次服一錢五分，所送服之湯藥方則稍為加減。



湯藥：生懷山藥（一兩）、生杭芍（六錢）、生麥芽（三錢）、茵陳（二錢）、鮮茅根（三錢，茅根無鮮者，可代以鮮蘆根）、龍膽草（二錢）、甘草（錢半）。共煎湯，送服丸藥如前。

效果：將藥連服五劑，周身之黃已減三分之二，小便之黃亦日見清減，脈象已和平如常。遂俾停藥勿服，日用生懷山藥、生薏米等分軋細，煮作茶湯，調入鮮梨、鮮荸薺自然汁，當點心服之，閱兩旬病遂痊愈。

或問「黃膽之證，中法謂病發於脾，西法謂病發於膽。今此案全從病發於膽論治，將勿中法謂病發於脾者不可信歟」？答曰「黃膽之證有發於脾者，有發於膽者，為黃膽之原因不同，是以仲聖治黃膽之方各異，即如硝石礬石散，原治病發於膽者也。其礬石若用皂礬，固為平肝膽要藥，至硝石確係火硝，其味甚辛，辛者金味，與礬石並用更可相助為理也。且西人謂有因膽石成黃膽者，而硝石礬石散，又善消膽石。有因鈎蟲成黃膽者，而硝石礬石散，並善除鈎蟲，制方之妙誠不可令人思議也。不但此也，仲聖對於各種疸證多用茵陳，因最善入少陽之府以清熱、舒鬱、消腫、透竅，原為少陽之主藥。仲聖若不知黃膽之證兼發於膽，何以若斯喜用少陽之藥乎？是以至明季南昌喻氏出，深窺仲聖用藥之奧旨，於治錢小魯酒疸一案，直謂膽之熱汁溢於外，以漸滲於經絡則周身俱黃云云，不已顯然揭明黃膽有發於膽經者乎」？

【黃膽】

奉天陸軍連長，王級三，年三十二歲，於季秋得黃膽證。

病因：出外行軍，夜宿帳中，勤苦兼受寒涼，如此月餘，遂得黃膽證。

證候：周身黃色甚暗似兼灰色，飲食減少，肢體酸懶無力，大便一日恆兩次似完穀不化，脈象沉細，左部更沉細欲無。

診斷：此脾胃肝膽兩傷之病也，為勤苦寒涼過度，以致傷其脾胃，是以飲食減少，完穀不化；傷其肝膽，是以膽汁凝結於膽管之中，不能輸腸以化食，轉由膽囊滲出，隨血流行於周身而發黃。此宜用《金匱》硝石礬石散以化其膽管之凝結，而以健脾胃補肝膽之藥煎湯送服。

處方：用硝石礬石散所制丸藥（見前），每服二錢，一日服兩次，用後湯藥送服。

湯藥：生箭耆（六錢）、白朮（四錢炒）、桂枝尖（三錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，送服丸藥一次，至第二次服丸藥時，仍煎此湯藥之渣送之。

複診：將藥連服五劑，飲食增加，消化亦頗佳良，體力稍振，周身黃退弱半，脈象亦大有起色。俾仍服丸藥一次服一錢五分，日兩次，所送服之湯藥宜略有加減。

湯藥：生箭耆（六錢）、白朮（三錢炒）、當歸（三錢）、生麥芽（三錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，送服丸藥一次。至第二次服丸藥時，仍煎此湯藥之渣送服。

效果：將藥連服六劑，周身之黃已退十分之七，身形亦漸強壯，脈象已復其常。俾將丸藥減去一次，將湯藥中去白朮加生懷山藥五錢，再服數劑以善其後。

【黃膽】

范庸吾，年三十二歲，住天津城裡草廠庵旁，業商，為義商滙豐銀行經理，得黃膽證。

病因：連日朋友飲宴，飲酒過量，遂得斯證。

證候：周身面目俱黃，飲食懶進，時作嘔吐，心中恆覺發熱，小便黃甚，大便白而乾澀，脈象左部弦而有力，右部滑而有力。

診斷：此因脾中蘊有濕熱，不能助胃消食，轉輸其濕熱於胃，以致胃氣上逆（是以嘔吐），膽火亦因之上逆（黃坤載謂「非胃氣下降，則膽火不降」），致膽管腫脹不能輸其汁於小腸以化食，遂溢於血中而成黃膽矣。治此證者，宜降胃氣，除脾濕，兼清肝膽之熱則黃膽自愈。

處方：生赭石（一兩軋細）、生薏米（八錢搗細）、茵陳（三錢）、梔子（三錢）、生麥芽（三錢）、竹茹（三錢）、木通（二錢）、檳榔（二錢）、甘草（二錢）。煎湯服。

效果：服藥一劑，嘔吐即止，可以進食，又服兩劑，飲食如常，遂停藥，靜養旬日間黃膽皆退淨。

〈 第 三 卷 〉

痢疾門

【痢疾轉腸潰瘍】

楊晴溪，滄縣楊家石橋人，年三十五歲，業商，於季秋因下痢成腸潰瘍證。病因：因業商賠累歇業，心中懊懣，暗生內熱，其肝膽之熱，下迫致成痢疾。痢久不愈，又轉為腸潰瘍。

證候：其初下痢時，後重腹疼，一晝夜十七八次，所下者赤痢多帶鮮血，間有白痢。延醫治療閱兩月，病益加劇，所下者漸變為血水，雜以脂膜，其色腐敗，其氣腥臭，每腹中一覺疼即須入廁，一晝夜二十餘次，身體羸弱，口中發乾，心中怔忡，其脈左右皆弦細，其左部則弦而兼硬，一分鐘九十二至。

診斷：此乃因痢久不愈，腸中脂膜腐敗，由腐敗而至於潰爛，是以純下血水雜以脂膜，即西人所謂腸潰瘍也。其脈象弦細者，氣血兩虧也。其左脈細而硬者，肝腎之陰虧甚也。其口乾，心中怔忡者，皆下血過多之所致也。此宜培養其氣血而以太毒化瘀生新之藥佐之。

處方：龍眼肉（一兩）、生懷山藥（一兩）、熟地黃（一兩）、金銀花（四錢）、甘草（三錢）、廣三七（三錢軋細）。藥共六味，將前五味煎湯，送服三七末一半，至煎渣再服時，仍送服其餘一半。

方解：龍眼肉為補益脾胃之藥，而又善生心血以愈怔忡，更善治腸風下血，治此證當為主藥。山藥亦善補脾胃，而又能上益肺氣，下固腎氣，其所含多量之蛋白質，尤善滋陰養血，凡氣血兩虛者，洵為當用之藥。熟地黃不但補腎陰也，馮楚瞻謂能大補腎中元氣，要亦氣血雙補之品也。此三味並用，久虧之氣血自能漸復，氣血壯旺，自能長肌肉排腐爛。又佐以金銀花甘草以解毒，三七以化瘀生新，庶能挽回此垂危之證也。

複診：將藥煎服三劑，病大見愈，一晝夜大便三四次，間見好糞，心中已不怔忡，脈象猶弦而左部不若從前之硬。因所服之藥有效，遂即原方略為加減，又服數劑，其大便仍一日數次，血糞相雜，因思此證下痢甚久，或有阿米巴毒菌（此菌詳三期痢疾門）伏藏於內，擬方中加消除此毒菌之藥治之。

處方：龍眼肉（一兩）、生懷山藥（一兩）、熟地黃（一兩）、甘草（三錢）、生硫黃（八分研細）、鴉膽子（成實者六十粒去皮）。藥共六味，將前四味煎湯一大盅，送服鴉膽子、硫黃末各一半，至煎渣再服時，仍送服其餘一半。

方解：方中用鴉膽子、硫黃者，因鴉膽子為治血痢要藥，並善治二便下血；硫黃為除阿米巴痢之毒菌要藥，二藥並用，則涼熱相濟，性歸和平奏效當速也。

三診：將藥煎服兩劑，其大便仍血糞相雜一日數行，因思鴉膽子與硫黃並用雖能消除痢中毒菌，然鴉膽子化瘀之力甚大，硫黃又為潤大便之藥（本草謂其能

使大便潤、小便長，西人以硫黃為輕下藥，二藥雖能消除痢中毒菌，究難使此病完全除根，擬去此二藥，於方中加保護脂膜固澀大便之品。

處方：龍眼肉（一兩）、生懷山藥（一兩）、大熟地黃（一兩）、赤石脂（一兩搗細）、甘草（三錢）、廣三七（三錢軋細）。藥共六味，將前五味煎湯一大盅，送服三七細末一半，至煎渣再服時，仍送服其餘一半。

效果：將藥連服五劑，下血之證痊愈，口中已不發乾，猶日下溏糞兩三次，然便時腹中分毫不疼矣。俾用生懷山藥軋細末，每用兩許煮作茶湯，調以白糖令適口，當點心服之，其大便久自能固。



【痢疾】

天津一區慧文里，張氏幼女，年五歲，於孟秋得痢證。

病因：暑日恣食瓜果，脾胃有傷，入秋以來則先瀉後痢。

證候：前因泄瀉旬日，身體已羸弱，繼又變瀉為痢，日下十餘次，赤白參半，下墜腹疼。屢次服藥不愈，身益羸弱，其脈象亦弱，而左脈之力似略勝於右。

診斷：按其左右脈皆弱者，氣血兩虛也。而左脈之力似略勝於右脈者，知其肝膽虛而挾熱，是以痢久不愈。然此熱非純係實熱，不可用過涼之藥，因其虛而挾熱，其虛又不受補，是必所用之補品兼能瀉熱，俾肝膽之虛熱皆愈而痢自愈矣。

處方：鴨肝一具，調以食料，煮熟服之，日服二次。

效果：如法將鴨肝烹食兩日痊愈，此方愚在遼寧得之友人齊自芸君（北京人，學問淵博，兼通醫學，時為瀋陽稅捐局長）。嘗閱李氏《本草綱目》，鴨肉性涼善治痢，鴨蛋之醃鹹者亦善治痢，而未嘗言及鴨肝。然痢之為病，多係肝火下迫腸中，鴨肉涼想鴨肝亦涼，此證先瀉後痢，身體羸弱，其肝經熱而且虛可知，以鴨肝瀉肝之熱，即以鴨肝補肝之虛，此所謂臟器療法，是以奏效甚速也。且又香美適口，以治孺子之苦於服藥者為尤宜也。

【痢疾】

鄭耀先，棗強人，年五旬，在天津一區為私塾教員，於孟秋得下痢證。

病因：連日勞心過度，心中有熱，多食瓜果，遂至病痢。

證候：腹疼後重，下痢赤白參半，一日夜七八次，其脈左部弦而有力，右部浮而濡，重按不實，病已八日，飲食減少，肢體酸軟。

診斷：證脈合參，當係肝膽因勞心生熱，脾胃因生冷有傷，冷熱相搏，遂致成痢。當清其肝膽之熱，兼顧其脾胃之虛。

處方：生懷山藥（一兩）、生杭芍（一兩）、當歸（六錢）、炒薏米（六錢）、金銀花（四錢）、竹茹（三錢碎者）、甘草（三錢）、生薑（三錢）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：服藥兩劑，腹疼後重皆除，下痢次數亦減，且純變為白痢。再診脈左部已和平如常，而右部之脈仍如從前，斯再投以溫補脾胃之劑當愈。

處方：生懷山藥（一兩）、炒薏米（五錢）、龍眼肉（五錢）、山楂片（三錢）、乾薑（二錢）、生杭芍（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥煎湯服兩劑，痢遂痊愈。

說明：按欲溫補其脾胃而復用芍藥者，防其肝膽因溫補復生熱也。用山楂片者，以其能化白痢之滯，且與甘草同用則酸甘化合，實有健運脾胃之功效也。

【噤口痢】

施瑞臣，安徽蒙城人，五十六歲，居天津一區，得噤口痢證。

病因：舉家數口，寄食友家不能還鄉，後友家助以資斧令還鄉，道路又復不通，日夜焦思，頻動肝火，時當孟秋，心熱貪涼，多食瓜果，致患下痢。

證候：一日夜下痢十五六次，多帶鮮血，後重甚劇，腹偶覺疼即須入廁，便後移時，疼始稍愈，病已五日，分毫不能進食，唯一日之間強飲米湯數口。其脈左部弦而硬，右部弦而浮，其搏五至，心中發熱，常覺噁心。

診斷：此肝火熾盛，肝血虛損，又兼胃氣挾熱上逆，是以下痢甚劇，而又噤口不食也。當治以滋陰、清熱、平肝、降胃之品。

處方：生杭芍（一兩）、生懷山藥（一兩）、滑石（七錢）、白頭翁（五錢）、秦皮（三錢）、碎竹茹（三錢）、甘草（三錢）、鴉膽子（成實者五十粒去皮）。先用白糖水囫圇送服鴨膽子仁，再將餘藥煎湯一大盅，溫服下。

複診：將藥如法服兩劑，痢中已不見鮮血，次數減去三分之二。其脈左部較前和平，右部則仍有浮弦之象，仍然不能飲食，心中仍然發熱，然不若從前之噁心，此宜用藥再清其胃腑必然能食矣。

處方：生懷山藥（兩半）、生石膏（兩半搗細）、生杭芍（六錢）、白頭翁（四錢）、秦皮（二錢）甘草（二錢）。共煎湯一大盅，分兩次溫服。

效果：將藥煎服一劑，即能進食，痢已不見，變作泄瀉，日四五次，俾用生懷山藥細末煮作粥，少調以白糖服之，三日痊愈。

或問「石膏為治外感實熱之藥，今此證未夾雜外感，何以方中亦用之」？答曰「石膏為治陽明胃腑有實熱者之聖藥，初不論其為外感非外感也。蓋陽明胃氣以息息下行為順，若有熱則其氣多不下行而上逆，因其胃氣挾熱上逆，所以多噁心嘔吐，不思飲食，若但知清其熱而不知降其氣，治之恆不易見效。惟石膏性涼質重（雖煎為湯，仍有沉重之力），其涼也能清實熱，其重也能鎮氣逆，是以凡胃氣挾實熱上逆，令人不思飲食者，服之可須臾奏效。若必謂石膏專治外感實熱，不可用治內傷實熱，則近代名醫徐氏、吳氏醫案中皆有重用石膏治癒內傷實熱之案，何妨取以參觀乎」？

大小便病門

【泄瀉兼發灼】

胡益軒，天津南唐官屯人，年四十二歲，業商，於孟秋得泄瀉兼灼熱病。

病因：其兄因痢病故，鋪中之事及為其兄殯葬之事，皆其一人經理，哀痛之餘，又兼心力俱瘁，遂致大便泄瀉，周身發熱。

證候：一日夜瀉十四五次，將瀉時先腹疼，瀉後疼益甚，移時始愈，每過午一點鐘，即覺周身發熱，然不甚劇，夜間三點鐘後，又漸癒，其脈六部皆弱，兩尺尤甚。

診斷：按此證係下焦虛寒及胸中大氣虛損也。蓋下焦寒甚者，能迫下焦之元陽上浮，胸中大氣虛甚者，恆不能收攝，致衛氣外浮，則元陽之上浮與衛氣之外浮相並，即可使周身發熱。其發在過午者，因過午則下焦之陰寒益盛，而胸中大氣益虛也（胸中大氣乃上焦之陽氣，過午陰盛，是以大氣益虛）。此本虛寒泄瀉之證，原不難治，而醫者因其過午身熱，皆不敢投以溫補，是以屢治不愈。擬治以大劑溫補之藥，並收斂其元陽歸其本源，則泄瀉止而灼熱亦愈矣。

處方：白朮（五錢炒）、熟懷地黃（一兩）、生懷山藥（一兩）、淨萸肉（五錢）、乾薑（三錢）、烏附子（三錢）、生杭芍（三錢）、雲苓片（二錢）、炙甘草（三錢）。共煎湯一大盅，溫服。

復診：服藥一劑，身熱即愈，服至三劑，泄瀉已愈強半，脈象亦較前有力，遂即原方略為加減俾再服之。

處方：白朮（六錢炒）、熟懷地黃（一兩）、生懷山藥（一兩）、淨萸肉（五錢）、龍眼肉（五錢）、乾薑（四錢）、烏附子（四錢）、雲苓片（二錢）、炙甘草（三錢）。

效果：將藥連服十餘劑，病遂痊愈。

說明：大隊溫補藥中復用芍藥者，取其與附子並用，能收斂元陽歸根於陰，且能分利小便，則泄瀉易愈也。至後方去芍藥者，因身已不熱，元陽已歸其宅，且泄瀉已就愈，仍有茯苓以利其小便，無須再用芍藥也。

【小便白濁】

李克明，天津東門里寶林書莊理事，年二十六歲，得小便白濁證。

病因：於季秋乘大車還家，中途遇雨，衣服盡濕，夜宿店中，又披衣至庭中小便，為寒風所襲，遂得白濁之證。

證候：尿道中恆發刺癢，每小便完時有類精髓流出數滴，今已三閱月，屢次服藥無效，頗覺身體衰弱，精神短少，其脈左部弦硬，右部微浮，重按無力。

診斷：《內經》謂「腎主蟄藏，肝主疏泄」，又謂「風氣通於肝」，又謂「肝行腎之氣」，此證因風寒內襲入肝，肝得風助，其疏泄之力愈大，故當小便時，肝為腎行氣過於疏泄，遂致腎臟失其蟄藏之用，尿出而精亦隨之出矣。其左脈弦硬者，肝脈挾風之象，其右脈浮而無力者，因病久而氣血虛弱也。其尿道恆發刺癢者，尤顯為風襲之明徵也。此宜散其肝風，固其腎氣，而更輔以培補氣血之品。

處方：生箭耆（五錢）、淨萸肉（五錢）、生懷山藥（五錢）、生龍骨（五錢搗碎）、生牡蠣（五錢搗碎）、生杭芍（四錢）、桂枝尖（三錢）、生懷地黃（三錢）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅，溫服。

方解：方中以黃耆為主者，因《本經》原謂黃耆主大風，是以風之入臟者，黃能逐之外出，且其性善補氣，氣盛自無滑脫之病也。桂枝亦逐風要藥，因其性善平肝，故尤善逐肝家之風，與黃耆相助為理則逐風之力愈大也。用萸肉、龍骨、牡蠣者，以其皆為收斂之品，又皆善收斂正氣而不斂邪氣，能助腎臟之蟄藏而無

礙肝風之消散，拙著藥物講義中論之詳矣。用山藥者，以其能固攝下焦氣化，與莢肉同為腎氣丸中要品，自能保合腎氣不使虛瀉也。用芍藥、地黃者，欲以調劑黃耆、桂枝之熱，而芍藥又善平肝，地黃又善補腎，古方腎氣丸以乾地黃為主藥，即今之生地黃也。用甘草者，取其能緩肝之急，即能緩其過於疏泄之力也。

效果：將藥連服三劑，病即痊愈，因即原方去桂枝以熟地易生地，俾再服數劑以善其後。



【小便因寒閉塞】

石玉和，遼寧省公署護兵，年三十二歲，於仲冬得小便不通證。

病因：晚飯之後，食梨一顆，至夜站崗又受寒過甚，遂致小便不通。

證候：病初得時，先入西醫院治療。西醫治以引尿管小便通出，有頃小便復存蓄若干，西醫又納以橡皮引尿管，使久在其中，有尿即通出。乃初雖稍利，繼則小便仍不出，遂院中（立達醫院）求為診治。其脈弦細沉微，不足四至，自言下焦疼甚且涼甚，知其小便因受寒而凝滯也，斯當以溫熱之藥通之。

處方：野黨參（五錢）、椒目（五錢炒搗）、懷牛膝（五錢）、烏附子（三錢）、廣肉桂（三錢）、當歸（三錢）、乾薑（二錢）、小茴香（二錢）、生明沒藥（二錢）、威靈仙（二錢）、甘草（二錢）。共煎一大盅，溫服。

方解：方中之義，人參、靈仙並用，可治氣虛小便不通。椒目與桂、附、乾薑並用，可治因寒小便不通。又佐以當歸、牛膝、茴香、沒藥、甘草諸藥，或潤而滑之，或引而下之，或辛香以透竅，或溫通以開瘀，或和中以止疼，眾藥相濟為功，自當隨手奏效也。

效果：將藥煎服一劑，小便通下，服至三劑，腹疼覺涼痊愈，脈已復常。俾停服湯藥，日用生硫黃錢許研細，分作兩次服，以善其後。

之性，說明：諸家本草，皆謂硫黃之性能使大便潤小便長，用於此證，其暖而能通，適與此證相宜也。

不寐病門

【心虛不寐】

徐友梅，道尹（總統介弟），寓天津一區小松島街，年六十六歲，於季春得不寐證。

病因：因性嗜吟詠，喜與文士結社，賦詩聯句，暗耗心血，遂致不寐。

證候：自冬令間有不寐之時，未嘗介意，至春日陽生，病浸加劇，迨至季春恆數夜不寐，服一切安眠藥皆不效。精神大為衰憊，心中時常發熱，懶於飲食，勉強加餐，恆覺食停胃脘不下行。大便乾燥，恆服藥始下。其脈左部浮弦，右脈尤弦而兼硬，一息五至。

診斷：其左脈浮弦者，肝血虛損，兼肝火上升也，陰虛不能潛陽，是以不寐。其右脈弦而兼硬者，胃中酸汁短少更兼胃氣上逆也。酸汁少則不能化食，氣上逆則不能息息下行傳送飲食，是以食後恆停胃脘不下，而其大便之燥結，亦即由胃腑氣化不能下達所致。治此證者，宜清肝火、生肝血、降胃氣、滋胃汁，如此以調養肝胃，則夜間自能安睡，食後自不停滯矣。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（八錢）、生赭石（六錢軋細）、玄參（五錢）、北沙參（五錢）、生杭芍（五錢）、酸棗仁（四錢炒搗）、生麥芽（三

錢)、生雞內金(錢半黃色的搗)、茵陳(錢半)、甘草(二錢)。共煎一大盅，溫服。

複診：將藥煎服兩劑，夜間可睡兩三點鐘，心中已不發熱，食量亦少加增，大便仍滯，脈象不若從前之弦硬，遂即原方略為加減俾再服之。

處方：生懷山藥(一兩)、大甘枸杞(八錢)、生赭石(六錢軋細)、玄參(五錢)、北沙參(五錢)、酸棗仁(四錢炒搗)、龍眼肉(三錢)、生杭芍(三錢)、生雞內金(錢半黃色的搗)、生遠志(錢半)、茵陳(一錢)、甘草(錢半)。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服三劑，夜間安睡如常，食慾已振，大便亦自然通下。惟脈象仍有弦硬之意，遂將方中龍眼肉改用八錢，俾多服數劑以善其後。

說明：《易》繫辭一陰一陽互為之根，此天地之氣化也。人稟天地之氣化以生，是以上焦之氣化為陽，下焦之氣化為陰。當白晝時，終日言語動作，陰陽之氣化皆有消耗，實賴嚮晦燕息以補助之。誠以人當睡時，上焦之陽氣下降潛藏與下焦之陰氣會合，則陰陽自能互根，心腎自然相交。是以當熟睡之時，其相火恆熾盛暗動(得心陽之助)，此心有益於腎也。至睡足之時，精神自清爽異常(得腎陰之助)，此腎有益於心也。由斯知人能寐者，由於陽氣之潛藏，其不能寐者，即由於陽氣之浮越，究其所以浮越者，實因臟腑之氣化有升無降也。是以方中重用赭石以降胃鎮肝，即以治大便燥結，且其色赤質重，能入心中引心陽下降以成

寐，若更佐以龍骨、牡蠣諸收斂之品以鎮安精神，則更可穩睡，而方中未加入者，因其收澀之性與大便燥結者不宜也。又《內經》治目不得瞑，有半夏秫米湯原甚效驗，誠以胃居中焦，胃中之氣化若能息息下行，上焦之氣化皆可因之下行。半夏善於降胃，秫米善於和胃，半夏與秫米並用，俾胃氣調和順適，不失下行之常，是以能令人瞑目安睡。方中赭石與山藥並用，其和胃降胃之力實優於半夏秫米，此乃取古方之義而通變化裁，雖未顯用古方而不啻用古方也。

【不寐兼驚悸】

表兄趙文林之夫人，年近三旬，得不寐證，兼心中恆驚悸。

病因：因家中諸事皆其自理，勞心過度，因得不寐兼驚悸病。

證候：初苦不寐時，不過數日偶然，其過半夜猶能睡，繼則常常如此，又繼則徹夜不寐，一連七八日困頓已極，彷彿若睡，陡覺心中怦怦而動，即暮然驚醒，醒後心猶怔忡，移時始定，心常發熱，呼吸似覺短氣，懶於飲食，大便燥結，四五日始一行。其脈左部弦硬，右部近滑，重診不實，一息數近六至。

診斷：此因用心過度，心熱耗血，更因熱生痰之證也。為其血液因熱暗耗，陰虛不能潛陽，是以不寐，痰停心下，火畏水刑（心屬火痰屬水），是以驚悸。其呼吸覺短氣者，上焦凝滯之痰礙氣之升降也。其大便燥結者，火盛血虛，腸中津液短也。此宜治以利痰、滋陰、降胃、柔肝之劑，再以養心安神之品輔之。

處方：生赭石（八錢軋細）、大甘枸杞（八錢）、生懷地黃（八錢）、生懷山藥（六錢）、栝蒌仁（六錢炒搗）、天冬（六錢）、生杭芍（五錢）、清半夏（四錢）、棗仁（四錢炒搗）、生遠志（二錢）、茵陳（錢半）、甘草（錢半）、硃砂（二分研細）。藥共十三味，將前十二味煎湯一大盅，送服硃砂末。

複診：將藥連服四劑，心中已不覺熱，夜間可睡兩點鐘，驚悸已愈十之七八，氣息亦較前調順，大便之燥結亦見愈，脈象左部稍見柔和，右部仍有滑象，至數稍緩，遂即原方略為加減俾再服之。

處方：生赭石（八錢軋細）、大甘枸杞（八錢）、生懷地黃（八錢）、生懷山藥（六錢）、龍眼肉（五錢）、栝萸仁（五錢炒搗）、玄參（五錢）、生杭芍（五錢）、棗仁（四錢炒搗）、生遠志（二錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服六劑，徹夜安睡，諸病皆愈。

癩 癩 癩 狂 門

【癩風兼腦充血】

陳德三，山東曲阜人，年三十八歲，在天津一區充商業學校教員，得癩風兼腦充血證。

病因：因肝火素盛，又在校中任講英文，每日登堂演說，時間過長。勞心勞力皆過度，遂得斯證。

證候：其來社求診時，但言患癩風，或數日一發，或旬餘一發，其發必以夜，亦不自覺，惟睡醒後其舌邊覺疼，有咬破之處，即知其睡時已發癩風，其日必精神昏憤，身體酸懶。診其脈左右皆弦硬異常，因問其腦中發熱或作疼，或兼有眩暈之時乎？答曰「此三種病，腦中皆有，餘以為係癩風之連帶病，故未言及耳」。愚曰「非也，是子患癩風兼患腦充血也」。

診斷：按癩風之證，皆因腦髓神經失其所司，而有非常之變動，其腦部若充血過甚者，恆至排擠腦髓神經，使失其常司也。此證既患癩風，又兼腦部充血，則治之者自當以先治其腦部充血為急務。

處方：治以拙擬鎮肝熄風湯（方在三期七卷），為其兼患癩風加全蜈蚣大者三條，蓋鎮肝熄風湯原為拙擬治腦充血之主方，而蜈蚣又善治癩風之要藥也。



複診：前方連服十劑，腦部熱疼眩暈皆除。惟脈仍有力，即原方略為加減，又服十劑則脈象和平如常矣，繼再治其癩風。

處方：治以拙擬愈癩丹（方在五期論治癩風篇中），日服兩次，每次用生懷山藥五錢煎湯送下。

效果：服藥逾兩月舊病未發，遂停藥勿服，癩風從此愈矣。

【受風癱瘓】

天津北門西白家胡同，董氏幼女，年三歲，患癱瘓病。

病因：暮春氣暖著衣過厚，在院中戲，出汗受風，至夜間遂發癱瘓。

證候：劇時閉目昏昏，身軀後挺，兩手緊握，輕時亦能明瞭，而舌腫不能吮乳，惟飲茶湯及代乳粉。大便每日溏瀉兩三次，如此三晝夜不愈，精神漸似不支，皮膚發熱，診其脈亦有熱象。

診斷：此因春暖衣濃，肝有鬱熱，因外感激發其熱上衝腦部，排擠腦髓神經失其運動之常度，是以發搐。法當清其肝熱，散其外感，兼治以鎮安神經之藥其病自愈。

處方：生懷山藥（一兩）、滑石（八錢）、生杭芍（六錢）、連翹（三錢）、甘草（三錢）、全蜈蚣（兩條大者）、硃砂（二分細末）。藥共七味，將前六味煎湯一盅，分數次將硃砂徐徐溫送下。

效果：將藥煎服一劑，癱瘓已癒，其頭仍向後仰，左手仍拳曲不舒，舌腫已消強半，可以吮乳，大便之溏已癒。遂即原方減滑石之半，加玄參六錢，煎服後左手已不拳曲，其頭有後仰之意，遂減去方中滑石，加全蠍三個，服一劑痊愈。蓋蜈蚣之為物，節節有腦，原善理神經以愈癱瘓，而蠍之為物，腹有八星，列作兩行，實為木之成數，故能直人肝經以理肝舒筋（肝主筋），項間之筋舒則無拘攣，頭自不向後仰矣。

【慢脾風】

遼寧省公署科員侯壽平之幼子，年七歲，於季秋得慢脾風證。

病因：秋初病瘧月餘方愈，愈後覺左脅下痞硬，又屢服消痰之品，致脾胃虛寒不能化食，浸至吐瀉交作，兼發抽掣。

證候：日晡潮熱，兩顴發紅，昏睡露睛，手足時作抽掣，劇時督脈緊而頭向後仰（俗名角弓反張），無論飲食藥物，服後半點鐘即吐出，且帶出痰涎若干，時作泄瀉，其脈象細數無力。

診斷：瘧為肝膽所受之邪，木病侮土，是以久病瘧者多傷脾胃，此證從前之左脅下痞硬，脾因受傷作脹也，而又多次服消導開破之品，則中焦氣化愈傷，以致寒痰留飲積滿上溢，迫激其心肺之陽上浮，則面紅外越而身熱，而其病本實則涼也。其不受飲食者，為寒痰所阻也；其兼泄瀉者，下焦之氣化不固也；其手足抽掣者，血虛不能榮筋養肝，則肝風內動而筋緊縮也。抽掣劇時頭向後仰者，不但督脈因寒緊縮，且以督脈與神經相連，督脈病而腦髓神經亦病，是以改其常度而妄行也。擬先用《福幼編》逐寒蕩驚湯開其寒痰，俾其能進飲食斯為要務。

處方：胡椒（一錢）、乾薑（一錢）、肉桂（一錢）、丁香（十粒）、四味共搗成粗渣）、高麗參（一錢）、甘草（一錢）。先用灶心土三兩煮湯澄清，以之代水，先煎人參、甘草七八沸，再入前四味同煎三四沸，取清湯八分杯，徐徐灌之。此方即逐寒蕩驚湯原方加人參、甘草也。原方乾薑原係炮用，然炮之則其氣

輕浮，辣變為苦，其開通下達之力頓減，是以不如生者。特是生用之則苛辣過甚，故加甘草和之，且能逗留乾薑之力使綿長也。又加人參者，欲以補助胸中大氣以運化諸藥之力，仲師所謂大氣一轉，其結（即痰飲）乃散也。又此方原以胡椒為主，若遇寒痰過甚者，可用至錢半。又此物在藥局中原係背藥，陳久則力減，宜向食料鋪中買之。

複診：將藥服後嘔吐即止，抽掣亦愈，而潮熱泄瀉亦似輕減，擬繼用《福幼編》中加味理中地黃湯，略為加減俾服之。

處方：熟懷地黃（五錢）、生懷山藥（五錢）、焦白朮（三錢）、大甘枸杞（三錢）、野黨參（二錢）、炙箭耆（二錢）、乾薑（二錢）、生杭芍（二錢）、淨萸肉（二錢）、肉桂（一錢後入）、紅棗（三枚掰開）、炙甘草（一錢）、胡桃（一個用仁搗碎）。共煎湯一大盅，分多次徐徐溫服下。

方解：此方之藥為溫熱並用之劑，熱以補陽，溫以滋陰，病本寒涼是以藥宜溫熱，而獨雜以性涼之芍藥者，因此證涼在脾胃，不在肝膽，若但知暖其脾胃，不知涼其肝膽，則肝膽因服熱藥而生火，或更激動其所寄之相火，以致小便因之不利，其大便必益泄瀉，芍藥能涼肝膽，尤善利小便，且尤善斂陽氣之浮越以退潮熱，是以方中特加之也。《福幼編》此方乾薑亦係炮用，前方中之乾薑變炮為生，以生者善止嘔吐也。今嘔吐已止，而乾薑復生用者，誠以方中藥多滯膩，猶恐因之生痰，以乾薑生用之芍辣者開通之，則滯膩可化，而乾薑芍辣過甚之性，

即可因與滯膩之藥並用而變為緩和，此藥性之相合而化亦即相得益彰也。此方原亦用灶心土煎湯以之代水煎藥，而此時嘔吐已止，故可不用。然須知灶心土含鹼質甚多，凡柴中有鹼質者，燒餘其鹼多歸灶心土，是以其所煮之湯苦鹹，甚難下嚥，愚即用時恆以灶壙紅土代之。且灶心土一名伏龍肝，而雷斅調用此土勿誤用灶下土，宜用灶額中赤土，此與灶壙中紅土無異，愚從前原未見其說，後得見之，自喜拙見與古暗合也。

效果：將藥連服兩劑，潮熱與泄瀉皆愈，脈象亦較前有力。遂去白朮，將乾薑改用一錢，又服兩劑痊愈。

【慢脾風】

遼寧測量局長張孝孺君之幼孫，年四歲，得慢脾風證。

病因：秋初恣食瓜果，久則損傷脾胃，消化力減猶不知戒，中秋節後遂成慢脾風證。

證候：食慾大減，強食少許，猶不能消化，醫者猶投以消食開瘀之劑，脾胃益弱，浸至吐瀉交作，間發抽掣，始求愚為診視，周身肌膚灼熱，其脈則微細欲無，昏睡露睛，神氣虛弱。

診斷：此證因脾胃虛寒，不能熟腐水穀消化飲食，所以作吐瀉，且所食之物不能融化精微以生氣血，惟多成寒飲，積於胃中，溢於膈上，排擠心肺之陽外出，是以周身灼熱而脈轉微細，此裡有真寒外作假熱也。其昏睡露睛者，因眼胞屬脾胃，其脾胃如此虛寒，眼胞必然緊縮，是以雖睡時而眼猶微睜也。其肢體抽掣者，因氣血虧損，不能上達於腦，以濡潤斡旋其腦髓神經（《內經》謂「上氣不足則腦為之不滿」，蓋血隨氣升，氣之上升者少，血之上升亦少。可知觀凶門未合之小兒，患此證者，其凶門必然下陷，此實腦為不滿之明證，亦即氣血不能上達之明徵也），是以神經失其常司而肢體有時抽掣也，此當投以溫暖之劑，健補脾胃以消其寒飲，諸病當自愈。

處方：赤石脂（一兩研細）、生懷山藥（六錢）、熟懷地黃（六錢）、焦白朮（三錢）、烏附子（二錢）、廣肉桂（二錢去粗皮後入）、乾薑（錢半）、大

雲苓片（錢半）、炙甘草（二錢）、高麗參（錢半搗為粗末）。藥共十味，將前九味煎湯一大盅，分多次徐徐溫服，每次皆送服參末少許。

方解：方中重用赤石脂者，為其在上能鎮嘔吐，在下能止泄瀉也。人參為末送服者，因以治吐瀉，丸散優於湯劑，蓋因丸散之渣滓能留戀於腸胃也。

效果：將藥服完一劑，嘔吐已止，瀉愈強半，抽掣不復作，灼熱亦大輕減，遂將乾薑減去，白朮改用四錢，再服一劑，其瀉亦止。又即原方將附子減半，再加大甘枸杞五錢，服兩劑病遂痊愈。

說明：按此證若嘔吐過甚者，當先用《福幼編》逐寒蕩驚湯開其寒飲，然後能受他藥，而此證嘔吐原不甚劇，是以未用。

【將成慢脾風】

鄰村趙姓幼男，年八歲，脾胃受傷，將成慢脾風證。

病因：本係農家，田園種瓜看守其間，至秋日瓜熟，饑恆食瓜當飯，因之脾胃受傷，顯露慢脾風朕兆。

證候：食後，飲食不化，恆有吐時，其大便一日三四次，多帶完穀，其腿有時不能行步，恆當行走之時委坐於地，其周身偶有灼熱之時，其脈左部弦細，右部虛濡，且至數兼遲。

診斷：此證之吐而且瀉及偶痿廢不能行步，皆慢脾風朕兆也。況其周身偶或灼熱，而脈轉弦細虛濡，至數且遲，此顯係內有真寒外有假熱之象。宜治以大劑溫補脾胃之藥，俾脾胃健旺自能消化飲食，不復作吐作瀉，久之則中焦氣化舒暢，周身血脈貫通，餘病自愈。

處方：生懷山藥（一兩）、白朮（四錢炒）、熟懷地黃（四錢）、龍眼肉（四錢）、乾薑（三錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、生杭芍（二錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，分兩次溫服下。

複診：將藥煎服兩劑，吐瀉灼熱皆愈，惟行走時猶偶覺腿有不利，因即原方略為加減，俾多服數劑當痊愈。



處方：生懷山藥（一兩）、熟懷地黃（四錢）、龍眼肉（四錢）、胡桃仁（四錢）、白朮（三錢炒）、川續斷（三錢）、乾薑（二錢）、生雞內金（二錢黃色搗）、生杭芍（錢半）、甘草（錢半）。共煎湯一大盅，分兩次溫服。

效果：將藥煎服兩劑，病遂痊愈，因切戒其勿再食生冷之物，以防病之反覆。

【癲狂失心】

都鳳巢，洮昌都道尹之公子，年三旬，得癲狂失心證。

病因：因讀書無所成就，欲別謀營業而庭訓甚嚴，不能自由，心鬱生熱，因熱生痰，遂至癲狂失心。

證候：言語錯亂，精神昏瞶，時或忿怒，時或狂歌，其心中猶似煩躁，夜不能寐，恆以手自撓其胸，蓋自覺發悶也。問之亦不能答，觀其身形似頗強壯，六脈滑實，兩寸尤甚，一息五至。

診斷：人之元神在腦，識神在心，心腦息息相通，其神明自湛然長醒。生理學家謂心有四支血管通腦，此即神明往來於心腦之路也。此證之脈，其關前之滑實太過，係有熱痰上壅，將其心腦相通之路杜塞，遂至神明有所隔礙，失其常性，此癲狂失心之所由來也。治之者，當投以開通重墜之劑，引其痰火下行，其四支血管為痰所瘀者，復其流通之舊，則神明之往來自無所隔礙，而復湛然長醒之舊矣。

處方：生赭石（兩半軋細）、川大黃（八錢）、清半夏（五錢）芒硝（四錢）。藥共四味，先將赭石、半夏煎十餘沸，加入大黃煎兩三沸，取湯一大盅，入芒硝融化溫服。

方解：方中重用赭石者，其重墜之性能引血管中之瘀痰下行也。

複診：三日服藥一次（凡降下之藥不可連服，須俟其正氣稍緩再服），共服三次，每次服藥後通下大便兩三次，似有痰涎隨下，其精神較前稍明瞭，診其脈仍有滑實之象，身體未見衰弱，擬再投以較重之劑，蓋凡癲狂之甚者，非重劑治之不能愈也。

處方：生赭石（二兩軋細）、川大黃（一兩）、芒硝（四錢）、甘遂（錢半細末）。藥共四味，先煎赭石十餘沸，入大黃煎兩三沸，取湯一大盅，入芒硝融化，將服時再調入甘遂末。

三診：將藥如法煎服一劑，下大便五六次，帶有痰涎若干，中隔兩日，又服藥一次（藥中有甘遂，必須三日服一次，不然必作嘔吐），又下大便五六次，中多兼痰塊挑之不開，此所謂頑痰也。從此精神大見明瞭，脈象亦不復滑實矣，擬改用平和之劑調治之。

處方：生懷山藥（一兩）、生杭芍（六錢）、清半夏（四錢）、石菖蒲（三錢）、生遠志（二錢）、清竹瀝（三錢）、鏡面砂（三分研細）。藥共七味，將前五味煎湯一大盅，調入竹瀝，送服硃砂細末。

效果：將藥如法煎服數劑，病遂痊愈。

【神經錯亂】

黃象三，天津北倉中學肄業生，年二十歲，得神經錯亂病。

病因：在校中本屬翹楚，而考時不列前茅，因此心中忿鬱，久之遂致神經錯亂。

證候：心中滿悶發熱，不思飲食，有時下焦有氣上衝，並覺胃脘之氣亦隨之上衝，遂致精神昏瞶，言語支離，移時覺氣稍稍順，或吐痰數口，精神遂復舊。其左脈弦而硬，右脈弦而長，兩尺皆重按不實，一息五至。

診斷：此乃肝火屢動，牽引衝氣胃氣相並上衝，更挾痰涎上衝以滯塞於喉間並衝激其腦部，是以其神經錯亂而精神言語皆失其常也。其左脈弦硬者，肝血虛而火熾盛也。右脈弦長者，衝氣挾胃氣上衝之現象也。方書論脈有「直上直下，衝脈昭昭」之語，所謂直上直下者，即脈弦且長之形狀也。其兩尺不實者，下焦之氣化不固也，因下焦有虛脫之象，是以衝氣易挾胃氣上衝也。此當治以降胃、斂衝、鎮肝之劑，更兼用涼潤滋陰之品，以養肝血，清肝熱，庶能治癒。

處方：生赭石（一兩軋細）、靈磁石（五錢軋細）、生懷山藥（八錢）、生龍骨（八錢搗碎）、生杭芍（六錢）、玄參（五錢）、柏子仁（五錢）、雲苓片（三錢）、清半夏（三錢）、石菖蒲（三錢）、生遠志（二錢）、鏡面砂（三分研細）。藥共十二味，將前十一味煎湯一大盅，送服硃砂細末。

複診：將藥連服四劑，滿悶發熱皆大見愈，能進飲食，有時氣復上衝而不復上，干神經至於錯亂，左右之脈皆較前平和，而尺部仍然欠實，擬兼用培補下元之品以除病根。

處方：生赭石（一兩軋細）、熟懷地黃（八錢）、生懷山藥（八錢）、大甘枸杞（六錢）、淨萸肉（五錢）、生杭芍（四錢）、玄參（四錢）、雲苓片（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服六劑，諸病皆愈，脈亦復常。

或問「地黃之性粘膩生痰，胃脘脹滿，有痰者多不敢用，今重用之何以能諸病皆愈」？答曰「用藥如用兵，此醫界之恆言也，如宋八字軍最弱，劉錡將之即為勁卒，遂能大敗金人，奏順昌之捷，以斯知兵無強弱，在用之者何如耳。至用藥亦何獨不然，憶曾治一李姓媪，胃口滿悶有痰，其脈上盛下虛，投以腎氣丸作湯服，為加生赭石八錢，服後覺藥有推蕩之力，須臾胸次豁然，腎氣丸非重用地黃者乎？然如此用藥非前無師承而能有然也。《金匱》云「短氣有微飲，當從小便去之，苓桂朮甘湯主之，腎氣丸亦主之」。夫飲即痰也，氣短亦近於滿悶，而仲師竟謂可治以腎氣丸，愚為於《金匱》曾熟讀深思，故臨證偶有會心耳。

傷寒門

【傷寒兼腦膜炎】

李淑顏，鹽山城西八裡莊人，年六旬，蒙塾教員，於季冬患傷寒兼腦膜炎。病因：素有頭昏證，每逢上焦有熱，精神即不清爽，腦底偶冒風寒，病傳陽明，邪熱內熾，則腦膜生炎，累及神明失其知覺。

證候：從前醫者治不如法，初得時未能解表，遂致傷寒傳裡，陽明腑實，舌苔黃而帶黑，其乾如錯，不能外伸，譫語不休，分毫不省人事，兩目直視不瞬。診其脈兩手筋惕不安，脈象似有力而不實，一息五至，大便四日未行，小便則溺時不知。

診斷：此乃病實脈虛之證，其氣血虧損難抗外邪，是以有種種危險之象。其舌苔黑而乾者，陽明熱實，津液不上潮也；其兩目直視不瞬者，肝火上衝而目發脹也；其兩手筋惕不安者，肝熱血耗而內風將動也；其譫語不省人事者，固有外感之邪熱過盛，昏其神明，實亦由外感之邪熱上蒸，致腦膜生炎，累及腦髓神經也。擬用白虎加人參湯，更輔以滋補真陰之品，庶可治癒。

處方：生石膏（五兩搗細）、生懷地黃（二兩）、野臺參（八錢）、天花粉（八錢）、北沙參（八錢）、知母（六錢）、生杭芍（六錢）、生懷山藥（六錢）、甘草（四錢）、荷葉邊（一錢）。共煎湯三盅，分三次溫服下，每服一盅調入生

雞子黃兩枚。方中不用粳米者，以生山藥可代粳米和胃也；用生雞子黃者，以其善熄肝風之內動也；用荷葉者，以其形為仰盂象震，而其梗又中空亭亭直上，且又得水面氫氣最多，以善引諸涼藥之力直達腦中以清腦膜之炎也。

再診：將藥如法煎服，翌晨下大便一次，舌苔乾較愈，而仍無津液，精神較前明瞭而仍有譫語之時，其目已不直視而能瞬，診其脈筋惕已愈強半，至數較前稍緩，其浮分不若從前有力，而重按卻比從前有根底，此皆佳兆也。擬即前方略為加減，清其餘熱即以復其真陰，庶可痊愈。

處方：生石膏（四兩搗細）、生懷地黃（二錢）、野臺參（八錢）、大甘枸杞（一兩）、生懷山藥（一兩）、天花粉（八錢）、北沙參（八錢）、知母（六錢）、生杭芍（六錢）、甘草（四錢）。共煎湯三盅。為其大便已通，俾分多次徐徐溫飲下，一次只飲一大口。

效果：閱十點鐘將藥服完，精神清爽，諸病皆愈。

說明：按治腦膜炎證，羚羊角最佳，而以治筋惕不安，亦羚羊角最效，以其上可清頭腦，下可熄肝風之萌動也。然此藥價太昂，僻處藥局又鮮真者，是以方中未用，且此證雖兼有腦膜炎病，實因臟腑之邪熱上蒸，清其邪熱則腦膜炎自愈，原不必注重於清腦也。

或問「筋惕之病，西人謂腦髓神經失其常度而妄行，是以腦膜炎證，恒有瘳搖拘攣，角弓反張諸病，此皆筋惕之類，誠以腦膜生炎而累及神經也。今則謂肝

經血虛有熱使然，將勿西人之說不足信歟」？答曰「此二說原可相通，腦髓神經原名腦氣筋，乃灰白色之細筋也，全體之筋皆肝主之，是以腦髓神經與肝有至切之關係，肝有所傷，腦髓神經恒失其常，度西醫所謂腦髓神經病，多係方書中謂肝經病也。況方中用荷葉邊作引，原能引諸涼藥上行以清其腦部乎」。



【傷寒脈閉】

張金鐸，天津東門裡麵粉莊理事，年三十八歲，於季冬得傷寒證，且無脈。

病因：旬日前曾感冒風寒，經醫治癒，繼出門作事，又感風寒遂得斯病。

證候：內外俱覺寒涼，頭疼，氣息微喘，身體微形寒戰，六脈皆無。

診斷：蓋其身體素弱，又在重感之餘，風寒深入，阻塞經絡，是以脈閉。擬治以麻黃湯，再重加補氣之藥，補其正氣以逐邪外出，當可奏效。

處方：麻黃（三錢）、生箭耆（一兩）、桂枝尖（二錢）、杏仁（二錢去皮）、甘草（二錢）。先煎麻黃數沸，吹去浮沫，再入餘藥同煎湯一大盅，溫服，被覆取微汗。

效果：服藥後周身得汗，其脈即出，諸病皆愈。

說明：按此證或疑係少陰傷寒，因少陰傷寒脈原微細，微細之至可至於無也。而愚從太陽治者，因其頭疼、微喘、寒戰，皆為太陽經之現象，而無少陰證蜷臥、但欲寐之現象也。是以於麻黃湯中，重加生黃耆一兩，以助麻、桂成功，此扶正即以逐邪也。

【傷寒脈閉】

李姓童子，年十四歲，天津河北耀華織布工廠學徒，得傷寒脈閉證。

病因：其左肋下素有鬱氣，發動時輒作疼，一日發動疼劇，頭上汗出，其汗未解，出冒風寒，遂得斯證。

證候：頭疼、身冷、惡寒、無汗、心中發熱，六脈皆閉。

診斷：因其素有肋下作疼之病，身形羸弱，又當汗出之時感冒風寒，則風寒之人者必深，是以脈閉身寒，又肋下素有鬱氣，其肝膽之火必然鬱滯，因外感所束，激動其素鬱之火，所以心中覺熱。法當以發表之藥為主，而以清熱理鬱兼補正之藥佐之。

處方：麻黃（二錢）、玄參（六錢）、生懷山藥（六錢）、野臺參（二錢）、生雞內金（二錢）、天花粉（五錢）、甘草（錢半）。先煎麻黃數沸，吹去浮沫，再入諸藥同煎一大盅，溫服取汗，若不出汗時，宜再服西藥阿斯匹林一瓦以助其汗。

效果：服藥兩點鐘，周身微發熱，汗欲出不出，遂將阿斯匹林服下，須臾汗出遍體，翌日複診，其脈已出，五至無力，已不惡寒，心中仍覺發熱，遂去麻黃，將玄參、山藥皆改用一兩，服至三劑後，心中已不發熱，遂將玄參、天花粉各減半，再服數劑以善其後。

【少陰傷寒】

李儒齋，天津山東省銀行理事，年三十二歲，於夏季得傷寒證。

病因：午間恣食瓜果，因夜間失眠，遂食餘酣睡，值東風驟至天氣忽變寒涼，因而凍醒，其未醒之時，又復夢中遺精，醒後遂覺周身寒涼抖戰，腹中又復隱隱作疼，懼甚，遂急延為診視。

證候：迨愚至為診視時，其寒戰腹疼益甚，其脈六部皆微細欲無，知其已成直中少陰之傷寒也。

診斷：按直中少陰傷寒為麻黃附子細辛湯證，而因在夢遺之後，腹中作疼，則寒涼之內侵者益深入也，是宜於麻黃附子細辛湯中再加溫暖補益之品。

處方：麻黃（二錢）、烏附子（三錢）、細辛（一錢）、熟地黃（一兩）、生懷山藥（五錢）、淨萸肉（五錢）、乾薑（三錢）、公丁香（十粒）。煎湯一大盅，溫服，溫復取汗，勿令過度。

效果：將藥服後，過一點鐘，周身微汗，寒戰與腹疼皆愈。

或問「麻黃附子細辛湯證，傷寒始得發熱脈沉也，今斯證寒戰脈沉細，夫寒戰與發熱迥異矣，何以亦用麻黃附子細辛湯乎？」答曰「麻黃附子細辛湯證，是由太陽傳少陰也，為其病傳少陰是以脈沉，為其自太陽傳少陰是以太陽有響應之力而發熱。此證晝眠凍醒，是自太陽傳少陰，又因恣食寒涼繼而晝寢夢遺，其寒

涼又直中少陰，內外寒涼夾攻，是以外寒戰而內腹疼，太陽雖為表陽，亦無響應之力也。方中用麻黃以逐表寒，用附子以解裡寒，用細辛以通融表裡，使表裡之寒盡化，又因其少陰新虛，加熟地黃、萸肉、山藥以補之，養正即以除邪也，又因其腹疼，知寒侵太深，又加乾薑、丁香助附子、細辛以除之，寒邪自無遁藏也。方中用意周匝，是以服之即效。至於麻黃發汗止二錢者，因當夏令也，若當冬令則此證必須用四錢方能出汗，此用藥因時令而有異也。至若在南方雖當冬令用麻黃二錢亦能發汗，且南方又有麻黃不過錢之說，此又用藥因地點而有異也」。

【傷寒兼有伏熱證】

馬朴臣，遼寧大西關人，年五十一歲，業商，得傷寒兼有伏熱證。

病因：因買賣賠錢，家計頓窘，懊悔不已，致生內熱，孟冬時因受風，咳嗽有痰微喘，小便不利，周身漫腫。愚為治癒，旬日之外，又重受外感，因得斯證。

證候：表裡大熱，煩躁不安，腦中脹疼，大便數日一行甚乾燥，舌苔白厚，中心微黃，脈極洪實，左右皆然，此乃陽明腑實之證。凡陽明腑實之脈，多偏見於右手，此脈左右皆洪實者，因其時常懊悔，心肝積有內熱也，其腦中脹疼者，因心與肝膽之熱挾陽明之熱上攻也。當用大劑寒涼微帶表散，清其陽明胃腑之熱，兼以清其心肝之熱。

處方：生石膏（四兩搗細）、知母（一兩）、甘草（四錢）、粳米（六錢）、青連翹（三錢）。共作湯煎至米熟，取湯三盅，分三次溫服下，病癒勿盡劑。

方解：此方即白虎湯加連翹也，白虎湯為傷寒病陽明腑熱之正藥，加連翹者取其色青入肝，氣輕入心，又能引白虎湯之力達於心肝以清熱也。

效果：將藥三次服完，其熱稍退，翌日病復還原，連服五劑，將生石膏加至八兩，病仍如故，大便亦不滑瀉，病家懼不可挽救，因曉之曰「石膏原為平和之藥，惟服其細末則較有力，聽吾用藥勿阻，此次即愈矣」。為疏方，方中生石膏仍用八兩，將藥煎服之後，又用生石膏細末二兩，俾蘸梨片徐徐嚼服之，服至兩半，其熱全消，遂停服，從此病癒，不再反覆。

附記：此案曾登於《全國名醫驗案類編》，何廉臣評此案云「日本和田東廓氏謂『石膏非大劑則無效，故白虎湯、竹葉石膏湯及其他石膏諸方，其量皆過於平劑。世醫不知此意為小劑用之，譬如一杯水救一車薪之火，宜乎無效也』，吾國善用石膏者，除長沙漢方之外，明有繆氏仲淳，清有顧氏松園、余氏師愚、王氏孟英，皆以善治溫熱名，凡治陽明實熱之證，無不重用石膏以奏功。今用石膏由四兩加至八兩，似已駭人聽聞，然連服五、六劑熱仍如故，大便亦不滑瀉，迨外加石膏細末梨片蘸服又至兩半，熱始全消而病癒，可見石膏為涼藥中純良之品，世之畏石膏如虎者，可以放膽而不必懷疑也」。

溫病門

【溫病兼大氣下陷】

天津公安局科長康國屏之幼女曉卿，年九歲，於孟秋得溫病兼大氣下陷。

病因：因得罪其母懼譴謫，藏樓下屋中，屋窗四敞，臥床上睡著，被風吹襲遂成溫病。

證候：初得病時，服藥失宜，熱邪內陷，神昏不語，後經中西醫多位診治二十餘日，病益加劇，醫者見病危已至極點，皆辭不治。繼延愚為診視，其兩目上竄，幾不見黑睛，精神昏憤，毫無知覺，身體顫動不安，時作噯聲，其肌膚甚熱，啟其齒見其舌縮而乾，苔薄微黃，偶灌以水或米湯猶知下嚥，其氣息不勻，間有喘時，其脈數逾六至，左部細而浮，不任重按，右部亦弦細，重診似有力，大便旬日未行。

診斷：此外感之熱久不退，灼耗真陰，以致肝臟虛損，木燥生風而欲上脫也。當用藥清其實熱，滋其真陰，而更輔以酸收斂肝之品，庶可救此極危之證。

處方：生石膏（二兩軋細）、野臺參（三錢）、生懷地黃（一兩）、淨莢肉（一兩）、生懷山藥（六錢）、甘草（二錢）。共煎湯兩大盅，分三次溫飲下，每次調入生雞子黃一枚。

方解：此方即白虎加人參湯，以生地黃代知母，生山藥代粳米，而又加萸肉也。此方若不加萸肉為愚常用之方，以治寒溫證當用白虎加人參湯而體弱陰虧者，今加萸肉藉以收斂肝氣之將脫也。至此方不用白虎湯加減，而必用白虎加人參為之加減者，因病至此際，非加人參於白虎湯中，不能退其深陷之熱，復其昏憤之神明也。此理參觀四期藥物講義人參解後所附醫案自明。

複診：將藥三次服完，目睛即不上竄，身體安穩，不復顫動，噤聲已止，氣息已勻，精神較前明瞭而仍不能言，大便猶未通下，肌膚猶熱，脈數已減，不若從前之浮弦，而右部重診仍似有力，遂即原方略為加減，俾再服之。

處方：生石膏（兩半軋細）、野臺參（三錢）、生懷地黃（一兩）、淨萸肉（六錢）、天冬（六錢）、甘草（二錢）。共煎湯兩盅，分兩次溫飲下，每次調入生雞子黃一枚。

三診：日服藥一劑，連服兩日，熱已全退，精神之明了似將復原而仍不能言，大便仍未通下，間有努力欲便之象，遂用灌腸法以通其便。再診其脈六部皆微弱無力，知其所以不能言者，胸中大氣虛陷，不能上達於舌本也。宜於大劑滋補藥中，再加升補氣分之品。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（一兩）、沙參（一兩）、天冬（六錢）、寸麥冬（六錢）、生箭耆（三錢）、野臺參（三錢）、升麻（一錢）、桔梗（一錢）。共煎湯一盅半，分兩次溫服下。



效果：將藥煎服兩劑，遂能言語，因即原方去升麻減沙參之半，再加萸肉、生麥芽各三錢，再服數劑以善後。

說明：醫者救危險將脫之證喜用人參，而喻嘉言謂氣若上脫，但知重用人參轉令人氣高不返，必重用赭石輔之始能奏效，此誠千古不磨之論也。此方中之用人參原非用其救脫，因此證真陰大虧，惟石膏與人參並用，獨能於邪火熾盛之時立復真陰，此白虎加人參湯之實用也。至於萸肉，其補益氣分之力遠不如參，而其挽救氣分之上脫則遠勝於參。誠以肝主疏泄，人之元氣甚虛者，恆因肝之疏泄過甚而上脫，重用萸肉以斂肝使之不復疏泄，則元氣之欲上脫者即可不脫，此屢次用之奏效而確知其然者也。

【溫病兼氣虛氣鬱】

天津南開義善里，遲氏婦，年二十二歲，於季秋得溫病。

病因：其素日血分不調，恆作灼熱，心中亦恆發熱，因熱貪涼，薄受外感，即成溫病。

證候：初受外感時，醫者以溫藥發其汗，汗出之後，表裡陡然大熱，嘔吐難進飲食，飲水亦恆吐出，氣息不調，恆作呻吟，小便不利，大便泄瀉日三四次，其舌苔薄而黃，脈象似有力而不實，左部尤不任重按，一分鐘百零二至，搖搖有動象。

診斷：其胃中為熱藥發表所傷，是以嘔吐，其素日陰虧，肝腎有熱，又兼外感之熱內迫，致小便利，水歸大腸，是以泄瀉，其舌苔薄而黃者，外感原不甚劇（舌苔薄，亦主胃氣虛），而治以滋陰、清熱、上止嘔吐、下調二便之劑。

處方：生懷山藥（一兩）、滑石（八錢）、生杭芍（八錢）、生懷地黃（六錢）、清半夏（五錢溫水洗三次）、碎竹茹（三錢）、生麥芽（三錢）、淨青黛（二錢）、連翹（二錢）、甘草（三錢）、鮮茅根（四錢）。藥共十一味，先將前十味水煎十餘沸，再入茅根同煎七八沸，其湯即成，取清湯兩盅，分三次溫飲下。服醫藥後防其嘔吐，可口含生薑一片，或於煎藥時加生薑三片亦可。至藥局中若無鮮茅根，可用乾茅根兩半煎湯，以之代水煎藥。

方解：方中之義，山藥與滑石並用，一滋陰以退熱而能固大便，一清火以退熱而善利小便。芍藥與甘草並用為甘草芍藥湯，仲師用之以復真陰，而芍藥亦善利小便，甘草亦善補大便，彙集四味成方，即拙擬之滋陰清燥湯（方載三期五卷）也。以治上有燥熱下焦滑瀉之證，莫不隨手奏效。半夏善止嘔吐，然必須洗淨礬味（藥局清半夏亦有礬），屢洗之則藥力減，是以用至五錢。竹茹亦善止嘔吐，其碎者為竹之皮，津沽藥局名為竹茹粉，其止嘔之力較整者為優。至於青黛、生薑亦止嘔吐之副品也。用生麥芽、鮮茅根者，以二藥皆善利小便，而又善達肝木之鬱以調氣分也。用生地黃者，以其為滋補真陰之主藥，即可為治脈數動搖者之要藥也。

複診：將藥煎服一劑，嘔吐與泄瀉皆愈，小便已利，脈象不復搖搖，仍似有力，至數未減，其表裡之熱稍退，氣息仍似不順，舌苔仍黃，欲投以重劑以清其熱，猶恐大便不實，擬再治以清解之劑。

處方：生懷地黃（一兩）、玄參（八錢）、生杭芍（六錢）、天花粉（六錢）、生麥芽（三錢）、鮮茅根（三錢）、滑石（三錢）、甘草（三錢）。共煎湯一大盅，分兩次溫服下。

三診：將藥煎服後，病又見輕，家人以為病癒無須服藥矣，至翌日晚十一點鐘後，見其面紅，精神昏憤，時作呻吟，始知其病猶未癒。及愚診視時，夜已過半，其脈左右皆弦硬而長，數近七至，兩目直視，其呻吟之聲，似阻隔不順，舌

苔變黑，問其心中何如？自言熱甚，且覺氣息不接續，此其氣分虛而且鬱，又兼血虛陰虧，而陽明之熱又熾盛也。其脈近七至者，固為陰虛有熱之象，而正氣虛損不能抗拒外邪者，其脈亦恆現數象，至其脈不為洪滑而為弦硬者，亦氣血兩虧邪熱熾盛之現象也。擬用白虎加人參湯，再加滋陰理氣之品，蓋此時大便已實，故敢放膽治之。

處方：生石膏（五兩軋細）、野臺參（六錢）、知母（六錢）、天花粉（六錢）、玄參（六錢）、生杭芍（五錢）、生萊菔子（四錢搗碎）、生麥芽（三錢）、鮮茅根（三錢）、粳米（三錢）甘草（三錢）。共煎湯一大碗，分四次溫飲下，病癒不必盡劑。

效果：將藥分四次服完，熱退強半，精神已清，氣息已順，脈象較前緩和，而大便猶未通下，因即原方將石膏改用四兩，萊菔子改用二錢，如前煎服，服至三次後，大便通下，其熱全退，遂停後服。

說明：愚用白虎加人參湯，或以玄參代知母（產後寒溫證用之）、或以芍藥代知母（寒溫兼下痢者用之）、或以生地黃代知母（寒溫兼陰虛者用之）、或以生山藥代粳米（寒溫熱實下焦氣化不固者用之、產後寒溫證用之），又恆於原方之外，加生地黃、玄參、沙參諸藥以生津液，加鮮茅根、蘆根、生麥芽諸藥以宣通氣化，初未有加萊菔子者，惟此證之氣分虛而且鬱，白虎湯中加人參可補其氣分之虛，再加萊菔子更可理其氣分之鬱也。至於萊菔子必須生用者，取其有升發

之力也。又須知此證不治以白虎湯而必治以白虎加人參湯者，不但為其氣分虛也，凡人外感之熱熾盛，真陰又復虧損，此乃極危險之證，此時若但用生地黃、玄參諸滋陰之品不能奏效，即將此等藥加於白虎湯中亦不能奏效，惟生石膏與人參並用，獨能於邪熱熾盛之時立復真陰，此所以傷寒汗吐下後與渴者治以白虎湯時，仲聖不加他藥而獨加人參也。觀拙著三期六卷所載治寒溫諸案，乃四期一卷人參解後附載之案，五期五卷論白虎湯及白虎加人參湯之用法，則於此理益曉然矣。

【溫病兼吐瀉腿抽】

族侄秀川，年五十三歲，在天津業商，於仲春下旬得溫病兼吐瀉，腿筋抽縮作疼。

病因：素為腿筋抽疼病，犯時即臥床不能起，一日在鋪中，舊病陡發，急乘車回寓，因腿疼出汗在路受風，遂成溫病，繼又吐瀉交作。

證候：表裡俱壯熱，嘔吐連連不止，飲水少許亦吐出，一日夜瀉十餘次。得病已三日，小便滴瀝全無，腿疼劇時恆作號呼，其脈左部浮弦似有力，按之不實。右部則弦長有力，重按甚硬，一息逾五至。

診斷：此證因陰分素虧，血不榮筋，是以腿筋抽疼。今又加以外感之壯熱，傳入陽明以灼耗其陰分，是以其脈象不為洪滑有力而為弦硬有力，此乃火盛陰虧之現象也。其作嘔吐者，因其右脈弦硬且長，當有衝氣上衝，因致胃氣不下行而上逆也。其小便利大便滑瀉者，因陰虛腎虧不能瀉水，水歸大腸是以下焦之氣化不能固攝也。當用拙擬滋陰宣解湯（在三期五卷）以清熱、滋陰、調理二便，再加以止嘔吐及舒筋定疼之品輔之。

處方：生懷山藥（一兩）、滑石（一兩）、生杭芍（一兩）、清半夏（四錢、溫水淘三次）、碎竹茹（三錢）、淨青黛（二錢）、連翹（錢半）、蟬蛻（錢半）、甘草（三錢）、全蜈蚣（大者一條為末）。藥共十味，將前九味煎湯一大盅，送

服蜈蚣細末，防其嘔吐，俾分三次溫服，蜈蚣末亦分三次送服，服後口含生薑片以防噁心。

方解：方中用蟬蛻者，不但因其能托邪外出，因蟬之為物，飲而不食，有小便無大便，是以其蛻亦有利小便固大便之力也。用蜈蚣者，因其原善理腦髓神經，腿筋之抽疼，固由於肝血虛損不能榮筋，而與神經之分支在腿者，實有關係，有蜈蚣以理之，則神經不至於妄行也。

複診：將藥服後，嘔吐未止，幸三次所服之藥皆未吐出，小便通下兩次，大便之瀉全止，腿疼已愈強半，表裡仍壯熱，脈象仍弦長有力。為其滑瀉已癒，擬放膽用重劑以清陽明之熱，陽明胃之熱清，則嘔吐當自止矣。

處方：生石膏（三兩搗細）、生懷山藥（兩半）、生懷地黃（一兩）、生杭芍（五錢）、滑石（五錢）、碎竹茹（三錢）、甘草（三錢）。共煎湯一大碗，分四次溫飲下。

方解：按用白虎湯之定例，凡在汗吐下後當加人參，此方中以生地黃代知母、生山藥代粳米，與石膏、甘草同用，斯亦白虎湯也。而不加人參者，以其吐猶未止，加之恐助胃氣上升，於斯變通其方，重用生山藥至兩半，其沖和稠粘之液，既可代粳米和胃，其培脾滋腎之功，又可代人參補益氣血也。至於用白虎湯而復用滑石、芍藥者，因二藥皆善通利小便，防其水飲，仍歸大腸也。且芍藥與甘草同用名甘草芍藥湯，仲聖用以復真陰，前方之小便得通，實芍藥之功居多（陰虛

小便不利者，必重用芍藥始能奏效。矧弦為肝脈，此證之脈象弦硬，肝經必有熾盛之熱，而芍藥能生肝血、退肝熱，為柔肝之要藥，即為治脈象弦硬之要藥也。

三診：將藥分四次服完，表裡之熱退強半，腿疼痊愈，脈象亦較前緩和，惟嘔吐未能痊愈，猶噁心懶進飲食，幸其大便猶固。俾先用生赭石細末兩半，煎湯一盅半，分三次溫飲下，飲至第二次後，覺胃脘開通，噁心全無，遂將赭石停飲，進稀米粥一大甌，遂又為疏方以清餘熱。

處方：生石膏（一兩搗細）、生懷山藥（一兩）、生懷地黃（一兩）、生杭芍（六錢）、甘草（二錢）。共煎湯兩盅，分兩次溫服下。

效果：將藥兩次服完，表裡之熱全消，大便通下一次，病遂脫然痊愈。惟其脈一息猶五至，知其真陰未盡復也。俾用生懷山藥軋細過羅，每用七八錢或兩許，煮粥調以蔗糖，當點心服之。若服久或覺發悶，可以送服西藥百布聖五分，若無西藥處，可用生雞內金細末三分代之。



【溫病少陰證】

表弟劉爽園，二十五歲，業農，於季春得溫病。

病因：自正二月間，心中恆覺發熱，懶於飲食，喜坐房陰乘涼，薄受外感，遂成溫病。

證候：初得病時，延近處醫者診治，閱七八日病勢益劇，精神昏憤，閉目蜷臥，似睡非睡，懶於言語，咽喉微疼，口唇乾裂，舌乾而縮，薄有黃苔欲黑，頻頻飲水，不少濡潤，飲食懶進，一日之間，惟強飲米湯甌許，自言心中熱而且乾，周身酸軟無力，撫其肌膚不甚發熱，體溫三十七度八分，其脈六部皆微弱而沉，左部又兼細，至數如常，大便四日未行，小便短少赤澀。

診斷：此伏氣觸發於外，感而成溫，因腎臟虛損而竄入少陰也。《內經》謂「冬傷於寒，春必病溫」，此言冬時所受之寒甚輕，不能實時成為傷寒，恆伏於三焦脂膜之中，阻塞氣化之升降，暗生內熱，至春陽萌動之時，其所生之熱恆激發於春陽而成溫。然此等溫病未必入少陰也。《內經》又謂「冬不藏精，春必病溫」，此言冬不藏精之人，因陰虛多生內熱，至春令陽回其內熱必益加增，略為外感激發，即可成溫病，而此等溫病亦未必入少陰也。惟其人冬傷於寒又兼冬不藏精，其所傷之寒伏於三焦，隨春陽而化熱，恆因其素不藏精乘虛而竄入少陰，此等證若未至春令即化熱竄入少陰，則為少陰傷寒，即傷寒少陰證二三日以上，宜用黃連阿膠湯者也。若已至春令，始化熱竄入少陰，當可名為少陰溫病，即溫

病中內有實熱，脈轉微細者也。誠以脈生於心，必腎陰上潮與心陽相濟，而後其跳動始有力。蓋此證因溫邪竄入少陰，俾心腎不能相濟，是以內雖蘊有實熱，而脈轉微細，其咽喉疼者，因少陰之脈上通咽喉，其熱邪循經上逆也。其唇裂舌乾而縮者，腎中真陰為邪熱遏抑，不能上潮，而心中之亢陽益妄動上升，以鑠耗其津液也。至於心中發熱且發乾，以及大便燥結，小便赤澀，亦無非陰虧陽亢所致。為其腎陰心陽不能相濟為功，是以精神昏憤，閉目蜷臥，煩人言語，此乃熱邪深陷，氣化隔闕之候，在溫病中最為險證。正不可因其脈象無火，身不甚熱，而視為易治之證也。愚向擬有坎離互根湯（在五期六卷）可為治此病的方，今將其方略為加減，俾與病候相宜。

處方：生石膏（三兩軋細）、野臺參（四錢）、生懷地黃（一兩）、生懷山藥（八錢）、玄參（五錢）、遼沙參（五錢）、甘草（三錢）、鮮茅根（五錢）。藥共八味，先將前七味煎十餘沸，再入鮮茅根煎七八沸，其湯即成。取清湯三盅，分三次溫服下，每服一次調入生雞子黃一枚，此方若無鮮茅根，可用乾茅根兩半，水煮數沸，取其湯代水煎藥。

方解：溫病之實熱，非生石膏莫解，輔以人參並能解邪實正虛之熱，再輔以地黃、山藥諸滋陰之品，更能解腎虧陰虛之熱。且人參與滋陰之品同用，又能助腎陰上潮，以解上焦之燥熱。用雞子黃者，化學家謂雞子黃中含有副腎髓質之分

泌素，為滋補腎臟最要之品也。用茅根者，其涼而能散，用之作引，能使深入下陷之邪熱，上出外散，以消解無餘也。

複診：將藥三次服完，周身之熱度增高，脈象較前有力，似近洪滑，諸病皆見輕減，精神已振。惟心中仍覺有餘熱，大便猶未通下，宜再以大劑涼潤之藥清之，而少佐以補氣之品。

處方：生石膏（一兩軋細）、大潞參（三錢）、生懷地黃（一兩）、玄參（八錢）、遼沙參（八錢）、大甘枸杞（六錢）、甘草（二錢）、鮮茅根（四錢）。藥共八味，先將前七味煎十餘沸，再入茅根煎七八沸，其湯即成。取清湯兩大盅，分兩次溫服下，每服一次調入生雞子黃一枚。

效果：將藥連服兩劑，大便通下，病遂痊愈。

說明：此證之脈象沉細，是腎氣不能上潮於心，而心腎不交也。迨服藥之後，脈近洪滑，是腎氣已能上潮於心而心腎相交也。為其心腎相交，是以諸病皆見輕減，非若尋常溫病其脈洪大為增劇也。

【溫病結胸】

張姓叟，年近五旬，住天津西關外下頭，以繕緝破鞋為業，於季夏得溫熱結胸證。

病因：心有忿怒，繼復飽食，夜眠又當窗受風，晨起遂覺頭疼發熱，心下痞悶，服藥數次病益進。

證候：初但心下痞悶，繼則胸膈之間亦甚痞塞，且甚煩熱，其脈左部沉弦，右部沉牢。

診斷：寒溫下早成結胸，若表有外感，裡有瘀積，不知表散藥與消積藥並用，而專事開破以消其積，則外感乘虛而入，亦可成結胸。審證察脈，其病屬結胸無疑，然其結之非劇，本陷胸湯之義而通變治之可也。

處方：病者旬餘輟工，家幾斷炊，愚憐其貧，為擬簡便之方，與以自制通徹丸（即牽牛軋取頭次末，水泛為小丸）五錢及自製離中丹兩半，俾先服通徹丸三錢，遲一點半鐘，若不覺藥力猛烈，再服下所餘二錢，候須臾再服離中丹三錢，服後多飲開水，俾出汗。若痞塞開後，仍有餘熱者，將所餘離中丹分數次徐徐服之，每服後皆宜多飲開水取微汗。

效果：如法將兩種藥服下，痞塞與煩熱皆愈。

【溫病結胸】

趙殿傑，年四十二歲，鹽山人，在天津西門外開利源恒織布工廠，得溫病結胸證。

病因：季春下旬，因飯後有汗出受風，翌日頭疼，身熱無汗，心中發悶，醫者外散其表熱，內攻其發悶，服藥後，表未汗解而熱與發悶轉加劇。醫者見服藥無效，再疏方時益將攻破之藥加重，下大便一次，遂至成結胸證。

證候：胸中滿悶異常，似覺有物填塞，壓其氣息不能上達，且發熱嗜飲水，小便不利，大便日溏瀉兩三次。其脈左部弦長，右部中分似洪而重按不實，一息五至強。

診斷：此證因下早而成結胸，又因小便不利而致溏瀉，即其證脈合參，此乃上實下虛，外感之熱兼挾有陰虛之熱也。治之者宜上開其結，下止其瀉，兼清其內傷外感之熱庶可奏效。

處方：生懷山藥（一兩五錢）、生萊菔子（一兩搗碎）、滑石（一兩）、生杭芍（六錢）、甘草（三錢）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：服藥後，上焦之結已愈強半，氣息頗形順適，灼熱亦減，已不感渴，大便仍溏，服藥後下一次，脈象較前平和仍微數，遂再即原方略加減之。

處方：生懷山藥（一兩五錢）、生萊菔子（八錢搗碎）、滑石（八錢）、生杭芍（五錢）、甘草（三錢）。先用白茅根（鮮者更好）、青竹茹各二兩，同煎數沸，取湯以之代水煎藥。

效果：將藥煎服後，諸病皆愈，惟大便仍不實，俾每日用生懷山藥細末兩許，水調煮作茶湯，以之送服西藥百布聖五分，充作點心以善其後。

【溫病】

俞壽卿，年過四旬，住天津大胡同經理房租，於孟夏得溫病。

病因：與人動氣爭鬧，頭面出汗為風所襲，遂成溫病。

證候：表裡俱發熱，胸膈滿悶，有似結胸，呼吸甚覺不利，夜不能寐，其脈左右皆浮弦有力，舌苔白厚，大便三日未行。

診斷：此病繫在太陽而連及陽明少陽也。為其病在太陽，所以脈浮；為其連及陽明，所以按之有力；為其更連及少陽，是以脈浮有力而又兼弦也。其胸膈滿悶呼吸不利者，因其怒氣溢於胸中，挾風邪痰飲凝結於太陽部位也。宜外解太陽之表，內清陽明之熱，兼和解其少陽，更開蕩其胸膈，方為完全之策。

處方：生石膏（二兩搗細）、萸仁（二兩炒搗）、生萊菔子（八錢搗碎）、天花粉（六錢）、蘇子（三錢炒搗）、連翹（三錢）、薄荷葉（二錢）、茵陳（二錢）、龍膽草（二錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服後，復衾取微汗。

效果：服藥後閱一小時，遍身得汗，胸次豁然，溫熱全消，夜能安睡，脈已和平如常，惟大便猶未通下，俾但用西藥旃那葉一錢，開水浸服兩次，大便遂通下。

【風溫】

趙印龍，邑北境許孝子莊人，年近三旬，業農，於孟秋得風溫病。

病因：孟秋下旬，農人忙甚，因勞力出汗過多，復在樹陰乘涼過度，遂得風溫病。

證候：胃熱氣逆，服藥多嘔吐，因此屢次延醫服藥，旬餘無效。及愚診視，見其周身壯熱，心中亦甚覺熱，五六日間飲食分毫不進，大便數日未行。問何不少進飲食？自言有時亦思飲食，然一切食物聞之皆臭惡異常，強食之即嘔吐，所以不能食也。診其脈弦長有力，右部微有洪象，一息五至。

診斷：即此證脈相參，知其陽明腑熱已實，又挾衝氣上衝，所以不能進食，服藥亦多嘔也。欲治此證當以清胃之藥為主，而以降衝之藥輔之。則衝氣不上衝，胃氣亦必隨之下降，而嘔吐能止即可以受藥進食矣。

處方：生石膏（三兩搗細）、生赭石（一兩軋細）、知母（八錢）、潞黨參（四錢）、粳米（三錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大碗，分三次溫服下。

方解：此方乃白虎加人參湯又加赭石，為其胃腑熱實故用白虎湯，為其嘔吐已久，故加人參，為其衝胃上逆，故又加赭石也。

效果：將藥三次服完，嘔吐即止，次日減去赭石，又服一劑，大便通下，熱退強半。至第三日減去石膏一兩，加玄參六錢，服一劑，脈靜身涼，而仍分毫不



能飲食，憎其臭味如前。愚曉其家人曰「此病已癒，無須用藥，所以仍不飲食者，其胃氣不開也。開胃之食物莫如萊菔，可用鮮萊菔切絲香油炒半熟，而以蔥醬作湯，勿過熟，少調以綠豆粉俾服之。至湯作熟時，病人仍不肯服，迫令嘗少許，始知香美，須臾服盡兩碗，從此飲食復常。病人謂其家人曰「吾從前服藥十餘劑，病未見愈，今因服萊菔湯而霍然痊愈，若早知萊菔湯能如此治病，則吾之病不早已愈乎」？其家人不覺失笑。

附記：曾記弱冠時，比鄰有病外感痰喘者，延邑中老醫皮榮伯，投以小青龍湯一劑喘即愈，然覺胸中似有霧氣瀰漫不能進食。皮君曰，此乃濕氣充盛，是以胃氣不開也，此當投以開胃之劑。為疏方，用《金匱》苓桂朮甘湯，煎服後未半刻，陡覺胸中陰霾頓開，毫無障礙，遂能進食，見者皆驚其用藥之神奇。夫皮君能如此用藥，誠無愧名醫之目，而益歎經方之神妙，誠有不可令人思議者矣。此因一用萊菔，一用古方，均開胃於頃刻之間，故附志之。

【風溫兼伏氣化熱】

陳百生督軍（前任陝西），年四十六歲，寓天津廣東路，得風溫兼伏氣化熱病。

病因：因有事乘京奉車北上時，當仲夏歸途受風，致成溫熱病。

證候：其得病之翌日，即延為診視，起居如常，惟覺咽喉之間有熱上衝，咳嗽吐痰音微啞，周身似拘束酸軟。脈象浮而微滑，右關重按甚實，知其證雖感風成溫，而其熱氣之上衝咽喉，實有伏氣化熱內動也。若投以拙擬寒解湯原可一汗而愈，然當此病之初起而遽投以石膏重劑，彼將疑而不肯服矣。遂遷就為之擬方。蓋醫以救人為目標，正不妨委曲以行其道也。

處方：薄荷葉（三錢）、青連翹（三錢）、蟬蛻（二錢）、知母（六錢）、玄參（六錢）、天花粉（六錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：翌日復延為診視，言服藥後周身得微汗，而表裡反大熱，咳嗽音啞益甚，何以服如此涼藥而熱更增加，將毋不易治乎？言之若甚恐懼者。診其脈洪大而實，左右皆然，知非重用石膏不可。因謂之曰「此病乃伏氣化熱，又兼有新感之熱，雖在初得亦必須用石膏清之方能治癒。若果能用生石膏四兩，今日必愈，吾能保險也。問石膏四兩一次全服乎？答曰「非也。可分作數次服，病癒則停服耳」，陳督聞愚言似相信，求為出方，蓋因其有恐懼之心，故可使相信耳。

處方：生石膏（四兩搗細）、粳米（六錢）。共煎湯至米熟，取湯四盅，分四次徐徐溫飲下。病癒不必盡劑，飲至熱退而止。大便若有滑瀉，尤宜將藥急停服。至方中石膏既開生者，斷不可誤用煨者。若恐藥房或有差誤，可向雜貨鋪中買大塊石膏自製細用之。蓋此時愚至津未久，津地醫者率用煨石膏，鮮有用生石膏者，前此開方曾用生石膏三兩，藥房以煨者誤充，經愚看出，是以此次如此諄諄告語也。

複診：翌日又延為診視，相迎而笑曰「我今熱果全消矣，惟喉間似微覺疼，先生可再為治之」。問藥四盅全服乎？答曰「全服矣。當服至三盅後，心猶覺稍熱，是以全服，且服後並無大便滑瀉之病，石膏真良藥也」。再診其脈已平和如常，原無須服藥，問其大便，三日猶未下行。為開滋陰潤便之方，謂服至大便通後，喉疼亦必自愈，即可停藥勿服矣。

【溫病兼痧疹】

舒嘯岑，天津二區華新公司辦公處經理，年四十五歲，於仲夏得溫病兼痧疹。病因：舒君原精醫術，當溫疹流行之時，屢次出門為人診病，受其傳染因得斯病。

證候：其前數日皆係自治，屢次服表疹清熱之藥，疹已遍身出齊而熱仍不退，因求愚為診治。其表裡俱覺發熱，且又煩躁異常，無片時寧靜，而其脈則微弱不起，舌苔薄而微黃，大便日行一次不乾不溏，小便赤澀短少。

診斷：此證當先有伏氣化熱，因受外感之傳染而激發，緣三焦脂膜竄入少陰遏抑腎氣，不能上與心火相濟，是以舌苔已黃，小便短赤，陽明腑熱已實，而其脈仍然無力也。其煩躁異常者，亦因水火之氣不相交也。此雖溫病，實與少陰傷寒之熱者無異，故其脈亦與少陰傷寒之脈同。當治以白虎加人參湯，將原方少為變通，而再加托表疹毒之品輔之。

處方：生石膏（二兩搗細）、大潞參（四錢）、天花粉（八錢）、生懷山藥（八錢）、鮮茅根（四錢）、甘草（二錢）。共煎湯兩盅分兩次溫服下。

方解：此方即白虎加人參湯以花粉代知母，生山藥代粳米，而又加鮮茅根也。花粉與知母，皆能清熱，而花粉於清熱之外，又善解毒，山藥與粳米皆能和胃，而山藥於和胃之外，又能滋腎。方中之義，用白虎湯以治外感實熱，如此變通則

兼能清其虛熱，解其疹毒，且又助以人參，更可治證實脈虛之熱，引以鮮茅根，並可治溫病下陷之熱也。

復診：將藥煎服一劑，熱退強半，煩躁亦大輕減，可安睡片時。至翌日過午，發熱煩躁又如舊，脈象仍然無力，因將生石膏改用三兩，潞參改用五錢，俾煎湯三盅，分三次溫飲下。每飲一次，調入生雞子黃一枚。服後其病亦見愈，旋又反覆，且其大便一日兩次，知此寒涼之藥不可再服，乃此時愚恍然會悟，得治此證之的方矣。

處方：鮮白茅根（六兩切碎），添涼水五盅，在爐上煎一沸，即將藥罐離開爐眼，約隔三寸許，遲十分鐘再煎一沸，又離開爐眼，再遲十分鐘，視其茅根皆沉水底其湯即成。若茅根不沉水底，可再煎一沸，約可取清湯三盅，乘熱頓飲之以得微汗方佳。

效果：此方如法服兩劑，其病脫然愈矣。

說明：按此證，其伏氣之化熱，固在三焦，而毒菌之傳染，實先受於上焦，於斯毒熱相並，隨上焦之如霧而瀰漫於全身之臟腑經絡，不分界限。茅根涼而能散，又能通達經絡臟腑，無微不至。惟性甚平和，非多用不能奏效。是以一劑重用至六兩，其涼散之力，能將臟腑經絡間之毒熱盡數排出（茅根能微汗利小便，皆其排出之道路），毒熱清肅，煩躁自除矣。愚臨證五十年，用白虎加人參湯時不知凡幾，約皆隨手奏效。今此證兩次用之無效，而竟以鮮白茅根收其功，此非

愚所素知，乃因一時會悟後，則屢次用之皆效，故特詳之以為治溫疹者開一法門也。若其脈象洪滑甚實者，仍須重用石膏清之，或石膏、茅根並用亦可。又按白茅根必須用鮮者，且必如此煎法方效。但根據之成功，多用可至十兩，少用亦須至四兩，不然此證前兩方中皆有茅根四錢未見效驗，其宜多用可知矣。又藥局中若無鮮者，可自向窪中剖之，隨處皆有。若剖多不能一時皆用，以濕土埋之永久不壞。

【溫病兼勞力過度】

族弟印春，年三十八歲，業商，於孟夏來津，於孟夏來津於旅次得溫病。病因：時天氣炎熱，途中自挽鹿車，辛苦過力，出汗受風，至津遂成溫病。證候：表裡俱覺甚熱，合目恆譫語，所言多勞力之事，舌苔白厚，大便三日未行，脈象左部弦硬，右部洪實而浮，數逾五至。

診斷：此證因長途炎熱勞碌，臟腑間先有積熱，又為外感所襲，則其熱陡發。其左脈弦硬者，勞力過度肝腎之陰分有傷也。右部洪實者，陽明之腑熱已實也。其洪實兼浮者，證猶連表也。擬治以白虎加人參湯以玄參代知母，生山藥代粳米，更輔以透表之藥以引熱外出。

處方：生石膏（三兩搗細）、大潞參（四錢）、玄參（一兩）、生懷山藥（六錢）、甘草（三錢）、西藥阿斯匹林（一瓦）。將前五味共煎湯兩大盅，先溫服一盅，遲半點鐘將阿斯匹林用開水送下，俟汗出後再將所餘一盅分兩次溫服下。效果：將藥服一盅後，即不作譫語，須臾將阿斯匹林服下，遍體得汗，繼又將所餘之湯藥徐徐服下，其病霍然痊愈。

說明：白虎湯中以石膏為主藥，重用至三兩，所以治右脈之洪實也。於白虎湯中加人參，更以玄參代知母，生山藥代粳米，退熱之中大具滋陰之力（石膏、人參並用，能於溫寒大熱之際，立復真陰），所以治左脈之弦硬也。用藥如用兵，

料敵詳審，步伍整齊，此所以戰則必勝也。至於脈象兼浮，知其表證未罷，猶可由汗而解，遂佐以阿斯匹林之善透表者以引之出汗，此所謂因其病機而利導之也。若無阿斯匹林之處，於方中加薄荷葉一錢，連翹二錢，亦能出汗。若疑二藥如此少用，似不能出汗者，觀三期五卷寒解湯後之詮語自明。

按：石膏之原質為硫氧氫鈣化合而成。其性涼而能散，是以白虎湯證及白虎加人參湯證，往往於服藥後周身得汗而解，即使服藥後未即得汗，而石膏所含硫氧氫之宣散力，實能排逐內蘊之熱，息息自毛孔透出，此雖非汗解亦等於出汗也。

又按：阿斯匹林之原質存於楊柳皮中。楊柳在春日發生最早，原稟少陽初生之氣，其性涼而長於表散，且有以皮達皮之妙用。西人又制以硫酸（即硫氧），與石膏之原質原有相同之處，是以既能發表，又善退熱，然其透表之力勝於石膏，而其退熱之力則遠不如石膏。是以溫病初得，其內熱未實者，用開水送服一瓦或一瓦強，得汗即愈。若其內熱既已熾盛，其證猶連表可發汗者，單用阿斯匹林發汗不效，若用生石膏兩許，其脈甚洪實者，或用生石膏至二兩，煎湯一大盞，送服阿斯匹林以發汗則效，即服後不出汗，其病亦可愈，此愚屢經試驗而確知其然者也。



【溫病兼下痢】

天津大胡同，范姓媪，年過五旬，得溫病兼下痢證。

病因：家務勞心，恆動肝火，時當夏初，肝陽正旺，其熱下迫，遂患痢證。因夜間屢次入廁，又受感冒，兼發生溫病。

證候：表裡皆覺發熱，時或作渴，心中煩躁，腹中疼甚劇，恆作呻吟。晝夜下痢十餘次，旬日之後係純白痢，其舌苔厚欲黃，屢次延醫服藥，但知治痢且用開降之品，致身體虛弱，臥不能起，其脈左右皆弦而有力，重按不實，搏近五至。

診斷：此病因肝火甚盛，兼有外感之熱已入陽明，所以脈象弦而有力。其按之不實者，因從前服開降之藥過多也。其腹疼甚劇者，因弦原主疼，茲則弦而且有力，致腹中氣化不和，故疼甚劇也。其煩躁者，因下久陰虛，腎氣不能上達與心相濟，遂不耐肝火溫熱之灼耗，故覺煩躁也。宜治以清溫涼肝之品，而以滋陰補正之藥輔之。

處方：生杭芍（一兩）、滑石（一兩）、生懷山藥（一兩）、天花粉（五錢）、山楂片（四錢）、連翹（三錢）、甘草（三錢）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：將藥煎服一劑，溫熱已愈強半，下痢腹痛皆愈，脈象亦見和緩，擬再用涼潤滋陰之劑，以清其餘熱。

處方：生懷山藥（一兩）、生杭芍（六錢）、天花粉（五錢）、生懷地黃（五錢）、玄參（五錢）、山楂片（三錢）、連翹（二錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服兩劑，病遂痊愈，惟口中津液短少，恆作渴，運動乏力，俾用生懷山藥細末煮作茶湯，兌以鮮梨自然汁，當點心服之，日兩次，浹辰之間當即可復原矣。蓋山藥原善滋陰，而其補益之力又能培養氣化之虛耗，惟其性微溫，恐與病後有餘熱者稍有不宣，借鮮梨自然汁之涼潤以相濟為用，則為益多矣。

【溫病兼腦膜炎】

天津東門里經司胡同，侯姓幼男，年八歲，得熱病兼腦膜炎。

病因：蒙學暑假乍放，幼童貪玩，群在烈日中嬉戲，出汗受風，遂得斯證。證候：閉目昏昏，呼之不應，周身灼熱無汗，其脈洪滑而長，兩寸尤盛。其母言病已三日，昨日猶省人事，惟言心中發熱，至夜間即昏無知覺，然以水灌之猶知下嚥，問其大便，三日未行。

診斷：此溫熱之病，陽明腑熱已實，其熱循經上升兼發生腦膜炎也。腦藏神明，主知覺，神經因熱受傷，是以知覺全無，宜投以大劑白虎湯以清胃腑之熱，而復佐以輕清之品，以引藥之涼力上行，則腦中之熱與胃腑之熱全清，神識自明瞭矣。

處方：生石膏（三兩搗細）、知母（八錢）、連翹（三錢）、茵陳（錢半）、甘草（三錢）、粳米（五錢）。煎至米熟其湯即成，取清汁三茶杯，徐徐分三次溫服，病癒無須盡劑。

效果：服至兩次已明瞭能言，自言心中猶發熱，將藥服完，其熱遂盡消，霍然痊愈。

說明：按腦膜炎之名，創自西人。所謂炎者，謂其膜紅、熱、腫、疼也。此多為傷寒溫病之兼證，故中醫對於此證皆責之陽明熱實，然均是陽明熱實，而其

神明有昏憤、不昏憤之殊，實因其腦膜有炎有不炎也，是以西人之說原自可信。然腦中所藏者元神，心中所藏者識神，故寒溫之熱，若竄入手少陰，亦可使神明昏憤（此證極少）。西人不知心中有識神，而熱人手少陰以昏人之神明，自非西人所能知也。

【溫熱泄瀉】

天津一區錢姓幼男，年四歲，於孟秋得溫熱兼泄瀉，病久不愈。

病因：季夏感受暑溫，服藥失宜，熱留陽明之腑，久則灼耗胃陰，嗜涼且多嗜飲水，延至孟秋，上熱未清，而下焦又添泄瀉。

證候：形狀瘦弱已極，周身灼熱，飲食少許則噁心欲嘔吐。小便不利，大便一晝夜十餘次，多係稀水，臥不能動，哭泣無聲，脈數十至且無力（四歲時，當以七至為正脈），指紋現淡紅色，已透氣關。

診斷：此因外感之熱久留耗陰，氣化傷損，是以上焦發熱懶食，下焦小便不利而大便泄瀉也，宜治以滋陰、清熱、利小便兼固大便之劑。

處方：生懷山藥（一兩五錢）、滑石（一兩）、生杭芍（六錢）、甘草（三錢）。煎湯一大盅，分數次徐徐溫服下。

方解：比方即拙著三期五卷中滋陰清燥湯也。原方生山藥是一兩，今用兩半者，因此幼童瘦弱已極，氣化太虛也。方中之義，山藥與滑石同用，一利小便，一固大便，一滋陰以退虛熱，一瀉火以除實熱。芍藥與甘草同用，甘苦化合，味近人參，能補益氣化之虛損，而芍藥又善滋肝腎以利小便，甘草又善調脾胃以固大便，是以彙集而為一方也。

效果：將藥連服兩劑，熱退瀉止，小便亦利，可進飲食，惟身體羸瘦不能遽復，俾用生懷山藥細末七八錢許，煮作粥，調以白糖，作點心服之，且每次送西藥百布聖一瓦，如此將養，月餘始胖壯。

附記：此錢姓幼男之舅，係西醫楊秀章，為愚在陸軍充軍醫正時之從事。見愚治癒此病，深歎中藥若用之得法，有挽回造化之權。於斯從愚兼習中醫，今已深窺醫理之奧，中西並用而為救世之良醫矣。



〈 第 四 卷 〉



【溫病兼虛熱】

高振之，山西人，年二十八歲，來天津謀事，寓居其友家一區陳宅，於仲秋得溫病。

病因：朋友招飲，飲酒過度，又多喝熱茶，周身出汗，出外受風。

證候：周身骨節作疼，身熱三十九度四分，心中熱而且渴，舌苔薄而微黃，大便乾燥，小便短赤，時或乾嗽，身體酸軟殊甚，動則眩暈，脈數逾五至，浮弦無力，自始病至此已四十日矣，屢次延醫服藥無效。

診斷：此證乃薄受外感，並非難治之證，因治療失宜，已逾月而外表未解，內熱自不能清，病則懶食，又兼熱久耗陰，遂由外感之實熱，釀成內傷之虛熱，二熱相並，則愈難治矣，斯當以大滋真陰之藥為主，而以解表瀉熱之藥佐之。

處方：生懷山藥（一兩）、生懷地黃（一兩）、玄參（一兩）、沙參（六錢）、生杭芍（六錢）、大甘枸杞（五錢）、天冬（五錢）、天花粉（五錢）、滑石（三錢）、甘草（三錢）。共煎湯一大碗，分三次溫飲下，其初飲一次時，先用白糖水送服西藥阿斯匹林半瓦，然後服湯藥。

複診：初服藥一次後，周身得汗，骨節已不覺疼，二次三次繼續服完，熱退強半，小便通暢，脈已不浮弦，跳動稍有力，遂即原方略為加減，俾再服之。

處方：生懷山藥（一兩）、生懷地黃（八錢）、玄參（六錢）、沙參（六錢）、大甘枸杞（六錢）、天門冬（六錢）、滑石（三錢）、甘草（二錢）、真阿膠（三錢搗碎）。藥共九味，先將前八味煎湯兩大盅，去渣入阿膠融化，分兩次溫服。其服初次時，仍先用白糖水送服阿斯匹林三分之一瓦。此方中加阿膠者，以其既善滋陰，又善潤大便之乾燥也。

效果：將藥先服一次，周身又得微汗，繼將二分服下，口已不渴，其日大便亦通下，便下之後，頓覺精神清爽，灼熱全無，病遂從此愈矣。

按：方中重用大隊涼潤之品，滋真陰即以退虛熱，而復以阿斯匹林解肌、滑石利小便者，所以開實熱之出路也。至於服阿斯匹林半瓦，即遍身得汗者，因體虛者其汗易出，而心有燥熱之人，得涼藥之濡潤，亦恆自出汗也。

【溫病體虛】

遼寧清丈局科員劉敷辰之幼子，年七歲，於暮春得溫病。

病因：因赴澡塘洗澡，汗出未竭，遽出冒風，遂成溫病。病初得時，醫者不知用辛涼之藥解肌，而竟用溫熱之藥為發其汗，迨汗出遍體，而灼熱轉劇。又延他醫遽以承氣下之，病尤加劇，因其無可下之證而誤下也。從此不敢輕於服藥，遲延數日見病勢浸增，遂延愚為診視，其精神昏憤，間作譫語，氣息微喘，肌膚灼熱，問其心中亦甚覺熱，唇乾裂有凝血，其舌苔薄而黃，中心乾黑，頻頻飲水不能濡潤。其脈弦而有力，搏近六至，按之不實，而左部尤不任重按，其大便自服藥下後未行。

診斷：此因誤汗誤下，傷其氣化，兼溫熱既久，陰分虧耗，乃邪實正虛之候也，宜治以大劑白虎加人參湯。以白虎湯清其熱，以人參補其虛，再加滋陰之品數味，以滋補陰分之虧耗。

處方：生石膏（四兩搗細）、知母（一兩）、野黨參（五錢）、大生地黃（一兩）、生懷山藥（七錢）、玄參（四錢）、甘草（三錢）。共煎湯三大盅，分三次溫飲下。病癒者勿須盡劑，熱退即停服。白虎加人參湯中無粳米者，因方中有生山藥可代粳米和胃也。

效果：三次將藥服完，溫熱大減，神已清爽。大便猶未通下，心中猶覺發熱，診其脈仍似有力，遂將原方去山藥，仍煎三盅，俾徐徐溫飲下，服至兩盅大便通下，遂停藥勿服，病痊愈。

【溫熱腹疼兼下痢】

天津一區教堂後，張姓媪，年過五旬，先得溫病，腹疼即又下痢。

病因：因其夫與子相繼病，故屢次傷心，蘊有內熱，又當端陽節後，天氣乾熱非常，遂得斯證。

證候：腹中攪疼，號呼輾轉不能安臥，周身溫熱，心中亦甚覺熱，為其臥不安枕，手足擾動，脈難細診，其大致總近熱象，其舌色紫而乾，舌根微有黃苔，大便兩日未行。

診斷：此乃因日日傷心，身體虛損，始則因痛悼而臟腑生熱，繼則因熱久耗陰而更生虛熱，繼又因時令之燥熱內侵與內蘊之熱相並，激動肝火下迫腹中，是以作疼，火熱熾盛，是以表裡俱覺發熱，此宜清其溫熱，平其肝火，理其腹疼，更宜防其腹疼成痢也。

處方：先用生杭芍一兩、甘草三錢，煎湯一大盅，分兩次溫服。每次送服衛生防疫寶丹（方載三期霍亂門）四十粒，約點半鍾服完兩次，腹已不疼。又俾用連翹一兩、甘草三錢，煎湯一大盅，分作三次溫服，每次送服拙擬離中丹（方即益元散以生石膏代滑石）三錢，囑約兩點鐘溫服一次。

複診：翌日晚三點鐘，復為診視，閉目昏昏，呼之不應。其家人言，前日將藥服完，裡外之熱皆覺輕減，午前精神頗清爽，午後又漸發潮熱，病勢一時重於一時。前半點鐘呼之猶知答應，茲則大聲呼之，亦不應矣。又自黎明時下膿血，

至午後已十餘次，今則將近兩點鐘未見下矣。診其脈左右皆似大而有力，重按不實，數近六至，知其身體本虛，又因屢次下痢，更兼外感實熱之灼耗，是以精神昏憤，分毫不能支持也。擬放膽投以大劑白虎加人參湯，復即原方略為加減，俾與病機適宜。

處方：生石膏（三兩搗細）、野臺參（五錢）、生杭芍（一兩）、生懷地黃（一兩）、甘草（三錢）、生懷山藥（八錢）。共煎湯三盅，分三次徐徐溫服下。此方係以生地黃代原方中知母，生山藥代原方中粳米，而又加芍藥。以芍藥與方中甘草並用，即《傷寒論》中甘草芍藥湯，為仲聖復真陰之妙方，而用於此方之中，又善治後重腹疼，為治下痢之要藥也。

複診：將藥三次服完後，時過夜半，其人豁然省悟，其家人言自診脈疏方後，又下膿血數次，至將藥服完，即不復下膿血矣。再診其脈，大見和平，問其心中，仍微覺熱，且覺心中怔忡不安。擬再治以涼潤育陰之劑，以清餘熱，而更加保合氣化之品，以治其心中怔忡。

處方：玄參（一兩）、生杭芍（六錢）、淨莢肉（六錢）、生龍骨（六錢搗碎）、生牡蠣（六錢搗碎）、沙參（四錢）、酸棗仁（四錢炒搗）、甘草（二錢）。共煎湯兩盅，分兩次溫服，每服一次，調入生雞子黃一枚。

效果：將藥連服三劑，餘熱全消，心中亦不復怔忡矣。遂停服湯藥，俾用生懷山藥細末一兩弱，煮作茶湯，少兌以鮮梨自然汁，當點心服之，以善其後。

說明：溫而兼痢之證，愚治之多矣，未有若此證之劇者。蓋此證腹疼至輾轉號呼不能診脈，不但因肝火下迫欲作痢也，實兼有外感毒癘之氣以相助為虐，故用芍藥以瀉肝之熱，甘草之緩肝之急，更用衛生防疫寶丹以驅逐外侵之邪氣。迨腹疼已癒，又恐其溫熱增劇，故又俾用連翹、甘草煎湯，送服離中丹以清其溫熱，是以前其證翌日頭午頗見輕，若即其見輕時而早為之診脈服藥，原可免後此之昏沉，乃因翌日相延稍晚，竟使病勢危至極點，後幸用藥得宜，猶能挽回，然亦險矣。諺有「走馬看傷寒」，言其病勢更改之速也，至治溫病亦何獨不然哉。又此證過午所以如此加劇者，亦以其素本陰虛，又自黎明下痢膿血多次，則虛而益虛，再加以陰虧之虛熱，與外感之實熱相並，是以前其精神即不能支持。所賴方中藥味無多，而舉凡虛熱實熱及下痢所生之熱，兼顧無遺，且又煎一大劑分三次溫飲下，使藥力前後相繼，此古人一煎三服之法。愚遵此法以挽回險證救人多矣，非然者則劑輕原不能挽回重病，若劑重作一次服病人又將不堪，惟將藥多煎少服，病癒不必盡劑，此以小心行其放膽，洵為挽回險病之要著也。

【溫病兼下痢】

津海道尹袁霖普君之夫人，年三十六歲，得溫病兼下痢證。

病因：仲秋乘火車赴保定歸母家省視，往來辛苦，路間又兼受風，遂得溫病兼患下痢。

證候：周身壯熱，心中熱而且渴，下痢赤多白少，後重腹疼，一晝夜十餘次，舌苔白厚，中心微黃，其脈左部弦硬，右部洪實，一息五至。

診斷：此風溫之熱已入陽明之腑，是以右脈洪實，其熾盛之肝火下迫腸中作痢，是以左脈弦硬。夫陽明脈實而渴者，宜用白虎加入參湯，因其肝熱甚盛，證兼下痢，又宜以生山藥代粳米以固下焦氣化，更輔以涼肝調氣之品，則溫與痢庶可並愈。

處方：生石膏（三兩搗細）、野黨參（四錢）、生懷山藥（一兩）、生杭芍（一兩）、知母（六錢）、白頭翁（五錢）、生麥芽（四錢）、甘草（四錢）。將藥煎湯三盅，分三次溫飲下。

複診：將藥分三次服完，溫熱已退強半，痢疾已愈十之七八，腹已不疼，脈象亦較前和平，遂即原方略為加減俾再服之。



處方：生石膏（二兩搗細）、野臺參（三錢）、生懷山藥（八錢）、生杭芍（六錢）、知母（五錢）、白頭翁（五錢）、秦皮（三錢）、甘草（三錢）。共煎湯兩盅，分兩次溫服下。

效果：將藥煎服兩劑，諸病皆愈，惟脈象似仍有餘熱，胃中似不開通，懶於飲食，俾用鮮梨、鮮藕、萊菔三者等分，切片煮汁，送服益元散三錢許，日服兩次，至三次則喜進飲食，脈亦和平如常矣。

說明：凡溫而兼痢之證，最為難治，蓋溫隨下痢深陷而永無出路，即痢為溫熱所灼而益加疼墜，惟石膏與人參並用，能升舉下陷之溫邪，使之徐徐上升外散。而方中生山藥一味，在白虎湯中能代粳米以和胃，在治痢藥中又能固攝下焦氣化，協同芍藥、白頭翁諸藥以潤肝滋腎，從容以奏膚功也。至於麥芽炒用之為消食之品，生用之，不但消食實能舒發肝氣，宣散肝火，而痢病之後重可除也。至後方加秦皮者，取其性本苦寒，力善收澀，借之以清熱補虛，原為痢病將愈最宜之品。是以《傷寒論》白頭翁湯中亦借之以清厥陰熱痢也。

【溫病兼下痢】

天津河北玄緯路，姚姓媪，年六旬有二，於孟秋得溫病兼下痢。

病因：孟秋天氣猶熱，且自覺心中有火，多食瓜果，又喜當風乘涼，遂致病溫兼下痢。

證候：周身灼熱，心中熱且渴，連連呻吟不止，一日夜下痢十二三次，赤白參半，後重腹疼，飲食懶進，噁心欲嘔，其脈左部弦而兼硬，右部似有力而重按不實，數近六至。延醫治療近旬日，病益加劇。

診斷：其左脈弦而兼硬者，肝血虛而膽火盛也。其右脈似有力而重按不實者，因其下痢久而氣化已傷，外感之熱又侵入陽明之腑也。其數六至者，緣外感之熱灼耗已久，而其真陰大有虧損也。證脈合參，此乃邪實正虛之候，擬用拙定通變白虎加人參湯，及通變白頭翁湯（兩方皆在三期三卷痢疾門）二方相並治之。

處方：生石膏（二兩搗細）、野臺參（四錢）、生懷山藥（一兩）、生杭芍（一兩）、白頭翁（四錢）、金銀花（四錢）、秦皮（二錢）、生地榆（二錢）、甘草（二錢）、廣三七（二錢軋細）、鴉膽子（成實者五十粒去皮）。共藥十一味，先用白糖水送服三七、鴉膽子各一半，再將餘藥煎湯兩盅，分兩次溫服下。至煎渣再服時，亦先服所餘之三七、鴉膽子。

複診：將藥煎服，日進一劑，服兩日，表裡之熱皆退，痢變為瀉，仍稍帶痢，瀉時仍覺腹疼後重而較前輕減，其脈象已近平和，此宜以大劑溫補，止其泄瀉，再少輔以治痢之品。

處方：生懷山藥（一兩）、炒懷山藥（一兩）、龍眼肉（一兩）、大雲苓片（三錢）、生杭芍（三錢）、金銀花（三錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥煎服兩劑，痢已淨盡而瀉未痊愈，遂即原方去金銀花、芍藥，加白朮三錢，服兩劑其瀉亦愈。

【暑溫兼泄瀉】

天津估衣街西頭萬全堂藥局，侯姓學徒，年十三歲，得暑溫兼泄瀉。

病因：季夏天氣暑熱，出門送藥受暑，表裡俱覺發熱，兼頭目眩暈。服藥失宜，又兼患泄瀉。

證候：每日泄瀉十餘次，已逾兩旬，而心中仍覺發熱懶食，周身酸軟無力，時或怔忡，小便赤澀發熱，其脈左部微弱，右部重按頗實，搏近六至。

診斷：此暑熱鬱於陽明之腑，是以發熱懶食，而肝腎氣化不舒，是以小便不利致大便泄瀉也。當清瀉胃腑，調補肝腎，病當自愈。

處方：生懷山藥（兩半）、滑石（一兩）、生杭芍（六錢）、淨萸肉（四錢）、生麥芽（三錢）、甘草（三錢）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：服藥一劑瀉即止，小便通暢，惟心中猶覺發熱，又間有怔忡之時，遂即原方略為加減俾再服之。

處方：生懷山藥（一兩）、生懷地黃（一兩）、淨萸肉（八錢）、生杭芍（六錢）、生麥芽（二錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服兩劑，其病霍然痊愈。

說明：初次所用之方，即拙擬之滋陰清燥湯（在三期五卷）加山萸肉、生麥芽也。從來寒溫之熱傳入陽明，其上焦燥熱，下焦滑瀉者，最為難治，因欲治其

上焦之燥熱，則有礙下焦之滑瀉；欲補其下焦之滑瀉，則有礙上焦之燥熱，是以醫者對之恆至束手，然此等證若不急為治癒，則下焦滑瀉愈久，上焦燥熱必愈甚，是以本屬可治之證，因稍為遲延，竟至不可救者多矣。惟拙擬之滋陰清燥湯，山藥與滑石並用，一補大便，一利小便，而山藥多液，滑石性涼，又善清上焦之燥熱，更輔以甘草、芍藥以復其陰（仲景謂作甘草芍藥湯以復其陰），陰復自能勝燥熱，而芍藥又善利小便，甘草亦善調大便，彙集四味為方，凡遇證之上焦燥熱下焦滑瀉者，莫不隨手奏效也。間有陽明熱實，服藥後滑瀉雖止而燥熱未盡清者，不妨繼服白虎湯。其熱實體虛者，或服白虎加人參湯，若慮其復作滑瀉，可於方中仍加滑石三錢，或更以生山藥代粳米煎取清湯，一次只飲一大口，徐徐將藥服完，其熱全消，亦不至復作滑瀉。愚用此法救人多矣，滋陰清燥湯後，附有治癒多案可參觀也。至此案方中加萸肉、生麥芽者，因其肝脈弱而不舒，故以萸肉補之，以生麥芽調之，所以遂其條達之性也。至於第二方中為瀉止小便已利，故去滑石，為心中猶怔忡，故將萸肉加重。為猶有餘熱未清，故又加生地黃。因其餘熱無多，如此治法已可消除淨盡，無須服白虎湯及白虎加人參湯也。

【溫病】

孫雨亭，武清縣人，年三十一歲，小學教員，喜閱醫書，尤喜閱拙著《衷中參西錄》，於孟秋時得溫病，在家治不愈，遂來津求為診治。

病因：未病之前，心中常覺發熱，繼因飯後有汗，未暇休息，陡有急事冒風出門，致得溫病。

證候：表裡俱覺壯熱，嗜飲涼水、食涼物，舌苔白厚，中心已黃，大便乾燥，小便短赤，脈象洪長有力，左右皆然，一分鐘七十八至。

診斷：此因未病之先，已有伏氣化熱，或有暑氣之熱內伏，略為外感所激，即表裡陡發壯熱，一兩日間，陽明府熱已實，其脈之洪長有力是明徵也。擬投以大劑白虎湯，再少佐以宣散之品。

處方：生石膏（四兩搗細）、知母（一兩）、鮮茅根（六錢）、青連翹（三錢）、甘草（三錢）、粳米（三錢）。共煎湯三盅，分三次溫服下。

複診：將藥分三次服完，表裡之熱分毫未減，脈象之洪長有力亦仍舊，大便亦未通下，此非藥不對證，乃藥輕病重，藥不勝病也。夫石膏之性《本經》原謂其微寒，若遇陽明大熱之證，當放膽用之，擬即原方去連翹加天花粉，再將石膏加重。

處方：生石膏（六兩）、知母（一兩）、天花粉（一兩）、鮮茅根（六錢）、甘草（四錢）、粳米（四錢）。共煎湯三大盅，分三次溫服下。

復診：將藥分三次服完，下燥糞數枚，其表裡之熱仍然不退，脈象亦仍有力。愚謂兩亭曰「余生平治寒溫實熱證，若屢次治以大劑白虎湯而其熱不退者，恆將方中石膏研極細，將餘藥煎湯送服即可奏效」，今此證正宜用此方，兩亭亦以為然。

處方：生石膏（二兩研極細）、生懷山藥（二兩）、甘草（六錢）。將山藥、甘草煎湯一大碗，分多次溫服，每次送服石膏末二錢許，熱退勿須盡劑，即其熱未盡退，若其大便再通下一次者，亦宜將藥停服。

效果：分六次將湯藥飲完，將石膏送服強半，熱猶未退，大便亦未通下，又煎渣取湯兩盅，分數次送服石膏末，甫完，陡覺表裡熱勢大增，時當夜深，不便延醫。兩亭自持其脈弦硬異常，因常閱《衷中參西錄》，知脈雖有力而無洪滑之象者，用白虎湯時皆宜加人參，遂急買高麗參五錢，煮湯頓飲下，其脈漸漸和緩，熱亦漸退，至黎明其病霍然痊愈矣。

說明：按傷寒定例，凡用白虎湯若在汗吐下後及渴者，皆宜加人參。細詢此證之經過，始知曾發大汗一次，此次所服之藥雖非白虎湯原方，實以山藥代粳米，又以石膏如此服法，其力之大，可以不用知母，是其方亦白虎湯也。若早加黨參數錢，與山藥、甘草同煎湯以送服石膏，當即安然病癒。乃因一時疏忽，並未見

及，猶幸病者自知醫理以挽回於末路，此雖白虎湯與人參前後分用之，仍不啻同時並用之也。此證加人參於白虎湯中其益有三，發汗之後人之正氣多虛，人參大能補助正氣，俾正氣壯旺，自能運化藥力以勝邪，其為益一也。又發汗易傷津液，津液傷則人之陰分恆因之虧損。人參與石膏並用，能於邪熱熾盛之時，滋津液以復真陰，液滋陰復則邪熱易退，其為益二也。又用藥之法，恆熱因涼用，涼因熱用，《內經》所謂伏其所因也。此證用山藥、甘草煎湯送服石膏之後，病則純熱，藥則純涼，勢若冰炭不兼容，是以其熱益激發而暴動，加人參之性溫者以為之引，此即涼因熱用之義，為涼藥中有熱藥引之以消熱，而後熱不格拒轉與化合，熱與涼藥化合則熱即消矣，此其為益三也。統此三益觀之，可曉然於此病之所以愈，益歎仲聖制方之妙，即約略用之，亦可挽回至險之證也。



【溫病兼項後作疼】

李芳岑督軍之太夫人，年八旬有三，於孟夏得溫病，兼項後作疼。

病因：飯後頭面有汗，忽隔窗紗透入涼風，其汗遂閉，因得斯證。

證候：項疼不能轉側，並不能俯仰，周身發灼熱，心中亦熱，思涼物，脈象左部弦而長，右部則弦硬有力，大便乾燥，小便短少。

診斷：此因汗出腠理不閉，風襲風池、風府，是以項疼，因而成風溫也。高年之脈，大抵弦細，因其氣虛所以無甚起伏，因其血液短少，是以細而不濡，至於弦硬而長有力，是顯有溫熱之現象也，此當清其實熱而輔以補正兼解表之品。

處方：生石膏（一兩軋細）、野臺參（三錢）、生懷地黃（一兩）、生懷山藥（五錢）、玄參（三錢）、沙參（三錢）、連翹（二錢）、西藥阿斯匹林一瓦。先將阿斯匹林用白糖水送下，繼將中藥煎湯一大盅，至甫出汗時，即將湯藥乘熱服下。

效果：如法將藥服下後，周身得汗，表裡之熱皆退，項之疼大減，而仍未脫然，俾每日用阿斯匹林一瓦強（約三分），分三次用白糖水送下，隔四點鐘服一次，若初次服後微見汗者，後兩次宜少服，如此兩日，項疼痊愈，蓋阿斯匹林不但能發汗去熱，且能為熱性關節疼痛之最妙藥也。

【溫病兼脅疼】

李鏡波律師，寓天津河北三馬路頤壽里，年三十八歲，於孟冬上旬得溫病。病因：其妻於秋間病故，子女皆幼，處處須自經管，傷心又兼勞心，遂致暗生內熱，薄受外感，遽成溫病。

證候：初得時，即表裡俱熱，醫者治以薄荷、連翹、菊花諸藥，服後微見汗，病稍見輕，至再診時，病人自覺呼吸短氣，此氣鬱不舒也，醫者誤以為氣虛，遂於清熱藥中加黨參以補其氣，服後右脅下陡然作疼，徹夜不能臥，亦不能眠，心中發熱，舌苔白厚，大便四日未行，其左右脈皆弦，右部尤弦而有力，一分鐘八十二至。

診斷：凡脈象弦者主疼，又主血液短少，此證之右脅非常疼痛，原為證脈相符，而其傷心勞心以致暗生內熱者，其血液必然傷損，此亦證脈相符也。其右脈弦而有力者，外感之熱已入陽明之府也，擬治以白虎湯而輔以開鬱滋陰之品。

處方：生石膏（二兩軋細）、知母（八錢）、玄參（八錢）、天冬（八錢）、川棟子（五錢搗碎）、生萊菔子（五錢搗碎）、連翹（三錢）、甘草（二錢）、粳米（三錢）。共煎湯兩大盅，分兩次溫服下。

複診：將藥服完，熱退強半，脅疼已愈三分之二，脈象變為浮弦，惟胸膈似覺鬱悶，大便猶未通下，再治以寬胸清熱潤燥之劑，為其脈浮有還表之象，宜再少加透表之藥，以引之外出，其病當由汗而解。

處方：糖栝萸（二兩切碎）、生石膏（一兩搗細）、知母（五錢）、玄參（五錢）、連翹（三錢）、川棟子（四錢搗碎）、甘草（二錢）。共煎湯兩盅，分二次溫服下。其服完兩次之後，遲一點鐘再服西藥阿斯匹林一瓦。溫復以取微汗。

效果：如法將藥服完，果周身皆得微汗，病若失，其大便亦通下矣。

【風溫兼喘促】

遼寧小南關柴市旁，赫姓幼子，年五歲，得風溫兼喘促證。

病因：季春下旬，在外邊嬉戲，出汗受風，遂成溫病。醫治失宜，七八日間又添喘促。

證候：面紅身熱，喘息極迫促，痰聲漉漉，目似不瞬，脈象浮滑，重按有力，指有紫紋，上透氣關，啟口視其舌苔白而潤，問其二便，言大便兩日未行，小便微黃，然甚通利。

診斷：觀此證狀況已危至極點，然脈象見滑，雖主有痰，亦足徵陰分充足。且視其身體胖壯，知猶可治，宜用《金匱》小青龍加石膏湯，再加杏仁、川貝以利其肺氣。

處方：麻黃（一錢）、桂枝尖（一錢）、生杭芍（三錢）、清半夏（二錢）、杏仁（二錢去皮搗碎）、川貝母（二錢搗碎）、五味子（一錢搗碎）、乾薑（六分）、細辛（六分）、生石膏（一兩搗細）。共煎湯一大盅，分兩次溫服下。

方解：《金匱》小青龍加石膏湯，原治肺脹咳而上氣煩躁而喘，然其石膏之份量，僅為麻桂三分之一（《金匱》小青龍加石膏湯，其石膏之份量原有差誤，曾詳論之），而此方中之生石膏則十倍於麻桂，誠以其面紅身熱，脈象有力，若不如此重用石膏，則麻、桂、薑、辛之熱，即不能用矣。又《傷寒論》小青龍湯

加減之例，喘者去麻黃加杏仁，今加杏仁而不去麻黃者，因重用生石膏以監製麻黃，則麻黃即可不去也。

複診：將藥服盡一劑，喘愈強半，痰猶壅盛，肌膚猶灼熱，大便猶未通下，脈象仍有力，擬再治以清熱利痰之品。

處方：生石膏（二兩搗細）、栝蔞仁（二兩炒搗）、生赭石（一兩軋細）。共煎湯兩盅，分三次徐徐溫飲下。

效果：將藥分三次服完，火退痰消，大便通下，病遂痊愈。

說明：此案曾登於《全國名醫驗案類編》，何廉臣評此案云「風溫犯肺脹喘促，小兒尤多，病最危險，兒科專家，往往稱為馬脾風者此也。此案斷定為外寒束內熱，仿《金匱》小青龍加石膏湯，再加貝母開豁清泄，接方用二石蔞仁等清鎮滑降而痊。先開後降，步驟井然。惟五歲小兒能受如此重量，可見北方風氣剛強，體質茁實，不比南方人之體質柔弱也。正惟能受重劑，故能奏速功」。

觀何廉臣評語，雖亦推獎此案，而究嫌藥量過重，致有南北分別之設想，不知此案藥方之份量若作一次服，以治五歲孺子誠為過重。若分作三次服，則無論南北，凡身體胖壯之孺子皆可服也。試觀近今新出之醫書，治產後溫病，有一劑用生石膏半斤者矣，曾見於劉蔚楚君《遇安齋證治叢錄》，劉君原廣東香山人也。治鼠疫病亦有一劑用生石膏半斤者矣，曾見於李健頤君《鼠疫新篇》，李君原福建平潭人也。若在北方治此等證，豈藥之份量可再加增乎？由此知醫者之治病用

藥，不可定存南北之見也，且愚亦嘗南至漢皋矣，曾在彼處臨證處方，未覺有異於北方，惟用發表之劑則南方出汗較易，其份量自宜從輕。然此乃地氣寒暖之關係，非其身體強弱之關係也。既如此，一人之身則冬時發汗與夏時發汗，其所用藥劑之輕重自迥殊也。

嘗細驗天地之氣化，恆數十年而一變，仲景當日原先著《傷寒論》，後著《金匱要略》，《傷寒論》小青龍湯，原有五種加法，而獨無加石膏之例，因當時無當加石膏之病也。至著《金匱》時，則有小青龍加石膏湯矣，想其時已現有當加石膏之病也。憶愚弱冠時，見醫者治外感痰喘證，但投以小青龍湯原方即可治癒，後數年愚臨證遇有外感痰喘證，但投以小青龍湯不效，必加生石膏數錢方效。又遲數年必加生石膏兩許，或至二兩方效，由斯知為醫者當隨氣化之轉移，而時時與之消息，不可拘定成方而不知變通也。

【秋溫兼伏氣化熱】

天津鼓樓東，徐姓媪，年五十九歲，於中秋上旬得溫病，帶有伏氣化熱。

病因：從前原居他處，因遷居勞碌，天氣燥熱，有汗受風，遂得斯病。

證候：晨起覺周身微發熱兼酸懶不舒，過午陡覺表裡大熱，且其熱浸增，及晚四點鐘往視時，見其臥床閉目，精神昏昏，呻吟不止。診其脈左部沉弦，右部洪實，數近六至。問其未病之前，曾有拂意之事乎？其家人曰「誠然，其稟性褊急，恆多憂思，且又易動肝火」，欲見其舌苔，大聲呼數次，始知啟口，視其舌上似無苔而有腫脹之意，問其大便，言素恆乾燥。

診斷：其左脈沉弦者，知其肝氣鬱滯不能條達，是以呻吟不止，此欲借呻吟以舒其氣也。其右脈洪實者，知此證必有伏氣化熱，竄入陽明，不然則外感之溫病，半日之間何至若斯之劇也。此當用白虎湯以清陽明之熱，而以調氣舒肝之藥佐之。

處方：生石膏（二兩搗細）、知母（八錢）、生萊菔子（三錢搗碎）、青連翹（三錢）、甘草（二錢）、粳米（四錢）。共煎湯兩盅，分兩次溫服。

方解：萊菔子為善化鬱氣之藥，其性善升亦善降，炒用之則降多於升，生用之則升多於降。凡肝氣之鬱者宜升，是以方中用生者。至於連翹，原具有透表之力，而用於此方之中，不但取其能透表也，其性又善舒肝，凡肝氣之鬱而不舒者，

連翹皆能舒之也。是則連翹一味，既可佐白虎以清溫熱，更可輔萊菔以開肝氣之鬱滯。

複診：將藥兩次服完，周身得汗，熱退十之七八，精神驟然清爽。左脈仍有弦象而不沉，右脈已無洪象而仍似有力，至數之數亦減。問其心中仍有覺熱之時，且腹中知饑而懶於進食，此則再宜用涼潤滋陰之品清其餘熱。

處方：玄參（一兩）、沙參（五錢）、生杭芍（四錢）、生麥芽（三錢）、鮮茅根（四錢）、滑石（三錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。方中用滑石者，欲其餘熱自小便瀉出也。

效果：將藥連服兩劑，大便通下，其熱全消，能進飲食，脈象亦和平矣。而至數仍有數象，俾再用玄參兩半，潞參三錢，煎服數劑以善其後。

說明：醫者論溫病之成，多言由於伏氣化熱，而推本於《內經》「冬傷於寒，春必溫」二語，謂所受之伏氣皆為冬令所感之寒。夫春日之溫病，謂係冬日所感之寒化熱，斯原近理，至夏日、秋日，皆有溫病，若亦謂係冬日所感之寒化熱則非是。蓋凡伏氣伏於三焦脂膜之中，能阻塞人身氣化之流通，其人恒不易得汗，若能遍體出透汗，其伏氣即可隨汗發出。由斯而論，人之春日或可不出汗，至夏日則人有不出汗者乎？至夏日屢次出汗，縱有伏氣，有不暗消者乎？蓋人四時皆可受外感，其受外感之輕者不能即發，皆可伏於三焦脂膜之中而為伏氣，至於伏氣之化熱，冷時則遲，暖時則速，若交夏令以後，其化熱不過旬日間耳。乃醫者



多不悟此理，仍執定舊說，遂致來西醫之譏，謂病菌之伏於人身，其發皆有定期，未有至一月者，而況至數月乎？此固西醫之輕言多事，然亦中醫自遺人以口實也。

【溫病兼嘔吐】

劉秀岩，年三十二歲，住天津城北金鋼橋西，小學教員，於季夏得溫熱病，兼嘔吐不受飲食。

病因：學校與住宅相隔甚近，暑假放學，至晚仍在校中宿臥，一日因校中無人，其衾褥被人竊去，追之不及，因努力奔跑，周身出汗，乘涼歇息，遂得斯病。證候：心中煩熱，周身時時汗出，自第二日，嘔吐不受飲食。今已四日，屢次服藥亦皆吐出，即渴時飲水，亦恆吐出。舌苔白厚，大便四日未行，其脈左部弦硬，右部弦長有力，一息五至。

診斷：其脈左部弦硬者，肝膽之火熾盛也。右部弦長者，衝氣挾胃氣上衝也。弦長而兼有力者，外感之熱已入陽明之府也。此證因被盜，怒動肝氣，肝火上衝，並激動衝氣挾胃氣亦上衝，而外感之熱又復熾盛於胃中以相助為虐，是以煩熱汗出，不受飲食而吐藥吐水也。此當投以清熱鎮逆之劑。

處方：生石膏（二兩細末）、生赭石（六錢細末）、鏡面硃砂（五錢細末）和勻分作五包，先送服一包，過兩點鐘再送服一包，病癒即停服，不必盡劑。方用散劑不用湯劑者，止嘔吐之藥丸散優於湯劑也。

效果：服至兩包，嘔吐已癒，心中猶覺煩熱。服至四包，煩熱痊愈，大便亦通下矣。

說明：石膏為石質之藥，本重墜且又寒涼，是以白虎湯中以石膏為主，而以甘草緩之，以粳米和之，欲其服後留戀於胃中，不至速於下行，故用石膏者，忌再與重墜之藥並用，恐其寒涼侵下焦也，並不可與開破之藥同用，因開破之藥力原下行也。乃今因肝氣膽火相並上衝，更激動衝氣挾胃氣上衝，且更有外感之熱助之上衝，因致臟腑之氣化有升無降，是以飲食與藥至胃中皆不能存留，此但恃石膏之寒涼重墜，原不能勝任，故特用赭石之最有壓力者以輔之，此所以旋轉臟腑中之氣化，而使之歸於常也。設非遇此等證脈，則石膏原不可與赭石並用也。

【溫病兼嘔吐】

天津北門里，楊姓媪，年過五旬，於季春得溫病兼嘔吐。

病因：家庭勃谿，激動肝膽之火，繼因汗出受風，遂得此證。

證候：表裡壯熱，嘔吐甚劇，不能服藥，少進飲食亦皆吐出。舌苔白厚，中心微黃，大便三日未行。其脈左部弦長，右部洪長，重按皆實。

診斷：此少陽陽明合病也。為其外感之熱已入陽明胃府，是以表裡俱壯熱，而舌苔已黃，為其激動之火積於少陽肝膽，是以其火上衝，頻作嘔吐。治此證者欲其受藥不吐，當變湯劑為散，且又分毫無藥味，庶可奏效。

處方：生石膏（一兩細末）、鮮梨（兩大個）。將梨去皮，切片，蘸石膏末，細細嚼服。

複診：將梨片與石膏末嚼服一強半未吐，遲兩點鐘又將所餘者服完，自此不復嘔吐，可進飲食，大便通下一次。診其脈猶有餘熱，問其心中亦仍覺熱，而較前則大輕減矣。擬改用湯劑。以清其未盡之熱。

處方：生石膏（一兩搗細）、生杭芍（八錢）、玄參（三錢）、沙參（三錢）、連翹（二錢）、甘草（二錢）、鮮白茅根（三錢）。藥共七味，先將前六味水煎十餘沸，入鮮白茅根再煎三四沸，取湯一大盞，溫服。

效果：將藥如法煎服一劑，熱又減退若干，脈象已近和平，遂即原方將石膏改用六錢，芍藥改用四錢，又服一劑，病遂痊愈。

或問「石膏為清陽明之主藥，此證原陽明少陽均有實熱，何以用石膏但清陽明之熱而病即可愈」？答曰「凡藥服下，原隨氣血流行無處不到。石膏雖善清陽明之熱，究之，凡臟腑間蘊有實熱，石膏皆能清之，且凡嘔吐者皆氣上逆也，石膏末服，其石質之重墜，大能折其上逆之氣，使之下行，又有梨片之甘涼開胃者以輔之，所以奏效甚捷也。若當秋夏之交無鮮梨時，可以西瓜代之。

【溫病兼衄血便血】

天津城西梁家嘴，陳姓童子，年十五歲，在學校肄業，於仲秋得溫病，兼衄血便血。

病因：初因周身發熱，出有斑點，有似麻疹，醫用涼藥清之，斑點即回，連服涼藥數劑，周身熱已退，而心中時覺煩躁，逾旬日因薄受外感，其熱陡然反覆。

證候：表裡壯熱，衄血兩次，小便時或帶血，嘔吐不受飲食，服藥亦多吐出。心中自覺為熱所灼，怔忡莫支，其脈搖搖而動，數逾五至，左右皆有力，而重按不實，舌苔白而欲黃，大便三日未行，本擬投以白虎加人參湯，恐其服後作嘔。

處方：生石膏（三兩細末）、生懷山藥（二兩）。共煎湯一大碗，俾徐徐溫飲下，為防其嘔吐，一次只飲一大口，限定四小時將藥服完。

方解：凡嘔吐之證，飲湯則吐，服粥恆可不吐。生山藥二兩煎取濃汁，與粥無異，且無藥味，服後其粘滯之力自能留戀於胃中。且其溫補之性，又能固攝下焦以止便血，培養心氣，以治怔忡也。而以治此溫而兼虛之證，與石膏相伍為方，以石膏清其溫，以山藥補其虛，雖非白虎加人參湯，而亦不啻白虎加人參湯矣。

效果：翌日複診，熱退十之七八，心中亦不怔忡，少進飲食亦不嘔吐，衄血便血皆愈。脈象力減，至數仍數，又俾用玄參二兩，潞參、連翹各五錢，仍煎湯一大碗，徐徐溫飲下，盡劑而愈，大便亦即通下。蓋其大熱已退而脈仍數者，以

其有陰虛之熱也。玄參、潞參並用，原善退陰虛作熱，而猶恐其伏有疹毒，故又加連翹以托之外出也。

按：此證若能服藥不吐，投以大劑白虎加人參湯，大熱退後，其脈即可不數。乃因其服藥嘔吐，遂變通其方，重用生山藥二兩與生石膏同煎服。因山藥能健脾滋腎，其補益之力雖不如人參，實有近於人參處也。至大熱退後，脈象猶數，遂重用玄參二兩以代石膏，取其能滋真陰，兼能清外感餘熱，而又伍以潞參、連翹各五錢。潞參即古之人參。此由白虎加人參之義化裁而出，故虛熱易退，而連翹又能助玄參涼潤之力外透肌膚，則餘熱亦易清也。

【溫疹】

天津南門西沈家臺，楊姓幼子，年四歲，於季春發生溫疹。

病因：春暖時氣流行，比戶多有發生此病者，因受傳染。

證候：周身出疹甚密，且灼熱異常，閉目昏昏，時作譫語，氣息迫促，其唇乾裂紫黑，上多凝血。脈象數而有力，大便不實，每日溏瀉兩三次。

診斷：凡上焦有熱之證，最忌下焦滑瀉，此證上焦之熱已極，而其大便又復溏瀉，欲清其熱，又恐其溏瀉益甚，且在發疹，更虞其因溏瀉毒內陷也。是以治此證者，當上清其熱下止其瀉，兼托疹毒外出，證候雖險，自能治癒。

處方：生懷山藥（一兩）、滑石（一兩）、生石膏（一兩搗細）、生杭芍（六錢）、甘草（三錢）、連翹（三錢）、蟬蛻（錢半去土）。共煎一大盅，分多次徐徐溫飲下。

效果：分七八次將藥服完。翌日視之其熱大減，諸病皆見愈。惟不能穩睡，心中似騷擾不安，其脈象仍似有力。遂將方中滑石、石膏皆減半，煎湯送安宮牛黃丸半丸，至煎渣再服時，又送服半丸，病遂痊愈。



【溫疹兼喉痧】

天津瑞雲里，沈姓學生，年十六歲，於仲春得溫疹兼喉痧證。

病因：因在體育場中遊戲，努力過度，周身出汗為風所襲，遂得斯病。

證候：初病時微覺惡寒頭疼，翌日即表裡俱壯熱，咽喉悶疼。延醫服藥病未見輕，喉中疼悶似加劇，周身又復出疹，遂延愚為診治。其肌膚甚熱，出疹甚密，連無疹之處其肌膚亦紅，誠西人所謂猩紅熱也。其心中亦自覺熱甚，其喉中扁桃腺處皆紅腫，其左邊有如榆莢一塊發白，自言不惟飲食疼難下嚥，即呼吸亦甚覺有礙，診其脈左右皆洪滑有力，一分鐘九十八至。愚為刺其少商出血，復為針其合谷，又為擬一清咽、表疹、瀉火之方俾服之。

處方：生石膏（二兩搗細）、玄參（六錢）、天花粉（六錢）、射干（三錢）、牛蒡子（三錢搗碎）、浙貝母（三錢）、青連翹（三錢）、鮮蘆根（三錢）、甘草（錢半）、粳米（三錢）。共煎湯兩大盅，分兩次溫服下。

複診：翌日過午復為診視，其表裡之熱皆稍退，脈象之洪滑亦稍減，疹出又稍加多。從前三日未大便，至此則通下一次。再視其喉，其紅腫似加增，白處稍大，病人自言此時飲水必須努力始能下嚥，呼吸之滯礙似又加劇。愚曰「此為極危險之病，非刺患處出血不可」，遂用圭式小刀，於喉左右紅腫之處，各刺一長口放出紫血若干，遽覺呼吸順利，擬再投以清熱消腫托表疹毒之劑。

處方：生石膏（一兩搗細）、天花粉（六錢）、赤芍（三錢）、板藍根（三錢）、牛蒡子（三錢搗細）、生蒲黃（三錢）、浙貝母（三錢）、青連翹（三錢）、鮮蘆根（三錢）。共煎一大盅半，分兩次溫服。

方解：赤芍藥，張隱庵、陳修園皆疑是山中野草之根，以其紋理甚粗，與園中所植之芍藥根迥異也。然此物出於東三省，愚親至其地，見山坡多生此種芍藥，開單瓣紅花，其花小於尋常芍藥花約三倍，而其葉則確係芍藥無疑。蓋南方亦有赤芍藥，而其根仍白，茲則花赤，其根亦赤，是以善入血分活血化瘀也。又浙貝治嗽，不如川貝，而以其治瘡，浙貝似勝於川貝，以其味苦性涼，能清熱解毒也。效果：將藥連服兩劑，其病脫然痊愈。

說明：《內經靈樞》〈癰疽篇〉謂「癰發於嗑中，名曰猛疽，猛疽不治，化為膿，膿不瀉，塞咽半日死」，此證咽喉兩旁紅腫日增，即癰發嗑中，名為猛疽者也。其膿成不瀉，則危在目前，若其劇者，必俟其化膿而後瀉之，又恆有迫不及待之時，是以此證因其紅腫已甚，有礙呼吸，急刺之，以出其紫血而紅腫遂愈，此所謂防之於預也。且化膿而後瀉之，其瘡口恆至潰爛，若未成膿而瀉，其紫血所刺之口半日即合矣。

喉證原有內傷外感之殊，其內傷者雖宜注重清熱，亦宜少佐以宣散之品，如《白喉忌表抉微》方中之用薄荷、連翹是也。由外感者雖不忌用表散之品，然宜

表散以辛涼，不宜表散以溫熱，若薄荷、連翹、蟬蛻、蘆根諸藥，皆表散之佳品也。

或有謂喉證若由於外感，雖麻黃亦可用者，然用麻黃必須重用生石膏佐之，若《傷寒論》之麻杏甘石湯，誠為治外感喉證之佳方也。特是，其方原非治喉證之方，是以方中石膏僅為麻黃之兩倍，若藉以治外感喉證，則石膏當十倍於麻黃，若遇外感實火熾盛者，石膏尤宜多加方為穩妥。是以愚用此方以治外感喉證時，麻黃不過用至一錢，而生石膏恆用至兩餘，或重用至二兩也。然此猶論喉證之紅腫不甚劇者，若至腫甚有礙呼吸，不惟麻黃不可用，即薄荷亦不可用，是以治此證方中止用連翹、蘆根也。

以上所論者，無論內傷外感，皆咽喉證之屬熱者也，而咽喉中之變證，間有真寒假熱者，又當另議治法。五期四卷載有治此等咽喉證之驗案可參觀。

【溫病兼喉痧痰喘】

馬心琢，天津城裡鄉祠前皮局工人，年二十八歲，於季秋得溫病兼喉痧痰喘證。

病因：初因外出受風感冒甚微，醫者用熱藥發之，陡成溫病，而喉病喘病遂同時發現。

證候：表裡俱壯熱，喘逆咳嗽，時吐痰涎，咽喉左邊紅腫作疼（即西人所謂扁桃體炎）。其外邊項左側亦腫脹，呼吸皆有窒礙，為其病喉且兼喘逆，則吸氣尤形困難，必十分努力始能將氣吸入。其舌苔白而薄，中心微黃，小便赤澀，大便四日未行，其脈左右皆弦長，右部重診有力，一分鐘九十六至。

診斷：此乃外感之熱已入陽明之府，而衝氣又挾胃氣肝火上衝也。為其外感之熱已入陽明之府，是以右脈之力勝於左脈，為其衝氣挾胃氣肝火上衝，是以左右脈皆弦長。病現喘逆及咽喉腫疼，其腫痛偏左者，正當肝火上升之路也。擬治以麻杏甘石湯，兼加鎮衝降胃納氣利痰之品以輔之，又宜兼用針刺放血以救目前之急。

處方：麻黃（一錢）、生石膏（二兩搗細）、生赭石（一兩軋細）、生懷山藥（八錢）、杏仁（三錢去皮炒搗）、連翹（三錢）、牛蒡子（三錢搗碎）、射干（二錢）、甘草（一錢）。共煎湯兩盅，分兩次溫服。又於未服藥之前，用三稜針刺其兩手少商出血，用有尖小刀刺其咽喉腫處，開兩小口令其出血，且用礪

砂、西藥鹽酸加里，融以三十倍之水，俾其含漱。又於兩手合谷處為之行針，其咽喉腫處驟然輕減，然後服藥。

複診：將藥服後，其喘頓愈強半，呼吸似無妨礙，表裡之熱亦愈強半。脈象亦較前平和，其右部仍然有力，胸膈似覺鬱悶，有時覺氣上衝，仍然咳嗽，大便猶未通下，擬再治以開鬱降氣清熱理嗽之劑。

處方：糖栝萸（二兩切碎）、生石膏（一兩搗細）、生赭石（五錢軋細）、生杭芍（三錢）、川貝母（三錢）、碎竹茹（三錢）、牛蒡子（三錢搗碎）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥煎服一劑，大便通下，諸病皆愈。唯一日之間猶偶有咳嗽之時，俾用川貝母細末和梨蒸食之以善其後。

說明：凡用古人成方治病，其藥味或可不動，然必細審其藥之份量或加或減，俾與病機相宜，如麻杏甘石湯原方，石膏之份量僅為麻黃之兩倍，而此證所用麻杏甘石湯則石膏之份量二十倍於麻黃矣。蓋《傷寒論》之麻杏甘石湯原非為治喉證而設，今借之以治喉證，原用麻黃以散風定喘，又因此證之喉腫太甚，有礙呼吸，而方中猶用麻黃，原為行險之道，故麻黃僅用一錢，而又重用生石膏二兩以監製之，且於臨服藥時先用刀開其患處，用針刺其少商與合谷，此所以於險中求穩也。嘗聞友人楊達夫言有一名醫深於《傷寒論》，自著有《注解傷寒論》之書行世，偶患喉證，自服麻杏甘石湯竟至不起，使其用麻杏甘石湯時，亦若愚所用

者如此加減，又何患喉證不愈乎？縱使服藥不能即愈，又何至竟不起乎？由此知非古人之方誤人。麻杏甘石湯，原為發汗後及下後汗出而喘無大熱者之的方，原未言及治喉證也。而欲借之以治喉證，能勿將藥味之份量為之加減乎？嘗總核《傷寒論》諸方用於今日，大抵多稍偏於熱，此非仲景之不善制方也。自漢季至今，上下相隔已一千六百餘年，其天地之氣化，人生之稟賦，必有不同之處，是以欲用古方皆宜細為斟酌也。

【溫病兼喉疼】

胡珍簾，道尹，年五十四歲，原籍雲南，寓天津一區，於仲秋感受溫病兼喉疼證。

病因：子孫繁多，教養皆自經心，又兼自理家中細務，勞心過度，暗生內熱，且日飲牛乳兩次作點心，亦能助熱，內熱上潮，遂覺咽喉不利，至仲秋感受風溫，陡覺咽喉作疼。

證候：表裡俱覺發熱，咽喉疼痛，妨礙飲食，心中之熱時覺上衝，則咽喉之疼即因之益甚。周身酸懶無力，大便乾燥，脈象浮滑而長，右關尤重按有力，舌上白苔滿佈。

診斷：此證脈象猶浮，舌苔猶白，蓋得病甫二日，表證猶未罷也。而右關重按有力，且時覺有熱上衝咽喉者，是內傷外感相並而為病也。宜用重劑清其胃腑之熱，而少佐以解表之品，表解裡清，喉之疼痛當自愈矣。

處方：生石膏（四兩搗細）、西藥阿斯匹林（一瓦）。單將生石膏煎湯一大盅，乘熱將阿斯匹林融化其中服之。因阿斯匹林實為酸涼解肌之妙藥，與大量之石膏並用，服後須臾，其內傷外感相並之熱，自能化汗而解也。

效果：服後約半點鐘，其上半身微似有汗，而未能遍身透出，遲一點鐘，覺心中之熱不復上衝，咽喉疼痛輕減。時在下午一點鐘，至晚間臨睡時，仍照原方再服一劑，周身皆得透汗，安睡一夜，翌晨，諸病若失矣。

【溫病兼陰虛】

高誠軒，鄰村張馬村人，年二十五歲，業農，於仲夏得溫病。

病因：仲夏上旬，麥秋將至，遠出辦事，又欲急回收麥，長途趨行於烈日之中，辛苦殊甚，因得溫病。其叔父魯軒與其表叔毛仙閣皆邑中名醫，又皆善治溫病，二人共治旬日無效，蓋因其勞力過甚，體虛不能托病外出也。

證候：愚診視時，其兩目清白，竟無所見，兩手循衣摸床，亂動不休，譫語無倫，分毫不省人事，其大便從前滑瀉，此時雖不滑瀉，每月仍溏便一兩次，脈象浮而無力，右寸之浮尤甚，兩尺按之即無，一分鐘數至一百二十至，舌苔薄黃，中心乾而微黑。

診斷：診視甫畢，魯軒與仙閣問曰「視此病脈何如，尚可救否」？答曰「此證兩目清白無火，而竟無所見者，腎陰將竭也。其兩手亂動不休者，肝風已動也。病勢至此，危險已至極點。幸喜脈浮為病還在太陽，右寸浮尤甚，又為將汗之兆。其所以將汗而不汗者，人身之有汗，如天地之有雨，天地陰陽和而後雨，人身亦陰陽和而後汗。此證兩尺脈甚弱，陽升而陰不應，是以不能作汗，當用大滋真陰之品，濟陰以應其陽，必能自汗，汗出則病癒矣。然非強發其汗也，強發其汗則汗出必脫，調劑陰陽以聽其自汗，是以汗出必愈也」。



處方：熟懷地黃（二兩）、生懷山藥（一兩）、玄參（一兩）、大甘枸杞（一兩）、甘草（三錢）、真阿膠（四錢）。藥共六味，將前五味煎湯一大碗去渣，入阿膠融化，徐徐分數次溫飲下。

效果：時當上午十點鐘，將藥煎服至下午兩點鐘將藥服完。形狀較前安靜，再診其脈頗有起色，俾再用原方煎湯一大碗，陸續服之，至秉燭時遍身得透汗，其病霍然愈矣。此案曾載於《全國名醫驗案類編》，編輯主任何廉臣對於此案似有疑意，以為誠如案中所述病況，實為不可挽救之證也，故今將此案又登斯編，並細載臨證時問答諸語，以徵此案之事實。且其哲嗣仙莊，後從愚學醫，今已行道津沽，彰彰有聲，其父偶與追述往事，猶不勝感激也。

說明：嘗實驗天地之氣化，恆數十年而一變，醫者臨證用藥，即宜隨氣化而轉移，因病者所得之病已先隨氣轉移也。愚未習醫時，見醫者治傷寒溫病，皆喜用下藥，見熱已傳裡，其大便稍實者，用承氣湯下之則愈，如此者約二十年。及愚習醫學時，其如此治法者則恆多債事，而愚所閱之醫書，又皆係趙氏《醫貫》、《景岳全書》、《馮氏錦囊》諸喜用熟地之書，即外感證亦多喜用之。愚之治癒此證，實得力於諸書之講究，而此證之外，又有重用熟地治癒寒溫之壞證，諸多驗案（三期六卷白虎加人參以山藥代粳米湯後，載有數案可參觀）。此乃用藥適與時會，故用之有效也。且自治癒此證之後，仙閣、魯軒二君，深與愚相契，亦仿用愚方而治癒若干外感之虛證，而一變其從前之用藥矣。後至愚年過四旬，覺

天地之氣化又變，病者多係氣分不足，或氣分下陷，外感中亦多兼見此證，即用白虎湯時多宜加人參方效。其初得外感應發表時，亦恆為加黃耆方效，如是者又有年。乃自民紀十稔以來，病多亢陽，宜用大劑涼潤之藥濟陰以配其陽，其外感實熱之證，多宜用大劑白虎湯，更佐以涼潤之品。且人臟腑之氣化多有升無降，或腦部充血，或夜眠不寐，此皆氣化過升之故，亦即陽亢無制之故，治之者宜鎮安其氣化，潛藏其陽分，再重用涼潤之藥輔之，而病始可治，此誠以天地之氣化又有轉移，人所生之病即隨之轉移，而醫者之用藥自不得不隨之轉移也。由此悟自古名醫所著之書，多有所偏者，非偏也，其所逢之時氣化不同也。愚為濫竽醫界者已五十年，故能舉生平之所經歷而細細陳之也。

【溫病兼喘脹】

邑中牛留里，王义源君之女，年十五歲，於仲春得溫病久不愈。

病因：仲春上旬，感受風溫，醫者診治失宜，遷延旬餘，病益增劇，醫者諉為不治，始延愚為診視。

證候：心下脹滿甚劇，喘不能臥，自言心中乾甚，似難支持，其舌蒼白而微黃，小便赤少，大便從前滑瀉，此時雖不滑瀉，然仍每日下行。脈搏一息五至強，左部弦而有力，右部似大而有力量，然皆不任重按。

診斷：此其溫病之熱，本不甚劇，因病久真陰虧損，致小便不利，所飲之水停於腸胃則脹滿，迫於心下則作喘，其心中自覺乾甚，固係溫病之熱未清，亦足徵其真陰虧損，陰精不能上奉也（《內經》謂陰精上奉，其人壽），當滋其真陰，利其小便，真陰足則以水濟火，而心中自然不乾；小便利則水從下消，而脹滿喘促自愈。至於些些溫病之餘熱，亦可皆隨小便瀉出而不治自愈矣。

處方：鮮白茅根去淨皮及節間細根（六兩銼碎），用水三大碗，煎一沸，俟半點鐘，視其茅根若不沉水底，再煎一沸，至茅根皆沉水底其湯即成。去渣當茶，徐徐溫飲之。

效果：如法煎飲茅根兩日，其病霍然痊愈。蓋白茅根涼潤滋陰，又善治肝腎有熱，小便不利，且具有發表之性，能透溫病之熱外出。一藥而三善備，故單用之而能立建奇功也。然必剖取鮮者用之，且復如此煎法（過煎則無效）方能有效。

凡藥之性，能利水者，多不能滋陰，能下降者，多不能上升，能清裡者，多不能達表。惟茅根既善滋陰，又善利水，既善引水氣下行，又善助腎陰上升。且內清臟腑之熱，外托肌表之邪，而尤善清肺利痰，定其喘逆。蓋凡物體之中空者皆象肺，茅根不但中空，其周圍片上又有十二小孔，是其中空象肺葉，而其片上之小孔又象肺葉上之通氣小管也。因其形與肺肖，是以此證之病兼喘者服之亦愈也。

【溫病兼虛熱】

邑城東趙家莊，劉氏女，年十五歲，於季春患溫病久不愈。

病因：因天氣漸熱，猶勤紡織，勞力之餘出外乘涼，有汗被風遂成溫病。

證候：初得周身發熱，原宜辛涼解肌，醫者竟用熱藥發之，汗未出而熱益甚，心中亦熱而且渴，此時若用大劑白虎加人參湯清之，病亦可愈，而又小心不敢用。惟些些投以涼潤小劑，遷延二十餘日，外感之熱似漸退。然午前稍輕而午後則仍然灼熱，且多日不能飲食，形體異常清瘦，左脈弦細無根，右部關脈稍實，一息六至，舌苔薄而微黃，毫無津液，大便四五日一行，頗乾燥。

診斷：此因病久耗陰，陰虛生熱，又兼外感之熱留滯於陽明之府未盡消也。當以清外感之熱為主，而以滋補真陰之藥輔之。

處方：生石膏（一兩搗細）、野黨參（三錢）、生懷地黃（一兩）、生懷山藥（一兩）、生杭芍（四錢）、滑石（三錢）、甘草（三錢）。共煎湯一大盅，分兩次溫服下。

複診：將藥煎服兩劑後，外感之熱已退，右關脈已平和，惟過午猶微發熱，此其陰分猶虛也，當再滋補其陰分。

處方：玄參（一兩）、生懷山藥（一兩）、甘枸杞（五錢大者）、生杭芍（五錢）、滑石（二錢）、熟地黃（一兩）、生雞內金（一錢黃色的搗）、甘草（二錢）。共煎一大盅，分兩次溫服。

效果：日服藥一劑，連服三日，灼熱痊愈。

說明：按此方於大隊滋陰藥中猶少加滑石者，恐外感之熱邪未盡，引之自小便出也。愚凡治外感之熱兼有虛熱者，恆生山藥與滑石並用，瀉熱補虛一舉兩得，至上有外感燥熱而下焦復滑瀉者，用之以清熱止瀉（宜各用一兩），尤屢次奏效。二藥相伍，原有化合之妙用，若再加芍藥、甘草，即拙擬之滋陰清燥湯，載於三期五卷，可參觀也。

【溫病兼吐血】

滄州大西門外，吳姓媪，年過七旬，偶得溫病兼患吐血。

病因：年歲雖高，家庭事務仍自操勞，因勞心過度，心常發熱，時當季春，有汗受風，遂得溫病，且兼吐血。

證候：三四日間表裡俱壯熱，心中熱極之時，恆吐血一兩口，急飲新汲井泉水，其血即止。舌苔白厚欲黃，大便三日未行，脈象左部弦長，右部洪長，一息五至。

診斷：此證因家務勞心過度，心肝先有蘊熱，又兼外感之熱傳入陽明之府。兩熱相並，逼血妄行，所以吐血，然其脈象火熱雖盛，而正猶不虛，雖在老年，知猶可治，其治法當以清胃腑之熱為主，而兼清其心肝之熱，俾內傷外感之熱俱清，血自不吐矣。

處方：生石膏（三兩軋細）、生懷地黃（一兩五錢）、生懷山藥（一兩）、生杭芍（一兩）、知母（三錢）、甘草（三錢）、烏犀角（一錢五分）、廣三七（二錢軋細）。藥共八味，將前六味煎湯三盅，犀角另煎湯半盅和勻，分三次溫服下。每服藥一次，即送服三七末三分之一。

效果：將藥三次服完，血止熱退，脈亦平和，大便猶未通下，俾煎渣再服，犀角亦煎渣取湯，和於湯藥中服之，大便通下痊愈。

說明：愚平素用白虎湯，凡年過六旬者必加人參，此證年過七旬而不加人參者，以其證兼吐血也。為不用人參，所以重用生山藥一兩，取其既能代粳米和胃，又可代人參稍補益其正氣也。



【溫病兼衝氣上衝】

鄭伯恕，奉天裕盛銘印書局經理，年五十二歲，於季春得溫病，兼衝氣自上衝。

病因：其人素有痰飲，偶有拂意之事，肝火內動，其衝氣即挾痰飲上湧，連連嘔吐痰水。季春之時，因受感冒成溫病。溫熱內傳，觸動衝氣又復上衝。

證候：表裡俱壯熱，嗜飲涼水，痰涎上泛，屢屢咳吐，呃逆噦氣，連連不除，兩脅作脹，舌苔白厚，而中心微黃，大便三日未行，其脈左部弦硬而長，右部洪滑而長，皆重按有力，此溫病之熱，已入陽明之府，又兼肝火挾衝氣上衝也。是以其左脈弦硬為肝火熾盛，其弦硬而長即為衝脈上衝之現象也；其右脈洪滑，為溫熱已入陽明胃腑，其洪滑而長，亦衝氣上衝之現象也。因衝脈雖居於上，而與陽明厥陰皆有連帶之關係也，欲治此證，當重用白虎湯以清陽明之熱，而以瀉肝降衝理痰之品輔之。

處方：生石膏（三兩搗細）、生赭石（一兩軋細）、生龍骨（八錢搗碎）、生牡蠣（八錢搗碎）、白知母（八錢）、生杭芍（六錢）、清半夏（三錢）、厚朴（錢半）、甘草（二錢）、粳米（四錢）。共煎湯三盅，分三次溫飲下。

效果：將藥分三次服完，熱退氣平，痰涎亦減十之七八，脈象亦近平和。其大便猶未通下，遂即原方將石膏、龍骨、牡蠣各減半，再煎服一劑，大便通下，病痊愈。

說明：方書用石膏未有與赭石並用者，即愚生平用石膏亦未嘗與赭石並用，恐其寒涼之性與赭石之重墜者並用，而直趨下焦也。然遇有當用之病則病當之，非人當之。有如此證，不重用石膏，則陽明之大熱不除，不重用赭石，則上逆之衝氣莫制，此所以並用之而無妨礙也。設若此證，但陽明熱實而無衝氣上逆，服此藥後，其大便當即通下，或更至於滑瀉，而陽明胃腑之熱轉難盡消，為其兼有衝氣上逆，故必俟服之第二劑大便始能通下，此正所謂病當之，非人當之之明徵也。

龍骨、牡蠣之性，皆善鎮肝斂衝，以之治痰原非所長，而陳修園謂龍骨、牡蠣同用，能引逆上之火、氾濫之水下歸其宅，為治痰之神品。其所謂痰，皆逆上之火氾濫之水所成，即此證之衝氣上衝，痰飲上泛者是也。是以方中龍骨、牡蠣各重用八錢，輔翼赭石以降逆消痰之功，而非可泛以之治痰也。至於二藥必生用者，非但取其生則性涼能清熱也，《傷寒論》〈太陽篇〉用龍骨、牡蠣者三方，皆表證未罷，後世解者謂「龍骨、牡蠣，斂正氣而不斂邪氣」，是以仲師於表證未罷者亦用之。然三方中之龍骨、牡蠣下皆未注有煨字，其生用可知，雖其性斂正氣不斂邪氣，若煨之則其性過澀，亦必於外感有礙也。且煨之則其氣輕浮，不能沉重下達，以鎮肝斂衝，更可知矣。

瘧疾門

【瘧疾兼陰虛】

吳元躋，天津華新紡紗廠理事，常州人，年三十二歲，於仲秋病瘧久不愈。病因：廠中作工，歇人不歇機器，輪流恆有夜班，暑熱之時，徹夜不眠，辛苦有火，多食涼物，入秋遂發瘧疾。

證候：其瘧初發時，寒熱皆劇，服西藥金雞納霜治癒，旬日瘧復發如前，又服金雞納霜治癒，七八日瘧又發，寒輕熱重，服金雞納霜不愈，服中藥治瘧湯劑亦不愈，遷延旬餘，始求為診治，自言瘧作時發熱固重，即不發瘧之日身亦覺熱，其脈左右皆弦而無力，數逾五至，知其陰分陽分俱虛，而陰分之虛尤甚也。此當培養其氣血而以治瘧之藥輔之。

處方：玄參（一兩）、知母（六錢）、天冬（六錢）、潞參（三錢）、何首烏（三錢）、炙鱉甲（三錢）、常山（錢半酒炒）、柴胡（錢半）、茵陳（錢半）、生薑（三錢）、大棗（三個掰開）。此方於發瘧之前一夕煎服，翌晨煎渣再服，又於發瘧之前四點鐘，送服西藥鹽酸規尼涅（即金雞納霜，以鹽酸制者）半瓦。效果：將藥如法服之，一劑瘧即不發，而有時身猶覺熱，脈象猶數，知其陰分猶虛也。俾用玄參、生懷山藥各一兩，生薑三片，大棗三枚，同煎服，以服至身不發熱時停服。

【瘧疾兼脾脹】

張寶華，住天津特別一區，年十九歲，習英文學生，於孟秋病瘧，愈而屢次反覆。

病因：其人性篤於學，當溽暑放假之時，仍自補習功課，勞心過度，又復受熱過度，兼又多食瓜果以解其熱，入秋遂發瘧疾。

證候：自孟秋中旬病瘧，服西藥金雞納霜治癒，後旬日反覆，又服金雞納霜治癒，後又反覆，服金雞納霜無效。以中藥治癒，隔旬餘病又反覆。服中西藥皆無效，因來社求治於愚，其脈洪滑而實，右部尤甚，自覺心中杜塞滿悶，常覺有熱上攻，其病瘧時，則寒熱平均，皆不甚劇，其大便四日未行。

診斷：此胃間積有熱痰，又兼脾作脹也。方書謂久瘧在肋下結有硬塊名瘧母，其塊不消，瘧即不愈，而西人實驗所結之塊確係脾臟脹大，此證之自覺滿悶，即脾臟脹大也。又方書謂無痰不作瘧，是以治瘧之方多用半夏、常山以理其痰，此證之自覺滿悶且杜塞，又時有熱上攻，實為熱痰充塞於胃脘也。治之者宜消其脾之脹大，清其胃之熱痰，兼以治瘧之品輔之，且更可因其大便不通，驅逐脾之病下行自大便瀉出，其病瘧之根柢可除矣。

處方：川大黃（四錢）、生雞內金（三錢黃色的搗）、清半夏（三錢）、常山（錢半酒炒）、柴胡（錢半）、茵陳（錢半）、甘草（錢半）、淨芒硝（錢半）。藥共八味，將前七味煎湯一盅，衝芒硝服之。其瘧每日一發，在下午七點鐘。宜

於午前早將藥服下，至午後兩三點鐘時，再服西藥鹽酸規尼涅（即金雞納霜經鹽酸制者）半瓦。

效果：前午十點鐘將藥服下，至午後一點時下大便兩次，其心中已不覺悶熱杜塞，遲至兩點將西藥服下，其日瘧遂不發，俾再用生懷山藥一兩，熟萊菔子二錢，生雞內金錢半煎湯，日服一劑，連服數日以善其後。

【瘧疾兼暑熱】

天津鼓樓東，徐姓媪，年近五旬，於季夏得瘧疾。

病因：勤儉持家，中饋事多躬操，且宅旁設有麵粉莊，其飯亦由家出，勞而兼暑，遂至病瘧。

證候：其病間日一發，先冷後熱，其冷甚輕，其熱甚劇。噁心懶食，心中時常發熱，思食涼物，其脈左部弦硬，右部洪實，大便乾燥，小便赤澀，屢次服藥無效。

診斷：此乃肝膽伏有瘧邪，胃腑鬱有暑熱，暑熱瘧邪相並而為寒熱往來，然寒少熱多，此方書所謂陽明熱瘧也。宜祛其肝膽之邪，兼清其胃腑之熱。

處方：生石膏（一兩研細）。均分作三包，其未發瘧之日，頭午用柴胡二錢煎湯送服一包，隔半日許再用開水送服一包，至次日前發瘧五小時，再用生薑三錢煎湯送服一包。

效果：將藥按期服完後，瘧疾即愈，心中發熱、懶食亦愈。蓋石膏善清胃熱，兼能清肝膽之熱，初次用柴胡煎湯送服者，所以和解少陽之邪也。至三次用生薑煎湯送服者，是防其瘧疾將發與太陽相並而生寒也。

【瘧痢兼證】

劉星垣，天津津浦路機械廠中工師，年三十二歲，於季秋患瘧又兼下痢。

病因：因軍事繁多，需車孔亟，機輪壞處，須得急速收拾，忙時恆徹夜不眠，勞苦過甚，遂至下痢，繼又病瘧。

證候：其痢赤白參半，一晝夜十餘次，下墜腹疼，其瘧間日一發，寒輕熱重，其脈左右皆有弦象，而左關獨弦而有力。

診斷：此證之脈，左右皆弦者，病瘧之脈，大抵如此。其左關獨弦而有力者，其病根在肝膽也。為肝膽有外受之邪，是以脈現弦象，而病瘧為其所受之邪為外感之熱邪，是以左關脈象弦而有力，其熱下迫腸中而下痢，擬清肝膽之熱，散其外感之邪，則瘧痢庶可同愈。

處方：生杭芍（一兩）、山楂片（三錢）、茵陳（二錢）、生麥芽（二錢）、柴胡（錢半）、常山（錢半酒炒）、草果（錢半搗碎）、黃芩（錢半）、甘草（二錢）、生薑（三片）。煎湯一大盅，於不發瘧之日晚間服之，翌晨煎渣再服一次。

效果：將藥如法服後，瘧痢皆愈。又為開生懷山藥一兩，生杭芍三錢，黃色生雞內金一錢，俾日煎服一劑，以滋陰、培氣、化痰，連服數日以善其後。

霍亂門

【霍亂兼轉筋】

王格言，鹽山人，年三十八歲，在天津南開開義聚成鐵工廠，於季冬得霍亂證。

病因：廠中臘底事務煩雜，勞心過度，暗生內熱，又兼因怒激動肝火，怒猶未歇，遽就寢睡，至一點鐘時，覺心中擾亂，腹中作疼，移時則吐瀉交作，遂成霍亂。

證候：心中發熱而渴，噁心怔忡，飲水須臾即吐，腹中時疼時止，疼劇時則下瀉，瀉時異常覺熱，偶有小便，熱亦如斯，有時兩腿筋轉，然不甚劇，其脈象無力，卻無閉塞之象。

診斷：霍亂之證，恆有脈象無火而其實際轉大熱者，即或脈閉身冷，顯露寒涼之象，亦不可遽以涼斷。此證脈象不見有熱，而心中熱而且渴，二便尤甚覺熱，其為內蘊實熱無疑，至其脈不見有熱象者，以心臟因受毒麻痺，而機關之啟閉無力也。擬用大劑寒涼清其內熱，而輔以解毒消菌之品。

處方：生石膏（三兩搗細）、生杭芍（八錢）、清半夏（五錢溫水淘三次）、生懷山藥（五錢）、嫩竹茹（三錢碎的）、甘松（二錢）、甘草（三錢）。共煎湯三盅，分三次溫服下。每次送服衛生防疫寶丹五十粒。方載後方中。甘松亦名



甘松香，即西藥中之纈草也。《本草綱目》謂「馬氏《開寶本草》載其主惡氣，卒心腹痛滿」，西人謂其善治轉筋，是以為治霍亂要藥。且其性善熏勞瘵，誠有解毒除菌之力也。

複診：將藥分兩次服完，吐瀉、腹疼、轉筋諸證皆愈。惟心中猶覺熱作渴，二便仍覺發熱，診其脈較前有力，顯呈有火之象，蓋其心臟至此已不麻痺，啟閉之機關靈活，是以脈象更改也。其猶覺熱與渴者，因係餘火未清，而吐瀉之甚者最足傷陰，陰分傷損，最易生熱，且善作渴，此不可但治以瀉火之涼藥也，擬兼投以大滋真陰之品。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（一兩）、北沙參（一兩）、離中丹（五錢）。藥共四味，將前三味煎湯一大盅，送服離中丹一半，遲四點鐘再將藥渣煎湯一大盅，送服其餘一半。離中丹載虛勞喘嗽門葉案中。

效果：將藥分三次服完，熱退渴止，病遂痊愈。

說明：霍亂之證，原陰陽俱有。然愚五十年經驗以來，知此證屬陽，而宜治以涼藥者十居其八；此證屬陰，而宜治以熱藥者十居其一；此證屬半陰半陽，當涼熱之藥並用，以調劑其陰陽者，又十居其一。而後世論者，恆以《傷寒論》所載之霍亂為真霍亂，至於以涼藥治癒之霍亂，皆係假霍亂，不知《傷寒論》對於霍亂之治法，亦非專用熱藥也。有如其篇第七節云「霍亂頭痛、發熱、身疼痛、熱多，欲飲水者五苓散主之。寒多，不用水者理中丸主之」。夫既明言熱多寒多，

是顯有寒熱可分也。雖所用之五苓散中亦有桂枝而份量獨輕，至澤瀉、茯苓、豬苓其性皆微涼，其方原不可以熱論也。且用顯微鏡審察此病之菌，係彎曲桿形，是以此證無論涼熱，惟審察其傳染之毒菌，現彎曲桿形，即為霍亂無疑也。至欲細審此病之涼熱，百不失一，當當參觀三期七卷霍亂門，及五期六卷論霍亂治法篇，自能臨證無誤。

衛生防疫寶丹方：粉甘草細末十兩，細辛細末兩半，香白芷細末一兩，薄荷冰細末三錢，樟腦所升冰片細末二錢，鏡面朱砂三兩，將前五味共和水泛為丸，如薏米粒大晾乾（忌曬），將朱砂研細為衣，勿令餘剩，瓶貯密封。以治霍亂宜服八十粒，不效，遲兩三點鐘可再服八十粒，無論霍亂涼熱，服之皆宜。

【霍亂吐瀉】

天津榮業大街，李姓媪，年過六旬，於仲夏得霍亂證。

病因：天氣炎熱，有事出門，道途受暑，歸家又復自炊，多受炭氣，遂病霍亂。

證候：噁心嘔吐，腹疼泄瀉，得病不過十小時，吐瀉已十餘次矣。其手足皆涼，手涼至肘，足涼至膝，心中則覺發熱，其脈沉細欲無，不足四至。

診斷：此霍亂之毒菌隨溽暑之熱傳入臟腑也。其心臟受毒菌之麻痺，跳動之機關將停，是以脈沉細且遲；其血脈之流通無力，不能達於四肢，是以手足皆涼；其毒菌侵入腸胃，俾腸胃之氣化失和，兼以臟腑之正氣與侵入之邪氣，互相格拒，是以噁心腹疼，吐瀉交作；其心中發熱者，固係夾雜暑氣，而霍亂之屬陽者，即不夾雜暑氣，亦恆令人心發熱也，此宜治以解毒清熱之劑。

處方：衛生防疫寶丹（百六十粒）、離中丹（四錢）、益元散（四錢）。先將衛生防疫寶丹分三次用開水送服，約半點多鐘服一次，服完三次，其噁心腹疼當愈，嘔吐泄瀉亦當隨愈。愈後若仍覺心中熱者，再將後二味藥和勻，亦分三次用開水送服。每一點鐘服一次，熱退者不必盡服。

效果：將衛生防疫寶丹分三次服完，果噁心、嘔吐、腹疼、泄瀉皆愈。而心中之熱，未見輕減，繼將離中丹、益元散和勻，分三次服完，其熱遂消，病痊愈。

【霍亂脫證】

遼寧小南關，寇姓媪，年過六旬，得霍亂脫證。

病因：孟秋下旬染霍亂，經醫數人調治兩日，病勢垂危，醫者辭不治，其家人來院，懇求往為診治。

證候：其證從前吐瀉交作，至此吐瀉全無，奄奄一息，昏昏似睡，肢體甚涼，六脈全無，詢之猶略能言語，惟覺心中發熱難受。

診斷：此證雖身涼脈閉，而心中自覺發熱，仍當以熱論。其所以身涼脈閉者，因霍亂之毒菌竄入心臟，致心臟行血之機關將停，血脈不達於周身，所以內雖蘊熱而仍身涼脈閉也。此當用藥消其毒菌，清其內熱，並以助心房之跳動，雖危險仍可挽回。

處方：鏡面硃砂（錢半）、粉甘草（一錢細面）、冰片（三分）、薄荷冰（二分）。共研細末，分作三次服，病急者四十分鐘服一次，病緩者一點鐘服一次，開水送下。

複診：將藥末分三次服完，心熱與難受皆愈強半。而脈猶不出，身仍發涼，知其年過花甲，吐瀉兩日，未進飲食，其血衰憊已極，所以不能鼓脈外出，以溫暖於周身。

處方：野臺參（一兩）、生懷地黃（一兩）、生懷山藥（一兩）、淨萸肉（八錢）、甘草（三錢蜜炙）。煎湯兩大盅，分兩次溫服。

方解：方中之義，用臺參以回陽，生懷地黃以滋陰，萸肉以斂肝之脫（此證吐瀉之始，肝木助邪侮土、至吐瀉之極，而肝氣轉先脫），炙甘草以和中氣之瀉。至於生山藥其味甘性溫，可助臺參回陽，其汁漿稠潤，又可助地黃滋陰，且此證胃中毫無穀氣，又可惜之以培養脾胃，俾脾胃運化諸藥有力也。

效果：將藥兩次服完，脈出，周身亦熱，惟自覺心中餘火未清，知其陰分猶虧不能潛陽也。又用玄參、沙參、生山藥各六錢，煎湯服下，病遂痊愈。

說明：此證初次所服之藥末，原名急救回生丹，載在三期七卷霍亂門。因民紀八稔孟秋，霍亂盛行，時在遼寧立達醫院，擬得此方，登報廣告，凡用此方者皆愈。時桓仁友人袁霖普，為河北故城縣尹，用此方施藥二百六十劑，即救愈二百六十人，復將此方遍寄河北、山東各縣署，又呈明省長，登於《北洋公報》。次年河北南南省又有霍亂證，復為寄去衛生防疫寶丹（見前王案中），袁君按方施藥六大料，救愈千人。又將其方傳遍各處，呈明省長及警務處長，登之《北洋公報》，袁君可為好行其德者矣。大抵前方治霍亂陽證最宜，後方則無論陰陽證及陰陽參半之證用之皆效。

【霍亂暴脫證】

邑北境故城縣，劉氏婦，年近四旬，得霍亂暴脫證。

病因：受妊五六個月，時當壬寅秋令，霍亂盛行，因受傳染，吐瀉一晝夜，病似稍愈，而胎忽滑下。自覺精神頓散，心搖搖似不能支持，時愚在其鄰村訓蒙，遂急延為診視。

證候：迨愚至欲為診視，則病勢大革，殮服已備，著於身將舛諸床，病家辭以不必入視。愚曰「此係暴脫之證，一息尚存，即可挽回」，遂入視之，氣息若無，大聲呼之，亦不知應，脈象模糊，如水上浮麻，莫辨至數。

診斷：此證若係陳病狀況，至此定難挽回，惟因霍亂吐瀉已極，又復流產，則氣血暴脫，故仍可用藥挽救。夫暴脫之證，其所脫者元氣也。凡元氣之上脫必由於肝（所以人之將脫者，肝風先動），當用酸斂之品直趨肝臟以收斂之，即所以杜塞元氣上脫之路，再用補助氣分之藥輔之，雖病勢垂危至極點，亦可挽回性命於呼吸之間。

處方：淨杭莢肉（二兩）、野黨參（一兩）、生懷山藥（一兩）。共煎湯一大盅，溫服。方雖開就而藥局相隔數里，取藥迫不及待，幸其比鄰劉翁玉珍是愚表兄，有愚所開藥方，取藥二劑未服，中有莢肉共六錢，遂急取來暴火煎湯灌之。

效果：將藥徐徐灌下，須臾，氣息稍大，呼之能應，又急煎渣灌下，較前尤明瞭，問其心中何如，言甚難受，其音惟在喉間，細聽可辨。須臾，藥已取到，

急煎湯兩茶杯，此時已自能服藥。俾分三次溫服下，精神頓復，可自動轉，繼用生山藥細末八錢許，煮作茶湯，調以白糖，令其適口，當點心服之，日兩次，如此將養五六日以善其後。

說明：按人之氣海有二，一為先天之氣海，一為後天之氣海。《內經》論四海之名，以膻中（即膈上）為氣海，所藏者大氣，即宗氣也，養生家及針灸家皆以膻下為氣海，所藏者元氣，即養生家所謂祖氣也。此氣海之形狀，若倒提雞冠花形，純係脂膜結成而中空（剖解豬腹者，名之為雞冠油），肝臟下垂之脂膜與之相連，是以元氣之上行，原由肝而敷布，而元氣之上脫，亦即由肝而疏泄也（《內經》謂「肝主疏泄」）。惟重用萸肉以酸斂防其疏泄，藉以杜塞元氣上脫之路，而元氣即可不脫矣，所最足明徵者，若初次即服所開之方以治癒此證，鮮不謂人參之功居多，乃因取藥不及，遂單服萸肉，且所服者只六錢，即能建此奇功，由此知萸肉救脫之力，實遠勝人參。蓋人參以救無氣之下脫，猶足恃，而以救元氣之上脫，若單用之，轉有氣高不返之弊（說見俞氏《寓意草》），以其性溫而兼升也。至萸肉則無論上脫下脫，用之皆效。蓋元氣之上脫由於肝，其下脫亦由於肝，誠以肝能為腎行氣（《內經》謂「肝行腎之氣」），即能瀉元氣自下出也。為其下脫亦由於肝，故亦可重用萸肉治之也。

或問「同為元氣之脫，何以辨其上脫下脫」？答曰「上脫與下脫，其外現之證可據以辨別者甚多。今但即脈以論，如此證脈若水上浮麻，此上脫之徵也。若

係下脫其脈即沉細欲無矣。且元氣上脫下脫之外，又有所謂外脫者，周身汗出不止者是也。莧肉最善斂汗，是以莧肉亦能治之。三期一卷來復湯後載有治驗之案數則，可參觀也。



【懷妊受溫病】

長安縣尹，何麟皋君夫人，年三十二歲，受妊五月，於孟秋感受溫病。

病因：懷妊畏熱，夜眠當窗，未上窗幔，自窗紗透風，感冒成溫。

證候：初病時調治失宜，溫熱傳裡，陽明府實，延醫數人，皆言病原當用大涼之藥，因懷妊實不敢輕用，繼延愚為診視，見其面紅氣粗，舌苔白厚，中心已黃，大便乾燥，小便短赤，診其脈左右皆洪滑而實，一息五至強。

診斷：據此證狀脈象觀之，不但陽明胃府之熱甚實，即肝膽之熱亦甚盛。想其未病之前，必曾怒動肝火，若不急清其熱，勢將迫血妄行，危險即在目前。治以白虎加人參湯，以白虎湯解其熱，加參以保其胎，遂為疏方俾急服之。

處方：生石膏（三兩搗細）、野黨參（四錢）、生懷地黃（一兩）、生懷山藥（一兩）、生杭芍（五錢）、甘草（三錢）。共煎湯三盅，分三次溫服下。

方解：按此方雖非白虎加人參湯原方，而實以生地黃代知母，以生山藥代粳米，而外加芍藥也。蓋知母、地黃同能滋陰退熱，而知母性滑，地黃則饒有補腎之力（八味丸中乾地黃即藥房中之生地黃），粳米與山藥皆有濃汁能和胃，而粳米汁濃而不粘，山藥之汁濃而且粘，大有固腎之力。如此通變原方，自於胎妊大有益也。外加芍藥者，欲借之以清肝膽之熱也。

複診：將藥分三次服完，翌日午前大便通下一次，熱已退十之七八，脈象已非洪實，仍然有力，心中仍覺發熱，擬再用涼潤滋陰之品清之。

處方：玄參（一兩）、生懷地黃（一兩）、天花粉（五錢）、生杭芍（五錢）、鮮茅根（四錢）、甘草（二錢）。共煎湯兩盅，分兩次溫服下。

效果：將藥煎服兩劑，病遂霍然痊愈。

說明：凡外感有熱之證，皆右部之脈盛於左部之脈，至陽明府實之證，尤必顯然於右部見之，因胃府之脈原候於右關也。今此證為陽明府實，其右部之脈洪滑而實宜矣。而左部之脈亦現此象，是以知其未病之先，肝中先有鬱熱，繼為外感之熱所激，則勃然發動而亦現洪滑而實之脈象也。

【受妊嘔吐】

天津一區，王氏婦，年二十六歲，受妊後，嘔吐不止。

病因：素有肝氣病，偶有拂意，激動肝氣，恆作嘔吐，至受妊後，則嘔吐連連不止。

證候：受妊至四十日時，每日必吐，然猶可受飲食，後則吐浸加重，迨至兩月以後勺水不存，及愚診視時，不能食者已數日矣。困頓已極，不能起床，診其脈雖甚虛弱，仍現滑象，至數未改，惟左關微浮，稍似有力。

診斷：惡阻嘔吐，原妊婦之常，茲因左關獨浮而有力，知係肝氣膽火上衝，是以嘔吐特甚。有謂惡阻嘔吐雖甚劇無礙者，此未有閱歷之言。愚自行道以來，耳聞目睹，因此證僨事者已有多人，甚勿忽視，此宜急治以鎮肝降胃之品，不可因其受妊而不敢放膽用藥也。

處方：生赭石（兩半軋細）、黨參（三錢）、生懷山藥（一兩）、生懷地黃（八錢）、生杭芍（六錢）、大甘枸杞（五錢）、淨萸肉（四錢）、青黛（三錢）、清半夏（六錢）。藥共九味，先將半夏用溫水淘三次，將礬味淘淨，用煮菜小鍋煮取清湯一盅，調以麵粉煮作茶湯，和以白糖令其適口，服下其吐可止。再將餘藥八味煎湯一大盅，分三次溫服。

複診：將藥連服兩劑，嘔吐即止，精神氣力稍振，可以起坐，其脈左關之浮已去，六部皆近和平。惟仍有噁心之時，懶於飲食，擬再治以開胃、理肝、滋陰、清熱之劑。

處方：生懷山藥（一兩）、生杭芍（五錢）、冬瓜仁（四錢搗碎）、北沙參（四錢）、碎竹茹（三錢）、淨青黛（二錢）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，分兩次溫服下。

效果：將藥連服三劑，病遂痊愈，體漸復原，能起床矣。

或問「赭石《別錄》稱其能墜胎，原為催生要藥，今重用之以治惡阻嘔吐，獨不慮其有墜胎之弊乎」？答曰「《別錄》謂其能墜胎者，為赭石之質重墜，可墜已成形之胎也，若胎至五六月時誠然忌之。若在三月以前之胎，雖名為胎，不過血脈一團凝聚耳，此時惟忌用破血之品，而赭石毫無破血之性。且《本經》謂治赤沃漏下，李氏《綱目》謂治婦人血崩，則其性可知。且其質雖重墜，不過鎮降其肝胃上逆之氣，使歸於平，是重墜之力，上逆之氣當之，即病當之，非人當之也。況又與潞參、萸肉、山藥諸補益之藥並用，此所謂節制之師，是以戰則必勝也。」

【懷妊得溫病兼痰喘】

天津北閣西，董紹軒街長之夫人，年三十四歲，懷妊，感受溫病兼有痰作喘。病因：受妊已逾八月，心中常常發熱，時當季春，喜在院中乘涼，為風襲遂成此證。

證候：喘息有聲，呼吸迫促異常，晝夜不能少臥，心中煩躁，舌苔白厚欲黃。左右寸脈皆洪實異常，兩尺則按之不實，其數八至，大便乾燥，小便赤澀。

診斷：此證前因醫者欲治其喘，屢次用麻黃發之，致其元氣將脫，又兼外感之熱已入陽明，其實熱與外感之氣相並上衝，是以前脈上盛下虛，喘逆若斯迫促，脈七至即為絕脈，今竟八至，恐難挽回，欲辭不治而病家再三懇求，遂勉為擬方。以清其熱，止其喘，挽救其氣化之將脫。

處方：淨莢肉（一兩）、生懷地黃（一兩）、生龍骨（一兩搗碎）、生牡蠣（一兩搗碎）。將四味煎湯，送服生石膏細末三錢，遲五點鐘若熱猶不退，煎渣再服，仍送服生石膏細末三錢。

複診：服藥頭煎次煎後，喘愈強半，遂能臥眠，迨至黎明胎忽滑下，且係死胎，再診其脈較前更數，一息九至，然不若從前之滑實，而尺脈則按之即無。其喘似又稍劇，其心中煩躁依舊，且覺怔忡，不能支持，此乃肝腎陰分大虧，不能維繫陽分而氣化欲渙散也，當峻補肝腎之陰，兼清外感未盡之餘熱。

處方：生懷山藥（六兩）、玄參（兩半）、熟雞子黃（六個捻碎）、真西洋參（二錢搗為粗末）。先將山藥煎十餘沸，再入玄參、雞子黃煎湯一大碗，分多次徐徐溫飲下，每飲一次，送服洋參末少許，飲完再煎渣取湯接續飲之，洋參末亦分多次送服，勿令餘剩。

國產之參，皆有熱性，惟西洋參則補而不熱，以治溫熱病氣分虛者甚宜。然此參偽者極多，其性甚熱，誤用之足以僨事。惟其皮色黃，皮上皆係橫紋，密而且細，其質甚堅者方真，若無真西洋參，可權用潞黨參代之。剪成小塊用藥湯送服。

三診：翌日又為診視，其脈已減去三至為六至，尺脈按之有根，知其病已回生。問其心中已不怔忡，惟其心中猶覺發熱，此非外感之熱，乃真陰未復之熱也。當純用大滋真陰之品以復其陰。

處方：玄參（三兩）、生懷山藥（兩半）、當歸（四錢）、真西洋參（二錢搗為粗末）。將前三味共煎湯一大碗，分多次溫飲下，每飲一次，送服洋參末少許。

四診：前方服一劑，心中已不覺熱，惟腹中作疼，問其惡露所下甚少，當係瘀血作疼，治以化瘀血之品，其疼當自愈。

處方：生懷山藥（一兩）、當歸（五錢）、懷牛膝（五錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、桃仁（二錢）、紅花（錢半）、真西洋參（二錢搗為粗末）。將前六味共煎湯一大盅，送服洋參末一半，至煎渣服時再送服餘一半。

效果：前方日服一劑，服兩日病遂痊愈。

或問「他方用石膏皆與諸藥同煎，此證何以獨將石膏為末送服」？答曰「石膏原為石質重墜之品，此證之喘息迫促，呼吸惟在喉間，分毫不能下達，幾有將脫之勢。石膏為末服之，欲借其重墜之力，以引氣下達也。且石膏末服，其退熱之力一錢可抵半兩，此乃屢經自服以試驗之。而確能知其如斯，此證一日服石膏末至六錢，大熱始退。若用生石膏三兩，同諸藥煎湯，病家將不敢服，此為救人計，不得不委曲以行其術也」。

或問「產後忌用寒涼，第三方用於流產之後，方中玄參重用三兩，獨不慮其過於苦寒乎」？答曰「玄參細嚼之其味甘而微苦，原甘涼滋陰之品，實非苦寒之藥。是以《本經》謂其微寒，善治產乳餘疾，故產後忌用涼藥而玄參則毫無所忌也。且後世本草謂大便滑瀉者忌之，因誤認其為苦寒也。而此證服過三兩玄參之後，大便仍然乾燥，則玄參之性可知矣」。

或問「此證之胎已逾八月，即係流產，其胎應活，何以產下竟為死胎」？答曰「胎在腹中，原有臍呼吸，實借母之呼吸以為呼吸，是以凡受妊者其吸入之氣，

可由任脈以達於胎兒臍中，此證因吸入之氣分毫不能下達，則胎失所蔭，所以不能資生也。為其不能資生，所以下降，此非因服藥而下降也」。



【懷妊受溫病兼下痢】

天津一區橘街，張氏婦，年近三旬，懷妊，受溫病兼下痢。

病因：受妊已六個月，心中恆覺發熱，繼因其夫本為顯宦，時事變革，驟爾賦閒，遂致激動肝火，其熱益甚，又薄為外感所束，遂致溫而兼痢。

證候：表裡俱壯熱無汗，心中熱極，思飲冰水，其家人不敢予。舌苔乾而黃，頻飲水不濡潤，腹中常覺疼墜，下痢赤多白少，間雜以鮮血，一晝夜十餘次。其脈左部弦長，右部洪滑，皆重診有力，一息五至。

診斷：其脈左部弦長有力者，肝膽之火熾盛也。惟其肝膽之火熾盛下迫，是以不但下痢赤白，且又兼下鮮血，腹疼下墜。為其右部洪滑有力，知溫熱已入陽明之府，是以舌苔乾黃，心為熱迫，思飲冰水。所猶喜者，脈象雖熱，不至甚數，且又流利無滯，胎氣可保無恙也，宜治以白虎加人參湯以解溫病之熱，而更重用芍藥以代方中知母，則肝熱能清而痢亦可愈矣。

處方：生石膏（三兩搗細）、大潞參（五錢）、生杭芍（一兩）、粳米（五錢）、甘草（三錢）。共煎湯三盅，分三次溫飲下。

複診：將藥分三次服完，表裡之熱已退強半，痢愈十之七八，腹中疼墜亦大輕減，舌苔由黃變白，已有津液，脈象仍然有力而較前則和緩矣。遂即原方為之加減俾再服之。

處方：生石膏（二兩搗細）、大潞參（三錢）、生懷山藥（八錢）、生杭芍（六錢）、白頭翁（四錢）、秦皮（三錢）、甘草（二錢）。共煎湯三盅，分三次溫飲下。

方解：按此方即白虎加人參湯與白頭翁湯相並為一方也。為方中有芍藥、山藥，是以白虎加人參湯中可省去知母、粳米；為白虎加人參湯中之石膏，可抵黃連、黃柏，是以白頭翁湯中止用白頭翁、秦皮，合用之則一半治溫，一半治痢，安排周匝，步伍整齊，當可奏效。

效果：將藥如法服兩劑，病遂痊愈。

或問「《傷寒論》用白虎湯之方定例，汗吐下後加人參，渴者加人參。此案之證非當汗吐下後，亦未言渴，何以案中兩次用白虎皆加人參乎？」答曰「此案證兼下痢，下痢亦下之類也。其舌苔乾黃毫無津液，舌乾無液，亦渴之類也。且其溫病之熱，不但入胃，更隨下痢陷至下焦，永無出路，惟人參與石膏並用，實能升舉其下陷之溫熱而清解消散之，不至久留下焦以耗真陰。況此證溫病與下痢相助為虐，實有累於胎氣，幾至於莫能支，加人參於白虎湯中，亦所以保其胎氣使無意外之虞也。」

【產後下血】

天津河東十字街東，李氏婦，年近四旬，得產後下血證。

病因：身形素弱，臨盆時又勞碌過甚，遂得斯證。

證候：產後未見惡露，純下鮮血，屢次延醫服藥，血終不止，及愚診視，已二十八日矣。其精神衰憊，身體羸弱，周身時或發灼，自覺心中怔忡莫支。其下血劇時，腰際疼甚，呼吸常覺短氣，其脈左部弦細，右部沉虛，一分鐘八十二至。診斷：即此脈證細參，當係血下陷，氣亦下陷，從前所服之藥，但知治血，不知治氣，是以屢次服藥無效，此當培補其氣血，而以收斂固澀之藥佐之。

處方：生箭耆（一兩）、當歸身（一兩）、生懷地黃（一兩）、淨萸肉（八錢）、生龍骨（八錢搗碎）、桑葉（十四片）、廣三七（三錢細末）。藥共七味，將前六味煎湯一大盅，送服三七末一半，至煎渣再服時，仍送服其餘一半。

方解：此乃傅青主治老婦血崩之方，愚又為之加生地黃、萸肉、龍骨也。其方不但善治老婦血崩，即用以治少年者亦效，初但用其原方，後因治一壯年婦人患血崩甚劇，投以原方不效，且服藥後心中覺熱，遂即原方為加生地黃一兩則效。從此，愚再用其方時，必加生地黃一兩，以濟黃耆之熱，皆可隨手奏效。今此方中又加萸肉、龍骨者，因其下血既久，下焦之氣化不能固攝，加萸肉、龍骨所以固攝下焦之氣化也。

複診：服藥兩劑，下血與短氣皆愈強半，諸病亦皆見愈，脈象亦有起色，而起坐片時自覺筋骨酸軟，此仍宜治以培補氣血，固攝下焦氣化，兼壯筋骨之劑。

處方：生箭耆（一兩）、龍眼肉（八錢）、生懷地黃（八錢）、淨萸肉（八錢）、胡桃肉（五錢）、北沙參（五錢）、升麻（一錢）、鹿角膠（三錢）。藥共八味，將前七味煎湯一大盅，鹿角膠另燉化兌服。方中加升麻者，欲以助黃官升補氣分使之上達，兼以升提血分使不下陷也。

三診：將藥連服三劑，呼吸已不短氣，而血分則猶見少許，然非鮮血而為從前未下之惡露，此吉兆也。若此惡露不下，後必為恙，且又必須下淨方妥，此當兼用化瘀之藥以催之速下。

處方：生箭耆（一兩）、龍眼肉（八錢）、生懷地黃（八錢）、生懷山藥（六錢）、胡桃肉（五錢）、當歸（四錢）、北沙參（三錢）、鹿角膠（四錢）、廣三七（三錢細末）。藥共九味，先將前七味煎湯一大盅，鹿角膠另燉化兌湯藥中，送服三七末一半，至煎渣再服時，仍將所餘之鹿角膠燉化兌湯藥中，送服所餘之三七末。

方解：按此方欲用以化瘀血，而不用桃仁、紅花諸藥者，恐有妨於從前之下血也。且此方中原有善化瘀血之品，鹿角膠、三七是也。蓋鹿角之性原善化瘀生新，熬之成膠其性仍在，前此之惡露自下，實多賴鹿角膠之力，今又助之以三七，亦化瘀血不傷新血之品，連服數劑，自不難將惡露盡化也。

效果：將藥連服五劑，惡露下盡，病遂痊愈。

【產後手足抽掣】

天津大夥巷，於氏婦，年過三旬，於產後得四肢抽掣病。

病因：產時所下惡露甚少，至兩日又分毫惡露不見，遲半日遂發抽掣。

證候：心中發熱，有時覺氣血上湧，即昏然身驅後挺，四肢抽掣。其腹中有時作疼，令人揉之則少瘥，其脈左部沉弦，右部沉澀，一息四至強。

診斷：此乃肝氣膽火，挾敗血上衝以瘀塞經絡，而其氣火相並上衝不已，兼能妨礙神經，是以昏然後挺而四肢作抽掣也。當降其敗血，使之還為惡露瀉出，其病自愈。

處方：懷牛膝（一兩）、生杭芍（六錢）、丹參（五錢）、玄參（五錢）、蘇木（三錢）、桃仁（三錢去皮）、紅花（二錢）、土鱉蟲（五大個搗）、紅娘蟲（即樗雞，六大個搗）。共煎湯一盅，溫服。

效果：此藥煎服兩劑，敗血盡下，病若失。

【產後癥瘕】

邑城西韓家莊，韓氏婦，年三十六歲，得產後癥證。

病因：生產時惡露所下甚少，未嘗介意，遲至半年遂成癥瘕。

證候：初因惡露下少，彌月之後漸覺少腹脹滿，因係農家，時當麥秋忙甚，未暇延醫服藥。又遲月餘則脹而且疼，始服便方，數次皆無效。後則疼處按之覺硬，始延醫服藥，延醫月餘，其疼似減輕而硬處轉見增大，月信自產後未見。診其脈左部沉弦，右部沉澀，一息近五至。

診斷：按生理正則，產後兩月，月信當見，有孩吃乳，至四月亦當見矣。今則已半載月信未見，因其產後未下之惡露，結癥瘕於衝任之間，後生之血遂不能下為月信，而盡附益於其上，俾其日有增長，是以積久而其硬處益大也。是當以消癥瘕之藥消之，又當與補益之藥並用，使之消癥瘕而不至有傷氣化。

處方：生箭耆（五錢）、天花粉（五錢）、生懷山藥（五錢）、三稜（三錢）、莪朮（三錢）、當歸（三錢）、白朮（二錢）、知母（二錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、桃仁（二錢去皮）。共煎湯一大盅，溫服。

複診：將藥連服六劑，腹已不疼，其硬處未消，按之覺軟，且從前食量減少，至斯已復其舊。其脈亦較前舒暢，遂即原方為之加減俾再服之。

處方：生箭耆（五錢）、天花粉（五錢）、生懷山藥（四錢）、三稜（三錢）、莪朮（三錢）、懷牛膝（三錢）、野黨參（三錢）、知母（三錢）、生雞內金（二錢黃色的搗）、生水蛭（二錢搗碎）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服十五六劑（隨時略有加減），忽下紫黑血塊若干，病遂痊愈。說明：婦女癥瘕治癒者甚少，非其病之果難治也。《金匱》下瘀血湯，原可為治婦女癥瘕之主方，特其藥性猛烈，原非長服之方，於癥瘕初結未堅硬者，服此藥兩三次或可將病消除，若至累月累年，癥瘕結如鐵石，必須久服，方能奏效者，下瘀血湯原不能用，乃醫者亦知下瘀血湯不可治堅結之癥瘕，遂改用桃仁、紅花、丹參、赤芍諸平和之品；見其癥瘕處作疼，或更加香附、延胡、青皮、木香諸理氣之品，如此等藥用之，以治堅結之癥瘕，可決其雖服至百劑，亦不能奏效。然仗之奏效則不足，傷人氣化則有餘，若視為平和而連次服之，十餘劑外，人身之氣化即暗耗矣，此所以治癥瘕者十中難愈二三也。若拙擬之方其三稜、莪朮、水蛭，皆為消癥瘕專藥，即雞內金，人皆用以消食，而以消癥瘕亦甚有力。更佐以參、耆、朮諸補益之品，則消癥瘕諸藥不慮其因猛烈而傷人。且又用花粉、知母以調劑補藥之熱，牛膝引藥下行以直達病所，是以其方可久服無弊，而堅結之癥瘕即可徐徐消除也。至於水蛭必生用者，三期八卷理沖丸後論之最詳。且其性並不猛烈過甚，治此證者，宜放膽用之，以挽救人命。



【血閉成癥】

鄰莊李邊務，劉氏婦，年二十五歲，經血不行，結成癥瘕。

病因：處境不順，心多抑鬱，以致月信漸閉，結成癥瘕。

證候：癥瘕初結時，大如核桃，屢治不消，漸至經閉後則癥瘕浸長。三年之後大如復盂，按之甚硬，漸至飲食減少，寒熱往來，咳嗽吐痰，身體羸弱，亦以為無可醫治待時而已。後忽聞愚善治此證，求為診視。其脈左右皆弦細無力，一息近六至。

診斷：此乃由經閉而積成癥瘕，由癥瘕而浸成虛勞之證也。此宜先注意治其虛勞，而以消癥瘕之品輔之。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（一兩）、生懷地黃（五錢）、玄參（四錢）、沙參（四錢）、生箭耆（三錢）、天冬（三錢）、三稜（錢半）、莪朮（錢半）、生雞內金（錢半黃色的搗）。共煎湯一大盅，溫服。

方解：方中用三稜、莪朮，非但以之消癥瘕也。誠以此證廉於飲食，方中雞內金固能消食，而三稜、莪朮與黃耆並用，更有開胃健脾之功。脾胃健壯，不但善消飲食，兼能運化藥力使病速愈也。

復診：將藥連服六劑，寒熱已癒，飲食加多，咳嗽吐痰亦大輕減。癥瘕雖未見消，然從前時或作疼，今則不復疼矣。其脈亦較前頗有起色，擬再治以半補虛勞半消癥瘕之方。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（一兩）、生懷地黃（八錢）、生箭耆（四錢）、沙參（四錢）、生杭芍（四錢）、天冬（四錢）、三稜（二錢）、莪朮（二錢）、桃仁（二錢去皮）、生雞內金（錢半黃色的搗）。共煎一大盅，溫服。

三診：將藥連服六劑，寒熱已愈，飲食加多，咳嗽吐痰皆愈。身形已漸強壯，脈象又較前有力，至數復常，至此虛勞已癒，無庸再治，其癥瘕雖未見消，而較前頗軟。擬再專用藥消之。

處方：生箭耆（六錢）、天花粉（五錢）、生懷山藥（五錢）、三稜（三錢）、莪朮（三錢）、懷牛膝（三錢）、潞黨參（三錢）、知母（三錢）、桃仁（二錢去皮）、生雞內金（二錢黃色的搗）、生水蛭（二錢搗碎）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：將藥連服十二劑，其瘀血忽然降下若干，紫黑成塊，雜以脂膜，癥瘕全消。為其病積太久，恐未除根，俾日用山楂片兩許，煮湯衝紅蔗糖，當茶飲之以善其後。

【產後溫病】

天津一區，李氏婦，年二十七歲，於中秋節後得溫病。

病因：產後六日，更衣入廁，受風。

證候：自廁返後，覺周身發冷，更數小時，冷已又復發熱，自用生薑，紅糖煎湯乘熱飲之，周身得汗稍愈，至汗解而其熱如故。遷延兩日熱益盛，心中煩躁作渴，急延愚為診視，見其滿面火色，且微喘，診其脈象洪實，右部尤甚，一分鐘九十三至，舌苔滿佈白而微黃，大便自病後未行。

診斷：此乃產後陰虛生內熱，略為外感拘束而即成溫病也。其心中煩躁而渴者，因產後腎陰虛損，不能上達舌本，且不能與心火相濟也。其微喘者，因腎虛不能納氣也。其舌苔白而微黃者，熱已入陽明之府也。其脈洪實兼數者，此陽明府熱已實，又有陰虛之象也。宜治以白虎加人參湯更少為變通之，方於產後無礙。

處方：生石膏（三兩搗細）、野臺參（四錢）、玄參（一兩）、生懷山藥（八錢）、甘草（三錢）。共煎湯三盅，分三次溫飲下。

方解：按此方即白虎加人參湯，以玄參代知母，生山藥代粳米也。傷寒書中用白虎湯之定例，汗吐下後加人參，以其虛也；渴者加人參，以其津液不上潮也，至產後則虛之尤虛，且又作渴，其宜加人參明矣。至以玄參代知母者，因玄參《本經》原謂其治產乳餘疾也。以生山藥代粳米者，因山藥之甘溫既能代粳米和胃，

而其所含多量之蛋白質，更能補益產後者之腎虛也。如此變通，其方雖在產後用之，可毫無妨礙，況石膏《本經》原謂其微寒，且明載其主產乳乎。

復診：服藥一劑，熱退強半，渴喘皆愈。脈象已近和平，大便猶未通下，宜大滋真陰，以退其餘熱，而復少加補氣之藥佐之，誠以氣旺則血易生，即真陰易復也。

處方：玄參（二錢）、野黨參（五錢）。共煎湯兩盅，分兩次溫飲下。  
效果：將藥煎服兩劑，大便通下，病遂痊愈。

【流產後滿悶】

天津一區，張姓婦年二十六歲，流產之後，胃脘滿悶，不能進食。

病因：孕已四月，自覺胃口滿悶，倩人以手為之下推，因用力下推至臍，遂至流產。

證候：流產之後，忽覺氣血上湧充塞胃口，三日之間分毫不能進食，動則作喘，頭目眩暈，心中怔忡，脈象微弱，兩尺無根。其夫張耀華，曾因肺病吐膿血，經愚治癒，因相信復急延為診治。

診斷：此證因流產後，下焦暴虛，腎氣不能固攝衝氣，遂因之上衝。夫衝脈原上隸陽明胃府，其氣上衝，胃氣即不能下降（胃氣以息息下行為順），是以胃中脹滿，不能進食，治此等證者，若用開破之藥開之，脹滿去而其人或至於虛脫。宜投以峻補之劑，更用重鎮之藥輔之以引之下行，則上之鬱開而下焦之虛亦即受此補劑之培養矣。

處方：大潞參（四錢）、生赭石（一兩軋細）、生懷山藥（一兩）、熟懷地黃（一兩）、玄參（八錢）、淨萸肉（八錢）、紫蘇子（三錢炒搗）、生麥芽（三錢）。共煎湯一大盅，分兩次溫服下。

方解：按方中用生麥芽，非取其化食消脹也。誠以人之肝氣宜升，胃氣宜降，凡用重劑降胃，必須少用升肝之藥佐之，以防其肝氣不舒。麥芽生用原善舒肝，況其性能補益胃中酸汁，兼為化食消脹之妙品乎。

愈。

效果：將藥煎服一劑，胃中豁然頓開，能進飲食，又連服兩劑，喘與怔忡皆

【月閉兼溫疹靨急】

天津城裡丁家胡同，楊氏女，年十五歲，先患月閉，繼又染溫疹靨急。

病因：自十四歲月信已通，後因肝氣不舒，致月信半載不至，繼又感發溫疹，初見點即靨。

證候：初因月信久閉，已發熱瘦弱，懶於飲食，恆倦臥終日不起。繼受溫疹，寒熱往來，其寒時覺體熱減輕，至熱時，較從前之熱增加數倍，又加以疹初見點即靨，其毒熱內攻。心中煩躁怔忡，劇時精神昏憤，恆作譫語，舌苔白而中心已黃，毫無津液。大便數日未行，其脈覺寒時似近閉塞，覺熱時又似洪大而重按不實，一息五至強。

診斷：此證因陰分虧損將成癆瘵，又兼外感內侵，病連少陽，是以寒熱往來，又加以疹毒之熱，不能外透而內攻，是以煩躁怔忡，神昏譫語，此乃內傷外感兩劇之證也。宜用大劑滋其真陰，清其毒熱，更佐以托疹透表之品當能奏效。

處方：生石膏（二兩搗細）、野臺參（三錢）、玄參（一兩）、生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（六錢）、知母（四錢）、連翹（三錢）、蟬蛻（二錢）、茵陳（二錢）、殭蠶（錢半）、鮮蘆根（四錢）。共煎湯三盅，分三次溫飲下。囑其服一劑熱不退時，可即原方再服，若服至大便通下且微溏時，即宜停藥勿服。

複診：將藥煎服兩劑，大熱始退，不復寒熱往來，疹未表出而心已不煩躁怔忡。知其毒由內消，當不變生他故。大便通下一次亦未見溏，再診其脈已近和平，

惟至數仍數，和其外感已愈十之八九，而真陰猶未復也。擬再滋補其真陰，培養其血脈，俾其真陰充足，血脈調和，月信自然通順而不愆期矣。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（一兩）、玄參（五錢）、地骨皮（五錢）、龍眼肉（五錢）、北沙參（五錢）、生杭芍（三錢）、生雞內金（錢半黃色的搗）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

三診：將藥連服四劑，飲食增加，精神較前振作，自覺諸病皆無，惟腹中間有疼時，此月信欲通而未能即通也，再診其脈已和平四至矣。知方中涼藥宜減，再少加活血化瘀之品。

處方：生懷山藥（一兩）、大甘枸杞（一兩）、龍眼肉（六錢）、當歸（五錢）、玄參（三錢）、地骨皮（三錢）、生杭芍（三錢）、生雞內金（錢半黃色的搗）、土鱉蟲（五個大者搗）、甘草（錢半）、生薑（三片）。共煎湯一大盅，溫服。

效果：此藥連服十劑，腹已不疼，身形已漸胖壯，惟月信仍未至，俾停藥靜候。旬日後月信遂見，因將原方略為加減，再服數劑以善其後。

或問「方書治溫疹之方，未見有用參者。開首之方原以治溫疹為急務，即有內傷亦當從緩治之，而方中用野臺參者其義何居」？答曰「《傷寒論》用白虎湯之例，汗吐下後加人參，以其虛也；渴者加人參，以其氣虛不能助津液上潮也。令此證當久病內虧之餘，不但其血分虛損，其氣分亦必虛損。若但知用白虎湯以



清其熱，不知加參以助之，而熱轉不清，且更有病轉加劇之時（觀四期人參後附載醫案可知）。此證之用人參，實欲其熱之速退也。且此證疹靨之急，亦氣分不足之故。用參助石膏以清外感之熱，即借其力以托疹毒外出，更可借之以補從前之虛勞，是此方中之用參，誠為內傷外感兼顧之要藥也。

或問「凡病見寒熱往來者，多係病兼少陽，是以治之者恆用柴胡以和解之。今方中未用柴胡，而寒熱往來亦愈何也」？答曰「柴胡雖能和解少陽，而其升提之力甚大，此證根本已虛，實不任柴胡之升提。方中茵陳其性涼而能散，最能宣通少陽之鬱熱，可為柴胡之代用品，實為少陽病兼虛者，無尚之妙藥也。況又有蘆根亦少陽藥，更可與之相助為理乎？此所以不用柴胡亦能愈其寒熱往來也」。

【處女經閉】

天津南開中學旁，陳氏女，年十七歲，經通忽又半載不至。

病因：項側生有瘰癧，服藥療治，過於鹹寒，致傷脾胃，飲食減少，遂至經閉。

證候：午前微覺寒涼日加，申時又復潮熱，然不甚劇，黎明時或微出汗，咳嗽有痰，夜間略甚，然仍無妨於安眠。飲食消化不良，較尋常減半。心中恆覺發熱思食涼物，大便乾燥，三四日一行。其脈左部弦而微硬，右部脈亦近弦，而重診無力，一息搏逾五至。

診斷：此因飲食減少，生血不足以至經閉也。其午前覺涼者，其氣分亦有不足，不能乘陽氣上升之時而宣佈也。至其晚間之覺熱，則顯為血虛之象。至於心中發熱，是因陰虛生內熱也。其熱上升傷肺，易生咳嗽，胃中消化不良，易生痰涎，此咳嗽又多痰也。其大便燥結者，因脾胃傷損，失傳送之力，而血虛陰虧又不能潤其腸也。左脈弦而兼硬者，心血虛損不能潤肝滋腎也。右脈弦而無力者，肺之津液，胃之酸汁皆虧，又兼肺胃之氣分皆不足也。擬治以資生通脈湯（方在三期八卷），復即原方略為加減，俾與證相宜。

處方：白朮（三錢炒）、生懷山藥（八錢）、大甘枸杞（六錢）、龍眼肉（五錢）、生懷地黃（五錢）、玄參（四錢）、生杭芍（四錢）、生赭石（四錢軋細）、

當歸（四錢）、桃仁（二錢）、紅花（錢半）、甘草（二錢）。共煎湯一大盅，溫服。

復診：將藥連服二十餘劑（隨時略有加減），飲食增多，身形健壯，諸病皆愈。惟月信猶未通，宜再注意通其月信。

處方：生水蛭（一兩軋為細末）、生懷山藥（半斤軋為細末）。每用山藥末七錢，涼水調和煮作茶湯，加紅蔗糖融化，令其適口，以之送服水蛭末六分，一日再服，當點心用之，久則月信必通。

效果：按方服過旬日，月信果通下，從此經血調和無病。

方解：按水蛭，《本經》原無炙用之文，而後世本草謂若不炙即用之，得水即活，殊為荒唐之言。嘗試用此藥，先用炙者無效，後改用生者，見效甚速（三期七卷理衝丸後附有醫案，且論水蛭之性甚詳）。其性並不猛烈，惟稍有刺激性，屢服恐於胃不宜，用山藥煮粥送服，此即《金匱》硝石礬石散送以大麥粥之義也，且山藥饒有補益之力，又為尋常服食之品，以其粥送水蛭，既可防其開破傷正，且又善於調和胃腑也。

【血崩證】

天津二區，徐姓婦，年十八歲，得血崩證。

病因：家庭不和，激動肝火，因致下血不止。

證候：初時下血甚多，屢經醫治，月餘血雖見少，而終不能止。脈象濡弱，而搏近五至，呼吸短氣，自覺當呼氣外出之時，稍須努力，不能順呼吸之自然。過午潮熱，然不甚劇。

診斷：此胸中大氣下陷，其陰分兼虧損也。為其大氣下陷，所以呼氣努力，下血不止，為其陰分虧損，所以過午潮熱。宜補其大氣，滋其真陰，而兼用升舉固澀之品方能治癒。

處方：生箭耆（一兩）、白朮（五錢炒）、大生地（一兩）、龍骨（一兩搗）、牡蠣（一兩搗）、天花粉（六錢）、苦參（四錢）、黃柏（四錢）、柴胡（三錢）、海螵蛸（三錢去甲）、茜草（二錢）。西藥麥角中者一個，攪乳糖五分，共研細，將中藥煎湯兩大盅，分兩次服，麥角末亦分兩次送服。

效果：煎服一劑，其血頓止，分毫皆無，短氣與潮熱皆愈，再為開調補氣血之劑，俾服數劑以善其後。

【附錄保赤良方】

治小兒之書，有《兒科輯要》，著此書者為姚濟蒼，遼源友人王止孚曾贈一部，書中謂小兒初生時，宜急用手指蘸雞蛋清摩擦其脊骨，自下而上，須著力挨次摩擦，其摩擦之處，即出若干粗黑毛，如拔淨可免抽風及他病。王君曾自試其方，確有效驗，因多買其書，以送朋友。會比鄰王姓小孩降生後，不哭不乳，授以此方治之，現出黑粗毛若干，為拔淨，即啼哭食乳矣，此誠保赤之良方也。其黑毛之生，多在脊骨靠下處，擦時於其處尤宜注意，見此方者，若能廣傳誠積善之一道也。

評語：嘗思五經之中，惟《易》理能包括萬有，至於伏羲、文王周公、孔子，嘗本《易》之象數推衍，以盡萬事萬物之理者無論矣。三代而後，若通書、若正蒙、若程傳、若本義、若啟蒙、若皇極經世，莫不各得《易》中神奧，以垂為壽世名言，而近今名醫應運而出，更有本《易》理化為醫理，以醫藥救世者，則壽甫世講所著之《衷中參西錄》是也。蓋余知壽甫有年矣，因余素有詩癖，而其先大人丹亭先生為近代詩家，且又在比鄰，是以恒相過從，朝夕談燕，時壽甫年在髫齡，既迥然器宇不凡。至弱冠時，博通五經，而又深於《易》，每與談及，輒能剖析入微，爽人心懷，乃至弱冠後，更能由《易》理推出醫理，著書立說，以醫藥救世活人，賢者之不可測，有如斯哉！或疑《易》理本難窮，由《易》理化為醫理則難之尤難，況壽甫弱冠，而竟能如此深造，先生果何所見，而能若斯確

信乎？余聞之，忽然有感於中，不覺淚下曰「壽甫之於醫誠神效也。昔者先慈患腕腫證三年，延醫無效，及延壽甫診視，數劑而大愈，因索觀其所著醫稿，凡至醫理深奧之處，莫不引《易》理以為之解釋，乃深知壽甫之於醫學，洵由《易》理推衍而出者也。然壽甫素裕經猷，固醫國才也，醫藥之神效猶其小焉者耳！」！

癸巳季春鹽山李應熙子咸氏序於香魚書院

〈 第 五 卷 〉

種菊軒詩草

自序

詩以舒胸臆，乃所以適一己之性情，初非求知於外人也。況詩原欠佳，又何必附於自撰醫學之後哉！誠以十餘前來醫報宣傳各位同人，聲氣相通，錫純不免有以詩應酬之舉，竟謬得能詩之名。同人來函多勸再有書出版，當附詩集於後者，而四川萬縣政界、軍界、學界、醫界諸大雅，又聯名登於杭州《三三醫報》，勸將生平詩文並附於書後，乃自顧詩文皆所作無多，而於醫界同人行世之新著作，數年來恒為之作序，此亦足見文之一斑矣。今因重違諸大雅之期望，遂但將所撰詩集附載於六期醫案之後，而自遴選譽錄之際，忽不禁戚然有感，憶自幼時從先嚴丹亭公讀書，恒命多讀唐詩，且又精選歷代名家詩數百篇，以備暇時諷咏。誠以先嚴素善詩，自著有蓮香齋詩稿，是以於教授之際，恒注重於詩。一日試帖詩課，以天寶宮人命題，錫純詩課中有月送滿宮愁之句，先嚴大加獎異，謂孺子異日當以詩顯名，此語迄今已六十年矣，而所作之詩，漁翁樵夫之謳歌，毫無騷人風致，回憶先嚴期許之語，能勿深愧於心乎！夫良弓良冶，箕裘傳世。錫純自幼以至弱冠，日侍先嚴之側，每見先嚴自繪丹青圖畫，必題以新詩，即景揮毫，頃刻可就。凡有歌詠，皆能為景物繪真寫生，而錫純才質笨魯，竟不能上紹前徽，此誠所謂其父析薪，其子不克負荷者矣。夫當世多善詩名流，即吾醫界中能詩者亦不乏人，其有覽斯編而閱到疵瑕之處者，深期不索指教也。



登日觀峰詩並序

癸巳孟春，余曾有泰山之行，因為母祈禱病癒，往叩碧霞元君也。路出濟南，見其湖（大明湖）山（千佛山）之美，誠古詩所謂濟南瀟灑小江南也。又南行百里，山勢漸高，行近泰山，諸峰攢秀，高插青雲，見有轟然起於諸峰環繞之間者，泰山也。其氣象莊嚴，不同諸峰之秀麗，魯頌所謂泰山巖巖者，實善為泰山寫照也。既至，住山南旅次，息兩日，同行者邀翌日登山，未及半夜即起，飽食篝燈而行。循山坡北上，穿山數重，至泰山麓，約高於平地已千尺矣。山麓有門，額橫鐫「孔子登臨處」五字，入門仍北上，見山路鋪青石作蹬，壘級而上，約行五六里，其級漸緊，兩旁古柏夾路，粗皆合抱，蒼翠可愛，人呼為柏樹，又行近十里，山勢偶有平處，有松三株，其粗未及合抱，而頂大甚平，其蔭畝餘，同行者謂五大夫松也。問「何以三株」？曰「土人謂其二株不受秦封，際天大雨雷電，化雲飛去」。問「此松數千年何以粗僅如許」？曰「土人謂此恥受秦封，而愧慚不長耳」！似此荒渺之談，應出之齊東野人，然亦足徵廉恥之念，猶在人心也。過此，則山路尤緊，其蹬寬不容足，而厚則徑尺。又約行六七里，其路北上忽窮，因有石壁當前，其高萬仞，而東西夾以深澗，下望無底，幸有橋橫空。度過東澗，其石壁當橋處鐫有「雲中仙步」四字，謂橋之高峻直可凌雲也。橋之東，數步有亭，過橋坐此，可少歇。亭上匾額為「對松亭」三字。因亭之東，又為一深澗，澗東石壁聳立，壁多石縫，遍生松樹近百株，為其生直壁上，縱橫偃蹇，奇狀異

常，故亭以對松名，而松枝掩映之中，見有「松濤」二字鐫於壁，每字大可方丈，真奇觀也。又十餘里，已近山頂，有門當路，額鐫「南天門」三字。登門後，一望平坦，向東北行二里許至泰折，為自古帝王巡東嶽祭地之處，碧霞元君廟在焉。廟貌之壯麗閎廓，實為生平所未睹，廟庭有碑丈餘，以銅為外廓，係清高宗所立。其文因太后目眚，遙禱碧霞元君而愈，後歷年所，太后陡遐，因思為太后夙願未還，而太后陡遐後，當常依碧霞元君之左右，今至泰山祭碧霞元君以還夙願，並於此祭太后云云。夫文王陡降，在帝左右，周頌所賡也。今太后陡遐，在碧霞元君左右，是知碧霞元君當為至尊地母之神，故居泰折祭地之處也。過此，則山又起頂，上行之路仍向東北，約行二里強，至岱詞所祀東嶽之神（俗呼為天啟廟）。又二里許，至山頂極高之處（俗名為玉皇頂），自古帝王巡東嶽祭天於此，建有祠宇，以供上帝。由此東行半里許，為日觀峰，不再起頂，有石橫出東指約十餘丈，寬五丈，作笏形（俗名探海石）。履其上以觀日出時，高三丈，下望平地猶黑暗。爰口占五律四韻，以示同人。蓋泰山極高峻，四圍群山皆未及泰山之半，而白雲橫帶山腰，如煙鋪地，詩中之所云云，皆實錄也。須臾，下方亦明亮，南望白光界地，如衣帶者，汶水也。汶之北有如菜畦，廣袤數尺者，泰安城也。城中他無所見，有一點如玉蜀黍，近北城牆處，同行者謂係岱祠，極高峻閎廓，故獨見之。於斯自山頂尋他路下行，以便觀覽，行至二里許，見有磨崖碑，高約三丈，上鐫「孔子」二字，下為積雪所遮不可見。余謂同行者曰「聞泰山有孔子崖，

當是此處，下為積雪遮者，崖字也」。過此，復歸舊路，徐徐下行，見路旁有豐碑屹立（來時路黑，故不見），其文曰「自古祭天有泰壇，祭地於泰折。天有何形象，而祭天者但祭無形象之天，終覺於心未安，於斯有十二旒赭黃袍至尊至貴之神，儼然臨乎其上，地亦有何形象，而祭地者但祭無形之地，亦覺於心未安，於斯有鳳冠霞帔手秉圭璋至尊至貴之神，儼然乎其下焉。夫人皆父天母地，然父尊母親，為其親也，呼吸之間即有感應。是以人當困苦疾痛之時，誠心祈禱於碧霞元君而輒有應驗」云云。觀此，則碧霞元君為地母之尊，不尤確然可信乎！此碑之外，路旁猶有多碑，然因同行者急欲歸寓，無暇細觀，及至寓時，日已加申矣。

夜氣蒼茫里，來登第一峰。

群山丹嶂列，古徑白雲封。

旭日觀初出，青天問可通。

汪洋滄海闊，極目到蓬瀛。

附記：翌日，偕同人進城觀覽，因憶同人在日觀峰盛稱岱祠，遂至其處。見周圍壘石為牆，牆上生松十餘株，似皆數百年物，牆南面平列三門，皆作城門式，而高大少亞於城門。庭中亦多有古松柏，祠之正殿縱橫皆九，共為一頂。同人皆誇其殿宇之弘，而余獨訝其殿制之異。躊躇再四，恍悟此即泰山下之明堂，宣王聽孟子之言而勿毀者也，猶幸古制留遺至今，猶得觀瞻也。

遊覽既畢，遂與同人出城，逍遙散步，見西南有山，相距六七里許，山形不高，孤立聳秀，因徐步往觀，將近山處，見有石碑千餘，碣上皆鐫有某省府縣莊、某姓先人，饗祀之處，石工數百人，所作之碑文亦如此。愚心大疑，詢之同人，亦莫明其故。山麓有神祠十所，人視之，皆為閻羅像。此胡為者，心疑愈甚，詳觀祠庭碑文，乃知此地名蒿里，即封禪書所謂西蒿里也。蓋自古相傳，謂人之始生，魂靈來自泰山，百歲之後，則魂靈歸於蒿里。夫泰山為東嶽，東方原為化育之始，而蒿里在泰山坤位，又適為歸藏之地，古說之云云，似亦可信，此登泰山祭碧霞元君者，多祭其先於蒿里也，並悟清高宗謂祭碧霞元君即以祭太后，亦猶此義也。

秋日與廣平諸同人會治北學舍開軒遠眺

結舍臨畎畝，秋光匝野排。

涼風吹雨過，夕照送山來（日夕可見太行）。

豐歲田家樂，鄉心遊子懷。

同人欣聚首，佳景共徘徊。

和楊孕靈君甲子生朝偶成（步原韻）

名醫間出世，江左屢發祥。

國手年而立，上元月轉陽。

活人今仲景，賣藥古韓康。  
愧和清風句，巴人妄濫觴。  
醫界君競爽，前途早著鞭。  
新春初度日，化甲半周年。  
著述紹先聖，刀圭傳後賢。  
錫齡膺善果，欣誦九如篇。  
貴農  
邦以農為本，史家重有年。  
稻粱勝珠玉，飲食是民天。  
惜物命  
生物供飲饌，余心殊不安。  
雖微亦性命，何忍競相殘。  
憫時  
世運何紛擾，天心問有無。  
哀鴻飛遍野，含淚獨躊躇。  
德州軍中視日報有感

神州倏忽變滄桑，驟雨狂風幾莫當。  
時事愴懷增感慨，天心搔首竟蒼茫。  
英雄造世空懸憶，鷓蚌相持轉自戕。  
萬種愁思消未盡，聞雞起舞劍生光。

德州衛岸有感（時洪憲僭號）

浮沉世世競年年，百丈狂瀾誰障川。  
傀儡登場原是戲，書生扼腕亦徒然。  
壘卵國運風潮湧，逝水光陰歲月遷。  
消盡愁思端借酒，俗塵不混醉中天。

秋日閒遊衛岸

西風搖落衛河邊，極目雲山意渺然。  
梵閣鈴聲黃葉寺，漁舟笛韻白蘋天。  
崎嶇命運蠶叢路，瀟灑胸懷詩酒緣。  
且喜秋光三徑滿，菊花香裡任留連。  
月夜獨步河上  
黃河堤外水無涯，星宿來源極目奢。

萬里洪濤飛雪浪，一灘皓月曬銀砂。  
年垂白首還為客，春老青山未見花。  
潦倒此生成底事，空杯壯志欲乘槎。

題扇詩並序

客居濮陽，寓近舞臺，時河工興舉演戲，賽神班中有童子馥花，年十五歲，充花旦腳色，持扇造寓求詩，因成四韻，為書扇上，其面色過白，善笑善舞，故詩中云云。

傅粉何郎辨未真，恍疑仙子落寰塵。

歌喉嚶嚶鶯聲轉，舞袖翩翩風翼分。

楊柳臨風工態度，芙蓉出水寫精神。

陽春一出行雲過，真個魂消顧曲人。

廣平學舍題壁並序

乙卯季夏，自澶淵之南移住廣平，溽暑長途頗形勞瘁，至廣平後借寓治北學舍，地居高阜，下臨曠野，時當雨後，禾黍之光油然在目，繞以清流，蛙聲鼓吹，覺心目頓爽。學中主講者三人，為李君濟民、張君嚴卿、張君秀升，皆博雅君子也，傾蓋定交臭味浹洽，遂賦此以志之。

征塵僕僕太行東，小寓琅環俗慮空。

兩部鼓吹新雨後，四圍禾黍澹煙中。  
如氈細草緣皆綠，帶露琦花榜戶紅。  
更喜主人皆雅士，快談今古興何窮。

廣平模範學校題壁

琅環福地甚清奇，瑤草琦花傍短籬。

梵閣鈴聲風過後（鄰古剎），芸窗琴韻課餘時（課餘多習琴）。

修篁耐雪經冬茂，古木參天入夏宜。

主講循循皆善誘，菁莪棫朴慶培之。

大名臨河旅邸春日即事

細柳垂楊繞岸栽，波光漾綠照樓臺。

流鶯百轉如珠玉，沙鳥群飛自去來。

水面風微清澹蕩，林間月透意徘徊。

內經一卷從容看，又聞漁歌南浦回。

客居大名清明有感

寄居蕭寺度年華，舉目鄉關雲樹遮。

數盞酒從寒舍飲，半輪月向故園斜。



煙迷衛岸生芳草，雪霽山村見杏花（前二曰雨雪）。

千里相隔俗未改，門前插柳又家家。

黃鶴樓題壁詩並序

樓在武昌城西北隅蛇山上。蛇山之脈，自東北而西南，起伏一線，勢如長蛇。至西北隅起頂而止，人呼為蛇山頭，山麓有紅樓三層，甚高峻，額署黃鶴樓，實為後世添造之樓。舊黃鶴樓原在山腰，日久頽廢，經張文襄公督荊時重修，樓亦三層，琉瓦為簷，高峻壯麗，名之為樓，實作閣形，額署「奧略樓」，荊人以志文襄撫荊之功德，故以名焉。樓之第二層供奉文襄遺相一方，人頗致虔誠，是知遺愛在人，自與江山並壽也。其上層則閒遊者多飲茶酒其中，四壁題詩甚多，然鮮佳作。再其上為抱膝亭，在山之極高處，下作兩層樓式，而樓之上有亭，在此四望，知此地雖一面臨江，而為江渚環繞，實四面皆水。其對面為龜山，即禹貢之大別山，漢水在山下入江，山介其間，分別江漢，故以名焉。後世呼為龜山者，象形也。山之坡有鸚鵡洲，洲之東有晴川閣，江山勝概歷歷在目。夫鸚鵡洲原為舊名，而晴川閣則後世摘取崔灑詩句以為名焉，愚因之有感矣。夫止一日之間，人之登樓遊眺者，不知凡幾，而千古以登黃鶴樓名者，獨崔灑、李太白二人。因此知人無百年不敝之身，而有千古不朽之著作。愚今徘徊此間，前不見古人，後不見來者，俯仰天地，感慨何極，爰成七律四韻，還題於奧略樓上，非敢與前賢競美也，亦略留雪泥之跡云爾。

高樓突兀半空支，此日登臨萬象卑。  
江漢合流天景闊，龜蛇對峙地形奇。  
青山一脈連衡岳，古木千章傍釣坻。  
幾度憑欄北眺望，蒼茫雲樹起鄉思。

漢皋江上偶成

時當三次革命，南方不靖，余偶至漢皋，見其江山之美，而竟南北分裂，實有風景不殊之感，且際此列強環伺，毫無徹侮之策，惟鬩牆是力，真堪令人浩歎也。

敢將詩酒傲王侯，瀟灑閑身幸自由。  
天地有情容放浪，江山多致在勾留。  
壯懷空擊祖生楫，高蹈期隨范蠡舟。  
世世茫茫難逆料，滄桑不改舊神州。

自漢皋還至保陽即事

北還小住保陽東，度卻春光夏又逢。  
布穀飛鳴芳樹外，垂楊搖曳淡煙中，  
青山不斷太行脈，微雨吹來大海風。  
青酒一樽消世慮，閒愁不使上眉峰。

題東明縣漆陽書院

征塵仆仆大河濱，偶至琅環景物新。

拔地危樓紅射日，參天古木綠團雲。

社余宰肉識王佐（陳平此縣人），濮上觀魚悟道心（莊子為漆國吏處）

流覽此邦多勝概，抗懷希古伊何人。

和友人李心泉自詠原韻

未酬壯志鬢先霜，世變倏然一劇場。

躍馬英雄徒熱惱，騎驢居士自清涼。

掃除俗慮襟懷闊，詠就新詩翰墨香。

慧業如君磨不盡，浮雲富貴豈能長。

詠菊詩並序

愚性喜養花，於群花之中又最愛菊，以其性能傲霜，且又種種色相，盡態極妍，而毫無俗，門前有隙地畝許，結屋數間，編樹為籬，種菊其中，外有清溪護繞，恒自汲溪水以灌菊畦，至重陽節，菊英吐豔，滿院芬芳，與二三契友飲詠其間，亦隱居之樂事也。

紅紫百般孰傲霜，菊花原自殿群芳。  
東籬月冷添幽豔，老圃秋深聽主張。

不共春華爭富貴，獨留夕秀振頽唐。  
邀來佳客同欣賞，觴詠花前詩幾章。  
詠菊（在奉省作於錫鈞翰林座上）  
百花凋謝此花香，骨骼由來能傲霜。  
點綴秋容存老圃，扶持晚節仗孤芳  
陶公開徑煙霞古，騷客餐英風味涼。  
幸有仙翁堪作伴，朝朝相嘗興偏長。  
正月上旬懷友人楊杏村  
律回太簇又逢春，忽憶薊門有故人。  
慷慨胸懷斑定遠，精明韜略馬服君。  
英雄造世盟夙志，臭味相投契素心。  
雲白山青千里隔，何時晤語滌塵襟。  
和張漢槎自題避秦居原韻  
多文為富不憂貧，寄傲名園孰是鄰。  
栗里歸來同靖節，天臺小住擬劉晨。  
囊中錦繡詩成癖，筆下煙雲畫有神。

滿眼秦坑火未熄，清涼居士獨伊人。  
琦行不顧恒流嗔，世外煙霞寄此身。  
傲骨嚴霜存碩果，清標明月認前因。  
偶逢舊雨談詩畫，常對青山作主賓。  
記撰桃源原自況，品同五柳即仙人。  
又壘前韻

茅簷穩住莫愁貧，翠竹琦花都是鄰。  
世外煙霞成大隱，個中風月度良晨。  
消磨壯志權行樂，嘯傲名園靜養神。  
詩酒陶情皆慧業，羨君常作散仙人。  
寄語恒流且莫嗔，蒼天留得等閒身。  
潛龍事業先藏用，附驥勳名恥有因。  
行樂略為千日醉，傷心未見四夷賓。  
東山謝傅豈終老，尚作群生托命人。  
和宗弟相臣詠懷二律原韻

想像豐神五度年（相契五年猶未未覲面），兩心相契默通玄。

刀圭濟眾功無量，珍異羅胸書幾篇。  
救世期弘胞與願，活人非為姓名傳。  
萱堂多壽子繼業，積善門庭自古然。  
戾氣中人似虎狂，靈丹救苦病何傷。  
術同扁華今誰伍，藥核寒涼昔遍嘗。  
臭味芝蘭深結契，逍遙身世任行藏。  
羨君洞徹隔垣視，臨證何須細較量。  
和胡天宗五十自壽原韻

劍鋏羞隨俗士彈，浮雲富貴等閒看。  
志存濟世弘胞與，水飲上池見肺肝。  
醫國經綸原素裕，活人千萬更何難。  
年華半百逢初度，菊綻黃英正可餐。  
數卷書成寓化機，軒岐奧理想非非。  
神明勞瘁奚暇恤，黎庶恫瘝甚可悲。  
既倒狂瀾憑挽救，多歧醫術定從違。  
群生普渡功無量，煦物深恩同曙暉。

感慨同胞憂採薪，抗懷希古貴求真。  
經研靈素深參奧，理匯中西妙入神。  
願力慈祥能廣被，陶情詩酒不妨貧。  
地仙歲月閑中度，隨意逍遙江水濱。  
吳江楓冷葉丹黃，隱士堂中共舉觴。  
淡於為官早解組，偶逢作賦喜登場。  
功回造化人同壽，德被蒼黎後自昌。  
調劑陰陽身不老，籌添海屋記滄桑。

詠遼寧城東萬泉河並序

遼寧氣候寒涼，花木遲發，未至其地者，恒疑殊少佳景，而靈秀所鐘，隨址呈露，一邱一壑，自有洞天。因景物之天然，又加以人工點綴，誠有令人嘗心悅目者，遼寧城東之萬泉河是也。河在城東稍南二里許，平地出泉若干，匯而為澤，廣四五里，澤積滿則流而為河，出向東南，注於洪河，澤中水深四五尺，無雜草，盡種荷花，有堤相通，堤勢蜿蜒曲折，分歧旁達，堤多斷處，以通澤水，便舟楫往來，上皆橫橋，以便行人。落霞飛虹，皆其中橋名，而橋之形勢，亦如虹飛霞舉，高跨水上。緣堤兩旁皆植楊柳，澤之四面亦多楊柳護繞。水上樓臺數十處，皆極工巧華麗，或為歌館，或為茶社酒亭，分住其中。當荷花開時，乘輕舟游泳

其間，柳蔭垂綠，蓮蕊飄香，舟行緩緩，風浪無驚，時聞歌韻悠揚，管弦清越，四五契友圍坐談心，時浮以大白，快何如哉！爰賦詩以志之。

奉城勝地屬東隅，乘興遨遊縱目初。

跨水飛橋虹倒影，緣堤曲徑蟻穿珠。

蓮花世界真香國，楊柳樓臺入畫圖。

幾度萬泉河畔立，恍疑仙境是蓬壺。

和徐韻英二十感懷原韻

青年日月未蹉跎，百歲光陰來正多。

志士惟期身有用，達人不問命如何。

精金冶煉方成器，美玉磨礱或借他。

不世才華當奮勉，居諸分寸莫輕過。

英奇間出何論年，生甫弱冠已卓然。

學問漸深同蟻術，才思日進效鶯遷。

囊中有草文成錦，筆底生花色更嫣。

權藉刀圭廣救世，杏林春暖豔陽天。

感時



茫茫國運未逢涯，極目遙天雲霧遮。

來往要衝皆壁壘，村莊何處樂桑麻。

閱牆有力侮誰禦，濟世無權忿自嗟。

五夜聞雞思起舞，古希垂老感年華。

呂鏡宇尚書八旬晉五壽誕兼重逢赴鹿鳴之期志喜

富貴神仙元老身，逍遙歲月隱風塵。

薊門耆獻存遺愛，桂苑馨香來舊人。

南北飛輪開輕路（曾督修津浦鐵路）、歐羅奉檄靖夷風（曾出使德國議和）。

生平勳業垂青史，大德由來壽莫倫。

傳經家世舊名儒（伯恭後裔），澤被蒼生信不虛。

拯救戰危倡結會（曾創中國紅十字會），旬宣秩滿共攀車（曾以常鎮道內擢

遮道攀留者以萬計）。

精神矍鑠邀天佑，時事蝸蟻避地居。

佳節重陽菊酒熟，稱觴共祝壽如山。

放紙鳶

誰把長繩放太空，製成紙鳶競知風。

沖虛欲伴九霄鶴，遇順恍如千里鴻。  
翔止全憑操縱穩，飛騰不仗羽毛豐。  
吹噓直上青雲路，天際盤旋賴化工。

詠傅星橋表兄元配劉孺人詩並序

傅星橋表兄，資稟穎異，髫齡入泮，為邑名士，元配劉孺人，出滄州望族，禮門庭，素嫻內則。適星橋時，舅姑早亡，惟祖舅阿平公患痿，獨存孺人佐夫事。其父，朝夕罔懈，闔內諸事，纖悉就理，宜室宜家之什，洵堪為孺人詠焉。不幸星橋早逝，當病危時，孺人割臂和藥，焚香籲天，乞以身代，其心亦良苦矣。時其哲嗣金樞甫五歲，孺人柏舟矢志，撫孤恩勤，教養備至。鄰里垂其懿行，共為呈請旌表，至斯孺人之苦衷藉以少慰。迨民紀戊辰，年近八旬以壽終，其哲嗣金樞，長號泣血，幾至滅性，殯後猶恒繞墓號泣，哀感路人。如此純孝，誠得於母教者深也。爰賦此以賡颺之。

婺女光臨渤海濱，篤生淑德振彝倫。

忘身救婿心何苦，無愧大家（同姑）傳里人。

自古三遷孟母傳，傳家有母媿前賢。

撫孤教養恩勤至，有子克家豈偶然。

暮春閒遊衛上

衛岸閒遊竟忘歸，緣堤細草自芳菲。  
苔磯鎮日從容坐，獨對青風看燕飛。

意境

僻處深山不厭深，山花山鳥伴閑身。  
開軒朗朗三更月，照得心頭悟道心。

題友人張子平別墅（別墅在許孝子莊，門外有許孝子墓）

故人家住屯河濱，別墅晴開景物新。

門外荒臺孝子墓，千秋原可結芳鄰。

秋日在大名偶眺河上

西風颯颯雁聲涼，夾岸園林逗晚芳。

款乃衛河船欲泊，鷺頭滿載菊花香。

和李心泉詠黃梅詩原韻

眈眈梅花白雪光，如何此樹色偏黃。

祇緣高居群芳首，青帝催他換素裝。

題楊如侯君靈素生理新論中肖相

道貌靄如太古春，天人合撰筆通神。

內經精義融中外，仲聖而今有替人。  
莫道書生無相才，經綸小試亦安懷。  
慈悲大眾恒河數，前度如來今又來。

自題衷中參西錄中肖相

藐焉俯仰地天中，遭際嶙峋百慮空。  
獨有拳拳消未盡，同胞疴養係私衷。  
慘澹經營幾度年，此心非不愛逃禪。  
欲求後世堪持贈，長作千秋未了緣。

題友人張叔翔與全連軍士攝影

翩翩儒將士赳赳，指臂相連秘運籌。  
三十六人抵西海，班超事業驚全歐。

詠藥中白頭翁

邑治東有古城址基，愚偶登其上，見城陰多長白頭翁，而彼處人固未之識也。  
因剖取鮮根，以治血證之因熱者甚效，爰賦詩以志之。

白頭翁住古城陰，埋沒英才歲月深。  
偶遇知音來勸駕，出為斯世起疴沉。

題軍士魯廣達肖相

冰雪聰明秋水神，學成韜略幾經春。

茫茫塵海誰青眼，落拓英雄竟至今。

題蘇明陽君肖相（天地新學社主任）

一點靈臺萬象含，千秋慧業靜中參。

從今開闢新天地，掃盡西人荒渺談。

題張鐘山君肖相（天地新學社副主任，素有修道工夫，故詩中云云）

瀟灑風塵一介身，茫茫何處問前因。

鍾情吐納悟玄妙，君是蓬來舊主人。

題姜指歐君肖相（天地新學社編輯主任）

珠玉丰姿秋水神，文參造化筆超群。

毛錐不是封侯業，定遠功名須待君。

題優伶孝女詩並序

愚於民紀七稔，應遼寧立達醫院之聘，星期得暇，恒出外消遣，一日觀劇於會仙茶園，見有女優金翠紅者，年近三旬，充髯生腳色，演回荊州、柴桑口、空城計諸劇，形容盡致，聲情逼肖，而眉目之間時有英氣流露，毫無女子態度，心甚異之。歸向內子述之，內子曰「此人我甚知悉。其本姓劉，名荊玉，金翠紅其

所託名也。其家亦棲霞，與余家同移居安東，為比鄰。自幼在女子學校讀書，穎悟過人，其年少余五歲。當其十一二歲時，放學歸家，恒執書質問，余愛其聰明秀婉，意態憐人，每盡情為之講解，視之如妹，彼亦視余猶姊焉。及余留學東洋，數載始歸，其所住之宅已易他姓，細詢之，始知荆玉廢讀學戲，其家已遷居奉天矣。蓋其家原無恆產，荆玉又無兄弟，一家數口賴其父劉翁作小經紀，僅能糊口。後因劉翁臂疼病廢，饗餼不給，荆玉不忍雙親凍餒，遂棄讀學戲，慚執賤業，諱莫如深，故托為金翠紅焉。其演劇多在奉城，是以舉家就居之。余初來奉時，觀劇亦在會仙茶園，荆玉見餘在座，出班至座前，殷勤款待，極道契闊，因執餘手曰：「不竟今生猶得見我姊」。言之淚隨聲墜，余亦淒然淚下，又為另備茶點，其眷眷相依，深情猶如十二歲時也」。余曰：「彼已嫁人乎？」內子曰：「未也。彼孝女也，出嫁恐不能養親，且其立志清高，俟雙親百歲後，當入廣寧山中（即古之醫巫閭山），祝髮空門，長齋繡佛，曾再三勸喻，其志堅不能奪。蓋揣其意，以為十餘年混跡靡麗場中，其結局不如斯，不足自明其清白之身也」。余聞而嘉其孝，且悲其志，因賦詩三章，浼內子轉寄之。荆玉得詩良喜，來寓相謝，且曰：「前因事賤業，不敢輕來貴寓相溷，今既如此垂青，荆玉何敢自外！從此，數日輒一至，從內子學風琴，略撫弄即成聲調，後因漸稔，愚勸以及時出嫁，為女子正規，彼仍堅執素志。愚曰：「許字得聘儀，亦可養親，若欲長生，雙修中自有神仙，

何必求之於寂寞中也。因歷舉簫史，攜弄玉上升，唐詩人陳陶（即八仙中藍採禾）夫婦，同登仙錄。諸事告之，荆玉慧心人，似有會悟，笑而頷之。

雲英本是謫仙人，演劇登臺為養親。

靡麗場中完素志，清風明月認前身。

美玉精金莫指瑕，超然出俗洗繁華。

觀音大士慈悲甚，願借祥雲護瑞花。

蘭蕙由來稱國香，蹉跎數載伍群芳。

他年得子清修願，名列仙班第一行。

中秋望月

中秋佳節衛河濱，消盡煙雲寶鏡新。

大造似嫌多戾氣，月華如水洗乾坤。

題友人張海如所畫山水圖

萬山合選樹槎桠，一徑羊腸雲半遮。

遙指蒼茫煙水裡，漁樵相伴是誰家。

寄友人朱鉢文

如何傾蓋便傾心，臭味相投非自今。

慧業同修來淨土，三生石畔問前因。  
經綸富有識超群，國土偃蹇竟至今。  
若得指揮天下事，神州何患遍煙塵。

題康燮忱色門棒喝集

一掬慈心筆下傳，行行珠玉驚青年。  
果悟大士低眉意，便是紅塵不老仙。  
百年壽命最堪思，莫負彼蒼賦畀奇。  
啟後承先擔荷重，況復國運仗撐持。  
漫道蓮開並蒂紅，女戎自古困英雄。  
瑤編字字精心讀，參透禪宗色是空。

詠史

天生王佐本興劉，初志為韓焉得酬。  
滅項亡秦資漢力，英雄終復舊君仇。  
出師兩表炳千秋，三代英才漢秀留。  
天下指揮猶未定，勳名已可比伊周。  
強師壓境鎮從容，決勝謀成遊眺中。



報到捷音方對奕，東山氣度果恢弘。  
捫虱談笑度恢弘，將相兼才國士風。  
正朔關心覘素志，偏邦佐命亦英雄。  
神仙骨骼蓋臣衷，兩定儲君默建功。  
重造唐家資廟算，漫雲將相不相容。  
良醫良相兩盟心，濟世活人念念深。  
更有文章光日月，千秋俎豆重儒林。  
興亡兩代歷遼金，隱托角端感主心。  
涕泣陳言回功運，一團忠愛貯胸襟。  
難星能識功最奇，王佐有才感主知。  
華夏重興資輔弼，祥雲預兆隱居時。

題明季費宮人故里

愚在天津，寓東門里大街路北，路南相對即明費宮人故里也。愚素重費宮人節義非常，因賦此以吊之。

為國捐軀烈烈風，卓然巾幗出英雄。  
渠魁未織終齎恨，潛帝有知憫苦衷。

猛將闖如虓虎狂，身經百戰助強梁。

一朝斷送纖纖手，李逆魂飛魄亦亡。

立春日遲楊杏村不至

嚴冬消盡意徘徊，渺渺餘心獨遠懷。

北向薊門幾眺望，春風不送故人來。

湖北道中

春山缺處露桃林，翠竹蒼松掩映新。

綠水一灣斜抱去，苔磯獨立釣魚人。

觀劇偶成

乙卯之歲，客居濮陽時，河工興舉演劇，賽神班中有童子名馥青者，年十四歲，充正旦腳色，風神瀟灑，氣度從容，最善於舞臺之上為烈女節婦傳神寫照，每演至淒惋之處，則聲淚俱下，旁觀亦多有泣下者，而余下淚最多，故賦詩以志之。

雙眉澹掃善顰顰，瀟灑風姿秋水神。

聽到歌喉聲咽處，青衫司馬半濕襟。

裝成嫋娜恁多情，一出驪歌淚欲傾。

漫道大羅天上曲，人間不得聽分明。

雅韻隨風來月宮，悠然響遏白雲橫。  
如何仙子多幽恨，常作梨花帶雨容。  
和友人何筱棠贈妓原韻並勸筱棠為之消籍  
珠玉精神白雪心，可憐孽海竟深深。  
何郎本是揮豪客，欲贖蛾眉詎惜金。  
琵琶一曲奏潯陽，逝水年華徒自傷。  
且喜徐娘身未老，臂盟早定有情郎。  
慈溪張生甫君六旬壽詞  
天目兩乳長，瑞脈赴錢塘。  
龍蟠又虎踞，宋代曾發祥。  
余氣尚磅礴，直走慈溪鄉。  
水環山抱處，少微下垂芒。  
伊人誰宛在，張君讀書堂。  
胸中羅萬卷，邦家儲棟樑。  
舉世無真賞，荊璞沾莫償。  
出人曾小試，驥足難騰驤。

解組旋飲至，歡迎動一方。  
黎庶苦疾厄，先生熱中腸。  
刀圭活萬眾，生佛姓字香。  
心得難自秘，簡冊錄彰彰。  
要旨虛勞著，醫學達變詳（著有虛勞要旨、醫學達變二書）。  
風行遍海內，不為名山藏。  
先生善養生，精神日倍增。  
歷年周化甲，意態自縱橫。  
有如松柏茂，百歲不凋零。  
太簇律回新，先生初度辰。  
中甸有三日，華堂集嘉賓。  
共祝仁者壽，紫霞杯滿斟。  
歲月既可假，著作更等身。  
醫界仰山斗，流澤萬千春。  
贈友人楊杏村

丙辰之歲，客居德州，防次有見習員楊杏村者，居同院宇，朝夕相談宴見，其器弘識遠，議論風生，遞談救時之策，如述家珍。司馬德操云「識時務者為俊傑」，余今喜遇其人，爰作歌以贈之。

保陽有偉人，家居濡水濱。

聰明本天授，志氣憤風雲。

胸襟羅萬有，學術貫古今。

指揮天下事，如觀掌上紋。

縱橫億萬里，上下幾千春。

雄談驚四座，聽者振精神。

說同生公法，頑石亦傾心。

同胞苦饑溺，豈能長山林。

投筆班定遠，請纓漢終軍。

同此七尺軀，後先相追尋。

謝何筱棠贈詩為題扇上並為畫蘭於扇

山左有高士，飄然海鶴姿。

居近王貽上（新城人），後先相追隨。

文章排屈宋，風裁等田夷。

大才難為用，抱負紕數奇。  
沙麓初相遇，莫逆兩心知。  
殷勤獎勵意，寫作扇頭詩。  
更為畫幽蘭，龍蛇騰筆端。  
國香況國士，自喻風骨騫。  
竭成芻蕘句，難答意綿綿。

題畫

童子高振先者，友人錫三之哲嗣也。自髫齡已善書畫，曾為畫山水於扇端，因題其上。

種松作龍鱗，硬幹撐濃雲。  
雲白山潑黛，草色蒙茸新。  
筆端生造化，景物逼天真。  
題友人祁仲安肖相  
北海有高士，翛然雲鶴姿。  
抱負濟世略，落拓不逢時。  
閒居多韻事，行樂任天倪。

作畫學摩詰，作書學羲之。  
彈琴多古調，知音少子期。  
更悟養生理，玄奧師希夷。  
身有九仙骨，何須一品衣。

挽陸軍中將黃華軒公

衛岸風寒草色枯，日光黯黯雲模糊。  
林鳥悲鳴廐馬嘶，旌旗烈烈樹扶疏。  
景物觸懷何慘澹，壁壘依舊元老無。  
元老為誰我黃公，綸巾羽扇漢伏龍。  
民國肇造蝨賊起，公鎮河朔靖刁風。  
國家依公將大用，將星忽墜太行東。  
才堪濟世竟不壽，搔首直欲問蒼冥。  
今日萬眾齊灑淚，我為公哭又為公。  
賡吁嗟！

我公遺愛在人兮，德被群生。保障一方兮，萑澤風清。撫恤士卒兮，待以心腹。功垂異祀兮，勳銘鼎鐘。不朽有三兮，公身皆備。神明之壽兮，天地無窮。同胞熏沐兮，共薦馨香。大招賦罷兮，我心悽愴。公感虔誠兮，仿佛來饗。驂鸞駕虬兮，空際翱翔。俯仰乾坤兮，倍倍增感慨。黃泉碧落兮，極目茫茫。

擬諸葛武侯祠堂對聯（奉天高等師範題）

學為帝師，才為王佐，六伐七擒廿餘載，鞠躬盡瘁。  
難回者天，不磨者心，陣圖師表億萬年，浩氣長存。

〈醫學衷中參西錄第七期〉



放魚詩並序

有客饋活鯉魚兩尾，皆長尺餘，急命孫輩送之河中。又家人買魚中鱧魚一尾獨活，亦命孫輩送河中。因作放魚詩以留紀念，且欲令孫輩知惜物命也。

鱧眠知拱北，鯉魚化為能。

水闊任游泳，何落人手中。

送汝歸江去，潭深少露蹤。

聞香莫貪餌，網罟避重重。

隨流多食物，慎勿害微生。

此詩為先師未歿前二日所作，仁慈之懷，溢於言表，與周子養魚記同一懷抱，可並垂千古。於病患纏綿中，猶能有此豪興，信非學深養到者不能也。

受業李寶和記

題先師張壽甫先生遺像

先生義氣薄重霄，遺像神姿萬古豪。  
一片婆心昭日月，千秋令聞卿雲高。  
精思慧眼軼群倫，冀北神醫天下聞，  
試緬音容懷叔度，高山安仰挹清芬。

深縣受業張埜方輿頓首

王序

古聖賢作醫學，以救濟群生，為舉世日用，所需甚於水火，進而與世運相消息、相盛衰。岐黃衣鉢，代有傳人，問世一出，良有以也。鹽山張壽甫先生，寢饋醫學，垂五十年，博綜典籍，神明而變化之，辨天道之盈虛消長，察稟賦之南北各殊，因時辨方，按脈立法，會通今古，兼用中西。四方學者歸之如雲，而先生不厭不倦，復遂同人之請，設函授學校，以廣流傳。先生沖和直諒，濟世為懷，延診求方者，戶屨常滿，沉疴宿症，無不立應，應無不效，而請益者，或前席陳詞，或函牘紛沓，口講手答，竟委窮源，言無不盡，甚或漏夜未嘗有倦容。居迪嘗請先生量為同志分勞，以事珍衛。先生愀然曰「病機之變，萬有不齊，一字之微，毫釐千里，曷敢稍自懈逸，假手於人哉！」

嗚呼！先生布衣蔬食，不慕榮利，與夫所著《衷中參西錄》六期，固人所共知者耳，而先生之立身植品，一以聖賢為指歸，譬彼談佛，世人但知我佛之成道救人，而我佛之投崖飼虎，殆未能盡知也，先生誠千古之傳人哉！癸酉秋，居迪道次津沽，見先生精神奕奕，宏論博議，猶如往昔，乃別經匝月，逮還沽上，而先生已歸道山。回憶別時，先生若有不愉色者，然豈預有所知耶？小兒毓瀛幸辱門牆，備蒙教育，未及一修北面之儀，其抱憾又何如耶？長公子春生兄，梓函授遺篇，為《衷中參西錄》第七期以行世，是未讀《傷寒論》者，固不可不讀，已讀《傷寒論》者，尤不可不讀之書也。雖止於《傷寒論》，而大要可以類推。春

生兄克繼先業，家學淵源，自必能神明變化，以成先生未竟之志，而濟世壽民詎有量哉！

甲戌暮春河間王居迪惠安

范文正公曰「不為良相，必為良醫」，蓋以燮理陰陽，補偏救弊，致平而定亂，起死而回生，良相、良醫其揆一也。或曰「舉一政而四海臚歡，進一言而萬民食德，良相之豐功偉烈，豈醫者三指一方所可侔哉」？曰「不然，子之所擬述而不作之時醫，而非所謂良醫也。良醫者，必先治儒通經，寢饋於《本經》、《靈》、《素》，能於醫理觸類旁通，發人之所未發，然後本悲天憫人之懷，出其緒餘以問世，進而濟眾臨證，則妙緒環生，退而著書立論，則名山不朽。仲景而後，代有聞人，若晉之王叔和、唐之孫思邈、宋之成無己、明之喻嘉言，以及有清徐、張諸賢皆是也。中古以後，治亂相尋，世少長治久安之策而多活人濟世之書，是良相致治一時，猶未若良醫垂法千古也。吾先師張壽甫先生，品學身世，於本集各期序文及前三期自序已見崖略，稱之為良醫，洵無愧色矣。及讀先生之書，仰見肫肫懇懇之誠，流露行間字裡，其善氣迎人之概，求之他書未之有也。發明醫理，本諸載籍，以求弦外之音。如暢論大氣，發人之所未發；化裁經方，言人之所不敢言。以古今稟賦不同，為體以親嘗藥力之特效，為用不空談、不諱過，立身於不敗之地。語可驚人，而效歸實用，求之前賢亦未之有也。故《衷中參西錄》前出六期，久已名重醫林，風行海內，私淑名流，遵用方論，救人無算，先生意猶未足。於癸酉春，發起醫學函授，先生時年七十有四歲，精神矍鑠，樂此不疲，手制講義夜分不倦。函授要目，首重傷寒，繼之以溫病、雜病，以及臨床醫話，

範圍愈廣，預定四年畢業。嘗曰『吾老矣，今將未了之事，托諸函授，四年之後，吾門中必有人材輩出，以行吾志，則可息影田園，樂吾天年矣』。時不敏亦列門牆，方自期許，不圖是年八月，先生遽歸道山，傷寒講義方告結束，溫病正在開端，僅得遺方十一首。長公子春生，哀輯講義成書付梓，公之於世，名曰《衷中參西錄》第七期，與前六期合為一集，成先志也。書中名貴之處，筆難盡述，要在繁徵博引，與古為新，而又與古人精蘊天然合拍，水到渠成，匯為大觀。論斷中有云「吾人生於古人之後，不可以古人之才智囿我，實貴以古人之才智啟我，然後醫學方有進步」，嗚呼！寥寥數語，可見吾師畢生之志矣，謂之為全書三昧亦宜。

中華民國二十有三年甲戌春二月通縣受業高崇勳硯樵謹序

袁中參西錄第七期題詠六首

尋到源頭一葦航，天空海闊任平章。  
洛陽已貴名山集，又見七期肘後方。  
百家曾已注傷寒，剩義無多智欲殫。  
獨取經方加變化，古今稟賦豈同看。  
卅年心血結晶瑩，掃盡飛雲月自明。  
且把六經為注腳，果然一語息紛爭。  
溫病遺方十首多，坳堂杯水起洪波。  
新機肯傍他人戶，絕筆麟經意若何。  
吉光片羽自成家，天外奇峰燦落霞。  
拾得寒山微意後，春風滿座話長沙。  
欲將心事付鴻篇，滿紙雲煙朵朵蓮。  
天意果然關造化，長留遺憾永年年。

通縣受業高崇勳硯樵謹識

林序

聖人以益世為心，不以名利自私，農黃之世道，在君相既明農教稼，制禮作樂，而天行時氣、飲食、寒暑恐民之不免於疾病也，乃復闡明醫理，聖人之用心其周匝為何如乎？降及後世，人心日偷，醫者多炫其術以市利，又或不學無術，以其生人者殺人，雖歷代不乏名家著述，然自仲景而後，多空談玄理，鮮能證諸實驗，遂使我中華數千年神聖醫學，幾如曙後晨星矣。吾師鹽山張壽甫先生，博學窮經，感醫學之頹廢，悵醫德之淪喪，慨然以振興醫學為己任。行道數十年，足跡遍天下，沉疴宿痼群醫束手，一經診視，無不著手回春，所著《醫學衷中參西錄》凡六集，不僅風行遍國中，西人亦譯為番文，奉為圭臬。

書丹拳拳，私淑亦既有年，衣食奔逐，未能執弟子之役，自先生設立函授醫學校，始得附列門牆，講義以《傷寒論》開始，且《傷寒》一書雖代有注者，仍不免附會牽強，晦澀罕通，先生反復解釋，胥以經驗證明，使學者易於領悟，顧書丹素性魯鈍，請益繁多，函牘往還，無或有間，先生不責其瀆，而勸其勤，隨問批答，淪我性靈，益我神智，方期努力加勉，仰答裁成，何意六經講義甫畢，而先生遽歸道山，嗚呼！先生絕詣苦心，竟抱憾以終天耶？數耶？不禁令人痛哭矣。今春生大兄，彙集諸稿，梓為《衷中參西錄》第七期以行世，誠度世之金針，救時之寶筏，豈獨垂名於當世，尤當流澤於千秋也。猶憶書丹於壬申之秋，展謁



師門時，先生施診遠道，未得一親杖履，乃竟未能再申瞻拜之儀，心喪詎有窮期耶。爰於書成之日，略書數語以志哀悼。

甲戌清和月受業門人長樂林書丹謹識

張序

予嘗學道於段正元師尊之門。師曰「讀古人之書，不被古人所愚，學今人之學，不被今人所惑，從容中道，擇善而從，其庶幾乎」？予嘗本此旨，以求天下之士而不可得，後遇張壽甫先生於津門，先生鹽山名儒，經史淹通，舉凡中外科學，天文、算數、聲光、電化，莫不研究有得。居常以天下事自任，其後懷才不遇，遂隱於醫，歷遊國內通商大埠，南至漢皋，東抵遼沈，所至博採旁搜，以資醫理之研究。後乃卜居津門，以其平生經驗，著《醫學衷中參西錄》，先後出書凡六期，共二十五卷，風行全國，遠至異邦。千古疑難大症，前賢所諉為不治者，先生皆自立新方，效如桴鼓。海內賢達，奉為師資者有年矣。顧先生猶以為未足，嘗謂軒岐、仲景之書，大經大法固已燦然，然輾轉傳寫，訛錯不鮮，且時代變遷，人之稟賦各異，故藥之涼熱，方之配合，均宜酌古准今，權輕重、峻緩之不同，察天時、人事之迭變，為之變通改正而後可。而前人之注解，多為古人作奴隸，有不可通者，亦強為之解，是不特厚誣古人，亦且遺害於來世。於是先生復設函授醫學，手著講義，經驗與理想同歸，哲學與科學相合，融冶古今，匯通中外，獨辟統係，列為成書。古代醫聖之心傳，一語道及，石破天驚，為中華醫界開一新紀元。學者本此，以求病無遁情，胸有成竹，如飲上池之水，洞見癥結，以之治疾，何疾不瘳？是誠功同良相，博濟蒼生者也。若段師尊之所稱，先生可以當之矣。予幼承庭訓，讀書之餘兼習醫理，忽忽十年，苦無門徑可尋，自聆先生名

論，欽佩莫名，於是五體投地，親受師門。先生誨人不倦，每有疑難輒反復剖解，若惟恐人之不喻者，亦見其誘導後學之至意也。予方以得名師自幸，而先生於傷寒大綱甫經完畢，溫病方一人手之際，竟駕返道山，時癸酉八月初八日也，先生壽七十有四。猶憶是歲七月間，造先生處執卷問難，先生講解畢，援筆成自詠詩云「八旬已近又何求，意匠經營日不休，但願同胞皆上壽，敢云身後有千秋」，書成，唏噓！不料竟成讖語，痛矣！先生哲嗣春生兄，家學淵源，其論證處方，膽識過人，有先生風，曾充前京畿衛戍司令部軍醫官，今繼承先志，行道津門，各處同學函簡紛來，咸以將先生函授遺稿付印為請，爰詳加校訂，付之手民，為《衷中參西錄》第七期。予以深蒙先生指導之惠，而又歎春生兄之克紹先志也，略述顛末，而為之序云。

民國二十三年甲戌正月受業門人深縣張埜方輿敬序

劉序

參贊化育，燮理陰陽，古聖賢致身君相，行道於國者之所為也。挽天地之診癘，救斯民之疾苦，士君子抱道在躬，不遇於時者之所為也。范文正公，不為良相，願為良醫，夫非以濟世活人厥相功同歟？我師壽甫先生當代名儒，懷抱利器，不得志於場屋，遂絕意仕，進而隱於醫壇，九折之良，得軒岐之秘，垣方洞見，著手春成，奇論鴻篇，化通微莫。前著《衷中參西錄》已出版者凡六期，久已名滿天下，無待予之饒舌矣。癸酉春復設函授醫學，所著講義，首論傷寒，凡古人未發之意，先聖言外之旨，不惜傾囊倒篋而出，苦口婆心，喚醒夢夢，一正中醫數千年之訛謬，誠度人之金針，救世之寶筏也。先生云傷寒完畢，繼將各科依次發揮，孰料傷寒甫成，溫病甫一人手，先生竟駕歸道山。泰山其頽，梁木其壞，誠可為我醫界痛哭矣。今先生哲嗣春生兄，校勘遺稿，將付之梓，為《衷中參西錄》第七期，予以親受先生，宿受教誨，師恩未報，有不能已於言者，爰不揣冒昧，而為之序。

冀縣受業劉明寶謹識

孫序

醫者意也，君子之道也。何則？夫藥能生人，亦能殺人。若學焉而不精，方藥亂投，其不至以生人者殺人幾希？又有稍精於朮者，偶有心得，密而不傳，自高身價，以為博取厚利之資，是皆賤丈夫之所為，甚非古人濟世活人之深意也。惟我師張壽甫先生，黃卷功深，青囊學富，囊括中外，融貫古今，審證詳而確，處方簡而效，無論貧富，有求必應，故受其惠者不可勝數。診餘之暇，集四十餘年之心得，成《衷中參西錄》六期，都二十五卷。問世以來，風行全國，遠至歐美，有口皆碑，勿待予之贅述矣。晚年卜居津門，復設中醫函授學校，受業者遍全國，先生編著講義，焚膏繼晷，孜孜不倦，因勞苦過度，於癸酉八月間謝世長辭，壽七十有四。嗚呼！先生可謂鞠躬盡瘁於醫界矣。先師生平著作，多發前人所未發，言今人所不敢言，時人稱為醫界革命第一人，洵不誣也。其長公子春生亦精於醫，繼父業行道津門，盛名卓著，因不敢埋沒先生之遺志，故集《傷寒論》舊稿，以成《衷中參西錄》第七期，付之敬勵，公之於世，行見災癘消弭二豎潛縱，抑亦登斯民於壽域也。

天津受業門人孫玉泉靜明謹識

題詞

余因感弟妹等染疫，誤於庸手，乃從吾師張公壽甫習醫，我師面命耳提，誨人不倦。余方慶略有進益，忽我師以編纂函授講義，勞心過甚，遽歸道山，至今思之，余痛猶未已也。今春生學兄，將《傷寒講義》匯訂成冊，公諸醫界，余因緬懷師恩，勉成七絕四章，自愧不工，著冀之譏，知所難免，抑亦聊志吾師之生平云爾。

妙術回春本自成，滿腔心血為蒼生。  
霖雨遍敷三千界，不見哀聲見義聲。  
絳帳春風煦煦融，滿門桃李拜張公。  
及時化雨原無價，卅卷青囊啟眾蒙。  
七十高年又四秋，平生大願未全酬。  
傷寒要義名千古，溫病遺方與世留。  
我師道滿已登仙，猶憶燈前細細傳。  
念念音容空幻想，行間字裡自思研。

天津受業李寶和允中拜題

題記

先嚴壽甫府君，以醫問世垂五十年，所著《醫學衷中參西錄》，循期印行已至六期，歷蒙海內醫學名家交口稱讚，游揚備至，先嚴感深知己，益樂道不倦。癸酉春，復有醫學函授之組設，及門同學多為俊義，所授學理亦一洗膚淺，蓋旨趣所寄，欲將畢生心血最後表見於世也。原定方策四年畢業，課程首先精研傷寒、溫病、金匱雜證，而後殿以醫話匯為大觀。惜天不我佑，編發講義，傷寒甫畢，溫病正在開端，先嚴競於是年秋八月謝世，抱憾以終。嗚呼！可不痛哉！蔭潮不肖，自幼隨侍先嚴讀書，耳提面命，少得緒餘，何期慘遭大故。思有以勉繼先志，謹將先嚴遺著《傷寒論講義》及最後手澤溫病驗方十一首編輯成書，公之於世，為《衷中參西錄》第七期，感蒙諸賢遠道賜序，有光簡冊，並擬廣徵醫林前輩及同門碩彥，凡曾與先嚴通函、晤面，研摩醫理、質疑問難，重要之簡翰、談片、集錦、零紈，繽紛下惠，繼以蔭潮生平所聞，於先嚴之醫訓，其理論為前所未發明者，匯為醫話拾零，以作是集八期之續，蓋亦繼志述事之微意，惟海內賢達有以教之幸甚。

不肖男蔭潮謹識

〈 第 一 卷 〉



六經總論

傷寒治法以六經分篇，然手足各有六經，實則十二經也。手足之經既有十二，而《傷寒論》但分為六經者何也？按《內經》之論十二經也，凡言某經而不明言其為手經、足經者皆係足經，至言手經則必明言其為手某經。蓋人之足經長、手經短，足經大、手經小，足經原可以統手經，但言足經而手經亦恆寓其中矣。《傷寒論》之以六經分篇，此遵《內經》定例，寓手經於足經中也。彼解《傷寒論》者，謂其所言之六經皆係足經，是猶未明仲景著傷寒之深意也。

經者，氣血流通之處也。人之臟腑與某經相通，即為某經之府，其流通之氣血原由府發出，而外感之內侵遂多以府為歸宿。今將手足十二經及手足十二經之府詳列於下。

手足雖有十二經，其名則分為六經，因手足經之名原相同也。其經有陰有陽，其陽經分太陽、陽明、少陽，其陰經分太陰、少陰、厥陰。其陰陽之經原互相表裡，太陽與少陰為表裡，陽明與太陰為表裡，少陽與厥陰為表裡。凡互為表裡者，因其陰陽之經並行，其陽行於表，陰行於裡也。至於經之分屬於府者，足太陽經之府在膀胱，足少陰經之府在腎，足陽明經之府在胃，足太陰經之府在脾，足少陽經之府在膽，足厥陰經之府在肝，此足之三陰、三陽經與府也。

手之太陽經其府在小腸，手之少陰經其府在心，手之陽明經其府在大腸，手之太陰經其府在肺，手之少陽經其府在三焦，手之厥陰經其府在心胞，此手之三陰、三陽經與府也。

陽經為陰經之表，而太陽經又為表中之表。其經之大都會在背，而實則為周身之外廓，周身之營血衛氣皆賴其衛護保合，且具有充分之熱力，為營衛御外感之內侵，是以《內經》名之為巨陽。推原其熱力之由來，不外君、相二火，君火生於心之血脈與肺相循環，而散熱於胸中大氣（一名宗氣），以外通於營衛，此如日麗中天，有陽光下濟之熱也，是以其經名為太陽。相火生於腎中命門，腎原屬水，中藏相火，其水火蒸熱之氣，由膀胱連三焦之脂膜以透達於身之外表，此猶地心水火之氣（地中心有水火之氣），應春令上透地面以生熱也，為其熱力發於水中，故太陽之經又名太陽寒水之經也。為太陽經之熱力生於君、相二火，是以其經不但以膀胱為府，而亦以胸中為府，觀《傷寒論》陷胸諸湯、丸及瀉心諸湯，皆列於《太陽篇》中可知也。

至於人病傷寒，其六經相傳之次第，詳於《內經·素問》《熱論篇》謂「人之傷於寒也，則為病熱，一日巨陽受之，故頭項痛、腰脊強；二日陽明受之，陽明主肌肉，其脈俠（同夾）鼻絡於目，故身熱目疼，而鼻乾不得臥也；三日少陽受之，少陽主膽，其脈循脅絡於耳，故胸脅痛而耳聾；三陽經絡皆受其病而未入於臟者故可汗而已；四日太陰受之，太陰脈布胃中絡於嗑（咽喉），故腹滿而嗑

乾；五日少陰受之，少陰脈貫腎絡於肺，係舌本，故口燥舌乾而渴；六日厥陰受之，厥陰之脈循陰器而絡於肝，故煩滿而囊縮。經絡受病人於府者，故可下而已」，此《內經》論六經相傳之次第也。至《傷寒論》六經之次序，皆以《內經》為法，而未明言其日傳一經，至愚生平臨證之實驗，見有傷寒至旬日，病猶在太陽之府者，至他經相傳之日期，亦無一定，蓋《內經》言其常，而病情之變化恆有出於常例之外者，至傳至某經，即現某經之病狀，此又不盡然，推原其所以然之故，且加以生平臨證之實驗，知傳至某經即現某經之病狀者，多係因其經先有內傷也。若無內傷則傳至某經恆有不即現某經之病時，此在臨證者細心體察耳。

至於六經之命名，手足皆同，然有因手經發源之府而命名者，有因足經發源之府而命名者。如太陽經名為太陽寒水之經，此原因足太陽之府命名，而手太陽亦名太陽寒水之經者，是以足經而連帶其手經也。他如陽明經名為陽明燥金之經，是因手陽明之府命名（手陽明府大腸屬金，其互為表裡之肺亦屬金），而足陽明經亦名陽明燥金之經者，是以手經而連帶其足經也。少陽經名為少陽相火之經，此因足少陽之府命名（膽中寄有相火），而手少陽經亦名為少陽相火之經者，是以足經而連帶其手經也。太陰經名為太陰濕土之經，此因足太陰之府命名（脾為濕土），而手太陰經亦名太陰濕土之經者，是以足經而連帶其手經也。少陰經名為少陰君火之經，此因手少陰之府命名（心為君火），而足少陰經亦名少陰君火之經者，是以手經而連帶其足經也。厥陰經名為厥陰風木之經，此因足厥陰之府

命名（肝屬木而主風），而手厥陰經亦名厥陰風木之經者，是以足經而連帶其手經也。此手足十二經可並為六經之義也。

太陽病桂枝湯證

病名傷寒，而《太陽篇》之開端，實中風、傷寒、風溫並列，蓋寒氣多隨風至，是中風者，傷寒之誘起也。無論中風、傷寒，入陽明後皆化為溫，是溫病者傷寒之歸宿也。惟其初得之時，中風、傷寒、溫病，當分三種治法耳。為中風為傷寒之誘起，是以太陽篇開始之第一方為桂枝湯，其方原為治中風而設也。《傷寒論》原文「太陽病，發熱，汗出，惡風，脈緩者（緩脈與遲脈不同，脈搏以一息四至為準，脈遲者不足四至，若緩脈則至數不改，似有懶動之意），名為中風」。

《傷寒論》原文「太陽中風，陽浮而陰弱（脈法關前為陽，關後為陰，其浮脈見於關前，弱脈見於關後，浮者著手即得，弱者不任重按）。陽浮者，熱自發，陰弱者，汗自出，嗇嗇惡寒（單弱不勝寒之意），淅淅惡風（為風所傷恆畏風聲之意），翕翕發熱（其熱蘊而不散之意），鼻鳴乾嘔者，桂枝湯主之」。

【桂枝湯方】

桂枝三兩去皮，芍藥三兩，炙甘草二兩，生薑三兩，大棗十二枚擘。上五味咀，以水七升，微火煮取三升，去滓，適寒溫，服一升。服須臾，啜熱稀粥一升餘以助藥力，溫覆令一時許，遍體微似有汗者，益佳，不可令如水流漓，病必不除。若一服汗出病瘥（愈也），停後服，不必盡劑，若不汗，更服根據前法，又不汗，後服小促其間，半日許，令三服盡，若病重者，一日一夜服，周時觀之，

服一劑盡，病證猶在者，更作服，若汗不出者，乃服至二三劑。禁生冷、粘滑、肉麵、五辛、酒酪、臭惡等物。

古用桂枝，但取新生枝之嫩尖，折視之皮骨不分，若見有皮骨可分者，去之不用，非去枝上之皮也。

陳古愚曰「桂枝辛溫陽也，芍藥苦平陰也、桂枝又得生薑之辛同氣相求，可恃之以調周身之陽氣；芍藥而得大棗、甘草之甘，則甘苦化合，可恃之以滋周身之陰液，即取大補陰陽之品，養其汗源為勝邪之本，又啜粥以助之，取水穀之津以為汗，汗後毫不受傷，所謂立身有不敗之地以圖萬全也」。

人之營衛皆在太陽部位，衛主皮毛，皮毛之內有白膜一層名為腠理，腠理之內遍佈微絲血管，即營也。其人若衛氣充盛，可為周身之外圍，即受風不能深入（此受風，不可名為中風），其人恆多汗閉不出，迨其衛氣流通，其風自去，原可不藥而癒也。至桂枝湯所主之證，乃衛氣虛弱，不能護衛其營分，外感之風直透衛而入營，其營為風邪所傷，又乏衛之保護，是以易於出汗。其發熱者，因營分中之微絲血管原有自心傳來之熱，而有風以擾之，則更激發其熱也。其惡風者，因衛虛無御風之力，而病之起點又由於風也。推原其衛氣不能衛護之故，實由於胸中大氣之虛損。《靈樞》〈五味篇〉曰「穀始入於胃，其精微者，先出於胃之兩焦，以溉五臟，別出兩行營衛之道，其大氣之搏而不行者，積於胸中，命曰氣海」。由斯觀之，營衛原與胸中大氣息息相通，而大氣實為營衛內部之大都會，

愚臨證實驗以來，見有大氣虛者，其營衛即不能護衛於外而汗出淋漓，夫大氣原賴水穀之氣時時培養，觀服桂枝湯者當啜熱粥以助藥力，此不惟助其速於出汗，實兼欲助胸中大氣以固營衛之本源也。

或問「桂枝湯提綱中原謂陰弱者汗自出，未嘗言陽弱者汗自出也。夫關後為陰主血，關前為陽主氣，桂枝湯證，其弱脈惟見於關後，至關前之脈則見有浮象，未見其弱，而先生竟謂桂枝湯證之出汗，實由於胸中大氣之弱，不顯與提綱中之言相背乎」？答曰「凡受風之脈多見於關前，提綱中所謂陽浮者，其關前之脈因受風而浮也，所謂陰弱者，知其未病之先其脈原弱，至病後而仍不改其弱也，由斯而論，其未病之先，不但關後之脈弱，即關前之脈亦弱，既病之後，其關前脈之弱者轉為浮脈所掩，而不見其弱耳。然其脈雖浮，必不任重按，是浮中仍有弱也，特古人立言尚簡，未嘗細細明言耳。是以愚用桂枝湯時，恆加黃耆以補其胸中大氣，加薄荷以助其速於出汗，不至若方後所云，恆服藥多次始汗也。又宜加天花粉助芍藥以退熱（但用芍藥退熱之力恆不足），即以防黃耆服後能助熱也（黃耆天花粉等分並用，其涼熱之力相敵，若兼用之，助芍藥清熱，份量又宜多用）。若遇乾嘔過甚者，又宜加半夏以治其嘔，惟此時藥局所鬻之半夏，多制以礬（雖清半夏亦有礬），若用以止嘔，必須用微溫之水淘淨礬味，用之方效」。

或疑《傷寒論》方中未有用薄荷者，想薄荷之性或於傷寒有所不宜，是以仲景於治傷寒諸方中未嘗一用。不知論古人之方，當先知古人所處之世，當仲景時，

論藥之書惟有《神農本經》，是以仲景所用藥品不外《神農本經》，而薄荷古名為，菜蔬中或有用者，而《本經》未載，是以仲景不用也。且薄荷之性涼而能散，能發出人之涼汗，桂枝湯證，原挾有外感之熱，發出涼汗即愈矣。惟不宜過煎以存其辛涼之性，則用之必有效也。

愚治桂枝湯證，又有屢用屢效之便方，較用桂枝湯殊為省事，方用生懷山藥細末兩半或一兩，涼水調和煮成稀粥一碗，加白糖令適口，以之送服西藥阿斯匹林一瓦（合中量二分六厘四毫），得汗即愈。

山藥富有蛋白質，人皆知其為補腎潤肺之品，而實具有人參性質，能培養全身氣化，兼能固攝全身氣化，服之能補助胸中大氣，使衛氣外護之力頓強。阿斯必林之原質，存於楊柳皮液中，而少加硫酸制之，為洞悉其原質及制法，故敢與中藥並用。楊柳皮中之津液其性原清涼，且有以皮達皮之用，又少制以硫酸，則其透表之力最速，少少用之即可發出周身涼汗，而外感之風熱可因之而頓解矣。

男蔭潮按：有服阿斯必林不能得汗者，必其人素有蘊寒，其脈之遲，阿斯必林之性原涼，故服之不能得汗，若煎生薑湯送服，其內蘊之寒得姜之辛溫透表，與阿斯必林相濟，必能得汗，屢用屢效，故附錄之。

桂枝湯證之出汗，不過間有出汗之時，非時時皆出汗也，故必用藥再發其汗，始能將外感之風邪逐出。然風邪去後，又慮其自汗之病不愈，故方中山藥與阿斯匹林並用，一發汗、一止汗也，至於發汗與止汗之藥並用而藥力兩不相妨者，此



中原有深義，蓋藥性之入人臟腑，其流行之遲速原迥異，阿斯匹林之性其發汗最速，而山藥止汗之力則奏效稍遲，是以二藥雖一時並用，而其藥力之行則一先一後，分毫不相妨礙也。

太陽病麻黃湯證（附：太陽與陽明合病麻黃湯證）

《傷寒論》原治傷寒之書，而首論中風者，因中風亦可名為傷寒也（《難經》曰「傷寒有五：有中風，有傷寒，有濕溫，有熱病，有溫病」）。然究與真傷寒不同，蓋中風病輕，傷寒病重，為其重也，而治之者必須用大有力之藥，始能勝任，所謂大有力者，即《傷寒論》中之麻黃湯是也。今試論麻黃湯證及麻黃湯制方之義，並詳論用麻黃湯時通變化裁之法。

《傷寒論》原文「太陽病，或已發熱，或未發熱，必惡寒，體痛，嘔逆，脈陰陽俱緊者，名曰傷寒」。又原文「太陽病，頭疼，發熱，身疼，腰痛，骨節疼痛，惡風，無汗而喘者，麻黃湯主之」。

脈象陰陽俱緊，實為傷寒之確徵，然緊脈之狀最難形容，惟深明其病理，自不難想像而得。脈生於心，心一動而外輸其血，周身之脈即一動，動則如波浪之有起伏，以理言之，凡脈之力大者，其起伏之勢自應愈大。至緊脈其跳動若有力而轉若無所起伏，究其所以然之故，實因太陽為外衛之陽，因為寒所襲，逼之內陷與脈相並，則脈得太陽蘊蓄之熱，原當起伏有力以成響應之勢，而寒氣緊縮之力，又復逼壓其脈道使不能起伏，是以指下診之似甚有力而竟直穿而過，且因其不得起伏，蓄極而有左右彈之勢，此緊脈真像也。

至麻黃湯證，全體作疼痛者，以筋骨不禁寒氣之緊縮也（鐵條經嚴寒則縮短，寒氣緊縮之力可知）。其發熱者，身中之元陽為寒氣閉塞，不能宣散而增熱也。

其無汗惡風者，汗為寒閉，內蘊之熱原欲借汗透出，是以惡風也。其作喘者，因手太陰肺經與衛共主皮毛，寒氣由皮毛入肺，閉其肺中氣管，是以不納氣而作喘。然深究其作喘之由，猶不但此也，人之胸中亦太陽之部位也，其中間所積大氣，原與外表之衛氣息相通，然大氣即宗氣，《內經·靈樞》（《內經》中《靈樞》。《素問》各自為書）謂「宗氣積於胸中，出於喉嚨，以貫心脈而行呼吸」，夫大氣既能以貫心脈，是營血之中亦大氣所流通也，傷寒之證，其營衛皆為外寒所束，則大氣內鬱必膨脹而上逆衝肺，此又喘之所由來也。

【麻黃湯方】

麻黃三兩，桂枝三兩去皮，甘草一兩炙，杏仁七十個去皮尖。上四味以水九升，先煮麻黃減二升，去上沫，納諸藥煮取二升半，去渣溫服八合（一升十合），復取微似汗，不須啜粥，餘如桂枝法將息。

麻黃發汗力甚猛烈，先煮之去其浮沫，因其沫中含有發表之猛力，去之所以緩麻黃發表之性也。麻黃不但善於發汗，且善利小便，外感之在太陽者，間有由經入府而留連不去者（凡太陽病多日不解者，皆是由經入府），以麻黃發其汗，則外感之在經者可解，以麻黃利其小便，則外感之由經入府者，亦可分消也。且麻黃又兼入手太陰能瀉肺定喘，俾外感之由皮毛竄入肺者（肺主皮毛），亦清肅無遺。是以發太陽之汗者不但麻黃，而仲景定此方時獨取麻黃也。桂枝味辛性溫，亦具有發表之力，而其所發表者，惟在肌肉之間，故善托肌肉中之寒外出，且《本

經》謂其主上氣咳逆吐吸（吸氣甫入即吐出），是桂枝不但能佐麻黃發表，兼能佐麻黃入肺定喘也。杏仁味苦性溫，《本經》亦謂其主咳逆上氣，是亦能佐麻黃定喘可知，而其苦降之性又善通小便，能佐麻黃以除太陽病之留連於府者，故又加之以為佐使也。至於甘草之甘緩，能緩麻黃發汗之猛烈，兼能解杏仁之小毒，即以填補（甘草屬土，能填補）出汗後之汗腺空虛也。藥止四味，面面俱到，且又互相輔助，此誠非聖手莫辦也。

附：用麻黃湯之變通法

人之稟賦隨天地之氣化為轉移，古今之氣化或有不同，則今人與古人之稟賦，其強弱厚薄、偏陰偏陽之際，不無差池，是以古方用於今日，正不妨因時制宜而為之變通加減也。麻黃湯原用解其外寒，服後遍體汗出，惡寒既愈，有其病從此遂愈者，間有從此仍不愈，後浸發熱而轉為陽明證者，其故何也？愚弱冠後，初為人治病時，用麻黃湯原方以治傷寒，有效有不效。其不效者，服麻黃湯出汗後其病恒轉入陽明，後乃悟今人稟賦多陰虧，後再用麻黃湯時，遂於方中加知母（近時知母多偽，宜以天花粉代之）數錢以滋陰退熱，則用之皆效。

大青龍湯治傷寒無汗煩躁，是胸中先有內熱，無所發泄，遂鬱而作煩躁，故於解表藥中加石膏以清內熱。然麻黃與石膏並用，間有不汗之時，若用麻黃加知母湯，將知母重加數錢，其寒潤之性入肺中化合而為汗，隨麻黃以達於外，而煩躁自除矣。

上所論者，麻黃湯原宜加知母矣，而間有不宜加者，此又不得不斟酌也。間有其人陽分虛者，又當於麻黃湯中加補氣之藥以助之出汗。一人年近四旬，身體素羸弱，於季冬得傷寒證，醫者投以麻黃湯汗無分毫，求為診治，其脈似緊而不任重按，遂於麻黃湯中加生黃耆、天花粉各五錢，一劑得汗而愈。

一人亦年近四旬，初得外感，經醫甫治癒，即出門作事，又重受外感，內外俱覺寒涼，頭疼氣息微喘，周身微形寒戰，診其脈六部皆無，重按亦不見，愚不禁駭然，問其心中除覺寒涼外，別無所苦，知猶可治，不至有意外之慮，遂於麻黃湯原方中為加生黃耆一兩，服藥後六脈皆出，周身得微汗，病遂愈。

一人，年過三旬，身形素羸弱，又喜吸鴉片，於冬令得傷寒證，因粗通醫學，自服麻黃湯，分毫無汗。求為診視，脈甚微細，無緊象，遂即所用原方，為加生黃耆五錢，服後得汗而愈。此二證皆用麻黃湯是不宜加知母，宜加黃耆者也。

嘗治一少年，於季冬得傷寒證，其人陰分素虧，脈近六至，且甚弦細，身冷惡寒，舌苔淡白。延醫診視，醫者謂脈數而弱，傷寒雖在初得，恐不可用麻黃強發其汗。此時愚應其近鄰之聘，因邀愚至其家，與所延之醫相商。愚曰「麻黃發汗之力雖猛，然少用則無妨，再輔以補正之品，自能穩妥奏功矣」。遂為疏方：麻黃錢半，桂枝尖一錢，杏仁、甘草各錢半，又為加生懷山藥、北沙參各六錢。囑其煎湯服後，若至兩點鐘不出汗，宜服西藥阿斯匹林二分許以助其出汗。後果如此服之，周身得汗而愈矣。

曾治鄰村李姓少年，得傷寒證已過旬日，表證未罷，時或惡寒，頭猶微疼，舌苔猶白，心中微覺發熱，小便色黃，脈象浮弦，重按似有力，此熱入太陽之腑（膀胱）也。投以麻黃湯，為加知母八錢，滑石六錢，服後一汗而愈。此證雖在太陽之表與腑，實已連陽明矣，故方中重用知母以清陽明之熱，而仍用麻黃解其表，俾其餘熱之未盡清者，仍可由汗而消散，此所以一汗而愈也。

至於《傷寒論》中載有其病重還太陽者，仍宜以麻黃湯治之，而愚遇此證，若用麻黃湯時亦必重加知母也。

麻黃湯證有兼咽喉疼者，宜將方中桂枝減半，加天花粉六錢，射干三錢，若其咽喉疼而且腫者，麻黃亦宜減半，去桂枝再加生蒲黃三錢以消其腫，然如此加減，涼藥重而表藥輕，若服後過點半鍾不出汗時，亦服西藥阿斯匹林瓦許以助其汗。若服後汗仍不出時，宜阿斯匹林接續再服，以汗出為目標，若能遍體皆微見汗，則咽喉之疼腫皆愈矣。

麻黃湯證，若遇其人素有肺勞病者，宜於原方中加生懷山藥、天門冬各八錢。麻黃湯證，若遇其人素有吐血病者，雖時已癒，仍宜去桂枝以防風二錢代之（吐血之證最忌桂枝），再加生杭芍三錢（按古之一兩約折為今之三錢，且將一次所煎之湯分作三劑，則一劑之中當有麻黃三錢），然又宜因時、因地、因人細為斟酌，不必定以三錢為準也。如溫和之時，汗易出，少用麻黃即能出汗。嚴寒之時，汗難出，必多用麻黃始能出汗，此因時也。又如大江以南之人，其地氣候溫暖，

人之生於其地者，其肌膚淺薄，麻黃至一錢即可出汗，故南方所出醫書有用麻黃不過一錢之語。至黃河南北，用麻黃約可以三錢為率。至東三省人，因生長於嚴寒之地，其肌膚頗強厚，須於三錢之外再將麻黃加重始能得汗，此因地也。至於地無論南北，時無論寒燠，凡其人之勞碌於風塵，與長居屋中者，其肌膚之厚薄強弱原自不同，即其汗之易出不易出，或宜多用麻黃，或宜少用麻黃，原不一致，此因人也。用古人之方者，豈可膠柱鼓瑟哉！

太陽與陽明合病麻黃湯證

《傷寒論》原文「太陽與陽明合病，喘而胸滿者，不可下，宜麻黃湯主之」。太陽與陽明合病，是太陽表證未罷，而又兼陽明之熱也。其喘者，風寒由皮毛襲肺也；其胸滿者，胸中大氣因營衛閉塞，不能宣通而生膜脹也；其言不可下者，因陽明仍連太陽，下之則成結胸，且其胸本發滿，成結胸尤易，矧其陽明之熱，僅在於經，亦斷無可下之理，故諄諄以不可下示戒也。仍治以麻黃湯，是開其太陽而使陽明初生之熱隨汗而解也。

證兼陽明，而仍用麻黃湯主治，在古人稟賦敦厚，淡泊寡欲，服之可以有效。今人則稟賦薄弱，嗜好日多，強半陰虧，若遇此等證時，宜以薄荷代方中桂枝。若其熱稍劇，而大便實者，又宜酌加生石膏（宜生用不可煨用，理詳白虎湯下）數錢，方能有效。

受業寶和按：陰虧則虛陽上浮，故桂枝之苦溫者不宜，服之則轉為汗後不解。



太陽溫病麻杏甘石湯證

至於溫病，在上古時，原與中風、傷寒統名之為傷寒，是以秦越人《難經》有傷寒有五之說。至仲景著《傷寒論》，知溫病初得之治法，原與中風、傷寒皆不同，故於太陽篇首即明分為三項，而於溫病復詳細論之，此仲景之醫學，較上古有進步之處也。

《傷寒論》原文「太陽病，發熱而渴，不惡寒者，為溫病。若發汗已，身灼熱者，名曰風溫。風溫為病，脈陰陽俱浮，自汗出，身重，多眠睡，息必鼾，語言難出」。

論溫病之開端，亦冠以太陽病三字者，因溫病亦必自太陽（此是足太陽非手太陽，彼謂溫病入手經，不入足經者，果何所據也）入也。然其化熱最速，不過數小時即侵入陽明，是以不覺惡寒，轉發熱而渴也。治之者不知其為溫病，而誤以熱藥發之，竟至汗出不解而轉增其灼熱，則即此不受熱藥之發表，可確定其名為風溫矣。其脈陰陽俱浮者，像風之飄揚也，自汗出者，熱隨浮脈外透也，身重者，身體經熱酸軟也，多眠睡者，精神經熱昏沉也，語言難出者，上焦有熱而舌腫脹也。

按：風溫之外，又有濕溫病與伏氣化熱溫病，而提綱中止論風溫者，因濕溫及伏氣化熱之溫，其病之起點亦恆為風所激發，故皆可以風溫統之也。

按：提綱中論風溫之病狀詳矣，而提綱之後未列治法，後世以為憾事。及反覆詳細推之，乃知《傷寒論》中原有治溫病之方，特因全書散佚，後經叔和編輯而錯簡在後耳。嘗觀《傷寒論》第六十二節云「發汗後，不可更行桂枝湯，汗出而喘，無大熱者，可與麻黃杏仁甘草生石膏湯」，今取此節與溫病提綱對觀，則此節之所謂發汗後，即提綱之所謂若發汗也，此節之所謂喘，即提綱之所謂息必鼾也，由口息而喘者，由鼻息即鼾矣，此節之所謂無大熱，即提綱之所謂身灼熱也，蓋其灼熱猶在外表，心中仍無大熱也，將此節之文與溫病提綱一一比較，皆若合符節。

夫中風、傷寒、溫病特立三大提綱，已並列於篇首，至其後則於治中風治傷寒之方首仍加提綱，以彼例此，確知此節之文原為溫病之方，另加提綱無疑，即麻杏甘石湯為治溫病之方無疑也。蓋當仲景時，人之治溫病者，猶混溫病於中風、傷寒之中，於病初得時，未細審其發熱不惡寒，而以溫熱之藥發之，是以汗後不解，或見其發熱不惡寒，誤認為病已傳裡，而竟以藥下之，是以百六十三節，又有下後不可更行桂枝湯云云。所稍異者，一在汗後，一在下後，仲景恐人見其汗出再誤認為桂枝證，故切戒其不可更行桂枝湯，而宜治以麻杏甘石湯。蓋傷寒定例，凡各經病證誤服他藥後，其原病猶在者，仍可投以正治之原方，是以百零三節云「凡柴胡湯病證而下之，若柴胡證不罷者復與小柴胡湯」。以此例彼，知麻

杏甘石湯為救溫病誤治之方，實即治溫病初得之主方，而欲用此方於今日，須將古方之份量稍有變通。

【麻黃杏仁甘草石膏湯原方】

麻黃四兩去節，杏仁五十個去皮尖，甘草二兩，石膏八兩碎綿裹。上四味以水七升，先煮麻黃，減二升，去上沫，納諸藥，煮取二升，去渣溫服一升。

方中之義，用麻黃協杏仁以定喘，伍以石膏以退熱，熱退其汗自止也。復加甘草者，取其甘緩之性，能調和麻黃、石膏，使其涼熱之力溶和無間以相助成功，是以奏效甚捷也。

按：此方原治溫病之汗出無大熱者，若其證非汗出且熱稍重者，用此方時，原宜因證為之變通，是以愚用此方時，石膏之份量恆為麻黃之十倍，或麻黃一錢、石膏一兩，或麻黃錢半、石膏兩半。遇有不出汗者，恐麻黃少用不致汗，服藥後可服西藥阿斯匹林瓦許以助其汗。若遇熱重者，石膏又可多用。曾治白喉證及爛喉痧證（爛喉痧證必兼溫病、白喉證，亦多微兼外感），麻黃用一錢，石膏恆重至二兩，喉證最忌麻黃，而能多用石膏以輔弼之，則不惟不忌，轉能借麻黃之力立見奇功也。

至於肺病之起點，恆有因感受風溫，其風邪稽留肺中化熱鑱肺，有時肺中作癢，即連連喘嗽者，亦宜投以此湯，清其久蘊之風邪，連服數劑其肺中不作癢，嗽喘自能減輕，再徐治以潤肺清火利痰之劑，而肺病可除矣。蓋此麻杏甘石湯之

用處甚廣，凡新受外感作喘嗽，及頭疼、齒疼、兩腮腫疼，其病因由於外感風熱者皆可用之，惟方中藥品之份量，宜因證變通耳。

【附記】

北平大陸銀行理事林農孫，年近五旬，因受風溫，雖經醫治癒，而肺中餘熱未清，致肺陰鑠耗，釀成肺病，屢經醫治無效。其脈一息五至，浮沉皆有力，自言喉連肺際，若覺癢則咳嗽頓發，劇時連嗽數十聲，周身汗出，必吐出若干稠痰，其嗽始止。問其心中常覺發熱，大便燥甚，四五日一行。因悟其肺際作癢，即頓發咳嗽者，必其從前病時風邪由皮毛襲入肺中者，至今猶未盡除也。因其肺中風熱相助為虐，宜以麻黃祛其風，石膏清其熱，遂為開麻杏甘石湯方，麻黃用錢半，生石膏用兩半，杏仁三錢，甘草二錢，煎服一劑，咳嗽頓愈。診其脈仍有力，又為開善後之方，用生山藥一兩，北沙參、天花粉、天冬各五錢，川貝、射干、蘇子、甘草各二錢，囑其多服數劑，肺病可從此除根。後閱旬日，愚又赴北平，林農孫又求診視，言先生去後，余服所開善後方，肺癢咳嗽仍然反覆，遂仍服第一次方，至今已連服十劑，心中熱已退，仍分毫不覺藥涼，肺癢咳嗽皆愈，且飲食增加，大便亦不甚乾燥。聞其所言，誠出愚意料之外也。再診其脈已不數，仍似有力，遂將方中麻黃改用一錢，石膏改用一兩，杏仁改用二錢，又加生懷山藥六錢，俾煎湯接續服之，若服之稍覺涼時，即速停止，後連服七八劑似稍覺涼，遂停服，肺病從此竟愈。

按：治肺勞投以麻黃杏仁甘草石膏湯，且用至二十餘劑，竟將肺勞治癒，未免令閱者生疑，然此中固有精細之理由在也。蓋肺病之所以難愈者，為治之者但治其目前所現之證，而不深究其病因也。如此證原以外感受風成肺勞，且其肺中作癢，猶有風邪存留肺中，且為日既久，則為錮閉難出之風邪，非麻黃不能開發其錮閉之深，惟其性偏於熱，於肺中蘊有實熱者不宜，而重用生石膏以輔弼之，既可解麻黃之熱，更可清肺中久蘊之熱，以治肺熱有風勞嗽者，原為正治之方，故服之立時見功。至於此藥，必久服始能拔除病根，且久服麻黃、石膏而無流弊者，此中又有理由在，蓋深入久錮之風邪，非屢次發之不能透，而伍以多量之石膏以為之反佐，俾麻黃之力惟旋轉於肺臟之中，不至直達於表而為汗，此麻黃久服無弊之原因也。至石膏性雖寒涼，然其質重氣輕，煎入湯劑毫無汁漿（無汁漿即是無質），其輕而且涼之氣，盡隨麻黃發表之力外出，不復留中而傷脾胃，此石膏久服無弊之原因也。所遇之證，非如此治法不愈，用藥即不得不如此也。

太陽病大青龍湯證（附：脈微弱汗出惡風及筋惕肉瞤治法）

有太陽中風之脈，兼見太陽傷寒之脈者，大青龍湯所主之證是也。其三十八節原文提綱云「太陽中風，脈浮緊，發熱，惡寒，身疼痛，不汗出而煩躁，大青龍湯主之。若脈微弱，汗出惡風者，不可服，服則厥逆，筋惕肉瞤，此為逆也」。

【大青龍湯方】

麻黃六兩去節，桂枝二兩去皮，甘草二兩炙，杏仁五十個去皮尖，生薑三兩切，大棗十二枚擘。石膏如雞子大碎（如雞子大當有今之三兩）。上七味，以水九升，先煮麻黃，減二升，去上沫，納諸藥，煮取三升，去滓溫服一升，取微似汗，汗出多者，溫粉撲之。一服汗者，停後服。汗多亡陽遂虛，惡風煩躁，不得眠也。

按：此大青龍湯所主之證，原係胸中先有蘊熱，又為風寒錮其外表，致其胸中之蘊熱有蓄極外越之勢，而其錮閉之風寒，而猶恐芍藥苦降酸斂之性，似於發汗不宜，而代以石膏，且多用之以厚其力，其辛散涼潤之性，既能助麻、桂達表，又善化胸中蘊蓄之熱為汗，隨麻、桂透表而出也，為有雲騰致雨之象，是以名為大青龍也。至於脈微弱汗出惡風者，原係胸中大氣虛損，不能固攝衛氣，即使有熱，亦是虛陽外浮，若誤投以大青龍湯，人必至虛者益虛，其人之元陽因氣分虛極而欲脫，遂致肝風萌動而筋惕肉瞤也。夫大青龍湯既不可用，遇此證者自當另有治法，擬用生黃耆、生杭芍各五錢，麻黃錢半，煎湯一次服下，此用麻黃以逐

其外感，黃耆以補其氣虛，芍藥以清其虛熱也。為方中有黃耆以補助氣分，故麻黃仍可少用也。若其人已誤服大青龍湯，而大汗亡陽，筋惕肉瞤者，宜去方中麻黃加淨莢肉一兩。

其三十九節原文「傷寒脈浮緩，身不疼，但重，乍有輕時，無少陰證者，大青龍湯發之」。細思此節之文，知所言之證原係溫病，而節首冠以傷寒二字者，因中風、溫病在本書之定例，均可名為傷寒也。凡外感之脈多浮，以其多兼中風也。前節言傷寒脈浮緊，是所中者為凜冽之寒風，是中風兼傷寒也。後節言傷寒脈浮緩，知所中者非凜冽之寒風，當為柔和之溫風，既中柔和之溫風，則即成風溫矣。是以病為傷寒必胸中煩躁而後可用石膏，至溫病其胸中不煩躁，亦恆可用石膏，且其身不疼但重，傷寒第六節溫病提綱中，原明言身重此明徵也。況其證乍有輕時，若在傷寒必不復重用石膏，惟溫病雖有輕時，亦可重用石膏。又傷寒初得有少陰證，若溫病則始終無少陰證（少陰證有寒有熱，此言無少陰證，指少陰之寒證而言，少陰寒證斷不可用大青龍湯，至少陰熱證，原為伏氣化熱竄入少陰，雖在初得亦可治以大青龍湯，此又不可不知），此尤不為傷寒而為溫病之明徵也。由此觀之，是此節原為治溫病者說法，欲其急清燥熱以存真陰為先務也。至愚用此方治溫病時，恆以薄荷代方中桂枝，尤為穩妥。

凡發汗所用之藥，其或涼或熱，貴與病適宜，其初得病寒者，宜用熱藥發其汗，初得病熱者，宜用涼藥發其汗。如大青龍湯證，若投以麻黃湯則以熱濟熱，

恆不能出汗，即或出汗，其病不惟不解，轉益增煩躁，惟於麻、桂湯中去芍藥，重加石膏多於麻、桂數倍，其涼潤輕散之性，與胸中之煩躁化合自能作汗，矧有麻黃之善透表者以助之，故服後復杯之頃，即可周身得汗也。曾治一人冬日得傷寒證，胸中異常煩躁，醫者不識為大青龍湯證，竟投以麻黃湯，服後分毫無汗，胸中煩躁益甚，自覺屋隘莫能容，診其脈洪滑而浮，治以大青龍湯，為加天花粉八錢，服後五分鐘，周身汗出如洗，病若失。

或問「服桂枝湯者，宜微似有汗，不可令如水流漓，病必不除，服麻黃湯者，復取微似汗，知亦不可令汗如水流漓也。今於大青龍湯中加花粉，服湯後竟汗出如洗而病若失者何也」？答曰「善哉問也，此中原有妙理，非此問莫能發之。凡傷寒、溫病，皆忌傷其陰分，桂枝湯證與麻黃湯證，禁過發汗者，恐傷其陰分也。至大青龍湯證，其胸中蘊有燥熱，得重量之石膏，則化合而為汗，其燥熱愈深者，化合之汗愈多，非盡量透發於外，其燥熱即不能徹底清肅，是以此等汗不出則已，出則如時雨沛然，莫可遏抑。蓋麻黃、桂枝等湯，皆用藥以祛病，得微汗則藥力即能勝病，是以無事過汗以傷陰分。至大青龍湯乃合麻、桂為一方，又去芍藥之酸收，益以石膏之辛涼，其與胸中所蘊之燥熱化合，猶如冶紅之鐵沃之以水，其熱氣自然蓬勃四達，此乃調燮其陰陽，聽其自汗，此中精微之理，與服桂枝、麻黃兩湯不可過汗者，迥不侔也」。



或問「大青龍湯證，當病之初得，何以胸中即蘊此大熱」？答曰「此傷寒中伏氣化熱證也（溫病中有伏氣化熱，傷寒中亦有伏氣化熱）。因從前所受外寒甚輕，不能遽病，惟伏藏於三焦脂膜之中，阻塞升降之氣化，久而化熱，後又因薄受外感之激動，其熱陡發，竄入胸中空曠之府，不汗出而煩躁，夫胸中原為太陽之府，為其猶在太陽，是以其熱雖甚而仍可汗解也。

太陽病小青龍湯證（附：從龍湯）

《傷寒論》大青龍湯後，又有小青龍湯以輔大青龍湯所不逮，蓋大青龍湯為發汗所用，如龍之乘雲而致雨。小青龍湯為滌飲所用，如龍之率水以歸海，故其湯皆可以青龍名。今於論大青龍湯後，更進而論小青龍湯。

《傷寒論》原文「傷寒表不解，心下有水氣，乾嘔，發熱而咳，或渴，或利，或噎，或小便不利，少腹滿，或喘者，小青龍湯主之」。

水散為氣，氣可復凝為水。心下不曰停水，而曰有水氣，此乃飲水所化之留飲，形雖似水而有粘滯之性，又與外感互相膠漆，是以有以下種種諸病也。乾嘔者，水氣粘滯於胃口也，發熱者，水氣變為寒飲，迫心肺之陽外越也，咳者，水氣浸入肺中也，渴者，水氣不能化津液上潮也，利者，水氣溜入大腸作瀉也，噎者，水氣變為寒痰梗塞咽喉也，小便不利少腹滿者，水氣凝結，膨脹於下焦也，喘者，肺中分支細管皆為水氣所瀰漫也。

【小青龍湯原方】

麻黃三兩去節，桂枝三兩去皮，芍藥三兩，五味子半升，乾薑三兩切，甘草三兩炙，細辛三兩，半夏半升湯洗。上八味，以水一斗，先煮麻黃，減二升，去上沫，納諸藥，煮取三升，去滓溫服一升。若微利者，去麻黃，加薤白，如雞子大，熬（炒也）令赤色；若渴者，去半夏加栝蒌根三兩；若噎者，去麻黃加附子一枚炮；若小便不利少腹滿者，去麻黃加茯苓四兩；若喘者，去麻黃加杏仁半升。

按：蕘花近時無用者，《醫宗金鑒》注，謂係芫花之類，攻水之力甚峻，用五分可令人下數十次，當以茯苓代之。又噎字，注疏家多以呃逆解之，字典中原有此講法，然觀其去麻黃加附子，似按寒痰凝結梗塞咽喉解法，方與所加之藥相宜。

【後世所用小青龍湯份量】

麻黃二錢，桂枝尖二錢，芍藥三錢，五味子錢半，乾薑一錢，甘草錢半，細辛一錢，半夏二錢，煎一盅作一次服。

喻嘉言曰「桂枝、麻黃無大小，而青龍湯有大小者，以桂枝、麻黃之變化多，而大青龍湯之變法不過於桂麻二湯之內施其化裁，故又立小青龍湯一法，散邪之功兼乎滌飲，取義山澤小龍養成頭角，乘雷雨而翻江攪海，直奔龍門之義，用以代大青龍而擅江河行水之力，立法誠大備也。昌昔謂膀胱之氣流行，地氣不升則天氣常朗，其偶受外感，則仲景之小青龍湯一方，與大士水月光中大圓鏡智無以異也。蓋無形之感挾有形之痰，互為膠漆，其當胸窟宅，適在太陽經位，惟於麻黃、桂枝方中，加五味子、半夏以滌飲而收陰，乾薑、細辛以散結而分解，合而用之，令藥力適在痰飲縮結之處，攻擊片時，則無形之感從肌膚出，有形之痰從水道出，頃刻分解無餘，而胸膈空曠矣」。

小青龍湯所兼主諸病，喘居其末，而後世治外感痰喘者，實以小青龍湯為主方，是小青龍湯為外感中治痰飲之劑，實為理肺之劑也。肺主呼吸，其呼吸之機

關在於肺葉之闢，其闢之機自如，喘病自愈。是以陳修園謂「小青龍湯當以五味、乾薑、細辛為主藥，蓋五味子以司肺之闢，乾薑以司肺之辟，細辛以發動其闢辟活潑之機，故小青龍湯中諸藥皆可加減，獨此三味不可加減」。

按：陳氏此論甚當，至其謂細辛能發動闢辟活潑之靈機，此中原有妙理。蓋細辛人皆知為足少陰之藥，故傷寒少陰證多用之，然其性實能引足少陰與手少陰相交，是以少陰傷寒，心腎不交而煩躁者宜用之，又能引諸藥之力上達於腦，是以陰寒頭疼者必用之，且其含有龍腦氣味，能透發神經使之靈活，自能發動肺葉闢辟之機使靈活也。鄒潤安謂「凡風氣寒氣，根據於精血、津液、便溺、涕唾以為患者，並能曳而出之，使相離而不相附，審斯則小青龍湯中之用細辛，亦所以除水氣中之風寒也」。

仲景之方，用五味即用乾薑，誠以外感之證皆忌五味，而兼痰嗽者尤忌之，以其酸斂之力甚大，能將外感之邪錮閉肺中，永成勞嗽，惟濟之以乾薑至辛之味，則無礙。誠以五行之理，辛能勝酸，《內經》有明文也。徐氏《本草百種注》中論之甚詳，而愚近時臨證品驗，則另有心得，蓋五味之皮雖酸，其仁則含有辛味，以仁之辛濟皮之酸，自不至因過酸生弊，是以愚治勞嗽，恆將五味搗碎入煎，少佐以射干、牛蒡諸藥即能奏效，不必定佐以乾薑也。

特是醫家治外感痰喘喜用麻黃，而以小青龍湯治外感之喘，轉去麻黃加杏仁，恆令用者生疑。近見有彰明登諸醫報而議其非者，以為既減去麻黃，將恃何者以

治外感之喘乎？不知《本經》謂桂枝主上氣咳逆，吐吸，是桂枝原能降氣定喘也。誠以喘雖由於外感，亦恆兼因元氣虛損，不能固攝，麻黃雖能定喘，其得力處在於瀉肺，恐於元氣素虛者不宜，是以不取麻黃之瀉肺，但取桂枝之降肺，更加杏仁能降肺兼能利痰祛邪之品，以為之輔佐，是以能穩重建功也。

《傷寒論》小青龍湯為治外感因有水氣作喘之聖方，而以治後世痰喘證，似有不盡吻合之處，誠以《傷寒論》所言之水氣原屬涼，而後世所言之痰喘多屬熱也。為其屬熱，則借用小青龍湯原當以涼藥佐之。嘗觀小青龍湯後諸多加法，原無加石膏之例，至《金匱》治肺脹作喘，則有小青龍加石膏湯矣。仲景當日先著《傷寒論》，後著《金匱要略》，《傷寒論》中小青龍湯無加石膏之例，是當其著《傷寒論》時猶無宜加石膏之證也。至《金匱》中載有小青龍加石膏湯，是其著《金匱》時已有宜加石膏之證也。夫仲景先著《傷寒論》後著《金匱要略》，相隔不過十餘年之間耳，而其病隨氣化之更變即迥有不同，況上下相隔千餘年乎？是以愚用小青龍湯以治外感痰喘，必加生石膏兩許，或至一兩強，方能奏效。蓋如此多用石膏，不惟治外感之熱且以解方中藥性之熱也。為有石膏以監製麻黃，若遇脈之實者，仍宜用麻黃一錢，試舉一案以徵明之。

堂姊丈褚樾濃，體豐氣虛，素多痰飲，薄受外感，即大喘不止，醫治無效，旬日喘始愈，偶與愚言及，若甚恐懼。愚曰「此甚易治，顧用藥何如耳。《金匱》小青龍加石膏湯，為治外感痰喘之神方，輔以拙擬從龍湯，則其功愈顯，若後再

喘時，先服小青龍湯加石膏，若一劑喘定，繼服從龍湯一兩劑，其喘必不反覆。若一劑喘未定，小青龍加石膏湯可服至兩三劑，若猶未痊愈，繼服從龍湯一兩劑必能痊愈。若服小青龍加石膏湯，喘止旋又反覆，再服不效者，繼服從龍湯一兩劑必效」。遂錄兩方贈之，樾濃甚欣喜，如獲異珍。後用小青龍湯時，畏石膏不敢多加，雖效實無捷效，偶因外感較重喘劇，連服小青龍兩劑，每劑加生石膏三錢，喘不止而轉增煩躁，迎為診視，其脈浮沉皆有力，遂即原方加生石膏一兩，煎湯服後其喘立止，煩躁亦愈，繼又服從龍湯兩劑以善其後。至所謂從龍湯者，係愚新擬之方，宜用於小青龍湯後者也。其方生龍骨、生牡蠣各一兩搗碎，生杭芍五錢，清半夏、蘇子各四錢，牛蒡子三錢，熱者酌加生石膏數錢或至一兩。

按：小青龍湯以驅邪為主，從龍湯以斂正為主。至斂正之藥，惟重用龍骨、牡蠣，以其但斂正氣而不斂邪氣也（觀《傷寒論》中仲景用龍骨牡蠣之方可知）。又加半夏、牛蒡以利痰，蘇子以降氣，芍藥清熱兼利小便，以為餘邪之出路，故先服小青龍湯，病減去十之八九，即可急服從龍湯以收十全之功也。

龍骨、牡蠣，皆宜生用，而不可煨用者，誠以龍為天地間之元陽與元陰化合而成，迨至元陽飛去，所餘元陰之質，即為龍骨（說詳第四期藥物學講義龍骨條下）。牡蠣乃大海中水氣結成，萬億相連，聚為蠔山，為其單片無孕育，故名為牡，實與龍骨同稟至陰之性，以翕收為用者也。若煨之則傷其所稟之陰氣，雖其質因煨少增黏澀，而翕收之力全無，此所以龍骨、牡蠣宜生用而不可煨用也。

若遇脈象虛者，用小青龍湯及從龍湯時，皆宜加參，又宜酌加天冬，以調解參性之熱。然如此佐以人參、天冬，仍有不足恃之時。曾治一人年近六旬，痰喘甚劇，脈則浮弱不堪重按，其心中則頗覺煩躁，投以小青龍湯去麻黃加杏仁，又加生石膏一兩，野臺參四錢，天冬六錢，俾煎湯一次服下。然仍恐其脈虛不能勝藥，預購生杭萸肉（藥房中之山萸肉多用酒拌蒸熟令黑，其酸斂之性大減，殊非所宜）三兩，以備不時之需。乃將藥煎服後，氣息頓平，閱三點鐘，忽肢體顫動，遍身出汗，又似作喘，實則無氣以息，心怔忡莫支，診其脈如水上浮麻，莫辨至數，急將所備之萸肉，急火煎數沸服下，汗止精神稍定，又添水煮透，取濃湯大盅服下，脈遂復常，怔忡喘息皆愈。繼於從龍湯中加萸肉一兩，野臺參三錢，天冬六錢，煎服兩劑，痰喘不再反復。

按：此證為元氣將脫，有危在頃刻之勢，重用山萸肉即可隨手奏效者，因人之臟腑惟肝主疏泄，人之元氣將脫者，恒因肝臟疏泄太過，重用萸肉以收斂之，則其疏泄之機關可使之頓停，即元氣可以不脫，此愚從臨證實驗而得，知山萸肉救脫之力十倍於參耆也。因屢次重用之，以挽回人命於頃刻之間，因名之為回生山茱萸湯。其人若素有肺病常咳血者，用小青龍湯時，又當另有加減，宜去桂枝留麻黃，又宜於加杏仁、石膏之外，再酌加天冬數錢。蓋咳血及吐衄之證，最忌桂枝而不甚忌麻黃，以桂枝能助血分之熱也。憶歲在癸卯，曾設教於本縣北境劉仁村，愚之外祖家也，有近

族舅母劉媪，年過五旬，曾於初春感受風寒，愚為診視，疏方中有桂枝，服後一汗而愈，因其方服之有效，恐其或失，粘於壁上以俟再用。至暮春又感受風溫，遂取其方自購藥服之，服後遂至吐血，治以涼血降胃之藥，連服數劑始愈。



太陽病旋覆花代赭石湯證

心下停有水氣可作乾嘔咳喘，然水氣仍屬無形不至於痞硬也。乃至傷寒或因汗吐下，傷其中焦正氣，致衝氣肝氣皆因中氣虛損而上干，迫搏於心下作痞硬，且其外呼之氣必噫而後出者，則非小青龍湯所能治矣，而必須治以旋覆花代赭石湯。

《傷寒論》原文「傷寒發汗，若吐若下解後，心下痞硬，噫氣不除者，旋覆代赭石湯主之」。

【旋覆代赭石湯方】

旋覆花三兩，人參二兩，生薑五兩切，代赭石一兩，大棗十二枚擘，甘草三兩炙，半夏半升洗。上七味，以水一斗煮取六升，去滓再煮取三升，溫服一升，日三服。

人之胃氣，其最重之責任在傳送飲食，故以息息下行為順，乃此證因汗吐下傷其胃氣，則胃氣不能下行，或更轉而上逆。下焦之衝脈（為奇經八脈之一），原上隸陽明，因胃氣上逆，遂至引動衝氣上衝，更助胃氣上逆。且平時肝氣原能助胃消食，至此亦隨之上逆，團結於心下痞而且硬，阻塞呼吸之氣不能上達，以致噫氣不除，噫氣者，強呼其氣外出之聲也。此中原有痰涎與氣相凝滯，故用旋覆花之逐痰水除脅滿者，降胃兼以平肝，又輔以赭石、半夏降胃，即以鎮衝，更

伍以人參、甘草、大棗、生薑以補助胃氣之虛，與平肝降胃鎮衝之品相助為理，奏功自易也。

按：赭石之原質為鐵氧化合，含有金氣而兼饒重墜之力，最善平肝、降胃、鎮衝，在此方中當得健將，而只用一兩，折為今之三錢，三分之則一劑中只有一錢，如此輕用必不能見效。是以愚用此方時，輕用則六錢，重用則一兩，蓋如此多用，不但取其能助旋復、半夏以平肝、降胃、鎮衝也，且能助人參以補助正氣。蓋人參雖善補氣，而實則性兼升浮，惟借赭石之重墜以化其升浮，則人參補益之力下行可至湧泉，非然者但知用人參以補氣，而其升浮之性轉能補助逆氣，而分毫不能補助正氣，是用之不如不用也。是以愚從屢次經驗以來，知此方中之赭石，即少用，亦當為人參之三倍也。夫當世出一書，一經翻印，其分量即恒有差謬，況其幾經口授、傳寫，至宋代始有印版，安知藥味之分量分毫無差謬乎？夫郭公、夏五、三豕渡河之類，古經史且不免差誤，況醫書乎？用古不至泥古，此以救人為宗旨，有罪我者，亦甘受其責而不敢辭也。再者赭石為鐵氧化合，宜生軋細用之，不宜煨用，若煨之，則鐵氧分離（赭石原是鐵礦，以火煨之鐵即外出），即不堪用，且其質雖硬，實同鐵銹（鐵銹亦係鐵氧化合），即作丸散亦可生用，於脾胃固毫無傷損也。

又旋覆花，《本經》謂其味鹹，主結氣、脅下滿、驚悸、除水。為其味鹹，有似朴硝，故有軟堅下行之功，是以有以上種種之功效，而藥房所鬻者其味甚苦，

分毫無鹹意，愚對於此等藥，實不敢輕用以恃之奏功也。敝邑（鹽山）武帝臺污所產旋覆花，其地近渤海，所產旋覆花大於藥房所鬻者幾一倍，其味鹹而且辛，用以平肝、降胃、開痰、利氣誠有殊效。有姻家王姓童子，十二三歲，於晨起忽左半身手足不遂，知其為痰瘀經絡，致氣血不能流通也。時蓄有自製半夏若干，及所採武帝臺旋覆花若干，先與以自制半夏，俾為末徐徐服之，服盡六兩，病瘳弱半，繼與以武帝臺旋覆花，俾其每用二錢半，煎湯服之，日兩次，旬日痊愈。蓋因其味鹹而兼辛，則其利痰開瘀之力當益大，是以用之有捷效也。夫鹹而兼辛之旋覆花，原為罕有之佳品，至其味微鹹而不甚苦者，藥局中容或有之，用之亦可奏效。若並此種旋覆花亦無之，用此方時，宜將方中旋覆花減半，多加赭石數錢，如此變通其方亦權可奏效也。

或問「人之呼吸惟在肺中，旋復代赭石湯證，其痞硬在於心下，何以妨礙呼吸至噫氣不除乎？」答曰「肺者，發動呼吸之機關也，至呼吸氣之所及，非僅在於肺也，是以肺管有分支下連於心，再下則透隔連於肝，再下則由肝連於包腎之脂膜以通於胞室（胞室男女皆有），是以女子妊子其臍帶連於胞室，而竟能母呼子亦呼，母吸子亦吸，斯非氣能下達之明徵乎？由斯知心下痞硬，所阻之氣雖為呼吸之氣，實自肺管分支下達之氣也」。

太陽病大陷胸湯證

又有痰氣之凝結，不在心下而在胸中者。其凝結之痰氣，填滿於胸膈，至窒塞其肺中之呼吸幾至停止者，此為結胸之險證，原非尋常藥餌所能療治。

《傷寒論》原文「太陽病，脈浮而動數。浮則為風，數則為熱。動則為痛，數則為虛。頭痛發熱，微盜汗出，而反惡寒者，表未解也。醫反下之，動數變遲，膈內拒痛，胃中空虛，客氣動膈，短氣躁煩，心中懊憹，陽氣內陷，心下因硬，則為結胸，大陷胸湯主之」。

脈浮熱猶在表，原當用辛涼之藥發汗以解其表，乃誤認為熱已入裡，而以藥下之，其胸中大氣因下而虛，則外表之風熱即乘虛而入，與上焦痰水互相凝結於胸膈之間，以填塞其空曠之府，是以成結胸之證。不但覺胸中滿悶異常，即肺中呼吸亦覺大有滯礙。其提綱中既言其脈數則為熱，而又言數則為虛者，蓋人陰分不虛者，總有外感之熱，其脈未必即數，今其熱猶在表，脈之至數已數，故又因其脈數，而斷其為虛也。至於因結胸而脈變為遲者，非因下後熱變為涼也，蓋人之臟腑中有實在瘀積，阻塞氣化之流通者，其脈恆現遲象，是以大承氣湯證，其脈亦遲也。膈內拒痛者，胸中大氣與痰水凝結之氣，互相撐脹而作痛，按之則其痛益甚，是以拒按也。胃中空虛，客氣動膈者，因下後胃氣傷損，氣化不能息息下行（胃氣所以傳送飲食，故以息息下行為順），而與胃相連之衝脈（衝脈之上源與胃相連），其氣遂易於上干，至鼓動膈膜而轉排擠呼吸之氣，使不得上升，

是以短氣也。煩躁者，因表熱內陷於胸中，擾亂其心君之火，故煩躁也。懊懜者，上干之氣欲透膈而外越故懊懜也。

【大陷胸湯方】

大黃六兩去皮，芒硝一升，甘遂一錢匕為末。上三味，以水六升先煮大黃，取二升，去渣，納芒硝煮一、兩沸，納甘遂末，溫服一升，得快利、止後服，所謂一錢匕者，俾匕首作扁方形，將藥末積滿其上，重可至一錢耳。

結胸之證，雖填塞於胸中異常滿悶，然純為外感之風熱內陷，與胸中素蓄之水飲結成，縱有客氣上干至於動膈，然仍阻於膈而未能上達，是以若枳實、厚朴，一切開氣之藥皆無須用。惟重用大黃、芒硝以開痰而清熱，又慮大黃、芒硝之力雖猛，或難奏效於頃刻，故又少佐以甘遂，其性以攻決為用，異常迅速，與大黃、芒硝化合為方，立能清肅其空曠之府，使毫無障礙，制此方者，乃霹靂手段也。

按：甘遂之性，《本經》原謂其有毒。憶愚初學醫時，曾遍嘗諸藥以求其實際，一日清晨嚼服生甘遂一錢，閱一點鐘未覺瞑眩，忽作水瀉連連下行近十次，至巳時吃飯如常，飯後又瀉數次，所吃之飯皆瀉出，由此悟得利痰之藥，當推甘遂為第一。後以治痰迷心竅之瘋狂，恆恃之成功，其極量可至一錢強，然非其脈大實，不敢輕投，為其性至猛烈，是以大陷胸湯中所用之甘遂，折為今之份量，一次所服者只一分五厘，而能導引大黃、芒硝直透結胸病之中堅，俾大黃、芒硝得施其藥力於瞬息之頃，此乃以之為嚮導，少用即可成功，原無須乎多也。

又按：甘遂之性，原宜作丸散，若入湯劑，下嚥即吐出，是以大陷胸湯方必將藥煎成，而後納甘遂之末於其中也。

又甘遂之性，初服之，恆可不作嘔吐，如連日服，即易作嘔吐，若此方服初次病未盡除而需再服者，宜加生赭石細末二錢，用此湯藥送服，即可不作嘔吐。用大陷胸湯治結胸原有捷效，後世治結胸證敢用此方者，實百中無二三。一畏方中甘遂有毒，一疑提綱論脈處，原明言數則為虛，恐不堪此猛烈之劑。夫人之畏其方不敢用者，愚實難以相強，然其方固可通變也。《傷寒論》大陷胸湯之前，原有大陷胸丸，方係大黃半斤，葶藶半升熬，杏仁半升，去皮尖熬黑，芒硝半升。上四味，搗篩二味，次納杏仁、芒硝，研如脂，和散，取如彈丸一枚，別搗甘遂末一錢匕、白蜜二合，水二升，煮取一升，溫頓服之。

按：此方所主之證，與大陷胸湯同，因其兼有頸強如柔痙狀，故於大陷胸湯中加葶藶、杏仁，和以白蜜，連渣煮服，因其病上連頸，欲藥力緩緩下行也。今欲於大陷胸湯中減去甘遂，可將大陷胸丸中之葶藶及前治噫氣不除方中之赭石，各用數錢加於大陷胸湯中，則甘遂不用亦可奏效。夫赭石饒有重墜之力，前已論之，至葶藶則味苦善降，性近甘遂而無毒，藥力之猛烈，亦遠遜於甘遂，其苦降之性，能排逐溢於肺中之痰水，使之迅速下行，故可與赭石共享以代甘遂也。

至大陷胸湯如此加減用者，若猶畏其力猛，愚又有自擬之方以代之，即拙著《衷中參西錄》三期中之蕩胸湯是也。其方用瓜蒌仁新炒者二兩搗碎，生赭石二

兩軋細，蘇子六錢炒搗，芒硝四錢，藥共四味，將前三味用水四盅煎湯兩盅，去渣入芒硝融化，先溫服一盅，結開大便通下者，停後服。若其胸中結猶未開，過兩點鐘再溫服一盅，若胸中之結已開，而大便猶未通下，且不覺轉矢氣者，仍可溫服半盅。

按：蕩胸湯方不但無甘遂，並無大黃，用以代大陷胸湯莫不隨手奏效，故敢筆之於書以公諸醫界也。

太陽病小陷胸湯證（附：白散方）

《傷寒論》大陷胸湯後，又有小陷胸湯以治結胸之輕者，蓋其證既輕，治之方亦宜輕矣。

《傷寒論》原文「小結胸病，正在心下，按之則痛，脈浮滑者，小陷胸湯主之」。

按：心下之處，注疏家有謂在膈上者，有謂在膈下者，以理推之實以膈上為對。蓋膈上為太陽部位，膈下則非太陽部位，且小結胸之前（百三十九節）謂「太陽病，重發汗，而復下之，不大便五、六日，舌上燥而渴，日晡所小有潮熱，從心下至少腹，硬滿而痛不可近者，大陷胸湯主之」，觀此大陷胸湯所主之病，亦有從下之文，則知心上仍屬胸中無疑義也。

【小陷胸湯方】

黃連一兩，半夏半升湯洗，枳實大者一枚。上三味，以水六升，先煮枳實取三升，去渣，納諸藥，煮取二升，去渣，分溫三服。

此證乃心君之火熾盛，鑠耗心下水飲結為熱痰（脈現滑象，是以知為熱痰，若但有痰而不熱，當現為濡象矣），而表陽又隨風內陷，與之互相膠漆，停滯於心下為痞滿，以杜塞心下經絡，俾不流通，是以按之作痛也。為其病因由於心火熾盛，故用黃連以寧熄心火，兼以解火熱之團結，又佐以半夏開痰兼能降氣，枳



萸滌痰，兼以清熱，其藥力雖遠遜於大陷胸湯，而以分消心下之痞塞，自能勝任有餘也。然用此方者，須將枳萸細切，連其仁皆切碎，方能將藥力煎出。

又此證若但痰飲痞結於心下，而脈無滑熱之象者，可治以拙擬蕩胸湯，惟其藥劑宜斟酌減輕耳。

小結胸之外，又有寒實結胸，與小結胸之因於熱者，迥然各異，其治法自當另商。《傷寒論》謂「宜治以三物小陷胸湯」。又謂「白散亦可服」，三物小陷胸湯《傷寒論》中未載，注疏家或疑即小陷胸湯，謂係從治之法。不知所謂從治者，如純以熱治涼，恐其格拒不受，而於純熱之中少用些些涼藥為之作引也，若純以涼治涼，是猶冰上積冰，其凝結不益堅乎？由斯知治寒實結胸，小陷胸湯斷不可服，而白散可用也。爰錄其方於下。

【白散方】

桔梗三分，巴豆一分去皮心熬黑研如脂，貝母三分。上三味為散，納巴豆，更於臼中杵之，以白飲和服，強人半錢匕，羸者減半，病在膈上必吐，在膈下必利，不利，進熱粥一杯，利過不止，進冷粥一杯。

按：方中幾分之分，當讀為去聲，原無份量多少，如方中桔梗、貝母各三分，巴豆一分，即桔梗、貝母之份量皆比巴豆之份量多兩倍，而巴豆僅得桔梗及貝母之份量三分之一也。巴豆味辛性熱，以攻下為用，善開冷積，是以寒實結胸當以此為主藥，而佐以桔梗、貝母者，因桔梗不但能載諸藥之力上行，且善開通肺中

諸氣管，使呼吸通暢也。至貝母為治嗽要藥，而實善開胸膈之間痰氣鬱結。至巴豆必炒黑而後用者，因巴豆性至猛烈，炒至色黑，可減其猛烈之性，然猶不敢多用，所謂半錢匕者，乃三藥共和之份量，折為今之份量為一分五厘，其中巴豆之份量僅二厘強，身形羸弱者又宜少用，可謂慎之又慎也。

按：白散方中桔梗、貝母，其份量之多少無甚關係，至巴豆為方中主藥，所用僅二厘強，縱是藥力猛烈，亦難奏效，此蓋其份量傳寫有誤也，愚曾遇有寒實結胸，但用巴豆治癒一案，爰詳細錄出以徵明之。

一人年近三旬，胸中素多痰飲，平時呼吸其喉間恆有痰聲。時當孟春上旬，冒寒外出，受涼太過，急急還家，即臥床上，歇息移時，呼之吃飯不應，視之有似昏睡，呼吸之間痰聲漉漉，手搖之使醒，張目不能言，自以手摩胸際，呼吸大有窒礙。延醫治之，以為痰厥，概治以痰厥諸方皆無效。及愚視之，撫其四肢冰冷，其脈沉細欲無，因曉其家人曰「此寒實結胸證，非用《傷寒論》白散不可」，遂急購巴豆去皮及心，炒黑搗爛，紙裹數層，壓去其油（藥局中名為巴豆霜，恐藥局制不如法，故自製之），秤准一分五厘，開水送下，移時胸中有開通之聲，呼吸頓形順利，可作哼聲，進米湯半碗。翌晨又服一劑，大便通下，病大輕減，脈象已起，四肢已溫，可以發言，至言從前精神昏憤似無知覺，此時覺胸中似滿悶，遂又為開乾薑、桂枝尖、人參、厚朴諸藥為一方，俾多服數劑以善其後。

如畏巴豆之猛烈不敢輕用，愚又有變通之法，試再舉一案以明之。

一婦人年近四旬，素患寒飲，平素喜服乾薑、桂枝等藥。時當嚴冬，因在冷屋察點屋中傢俱為時甚久，忽昏仆於地，昇諸床上，自猶能言，謂適才覺涼氣上衝遂至昏仆，今則覺呼吸十分努力，氣息始通，當速用藥救我，言際忽又昏憤，氣息幾斷。時愚正在其村為他家治病，急求為診視，其脈微細若無，不足四至，詢知其素日稟賦及此次得病之由，知其為寒實結胸無疑，取藥無及，急用胡椒（辛熱之品能開寒結）三錢搗碎，煎兩三沸，徐徐灌下，頓覺呼吸順利，不再昏厥。遂又為疏方，乾薑、生懷山藥各六錢，白朮、當歸各四錢，桂枝尖、半夏、甘草各三錢，厚朴、陳皮各二錢，煎服兩劑，病癒十之八九。又即原方略為加減，俾多服數劑以善其後。

謹案：有以胡椒非開結之品，何以用之而效為問者，曰「此取其至辛之味以救一時之急，且辛熱之品能開寒結，仲景通脈四逆湯所以加重乾薑也」。又有以腹滿用厚朴，胸滿用枳實，此兩證均係結胸，何以不用枳實而用厚朴為問者，曰「枳實性涼，與寒實結胸不宜，厚朴性溫，且能通陽，故用也」。

受業張堃謹注

太陽病大黃黃連瀉心湯證

諸陷胸湯、丸及白散之外，又有瀉心湯數方，雖曰瀉心，實亦治胸中之病，蓋陷胸諸方所治者，胸中有形之痰水為病，諸瀉心湯所治之病，胸中無形之氣化為病也。

《傷寒論》原文「心下痞，按之濡，其脈關上浮者，大黃黃連瀉心湯主之」。

【大黃黃連瀉心湯方】

大黃二兩，黃連一兩。上一味，以麻沸湯二升漬之，須臾絞去渣，分溫再服。人之上焦如霧。上焦者，膈上也，所謂如霧者，心陽能蒸騰上焦之濕氣作雲霧而化水，緣三焦脂膜以下達於膀胱也。乃今因外感之邪氣深陷胸中，與心火蒸騰之氣搏結於心下而作痞，故用黃連以瀉心火，用大黃以除內陷之外邪，則心下之痞者開，自能還其上焦如霧之常矣。至於大黃、黃連不用湯煮，而俱以麻沸湯漬之者，是但取其清輕之氣以治上，不欲取其重濁之汁以攻下也。

太陽病附子瀉心湯證（附：自擬變通方）

心下痞病，有宜並涼、熱之藥為一方，而後能治癒者，《傷寒論》附子瀉心湯所主之病是也。試再詳論之。

《傷寒論》原文「心下痞，而復惡寒汗出者，附子瀉心湯主之」。

【附子瀉心湯方】

大黃二兩，黃連、黃芩各一兩，附子一枚炮去皮破（別煮取汁）。上四味，切前三味以麻沸湯二升漬之，須臾絞去滓，納附子汁，分溫再服。

按：附子瀉心湯所主之病，其心下之痞與大黃黃連瀉心湯所主之病同，因其復惡寒，且汗出，知其外衛之陽不能固攝，且知其陽分虛弱不能抗禦外寒也。夫太陽之根底在於下焦水府，故於前方中加附子以補助水府之元陽，且以大黃、黃連治上，但漬以麻沸湯，取其清輕之氣易於上行也。以附子治下，則煎取濃湯，欲其重濁之汁易於下降也。是以如此寒熱殊異之藥，渾和為劑，而服下熱不妨寒，寒不妨熱，分途施治，同時奏功，此不但用藥之妙具其精心，即制方之妙亦幾令人不可思議也。

按：附子瀉心湯之方雖妙，然為其大寒大熱並用，醫者恆不敢輕試，而愚對於此方原有變通之法，似較平易易用。其方無他，即用黃耆以代附子也。蓋太陽之府原有二，一在膀胱、一在胸中（於六經總論中曾詳言其理），而胸中所積之

大氣，實與太陽外表之衛氣有息息密切之關係。氣原屬陽，胸中大氣一虛，不但外衛之氣虛不能固攝，其外衛之陽，亦遂因之衰微而不能御寒，是以汗出而且惡寒也。用黃耆以補助其胸中大氣，則外衛之氣固，而汗可不出，即外衛之陽亦因之壯旺而不畏寒矣。蓋用附子者，所以補助太陽下焦之府；用黃耆者所以補助太陽上焦之府，二府之氣化原互相流通也。爰審定其方於下，以備採用。

大黃三錢、黃連二錢、生箭耆三錢。前二味，用麻沸湯漬取清湯多半盅，後一味，煮取濃湯少半盅，渾和作一次溫服。

或問「凡人臟腑有瘀，恆忌服補藥，因補之則所瘀者益錮閉也，今此證既心下瘀而作痞，何以復用黃耆以易附子乎」？答曰「凡用藥開瘀，將藥服下必其臟腑之氣化能營運，其破藥之力始能奏效，若但知重用破藥以破瘀，恆有將其氣分破傷而瘀轉不開者，是以人之有瘀者，固忌服補氣之藥，而補氣之藥若與開破之藥同用，則補氣之藥轉能助開破之藥，俾所瘀者速消」。

太陽病炙甘草湯證

陷胸、瀉心諸方，大抵皆治外感之實證，乃有其證雖屬外感，而其人內虧實甚者，則《傷寒論》中炙甘草湯所主之證是也。

《傷寒論》原文「傷寒，脈結代，心動悸，炙甘草湯主之」。

脈之跳動，偶有止時，其止無定數者為結，言其脈結而不行，是以中止也；止有定數者曰代，言其脈至此即少一跳動，必需他脈代之也。二脈雖皆為特別病脈，然實有輕重之分，蓋結脈止無定數，不過其脈偶阻於氣血凝滯之處，而有一止，是以為病猶輕，至代脈則止有定數，是臟腑中有一臟之氣內虧，不能外達於脈之部位，是以為病甚重也。其心動悸者，正其結代脈之所由來也。

【炙甘草湯方】

甘草四兩炙，生薑三兩切，桂枝三兩去皮，人參二兩，生地黃一斤，阿膠二兩，麥門冬半升，麻子仁半升，大棗三十枚擘。上九味，以清酒七升，水八升，先煮八味取三升，去滓納膠，烱化消盡，溫服一升，日三服，一名復脈湯。

按：炙甘草湯之用意甚深，而注疏家則謂，方中多用富有汁漿之藥。為其心血虧少，是以心中動悸，以致脈象結代，故重用富有汁漿之藥，以滋補心血，為此方中之宗旨，不知如此以論此方，則淺之乎視此方矣。試觀方中諸藥，惟生地黃（即乾地黃）重用一斤，地黃原補腎藥也，惟當時無熟地黃，多用又恐其失於

寒涼，故煮之以酒七升、水八升，且酒水共十五升，而煮之減去十二升，是酒性原熱，而又復久煮，欲變生地黃之涼性為溫性者，欲其溫補腎臟也。蓋脈之跳動在心，而脈之所以跳動有力者，實賴腎氣上升與心氣相濟，是以傷寒少陰病，因腎為病傷，遏抑腎中氣化不能上與心交，無論其病為涼為熱，而脈皆微弱無力，是明徵也。由斯觀之，是炙甘草湯之用意，原以補助腎中之氣化，俾其壯旺上升，與心中之氣化相濟救為要著也。至其滋補心血，則猶方中兼治之副作用也，猶此方中所緩圖者也。

又方中參原能助心脈跳動，實為方中要藥，而只用二兩，折為今之六錢，再三分之一，劑中只有人參二錢，此恐份量有誤，擬加倍為四錢則奏效當速也。然人參必用黨參，而不用遼參，蓋遼參有熱性也。

又脈象結代而兼有陽明實熱者，但治以炙甘草湯恐難奏功，宜借用白虎加人參湯，以炙甘草湯中生地黃代方中知母，生懷山藥代方中粳米。曾治一叟，年近六旬，得傷寒證，四五日間表裡大熱，其脈象洪而不實，現有代象，舌苔白而微黃，大便數日未行。為疏方，用生石膏三兩，大生地一兩，野臺參四錢，生懷山藥六錢，甘草三錢，煎湯三盅，分三次溫飲下，將三次服完，脈已不代，熱退強半，大便猶未通下，遂即原方減去石膏五錢，加天冬八錢，仍如從前煎服，病遂痊愈。



又炙甘草湯雖結代之脈並治，然因結輕代重，故其制方之時注重於代，純用補藥，至結脈恆有不宜純用補藥，宜少加開通之藥始與病相宜者。近曾在津治一錢姓壯年，得傷寒證，三四日間延為診視，其脈象洪滑甚實，或七八動一止，或十餘動一止，其止皆在左部，詢其得病之由，知係未病之前曾怒動肝火，繼又出門感寒，遂得斯病，因此知其左脈之結，乃肝氣之不舒也。為疏方，仍白虎加人參湯加減，生石膏細末四兩，知母八錢，以生山藥代粳米用六錢，野臺參四錢，甘草三錢，外加生萊菔子四錢搗碎，煎湯三盅，分三次溫服下。結脈雖除，而脈象仍有餘熱，遂即原方將石膏減去一兩，人參、萊菔子各減一錢，仍如前煎服，其大便從前四日未通，將藥三次服完後，大便通下，病遂痊愈。

按：此次所用之方中不以生地黃代知母者，因地黃之性與萊菔子不相宜也。又愚治寒溫證不輕用降下之品，其人雖熱入陽明之府，若無大便燥硬，欲下不下之實徵，亦恆投以大劑白虎湯清其熱，熱清大便恆自通下。是以愚日日臨證，白虎湯實為常用之品，承氣湯恆終歲不一用也。

又治一叟，年過六旬，大便下血，醫治三十餘日病益進，日下血十餘次，且多血塊，精神昏憤。延為診視，其脈洪實異常，至數不數，惟右部有止時，其止無定數乃結脈也。其舌苔純黑，知係外感大實之證，從前醫者但知治其便血，不知治其外感實熱，可異也。投以白虎加人參湯，方中生石膏重用四兩，為其下血日久，又用生山藥一兩以代方中粳米，取其能滋陰補腎，兼能固元氣也。煎湯三

虛，分三次溫服下，每次送服廣三七細末一錢，如此日服一劑，兩日血止，大便猶日行數次，脈象之洪實大減，而其結益甚，且腹中覺脹。詢其病因，知得於惱怒之後，遂改用生萊菔子五錢，而佐以白芍、滑石、天花粉、甘草諸藥（外用鮮白茅根切碎四兩，煮三四沸，取其湯以代水煎藥），服一劑脹消，脈之至數調勻，毫無結象而仍然有力，大便滑瀉已減半，再投以拙擬滋陰清燥湯（方係生懷山藥、滑石各一兩，生杭芍六錢，甘草三錢），一劑瀉止，脈亦和平。觀上所錄二案，知結脈現象未必皆屬內虧，恆有因氣分不舒，理其氣即可愈者。

又有脈非結代，而若現雀啄之象者，此亦氣分有所阻隔也。曾治一少婦素日多病，於孟春中旬得傷寒，四五日表裡俱壯熱，其舌苔白而中心微黃，毫無津液，脈搏近六至，重按有力，或十餘動之後，或二十餘動之後，恆現有雀啄之象，有如雀之啄粟，恆連二三啄也。其呼吸外出之時，恆似有所齟齬而不能暢舒，細問病因，知其平日司家中出入賬目，其姑察賬甚嚴，未病之先，因賬有差誤，曾被責斥，由此知其氣息不順及脈象之雀啄，其原因皆由此也。問其大便，自病後未行，遂仍治以前案錢姓方，將生石膏減去一兩，為其津液虧損，為加天花粉八錢，亦煎湯三虛分三次溫服下，脈象已近和平，至數調勻如常，呼吸亦順，惟大便猶未通下，改用滋陰、潤燥、清火之品，服兩劑大便通下痊愈。

太陽病桃核承氣湯證

以上所論傷寒（太陽篇），諸方雖不一致，大抵皆治太陽在經之病者也。至治太陽在府之病其方原無多，而治太陽府病之至劇者，則桃核承氣湯是也。試再進而詳論之。

《傷寒論》原文「太陽病不解，熱結膀胱，其人如狂，血自下，下者愈。其外不解者，尚未可攻，當先解其外。外解已，但少腹急結者，乃可攻之，宜桃核承氣湯」。

【桃核承氣湯方】

桃仁五十個去皮尖，桂枝二兩去皮，大黃四兩去皮，芒硝二兩，甘草二兩炙。上五味，以水七升，煮取二升半，去滓納芒硝，更上火微沸，下火，先食溫服五合，日三服，當微利。

此證乃外感之熱，循三焦脂膜下降結於膀胱，膀胱上與胞室之脂膜相連，其熱上蒸，以致胞室亦蘊有實熱，血蓄而不行，且其熱由任脈上竄，擾亂神明，是以其人如狂也。然病機之變化無窮，若其胞室之血蓄極而自下，其熱即可隨血而下，是以其病可愈。若其血蓄不能自下，且有欲下不下之勢，此非攻之使下不可。惟其外表未解，或因下後而外感之熱復內陷，故又宜先解其外表而後可攻下也。

大黃味苦、氣香、性涼，原能開氣破血，為攻下之品，然無專入血分之藥以引之，則其破血之力仍不專，方中用桃仁者，取其能引大黃之力專入血分以破血也。徐靈胎云「桃花得三月春和之氣以生，而花色鮮明似血，故凡血鬱、血結之疾，不能自調和暢達者，桃仁能入其中而和之散之」，然其生血之功少，而去瘀之功多者何也？蓋桃核本非血類，故不能有所補益，若瘀血皆已敗之血，非生氣不能流通，桃之生氣在於仁，而味苦又能開泄，故能逐舊而不傷新也。至方中又用桂枝者，亦因其善引諸藥入血分，且能引諸藥上行以清上焦血分之熱，則神明自安而如狂者可愈也。

特是用桃核承氣湯時，又須細加斟酌，其人若素日少腹恆覺脹，至此因外感之激發，而脹益甚者，當防其素有瘀血，若誤用桃核承氣湯下之，則所下者，必紫色成塊之血，其人血下之後，十中難救一二。若臨證至不得已必須用桃核承氣湯時，須將此事說明以免病家之誤會也。

按：熱結膀胱之證，不必皆累及胞室蓄血也。人有病在太陽，旬餘不解，午前稍輕，午後則肢體酸懶、頭目昏沉、身似灼熱、轉畏寒涼、舌苔純白、小便赤澀者，此但熱結膀胱而胞室未嘗蓄血也。此當治以經府雙解之劑，宜用鮮白茅根銼細二兩，滑石一兩，共煮五六沸，取清湯一大盅，送服西藥阿斯匹林瓦許，周身得汗，小便必然通利，而太陽之表裡俱清矣。

〈 第 二 卷 〉

太陽陽明合病桂枝加葛根湯證

傷寒之傳經，自太陽而陽明，然二經之病恆互相連帶，不能劃然分為兩界也。是以太陽之病有兼陽明者，此乃太陽入陽明之漸也，桂枝加葛根湯所主之病是也。

《傷寒論》原文「太陽病，項背強几几（音及），反汗出惡風者，桂枝加葛根湯主之」。

【桂枝加葛根湯方】

桂枝二兩去皮，芍藥二兩，甘草二兩炙，生薑三兩切，大棗十二枚擘，葛根四兩。上六味，以水七升，納諸藥，煮取三升，去滓，溫服一升，不須啜粥，餘如桂枝法將息及禁忌。

王和安曰「手陽明經，根於大腸出絡胃，外出肩背，合於督脈，其氣由大腸胃外之油膜吸水所化，循本經上出肩背」。葛根純為膜絲管之組織，性善吸水，入土最深，能吸引土下黃泉之水，化氣結脂，上升於長藤支絡，最與陽明經性切合，氣味輕清，尤善解熱，故元人張元素謂為陽明仙藥也。此方以桂枝湯治太陽中風之本病，加葛根以清解陽明經之兼病，使兼及陽明經之鬱熱化為清陽，仍以薑、桂之力引之，從太陽所司之營衛而出。至葛根之分量用之獨重者，所以監製薑、桂之熱不使為弊也。不須啜粥者，以葛根養液，無須穀力之助也。傷寒之病手經足經皆有，因手、足之經原相毗連，不能為之分清，是以仲景著書，只渾言

某經未嘗確定其為手為足也。愚於第一課首節中，曾詳論之。王氏注解此方，以手經立論，原《傷寒論》中當有之義，勿訝其為特創別說也。

張拱端曰「太陽之經連風府，上頭項，挾脊，抵腰，至足，循身之背」。本論論太陽經病約有三樣，一頭痛，二項強，三背几几。頭、項、背三處，一脈相貫，故又有頭項強痛，項背強几几之互詞，以太陽之經脈，置行於背而上於頭，故不限於一處也。讀者須知上節止言頭痛，是經病之輕證，此節項背強几几，則經脈所受之邪較重。《內經》云「邪人於輸，腰脊乃強」，今邪人於太陽之經輸，致使項背強几几。察其邪人之路，從風池而入，上不干於腦，而下干於背，故頭不痛而項背強也。又據汗出惡風證，是邪不獨入經輸，且入肌肉，故用桂枝湯以解肌，加葛根以達經輸，而療項背几几之病也。

愚按：太陽主皮毛，陽明主肌肉，人身之筋絡於肌肉之中，為其熱在肌肉，筋被熱鑱有拘攣之意，有似短羽之鳥，伸頸難於飛舉之狀，故以几几者狀之也。至葛根性善醒酒（葛花尤良，古有葛花醒醒湯），其涼而能散可知，且其能鼓胃中津液上潮以止消渴，若用以治陽明之病，是借陽明府中之氣化，以逐陽明在經之邪也，是以其奏效自易也。

太陽陽明合病葛根湯證

桂枝加葛根湯是治太陽兼陽明之有汗者。至太陽兼陽明之無汗者，《傷寒論》又另有治法，其方即葛根湯。

《傷寒論》原文「太陽病，項背強几几，無汗惡風者，葛根湯主之」。

【葛根湯方】

葛根四兩，麻黃三兩去節，桂枝二兩去皮，芍藥二兩，甘草二兩炙，生薑三兩切，大棗十二枚擘。上七味㕮咀，以水一斗，先煮麻黃、葛根減二升，去沫納諸藥，煎取三升，去渣溫服一升，復取微似汗，不須啜粥，餘如桂枝湯法將息及禁忌。

陳古愚曰「桂枝加葛根湯與此湯，俱治太陽經之病，太陽之經在背，經云『邪入於輸，腰脊乃強』，師於二方皆云治項背几几。几几者，小鳥羽短，欲飛不能飛，而伸頸之象也。但前方治汗出，是邪從肌腠而入，故主桂枝；此方治無汗，是邪從膚表而入，故主麻黃。然邪既入，肌腠亦病，方中取桂枝湯全方加葛根、麻黃，亦肌表兩解之治，與桂枝二麻黃一湯同意而用卻不同，微乎微乎！」



陽明病葛根黃連黃芩湯證（附：自訂滋陰宣解湯方）

上所論二方，皆治太陽與陽明合病之方也。乃有其病原屬太陽，誤治之後，而又純屬陽明者，葛根黃芩黃連湯所主之病是也。

《傷寒論》原文「太陽病，桂枝證，醫反下之，利遂不止，脈促者，表未解也，喘而汗出者，葛根黃芩黃連湯主之」。

【葛根黃連黃芩湯方】

葛根半斤，甘草二兩炙，黃芩三兩，黃連三兩。上四味，以水八升，先煮葛根減二升，納諸藥煮取二升，去渣，分溫再服。

促脈與結、代之脈皆不同，注疏諸家多謂，脈動速時一止者曰促。夫促脈雖多見於速脈之中，而實非止也。譬如人之行路，行行且止，少停一步復行，是結、代之脈也。又譬如人之奔馳，急急速走，路中偶遇不平，足下恆因有所齟齬，改其步武，而仍然奔馳不止，此促脈也。是以促脈多見於速脈中也。凡此等脈，多因外感之熱內陷，促其脈之跳動加速，致脈管有所擁擠，偶現此象，名之為促，若有人催促之使然也。故方中重用芩、連，化其下陷之熱，而即用葛根之清輕透表者，引其化而欲散之熱盡達於外，則表裡俱清矣。且喘為肺病，汗為心液，下陷之熱既促，脈之跳動改其常度，復迫心肺之陽外越，喘而且汗，由斯知方中芩、連，不但取其能清外感內陷之熱，並善清心肺之熱，而汗喘自愈也。況黃連性能厚腸，又為治下利之要藥乎。若服藥後，又有餘熱，利不止者，宜治以拙擬滋陰宣解湯

（方載三期五卷、條滑石、山藥各一兩、杭芍六錢、甘草三錢，連翹三錢，蟬退去足土三錢）。

陸九芝曰「溫熱之與傷寒所異者，傷寒惡寒，溫熱不惡寒耳。惡寒為太陽主證，不惡寒為陽明主證，仲景於此分之最嚴。惡寒而無汗用麻黃，惡寒而有汗用桂枝，不惡寒而有汗且惡熱者用葛根。陽明之葛根，即太陽之桂枝也，所以達表也。葛根黃連黃芩湯中之芩、連，即桂枝湯中之芍藥也，所以安裡也。桂枝協麻黃治惡寒之傷寒，葛根協芩、連治不惡寒之溫熱，其方為傷寒、溫熱之分途，任後人審其病之為寒為熱而分用之。尤重在芩、連之苦，不獨可降可瀉，且合苦以堅之之義，堅毛竅可以止汗，堅腸胃可以止利，所以葛根黃芩黃連湯又有下利不止之治，一方而表裡兼清，此則藥借病用，本不專為下利設也。乃後人視此方若舍下利一證外，更無他用者何也！」

按：用此方為陽明溫熱發表之藥可為特識，然葛根發表力甚微，若遇證之無汗者，當加薄荷葉三錢，始能透表出汗，試觀葛根湯治項背強几几→無汗惡風者，必佐以麻、桂可知也。當仲景時薄荷尚未入藥，前曾論之，究之清輕解肌之品，最宜於陽明經病之發表，且於溫病初得者，不僅薄荷，若連翹、蟬蛻其性皆與薄荷相近，而當仲景時，於連翹止知用其根（即連軀赤小豆湯中之連軀）以利小便，而猶不知用連翹以發表。至於古人用蟬，但知用蚱蟬，是連其全身用之，而不知用其退，有皮以達皮之妙也。蓋連翹若單用一兩，能於十二小時中使周身不斷微

汗。若止用二三錢於有薄荷劑中，亦可使薄荷發汗之力綿長。至蟬蛻若單用三錢煎服，分毫不覺有發表之力，即可周身得微汗，且與連翹又皆為清表溫疹之妙品，以輔佐薄荷奏功，故因論薄荷而連類及之。

【附錄】後世用葛根黃芩黃連湯份量

葛根（四錢）、甘草（一兩炙）、黃芩（一錢五分）、黃連（一錢五分）。不下利者，去黃連加知母三錢。無汗者，加薄荷葉、蟬蛻各錢半。

陽明病白虎湯證

上所論有葛根諸方，皆治陽明在經之病者也。至陽明在府之病，又當另議治法，其治之主要，自當以白虎湯為稱首也。

《傷寒論》原文「傷寒，脈浮滑，此表有熱裡有寒，白虎湯主之」。（此節載《太陽篇》）

按：此脈象浮而且滑，夫滑則為熱入裡矣，乃滑而兼浮，是其熱未盡入裡，半在陽明之府，半在陽明之經也。在經為表，在府為裡，故曰「表有熱裡有寒」。《內經》謂「熱病者，皆傷寒之類也」。又謂「人之傷於寒也，則為病熱」。此所謂裡有寒者，蓋謂傷寒之熱邪已入裡也。陳氏之解原如斯，愚則亦以為然。至他注疏家有謂此寒熱二字，宜上下互易，當作外有寒裡有熱者，然其脈象既現浮滑，其外表斷不至惡寒也。有謂此寒字當係痰之誤，因痰寒二音相近，且脈滑亦為有痰之徵也。然在寒溫，其脈有滑象，原主陽明之熱已實，且足徵病者氣血素充，治亦易愈。若因其脈滑，而以為有痰，則白虎湯豈為治痰之劑乎。

《傷寒論》原文「三陽合病，腹滿身重，難以轉側，口不仁而面垢，譫語，遺尿。發汗則譫語，下之則額上生汗，手足逆冷。若自汗出者，白虎湯主之」。（此節載《陽明篇》）

按：證為三陽合病，乃陽明外連太陽，內連少陽也。由此知三陽會合以陽明為中間，三陽之病會合，即以陽明之病為中堅也。是以其主病之方，仍為白虎湯，勢若帥師以攻敵，以全力搗其中堅，而其餘者自瓦解。

《傷寒論》原文「傷寒，脈滑而厥者，裡有熱也，白虎湯主之」。（此節載〈厥陰篇〉）

按：脈滑者，陽明之熱傳入厥陰也。其脈滑而四肢厥逆者，因肝主疏泄，此證乃陽明傳來之熱鬱於肝中，致肝失其所司，而不能疏泄，是以熱深厥亦深也。治以白虎湯，熱消而厥自回矣。

或問「傷寒傳經之次第，原自陽明而少陽，三傳而後至厥陰，今言陽明之熱傳入厥陰，將勿與經旨有背謬乎」？答曰「白虎湯原為治陽明實熱之正藥，其證非陽明之實熱者，仲景必不用白虎湯，此蓋因陽明在經之熱，不傳於府（若入府則不他傳矣）而傳於少陽，由少陽而為腑臟之相傳（如由太陽傳少陰，即腑臟相傳，《傷寒論》〈少陰篇〉麻黃附子細辛湯所主之病是也），則肝中傳入陽明實熱矣。究之，此等證其左右兩關必皆現有實熱之象，蓋此陽明在經之熱，雖由少陽以入厥陰，必仍有餘熱入於陽明之府，俾其府亦蘊有實熱，故可放膽投以白虎湯，而於胃府無損也」。

【白虎湯方】

知母六兩，石膏一斤打碎，甘草二兩炙，粳米六合。上四味，以水一斗，煮米熟湯成，去滓，溫服一升，日三服。

白虎者，西方之金神也。於時為溽暑既去，金風乍來，病暍之人當之，頓覺心地清涼，精神爽健，時序之宜人，莫可言喻。以比陽明實熱之人，正當五心煩灼，毫無聊賴之際，而一飲此湯，亦直覺涼沁心脾，轉瞬之間已置身於清涼之域矣。方中重用石膏為主藥，取其辛涼之性，質重氣輕，不但長於清熱，且善排擠內蘊之熱，息息自毛孔達出也。用知母者，取其涼潤滋陰之性，既可佐石膏以退熱，更可防陽明熱久者之耗真陰也。用甘草者，取其甘緩之性，能逗留石膏之寒涼不至下趨也。用粳米者，取其汁漿濃鬱，能調石膏金石之藥，使之與胃相宜也。藥止四味，而若此相助為理，俾强悍之劑歸於和平，任人放膽用之，以挽回人命於垂危之際，真無尚之良方也。何猶多畏之如虎而不敢輕用哉？

白虎湯方，三見於《傷寒論》。一在《太陽篇》，治脈浮滑；一在《陽明篇》，治三陽合病自汗出者，一在《厥陰篇》，治脈滑而厥。注家於陽明條下，謂苟非自汗，恐表邪抑塞，亦不敢鹵莽而輕用白虎湯。自此說出，醫者遇白虎湯證，恆因其不自汗出即不敢用，此誤人不淺也。蓋寒溫之證，邪愈深入則愈險。當其由表入裡，陽明之府漸實，急投以大劑白虎湯，皆可保完全無虞。設當用而不用，由胃實以至腸實而必須降下者，已不敢保其完全無虞也。況自汗出之文，惟《陽明篇》有之，而《太陽篇》但言脈浮滑，《厥陰篇》但言脈滑而厥，皆未言自汗

出也。由是知其脈但見滑象，無論其滑而兼浮，滑而兼厥，皆可投以白虎湯。經義昭然，何醫者不知尊經，而拘於注家之謬說也？

白虎湯所主之病，分載於〈太陽〉、〈陽明〉、〈厥陰篇〉中，惟陽明所載未言其脈象何如，似令人有未愜意之處。然即〈太陽篇〉之脈浮而滑及〈厥陰篇〉之脈滑而厥，推之其脈當為洪滑無疑，此當用白虎湯之正脈也。故治傷寒者，臨證時若見其脈象洪滑，知其陽明之府熱已實，放膽投以白虎湯必無差謬，其人將藥服後，或出涼汗而愈，或不出汗，其熱亦可暗消於無形。若其脈為浮滑，知其病猶連表，於方中加薄荷葉一錢，或加連翹、蟬退各一錢，服後須臾即可由汗解而愈（此理參看《衷中參西錄》三期五卷中寒解湯下詮解自明）。其脈為滑而厥也，知係厥陰肝氣不舒，可用白茅根煮湯以之煎藥，服後須臾厥回，其病亦遂愈。此愚生平經驗所得故敢確實言之，以補古書所未備也。

近世用白虎湯者，恒恪守吳氏四禁。所謂四禁者，即其所著《溫病條辨》白虎湯後所列禁用白虎湯之四條也。然其四條之中，顯有與經旨相反之兩條，若必奉之為金科玉律，則此救顛扶危挽回人命之良方，幾將置之無用之地。愚非好辯而為救人之熱腸所迫，實有不能已於言者。

吳鞠通原文「白虎湯本為達熱出表，若其人脈浮弦而細者，不可與也，脈沉者，不可與也，不渴者，不可與也，汗不出者，不可與也，當須識此勿令誤也」。

按：前兩條之不可與，原當禁用白虎湯矣。至其第三條謂不渴者不可與也，夫用白虎湯之定例，渴者加人參，其不渴者即服白虎湯原方，無事加參可知矣。吳氏以為不渴者不可與，顯與經旨相背矣。且果遵吳氏之言，其人若渴即可與以白虎湯，而亦無事加參矣，不又顯與渴者加人參之經旨相背乎？至其第四條謂汗不出者不可與也，夫白虎湯三見於《傷寒論》，惟《陽明篇》中所主之三陽合病有汗，其《太陽篇》所主之病及《厥陰篇》所主之病，皆未見有汗也。仲聖當日未見有汗即用白虎湯，而吳氏則於未見有汗者禁用白虎湯，此不又顯與經旨相背乎？且石膏原具有發表之性，其汗不出者，不正可藉以發其汗乎？且即吳氏所定之例，必其人有汗且兼渴者始可用白虎湯，然陽明實熱之證，渴而兼汗出者，十人之中不過一二人，是不幾將白虎湯置之無用之地乎？夫吳氏為清季名醫，而對於白虎湯竟誤設禁忌若此，彼蓋未知石膏之性也。及至所著醫案，曾治何姓叟，手足拘攣，因誤服熱藥所致，每劑中用生石膏八兩，服近五十日始愈，計用生石膏二十餘斤。又治趙姓中焦留飲，上泛作喘，每劑藥中皆重用生石膏，有一劑藥中用六兩八兩者，有一劑中用十二兩者，有一劑中用至一斤者，共服生石膏近百斤，其病始愈。以觀其《溫病條辨》中，所定白虎湯之份量生石膏止用一兩，猶煎湯三杯分三次溫飲下者，豈不天壤懸殊哉？蓋吳氏先著《溫病條辨》，後著《吳氏醫案》，當其著《溫病條辨》時，因未知石膏之性，故其用白虎湯慎重若此，



至其著《吳氏醫案》時，是已知石膏之性也，故其能放膽重用石膏若此，學問與年俱進，故不失其為名醫也。

按：人之所以重視白虎湯而不敢輕用者，實皆未明石膏之性也。夫自古論藥之書，當以《本經》為稱首，其次則為《名醫別錄》。《本經》創於開天闢地之聖神，洵堪為論藥性之正宗，至《名醫別錄》則成於前五代之陶弘景，乃取自漢以後及五代以前名醫論藥之處而集為成書，以為《本經》之輔翼（弘景曾以朱書本經、墨書別錄為一書），今即《本經》及《名醫別錄》之文而細為研究之。

《本經》石膏原文「氣味辛，微寒，無毒，主治中風寒熱、心下逆氣、驚喘、口乾、舌焦、不能息、腹中堅痛、除邪鬼、產乳、金瘡」。

按：後世本草，未有不以石膏為大寒者，獨《本經》以為微寒，可為萬古定論。為其微寒，是以白虎湯中用至一斤，至《吳氏醫案》治痰飲上泛作喘，服石膏近百斤而脾胃不傷也。其言主中風者，夫中風必用發表之藥，石膏既主之，則性善發表可知，至其主寒熱、驚喘、口乾、舌焦、無事詮解。至其能治心下逆氣、腹中堅痛，人或疑之，而臨證細心品驗，自可見諸事實也。曾治一人，患春溫陽明府熱已實，心下脹滿異常，投以生石膏二兩、竹茹碎末五錢，煎服後，頓覺藥有推蕩之力，脹滿與溫病皆愈。又嘗治一人，少腹腫疼甚劇，屢經醫治無效，診其脈沉洪有力，投以生石膏三兩、早三七二錢（研細沖服）、生蒲黃三錢，煎服兩劑痊愈。此證即西人所謂盲腸炎也，西人恆視之為危險難治之病，而放膽重用

生石膏即可隨手奏效。至謂其除邪鬼者，謂能治寒溫實熱證之妄言妄見也。治產乳者，此乳字當作生字解（注疏家多以乳字作乳汁解者非是），謂婦人當生產之後，偶患寒溫實熱，亦不妨用石膏，即《金匱》謂「婦人乳中虛煩亂、嘔逆、安中益氣，竹皮大丸主之」者是也（竹皮大丸中有石膏）。治金瘡者，人若為刀斧所傷，摻以生石膏細末，立能止血且能消腫愈疼也。

《名醫別錄》石膏原文「石膏除時氣、頭疼身熱、三焦大熱、腸胃中結氣、解肌發汗、止消渴、煩逆、腹脹暴氣、咽痛，亦可作浴湯」。

按：解肌者，其力能達表，使肌膚鬆暢，而內蘊之熱息息自毛孔透出也。其解肌兼能發汗者，言解肌之後，其內蘊之熱又可化汗而出也。特是，後世之論石膏者，對於《本經》之微寒既皆改為大寒，而對於《名醫別錄》之解肌發汗，則尤不相信，即如近世所出之本草，若鄒潤安之《本經疏證》、周伯度之《本草思辨錄》，均可為卓卓名著，而對於《名醫別錄》謂石膏能解肌發汗亦有微詞，今試取兩家之論說以參考之。

鄒潤安曰「石膏體質最重，光明潤澤，乃隨擊即解，紛紛星散，而絲絲縱列，無一縷橫陳，故其性主解橫溢之熱邪，此正石膏解肌之所以然。至其氣味辛甘，亦兼具解肌之長，質重而大寒，則不足於發汗，乃《別錄》於杏仁曰解肌，於大戟曰發汗，石膏則以解肌發汗連稱，豈以仲聖嘗用於發汗耶？不知石膏治傷寒陽明病之自汗，不治太陽病之無汗，若太陽表實而兼陽明熱鬱，則以麻黃發汗，石

膏泄熱，無舍麻黃而專用石膏者。白虎湯治無表證之自汗，且戒人以無汗勿與，即後世發表經驗之方，亦從無用石膏者，所謂發表不遠熱也。然則解肌非歟？夫白虎證至表裡俱熱，雖尚未入血分成府實，而陽明氣分之熱已勢成連橫，非得辛甘寒解肌之石膏，由裡達表以散其連橫之勢，熱焉得除，而汗焉得止，是則石膏解肌所以止汗，非所以出汗。他如竹葉石膏湯、白虎加桂枝湯，非不用於無汗，而其證則非發表之證，學者勿過泥《別錄》可耳。

無汗禁用白虎之言，《傷寒論》未見，欲自是其說，而設為古人之言以自作徵據，其誤古人也甚矣。至講解肌為止汗，則尤支離，不可為訓。

周伯度曰「王海藏謂石膏發汗，朱丹溪謂石膏出汗，皆以空文附和，未能實申其義。竊思方書石膏主治，如時氣肌肉壯熱，煩渴喘逆、中風眩暈、陽毒發斑等證，無可以發汗而愈者，病之倚重石膏莫如熱疫。余師愚清瘟敗毒散一劑用至六兩、八兩，而其所著《疫證一得》，則諄諄以發表致戒。顧松園以白虎湯治汪纘功陽明熱證，每劑石膏用至三兩，兩服熱頓減而遍身冷汗、肢冷發呃，群醫譁然阻勿再進。顧引仲聖熱深厥深，及喻氏陽證忽變陰厥，萬中無一之說與辯勿聽。迨投參附回陽之劑，而汗益多體益冷，復求顧診。顧仍以前法用石膏三兩，而二服後即汗止身溫，此尤可為石膏解肌不發汗之明證，要之顧有定識定力，全在審證之的，而仲聖與喻氏有功後世，亦可見矣」。

按：周氏之見解，與鄒氏大致相同，所可異者，自不知石膏能發汗，而轉笑王海藏謂石膏發汗、朱丹溪謂石膏出汗者，皆以空文附和，未能實申其義，此何異以己之昏昏，訾人之昭昭也哉。至顧松園治汪纘功之熱深厥深、周身冷汗，重用生石膏三兩，兩服病癒，以為石膏非能發汗之明證，而不知石膏能清熱即能回厥，迨厥回之後，其周身之冷汗必先變為溫和之汗，其內蘊之熱，藉石膏發表之力，皆息息自皮毛達出，內熱隨汗出盡，則汗自止而病自愈也。若認為將石膏服下，其冷汗即立止而病亦遂愈，此誠不在情理中矣。夫鄒氏之《本經疏證》及周氏之《本草思辨錄》，其講解他藥莫不精細入微，迥異於後世諸家本草，而獨於石膏之性未能明瞭甚矣，石膏之令人難知也。

愚浮沉醫界者五十餘年，嘗精細體驗白虎湯之用法，若陽明之實熱，一半在經，一半在府，或其熱雖入府而猶連於經，服白虎湯後，大抵皆能出汗，斯乃石膏之涼與陽明之熱化合而為汗以達於表也。若猶慮其或不出汗，則少加連翹、蟬蛻諸藥以為之引導，服後覆杯之頃，其汗即出，且汗出後，其病即愈，而不復有外感之熱存留矣。若其陽明之熱已盡入府，服白虎湯後，大抵出汗者少，不出汗者多，其出汗者，熱可由汗而解，其不出汗者，其熱亦可內消。蓋石膏質重氣輕，其質重也，可以逐熱下行，其氣輕也，可以逐熱上出，俾胃府之氣化升降皆湛然清肅，外感之熱自無存留之地矣。

石膏之發汗，原發身有實熱之汗，非能發新受之風寒也。曾治一人，年近三旬，於春初得溫病，醫者以溫藥發其汗，汗出而病益加劇，診其脈洪滑而浮，投以大劑白虎湯，為加連翹、蟬蛻各錢半，服後遍體得涼汗而愈。然愈後泄瀉數次，後過旬日又重受外感，其脈與前次相符，乃因前次服白虎湯後作泄瀉，遂改用天花粉、玄參各八錢，薄荷葉、甘草各二錢，連翹三錢，服後亦汗出遍體，而其病分毫不減，因此次所出之汗乃熱汗非涼汗也。不得已遂仍用前方，為防其泄瀉，以生懷山藥八錢代方中粳米，服後仍遍體出涼汗而愈。由此案觀之，則石膏之妙用，有真令人不可思議者矣。

重用石膏以發汗，非僅愚一人之實驗也。邑中友人劉聘卿，肺熱勞喘，熱令尤甚，時當季夏，病犯甚劇，因嘗見愚重用生石膏治病，自用生石膏四兩，煎湯一大碗頓飲下，周身得涼汗，勞喘驟見輕，隔一日又將石膏如前煎飲，病又見輕，如此隔日一飲石膏湯，飲後必然出汗，其病亦隨之遞減，飲過六次，而百藥難愈之痼疾竟霍然矣。後聘卿與愚相遇，因問石膏如此涼藥，何以能令人發汗？愚曰「石膏性善發汗，《名醫別錄》載有明文，臟腑蘊有實熱之人，服之恆易作汗也。此證因有伏氣化熱，久留肺中不去，以致肺受其傷，屢次飲石膏湯以逐之，則久留之熱不能留，遂盡隨汗出而消解無餘矣」。

用石膏以治肺病及勞熱，古人早有經驗之方，因後世未知石膏之性，即見古人之方亦不敢信，是以後世無用者。其方曾載於王燾《外臺秘要》，今特詳錄於下，以備醫界之採取。

《外臺秘要》原文「治骨蒸勞熱久嗽，用石膏紋如針者一斤，粉甘草一兩，研細如麵，日以水調三、四服，言其無毒有大益，乃養命上藥，不可忽其賤而疑其寒。《名醫別錄》言陸州楊士丞女，病骨蒸，內熱外寒，眾醫不能瘥，處州吳醫用此方而體遂涼」。

按：書中所載楊氏女亦伏氣化熱病，凡伏氣化熱之病，原當治以白虎湯，脈有數象者，白虎加人參湯，醫者不知如此治法，是以久不瘥。吳醫治以石膏、甘草粉，實為白虎湯之變通用法。乃有其證非如此變通用之而不能愈者（必服石膏麵始能愈），此愚治伏氣化熱臨證之實驗，爰錄一案於下，以明用古方者原宜因證變通也。

一人年近四旬，身形素強壯，時當暮春，忽覺心中發熱，初未介意，後漸至大小便皆不利，屢次延醫服藥，病轉加劇，腹中脹滿，發熱益甚，小便猶可通滴瀝，而大便則旬餘未通矣，且又覺其熱上逆，無論所服何藥，下嚥即吐出，因此醫皆束手無策。後延愚為診視，其脈弦長有力，重按甚實，左右皆然，視其舌苔厚而已黃，且多芒刺，知為伏氣化熱，因謂病者曰「欲此病癒非治以大劑白虎湯不可」。病者謂「我未受外感何為服白虎湯」？答曰「此伏氣化熱證也，蓋因冬

日或春初感受微寒，未能即病，所受之寒伏藏於三焦脂膜之中，阻塞升降之氣化，久而生熱，至春令已深，而其所伏之氣更隨春陽而化熱，於斯二熱相並，而臟腑即不勝其灼熱矣，此原與外感深入陽明者治法相同，是以宜治以白虎湯也」。病者聞愚言而頷之，遂為開白虎湯方，方中生石膏用三兩，為其嘔吐為加生赭石細末一兩，為其小便利為加滑石六錢，至大便旬餘不通，而不加通大便之藥者，因赭石與石膏並用，最善通熱結之大便也。俾煎湯一大碗，徐徐溫飲下，服後將藥吐出一半，小便稍通，大便未通下。翌日即原方將石膏改用五兩，赭石改用兩半，且仿白虎加人參湯之義，又加野臺參三錢，復煎湯徐徐溫飲下，仍吐藥一半，大便仍未通下。於是變湯為散，用生石膏細末一兩，赭石細末四錢和勻，為一日之量，鮮白茅根四兩，煎湯分三次將藥末送服，服後分毫未吐，下燥糞數枚，小便則甚暢利矣。翌日更仿白虎加人參湯之義，又改用野黨參五錢（古之人參生於上黨，今之黨參即古之人參也，然此參人工種者甚多，而仍以野山自生者為貴），煎湯送服從前藥末，又下燥糞數枚，後或每日如此服藥，歇息一日不服藥，約計共服生石膏細末斤許，下燥糞近百枚，病始霍然痊愈。其人愈後，飲食增加，脾胃分毫無傷，則石膏之功用及石膏之良善可知矣。愚用石膏治大便之因熱燥結者實多次矣，或單用石膏細末，或少佐以赭石細末，莫不隨手奏效，為此次所用石膏末最多，故特志之。

陽明病白虎加人參湯證

白虎湯之外，又有白虎加人參湯，以輔白虎湯之所不逮。其方五見於《傷寒論》，今試約略錄其數節以為研究之資料。

《傷寒論》原文「服桂枝湯，大汗出後，大煩渴不解，脈洪大者，白虎加人參湯主之」。

【白虎加人參湯方】

知母六兩，石膏一斤碎綿裹，甘草二兩炙，粳米六合，人參三兩。上五味，以水一斗，煮米熟湯成，去滓，溫服一升，日三服。

服桂枝湯原取微似有汗，若汗出如水流漓，病必不解，此謂服桂枝湯而致大汗出，是汗出如水流漓也。因汗出過多，大傷津液，是以大煩大渴、脈洪大異常，以白虎湯解其熱，加人參以復其津液而病可愈矣。

《傷寒論》原文「傷寒病，若吐若下後，七、八日不解，熱結在裡，表裡俱熱，時時惡風，大渴，舌上乾燥而煩，欲飲水數升者，白虎加人參湯主之」。

按：所謂若吐、若下者，實因治失其宜，誤吐、誤下，是以吐下後而病不愈也。且誤吐則傷其津液，誤下則傷其氣分，津液傷損可令人作渴，氣分傷損，不能助津液上潮更可作渴，是以欲飲水數升也。白虎湯中加人參，不但能生津液，且能補助氣分以助津液上潮，是以能立建奇功也。



《傷寒論》原文「傷寒，脈浮，發熱無汗，其表不解者，不可與白虎湯。渴欲飲水，無表證者，白虎加人參湯主之」。

凡服白虎湯之脈，皆當有滑象脈，滑者中有熱也。此節之脈象但浮，雖曰發熱，不過其熱在表，其不可與以白虎湯之實際，實在於此。乃因節中有無汗及表不解之文，而後世之治傷寒者，或謂汗不出者，不可用白虎湯，或謂表不解者，不可用白虎湯，至引此節之文以為徵據，而不能連上數句匯通讀之，以重誤古人。獨不思《太陽篇》中白虎湯證，其脈浮滑，浮非連於表乎？又不思白虎湯證三見於《傷寒論》，惟《陽明篇》白虎湯證，明言汗出，而《太陽篇》與《厥陰篇》之所載者，皆未言有汗乎？至於其人欲飲水數升，且無寒束之表證，是其外感之熱皆入於裡，灼耗津液，令人大渴，是亦宜急救以白虎加人參湯而無可遲疑也。

按：白虎加人參湯所主之證，或渴、或煩、或舌乾，固由內陷之熱邪所傷，實亦由其人真陰虧損也。人參，補氣之藥，非滋陰之藥，而加於白虎湯中，實能於邪火熾盛之時立復真陰，此中蓋有化合之妙也。曾治一人，患傷寒熱入陽明之府，脈象有力而兼硬，時作譫語，按此等脈原宜投以白虎加人參湯，而愚時當少年，醫學未能深造，竟與以大劑白虎湯，俾分數次溫飲下，翌日視之熱已見退，而脈搏轉數，譫語更甚，乃恍然悟會，改投以白虎加人參湯煎一大劑，分三次徐徐溫飲下，盡劑而愈。蓋白虎湯證其脈宜見滑象，脈有硬象即非滑矣，此中原有陰虧之象，是以宜治以白虎加人參湯，而不可但治以白虎湯也。自治癒此案之後，

凡遇其人脈數或弦硬，或年過五旬，或在勞心勞力之餘，或其人身形素羸弱，即非在汗吐下後，渴而心煩者，當用白虎湯時，皆宜加人參，此立腳於不敗之地，戰則必勝之師也。

同邑友人李曰綸，曾治一陽明府實證，其脈雖有力而數逾六至，曰綸先投以白虎湯不效，繼因其脈數加玄參、沙參以滋其陰分仍不效，詢方於愚。答曰「此白虎加人參湯證也」。曰綸謂「此證非在汗吐下後，且又不渴不煩，何為用白虎加人參湯」？愚曰「用古人之方，當即古人立方之意而推展變通之，凡白虎湯所主之證，其渴與煩者，多因陰分虛損，而脈象數者，獨非陰分虛損乎」？曰綸聞愚言而心中會悟，改投以白虎加人參湯一劑而愈。

推展白虎加人參湯之用法，不必其人身體虛弱或有所傷損也。憶愚年三旬時，曾病伏氣化熱，五心煩熱，頭目昏沉，舌苔白厚欲黃，且多芒刺，大便乾燥，每日用生石膏數兩煮水飲之，連飲數日，熱象不退，因思或藥輕不能勝病，乃於頭午用生石膏五兩煮水飲下，過午又用生石膏五兩煮水飲下，一日之間共服生石膏十兩，而心中分毫不覺涼，大便亦未通下。躊躇再四，精思其理，恍悟此必伏氣之所入甚深，原當補助正氣，俾吾身之正氣壯旺，自能逐邪外出也。於斯欲仿白虎加人參湯之義，因無確實把握，猶不敢遽用大劑，就已所預存之藥，用生石膏二兩，野臺參二錢，甘草錢半，適有所軋生懷山藥粗渣又加少許，煎湯兩盅，分三次溫飲下，飲完晚間即覺清爽，一夜安睡，至黎明時少腹微疼，連瀉三次，自

覺伏氣之熱全消，再自視舌苔，已退去一半，而芒刺全無矣。夫以常理揆之，加人參於白虎湯中，必謂能減石膏之涼力，而此次之實驗乃知人參反能助石膏之涼力，其理果安在乎？蓋石膏煎湯，其涼散之力皆息息由毛孔透達於外，若與人參並用，則其涼散之力，與人參補益之力互相化合，能旋轉於臟腑之間，以搜剔深入之外邪，使之淨盡無遺，此所以白虎加人參湯，清熱之力遠勝於白虎湯也。

愚生平治寒溫實熱，用白虎加人參湯時，恆多於用白虎湯時，而又恆因證制宜，即原方少有通變，凡遇脈過六至者，恆用生懷山藥一兩以代方中粳米，蓋以山藥含蛋白質甚多，大能滋陰補腎，而其濃鬱之汁漿又能代粳米調胃也。若遇陽明之熱既實，而其人又兼下痢者，恆用生杭芍一兩以代方中知母，因芍藥善清肝熱，以除痢疾之裡急後重，而其涼潤滋陰之性，又近於知母也。若婦人產後患寒溫實熱者，亦以山藥代粳米，又必以玄參八錢，以代方中知母，因山藥既可補產後之腎虛，而玄參主產乳餘疾，《本經》原有明文也（《本經》中石膏、玄參皆主產乳，知母未言治產乳，不敢師心自用、輕以苦寒之藥施於產後也）。且玄參原非苦寒之品，實驗之，原甘而微苦（《本經》謂其味苦者，當係後世傳寫之誤），是以雖在產後，可放膽用之無礙也。

愚治寒溫之證，於陽明腸實大便燥結者，恆投以大劑白虎湯，或白虎加人參湯，往往大便秘通而愈，且無下後不解之虞。間有服藥之後大便未即通下者，而少投以降下之品，或用玄明粉二三錢和蜜沖服，其大便即可通下。蓋因服白虎湯

及服白虎加人參湯後，壯熱已消，燥結已潤，自易通下也。有外感之實熱日久不退，致其人氣血兩虧，危險迫於目前，急救以白虎加人參湯，其病只愈一半，必繼服他種補益之藥始能痊愈者，今試詳述一案以徵明之。

一幼女年九歲，於季春上旬感受溫病，醫者以熱藥發之，服後分毫無汗，轉覺表裡大熱，蓋已成白虎湯證也。醫者不知按方施治，遷延二十餘日，身體尪羸，危險之朕兆歧出，其目睛上竄，幾至不見，筋惕肉瞤，周身顫動，時作噎聲，間有喘時，精神昏憤，毫無知覺，其肌膚甚熱，啟其齒見舌縮而乾，苔薄微黃，其脈數逾六至，左部弦細而浮，不任重按，右部亦弦細而重診似有力，大便旬日未行。此久經外感之熱灼耗，致氣血兩虛，肝風內動，真陰失守，元氣將脫之候也。宜急治以白虎加人參湯，再輔以滋陰固氣之品，庶可救愈，特慮病狀若此，湯藥不能下嚥，其家人謂偶與以勺水或米湯猶知下嚥，想灌以藥亦知下嚥也，於斯遂為疏方。

【處方】生石膏細末二兩，野臺參三錢，生懷山藥六錢，生懷地黃一兩，生淨萸肉一兩，甘草二錢，共煎湯兩大盅，分三次溫飲下。

按：此方即白虎加人參湯以生地黃代知母，生山藥代粳米，而又加山萸肉也。此方若不加萸肉，為愚常用之方，以治寒溫證當用白虎加人參湯而體弱陰虧者。今重加山萸肉一兩者，誠以人當元氣不固之時，恒因肝臟之疏泄而上脫，此證目睛之上竄，乃顯露之朕兆（當屬於肝），重用萸肉以收斂肝臟之疏泄，元氣即可

不脫。且喻嘉言謂「上脫之證若但知重用人參，轉令人氣高不返。重用萸肉為之輔弼，自無斯弊，可穩重建功」。

將藥三次服完，目睛即不上竄，身體安穩，噯聲已止，氣息已勻，精神較前明瞭，而仍不能言，大便猶未通下，肌膚猶熱，脈數已減，不若從前之浮弦，右部重診仍似有力，遂即原方略為加減，俾再服之。

【第二方】生石膏細末兩半，野臺參三錢，生懷地黃一兩，生淨萸肉六錢，天冬六錢，甘草二錢，煎湯兩盅，分兩次溫飲下，每飲一次調入生雞子黃一枚。

按：目睛已不上竄而猶用萸肉者，誠以此證先有噯氣之病，是其氣難於上達也。凡氣之難於上達者，須防其大便通後，氣或下脫，故用萸肉以預防之。至於雞子黃，化學家謂其含有副腎髓質，即善滋真陰，生用之，又善潤大便，是以加之。

此藥日服一劑，服兩日熱已全退，精神之明瞭似將復原，而仍不能言，大便仍未通下，間有努力欲便之狀。診其脈熱象已靜且微弱，擬用灌腸法通其大便。先用野臺參三錢，萸肉、天冬各四錢，煎湯服下，然後用灌腸法以通其大便。安然通下，仍不能言，細診其脈微弱益甚，右部關前之脈幾至不見。乃恍悟其所以不能言者，胸中大氣下陷也，升補其胸中大氣，使之上達於舌本必能言矣。

【第三方】生箭耆三錢，野臺參三錢，生懷山藥一兩，大甘枸杞一兩，北沙參一兩，天冬六錢，寸冬帶心六錢，升麻一錢，桔梗錢半，共煎湯一盅半，分兩

次溫服下。此方連服兩劑，遂能言語，因方中重用滋陰之藥以培養其精神，而精神亦復常矣。

陽明病三承氣湯證

白虎湯及白虎加人參湯兩方，皆治足陽明有實熱者也。至熱入手陽明之府，致大便因熱燥結，其燥結愈甚者，蘊蓄之熱必愈深，此非開其燥結，其熱固不能消也。若斯則攻下之劑，若承氣湯諸方在所必需矣。

《傷寒論》原文「陽明病，脈遲，雖汗出不惡寒者，其身必重，短氣腹滿而喘，有潮熱者，此外欲解，可攻裡也。手足然而汗出者，此大便已硬也，大承氣湯主之。若汗多，微發熱惡寒者，外未解也，其熱不潮，未可與承氣湯。若腹大滿不通者，可與小承氣湯，微和胃氣，勿令大泄下」。

王和安曰「《脈訣》遲為在臟，以邪正相搏於太陰油膜中，氣不上動搏脈，故脈動濡滯也。仲景論遲有正言者，本篇十七節所言之脈遲是也。有反言者，如《太陽篇》一百四十五節所言之脈遲身涼，為熱結血室，及此節所言之脈遲潮熱，為熱結油膜是也。大抵遲為在臟，而臟寒、臟熱仍以脈力之虛實定之，不得以至數分寒熱也。傷寒言身重，多因熱灼津液，脈痿不運；雜證身重，多以陽虛氣不布津而身體倦困，或鬱氣凝水，重尤甚於腰際四肢，身重之原因固隨證各異也。短氣因虛寒者，必氣短而息微，或漸有痰飲；短氣因熱促者，必氣短而息粗，甚則兼喘。潮熱為內有結熱，衛氣循行，日以定時觸發。雜證結熱多在血分，傷寒結熱多在油分，故仲景以潮熱為用硝黃之的證，至腹大滿只可治以小承氣也。仲景凡言滿，皆指熱結脈中，此兼不通則熱結於脈而氣因滯於油膜也。小承氣君大

黃入血治熱源，佐朴、枳多瀉脈血滯氣，少瀉膜中滯氣，而不用硝草引藥入油，可因方治而知結熱之先後矣。至潮熱為油膜熱結，仍可主以小承氣，至手足濇然汗出，則為大便已硬，乃可投以大承氣，又可因方治而知結熱之所抵止矣」。

按：此段疏解頗精細，惟於脈遲之理仍發揮未盡，若參觀前節大陷胸湯後，愚曾論大陷胸湯兼及大承氣湯證脈之所以遲，並詳言其脈遲形狀，與他病脈遲者迥然不同，自能於提綱中之言脈遲，了然無疑義也。

【大承氣湯方】

大黃四兩酒洗，厚朴半斤炙去皮，枳實五枚炙，芒硝三合。上四味，以水一斗，先煮二物，取五升，去滓，納大黃，煮取二升，去滓，納芒硝，更上微火一兩沸，分溫再服，得下，餘勿服。

大承氣湯方，所以通腸中因熱之燥結也。故以大黃之性善攻下，且善瀉熱者為主藥，然藥力之行必恃臟腑之氣化以斡旋之，故佐以朴、實以流通腸中鬱塞之氣化，則大黃之攻下自易為力矣。用芒硝者，取其性寒味鹹，善清熱又善軟堅，且兼有攻下之力，則堅結之燥糞不難化為溏糞而通下矣。方中之用意如此，藥味無多，實能面面精到，而愚對於此方不無可疑之點，則在其藥味份量之輕重也。

《本經》謂大黃能推陳致新，是以有黃良之名，在陽明蘊有實熱大便燥結者，原宜多用。至厚朴不過為大黃之輔佐品，竟重用至半斤，較大黃之份量為加倍，若按一兩為今之三錢折算，復分兩次服之，則一次所服之藥，當有厚朴一兩二錢。



夫厚朴氣溫味辛，若多用之，能損人真氣，為人所共知，而其性又能橫行達表，發出人之熱汗。憶愚少時，曾治一陽明實熱大便燥結證，方中用大黃三錢，服後大便未通下，改延他醫，方中重用厚朴一兩，服後片時出熱汗遍體，似喘非喘，氣弱不足以息，未逾半日而亡矣，此誠可為前車之鑒也。是以愚謂此方之份量必有差誤，愚疑此方厚朴之份量，當亦如小承氣湯為大黃份量之半，其原本或為厚朴之份量半大黃，大抵由此半字而誤為半斤也。

【小承氣湯方】

大黃四兩酒洗，厚朴二兩炙去皮，枳實三枚大者炙。上三味，以水四升，煮取一升二合，去滓，分溫二服。初服湯當更衣，不爾者盡飲之。若更衣者，勿服之。

大承氣湯所主之病，大腸中有燥糞，是以用芒硝軟堅以化其燥糞。小承氣湯所主之病為腹大滿不通，是其病在於小腸而上連於胃，是以但用大黃、枳實以開通其小腸，小腸開通下行，大便不必通下，即通下亦不至多，而胃中之食可下輸於小腸，是以胃氣得和也。此大、小承氣湯用法之分別也。而二承氣湯之外，又有調胃承氣湯，更可連類論及之。

《傷寒論》原文「陽明病，不吐不下，心煩者，可與調胃承氣湯」。

成無己曰「吐後心煩，謂之內煩，下後心煩，謂之虛煩，今陽明病不吐不下心煩，是胃有鬱熱也，故與調胃承氣湯以下鬱熱」。

湯」。喻嘉言曰「津液既不由吐下而傷，則心煩明係胃中熱熾，故可與調胃承氣

湯」。王和安曰「從胃緩調使和而止，殆非下比也，謂其可與，蓋猶有不可與者在，當精審而慎用之」。

【調胃承氣湯方】

大黃四兩去皮清酒浸，甘草二兩炙，芒硝半升。上二味，咬咀，以水三升，煮取一升，去滓，納芒硝，再上火微煮令沸，少少溫服之。

大黃雖為攻下之品，原善清血分之熱，心中發煩實為血分有熱也。大黃浸以清酒，可引其苦寒之性上行，以清心之熱而煩可除矣。證無大便燥結而仍用芒硝者，《內經》謂「熱淫於內，治以鹹寒」，芒硝味鹹性寒，實為心家對宮之藥（心屬火，鹹屬水，故為心家對宮之藥），其善清心熱，原有專長，故無大便燥結證而亦加之也。用甘草者，所以緩藥力之下行，且又善調胃也。不用朴、實者，因無大便燥結及腹滿之證也。

承氣湯雖有三方，而小承氣及調胃承氣，實自大承氣變化而出。《傷寒論》所載三承氣主治之證不勝錄，然果洞悉三方之各有用意，及三方藥力輕重各有區別，且所主之病雖有上、中、下之分，而究之治上可及於中，治中可及於下，分治之中，仍有連帶關係，自能凡遇宜用承氣湯證，斟酌其宜輕宜重，分別施治而無差謬矣。

至於愚用承氣湯之經過，又恆變化多端，不拘拘於三承氣湯中之藥味也。今試舉數案以徵明之。

大承氣湯所主之證，原宜脈遲，其有脈不遲而洪實有力者，亦不妨用。惟其脈不遲而轉數，若因大便燥結，而遽投以大承氣湯，其脈之無力者，恆因大便通後而虛脫。其脈之有力者，下後縱不至虛脫，其病亦必不能愈，所謂降後不解也。凡遇此等脈，必設法將其脈數治癒，然後再通其大便。

曾治一叟，年近六旬，因外感之熱過甚，致大便旬日未通，其脈數逾六至，心中煩熱，延醫數人，皆不敢用降下之劑，然除降下外，又別無治法。愚診其脈象雖數，重按甚實，遂先投以大劑白虎加人參湯，每劑分三次溫服下，連服兩劑，壯熱全消，脈已不數，大便猶未通下，繼用淨芒硝細末三錢，蜂蜜一兩，開水沖服，大便通下，病遂愈。

曾治一少年，因外感實熱，致大便燥結，旬餘未下，其脈亦數逾六至，且不任重按，亦投以白虎加人參湯，以生地黃代方中知母，生山藥代方中粳米，煎湯一大碗，俾分多次徐徐溫飲下。初服一劑，脈數見緩，遂即原方略為減輕，俾再煎服，擬後服至脈象復常，再為通其大便，孰意次劑服完而大便自通下矣。且大便秘下後，外感之實熱亦消解無餘矣。此直以白虎加人參湯代承氣湯也，自治癒此病之後，凡遇有證之可下而可緩下者，恆以白虎湯代承氣，或以白虎加人參湯

代承氣，其涼潤下達之力，恆可使大便徐化其燥結，無事用承氣而自然通下，且下後又無不解之虞也。

治一少婦，於大怒之餘感冒傷寒，熱傳陽明，大便燥結，醫者兩次投以大承氣皆吐出。診其脈弦長有力，蓋脈現弦長，無論見於何部，皆主肝火熾盛，此不受藥之所以然也。遂於大承氣湯中將朴、實減輕（朴實各用錢半），加生杭芍、生赭石各一兩，臨服藥時，又恐藥湯入口即吐出，先用白開水送服生赭石細末三錢（赭石質同鐵銹，因鐵銹為鐵氧化合，赭石亦鐵氧化合也，故生研為細末可服，凡吐甚者，煎湯服之，或不效，服其細末必能立止），繼將藥服下，閱三點鐘大便通下而病即愈矣。

又治一人素傷煙色，平日大便七八日一行，今因受外感實熱，十六七日大便猶未通下，心中煩熱，腹中脹滿，用洗腸法下燥糞少許，而脹滿煩熱如舊，醫者謂其氣虛脈弱，不敢投降下之藥。及愚診之，知其脈雖弱而火則甚實，遂用調胃承氣湯加野臺參四錢，生赭石、天門冬各八錢，共煎湯一大碗，分三次徐徐溫飲下，飲至兩次，腹中作響，覺有開通之意，三次遂不敢服，遲兩點鐘大便通下，內熱全消，霍然愈矣。

有服承氣湯後，大便之燥結不下，繼服些許他藥而燥結始下者，試再舉兩案以明之。

邑中名醫劉肅亭（蘊度），愚初學醫時，家中常延之，一日，見先生治一傷寒熱入陽明大便燥結證，從前醫者，投以大承氣湯兩劑不下，繼延先生治之，單用威靈仙三錢，煎湯服後，大便通下，病亦遂愈。愚疑而問曰「威靈仙雖能通利二便，以較硝、黃攻下之力實遠不如，乃從前服大承氣湯兩劑大便不下，何先生只用威靈仙三錢而大便即下乎？」答曰「其中原有妙理，乃前後所用之藥相藉以成功也。蓋其從前所服之大承氣湯兩劑，猶在腹中，因其臟腑之氣化偶滯，藥力亦隨之停頓，借威靈仙走竄之力以觸發之，則硝、黃力之停頓者，可陡呈其開通攻決之本性，是以大便遂通下也。是威靈仙之於硝、黃，猶如槍炮家導火之線也」。愚聞如此妙論，頓覺心地開通，大有會悟，後有仿此醫案之時，亦隨手奏效。因並錄之於此，由此知醫學雖貴自悟，亦必啟發之有自也。

鄰村霍印科，愚師兄弟也，當怒動肝火之餘感受傷寒，七八日間腹中脹滿，大便燥結，醫者投以大承氣湯，大便未通下，肋下轉覺疼不可支。其脈左部沉弦有力，知係肝經氣鬱火盛，急用柴胡三錢，生麥芽一兩，煎湯服後，至半點鐘肋下已不覺疼，又遲一點餘鐘，大便即通下。大便下後，腹即不脹，而病脫然痊愈矣。

此案實仿前案之義，亦前後藥力相藉以通大便也。蓋腎為二便之關，肝行腎之氣，肝又主疏泄，大便之通與不通，實於肝有關係也。調其肝鬱，即可以通行大便，此中原有至理，至於調肝用柴胡而又必佐以生麥芽者，因麥芽生用亦善調

肝者也。且柴胡之調肝，在於升提，生麥芽之調肝，在於宣通，若因肝不舒但用柴胡以升提之，恐初服下時肋下之疼將益劇。惟柴胡之升提，與麥芽之宣通相濟以成調肝氣之功，則肝氣之鬱者自開，遏者自舒，而徐還其疏泄之常矣。且柴胡之性不但善調肝氣也，《本經》謂柴胡主心腹腸胃中結氣，飲食積聚，寒熱邪氣，推陳致新。三復《本經》之文，是柴胡不但善於調肝，兼能消脹滿通大便矣。然柴胡非降下之藥也，其於大便之當通者，能助硝黃以通之，若遇脾胃之氣下溜大便泄瀉者，伍以耆、朮轉能升舉脾胃之氣以止泄瀉，柴胡誠妙藥也哉。善於用柴胡者，自能深悟此中之妙理也。

至於妊婦外感熱實，大便燥結者，承氣湯亦不妨用，《內經》所謂「有故無殞亦無殞也」。然此中須有斟酌，以上所列方中諸藥，芒硝斷不可用。至赭石則三月以前可用，三月以後不可用。其餘雖皆可用，然究宜先以白虎湯或白虎加人參湯代承氣，即不能完全治癒，後再用承氣時亦易奏效也。

曾治一婦人，妊過五月，得傷寒證，八九日間，脈象洪實，心中熱而煩躁，大便自病後未行，其臍上似有結糞，按之微疼，因其內熱過甚，先用白虎加人參湯清之，連服兩劑內熱頗見輕減，而臍上似益高腫，不按亦疼，知非服降下之藥不可也。然從前服白虎加人參湯兩劑，知其大便雖結不至甚燥，治以降下之輕劑當可奏效，為疏方，用大黃、野臺參各三錢，真阿膠（不炒，另燉兌服）、天冬各五錢，煎湯服下，即覺臍上開通，過一點鐘，疼處即不疼矣。又遲點半鐘，下

結糞十餘枚，後代溏糞，遂覺霍然痊愈，後其胎氣亦無所損，屆期舉子矣。至方中之義，大黃能下結糞，有人參以駕馭之，則不至於傷胎。又輔以阿膠，取其既善保胎，又善潤腸，則大便之燥者可以不燥矣。用天冬者，取其涼潤微辛之性（細嚼之實有辛味），最能下行以潤燥開瘀，兼以解人參之熱也。

陽明病茵陳蒿湯證

陽明原屬燥金，其為病也多燥熱，白虎、承氣諸方，皆所以解陽明之燥熱也。然燥熱者陽明恆有之正病，而有時間見濕熱為病，此陽明之變病也。其變病果為何病？〈陽明篇〉中諸發黃之證是也。試再進而詳論之。

《傷寒論》原文「陽明病，發熱汗出者，此為熱越，不能發黃也。但頭汗出，身無汗，劑頸而還，小便不利，渴引水漿者，此為瘀熱在裡，身必發黃，茵陳蒿湯主之」。

作酒麴者，濕窳以生熱，熱與濕化合即生黃色，以之例人其理同也。是以陽明病發熱汗出者，熱外越而濕亦隨之外越，即不能發黃。若其熱不外越而內蘊，又兼其人小便不利，且飲水過多，其濕與熱必至化合而生黃，是以周身必發黃也。主以茵陳蒿湯者，以茵陳蒿湯善除濕熱也。

【茵陳蒿湯方】

茵陳蒿六兩，梔子十四枚擘，大黃二兩去皮。上三味，以水一斗，先煮茵陳減六升，納二味，煮取三升，去滓，分溫三服，小便當利，尿如皂角汁，色正赤，一宿腹減，黃從小便去也。

茵陳為青蒿之嫩者，蒿子落地，至仲秋生芽，貼地長小葉，嚴冬之時埋藏於冰雪之中，而其葉不枯，甫交春令，得少陽最初之氣而勃然發生，其性寒味苦，



具有生發之之氣，寒能勝熱，苦能勝濕，其生發之氣能逐內蘊之濕熱外出，故可為濕熱身黃之主藥。佐以梔子、大黃者，因二藥亦皆味苦性寒也，且梔子能屈曲引心火下行以利小便。大黃之色能直透小便（凡服大黃者，其小便即為大黃之色，是大黃能利小便之明徵），故少用之，亦善利小便。至茵陳雖具有升發之性，《名醫別錄》亦謂其能下利小便，三藥並用，又能引內蘊之熱自小便瀉出，是以服之能隨手奏效也。

《傷寒論》原文「傷寒七、八日，身黃如橘子色，小便不利，腹微滿者，茵陳蒿湯主之」。

身黃如橘而腹滿，小便不利，此因濕熱成病可知，故亦治以茵陳蒿湯也。

陽明病梔子柏皮湯證

《傷寒論》原文「傷寒身黃發熱，梔子柏皮湯主之」。

此節示人，但見其身黃發熱，即無腹滿小便不利諸證，亦直可以濕熱成病斷之也。

【梔子柏皮湯方】

梔子十五個擘，甘草一兩炙，黃柏二兩。上三味，以水四升，煮取一升半，去滓，分溫再服。

此方之用意，欲以分消上中下之熱也。是以方中梔子善清上焦之熱，黃柏善清下焦之熱，加甘草與三藥並用，又能引之至中焦以清中焦之熱也。且梔子、黃柏皆過於苦寒，調以甘草之甘，俾其苦寒之性味少變，而不至有傷於胃也。

陽明病麻黃連軹赤小豆湯證

《傷寒論》原文「傷寒瘀熱在裡，身必發黃，麻黃連軹赤小豆湯主之」。

【麻黃連軹赤小豆湯方】

麻黃二兩去節，赤小豆一升，連軹二兩，杏仁四十個去皮尖，大棗十二枚，生梓白皮一升，生薑二兩切，甘草二兩炙。上八味，以潦水一斗，先煮麻黃再沸，去上沫，納諸藥，煮取三升，分溫三服，半日服盡。

按：連軹非連翹，乃連翹根也。其性涼能瀉熱，兼善利濕，後世改用連翹則性不同矣。赤小豆，即作飯之小豆，形如綠豆而色赤者，非南來之紅豆也。梓白皮，藥局無鬻者，有梓樹處自加之，可也。陳修園云「若無梓白皮，可以茵陳代之」。

唐容川曰「在裡言在肌肉中，對皮毛而言則為在裡也。肌是肥肉，氣分所居；肉是瘦肉，血分所藏。若熱入肌肉，令氣血相蒸，則汗滯不行，是名瘀熱。氣瘀則為水，血瘀則為火，水火蒸發於肌肉中，現出土之本色，是以發黃。故用麻黃、杏仁發皮毛，以散水於外，用梓白皮以利水於內，梓白皮象人之膜，人身肥肉均生於膜上，膜中通利，水不停，汗則不蒸熱，故必利膜而水乃下行，此三味是去水分之瘀熱也。連翹散血分之熱，赤豆疏血分之結，觀仲景赤小豆當歸散是疏結血，則此處亦同，此二味是去血分之瘀熱也。尤必用甘、棗、生薑宣胃氣，協諸

藥使達於肌肉，妙在潦水是雲雨既解之水，用以解水火之蒸鬱為切當也。即方觀證，而義益顯明」。

按：身發黃與黃膽不同。黃膽為膽汁妄行於血中，仲景書中雖未明言，而喻嘉言《寓意草》於錢小魯案中曾發明之，彼時西人謂膽汁溢於血中之說，猶未入中國也。至身發黃之病，猝成於一兩日間，其非膽汁溢於血分可知矣。茵陳為治熱結黃膽之要藥，《本經》載有明文，仲景治身發黃亦用之者，誠以二證之成，皆由於濕熱，其濕熱由漸而成則為黃膽，其濕熱因外感所束，倉猝而成則為身發黃，是以皆可以茵陳蒿治之也。

身發黃之證，不必皆濕熱也。《陽明篇》七十六節云「傷寒，發汗已，身目為黃，所以然者，寒濕在裡不解，故也，以為不可下也，於寒濕中求之」。

程應旂曰「其人素有濕邪，汗後之寒與宿濕鬱蒸為熱，非實熱也，故不可下，仍當於寒濕責其或淺或深而治之」。

王和安曰「黃為油熱色，油中含液而包脈孕血，液虛血燥則熱甚為陽黃，身黃發熱之梔子柏皮證也。油濕血熱相等而交蒸，為小便不利，身黃如橘之茵陳蒿證也。油寒膜濕，鬱血為熱，則寒濕甚而為陰黃，即茵陳五苓證也。病有熱而治從寒濕，玩以為二句，語氣之活自可想見。蓋以為不可下，明見有可下之熱黃也，在於寒濕中求之，言治法求之寒濕，明見黃證不純為寒濕也。凡一證二因者，治從其甚，可於二語見之」。

上程氏、王氏之論甚精細，而愚於此節之文則又別有會悟，試引從前治癒之兩案以明之。

曾治一人受感冒，惡寒無汗，周身發黃，以麻黃湯發之，汗出而黃不退。細診其脈，左部弦而無力，右部濡而無力，知其肝膽之陽不振，而脾胃又虛寒也。蓋脾胃屬土，土色本黃，脾胃有病，現其本色，是以其病濕熱也，可現明亮之黃色，其病濕寒也，亦可現黯淡之黃色。觀此所現之黃色，雖似黯淡而不甚黯淡者，因有膽汁妄行在其中也。此蓋因肝膽陽分不振，其中氣化不能宣通膽汁達於小腸化食，以致膽管閉塞，膽汁遂蓄極妄行，溢於血分而透黃色，其為黃色之根源各異，竟相並以呈其象，是以前發黃似黯淡而非黯淡也。審病既確，遂為擬分治左右之方以治之。

生箭耆六錢，桂枝尖二錢，乾薑三錢，厚朴錢半，陳皮錢半，茵陳二錢。上藥六味，共煎湯一大盅溫服。方中之義，用黃耆以助肝膽之陽氣，佐以桂枝之辛溫，更有開通之力也。用乾薑以除脾胃之濕寒，輔以厚朴能使其熱力下達。更輔以陳皮，能使其熱力旁行，其熱力能布充周，脾胃之寒濕自除也。用茵陳者，為其具有升發之性，實能打開膽管之閉塞，且其性能利濕，更與薑、桂同用，雖云苦寒而亦不覺其苦寒也。況肝膽中寄有相火，肝膽雖涼，相火之寄者仍在，相火原為龍雷之火，不可純投以辛熱之劑以觸發之，少加茵陳，實兼有熱因寒用之義也。

又治一人，時當仲秋，寒熱往來，周身發黃，心中煩熱，腹中又似覺寒涼，飲食不甚消化，其脈左部弦硬，右部沉濡，心甚疑之，問其得病之由，答云不知。因細問其平素之飲食起居，乃知因屋宇窄隘，六七月間皆在外露宿，且其地多潮濕，夜間霧露尤多。乃恍悟此因臟腑久受潮濕，脾胃屬土，土為太陰，濕鬱久則生寒，是以飲食不能消化。肝膽屬木，木為少陽，濕鬱久則生熱，又兼有所寄之相火為之熏蒸，以致膽管腫脹閉塞，是以膽汁妄行，溢於血中而身黃也。舌上微有白苔，知其薄受外感，侵入三焦，三焦原為手少陽與足少陽並為游部，一氣貫通，是以亦可作寒熱，原當以柴胡和解之，其寒熱自己，茵陳性近柴胡，同為少陽之藥，因其身發黃，遂用茵陳三錢以代柴胡，又加連翹、薄荷葉、生薑各三錢，甘草二錢，煎湯服後，周身得汗（足少陽不宜發汗，手少陽宜發汗），寒熱往來愈，而發黃如故。於斯就其左右之脈寒熱迥殊者，再擬一方治之。

茵陳三錢，梔子三錢，乾薑三錢，白朮三錢炒，厚朴二錢，焰硝五分研細。上六味，將前五味煎湯一大盅，乘熱納硝末融化服之。

方中之義，用梔子、茵陳以清肝膽之熱，用乾薑、白朮、厚朴以除脾胃之寒，藥性之涼熱迥然不同，而匯為一方自能分途施治也。用焰硝者，因膽管之閉塞，恆有膽石阻隔，不能輸其膽汁於小腸，焰硝之性善消，即使膽管果有膽石，服之亦不難消融也，

陽明病豬苓湯證

發黃之證，多成於濕熱，諸治發黃之方，皆治濕熱之方也。乃有本陽明病，其人蘊有濕熱而不發黃者，自當另議治法，而《陽明篇》中亦曾載其治方矣。

《傷寒論》原文「陽明病：若脈浮發熱，渴欲飲水，小便不利者，豬苓湯主之」。

張拱端曰「肺脈浮，肺主皮毛，故脈浮發熱為肺病。經云『飲入於胃，遊溢精氣，上輸於脾，脾氣散精，上歸於肺，通調水道，下輸膀胱，水精四布，五經並行』，是渴為肺不四布水精，小便不利為肺不通調水道下輸膀胱，非若口乾舌燥之渴熱在於胃也。上節之渴關於胃，宜白虎加人參，此節之渴關於肺，宜豬苓湯」。

按：此節所謂脈浮者，乃病人陽明，而猶連太陽之府也。蓋太陽之病，在經脈浮，在府亦脈浮，此因太陽之府蘊有實熱，以致小便不利，而熱之入於陽明者，不能由太陽之府分消其熱下行，轉上逆而累及於肺，是以渴欲飲水也。治以豬苓湯，是仍欲由太陽之府分消其熱也。

【豬苓湯方】

豬苓去皮、茯苓、阿膠、滑石、澤瀉各一兩。上五味，以水四升，先煮四味取二升，去滓，納下阿膠，烱消，溫服七合，日三服。

豬苓、茯苓，皆為滲淡之品，而豬苓生於楓下，得楓根陰柔之氣（茯苓生於松下，松經霜則彌茂，豬苓生於楓下，楓經霜即紅隕，則楓性之陰柔可知也），以其性善化陽，以治因熱小便不利者尤宜，故用之為主藥。用澤瀉者，因其能化水氣上升以止渴，而後下降以利小便也。用滑石者，其性可代石膏，以清陽明之實熱，又能引其熱自小便出也。用阿膠者，因太陽之府原與少陰相連，恐諸利水之藥或有損於少陰，故加阿膠大滋真陰之品，以助少陰之氣化也。

西醫雖未能將腎之功用發揮盡至，而謂其能瀉水亦自可取。若少陰衰弱，不能作強則失其職，即為小便不通之證，法當以滲淡通利之品治之。然專用通利諸藥亦有不能奏效者，且慮其傷腎，故加阿膠以助少陰之氣化，少陰壯旺，自能助利水諸藥通調水道矣。

受業寶和謹識

陳古愚曰「此湯與五苓之用有天淵之別，五苓治太陽之水，太陽司寒水，故加桂以溫之，是暖腎以行水也。此湯治陽明、少陰結熱，二經兩關津液，惟取滋陰以行水。蓋傷寒表證最忌亡陽，而裡熱又患亡陰，亡陰者，亡腎中之陰與胃之津液也。若過於滲利，則津液反致耗竭，方中阿膠即從利水中育陰，是滋養無形以行有形也。故仲景云『汗多胃燥，雖渴而裡無熱者，不可與也』」。

《金鑿》注曰「太陽煩熱無汗，小便利者，大青龍湯證也。小便不利者，小青龍去半夏加花粉、茯苓證。煩熱有汗而渴，小便利者，桂枝合白虎湯證；小便



不利者，五苓散證。陽明病煩熱無汗而渴，小便利者，宜葛根湯加石膏主之；小便利者，以五苓散加石膏、寒水石、滑石主之。陽明病煩熱有汗而渴，小便利者，宜白虎湯；小便利者，以豬苓湯。少陽病寒熱無汗而渴，小便利者，以柴胡湯去半夏加花粉；小便利者，當以小柴胡加茯苓。太陰無渴證，少陰陽邪煩嘔，小便赤而渴者，以獵苓湯；少陰陰邪下利，小便白而渴者，以真武湯。厥陰陽邪消渴者，白虎加人參湯；厥陰陰邪轉屬陽明，渴欲飲水者，少少與之則愈。證既不同，法亦各異，當詳審而明辨之。

陽明病四逆湯證

總計〈陽明篇〉中之病證，大抵燥而且熱也，其有不燥而轉濕者，此陽明之變證也。於治發黃諸方，曾發明之矣。更有不熱而反寒者，此亦陽明之變證也。夫病既寒矣，必須治以熱劑，方為對證之藥，是則溫熱之劑，又宜講求矣。

《傷寒論》原文「脈浮而遲，表熱裡寒，下利清穀者，四逆湯主之」。

外感之著人，恆視人體之稟賦為轉移，有如時氣之流行，受病者或同室、同時，而其病之偏涼、偏熱，或迥有不同。蓋人之臟腑素有積熱者，外感觸動之則其熱益甚；其素有積寒者，外感觸動之則其寒亦益甚也。明乎此則可與論四逆湯矣。

【四逆湯方】

甘草二兩炙，乾薑兩半，附子一枚生用去皮破八片。上三味以水三升，煮取一升二合，去滓，分溫再服，強人可大附子一枚、乾薑三兩。

乾薑為溫暖脾胃之主藥，伍以甘草，能化其猛烈之性使之和平，更能留其溫暖之力使之常久也。然脾胃之溫暖，恆賴相火之壯旺，附子色黑入腎，其非常之熱力，實能補助腎中之相火，以厚脾胃溫暖之本源也。方名四逆者，誠以脾主四肢，脾胃虛寒者，其四肢常覺逆冷，服此藥後，而四肢之厥逆可回也。

方中附子，注明生用，非剖取即用也。

按：附子之毒甚大，種附子者，將附子剖出，先以鹽水浸透，至藥局中又幾經泡製，然後能用，是知方中所謂附子生用者，特未用火炮熟耳。

又按：烏頭、天雄、附子、側子，原係一物，種附子於地，其當年旁生者為附子，附子外復旁生小瓣為側子，其原種之附子本身變化為烏頭，若附子經種後，其旁不長附子，惟本身長大即為天雄。天雄之熱力最大，此如蒜中之獨頭蒜，實較他蒜倍辣也。天雄之色較他附子獨黑，為其色黑，其力能下達，佐以芍藥，能收斂浮越之陽下歸其宅；為其獨頭無瓣，故所切之片為圓片，其熱力約大於尋常附子三分之一。方上開烏附子，藥房給此，開天雄藥房亦應給此。若此藥以外，復有所謂天雄者，乃假天雄也。

〈 第 三 卷 〉

少陽病提綱及汗吐下三禁

陽明之熱，已入府者，不他傳矣。若猶在經，而未入於府者，仍可傳於少陽。而少陽確實之部位，又須詳為辨析也。夫太陽主外，陽明主裡，而介於太陽、陽明之間者，少陽也。少陽外與太陽相並則寒，內與陽明相並則熱，是以少陽有病而寒熱往來也。由此而論，則傳經之次第，當由太陽而少陽，由少陽而陽明，而《內經》竟謂一日巨陽（即太陽）受之，二日陽明受之，三日少陽受之者何也？蓋他手、足同名之經各有界限，獨少陽主膜，人身之膜無不相通。膜有連於太陽者，皮膚下腠理之白膜也。膜有連於陽明者，肥肉、瘦肉間之膜也。此為手少陽經以三焦為府者也（三焦亦是膜，發源於命門，下焦為包腎絡腸之膜，中焦為包脾連胃之膜，上焦為心下膈膜及心肺一係相連之膜）。又兩脅之下皆板油，包其外者亦膜也，此為足少陽之膜以膽為府者也。由此知介於太陽、陽明之間者，手少陽也；傳經在陽明之後者，足少陽也。太陽傳陽明原自手少陽經過，而《傷寒論》未言及者，以其重足經，不重手經也。總之，手、足少陽之膜原相聯繫，即手、足少陽之氣化原相通，是以《內經》謂少陽為游部（游部者，謂其中氣化自手經至足經，自足經至手經，遊行無定也），更由此知所謂與太陽相並者，為手少陽腠理之膜也，與陽明相並者，為足少陽板油之膜也，以其相近故能相並也。能明乎此，即可與論《少陽篇》之病矣。

《傷寒論》原文「少陽之為病，口苦，咽乾，目眩也」。

唐容川曰「少陽是三焦，腎係命門之中，水中之陽，故曰少陽。從腎係達肝係而與膽通，水中之陽上生肝木，是為春生之陽，故曰少陽，膽寄於肝，秉風化而生火，故又為風火之主。若少陽三焦與膽皆不病，則風火清暢，生陽條達，人自不知不覺也。設病少陽膽木之火，則火從膜中上入胃口，而為口苦、咽乾。設病少陽膽木之風，則風從膜中上走空竅，入目係合肝脈，肝脈貫腦入目，膽經與之合，則風火相煽而發目眩。眩者，旋轉不定，如春夏之旋風，乃風中有鬱火之氣也。此少陽膽經自致之病，仲景以此提綱，既見膽中風火之氣化，又見三焦膜膈之道路，凡少陽與各經相通之理，欲人從此會通之矣」。

《傷寒論》原文「少陽中風，兩耳無所聞，目赤胸中滿而煩者，不可吐下，吐下則悸而驚」。

張拱端曰「手、足少陽經脈均入耳中，耳內海底之鼓膜，為聞聲之先受，風邪由經脈壅塞於鼓膜之下，外聲不能由鼓膜傳於司聽神經，故兩耳無所聞。又手、足少陽經脈交會於目銳眥，故目赤，此亦少陽風火循經脈而上走空竅之病也。胸中滿而煩者，則又是邪在少陽三焦之府也。上焦之膜，由膈上循腔子而為胸中，達心肺而生心包，故胸中滿而煩者，滿煩是火氣在上焦膜孔府中，不在胃管中，故不可吐下。悸者，心包病也，驚者，肝病也，心包屬手厥陰，與手少陽三焦相表裡，肝屬足厥陰，與足少陽膽相表裡，且包絡為三焦所歸結，肝為膽所寄附，

故少陽三焦膽有病，因誤吐下，虛其裡之正氣，則少陽之邪，可內入於主厥陰之心包、肝而為悸驚也。

《傷寒論》原文「傷寒脈弦細，頭痛發熱者，屬少陽。少陽不可發汗，發汗則譫語，此屬胃。胃和則愈，胃不和，煩而悸」。

按：此節所言之證，乃少陽病之偏於熱者也。弦細固為少陽之脈，觀提綱中諄諄以胃和、胃不和為重要之點，想自陽明傳少陽時，其外感之熱仍有一半入府，而非盡傳於少陽。脈雖弦細，重按必然甚實，此原當為少陽、陽明合病也。愚遇此等證脈時，恆將柴胡湯方中藥味減半（惟人參與甘草不減），外加生石膏一兩，知母五錢（此為白虎加人參湯與小柴胡湯各用一半），則少陽之病可解，其胃中之熱亦可盡清，而不至有胃不和之虞矣。又此節合上節，為少陽病汗、吐、下三禁，凡治少陽病者當切記之。

少陽病小柴胡湯證

《傷寒論》原文「傷寒五六日，中風，往來寒熱，胸脅苦滿，默默不欲飲食，心煩喜嘔，或胸中煩而不嘔，或渴，或腹中痛，或脅下痞硬，或心下悸，小便不利，或不渴，身有微熱，或咳者，與小柴胡湯主之」。（此節載《太陽篇》）

唐容川曰「《內經》云少陽為樞，蓋實有樞之地可指。又曰十二經皆取決於少陽，亦實有取決之道路可指。蓋決如決水，謂流行也，如管子決之則行之義，蓋言十二經之流行，皆取道於少陽也。少陽是三焦，古作焦，即人身中之隔膜油網，西醫名為連網，《內經》名為三焦，宋元後謂三焦有名無象，其說非也。三焦之根發於腎係，由腎係生脅下之兩大板油，中生腹內之網油，連小腸、大腸、膀胱，又上生肝膈、連膽係，由肝膈生胸前之膜膈，循胸腔內為一層白膜，上至肺係，連於心為心包絡，又上而為咽喉，此三焦之府在內者也。從內透出筋骨之外，是生肥肉，肥肉內，瘦肉外，一層網膜有紋理，為營衛外來之路，名曰腠理（此與理者皮膚有所本），乃三焦之表也。邪在腠理，出與陽爭則寒，入與陰爭則熱，故往來寒熱。胸脅是隔膜連接之處，邪在隔膜，故胸脅苦滿。少陽膽火遊行三焦，內通包絡，火鬱不達，故默默。凡人飲水俱從胃散入膈膜，下走連網以入膀胱，凡人食物化為汁液，從腸中出走網油以達各臟。邪在膜油之中，水不下行則不欲飲，汁不消行則不欲食。心煩者，三焦之相火內合心包也。喜嘔者，三焦為行水之府，水不下行，故反嘔也，或但合心火為胸中煩，而水不上逆則不嘔。



或三焦之火能消水則渴。或肝膈中之氣，迫湊於腹內網油之中則腹中痛。或邪結於脅下兩大板油之中，則脅下痞滿。或三焦中火弱水盛，水氣逆於心下膈膜之間，則心下悸。或三焦之府不熱則不消渴。而邪在三焦之表，居腠理之間，則身有微熱。或從膈膜中上肺衝咽喉，為痰火犯肺則咳。總之，是少陽三焦膜中之水火鬱而為病也，統以小柴胡湯散火降水主之。

上唐氏之疏解可謂精細，而於何者為手少陽，何者為足少陽，仍欠發明。再者，觀其傳經在陽明之後及少陽忌發汗，少陽行身之側，少陽為樞之義，皆指足少陽而言，則《傷寒論》之側重足少陽明矣。蓋少陽為遊部，其手經、足經原不能分，是以病在足少陽多有連帶手少陽之處，提綱中所言之病本此義，以融會觀之，自無難解之處也。

【小柴胡湯方】

柴胡半斤，黃芩三兩，人參三兩，甘草三兩炙，半夏半升洗，生薑三兩切，大棗十二枚擘。上七味，以水一斗二升，煮取六升，去滓，再煎取三升，溫服一升，日三服。若胸中煩而不嘔，去半夏、人參，加枳實一枚；若渴者，去半夏，加人參，合前成四兩半，枳實根四兩；若腹中痛者，去黃芩，加芍藥三兩；若脅下痞硬，去大棗，加牡蠣四兩；若心下悸小便不利者，去黃芩，加茯苓四兩；若不渴外有微熱者，去人參，加桂枝三兩，溫覆取微汗愈；若咳者，去人參、大棗、生薑，加五味子半升、乾薑二兩。

張令韶曰「太陽之氣，不能由胸出人，逆於胸脅之間，內干動於臟氣，當借少陽之樞轉而外出也。柴胡二月生苗，感一陽初生之氣，香氣直達雲霄，又稟太陽之氣，故能從少陽之樞以達太陽之氣。半夏生當夏半，感一陰之氣而生，啟陰氣之上升者也。黃芩氣味苦寒，外實而內空腐，能解形身之外熱。甘草、人參、大棗，助中焦之脾土，由中而達外。生薑所以發散宣通者也。此從內達外之方也，原本列於太陽，以無論傷寒、中風，至五六日之間，經氣一周，又當來復於太陽，往來寒熱為少陽之樞象，此能達太陽之氣從樞以外出，非解少陽也。各家俱移入〈少陽篇〉，到底是後人識見淺處」。又曰「太陽之氣，不能從胸出入，逆於胸脅之間，雖不干動在內有形之臟真，而亦干動在外無形之臟氣。然見一臟之證，不復更見他臟，故有七或證也。胸中煩者，邪氣內侵君主，故去半夏之燥。不嘔者，胃中和而不虛，故去人參之補，加栝萸實之苦寒，導火熱以下降也。渴者，陽明燥金氣盛，故去半夏之辛，倍人參以生津，加栝萸根引陰液以上升也。腹中痛者，邪干中土，故去黃芩之苦寒，加芍藥以通脾絡也。脅下痞硬者，厥陰肝氣不舒，故加牡蠣之純牡能破肝之牝臟，其味鹹能軟堅，兼除脅下之痞，去大棗之甘緩，欲其行之捷也。心下悸、小便不利者，腎氣上乘而積水在下，故去黃芩，恐苦寒以傷君火，加茯苓保心氣以制水邪也。不渴而外有微熱者，其病仍在太陽，故不必用生液之人參，宜加解外之桂枝，復取微汗也。咳者傷肺，肺氣上逆，故

加乾薑之熱以溫肺，五味之斂以降逆，凡咳皆去人參，長沙之秘旨，既有乾薑之溫，不用生薑之散，既用五味之斂，不用大棗之緩也。

或問「傳經之次第，自太陽傳陽明，因太陽主皮膚，陽明主肌肉，皮膚之內即肌肉也，至陽明傳少陽，亦顯有道路可指者乎」？答曰「善哉問也，欲求醫學進步，原當如此研究也。子知陽明主肌肉，亦知少陽主膜乎？肌肉之中有膜，肌肉之底面亦為膜，即人身軀殼裡邊，腔上之肉皮也。陽明之邪入府者，不復傳矣，其不入府而傳者，由肌肉之淺處以深傳不已，必能達於底面之膜，此膜原足少陽主之也。邪傳至此，因其膜多與肉緊貼無隙存留，遂皆聚於兩脅板油之中，此乃足少陽之大都會，油質原來鬆緩，膜與肉相離又綽有餘地，是以可容邪伏藏也，此陽明傳少陽，顯然可指之道路也。至《內經》謂少陽為樞者（《內經》謂太陽主開，陽明主闔，少陽為樞），乃自下上升之樞，即由內轉外之樞也。蓋板油之膜，原上與膈膜相連，外邪至此，不能透膜而出，遂緣板油之膜上升至膈，直欲透膈膜而上出，是以少陽之病多數喜嘔也，此乃病機之上越也。方中重用柴胡，正所以助少陽之樞轉以引邪外出也。猶恐其樞轉之力或弱，故又助以人參，以厚其上升之力，則少陽之邪直能隨少陽之氣透膈上出矣。用半夏者，因其生當夏半，能通陰陽、和表裡，且以病本喜嘔，而又升以柴胡、助以人參，少陽雖能上升，恐胃氣亦因之上逆，則欲嘔之證仍難愈，用半夏協同甘草、薑、棗降胃兼以和胃也。用黃芩者，以其形原中空，故善清軀殼之熱，且亦以解人參之偏熱也。

小柴胡湯證，原忌發汗，其去滓重煎者，原所以減柴胡發表之力，欲其但上升而不外達也。乃《太陽篇》一百零三節，服小柴胡湯後，竟有發熱汗出之文，讀《傷寒論》者，恆至此而生疑，注疏家亦未見有詳申其義者，今試錄其原文細研究之。

《傷寒論》原文「凡柴胡湯證而下之，若柴胡證不罷者，復與柴胡湯，必蒸蒸而振，卻發熱汗出而解」。

服小柴胡湯，以引少陽之邪透膈上出而無事出汗，原為小柴胡湯證治法之正則。然藥力之上升透膈頗難，必賴其人之正氣無傷，藥借正氣以營運之而後可以奏效。至誤下者，足少陽之邪多散漫於手少陽三焦脂膜之中，仍投以小柴胡湯，其散漫於手少陽者，遂可借其和解宣通之力，達於太陽而汗解矣。其留於脅下板油中者，因誤降傷氣，無力上達，亦遂借徑於手少陽而隨之汗解，故於汗出上特加一卻字，言非發其汗而卻由汗解，此乃因誤下之後而使然，以明小柴胡湯原非發汗之藥也。其汗時必發熱蒸蒸而振者，有戰而後汗意也。蓋少陽之病由汗解，原非正路，而其留於脅下之邪作汗解尤難，乃至服小柴胡湯後，本欲上透膈膜，因下後氣虛，不能由上透出，而其散漫於手少陽者，且又以同類相招，遂於蓄極之時而開旁通之路，此際幾有正氣不能勝邪氣之勢，故汗之先必發熱而振動，此小柴胡湯方中所以有人參之助也。是以愚用此方時，於氣分壯實者，恆不用人參，而於誤服降藥後及氣虛者，則必用人參也。

人身之膜原，無處不相聯繫，女子之胞室亦膜也。其質原兩膜相合，中為夾室，男女皆有，男以化精，女以通經，故女子之胞室亦曰血室。當其經水初過之時，適有外感之傳經者乘虛襲入，致現少陽證病狀，亦宜治以小柴胡湯，《傷寒論》中亦曾詳論之矣。

《傷寒論》原文「婦人中風，七、八日續得寒熱，發作有時，經水適斷者，此為熱入血室。其血必結，故使如瘧狀，發作有時，小柴胡湯主之」。

唐容川注曰「邪在表裡之間，只能往來寒熱而不發作有時。惟瘧證邪客風府，或瘧母結於脅下膜油之中，衛氣一日一周，行至邪結之處欲出不得，相爭為寒熱，所以發作有時也。夫衛氣者，發於膀胱水中達出血分，血為營，氣為衛，此證熱入血室，在下焦膜網之中，其血必結，阻其衛氣，至血結之處相爭則發寒熱，衛氣已過則寒熱止，是以發作有時，與瘧無異。原文故使二字，明言衛氣從膜中出，血結在膜中，故使衛氣不得達也。用柴胡透達膜隔而愈，知熱入血室在膜中，即知瘧亦在膜中矣」。

傷寒之病既自陽明傳少陽矣，間有遵少陽之法治之，其證復轉陽明者，此雖僅見之證，亦宜詳考治法。

《傷寒論》原文「服柴胡湯已，渴者屬陽明，以法治之」。

喻嘉言曰「風寒之邪，從陽明而傳少陽，起先不渴，裡證未具，及服小柴胡湯已，重加口渴，則邪還陽明，而當調胃以存津液矣。然不曰攻下，而曰以法治

之，意味無窮。蓋少陽之寒熱往來，間有渴證，倘少陽未罷而恣言攻下，不自犯少陽之禁乎？故見少陽重轉陽明之證，但云以法治之，其法維何？即發汗利小便已，胃中躁煩，實大便難之說也。若未利其小便，則有豬苓、五苓之法，若津液熱熾，又有人參白虎之法，仲景圓機活潑，人存政舉，未易言矣」。

按：少陽證，不必皆傳自陽明也。其人若膽中素有積熱，偶受外感，即可口苦、心煩、寒熱往來，於柴胡湯中加生石膏、滑石、生杭芍各六錢，從小便中分消其熱，服後即愈。若其左關甚有力者，生石膏可用至一兩（小柴胡湯證宜加石膏者甚多，不但此證也），自無轉陽明之虞也。

按：小柴胡湯本為平和之劑，而當時醫界恆畏用之，忌柴胡之升提也。即名醫若葉天士，亦恆於當用柴胡之處避而不用，或以青蒿代之。誠以古今之人，稟賦實有不同，古人稟質醇厚，不忌藥之升提，今人體質多上盛下虛，上焦因多有浮熱，見有服柴胡而頭疼目眩者，見有服柴胡而齒齦出血者，其人若素患吐血及腦充血證者，尤所忌服。至愚用小柴胡湯時，恆將原方為之變通，今試舉治驗之數案以明之。

同莊張月樓，少愚八歲，一方之良醫也。其初習醫時，曾病少陽傷寒，寒熱往來，頭疼發熱，心中煩而喜嘔，脈象弦細，重按有力。愚為疏方調治，用柴胡四錢，黃芩、人參、甘草、半夏各三錢，大棗四枚，生薑三大片，生石膏一兩，俾煎湯一大盅服之。月樓疑而問曰「此方乃小柴胡湯外加生石膏也，按原方中份

量，柴胡半斤以一兩折為今之三錢計之，當為二兩四錢，復三分之，當為今之八錢，今方中他藥皆用其原份量，獨柴胡減半，且又煎成一盅服之，不復去滓重煎，其故何也？弟初習醫，未明醫理，願兄明以教我也！」答曰「用古人之方，原宜因證、因時，為之變通，非可膠柱鼓瑟也。此因古今氣化，略有不同，即人之稟賦遂略有差池，是以愚用小柴胡湯時，其份量與藥味，恆有所加減。夫柴胡之性，不但升提，實原兼有發表之力，古法去滓重煎者，所以減其發表之力也。今於方中加生石膏一兩以化其發表之力，即不去滓重煎，自無發表之虞，且因未經重煎，其升提之力亦分毫無損，是以止用一半，其力即能透隔上出也。放心服之，自無差謬。月樓果信用愚言，煎服一劑，諸病皆愈。」

又治鄰村劉姓婦人，得傷寒少陽證，寒熱往來無定時，心中發熱，嘔吐痰涎，連連不竭，脈象沉弦。為開小柴胡湯原方，亦柴胡減半用四錢，加生石膏一兩，雲苓片四錢。有知醫者在座，疑而問曰「少陽經之證，未見有連連吐粘涎不竭者，今先生用小柴胡湯，又加石膏、茯苓，將勿不但為少陽經病，或又兼他經之病乎？」答曰「君之問誠然也，此乃少陽病而連太陰也。少陽之去路原為太陰之經，太陰在腹為濕土之氣，若與少陽相並，則濕熱化合，即可多生粘涎，故於小柴胡湯中加石膏、茯苓，以清少陽之熱，即以利太陰之濕也」。知醫者聞之，甚為歎服。遂將此方煎服，兩劑痊愈。

在遼寧曾治一婦人，寒熱往來，熱重寒輕，夜間恆作語，其脈沉弦有力。因憶《傷寒論》謂「婦人熱入血室證，晝日明瞭，暮則語」，遂細詢之，因知其初受外感三四日，月信忽來，至月信斷後，遂變斯證。據所云云，知確為熱入血室，是以前脈沉弦有力也。遂為開小柴胡原方，將柴胡減半，外加生黃耆二錢、川芎錢半，以升舉其邪之下陷，更為加生石膏兩半，以清其下陷之熱，將小柴胡如此變通用之，外感之邪雖深陷，實不難逐之使去矣。將藥煎服一劑，病癒強半，又服一劑痊愈。

按：熱入血室之證，其熱之甚者，又宜重用石膏二三兩以清其熱，血室之中，不使此外感之熱稍有存留，始無他虞。愚曾治有血室潰爛膿血者數人，而究其由來，大抵皆得諸外感之餘，其為熱入血室之遺恙可知矣。蓋當其得病之初，醫者縱知治以小柴胡湯，其遇熱之劇者，不知重用石膏以清血室之熱，遂致釀成危險之證，此誠醫者之咎也。醫者有治熱入血室之證者，尚其深思愚言哉。



少陽病大柴胡湯證

柴胡湯證，有但服小柴胡不能治癒，必治以大柴胡湯始能治癒者，此病欲借少陽之樞轉，外出而阻於陽明之闔，故宜於小柴胡湯中兼用開降陽明之品也。

《傷寒論》原文「太陽病，過經十餘日，反二、三下之，後四、五日柴胡證仍在者，先與小柴胡。嘔不止，心下急，鬱鬱微煩者，為未解也，與大柴胡湯下之則愈」。

【大柴胡湯方】

柴胡半斤，黃芩三兩，芍藥三兩，半夏半升洗，生薑五兩切，枳實四兩炙，大棗十二枚擘。上七味，以水一斗二升，煮取六升，去滓再煎，溫服一升，日三服。一方用大黃二兩。

陳修園曰「此方若不加大黃，恐不能為大柴胡湯」，此乃少陽之樞並於陽明之闔，故用大黃以調胃。

陳古愚曰「凡太陽之氣逆而內干，必藉少陽之樞轉而外出者，仲景名為柴胡證。但小柴胡證心煩，或胸中煩，或心下悸，重在於脅下苦滿，而大柴胡證，不在於脅下，而在心下，曰心下急，鬱鬱微煩，曰心下痞硬，以此為別。小柴胡證，曰喜嘔，曰或胸中煩而不嘔，而大柴胡證，不但嘔而且嘔吐，不但喜嘔而且嘔不止，又以此為別。所以然者，太陽之氣不從樞外出，反從樞內入，干於君主之分，

視小柴胡證頗深也。方用芍藥、黃芩、枳實、大黃者，以病勢內入，必取苦泄之品，以解在內之煩急也。又用柴胡、半夏以啟一陰一陽之氣，生薑、大棗以宣發中焦之氣。蓋病勢雖已內入，而病情仍欲外達，故制此湯還藉少陽之樞而外出，非若承氣之上承熱氣也」。

愚按：此方無大黃者非原方，即加大黃亦疑非原方，以其病當屢下之餘，雖柴胡證仍在，其氣分必有傷損，況又減去人參，復大黃、枳實並用，既破其血，又破其氣，縱方中有柴胡，猶能治其未罷之柴胡證乎？蓋大黃雖為攻下之品，然偏於血分，仍於氣分無甚傷損，即與柴胡無甚齟齬，至枳實能損人胸中最高之氣，其不宜與柴胡並用明矣。愚想此方當日原但加大黃，後世用其方者，畏大黃之猛烈，遂易以枳實，迨用其方不效，不得不仍加大黃，而竟忘去枳實，此為大柴胡或有大黃或無大黃，以致用其方者恆莫知所從也。以後凡我同人，有用此方者，當以加大黃去枳實為定方矣。究之，古今之氣化不同，人身之強弱因之各異，大柴胡湯用於今日，不惟枳實不可用，即大黃亦不可輕用，試舉兩案以明之。

邑諸生劉干臣，愚之契友也，素非業醫而喜與愚研究醫學，其女適邑中某氏，家庭之間，多不滿意，於季秋感冒風寒，延其近處醫者治不愈。干臣邀愚往診，病近一旬，寒熱往來，其胸中滿悶煩躁皆甚劇，時作嘔吐，脈象弦長有力，愚語干臣曰「此大柴胡湯證也，從前醫者不知此證治法，是以不愈」。干臣亦以愚言為然，遂為疏方，用柴胡四錢，黃芩、芍藥、半夏各三錢，生石膏兩半碎，竹茹

四錢，生薑四片，大棗四枚，俾煎服。干臣疑而問曰「大柴胡湯原有大黃、枳實，今減去之，加石膏、竹茹，將勿藥力薄弱難奏效乎？」答曰「藥之所以能愈病者，在對證與否，不在其力之強弱也，宜放膽服之，若有不效，余職其咎」。病人素信愚，聞知方中有石膏，亦願急服，遂如方煎服一劑，須臾覺藥有推蕩之力，胸次頓形開朗，煩躁嘔吐皆愈。干臣疑而問曰「余疑藥力薄弱不能奏效，而不意其奏效更捷，此其理將安在耶？」答曰「凡人得少陽之病，其未病之先，肝膽恆有不舒，木病侮土，脾胃亦恆先受其擾。迨其陽明在經之邪，半入於府，半傳於少陽，於斯陽明與少陽合病，其熱之人於府中者，原有膨脹之力，復有肝膽以擾之，其膨脹之熱，益逆行上干而凌心，此所以煩躁與脹滿並劇也。小柴胡湯去人參原可舒其肝膽，肝膽既舒，自不復擾及脾胃，又重用石膏，以清入府之熱，俾其不復膨脹上干，則煩躁與滿悶自除也。況又加竹茹之開胃止嘔者以輔翼之，此所以奏效甚捷也。此誠察於天地之氣化，揆諸生人之稟賦，而有不得不為變通者矣」。干臣聞之，甚為嘆服曰「聆此妙論，茅塞頓開，祝我良多矣」。

又治一人，年逾弱冠，稟賦素羸弱，又專心醫學，昕夕研究，頗費神思。偶於初夏，往邑中辦事，因受感冒病於旅邸，迎愚診視，適愚遠出，遂求他醫治療，將近一旬，病猶未癒。時適愚自他處旋里，路經其處，聞其有病，停車視之，正值其父亦來看視，見愚喜甚，蓋其人亦略識醫學，素深信愚者也。時正為病人煎藥，其父正為病人煎藥，視其方乃係發表之劑，及為診視，則白虎湯證也。囑其

所煎之藥，千萬莫服。其父求為疏方，因思病者稟賦素弱，且又在勞心之餘，若用白虎湯原宜加人參，然其父雖信愚，而其人實小心過度，若加人參，石膏必須多用，或因此不敢徑服，況病者未嘗汗下，且又不渴，想但用白虎湯不加人參亦可奏效。遂為開白虎湯原方，酌用生石膏二兩，其父猶嫌其多。愚曰：「此因君平素小心特少用耳，非多也。」又因脈有數象，外加生地黃一兩以滋其陰分，囑其煎湯兩盅，分兩次溫飲下，且囑其若服後熱未盡退，其大便不滑瀉者，可即原方仍服一劑。迨愚旋里後，其藥止服一劑，熱退十之八九，雖有餘熱未清，不敢再服。遲旬日大便燥結不下，兩腿微腫，擬再迎愚診視，適有其友人某，稍知醫學，謂其腿腫係為前次重用生石膏二兩所傷。其父信友人之言，遂改延他醫，見其大便燥結，投以降下之劑，方中重用大黃八錢，將藥服下，其人即不能語矣。其父見病勢垂危，急遣人迎愚，未及診視而亡矣。夫此證之所以便結腿腫者，因其餘熱未清，藥即停止也。乃調養既失之於前，又誤藥之於後，竟至一誤再誤，而不及挽救，使其當時不聽其友之盲論，仍迎愚為診治，或再投以白虎湯，或投以白虎加人參湯，將石膏加重用之，其大便即可因服涼潤之藥而通下，大便既通，小便自利，腿之腫者，不治自愈矣。就此案觀之，則知大柴胡湯中用大黃，誠不如用石膏也（重用白虎湯即可代承氣，曾於前節論承氣湯時詳言之）。蓋愚當成童時，醫者多篤信吳又可，用大劑承氣湯以治陽明府實之證，莫不隨手奏效，及愚業醫時，從前之篤信吳又可者，竟恆多僨事，此相隔不過十餘年耳，況漢季至今

千餘年哉，蓋愚在醫界頗以善治寒溫知名，然對於白虎湯或白虎加人參湯，旬日之間必用數次，而對於承氣湯恆終歲未嘗一用也。非敢任意左右古方，且僭易古方，此誠為救人計而甘冒不韙之名。醫界同人之覽斯編者尚其諒之。

〈少陽篇〉三陽合病之治法

〈少陽篇〉有三陽並病之證，提綱中詳其病狀而未列治法，此或有所遺失歟？抑待後人遇此證自為擬方歟？愚不揣固陋，本欲擬一方以補之，猶恐所擬者未必有效，今試即其所載病狀以研究其病情，再印徵以生平所治之驗案，或於三陽合病之治法，可得其彷彿歟。

《傷寒論》原文「三陽合病，脈浮大，上關上，但欲眠睡，目合則汗」。

唐容川曰「少陽半表半裡，若從半表而外合於陽明太陽，則為三陽合病。其脈亦應三陽主外之象而浮大上關上，則寸更浮大皆主在表也。三陽經皆起於目，而三焦膜腠上通耳目空竅，聲音從耳入，耳壅塞則聾，神魂從目出，目沉迷則但欲眠。蓋邪熱在裡，則神魂不得人而虛煩不眠，邪熱在表，則神魂不得出而但欲眠。神魂者，陽也，與衛氣為體，神魂內返則衛氣不出而衛外，故目合則汗。其汗之道路，又從膜而蒸其肌肉，從肌肉而滲出皮毛，總見少陽三焦膜網外通二陽，凡一切由外入內、由內出外之理皆可知矣。即太陽、陽明關於少陽膜間之證，亦從可知矣。少陽證所以不詳者，凡二陽兼證，已具〈太陽〉、〈陽明篇〉中，故不具論，讀者當會其通也」。

陶華氏謂「此節所言之病，當治以小柴胡加葛根、芍藥」，而愚對於此證有治驗之案二則，又不拘拘於小柴胡湯中加葛根、芍藥也。試詳錄二案於下，以質諸醫界。

一人年過三旬，於初春患傷寒證，經醫調治不愈。七八日間延為診視，頭疼，周身發熱，噁心欲吐，心中時或煩躁，頭即有汗而身上無汗，左右脈象皆弦，右脈尤弦而有力，重按甚實，關前且甚浮。即此脈論，其左右皆弦者，少陽也，右脈重按甚實者，陽明也。關前之脈浮甚者，太陽也，此為三陽合病無疑。其既有少陽病而無寒熱往來者，緣與太陽、陽明相並，無所為往，無所為來也。遂為疏方：生石膏、玄參各一兩，連翹三錢，茵陳、甘草各二錢，俾共煎湯一大盅頓服之，將藥服後，俄頃汗出遍體，近一點鐘，其汗始竭，從此諸病皆愈。其兄頗通醫學，疑而問曰「此次所服藥中分毫無發表之品，而服後竟由汗解而愈者，何也？」答曰「出汗之道，在調劑其陰陽，聽其自汗，非可強發其汗也，若強發其汗，則汗後恆不能愈，且轉至增劇者多矣。如此證之三陽相並，其病機本欲借徑於手太陰之絡而外達於皮毛，是以右脈之關前獨浮也，乃因其重按有力，知其陽明之積熱，猶團結不散，故用石膏、玄參之涼潤者，調劑其燥熱，涼熱化合，自能作汗，又少加連翹、茵陳（可代柴胡）以宣通之，遂得盡隨病機之外越者，達於皮毛而為汗解矣，此其病之所以愈也」。

又治一人，年近三旬，因長途勞役，感冒甚重，匆匆歸家，臥床不起。經醫診治，半月病益加劇。及愚視之，見其精神昏憤，語不休，肢體有時惕動不安，其兩目直視，似無所見，其周身微熱，而間有發潮熱之時，心中如何，詢之不能自言，其大便每日下行皆係溏糞，其脈左右皆弦細而浮，數逾六至，重按即無。

其父泣而問曰「延醫數位，皆不為出方，因此後事皆備，不知猶可救否？」余生平止此一子，深望先生垂憐也。愚憫其言詞慟切，慨然許為救愈。時有其同村醫者在座，疑而問曰「此證之危險已至極點，人所共見，先生獨慨然謂其可治，然不知此證果係何病，且用何方藥治之？」答曰「此《傷寒論》〈少陽篇〉所謂三陽合病，然《傷寒論》中所言者，是三陽合病之實證，而此症乃三陽合病之虛證，且為極虛之證。凡三陽合病以病已還表，原當由汗而解，此病雖虛，亦當由汗而解也。醫者聞愚言，若深訝異曰「病虛若此，猶可發汗乎？且據何見解而知謂為三陽合病乎？」答曰「此證為三陽合病，確有徵據。此證之肢體惕動，兩目直視，且間發潮熱者，少陽也；精神昏憤、語不休者，陽明也；其脈弦而甚浮者，乃自少陽還太陽也，是以謂之三陽合病也。《傷寒論》〈少陽篇〉所謂三陽合病，然《傷寒論》中所言者，是三陽合病之實證，而此症乃三陽合病之虛證，且為極虛之證。凡三陽合病以病已還表，原當由汗而解，此病雖虛，亦當由汗而解也。特以脈數無根，真陰大虧，陽升而陰不能應，是以不能化合而為汗耳。治此證者，當先置外感於不問，而以滋培其真陰為主，連服數劑，俾陰分充足，自能與陽氣化合而為汗，汗出而病即愈矣。若但知病須汗解，當其脈數無根之時，即用藥強發其汗，無論其汗不易出也，即服後將汗發出，其人幾何不虛脫也」。愚遂為開生地黃、熟地黃、生山藥、大枸杞各一兩，玄參、沙參、淨萸肉各五錢，煎湯一大碗，分兩次溫飲下。此藥一日夜間連進兩劑。翌晨再診其脈，不足六至，精神



亦見明瞭，自服藥後大便未行，遂於原方中去萸肉，加青連翹二錢，服後周身得汗，病若失。

太陰病提綱及意義

病由少陽而愈者，借少陽之樞轉而外出也。乃有治不如法，其病不能借少陽之樞轉外出，而轉由腔上之膜，息息透入腹中，是由少陽而傳太陰也。夫病既傳於太陰，其病情必然變易，自當另議治法，是則太陰經發現之病狀與其治法，又當進而研究矣。

《傷寒論》原文「太陰之為病，腹滿而吐，食不下，自利益甚，時腹自痛，若下之，必胸中結硬」。

脾為太陰之府，其處重重油脂包裹，即太陰之經也。蓋論其部位，似在中焦之內，惟其處油脂獨厚於他處，是太陰之經雖與三焦相連，而實不與三焦相混也。且《難經》謂脾有散膏半斤，即西人所謂甜肉汁，原係胰子團結而成，方書謂係脾之副臟，其分泌善助小腸化食，實亦太陰經之區域也。為其經居於腹之中間，是以腹滿為太陰經之的病。其吐食、自利者，此經病而累及於府，脾病不能運化飲食，是以吐利交作也。其腹痛者，因病在太陰，中焦鬱滿而氣化不通也。下之必胸中結硬者，因下後脾氣下陷，不能散精以達於肺（《內經》謂脾氣散精，以達於肺），遂致鬱於胸中而為結硬也。

按：此節提綱甚詳，而未言治法，及下節匯通觀之，可自得其治法矣。《傷寒論》原文「太陰中風，四肢煩疼，陽微陰澀而長者，為欲愈」。

唐容川曰「此節言太陰中風，脈若陽大而陰滑，則邪盛內陷矣。今陽不大而微，陰澀而又見長者，乃知微澀是邪不盛，不是正氣虛。長是正氣足，不嫌其微澀，故為欲愈也」。

一人，年甫弱冠，當仲春之時，因伏氣化熱竄入太陰，腹中脹滿，心中煩躁，兩手腫疼，其脈大而濡，兩尺重按頗實。因思腹中者太陰之部位也，腹中脹滿乃太陰受病也，太陰之府為脾，脾主四肢，因伏氣化熱竄入太陰，是以兩手腫疼也，其兩足無恙者，因竄入太陰者，原係熱邪，熱之性喜上行，是以手病而足不病也。為其所受者熱邪，是以覺煩躁也。因憶《傷寒論》〈太陰篇〉有謂「太陰中風，四肢煩疼，陽微陰澀而長者，為欲愈」，今此證所現之脈，正與欲愈之脈相反，是不得不細商治法也。為疏方，用生萊菔子、生雞內金各三錢以開其脹滿，滑石、生杭芍各六錢以清其煩躁，青連翹、生蒲黃各四錢以愈其兩手腫疼，按方煎服兩劑，諸病皆愈。誠以太陰之病原屬濕熱，其濕熱之鬱蒸於上者，服此湯後得微汗而解，其濕熱之陷溺於下者，服此湯後亦可由小便分利而解矣。若執此案之方以治前節所言之病，於方中加法半夏三錢，則在上之吐可止，再加生山藥八錢，下焦之利亦可愈，至方中之連翹、蒲黃，不但能治手腫疼，即腹中作痛服之亦能奏效，將方中藥味，略為增加以治前節之病，亦可隨手治癒也。

太陰病桂枝湯證

太陰之病，有時可由汗解者，然必須病機有外越之勢，原非強發其汗也。

《傷寒論》原文「太陰病，脈浮者，可發汗，宜桂枝湯」。

脈浮者，乃太陰之病機外越，原可因其勢而導之，故可服桂枝湯以發其汗也。若其脈之浮而有力者，宜將桂枝減半（用錢半），加連翹三錢，蓋凡脈有浮熱之象者，過用桂枝，恆有失血之虞，而連翹之性涼而宣散，凡遇脈象之浮而有力者，恆得之即可出汗，故減桂枝之半而加之以發汗也。恐其汗不出者，服藥後亦可啜粥，若間有太陰腹滿之本病者，可加生萊菔子三錢，蓋萊菔子生用，其辛辣之味不但可以消脹滿，又可助連翹發汗也。

太陰病宜四逆輩諸寒證

太陰自少陽傳來原無寒證，乃有其臟本素有寒積，經外感傳入而觸發之，致太陰外感之證不顯，而惟顯其內蓄之寒涼以為病者，是則不當治外感，惟宜治內傷矣。

《傷寒論》原文「自利不渴者，屬太陰，以其臟有寒故也。當溫之，宜四逆輩」。

陳修園曰「自利者，不因下而利也。凡利則津液下注，多見口渴，惟太陰濕土之為病不渴，至於下利者當溫之，而渾言四逆輩，所包括之方原甚廣」。

王和安謂「溫其中兼溫其下宜四逆，但溫其中宜理中、吳茱萸，寒結宜大建中湯。濕宜真武湯，渴者宜五苓散，不渴而滑宜赤石脂禹餘糧湯」，而愚則謂甘草乾薑湯、乾薑附子湯、茯苓四逆湯諸方，皆可因證選用也。

太陰病壞證桂枝加芍藥湯及桂枝加大黃湯證

太陰之證，不必皆由少陽傳來也，又間有自太陽傳來者。然自少陽傳來，為傳經次第之正傳，自太陽傳來則為誤治之壞證矣。

《傷寒論》原文「本太陽病，醫反下之，因而腹滿時痛者，屬太陰也，桂枝加芍藥湯主之。大實痛者，桂枝加大黃湯主之」。

張拱端曰「太陰脾臟通體連於油網之上，網中之膏油脾所主也。油網布腹中，邪入太陰之網油，故腹滿時痛，網油透出軀殼，是生肥肉，稱肌肉，肌肉與太陽之營衛相接於外，故太陽之邪熱可由肌肉而入太陰脾也。用桂枝加芍藥湯，以太陽營衛之陷邪可舉者，有薑、桂調而舉之。不可舉者，重加芍藥之苦以降之，則滿痛可愈。若大實痛者，是膏油受邪過甚，實於其中胰脂化膏之力不足以勝之，故用桂枝加大黃湯，倍芍藥苦降之外，更加大黃助胰脂滑利之性以去膏油之實也。然太陰標陰本濕，只有溫汗兩法，原無下法，以太陰主濕，濕能濡，無燥結之可下也，今用下行之大黃者何耶？蓋大黃雖能下行，亦視所用之輕重為變遷，考夫陽明與太陰，俱有滿痛證，觀陽明之承氣湯重用大黃，此處輕用大黃，不獨見藥之輕重有變遷，更可見陽明與太陰之滿痛，其界限又不同。陽明是胃管，胃管內之糟粕，得陽明之燥氣，能使結實不大便而滿痛，故承氣重用大黃以通地道。太陰是脾，脾連油網，在胃管之外網膜膏油中，只能壅水與血而為滿痛，理中湯用白朮、乾薑，燥水濕以散寒也。桂枝加芍藥湯、桂枝加大黃湯，均重用芍藥泄血

分之熱也。而桂枝加大黃，雖用大黃，然分兩輕於諸藥，當從諸藥人於太陰脾之網油，不得由大腸徑過而下也。例如茵陳蒿湯雖用大黃，其茵陳獨多，而大黃隨茵陳利濕熱由小便出，其理可求矣。

張氏此段疏解頗精細，惟於桂枝湯中倍用芍藥之理似欠發揮。蓋當誤下之後，外感之邪固可乘虛而入太陰，究之，脾土驟為降下所傷，肝木即乘虛而侮脾土，腹中之滿而且痛，實由肝脾之相齟齬也。桂枝原為平肝（木得桂則枯，且其味辛屬金，金能制木也）、和脾（氣香能醒脾，辛溫之性，又善開脾瘀）之聖藥，而輔以芍藥、甘草、薑、棗，又皆為柔肝扶脾之品，是桂枝湯一方，若免去啜粥，即可為治太陰病之正藥也。至於本太陽證，因誤下病陷太陰，腹滿時痛，而獨將方中芍藥加倍者，因芍藥善治腹痛也。試觀仲景用小柴胡湯，腹痛者，去黃芩加芍藥，通脈四逆湯腹痛者，去蔥加芍藥，此明徵也。若與甘草等分同用，為甘草芍藥湯，原為仲景復陰之方，愚嘗用之以治外感雜證、驟然腹痛（須審其腹痛非涼者），莫不隨手奏效。惟其所用之份量，芍藥倍於甘草是為適宜，蓋二藥同用原有化合之妙，此中精微固不易窺測也。且二藥如此並用，大有開通之力，則不惟能治腹痛，且能除腹滿也。惟此方中芍藥加倍為六兩，甘草仍為二兩，似嫌甘草之力薄弱，服後或難速效，擬將甘草亦加重為三兩，應無藥性偏重之弊歟。

【桂枝加芍藥湯方】

桂枝三兩，芍藥六兩，甘草二兩炙，生薑三兩切，大棗十二枚擘。上五味，以水七升，煮取三升，去滓，分溫三服。

【桂枝加大黃湯方】

即前方加大黃二兩。



〈 第 四 卷 〉

少陰病提綱及意義

中焦脂膜團聚之處，脾居其中，斯為太陰，前已言之。而下焦脂膜團聚之處，腎居其中，故名少陰。少陰之府在腎，少陰之經即團聚之脂膜也。為其與中焦團聚之處相連，是以外感之傳遞，可由太陰而傳入少陰也。

《傷寒論》原文「少陰之為病，脈微細，但欲寐也」。

少陰之病，有涼有熱。說者謂「若自太陰傳來，是陽明、少陽之邪順序傳入少陰則為熱證，若外感之邪直中真陰，則為寒證者」，而愚臨證實驗以來，知少陰病之涼者原非直中，乃自太陽傳來，為表裡之相傳，亦為腑臟之相傳（膀胱），因太陽之府相連之脂膜，原與包腎之脂膜相通也。其間有直中者，或因少陰驟虛之時，飲食寒涼而得，此不過百中之一二，其治法原當另商也。至少陰病之熱者，非必自傳經而來，多由伏氣化熱入少陰也。所謂伏氣者，因其素受外寒甚輕，不能即病，其所受之寒氣伏於三焦脂膜之中，阻塞氣化之升降而化熱（氣化因阻塞而生熱，伏氣即可與之相合而化熱），恆因少陰之虛損，伏氣即乘虛而竄入少陰，此乃少陰之熱病初得即宜用涼藥者也。

至無論其病之或涼或熱，而脈皆微細者，誠以脈之跳動發於心，而脈之所以跳動有力者，又關於腎。心腎者，水火之根源也，心腎之氣相濟，則身中之氣化自然壯旺，心腎之氣若相離，身中之氣化遽形衰憊。少陰有病者，其腎氣為外邪遏抑，不能上升以濟心，是以無論病之為涼為熱，其脈象皆微細無力也。其但欲

寐者，因心腎之氣不交，身中之氣化衰憊，精神必然倦懶，是以常常閉目以靜自休息。又因腎氣不能上達以吸引心陽下潛，是以雖閉目休息不能成寐，而為但欲寐之狀也。從前西人之論腎者，惟知為漉水之器，後乃知論腎當取廣義，遂謂副腎髓質（命門督脈）及副腎皮質（胞室）之分泌素，皆於心之跳動有至切之關係，此誠西人之醫學有進步也。然必實徵諸其所分泌者而後知之，是仍囿於跡象，而不知腎中有無形之氣化，與心息息相關者尤切也。

《傷寒論》原文「少陰病，欲吐不吐，心煩，但欲寐，五、六日自利而渴者，屬少陰也。虛故引水自救，若小便色白者，少陰病形悉具，小便白者以下焦虛有寒，不能制水，故令色白也」。

張拱端曰「少陽為陽樞，少陰為陰樞。少陰欲吐不吐者，以少陰有水復有火，水火之氣循環上下不利，故欲吐不吐也。少陽喜嘔者，以內外之氣由焦膜中行，焦膜不利則氣難於出入，是以逆於胃而為嘔，嘔則氣少暢，故喜嘔，此少陰欲吐、少陽喜嘔之所以然也。又太陰、少陰俱有自利證，少陰自利而渴，從少陰本熱之化也。太陰自利不渴，從太陰本濕之化也。若治少陰上焦口渴之實熱，罔顧及下焦下利之虛寒，則下利不止矣，故凡對於水火分病，則當用寒熱之藥分治之。對於水火合病，無妨用寒熱之藥合治之。本論用方，有純於寒，有純於熱，復有寒熱並用者，即此理也。」

謹按：本節未列治法，張氏謂「上有實熱下有虛寒，宜用寒熱之藥」？函問。師答曰「宜用生地一兩，生杭芍五錢，附子二錢，乾薑二錢，細辛一錢，計五味，不宜用石膏」。

高崇勳謹注

《傷寒論》原文「少陰病脈緊，至七、八日自下利，脈暴微，手足反溫，脈緊反去者，為欲解也。雖煩，下利必自愈」。

少陰之中有水有火，腎左右兩枚水也，腎係命門所生之相火，少陰中之火也。外寒自太陽透入少陰，與少陰中之水氣相並，以阻遏其元陽，是以脈現緊象，緊者寒也，乃陰盛陽衰，逼陽不得宣佈之象也。迨陽氣蓄之既久，至七、八日又重值太陽、陽明主氣之候，命門之火因蓄極而暴發，遂迫陰寒自下利外出，脈之緊者亦暴微。蓋脈緊原陽為陰迫，致現弦而有力之象，至暴微是由緊而變為和緩，未必甚微，與緊相較則見其微矣。且其手足反溫，此為元陽已回之兆無疑，治少陰中之寒病者，原以保護其元陽為主，此時或有心煩之病，實因相火暴發，偶有浮越於上者，此益足徵元陽之來復也，是以知其必愈也。

陳修園曰「此言少陰得陽熱之氣而解也。余自行醫以來，每遇將死之證，必以大藥救之，忽而發煩下利，病家怨而更醫，醫家亦詆前醫之誤，以搔不著疼癢之藥居功，余反因熱腸受謗，甚矣，名醫之不可為也」。

愚年少時，初閱《傷寒論淺注》至此，疑修園之言，似近自為掩飾。迨醫學研究既久，又加以臨證實驗，乃知修園之言誠不誣也。後又見常德張拱端所著《傷寒論會參》，亦謂修園之言誠然，且謂余治一人，服藥後下利苦煩，又喜哈哈，似癩非癩，數時病癒，亦與此節煩利自愈一例也。而愚則謂，若遇少陰陰寒險證，欲用藥以回其陽時，不妨預告病家，陽回之後恆現下利心煩之象，自能免病家之生疑也。

萌潮按：數年前余在里處，曾治一少陰寒證，服藥後下利發煩而愈。民國二十二年臘月，在津又治敦慶隆布莊閻戟臨少陰寒證，服茴香、乾薑等藥久不愈，乃詢方於余，俾單服生硫黃如棗大，食前服，每日三次，至五六日忽下利日二三次，駭而問余。余曰「此寒結得硫黃之熱而開，《傷寒論》所謂雖煩，下利必自愈者是也」。後數日利果止，其病亦愈。即此例彼，益知修園、拱端之言不我欺也。

《傷寒論》原文「少陰病，下利，若利自止，惡寒而蜷臥，手足溫者，可治」。唐容川曰「少陰腎中之陽下根於足，上達於手，而充塞於膏膜之中。膏即脾所司也，脾膏陽足則熏吸水穀，不致水穀從腸中直瀉而出。若腎陽不充於脾，而脾土所司之膏油失職，水穀不分，氣陷而崩注是為下利，其腸中水穀泄盡，利止後惡寒蜷臥。若生陽已竭者，則手足厥冷而死，設手足溫者，是腎中生陽尚在，故為可治，白通湯等方是矣」。

張拱端曰「以上三節，俱少陰陰寒之病，前兩節手足溫，第三節自煩欲去衣被，均為陽回之候，均為自愈、可治之證。可見治少陰傷寒以陽為主，不特陰證見陽脈者生，即陰病見陽證亦為易愈。論中惡寒而蜷之蜷字，足供陰寒在內之考察，何也？大凡陰寒之病，俱有屈曲身體之形，其屈曲之理，實關係於督、任二脈，蓋以督統諸陽行於背脊，任統諸陰行於胸腹，陰寒在內屈曲身體者，伸背之陽以抑陰也，陽熱在內直腰張胸者，伸腹之陰以濟陽也。如天氣熱人必張胸，天氣寒人必拘急，觀其伸陽以自救，則蜷之屬於陰寒其理可得矣。故陽盛則作瘧，陰盛則蜷臥，理所必然也。至於自煩欲去衣被，是陰得陽化故為可治」。

張氏論督任相助之理，以釋本節中之蜷臥頗為精細，而愚於張氏所論之外，則更別有會心也。推坎離相濟，陰陽互根之理，人之心腎相交，即能生熱（心腎相交能補助元陽，故能生熱），而心腎之相交每在呼氣外出之時也。蓋當呼氣外出之時，其心必然下降，其腎必然上升（此可默自體驗），此際之一升一降而心腎交矣。是乃呼吸間自然之利益，以為人身熱力之補助也（試觀睡時恆畏冷，以人睡著則呼吸慢，熱力即頓形不足，是明徵也）。人之畏冷身蜷臥者，是其心腎欲相交以生熱也（此中有無思無慮自然而然之天機）。至於病熱，其身恆後挺，是心腎欲相遠，防其相交以助熱也。果參透此中消息，以後天補助先天，不但由此悟卻病之理，更可由此悟養生之理，壽命之悠久固可在把握中也。

《傷寒論》原文「少陰病，吐利，手足不逆冷，反發熱者不死，脈不至者，灸少陰七壯」。

陳修園謂「宜灸太谿二穴」。張拱端謂「亦可灸復溜二穴」，而愚則謂，若先灸太谿二穴，脈仍不應，可再灸復溜二穴，灸時宜兩腿一時同灸。太谿二穴，在足內踝後五分，跟骨上動脈中，復溜二穴，在內踝上二寸，大骨後側陷中，此與太谿同為少陰生脈之源。

少陰病麻黃附子細辛湯證

《傷寒論》原文「少陰病，始得之，反發熱脈沉者，麻黃附子細辛湯主之」。此外感之寒涼，由太陽直透少陰，乃太陽與少陰合病也。為少陰與太陽合病，是以少陰已為寒涼所傷，而外表縱有發熱之時，然此非外表之壯熱，乃惡寒中之發熱耳。是以其脈不浮而沉，蓋少陰之脈微細，微細原近於沉也。故用附子以解裡寒，用麻黃以解外寒，而復佐以辛溫香竄之細辛，既能助附子以解裡寒，更能助麻黃以解外寒，俾其自太陽透入之寒，仍由太陽作汗而解，此麻黃附子細辛湯之妙用也。

【麻黃附子細辛湯方】

麻黃二兩去節，細辛二兩，附子一枚炮去皮破八片。上三味，以水一斗，先煮麻黃，減二升，去上沫，納諸藥，煮取三升，去滓，溫服一升，日三服。

按：方中細辛二兩，折為今之六錢，復三分之一劑中仍有二錢，而後世對於細辛有服不過錢之說，張隱庵曾明辯其非。二錢非不可用，而欲免病家之疑，用一錢亦可奏效。蓋凡宜發汗之病，其脈皆浮，此獨脈沉，而欲發其汗，故宜用細辛輔之，至謂用一錢亦可奏效者，因細辛之性原甚猛烈，一錢亦不為少矣。

按：此方若少陰病初得之，但惡寒不發熱者，亦可用。曾治一少年，時當夏季，午間恣食西瓜，因夜間失眠，遂於食餘當窗酣睡，值東風驟至，天氣忽變寒



涼，因而凍醒，其未醒之先，又復夢中遺精，醒後遂覺周身寒涼抖戰，腹中隱隱作疼，須臾覺疼浸加劇。急迎為診治，其脈微細若無。為疏方：用麻黃二錢，烏附子三錢，細辛一錢，熟地黃一兩，生山藥、淨萸肉各五錢，乾薑三錢，公丁香十粒，共煎湯服之，服後溫覆，周身得微汗，抖戰與腹疼皆愈。此於麻黃附子細辛湯外而復加藥數味者，為其少陰暴虛腹中疼痛也。

少陰病黃連阿膠湯證（附：自訂坎離互根湯方）

《傷寒論》原文「少陰病，得之二、三日以上，心中煩，不得臥，黃連阿膠湯主之」。

二、三日以上，即一日也，合一二三日而渾言之即初得也。細繹其文，是初得即為少陰病，非自他經傳來也。其病既非自他經來，而初得即有熱象者，此前所謂伏氣化熱而竄入少陰者也。蓋凡伏氣化熱之後，恆因薄受外感而猝然發動，至其竄入之處，又恆因其臟腑素有虛損，伏氣即乘虛而入。由斯而論，則此節之所謂少陰病，乃少陰病中之腎虛兼熱者也。夫大易之象，坎上離下為既濟，坎為腎而在上者，此言腎當上濟以鎮心也，離為心而在下者，此言心當下濟以暖腎也。至腎素虛者，其真陰之氣不能上濟以鎮心，心火原有搖搖欲動之機，是以少陰之病初得，腎氣為伏氣所阻，欲上升以濟心尤難，故他病之現象猶未呈露，而心中已不勝熱象之煩擾而不能安臥矣，是以當治以黃連阿膠湯也。

【黃連阿膠湯】

黃連四兩，黃芩一兩，芍藥二兩，雞子黃二枚，阿膠三兩。上五味，以水五升，先煮三味取二升，去滓，納膠烱盡，小冷，納雞子黃，攪令相得，溫取七合，日三服。

黃連味苦入心，性涼解熱，故重用之以解心中發煩，輔以黃芩，恐心中之熱擾及於肺也，又肺為腎之上源，清肺亦所以清腎也。芍藥味兼苦酸，其苦也善降，

其酸也善收，能收降浮越之陽，使之下歸其宅，而性涼又能滋陰，兼能利便，故善滋補腎陰，更能引腎中外感之熱自小便出也。阿膠其性善滋陰，又善潛伏，能直入腎中以生腎水。雞子黃中含有副腎髓質之分泌素，推以同氣相求之理，更能直入腎中以益腎水，腎水充足，自能勝熱逐邪，以上鎮心火之妄動，而心中發煩自愈矣。

或問「提綱明言心中煩而不能臥，夫心與腎共為少陰，使其心之本體熱而生煩，其人亦恆不能安臥，此雖為手少陰，亦可名為少陰病也，何先生獨推本於腎，由腎病而累及於心乎？」答曰「凡曰少陰病者，必脈象微細，開端提綱中已明言之矣。若謂其病發於心，因心本體過熱而發煩，則其脈必現浮洪之象，今其心雖有熱，而脈象仍然微細（若脈非微細而有更改者，本節提綱中必言明此定例也），則知其病之源不在於心而在於腎可知，其心中發煩不得臥，實因腎病而累及於心，更可知也。」

按：此節所言之病，原係少陰病初得無大熱者，故治以黃連阿膠湯已足清其熱也。若其為日既久，而熱浸加增，或其腎經素有蘊熱，因有伏氣之熱激發之，則其熱益甚，以致心腎皆熱，其壯熱充實於上下，又非此湯所能勝任矣。愚遇此等證，則恆用白虎加人參湯，以玄參代知母、山藥代粳米，又加鮮茅根，生雞子黃，莫不隨手奏效，用之救人多矣，因名之為坎離互根湯，詳錄其方之份量及煎法於下。

生石膏（三兩細末）、玄參（一兩）、生懷山藥（八錢）、甘草（三錢）、野臺參（四錢）、鮮白茅根（六兩洗淨切碎）、生雞子黃（三枚）。上共六味，先將茅根煎三四沸，去滓，納餘藥五味，煎湯三盅，分三次溫服，每服一次，調入雞子黃一枚。

方中之意，石膏、人參並用，不但能解少陰之實熱，並能於邪熱熾盛之時立復真陰，輔以茅根，更能助腎氣上升與心火相濟也。至於玄參，性涼多液，其質輕鬆，原善清浮游之熱，而心之煩躁可除，其色黑入腎，又能協同雞子黃以滋腎補陰，俾少陰之氣化壯旺，自能逐邪外出也。

或問「外感之伏氣，恆受於冬日，至春日陽升，隨春日之陽而化熱，是以溫病多有成於伏氣化熱者，至傷寒約皆在於冬日，何亦有伏氣化熱者乎」？答曰「伏氣化熱，原有兩種化法。伏氣冬日受之，伏於三焦脂膜之中，遲至春日隨春日之陽生而化熱，此伏氣化熱之常也。乃有伏氣受於冬日，其所伏之處，阻塞腹內升降之氣化，其氣化因阻塞而生熱，伏氣亦可隨之化熱，此伏氣化熱之變也。迨其化熱之後，或又微受外感而觸發之，其觸發之後，又恆因某經素有虛損，乘虛而竄入其經，此所以傷寒病中亦有伏氣化熱者也。注疏諸家，因不知傷寒中亦有伏氣化熱，故對於少陰病之熱者，而釋之終涉影響也」。

少陰病當灸及附子湯證

《傷寒論》原文「少陰病得之一、二日，口中和，其背惡寒者，當灸之，附子湯主之」。

陳修園曰「此宜灸鬲關二穴以救太陽之寒，再灸關元一穴以助元陽之氣」。王和安曰「腎陽以先天元陽藏於丹田，吸引衛陽內返者為體，以後天水穀津液於水府，被心火下交蒸發外出者為用。茲言口中和而不燥渴，則心陽已衰於上，背惡寒則太陽氣循脊入命門下丹田者亦衰。治宜引天陽由背脊入命門下丹田，溫腎破寒以為之根，故鬲關二穴，在脊七椎下各旁開三寸，為足太陽氣脈所發，灸七壯，由太陽外部引天陽循脊下胞室矣。關元一穴，在臍下三寸，足三陰任脈之會，可灸百壯，從任脈引心陽以下胞室也」。

王氏於此節疏解甚精細，而猶未指出下焦之元陽存於何處？蓋人身有兩氣海，《內經》謂膈上為氣海，此後天之氣海，所藏者宗氣也（即胸中大氣）。哲學家以臍下為氣海，此先天之氣海，所藏者祖氣，即元氣也。人身之元陽，以元氣為體質，元氣即以元陽為主宰，誠以其能斡旋全身則為元氣，能溫暖全身則為元陽，此元陽本於先天，原為先天之君火，以命門之相火為之輔佐者也（此與以心火為君火，以肝中所寄之少陽相火為相火者，有先天後天之分）。至下焦氣海之形質，原為脂膜及胰子團結而中空，《醫林改錯》所謂「形如倒提雞冠花者」是也。人生結胎之始，先生此物，由此而下生督脈，上生任脈，以生全身，故其處最為重

要之處，實人生性命之根也。有謂人之元氣、元陽藏貯於胞室者，不知胞室若在女子，其中生瘡潰爛，原可割而去之，若果為藏元氣、元陽之處，豈敢為之割去乎？

《傷寒論》原文「少陰病，身體痛，手足寒，骨節痛，脈沉者，附子湯主之」。

【附子湯方】

附子二枚炮去皮破八片，茯苓二兩，人參二兩，白朮四兩，芍藥三兩。上五味，以水八升，煮取三升，去滓，溫服一升，日三服。

陳古愚曰「論云『少陰病，得之一二日，口中和，其背惡寒者當灸之，宜此湯』，此治太陽之陽虛，不能與少陰之君火相合也。又云『少陰病，身體疼，手足寒，骨節痛，脈沉者，宜此湯』，此治少陰君火內虛，神機不轉也。方中君以生附子二枚，益下焦水中之生陽以達於上焦之君火也。臣以白朮者，以心腎藉中土之氣而交合也。佐以人參者，取其甘潤以濟生附子之大辛，又佐以芍藥者，取其苦降以泄生附子之大毒也。然參、芍皆陰分之藥，雖能化生附子之暴，又恐其掣生附子之肘，當此陽氣欲脫之頃，雜一點陰柔之品，便足害事，故又佐以茯苓之淡滲，使參、芍成功之後，從小便而退於無用之地，不遺餘陰之氣以妨陽藥也。師用此方，一以治陽虛，一以治陰虛，時醫開口輒言此四字，其亦知陽指太陽，陰指少陰，一方統治之理乎」。

張拱端曰「此方中最妙是人參一味，生於陰林濕地，味甘苦而質潤，本於陰也。而發出之苗葉三丫五加，悉為陽數，可知此物從陰出陽，宛如腎水中生陽，用於附子湯中，一則濟附子之熱，一則助附子以生陽，聖方奇妙，不可思議也。前輩將人參或只解為化附子之大辛，或解為補中土，此皆未知仲師用藥之妙義也」。

按：古之人參，即今之黨參，其性原溫，而《本經》謂其微寒者，因神農嘗百草時，原採取其鮮者嘗之，含有自然之鮮漿汁，是以其性微寒，至蒸熟曬乾則變為溫矣，此猶如鮮地黃、熟地黃之性各殊也。即古時用人參，亦恒多剖取鮮者用之，是以古方中之用人參，亦多取其微寒之性，與他藥配合，而後世之篤信《本經》者，猶以人參為微寒，豈未嘗單用人參以試其性之寒熱乎？夫人參原為救顛扶危挽回人命之大藥，醫界同人尚其於人參之性細研究之。

少陰病桃花湯證

《傷寒論》原文「少陰病，下利便膿血者，桃花湯主之」。

《傷寒論》原文「少陰病，二、三日至四、五日，腹痛，小便不利，下膿血者，桃花湯主之」。

少陰之病寒者居多，故《少陰篇》之方亦多用熱藥。此二節之文，未嘗言寒，亦未嘗言熱。然桃花湯之藥，則純係熱藥無疑也。乃釋此二節者，疑下利膿血與小便不利必皆屬熱，遂強解桃花湯中藥性，謂石脂性涼，而重用一斤，乾薑雖熱，而只用一兩，合用之仍當以涼論者。然試取石脂一兩六錢、乾薑一錢煎服，或涼或熱必能自覺，藥性豈可重誤乎？有謂此證乃大腸因熱腐爛致成潰瘍，故下膿血。《本經》謂石脂能消腫去瘀，故重用一斤以治潰瘍，復少用乾薑之辛烈，以消潰瘍中之毒菌。然愚聞之，毒菌生於熱者，惟涼藥可以消之，黃連、苦參之類是也；生於涼者，惟熱藥可以消之，乾薑、川椒之類是也。桃花湯所主之下膿血果係熱毒，何以不用黃連、苦參佐石脂，而以乾薑佐石脂乎？雖乾薑只用一兩，亦可折為今之三錢，雖分三次服下，而病未癒者約必當日服盡。夫一日之間服乾薑三錢，其熱力不為小矣，而以施之熱痢下膿血者，有不加劇者乎？蓋下利膿血原有寒證，即小便不利亦有寒者。注疏諸家疑便膿血及小便不利皆為熱證之發現，遂不得不得於方中藥品強為之解，斯非其智有不逮，實因臨證未多耳。



王和安曰「凡下利皆油膜寒水返注入腸，油寒而脈血之熱力不旺則為洞瀉。油寒錮蔽脈血，鬱熱衝突於油膜中，則為腹痛下墜。要略云『陽證內熱則溢出鮮血，陰證內寒則下紫血如豚肝』。蓋油寒感及脈血，寒瘀而脹裂脈管，則下死瘀之黑血；血熱素盛，被油寒鬱積，熱血脹裂脈管，則下鮮血也。油寒而穀精不能化血，隨水下注，則便中挾有白津油中還流之液，或穀精已化之油，被脈血熱迫奔注人腸，則便中挾有油汁，油汁白血球應化赤血球者，不得純熱之融化，反以暴熱之迫激，雜油血下則為膿血，而知此，則桃花湯之微義可解矣」。

【桃花湯方】

赤石脂一斤（一半全用，一半篩末），乾薑一兩，粳米一升。上三味，以水七升，煮米令熟，去滓，溫服七合，納赤石脂末方寸匕，日三服，若一服愈，餘勿服。

石脂原為土質，其性微溫，故善溫養脾胃。為其具有土質，頗有粘澀之力，故又善治腸下膿血。又因其生於兩石相並之夾縫，原為山脈行氣之處，其質雖粘澀，實兼能流通氣血之瘀滯，故方中重用之以為主藥。至於一半煎湯一半末服者，因凡治下利之藥，丸散優於湯劑，且其性和平，雖重用一斤猶恐不能勝病，故又用一半篩其細末，納湯藥中服之也。且服其末，又善護腸中之膜，不至為膿血凝滯所傷損也。用乾薑者，因此證其氣血因寒而瘀，是以化為膿血，乾薑之熱既善

祛寒，乾薑之辛又善開瘀也。用粳米者，以其能和脾胃，兼能利小便，亦可為治下利不止者之輔佐品也。

或問「大便下膿血之證，多因於熱，此證即為少陰中寒證，何亦下膿血乎？」答曰「提綱之後，曾引王氏一段疏解，君所問之理，中已言明，若心中仍復遊移不敢確信者，可舉愚平素治驗之案以徵實之」。

遼寧陸軍連長何閣臣，年三十許，因初夏在外地多受潮濕，下痢膿血相雜，屢治不愈。後所下者漸變紫色，有似爛炙，雜以脂膜，腹中切痛，醫者謂此因腸中腐敗，故所下如此，若不能急為治癒，則腸將斷矣。閣臣聞之懼甚，遂乘火車急還遼寧，長途辛苦，至家，病益劇，下痢無度，而一日止食稀粥少許。時愚應遼寧軍政兩界之聘在所建立達醫院中施診。閣臣遂來院求為診治，其脈微弱而沉，左三部幾不見，問其心中自覺飲食不能消化，且覺上有浮熱，諸般飲食皆懶下嚥，下痢一晝夜二十餘次，每欲痢時，先覺腹中墜而且疼，細審病因，確係寒痢無疑，其所下者如爛炙，雜以脂膜者，是其腸中之膜，誠然腐敗隨痢而下也。西人謂此證為腸潰瘍，乃赤痢之壞證，最為危險，所用之藥有水銀基製品，而用於此證實有不宜。即愚平素所遇腸潰瘍證，亦恆治以金銀花、旱三七、鴨膽子諸藥，對於此證亦不宜。蓋腸潰瘍證多屬於熱，而此證獨屬於寒，此誠腸潰瘍證之僅見者也。遂俾用生硫黃細末，摻熟麵少許為小丸，又重用生山藥、熟地黃、龍眼肉，煎濃

湯送服，連服十餘劑，共服生硫黃二兩半（日服藥一劑，頭煎次煎約各送服生硫黃八分許），其痢始愈。

按：此證脈微弱而沉，少陰之脈也，下者如爛炙兼脂膜，較下膿血為尤甚矣。使其初得下膿血時，投以桃花湯不即隨手可愈乎？乃至病危已至極點，非桃花湯所能勝任，故仍本桃花湯之義，以硫黃代乾薑（上焦有浮熱者，忌乾薑，不忌硫黃），用生山藥、熟地黃、龍眼肉以代石脂（病人陰虛，石脂能固下不能滋陰，山藥諸藥能固下兼能滋陰），如此變通，仍不失桃花湯之本義，是以多服十餘劑亦能奏效也。至此節之下節，下利不止，下膿血，又添腹痛，小便不利證，亦桃花湯主之。蓋小便不利因寒者亦恆有之，故投以桃花湯亦能愈也。

奉天省公署護兵石玉和，忽然小便不通，入西醫院治療，西醫治以引溺管，小便通出。有頃，小便復存蓄若干。西醫又納以橡皮管，使久在其中，有溺即通出，乃初雖稍利，繼則小便仍不能出，遂來院求為診治。其脈弦遲細弱，自言下焦疼甚且涼甚，知其小便因涼而凝滯也。為擬方用人參、椒目、懷牛膝各五錢，附子、肉桂、當歸各三錢，乾薑、小茴香、威靈仙、甘草、沒藥各二錢。連服三劑，腹疼及便閉皆愈。遂停湯藥，俾日用生硫黃細末錢許分兩次服下，以善其後。方中之義，人參、靈仙並用，可治氣虛小便不利；椒目、桂、附、乾薑並用，可治因寒小便不利，又佐以當歸、牛膝、茴香、沒藥、甘草諸藥，或潤而滑之，或引而下之，或馨香以通竅，或溫通以開瘀，或和中以止疼，眾藥相濟為功，所以

奏效甚速也。觀此小便不利及《傷寒論》少陰症桃花湯後所附下利膿血治驗之案皆為寒證，非熱證也明矣。

少陰病吳茱萸湯證

《傷寒論》原文「少陰病，吐利，手足厥冷，煩躁欲死者，吳茱萸湯主之」。柯韻伯曰「少陰病，吐利、煩躁、四逆者死。四逆者，四肢厥冷兼臂、脛而言也，此云手足是指掌而言，四肢之陽猶在也」。

【吳茱萸湯】

吳茱萸一升湯洗七遍，人參三兩切，生薑六兩切，大棗十二枚擘。上四味，以水七升，煮取二升，去滓，溫服七合，日三服。

陳古愚曰「師於不治之證，不忍坐視，專求陽明，是得絕處逢生之妙，所以與通脈四逆湯，白通加豬膽汁湯三方鼎峙也。論云『食穀欲嘔者屬陽明也，吳茱萸湯主之』。又云『乾嘔吐涎沫頭痛者，吳茱萸湯主之』，此陽明之正方也。或謂吳茱萸降濁陰之氣為厥陰專藥，然溫中散寒，又為三陰並用之藥，而佐以人參、薑、棗，又為胃陽衰敗之神方也」。

周伯度曰「吳茱萸樹高丈餘，皮青綠色，結實梢頭。其氣臊，故得木氣多而用在於肝。葉紫、花紫、實紫，紫乃水火相亂之色。實熟於季秋，氣味苦辛而溫性且烈，是於水火相亂之中，操轉旋撥亂之權，故能入肝伸陽戢陰而辟寒邪。味辛則升、苦則降，辛能散、苦能堅，亦升亦降，亦散亦堅，故上不至極上、下不至極下，第為辟肝中之寒邪而已。食穀欲嘔者，肝受寒邪上攻其胃，不食穀則肝

氣猶舒，食穀則肝不能容而欲嘔，與胃虛之有反胃迥殊，故非吳茱萸湯不治。夫肝邪上攻，則胃病為木乘土，下迫則腎病為子傳母，迨子傳母則吐利交作，而不止一吐矣，少陰自病下利已耳，未必兼吐，吐而利矣，未必兼逆冷煩躁吐利，而且手足逆冷煩躁欲死，非肝邪盛極而何？此時療之，舍吳茱萸湯亦別無他法也」。

按：上兩節之議論，一主胃，一主肝，究之吳茱萸湯之實用，乃肝胃同治之劑也。至於此證煩躁欲死，非必因肝邪盛極，實因寒邪阻塞而心腎不交也。蓋人心腎之氣，果分毫不交，其人即危不旋踵，至於煩躁欲死，其心腎幾分毫不交矣。夫心腎之所以相交者，實賴脾胃之氣上下通行，是以少陰他方中皆用乾薑，而吳茱萸湯中則重用生薑至六兩，取其溫通之性，能升能降（生薑善發汗，是其能升，善止嘔吐，是其能降），以開脾胃凝滯之寒邪，使脾胃之氣上下通行，則心腎自能隨脾胃氣化之升降而息息相通矣。

少陰病苦酒湯證

《傷寒論》原文「少陰病，咽中傷，生瘡，不能語言，聲不出者，苦酒湯主之」。

王和安曰「此西人所謂扁桃炎也。扁桃在咽喉兩旁，中有縮筋，食物入咽，即以收縮作用，壓迫食物下嚥，同時收提氣管，免食物竄入。扁桃體內有分泌腺，由少陰經從心係上夾咽之脈，下通心腎，平人腎臟真氣含液循經達咽，由扁桃腺分泌而出，咽潤則食管滑利易於下食，咽潤則聲帶得其滋養而發聲清澈。今少陰心熱上迫，則扁桃體腫大而喉塞，氣不得出，扁桃之分泌失職，聲帶枯梗，不能語言，久則瘀血結合熱力，脹裂脈管腺管，腐化膿臭，則成喉癰，其因誤食渣滓而刺傷者，亦與喉癰同例」。

【苦酒湯】

半夏洗破如棗核十四枚，雞子一枚去黃，內上苦酒，著雞子殼中。上兩味，納半夏，著苦酒中，以雞子殼著刀環中，安火上，令三沸，去滓，少少含咽之，不瘥，更作三劑。

按：苦酒即醋也，又方中棗核當作棗仁，不然，破半夏如棗核大十四枚，即雞子空殼亦不能容，況雞子殼中猶有雞子清與苦酒乎？古用半夏皆用生者，湯洗七次即用，此方中半夏宜用生半夏先破之，後用湯洗，始能洗出毒涎。

唐容川曰「此節所言生瘡，即今之喉癰、喉蛾，腫塞不得出聲，今有用刀針破之者，有用巴豆燒焦烙之者，皆是攻破之，使不壅塞也。仲景用生半夏正是破之也，余親見治重舌敷生半夏立即消破，即知咽喉腫閉亦能消而破之矣。且半夏為降痰要藥，凡喉腫則痰塞，此仲景用半夏之妙。正是破之又能去痰，與後世刀針、巴豆等方較見精密，況兼蛋清之潤，苦酒之瀉，真妙法也」。



少陰病白通湯證及白通加豬膽汁湯證

《傷寒論》原文「少陰病，下利，白通湯主之」。

【白通湯方】

蔥白四莖，乾薑一兩，附子一枚生用去皮破八片。上三味，以水三升煮取一升，去滓，分溫再服。

下利固係少陰有寒，然實與脾胃及心臟有關，故方中用附子以暖腎，用乾薑以暖脾胃，用蔥白以通心腎之氣，即引心君之火下濟（天道下濟而光明），以消腎中之寒也。

《傷寒論》原文「少陰病，下利脈微者，與白通湯。利不止，厥逆無脈，乾嘔煩者，白通加豬膽汁湯主之。服湯脈暴出者死，微續者生」。

【白通加豬膽汁湯方】

蔥白四莖，乾薑一兩，附子一枚生用去皮破八片，人尿五合，豬膽汁一合。以上三味，以水三升，煮取一升，去滓，納膽汁、人尿，和令相得，分溫再服。若無膽，亦可用。

張令韶曰「脈始於足少陰腎，主於手少陰心，生於足陽明胃。少陰下利脈微者，腎中之生陽不升也，與白通湯以啟下陷之陽，若利不止、厥逆無脈、乾嘔煩者，心無所主、胃無所生、腎無所始也。白通湯三面俱到，加豬膽汁、人尿，調

和後入，生氣俱在，為效倍速，苦鹹合為一家，入咽之頃，苦先入心，即隨鹹味而直交於腎，腎得心君之助，則生陽之氣，又有附子在下以啟之，乾薑從中以接之，蔥白在上以通之，利止厥回，不煩不嘔，脈可微續，危證必仗此大力也。若服此湯後，脈不微續而暴出，燈光回焰，藥亦無如之何矣」。

按：此節較前節所言之病為又重矣，而於白通湯中加人尿、豬膽汁，即可挽回者，此中原有精微之理在也。人尿原含有臟腑自然之生氣，愚友毛仙閣之侄病霍亂，六脈皆閉，兩目已瞑，氣息已無，舁諸床上，仙閣以手掩其口鼻，覺彷彿仍有呼吸，灌水少許，似猶知下嚥。乃急用現接之童便，和硃砂細末數分灌之，須臾頓醒，則人尿之功效可知矣。至於豬膽汁，以人之生理推之，原少陽相火之所寄生，故其味甚苦，此與命門相火原有先後天之分，當此元陽衰微、命門相火將絕之時，而以後天助其先天，西人所謂臟器療法也。且人尿與豬膽汁之性皆涼，加於熱藥之中以為引導，則寒涼凝聚之處自無格拒，此又從治之法也。

其脈暴出者，提綱中以為不治，以其將脫之脈象已現也。而愚臨證數十年，於屢次實驗中，得一救脫之聖藥，其功效遠過於參，而自古至今未有發明，其善治脫者其藥非他，即山萸肉一味大劑煎服也。蓋無論上脫、下脫、陰脫、陽脫、奄奄一息，危在目前者，急用生淨萸肉（藥局中恆有將酒浸萸肉蒸熟者，用之無效）三兩，急火煎濃汁一大碗，連連溫飲之，其脫即止，脫回之後，再用萸肉二兩，生懷山藥一兩，真野臺參五錢，煎湯一大碗，復徐徐溫飲之，暴脫之證約皆

可救愈。想此節所謂脈暴出者用之亦可愈也。夫以愚之管窺蠡測，較之仲師何異，瑩火之比皓月，然吾人生古人之後，貴發古人所未發，不可以古人之才智囿我，實貴以古人之才智啟我，然後能於醫學有進步也。

少陰病真武湯證

《傷寒論》原文「少陰病，二、三日不已，至四、五日，腹痛，小便不利，四肢沉重疼痛，自下利者，此為有水氣。其人或咳，或小便利，或下利，或嘔者，真武湯主之」。

【真武湯方】

茯苓三兩，芍藥三兩，生薑三兩切，白朮二兩，附子一枚炮去皮破八片。上五味，以水八升，煮取三升，去滓，溫服七合，日三服。若咳者，加五味子半升，細辛、乾薑各一兩；若小便利者，去茯苓；若下利者，去芍藥，加乾薑二兩；若嘔者，去附子，加生薑，足前成半斤。

羅東逸曰「真武者，北方司水之神也，以之名湯者，藉以鎮水之義也。夫人一身制水者脾，主水者腎也。腎為胃關，聚水而從其類，倘腎中無陽，則脾之樞機雖運，而腎之關門不開，水即欲行，以無主制，故泛溢妄行而有是證也。用附子之辛溫壯腎之元陽，則水有所主矣。白朮之溫燥，創建中土，則水有所制矣。生薑之辛散，佐附子以補陽，於補水中寓散水之意。茯苓之滲淡，佐白朮以建土，於制水中寓利水之道焉。而尤重在芍藥之苦降，其旨甚微。蓋人身陽根於陰，若徒以辛熱補陽，不少佐以苦降之品，恐真陽飛越矣。芍藥為春花之殿，交夏而枯，用之以極亟收散漫之陽氣而歸根。下利減芍藥者，以其苦降湧瀉也。加乾薑者，以其溫中勝寒也。水寒傷肺則咳，加細辛、乾薑者，勝水寒也。加五味子者，收

肺氣也。小便利者，去茯苓，恐其過利傷腎也。嘔者，去附子倍生薑，以其病非下焦，水停於胃，所以不須溫腎以行水，只當溫胃以散水，且生薑功能止嘔也」。

少陰病通脈四逆湯證

《傷寒論》原文「少陰病，下利清穀，裡寒外熱，手足厥逆，脈微欲絕，身反不惡寒，其人面赤色，腹痛，或乾嘔，或咽痛，或利止脈不出者，通脈四逆湯主之」。

【通脈四逆湯】

甘草二兩炙，附子大者一枚生用去皮破八片，乾薑三兩。上三味，以水三升，煮取一升二合，去滓，分溫再服，其脈即漸而出者愈（非若暴出者之自無而忽有、既有而仍無，如燈火之回焰也）。面赤色者，加蔥九莖；腹中痛者，去蔥，加芍藥二兩；嘔者，加生薑二兩；咽痛者，去芍藥，加桔梗一兩；利止脈不出者，去桔梗，加人參二兩。病皆與方相應者，乃服之。

按：《太陽篇》四逆湯中乾薑兩半，以治汗多亡陽之證。至通脈四逆湯藥味同前，惟將乾薑加倍，蓋因寒盛脈閉，欲借辛熱之力開凝寒以通脈也。面赤者加蔥九莖（權用粗蔥白切上九寸即可），蓋面赤乃陰寒在下，逼陽上浮，即所謂戴陽證也。加蔥以通其上下之氣，且多用同於老陽之數，則陽可下歸其宅矣。而愚遇此等證，又恆加芍藥數錢，蓋芍藥與附子並用，最善收斂浮越之元陽下降也。

《金鑿》注曰「論中扶陽抑陰之劑，中寒陽微，不能外達，主以四逆；中外俱寒，陽氣虛甚，主以附子；陰盛於下，格陽於上，主以白通，陰盛於內，格陽於外，主以通脈，是可知四逆運行陽氣者也，附子溫補陽氣者也，白通宣通上下

之陽者也，通脈通達內外之陽者也。今脈微欲絕，裡寒外熱，是腎中陰盛格陽於外，故主之也。倍乾薑加甘草佐附子，易名通脈四逆湯者，以其能大壯元陽，主持中外，共招外熱，返之於內。蓋此時生氣已離，亡在俄頃，若仍以柔緩之甘草為君，何能疾招外陽，故易以乾薑，然必加甘草、乾薑等分者，恐渙漫之餘，薑附之猛不能安養元氣，所謂有制之師也。若面赤加蔥以通格上之陽，腹痛加芍藥以和在裡之陰，嘔逆加生薑以宣胃，咽痛加桔梗以利經，利不止脈不出氣少者，加參以生元氣而復脈也」。

按：通脈四逆湯，方中甘草亦有作三兩者，故鑒注云云。

少陰病大承氣湯證

《傷寒論》原文「少陰病，自利清水，色純青，心下必痛，口乾燥者，急下之，宜大承氣湯」。

按：此證乃伏氣之熱竄入肝腎二經也。蓋以腎主閉藏，肝主疏泄，腎為二便之關，肝又為腎行氣，茲因伏氣之熱，竄入腎兼竄入肝，則肝為熱助疏泄之力太過，即為腎行氣之力太過，致腎關失其閉藏之用，而下利清水。且因肝熱而波及於膽，致膽汁因熱妄行，隨肝氣之疏泄而下純青色之水。於斯，腎水因疏泄太過而將竭，不能上濟以鎮心火，且肝木不得水氣之涵濡，則在下既過於疏泄，在上益肆其橫恣，是以心下作痛口中乾燥也。此宜急下之，瀉以止瀉，則腎中之真陰可回，自能上濟以愈口中乾燥、心下作痛也。

此節之前有「少陰病得之二，三日，口燥咽乾者，急下之，宜大承氣湯。」及後節「少陰病六、七日，腹脹不大便者，急下之，宜大承氣湯」，想此二節，仲師亦皆言急下，若不急下，當亦若純下青水者，其危險即在目前。若仲師者，宜其為醫中之聖也。

張拱端曰「民國十五年秋季，發生痢疾，見有一男子得痢，利時極其閉迫後重，惟利下清水色青無膿血。醫者均作痢疾，治之不效，余治亦不效，數日即死。後閱至此條，始知為少陰急下之證，最為惡候，非秋痢也、其於秋時常痢中，單現一少陰急下之特別下利甚矣，醫之難於知病也」。



按：少陰病純下青色之水，愚亦未見，然觀張氏所遇之證，治以他藥皆不愈，則宜以大承氣湯下之無疑矣。且此節之前有少陰病得之二三日，口燥咽乾者，急下之，宜大承氣湯。及後節少陰病六七日，腹脹不大便者急下之，宜大承氣湯。想此二節，仲師亦皆言急下，若不急下，當亦若純下青水者，其危險即在目前，若仲師者，宜其為醫中之聖也。

按：方書有奇恆痢，張隱庵謂「係三陽並至，三陰莫當，九竅皆塞，陽氣旁溢，咽乾喉塞痛，並於陰則上下無常，薄為腸澼，其脈緩小遲澀，血溫身熱者死，熱見七日者死」。蓋因陽氣偏盛，陰氣受傷，是以脈小遲澀，此證宜急用大承氣湯瀉陽養陰，緩則無效。夫奇恆痢病，未知所下者奚似，而第即其脈象緩小遲澀，固與少陰病之脈微細者同也。其咽乾喉塞，痛並於陰，又與此節之心下痛、口中乾燥者同也。隱庵謂宜急服大承氣湯，又與此節之急下之宜大承氣者同也。是奇恆痢者，不外少陰下利之範圍，名之為奇恆痢可也，名之為少陰下利亦無不可也。

《傷寒論》原文「少陰病，下利，脈微澀，嘔而汗出，必數更衣，反少者，當溫其上，灸之（注家謂宜灸百會穴）」。

張拱端曰「此節言少陰為陰陽氣血所資生，其生由下而上，以結少陰全篇之義。經云『少陰為樞』，是言少陰之陰陽水火迴圈相生，以少陰為樞紐也。其陰中潛陽，陽中潛陰，上火下水是其體，水火相銜是其用，於卦為坎離，於人身屬先天後天，造化寄在坎離，故又為陰陽所資始，氣血所資生，而其資始資生，悉

由下而上，猶水氣騰而為雲，雲行雨施，而後品物流行也。仲師以下利反少，為陽復於下，取灸之，引生氣上行以結全篇之義，此理放之則彌六合，卷之則退藏於密，非常人所易窺測也」。

厥陰病提綱及意義

傳經之次第，由少陰而厥陰。厥陰者，肝也，肝為厥陰之府，而肝膈之下垂，與包腎之脂膜相連者，即厥陰之經也。為其經與少陰經之脂膜相連，是以由少陰可傳於厥陰。厥者，逆也，又盡也。少陰自少陽、太陰傳來，而復逆行上傳於肝，且經中氣化之相傳至此，又復陰盡而陽生也，是以名為厥陰也。

《傷寒論》原文「厥陰之為病，消渴，氣上撞心，心中疼熱，饑而不欲食，食則吐蛔，下之利不止」。

《內經》謂「厥陰之上，風氣主之，中見少陽」。少陽者，肝中所寄之少陽相火也。為肝中寄有相火，因外感之激發而暴動，是以消渴。相火挾肝氣上衝，是以覺氣上撞心，心中疼且熱也。凡人之肝熱者，胃中亦恆有熱，胃中有熱能化食，肝中有熱又恆欲嘔，是以饑而不欲食。至於腸中感風木兼少陽之氣化，原能生蛔，因病後懶食，腸中空虛，蛔無所養，偶食少許，蛔聞食味則上來，是以吐蛔也。至誤下之利不止者，因肝受外感正在不能疏泄之時（經謂肝主疏泄），適有降下之藥為嚮導，遂至為腎過於行氣（肝行腎之氣）而疏泄不已。

厥陰病烏梅丸證

《傷寒論》原文「傷寒脈微而厥，至七、八日，膚冷，其人躁無暫安時者，此為臟厥，非蛔厥也。蛔厥者，其人當吐蛔，今病者靜，而復時煩者，此為臟寒，蛔上入膈，故煩，須臾復止，得食而嘔，又煩者，蛔聞食臭出，其人當自吐蛔，蛔厥者，烏梅丸主之，又主久利」。

陳修園曰「此借少陰之藏厥托出厥陰之蛔厥，是明托法。節末補出『又主久利』四字，言外見本經厥利相因，取烏梅丸為主，分之為蛔厥一證之專方，合之為厥陰各證之總方，以主久利，而托出厥陰之全體，是暗托法。以厥陰證非厥即利，此方不特可以治厥，而並可以治利。凡陰陽不相順接、厥而下利之證，亦不能舍此而求方。又凡厥陰之變證不一，無論見蟲不見蟲，辨其氣化不拘形跡，皆可統以烏梅丸主之」。

【烏梅丸方】

烏梅三百枚，細辛六兩，乾薑十兩，黃連一斤，當歸四兩，附子六兩去皮炮，蜀椒四兩炒出汗，人參六兩，黃柏六兩，桂枝六兩去皮。上十味，異搗篩，合治之，以苦酒漬烏梅一宿，去核，蒸之五升米下，飯熟，搗成泥，和藥令相得，內臼中，與蜜杵二千下，丸如梧桐子大，先食飲，服十九，日三服，稍加至二十九。禁生冷、滑物、臭食等。

陳元犀曰「通篇之眼目，在『此為臟寒』四字。言見證雖有風木為病，相火上攻，而其臟則為寒。何也？厥陰為三陰，陰之盡也，《周易》震卦，一陽居二陰之下，為厥陰本象。病則陽逆於上，陰陷於下，饑不欲食，下之利不止，是下寒之確徵也。消渴，氣上撞心，心中疼熱，吐蛔，是上熱之確徵也。方用烏梅，漬以苦酒，順曲直作酸之本性，逆者順之，還其所固有，去其所本無，治之所以臻於上理也。桂、椒、辛、附辛溫之品，導逆上之火，以還震卦下一畫之奇，黃連、黃檗苦寒之品，瀉心胸之熱，以還震卦上四畫之偶，又佐以人參之甘寒，當歸之甘溫，乾薑之辛溫，三物合用，能令中焦受氣取汁，而烏梅蒸於米下，服丸送以米飲，無非養中焦之法，所謂『厥陰不治，求之陽明者』此也。此為厥陰證之總方，注家第謂蛔得酸則靜，得辛則伏，得苦則下，猶淺乎測烏梅丸也」。

按：厥陰一篇，病理深邃，最難疏解。注家以經文中有陰陽之氣，不相順接之語，遂以經解經，於四肢之厥逆，即以陰陽之氣不相順接解之，而未有深究其不相順接之故，何獨在厥陰一經者。蓋肝主疏泄，原為風木之臟，於時應春，實為發生之始。肝膈之下垂者，又與氣海相連，故能宣通先天之元氣，以敷佈於周身，而周身之氣化，遂無處不流通也。至肝為外感所侵，其疏泄之力頓失，致臟腑中之氣化不能傳達於外，是以內雖蘊有實熱，而四肢反逆冷，此所謂陰陽之氣不相順接也。至於病多嘔吐者，亦因其疏泄之力外無所瀉，遂至蓄極而上衝胃口，此多嘔吐之所以然也。又胃為肝衝激不已，土為木傷，中氣易瀉，是以間有除中

之病。除中者，脾胃之氣已傷盡，而危在目前也。至於下利亦未必皆因藏寒，其因伏氣化熱竄入肝經，遏抑肝氣太過，能激動其疏泄之力上衝，亦可激動其疏泄之力下注以成下利，然所利者必覺熱而不覺涼也。試舉一治驗之案以明之。

遼寧劉允卿，寓居天津河東，年近四旬，於孟秋得吐瀉證，六日之間勺飲不存，一晝夜間下利二十餘次，病勢危急莫支。延為診治，其脈象微細，重按又似弦長，四肢甚涼，周身肌膚亦近於涼，而心中則甚覺發熱，所下利者亦覺發熱，斷為係厥陰溫病，在《傷寒論》中即為厥陰傷寒（《傷寒論》開端處，曾提出溫病，後則渾名之為傷寒）。惟其嘔吐殊甚，無論何藥，入口即吐出，分毫不能下嚥，實足令醫者束手耳。因問之曰，心中既如此發熱，亦想冰吃否？答曰「想甚，但家中人駁阻不令食耳」。愚曰「此病已近垂危，再如此吐瀉一晝夜，即仙丹不能挽回，惟用冰膏攪生石膏細末服之，可以止吐，吐止後瀉亦不難治矣」。遂立主買冰淇淋若干，攪生石膏細末兩許服之，服後病見愈，可服稀粥少許，下利亦見少。翌日復為診視，四肢已不發涼，身亦微溫，其脈大於從前，心中猶覺發熱，有時仍復嘔吐。俾再用生石膏細末一兩，攪西瓜中服之，嘔吐從此遂愈。翌日再診其脈，熱猶未清，心中雖不若從前之大熱，猶思食涼物，懶於飲食，其下利較前已愈強半。遂為開白虎加人參湯，方中生石膏用二兩，野臺參三錢，用生杭芍六錢以代知母，生山藥六錢以代粳米，甘草則多用至四錢，又加滑石六錢，方中如此加減替代者，實欲以之清熱，又欲以之止利也。俾煎湯兩盅，分兩次溫飲下，

病遂痊愈。此於厥陰溫病如此治法，若在冬令，遇厥陰傷寒之有實熱者，亦可如此治法。蓋厥陰一經，於五行屬木，其性原溫，而有少陽相火寄生其間，則溫而熱矣。若再有伏氣化熱竄入，以激動其相火，原可成極熱之病也。夫石膏與冰膏、西瓜並用，似近猛浪，然以愚之目見耳聞，因嘔吐不止而廢命者多矣，況此證又兼下利乎？此為救人之熱腸所迫，於萬難挽救之中，而擬此挽救之奇方，實不暇計其方之猛浪也。若無冰膏、西瓜時，或用鮮梨切片，蘸生石膏細末服之，當亦不難下嚥而止嘔吐也。

厥陰病白虎湯證

《傷寒論》原文「傷寒，脈滑而厥者，裡有熱，白虎湯主之」。

〈太陽篇〉白虎湯證，脈浮滑是表裡皆有熱也。此節之白虎湯證，脈滑而厥，是裡有熱表有寒也，此所謂熱深厥深也。愚遇此等證，恆先用鮮白茅根半斤切碎，煮四五沸，取湯一大碗，溫飲下，厥回身熱，然後投以白虎湯，可免病家之疑，病人亦敢放膽服藥。若無鮮茅根時，可以藥局中乾茅根四兩代之。若不用茅根時，愚恆治以白虎加人參湯，蓋取人參能助人生發之氣，以宣通內熱外出也。



厥陰病當歸四逆湯及加吳茱萸生薑湯證

《傷寒論》原文「手足厥寒，脈細欲絕者，當歸四逆湯主之。若其人內有久寒者，宜當歸四逆加吳茱萸生薑湯」。

沈堯封曰「叔和釋脈法，細極謂之微，即此之脈細欲絕，即與脈微相渾。不知微者，薄也，屬陽氣虛。細者，小也，屬陰血虛，薄者未必小，小者未必薄也。蓋榮行脈中，陰血虛則實其中者少，脈故小；衛行脈外，陽氣虛則約乎外者怯，脈故薄。況前人用微字，多取薄字意，試問「微雲淡河漢」，薄乎？細乎？故《少陰論》中脈微欲絕，用通脈四逆主治回陽之劑也。此之脈細欲絕，用當歸四逆主治補血之劑也。兩脈陰陽各異，豈堪混釋！」

【當歸四逆湯方】

當歸三兩，桂枝三兩去皮，芍藥三兩，細辛三兩，大棗二十五枚擘，甘草二兩炙，通草二兩。上七味，以水八升，煮取三升，去滓，溫服一升，日三服。

【當歸四逆加吳茱萸生薑湯方】

即前方加吳茱萸二升，生薑半斤切，以水六升、清酒六升，和煮取五升，去滓，分溫五服。

王和安曰「厥陰經氣來自足少陰經，宣於手太陰經，成循環不息之常度。若以血寒自鬱於臟，脈象應有弦凝之徵。今脈細欲絕，可知少陰經氣來源先虛，及

復本經受臟寒之感，則虛寒轉甚，細而欲絕也。治以當歸四逆湯，意在溫肝通鬱，而必以桂枝、白芍疏浚經氣之源，細辛、通草暢達經氣之流，內有凝寒，重加吳萸、生薑，溫經通氣，仍加入原方以全其用，解此，則治經氣之定義可三反矣」。

厥陰病白頭翁湯證

《傷寒論》原文「熱利下重者，白頭翁湯主之」。

【白頭翁湯方】

白頭翁二兩，黃連、黃柏、秦皮各三兩。上四味，以水七升，煮取二升，去滓，溫服一升，不愈更服一升。

陳古愚曰「下重者，即《內經》所謂『暴注下遭，皆屬於熱』之旨也。白頭翁臨風偏靜，特立不撓，用以為君者，欲平走竅之火，必先定搖動之風也。秦皮浸水青藍色，得厥陰風木之化，故用為臣，以黃連、黃柏為佐使者，其性寒能除熱，其味苦又能堅也。總使風木遂其上行之性，則熱利下重自除，風火不相煽而燎原，則熱渴飲水自止」。

《醫宗金鑒》注曰「三陰俱有下利證，自利不渴屬太陰，自利渴屬少陰。惟厥陰下利，屬寒者厥而不渴，下利清穀；屬熱者消渴，下利後重，便利膿血。此熱利下重，乃鬱熱奔逼廣腸、魄門重滯難出。初痢用此法以寒治熱，久痢則宜用烏梅丸，隨所利而從治之，調其氣使之平也」。

按：白頭翁一名獨搖草，後世本草謂其無風自搖，有風反安然不動。愚初甚疑之，草木之中，何曾見有有風不動，無風反自搖者乎？乃後登本邑古城址墓，見其背陰多長白頭翁，細察其狀，乃恍悟其亦名獨搖草之所以然也。蓋此物莖粗

如箬，而高不盈尺，其莖四面生葉與艾葉相似，而其蒂則細而且軟，微有風吹，他草未動而其葉已動，此其無風自搖也。若有大風，其莖因粗而且短，是以不動，而其葉因蒂細軟，順風溜於一邊，無自反之力，亦似不動，此所謂有風不動也。事非親見，又安知本草之誤哉。蓋此物生岡阜之陰而性涼，原稟有陰性，而感初春少陽之氣即突然發生，正與肝為厥陰，而具有升發之氣者同也。為其與肝為同氣，故能升達肝氣，清散肝火，不使肝氣挾熱下迫以成下重也。且其頭生白，葉上亦微有白毛，原兼稟西方之金氣，故又善鎮肝而不使肝木過於橫恣也。至於又加連、柏、秦皮為之佐使，陳氏論中已詳言其義，無庸愚之贅語也。

又按：白頭翁湯所主之熱利下重，當自少陰傳來，不然則為伏氣化熱竄入厥陰，其證雖熱，而仍非外感大實之熱，故白頭翁湯可以勝任。乃有病在陽明之時，其病一半入府，一半由經而傳於少陽，即由少陽入厥陰而為腑臟之相傳。則在厥陰者既可成厥陰熱利之下重，而陽明府中稽留之熱，更與之相助而為虐，此非但用白頭翁湯所能勝任矣。愚遇此等證，恆將白頭翁、秦皮加於白虎加人參湯中，則莫不隨手奏效也。

曾治一中年婦人，於孟春感冒風寒，四、五日間延為診治，其左脈弦而有力，右脈洪而有力，舌苔白而微黃，心中熱而且渴，下利膿血相雜，裡急後重，一晝夜二十餘次，即其左右之脈象論之，斷為陽明、厥陰合併病。有一醫者在座，疑而問曰「凡病涉厥陰，手足多厥逆，此證則手足甚溫何也」？答曰「此其所以與

陽明並病也，陽明主肌肉，陽明府中有熱，是以周身皆熱，而四肢之厥逆，自不能於周身皆熱時外現也。況厥陰之病，即非雜以陽明，亦未必四肢皆厥逆乎？」醫者深躉愚言，與病家皆求速為疏方，遂為立方如下。

生石膏（三兩搗細）、生杭芍（八錢）、生懷山藥（八錢）、野臺參（四兩）、白頭翁（八錢）、秦皮（六錢）、天花粉（八錢）、甘草（三錢）。上藥八味，共煎三盅，分三次溫飲下。

方中之義，是合白虎加人參湯與白頭翁湯為一方，而又因證加他藥也。白虎湯中無知母者，方中芍藥可代知母也。蓋芍藥既能若知母之退熱滋陰，而又善治下利者之後重也。無粳米者，方中生山藥可代粳米也，蓋山藥汁漿濃鬱，既可代粳米和胃，而其溫補之性，又能助人參固下也，至於白頭翁湯中無黃連、黃柏者，因與白虎湯並用，有石膏之寒涼，可省去連、柏也。又外加天花粉者，因其病兼渴，天花粉偕同人參最善生津止渴。將此藥三次服完，諸病皆減三分之二。再診其脈仍有實熱未清，遂於原方中加滑石五錢，利其小便，正所以止其大便，俾仍如從前煎服，於服湯藥之外，又用鮮白茅根半斤煎湯當茶，病遂痊愈。

不分經之病燒棍散證、理中丸證、竹葉石膏湯證

傷寒病六經分治之外，又有不分經之病，附載於傷寒分經之後者，又宜擇其緊要者，詳為詮解，而後學治傷寒者，自能應變無窮也。

《傷寒論》原文「傷寒，陰陽易之為病，其人身體重，少氣，少腹裡急，或引陰中拘攣，熱上衝胸，頭重不欲舉，眼中生花，膝脛拘急者，燒棍散主之」。

【燒棍散方】

婦人中棍近陰處，取燒作灰。上一味，水服方寸匕，日三服，小便即利，陰頭微腫，此為愈矣。婦人病，取男子棍，燒灰服。

張隱庵曰「棍襠，乃陰吹注精之的，蓋取彼之餘氣，卻彼之餘邪，邪毒原從陰入，復使之從陰以出，故曰小便利、陰頭微腫即愈」。

王和安曰「人身正陽充滿，氣血盈溢，對於外邪富有抵抗力，諸邪莫入。交媾時，衝任督三脈氣血之一部頓虛，則有受邪之餘地矣。傷寒新瘥人，病菌在氣血者，雖多從表裡汗下除去，而潛於骨髓者無由發洩，必俟正氣充盈，以白血球捕菌之力，久久搜捕而排泄之，菌邪乃盡。新瘥之人，骨髓中未泄之菌欲泄不能，必乘交媾時以靈能作用隨精發洩，此時乘彼交媾，人三脈頓虛，注射而入，其人虛氣被鬱，自身重少氣。膜中寒燥，自少腹裡急，牽引陰筋為之拘攣。脈中鬱熱積盛上浮，循衝由前上胸，為熱上衝胸。循督由後上腦，為頭重不舉，眼中生花。

其循任脈由內上心，為煩，上口為瘡者較少，以任脈血下行稍資敵禦不如衝督之精血上行之勢順也。但以邪集少腹，鬱阻任脈血，不能下行溫足，必漸至膝脛拘急。此時治法，應審三脈，菌集孰多，鬱熱孰甚，諒以鹿角治督、黃柏治衝、龜板通任，陰攣加荔枝、川棟，筋結加羚羊、犀角，膝脛拘急、眼中生花加牛膝、杏仁，於清熱解鬱中，加菴蓉、車前、土茯苓等利竅，引毒從前陰去。此云燒裊散主之，以裊近陰處，常有餘精流著，取之以燒灰入藥，可引藥力直達精所，泄菌出自前陰，猶治血熱用尿，可引藥力直達血分，引熱泄於尿竅也。陳修園謂，治此證以大劑加人燒裊散易效，誠善讀聖書也。

按：王氏之論甚精細，其論用藥處亦佳，然愚對於此證，又另有作引之藥，可與燒裊散並用，其藥非他，血餘炭是也。蓋血餘原心血所生，為炭服之能自還原化，此證以之作引，有以心濟腎之義也。且其性又善利小便，更可引陰中所受之邪自小便出也。

《傷寒論》原文「大病瘥後，喜唾，久不了了者，胸上有寒，當以丸藥溫之，宜理中丸」。

【理中丸方】

人參、甘草、白朮、乾薑各三兩。上四味，搗篩為末，蜜丸如雞子黃大，以沸湯數合，和一丸，研碎，溫服之，日三服，夜二服，腹中未熱，益至三、四丸，然不及湯。湯法以四物根據兩數切，用水八升，煮取三升，去滓，溫服一升，日

三服。若臍上築者，腎氣動也，去朮，加桂四兩；吐多者，去朮，加生薑三兩；下多者，還用朮；悸者，加茯苓二兩；渴欲飲水者，加朮，足前成四兩半；腹中疼者，加人參，足前成四兩半；寒者，加乾薑，足前成四兩半；腹滿者，去朮，加附子一枚。服湯後如食頃，飲熱粥一升許，微自溫，勿發揭衣被。

此病時服涼藥太過，傷其胃中之陽，致胃陽虛損不能運化脾臟之濕，是以痰飲上溢而喜唾，久不了了也。故方中用人參以回胃中之陽，其補益之力，且能助胃之動加數，自能運化脾中之濕使之下行，而又輔以白朮，能健脾又能滲濕。乾薑以能暖胃，又能助相火以生土。且又加甘草以調和諸藥，使藥力之猛者，得甘草之緩而猛力悉化，使藥性之熱者，得甘草之甘而熱力愈長也。至於方後諸多加減，又皆各具精義，隨諸證之變化，而遵其加減諸法，用之自能奏效無誤也。

《傷寒論》原文「傷寒解後，虛羸少氣，氣逆欲吐者，竹葉石膏湯主之」。

【竹葉石膏湯方】

竹葉二把，石膏一斤，半夏半升洗，麥門冬一升，人參三兩，甘草二兩炙，粳米半升。上七味，以水一斗，煮取六升，去滓，納粳米，煮米熟湯成去米，溫服一升，日三服。

前節是病時過用涼藥，傷其陽分，此節是病時不能急用涼藥以清外感之熱，致耗陰分。且其大熱雖退，仍有餘熱未清，是以虛羸少氣，氣逆欲吐，此乃陰虛不能戀陽之象，又兼有外感之餘熱為之助虐也。故方中用竹葉、石膏以清外感之



熱，又加人參、麥冬協同石膏以滋陰分之虧，蓋石膏與人參並用，原有化合之妙，能於餘熱未清之際立復真陰也。用半夏者，降逆氣以止吐也。用甘草、粳米者，調和胃氣，以緩石藥下侵也。自常情觀之，傷寒解後之餘熱，何必重用石膏，以生地、玄參、天冬、麥冬諸藥，亦可勝任，然而甘寒留邪，可默釀癆瘵之基礎，此又不可不知也。

溫病遺方

《傷寒論》中原有溫病，渾同於六經分篇之中，均名之為傷寒，未嘗明指為溫病也。況溫病之原因各殊，或為風溫，或為濕溫，或為伏氣成溫，或為溫熱，受病之因既不同，治法即宜隨證各異。有謂溫病人手經不入足經者，有謂當分上中下三焦施治者，皆非確當之論，斟酌再四，惟仍按《傷寒論》六經分治乃為近是。

【太陽經】

有未覺感冒，身體忽然酸軟，懶於動作，頭不疼，肌膚不熱，似稍畏風，舌似無苔而色白，脈象微浮，至數如常者，此乃受風甚輕，是以受時不覺也，宜用輕清辛涼之劑發之。

【處方】

薄荷葉三錢，連翹三錢，大蔥白三寸。上藥三味，共煎湯七、八沸，取清湯一大盅溫服下，周身得汗即愈。

薄荷之成分，含有薄荷腦，辛涼芬芳，最善透竅，內而臟腑，外而皮毛，凡有風邪匿藏，皆能逐之外出，惟其性涼，故於感受溫風者最宜。古原名苛，古人少用之，取其苛辣之味以調和菜蔬，是以當漢季時，猶不知以之入藥，是以《傷寒論》諸方未有用薄荷者。自後世視之，不知論世知人，轉謂仲師方中不用薄荷，

是薄荷原非緊要之藥。不然則謂薄荷原係辛涼之品，宜於溫病而不宜於傷寒者，皆非通論也。惟煮湯服之，宜取其輕清之氣，不宜過煎（過煎即不能發汗），是以以之煎湯，只宜七八沸。若與難煎之藥同煎，後入可也。連翹為輕清宣散之品，其發汗之力不及薄荷，然與薄荷同用，能使薄荷發汗之力悠長（曾治一少年受感冒，俾單用連翹一兩，煮兩湯服之，終宵微汗不竭，病遂愈，其發汗之力和緩兼悠長可知）。蔥之形中空，其味微辣微甘，原微具發表之性，以旋轉於營衛之間，故最能助發表之藥以調和營衛也。

有受風較重，不但酸軟懶動，且覺頭疼，周身骨節皆疼，肌膚熱，不畏風，心中亦微覺發熱，脈象浮數似有力，舌苔白厚，宜於前方中去蔥白，加天花粉八錢以清熱，加菊花二錢以治頭疼，惟煎湯時，薄荷宜後入。

有其人預有伏氣化熱，潛伏未動，後因薄受外感之觸動，其伏氣陡然勃發，一時表裡俱熱，其舌苔白厚，中心似乾，脈象浮而有洪象，此其病雖連陽明而仍可由太陽汗解也。

【處方】

生石膏一兩搗細，天花粉一兩，薄荷葉錢半，連翹錢半。上藥四味，煎湯一大盅，溫服得汗即愈，薄荷葉煎時宜後入。

或問「此方重用石膏、花粉，少用薄荷、連翹，以為發表之劑，特恐石膏、花粉監製薄荷、連翹太過，服後不能作汗耳」。答曰「此方雖為發表之劑，實乃

調劑陰陽，聽其自汗，而非強發其汗也。蓋此證原為伏氣化熱，偶為外感觸動，遂欲達於表而外出，而重用涼藥與之化合，猶如水沃冶紅之鐵，其蓬勃四達之熱氣原難遏抑，而復少用薄荷、連翹，為之解其外表之阻隔，則腹中所化之熱氣，自奪門而出，作汗而解矣。且此等汗，原不可設法為之息止，雖如水流漓而斷無亡陰、亡陽之虞，亦斷無汗後不解之虞。此方原與拙擬寒解湯相似（寒解湯：生石膏一兩，知母八錢，連翹、蟬退各錢半，今以知母多劣，故易以花粉，為蟬退發表之力稍弱，又易以薄荷葉），一方任用其一，果能證脈無誤，服後覆杯之頃，即可全身得汗。間有畏石膏之涼，將其藥先服一半者，服後亦可得汗，後再服其所餘，則分毫無汗矣。因其熱已化汗而出，所餘之熱無多也。即此之前後分服，或出汗或不出汗，可不深悟此藥發汗之理乎？況石膏原具有發表之力也。

有其人身體酸懶，且甚覺沉重，頭重懶抬，足重懶舉，或周身肌膚重按移時，微似有痕，或小便不利，其舌苔白而發膩，微帶灰色，其脈浮而濡，至數如常者，此濕溫也。其人或久居潮濕之地，臟腑為濕氣所侵，或值陰雨連旬，空氣之中含水量分過度，或因飲食不慎，傷其脾胃，濕鬱中焦，又復感受風邪，遂成斯證，宜用藥外解其表，內利其濕則病癒矣。

【處方】

薄荷葉三錢，連翹三錢，小蒼朮三錢，黃芩三錢，木通二錢。上藥五味，先將後四味水煎十餘沸，再入薄荷煎七、八沸，取清湯一大盅，溫服之。若小便不

利者，於用藥之外，用鮮白茅根六兩，去皮切碎，水煎四、五沸，取其清湯以之當茶，渴則飲之。若其人肌膚發熱，心中亦微覺熱者，宜去蒼朮加滑石八錢。

有溫病初得作喘者，其肌膚不惡寒而發熱，心中亦微覺發熱，脈象浮而長者，此乃肺中先有痰火，又為風邪所襲也。宜用《傷寒論》麻杏甘石湯，而更定其份量之輕重。

【更定麻杏甘石湯方】

生石膏一兩搗細，麻黃一錢，杏仁二錢去皮，甘草錢半。上四味，共煎湯一大盅（不先煎麻黃吹去浮沫者，因所用只一錢，而又重用生石膏以監製之也）溫服。若服後過點半鐘，汗不出者，宜服西藥阿斯匹林一瓦。若不出汗，仍宜再服，以服至出汗為度。蓋風邪由皮毛而入，仍使之由皮毛而出也。

有溫病旬日不解，其舌苔仍白，脈仍浮者，此邪入太陽之府也，其小便必發黃，宜於發表清熱藥中，加清膀胱之藥，此分解法也。今擬二方於下，以使用者相熱之輕重而自斟酌用之。

【處方】

滑石一兩，連翹三錢，蟬蛻去土足三錢，地膚子三錢，甘草二錢。上藥五味，共煎一大盅，溫服。

【又方】

生石膏搗細一兩，滑石八錢，連翹三錢，蟬蛻去土足三錢，地膚子三錢，甘草二錢。上藥六味，共煎湯一大盅，溫服。

有溫病至七、八日，六經已周，其脈忽然浮起，至數不數，且有大意者，宜用辛涼之劑助之達表而汗解。

【處方】

玄參一兩，寸麥冬帶心五錢，連翹二錢，菊花二錢，蟬蛻去土足二錢。上藥五味，共煎湯一大盅，溫服。用玄參者，恐溫病日久傷陰分也。

有溫病多日，六經已周，脈象浮數而細，關前之浮尤甚，其頭目昏沉，恆作譫語，四肢且有擾動不安之意，此乃外感重還太陽欲作汗也。其所欲汗而不汗者，因陰分太虧，不能上濟以應陽也。此證若因脈浮而強發其汗，必凶危立見，宜用大滋真陰之品，連服數劑，俾脈之數者漸緩，脈之細者漸大，迨陰氣充長，能上升以應其陽，則汗自出矣。

【處方】

生地黃一兩，生懷山藥一兩，玄參一兩，大甘枸杞一兩，生淨茺肉六錢，柏子仁六錢，生棗仁六錢搗碎，甘草三錢。上藥八味，水煎一大碗，候五分鐘，調入生雞子黃二枚，徐徐溫飲之，飲完一劑再煎一劑，使晝夜藥力相繼不斷，三劑之後，當能自汗。若至其時，汗仍不出者，其脈不似從前之數細，可仍煎此藥送服西藥阿斯匹林一瓦，其汗即出矣。

或問「山萸肉原具酸斂之性，先生所定來復湯嘗重用之以治汗出不止，此方原欲病者服之易於出汗，何方中亦用之乎？」答曰「此中理甚精微，當詳細言之。萸肉為養肝熄風之要藥，此證四肢之騷擾不安，其肝風固已動也，此方中用萸肉之本意也。若慮用之有妨於出汗，是猶未知萸肉之性。蓋萸肉之味至酸，原得木氣最全，是以酸斂之中，大具條暢之性，《本經》謂其逐寒濕痺是明徵也。為其味酸斂也，故遇元氣不能固攝者，用之原可止汗；為其性條暢也，遇肝虛不能疏泄者，用之又善出汗。如此以用萸肉，是皆得之臨證實驗之餘，非但憑諸理想而云然也。若果服藥數劑後，其脈漸有起色，四肢不復擾動，即去萸肉亦無妨，其開始服藥時，萸肉則斷不能去也。

有未病之先，心中常常發熱，後為外感觸發，則其熱益甚，五心煩躁，頭目昏沉，其舌苔白厚，且生芒刺，其口中似有辣味，其脈浮數有力者，此伏氣化熱已入心包，而又為外感束其外表，則內蘊之熱益甚，是以舌有芒刺且覺發辣也。宜用涼潤清散之劑，內清外解，遍體得透汗則愈矣。

【處方】

鮮地黃一兩，玄參一兩，天花粉一兩，知母五錢，寸麥冬帶心五錢，西藥阿斯匹林兩瓦。上藥先煎前五味，取清湯兩大盅，先溫服一大盅，送服阿斯匹林一瓦。若服一次後汗未出，熱亦未消者，可再溫服一盅，送服阿斯匹林一瓦。若汗已出，熱未盡消者，藥湯可如前服法，阿斯匹林宜斟酌少服。

醫 學 衷 中 參 西 錄 第 八 期





【診餘隨筆】

西人謂「膽汁滲入十二指腸，能助小腸消化食物」，此理《內經》未嘗言之，似為中醫疏忽之處，不知後世名醫曾言之矣。吳鞠通《醫醫病書》曰「膽無出路，借小腸以為出路」，此非謂膽汁能入小腸乎？至於膽汁能化食之說，中醫書中亦早寓其理。《本經》之論柴胡也，謂「能去腸胃中結氣，飲食積聚，寒熱邪氣，推陳致新」，夫柴胡為少陽膽經之主藥，而其功效多見於腸胃者，為其善理肝膽，使膽汁流通無滯，自能入於腸中消化食物積聚，以成推陳致新之功也。至於徐靈胎注《本經》則以「木能疏土」解之，是謂肝膽屬木、脾胃屬土。徐氏既云「木能疏土」，是明謂肝膽能助腸胃化食，而膽汁能助小腸化食之理，即在其中矣。

或問「太陽病，發熱惡寒，熱多寒少，脈微弱者，此無陽也，不可發汗，宜桂枝二越婢一湯。夫既曰無陽，何以復用石膏？既曰不可發汗，何以復用麻黃？」答曰「人之血分屬陰，氣分屬陽，無陽從脈微弱看出，是言其氣分不足也。蓋證既熱多寒少，其脈原當有力，若脈果有力時，可直投以越婢湯矣，或麻杏甘石湯。今因其氣分虛而脈象微弱，故用桂枝助其脈（凡脈之微弱者，服桂枝則脈大），以托肌肉中外感之邪外出，隨麻黃以達於皮毛也。其云不可發汗者，蓋症止宜解肌。麻黃發汗之力雖猛，然所用甚少，且有石膏涼之，芍藥斂之，是以服藥之後，止為解肌之小汗，而不至於為淋漓之大汗也」。

肺臟下無透竅，而吸入之氧氣，實能隔肺胞息息通過，以養胸中大氣，由胸中大氣以敷佈於全身。而其吸入之氣，又自喉管分支下達於心，由心及肝，由肝至衝任交會之處，以及於腎。故肝腎之氣化收斂，自能容納下達之氣，且能導引使之歸根。有時肝腎陰虛，其氣化不能固攝，則肝氣忿急，可透膈以干大氣，腎氣膨脹，可挾衝氣上衝。則肝氣可挾所寄之相火上逆，腎氣可挾副腎臟之衝氣上逆。於是逆氣上干，排擠胸中喉中，皆不能容受外氣則喘作矣。

肺勞咳嗽，最為難治之症，愚向治此症，惟用生懷山藥條（切片者，皆經水泡，不如用條），軋細過羅，每用兩許，煮作茶湯，調以糖，令適口，以之送服川貝細末，每日兩次，當點心服之。若其脾胃消化不良或服後微覺滿悶者，可將黃色生雞內金，軋成細末，每用二三分與川貝同送服。若覺熱時，可嚼服天冬。此方曾治癒肺癆作喘者若干人，且能令人胖壯，能享大年。

【離中丹】

治肺病發熱，咳吐膿血，兼治暴發眼疾，紅腫作痛，頭痛齒痛，一切上焦實熱之症。

生石膏（二兩細末）、甘草（六錢細末）、硃砂末（一錢半）。共和勻，每服一錢，日再服，白水送。熱甚者，一次可服錢半。咳嗽甚者，方中加川貝五錢。咳血多者，加三七四錢。大便不實者，將石膏去一兩，加滑石一兩，用生山藥麵

熬粥，送服此丹。若陰虛作喘者，亦宜山藥粥送服。至於山藥麵熬粥自五錢可至一兩。

下焦寒涼泄瀉及五更瀉者，皆係命門相火虛衰，確能補助相火之藥，莫如硫黃，且更莫如生硫黃。為其為石質之藥，沉重下達耳。不經水煮火爍，而其熱力全也（硫黃無毒，其毒即其熱，故可生用）。然愚向用硫黃治寒瀉症，效者固多，兼有服之瀉更甚者，因本草原謂其大便潤、小便長，豈以其能潤大便即可作瀉乎？後閱西人藥性書，硫黃原列於輕瀉藥中，乃知其服後間作瀉者，無足怪也。且其所謂輕瀉藥者，與中醫說所謂大便潤者，原相通也。於斯再用硫黃時，於石質藥中，擇一性溫且饒有收澀之力者佐之，即無斯弊，且但熱下焦而性不僭上，勝於但知用桂附者遠矣。若於方中再少加辛香之品，引其溫暖之力以入奇經，更可治女子血海虛寒不孕。

【坎中丹】

治下焦寒涼泄瀉及五更瀉。

硫黃（純黃者一兩）、赤石脂（一兩）。共為細末和勻。每服五分，食前服，一日兩次。不知則漸漸加多，以服後移時微覺溫暖為度。若以治女子血海虛寒不孕者，宜於方中加炒熟小茴香末二錢。

按：治此症時，恆加肉桂少許與石脂硫黃同服，且其止腹痛之力甚速也。

【逐風通痺湯】

治風襲肌肉經絡，初則麻木不仁，浸至肢體關節不利。

生箭耆（六錢）、麻黃（三錢）、全當歸（五錢）、丹參（三錢）、乳香（三錢）、沒藥（三錢）、全蠍（二錢）。脈象遲弱無力惡寒者，將黃耆重用一兩，再照加烏頭二三錢；脈象有力惡熱者，以薄荷易麻黃，再加天花粉一兩。初服以遍體皆得微汗為佳，至汗後再服，宜將麻黃減半，或止用一錢；筋骨軟弱者，加明天麻三錢；口眼歪斜者，加蜈蚣二條，其病劇者，可加三條。此風中身之外廓，未入於臟腑也。是以心中無病，而病在於肌肉、肢體、經絡、關節之處。《內經》〈風論篇〉謂「風氣與太陽俱入行諸脈俞，散於分肉之間，與衛氣相干，其道不利，故使肌肉憤而有瘍，衛氣有所凝而不行，故其肉有不仁也」。又《內經》〈痺論〉曰「風、寒、濕三氣雜至，合而為痺也。其風氣勝者為行痺，寒氣勝者為痛痺，濕氣勝者為著痺」，據《內經》二節之文觀之，則風襲人之肌肉經絡，可使麻木不仁，浸至肢體關節不利可知也。是以方中以黃耆為主藥，取其能升補胸中大氣以通於衛氣，自能逐風外出。故《本經》謂「黃耆能主大風」，而又以最善發表之麻黃輔之。一則扶正以祛邪，一則發汗以透邪，二藥相濟為用，其逐風之力雖猛，而實不至傷正氣也。至當歸、丹參、乳、沒、全蠍諸藥，或活血以祛風，或通絡以祛風，皆所以贊助黃耆、麻黃以成功也。至於病偏涼者加烏頭，更將黃耆增重；病偏熱者加花粉，更以薄荷易麻黃，此隨病機之所宜，以細為調劑，不使服藥後有覺涼覺熱之齟齬也。筋骨軟弱者加明天麻，取其能壯筋骨兼能祛風也；

口眼歪斜者加蜈蚣，取其善理腦髓神經，而有牽正口眼之力也。曾治一人，夏月開軒當窗而寢，為風所襲，其左半身即覺麻木，肌肉漸形消瘦，左手足漸覺不遂，為擬此方。其病偏於左，又加鹿角膠二錢作引（若偏於右，宜用虎骨膠作引），一劑周身得汗，病癒強半，即方略為加減，又服二劑痊愈。後屢試其方莫不隨手奏效。

愚於諸藥多喜生用，欲存其本性也。有如石膏為硫氧氫輕鈣化合，若煨之則硫氧氫皆飛去，其涼散之力頓失，而所餘之鈣經即變質，斷不可服。故斯編之中於生石膏之能救人，煨石膏之能傷人，反覆論之，再三致意，以其關於人命之安危甚重也。又如赭石原鐵氧化合，其重墜涼鎮之力最善降胃止血，且又能生血，分毫不傷氣分。至藥局中所鬻之赭石，必煨以煤火，則鐵氧分離，即不能生血，且更淬之以醋，轉成開破之性，多用之即可令人泄瀉。又如赤石脂原係粉末，宜興茶壺即用此燒成。為其質同粉末，有粘滯之性，研細服之可保護腸胃之內膜，善治大便泄瀉，而津沽藥局中竟將石脂為細末，水和為泥，捏作小餅，煨以煤火，即與宜興壺瓦無異，若為末服之，其傷人脾胃也必矣。又如山萸肉，其酸溫之性能補肝、斂肝、治肝虛自汗以固元氣之將脫，實能挽回人命於至危之候。藥局多酒浸蒸黑用之，其斂肝固氣之力頓減矣。如此者實難枚舉，此所以愚於藥品多喜生用以存其本性也。

藥有非制過不可服者，若半夏、附子、杏仁諸有毒之藥皆是也。雖古方中之附子，亦偶生用，實係滷水淹透，未經炮熟之附子，亦非採取即用也。凡此等藥，方中雖未注明如何炮製，坊間亦必為制至無毒。若其藥本無毒，原可生用者，斯編方中若未注明制用，皆宜生用。有用斯編之方者，甚勿另加製法，致失藥之本性也。

威靈仙、柴胡諸藥，原是用根，坊間恆雜以莖葉，醫者不知甄別，即可誤事。細辛之葉，其功用亦不如根，故李瀕湖《本草綱目》亦謂用根，至樗白皮與桑白皮，亦皆用根上之皮，其真偽尤屬難辨，用者必自採取方的。如樗根白皮，大能固澀下焦，而帶皮樗枝煎湯，又能通大便。俗傳便方，大便不通者，用帶皮樗枝七節，每節長寸許，煎湯服之甚效。其枝與根性之相異如此，用者可不慎哉。

煎時易沸之藥，醫者須預告病家。如知母若至五六錢，微火煎之亦沸，若至一兩幾不能煎。然此藥最易煎透，先將他藥煎十餘沸，再加此藥，敞開藥罐蓋，略煎數沸，其湯即成。至若山藥、阿膠諸有汁漿之藥，龍骨、牡蠣、石膏、滑石、赭石諸搗末之藥，亦皆易沸。大凡煎藥，其初滾最易沸。煎至將滾時，須預將藥罐之蓋敞開，以箸攪之。迨沸過初滾，其後仍沸，敞蓋煎之無妨，若不沸者，始可蓋而煎之。蓋險急之證，安危止爭此藥一劑，故古之醫者，藥餌必經己手修制，即煎湯液，亦必親自監視也。

近聞京中會議，上峰偏重西醫之說，欲廢中醫中藥，此特因諸位上峰，非醫界中人，不知中醫之實際也。即近時觀之，都會商埠之處，病家延西醫服西藥者，不過十中之一，其餘各處延西醫服西藥者，實百中無一二也。夫西醫入中國已多年矣，使果遠勝中醫，何信之者如此寥寥，此明徵也。且中醫創自農軒，保我民族，即遇有癘疫流行，亦皆有妙方挽救，是以我國民族之生齒，實甲於他國之人。今若將中醫中藥一旦廢卻，此於國計民生大有關係，且近時日本人亦深悟明治專尚西醫之非，其醫學博士如朝比奈泰彥及近藤平三郎等七十餘人，創立皇漢醫學會，又有貴族議員中村純九郎、高橋源太郎、陸軍大學教授安井小太郎、陸軍大將立花小一郎等為之贊助，此載於各處報章，彰彰可考者也，奈何竟欲蹈明治之覆轍也。

如謂中醫不善防疫，西醫能明於毒菌之學，故善防疫，此為中醫不及西醫之處歟？則時賢劉蔚楚所著《遇安齋證治叢錄》，載有香港防疫一案，可為中西醫比較之確證也。今試錄其原文於下：

《證治叢錄》原文：前約二十年（即清朝末季）香港鼠疫流行，沿門闔戶，死人如麻。香港西醫謂中醫不識治疫，請港政府禁絕中醫，各中醫求東華院紳，聯謁港督華民政務司請選西紳院紳十人為監督，以病疫者外授中西醫各半，表列成績，不尚空談。一考，中醫治效超過之，西醫不服。二考，平均以百分計，西醫得三十餘分，中醫竟超過六十分，中醫賴此以保存。當時華督一為韋寶珊姻兄，



一為余友古君輝山經理其事，而粵人又多有能言之者。即此觀之，西醫之於治疫，果精焉否乎？

吾中華醫學，始於黃帝，當其臨朝致治，他務未遑，首先與其臣岐伯、伯高、雷公諸臣問答，以成《內經》一書，其書誠能博濟群生以利萬世也。後因此書師弟相傳，皆以口授，至週末始筆之於書，其數千年累相授受之際，必多有附《內經》並傳之語，是以內兼有失於誇張，有類戰國策士語氣者。然其精到之處，恒數語包括萬有，能令熟讀深思者，得醫學無限法門。是以讀《內經》之法，其於可寶貴之處，當竭力研究，於其不可盡信之處，置而不論可也。乃今之信西學者，謂《內經》多言陰陽五行，不可入於科學，然西人科學中非不言陰陽也？如電學家以磁石養針，其針即能收攝電氣，然其所收攝之電，必一端是陰電，一端是陽電，欲其針相黏連，必陽端與陰端相對，陰端與陽端相接，始能吸引不脫。按此理以通於醫學，此中原有無窮妙用，此醫家所以談陰陽也。乃同一陰陽，在西人談之，即為科學，在中人談之，即為荒渺，此果平情之論乎？

又西醫謂《內經》多談十二經，按解剖實驗，實無形跡可指。然精於針灸者，按十二經以刺疔瘡，若疔生於經之起處，刺經之止處可愈；疔生於經之止處，針經之起處可愈；若生於經之中間，並刺其本經起止之處皆可愈。此雖無形跡可憑，實有氣化可通也。蓋有形跡可憑者，譬之有線電也。無形跡可憑而仍有氣化相通者，譬之無線電也。西人窺天地氣化之精微以創無線電，可列於科學，古聖能窺

人身之氣化精微，以定十二經，而目之為荒渺，此又平情之論乎？且針灸詳於《內經》，外國此時不亦有習此為專科者乎？嘗閱滬上諸醫報，中、西勢若冰炭，甚至互相謾罵，此誠醫界之大恥也。究之平情而論，中醫尚理想不尚實驗，故精於人身之氣化，而略於人身之組織；醫尚實驗不尚理想，故精於人身之組織，而略於人身之氣也。是以區區意見，以為當今之世，欲求醫學登峰造極，誠非溝通中西不可也。是以因《益世報》有醫學一欄，擬得中西醫理異同論篇，歷舉《內經》之文，以發明中醫之理，多同於西醫者，實於西醫未嘗少有疵瑕。以有鑒於滬上中西醫之爭，一以僕之親朋多有業西醫者，如此立說，可告無罪於西醫矣。乃不謂有某君者，仇視中醫，並仇視《內經》，至謂《內經》談生理處，無一是處。如某君駁抽論云「神明之體藏於腦，神明之用發於心，這一種說法，可謂極周納之能事。這明是不肯承認《內經》神明在心之非，又難以否認現代醫學神明在腦的事實，於無可如何之中，採取了這個騎牆式的說法」，按某君如此駁辯，是謂《內經》「頭者精明之府」句，說得渾含不足徵，不知《內經》早知神明在腦之理。是以其駁語中，並未提著《內經》此句，而惟單提「心者君主之官，神明出焉」兩句，是又變出字為在字，可為巧於立言矣。究之《內經》「頭者精明之府」句，如日麗中天，終不可掩，而後人因讀《內經》，悟得神明在腦者，已不乏人，今略舉數條以證明之。

古文思字作恣。說文解之云「囟、頂骨空處，思字從囟從心」者，言自腦至心，如絲相貫，非心與腦相輔而成思乎？若腦無神明，何以與心相輔而成思也？且人頭顙之顙字（音信），其左旁即古思字，則腦藏神明而能思，自倉頡造字之時，已顯露其端倪矣。

又明季文豪嘉魚金正希曰「人之記性，皆在於腦中。小兒善忘者，腦未滿也；老人健忘者，腦漸空也。凡人外見一物，必留一形影於腦中」。

又李時珍曰「肺氣通於鼻，陽明胃脈，環鼻上行於腦，腦為元神之府，鼻為命門之竅，人之中氣不足，清陽不升，則頭為之傾，九竅為之不利」。

又自古養生之家（即今之所謂哲學家），皆以腦中之神為元神，心中之神為識神，元神者無思無慮，自然虛靈也；識神者有思有慮，靈而不虛也。然其所注重者在腦中元神，不在心中識神，是以有「學道之人不識真，只為從前認識神」之語（見《慧命經》），其以腦中之知覺為神明之正宗，尤可知矣。

又古《六書精蘊》云「元神何宅，心為之宅，元神何門，囟為之門（見《康熙字典》）」。

以上所引諸端，亦可謂其不知神明在腦乎？夫我億萬同胞，黃帝之子孫也，《內經》一書，乃黃帝留以保護後世子孫者也。縱其書有大醇小疵，而但於其大醇之處，通變化裁，自能普濟群生；其小疵之處，置而不論可也。此尊祖敬宗之義也，亦保存國粹之義也。僕願某君再三深思之，且至清夜時思之。



胡萊菔英能解砒石毒

邑東境褚姓，因夫妻反目，其妻怒吞砒石，其夫出門未歸，夜間砒毒發作，覺心中熱渴異常。其鍋中有泡乾胡萊菔英之水若干，猶微溫，遂盡量飲之，熱渴頓止，迨其夫歸猶未知也。隔旬，其夫之妹，在婆家亦吞砒石，急遣人來送信，其夫倉猝將往視之。其妻謂，將乾胡萊菔英攜一筐去，開水浸透，多飲其水必愈，萬無一失。其夫問何以知之，其妻始明言前事。其夫果亦用此方，將其妹救愈。然所用者，是秋末所曬之乾胡萊菔英，在房頂迭次經霜，其能解砒毒或亦借嚴霜之力歟？至鮮胡萊菔英亦能解砒毒否，則猶未知也。

麥苗善治黃膽

內子王氏，生平不能服藥，即分毫無味之藥亦不能服。於乙丑季秋，得黃膽症，為開好服之藥數味，煎湯，強令服之，下嚥即嘔吐大作，將藥盡行吐出。友人張某謂「可用鮮麥苗煎湯服之」，遂採鮮麥苗一握，又為之加滑石五錢，服後病即輕減，又服一劑痊愈。蓋以麥苗之性，能疏通肝膽，兼能清肝膽之熱，猶能消膽管之炎，導膽汁歸小腸也。因悟得此理後，凡遇黃膽症，必加生麥芽數錢於藥中，亦奏效頗著。然藥鋪中麥芽皆乾者，若能得鮮麥芽，且長至寸餘用之，當更佳。或當有麥苗時，於服藥之外，以麥苗煎湯當茶飲之亦可。

答受業高崇勳質疑

（一）問「講義對於脈法，浮、沉、遲、數、緩、緊、代、促、結真象，發揮盡致，其餘各脈，尚未闡發，如芤、滑、澀、革、牢等脈形狀，均難揣摩，請示其端」？答曰「芤覺脈中無物充實其中也。蓋脈管中有氣有血，至血去而氣獨留，是以脈雖不至微細而充實則有欠也。滑為氣血有餘之象，指下覺氣血充足而兼流走也，其跳動似數而非數也。澀為氣血不足之象，指下覺氣血而近模糊也，其跳動似遲而非遲也。革者，浮弦兼大硬也。牢者，沉弦有力，而無過度流走之勢也。滑主熱，滑而有力者，或至血熱妄行。澀而無力者，主有瘀血，或血脈不通。革主病有變革，且主陰陽將離。牢為腹內有堅結之病，牢守其處而不動」。

（二）問「《傷寒論》講義，何不依照原論，逐節發揮」？答曰「《傷寒論》一書，若如數皆為解釋，須得四年工夫。此限於時間，有不得不然者。但即余所發明者熟習而匯通之，醫治傷寒自無難也」。

（三）兩寸微弱，關尺弦硬，認為其人平素氣虛，驟為肝膽之火激動，挾血上衝將成腦充血證。宜於建瓴湯中加野臺參三錢以補其氣，再加天花粉四錢以解參之熱，生赭石又宜改用一兩，黃耆仍以不用為是。蓋參、赭並用，其補益之力，可下行達於湧泉，補其下即所以益其上也。

(四) 升陷湯證，有兼肝膽之火上衝，並衝氣亦上衝者，加龍骨、牡蠣、芡實，甚為適宜。因三藥皆斂藥，而非降藥，是以升陷湯後之注語原有加芡肉之說，芡肉亦與芡實諸藥同性也。

(五) 濕氣之為病，當用薏米，炒至焦黃色，軋成細末過羅，隨意服之，所炒之薏米，不可過多，取其焦香之氣，五日一炒可也。此是穀食，不論多食久食，皆無弊也。

(六) 人患傷寒，其府無內傷，即不現其經之病。如少陽傳太陰，太陰傳少陰病、恒有先見少陽，後無腹脹病，忽見少陰病者，是因脾土強壯而不現其經之病也。

(七) 無論何經，皆可直中，然直中之理，固因其經府空虛，此中亦有歲運相關。如去歲壬申少陽相火司天，厥陰風木在泉，故凡病者多連少陽，寒熱往來或作嘔吐。

(八) 外感自後受者，易入太陽，自前受者，易入陽明，自側受者，易入少陽。

(九) 脈搏以一息四至為準，但人之呼吸長短非一定，聞以太息則五至，太息者，其呼吸之氣較長也，是以五至。以余生平體驗，大抵一息四至半為準。

(十) 瘀血新得者，可治其血，雖瘀久而身形壯者猶可治。惟其人瘀血既久，身形又弱，若用藥降下其瘀斷不可。蓋常見病瘀血之人，其病革時，瘀血自下，



然至此時神丹亦難挽回矣。非在於用桃仁也，桃仁為破血中和平之藥，拙著中曾引徐氏之說，可參觀也。是以用桃核承氣湯時，恐其人素有瘀血，診脈時未能診出，不妨預告病家，若下紫黑之血，是從前之瘀，為不治之證，即不下之，亦為不治之證，以自留站腳之地也。

（十一）問「《衷中參西錄》五期，大青龍湯論中，可以薄荷代麻黃，講義大青龍湯則以薄荷代桂枝，未知孰是」？答曰「講義與參西錄各自為書，其有矛盾之處，當以講義為是，以其書後出也。大青龍湯無論溫病、傷寒，皆宜以薄荷代桂枝，而麻黃勿庸代，然宜少用，當為石膏十分之一，以治溫病，麻黃尤宜少用，蓋有薄荷葉代之，發表原可少用也。至桂枝原與煩躁不相宜，是以原方分量止為麻黃之半。觀此則仲景制方之時，原有嫌桂枝性熱之意，特當時無薄荷，又無相當之藥以代之耳。

答受業林世銘質疑

(一) 心下之水氣，有何形象？答曰「凡言水氣，皆指稀痰」。

(二) 古之一升，合今量一兩。

(三) 麻沸湯，即煮水雖開，而不至翻花者。

(四) 桃仁之皮尖原無毒，非杏仁可比。經方云云，乃古人誤處。

(五) 陽明、少陰二經之證，皆與津液有關係。

(六) 內煩、虛煩之別，如吐後不至於虛，謂之內煩；下後則氣虛，謂之虛煩。

(七) 芒硝、大黃皆為攻下品，妊婦獨禁芒硝，而不禁大黃者，因芒硝有下死胎之故當忌，至大黃則力較和平耳。

(八) 太陽傷寒入府，外不解者，宜麻黃湯加滑石。

(九) 人之素有痰飲者，感受風寒，其見症必有胸中脹滿作痛，蓋因風寒外來，胸中大氣與痰飲衝激也。

(十) 三種承氣湯，主病上、中、下，意調胃承氣湯治上、小承氣湯治中、大承氣湯治下，然否？答曰「此說是」。

(十一) 桔梗一藥，有苦甜二種，入藥以苦者為佳，惜今苦者少耳。

(十二) 肝熱，所以能致裡急後重之痢者，因腎為二便之關，肝行腎之氣，肝熱下迫，故裡急後重而作痢。

(十三) 少陽行身之側，是否指板油而言？答曰「然。少陽之府是膽，少陽經是板油，原居身之側也」。

(十四) 少陽之邪，透膈上出之途徑，是隨少陽之氣，透膈膜上之微絲血管而上出。

(十五) 瘧母，結於脅下膜油中，久發瘧，則脅下實，即脾脹也。

(十六) 胞室之形象，兩膜相合為扁形，中為夾室，其功用則男以化精，女以係胎。

(十七) 副腎髓質，即腎脈中所含之骨髓，俗名脊髓袋。

(十八) 氣血因寒而瘀者，其變化，瘀久變熱，可化膿血。

答葛介人相質一則（論隱曲）

嘗考《內經》文同而義異者，實確有其處。如《熱論篇》有「大氣皆去」之語，所謂大邪之氣也。至《五味篇》又有「大氣之搏而不行者，積於胸中」之語。若先生所言《內經》之文同者，其義必同。將《五味篇》之所謂大氣，亦與《熱論篇》之所謂大氣同一解乎？豈五味可以養人，而五味所化之氣，乃大邪之氣乎？由此推之，「隱曲」二字，雖《內經》數見，多作房事解，安知此處不可作心思不遂解乎？且所謂心思不遂者，非必皆如閣下所言「想思病」也，凡拂情不能自由之事，皆在其中。且《內經》謂此證傳為風消，傳為息賁，即在不治之例。而愚苦心思索，擬得資生湯一方，救人多矣。醫界同人用此方救人而寄函相告者亦多矣。夫醫者以活人為主，苟其方能活人，即與經旨少有差池，猶當曲諒，況與經旨未必有差池乎。且愚因才識庸碌，生平不敢講薄前人，故方後自注有云「吾不敢謂從前解者皆謬，然由拙解以釋經文，自覺經文別有意味，且有實用也」云云。此欲然不滿之心，不敢自居於必是也。先生閱拙著至此數語，亦可寬余妄論之罪矣。

答汪景文質疑

詳觀病案，知係「心腎不交」病。人稟太和之氣以生，上陽下陰，互相維繫。陽之性親上，而有下焦之陰吸之，則不至上脫；陰之性親下，而有上焦之陽吸之，則不至下脫，此臨證者所以上病取諸下，下病取諸上也。某少年涉足花叢，既傷於色，致腎陰虧損，不能上吸心陽，上焦陽分先有浮越之勢。加以拂鬱以激動肝火，縱酒以昏迷腦筋，多言不寐，以耗散氣血，是以忽然昏厥，此扁鵲所謂「上有絕陽之絡，下有破陰之紐」也。此證若非大便溏瀉或猶可治，當峻補真陰以助之上升，收斂元陽以引之下降，鎮斂肝氣肝火，以熄內風，自然陰陽維繫，火降痰消，而精神復初矣。乃此證溏瀉數旬，且又陽縮，少陰之根基已陷，用藥縱對證，又何益哉？再者，此又似夾雜外感，自太陽陷入少陰，故形似有火而脈沉也。內傷已在不治，況又加之外感乎？

胃之大絡名「虛里」，貫膈絡肺，出於左乳下。夫「虛里」之絡，即胃輸水穀之氣於胸中，以積成大氣之道路。所以名「虛里」者，因其貫膈絡肺，遊行於胸中空虛之處也。

答柴德新疑問

萬物未有之先，皆賴天地之氣化以生之。人稟天地之氣化以生，人身亦小天地也。是以人之身內可寄生蛔蟲，身外可寄生虱蟻。友人田聘卿，曾治一人，腹中生蟲，用藥下之，長尺餘，形若蛇，係其尾倒懸之，滴血數日，係一帶根長髮。古人謂帶根之髮誤食之可化為蛇，信不誤也。由此推之，蛇之精遺於穀菜之上，人食之可成蛟龍病，又何異乎？且蛟龍病，史書亦恒載之，不但如田君所引徵也。《後漢書》載「華元化見一人病噎食，不得下，令取餅店家蒜齏（搗爛之蒜汁），大可二升，飲之，立吐一蛇。病者懸蛇於車，造陀家，壁上懸蛇數十，乃知其奇」。又《唐書》〈方伎傳〉「有宦者奉使嶺南，還奏事，適有太醫過其前曰『此人腹中有蛟龍』。上問之，對曰『曾在嶺南騎馬行烈日中，渴甚，飲澗水數口，自此常常腹痛』。上命太醫治之，投以雄黃末，吐出一物，長數寸，有鱗甲，疼遂愈」。按：此條記不甚清，因客中無書可查，遂約略錄之。

又按：醫者一見其人，即知其為蛟龍病者，必因其頭面有光也。夏子益《奇疾方》云「人頭面上有光，他人手近之如火熾者，此中蟲也。用蒜汁半兩和酒服之，當吐出如蛇狀」。

答劉希文問七傷

（一）大飽傷脾：因脾主運化飲食，飲食太飽，脾之運化力不足以勝之，是以受傷。其作噫者，因脾不運化，氣鬱中焦，其氣鬱極欲通，故噫以通之；其欲臥者，因脾主四肢，脾傷四肢酸懶，是以欲臥；其色黃者，因脾屬土，土色黃。凡人之五臟，何臟有病，即現何臟所屬之本色。此四診之中，所以望居首也。

（二）大怒氣逆傷肝：因肝屬木，木之條上達，木之根下達。為肝氣能上達，故能助心氣之宣通（肝係下連氣海，上連心，故能接引氣海中元氣上達於心）；為肝氣能下達，故能助腎氣之疏泄（腎主閉藏，有肝氣以疏泄之，二便始能通順）。大怒，其氣有升無降，甚而至於橫行，其中所藏之相火，亦遂因之暴動（相火生於命門，寄於肝膽，遊行於三焦），耗其血液，所以傷肝而血即少。肝開竅於目，目得血而能視，肝傷血少，所以其目暗也。

（三）形寒飲冷傷肺：因肺為嬌臟，冷熱皆足以傷之也。蓋肺主皮毛，形寒則皮毛閉塞，肺氣不能宣通，遂鬱而生熱，此肺之因熱而傷也。飲冷則胃有寒飲留滯，變為飲邪，上逆於肺而為懸飲，此肺之因冷而傷也，肺主氣，開竅於鼻，有病則咳，肺傷所以氣少，咳嗽鼻鳴也。

（四）憂愁思慮傷心：因人之神明藏於腦，故腦為精明之府（《內經》〈脈要精微論〉），而發出在心，故心為君主之官（《內經》〈靈蘭秘典〉）。神明屬陽，陽者主熱。憂愁思慮者，神明常常由心發露，心血必因熱而耗，是以傷心

也。心傷，上之不能充量輸血於腦，下之不能充量輸血於肝，腦中之神失其憑藉，故苦驚喜忘，肝中之魂，失其護衛，故夜不能寐，且肝中血少，必生燥熱，故又多怒也。

（五）強力人房坐臥濕地傷腎：因腎有兩枚，皆屬於水，中藏相火，為真陰中之真陽，共為坎卦，以統攝下焦真陰、真陽之氣。強力入房則傷陰，久坐濕地則傷陽，腎之真陰、真陽俱傷，所以傷腎。腎傷則呼吸之時，不能納氣歸根，所以短氣。腰者腎之府，腎傷所以腰疼，骨者腎所主，腎傷所以腳骨作疼。至於厥逆下冷，亦腎中水火之不能敷布之故也。

（六）風雨寒暑傷形：因風雨寒暑原天地之氣化，雖非若癘疫不正之氣，而當其來時或過於猛烈，即與人身之氣化有不宜，是以上棟下宇，以徇風雨，夏葛冬裘，以節寒暑，衛生之道，自古然也。乃有時為時勢所迫，或自不經意，被風雨寒暑之氣侵，其身體氣弱，不能捍，則傷形矣。形傷則髮落，肌膚枯槁，此猶木傷其本，而害及枝葉也。

（七）大恐懼不節傷志：因志者為心之所主，必以中正之官輔之，此志始百折不回。中正之官者，膽也，若過恐懼，則膽失其司，即不能輔心以成志，所以傷志。志傷，則心有所圖而畏首畏尾，所以恍惚不樂也。



答胡劍華疑問二則

五運六氣之說，似乎無憑，然亦非盡無憑，以六氣配一歲，初之氣風木，二之氣君火，三之氣相火，四之氣濕土，五之氣燥金，六之氣寒水，每氣各主六十日強。而人生之病，即多隨各氣之主令而現症，此靜而有常之主氣也。又有每年轉換之氣，如子午年，初之氣寒水，丑未年，初之氣風木，寅申年，初之氣君火，卯酉年，初之氣濕土，辰戌年，初之氣相火，己亥年，初之氣燥金，此動而不常之客氣也。主氣有權，客氣無權，故人之生病，恒隨主氣為轉移，不隨客氣為轉移。愚以為主氣者，乃天地自然之氣，聖人因而表彰之，至客氣或為後人附會之說耳。五運之說，因甲己化土，故為土運；乙庚化金，故為金運；丙辛化水，故為水運；丁壬化木，故為木運；戊癸化火，故為火運，然必二干相合，始能相化。若但以歲干逢甲，即為土運，逢乙即為金運，此理原來牽強。然甲干主歲，其歲支或又屬土；乙干主歲，其歲支或又屬金之類。天干地支，合為一氣，以之斷病，恒有驗時，即如陳修園集中所載，戊午年兩遇奇恒痢證。夫該證為非常之火毒，業醫者恒終身不一見，而修園於戊午年兩遇之者，誠以戊為火運，而歲支午又屬火，火氣太甚，故迭見此證，並云二證之危，皆至七日，因七者，火之成數也。由是觀之，五運之說，非盡無憑也。

《內經》診脈之法，原是三部九候。一部者，分上、中、下；九候者，每部之中又分三部以候脈也。是故上三部在頭，以候頭面、耳目、口齒之疾；中三部

在手，以候手經諸臟腑之疾；下三部在足，以候足經諸臟腑之疾。蓋動脈雖皆出於心，而其分支別派，實貫串於各臟腑。其由某臟腑貫而來者，即可以候某臟腑，此《內經》所以有三部九候也。至秦越人《難經》，但取手太陰之動脈處寸口，以為診病之準則，此僅為中三部中之一部，是取肺能終始諸脈之義（即西人由肺吐出碳氣，換氧氣之理），其法原不完備，故仲景《平脈篇》論脈，多手足並舉，其《傷寒論》序中，又譏「按手不及足」者，由是而論，若遵《內經》及仲景之診脈，固確有可憑也。

《內經·靈樞》〈五味篇〉曰「穀始入於胃，其精微者，先出於胃之兩焦，以溉五臟」，所謂精微者津液血液也（血雖成於小腸中乳糜汁，而其本源實由於胃，故《內經》有「中焦受氣，取汁變化而赤是為血」之語），蓋此精微胃中無時不生出，即無時不灌溉五臟，而毫無停滯也。至其人有病，將胃中所化之精微凝滯而為痰，有如經絡瘀血，瘡瘍潰膿一般，豈可借之以為胃中之滋養乎？至礫石滾痰丸之力雖猛，然病急治標，誠有頑痰充塞過甚，又當為探本窮源之治，使臟腑調和而痰自不生。此貴臨證制宜，隨時化裁，若渾而言之曰痰，而以為何方可用，何方不可用，原非精當之論也。

癥瘕二字，雖並舉而虛實有分。癥者，有實可徵，無論痰積、食積、血積，皆確有其物，其中原無氣也；瘕者，有象可假，無論痰積、食積、血積，皆忽聚忽散，其中原雜以氣也。即但以癥論，其當初病因，亦多由於氣分不順而病及於血，由是而論「氣裹血」之語，雖出之俗醫，未嘗見於古籍，似亦無可厚非也。

各處庭院中，多有絡石與夔夔，此二種皆木本籐蔓類，而皆可入藥。絡石蔓粗而長，葉若紅薯，其節間出鬚，鬚端作爪形，經雨露濡濕，其爪遂粘於磚石壁上，俗呼為爬山虎，即藥局中之絡石籐也。本草又名為石龍籐，其性善治喉痺腫塞，用鮮者兩半，煎湯一盅，細細呷之，少頃即通。其性又善通經絡，同續斷、菟絲子煮酒（須用黃酒，不宜用燒酒），日日飲之。或單用絡石，煮酒飲之，善治周身拘攣，肢體作痛。若與狗脊、猴薑煮酒飲之，善治腰疼。若兼腿疼者，宜加牛膝。《名醫別錄》又謂「此物久服能輕身、明目、潤澤、好顏色、不老」，誠如《名醫別錄》之所云云，則每日以之煮湯當茶飲之，其為益不亦多乎？

夔夔蔓類絡石而稍細，花葉若雞爪形，又多分歧，以其須纏於高樹之枝柯上。其籐中多通氣細孔，截斷吹之有漿出，可擦瘡瘍腫毒。其性亦善治淋，煎湯當茶，最善止渴。取其葉搗汁飲之，善治嘔噦。其所結之實，大如廣紅豆，形圓色紅而亮，中有漿微甘微酸，其功用能止渴，益氣力，悅顏色。俗傳有謂其善解砒石毒者，然未見其出載，此則待質高明也。

答王肖舫質疑

犀黃，誠如兄言為西黃之誤。蓋牛黃之好者，出於高麗，因高麗之牛大，故所出之黃亦最美（從前高麗清心丸甚佳，以其有牛黃也），特別之曰東牛黃，而其價亦較昂；青海、西藏之地，亦多出牛黃，其成色亞於東牛黃，故又別之曰西牛黃，而其地原有犀，遂又誤西為犀也。紫石英，弟恒用之，治女子不育甚效。其未經煨者，其色紫而透徹，大小皆作五棱者佳。蓋白石英屬陰，紫石英屬陽，陰者宜六棱，陽者宜五棱。至鐘乳石、蛇含石，皆未用過，不敢置論。

答沈仲圭問學醫當讀何書為要

鄙人於醫學，原係門外漢，而再三殷殷下問，不得不略陳管見以質高明。嘗思人以類聚，物以種分，西人之說，由漸進化，故凡有創造，皆謂後來居上。至中華黃族，乃神明之胄，故遠溯古昔，吾開天闢地之遠祖，實皆經天緯地之聖神也。所以其所創造留貽，以佑啟我後人者，無論後世如何變通盡妙，如何鼓舞盡神，皆不能出其範圍，而至於醫學為尤甚，是以有志醫學者，當以農軒之書為根本，《神農本草經》三百六十五味，每味皆有主治之要點。其所主治者，乃其本品獨具之良能，恒有不可由氣味推測者。後世本草對於此等處，恒疑而刪去，及取其藥實試之，其效驗恒與經文若合符節，是《本經》勝於後世本草遠矣。至後世注《本經》者，若張隱庵、葉天士、陳修園，皆有新穎可取之處，然皆不如徐靈胎所注《本經百種錄》之靈妙也。雖所注者僅百種，而尋常日用之藥亦大約皆備。他如《本草綱目》，本草原始諸書，亦可參觀以廣見聞。惟本草雷氏炮製，不宜涉獵，因此書原係劉宋時雷斅所著，非上古雷公之書，無論何藥，皆炮製失其本性，大為醫學之累也。至《內經》從前注者止注《素問》，至清初張隱庵始將《素問》、《靈樞》皆詳細詮解，較前人為優，然亦多有謬處。又宜兼看徐靈胎、陳修園節選《內經》之注（此書皆在其本集中）。至經文幽深難解之處，經諸家注疏而仍難解者，亦可以不求深解，蓋益我神智，淪我性靈之處，恒在一目了然之處也。至《脈訣》、《內經》開其始，扁鵲（《難經》）、仲景（《傷寒》）《金

匱》) 衍其緒，叔和竟其委。然王氏書多穿鑿，不可盡信，須兼看李士材、李瀕湖、徐靈胎、陳修園諸家脈訣，方能得其要領，而數家之中，尤以徐氏《脈訣啟悟》、《洄溪脈學》為最。至諸方書，《傷寒論》、《金匱》尚矣。然亦有不可盡信處(拙著書中，曾確為指明，茲不贅)，蓋年遠代湮，中有差訛也。他如《千金》、《外臺》皆可取，而《千金》之制方，有甚奇特處，可法也。漢、唐而後，諸家著作，無甚可取，迨至張、劉、李、朱四家出，所謂宋、元、明四大家也。而細閱其書，仍未能盡愜人意，如子和重用汗、吐、下三法，可謂有膽有識，而於扶正以勝邪之理，猶欠發揮；東垣善理脾胃，然知脾多陽虛，而不知胃多陰虛，且止知升脾，而不知降胃；丹溪注重滋陰，喜用熟地龜板、知、柏諸藥，果係陽火偏勝，鑠其真陰，致不足者用之，恒多效驗。若非陽有餘而陰實不足，其方斷不可用，當調其脾胃，俾多進飲食，自能生津養血，而真陰自足也。至河間主火立論，亦或間有偏欹，而以辛涼治外感，實為後世治溫者開不二法門，可崇拜也。至明季南昌喻氏出，本源《內經》，率由仲景，生平著作，大致純粹，而其《寓意草》二卷，及《尚論篇》中真武、大小青龍諸湯後之論，尤愚所生平快讀者也。此外徐氏《洄溪醫案》亦甚佳，愚遵用其法，恒多獲效。至若陳修園、黃坤載二家，用藥恒偏於熱，然其義論精到處，亦多可採取，而黃氏肝脾宜升，膽胃宜降之論(在其本草半夏、乾薑之下)尤為的確。後此則唐氏容川又為表表傑出，其發明三焦之體質，及其功用，誠突過唐、宋也。上所論者，管見如此，未知尊意

以為何如？未知質諸眾大雅以為何如？特是事貴師古，尤貴與古為新，方能使醫學日有進步。愚願有志學醫者，既於古人著作精心研究，更當舉古人著作而擴充之，引申觸長之，使古人可作應歎謂後生可畏，然後可為醫學嫡派之真種子，而遠紹農軒之傳也。此敬復。



答周小農問魚肚

前蒙問奉天之魚肚，出於何魚，即作魚肚之法。今特即所知者略為陳之。按魚肚色黃，故名黃魚肚，非出自鯉魚也。肴品中之魚骨，出自鯉魚，而不出魚肚。出魚肚之魚，奉天謂之鱸，以其巨口細鱗狀如松花江之鱸也。至敝邑海中亦出魚肚，其魚如鯽大十餘斤，俗呼為大魚。魚肚乃其胞也。其性溫而滋陰，為補腎良藥。余用《內經》四烏賊骨一茹蘆丸，恒用魚肚加於其中，以代送丸藥之鮑魚湯。入藥時，可用蛤粉炒至發起，即易軋細。若作食品，宜用香油炸至發起，再置涼水中，浸至柔軟用之。

復汪景文書

凡癥瘕結於少腹，多妨生育。令正癥瘕結於少腹，如此之大，而仍能生育，恐非血瘀之癥瘕，或是腸蕈證。西人割出人腹中之腸蕈，有重至十餘斤者。此證若係瘀血結為癥瘕，多服理衝湯無不愈者。若係腸蕈證，非藥餌所能消也。

答金履升問治吐血後咳嗽法

詳觀百五十三號病案，知係因吐血過多，下焦真陰虧損，以致腎氣不斂，衝氣上衝。五更乃三陽升發之時，衝氣上衝者必益甚，所以腦筋跳動，喘嗽加劇也。欲治此證，當滋陰納氣，斂衝鎮肝，方能有效。爰擬方於下以備酌用。

生山藥一兩、大熟地一兩、淨萸肉六錢、懷牛膝六錢、柏子仁六錢、生龍骨四錢、生牡蠣四錢、生赭石四錢、生內金二錢、玄參二錢、炙草二錢。日服一劑，煎渣重服

答吳自雄問病

所問婦人血淋之證，因日久損其脾胃，飲食不化，大便滑泄，且血淋又兼砂淋，洵為難治之證。今擬一方，用生山藥一斤軋細末，每用八錢，加生車前子二錢，同煮作粥，送服三七細末、生內金細末各五分，每日兩次，當點心用之，日久可愈。方中之意，用山藥、車前煮粥以治泄瀉，而車前又善治淋疼，又送服三七以治血淋，內金以消砂淋，且雞內金又善消食，與山藥並用，又為健補脾胃之妙品也。惟內金生用則力大，而稍有破氣之副作用，若氣分過虛時，宜先用生者軋細，焙熟用之。若服藥數日而血淋不見輕者，可用畢澄茄細末一分，加西藥哥拜拔油一分同服。又此證大便不止，血淋亦無從愈，若服山藥、車前粥而瀉不止，可將熟雞子黃二三枚撚碎，調在粥中，再煮一兩開服之。

答高甘棠問病三則

一答：係淋毒未淨，故小便渾濁，陰莖之端微腫，似梅毒亦未淨盡。方用鮮小薊根約二兩，洗淨切碎，丈菊子一兩，煮數沸，取湯一大盅，候半溫時，摻入西藥骨拜波拔爾撒謨一分五厘，調和同服。日兩次，半月後當痊愈。

二答：孕至十三月不育，且腹不甚大，亦不甚動，當是鬼胎。可用帶皮尖生桃仁四錢，搗碎，煎湯服之。若服一次不效，再服可用生桃仁六錢，連服數劑，腹當消。蓋桃仁皮尖無毒，原宜帶皮尖生用，皮色紅能入血分，尖乃生發之機，善通氣化。杏仁之毒在皮，故必去皮乃可用（中杏仁毒者，用杏樹根皮煎湯飲之即解，神效），用此方時，須仔細檢點，慎勿誤用生杏仁。

三答：咳嗽四年，肺有傷損，原不易治。方用西藥佗氏散一錢，阿斯必林二錢和勻，分為十六包，再用生山藥軋末過羅，每用一兩煮作粥，當點心服時，送服前二味藥末一包。日服二次，久當愈。

答王肖舫問小兒走馬牙疳

王洪緒《外科症治全生集》，有赤霜散治走馬牙疳甚效。然此藥有毒性，敷患處後，有唾須吐出。小兒不知吐，宜以少許點患處，恐多則隨津咽下。再每日用黃連清胃丸付，分三次服下。

答徐莊君問其夫人蕩漾病治法

詳觀所述病案，謂脈象滑動，且得之服六味地黃丸之餘，其為熱痰鬱於中焦，以致胃氣上逆，衝氣上衝，浸成上盛下虛之證無疑。為其上盛下虛，所以時時有蕩漾之病也。法當利痰清火，降胃斂衝，處一小劑，久久服之，氣化歸根，蕩漾自愈。擬方於下

清半夏三錢、柏子仁三錢、生赭石軋末三錢、生杭芍三錢、生芡實一兩、生薑三片。

磨生鐵銹濃水煎藥。

方中之意，用半夏、赭石以利痰墜痰，即以降胃安衝。用芡實以固下焦氣化，使藥之降者、墜者，有所底止，且以收斂衝氣，而不使再上衝也。用芍藥以清肝火，利小便，即以開痰之去路。用柏子仁以養肝血，滋腎水，即以調半夏之辛燥。用生薑以透竅絡，通神明，即以為治痰藥之佐使。至用鐵銹水煎藥者，誠以諸風掉眩暈，皆屬於肝。蕩漾，即眩暈也。此中必有肝風萌動，以助胃氣、衝氣之上升不已。律以金能制木之理，可借鐵銹之金氣以鎮肝木，更推以鐵能重墜，引肝中所寄龍雷之火下降也。況鐵銹為鐵與氧氣化合而成，最善補養人之血分，強健人之精神，即久久服之，於臟腑亦無不宜也。

答諸暨孟興朕疑問二則

禽亦有肺，其肺內與脊肉相連，貼脊之內，中有青色之管二支，即其肺也。至魚類，其胎生者，若鯨魚，懶婦魚之類，皆顯然有肺，故恒喙出水面，呼吸噴浪以舒其氣。其卵生者，肺與禽同。

草木之生，分甲生乙生。甲生者拆甲而出，其類屬陽。乙生者形屈似乙而出，其類屬陰，諸豆皆乙生也（出時屈其頂，先出土外），為其稟陰柔之氣化，力欠宣通，故諸豆多食皆能作脹，豆腐出於豆，是以其性與豆同也。



答月影女士問疼經治法

詳觀病案，知係血海虛寒，其中氣化不宣通也。夫血海者，衝脈也，居臍之兩旁，微向下，男女皆有。在女子則上承諸經之血，下應一月之信，有任脈以為之擔任，帶脈以為之約束。陽維、陰維、陽蹻、陰蹻為之擁護，督脈為之督攝，《內經》所謂「女子二七，太衝脈盛，月事以時下」者此也。有時其中氣化虛損或兼寒涼，其宣通之力微，遂至凝滯而作疼也。而諸脈之擔任、擁護、督攝者，亦遂連帶而作疼也。斯當溫補其氣化而宣通之，其疼自止。爰擬方於下：

全當歸一兩、生乳香一兩、生沒藥一兩、小茴香炒熟一兩、魚鱈膠豬脂炸脆一兩、川芎五錢、甘松五錢此藥原香鬱，若陳腐者不用亦可。

共為細末。每服二錢五分，用真鹿角膠錢半，煎湯送下，日服兩次。

答劉希文問濕溫治法之理由

行醫之道，貴識病之本源，而為提綱挈領之治法，故其疏方也，不過緊要之藥數味，以直搗病之要衝而掃除之，則一切諸連帶之病，不治自愈。乃今者醫學不講，而恒著書立說以自矜奇異，一證之中，立方眾多，一方之中，用藥龐雜，必就其諸端論說，而皆深究其所以然之故，若遇說有不通之處，而曲為將順，是渾俗同流也；顯為指摘，是傲氣凌人也，不如付之不論之為愈也。今詳觀所論濕溫病狀，純係濕熱鬱中，致經絡閉塞，故其外雖覺寒涼，而內則小便短澀赤黃也。為小便難，水氣必多歸大腸，所以兼泄瀉也。其肢體酸痛者，濕而兼風也。胸膈痞滿者，濕氣挾飲也。欲治此證，甚屬易易，用滑石兩許煎湯，送服阿斯必林一片半，汗出即愈。蓋二藥一發汗，一利水，可令內蘊之濕，由汗與小便而解，且二藥之性皆涼，其熱亦可隨之而解，阿斯必林又善愈關節疼痛也。余用此方，連治數人，皆一汗而愈，若熱劇者，滑石或多用，或加生石膏數錢與滑石同煎，亦莫不隨手奏效也。蓋拙著中自擬之方凡百餘，約皆歷試有效而後筆之於書，非敢憑虛擬議以誤人也。

答王蘭遠問時方生化湯

當歸之味甘勝於辛，性溫雖能助熱，而濡潤多液，又實能滋陰退熱，原不可但以助熱論，故《本經》謂可治溫瘧，且謂煮汁飲之尤良，誠以煮汁則其液濃厚，濡潤之功益勝也，其性雖流通活血，而用之得當亦能止血。友人王鄂庭曾小便溺血，用黃酒煮當歸兩飲之而愈。後其證反復，再服原方不效，問治於僕，俾用鴉膽子去皮五十粒，白糖水送服而愈。繼其證又反復，用鴉膽子又不效，仍用酒煎當歸法治癒。又傅青主治老婦血崩，用黃耆、當歸各一兩，桑葉十四片，煎湯送服三七細末三錢，甚效。又單用醋炒當歸一兩煎服，治血崩亦恒有效。是當歸可用以活血，亦可用以止血，故其藥原名「文無」，為其能使氣血各有所歸，而又名當歸也。產後血脈淆亂，且兼有瘀血，故可謂產後良藥。至川芎其香竄之性，雖甚於當歸，然善升清陽之氣，凡清陽下陷作寒熱者，用川芎治之甚效，而產後又恒有此證。同邑趙姓之婦，因臨盆用力過甚，產後得寒熱證，其家人為購生化湯二劑，服之病頓愈。蓋其臨盆努力之時，致上焦清陽下陷，故產後遂發寒熱，至服生化湯而愈者，全賴川芎升舉清陽之力也。旬餘寒熱又作，其叔父景山知醫，往省視之，謂係產後瘀血為恙，又兼受寒，於活血化瘀藥中，重加乾薑。數劑後，寒熱益甚，連連飲水，不能解渴。當時仲夏，身熱如炙，又復嚴裹厚被，略以展動即覺冷氣侵膚，後僕診視，左脈沉細欲無，右脈沉緊皆有數象，知其上焦清陽之氣下陷，又為熱藥所傷也。從前服生化湯，借川芎升舉之力而暫愈，然川芎能

升舉清陽，實不能補助清陽之氣使之充盛，是以愈而又反復也。為疏方黃耆、玄參各六錢，知母八錢（時已彌月，故可重用涼藥），柴胡、桔梗各錢半，升麻一錢，一劑而寒熱已，又少為加減，服數劑痊愈。由是觀之，川芎亦產後之要藥也。吳鞠通、王士雄之言皆不可奉為定論，惟發熱汗多者，不宜用耳。至包氏所定生化湯，大致亦順適。惟限於四點鐘內服完三劑，未免服藥過多。每次沖入紹酒一兩，其性過熱，又能醉人，必多有不能任受者。僕於婦人產後用生化湯原方，加生懷山藥數錢，其大便難者，加阿膠數錢，俾日服一劑，連服三日停止，亦必不至有產後病也。

答陳士成問異證治法

今閱病案，確為癩風無疑。然自古治此證無必效之方，愚遇此等證，有用熊膽治癒者，有用羚羊角治癒者，有用磨刀水治癒者，有用加味磁朱丸治癒，而效於甲者，未必效於乙，效於乙者，未必效於丙，至西人治此證，除麻醉腦筋暫收目前之功效外，亦無他方。惟中西藥並用，大約服之月餘，可以除根。詳錄其方於下。

生赭石末三錢、於朮三錢、酒麴三錢用神麴則無效，且宜生用、半夏三錢、龍膽草三錢、生沒藥三錢（以上係湯劑）、白礬焙枯一兩、黃丹炒紫色五錢、朱砂二錢。共研細，摻熟麥麵一兩，豬心血和為丸，桐子大。

西藥臭剝二錢、臭素安母紐謨二錢、抱水過魯拉爾一錢。共研細，摻熟麥麵四兩，水和為丸，桐子大。

上藥三種，早晚各服西藥三十九，午時服朱砂黃丹白礬丸四十九，每日服藥三次，皆煎湯藥汁送服。每湯藥一劑可煎三次，以遞送三次所服丸藥，如此服藥月餘，病可除根。蓋西藥為麻醉腦筋之品，能強制腦筋使不發癩，治標之藥也；中藥為健脾、利痰、瀉火、鎮驚、養神之品，治本之藥也。標本並治，所以能隨手奏效。此證若但用西藥治標，固難拔除病根，久服且有減食量、昏神智之弊。今擬此方，中西並用，相助為理不但病可除根，而於食量神智亦毫無所損也。

答龐履廷問大便脫肛治法

脫肛之證，用曼陀羅煎濃湯洗之甚效。僕常用鮮曼陀羅四五斤，煎取濃汁兩三大碗。再以其汁煎莢肉二三兩，取濃汁一大碗。再用黨參二兩，軋細末調汁中，曬乾。每用四五錢，水煎融化洗之，數次可痊愈。

答章景和君代友問病案治法

詳觀病案，知係胃陰虧損，胃氣上逆，當投以滋胃液、降胃氣之品。然病久氣虛，又當以補氣之藥佐之。爰擬方於下，放膽服之，必能止嘔吐、通大便。迨至飲食不吐，大便照常，然後再擬他方。

方用生赭石二兩，生山藥一兩，潞黨參五錢，天冬八錢，共煎湯兩茶杯，分三次溫服下，渣煎一杯半，再分兩次溫服下。一劑煎兩次，共分五次服，日盡一劑，三劑後吐必止，便必順。用此方者，赭石千萬不可減輕，若此藥服之覺涼者，可加生薑四五片或初服時加生薑四五片亦可。

答章詔君問腹內動氣證治法

觀此證，陡有氣自臍上衝至胸腔，集於左乳下跳動不休。夫有氣陡起於臍上衝者，此奇經八脈中，衝脈發出之氣也。衝脈之原，上隸於胃，而胃之大絡虛里，貫膈絡肺，出於左乳下為動脈。然無病者其動也微，故不覺其動也。乃因此衝氣上衝犯胃，且循虛里之大絡貫膈絡肺，復出於左乳下與動脈相並，以致動脈因之大動，人即自覺其動而不安矣。當用降衝、斂衝、鎮衝、補衝之藥以治病源，則左乳下之動脈，自不覺其動矣。爰擬兩方於下。

生山藥八錢、生牡蠣八錢、生赭石末四錢、生芡實四錢、清半夏中有礬須用溫水淘淨曬乾足四錢、柏子仁四錢炒搗不去油、寸麥冬三錢。

上藥七味，磨取鐵銹濃水煎藥。

又方：用淨黑鉛半斤，用鐵勺屢次熔化之，取其屢次熔化所餘之鉛灰若干，研細過羅。再將熔化所餘之鉛秤之，若餘有四兩，復用鐵勺熔化之。化後，用硫黃細末兩半，撒入勺中，急以鐵鏟炒拌之，鉛經硫黃灼煉，皆成紅色，因炒拌結成砂子。晾冷、軋細、過羅，中有軋之成餅者，係未化透之鉛，務皆去淨。二藥各用一兩，和以炒熟麥麵為丸（不宜多摻，宜僅可作成丸為度），如桐子大。每服六七丸或至十餘丸（以服後覺藥力下行，不至下墜為度），用生山藥末五六錢，煮作稀粥送下，一日再服。以上二方單用、同用皆可。



答任伯和問治蛇咬法

《驗方新編》治蛇咬法，用吸煙筒中油子，涼水沖出冷飲之。

按：此方甚驗，設猶不效，可用其相畏之物治之。蛇之所畏者，蜈蚣、雄黃也。擬方用全蜈蚣三條，雄黃二錢，共為末分三包。每用一包，甘草、蚤休各二錢，煎湯送下，日服二次，旬日當愈，若用西藥過滿俺酸加里○·○一克、餾水一○·○分作六次服，每日服三次，最能解蛇咬之毒。或用此水洗滌患處，亦大能解毒。若內服、外洗二方並用則更佳。

答任伯和問治頑癬法及足底癢治法

大楓子去皮，將仁搗如泥，加白砒細末少許（少少的），和豬脂調膏敷之，此劇方也。

又用鮮曼陀羅熬膏（梗葉花實皆可用），加鴉膽子細末（去皮研細），調和作膏藥貼之，此為和平方。

足底癢可用蛇退三條，甘草二錢，煎水飲之。再將渣重煎熏洗，半月可愈。

答任伯和問喉證治法

初秋時，用大西瓜一個（重約七八斤），開一口裝入礪砂、火硝細末各一斤，仍將開下之皮堵上，將西瓜裝於新出窯之瓦罐中（瓦罐須未經水濕者），將罐口嚴封，懸於不動煙火不通空氣之靜室中。過旬日，視罐外透出白霜，掃下。將罐口一兩，調入薄荷冰二分，瓶貯，勿令洩氣，遇紅腫喉證，點之即消。

答黃兩岩問創傷及跌打損傷外敷內服止疼化瘀方

外敷用生赤石脂細末，旱三七細末等分，和勻敷之，立能止血、止疼。內服用旱三七細末二錢，臭剝細末二分，同服下，立能化瘀止疼。

答胡劍華問拔漏管方

按象牙可托瘡管外出，而僕實未嘗試用，向在籍時，常由莊北中留舍村經過，見路旁溝邊有宿根之草，每歲出生以護田畔，高五六尺，其葉如榆，結實如蒼耳作扁形。本地之人云「其子能為末敷瘡」，時僕未嘗置意。後在奉天，乃知名為胡蒼子（即胡蒼耳），為細末納各種瘡管中，其管即化，亦不疼楚，且速於生肌，亦良藥也。僕多年未在家，想中留舍村此物尚有，又想各山野或亦有此物，特人不識耳。

示函，詞意甚謙，弟不敢任受。憶當日田君之病，實係瘀血積成臃脹，較水臃尤為難治。且病久身弱，又不敢用劇烈之藥開破。而勉用赭石、當歸、丹參三藥為方（當日似用赭石末、全當歸各一兩，丹參六錢），証竟服之病癒。後又變通此方，去丹參加生山楂、生山藥各一兩，治鄰村少年瘀血證，亦服後降下瘀血若干。用山藥者，以其脈甚虛也。至治痢，拙著中共有七方，於治痢之法可謂粗備，且與前人之法迥不同處，以治末期極險之證。再參以方後所附諸案，一切加減通變用法治痢，自無束手之處。近又新驗出品治痢之方二則，一治痢疾初得方，即拙著處方編中硝菴通結湯，服其藥劑三分之一，或弱半即愈。無論痢之赤白皆可用。若涼者（痢之熱者十有八、九，間有涼者），可用此湯藥，送服生硫黃末二三分許或將藥煎成，酌兌以生薑汁亦可。一治受暑熱痢疾方，即拙擬之衛生防疫寶丹，去細辛加椒紅一兩，薄荷冰改用五錢。若為丸可每服二十粒日服三四次；若作散劑，每次服三分，日服四次。此方又善治噤口痢，酌用之可也。

第 一 集 三 三 醫 書 評

《溫熱逢源》第一種評

仲聖《傷寒論》一書，詳於論傷寒，略於論溫病，遂使後世之治溫熱者，各執己見，鮮所折衷。斯編上溯《內經》，凡《內經》之論溫熱者、逐節備載，詳為注疏，於溫熱之證，已能探本窮源。而復即《傷寒論》中之未明言溫病而實則溫病者，復列若干條，亦復詳為注疏。所尤足貴者，傷寒《少陰篇》兩三日內，即有大熱數條，皆解為伏溫發動。所謂獨具卓識，戳破千古疑團，僕閱至此，不覺手舞足蹈，樂不可支。或疑少陰病，必脈象沉細，似與溫熱之脈不符。不知邪伏少陰，若能達於三陽，則脈洪大，不能達於三陽，雖中有大熱，而仍沉細。參透此理，不但能得溫熱治法，即傷寒一書，亦可豁然貫通矣。



《醫事啟源》第二種評

吾中華醫學，創之四千年以前，博大精深，於醫理醫術，無所不包，無所不蓋。乃自西學東漸，淺見者流，竟至厭故喜新，數典忘祖，真可歎也。孰意日本亮祇卿醫士，竟能篤信漢學，成《醫事啟源》一書。凡西人醫學新奇之處，莫不於中醫古籍得其源本，而特為表彰。俾習醫者，知自農軒迄漢唐諸書，皆可寶貴，吾中華醫界覽之，能無感愧交集而自奮勉也乎！

《醫經秘旨》第三種評

治病貴究其原因，原因既得，則臨證用藥知所注重，不治其病而其病自愈。不然，則治標遺本，以治此人此病則效，以治彼人此病不惟不效，轉有因之加劇者。《醫經秘旨》一書，持此宗旨，凡論病臨證，莫不為隔二隔三之治法。且廣引經文以相印證，又無不與經旨吻合。至其論人身之陰陽，深得《易經》陰陽互根之理，尤為精奧。

《醫病簡要》第四種評

醫學之理，貴由博返要，尤貴以要賅博。《醫病簡要》一書，所載病案無多，而分門別類，引申觸長，實於醫理無所不包，無所不徹，且又時出妙論，時用奇方，發前人所未發，治他人所不能治，且能逆料其將變何證，應如桴鼓，誠為醫學中之善本也。

《醫階辨症》第五種評

病之為類多矣，而一病之中，其病因又分多類，使不能細為區別，診病恆誤於疑似之間，用藥又何能吻合乎？《醫階辨症》一書，證分三十九門，又於每門相類之證，細辨其同中之異。更於相異之處，各究其病因，俾人認定方針，不迷所向。讀斯編者，直如飲上池之水，洞見垣一方人也。後附虛證用藥之法，亦議論精確可喜。

《喉科秘訣》第六種評

咽喉之證，最為緊要，因其為地無多，食息，皆由之經過，偶有阻塞，則食息俱困也。《喉科秘訣》一書，較之他喉科之書，獨為詳細精確，服藥敷藥之外，又輔以針法灸法，則收效益捷、其喉證種種名目，亦他書所未備，又得時賢曹炳章之批評，可謂盡善盡美矣。

《癰科全書》第七種評

癰證西人每用手術剖割，然割處愈後必有刀痕，且又不易除根。嘗見有割至再三，其割時屢用麻醉藥，致損傷元氣，身形因之羸弱者。至中法服藥內消，又必需以歲月收功，恒苦其過緩。《癰科全書》之法，以點藥治其標，以服藥清其本，且其內服之藥，又分別各種原因，辨證既精，制方更妙，真癰科之善本也。

《時行伏陰芻言》第八種評

伏陰之證，古書未載，偶遇其證，人或即以霍亂治之，然霍亂無論陰陽，必然腹痛，而伏陰雖至吐瀉轉筋，不覺腹痛。蓋因春夏偶受寒涼，伏於膜原，因感而發，阻塞氣化，清不能升，濁不能降，以致先瀉後吐，吐瀉不已，遂至轉筋。治之宜扶陽抑陰，溫中散寒，書中蘇砂平胃一方，隨症加減，投之皆效，誠無尚之妙方也。至參用經方，若附子理中、旋覆代赭諸方，亦莫不與病機吻合。至李貢三君批注此書，謂拙擬之衛生防疫寶丹，以治伏陰，亦屢試屢效，斯又愚擬方時所未計及者也。

《村居救急方》第九種評

醫書以普濟生命為宗旨，然必待知醫者始能用其書，則所濟亦非普矣。至《村居救急方》，多用鄉村中尋常物產，知醫者能用，不知醫者亦能擇用。用之得當，轉能治大病，即不得當，亦無甚害，誠村居救急之良方也。至於兒科、產科，備載無遺，尤為周密。



《毆蠱燃犀錄》第十種評

閱毆蠱全書，真如溫太真燃犀牛渚，洞徹深淵，物無遁形，奇態怪狀盡現目前。向閱經史及方書所載，疾化豎子，瘡中腹中有各樣動物，心恆疑之。今觀斯編，覺四十餘年疑團，豁然頓解，真快事也，所又可取者，毆蠱不必珍貴之品，如敗鼓皮、薄荷油皆為毆蠱要品。蓋鼓皮至敗，必經鼓桴震動幾千萬遍，其震動之餘威，直如雷霆；薄荷古原名苛，其苛辣之性，實稟秋金至剛之氣，故用二物毆蠱，則蠱皆披靡，至於防蠱、捉蠱、辨蠱，一切諸法，莫不詳細精妙，道人豈仙佛化身也，不然何僅以燃犀為號，不留姓氏於人間耶？

《外科方外奇方》第十一種評

此書第一卷分四部：一曰升降部，升降諸丹無所不備。所異者，升丹不但有紅升，且有白升，至降丹，則可降之再二再三，屢次另加藥品，俾用此藥者，化腐即以生肌，毫無痛楚。二曰圍藥部，其錠藥、散藥諸方，圍於外者，能束住瘡根，不使散漫，即以防周身之熱力貫注於瘡，其敷於內者，能使瘡毒暗消於無形，不留芥蒂。三曰內消部，所載內服諸藥，並皆精妙。四曰內護部，能護衛心主，不使瘡毒內攻。此雖為第一卷之四部，實為全書提綱，至二卷、三卷，瘡科雜證俱備，四卷論治疔毒之諸方，尤為精當。

《咳論經旨》第十二種評

統觀《咳論經旨》全書，凡《內經》、《難經》、《金匱》、《傷寒》、《脈經》諸書之論咳者，莫不備載，且逐節逐句詮解甚明，或引注疏，或參己見，務將經旨曲曲傳出。俾咳證之病因，盡皆披露，是其書不但為治咳證法程，實亦解經之善本矣。

《臨證經驗舌法》第十三種評

從來望居四診之首，較聞、問、切為尤要。然望其外，又不如望其內，至於臨證驗舌一法，則自外而內矣。古者驗舌無專書，至於《金鏡錄》、《觀舌心法》諸書，又專為傷寒而設，未及他證。今觀楊君雲峰所撰驗舌一書，其法簡而賅，圓機活潑，又示人以法外之法，誠於四診之外獨樹一幟。且於每一種舌下，又必綴明當用何方，或用何方加減，洵診病之金鑒也。

《沈氏經驗方》第十四種評

嘗思天下事，非親自實驗中來，雖言之鑿鑿猶不足信。近閱《沈氏經驗方》一書，歷數所用諸方，效驗彰彰可考，且其人好行其德，隨身自帶救急良藥，到處濟人，其人純乎善人，其言必確然可信，其方必為救人之良方無疑也。且愚細審其方，實皆能出奇致勝，至其後選雜證諸方，多有愚所喜用者，其奏效之處，亦誠如其書中所言也。

《痧疫指迷》第十五種評

痧證與霍亂，然霍亂可以疫統之，因霍亂多遍境傳染，皆屬暴病，痧證則偶有一二也。《痧疫指迷》能見及此，故命名則痧疫並列。至用方處，則痧與霍亂，亦恒渾同治之。其開卷急救溯源段，謂霍亂痧脹諸病，最緊急者莫如閉痧、然有寒閉、熱閉，寒閉開以熱藥，熱閉開以寒藥，可謂精論不磨。至其選用諸方，有開寒閉者，有開熱閉者，有寒、熱二閉皆能開者，更輔以刮法、灸法、刺法，則痧疫諸證，皆能隨手奏效。

《靈蘭要覽》第十六種評

金壇王宇泰先生，有明一代之醫宗也。所著《醫統》、《準繩》之外，又有《靈蘭要覽》兩卷。細閱其書，是先生於各種病證獨有會心之處，特為錄出。而於喘證，腰痛兩門，持論尤為精確，原可與《醫統》、《準繩》相輔而行，洵可寶貴也。

《凌臨靈方》第十七種評

臨證之道，不用古方，不能治病，拘守古方，亦不能治病。《凌臨靈方》一書，其亦談理透徹，仿佛香岩，其藥玄妙，仿佛潛齋，折衷經義而不盡用經方，即選用經方，亦必因證化裁與病機息息相赴，名為靈方，可謂名實相符矣。



《推篷悟話》第十八種評

愚嘗論哲學通於醫學，今觀李元薦先生《推篷悟話》，語語多從哲學中來。故其中論人身之氣化，較他書為獨精。不拘於談醫，而醫理轉因之透徹無遺。此所謂超以象外得其衷中也。醫者執此，既能得養生之道，更能精救人之術矣。

《舊德堂醫案》第十九種評

嘗思醫者喜閱醫案，為其足以淪我性靈，益我神智也，然必其人之性靈神智，迥異恒流，而後其治驗之案，乃能神明變化，廣被醫林。愚嘗執此以衡近代醫案，得三家焉。一為喻氏《寓意草》，二為徐氏《洄溪醫案》，其三即為《舊德堂醫案》也。一家並峙，直如華嶽三峰矣。

《內經辯言》第二十種評

《內經》之書最古，時當初造文字，字不足用，原有通用之法，有如四子書中人通於仁，謙通於愜者是也。且年湮代遠，口授筆錄，亥豕魯魚之訛，尤所不免。釋經者不諳古訓，惟知循文強解，致《內經》精義不明於世，誠於醫學大有關係也。前清俞由園先生，博通經史，深於漢學。其《內經辯言》一書，於注疏錯誤之處，皆本漢學解經之法正之，俾《內經》之精義復明於世，其表彰《內經》之功，何其偉哉。

《診脈三十二辯》第二十一種評

醫家四診，以辯脈為最要。醫者終身臨證，而於診脈之際，總覺遊移而無確據。此固因脈法之難學，實亦脈學之書，不能簡要詳明，令人一目了然也。今閱《診脈三十二辯》一書，開端先論診脈大法，提綱挈領，已於脈學探驪得珠，繼則納繁於簡，令人易於領略，而又各詳其脈形，各詳其主病，則簡而不陋，有如秦鏡高懸，令人臟腑備見。繼則將脈道經歷之處，主生何病，又詳細備載。繼又論脈之胃氣，脈之關格，脈之有無，凡脈學緊要之處，莫不推論盡致。

《專治麻疹初編》第二十二種評

麻疹之證，在小兒最為危險，誠以麻疹之毒，雖發於內，實多兼外感雜證。即天時人事之交，變化無窮，形跡各異，斯非博採群書，集其大成，不足盡麻疹之治法也。近閱《專治麻疹初編》，分述古、徵今、方論諸編。其述古也，名言鴻論，搜羅無遺；其徵今也，辨證審機，洞徹不爽；其方論亦多採之名家，而兼參以心得。麻疹一科，無證無方不備，洵福幼之佳編也。

《產科心法》第二十三種評

產科之書，行世者非無善本，而法皆不備。《產科心法》一書，於胎前產後諸證，莫不探本窮源，詳載治法。其辨妊娠，辨所妊男女，皆極精確。至其所論種子之法，且必得男，尤為奧妙，發人夢醒。

《本草衍句》第二十四種評

賞觀古聖作經，文多韻語，句多排偶，取其便於誦讀也，至於醫書，欲人便於誦讀，則編述之時，句法亦宜斟酌。是以《本草衍句》一書，其疏解藥性，亦猶他種本草，惟屬詞比句，易於記誦，最便初學，而每藥之下，又詳載伍以何藥，即能治何病尤為詳細周至。

《先哲醫話》第二十五種評

《先哲醫話》一書，成於東人。細閱一周，益歎吾中華古聖昔賢文教，廣被流澤孔長也。其書集東國漢學名醫語錄，共有十三家，莫不祖述農軒，私淑仲景，其卓識妙論，皆與經旨相發明。而其中田和東郭論藥之精當，荻野臺洲辨證之詳悉，尤為其中翹楚。吾中華醫界對之，能無感愧交集，而深自憤勉也哉！



《陳氏幼科秘訣》第二十六種評

幼科為啞科，痛苦不能自言，而尤皮膚淺薄，臟腑嬌嫩，飲食不知自檢，易染疾病。加以痘瘡、麻疹皆屬幼科，是以幼科為難也。陳氏幼科一書，凡於小兒易得之證，莫不詳載治法，而於疳積、驚風諸證，論之尤精，治法尤備，名之曰秘訣，洵非溢美也。

《秋瘧指南》第二十七種評

《內經》論瘧，歷舉手足十二經，然但詳刺法，而未言用藥治法。至後世之論瘧者，則又責重足少陽一經，而不賅不備，詳閱《秋瘧指南》，綜匯諸瘧，皆詳載治法，而其自擬兩澤湯一方，尤為救顛扶危之妙藥，是誠集瘧科之大成。俾治瘧者，無論所遇何瘧，皆胸有定識，不迷所向，洵為瘧科之指南矣。

《備急灸法》第二十八種評

針、灸皆治病之捷徑，救急要著，然針法非素習者不能，至灸法若知其當灸何處，則人人皆能，是灸法又便於針法也。《備急灸法》一書，傳至宋代，佚而復得，即非素習醫者，按圖各灸其處，亦可隨手奏效，而於筋骨諸病，或沉痾之疾，灸之尤為得力，真濟世活人之慈航哉。

《醫源》第二十九種評

治病必探其源，此中醫之特長也。然必於醫理先窮其源，而後能臨證深探其源。《醫源》一書，先由俯察仰觀，以深究天地之氣化，更因天地氣化以推及人身氣化，人身之氣化明，則醫理自能得其源矣。所尤足貴者，河圖生成之數理推之，莫不觸處洞然，纖微備徹，學醫得源，自能臨證深探其源矣。

《馬培之醫案》第三十種評

外科之書，不乏善本，至外科醫案，則專集罕覩。馬培之先生所評《證治全生集》，久為世所寶貴。今閱其外科醫案專集，其審證之確，用藥之妙，允足為外科法程，至其所論癘風治法，尤為精當，斯編原可與所論《證治全生集》相輔而行也。

《本事方集》第三十一種評

嘗思醫方非經名醫選擇，不足貴，誠以名醫能識方，猶伯樂之能相馬也。宋名醫許叔微先生，曾著《本事書》十卷，久為醫界所寶貴，至其續集十卷，則得之日本，誠所謂禮失求諸野矣。今觀其書所載諸方，多離奇新異，令人乍視之，不得其解，及深思之，則確有精義，是誠所謂海上仙方，而不可以尋常方術視之者也。

《曹仁伯醫案》第三十二種評

人之臟腑，各有體用，各有性情，不知臟腑之體用性情，不能窮病之根源，既知其體用性情，而不知其與氣化相關之實際，亦不能窮病之根源，今觀曹仁伯先生醫案，其於天地之氣化，人身之臟腑，研究深矣。故其臨證也，能洞達原因，視徹表明，調藥疏方，自能息息與病機相赴，醫案中之佳品也。

《南醫別鑒》第三十三種評

《內經》論五方用藥，各有所宜，至後世用藥，則惟注重南北之分，誠以北多陸，南多水，北多寒，南多熱。為南多熱也，故溫病多，為南方多熱，且多水分，故濕溫又多。自葉香岩之《溫熱論》出，而溫病之治法明；薛一瓢之《濕熱條辨》出，謂人中氣實則病在陽明，中氣虛則病入太陰，而濕溫之治法亦明。二家之書，誠南醫之金鑒也。後公望薛氏著《傷寒辨症歌括》，實則傷寒溫熱並論。且論溫熱處，又實本源葉、薛二家，故可與葉、薛二家之書綜匯為一編，而為南醫之治溫熱、治濕熱者不二法門。究之醫皆可貫通，引而申之，觸類而長之，即以治北方之病無難矣。



鹽山西門裡范文煥，年五十餘，素有肺癆，發時咳嗽連連，微兼喘促。仲夏末旬，喘發甚劇，咳嗽晝夜不止，且嘔血甚多。延醫服藥十餘日，咳嗽嘔血，似更加劇，憊莫能支，適愚自滄回籍，求為診治，其脈象洪而微數，右部又實而有力量，視其舌苔白厚欲黃，問其心中甚熱，大便二三日一行，診畢，斷曰「此溫病之熱，盤據陽明之府，逼迫胃氣上逆，因並肺氣上逆，所以咳喘連連，且屢次嘔血也。治病宜清其源，若將溫病之熱治癒，則咳喘、嘔血不治自愈矣」。其家人謂「從前原不覺有外感，即屢次延醫服藥，亦未嘗言有外感，何以先生獨謂係溫病乎」？答曰「此病脈象洪實，舌苔之白厚欲黃，及心中之發熱，皆為溫病之顯徵。其初不覺有外感者，因此乃伏氣化熱而為溫病。其受病之原因，在冬令被寒，伏於三焦脂膜之中，因春令陽盛化熱而發動，竄入各臟腑為溫病。亦有遲至夏秋而發者，其症不必有新受之外感，亦間有薄受外感不覺，而伏氣即因之發動者，」《內經》所謂「冬傷於寒，春必病溫」者，此也」。遂為疏方：生地（二兩）、生石膏（一兩）、知母（八錢）、甘草（一錢）、廣犀角（三錢另煎兌服）、三七（二錢細末用水送服）。煎湯兩茶盅，分三次溫飲下，一劑而諸病皆愈。又改用玄參、貝母、知母、花粉、甘草、白芍諸藥，煎湯服。另用水送服三七末錢許，服兩劑後，俾用生山藥末煮粥，少加白糖，每次送服赭石細末錢許，以治其從前

之肺癆。若覺熱時，則用鮮白茅根四五兩，切碎煮兩三沸，當茶飲之。如此調養月餘，肺癆亦大見愈。

按：吐血之症，原忌驟用涼藥，恐其離經之血得涼而凝，變為血痺虛勞也。而此症因有溫病之壯熱，不得不用涼藥以清之，而有三七之善化瘀血者以輔之，所以服之而有益無弊也。

鹽山南門里，王致祥，年近六旬，自孟夏患痢，延醫服藥五十餘劑，痢已愈而病轉加劇，臥床昏昏有危在旦夕之虞。此際適愚自滄回籍，求為診治，其脈左右皆洪實，一息五至，表裡俱覺發熱，脅下連腹，疼痛異常。其舌苔白厚，中心微黃，大便二三日一行。愚曰「此伏氣化熱而為溫病也。當其伏氣化熱之初，腸為熱迫，醞釀成痢與溫俱來。然溫為正病，痢為兼病。醫者但知治其兼病，而不知治其正病，痢雖愈而溫益重。綿延六十餘日，病者何以堪乎？」其家人曰「先生之論誠然，特是既為溫病，腹脅若是疼痛者何也？將勿腹中有鬱積乎？」答曰「從前云大便兩三日一行，未必腹有鬱積，以脈言之，凡溫病之壯熱，大抵現於右脈，因壯熱原屬陽明胃府之脈，診於右關也，今左部之脈亦見洪實，肝膽之火必熾盛，而肝木之氣，即乘火之熾盛而施其橫恣，此腹脅所以作疼也」。遂為開大劑白虎加人參湯，方用生石膏四兩，人參六錢以滋陰分。為其腹脅疼痛，遵傷寒方例，加生杭芍六錢，更加川棟子六錢，疏通肝膽之鬱熱下行，以輔芍藥之不逮。令煎湯三茶盅，分三次溫飲下，降下粘滯之物若干，持其便盆者，覺熱透盆

外，其病頓愈，可以進食。隔二日腹脅又微覺疼，俾用元明粉四錢，淨蜜兩半，開水調服，又降下粘滯之物若干，病自此痊愈。

銘勳孫，年九歲，於正月下旬感冒風寒，兩三日間，表裡俱覺發熱。診其脈象洪實，舌苔白厚，問其大便兩日未行，小便色黃，知其外感之實熱，已入陽明之府，為疏方：生石膏（二兩）、知母（六錢）、連翹（三錢）、薄荷葉（錢半）、甘草（二錢）。晚六點時煎湯兩茶盅，分兩次服下，翌晨熱退強半。因有事他出，臨行囑煎渣與服。閱四日來信言，仍不愈。按原方又服一劑，亦不見輕。斯時，頭面皆腫，愚遂進城往視，見其頭面腫甚劇，脈象之熱較前又盛，舌苔中心已黃，大便三日未行。為疏方：生石膏（四兩）、玄參（一兩）、連翹（三錢）、銀花（三錢）、甘草（三錢）。煎湯三茶盅，又將西藥阿斯匹林三分，融化湯中，分三次溫服下。頭面周身微汗，熱退腫消，繼服清火養陰之劑兩劑以善其後。

又鄰村李姓少年，亦同時得大頭瘟症，醫治旬日，病益劇，亦求愚治。其頭面連項皆腫，心中煩躁不能飲食，其脈象雖有熱，而重按無力。蓋其舊有鴉片嗜好，下元素虛，且大便不實，不敢投以大涼之劑。為疏方：玄參（一兩）、花粉（五錢）、銀花（五錢）、薄荷（錢半）、甘草（錢半）。煎湯一大盅，送服阿斯匹林二分，頭面周身皆出汗，病遂脫然痊愈。

鄰村高邊務孫連衡，年三十許，自初夏得喘症，動則作喘，即安居呼吸亦似迫促，服藥五十餘劑不愈，醫者以為已成肺癆諉為不治，聞愚回籍，求為診治，

其脈浮而滑，右寸關尤甚，知其風與痰互相膠漆滯塞肺竅也。為開麻杏甘石湯：麻黃三錢、杏仁三錢、生石膏一兩、甘草錢半，煎湯送服苦葶藶子（炒熟）二錢，一劑而喘定，繼又服利痰潤肺少加表散之劑，數服痊愈。

鄰村刁馬村刁志厚，年二十餘，自孟冬得喘症，遷延百餘日，喘益加劇，屢次延醫服藥，分毫無效。其脈浮而無力，數近六至，知其肺為風襲，故作喘。病久陰虛，肝腎不能納氣，故其喘浸劇也。即其脈而論，此時肺中之風邪猶然存在，欲以散風之藥祛之，又恐脈數陰虛益耗其陰分。於是用麻黃三錢，而佐以生山藥二兩，臨睡時煎服，夜間得微汗，喘愈強半。為脈象虛數，不敢連用發表之劑，俾繼用生山藥末八錢煮粥，少調白糖，當點心用，日兩次，若服之覺悶，可用粥送服雞內金末五分，如此服藥約半月，喘又見輕。再診其脈，不若從前之數，仍投以從前湯藥方，又得微汗，喘又稍輕，又服山藥粥月餘痊愈。

滄縣王媪，年七旬有一，於仲冬脅下作疼，噁心嘔吐，大便燥結。服藥月餘，更醫十餘人，病浸加劇。及愚診視時，不食者已六七日，大便不行者已二十餘日。其脈數五至餘，弦而有力，左右皆然。舌苔滿佈，起芒刺，色微黃。其心中時覺發熱，偶或作渴，仍非燥渴。脅下時時作疼，聞食味則欲嘔吐，所以不能進食，小便赤澀短少。此傷寒之熱已至陽明之府，胃與大腸皆實，原是承氣湯症。特其脈雖有力，然自弦硬中見其有力，非自洪滑中見其有力（此陰虛火實之脈），且數近六至，又年過七旬，似不堪承氣之推蕩，而愚有變通之法，加藥數味於白虎

湯中，則嘔吐與脅疼皆止，大便亦可通下矣。病家聞之，疑而問曰「先生之論誠善，然從前醫者皆未言有外感，且此病初起，亦未有頭疼惡寒外徵，何以竟成傷寒傳府之重症」？答曰「此乃伏氣為病也。大約此外感，受於秋冬之交，因所受甚輕，所以不覺有外感，亦未能即病。而其所受之邪，伏於膜原之間，阻塞氣化，暗生內熱，遂浸養成今日之病。觀此舌苔微黃，且有芒刺，豈非有外感之顯徵乎」？遂為疏方：生石膏（兩半）、生山藥（一兩）、知母（五錢）、赭石（五錢）、川棟子（五錢）、生杭芍（四錢）、甘草（二錢）。煎湯兩盅，分三次溫服下。因其脅疼甚劇，肝木不和，但理以芍藥、川棟，仍恐不能奏效，又俾用羚羊角一錢，另煎湯當茶飲之，以平肝瀉熱。當日將藥服完，次晨復診，脈象已平，舌上芒刺已無，舌苔變白色已退強半，脅疼亦大見愈，略思飲食，食稀粥一中碗，亦未嘔吐，惟大便仍未通下。疏方再用天冬、玄參、沙參、赭石各五錢，甘草二錢，西藥硫酸鎂二錢（沖服），煎服後，大便遂通下，諸病皆愈。為其年高病久，又俾服滋補之藥數劑以善其後。

按：此症之脈，第一方原當服白虎加人參湯，為其脅下作疼，所以不敢加人參，而權用生山藥一兩，以代白虎湯中之粳米，其養陰固氣之力，又可以少代人參也。又赭石重墜下行，似不宜與石膏並用，以其能迫石膏寒涼之力下侵也。而此症因大腸甚實，故並用無妨，且不僅以之通燥結，亦以之鎮嘔逆也。

滄縣東門里李氏婦，年近三旬，月事五月未行，目脹頭疼甚劇，診其脈近五至，左右皆有力，而左脈又弦硬而長，心中時覺發熱，周身亦有熱時，知其腦部充血過度，是以目脹頭疼也。蓋月事不行，由於血室，而血室為腎之副臟，實借肝氣之疏瀉以為流通，方書所謂肝行腎之氣也。今因月事久瘀，肝氣不能由下疏瀉而專於上行，矧因心肝積有內熱，氣火相並，迫心中上輸之血液迅速過甚，腦中遂受充血之病。惟重用牛膝，佐以涼瀉之品，化血室之瘀血以下應月事，此一舉兩得之法也。遂為疏方：懷牛膝（一兩）、生杭芍（六錢）、玄參（六錢）、龍膽草（二錢）、丹皮（二錢）、生桃仁（二錢）、紅花（二錢）。一劑目脹頭疼皆愈強半，心身之熱，已輕減。又按其方略為加減，連服數劑，諸病皆愈，月事亦通下。

天津東門里李氏婦，年過四旬，患病三年不愈，即稍愈旋又反覆。其痢或赤或白或赤白參半，且痢而兼瀉，其脈遲而無力。平素所服之藥，宜熱不宜涼，其病偏於涼可知。俾先用生山藥細末，日日煮粥服之，又每日嚼服蒸熟龍眼肉兩許，如此旬日，其瀉已癒，痢已見輕。又俾於服山藥粥時，送服生硫黃細末三分，日兩次，又兼用木賊一錢，淬水當茶飲之，如此旬日，其痢亦愈。

奉天商埠局旁呂姓童子，年五歲，於季夏初旬，周身發熱，至下午三句鐘時，忽又發涼，須臾涼已，其熱愈烈，此溫而兼瘧也。東醫治以金雞納霜，數日病不少減，蓋彼但知治其間歇熱，不知治其溫熱，其溫熱不愈，間歇熱亦不愈。及愚

視之，羸弱已甚，飲水服藥，輒嘔吐，大便數日未行，脈非洪大，而重按有力。知其陽明之熱已實，其嘔吐者，陽明兼少陽也。為兼少陽，所以有瘧疾。為擬方：生石膏（三兩）、生赭石（六錢）、生山藥（六錢）、碎竹茹（三錢）、甘草（三錢）。煎湯一盅半，分三次溫飲下。將藥飲完未吐，一劑大熱已退，大便亦通。至翌日復作寒熱，然較輕矣。投以硫酸規泥涅二分強，分三次用白糖水送下，寒熱亦愈。

奉天南關馬姓幼女，於午節前得溫病，醫治旬日病益增劇，周身灼熱，精神恍惚，煩躁不安，情勢危殆，其脈確有實熱，而至數嫌其過數。蓋因久經外感灼熱而陰分虧損也。遂用生石膏兩半、生山藥一兩（單用此二味，取其易服），煮濃汁兩茶盅，徐徐與之。連盡兩劑，灼熱已退，從前兩日未大便，至此大便亦通，而仍有煩躁不安之意。遂用阿斯匹林二分，同白糖錢許，開水沖化服之，周身微汗，透出白痧滿身而愈。或問「外感之症，在表者當解其表，由表而傳裡者當清其裡。今此症先清其裡，後復解其表者何也」？答曰「子所論者，治傷寒則然也。而溫病恆表裡毗連，因此表裡之界線不清。其症有當日得之者，有表未罷而即傳於裡者，有傳裡多日而表症仍未罷者。究其所以然之故，多因此症內有伏氣，又薄受外感，伏氣因感而發，一則自內而外，一則自外而內，以致表裡混淆。後世治溫者，恆不以六經立論，而以三焦立論，彼亦非盡無見也。是以愚對於此症有重在解表，而兼用清裡之藥者，有重在清裡而兼用解表之藥者，有其症似猶可解

表，因脈數煩躁，遂變通其方，先清其裡而後解其表者。如此則服藥不至暝眩，而其病亦易愈也。下列所治之案，蓋准此義。試觀解表於清裡之後，而白痧又可表出，是知臨症者，原可變通因心，不必拘於一端也。

病者：劉問籌，年二十五歲，江蘇人，寄居天津松島街，電報局理事。

病名：臟腑瘀血。

原因：其先偶患大便下血甚劇，西醫於靜脈管中注射以流動麥角膏其血立止。而血止之後已月餘矣，仍不能起床，但覺周身酸軟無力，飲食不能恢復原量，僅如從前之半。大小便亦照常，而惟覺便時不順利。其脈搏至數如常，芤而無力，重按甚澀，左右兩部皆然。

診斷：此因下血之時，血不歸經，行血之道路紊亂，遽用藥止之，則離經之血，瘀於臟腑經絡之間。蓋麥角止血之力甚大，愚嘗嚼服其小者一枚，陡覺下部會陰穴處有抽掣之力，其最能收閉血管可知。此症因其血管收閉之後，其瘀血留滯於臟腑之間，阻塞氣化之流行，致瘀不去而新不生，是以周身酸軟無力，飲食減少，不能起床也。此症若不急治，其周身氣化阻塞日久，必生灼熱。灼熱久之，必生咳嗽，或成肺病，或成癆瘵，即難為調治矣。今幸為日未久，灼熱咳嗽未作，則調治固易也。

療法：當以化其瘀血為目標，將瘀血化盡，身中氣化還其流通之常，其飲食必然增加，身體自能復原矣。



處方：（早三七細末三錢）為一日之量，分兩次服，空心時開水送下。  
效果：服藥數次後，自大便下瘀血若干，其色紫黑。後每大便時，必有瘀血若干，至第五日下血漸少，第七日便時不見瘀血矣。遂停服藥，後未旬日，身體即健康如初矣。

病者：王竹蓀，年四十九歲。

病名：溫病兼泄瀉。

病因：丙寅仲春來津。其人素吸鴉片，立志蠲除，因致身弱，於仲夏晚間，乘涼稍過，遂得溫病，且兼泄瀉。

病候：表裡俱壯熱，舌苔邊黃、中黑，甚乾。精神昏憤，時作譫語。小便短澀，大便一日夜四五次，帶有粘滯，其臭異常，且含有灼熱之氣，其脈左右皆洪長。重診欠實，至數略數，兩呼吸間可九至。

診斷：此純係溫病之熱，陽明與少陽合病也。為其病在陽明，故脈象洪長；為其兼入少陽，故小便短少，致水歸大便而滑瀉。為其身形素弱，故脈中雖挾有外感之實熱，而仍重按不實也。

療法：當瀉熱兼補其正，又大劑徐徐服之，方與滑瀉無礙也。

處方：生石膏（三兩細末）、生山藥（一兩）、大生地（兩半）、生杭芍（八錢）、甘草（三錢）、野臺參（五錢）。煎湯三大盅，徐徐溫飲下。一次只飲一

大口，時為早六點鐘，限至晚八點時服完。此方即白虎加人參湯，以生山藥代粳米，以生地代知母，而又加白芍也。以白虎湯清陽明之熱，為其脈不實故加人參；為其滑瀉故以生山藥代粳米，生地代知母，為其少陽之府有熱，致小便不利而滑瀉，所以又加白芍以清少陽之熱，即以利小便也。

效果：所備之藥，如法服完。翌晨精神頓爽，大熱已退，滑瀉亦見愈，脈象已近平和。因瀉仍不止，又為疏方，用生山藥一兩、滑石一兩、生杭芍五錢、玄參五錢、甘草三錢（此即拙擬之滋陰清燥湯加玄參也）一劑瀉止，脈靜身涼，脫然痊愈。

病者：胡珍篋之幼子，年三歲。

病名：間歇熱。

病因：先因失乳，飲食失調，泄瀉月餘，甫愈，身體虛弱，後又薄受外感，遂成間歇熱。

病候：或晝或夜發灼無定時，熱近兩點鐘，微似有汗，其熱始解。如此循環不已，體益虛弱。

診斷：此乃內傷、外感相並而為間歇熱。蓋外感之症，在少陽可生間歇熱；內傷之病，在厥陰亦生間歇熱（肝虛者，恆寒熱往來）。

療法：證雖兼內傷外感，原宜內傷外感並治，為治外感用西藥，取孺子易服；治內傷用中藥，先後分途施治，方為穩妥。

處方

（安知歇貌林一瓦）為一日之量，分作三次，開水化服。將此藥服完後，其灼必減輕，繼用生地八錢，煎湯一茶杯，分多次徐徐溫飲下，灼熱當痊愈。但用生地者，取其味甘易服也。

效果

先將安知歇貌林服下，每服一次，周身皆微有涼汗，其灼熱果見輕減。翌日，又將生地煎湯，如法服完，病即霍然愈矣。蓋生地雖非補肝虛正藥，而能滋腎水以生肝，更能涼潤肝血，則肝得其養，其肝之虛者，自然轉虛為強矣。

病者：盧姓，鹽山人，在天津包修房屋。

病因：孟秋天氣猶熱，開窗夜寢受風，初似覺涼，翌日即大熱成溫病。

病候：初次延醫服藥，竟投以麻、桂、乾薑、細辛大熱之劑。服後心如火焚，知誤服藥，以箸探喉，不能吐。熱極在床上亂滾，症甚危急。急來迎愚，及至，言才飲涼水若干，病熱稍愈，然猶呻吟連聲，不能安臥。診其脈近七至，洪大無倫，右部尤甚。舌苔黃厚，大便三日未行。

診斷：此乃陽明胃府之熱已實，又誤服大熱之劑，何異火上添油，若不急用藥解救，有危在目前之虞。幸所攜藥囊中有自製離中丹（係用生石膏一兩、硃砂二分製成），先與以五錢，俾用溫開水送下，過半點鐘，心中之熱少解，可以安臥，俾再用五錢送服，須臾呻吟亦止，再診其脈，較前和平。此時可容取藥，宜再治以湯劑以期痊愈。

處方

生石膏（三兩）、知母（一兩）、生山藥（六錢）、玄參（一兩）、甘草（三錢）。煎湯三盅，分三次溫飲下。

效果：當日將藥服完，翌日則脈靜身涼，大便亦通下矣。

治癒筆記

鹽山王瑞江，氣虛水腫，兩腿腫尤甚，方用生黃耆、威靈仙治癒。天津鈴當閣於氏少婦，頭疼過劇，且心下發悶作疼，兼有行經過多證，以建瓴湯加減治癒。

津市錢姓小兒，四歲，灼熱滑瀉，重用滋陰清燥湯治癒。

李仔齋山東銀行執事，夏日得少陰傷寒，用麻黃附子細辛湯，加生山藥，大熟地二味治癒。

楊德俊瘋狂溫病癒後，變成脈弦硬，用生赭石兩半，龍骨、牡蠣各八錢，杭芍、花粉各四錢，半夏、菖蒲各三錢，遠志、甘草各二錢，服一劑而愈。

臨證隨筆

奉天宮某，年三十餘，胸中滿悶，常作呃逆，連連不止，調治數年，病轉加劇。其脈洪滑有力，關前尤甚，知其心火熾盛，熱痰凝鬱上焦也。遂用朴硝四兩、白礬一兩，摻炒熟麥麵四兩，煉蜜為丸，三錢重，每服一丸，日兩次，服盡一料痊愈。蓋朴硝味原鹹寒，稟寒水之氣，水能勝火，寒能治熱，為治心有實熱者之要品。《內經》所謂「熱淫於內，治以鹹寒」也。用白礬者，助朴硝以消熱痰也。調以炒熟麥麵者，誠以麥為心穀，以防朴硝白礬之過瀉傷心，且炒之則氣香歸脾，又能防硝礬之不宜於脾胃也。